

ダクソかブラボとダンまちのクロス流行れ

鷺羽ユスラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

だれか書いて（切実）

はたけやまささんから主人公の絵を頂きました！
感無量です！ 本当にありがとうございます！

まるつぶさんから13話のとあるシーンの挿絵をいただきました

！

本当に嬉しいです！ ありがとうございます！

目次

原作一卷分

海（わた）のそこ撫ぜる蟒蛇（うわばみ）灰の川はたて眠れや尽き
せぬ人よ 1

人形の姫と焼け残りの灰 47

記される物語、埋もれる物語 89

原作二卷分

伏して贖え然らずは絶えよ 135

私は神を憎悪し、神は私を■する 177

そして彼女は、導きに出会う 222

外伝三卷分

蓋（けだ）し仮面は徒し世の仇 276

錆び果つ黄銅、死を裂く銀 312

原作三卷分

酔うてしがなき灰色の鳥よ 373

供饌、空転、暗がりの王 420

不転心誓 463

原作四卷分

盲（めし）いた剣に鍛冶師は願う 526

原作、外伝五卷分

迷宮の楽園に灰は降る 572

火を知る弟子、人でなしの師 612

二度と我が名を、呼ばれずとも 667

外伝六卷分

戦い続ける者達よ 700

原作六卷分

雷鳴の塔、落日の火

目覚めぬ卵の殻のように

焼き尽くす者

原作七卷分

移りゆく膝（かが）りし夜道花降れば

灰の交わり、火と陰り

産声

1003 959 918 860 799 751

原作一卷分

海（わた）のそこ撫ぜる蟒蛇（うわばみ）灰の川はた
て眠れや尽きせぬ人よ

そうさね。

これは一つの時代が終わった後の話さ。

灰が吹き溜まり、火の消えた闇の世界。

それをもたらししたのは最後の薪の王と言われている。

使命に生きながらそれを捨てた、狂った王さね。

王の最期は誰も知らない。

自らの消した火を求めて彷徨^{さまよ}ったか、それとも闇に消えていったか。

あるいは、分かたれた世界の最果てを目指したのか。

なんにせよ、言える事は一つだけ。

火に呪われ、闇に寄る辺なく、灰すらも尽き果てようと。

不死は使命と、旅と共にあるのさ。

『火に望まれぬ者がいる。君たちのこと、そして私たちのことだ』

『我らは同朋、瞳を覗くように明らかに』

『だから君、闇を恐れるなかれ』

『我ら食餌の時だ』

深淵の沼に巢食う白面の虫、説教者の言葉が暗闇に浮かぶ。

人が誰しも抱く闇、瞼の裏の深淵から“灰”はゆつくりと目を醒ま

した。

空は暗く、道しるべはない。かつての王の残り火だけが、闇の時代の儂い灯火。

その筈が、〃灰〃の目に飛び込んできたのは灰暗く発光する壁だった。

「……？」

頭から垂れ下がる灰髪が揺れる。眼球をこするそれが灰色であると認識したのは、目醒めてどれ程時間が経った後だろうか。とうに忘れてた色のついた光景に、〃灰〃はしばし茫洋とし、そして理解する。

「ああ、ここが世界の最果てか」

擦り鳴らす声は枯れている。言葉もまた、途方もない旅路の内に擦り切れている。だが気に留める事無く、〃灰〃は静かに立ち上がった。

生まれより伸びる毛髪が悶もたう蛇のように地面をうねる。それは、〃灰〃の歩みと共に引きずられ、ゆるやかな跡を残していく。

ここが何処であるか、〃灰〃は気にしなかった。

何故ここにあるのか、〃灰〃は考えなかった。

〃灰〃は不死だ。故にこそ、火を求め這い出すのだ。

迷宮都市オラリオ——その神蓋しんがいに封じられた、ダンジョンの暗い闇の底から。

その日、原初より遙か分かれた時代の果てに、一人の不死が降り立った。

——その光景を、ベル・クラネルは生涯忘れないだろう。

風と共に舞う金の憧憬しょうけい。光閃く剣を振るい、黄金財宝を編んだような繊細な長い金髪が戯れるように空を駆ける。踊るように軽快に、けれど力強さをもって怪物の両腕を叩き落とした、女神の如く美しい少女。

地を奔り、灰色の残影を置いて少女を抜き去った暗い影。まるで物

語の英雄のように剣の輝きさえ追えない速度で、怪物の左腹から右肩まで両断した姿。凍てついた太陽のような銀の瞳の残光が、その光景を網膜に焼きつかせる。

その二人が息を合わせ交差した瞬間以外、ベルの目には映っていない。怪物に追われていた事も忘れ、ただただそれに見惚れていた。

誰かの嘆きを止めるために現れる英雄の姿を、確かにそこに見ただ。ベルが憧れた彼の者たちを。

音も周りの景色も、自分の心さえ何処に行つてそれだけが残ったような錯覚は永遠にも似た長さで続いて——怪物の断末魔が、ベルを現実に引き戻す。

響く絶叫に影を差す。

魔性、真影、貫く刃。光に照らされた怪物の頭部に、鋭い鉋（たき）が食い込んでいる。

二本角のモンスター、『ミノタウロス』が上げた絶命の声はそれで止まった。両腕を切断され、心臓と魔石を二分する裂傷を負った怪物は鈍重に倒れ伏す。

ベル・クラネルは呆然と腰を落としていた。L.V.1（レベル）の自分では絶対に勝てないモンスター、L.V.2（レベル）相当のミノタウロスを易々と倒して見せた一幕もそうだが、細身の剣を振るうその姿に覚えがあったからだ。

無造作に伸ばされた灰色の髪。足元を超え床に広がる長いそれは乱雑に絡み、手入れがされていないのが見て取れる。たなびく灰髪は幽鬼のようにも、亡者のようにも見えた。

その間に見えるのは死人のように白い肌と凍える太陽のような鋭い眼だ。何の感情も無くミノタウロスの死体を見下ろす暗い瞳が、ベルの記憶の姿と重なった。

「ア、アスカさん!?! どうしてここに!?!」

「……ああ、貴公か。ベル・クラネル」

血振りをし剣を納めるアスカはベルを一瞥して眩き、振り向いて手を伸ばす。追い詰められていたためか青い顔をして臀部を地につけ

た恰好のベルは、少し羞恥で赤くなりながらその手をとって立ち上がった。

「あ、ありがとう。助けてくれて」

「気にするな。敵を倒しただけだ」

平坦な調子でアスカは言う。変わらないなあ、とベルは内心で思い、次の瞬間、硬直する。

近づいてくる。あの美しい金髪の女剣士が。怪物を斬った時あんなにも鋭かった表情が、こちらを心配するいたいけな少女の童顔となつて向かってくる。それでベルには金髪金眼の女剣士が誰だか分かかってしまった。

アイズ・ヴァレンシユタイン。オラリオなら誰もが知る「ロキ・ファミリア」のLv.5。

そう認識した瞬間、ベルは沸騰したように真っ赤になり——次の瞬間には絶叫を上げて走り去っていった。

「……………」

「……………」

取り残された二人は双方無言である。アスカは無表情で走り去るベルを見送り、アイズはベルと、アスカを見つめていた。

「今の子……知り合い？」

「ああ、家族だ」

「……アスカって、あの子が呼んでいた。それが本当の、名前なの？」
「違う。私に名前はない。アレからは「アスカ」と呼ばれているだけだ。」

アスカは「灰」を意味する。それ故だろう」

もう後ろ姿も見えないベルを幻視するようにアスカ——「灰」は答え、アイズとダンジョンの奥へ去っていった。

時はさかのぼり、遠征中の「ロキ・ファミリア」が50階層で休息している頃。

フィン・デイルムナが「それ」に遭遇したのは芋虫型の魔物に追い回

されている時だった。

元は冒険者依頼を達成するために51階層にある『カドモスの泉』から泉水を採取した後の事だ。

突如現れた芋虫型のモンスター。それらが放つ武器をも破壊する腐食液によつて仲間——ラウルが行動不能に陥つてしまい、戦闘ではなく逃走を選択した。

道すがらアイズ、ティオナ、ティオネ、レフイーヤとも合流し、一向に走り続けていた中で、“それ”は現れた。

「ああ!? 誰だあいつは!?!」

最初に気付いたのはベートだ。狼人特有の嗅覚からか、彼はいち早く“それ”に気付いた。

彼らが走り続ける通路の先、まるで亡霊のように佇む——灰色の人物に。

「え!? あんな奴、ファミリアにいた!?!」

「いや、見ない顔じゃ。他のファミリアが遠征でもしていたのか?」

「そんな筈はない。僕達以外が深層にいるなんてまず考えられない!?!」

フィンはそこまで言いかけて、ずくりと親指が疼いた。バツと通路の先に居る人物を見れば、先程まで持っていなかった杖を手にしている。

それをゆつくりとフィン達の方へ向け——青白い輝きが、杖の尖端へ収斂し始めた。

「何、あれ……!?!」

「魔法を撃つ気か!?!」

「ね、ねえ、ちよつとまずくない!?!」

「ちよつとどころじゃねえよ!! 早く避けねえと巻き添え食らうぞつ!!」

「全員ツ、右手の横道へ退避!!」

フィンの言葉に従い全員が横道へ体をねじ込む。

直後、青白い輝きが満ち、光の柱が芋虫型のモンスターごと通路を席卷した。

「なんだ、こりゃあ……」

警戒心を剥き出しにしたベートが呟く。今しがた走っていた通路を満たす青白い光の柱は通路を削り広げんばかりに増大している。実際、逃げた横道の入口付近は光の柱によって崩れていた。

その輝きは十数秒ほど続き、消え去る。残るものは何も無い。這いずるモンスターの音も、彼らの呼吸の音すら静寂に消えていく。シンと鎮まった空気の中、薄氷を割るような足音は嫌に大きく響いた。

コツン、コツンと規則正しく、足音は彼らへ向かってくる。さつき魔法を放った人物である事は想像に難くない。危うく巻き込まれそうになった面々は武器を構え、警戒する。

それをフィンが押し留めると同時に、灰色の“それ”は現れた。

遠目には丈の長い外套に見えた乱雑に絡む灰髪。そこから覗く生気のない白い肌と凍てついた眼。杖を気だるげにぶら下げて歩く“それ”は、彼らに一瞬すら気を払わず進んでいく。

「おいてめえ、待」

「待ってくれ」

それを舐められたと受け取ったのかベートが吼えようとしたが、被せるようにフィンの声が響く。どちらに反応したかは分からないが、灰髪は歩くのを止め、ゆっくりと首だけを彼らに向けた。

瞬間、歴戦の勇士である筈の第一級冒険者達に悪寒が走る。恐怖ではない、ただ心の底がざわめく。あまりにも暗い、その瞳にだ。

「……まずはお礼を言っておこうか。助けてくれてありがとう」

「助けたわけじゃない。敵を倒しただけだ」

掠れた声が小さく擦り鳴らされる。まるで何年も喋っていないような声だとフィンは思った。

「それでもさ。助かった事には変わらないからね。それと一つ聞きたいんだが——君は何者だい？」

「旅人だ」

間髪入れず吐き出された答えを、フィンは信じる事ができなかった。

ダンジョンに旅人はいない。迷宮都市オラリオを訪れる旅人はい

るだろうが、ダンジョンにまで出張る酔狂な者など存在しない。

ダンジョンに潜るのは冒険者だ。たとえ恩恵フアルナを持たずとも、夢焦がれる冒険者こそがダンジョンに踏み入る資格を持つ。そしてその中でも第一級の存在が深層へと到達できる。

だが灰髪は、旅人と名乗った。多くの冒険者が辿りつけさえしない、このダンジョンの深層で。

それだけなら良い。密かに深層攻略へ乗り出したどこかのファミリアの一員で、苦しまぎれの嘘をついたという強引な解釈も出来なくはない。

不可解なのは、先の魔法。見た事もない魔法だったが、異様なのはその威力。魔法円も無く無詠唱で、ともすれば推定威力Lv.5——レファイヤの魔法に匹敵する破壊能力。

尋常ではない。これ程の使い手ならば名が売れていなければおかしい。それなのに噂の一つすらないと言う事は——

フィンの親指が強く疼く。それを隠すように拳を握り、表面上はこやかに尋ねる。

「シー……それは君の二つ名かな？ すまないけど、聞いたことがないな。名前なら知っているかもしれないから、教えてもらってもいいかい？」

「名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

「『灰』……『灰』ね」

そっちが二つ名か？ あるいは何かの暗号コードか？ 内心で思うフィンはちらりと仲間を見る。ベート、ティオナ、ティオネは未だ警戒を解いていない。アイズとガレスは武器を下げて様子見、レファイヤはラウルの治療をすべきか迷っている。

便宜上『灰』と呼称する人物の素性を確かめるのも先だが、団長としてこの場をまとめるのも役目の一つだ。フィンは手早く指示を出す。

「武器を構えている者は下ろせ。ティオネ、レファイヤはラウルの治療を頼む。それ以外は周囲を警戒してくれ」

「おい、フィンっ！ そいつは俺達ごとモンスターを吹っ飛ばそうと

しただろうか！ ケジメつけなくていいのかよ!？」

「口を慎め、ベート。苛立っているのは分かるが恩人だ。無駄に敵愾心を持つ必要はないだろう?」

「ちっ!」

団長の言葉にベートは苦汁を飲んで、他は素早く従う。それを無感動に眺めていた「灰」は不意に体を反転させ、自分が歩いてきた通路に杖を向けた。

皆が身構える中、再び杖に青白い光が収斂する。同時に這いずるような地響きが地面を揺らし——濁流のように押し寄せる轟音を掻き消すように、青白い光は柱となって撃ち出された。

後は先の光景の焼き直しだ。光の柱が洞穴を削り、モンスターの大群を駆逐する。光の柱が消えた後、フィンの命令に従ったアイズとテイオナがさつと「灰」に近づき通路をのぞき込むと、そこにはやや広くなった通路以外に何一つなかった。

「うひゃ〜……すっげーい」

望遠するように額に手を当てて呟くテイオナの横でアイズがコクコクと頷く。腐食液ごと魔物を消滅させる魔法の威力に感服しているようだ。ベートは面白くなさそうに舌打ちをし、ガレスは後方の警戒をしつつフィンに話しかける。

「たまげたのう。よもや深層でこのような者に会おうとは」

「……そうだね。僕も正直驚いている。……ひよつとして、ロキの言っていた……」

「ん? 心当たりがあるのか?」

「いや……確証がない。それよりもあの——「灰」が撃った魔法の先には、50階層に続くルートがある。そしてモンスターはそこから来ていた」

「……! いかんぞ、フィン!」

「ああ。全員、集合しろ。全速力でキャンプに戻る」

フィンの言葉にガレスを除く全員が目を白黒させるが、手短かに話すとすぐに悟る。急ぐ仲間達を前に、フィンは改めて「灰」と向き合った。

「急ですまないが、一緒に来てくれないか。仲間が危険にさらされて
いるかも知れないんだ。君の力を貸してほしい」

「……………いいだろう」

“灰”は突然の要請に暗い瞳でフィンを見る。値踏みか、虚空を眺
めるような間をあけて、“灰”は頷いた。

『呪う者、呪う者、幾らあっても足りはしない』

『呪いと海に底は無く、故にすべてがやってくる』

『さあ、呪詛を。彼らのために哭いておくれ、我らのために哭いてお
くれ』

『すべての血の無きものたちよ。我らに耳をすませたまえ』

何時だったか、耳にした呪詛の言葉が青白い脳に這い上がる。

何処で聞いたのだろうか、“灰”はそれを覚えていない。零れたもの
は、“灰”の裡には戻らない。

“灰”は器だ。太陽の光の王より続く不死の伝承、火継ぎを果たし
た呪われ人たちは、その器ゆえに薪に選ばれ、王となった。

王に足る強大な力を注ぐための、ソウルの器。それこそが薪の王の
本質であると“灰”は理解している。

そして“灰”もまた同じ。黄昏に漣なみだむ海のように、底なしの器が“
灰”にはある。

それこそが、呪いなのだろう。原初、岩と大樹と朽ちぬ古竜ばかり
があった灰の時代。そこに灯った火が闇を生み、闇を抱いた人が得た
もの。

底なしの、終わりなき器と。

底なしの、終わりなき呪いと。

「……………」

感傷は今更だ。後戻りなど誰にもできない。歪み繋がる時間があ
れど、時は常に前へ進む。そうするしかない、何があろうと。

そうするしかない。“灰”はずっと、そのように生きてきたのだ。
人と、神と、それ以外と。無数の己を屍しかばねと晒しながら。

「……行くか」

“灰”は立ち上がり、歩き出す。行く当てはなく、辿り着くべき場所もない。されど使命は絶える事無く、“灰”の前へと現れる。

かつての使命が“王狩り”ならば。

今の使命は、さしずめ“魔性狩り”だった。

フィン達がキャンプへ戻った時、そこには大量のモンスターがいた。

そしてその大群は瞬く間に全滅する事となった。

【剣姫】の風と刃にではない。狼人の蹴りにでもない。アマゾネス姉妹にも、小人族にもドワーフにも、その場で最も高い威力を持つ魔法を宿すエルフにでもない。

ただ“灰”が、杖を振るった。まるで蠅を払うような気楽さで、だが幾億も繰り返した緻密な動作で——【白竜の息】が放たれる。

それはまさしく竜ドラゴンの息吹ブレスのように広がり、モンスター達を抵抗の隙も与えず結晶に沈めた。傍から見ていた【ロキ・ファミリア】の面々にはそれ以外に表現しようがなかった。

アイズ達は拠点から51階層入口に至る結晶の山脈を登ったり砕いたり眺めたりしている。その中にリヴェリアの姿もあつた。

「これは、一体どうなっている……」

約10Mメートルもの高さメドレが連なる結晶塊を前にリヴェリアは眉根を寄せる。睫毛の揺れる翡翠色の瞳に映るのは、腐食液すらも結晶化したモンスターメドレの成れ果てだ。

第一級冒険者であり魔道士に限れば頂点に立っていると云っても過言ではないリヴェリアをもつてして、このような魔法は見た事が無い。

無詠唱、魔法円なし、その上で広範囲高威力。まるで魔道士に憧れる子供が夢見るような魔法だ。そしてこれは東国に伝わる『妖術』でもなく、代償を必要とする『呪詛』カースの類でもない。

おそらく魔法アルテナ大国ですらまみえないような未知の魔法に、知らず杖

を握る力が強まる。

そう、まるで未知なのだ。これまでリヴェリアが振るい、先人が、同朋が、それに連なる者達が行使してきた魔法とこれは全く違う。まるで、根本から異なる別物のように。

「二体、ヤツは何者なんだ……」

つうつ、と頬を流れる汗に、リヴェリアは背後へ眼を向ける。襲撃を受けたキャンプの立て直しを進めるロキ・ファミリアの団員達も視線を向ける者が多い。

その視線の中心に位置する人物、*“灰”*と対峙するフィンは怪訝そうに目を細めた。

「君ほどの冒険者が無所属だって？」

「冒険者ではなく旅人だ。当て所ない旅路の中、ここに立ち寄った。それが全てだ」

「旅人、ね……あくまでそれを押し通すつもりなら、仕方ないけど引き下がるよ。けれどファミリアに所属していた事はあるんだろう？」

「主神の名前くらいは聞かせてくれないか」

「主神はいない。仕えるべき神を見出していないからだ。私に神血が宿っていないのがその証明になるだろう」

「……何だつて？」

「主神はいない。仕えるべき神を——」

「いや、そこじゃない。君は神血が宿っていないと、そう言ったのか？」

「ああ」

「……つまり、『神の恩恵』を受けていない……？」

「そうだ」

「いや、それは……」

ありえない、という言葉がフィンは飲み込む。暗い底を覗くような銀の眼は、嘘をついているように見えなかったからだ。*“灰”*は真剣に言葉を口に出している。

その瞳にフィンは黙考する。どうすれば【ステイタス】を聞き出せるかだ。

流すという選択肢はない。「ファミア」の危機にかこつけて連れてきたのは「灰」を見極めるためだ。深層に突如現れた正体不明の強者、それを何の情報もないまま放り出すなんて「ロキ・ファミア」団長として許容できない。

わざわざ団員達に見られる所で尋問済みた事をしているのもそれが理由だ。会話の内容は聞かせないようにしているが、ひよっとしたら団員の誰かが「灰」を知っているかもしれないという可能性を考慮している。

せめてLv^{レベル}だけでも聞き出さなければ——結論を出したフィンは交渉の定石として断られるだろう要求をする。

「……………不躰だが、確認させてもらってもいいかい？ 禁則^{タブー}に触れるのは分かっている。けれどにわかには信じられない」「構わない。背を見せればいいのだろうか？」

「……………あ、ああ」
特に忌避する様子も無く、「灰」は長すぎる髪を束ねて体の前へ持つてくる。そして上半身の服を脱ぎ、ためらわず背をフィンに向けた。

頓着の無い一連の所作にフィンは驚いたがそれ以上に、かろうじて骨の浮かばない程度に肉の付いた白い背に、何も描かれていない事に目を瞠った。

数秒固まって、フィンはリヴェリアに目配せをする。「灰」の行動に目を見開いていたリヴェリアは頷き、側まで近寄って「灰」の背を^た矯めつ^{すが}眺めつ検分する。

それは数秒だったか、数分だったか。長い時間が経ったような感覚の中、リヴェリアはふらりと後退し、ゆるゆると首を振った。

「……………ありえない……………『錠^{ロック}』を掛けられた痕跡どころか、『神聖文字^{ヒエログリフ}』が一文字も見当たらない……………間違いなく、『神^{ファルナ}の恩恵』を受けていない……………」

「……………本当、なのか」

気を抜けばその場に崩れ落ちそうなほどの衝撃を受けているリヴェリアに、フィンはそれが真実であると悟った。そしてそれがどれ

ほど異常な事なのか分かるからこそ、これまで積み上げてきた常識が打ち壊される感覚に手先が冷える。

二人の様子に「灰」は興味がないのか、黙々と服を着直す。周りでは会話の内容は聞こえずとも明らかに様子のおかしいフィンとリヴェリアを団員達が作業を止めて見守る中、突如轟音が鳴り響く。

『――！』

「何だ!？」

誰かが上げた叫び声に反応するように地響きが強くなる。そして現れる6 Mメドルを超える大型のモンスター。芋虫の下半身と女のように見える上半身を持つ、おそらくは先のモンスターの上位種。

醜く膨れ上がった腹に詰まっているだろう腐食液の量を想像して、小さな悲鳴が周囲から漏れた。フィンの脳裏に様々な考えが過ぎり、指示を出そうとするが――それより早く「灰」が動く。

「っ！ 待てー！」

フィンの制止を聞かず、「灰」は飛び上がった。一足で女体型のモンスターの上空へ飛び出した。「灰」は既に取り出した杖から「白竜の息」を放出する。

杖から放たれる眩い輝きが女体型のモンスターに接触した瞬間、巨大な結晶となってその場に広がる。モンスターは一切の動きを許さず、結晶の中へ閉じ込められた。

「……」

クリスタル状の結晶の中で乱反射する女体型のモンスターの像を見て、「灰」はもう一つ『魔術』を撃つ。【瞬間凍結】と呼ばれる対象を一瞬で凍らせる魔術だ。

結晶の上に更に氷の山が築かれる。周囲数十 Mメドルの木々ごと凍らせた後、着地した「灰」は飛び下がり、フィンの下へ戻った。

「失敗した」

一言、そう言い添えて。

「体液まで結晶化させられなかった。死ぬ手前で凍らせたが、融ければ爆死するだろう」

「……想像したくもないね。こっちの被害も思ったより大きいみたい

だ。……仕方ないけど、撤退かな」

ついで飛び出すフィンの指示に不満を上げる団員も居たが、いつ爆発するか分からない爆弾を前に悠長な真似はしていられない。精銳の【ファミリア】らしく機敏な動きで撤退する。

その中で全く動こうとしない「灰」に、フィンは声を掛けた。

「助けられたのはこれで二度……いや、三度目だ。改めて、礼を言っておくよ」

「助けたわけじゃない。敵を倒しただけだ」

「一辺倒だね、君は。まるでそれしか知らないみたいだ」

「正確ではない。これ以外を忘れ去っている」

「……何にせよ、【ロキ・ファミリア】としてきちんと礼をしないわけにはいかないんだ。こちらの都合で悪いが、一緒に本拠^{ホーム}へ来てくれないかい？」

「……………」

フィンの言葉に「灰」は押し黙り、初めて表情を変える。顔を伏せ、凍てついた太陽のような銀の眼を薄く削り、何かを思案するようになる。

数秒それを続け、「灰」は顔を上げる。

「所用がある。長くは付き合えない。それで良ければ同行しよう」

フィンと向き直り、「灰」は無表情に戻った顔でゆつくりと頷いた。

そして時は戻り、【ロキ・ファミリア】が遠征から帰還する道中。逃がしてしまつた『ミノタウロス』の群をどうにか殲滅した彼らは、再び合流し帰路を進んでいく。

「ねえねえ、ティオネ。あの「灰」って人が来てから、団長たちの様子おかしくない？」

「そうね……たぶんだけど、アイツの【ステイタス】がよっぽどヤバかつたんだと思う」

「え？ なにそれ、どういう事？」

アマゾネスの少女、ティオナは隣にいる姉に問いかける。腕を組んで豊満な胸を強調するティオネは思案顔で、前を歩く「灰」を眺めて

いた。

疑問の声を上げるティオナにティオネは続ける。

「ラウル達から聞いたんだけど、私たちがあのモンスターを一掃した魔法の結晶を調べてる間に、『灰』は団長とリヴェリアに『ステイタス』を見せたらしいのよ」

「ええーっ!? 【ステイタス】を他の派閥ファミリアに見せるって、普通やらないでしょ!? なんで!? なに考えてるの!？」

「知らないわよ。団長との話は聞こえなかったって言ってたし。唐突に服を脱いで【ステイタス】を見せたらしいわ、衆人環視の中でよ? ほんと、なんでそんな事したのかしらね」

『灰』が行った常識外の行動にアマゾネス姉妹は二人して『灰』に視線を向けた。それを察している筈だが、『灰』は何の反応も示さず黙々と歩いている。

そんな灰髪灰髪の存在に、もう一人視線を投げる人物がいた。

【劍姫】、アイズ・ヴァレンシユタインである。

(……あの時、『灰』……さん、は剣を持ってた)

(ただの魔道士じゃない……?)

一見して『灰』と同じように歩くアイズは先の出来事を思い出す。

『ミノタウロス』の群が現れて戦い、半数ほどが逃げ出してしまった出来事。アイズは上層へ逃げるミノタウロスを追っていて……その中にいつの間にか『灰』の姿があった。

『灰』はアイズを追い抜いて走っていた。その手に杖ではなく、細身の剣を携えて。迷う事無く進む姿にアイズもつられ、ついていけば今まさに新米の冒険者へ腕を振り下ろさんとするミノタウロスが居た。

アイズが第一級冒険者の敏捷をいかに発揮し、瞬時にミノタウロスの両腕を切断する。そして止めを刺そうとしたところで——『灰』が既に魔石ごと心臓を斬り裂き、牛頭の脳髓を貫いていた。

そして『灰』が知り合いらしき白髪赤目の冒険者を起こしたところ……なぜかアイズを見た冒険者は顔を真っ赤にして逃げ出してしまった。

怖がらせてしまったかとアイズは落ち込むが、今はそうじゃないと首を振る。気になったのは、アイズと同時に剣閃を叩き込んだ“灰”だ。

(……あの人は、ついてきた。私の速さに)

オラリオにおいて頂点を二分する【ロキ・ファミリア】の第一級冒険者。それもLv.5の中でベートについて速度に秀でたアイズに、“灰”は軽々と追いついたのだ。

それだけでなく、剣の腕も達人だ。少なくとも並みの冒険者に引けはとらない、それだけの剣圧をあの時感じた。

(あの人は……強い)

“灰”が何者かは分からない。その強さも、まだ未知の部分が多いように感じる。それがアイズには気になって仕方がなかった。

そしてそういった視線は周囲にも波及する。レファイヤ・ウイリデイスを筆頭としたアイズを慕う者達や、フィンと“灰”の会話を見ていたラウル達団員。無視しているのはベートくらいで、第一級冒険者が注目している故か、広がり方はいつそ驚異的だ。

フィンやリヴェリア、ガレスはその空気を感じ取っているものの、止め切れるものではない。そんな中で“灰”はやはり変わらず、思考の見えない瞳で歩いていた。

遠征に現れた未知のモンスターと、未知の冒険者。到達階層を伸ばせなかった事も相まって【ロキ・ファミリア】は妙な空気を抱えたまま、地上に帰還した。

「——おつかえりいいいいいいいいいいいいいいいい！」

そして、“灰”は邂逅する。

【ロキ・ファミリア】主神。天界きつての悪戯者^{トリックスター}。

朱色の髪を束ねたお調子者の女神——ロキと。

『道など、ありはしない』

『光すら届かず、闇さえも失われた先に』

『何があるというのか』

『だが、それを求める事こそが……』

『幾多の者が、この地にすら辿りつけず』

『そしてここですら、道半ばに過ぎない』

『お前は果たして、それに足る者か——』

遠く歪んだ記憶の中で、[〃]灰[〃]は確かにそう問われた。

それに何と答えただろう。あるいは、何も示さなかったのか。

[〃]灰[〃]はもう忘れてしまったが、あれからも歩みを止めず、足跡は

連綿と紡がれている。

最も近い記憶は、ダンジョンの奥底から這い出した時だろう。迷宮都市オラリオ、その軛から解き放たれた[〃]灰[〃]は、一点を指し歩み出す。

その場所を選んだ理由は、きつと[〃]灰[〃]が亡者だったからだ。闇の時代を放浪する中、喪い続けた人間性。誘蛾のようにそれに惹かれ、故にそこへ流れ着いた。

多くの死が積み重なる場所へ。

多くの願いが踏み躪られた場所へ。

多くの神の残滓が、吹き溜まる場所へ。

「……………」

ああ、[〃]灰[〃]に感慨はない。無感動に受け入れられる程度には、その光景に見飽きている。壊された営みと、積み上がる亡骸と、生の息吹なき大地と。

そして——光を裂いて黒く荒ぶる、対の瞳なき『隻眼の竜』と。

「……………」

[〃]灰[〃]に感慨はない。[〃]竜狩り[〃]など、それこそ彼の裏切りの白竜ほどに繰り返してきた。恐れなど、数多の死の沼に溶けて消えた。

[〃]灰[〃]は歩む。その先に如何なる絶望が待ち構えていようと。世界を廻す節理と悪意に、どれ程打ちのめされようと。立ち塞がる全てを討ち果たしてきたからこそ、[〃]灰[〃]は今も在るの

だから。

いずれ必ず、討ち果たすだろう。

[〃]灰[〃]は、それを使命とした。

ベル・クラネルが最初に「灰」と出会ったのは、まだ祖父が生きていた頃だ。

難しい顔をした祖父に連れられたか細い人間^{ヒューマン}。幼少のベルにはそう見えた。

「名前はない。ただ「灰」と呼ばれている」

最初の言葉はそれだ。これ以降、ベルから話しかけないと「灰」は沈黙したままだった。ベルはどう接したものと困ったがそれは祖父も同じようで、とりあえず祖父の呼び方を真似して「灰」を「アスカ」と呼ぶようになった。

アスカは妙な人物だった。日がな一日太陽を眺めていたと思えば、次の日は地下室に閉じこもったり、急に農業を手伝い始め、目を放したら森に採集しに行っていたりする。

ベルは幼い心でアスカはしたい事だけをする性格なのだと評した。それを許されるアスカを羨ましいと思う反面、ずっと祖父に見られているのは嫌だとも思った。

ベルは祖父の語る英雄譚が大好きだ。英雄の華々しい活躍と見目麗しい女性との愛の物語が少年の心をいたく刺激した。

一方で、アスカが口にする物語はあまり好きではなかった。祖父がいないある日、どうしても英雄譚が聞きたくてついねだってしまった時、聞かされた物語だ。

暗く陰鬱で、救いのない物語。ただ敵と戦い続けるだけの伝承は、幼少のベルにとっていつそ恐ろしさを伴っていた。

けれど少しだけ、気に入っている部分もあった。どんな敵に相手しても、絶望に折れぬ戦いの物語。言葉から紡がれるその姿が、小さな憧憬^{しょうけい}となってベルの心に溶けていった。

ある日の夜、アスカは村に侵入してきた獣を討ち取った。村の入り口に近かったからか、ベルとアスカしか知らない事だ。

その時の光景は今も鮮明に思い出せる。物語でしか聞いた事のないような見えない一閃、離れる獣の首と体。

そして血に濡れた、アスカの横顔。
それをベルは、忘れる事ができない。

祖父の死後、一年が経とうとした頃にアスカは唐突に姿を消した。
理由は分からなかった。

「まさかオラリオ（オラリオ）で会うなんて、思ってもみなかったなあ」

ギルドからの帰り道。ダンジョンから一直線に血塗れで駆け込み、
アドバイザーに散々雷を落とされた少年、ベルは夕焼けの中ひとり咳
く。

ベルはアスカの事を家族のように思っている。そう呼ぶには、少々
心の距離が離れていたけれど。でも祖父を亡くした今となっては、血
の繋がりがなくとも唯一の肉親と言ってよかった。

アスカが姿を消した時、ベルは寂しかった。ただそこにいるだけの
ような人だったけれど、祖父が死んだ時、悲しみに暮れるベルを支え
てくれた……ように思う。

「無口な人だったからなあ、アスカさん」

苦笑するベルは、オラリオに来るきっかけもアスカの失踪だった事
を思い出す。前々から冒険者になろうと思っただけはいたが、アスカがい
なくなり一人でいるのが寂しくなったのも、村を出る事を後押しした
要因だ。

「ダンジョンに居たって事は、アスカさんも冒険者なんだよね？」

そう思うと、ベルはなんだか嬉しくなった。あの獣狩りの夜はベル
とアスカの二人しか知らない事だけど、その時の月下に剣を振るうア
スカの姿をベルは忘れられない。

まるで英雄の物語のようなワンシーン場面。冒険者となった自分もいつか、
ああなれるのだろうか？とベルは夢見て、ふと、違和感が浮かび上がる。

「あれ……？　なんであの時、アスカさんは剣を持ってたんだっけ？」
ベルの家に剣の類はなかった。武器に出来そうなのは農具くらい
だ。でもアスカさんは確かに剣を持っていて……とベルが考えてい
る内に、街はずれの廃教会へと辿り着く。

ベルは考え事を打ち切り、神様の待つ廃教会へと入っていった。

次の日の夜。朝に出会った『豊饒ほうじょうの女主人』の店員から朝食を貰

い、いつも通りダンジョンに潜り、明らかに異常な「ステイタス」の上がり方に瞠目し、なぜか神様の反抗期にあっってしまったベル。

どうにか神様の反抗期から立ち直り、『豊饒の女主人』^{ほうじょう}を目標して街中を泳いでいたら、不意に外套のように長い灰髪の後ろ姿を見つけた。

「アスカさん!」

「……ベルか。また会ったな」

地面につかないよう適当に束ねて結ばれた灰髪が振り向く。凍てついた太陽のような銀の半眼に貫かれ、ベルは少したじろいだ。

「お、お久しぶりです!」

「……そう畏まるな。貴公と私の間柄だ」

「そ、そうで……そうだね、アスカ、さん。本当に……本当に、久しぶり!」

あたふたと慌てるベルは静かに擦り鳴らされる声に落ち着き、満面の笑顔を咲かせる。実際は別れて一月程度しか経っていないが、それでもベルには嬉しい再会だった。

二人はしばらく会話を交わしていたが、立ち話もなんだとベルが一緒に夕食を食べないかと誘う。アスカは平然と頷き、ベルに連れられて『豊饒の女主人』へと足を踏み入れた。

「冒険者さん! 来てくれたんですね! ……えっと、そちらの方は?」

「えっと、この人は僕の家族みたいな人で……」

「名前はない。ただ“灰”と呼ばれている」

「え? は、“灰”、さん……ですか?」

「ええっと! 気にしないでください! ちょっと変わってるっていうか、天然が入ってるっていうか、とにかくそういう人なので!」

「は、はあ……」

困惑する店員、シルに弁明しながら、ベルとアスカは店内に入る。シルと同じく美女美少女がせわしなく働くのに免疫のないベルが顔を赤くする横で、アスカは平然としていた。

恰幅のいい女将とのやり取りをして、カウンター席の端に二人は落

ち着く。ちようどベルは店の奥、カウンター席の角で、アスカは角を挟んだ隣だ。

しばらくして、二人の目の前に食事が置かれる。ベルは値段をしきりに気にしていたが、アスカはやはり平然とそれに手を付けるのだった。

しばし食事の美味さを黙々と味わい、ベルがぼつりと零す。

「……アスカさんは、なんで急にいなくなったの？」

「野暮用でな。旅に出ていた」

「旅？ それって、一年に一回くらいアスカさんがやってた？」

「ああ。用が済めば村に戻るつもりだった」

「そ、そうなんだ。……それじゃあここで会わなかったら、アスカさんは誰もいない家に帰ってたのか……僕、悪い事しちゃったかな」

「そうでもない。貴公の居場所が、私のあるべき処だ。たとえ今日袖をすり合わずとも、私は貴公を追ってここに来ていただろう」

「そうなの？ でも、どうして？」

「それが貴公の祖父の、最後の頼みだったからな」

「……お祖父ちゃんの……」

二人の間に、しんみりとした空気が流れる。それを打ち消すようにシルが現れ、会話が弾み——そして、彼らはやってきた。

遠征帰りの【ロキ・ファミリア】の面々だ。

「うひいっ!？」

「貴公、情けない声を上げてどうした」

周囲の客もざわつく中、アイズの姿を見つけて一気に赤面するベルに、平坦な調子でアスカが問う。ベルは答えず、角の更に隅の方へ体を隠した。

「す、少しの間盾になってください!？」

「……いいだろう。私にそれが務め上げられるとは思わないが」

ふるふると震える子兔のような情けない姿に、アスカは眼を細める。やがてロキが音頭を取り、喧騒が一層大きくなった。

ベルは隠れながらも、アスカの体を盾にちらりちらりとアイズに視線を送っていた。向こうは気付いていないのか澄ました顔で、けれど

どこか楽しそうに宴会に参加している。

アイズに視線を向けるベルの顔は、英雄に憧れる子供のそれだ。おそらくはアスカが『ミノタウロス』をアイズと共に倒した時、アイズに憧憬しんようけいを抱いたのだろう。

その割には先にアスカに気付き、アイズを見た瞬間逃げ出したので、あるいは邪な情かも知れない。一目惚れを、そう呼ぶのならだが。アスカはベルを見遣りつつ、食事を終える。そしてベルに声を掛けた。

「ベル。私はそろそろ出るが、貴公はどうする?」

「えっ!? も、もう食べ終わったの!」

「貴公が手を付けていなかったただけだろう。久々の再会だ、支払いは私が持つ」

「そ、それは流石に悪いよ、アスカさん!」
「気にするな」

ベルが断ろうとしたがアスカは既に硬貨を取り出し女将へ支払った。ベルはそれでもアスカへお金を渡そうとしたが、暗い半眼に射抜かれてすくみ、しぶしぶ懐へ戻す。そして立ち上がるうとするアスカを引き留めて、量の多い食事をなんとか平らげるのだった。

「はあく……もうお腹いっぱいだ」

『豊饒ほうじょうの女主人』を後にした二人は、人気もまばらになりつつある夜道を歩いていた。隣には灰髪を揺らすアスカがいる。

「美味しい店だった」

「そうだね、ほんと美味しかった……また行きたいなあ、僕にはまだまだ高いけど」

「貴公が望むなら、次からも私が支払いを持つ」

「いやいや、これ以上は頼れないよ! 自分の食い扶持くらい自分で稼ぐって! 僕だってもう冒険者だし!」

「そうか。時にベル、貴公はアイズ・ヴァレンシュタインに惚れたのか?」

「ひよっ!」

アスカの唐突な言葉にベルは素っ頓狂な声を上げる。ついで顔を

真つ赤にして人差し指を胸元で合わせ視線をふらふらとさまよわせる。

「ほ、ほほほほ、惚れたって、ヴァ、ヴァレンシユタインさんに、ぼぼぼ僕が!」

「そうだ。そう聞いている」

「いやっ、そのっ、何ていうかつ、惚れたっていうかつ、冒険者として憧れてるっていうかつ!? そりやすごく綺麗だし、髪もサラサラでいい香りもするしって違くてツ!」

アイズさんに邪な気持ちなんて全然ツ! そう全然持つてないですツ!」

「そうか。アイズ・ヴァレンシユタインとの性交セックスを望み、子供を欲しがっていると思っただが、違ったか」

「セツツツツツ!? 子供おとおおおつ!」

あまりと言えばあんまりな直球発言にベルはその深紅の瞳ルベライトよりも真つ赤に茹で上がる。ついに言葉を失いパクパクと俎上の魚のように口を開閉する事しかできなくなつたベルは、今にも破裂しそうな心臓を落ち着けるために壁に手をつけてせえせえと息を荒げた。

アスカはどこ吹く風と言わんばかりに無表情でベルを眺めている。そのまま数分棒立ちして、ベルが落ち着いたところで、熱の無い声で言った。

「ベル。貴公はなぜ冒険者になつた」

「え? えつと、それは……え、英雄になる……ため……?」

「その真実味を、貴公からは感じられない。建前ではなく本音を話せ」
「……その……ダンジョンに、出会いを、求めて、です……はい……」
「その出会いが、アイズ・ヴァレンシユタインであったと?」

「そ、そんな滅相もない! 僕なんかが、ヴァレンシユタインさんと、釣り合う、訳が……」

「……ああ、そうだな」

尻すぼみになるベルの言葉をアスカは肯定する。それに言い返せず、顔を地面に向けるベル。アスカはそれを銀の瞳に映して——はつきりと断言した。

「冒険者を辞めろ、ベル・クラネル」

「え——」

顔をあげて、どうして、と。言葉なく問いかけるベルにアスカは途切れぬ晩鐘のように語る。

「貴公は冒険者ではない。何処にでもいる、ただの若者だ」

「ぼ、冒険者じゃないって……でも、僕は！」

「職業の話ではない、貴公の心の裡の話だ。貴公は、心の底から冒険者に成り切れていない」

「そんな事っ……!?!」

反論しようとしたベルは、鋭さを増す暗い銀の輝きに言葉を失う。それは獣狩りの夜に見た、血塗れの「灰」が灯した光だ。

「貴公はどこかで甘えている。己の力ではどうにもならない敵と相對した時、何処かの誰かが倒してくれると心の裡で期待している」

「ち、違っ……!」

「あの時もそうだった。私が貴公を助けた時、その眼に宿っていたのは立ち向かう気概と剛毅ではなく、生を拾った安堵と怯えだった。

それは冒険者の心ではない。力なく、何も変えられはしない弱者のそれだ」

「っ……」

「貴公は言ったな、アイズ・ヴァレンシユタインとは釣り合わない。その通りだ、貴公はアイズ・ヴァレンシユタインに釣り合わない。憧憬しょうけいを抱いているのだろうが、貴公は追いつこうとすらしらない。ただ立ち止まり、光に目を眩ませている」

呆然とするベルを前にアスカは止まらない。凍てついた太陽の瞳を絶対零度に閉ざし、ベルを心ごと突き殺さんがばかりに言葉の刃を突きつける。

「貴公は弱い。その身も脆弱ならば、その心は懦弱だ。高みを目指す気概も無く、並び立とうとする意志もない。

卑小で浅ましく、ただ前を見て満足するだけの弱者。それが貴公だ

——ベル・クラネル」

「……僕、は……」

「私とまみえたあの日から、貴公は何も変わらない。ただ純真で、それだけの若者だ。」

冒険者を辞めて村に帰れ。田畑を耕し、村娘を娶り、子を為し、静かに老いて逝け。

当たり前のように生き、当たり前のように死ぬ。

貴公は冒険者ではない。貴公はそれに釣り合わない。

貴公はアイズ・ヴァレンシユタインのようにはなれない。

ベル・クラネルは——英雄になれない。

故にこそ……せめてもの幸福を得て、死ぬがいい」

「!!!」

ベル・クラネルは駆けだした。そうせずにはいられなかった。血の繋がらずとも、肉親と呼べるアスカを置いて——夜の帳に消えていった。

それをアスカは見送った。

ただ、見送るだけだった。

『正しき使命を与えよう』

『神の枷をはずすがいい』

『やがて火は消え、闇ばかりが残る』

『王となり、闇の時代をもたらすのだ』

それこそが、始まりであった。

真実を語る蛇、王の後見、闇撫でのカアス。

“灰”の前に現れたそれこそが、“灰”を狂った王へと変えた。

だがそれは、どの世界の話だっただろう。

繰り返される火の時代の、どの場所でまみえたのだろう。

“灰”はもう、覚えていない。あまりに多くを喪い続けた。

“灰”は喪失者だ。名前も無く、故郷は消え、不死の旅路を辿ってきた。

その先果てに『隻眼の黒竜』に挑み、敗れ、自らの骸をまた一つ積んだ。

『神』と相對したのは、その時だ。蘇生した『灰』の目の前に、その『神』は悠然と佇んでいた。

『お主に使命を与えよう』

朗々と響くその声に、従ったのは何故だろう。

ああ、答えは決まっている。『灰』は喪失者だ。故に使命を求めていた。

自らの定めた使命では、足りなかったのだ。それではとても、喪つたものを埋められなかった。

『灰』は『神』の手を取った。共に黒竜に敗れた者、行く末はどの道決まっていた。

『灰』は『神』に従い各地を放浪した。未踏の地を踏んでは魔性を狩り、終わればまた次の流浪へ。それを繰り返すある日、『灰』は『神』に呼び戻される。

そして出逢った。あの小さな子供に。

灰よりも白い新雪の髪と、深紅ルベライトの瞳を持つ彼らの系譜に。

『灰』は出逢い、忘れ果てたものを思い出した。

世界で唯一、『灰』が尊たつとぶべきものを。

『灰』はそれを守るために、『神』と子供の、血の繋がらぬ家族となったのだ。

「……不快だったか？ アイズ・ヴァレンシユタイン」

ベル・クラネルの消えた路地を見つめながら、アスカは——『灰』は静かに呟く。月明かりの届かない闇の中から、灰髪の後ろにアイズは現れた。

『灰』は振り向く事なく、言葉を投げかける。

「貴公にとってベル・クラネルは、幼い夢の再現だろう。私はそれを踏み躪った」

「……どうして、あんな事を言ったの？」

「家族だからだ」

伏し目がちに問いかけるアイズに、『灰』は月を見上げて答える。

「私はベルの死を望まない。私の手の届かぬ処で、骸を晒す事を望まない。家族とは、そういうものだろう」

「……何や、難儀な奴ぢやなあ。そのためにわざわざ自分が悪役になってまで罵倒したんか」

「ああ、そうだ。ロキ」

アイズが出てきた所と同じ建物の影から朱髪糸目の女神、ロキが頭の後ろで手を組んで歩いてくる。『灰』はやはり、視線を向けない。飄々とアイズの隣に立ったロキは、どこか興味なさげな顔で言う。

「しかし、目え掛けてる言うから見に来たんやけど、確かにありや冒險者じゃないなあ。

『器』やあない。自分の事もまるで分かっとらん洩垂れの小僧やんか」

「貴公の言う通りだ。確かに『器』ではない」

「でもちよつと可愛いヤツやったなあ」と残念そうに口にするロキの評価を『灰』は静かに肯定する。

「ベルはまだ、夢を見ている。言葉も足らぬ童のように。それでは行く末も知れている。

なればこそ現実を教え、せめて幸福な最期を遂げるべきだ」

「……あんな言い方は、しなくてよかった」

空を見上げたままの『灰』にアイズは一步言葉を差し込む。「アイズたん？」とロキが首をかしげるのも構わずにだ。

「あの子に幸せでいてほしいと思うなら……きつと、他の方法もあった」

「それでもない。少なくともベル・クラネルにとっては必要な事だ」

「……でも……」

「感傷か、アイズ・ヴァレンシユタイン。貴公のそれはベルではなく自分に向けられたものだ。貴公の胸に未だ留まる残滓への慰めに過ぎない」

「っ……」

言葉に詰まるアイズ。なおを空を見上げる『灰』。その間にロキは割り込む。

「あー、ちよい待ち。自分、訳知り顔でずけずけ言いよるけど、アイズ
たんの何を知つとんねん」

「何も。だが見えるものはある。他ならぬ神ロキならば、それが分からな
い筈もない」

「せやけどそれが全部つて訳やない。あんまりうちの眷族シ苛めんな
や」

糸目の隙間から胡乱気な光をロキは揺らす。それにひるむ様子も
無く、「灰」は夜空に首をもたげたままだ。

やはり、分からないと。ロキは心の中でため息をついた。

ロキが「灰」に出会ったのは、家族が遠征から帰った後だ。

団員達を労ったあと、フィン、リヴェリア、ガレスに連れられて来
た灰髪を引き摺る謎の人物——ロキの最初の評価は、小汚いであつ
た。

髪は手入れされておらず、乱雑に絡み、地面に引きずられている。
体の大半を隠すそれは灰色の外套のようで、一見して乞食だと思わな
くもない。

その間からかろうじて見える服は薄汚れていて、何の変哲もないボ
ロ布だ。肌は白く、生気のない死人のようで、凍てついた太陽のよう
な銀の瞳がただただ暗く輝いていた。

そんな人物を連れてこられたロキにしてはまるで意味が分からな
い。そして固い面持ちのフィンに説明を受けてますます分からなく
なった。

ダンジョンの深層、51階層で出会った謎の人物。

来歴不明、名称不明、派閥不明ファミリア。扱う魔法も出自不明。

能力は第一級冒険者に劣らず、それでいて全く無名の冒険者。

本人曰く旅人で、旅の途中にダンジョンに立ち寄ったという意味不
明な言い訳。

新米の冒険者に家族がいて、これから目を掛けるつもりだと言うど
うでもいい発言。

極めつけは——『神の恩恵ファルナ』を受けていないという、前代未聞の
不可解存在ミステリアス。

流石に最後のはありえないと一笑に付したが、実際にソウルの業を
実演され、背中を見せられてはさしものロキも絶句するしかなかつ
た。在り得る筈のない存在が、彼女の目の前に現れたのだ。

そして唐突に、過去と現在の糸が結ばれたようにロキは思い出し
た。

ロキがファミリアをオラリオの頂点に押し上げた時に流れていた、
一つの噂。神々の間で面白おかしく、だがまことしやかに囁かれてい
た話。

何度死しても黒竜に挑んだ——不死身の冒険者の物語を。

(……あん時は、それを確かめるだけで終わってしもうた)

ロキは内心で歯噛みする。不死身である事と黒竜に挑んだ事を肯
定した所で、「灰」は時間だと言つて早々に去つてしまった。まだ礼
も満足に言えてなかったロキ達は勿論止めようとしたが、ロキ達の知
識の埒外——《静かに眠る竜印の指輪》と「見えない体」によつて振
り切られてしまう。

もつと聞くべき事があつたと後悔しながら、残つた四人で顔を突き
合わせてそれはもう悩んだものだ。

「灰」は明らかな異常存在だ。その話がどこまで本当なのか、ロキ
が判断できないという一点においても。どんな些細な情報でも集め
て監視すべきだと、「ロキ・ファミリア」上層部は満場一致で意見を合
わせた。

『豊饒の女主人』で見かけたのは本当に偶然だ。見つけた瞬間危う
く噴き出しそうになつたロキは、表面上はいつも通りに音頭を取り、
「灰」とその連れが店を出たタイミングで酒に酔つたと嘘をついて
来たがつっていたアイズと共に追いかけた。

(今がチャンスや。何が何でも、聞き出さなアカン事がある)

ロキは消沈するアイズを労わりつつも、鋭い視線を「灰」に向け。

「——気に入らねエ」

口を開こうとした瞬間、苛立つ狼の聲が割つて入った。

「ベート!? ついてきとつたんか!」

「ベートさん……」

ロキが驚きの声をあげアイズが目を見開く中、〃灰〃が見上げていた空の近く、建物の屋上から狼人が降りてくる。

【凶狼】、ベート・ローガだ。

「…………ふむ。貴公、苛立っているな。私にか？ それともベルにか？」
「…………てめえにだよ、〃灰〃野郎」

「ああ、それならば私の眼にだらうな。貴公からすれば、私の眼ほど神経を逆撫でるものもあるまい。それと悪いのは、私の態度か。

だがこればかりは、どうしようもない。許したまえよ、ベート・ローガ」

「っ……………」

ギリツ、と牙を軋らせベートは憤怒の形相で〃灰〃の襟首を掴み上げた。〃灰〃はそうされてようやく彼らに眼を向ける。

凍てつく太陽のような暗い銀の輝きを。

敬意も敵意も感じられない、蟲を見下ろすような底冷えする瞳を。

冷たい谷のような色に射抜かれて、けれどベートは激昂した。

「ざけんじゃねえぞっ…………… てめえは俺たちを『雑魚』だとすら思っちゃいいねえ！ 鬱陶しい小バエか何かみてえに思っつてやがる！

あの時もそうだっ！ てめえが俺たちをモンスターごと吹っ飛ばそうとした時も、石ころ見るような眼えしやがって！

イラつくんだよ!! 俺を——俺たちを見下すんじゃねえ!!」

〃灰〃の胸元で握られる拳と、灰毛逆立つ狼の咆哮。大気を喰らう裂帛が〃灰〃の体と周囲の建物を揺らす。

それでも〃灰〃は変わらずに、暗い瞳で平然と話す。

「ああ、許したまえよ、ベート・ローガ。永く生きると、見え過ぎる。何処も彼処も海嘯のようで、あまり区別がつかんのだ。

この星空に蠅と竜が居たところで、どちらも等しく点に過ぎない。それと同じだ。私からすればただそうであり、見下してなどいないのだよ」

「ハッ、じゃあ何だ、てめえは何でも同じに見えるっつてか？ 俺も神も、第一級冒険者も新米も、全部まとめて石ころみてえに思っつてか!?!」

「否定はせんよ。そうせざるを得ない生き方をしてきた。今更、変えられるようなものでもない」

「——クソ野郎が」

ギチリとベートが牙を剥く。狼人に巡る激憤がまるで圧を発したかのように風が吹き荒れる。

怒りを滾らせるベートを見て、アイズは動こうとした。このままでは「灰」に手を出してしまうかもしれない。個人として、「ロキ・ファミリア」の一員として、それは許されないとベートを止めようとして——ロキがアイズの肩に手を乗せる。

振り向けば、ベートを信じろと、薄く開かれた朱色の目が言っているような気がした。主神に止められたアイズは、少し逡巡して、動かず場を見守る。

「——何なんだ、てめえは」

今にも爆発しそうな雰囲気のまま、ベートは「灰」を睨む。「灰」はやはり起伏なく、繰り返した答えを返す。

「旅人だ」

「そうじゃねえ！　どういう存在もんかって聞いてんだ！

てめえはまるで得体が知れねえ。強つええのか弱よええのかも分からねえ。気持ち悪わりいくらい何も見えねえし見させねえ癖に、こっちばっかりジツと見てきやがる。

まるでダンジョンみてえでウゼえんだよ！　鼻が利かなくてしようがねえっ！　てめえみてえなヤツなんか、それこそ神々バカ連中の中にもいなかっただ！

そらすんじゃねえよ、ちゃんと答えやがれ！　てめえは——一体何なんだ!？」

「……………」

渾身の咆哮でもって問いかけるベート。瞠目するアイズと、期せずして聞きたかった事を代弁したベートに心中でガッツポーズをするロキ。

「灰」は、そこで初めて表情を変えた。生白い月のように呆けた顔をする。そして眼を何度か瞬しばたかせて——クツクツと、掠れた笑い声を

擦り鳴らした。

「……何笑つてやがる」

「いや……いや。貴公を笑っているわけではない。ただ、そんな事を聞かれるとは思わなかった。よもや私が、私自身の事を問われるなど……久しく、いや、この生涯になかった事だ」

「ああ？」

「私がどのような誰であれ、関係はなかったという事さ。望もうが望むまいが、その『器』ならば焚べられる。我らの使命は、そういう呪いだ」

「……言ってる意味が分からねえ」

「ああ、すまない。こういうのは初めてだから、上手くできるか分からないが——貴公の期待に応えられるよう、どうにか言葉を紡いでみよう」

「その前に降ろしてくれ」と笑う。灰に少し毒気を抜かれながら、ベルトは胸元から手を放す。灰はなおも笑いながらよれた衣服を矯め直し——遠い日々を思い返すように、瞳に憧憬を奔らせた。「さて……では、私について語ってみようか。」

私に名前はない。ただ、灰と呼ばれている。

私は不死だ。死ぬ事がない。

私は器だ。無限のソウルを呑んできた。

私は灰だ。火に寄る辺なく、闇に吹き溜まる暗い魂だ。

私は王だ。火の時代の終わりに芽生えた、最後の薪の王。

そして私は、狂王だった。私が火の時代を——終わらせたのさ」
月下、一柱の神と二人の眷族を前に——灰は、幽かに微笑んだ。

『世界とは、もとより悲劇だ』

『分からないか』

『本当は誰も望んではないのだ……』

それはもう、灰が忘れ去った記憶。

『最初の火』が熾^わった黎明期。闇より生まれた幾匹かが、『王のソウル』を見出した。

最初の死者、二ト。

太陽の光の王、グウイン。

火の魔女イザリス。

そして——誰も知らぬ小人。

“灰”は、誰も知らぬ小人の一人だった。古竜が滅び、火の時代が始まる中、密かに、だが不屈をもって闇の到来を待ち望んだ。

大王グウインはそれを恐れた。誰も知らぬ小人とその子孫たちを恐れ、末娘フィリアノールと共に輪の都へ閉ざした。

いつか迎えを寄こすと約して。

だがその時は決して訪れなかった。

“灰”の前に真実を語る蛇が現れたのは、グウインが最初の薪の王となつて千年も後だ。

“灰”は憤った。グウインの謀略を、神が人に与えた欺瞞の使命を。矮小な身の上で、不相応に怒り狂つたのだ。

そして“灰”は、狂王となった。

本来ならば、“灰”はそこで終わったのだ。“フィリアノールの騎士、シラ”の手によつて屠られ、滅ばぬ磔^{はりつけ}となる筈だった。

だが——“灰”は逆に討ち倒した。死を忘れさせる刻印が、数多も己の屍の果てにシラの命を奪い去った。

“灰”は狂王だ。ただひたすらに狂っていた。そしてはや、止める者はいなかった。

“灰”は小人の王たちを貪った。闇を喰らう古竜をも喰らった。大王の愛しい末娘を殺し漁った。王女の眠りを守る勇士たちも、火を穿たれながら都を守った騎士たちさえ、例外ではなかった。

強大な存在を次々失つた輪の都はやがて均衡を失い、崩れ、莫大なソウルとなった。それすらも“灰”は呑み干し——そして因果が、崩壊した。

“灰”は繰り返される火の時代に囚われた。それでもなお狂っていた。

亡者も英雄も区別なく、ソウルをかき集め、喰らい、肥大した。幾度も幾度も火の時代を繰り返し、何ともつかぬ膨れ上がったソウルの塊になった。『灰』は、その最果てに最後の薪の王となった。

だが、『灰』は狂王だ。火継ぎをせず、火の時代を終わらせる。

正気を失った『灰』は共にあつた火防女を踏み躪り——消えかけた『最初の火』を我が物とした。

全ては火の時代に抗わんがために。闇の時代をもたらさんがために。

『灰』は『最初の火』を手に入れ——そして真に発狂した。

『最初の火』に照らされた『王のソウル』——『ダークソウル』が深海に達したのだ。人間性と記憶は深海に溶け、二度と浮かび上がる事はなかった。

残ったのはソウルと、僅かな記憶、枯れた人間性ばかりだった。火の時代に抗わんとした妄念すら忘れ去った『灰』は、喪失者となり闇の時代を彷徨った。

そして永い、あまりに永い旅路の果てに——『灰』は分かれた世界へと辿り着いた。

大地に穿たれた深い穴に蝕まれた世界に。その中心とも言われる、迷宮都市オラリオに。

それは今から、15年前の出来事だった。

「……つまり、話をまとめるとや。神々でも知らんような古い時代から、ずうーつと生き延びてきた不老不死もどき——それが自分たちゆう訳やな？」

「ああ、その認識で構わない。私自身、忘れた事の方が多い。口にこそするが、当てにならない情報も多いだろう」

「まあ、突っ込みどころ満載やったしなあ。話は虫食いだらけで訳分からんし、『最初の火』だの『薪の王』だの、聞いた事ない単語ばかりやし。ちゆうかグウィンとか誰やねん、知らんわそんな神！」

ベチツ、と隣に立つベートにノリツツコミを入れる神。ベートはイ

ラツとするも、ダメージはないので無視する。今はロキよりも「灰」に関心があった。

憤怒を抑え、静かに睨んでくるベートに「灰」は元の無表情を向ける。

「私が口のできる事は全て話した。これ以上は、実物を見せる以外に証明の手段もない。あとは貴公の、受け取り方次第だ」

「……てめえがぶつちぎりてイカれてるっただけは分かった。こんな話、信じられるわけがねエ」

吐き捨てるように言つて、ベートは静かに吼える。

「けどよオ、一つだけ言うんなら——てめえはどうしようもねえ『雑魚』だ。間違つても俺たちと対等にはなれねえ、一生地面を這い蹲^{つくば}つてるだけの野郎だ」

ベートは断言する。「灰」は決して、高みにはいないのだと。

どれ程の戦いを経ようと、どれ程のソウルと呼ばれる何かを得ようと。

「灰」は「灰」だ。所詮風に崩れ去る砂粒でしかない。

そう、言葉に籠めるベートの意志を、「灰」は当たり前のように肯定する。

「そうだな。私は決して強者ではない。語つた事も、全てが私の意志の下で行つた事ではない。

それ以外に道はなく、何があろうと前に進み続けるしかなかった。偏^{ひしえ}に不死があつてこそ、遂げられたただけだ。

だから私は旅人なのさ。ただ前に進むだけの——それだけの不死だ」

「……ちっ」

暗い銀の半眼を僅かに揺らして、「灰」は答えた。ベートはその瞳を自らの眼に捉え、見定め……舌打ちをして踵を返す。

「ベート、どこ行くん？」

「決まってるんだろ。帰るんだよ」

「……ええのか？」

「良いも悪いもねえ。俺あ、雑魚^{ザコ}をいたぶる雑魚^{クズ}じゃねえ。そいつは

『雑魚』だ、かかずらつてる暇なんかねえんだよ」

問いかけるロキに吐き捨てて、ベートは去っていく。その前に「灰」を一瞥し、牙を剥いた。

「もうその面を俺に見せんな。あのガキみてえに巢に逃げ込んで、二度と出てくるんじゃないやねえ。雑魚は雑魚らしく大人しく巢穴で震えてろ」

「保証はしかねるな。こんな私にも、^{たつと}尊ぶものはある。そのためならば、何をも厭わ^{いと}ないつもりだ」

「ハッ、下らねえ」

「それと一つ、訂正をしておこう。ベルは本拠^{ホーム}に帰っていない。今頃はダンジョンに潜っているだろう」

「……あ？」

そのまま立ち去ろうとしたベートは、「灰」の一言に足を止めた。黙って話を聞いていたアイズが僅かに眼を見開く。「灰」はまた月を見上げて言葉を綴る。

「アレは、私とは違う。弱者ではあるが、怯えてばかりではない。純真で、無垢で、真つ直ぐだ。一度こうと決めたら、どこまでも突き進んでいく。」

だから冒険者を辞めろと言った。それで折れるなら、それも良し。だがきつと、ベルは高みを目指すだろう。そう思ったから、私はベルを否定した。

まあ、アレは駆け出しだ。己の限界よりも深い階層へ進んで死んでしまうかもしれないが、それも致し方ない事だろう。

人は、いずれ死ぬものだ」

「っ……」

そこまで聞いて、ベートは足早に夜の闇へと消えていった。アイズはそれに続くようとして、雷に打たれたかのように立ち止まる。ロキは「難儀やなあ」と頭を搔いて、ジロリと「灰」をねめつけた。

「自分、矛盾しとるの分かつとるか？」

「家族を見殺しにする、私の行為はそうだろうな」

「家族言うなや、反吐が出る。死ぬかもしれないん分かつて何もせん癖

に、気取んなやボケ」

「……そうだな。家族など、一つとして持たなかった私が口にすべき言葉ではない。

だが、アレの祖父に託された以上は、紛い物でもそうしなくては立つ瀬がない。私はこれからも家族それを続けるよ。

それが私の権利であり、義務だ」

「はっ、勝手にせえ」

「行くで、アイズたん」と言つてロキはずかずかと歩き去る。アイズはハツとして女神ロキの後を追おうとするが、数歩歩いて立ち止まり、月を見上げたままの「灰」を見遣る。

口を開いては、つぐみ。それを数度繰り返して、アイズはやつと言葉を発した。

「……あの子を、どうしたいの……う」

「……先も言ったな。私には尊たつとぶものがある。

私は多くを喪い過ぎた。もはや何の感情も浮かばぬほどに。そして失わないものもまた、私の裡に燻っている。

この世には、喪われるものと失わないものがある。

一方は人の営み、その全て。

一方は天の神々と、この世そのもの。

私はそのどちらにも価値を見出さない。そこに尊たつと厳を感じようにも、私の感性は枯れ果ててしまった。

だがなおも、私には尊たつとべるものがある」

「灰」は月から瞳を下ろし、己の手のひらをじつと眺める。そこに灯る何かを幻視するように。

「あらゆる場所、あらゆる時代を超えて紡がれるもの。担い手を変えながら脈々と受け継がれるもの。誰かが死に絶え、誰かが生まれ、その系譜に流れるもの。

名も無き者たちが継ぐ物語。まだ見ぬ果てへと突き進む——命の螺旋。

ただそれのみを、私は尊たつとぶ」

月下に佇む灰髪の存在。そこから揺らぐ「残り火」を、アイズは見

た気がした。

「私は、見ていたいのさ。ベル・クラネルの螺旋の先を。そのために私は、血の繋がらぬ家族となったのだ」

「……………」

「話はこれで終わりだ、アイズ・ヴァレンシユタイン。またいずれ、出会う事になるだろう」

“灰”はそれっきり沈黙し、静かな足取りで去っていった。残されたアイズは灰髪の後ろ姿を見送る事しかできなかった。

ベートはダンジョンに潜っていた。

深い理由はない。ただあの“灰”との会話があまりに荒唐無稽で、その『雑魚』つぶりに苛立つてしようがなかった。それを晴らすためにダンジョンに潜った。ベートは言い訳するように理由を積み立てる。

(……………つち。もう8階層かよ)

(本当にいやがるのか？ あの^{ガキ}新米は)

ベートは迷宮をズンズンと進んでいく。普段冒険者を見つけては襲い掛かるモンスターも、第一級^ベ冒険者の威圧に^{けお}気圧されて微塵も姿を現さない。

8階層の大半をまわり次の階層へ行こうかと思いつながら、“灰”の言葉を真に受けた自分に馬鹿らしさを覚えるベート。苛立ち紛れにLv. 5の脚力で蹴られた石が破碎し粉塵をまき散らす。

(うざってえ。これ以上“灰”野郎の戯言に付き合ってられるか)

石をもう一つ土煙に変えて、ベートは踵を返そうとする。その時、狼人特有の鋭い聴覚が、鋼のぶつかる音を拾った。

瞬間、^{ヴァナルガンド}【凶狼】は秘めた敏捷を如何なく発揮する。音の方向へ10秒もかからず辿り着き——そこでナイフをモンスターの胸元に深々と突き刺す、ボロボロの^{ベル}兎を視界に入れた。

魔石に達した傷はモンスターを消滅させる。全体重をかけて覆いかぶさるように突き立てていたベルは、灰となったモンスターの死骸

へ倒れる。

ナイフは半ばから折れかけていた。脇目も振らずダンジョンに飛び込んだのだろう、衣服は着のままの冒険者を舐めた格好だった。鎧の役割など当然期待できず、当たり前前のようにポロポロで、ベルの全身は傷に覆われている。

右も左もどころではない、前後不覚の^{シロウト}新米以下。ベートの眼に映ったのは、そんな大馬鹿野郎だ。

「……おい、『雑魚』。そんな所で寝てんじゃねえ。通るのに邪魔だろうが」

だからベートは、嘲笑を顔に貼りつける。うつぶせに倒れ虫のように小さなうめき声を上げるベルを脚で転がし、あおむけに裏返す。

「ぐうっ……!?!」

「痛えか？ そうだろうなあ。てめえみてえな雑魚が^{わきま}弁えもしねーでダンジョンに潜ったんだ。こんな塵屑^{ゴミクズ}同然になっちまってよ、笑えてくるぜ」

「うっ、うう……」

「ハッ、吼える事もできねーか。みつともねえったらありやしねえ」

血を吐いて呻くばかりのベルをベートは見下す。【凶^{ヴァナルガンド}狼】は口元を裂かせ、ベルの無様をせせら笑う。

「これに懲りたら、もうダンジョンに入ってくんな。てめえの命も守れねー雑魚は、一生巢穴に引っ込んでろ。」

雑魚は雑魚らしくしてろ——二度と、『冒険者』を名乗るんじゃねえ」

放たれた嘲笑が、朦朧としたベルの意識を掻き回す。自分が何をしているのか、何をしていたのかも分からない少年は——折れかけたナイフの柄を、碎けんばかりに握りしめた。

「……がう……」

「……何だ、聞こえねーぞ」

「……違う……僕は……」

ベルが動く。傷の無い所など見当たらない体で、限界まで酷使した手足を引いて——無様でも、みつともなくても立ち上がる。

「僕は……冒険者だ……!」

血反吐を吐きながら、ベルは吼える。

「弱いままじゃ、いられないんだ……!」

体がとつくに折れかけていても、前を見る。

「あの人に、追いつくんだった……!」

ベルの双眸が見開かれる。弱者ではない、怯えではない——『男』の意志が燃え盛る深紅ルベライトの光が、瞳目するベートを貫く。

「僕は——強くなるんだっ!!!」

喉から絞り出される声は血混じりで、けして強くはない。だが、誰にも折られない誓いを立てるように、ベルは咆哮し——ふらりと意識を手放した。

かろうじて繋がっていた意識の糸が途切れる。少年の体は力なく崩れ……倒れる寸前、ベートが胸倉を掴み、持ち上げる。

「……だったら、こんな所で死にかけてんじゃねえぞ。……『兎野郎』」
牙を剥き、顔に走る刺青を歪ませながら、ベートは呟く。そしてベルの体を乱暴に担ぎ上げ、苦々しそうに唾を吐いて来た道を引き返した。

「ベート、どこ行つとつたん?」

【ロキ・ファミリア】、本拠ホーム。『黄昏の館』に帰還したベートを迎えたロキは、不機嫌そうな空気を隠しもしない狼人に呑気に尋ねる。

「どこでもいいだろ。俺の勝手だ」

ベートは一言そう言い捨てて、階段を上っていく。その途中で足を止め、ロキも訝しむ程長い沈黙の後、虚空の先に何かを見据えるように口を開いた。

「なあ、ロキ」

「なんや?」

「『灰』野郎が言つてた事……どこまで本当だ?」

人は神に嘘をつけない。オラリオならば誰もが知る事実を元に、ベートは『灰』の言葉を見極めようとした。

だがロキは「うくん」と悩む素振りを見せ、面目なさそうに答えた。
「それがなあ、分からんねん」

「……ああ？ 寝惚けてんのか？ てめえ、神だろうが」

「そうや。そんであのけつたいなヤツは人の筈や。その筈なんやけど……何でか、ウソかホントか判別できんねん。」

せやからベート、ウチが言えるのは一つつきりや」

「……………」

「^{アレ}灰^こは人より、神々^{ウチら}に近い。ヤツに関わるつもりなら、氣い付けえよ」

「……あんな『雑魚』に用なんかねえよ」

吐き捨てて、ベートは上階に消えていく。「おやすみ」と見送ったロキは、青い光の降り注ぐ窓から月を見上げ、目を薄く開いた。

「……にしても、眉唾やと思つとつたヤツが実在するとはなあ。これやから、下界つてのは面白い」

月明かりの下、滑稽に嗤う道化のように。酷薄な笑みをロキは裂かせた。

空をたなびく闇が去り、変わらぬ光が昇る朝。

「灰」はダンジョンに蓋をする白亜の摩天楼、『バベル』の正面で、静かにそれを眺めていた。

隙間なく傷付けられた檻^{らんる}をさらす、朝霧に包まれたベル・クラネルを。

ベルの側には、空になった試験管が転がっている。誰かが治療し、ここに投げ捨てたのだろう。深く傷ついていたと思しき箇所は、血の固まった痕を残して綺麗に治っている。

「……『器』が変わった。螺旋の先が、また見えなくなった」

折れかけたナイフを握りしめて眠るベルを、見透かすように「灰」は呟く。子供の成長を喜ぶように、ほんの少し口角を上げて。

「……………、くう……………」

丸くなった兎が身じろぎをする。体を伸ばし、ぱちぱちと目を瞬か

せるベルは焦点の合わない深紅の瞳を『灰』へ向けた。

「……アス、カさん……？」

「起きたか、ベル」

寝起きの口から奏でられる覚束ない旋律を聴いて、『灰』は『アスカ』となる。

「……は……？」

「バベルの神前だ。貴公こそ、何故ここで眠りこけていた？」

「……僕、ダンジョンに潜って……モンスターと戦ってたら、倒れて……」

「そうか。ならば誰かに助けられたのだな。その割には打ち捨てていくあたり、相当な捻くれ者だろうが。」

だが、貴公の命はその誰かに救われた。感謝は忘れぬことだ」

「……っ……はい……！」

何かを思い出したのか、はつきりと覚醒したベルは泣き出しそうになりながら強く返事をする。無言で差し出されるアスカの手をとってベルは立ち上がり、ふらりと倒れてしまいそうになった。

「す、すいません、アスカさん」

「気にするな。最低限の治療はされているようだが、体力が戻っていないのだろう。今は私に甘えておけ」

「はい……」

ふらつく体を支えるアスカの言葉にベルは顔を落とす。「ホームはどこだ？」と聞いてくるアスカに説明しながら帰路につき……その道中、うつむくベルが消え入りそうな声を発する。

「……アスカさんはまだ、僕に冒険者を辞めてほしいって思ってる……っ……」

「ああ。貴公にはあまりに荷が重い。適正もなければ力もない、このままではいつかダンジョンの何処かで死を迎える。

私は、そうなって欲しくはない。だから辞めろと、そう言った」

「だが、これは貴公の道だ。進むべき彼方も足を踏み出すかどうかかも、貴公以外に定められる事ではない。」

故にこそ、好きに選べ。覚悟があるなら迷いを振り切れ。これは、貴公の物語なのだから。

貴公の祖父ならば、そう言っただろう」

「……アスカさん」

「何だ？」

「……ありがとう」

「……今回の発端は私なのだがな。だがまあ、礼は受け取っておこう。その上で言っておくが、もう頭は下げるな。

我らは、家族だ」

「……うん」

断言するアスカに、ベルは嬉しそうに微笑んで。二人は日の昇る中を歩いていった。

ベルのホームである廃教会へ二人は到着する。扉を開けると同時に現れたベルの主神、ヘスティアは全身傷だらけに見えるベルの姿にそれはもう慌てた。アスカが口を挟むまでも無く急いでベルをベッドに寝かせる。

疲れていたのだろう、すぐに眠るベルに安心した表情を見せて、ヘスティアはアスカに向き直った。

「ベル君をここまで連れてきた事を、あの子の主神として感謝するよ。それはそれとして聞きたいんだけど、君は誰なんだい？」

「名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

「は、『灰』？ えーっと……ひよっとして、ベル君がオラリオに来る前に失踪したっていう、アスカつてのが君かい？」

「私をそう呼ぶのはベルとその祖父だけだ。私の大事な、家族だけだ」
「……その割には、何も言わずに急にいなくなっただってボクは聞いていたんだけど？」

「私にも事情はある。その辺りはおいおい話そう。その前に一つ、貴公に願いたい事がある」

「ん？ 何だい？」

「私を——貴公の【ファミリア】に入れてほしい。

家族とは、共にあるべきものだろうか？」

突然の申し入れに目を瞬かせるへスティアに、アスカは柔らかな笑みを浮かべた。

“灰”に語りかける者は、もういない。

火の時代は過ぎ去った。黎明期、闇より生まれた幾匹かも、“灰”を残して皆消えた。

闇の時代を彷徨う中、“灰”の眼を捉えたのは憧憬だ。

最後の薪の王たる“灰”の以前にあった、かつての薪の王たち。火は陰り、王たちに玉座なくとも、その身を賭して継いだ『最初の火』。彼らの亡骸に灯る残り火が、“灰”の道しるべだった。たとえ彼らを喰らい、ソウルを呑んで淀んだ臟腑はらわたに同じ火が燃えていたとしても。

記憶のほとんどを摩耗し、僅かな人間性と肥大したソウルばかりの怪物であった“灰”には、それが何よりも貴いとつとものに見えたのだ。

故にこそ“灰”は尊たつとび、その行く末を見守ろうとした。闇の時代の儂い光、それが示す道の先を。

“灰”が、狂王たる前の誰も知らぬ小人であった頃。とうに忘れ果てた原初の記憶、『最初の火』に見出した憧憬を。

それを思い出させてくれた少年のために、“灰”は生きる事を決めた。

これは、埋もれた【灰の物語】。

少年が歩み、女神が記す。そのそばに常にあったという、一人の“灰”の物語。

“灰”

L V. 1

力：10 耐久：10 器用：10 敏捷：10 魔力：10

《魔法》

【魔術】

- ・ウロコのない白竜が探究したソウルの業。
- ・ソウルの扱いにより、様々な効果をもたらす。
- ・才能により継承可能。

【呪術】

- ・火の魔女が創造した混沌の炎を扱う術^{すべ}。
- ・火への憧憬により、あらゆる炎を操る。
- ・才能により継承可能。

【奇跡】

- ・神々の物語を学び恩恵を受ける祈り。
- ・吟^{ぎん}じる物語によって受ける恩恵は異なる。
- ・才能により継承可能。

《スキル》

【暗い魂】^{ダークソウル}

- ・不死となる。
- ・死亡する度に人間性を損失する。
- ・完全に死亡するまで致命傷を無視して戦闘続行可能。
- ・【経験値】^{エクセリア}獲得不可。

『最初の火』^{おこ}が熾^{おこ}った黎明期、『ダークソウル』を見出した誰も知らぬ小人の一人。

輪の都に閉じ込められ、不相応に憤り、火の時代に抗わんとした狂王。

“ファイリアノールの騎士、シラ”によって屠^{ほふ}られ滅びぬ礫^{はりつけ}となるはずが、逆に討ち倒し輪の都をソウルへと変え呑み干した。それにより因果が崩れ、繰り返される火の時代に囚われる。

幾度となく繰り返される火の時代でソウルを吸収し続け、肥大し、

やがてその終わりに最後の薪の王となった。だが狂王は消えかける『最初の火』を奪い我が物としてしまう。

闇の時代が訪れる中、『最初の火』を得た事で『ダークソウル』の闇が深海に達し発狂、人間性と記憶を摩耗し、火の時代に抗わんとした妄念さえ忘れ去ってしまった。

ソウルと僅かな人間性ばかりが残った狂王は、喪失者となり闇の時代を彷徨^{さまよ}った。そして永い時の果てに分かたれた世界の一つへ達する事となる。

身長100C^{セルチ}を少し超える程度の幼女。『ダークソウル』の影響により老いず、また朽ちない。

生まれより伸びる灰色の髪を持つ。手入れはされておらず乱雑に絡み、地面に落ちた髪を引き摺って歩く。

肌は死人のように白い。凍てついた太陽とも称される銀の瞳を持つている。平時のほとんどを半眼で過ごすため、灰色の睫毛に隠される瞳は妙に暗く、底が見えない。

見た目は完全に小人族^{バルウム}であり、時折自らを小人と呼ぶため周囲からは小人族^{バルウム}と認識されている。

実際何の種族かは「灰」本人にも分からない。誰も知らぬ小人の子孫が人間なれど、誰も知らぬ小人そのものが人間であるとは限らないからである。

人形の姫と焼け残りの灰

「むむむむむむむむむむむむむむつ……!!」

「ヘスティア・ファミリア」本拠、^{ホーム}廃教会。

神友のヘファイストスのお情けで与えられた廃教会の地下室で、ヘスティアは目を真ん丸に見開いて難しい顔でうなっていた。

端を破らんばかりに握りしめられた用紙には、つい先ほど新たな^{ファミリア}眷族になった人——アスカの「スティタス」が刻まれている。

「魔法がいきなり三つも!! しかも【魔術】【呪術】【奇跡】つて……まるで一個ずつの魔法じゃなくて何かの分類^{カテゴリー}みたいじゃないか!? 詠唱も全く見当たらないし、それに全部に書いてある継承可能つても気になる……!」

穴が空くほど「スティタス」を見つめるヘスティアは、それぞれの魔法に書かれた注釈に頭を混乱させる。

（ウロコのない白竜が探究したソウルの業? 明らかにモンスターと思いき竜がどうして探究なんて学者の真似事ができるんだ!? そもそもソウルの業つて何だ! ソウルつて何だ!）

火の魔女なんて聞いた事ないし、混沌の炎とかいう聞くからにヤバそうなものを扱おうとするんじゃない!? 大体、憧憬で炎が操れるなら誰も苦労しないよっ!

最後の神々^{ボクラ}の物語から恩恵を受けるとのはまるで意味不明だよっ! 神から受ける恩恵は『神の恩恵^{フアルナ}』だろう!? それとも『神話』なのかい!? 賢者の石を造った眷族の前でぶっ壊した神の物語で^{バカたち}神々の腹筋をぶっ壊すのかいーっ!）

内心で嵐のようにツツコミの悲鳴を上げるヘスティア。はたから見ている『灰』は顔を赤くしたり青くしたり面白おかしく変形する神の顔に何の感情も浮かべていなかった。

百面相をする主神^{かみ}と、無表情に眺める眷族^こ。いつそシユールな光景は、ヘスティアの目がスキルの項目に滑った所で止まる。

（^{ダークソウル}暗い魂……このスキルは、危険だ）

頬に汗を流し、恐れにも似た色が^{にじ}滲む形相でその項目を凝視する。

書かれている注釈は以下の四つ。

- ・ 不死となる。
- ・ 死亡する度に人間性を損失する。
- ・ 完全に死亡するまで致命傷を無視して戦闘続行可能。
- ・ 【経^{エクセルリア}験値】獲得不可。

(上の三つはまだいい。いや、不死になるとかとんでもない効果ついでるけど。人間性ってのは分からないけど、死亡する度に損失ってことは明らかなデメリット。つまりベル君と同じで死なないようにって嚴重に注意すればいい。死なないからってそれを前提とした戦い方なんてまずしないだろうし。

でも、最後のこれは……あっちゃいけない)

眉間にしわを寄せ眉端を下げるヘステイアの目に映っているのは「【経^{エクセルリア}験値】獲得不可」の一文。それは『神の恩^{ファールナ}恵』そのものを打ち消すと言っても過言ではない、最悪な効果だ。

そもそも【経^{エクセルリア}験値】とはその人の歩んできた歴史そのものだ。人が日々生きる中で出逢った事柄、成し遂げた事象。人には扱い切れず埋没していく軌跡を指す。

それを得られないなんて事はありません。訪れる明日は何の感慨も与えず、過ぎゆく出会いは何の変質ももたらさず、成し遂げたあらゆる出来事は無価値になり下がる。これは、そういうスキルだ。

あるいは——死人のように歴史が止まっている、足跡すらも残さない亡霊のような旅人。

このスキルが示すのがアスカの、[〃]灰[〃]の本質なのだとするれば……ヘステイアは瞬きも忘れて考え、喉を大きく鳴らす。

「そろそろいいか？ 我^{かみ}が主神よ」

「うひゃあっ!？」

思考に没頭していたヘステイアを引き戻したのは、アスカの平坦な口調だった。ソファアから飛び上がるように跳ねたヘステイアは、眠るベルが発したうなるような寝言に慌てて口を塞ぐ。

「……貴公には返事を大声で返す癖があるのか、ヘステイア。老婆心ながら、矯正すべきだと進言しよう」

「君が急に話しかけるからびつくりしただけだよ！　というか、ベル君が起きちやうからあんまり大きな声出させないでくれ!？」

「そうか。それは済まない事をしたな、謝罪しよう」

ひそひそと声を張り上げる珍妙な特技を発揮するヘステイアにアスカは素直に頭を下げる。やりにくいなあと、そんな印象を抱きながら、ヘステイアは百面相から一転、申し訳なさそうな、やりきれない表情でアスカに用紙を渡す。

「アスカ君、どうか落ち着いて見てほしい。これが君の【ステイタス】だ」

「感謝する。……ふむ、成程な。当然の帰結だ」

「……………怒らないのかい？」

【ステイタス】の書かれた用紙を流し見て一人納得する仕草をするアスカに、ヘステイアは恐る恐る尋ねる。変わらぬ無表情を保つアスカは、こてんと首を傾げた。

「何をだ？　私には怒る理由が見当たらない」

「……………君のスキルの事だよ。【暗い魂】ダークソウルなんて聞いた事もないけど、効果は『【経験値】獲得不可』…………それは、つまり…………君はもう、これ以上の成長を見込めないうて事だ」

「らしいな。だが、何か問題があるのか？」

「大有りだよ！　もう成長できないんだぜ!?　君がこれまで積み上げてきた事も、これから成し遂げる事も、全部無駄になってしまったんだ！

ボクが、スキルを形にしまったばっかりに！」

ダンツ、とヘステイアはソファアを殴りつける。自分が『神の恩恵』ファアルナを与えなければ、こんな事にはならなかった——言外にそう悔やむ彼女に、アスカは銀の半眼を小さく細めるのみだった。

『恩恵』はどの神が与えようとも変わらない。私のような流浪者でも知っている事だ。貴公のせいではないよ」

「でも……………」

「ヘステイア、これは私の生の結実だ。私の旅が無為であったとして、それが何だと言う？」

私は未だ此処にいる。生きて、家族の隣に在る。私には、ただそれだけで十分だ」

「……君は、それでいいのかい……?」

「是非もない。私は初めからこうだった。それが目に見える形で現れたところで、微塵も感慨はない」

堂々と語るアスカには何の負い目もなかった。相変わらず起伏はなく、凍てついた太陽のような銀の瞳がヘスティアの心に真実を告げる。

無理に背負ってくれるな。これが私だ。これが、これこそが私の旅路の在り様なのだ——暗い色で伝えてくるアスカに、ヘスティアは痛恨をこらえてうつむくように頭を下げる。

「……分かったよ。君が受け入れているのなら、ボクも悔やむのは止める。それと、ごめん。君の「スティタス」の事を僕が気負うのは筋違いだった」

「気にするな。貴公が家族想いである事は、ベルへの献身を見れば分かった。私を想って嘆いてくれたのだろうか？ ならば歓喜はあれ、怒りなどしない」

「……ありがとう、アスカ君」

事もなげに言うアスカにヘスティアは微笑む。ヘスティアの曇っていた顔が晴れてアスカはこつくりと大きく頷き、ヘスティアに手を差し出した。

「さて……『恩恵』も刻んで貰った事だ。私は貴公の、「ヘスティア・ファミリア」の一員となった。改めて、よろしくお願いする」

「——うん！ こちらこそよろしく！ いやー、ベル君に続いて二人目の眷族かぞくだ！ こんなに嬉しい事はない！ 今日じゃガ丸くんパーティーだなっ！」

アスカの細い、小さな手をヘスティアは両手で包み込むように握る。アスカの体温は低くひんやりとしていて、どこか暗く、けれど優しさを感ずる手だった。

よほど嬉しいのか、上機嫌に手を上下に振り回すヘスティアにされるがまま、アスカは次の話題へ移る。

「楽しみにしておこう。それはそれとして、我が主神よ。貴公に伝えておきたい事がある。」

ベルとの関係と、私の素性だ」

「うーん？ それは確かに気になるけど、いやに急だね」

「ベルが寝ている今だからこそ、話しておきたい。特に私の素性に関して、ベルに話すなど厳命されている。」

アレは無垢だ。私に染まってほしくはない」

「……訳有りって事かい？」

「そうだ。まずは、私の素性から話そう。口を挟まず、最後まで聞いてくれ」

灰色の睫毛で瞳を隠すアスカに、ヘステイアは居住まいを正す。アスカは、*“灰”* は静かに、己の足跡を語り始めた。

『火の時代』、『不死の呪い』、そして『薪の王』か……どれも記憶にない事柄ばかりだ。君のいう神々もボクは寡聞にして知らない……でも、全部本当なんだろう？」

「ああ、全て事実だ。それを証明する手段も有している。ここで実演するか？」

「い、いやいや、いいよ。君の話を聞く限り、物騒な実物しか出てこなさそうだ。それに……*眷族*だしね。信じるよ、アスカ君」

アスカの途方もない話を真剣に聞き終えたヘステイアは穏やかに口角を上げて話を受け入れた。アスカは相変わらず暗い銀の半眼のままだったが、どこか柔らかな空気をまとう。

見つめ合う神と眷族。家族のような暖かな時間は、ヘステイアに浮かび上がった疑問で名残惜しくも途切れてしまう。

「しっかし、今の話が本当だとすると……君は『恩恵』なしでも相当強い、って事になるんだけど……」

「そうだが、何か疑問があるのか？」

「いやあ、疑問っていうか……とてもそうは見えないっていうか……」

ヘステイアは改めてアスカの容姿を見直してみる。

身長はヘスティアよりも下で、おそらく1000Cセルチを少し超える程度。顔立ちはとても幼く、子供特有の大きな銀の瞳、小さな鼻立ち、ぷっくりと膨れた色素の薄い唇はその口から語られた不死の偉業それとはかけ離れている。

よくよく見れば可愛らしい顔立ちだ。けれどヘスティアは今の今までその事実には気付けなかった。理由としては言葉遣い、纏う空気、そしてあまりにも長すぎる灰髪のためだ。

見るからに手を入れておらず、絡み合い垂れ下がる灰色の髪。後ろは地面につかないよう、足元で適当に折り曲げられて後頭部付近で結ばれている。足元で一回、頭付近で一回とたたまれている灰髪はそれでも長く、先端が足先へ届くほどの長さだ。

後ろ髪がそうなのだから、前髪は言うに及ばない。こちらは地面につかずとも、外套のように全身を覆っている。アスカの容姿はその隙間から見えるのみで、更に衣服はボロ衣も同然。まるで小汚い乞食か何かだ。

しかしながら、どうしてかそれに違和感がない。雰囲気か佇まいか、アスカの姿は言っちゃああれだが良く似合っていると言わざるを得なかった。

(……改めて見るとひどい恰好なのに、どうして僕は放置しているんだ)

他の神々ならば「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ」と囃はやし立てる事間違いなしだ。自分のせいではないが急にいたたまれなくなったヘスティアは、クローゼットからベルの衣服を取り出して押し付けるようにアスカに渡す。

「アスカ君。今思い至って本当にすまないが、君はまず清潔になるべきだ。何時までもそんな恰好しちやいけない」

「急にどうした？ 私はこのままで構わないのだが……」

「い・い・か・ら・は・や・く！ まずはシャワーで徹底的に汚れを落として来るんだ！ これは主神命令オーダだぞっ！」

「……了解した。その神意、謹んで拝命する」

ヘスティアの命令を儼げんこ乎たるものと受け取ったのか、アスカは厳か

に衣服を受け取る。「そ、そこまで畏まらなくてもいいんだぜ？」とヘステイアは頬を引きつらせつつ、アスカの手にタオルも追加した。

「それでは暫し、神前を失礼仕る」

「だから畏まらなくてもいいってー」

深々と頭を下げてシャワー室に消えるアスカを見送って、ヘステイアは疲れたようにため息をはいた。アスカは良い子だ、良い子なのだろう、良い子だと思う、良い子だと思いたい……が、少々浮世離れした感じがしないでもない。

「うくん……ボクはひよつとしたらとんでもない人を眷族にしたんじゃないだろうか……」

かすかに漏れ出るシャワーの音を聞きながらヘステイアはソファーに寝転がる。テーブルに目をやれば、アスカの「ステイタス」が書かれた用紙がポツンと置かれている。

信じると言った手前、ヘステイアは何が何でも信じるつもりだ。だが神意とは裏腹に、理性がどこかで信じ切れていないのも事実だ。

曰く、神々さえも知らない古い時代。『最初の火』と呼ばれる様々な差異をもたらすものが、熾つてから消えるまでの物語。

死者の眷族、混沌のデーモン、太陽の光の王の騎士たち、人々に現れた呪いの刻印——ダークリング。

常に滅びた場所で繰り広げられる、人を超越した存在との戦い。使命をもって彼らに挑んだらしい、アスカの唯一の武器は才能でも努力でもなく、ただ不死身という一点のみだ。

ヘステイアはそれを信じ切れていない。正確に言えば、死に続けてなお前に進んだアスカの道を、信じたくない。

だってそれは、あまりに悲しい。命を落とさなからと言って、喪わないものがないわけがない。アスカはきつと色々なものを引き換えに、火の時代を歩み続けてきたのだ。

仮にそれがベルだったのなら。ヘステイアが初めて得た、愛しい眷族だったなら。『神の力』を使ってでもその運命を否定しただろう。

それ程にアスカの語った素性は酷かった。それを当たり前のように受け入れる無情の顔も。

「……ふん！　それが何だつて言うんだい！　アスカ君がどんな子だろうと、ボクには関係ないじゃないか！」

ふっふっふっ、シャワー室から出たら目に物言わせてやるぞお……！　あの長い髪をじっくり梳きながら世話を焼いて、美味しいものを食べさせてあげて、ボクの「ファミリア」に入つて幸せだと嫌つてほども思ひ知らせてやる……！」

ベル君が起きたら、三人で出かけるのもありだ！　男の子の服はボクには分からないからベル君に選んでもらつて、オラリオを観光して、ボクたちの絆を深め合うんだ！

それに……くっくっくっ、アスカ君という外堀を埋めれば、ベル君がボクの物になるのもそう遠くはない……！　将を射んと欲すればなんとやら、絶対に成し遂げてやるぞお……！」

愛と打算の入り混じつた下品な顔でヘステイアは一人笑う。ベルはこの時、悪夢に襲われて悪寒に体を震わせていた。

——そして、一時間も後の事。

ようやくシャワー室から出てきたアスカに異様な満面の笑みを向けるヘステイアの顔は——次の瞬間驚愕の嵐に見舞われる事となる。

「やあやあ、綺麗になったじゃないかアスカ君！　さっぱりするとあれだね、ベル君に似て可愛いよ！」

まるで女の子、みたい、じゃない、か……——あああああああああああああああつ！」

「騒々しいな、ヘステイア。どうかしたのか？」

続く言葉が出ないのか、パクパクと酸欠の魚のように口を開閉するヘステイアは、ぷるぷる指を震わせながら一点を指す。

ベルの服を着た100Cセルチを少し超える程度の身長。華奢で肉付きの悪い体格線の中で、明らかに浮いている盛り上がった双丘。

男の子では決して在り得ない『女』のそれに、ロリ巨乳は絶叫した。「き、君は——女の子だったのかあああああああああああつ！」

昼下がりの廃教会。ニワトリも休む陽光の中響いた神の声は、寝ているベルが体を跳ね上げうなされる程大きく響いた。その中心地の目と鼻の先にいたアスカは、堪えた様子もなくこてんと首を傾げ。

「何を今更」、と。胸についた二つの丘を揺らした。

「どうして女の子だって言わなかったんだい!？」

「貴公が尋ねなかったからな。それに見て分からないか?」

「分からないよ!?! さっきまでの君の容姿を教えてあげようか!?! 亡霊だよ、ぼ・う・れ・い! あんな頭のとっぺんからつま先まで髪の毛ばかりで性別なんて分かるわけないじゃないか!」

「……ふむ。言われてみれば確かにそうだ。だが、性別など然したる問題にはならないだろう」

「なるよ! 大いになるよっ! ああ、初心なベル君にとっては初めての、異性と二人っきりの甘々ホーム生活だと思っていたのに……! まさかよりもよって、ボクが出会う前に先を越されていたとは……!」

若干綻びの目立つソファに顔を埋めてヘスティアは嘆く。湯上がりのハーブティーを飲みながら、アスカは音もなく嘆息した。大きな影を震わせながら、アスカは飲み終えたティーカップを置く。

「そもそもベルは私を女として見ていない。性別に関わらず私を家族だと思ってくれている。事実として廃教会こに連れてきた時、ベルは私に親愛以上の情は向けていなかった筈だ。

そこに男女の機微を邪推するなど、いくら我が主神と言えど無粋極まりないと思うが?」

「うっ……そ、それはそうだけど……ほんとに、本当に何にもないんだね? ベル君は何も経験していませんらな子なんだよね?」

「ああ、誓って何もしていない。私がした事などせいぜい、眠れぬベルのために夜通し寄り添ってやったり、食欲のない時に私の手で食わせてやったくらいだ」

「アウトオ——!! アウトオオオオオオ—— ツ!!」

何が「誓って何もしていない」だあああ!! そんな美味しいイベントをこなしてるなんて羨ま、許さ、羨ましいじゃないかああああっ!! くおのおおおっ!!」

「……それ以上騒ぐとベルが起きるぞ。慎みたまえよ、我が主神」

引っ付かれて泣き言を吐かれるアスカは銀の半眼で諭すように言う。その間も密着したヘスティアの胸が自在に形を変え、大きな影がぶるんぶるんと揺れるのだが、アスカは気にしていなかった。

その後ベルの名を何度か出し、ようやくヘスティアの狂乱状態を解除したアスカは、ティーポットから緑花草のハーブティーをカップに注ぐ。味は青く、独特の苦みを持つそれをアスカはすると飲んできく。

澄んだ香りだが一口飲んだだけで倦厭けんえんしたヘスティアは、ソファに深くもたれかかった。そして隣で優雅に過ごすアスカをじつとりと睨む。

気付いてはいた。そう、初めから気付いてはいたのだ。さつきから視界の端でこれ以上ない自己主張を繰り返す大きな影に。だがアスカが女であった衝撃がヘスティアに突っ込みを許さなかった。

しかしもう我慢できない。これを放置するなんて神じゃない。意を決したヘスティアは立ち上がり、びしりとアスカを指差した。

「アスカ君っ！ それは一体どういうつもりだい!!」

「ん？ ああ、これか？ どういうつもりも何も、見ての通りだが」

「見て分かんないから聞いているんだよおッ！ もう、君はどうしてやって当然みたいな顔で奇行を繰り返しているんだいっ！ ボクちよつと「ファミリア」に入れたこと後悔し始めてるよ!」

「なんと……そこまでとは思わなんだ。ベルもベルの祖父も、この格好になんら意見を示さなかったのだが」

「そんな馬鹿なっ!! いや、待てよ……ちなみにその時、ベル君たちはどんな顔してた?」

「非常に引きつった顔で何も言わずどうにか笑おうとして失敗していたな」

「ドン引きされてるじゃないかっ!! とにかく今すぐッ！ 今すぐその黄色いキノコみたいな頭を止めるんだっ!!」

ヘスティアはアスカの肩を掴んで懇願する。その上では大きな影が荒ぶっていた。

ヘステイアの頭上、アスカの頭から伸びる大きな影。異様に鮮やかな黄色の布が幾重にも巻かれた、アスカの身長ほどに高く巨大な突起物。

そう、それは失われた魔術の探究の証。伝説の追放者が身に纏ったという装束。まったく由来の分からない黄の王の冠——『黄衣の頭冠』である。

「髪を乾かすのに丁度良いから使っている」

「突っ込みどころが多すぎて逆に何も言えないよっ!? とりあえず、本当に、髪を乾かすのは手伝ってあげるから、その恰好を止めてくれ——っ!!」

最後は涙目になりながらの懇願に、アスカは渋々『黄衣の頭冠』を外した。ヘステイアが長く、そのくせ櫛くしも折れるくらい硬いアスカの灰髪に泣きを見るのは、もう少し後の事である。

ベルは丸一日寝込んでいた。その間にアスカとヘステイアは情報交換を終えていた。

大きな所で言えばベルに発現したスキル、リアリス・フレイゼ「憧憬一途」レベルに関して。成長速度に関連するこのレアスキルは、できれば周知したくない。

だがアスカを奇矯な所はあっても信頼に足る人物だと判断したヘステイアは伝える事にした。ダンジョンに潜れない自分に代わってベルを見守ってくれるだろうアスカに、ベルの未来を託すために。

アスカの魔法とスキルに関して、ヘステイアは口外を固く禁じた。魔法は正直訳が分からないが、レベルL.V.1にして三つもあるのは神々の興味を引くに違いない。それ以上にスキルダークソウル「暗い魂」が知れ渡るのにはあつてはいけなさと強く考えていた。

「不死になる」という一点だけでも知れてしまえば恐ろしい。それを知れば神々はこのぞってアスカで遊ぶだろう。ともすれば死なないからといって暇潰しに殺されてしまうかもしれない。

遊びで眷族を殺されては堪ったものではない。可能性がある以上、ヘステイアは決して知られてはならないと口を酸っぱくしてアスカ

に言い含めた。

それとヘステイアはアスカに目一杯釘を刺すのも忘れなかった。家族だのなんだのと言っているが、話を聞く限り少々距離が近すぎる。ベルを盗られまいと必死になるヘステイアに、この時ばかりはアスカも呆れた表情をして手を出さないと約束した。

そして一夜明け、早朝。ベッドに潜り込んでベルの顔をその豊かな胸で押し潰すという暴挙を行ったヘステイアに、起きたベルは大層慌てたそう。それはちよつとした一悶着に繋がったが、ここは割愛しよう。

【ステイタス】の更新を終えた後、ヘステイアはベルと話をしていた。身だしなみを整えていたアスカには内容が聞こえなかったが、大方【憧憬一途】をごまかす話とベルの身を案じた誓いだろうと予想は付いた。

「ベル、ダンジョンに行く前に少し付き合えないか？」

話が終わったのを見計らって、アスカは二人に声をかける。ベルはきよとんとして、ヘステイアは「付き合う」の言葉に過剰に反応してギロリとアスカを睨んだ。

「アスカくうくん？ 君い、ボクとの約束はどうしたのかなあ？」

「早とちりをするな、ヘステイア。これからは私もベルとダンジョンに潜る故、最低限の装備と冒険者登録が必要になる。それを済ませておきたくてな」

「あ、それなら付き合うよ。僕もナイフを買い替えなくちゃいけないし」

「ベル君まで！ むうう……それだけなら認めてあげなくもないけどさ、けれどね、アスカ君っ！ くれぐれもそれだけだよ！ これにかこつけてデートなんてしちや駄目だからねっ!？」

「デ、デートって……アスカさんは家族ですよ、神様」

「ベルの言う通りだ。貴公は勘繰り過ぎなのだよ」

苦笑するベルと無表情のアスカにヘステイアは「ふんっ」と顔を明後日へ向ける。ベッドに飛び込んで機嫌悪そうに転がる神の姿にベルは声をかけようとしたが、「好きにさせておけ」とアスカは《呆れる》

のジエスチャーをした。

その後、ヘスティアから伝えられた今日の夜から何日か家を空ける旨などをやり取りして、ベルとアスカは廃教会から出た。時間は9時ごろ、朝の活気や喧騒が人通りの多い方角から届いてくる。

「アスカさん、冒険者登録から先に行こうか？ エイナさん——僕のアドバイザーにもアスカさんを紹介したいし。装備を揃えるにしてもきつと良いアドバイザーが貰えると思うんだ」

「いや、その前に寄るところがある」

「え？ どこ？」

「服飾店だ」

ぱちくりと目を開閉するベルの隣には、男物の服を着たアスカが立っていた。

アイズは昨日に引き続き、オラリオを歩き回っていた。

彼女の心に小さな、けれど確かな影を落としている人物、“灰”を探すためである。

(……あの子を見ていたって、言ってた。だからまだ、オラリオにいる筈だけど……)

バベルを中心に八方へ広がるメインストリート。人通りと喧騒の絶えない区画を中心にアイズは歩を進める。周囲をそれとなく見回しながら麗しい金髪を風に任せるアイズはかなり目立っていたが、本人は気にしていなかった。

(見つからない……あの人、結構目立つんだけどな)

自分を柵に上げてアイズは思う。だが、それも致し方ない。

言い方は悪いが、乞食のような姿の“灰”は周りからとても浮く。本人だけを切り取れば違和感がないくらい似合っている、街中を歩けば黒い森に生える一本の白枝のように見つけられる筈なのだ。

しかし搜索二日目にて手がかりはゼロ、“灰”はその影さえも捉えられない。あんなにも際立った格好にも関わらず。

自分は人探しに向いていないと、アイズは微妙に落ち込んでいた。

(最初に会ったのは深層……やっぱりダンジョン、かな……)

探す場所がそもそも間違っていたのかもしれない、と北のメインストリートを散策していたアイズはバベルを見上げる。天を衝く白亜の摩天楼はオラリオの何処から見てもその威容を崩さない。

人界に打ち建てられた巨大な封印。その地下に根差すダンジョンに、“灰”の姿はあるのだろうか。アイズは考え、ふるふると小さく首を振る。

(あの人は、枯れているような人だった。きっと、理由がないとダンジョンには行かない、と思う)

二度の邂逅を経た印象から、アイズはそう判断する。

一度目は深層。戦う姿はどこか気だるげで、熱の無い冷えたやり方だった。戦いを好まないというよりは、飽き果てているといった印象。きっと“灰”は自分のように、強さを求めてダンジョンに潜る事は無いだろうとアイズは感じた。

二度目は夜半。ロキと共に“灰”を追って聞いた、ベルに対する辛辣な言葉。いつそ残酷ですらあったそれは、けれど確かに身を案じるものだった。一方で死すらも厭いとわない暗い態度が、アイズには少し悲しかった。

どちらにも共通しているのが老木のように枯れた立ち振る舞い。見た目にそぐわない“灰”の行動は、ダンジョンになどまるで興味が無いと雄弁に語っている。

だからダンジョンよりは街中にいるかもしれないと、アイズはオラリオを探し回っていた。そう考えていたのだが……アイズはふと、さつき思い浮かべた“灰”の言葉をもう一度拾い上げる。

(あの子を見ていたって言った……ひよつとして、あの子と一緒にいる？ あの子を探せば、見つけられたかも……?)

頭に閃いた衝撃の事実にはガーンと人知れずショックを受けるアイズ。やっぱり自分に人探しは向いていないと自虐的思考に陥る。

畏怖を抱かせる筈の「剣姫」は落ち込んだ顔でトボトボ歩く。周囲の人間はあまり見ないアイズの姿に囁き合い、心配する空気を出したが声をかける者はいなかった。

そんな彼女の沈んだ心を引き上げたのは、視界を掠めた白い髪だった。さつと顔を上げれば、メインストリートから一本外れた路地裏にある服飾店の前に、緊張した面持ちの少年が立っている。

新雪のような白い髪、せわしなく泳ぐ深紅ルベライトの瞳。そわそわと体を揺らすはぐれた兎のようなその少年は、間違いなくベル・クラネルだ。

(見つけた……！)

期せずして発見したベルに、アイズは駆け寄ろうとする。けれど少女のしなやかな脚は二、三步進んで止まってしまう。

(……なんて、声をかければいいんだろう……)

アイズとベルは初対面ではないが知人でもない。ダンジョンの5階層、逃げた『ミノタウロス』を倒した際に追い詰められていた冒険者がベルだったというだけの繋がりだ。

しかもベルはアイズを見るなり逃げだしてしまった。家族、らしい“灰”の手は取っていたから、きつとアイズが怖かったのだろう。

そう思うとまた気分が沈みそうになるが、首を振って霧散させる。今重要なのはベルにかける第一声だ。

(……久しぶり？ ……また、会ったね？ ……なんか、違う気がする……)

どうしよう、なんて言えばいいか分からない……みんななら、なんて言うかな)

アイズの脳裏にほわほわと「ロキ・ファミリア」の面々が浮かび上がる。

ロキは「うちのアイズたんがナンパするなんて論外や！」と訳の分からない事を叫んだ。

フィンは「とりあえず名前を呼べばいいんじゃないかな」と片目をつむった。

ガレスは「肩でも組んで酒場に連れて行けばいいわい！」と豪快に笑った。

リヴェリアは「何事も挨拶が基本だろう」と諭すように言った。

ベートは「雑魚に構うんじゃないやねえ」とそっぽを向いた。

ティオナは「抱きつけばいいんだよー！」と快活な笑みを浮かべた。

ティオネは「普通に話しかければいいんじゃない？」と不思議そうに首を傾げた。

レフィーヤは「駄目です！ 絶ツツツ対その人間ヒューマンと関わっちゃ駄目ですツ!!」となぜか激憤していた。

ラウルの事は普通に忘れていた。ああ、哀れなり【超凡夫ハイ・ノービス】。

(……………ここはリヴェリアの言う事を聞こう。ありがとう、リヴェリア)

心の中で【ロキ・ファミリア】の母親ママにお礼を言っつて、意を決したアイズはベルに近づいていく。

一步、二歩、三歩。ベルとの距離が段々縮まっていく。すると向こうも気付いたようで、目に見えて狼狽うろたえだした。

どんどん近づくアイズ。体をガチガチに固めるベル。二人の距離が近づくにつれ、ベルの顔は赤くなつていき。

「……………」

「？」

「ごめんなさあああああああああいつ!？」

アイズが挨拶をしようとした瞬間、ベルは脱兎の如く走り去つてしまった。

「……………また、逃げられた……………」

アイズはベルの後ろ姿を見送つて、火の消えた蠟燭のようにシユンとする。何がいけなかったのだろう、やっぱり怖がらせてしまったのだろうか……………そんなぐるぐるとした思考で頭がいっぱいになる。

ベルの立っていた服飾店の扉が開き、小さな掠れ声が聞こえたのはその時だった。

「どうした、ベル。こんな街中で大声を上げてはいけないだろう……………ベル？ いないのか？」

「……………あなたは……………『灰』、さん……………?」

「ん？ ああ、アイズ・ヴァレンシユタインか。やはり、また会ったな」
求めていた人物、『灰』の登場に、アイズは金色の瞳を大きく見開いた。

所変わって、南西のメインストリート、アモールの広場。

普段なら親密に寄り添うカップルが数組見受けられる華やかな場所だが、今ばかりは一組を除いて閑散としている。

理由は至って単純。割と見えやすい広場の陰に泣く子も黙る「ロキ・ファミリア」の冒険者、ティオナ、ティオネ、レフィーヤがいるためだ。彼女らの、特にレフィーヤの放つ雰囲気、アモールの広場に人を寄りつかなくしている。

「ティオネ、あれ、どう思う?」

「……すごく珍しい光景だと思うわ。アイズがあんな事するなんて……」

「だよねー。私、あんなアイズ見たの初めてだよ。あつ、レフィーヤはどう思う?」

「うう、うううっ……羨ましいくっくっくっ!」

「あはは、本音が隠し切れてないよレフィーヤ!」

「あんたら、静かにしなさい」

くわえたハンカチを噛み切らんばかりに引つ張るエルフの少女、レフィーヤにティオナはおかしそうに笑う。少々うるさい二人にティオネはシートと人差し指を唇に当てて、会話を切った三人はアモールの広場に目を向けた。

広場の小綺麗なベンチにアイズの姿はあった。どこか緊張した面持ちで深くベンチに座っている。それだけなら無くもない光景だけれど、そこに一つの要素が加わるだけで劇的に珍しくなる。

その要素はアイズの膝元に居る。張りの良い柔らかなアイズの太もも。そこにちよこんと腰を降ろす——人形のように美しい小人族バルウムの姿がそこにはあった。

恰好は暗褐色の上着に厚手のケープ、黒いスカート。上品な赤いスカーフと控えめなペンダントが彩りを与え、ごく丁寧に作られたであろう衣服はとても似合っている。

肌は白過ぎる嫌いがあるが、決して不健康ではない。顔立ちは幼くも女神に劣らず美しく、月のように大きな瞳は銀色で、半分落ちた瞼まぶた

と灰色の睫毛がそれを隠しどこか神秘的な雰囲気醸している。

なんととっても目を引くのが光沢のある灰髪とそれを留める髪飾りだ。アイズに隠れて正確な長さは分からないが、豊かに流れる髪は煌びやかに輝いている。後頭部を覆う王冠を半分に切ったような髪飾りには白銀に輝く石が嵌め込まれ、灰色の髪に静かに映えていた。

まさしく人形、そんな小人族バルウムを膝に乗せるアイズ。この光景を珍しいと言えない者など「ロキ・ファミリア」の団員にはいなかった。

「それにしてもあの子、誰なんだろう？ アイズの知り合いかな？」
「そうだとは思うわ。けど、私たちが知らないってのがなんか引つかるのよね」

「だよねだよね、あんなだけ綺麗な子だもん。一度見たら絶対覚えてるはずなんだけど」

「ええ、まず間違いなく記憶に残るわ。だからかしら……あの子、どこかで見たとような……」

「えっ、ティオネ、心当たりがあるの？」

「うーん……ちよつと待って、もう少しで思い出せそう……」

「そんな事どうでもいいですっ！ ちよつとつ、いや結構つ、いやかなり可愛いからって、アイズさんの膝を独占するなんて許せません!？」

私、止めてきますー！」

「うわ!? ーここら、止めなつてレフィーヤ。私たちがアイズをつけてきた理由忘れたのー?」

「でもー ーでもおっー!」

「あんたたちちよつさい！ せつかく思い出せそうだったのに忘れたじゃないっ!」

突撃をかまそうとするレフィーヤ、苦笑いで止めるティオナ、邪魔されて苛立つティオネ。三人娘がどうしてこんな事をしているかといえ、昨日からダンジョンにも行かずオラリオを歩き回るアイズを心配しての事だった。

変な事に巻き込まれてるんじゃないかとアイズにバレないようつけてきた三人が目撃したのが、服飾店から出てきた小人族バルウムとぎこちなく会話を交わすアイズ。そのままここまで移動して、先の光景に至る

わけだ。

もつとも、当のアイズ本人は誰かにつけられている事は分かっていた。流石に同じ「ファミリア」の団員だとは思っていないなかったが。

アイズからすれば好奇、嫉妬、情報収集などの理由でつけられるのは日常だったので、害意のない視線を送る彼女らは放っておく事にしたのだ。

それより今は、膝の上の小人族バルサム——「灰」との対話が重要だったから。

「そうか、ベルに逃げられたか。ならばアレに代わって謝罪しよう。すまなかった」

「いいよ……謝ってほしいわけじゃないし」

「感謝する。それにしてもアレは、どこか意気地がない。帰ったら説教だな」

「灰」はスツと目を細める。それはアイズからは見えないが、放つ空気は怒っている時のリヴェリアと同じだった。きつとベルは可哀そうな目に遭うだろう……アイズは心の中で「頑張つて」と届かない激励を送る。

「まあ、それは置いておくとしてだ。貴公、私を探していたようだが、それは何故だ？」

「……それは……」

アイズの胸に頭を預け、首を動かして見上げてくる「灰」に言葉が詰まってしまふ。聞きたい事は色々ある。知りたい事も。けれど最初の言葉が出てこない。

そもそも私は、アイズどうして「灰」を探していたのだろう。普段ならば遠征帰りであろうとダンジョンで戦っている筈なのに。力を求めて、悲願を達成するために。

それなのに、「灰」を探していたのは——

(……あの子の、ため……?)

アイズの心に白兔の少年の姿が過ぎる。「灰」と『ミノタウロス』を倒した時、幼心の自分こころけいと重なった彼。自分の境遇を重ねたあの少年が、アイズの中で暖かな何かをもたらしている。

……けれど、そこに影を落とす人がいる。決して悪意の人ではない。けれど善意の人でもない。ともすれば己を含めた全ての存亡に興味を持たない人物——「灰」が、ベルへ向けた言葉の刃。

それが今もアイズの胸に影を落とし、感情をささくれ立たせている。

その感情の名は、怒り。

少年の身を案じながらも、傷付ける事を選んだ「灰」への怒り。

そして——ベルへの純粋な意志ではなく、己の夢への慰めに過ぎないと切つて捨てられ、立ち竦む事しかできなかった自分への、怒り。何てことはない、アイズは怒っていたのだ。怒って、だから「灰」に会いたかった。

もつと少年を、ベルを大切にしてほしいと。家族というのなら、せめて無事を祈ってほしいと。

かつて幼いアイズが、愛情に包まれていたように。

今はもう喪つてしまったそれを、あの少年が喪わないように。

そうしてほしいとアイズは怒り、きつと願っていた。

「……成程。貴公、思ったよりもベルに入れ込んでいるのだな」

それを見透かすように、「灰」は言葉を擦り鳴らした。容姿のそれより低めの声は、どこか古い鐘の音のようで。穏やかな響きは心中を言い当てられたアイズの戸惑いを消して、純粋な疑問だけを残す。

「……私が、あの子に……？」

「ああ。そうでなければ私を追いはしまい。貴公のように、前ばかりを向いて顧みられない者は特にな。

——貴公も見たのだろうか？ ベル・クラネルに、かつての憧憬を」

「……………」

「貴公と私は、似通っている」

「あなたが、私と……？」

「灰」の予期せぬ言葉にアイズは目を瞠る。私が、「灰」と似ている？ その言葉の意味を掴みあぐねている内に、「灰」は視線を彼方へ向ける。

「アイズ・ヴァレンシュタイン。貴公は使命に生きている。己が全て

を燃やし尽くさなければ、辿り着けないような使命だ。ダンジョンに潜るのも、力を求めるのも、全てはそのためだろう。

かつては私もそうだった。繰り返される火の時代に、力を求め抗った。己の持ちうる何もかもを焚べて、全ては使命を果たすために。

そうしていると、いずれ忘れ去ってしまうのさ。何のために、使命を果たそうとしていたのかをな」

「何の、ために……」

「そうだ。全ての使命には理由がある。だが、使命のみに生きれば理由を忘れ、果たすだけが全てになる。何を置いても、ただ前へ。心の臓腑が鼓動を止めるまで。それ以外の何もかもを犠牲にしようとも。

使命を果たすだけの怪物。貴公もベルに会うまでは、きつとそうだったのだろう」

「……そうかも、しれない」

アイズは目を伏せ、自問して、せきれき漸瀝と呟く。「戦姫」とあだな綽名されるほどに、アイズは戦い続けてきた。悲願のために力の壁に挑み、超え続けてきた。

心のどこかで感じていた事だ。それがダンジョンに巣食うあの異形たちと、何が違うのだろうか。アイズ・ヴァレンシユタインは、モンスターと何が違うのだろうか。

けれど、変わった。あの日、ベル・クラネルに出逢った時から。少しずつ、けれど確実に。

戸惑いもある。迷いもある。今この瞬間、ダンジョンで戦っていない事に不安を覚えている。前に進めなくなるのではと恐れている。

一方で、アイズは少年がくれたものを手放したくない。忘れかけていた、幼い日々の記憶を。思い出させてくれた、大切な人の言葉を。

ベル・クラネルが魅せてくれた——アイズ・ヴァレンシユタインの始まりを。

（——これが、そうなんだ。私と“灰”さんの、似ているところ）

首を落とすアイズの目に、灰色の後頭部が映り込む。表情の見えない視線の先に、“灰”もきつと、同じものを見ているのだろう。小さな彼女の、始まりの憧憬を。

「ベルは無垢だ。いい年をしてまっさらで、穢れを知らない。まるで子供で、それ故に真っ直ぐだ。」

私はベルが大事だ。貴公に言ったように、螺旋の先を見ていたい気持ちもある。それと同じくらい、あの無垢な魂を守りたい。

——きつと、貴公もそうなのだろうか？ アレを傷付けた私に対して、こうして追ってくる程に」

「……………分からないよ、そんなの」

確信をもって問う「灰」に、アイズは顔を伏せる事しかできなかった。どうしても、自分もそうだといい切る自信も、意志もなかった。

ベル・クラネルは、弱者だから。

前を向くしかないアイズに、少年を顧みる余裕はないから。

もう、弱い過去には戻れないのだから。

押し黙るアイズに、「灰」は透明な息をつき、静かに喉を擦り鳴らした。

「分からないのなら、それでもいい。所詮は貴公をよく知らぬ、老骨の戯言だ。不要と思うなら忘れ去り、貴公の道に戻るがいい。……………だが、これだけは言っておく。」

人間性を捧げ、絶望を焚べて、使命を果たしたその先に、残されたものは何もなかった。

だから貴公、違う道を選びたまえよ。喪失者になんてなるんじゃないぞ」

「……………うん」

「灰」はほんの少し優しげに、唇から言葉を落として。彼方を見遣り沈黙する。アイズは形ばかり頷いて、思考の海に没した。

アイズは「灰」が自らを喪失者と呼ぶ理由を知っている。あの夜に聞いた物語がそうだ。

火の時代を歩んだ一人の不死の物語。戦いに明け暮れ力を求め、薪の王と呼ばれる人柱になる「灰」の辿った道。

出会いがあった。別れもあった。協力する者もいて、敵対する者もいた。相対するのは常に格上、人を超越した怪物たち。「灰」はそれに打ち勝つために、不死以外の全てを捧げたと、そう言っていた。

けれど「灰」はその最期に、『最初の火』を消し火の時代を終わらせたという。何故なのか、「灰」自身定かではないといっていたが——きつと、使命すらも焚^くべて、忘れ去ってしまったのだらうと微笑んでいた。

だから「灰」は、自らを喪失者と呼ぶ。使命のために何もかも犠牲にして、その最期に使命を捨てた愚か者と。

(……いつか私も、そうなるのかな……)

(このまま……願いのためだけに生き続けたら……)

^{アイズ}私も、捨てていくのだらうか。

ロキを、フィンを、リヴェリアを、ガレスを、ベートを、ティオナを、ティオネを、レフィーヤを。

こんな自分に居場所をくれる、「ロキ・ファミリア」を。

いつか捨てて、悲願のためだけに生きるのだらうか。

(……それでもいい、なんて、言えない……)

(でも……もし、それで、願いを果たさせるのなら……)

(私は、どうするんだらう——)

いくら考えても、その答えは出なかった。

「灰」はアイズの膝の上で、虚空を眺めていた。空の太陽を反転させたような凍てつく銀の瞳には、何の感情も宿っていない。

当たり前だ、「灰」に残った人間性など、人を取り繕う程度のものでしかない。自身の感情が希薄である事を自覚する「灰」は、本来ならばアイズのようなどうでもいい人物に進んで関わろうとはしない。

フィンたちのように名前だけ把握している第一級冒険者や、その主神であるロキにためらいもせずソウルの業と恩恵のない背を見せたのも、自身の素性を語ったのもそれが理由だ。

「灰」にとっては、自身の情報を開示する事による変化など何の興味もない。それがたとえ世界を揺るがし、今日まで築かれた人の営みをひっくり返すようなものだとしても、「灰」は躊躇なく見せつけるだらう。

純粋に、どうでもいいのだ。『灰』の選択が何を引き起こそうと、それを気にした事はなかった。ただ一つ、使命を果たす。『灰』はそれだけの不死である。

それなのにこうして膝の上に乗し、説教者まが紛いの事をしたのは——
ひとえにベルのためだろう。

ベル・クラネルは今、『灰』の尊たつとぶ唯一の存在だ。ベルの祖父も、主神であるヘステイアも、ベルの憧れであるアイズも、それに付属する枝葉末節に過ぎない。

大事なのは、ベルただ一人。それ以外は全て関心の外であり、そして——それ以外の全てを、利用する事に迷いが無い。

アイズと己が似通っていると云ったのも、アイズの中のベルを有象無象から引き上げるため。

アイズに己のようになるなど論じたのも、アイズの関心をベルに向けさせるため。

【憧憬リアリス・フレゼ一途】——スキルになるほどベル・クラネルの人生れきしに大きな衝撃を与えたアイズに、目を向けられ関心をもたれる。それはきつとベルの『器』を好転させうる出来事だ。

アイズ・ヴァレンシユタインとベル・クラネルの接触は、『灰』の見守る螺旋を必ず、まだ見ぬ果てへ導くだろう。

だからこそ、アイズから逃げたベルを放置してまで、『灰』はアイズと共に居るのである。

「……さて。貴公、もう話す事はないか？　であれば、私はこのまま立ち去るが」

黙ったまま言葉を発しないアイズに、『灰』は声を投げかける。おそらくは使命のために全てを捨て切れるのか悩んでいるのだろうが、付き合う義理は『灰』にはない。目的を達した『灰』はすぐにでもベルの処ところへ戻るつもりだった。

「……待って、ほしい」

それを留めたのはアイズだった。消え入りそうな少女の声に、『灰』は耳を傾ける。取り繕う程度の人間性は残っている『灰』は、意味もなく反感を買うような真似はしない。

永遠に似た放浪を続けた。『灰』はそれなりに気が長い。そしてアイズはまだまだ利用価値がある。だから『灰』は、中々次の言葉を紡げないアイズを泰然として待ち続ける。

『灰』の背で、アイズの体はずっと強張っていた。それは少しも緩みはせず、数分の後、一層固くなったアイズの口から、絞り出すように声は放たれた。

「……もし……もし、私が全部を捨てた、なら。私の願いは、叶うと思
う……？」

「知らん」

決死にも似たアイズの問いを、『灰』は躊躇なく一蹴する。

「未来など、神にすら見通せまい。まして地を這う我らにできるのは、最後の一呼吸まで抗う事だけだ。その過程で何を捨て、何を喪ったところで、果たせるかどうかは誰にも分からない。

故にアイズ・ヴァレンシユタイン。私から言えるのは、一つだけだ。己の使命の、その始まりを忘れるな」

それだけ答えて、『灰』は黙する。やはり説教者の真似事は肩が凝ると、アイズに何一つ感情を向けずあらぬ事を考える。

答えが適切かどうか、『灰』にはどうでもよかった。何を語り、何を聞かされようと、選ぶのはアイズだ。『灰』がこれまでそうしてきたように、アイズもそうするだろう。

頭の片隅にそんな考えを過ぎらせて、そろそろ行こうかと『灰』は立ち上がるうとした。しかし、それは叶わなかった。

そうされた理由は分からない。分かるのは、アイズが『灰』の体を抱きしめた事だ。『灰』の小さな腹に手を回し、まるで喪う事を恐れるように。

「どうした、貴公」

「……『灰』、さん……私は、どうすれば、いい……？」

『灰』の華奢な体を強く抱きとめて、幼い迷子のように呟く。見えぬ嗚咽をこぼすような声に、『灰』は密やかな嘆息と共に悟る。

どうやら『灰』は、アイズ・ヴァレンシユタインに踏み込み過ぎてしまったようだ。強さばかりを求める折れぬ剣のような意志のみを

鍛えて、それ以外を幼さに残してきたアイズの心に、いつそ無遠慮なまでに。

今までは、守る者がいたのだろう。アイズの仲間、アイズの「ファミリア」。だが今はここになく、あるのは「灰」ばかりだ。

そして「灰」はアイズの心を掻き回した。そもそも強さが頭打ちになりどこか焦っていたアイズに、ベルが始まりの憧憬を与えた。ほんの少しでもそれに気を取られたアイズは、「灰」がベルに向けた言葉に、そしてアイズに向けた言葉に揺さぶられた。

その揺れがおさまらないままに「灰」を探し、言葉を交わし、アイズの心は均衡を大きく崩してしまったのだろう。所詮はほとんど他人と言ってもいい「灰」に、胸の裡を吐露してしまう程に。

面倒だ、と「灰」は思う。だがここでアイズを放っておくのは、ベルに悪い影響を与えるかもしれない。それは「灰」にとって厄介事だ。

だから「灰」は、腹を抱くアイズの腕を解いて。体を反転させ、悲痛な色を灯すアイズと向き合った。

「あ……」

「私の眼を見ろ、アイズ・ヴァレンシユタイン」

白く小さな手を、金色の瞳を揺らすアイズの頬にそつと這わせて。そらさぬよう真つ直ぐに、「灰」はアイズと視線を交わす。

「私の眼に映っているのは誰だ？ 数多の怪物を屠った【劍姫】か？ 剣に程遠い幼い少女か？ そのどちらでもない迷い人か？

少なくとも、私に見えるのはアイズ・ヴァレンシユタインただ一人だ。強さも弱さも、全て貴公の裡にある。

だから貴公、己の心に従いたまえ。泣くのもいい、笑うのもいい、星空に足を止める事もあるだろう。それらの全てが貴公の意志だ。誰にも止められない、貴公の心の咆哮だ」

「私の……さげび……」

「そうだ。貴公の心は、何を吼えている？ 猛りの止まらぬ奥底で、己を賭して何を目指す？」

「……強く、なりたい……」

「それは、何のために？」

「……もう、誰も喪わないために……！」

「——それが答えだ、アイズ・ヴァレンシユタイン。貴公が願いを吼えるなら、もう、迷いはないだろう」

声はそう大きくなくとも心から叫ぶアイズの顔に、暗い感情はもうなかった。惑いを抱えていた瞳は、今は真つ直ぐに「灰」を見ている。

「灰」はそれに感じ入るものはなかったが——気付かぬうちに彼女の唇は、柔らかな笑みを湛えていた。

しばし、そうしていただろうか。どれくらいの時間かは分からないが、心の淀みが止まったアイズはふと、自分の行動を思い返し——羞恥の感情が急速に溢れてくる。

「……「灰」さん……そ、その……」

「ああ、分かっている。この事は貴公と私の、二人だけの秘密だ」

「うう……ごめんなさい……」

「順番が違う。まずは礼を言うのが筋だろう？」

「……あり、がとう」

「それでいい。……これに懲りたら、よく知らぬ者を追って語り合う真似は止める事だ。私が相手でなかったら、良からぬ事態になっていたかもしれないのだからな」

「うん……」

羞恥に顔を赤くしながらも年相応の少女のように笑うアイズに、「灰」はこつくりと頷く。そして今度こそ立ち去ろうとしたが、動く前にアイズが口を開いた。

「あの……」

「何だ？ アイズ・ヴァレンシユタイン」

「あなたの事……アスカって、呼んでもいい……？」

「何故？」

「えっと……「灰」、よりも、あなたに似合っているって、思うから」

「……まあ、いいだろう。貴公がそれを望むなら、好きにすればいい」

「……！ ありがとう、アスカ……！ 私も、アイズでいいよ……！」

「ああ、そうさせてもらおうよ。アイズ」

嬉しそうに頬を上気させ口元を綻ほころばせるアイズに、「灰」は——アスカは、微笑みで応えた。

……さて。ここで一つ問い掛けをしよう。

時は昼下がり、場所は色取り取りの花が咲き誇るアモールの広場。珍しく人気も無い広場のベンチで、見目麗しい一人の少女と、美しい一人の幼女が向かい合っている。視線を絡ませ、一方は頬を赤くしながら、一方は微笑みを湛えて、互いの名前を呼び合っている。

はたから眺めればそれは——一体何をしているように見えるだろうか？

「——駄あ目えでえすううううううううっ!」

結論。誇り高く清らかな妖精エルフの少女には、それはそれは不純に満ちた行為に見えたようなのであった。

迷宮都市オラリオが黄昏の光に沈んでいく。

一日の終わりを告げる朱色の輝きは行き交う住人を等しく照らし、絶え間ない喧騒を際立たせている。

そんな中、ホームへの帰路を消化するティオネ・ヒリユテは頭痛を堪えるように額に手を当てていた。

理由は背後、妹のティオナにされるがままに抱きしめられている人形のような小人族バルラム——「灰」のせいである。

アイズをつけていたティオナ、ティオネ、レフィーヤの三人は、レフィーヤの暴走によって尾行が露見する事となった。困惑するアイズに尾行の理由を素直に白状して、三人はなんとか許してもらった。問題なのはその後だ。アイズが話し込んでいた小人族バルラム、彼女が何者なのか問いかけると、あまりに予想外の答えが飛び出してきたのである。

——名前はない。ただ「灰」と呼ばれている。

その台詞と長い灰髪、銀の半眼、擦り鳴らされる声にレフィーヤとティオネは固まり、能天気なティオナだけが目をハートにして「灰」

を抱き上げて散々可愛がっていた。

再起動したティオネがどうして「灰」といたのか、何を話していたのかアイズに問い質すも「……秘密」とやや恥ずかしそうに言われては追及できない。どうしたものかと考えた末、団長であるフィン・ディムナの指示に従う事にしたのだ。

——「灰」について少しでも情報があるなら知らせてほしい。

「ロキ・ファミリア」各位に通達された命令を忠実に実行し、ティオネは「灰」をホームに連れ帰る事に決めた。その結論に至るまで「灰」が露骨に嫌がったりしたが、結局生粋のアマゾネスであるティオネは面倒になって愛しい団長の指示を優先して引き摺ってでも連れ帰る事にしたのだ。

あまりにティオナが可愛がり過ぎる事と、じーつとティオネの首筋に突き刺さる「灰」の視線に頭が痛くなってしまうが、それも仕方ないだろう。団長のためと思えば我慢できる、ティオネは愛に生きる戦士だった。

「お、帰ったか四人娘……なんやその子、ごつつ可愛えやん！」

「ロキ・ファミリア」本拠、『黄昏の館』に辿り着いたアイズたちが門に止まっている馬車に不思議そうにしていると、ドレスをまとったロキが居た。ロキはアイズたちを発見するなり陽気な笑みを浮かべて——「灰」の姿を捉えた瞬間、神速でティオナから奪い取る。

「あーっ!? ロキ、その子私のだよ！」

「何言ってるのよティオナ、違うでしょ」

「ええやんええやん、ちよつとくらい！ 可愛い子はみんなの宝や、平等に分け合わんとな！」

「ロキまで……めんどくせえなあ」

「ティ、ティオネさん、落ち着いてください……」

お気に入りのおもちゃを取られたかのように怒るティオナ、呆れるティオネ、へらへらと笑って「灰」の体をまさぐるロキ。ティオネの若干はがれかかった仮面に、レフイーヤは困り顔で落ちつけようとする。

「はー、それにしてもこんな可愛え小人族初めて見たわ！ 自分、入団

絶望したロキの泣き言はティオナに流れ弾をぶつ放した。打ちひしがれる主神と妹に、ティオネはこめかみを殴られるような疼痛を覚える。

「あーもー、話が進まないから私は先に行くわよ。はやく団長のところに連れて行って褒めてもらわなきゃ」

「そ、それはそれで違うような気がするんですけど……」

「違わないわよ。団長に褒めてもらう以上の方が何処にあるっていうの？ ラウル、このロキどつか行くんでしょ？ 馬車にでも何にでも突っ込んでさつきと連れて行きなさいな」

「は、はいっす!？」

突然呼ばれたラウルは御者席から慌てて降りて、絶望の淵から戻らないロキを無理やり馬車に詰めて出発した。

ティオネはそれを見送りもせず、「灰」の腰に手を回して荷物のように持って『黄昏の館』に消えていく。レフィーヤは追うべきか、ぶつぶつとうわ言を呟くティオナについているべきか悩み、流れについていけないアイズは呆然と立っていた。

……なお、ティオネに無理矢理連れて行かれる事が決定してからずっと、「灰」が死んだような目をしていたのはアイズしか気付いていなかった。

「……事情は分かった。君は本当に、「灰」、なんだね?」

「そうだ。フィン・ディムナ」

「そうか………君を女性と知らず、ダンジョンでこの上ない無礼を働いてしまった。もう遅いだろうが、謝らせてくれ。——本当に、すまなかった」

『黄昏の館』真北の塔、「ロキ・ファミリア」団長の執務室で、フィンは執務机から立ち上がり、「灰」の前で深々と頭を下げた。

「団長っ!？」とティオネが悲鳴を上げる。オラリオの頂点を二分する「ロキ・ファミリア」の団長であるフィンの謝罪は重い。まして直接頭を下げるなど、大きな弱みにすらなり得る。ティオネの反応は

もつともだ。

だが、頭を下げたフィンの鋭い眼光がティオネの動きを押し留めた。少なくともフィンにとっては、【勇者】^{フレイバー}の名に恥じぬ態度を示さなければならなかった。

そんな彼らの都合などどうでもいいという風に、“灰”は銀の半眼をフィンに向ける。

「気にするな。裸体を見られる羞恥など、今更感じる事もない」

「それでもだ。僕は君の尊厳に傷を付けるような真似をした。できるなら、償いをさせてほしい」

「それならば、私を今すぐ帰してくれる事を望む」

「……謝罪は、受け取ってもらえないかい？」

「謝罪は受け取ろう。貴公の名誉も守ろう。その上で償いは不要だ。」

本題はここにはない。確執なく言葉を交わすつもりなら、余計な事項は水へ流そう。私は気にしていない、貴公も忘れてしまえばいい
「そうか……いや、ありがとう」

もう一度頭を下げるフィンを“灰”は興味なさげに一瞥して、執務室に視線を滑らせる。

いるのは六人。フィン、リヴェリア、ガレス、ティオナ、ティオネ、アイズ。ベートを除いた【ロキ・ファミリア】の誇る第一級冒険者たちだ。

一様に固い表情を崩さない面々に囲まれて、“灰”は物怖じせず言葉を切り込んだ。

「それで貴公、何の用だ？ わざわざ部下に拉致紛いの事をさせてまるで、一体私に何を望む？」

「あははは……情報を集めてほしいとは言ったけど、まさか本人を連れてくるとは思わなかったんだ。君には迷惑をかけたね」

「私は特に気にしていない」

「团长おく……私、もしかしてやらかしました……？」

「いや、本人もこう言っている事だ。結果的には良かったよ。よくやったね、ティオネ」

「团长っ……！」

「うわ〜……我が姉ながらチョロ過ぎない?」

胸の前で両手を絡めてフィンに熱い眼差しを送るティオネに、ティオナが呆れたようにボソツと呟く。それは運よく誰にも咎められなかった。

フィンは執務机に戻り、腰掛けて指を組む。そして真っ直ぐな碧眼が「灰」へ向けられた。

「さて、話を戻そうか。本当なら、今すぐにも本題に入りたいところなんだけど……その前に、前回の【遠征】で助けられた事に対する礼をしたい」

「以前ここを訪れた時、不要と言った筈だが」

「僕は確執なく君と言葉を交わしたい。そのためには一方が負い目を覚めるような事は先に済ませておくべきだ。君も、そう思うだろう?」

「……成程。見解は一致しているという訳か。ならば私も、素直に礼を受け取るとしよう」

「助かるよ。それじゃあ改めて——僕たち【ロキ・ファミリア】は、三度に渡り君に助けられた。団長として、【ロキ・ファミリア】の総意として、団員を守ってくれた事を感謝する。

「灰」よ、本当にありがとう」

フィンの言葉に合わせ、周りのメンバーが一斉に頭を下げる。【ロキ・ファミリア】精鋭が謝辞する様は一種壯観ですらあったが、やはり「灰」は興味なさそうに見渡すのみであった。

「貴公らの謝儀、確かに頂戴した。それでは——本題に入ってもらおうか」

「……そうだね。まどろっこしいのはもう無しだ、単刀直入に言おう——【ロキ・ファミリア】に入団するつもりはないかい?」

「それは不可能だ。つい昨日、私は仕える主神を見出し【ファミリア】に入団した」

一瞬の迷いもなく、「灰」は事実を口にした。その返答が予想外だったのか、フィンは大きく目を見開き——耐えきれなくなったと言わんばかりに笑声を漏らす。

「どうしよう、ガレス。親指がうずうずいてたから無理だとは感じ

ていたけど、まさか振られる以前の話だとは思わなかった。もつと早く行動すべきだったかな」

「これはしょうがないじゃろ。儂らが「灰」に抱いていた印象と情報からして、こんな短期間で「ファミリア」に入団するなんぞ予想できん。リヴェリアもそうじゃったからな」

「ああ……流浪を好む根無し草だと思ひ込んでいた。これは私の失態だな」

くつくつと笑うフィン、髭を撫でるガレス、額に手を当てるリヴェリア。「ロキ・ファミリア」上層部で完結するやり取りに、フィンの提案に呆気にとられていたティオネが慌てて口を挟む。

「だ、団長っ!?!」 「灰」の情報を集めるよう指示したのってこのためだったんですかっ!?!」

「そうだよ、ティオネ。僕とロキ、リヴェリア、ガレスで話し合ってたね。ロキは乗り気じゃなかったけど、入団の話を持ちかけようって決めたんだ。……まあ、結果は見ての通り惨敗だったけどね」

「ティオナ、ティオネ。お前達には後で話すが、「灰」は特殊な経歴の持ち主だ。私自身、半分も信じてはいないが、確かな力を持っている事は深層で共に確認しただろう。」

「灰」は強い。その上で我々の知らない未知の技術を有している。性格にやや難を抱えてはいるが、野放しにしておくよりは身内に引き込んだ方がいいと判断した」

「力尽くが得意な儂が言うのも何じゃが、情報は武器じゃ。そしてこやつはどーも情報そを漏らすに頓着せん。ロキの話を聞く限り儂ら以外には話していないようだがのう、これからもそうであるとは限らん。」

下手にしゃべられて余所に取られるくらいなら、という話じゃ「そ、そうだったんですか……」

苦笑するフィンにリヴェリア、ガレスが補足する。ティオネは彼らの説明に頷きつつも、理解も納得もできない顔をする。

ティオネはロキ、フィン、リヴェリア、ガレスの聡明さをよく知っている。だからこそ分からない。同じ「ファミリア」として、一人の

冒険者として絶大の信頼を置く彼らにそこまで言わせるほどの人物なのか——と、とてもそうは見えない人形のような小人族バルウムへ視線だけを向けた。

分かりやすい疑惑の目をするティオネに、フィンはクスリと笑みを零した。そして虚空を眺める「灰」へいくつか質問を飛ばす。

「君はどの神の「ファミリア」に入ったんだい？」

「ヘステイアだ。「ヘステイア・ファミリア」に今は所属している」「その「ファミリア」を選んだ理由は？」

「家族がいるからだ。家族は共にあるべきものだ、私は知っている」

「フルナ神の恩恵』は受けたかい？」

「ああ」

「ステイタス」を教えてください」

「レベルL.v.は1、アビリティオールゼロ全能力初期値だ」

「《魔法》と《スキル》は？」

「答えられない。ヘステイアから止められている」

「もし、止められていなかったら？」

「答えていただろう。貴公がそれを望むなら」

次々と回答する「灰」にティオネは信じられないと顔を引きつらせる。神の名やレベルL.v.はともかく、平然とアビリティ能力値や止められてなければ《魔法》や《スキル》まで話そうとした「灰」に、ティオネの肌が戦慄で粟立つ。

恐ろしいのはほとんど話した事のないティオネでさえ、「灰」が嘘をついていないと確信できる事だ。凍てついた太陽のような銀の瞳は、虚飾や欺瞞など何一つないと雄弁に語っている。

だが、それだけでこうも確信を持てるだろうか。ティオネは己の感情に疑問を持ち、それを見透かしたフィンは「灰」へある要請をした。

「ソウルの業」——もう一度見せてくれないか」

「……止められているのだがな。貴公らはもう知っている。一度も二度も、変わらないだろう」

「灰」は小さく言葉を擦り鳴らして、てのひら掌を虚空へ差し出す。何の

変哲もない白く小さな手に——その青白い輝きは、どこからともなく集まり出した。

「これは……団長っ!？」

「大丈夫だ、テイオネ。攻撃じゃない」

深層でまみえた時、杖に収斂した光と同じそれにテイオネは身構え、フィンに止められる。『灰』は構わず青白い光——『ソウル』を掌に集め、火のように揺らめかせる。

「これは『ソウル』と呼ばれている。万象の根幹、人の隠された力、あるいは古き獣のもたらしたもの——諸説あるが、貴公らの尺度で言えば『魂』と言つて差し支えないものだ」

『魂』……?」

「そうだ。森羅万象が宿すもの。そして、神が見通すもの。神々は『ソウル』を見通す事で虚言の有無を判別しているのだろう。

私は『ソウル』の『器』だ。有形無形を問わず、あらゆる『ソウル』をこの身に宿している。——このようにな」

『灰』の掌の『ソウル』は形を変え、一本の剣となる。驚くテイオネに「持つてみる」と『灰』は柄を差し向けた。恐る恐るテイオネが持つてば、それは紛れもない実物であると分かる。

「『ソウル』の業」とは『ソウル』を扱う術を指す。それによつてできる事は多岐に渡るが、それ故に禁忌とされるものも多い。『魂』を扱うのだから、当然と言えば当然だ」

『灰』がテイオネに視線を向けると、剣は青白い光となつて霧散した。驚愕の間もなく、テイオネの意識は『灰』の瞳に絡め取られる。「そして、私が扱う『ソウル』の業」は禁忌のそれだ。故にこれ以上は語らない。……そういう約束だったな、フィン」

「ああ、見せてくれてありがとう」

フィンと『灰』のやり取りも、今はテイオネに届かない。『灰』の瞳に見入るテイオネは、分かつてしまった。『灰』の言葉に嘘がないと確信できる理由を。

凍てついた太陽のような銀の瞳。そこには『ソウル』が渦巻いている。神ならぬテイオネにも『灰』の『魂』が見えている。

それは人を強制的に信用させる眼だ。どんな感情を「灰」に抱いても、絶対的な真実を叩き込んでくる瞳。その暗い銀色に魅入られれば、たとえ初対面であっても神への懺悔の如く心中を吐露するに違いない。

そして、だからこそ野放しにできない——そんな思いがティオネの胸で荒れ狂った。そして同時に、フィンたちが入団を持ちかけた理由を悟る。

「分かってももらえたかい、ティオネ。この通り、彼女は中々危なっかしい。放置するには不安が大きすぎるんだ。だからこちらに引き込みたかったんだけど……」
「灰」、君の主神は神格者じんかくしゃかい？」

「眷族を心の底から家族と想う程度にはな。私に情報の開示を禁じたのも、私の身を案じての事だ」

「なら安心したよ。真つ当な神の下でなら、君も悪いようにはされな
いだろう。ああでも、何かあったら頼ってくれ。無碍にはしないよ。
君は、恩人だからね」

「……貴公、想像以上に義理堅いな。分かった、頼るべきと判断した時は世話になるう」

「そうしてくれると嬉しいよ」

フィンはニコニコと「灰」に話しかける。「灰」の視線が途切れたティオネはいつの間にか荒くなっていた呼吸を整えつつ、会話の内容に少し違和感を覚えた。気のせいかもしれないが……フィンはまだ諦めていないように感じたのだ。

訝しむティオネの後ろで、リヴェリアとガレスが視線を合わせて肩を竦め合っていた。

「あーあ、結局「灰」ちゃん入団しないんだー。残念だなー」

「……ティオナ、あんたねえ……」

話についていけず途中からポカーンとしていたティオナは、心底残念そうに落胆する。能天気な妹の発言にティオネは若干イラツとした。

頭の後ろに手を組んで小石を蹴る真似をするティオナの横で、アイズは金色の瞳を満月のように広げてずっと「灰」を見ていた。Lv.^{レベル}

1、全能力初期値。話の途中に出た単語が、アイズに衝撃を与えている。

真面目な空気が弛緩する中、アイズは「灰」に問いかけようとして——その瞬間、ドアを蹴破るような音と共に、狼人が執務室に足を踏み入れた。

「おいてめーら、雁首揃えて何してやがる」

「やあ、ベート。帰ったんだね」

後頭部を搔きながら入室したベートは会する一同に視線を投げ、「灰」に気付くと怪訝そうに目を歪ませる。そして鼻を動かし、盛大に顔をしかめる。

「あ？　なんでガキがここに居るんだよ。つーかフィン、この部屋ちやんと換気してんのか？　前に連れてきやがった「灰」野郎の匂いが残ってんじゃないか」

「ああ、それは「灰」が居るからだよ」

「はあ？　「灰」野郎がどこに居るってんだ、てめーらと知らねえガキしかいねえじゃねえ、か……」

「先日振りだな、ベート・ローガ」

振り向く人形のような小人族パルウムに、ベートは瞠目して絶句する。あまりの変貌ぶりにさしものベートも驚く他なかったようだが……すぐに射殺さんばかりに目を絞り上げ、忌々しそうに怨嗟の声を上げた。

「……雌だったのかよ、てめえ……」

「ああ。それがどうかしたのか？」
「ハッ、どうもしねーよ。元々『雑魚』だと思ってたやつが『雑魚』以下のムシケラに成り下がっただけだ」

「ちよつとベート！　「灰」ちゃんになんて口利くの！」

ベートの言動にテイオナが食って掛かるが、当の狼人は鼻で笑う。『雑魚』に『雑魚』と言って何が悪いわり。おいフィン、なんでこいつがここにいやがる」

「勧誘のためだよ、ベート。ぜひ【ロキ・ファミリア】に入ってほしくてね」

「……ふざけんじゃねえ。俺は絶対ぜって認めねーぞ」

「心配しなくても、振られたばかりさ。もう他の「ファミリア」に入っ
たそうだな」

「そうかよ。そりゃー安心したぜ。こんな臭えやつと同じ空気吸うな
んぎ御免だからな。おい、灰〃野郎。二度と面見せんなつつただ
ろうが、断つたんならさっさと出て行きやがれ」

「ベートツー！」

テイオナの強い恫喝にベートはひるまない。何の反応も示さない
灰〃に舌打ちをして、執務室から出ていこうとする。

普段以上に苛立ちを隠さないベートの姿に、リヴェリアは片眉を上
げた。

「……ロキから聞いていたが、灰〃に対して激情が過ぎるな。灰
〃、ベートと何かあったのか？」

「いや、何かという程の事もなかった筈だが……」

背後で交わされる言葉を無視して、ベートはドアの取っ手に手をか
け。

「……—そうだな。端的に言うと、ベート・ローガは私の初めての人
だ」

灰〃が何気なく呟いた爆弾発言に、ベートは盛大に吹き出した。

「ぶふううふううふううっ!!」

「……えっ? ベート? 初めて? 今灰〃ちゃんなんて言ったの
……っ?」

「……嘘でしょ、ベート……」

理解の追いつかないテイオナと理解できないものを見る目をする
テイオネ。リヴェリアは呆氣にとられ、ガレスは驚愕を露わにし、
フィンは瞠目する。アイズだけが理解していなかった。

アマゾネスの姉妹を筆頭に、灰〃を除いた全員の視線がベートに
突き刺さる。げほげほとむせていた狼人は、自分を囲む異様な空気に
おのの
慄き、吼え立てた。

「ばっ、ばっ、馬鹿言ってるじゃねえぞ 灰〃野郎おおおおお
!!? 俺がてめえの何だってエツ!!」

「だから、私の初めての人だと」

「うるせえその口今すぐ閉じろッ!」

「……ベート、君は……」

「違えぞフィンツ!? こいつが、このクソツたれな『灰』野郎が法螺吹いてるだけだッ!」

「……待て、落ち着け。ここは事情を聞くべきだ。『灰』、詳しく話してくれ」

『灰』に飛びかからんばかりの凶相を刻むベートとそれを止めるアマゾネス姉妹に待ったを入れ、リヴェリアは『灰』へ翡翠色の瞳を向ける。『灰』は何の落ち度もないといった顔で言葉を紡いだ。

「ふむ……あれは二日前の夜の事だ。路地裏にいた私は、ベート・ローガに迫られてな」

「待てエツ!? そんな事してねえだろうがッ!」

「あんなに強く求められたのは初めてだったから、嬉しくなっただけだ。つい応えてしまった」

「ザケんな法螺吹くんじゃ……て、てめえつ、まさかあの事言ってるのかッ!」

「……心当たりがあるようだな、ベート」

ベートの脳裏に過ぎったのは『灰』の素性を問い質したあの夜だ。それをそのまま口にして、リヴェリアの冷ややかな声に失態を悟る。これでは認めたも同然だ。

「まっ、待ちやがれッ! あん時はロキとアイズも居たッ!」

「ロキとアイズも……?」

「……ベート、てめえまさか二人の前でっ!」

「ちげーよふざけんなバカゾネスッ! おいアイズツ、説明しろッ!」
追い詰められた狼は一縷の望みをアイズに託す。だがアイズはここにきてようやく『灰』の発言の意味を理解し——かあつと顔を赤くして俯いてしまった。

「うオおおおおおおおおおおおおおおおいつ! 何で今そんな顔すんだよなんで何も言わねーんだよッ!」
じよっ、冗談じゃねえぞッ!」

「……ティオネ、このクソオオカミぶつ殺そうか」

「そうね、ティオナ。よりにもよってアイズに……何汚えもん見せて

んだてめえはあああああああああああああつ!!」

「るオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!? 覚えてろよ 〃灰〃
野郎オオオオオオオオオオオオ!!」

本気で殺しにかかるアマゾネス姉妹にベートは執務室を脱出する。
二対一の手前、退きながら迎撃するしかないベートは断末魔のような
捨て台詞を吐きながらアマゾネス姉妹に追いかけていった。

残ったフィン、リヴェリア、ガレスは一樣に 〃灰〃へ視線を向け
……同時に溜息をつく。

「…… 〃灰〃。一応確認しておくが、今の発言はロキとアイズ、ベート
に素性を明かした時の話か?」

「ああ。ベート・ローガと交わした出来事はそれくらいだからな。そ
れがどうかしたのか?」

「……………言い方が悪すぎる。どうするんだこの事態……………」

「あやつらが落ち着くまで、放つとくしかあるまい」

「あはは…………… 〃灰〃 って結構天然なんだね」

〃灰〃の無表情にくらりとして、リヴェリアは聞こえてくる破碎音
に頭を痛める。ガレスは処置なしといった具合に首を振り、フィンは
盛大に苦笑していた。

そんな彼らの様子に疑問符を浮かべ、 〃灰〃はアイズと視線を合わ
せる。羞恥から回復したアイズは 〃灰〃と見つめ合い、同時に首を傾
けるのであった。

真新しい月光がオラリオの路地に降り注ぐ。

人気のない綻びが目立つ建物の間を歩く 〃灰〃は、空に浮かぶ月に
何の感想も抱かない。

かつて神とその騎士団が司った月とあれは違う。影の太陽、復讐の
暗月。この月明かりは罪人を照らさず、また何をも導きはしないだろ
う。

【ロキ・ファミリア】の一騒動を放置して帰路についた 〃灰〃は、
フィンの言葉を思い出す。何かあれば頼ってほしい、あの【勇者】は

しきりにそう言っていた。

そんな日が来るのだろうかと思いつきながら歩き、やがて廃教会に辿り着いた。崩れた女神像を通り過ぎ、地下室に降りようとしたところで、地下室の入口に小さな影を見つける。

「あつ……」

扉の前で膝を丸めて座っているのはベルだった。捨てられた子鬼のような、どこか震えていたベルは、*“灰”*の姿を見つめるなりばあつと顔を輝かせる。

*“灰”*はその笑顔に銀の眼を細め、どう言い訳したものかと思える。最初にはぐれたのはベルとはいえ、こんな時間まで探さなかったのは *“灰”*の失態だ。責められても致し方ない——そう思っていたが、ベルは抱きつかんばかりに *“灰”*へ駆け寄って、笑った。

「アスカさん！ おかえりなさい！」

ベルの屈託のない笑顔に、*“灰”*は考えていた事が全て溶けた。あの『最初の火』に抱いた憧憬とベルを重ねて——そつと、口元を淡く綻ばせる。

「ああ、ただいま。ベル」

こうして長い一日は終わり。*“灰”*は——アスカは、家族の元へ帰った。

記される物語、埋もれる物語

世の中には恐ろしいものが数多く潜んでいると、ベル・クラネルは思う。

例えば夜。祖父を亡くし、一年近くを経てアスカも失踪した最初の夜は、不安と恐怖しかなかった。寒々しく、嫌に広く感じる家が、ベッドで眠れず震えるベルを追い立てるようであった。

例えば怪物。ベルは小さい頃、ゴブリンに襲われた事がある。あの時は祖父が助けしてくれたが、助けられるまで恐ろしい思いで胸が一杯だった。無力と絶望、それが体を支配する感覚は二度と経験したくない。

例えばエイナ・チュール。普段は優しいハーフェルフのお姉さんだが、いざアドバイザーとして接されると泣き言を上げたくなるスパルタっぷりだ。ベルはきつとエイナに頭が上がらないだろうと、二週間程度の付き合いでも分かってしまう。

そんな中でも一、二を争う恐ろしい事が、ベルにはある。たとえばそう——瞬きもせず無表情で、じいっと視線で攻め立ててくるアスカが、ベルにはとても恐ろしい。

時刻は朝の六時。既に朝日が昇っており、鳥が朝を知らせる歌を奏でる時間帯だ。廃教会の地下室、一つっきりのベッドの前で正座するベルは、ここに在らぬ神ヘステイアに懺悔と救援を必死に求めている。

「ごめんなさいごめんなさい、神様本当にごめんなさいっ！　いくらヴァレンシユタインさんが綺麗だったからつてアスカさんを置いて街中で逃げ出した僕が悪かったです！　本当に反省しています！　二度とあんな事はやりませんっ！

だからお願いです神様、どうか僕を助けてください！　アスカさんの怒りを鎮めてくださいっ！　お願いします、お願いしますっ……！！

「ベル。それ以上逃避を続けるなら、私にも考えがある」

「すみませんアスカさん許してくださいっ!?!」

どこか冷やかに落ちてくる声にベルは即行で土下座した。しおれ

た白い髪を振動させるベルの姿はなんとも情けない。ベッドの上で足を崩して横座りするアスカは、食べられる寸前の小動物のようなベルを銀の半眼で見下ろしている。

「顔を上げたまえ。その恰好は貴公も辛かろう」

「で、でも……！」

「顔を上げたまえ——私はそう言ったぞ」

「ひゃいっ!？」

変わらぬ調子のはずなのに低く押し潰すようなアスカの言葉が、ベルの上半身を強制的に跳ね上げさせる。震える子兎から一転、石像の如くガチガチに固まるベルの深紅の瞳が、凍てつく太陽のような暗い銀色に縫い止められた。

「さて、ベル・クラネル。前々から思っていたが、貴公は少し軟弱に過ぎる。懸想の相手から逃げるような真似は特にそうだ」

「アスカさんっ!？」 僕はヴァ、ヴァレンシユタインさんの事は何とも思っていないって言ったよね!？」

「御託はいい。貴公、祖父から何を教わってきた。男の心得をみつちり叩き込まれたのではなかったのか」

「そ、そうだけど……」

じくじくと突き刺さる視線にベルはしおらしくなる。しゅんと肩を落とす頼りなさは覇気や精気とまるで無縁だ。これでよくダンジョンに出会いを求めて来たと言えたものだ、アスカは呆れの色を瞳に混じらせる。

「私は色恋を知らない。故に貴公へ根本的な助言を与える事はできない。その役目は祖父のものだった。もはや貴公の記憶にしか、男の答えはないだろう。」

だが、そのような性根では叶うべくも叶わないとは私にも分かる。貴公はもつと肝を鍛えるべきだ」

「返す言葉もありません……」

背筋を丸めて小さくなるベルに透明な息をついて、アスカはベッドから立ち上がった。まだこの拷問のような時間が続くと思っていたベルは、上目づかいでアスカの動向をうかがう。

「ア、アスカさん……?」

「話は終わりだ。私から言う事はもう何も無い。朝食にでもしよう」

「も、もう怒らないの?」

「まだ言葉で責められるのか?」

「滅相もないです!」

じろりと見下す銀の半眼にベルは反射的に土下座しそうになる。それを押し留め、身振りで立つように促したアスカは、水場に向かいながらぼそりと呟いた。

「体に直接教え込んだ方が骨身に沁みるだろうからな」

「えっ」

「さあ、食事は私が用意しよう。貴公はダンジョンへ行く準備でもしているといい」

「ちよ、アスカさん!! 今なんて言ったの!?!」

「何でも無い。ダンジョンに行けばすぐに分かる」

「それってどういう事!? ねえアスカさん、アスカさあーんっ!?!」

ひどく真つ青な顔で灰髪の小人族バルウムに詰め寄るベル。それを無表情で流して、アスカは肅々と食事の準備を進めるのだった。

「あなたが話聞いたベル・クラネル氏の親族の方ですね。お名前を伺ってもいいですか?」

「名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

「は、『灰』? えーつと……ベル君?」

「あの、エイナさん。これはアスカさんの口癖みたいなもので……」

ギルドの受付でベルは何度か繰り返したアスカの紹介をする。アスカは村でもこの調子だったので、横から説明を入れるのはいつもベルの役目だった。

「それでは、こちらが登録用紙になります。共通語は書けますか?」

「問題ない。……これでいいか?」

「……まあ、一応問題はありませんが……本当に冒険者になるんですか?」

エイナは受付台の向こう、ベルの横にいる小人族バルウムへ視線を向ける。宝石のような緑の瞳に含まれるのは疑問と不安の感情だ。

長い灰髪が特徴的なアスカはどこか威圧感のある銀の半眼を持ち合わせているものの、それ以外で強さを感じる要素はない。黒い装束のローブとスカートのしろ、赤い腕帯にしろ、どこかの祈祷者のようでもダンジョンに潜る恰好ではない。

まして武器さえも持っていないとなれば、エイナが疑問を呈するのも無理からぬ事だ。まあ、ベルも似たようなものだったし、予備知識や準備なしに冒険者になる者も皆無ではない。

けれどここまでとなると、流石に不安が打ち勝つのだが……アスカは乏しい表情とは裏腹に、確固たる意志でゆっくり頷く。

「ああ。ベルのいる処ところが、私の居場所だ。そこがダンジョンだというのなら、冒険者にもなるさ」

「……って、言ってるけど。ベル君はいいの？ 家族なんでしょ？」

私は正直冒険者に向いてるとは思わないんだけど……」

「大丈夫ですよ、エイナさん。こう見えてアスカさんは僕よりずっと強い人ですから」

「本当かなあ……」

アスカへの信頼に満ちたベルの笑顔をエイナは当然信じていない。強いと言っても、所詮はオラリオの外の話だ。ダンジョン内は外とは比べ物にならないくらい危険に満ち溢れている。だから外での強さは当てにならないと、エイナはよく知っていた。

しかしエイナは真面目なギルド職員。誰であろうと最低限問題がないのであれば、冒険者として登録する義務がある。願わくは無事できてほしいと思いつつ、手早く登録の処理を済ませてアスカに向き直った。

「それでは、ただ今をもちましてあなたを冒険者と認めます。改めまして迷宮都市オラリオへようこそ、アスカ氏。私達はあなたを歓迎します」

「感謝する。エイナ・チュール」

「いえいえ、これも仕事ですので。それでは引き続き冒険者として活

動する上での契約内容、諸注意に移らせていただきます」

「いや、その必要はない」

不安を隠しながら仕事を全うしようとするエイナの笑顔をアスカは一刀両断した。横でベルが真っ青になる中、エイナは笑顔のままひくりと口端を引きつらせる。

「……アスカ氏？ 私の勘違いなら良いのですが、ひよつとしてダンジョンを侮ってはいませんか？」

「そうではない。一通りの知識は既に頭に入れてある。その上で私は今回、ベルの供回りをするだけだ」

低く抑えられたエイナの声にアスカは無表情で対応する。答えによつては爆発する事も辞さないエイナだったが、アスカの返しに氣勢を削がれる。

「クラネル氏の供回り、ですか？ それは……」

「端的に言えば、サポーターだな。武器を持たないのもそれが理由だ」
両手を広げて徒手空拳を殊更にアピールするアスカは、ベルへ視線を向けて言葉を続ける。

「先も言ったが、私の居場所はベルの処にある。ベルが冒険者を目指したからこそ私はオラリオにあり、ベルがダンジョンに行くなら同伴する。そう決めているのだ」

「だからサポーターとして同行するという事ですか？」

「ああ。傍で見守ればそれでいい。私が居ればベルもそう無茶をしないだろう」

「それは……私としてもありがたいですが。クラネル氏は最近調子に乗っているところもありますので」

「そ、そんな事ないですよ、エイナさん！」

「へえ〜〜〜？」

「えう……」

ベルの小さな抵抗はじつとりと重いエイナの笑顔にあえなく撃沈した。朝から見せられ続ける腹の据わらないベルの様にアスカはもう何の反応も示さない。構わずエイナへ言葉を投げる。

「心配ならば、冒険者の心得はベルに聞いておく。冒険者になって半

月ならば、初歩の初歩くらい他者に教えられるくらいにはなっている筈だ。それを確かめるためにも、貴公の親切は今回見送らせてもらおう」

「うーん……一理なくもありませんが……正直お勧めはしません。でも、クラネル氏がいつまでも単独ソロというのも……本当に無茶はされな
いんですね？」

「勿論だ」

凍える太陽のような銀の瞳をエイナは覗き見る。会ったばかりだが、嘘は言っていないようだ。家族のようだし、ベルを死なせるような真似はしないと信じられる。

それなりに考えた末、エイナはできる限りの忠告をしてアスカの主張を許可した。最低限しかギルドの言う事を聞かない冒険者も珍しくない。エイナはアスカがベルの家族である、その一点を信じる事にした。

こうしてベルとアスカの二人は無事にダンジョンへ潜る事になったのだが……

「ベル。貴公の到達階層はどこだ？」

「えーっと……五階層だよ、アスカさん」

「そうか。では六階層へ行こう」

「えっ!？」

アスカは嘘は言っていなかった。ただ単純に、誰を基準にして無茶をするかしないか、言葉にしていなかったただけだ。

ベルの性根を叩き直す気満々のアスカは、期待半分、不安半分のベルと共にダンジョンの奥へ潜っていった。

人間の影絵のようなモンスター、『ウォーシャドウ』の鉤爪が走り抜けようとするベルを襲う。黒閃と白髪、髪の毛数本を置いてギリギリで回避された凶悪な一撃は、ダンジョンの壁をたやすく削り三本の爪痕を残す。

『ウォーシャドウ』の動きはそれで終わった。回避と同時に振り抜

かれた《ダガー》が黒い胸部を真一文字に引き裂いていたのだ。魔石を斬られた『ウォーシャドウ』はぶるりと体を液状に崩れさせ、灰となる。

「次だ、ベル」

「はい！」

アスカの平坦な言葉に答え、休む間もなく接近するもう一体の『ウォーシャドウ』にベルは向き合う。「ステイタス」の成長により攻撃を見切る反応速度と敏捷性を得たベルは、それを存分に生かして上段と右下から交差する黒爪を避ける。

攻撃の隙間、『ウォーシャドウ』の左脇に滑走したベルは、折り畳んだ脚をバネのように伸ばし刺突する。勢いの乗った《ダガー》は黒い胴体に吸い込まれ、脇腹を貫通し、ベルの腕をめり込ませながら頭部まで達した。

そのまま液状に崩れる『ウォーシャドウ』を眺め、ベルは確かな手ごたえを感じる。強くなっている、確実に。敵を倒す達成感と力を振るう高揚感に酔いそうになる。

けれどそれは、すぐそばで繰り広げられる一方的な戦いに呆気なく霧散した。怪物の宴の如く壁から現れる数十体の『ウォーシャドウ』を、嵐のような灰色の影は難なく屠っていく。

アスカの立ち回りは凡庸だ。敵の動きを読む、一対一の状況をつくる、敵を誘導する、弱点を突く。どこまでも基本に忠実な戦い方は、けれど最短最速の動きにより圧倒的な暴力を生む。

群れる『ウォーシャドウ』の端から順に、不用意に攻撃を振った奴から急所を貫かれ倒れていく。平時とは違うアスカの赤い眼光は容赦なく黒い影たちの敵意を奪い、多対一の戦況は完全に制御されていた。

「次だ」

全く動きを止めないアスカが呟くと、『ウォーシャドウ』の群れから一匹ベルへ襲い掛かる。操り人形のように敵の動きを誘導する手腕に舌を巻きながら、ベルは果敢にモンスターへ立ち向かった。

どれくらい戦い続けていただろうか。『ウォーシャドウ』に加え、

『ゴボルト』、『ゴブリン』、『フロッグ・シューター』に『ダンジョン・リザード』など、アスカとベルが応戦するルームには引つ切り無しに大量のモンスターが群がっていた。

アスカが時折投げる青白い燐光を灯す頭蓋のような物のせいだろうか。確かめる間もなくやってくるモンスターに辟易しながら、ベルの体はきつちり《ダガー》を振るい、敵を倒していく。

やがて「そろそろ終わりにしよう」とアスカが言い、《ダガー》を背負っていた大曲剣に持ち替える。重量と切れ味を兼ね備えた極東の一品、《ムラクモ》は神速で振るわれ、壁ごと有象無象を裂き、竜巻のような回転斬りでモンスターを一掃した。

「うわあー……アスカさん、やっぱり強いや」

「この程度は当然だ。ベル、魔石を集めよう」

「う、うん」

ベルの感嘆の声を適当に肯定して、アスカは倒れたモンスターの死骸から魔石を抜き取っていく。ナイフも使わず腕を突っ込んで引き抜く姿にやや引きながら、ベルもせつせと《ダガー》で肉を掘りながら魔石を回収した。

そして大量の死骸が灰となりやっと一息ついたベルは、へとへとになりながらも膨れ上がったポーチについて頬を緩める。大半がアスカの戦果とはいえ、ここまで魔石を集められたのは初めてだ。嬉しくないはずがない。

「終わったか、ベル」

「うん！　こんなにたくさん獲れたの初めてだよ！」

「そうか。良かったな」

ベルは満面の笑顔でアスカに近づく。既に魔石を回収し、ドロップアイテムも集め終わっていたアスカはルームの中央で座っていた。指で座るよう示唆されたベルは浮かれた気分で従う。

「ベル。やはり貴公は冒険者に向いていない」

だがベルのうわずった気持ちは、アスカの一言にあえなくしぼんでしまった。

「……僕、結構頑張ったと思うんだけど……そりゃあ、アスカさんか

から見ればまだまだかもしれないけどさ……」

「いや、戦闘は及第点だ。初心者であるにしろ、基本をおさえ自身の特性を活かしている。最低限の知識も有し、速攻を旨とする流儀スタイルも付け焼き刃だが物にしている。」

力量に見合った相手と戦うのなら、何の問題もないだろう」

「ほ、本当!」

「ああ。それは私が保証する」

若干いじけた口調のベルは、アスカの偽りのない贅辞に顔を輝かせた。予想外に褒められて少し照れ臭いくらいだ。ベルは赤らむ頬をぽりぽりと搔く。

しかしながら、当然これで終わりではない。コロコロと表情を変え、ベルにアスカはずいっと顔を寄せる。鼻と鼻が触れ合う距離、驚くベルの深紅ルベライトの瞳に、銀の光が反射する。

「だからこそ、貴公の情弱は深刻だ。力量に見合った敵は充分相手取れる。格下なら油断なくば負けはしまい。」

だが、己より格上と相對した時、貴公の情弱は必ず敗北をもたらすだろう。必ずだ」

凍てつく太陽の瞳に絡め取られ、ベルはごくりと喉を鳴らす。ダンジョンの仄暗い明かりに照らされるアスカはぞっとする程美しい。それ故に今は、その無表情が何より恐ろしい。

「遙か絶望とまみえる時、誰しもが恐怖を抱く。それに対し我らができるのは二つに一つ。」

超克するか、打ち砕かれるか。

貴公は後者だ、ベル・クラネル。今のままでは貴公は恐怖に吞まれてしまう。足が竦み、剣が鈍り、致命的な隙を生む。そうなれば後には、屍を晒すのみだ。

それをもつて、私は貴公が冒険者に向かないと断言する。冒険ができないのだからな。死を前にして逃げる事しかできないのなら、端から冒険者であるべきではない」

ベルは何も言い返せなかった。心の底からその通りだと、そう思えてしまったからだ。

エイナ・チュールは『冒険者は冒険してはいけない』と言う。その意味をベルは重々承知しているし、それなりに守っている。

一方で、アスカの言う『冒険できない者は冒険者になるべきではない』というのも真理だ。自分を超越する敵に、死の危険に満ちた未知に、栄光と破滅が混在するダンジョンに挑むならば、冒険できなければ話にならない。

ベル・クラネルは冒険者に向かない。そんな事は分かっている。『ミノタウロス』を前にして無様に逃げ惑う事しかできなかったあの日のように、強敵を前に逃亡を選ぶ自分が容易に想像できる。

それでもベルは——諦める事ができなかった。瞳の奥、まぶたの裏に焼きついたあの憧憬が、ベルの心に止まる事を許さなかった。

ベルはアスカを強く見返す。怯えの灯る瞳には、けれど決して諦念はない。弱弱しくとも意志を宿す深紅ルベライトの輝きに、アスカは眩しそうに眼を細め、立ち上がった。

「立て。稽古をつけてやる」

「え？」

「どうせ、諦めなどしないのだろうか？ 貴公は軟弱だが、意志を曲げない頑固さもある。言って聞くような男ではないと私は知っている。

だから鍛錬を施そう。せめて貴公が、最後までその意志を通せるようにな」

「アスカさん……！ はい、お願いしますー！」

アスカの好意にやる気を奮い立たせたベルは、急いで場所の準備をする。回収した魔石とドロップアイテムを端に寄せ、活力がみなぎった表情で《ダガー》を取り出す。

そこでふと、疑問に思った。アスカはどんな稽古をつけてくれるのだろうか。そう思って目を向けると、アスカは丁度ルームの壁を一面破壊し終わったところだった。

ベルはその意味が分からなかったが、モンスターが湧かないようにするためだと教えられる。納得した表情を浮かべるベルに——アスカは拔身の《ムラクモ》を向けた。

「……えっ」

「ベル。恐怖を克服する手段は本人の意志に起因する部分が多い。だが、外部から強制的に克服させる方法がないわけでもない。

例えばそう——死の危険にさらされ続ければ、否が応でも恐怖は薄れる。生き残ろうと必死になる。その感覚を忘れなければ、恐怖を乗り越える引鉄トリガーを得られる。

貴公もきつと、そうだろうか？　なあ、ベル・クラネル」

「ま、まさか……!?!」

「それでは、始めるとしよう。死力を尽くして生を掴め」

「ちよつ、待つ、待って!?!　待ってよアスカさああああん?!?!」

「待ったは無しだ」

日頃と変わらない平坦な言葉に、ベルは血の気が引くほど明確に察した。先程見たモンスターを蹴散らした暴虐の嵐——それが自分に向けられるのだと、否が応にも理解せざるを得なかった。

その日、ダンジョンの上層に、非常に情けない子兔の悲鳴が響き渡ったという。

次の日もベルとアスカはダンジョンに潜っていた。

場所は変わらず六階層。『誘い頭蓋』でモンスターを集め、《赤眼の指輪》と《頭蓋の指輪》を装備したアスカが敵を引きつける。そこから敵の動きを調整し、ベルへ一体ずつ送り出して戦わせるという手順だ。

数時間ほどそれを繰り返し、終わればドロップアイテムを回収、そしてアスカの猛攻からベルが必死に逃げ回る稽古に移る。

今日もそのつもりだったが、ドロップアイテムを回収している途中、ダンジョンの奥が妙に騒がしくなる。アスカとベルが目を向けると、巨大なカーゴを牽くひ装備の良い冒険者の姿が通路に見えた。

「ふむ、【ガネーシャ・ファミリア】か」

「アスカさん、知ってるの?」

「いや、あの冒険者たちは知らん。だがあの像の顔のエンブレムには見覚えがある。そして牽いているカーゴの中身はモンスターだろう。

だから「ガネーシャ・ファミリア」と判断した」

「えっ、モンスター!？」

「そうだ。おおかた怪物祭モンスターファイリアの準備と言ったところか。貴公も知って
いるだろうか？」

「怪物祭……あーうん、その……」

「……知らないのだな。オラリオにありながら無知に過ぎるぞ、貴公」
「……ごめんなさい……」

しよんぼりと肩を落とすベルに嘆息して、アスカは軽く説明する。

怪物祭とは「ガネーシャ・ファミリア」が主催するオラリオの大きな催しの一つ。ダンジョンから連れてきたモンスターを民衆の前でタイム調教する、一種の見世物だ。

これにベルはひどく驚いていたが、モンスターが調教できること自体知らなかった故だろう。予想以上に世間を知らないベルに、一度教育を施すべきかとアスカは頭のどこかで思索する。

しかしそれもすぐに打ち切って、真横にして背負っていた《グレートソード》をソウルに溶かした。

「ガネーシャ・ファミリア」がいるとなると稽古をつけるのも難しい。連中の邪魔をするのは気が引ける。今日はここまでにしよう」

「そうだね……アスカさんのやり方だと階層中を走り回らないと僕死んじやうし……というか、昨日結構な冒険者の人に見られてたけど大丈夫かな……？」

「問題ないだろう。ダンジョンは誰のものでもない」

昨日追いかけて回された恐怖を思い出してぶるりと震えるベルに、不都合はないとアスカは言い切る。「本当かなあ」と不安顔のベルを連れて、二人は「ガネーシャ・ファミリア」の邪魔をしないようダンジョンの外を目指した。

「それにしても、アスカさんはすごいね」

「何がだ？」

「強いところだよ。アスカさんは僕なんかよりずっと強い。強くて、綺麗で、かっこよくて……僕もそうになれるかなあ」

帰路を辿る道中、ふいにベルがそんな事を言う。反応を示したアス

力は、独り言のようなベルの言葉にしばし黙考して、銀の半眼を虚空に向ける。

「その評価が私に当て嵌まるとは思えない。少なくともベル、貴公の目指す先に私がありはしないだろう」

「え？ そんな事ないよ。アスカさんはそう……たとえるなら物語の英雄みたいにすごいじゃない」

「……英雄、か」

そう呟いて、アスカは黙りこくる。声の途切れた灰髪を揺らす小人族バルウムに疑問を持ったのか、「アスカさん？」と確認するようなベルの言葉が降ってくる。

虚空を眺めていたアスカは、在りし日の記憶を思考の海に閉じ込めて、少し眉根を下げてからゆらりと光る暗い銀色をベルに向けた。

「私をそう呼んでくれるな、ベル。その称号こそ、私から最も遠い。そう呼ばれるのは、少し困る」

「困る？ アスカさんがそういうなら、僕ももう言わないけど……なんで困るの？」

「不相応な肩書きほど、扱いに窮きゆうするものはない。貴公とて、脈絡なく身の丈に合わない境遇に置かれては辛かろう。

仮に私やヘステイアが貴公を『ご主人様』と呼び、奴隷の如く振る舞い始めたらどう思う？」

「それは……すつごく困るね。アスカさんにも神様にも、そんな真似はととてもさせられないよ」

「そういう事だ」

奉仕される場面を想像したのか微妙に顔を赤くしてベルは困った顔をする。「何か煙に巻かれた気がする……」と首を傾げる家族を一瞥して、アスカは地上へ続く螺旋階段を登る。ベルは少し慌てて続いた。

二人は他愛ない話をしながらバベルを出て、戦利品の換金のためにギルドへ向かった。昨日は数万ヴァリスにも及ぶ稼ぎを叩き出したため、何気に換金が楽しみなベルである。九割方アスカのおかげなので、貯蓄に回しているけれど。

ギルドに到着した二人は、早速換金所へ足を運ぼうとした。けれど朗らかに会話する二人の前に、一人のハーフェルフが立ち塞がる。ベルはその姿を目にした瞬間硬直し、アスカは平素の表情で疑問符を浮かべた。

そしてギルドのロビーに設けられた一室で、怒髪天を衝くエイナの前に二人は仲良く正座していた。

「……昨日ね、六階層でやたらモンスターを集める二人組がいたんだって。あんまりにも数が多くて他の冒険者は近づけなかつたって苦情が殺到したんだよ、びつくりだよね。」

それにね、こつちも二人組んだけど六階層を暴れながら走り回った冒険者がいたんだって。それがなんと、白髪で赤目の少年と、長い灰色の髪をした小人族らしいんだー。

「……………アスカさん？ これは一体どういう事かなあ〜〜？」

笑顔の裏に抑えきれない激情を蠢かせるエイナに、アスカは能面のような顔で思考する。どうやら大丈夫ではなかつたようだ。失敗したな、と適当な反省をして、アスカはこめかみをぴくぴくと脈打たせるエイナに暗い銀の瞳を向ける。

「どうもこうもない。ベルを教育するのに最善と判断した手段を行使しただけだ。私に疚しい処はない」

「〜〜〜っ！ きいみいはあつ！ よくもそんな罪悪感のない顔で潔白を主張できるねえっ！ あなたを信じた私が馬鹿だったよっ！」

一貫したアスカの無表情に言葉遣いの崩れたエイナの雷が落ちる。蒼白を通り越して真っ白になりかけているベルは、ぶるぶると体を震わせるばかりだ。しかし落とされた当の本人は堪えた様子もなく、平然と言葉を返す。

「信じてもらう必要がある感じなかつたからな。適当にはぐらかさせてもらった」

「ふざけないでっ！ ダンジョンでは命が懸かっているんだよっ！ こんな真似して、あなたもベル君も死んだらどうするのっ！」

「懸念は理解できる。だが、そこまで私の行動を知っているのなら逆もまた然りだ。」

私は多数のモンスターを相手取って生き残る程度の事はできる。当然、ベルを守りながらだ。貴公は私が極めて危険な行為をしたと思っっているようだが、今回ほどベルの安全が確立された状況もない。少なくとも、ベルが単独で潜ソクっていた頃よりはずっと命の保証がされていたらと自負している」

「だからって危険を冒していいわけじゃないでしょ!? 冒険して命を落とした冒険者がどれだけいると思ってるの!!」

とにかく、あなたの勝手な行動はこれ以上許しません! また今回のような事があれば最悪、ペナルティとして冒険者資格の停止も検討します! いいですね!」

「そうか。どうやら貴公とは見解が異なるようだ。ならば話は終わりだな、エイナ・チュール」

立ち上がってテーブルを叩くエイナの激昂もどこ吹く風と、アスカは立ち去る素振りを見せる。その前にエイナとアスカの間でおおろと視線をさまよわせるベルに言葉を向けた。

「ベル。また私の訓導を受けたければ言うがいい。私はいつでも引き受けよう」

「アスカさん、話を聞いてたのっ!? 勝手な真似は許さないとっ……」

「——話は終わりだと言った筈だ。エイナ・チュール」

暗い銀の眼光が、一瞬でエイナを貫いた。冒険者思いで有名なハーフェルフは、何の感情もなくひたすらに重いアスカの眼に硬直し、言葉を詰まらせる。

「不毛な問答は好まない。簡潔に、貴公に対する私の認識を言おう。」

エイナ・チュール。貴公はベル・クラネルに必要な「アトバイザー」
「なっ……!?!」

アスカの容赦のない言葉にエイナは絶句する。不満や憤りが全身に駆け巡り、表情に如実に表れる。

けれど開きかかった口から反論が飛び出る事はなかった。凍てついた太陽のような、虚偽のない暗い瞳が、それを許さなかった。

「貴公はただのギルド職員でしかない。できる事はせいぜい担当官くアトバイザーらいだらう。それは私でも担える役目だ。貴公の務めは、わざわざ貴

公に全うして貰うまでもない。

私はダンジョンでベルを守る。必要な教育も施してやれる。ギルドに蓄積された知識程度なら、既に頭に入っている。

故にエイナ・チュール。貴公はベルに必要な。もはや毒にも薬にもならず、まして私の邪魔をするのなら、薬ではなく毒に傾く。

そして邪魔立てする者に、私は決して容赦しない」

エイナの緑玉色の瞳が、エメラルド「灰」の暗い銀に汚染される。光を吸い、ただただ暗く、底無しの虚を見せつける双眸が、エイナの意識を闇に引きずり込んでいく。

呑み込まれる——大量に発汗し風鳴りのような呼吸を繰り返すエイナは、僅かに残った理性でそう思うしかなかった。喉から出てくれない言葉も、狂瀾し荒れた心も、全てが闇に溶けていく。

「——アスカさんっ!!」

それを既の所で押し留めたのは、悲鳴にも似たベルの声だった。アスカとエイナが同時に顔をベルに合わせると、臆病な彼はびくりと体を硬直させる。

けれどそこで止まりはせず、半ば涙目になりながらも、懸命にアスカへ訴えた。

「あ、あのっ……エイナさんは、僕のアドバイザーでっ……その、一か月も経ってないけど、初心者の方にすごく優しくしてくれてっ……厳しい所もあるけど、それで生き残れた事もあってっ……とっても、とっても助かったんです……!」

エイナさんに会えて、僕、嬉しかった……! 最初にギルドで会えた職員の方がエイナさんで良かったって、心から思ってます……!」

だから……だから、その……け、喧嘩はっ、しないでっ、くださいっ……!」

凍てついた銀を湛えるアスカの瞳に、ベルは真っ向から向き合っていた。臆病で、懦弱で、けれど心に折れない芯を持つベル・クラネル。人間らしい弱い心と真っ新たな思いを抱くその表情に、アスカは静かに、瞳に渦巻かせていた暗い何かを奥底へと沈ませる。

「……そうだな。私が浅慮だった。エイナ・チュールを必要とするか

どうかは、貴公が決めるべきだ。口を出すのも、本来なら憚はばかられる」
発していた威圧感を霧散させたアスカは、エイナに深々と頭を下げる。動悸を抑えようとするエイナは困惑するが構わず、アスカは静かな鐘のように言葉を紡ぐ。

「非礼を詫びよう、エイナ・チュール。すまなかつた。私には過ぎた物
言いだつた」

「えっ……あの、えつと……」

「とはいえ、すぐには受け入れられまい。私は貴公を否定したのだからな。

目を改めて、もう一度謝罪する。故にこの場は引き下がらせてもらおう」

無表情のアスカは呆然とするエイナにそれだけ言つてギルドの入口へ足を向ける。その前に一言だけ声を零した。

「選びたまえよ、ベル。せめて、悔いのないように」

言うだけ言つて、アスカは遠ざかっていく。髪飾りの光る灰髪を揺らして外へ消えていく小人族を見送つて、ハツとしたベルは慌ててエイナへ頭を下げた。

「す、すいませんすいません、エイナさんっ!? アスカさんは悪い人じゃないんですけど、時々ちよつと過激になる所があるつて言うかつ!? 家族想いなんですけど、度が過ぎる時があるだけなんですっ!!」
「……あく、うん。分かつた、分かつたからベル君、そんな申し訳なき
そうにしないで」

テーブルに額を擦りつけんばかりに上半身を落とすベルに、心に溜まつた鬱憤をとりあえずしまつてエイナは苦笑する。あの失礼な小人族はともかく、ベルが悪くないのは明白なのだから。

謝罪を重ねようとするベルを宥めたエイナは、立場が逆じゃないかと思いつつアスカが去つていったギルドの入り口を眺めた。もう姿の见えない灰髪の後ろ姿を幻視して、疲れたようにため息をつく。

「それにしても……あんな子だつたなんて思わなかつた。昨日会つた時は多少変だとは感じたけど、まともそうに見えたのに」

「アスカさんは……すいません、僕も正直分らない所が多くて。人

にあんな態度取った所も初めて見ましたし……」

「そうなの？ でも、ベル君の家族なんですよ？」

「血は繋がってないですけどね。僕が小さい頃、お祖父ちゃんが連れてきたのがアスカさんで……村で暮らしていた頃は、あまりしやべらない人でした。代わりに魔物とか動物とかにはほんとに容赦がなく、行動で示す人って感じでしたね。」

……あんな風なアスカさんを見たのは、オラリオに来てからです。きっと僕の事をお祖父ちゃんに頼まれたから、そうなったと思います……」

ベルはその辺りで急に静かになる。疑問に思ったエイナが顔を向ければ、郷愁の念を漂わせる悲しげなベルの顔が瞳に映った。さみしそうにするベルに、エイナは何も言えなかった。

少し居た堪れなくなったエイナは、ふとギルドの受付に視線を投げる。昨日登録したばかりのアスカの登録書は、まだエイナの机に残っている。

ベルと同じ身元と出身地、ファミリア、そして「灰」と記された名前以外空欄の羊皮紙。年齢すらも書かれていない一枚の登録書が、先程のアスカの態度も相まって嫌にエイナの猜疑心を刺激する。

（あの子の事……少し、探ってみようかな）

ベルの家族という事以外、何者なのか分からない人物。あまりいい成果は出せないだろうが、エイナはアスカについて調べようと心に決めた。

ギルドを出たアスカはすぐさま裏路地へ身を隠した。小綺麗な身なりと容姿の都合、アスカはそれなりに目立つ。だから人気のない場所へ行き、人目の途切れた瞬間、《静かに眠る竜印の指輪》と《佇む竜印の指輪》を装備し、「見えない体」を発動させる。

そして誰にも悟られる事なく悠々とギルドに戻り、受付の奥へと歩を進めた。並べられた職員の仕事机や厳重な警備の置かれた金庫室、重要書類の眠る書庫を通り過ぎ、神聖さを徐々に滲ませる暗がりへと

突き進む。

やがて最奥に辿り着き、地下へと続く階段を降りるアスカは、指輪と魔法を解除し——凍てついた太陽のような瞳を睫毛に隠す。灰”
となつて、『祈禱の間』へと足を踏み入れた。

「——来たか、灰”」

重く鳴り渡る声に四炬きよの松明の一つがバチリと火の粉を跳ね上げる。不死たる「灰”にはありふれた、その小さな身の裡に今も爆ぜる、火に焚くべられた薪の割れる音だ。

それ故か、ここは何処か記憶に重なる。不死の旅路に常にあつた『篝火』と似ているからか——それとも、『大神』と称されるギルドの『真の主』、ウラノスが眼前に孤坐するせいか。

脳を駆ける既視感への薄い興味を捨てた「灰”は、臆せずウラノスを銀の半眼に映す。

「例の「新種のモンスター」について、何か情報は掴めたか？」

「ああ。フェルズがやってくれた。仔細に興味があればあやつから聞くがよい」

「いや、いい。迷宮都市オラリオの底で何が蠢こうと、私には興味がない。

必要なのは、使命だけだ」

「そうか……では、新たな使命を命じる」

見上げる「灰”を見下ろして、ウラノスは厳かに天命を告げる。

「オラリオの地下水路を調査せよ。フェルズの予想が正しければ、そこに痕跡が残っている筈だ」

「その使命、承った。他に用はあるか？」

「フェルズが会いたがっていた。戻るまで待っていてくれ」

「了解した」

会話を終えた「灰”はウラノスの前で《螺旋の大剣》を取り出す。黒い燃え殻の痕が残る螺旋状の大剣を地面に刺し、左の掌から火を注ぐ。骨灰が何処からともなく吹き溜まり、『篝火』に火を灯した「灰”は、その場に腰を降ろした。

四炬の松明と『篝火』が炎の猛る音を散らす。ダンジョンへ祈禱を捧げるウラノスは、静謐な瞳で『篝火』に座る「灰”を見下ろす。

不死にとって『篝火』とはある種『祈禱』にも似ているという。先も見えず敵を屠り、殺され続ける不死にとって、それは故郷に似て、また束の間の休息なのだ。故にこそ、祈る神の在る不死はそこに祈禱を見出す。

あいにく「灰」に祈る神はいないようだが、この『祈禱の間』において『篝火』を灯す以上に「灰」が示せる祈りはない。これが「灰」のできる唯一の祈りの形なのだと、ウラノスは感じ取っていた。

「……「灰」、待たせたか」

しばらくして、階段とは別の隠し扉から黒衣の人物が『祈禱の間』に現れる。深く被ったフードの奥に白骨の体を隠す、フェルズ愚者を名乗る『賢者』の成れ果てだ。

「用は何だ、フェルズ」

「前回の報告で【ロキ・ファミリア】と接触したと聞いた。その後、彼らのホームに招かれたとも。どこまで話したか、教えてほしい」

どこか固い口調で尋ねるフェルズに、「灰」はすぐには答えなかった。やってきたフェルズに目もくれず、炎の揺れる篝火をただ見つめている。火に炙あぶられた薪が少し崩れ、バチリと火花を散らしてから、「灰」はようやく口を開く。

「私の素性、私の目的、その二つを彼らに話した。証明のために当時受けていなかった恩恵のない背を見せ、「ソウルの業」を実演した。示したのはそれだけだ」

「そうか……依頼については話していないのか」

「ああ。【ロキ・ファミリア】は私自身に気を取られてなぜ『深層』にいたのかを失念しているようだ。いずれそこに疑念を覚えるだろうが、すぐにではない。」

【ロキ・ファミリア】に関しては、私が今しばらくの餌になるだろう」
「分かった、頭に入れておこう」

フェルズが頷くようにフードを揺らし、沈黙が場を支配する。篝火に白い顔を照らされる「灰」は、変わらず銀の半眼に揺れる炎を反射させ、そのまま静かに言葉を落とす。

「用はそれで終わりか、フェルズ」

「いや……………「灰」、今日はまだ時間はあるか？」

「ああ。夜にはホームに戻るが、それまでなら此処に居てもいい」

「それじゃあ、少し付き合ってくれ。……そろそろ私も、君について知っておきたい」

纏う空気を崩さずに、フェルズは「灰」へ言葉を落とす。幼い少女の成りをした「灰」は、感情の抜け落ちた表情で篝火を眺めながら唇を動かす。

「貴公は私を嫌っているものと思っていたが」

「嫌ってはいないさ。得体が知れなかったから警戒していただけだ。私が言えた義理ではないがね。だが今は、それ以上に君という『未知』に興味がある。

ウラノスから聞いた話だけでは物足りないんだ。特に君の扱う【魔術】には強く惹かれる。一魔術師^{メイジ}として、君に教えを乞いたい。どうだ？」

フェルズの要望に「灰」は少し口を閉ざした。篝火を眺め、記憶を反芻し、身じろぎをする。

「今は私も主神を崇める身だ。語れる事は多くない。まして【魔術】に關しては私の安全のため口止めもされている。現状では一端すら教えられない。

故に私がヘステイアから、信用できる者に情報を開示する許可を得るまで待ちたまえ。我が主神は寛容だ、そう遠くない内に貴公の望みは叶えられるだろう」

「そうか……！ それは楽しみだ！ 君が魅せてくれたソウルの業も充分に私の好奇心を刺激してくれたが、君の【魔術】はそれ以上だ！

ふふふつ——竜の二相、黄金の魔術、結晶の秘法……！ ああ、耳に挟んだ僅かな単語でさえ私の心を捉えて離さない……！ 【魔術】はきつと、私が想像もし得なかった新たな世界を見せてくれるだろう！

ふふつ、ふははつ、ふははははははつ!! ——ハッ!？」

いつの間にか両手を広げて高笑いを繰り広げていたフェルズは、突

き刺さる一柱と一人の視線に骨の体を硬直させる。

ウラノスは何も言わなかった。相変わらず厳然と神座に坐し、全くもって真面目な顔でフェルズを見下ろしている。「灰」は半分降りたまぶたの下で銀の瞳を冷たく光らせ、篝火から眼を離し無感動にフェルズを見上げている。

失笑も苦笑もなく、至つて真剣に眺めてくる両者にフェルズはゆつくりと両手で顔を覆い、深々と崩れ落ちた。

「……………いっそ笑ってくれ。あるいは道化のように扱ってくれ。こんな空気に私は耐えられない……………」

「何か笑う要素があったか？ 私には分からない」

「フェルズよ、お前の性格は重々承知している。未知の魔法を持つ者が目の前に居るのだ、少しばかり感情的になるのも致し方あるまい」
「……………君たちが人を笑うような神や人でない事は分かっていたが……………今ばかりはそれが恨めしい……………」

団子のように丸まったフェルズは、巷で通り名となっている《幽霊》ゴーストのように力なく囁いた。

あれからフェルズが立ち直れなかったため、「灰」はウラノスとの会合を早々に切り上げた。元々は大神ゼウスに与えられた最後の使命の一つだ。優先度は三番目といったところである。

ギルドの奥からロビーに戻った「灰」はベルがまだエイナと共に居るのを確認すると、一旦ギルドから出て適当な裏路地で《見えない体》を解除し、ギルド入口付近の壁に背中を預ける。

その内ベルが出てくるだろうと、入り口で待ちの姿勢を見せる「灰」は当然と言うべきか出入りする人間によく目立つ。特にベルと同じ新人冒険者キや下級冒険者は露骨に白い目を向けてきた。

昨日今日と六階層のモンスターを一ヶ所に集め独占したのだ。その上昨日は六層中を暴れながら駆け回った。冒険者どうきょうしやにすればいい迷惑だろう。ギルドにも報告が多数いつているようだ。以降も同じ事を繰り返せば動き辛くなるのは容易に想像できる。

予想はできた事だ。しかし「灰」が【パワーレベル経験値】稼ぎを敢行しない理由にはならなかった。世間体など「灰」が気にした事はなく、まして不死たる「灰」が稼ぎに効率を求めない筈がないのだ。

欲するならば奪い尽くす。不死とは得てしてそういうものである。(とはいえ、これ以上続けるのも無理があるか。必要以上に害意を集めるのも面倒だ。ベルが上層深部に至るまでは、適切な方法に切り替えよう)

数の暴力や不利な状況を体感できないデメリットもあるしな、と「灰」が考えていると、白い髪がギルド入口からひよつこりと顔を覗かせる。深紅の瞳をきよろきよろと動かして「灰」を発見したベルは、嬉しいような気まずいような複雑な表情を見せた。

「アスカさん……」

「エイナ・チュールとの話は終わったか？ ベル」

「う、うん、一応はね……アスカさんが入口で待つてるって聞いたから、エイナさんが気を利かせてくれたんだ」

「そうか」

一つ返事をして黙するアスカに、ベルは会話が続けられず狼狽し、心苦しくなる。エイナの名を出しても無反応という事は、数時間前のアスカの台詞は紛れもない本心という事だ。それがベルには心苦しく、とても悲しい。

吹雪の山の銀月のようなアスカの冷淡さと苛烈さを肌で感じたのはオラリオに来てからだ。村ではあまり喋らず、行動によって心を示していたアスカには、けれど暖かな人間味があった。

しかし今は、どうだろう。アスカの知らなかった一面を見て、距離が空いてしまったようだ。すぐそばに居るのにアスカが遠くにいるようで、ベルにはとても切なかった。

「どうかしたのか？」

「……何でもないよ、アスカさん」

「それならいい。帰るか、ベル」

「うん……」

ベルの胸中を知ってか知らずか、アスカはトコトコと歩き出す。そ

の後ろ姿をベルは黙って追いかける。

ひとしきり、喧騒だけが二人を包む。すれ違う巫人たちの笑い声、活きの良い店番の呼びかけ、オラリオの過ぎ去る今が遠い黄昏に消えていく。

落ちる夕日に焼かれながら、アスカとベルはメインストリートを外れて廃屋の目立つ方面へと歩を進めた。人氣がまばらになるこの辺りで、ベルは意を決してアスカに話しかける。

「あの、アスカさん……エイナさんの事なただけど……」

消え入りそうな眩きにアスカはぴたりと立ち止まった。赤く照らされる灰髪が揺らめき、銀の半眼がベルを捉える。灰の睫毛に隠された瞳の暗さに竦みながら、ベルは決して視線を切らない。

「ベル。貴公はどうしたい？」

「……僕？」

「ああ。貴公が何を望むのか、それが最も大切な事だ」

どこか観察するような目つきのアスカは狭い歩幅でベルに近づく。ギルドの支給品の部分鎧を纏っただけのベルの、腹のあたりまでしかない身長のアスカは自然とベルを見上げる形になる。

「エイナ・チュールを優先するのか、私を優先するのか。あるいは貴公の意志を優先するのか。何でもいいが、選ぶのは貴公の意志でなければならぬ。」

ベル。私は今も貴公にエイナ・チュールは必要ないと考えている。アドバイザーの務めなら私でも果たせる、貴公を心配し待つ者ならへステイアがいれば事足りる。

だからエイナ・チュールは必要ない。心無い意見であるとは自覚しているがな」

「……僕も、アスカさんのそういうところは、その……」

「嫌いなのだろうか？ 分かっている。貴公は優しい男だ。無意味に他人を貶め、敵を作ろうとする私を受け入れられないのも仕方ない。」

だからこそ、貴公が選ばねばならないのだ。私か、エイナ・チュールか。関係が円滑でないのなら、切り捨てるのも一つの選択たりうる」

「……僕には、できないよ……」

アスカを見下ろすように俯くベルの、肉刺まめの目立つ拳が強く握られる。悲痛に歪むベルの顔から、嘆きのように言葉が吐き出される。

「どっちかを選ぶなんて、僕にはできない……！ アスカさんも、エйнаさんも、大事な人なんだ！ だから切り捨てるなんて、そんな悲しい事言わないでよ！」

「どちらも選ぶ、という事か。強欲だな、貴公」

感情を高ぶらせているせいか、涙を溜めるベルにアスカは深く瞬きをし、柔らかに相貌を崩した。

「分かった。貴公がそれを望むなら、私もエイナ・チュールとの関係の改善を目指そう。」

「必要ないなどとはもう言うまい。貴公の大事な人というのなら、私にとってもそれと同義だ」

「……ごめん、アスカさん……」

「謝るな。我らは、家族だろう。本音を語り明かさずしてどうする」

「……うん……ありがとう……」
押し寄せる感情に耐えきれなくなったのか、頭を落とすベルの瞳から涙があふれた。頬を通じ地面に引かれる涙の糸に、アスカは「しようがない子だ」と嘆息と笑みを零して、ベルの頭に精一杯両手を伸ばし、抱き寄せる。

「全く……私が悪いとはいえ、泣いてしまうとはな。貴公は本当に涙脆い」

「だって……だって……アスカさんが知らない人みたいで、遠くに行っちゃうんじゃないかって……またいなくなっちゃうんじゃないかって、そんな気がしたからっ……！」

「……そうだったな。家族に置いていかれる痛みは、人一倍分かっていたな。すまない、ベル。」

私はどこにも行かないよ。貴公と私は、家族だ。貴公の知る私も、知らない私も、いつかきちんと話そう。ずっと最後、死が我らを分かつまで、貴公と共にいられるように。

私とベルの、約束だ」

「うんっ……うんっ……」

膝を崩して寄りかかるベルを受け止めて、アスカは首元を抱いて背中を撫でる。日が落ちて魔石灯が明るく光る中、ベルが泣き止むまでアスカはそうしていた。

やがて泣き止んだベルは、みつともなく泣いてしまった羞恥心で赤くなりながら、アスカが差し出したハンカチを受け取る。

「ご、ごめん、アスカさん……服汚しちゃって……」

「気にするな。この程度の汚れならすぐにソウルへ溶けてなくなる」

ベルの涙やら何やらで汚れたアスカの服は、話している間にも汚れが徐々に消えていく。ベルが確認した時にはもうほとんど残ってなかった汚れに、ベルは何度目かも分からない感嘆の息をついた。

「ほんとすごいよね……アスカさんの『ソウルの業』って」

ベルがそう呟いた瞬間、柔らかかったアスカの雰囲気が一気に冷たくなる。じろりと空を切る銀の瞳がベルの肩を跳ね上げさせた。アスカは爪先立ちをして、軽い手刀をベルの頭に落とす。

「あう……」

「ベル。みだりにその呼称を口にするなど教えなかったか？」

「ごめんなさい……」

痛くないが心に重くのしかかる一撃にベルは消沈する。アスカは軽く息をつき、念を押すように説明する。

「私の力が知れ渡ればよからぬ連中の興味を惹く。私は頓着しないが、ヘスティアは危険と判断した。だから広まらぬよう私に強く言い含めたのだ。」

共にダンジョンに潜る手前、貴公に話さないわけにはいかなかったがな。貴公は嘘をつけん。故にせめても、自分から口にしてはならない。我らの安寧のために、それがヘスティアの神意なのだから」

「うん……気を付けるよ。神様が僕達を心配して言ってくれたんだよね」

「そうだ。……それにしても、ヘスティアは何をしているのだろうか」「昨日も帰ってこなかったし……でも、今日はもうホームに戻ってるかも」

「なら、少し急ぐか」

話しながら、二人は帰路を消化する。地平線を照らす朱色の輝きはもう完全に消えて、星の輝く夜空に月が昇る。時折星を眺めながら歩いていると、不意にベルが挙動不審になった。キョロキョロと周りを見渡すベルに、不審に思ったアスカが尋ねる。

「どうかしたのか？」

「……嫌な視線を感じただけ……」

「視線？ 私は特に感じなかったが」

「……気のせいかな。最近、誰かに見られてる気がするんだ……」

ベルの言葉にアスカは周囲を見渡す。が、廃墟に潜む幾ばかの生命の気配しか感じ取れなかった。アスカはわざとらしく肩をすくめて、ベルの背中を叩く。

「周囲にそれらしい者はいない。ならば、気にしても仕方ない。ホームへ帰ろう」

「……そうだね」

メインストリートを外れたやや暗い夜道を二人は歩く。そんな彼らを見下ろすように、バベルは高々と突き立っていた。

翌日。オラリオは非常に大きな活気に満ちていた。

モンスターフェア

怪物祭。【ガネーシャ・ファミリア】が主催する、冒険者がモンスターを調教する姿を公の場で見られる数少ない機会の一つ。

普段見る事のないモンスターとそれに立ち向かう冒険者の姿を一目見ようと、都市内外から多くの人間、巫人が参加する怪物祭は、オラリオの空気を普段以上に熱くしていた。

そんな喧騒と熱気に包まれた祭り一色の東のメインストリートを、フレイヤは大通りに面する喫茶店の二階から眺めていた。

全身をゆったりとした紺色のローブで隠しているにも関わらず、隠しきれない『美』によって店内の視線を一身に集める女神は、通りを埋め尽くす下界の子供たちを一つ一つ丹念に観察している。

そうしていると、不意に、がたりと。窓際の四人席に座っていたフ

レイヤの正面に、誰かが現れた気配があった。

「……ロキ？ 挨拶もなしに座るなんて、貴方らしく……」

通りから目を離れたレイヤの言葉は、途中で途切れてしまう。目の前に座った存在がどうしてここにいるのか、一瞬分からなかったからだ。

全身を黒金糸の衣装で包んだ小人族^{バルウム}。炎によれ、見るからに古ぼけたそれは、どこか火の揺らめきに近い神聖さを有している。レイヤをして少し目を瞠るくらい、その衣装は奇妙であり貴重であった。

「——私の家族に、無遠慮な視線を投げかける者がいる」

だがそれは、その衣装に包まれた小人族^{バルウム}の『魂の色』によって完全に掻き消されている。黒金糸のフードの奥、深く被った薄闇の中から、暗い銀の眼光はいつそ禍々しいまでにレイヤを貫いていた。

その凍てついた太陽のような瞳に当てられて、けれどレイヤは抱擁する女神のように極上の笑みを浮かべる。

「そう。それが私と何か関係があるのかしら？」

「とぼけるな。貴公だろう、レイヤ」

「ふふふっ。子供たちに呼び捨てにされるなんて久しぶりね」

バチリと、何かが爆ぜる音が聞こえる。魔窟の底の闇のようなフードの奥から放たれる暗い声色に、レイヤの唇は楽しげに弧を描く。

同性でさえ見惚れてしまう女神の微笑みは、だが不死たる“灰”には通用しない。

「目的は何だ。なぜ私の家族を観察するような真似をする」

「あら、分からない？ 女が男を目で追いかけるなんて、とてもありふれた事だと思うのだけど」

「……そうか。貴公は『美の女神』だったな」

擦り鳴らされる古い鐘のような声に、レイヤは正解とばかりに目を緩ませる。同時に、“灰”からごく密やかに滲み出ていた熱が消える。

それに気付いたのはレイヤだけだ。店内にいた他の客たちは少しばかり冷えた空気に肌を無意識に擦る程度だった。

「それならばいい。邪魔をしたな」

「あら、もう帰るの?」

「ああ。もう用はない」

言い捨てて、[〃]灰[〃]は無表情に立ち上がる素振りを見せた。きよとんと小首を傾げるフレイヤが尋ねると、素っ気ない返事が返ってくる。

そのまま立ち上がるとうする [〃]灰[〃] をフレイヤは優しい笑顔で制した。

「そう? 私にはまだ用があるのだけれど」

「初対面の私にか?」

「ええ、そう。だって貴方、一方的なんですもの。急に来ていただけして帰るなんて、つまらない子供の典型よ?」

私は貴方の質問に答えた。なら、今度は貴方が私の質問に答えて頂戴? それで初めて釣り合いが取れる。そうでしょう?」

「……一つだけ、答えよう。私の聞きたい事も一つだった」

立ち上がりつつあった体を椅子に戻す [〃]灰[〃] にフレイヤは色香が飛んで見えるような蠱惑的な笑みを浮かべた。それを変わらぬ無表情で眺める [〃]灰[〃] に、フレイヤは艶めかしい舌を動かして話す。

「貴方の家族——今日は何処にいるのかしら」

「………へスティアは知らない。ベルならば、怪物祭を見に行くよう勧めた。私の知る範囲ではそれだけだ」

「ありがとう。とつても参考になったわ」

満面の笑みを浮かべるフレイヤに重い息を吐いて、[〃]灰[〃] はその場から立ち去った。名も知らぬ黒装束の小人族^{パルウム}を見送って、フレイヤは窓の外へ視線を戻す。

「……駄目ね。あの子の魂、大き過ぎるわ。あれだけ近くにいて片鱗しか見えないなんて、自信が無くなっちゃいそう」

心にもない事を口にして、フレイヤは喫茶店から出て人の波に紛れる [〃]灰[〃] をじっと眺めていた。その表情にはほんの僅かにだが、困惑が混じっている。

神は『魂』の在り様から下界の子供たちの虚言を判別するが、フレイヤは更に『魂の色』を見通す。心の在り方や才能、潜在能力まで見

透かす女神の慧眼は、つい先日も新たな、見た事もない魂の輝きを発見したばかりだ。

しかしそれが、あの小人族バルウムには通じない。見えないわけではなく、見え過ぎる。おそらく子供たちからも見える程に『魂』を剥き出しにしているあれば、元から見える神にすれば『魂』にゼロ距離で眼球を突き合わせているようなものだ。

人の表情から感情を見抜くのは容易い。だが顔の表面の産毛一本から読み解けと言われれば、神であっても「馬鹿じゃねーの？」と中指を立てる事間違いない。

ましてあの小人族バルウムの『魂』はあまりに巨大で、その『色』も万象の嵐のように変化する奇妙な代物だった。人ごみに消えて見えなくなった『灰』を幻視して、フレイヤはふう、と透明な息をつく。

「知らなかったわ。見えないって、思ったよりもつまらないのね。もう少し興味を惹くものだと考えていたけれど……こんなに味気ないなんて。」

あの子の言っていた事も本当かどうか分からないし、どうしようかしら」

細く滑らかな手を頬に当てて、フレイヤは一人呟く。少しばかり考えて、やはり興味が無いせいか思考が纏まらず、何と無しにメインストリートを埋め尽くす子供たちを眺めていたフレイヤ。

そんな美の女神に、金の少女を引き連れた朱色の髪の悪戯者が気安く声をかけるのだった。

昨晚、ヘステイアは結局帰ってこなかった。二人だけの夕食を取ったベルとアスカは、翌日の予定について話し合った。

アスカにはウラノスから託された使命がある。そのためベルと行動できない。単独でダンジョンに潜らせるのも手だが、ベルの見識の狭さを危惧したアスカは怪物祭の見物を勧めた。

「ベル、貴公はあまりに世界を知らない。明日はダンジョンに行かず、怪物祭を見に行くといい」

「アスカさんはどうするの？」

「私には所用がある。貴公には付き合えない」

こんな会話を交わして、アスカは寂しそうにするベルに怪物祭の簡略な概要を伝えた。これから出会う事になるモンスターの情報を得る良い機会であるとも。

最終的にはベルの自主性に任せるが、するべき提案を終えたアスカは、ホームでベルを別れたのち、フレイヤとの邂逅を経て地下水路の入口に姿を見せていた。

出で立ちは今までと打って変わって重装を纏っている。膝まで届く暗色に近い真鍮色のブーツに黒いズボン、腰の辺りで二股に裂けた青い外套の上に重厚な鎧を着込んでいる。肩を覆う灰色の毛皮が特徴的な防具だ。

戦神を信奉した獅子騎士団の装束を装備したアスカは、兜だけは身に着けない。頭部の守りなど、不死には不要である故に。

代わりに長い灰髪を留める、半分に欠けた冠に似た髪飾りを後頭部につけている。長い不死の旅路の中、常にアスカと共にあつた数少ない装飾を光らせ、アスカは地下水路へと侵入した。

「……成程。匂いが濃いな。フェルズの予測は当たりか」

薄暗い地下水路を進むアスカは一人呟く。

足取りに迷いはない。複雑に絡んだ水路の端を規則正しい足音で歩いていく。事前に地図を頭に入れているが、それ以上にソウルを求めめる嗅覚がアスカを目的地へと導いていた。

「この先か」

古びた両開きの門には巨大な錠前が掛かっている。自身の器に渦巻くソウルの中から『万能鍵』を取り出したアスカは、容易く開錠して門を開く。

短い階段を降り、浸水した足場を進むアスカは、一層色濃くなるソウルの匂いに銀光漏れる暗い瞳を鋭く研ぐ。やがて大きく崩れた壁面に辿り着き、その奥にある貯水槽へとアスカは足を踏み入れた。

「……………」

周囲を見渡すアスカの喉から声帯機能が削がれていく。言葉は不

要、ずるりずるりと這いずる音が、明確な敵意と共に貯水槽を満たす。古い既視感が、アスカの脳裏に過ぎつた。冷たい谷、法王の獣が守る大主教の座す貯水槽。守り手の契約者の姿をまぶたの裏に切つて捨て、アスカは——“灰”は静かに、武装をその手に錬成した。

極論を言つてしまえば、神とは殴り殺せるものである。

それは不死たる“灰”のみならず、下水のネズミから栄えある太陽の主神までもが知る厳然たる事実だ。命を肉体の外に持つ存在でない限り、拳によつて殺し切れないものは存在しない。

それは“ソウルの業”によるものか、全ての生が“魂喰らい”たる所以か。あるいは『最初の火』が生と死を生み、世界が分かれたる事によつて真なる不死が存在しえなくなったと、原罪を探究した賢者は嘯いた。

まあ、原理など“灰”にはどうでもいい。重要なのは、如何なる相手であろうとも攻撃とは通じるものであるという一点のみ。

どれ程固い外皮であろうとも、完全にダメージを防ぐ事はできない——突っ込んでくる巨大蛇のような食人花を《セスタス》で受け流した“灰”は、外皮の隙間に《物干し竿》で致命の一撃を叩き込む。

《スズメバチの指輪》によつて強化された一撃は容易く黄緑色の胴体を貫通し、異様に長い刀の先端が露出する。瞬間、それは振り抜かれ胴体の半分を切り裂き、返す刀は閃光となつて食人花を両断した。鈍重な音を立てて落ちる首と、体液をまき散らしのたうつ胴体。それらを見無視し、突撃してくる他二匹へと対応する。

《セスタス》をソウルに溶かし、取り出したのは岩のような大盾。“灰”の幼い肉体にあまりに不釣り合いな《ハベルの大盾》は、その巨岩を彫つて形作られた威容で食人花二匹の突撃を防いだ。

“灰”の体が僅かに浮き、数M後退する。そのまま更なる追撃を加えようとする食人花より早く、“灰”は《レドの大槌》を高々と振り上げていた。

尋常ではない膂力と持久力を誇る“灰”ならば、微塵も動かずに食

人花を受け止める事はできた。そうしなかつたのは、既に持ち替えていた巨大な大槌に岩を呼び込むためだ。

岩塊が寄り集まった《レドの大槌》が食人花が避ける間もなく振り下ろされる。巨大な極彩色の花弁と醜悪な口腔をたやすくひき潰し、貯水槽の床に絶大な地割れを引き起こす一撃は、凄まじい勢いで散乱する岩塊によって周囲の石柱ともう一匹の食人花に多大な損傷を与えた。

そして“灰”は振り下ろした勢いそのまま飛び上がる。空中で武装を《流刑人の大刀》に変え、両手に持ち三度回転、岩塊の影響で蠕動する食人花の首を断頭台のように断ち切った。

十秒に満たない攻防は、無傷の“灰”と三匹の食人花のモンスターの死骸という決着を生んだ。《レドの大槌》によって頭をひき潰された一体は、今になってびくりと長軀の胴体を跳ねさせ、灰となる。

完全に死亡したのを確認した“灰”は、手にする大曲剣を器に戻す。そのまま魔石を抉り出す作業に移った。

頭を叩き潰したモンスターが灰になったという事は、その辺りに魔石があるという事だ。残り二匹の落ちた首に近づき、唾液と体液の垂れる口腔に手をかけ、上下に引き裂く。食人花の頭の上半分を引き千切った“灰”は、丁度露出した魔石を引き抜き、死体を灰に変えた。

もう一つの首も同じように魔石を引き抜いた“灰”は——次の瞬間、地面から弾けるように飛び出てきた無数の触手に貫かれる。

右眼窩、首、右肩、左前腕、胴体に五か所、右脚に二、左足に一。合計十二本もの触手に貫かれ、穴を開けられた“灰”は——だが即死ではない。

無事な左目を動かし、臍の断たれた左腕に《薄暮のタリスマン》を握り、【生命狩りの鎌】を発動させる。

断固たる祈りによって発現した幻の鎌は、“灰”を貫く触手の群れを斬り裂き、生命力を奪い取る。僅かに回復した“灰”は着地と同時に距離を取り、触手の主を警戒する。

その間にも体には穴は開いたままだが、“灰”は頓着しない。たかが

脳や内臓に無数の穴を開けられた程度では、不死は死なないのだ。

不死の肉体は常人より脆い。それは死して灰となり、灰から復活するためか、巨大な武器を軽々と振り回す膂力に耐える事はできても、簡単にネズミ程度に齧り取られてしまう。命の外、攻撃を完全に断つ盾でもなければ、どんなに重厚な鎧を纏つてもネズミの歯とて不死を殺す。

複数の敵に囲まれば殺し尽くす前に殺し切られる。そんな死に様は日常茶飯事だ。不死が最も恐れるべきは強大な敵や初見殺しの罨ではなく、徒党を組む雑兵と落ちれば死ぬ高所。『灰』を筆頭とした不死にとつてそれは常識である。

だが逆に、死に切つていないのなら肉体の損傷など大した障害にはならない。たとえ竜狩りの大矢に頭を打たれようと、踊り子の炎剣に貫かれ臓腑を焼き尽くされようと、古老の結晶魔術に血肉を抉られようと——死んでいなければ、不死は何の問題も無く活動できる。

出血を強いる特殊な武器でなければ、失血死すらしない。八割がた失った脳髓で物を考え、弾け飛んだ心臓は脈々と血液を全身へ流し、背後から背骨と臓器を抉り飛ばされながら走り回り、千切れかかった手足が全力で得物を振るう。

不死の戦いとは、おぞましいものだ。まして不死同士の戦いを見れば、誰もが思うだろう——呪われた不死は世界の終わりまで、牢に繋がなければならぬ。

かつてそうやって牢に繋がれた不死の一人である『灰』は《エスト瓶》を取り出し、一度口に含んだ。途端、残つていた触手の先端が体からずり落ち、優しい黄金色の輝きが『灰』を瞬時に修復する。

篝火と共に不死の旅路にある《エスト瓶》は不死の秘宝の一つだ。一説にそれは篝火の灰と熱をエストに変え蓄えるときれ、飲めば僅かな一瞬、篝火の熱に当たるのと同等の効果を得られる。肉体を一時に灰と化し、傷付いた箇所を回復するのだ。

篝火に集う灰は復活を諦めた不死の成れ果てという。ほとんどの篝火にはそれを守った火防女の灰も混じっており、故に不死を助けるとも。《エスト瓶》はその遺志を汲む、貴重な品だ。

穴の開いた鎧もソウルによって編み直されている。体勢を整えた
“灰”は奇襲に対応するため《双蛇のカイトシールド》を構え、空いた右手に《輪の騎士の槍》を持つ。

触手を警戒した迎撃の姿勢だが、敵の居場所は既に感知していた。地に蠢き“灰”を貫いた触手の群れが、その宿主の場所を教えてくれる。“灰”は体を大きく後ろへ引き絞り——往時の姿、火の封を施された燃え盛る黒槍を投擲した。

静寂の後、地中から爆炎が吹き上がる。変わらず地下の食人花に命中した《輪の騎士の槍》が残り火を燃え上がらせ、モンスターの胴体を残らず焼き尽くしたのだ。

轟音が席卷し、貯水槽が振動する。多少地上にも伝わったかもしれないが、この程度は問題ないだろう。《輪の騎士の槍》を使い捨てた“灰”は食人花と壊れた槍のソウルを吸収して、残敵がいなか確認する。

(……いくつかソウルの気配が上に行った。地上に向かったか)

【敵意の感知】によって現れた巨大な赤眼の幻影が上に飛んでいくのを見送って、“灰”はその場を後にしようとする。が、立ち止まり、細く白い指を耳に添えて、水晶の耳飾りを取り付けた。

「何の用だ、フェルズ」

『“灰”か。今どこに居る?』

「地下水路の奥、貯水槽に居る。ウラノスからの使命を果たす途中だ」
『そうか……すまないが、そちらは一旦中止してくれ』

フェルズの要請に“灰”は僅かに眼を細める。

「何かあったのか」

『ああ、緊急事態だ。怪物祭のために捕獲されていたモンスターが逃亡した。数は九、市民に被害は出ていないが時間の問題だろう。』

急ぎ『祈禱の間』に“転送”して、対処に当たってくれ』

「……了解した。それと悪い知らせだ。地下水路に例のモンスターに近しいものがいたが、地上に向かった」

『何だどっ!? くそ、厄介事が重なったか……! “灰”、急いでくれ!』

「ああ」

オクルス
眼晶が聞こえる焦りの見えるフェルズの声に答えて、
「灰」は今度こそ貯水槽を後にした。

「灰」には盗賊として振る舞える程度の技量と敏捷性はある。オ
ラリオの建築物や外壁程度なら乗り越えられるし、バベルの外壁を
辿って頂上に辿り着く事もできるだろう。

だが「灰」は、というより不死は往々にしてそういった派手な動き
を好まない。純粹に危険だからだ。

道なき道を進む、というのには不死の常道ではあるが、実際にはなる
べく整備された道を通ろうとする。足場の悪い場所で戦うリスクを
冒す必要はないし、安全な昇降機エレベーターやはしごがあるならそちらを選ぶの
は当然だ。

空中を飛び跳ねて進むにしても弓や翼を持つ敵の恰好の的になる。
「灰」として【魔術】などの遠距離攻撃を主体にしている場合でない限
り、迂闊に中空へ身を投げたりしない。段差を無理に登ろうとした不
死が敵に襲われ、落下したところを罠り殺しにされたなどよく聞く話
だ。

だから【帰路】で『祈禱の間』に転送した「灰」が歩いて移動しよ
うとするのは当然の帰結だった。しかしフェルズの急かす声が眼晶
から響くため、やむなく盗賊の真似事をしていた。

重装を解き、東の間者の黒装束、影の姿となった「灰」は、
アンファイテアトルム
『円形闘技場』の高所に陣取り、《鬼討ちの大弓》を構えていた。《霧の
指輪》の効果で「灰」の姿は地上からはほとんど見えない。

片足を前に突き出し、深く曲げたもう片方で体を支える。狙撃の姿
勢をとる「灰」の体格では大弓は本来扱えない代物だが、腕の長さを
ソウルで補強し、縦ではなく横に構える事で使いこなしている。

矢を番える指に《鷹の指輪》を嵌め、《ドルゴーの帽子》の一部、黒
布の垂れる片眼鏡モノクルを左目にかけた「灰」は、銀の瞳で狙いを定め引き
絞った弦を手放した。

撃ち出された《鬼討ちの大矢》は空気を裂いて飛翔し、遠い路地で暴れるモンスターの胸部を貫く。魔石を破壊されたモンスターは断末魔を上げる事もできず倒れ、灰となる。

「灰」は続けざまに二射、三射と弓を引く。その度に空気を裂く音が轟き、モンスターが魔石を砕かれ崩れ去る。

「……む、あれは……」

都合五射を放ったところで、「灰」は動きを止めた。片眼鏡によって強化された視界に映るのは、『風』を纏いモンスターを斬り裂きながら疾走する金の少女。

「アイズか。【ガネーシャ・ファミリア】、もしくはギルド職員に協力を要請されたか、あるいは自主的な殲滅か。どちらでもいいが、この状況では有り難い」

凄まじい速度で駆け回る少女は瞬く間にモンスターを屠っていく。逃げたモンスターは九、「灰」が倒したのが五、残りはアイズに任せたいだろう。

大弓を青白い光に変えて立ち上がった「灰」は、小さな破砕音を耳にした。遠くを見遣れば、地下水路で相手をしていたモンスターとよく似た黄緑色の長躯が暴れ回っている。

「……丁度良い。使命の完遂に戻らせてもらおう」

一つ瞬きをして、「灰」は左手に《嵐の曲剣》を顕現させる。神を追われた長子の友、『嵐の王』を冠する古竜のソウルより錬成された曲剣は、片刃の刀身に風の力、古竜の嵐を宿している。

「灰」が一度刀身を振れば、局地的な嵐が「灰」の体を包み、浮かび上がらせた。アイズが『風』でそうするように、今まさに花を咲かせた蛇のようなモンスターに狙いを定め——空を駆ける一条の雷のように、「灰」は嵐の矢となって『円形闘技場』から放たれた。

食人花のモンスターが触手によってレフイーヤを傷付けた直後、アイズは花開こうとしていた黄緑色の頭部を斬り捨てた。

上空には既に敵を穿つ「眼」が居たため、その眼の死角になり得る

場所を走り回っていたアイズは、三匹のモンスターを討ったところでレフイーヤが攻撃を受ける瞬間を目撃、すぐさま急行しこれを討ち倒したのだ。

レイピアを構え周囲を警戒し、ほんの一瞬だけ『円形闘技場』へ意識を向ける。ここからでは小さく見える闘技場の外周部、街を俯瞰できる天頂部分の一角に、おそらく今も『灰』の姿があるだろう。

『灰』を発見したのはギルド職員から事情を聞かされ、ロキの一計を実行しようとした時だ。高所に登ろうと上を向いたアイズに、不鮮明ながら『灰』の姿がちらついていた。アイズは驚き、ロキにそれを伝えると訝しげに目を薄く開いていた。

なぜ『灰』が上にいるのかと疑問を覚えている内に、『灰』は矢を放ちモンスターを撃ち抜く。行動の理由を察したアイズは、ロキに促されて高所から見えない死角を探索したのだ。

(……後で、話ができるかな……)

そんな思考を僅かな時間浮かび上がらせて、アイズはレフイーヤへ駆け寄ろうとする。しかし微細に地面が揺れ、三体のモンスターが隆起した石畳から出現する。

現れる毒々しい極彩色の花。醜悪な口腔を三つ並べるモンスターに、アイズは応戦しようとして、次の瞬間レイピアが砕けた。

アイズと、その場にいたティオナ、ティオネが声を失う中——竜の嵐が、不死と共にやってくる。

「——！【吹き荒れる】！」

大気を巻き込んで噛み砕く嵐の音に、アイズはいち早く気付いた。迫り来る破壊の権化に金の双眸を見開き、『風』を強く纏って三匹のモンスターの包囲網からレフイーヤへ向けて離脱する。

直後落ちてくる嵐の一撃。轟音一閃、荒れ狂う嵐は周囲の空気を大いに揺るがし、石畳を根こそぎ剥がし、怪物祭のために増えていた出店の屋台を吹き飛ばす。

「うわっ、なにこれっ!？」

「風!? でもこれ、アイズの魔法じゃないっ……!？」

ティオナとティオネが吹き荒れる嵐に耐えながら叫ぶ。アイズも

レフイーヤが飛んで行かないよう押さえながら、肌を舐る嵐の力に瞳目していた。

やがて大気に平穏が戻り、ぼたぼたと黄緑色の何かが降ってくる。それがバラバラになったモンスター^の残骸だと知るとアマゾネスの二人は嫌悪の声を上げた。

「うへえー、ばつちい」

「気持ち悪いわね……それにしても、あの硬いモンスター^がこんなになるなんて、一体何が……」

灰と化していく破片から目を離して、二人は嵐の落下してきた中心地へ顔を向けた。レフイーヤを労わりながら、アイズもクレーター^状に陥没した場所を金の瞳に映す。

すると静まった空気に、規則正しい足音が伝わる。近づいてくる登音に彼女らは身構え——灰髪をなびかせて現れた「灰」に、一様に目を見開いた。

「ええーっ!? 〃灰〃ちゃん!? 〃灰〃ちゃんなんで!?!」

「何であんたが出てくん^のよ!」

「おや。ティオナ・ヒリユテにティオネ・ヒリユテか。それにレフイーヤ・ウイリデイスと——アイズ。無事だったか?」

「アスカ……!」

高所に居た不鮮明な姿ではなく、無手の黒装束の「灰」はレフイーヤを見るなり彼女に近づく。無視されて若干イラつくティオネをティオナが宥めるかたわら、「灰」は鈍い緑色の硝子瓶^{ガラス}を取り出し、黄金の液体をレフイーヤの腹部に振りかけた。

途端に塞がっていくレフイーヤの傷に、アイズは頭に過ぎったアイテムの名を無意識に呟く。

「万能薬……?」
エリックサー

「似たようなものだ」

傷が治った事を確認して瓶をしまった「灰」は、壊れた屋台の一つに向かつて歩いていく。少し瓦礫をどけて、「灰」より小さな獣人の女の子を抱えて戻ってきた。

「その子……」

「逃げ遅れだろうな。あとでギルド職員にでも引き渡そう」

“灰”は泣きじやくる獣人の少女をレフィーヤの側に座らせる。安心させるように頭を撫でながら少女に傷がないか確認する。“灰”に、アイズもレフィーヤに心配そうな顔を向けた。

「レフィーヤ、大丈夫……？」

「ッ……はい、大丈夫、です……！」

レフィーヤは悔しげに、何かに耐えるような表情で喉が張り裂けそうな声を出す。瞳に涙を溜める妖精の少女に、アイズは何か声をかけようとして——その眼前に、一振りの剣が地面に刺し置かれた。

「アスカ？」

「剣を取れ、アイズ。ティオナ・ヒリュテ、ティオネ・ヒリュテ。貴公からもだ」

「うわつととと！」

「ちよつと、武器を投げないでよ！」

“灰”はアマゾネスの二人に向けて《グレートソード》と複数の《絵画守りの曲刀》、《ククリ》を投げつけた。飛んでくる巨大な鉄塊剣をティオナは危なげに受け取り、ティオネは苛立ち混じりの声を張り上げながら《ククリ》を腰に差し曲刀を素早く装備する。

アイズもまた突き立てられた細く流麗な直剣、《銀騎士の剣》を手に取り、感触を確かめるように数度振る。壊れてしまったレイピアよりは頑丈な手応えにアイズが“灰”へ視線を向けると——“灰”は見るからに重い《巨象の斧槍》を構え、広場の先を静観していた。

「まだ終わっていない」

落とされる眩きにアイズ達は戦闘態勢に入る。それと同時に地面が揺れ、彼女らの視線の先で石畳の剥げた土が次々と隆起し、黄緑色の巨体が伸び極彩色の花が咲く。その数は十匹にも及んでいた。

「——レフィーヤ・ウィリデイス」

まるで天を喰らわんと伸びるモンスターの群れに“灰”は僅かに暗い銀の輝きを鋭くし、背後へ掠れた声を投げる。忸怩たる思いに支配されていたレフィーヤが反応を示すと、“灰”はモンスターから眼を逸らさないまま平坦に言った。

「我ら四人の誰かが、貴公とその少女を守らなければならない。そこで一つ問おう。」

貴公は、冒険者か？」

「——ツツツ!!」

レフィーヤの変化は劇的だった。その言葉の意味が分からない程、彼女は愚鈍ではない。今は届かずとも、追いつがる事しかできずとも——レフィーヤは迷宮都市最強の、偉大で誇り高いファミリアの一員である。

妖精の少女は涙を振り払って前に出る。弱い自分に力を入れて、無力を何度も噛み締めてきた口から詠唱を歌って、遙か先を行く彼女たちに並び立てるようになるために。

強い意志を漲らせて立ち向かうレフィーヤに、テイオナが快活に笑い、テイオネが口角を曲げてモンスターを見据える。そしてアイズは『風』を剣に纏わせ——レフィーヤに淡く微笑んだ。

「一緒に戦おう、レフィーヤ」

「——はいっ!!」

妖精の猛りを皮切りに——【ロキ・ファミリア】の精鋭たちが、オリオの空に鋼の音を打ち上げた。

(……私の出番は、もうなさそうだな)

眼前で繰り広げられる戦闘を眺めながら、*「灰」*はしゃがんで地面に片手をついていた。

ダンジョンで鍛え上げられた人間とアマゾネス二人の連携は凄まじい。十体ものモンスターを相手取りながら常にフォローを怠らず、手数でも引けを取らず真つ向から戦い抜いている。

その後ろで朗々と詠唱を歌っているのはレフィーヤだ。触媒を持たないにしろ、徐々に満ちていく魔力の高さが放たれるだろう魔法の威力を物語る。

その邪魔をされないよう、*「灰」*は地中に【炎の嵐】を放出している。吹き上がらず際限なく大地を焼き焦がす炎で触手の奇襲を防

いでいた。そして充分焼き尽くしたと判断して、赤熱した地面から手を放し立ち上がる。

ついで飛んできた石の破片を《巨象の斧槍》で弾いて、《灰》は怯える獣人の少女に目を向けた。

少女はまだしゃくりを上げ、しきりに母親を呼んでいる。モンスターから離れているとはいえ、ここは安全ではない。守られてはいても《灰》の見た目は幼子で、少女より背が高いという程度だ。とても安心はできないだろう。

この場は彼女らに任せ、ギルド職員に引き渡すべきか——《灰》がそんな風に考えていると、一柱の女神がのんきな足取りで近づいてきた。

「おーおー、やつとるなあ」

「ロキ。貴公、逃げないのか」

「ウチの子供たちが頑張つとるんやで？ 逃げる必要なんかあらへん」

後頭部に手を組んでニヤリと笑うロキは《灰》の横に立って戦いを見物する。獣人の少女はロキを大人、あるいは神と直感したのか、その足元に駆け寄った。ロキはそれを快く受け入れて、いやらしい笑みを《灰》に向ける。

「自分よりウチの方がええみたいやなあ。なあなあ、こんな可愛い子供に避けられるとか、どんな気持ち？ せっかく助けた子に選ばれないとか、今ドンナ気持ち？」

「私を忌避するなど当然だろう。貴公、私が何者か知っているだろうに」

再び飛んでくる破片を弾いて、《灰》は暗い半眼でロキを流し見る。「あゝ、せやったなあ」と《灰》の話を思い出して、だがほとんど信じず軽んじるロキは真つ向から視線を合わせた。

「にしても、上手くサボったなあ自分。こんな子供がおるんなら誰かが守つとくのが当然、そんでウチのレフィーヤを焼き付けてアイズたん達も乗せよつた。自然と部外者の自分は余るって寸法や。

涼しい顔して、案外腹黒いとちやう？」

「その場にあるものを利用しただけだ」

「よくもウチの前でそんな口が叩けるなあ、〃灰〃。潰したるか？」

スツと目を薄く開いて髪を掻き上げるロキに、〃灰〃は嘆息を返すのみだ。時折飛んでくる戦いの余波を防ぎながら、戦況を見守り続ける。

無意味と悟ったロキは元の糸目に戻り、戦いを見物しながら静かに問いかけた。

「で、誰の命令で動いとるんや」

「……………」

「だんまりは無しやで。自分の動きは早すぎる。」

この騒動が起こってからウチらが事情を把握したのは割とすぐやった。そしてそんな時にはもう自分は戦つとつた。アイズたんが自分を見つけたんや、見間違いつて事はないで。

ウチらより先に事情に通じてたんはギルドと「ガネーシャ・ファミリア」、そして騒動を起こした張本人しかおらん。自分はそのどれから命令を受けてモンスターを討伐したんや。

まさか子供たちが危険に晒されないよう自主的に助けた、なんて殊勝な事はあらへんやろ？ ボケつとしとらんでキリキリ吐けや」

断定的な口調に、〃灰〃は無音で瞳を閉ざす。しばし佇み、破片を払い、暗い銀色を光の元に露呈して、古びた鐘のような声を奏でた。

「ロキ。一つ言っておこう」

「あん？」

「私はフィン・ディムナから何かあれば頼ってほしいと言われている。だから私を、あまり困らせないでくれ」

「あく……………さよか。フィンがなあ、そう言っただんかあく……………」

あちやー、と額に手をつけて天を仰ぐロキは、二人の会話に怖がる獣人の少女の頭を撫でた。利害で成り立っているロキとフィンの関係上、フィンが「灰」にそう言ったのならこれ以上の追及はできない。

そうして神と人の会話が終わってすぐ、レフィーヤの魔法が解放され決着がついた。厳冬の切り絵、エルフの王女の魔法は十体に及んだ

食人花の全てを氷に閉ざしている。

凍てつく大地と冷たい空気、凍った花の色合いに「灰」は僅かに、白王の地と絵画世界を思い出す。それもすぐに忘れて、喜びを分かち合う「ロキ・ファミリア」の元へロキと共に向かった。

「ロキ・ファミリア」と別れた「灰」が『ダイダロス通り』に到着した時、全ては終わった後だった。

「灰」の家族、ベル・クラネルが逃亡したモンスターの最後の一体、『シルバーバック』を倒したのだ。

『ダイダロス通り』の住人の歓声に混じり耳にする断片的な情報からそれを悟った「灰」は、アスカとなって人ごみを掻き分けベルの元に辿り着いた。

なぜか倒れている女神、ヘステイアを抱き起こして、けれどポーションの類を持っていなかったベルは動けずにいた。そんな彼にエストを飲ませ、気を失っているヘステイアをベルに抱えさせて人垣から脱出した。

そしてホームに戻る途中でシル・フローヴァに出会い、彼女の好意で今は『豊饒の女主人』の離れの二階でヘステイアを休ませていた。ベッドでヘステイアが何かを感知したように呻くかたわら、魅惑的に意味深な発言をベルに向けて立ち去ったシルを見送り、アスカはベルから事情を聞き終える。

「——そうか。貴公が『シルバーバック』を倒したのだな」

アスカは、『ヘステイアナイフ』の腹を指でなぞる。シルバーバックの硬い体毛を貫いたというナイフは、光沢のない腐った暗い色をしている。

わざとそうしているアスカは、丁寧にベルへ手渡した。戻ったナイフを大事そうに抱えるベルは、息を吹き返したように光沢を取り戻すナイフの様子に気付かない。

そんなベルに優しく目を細めて、アスカは懸命に手を伸ばして彼の白い髪を撫でた。

「よくやったな、ベル。過程はどうあれ、貴公はヘステイアを守り抜いた。神の眷族として、これ程誇らしい事もあるまい。私からも、貴公に感謝と、尊敬を送ろう」

「アスカさんッ……！」

「ああ、ベル、この泣き虫め。貴公の涙はまだ早い。心極まるのなら、ヘステイアの前で流したまえ。

互いを信じ生き延びたのだろうか？ なればこそ、想いは二人で分かすべきだ」

目一杯に涙を溜めるベルに微笑んで、アスカは扉を開けて退室する。閉じられる扉の先でベルは引き留めようとしていたが、ヘステイアの目覚めを感じ取って彼は女神と向き合う。

それを見届けて扉を閉めたアスカは、微笑みを消して廊下を歩く。階段を降り、ベル達に声の間かれないところまで離れて、常より低く暗い声を放った。

「――フレイヤに伝えろ。次はない」

小人の威圧感を伴う声に、死角の影で誰かが蠢く気配がする。それを確認して、アスカは『豊饒の女主人』を後にし、日の落ちるオラリオの闇へ消えていった。

ヘステイアナイフ

刀身に神聖文字の刻まれたナイフ

腐った暗い黒色で、光沢のないただの鈍ら

おそらくは持つ者を選ぶ生きた武器の一種

素手よりはましだろうが、使い続ける意味はない

ヘステイアナイフ

刀身に神聖文字の刻まれたナイフ

刻まれた文字は青く輝き、紫紺の光沢は残像を描く

神の血と毛髪との交わりにより、生を帯びた武器

使い手と共に成長し、経験によって力を増す

それはただ一人のために造られた武器だという

そつとしておくべきものだろう

原作二巻分

伏して贖え然らずは絶えよ

「《神ヘステイアのナイフ》、か……」

深夜、廃教会の隠し部屋のすぐ外。崩れた屋根から月光が降り注ぐ教壇の前。

地下室から這いずり出た「灰」は、掌に握る腐ったような暗い色合いのナイフを月明かりに透かしていた。

持ち主ベルには無断で拝借している。彼ともう一柱、主神のヘステイアは今日の疲れ、怪物モンスター祭の一騒動が祟ったのか夕食を取る間もなく寝てしまった。眠りを必要としない不死たる「灰」は、その隙に改めてヘステイアがベルに与えた武器を検分している。

黒い鞆の隅には「ヘファイストス・ファミリア」のロゴが刻まれている。迷宮都市で唯一、冒険者の収入で運営されていない『鍛冶師スミス』のファミリア。その中でも限られた一級品にしかつけられない刻印だ。今はその評判が示す物とは真逆の鈍らでしかないが、本来の持ち主であるベル・クラネルの手に戻ればたちまち紫紺の光沢を取り戻すだろう。

同じ「ヘステイア・ファミリア」の「灰」にも担う資格はあるが、ひどく冷たい銀眼でナイフを眺める幼女は、意図して『神フアの恩恵ルナ』を自身に適応していなかった。

《神のナイフ》はベル・クラネルだけの物だ。これはベルと共に成長し、ベルとずっとある事を宿命づけられた武器。それは永遠に離れる事のない絆のようで、呪いに似ている。

この世が生まれる遙か過去を生きた「灰」からして、これは火の時代に近いものだ。神によって造られ、使命を負い、生を帯びる。果てのない旅路の中、「灰」はこういつた武器を幾つも見つけ、拾い集めてきた。

その「灰」の、あるいは不死の異様な蒐集癖に従えば、この武器に興味がないわけでもない。だが「灰」が冷たい瞳で《神のナイフ》を

眺めるのは、実に俗物的な理由があった。

「……一体いくらしたんだ、この武器は……」

金。そう、金である。あろう事か忌み嫌われ、火の時代の膿に徹してきた「灰」が、金の心配をしているのだ。

驚天動地だ。前代未聞、あるいは未曾有と言い換えてもいい。不死が金の心配などと、見る者が見れば存分に詰り貶める事だろう。呪われた不死がまともな振りなど、何を勘違いしているのかと。

事実「灰」にしても、これは奇妙な感覚だった。不死人にとって金は道しるべ代わりにしかならない。必要なのは人間性、あらゆる取引には全てソウルを支払ってきた。

だからこそこの世界に辿り着いた時、「灰」は可能な限り人を避けた。「灰」の感性からすれば生者など無用の長物だ。たいしたソウルもなく、人間性も持たず、それでいて不死を忌み嫌う者たちなど、何の役にも立たない故に。

そんな「灰」がこうしてオラリオに滞在し、表面上は真つ当に生きられるのは、ひとえに大神ゼウスのおかげである。彼の神は常識も社交性も持たない「灰」に世の倫理を教え込み、生者の粹を叩き込んだ。

大神ゼウスは本当に大変だっただろう。人とはいえ、神すらも知り得ない時代のド底辺の住人だ。殺しは手段、奪つて当たり前、拾い物は自分の物——それを神にさえ実行する「灰」に常識を教え込むのが、どれほど困難な事か。彼の神の苦勞が偲ばれる。

おかげでとりあえず人の世に溶け込んでいる「灰」は、抜身のナイフを鞘にしまい、決意する。長い灰髪を翻し、「灰」は地下室へと戻っていった。

ヘステイアには恐ろしいものが割と多くある。

それは空腹だったり、バイトでジャガ丸くんが売れない事だったり、失望し切った目を向けるヘアアイストスだったり、奇神きじん変神へんじんだらけの神々においては微笑ましいものばかりだ。最近で言えば愛しい愛しい第一の眷族べんくに変な虫がつかないかどうか、それが一番恐ろし

い。

そんな女神は今、ン億年に渡る神生しんせいの中で過去最大級の恐怖を味わっていた。鼻と鼻が触れ合うどころか目玉同士が引っ付きそうなほどに顔を近づけるアスカのせいだ。

「ア、アアア、アスカくん？ ど、ど、どうしたんだいつ？」

「日も出ぬ内に済まないな、我が主神よ。貴公に尋ねたい事がある」
腰を抜かして壁際に寄りかかるヘスティアを上から見下ろすアスカの顔はとても暗い。ただでさえ暗いアスカの銀の瞳が、彼女の影によつてますます暗くなつて、もはや闇そのものと言つても過言ではない状態になっている。

どうしてこうなつたんだろう。ヘスティアは逃げるように、僅かな回想を記憶の劇場で開演する。

それは深夜を過ぎ、あと一時間もすれば暁が訪れるであろう時間帯。丁度良い具合に空気が冷えて心地良い眠りに身を委ねていたヘスティアは、突如として覚醒を強いられる事となる。

まるで壊れかけの卵を無遠慮に叩き壊されるような目覚めだった。具体的には毛布を愛しい人代わりに抱きしめて幸せな夢に浸っていたヘスティアを、アスカは容赦なく持ち上げて壁際に放り投げたのだ。

舌を噛まなかつたのは運が良かっただけだ。「ぎにやうっ!？」と神らしからぬ悲鳴を上げたヘスティアが体の痛みに悶絶していると――いつの間にかアスカが顔を擦り合わせてくる事態に陥っていたわけである。

「私の眼を見ろ、ヘスティア」

「いや、目を見ろもなにも、目しか見えないんだけど……」

既にびたりとくっついている額からゴリゴリと押さえつけられる感触を味わうヘスティアは、猫のしっぽのようにツインテールを逆立たせてひくひくと頬を痙攣させる。ドン引き気味の女神の神情しんじょうを知って、だが完全に無視するアスカは掠れた声を擦り鳴らす。

「私が知りたいのはたった一つだ。たった一つだけ、貴公は真実を語ればいい。」

我が主神、ヘステイアよ——《神のナイフ》に、一体いくらつぎ込んだ？」

「ヴェツ!」

ただただ圧力に満ち溢れたアスカの言葉に、ヘステイアは本日二度目の神らしからぬ声を上げた。ついであからさまに挙動不審になり、下手な口笛をひゅーひゅーと鳴らす。

「い、いくらって……な、な、何の事だい？ ア、アスカ、くん？」

「我が主神、ヘステイアよ。《神のナイフ》に、一体いくらつぎ込んだ？」

「話を聞いてない!」

更にぐりぐりと顔を押し付けてくるアスカにヘステイアは悟る。マジだ、真つ暗でほとんど見えないが眼が本気だ。このままではヘステイアの平穏な生活が、発足して間もない「ファミリア」が、ベル君との初々しい甘ラブストーリーが、全てアスカの手で台無しにされてしまう!

直感的にそれを察知したヘステイアは、あらゆる見栄とプライドを投げ出して全てを白状した。二日間神友のヘファイストスに土下座して武器を造ってもらった事、その際二億ヴァリスもの借金を背負ってしまった事。

気付けばヘステイアは、その借金をベルに背負わせるような真似は絶対にしないとアスカに誓っていた。ぐうたらで怠惰でどうしようもない駄女神だけど、それだけは神の名にかけてしないと。

アスカはそれをどう受け取っただろうか。影に隠れて闇の中にあるアスカの相貌はヘステイアには分からない。けれど不意に、小さな体は離れ、古びた鐘のような溜息が幼い唇から零れた。

「事情は分かった。貴公は真に、ベルの力になりたかったのだな」

「……ああ、そうさ。何もできないのは嫌だったんだ」

「……貴公はベルに手を差し伸べた。ベルにとってはただそれだけでも、何にも代えられない貴公からの贈り物だったろうに。その上で武器もくれてやるとは、いっそ甘やかし過ぎだな。」

私も貴公の、眷族なのだぞ?」

「うつ……わ、悪かったよ、アスカ君。君なら何もしなくても平気だつて、驕っていたのは謝る。蔑ろにしてすまなかつた」

「全くだ。だが、それでいいのだろう。」

私も、私に気をかけられるよりベルを優先してくれた方が有り難い。客観的に言えば、貴公は主神として失格と言わざるを得ないが——貴公がベルの主神で良かったと、私は心からそう思うよ」

「アスカ君……ありがとう」

無表情に、いつもと同じまぶたの半分降りた瞳で、アスカは平坦に言う。ヘステイアにその真偽を見抜く事はできないが、今ばかりはそれが真実であると信じられた。

「……あつ……その、アスカ君、あのさ……」

こつくりと頷くアスカに満面の笑みを浮かべていたヘステイアは、急にもじもじして人差し指同士をつけたり離したりしながら消極的な声を上げる。神の言わんとする事を察したアスカは、目をつむって肩をすくめた。

「借金の事はベルに黙つていよう。それは貴公の覚悟の表れだ。告げ口など、無粋な真似はせんよ」

「う、うん、助かるよ……本当に、君には世話になりっぱなしだね」

「私もベルが貴公の世話になっている。お互い様という奴だ。いや、似た者同士と言うべきか？」

顎に手を当てて真剣に考え始めるアスカにヘステイアは苦笑する。確かにヘステイアとアスカは似ている所がある。二人とも、家族をとっても大切にしているという意味では、殊更に。

「——ああ、そうだ。ヘステイア、一つ頼まれ事をしてくれないか？」

「ん？ 何だい、アスカ君。ボクにできる事なら言っておくれよ」

思考を打ち切ったアスカの唐突な台詞にヘステイアはドンと胸を叩く。衝撃は豊かな胸に吸収され、たゆんつたゆんつ、と大きく揺れた。

ベルが見ていたら赤面していただろうな、とアスカは平静に考え、頼み事を口にする。

「私を——ヘファイストスに会わせてほしい」

眷族の思ってもみない依頼に、ヘステイアは青みがかつた瞳を大きく瞬かせた。

《ヘステイア・ナイフ》が紫紺の残像を描き、『キラアアント』の頑丈な硬殻を難なく切り裂く。首を切断されたモンスターは紫色の体液を散らし、ダンジョンの壁へぶち当たってごとりと転がる。

『シルバークバック』を倒した事による「ステイタス」の上昇、それに伴う《ヘステイア・ナイフ》の強化。『キラアアント』を易々と屠つた^{ヘステイア}神様からの贈り物に、ベルは玩具を与えられた子供のように喜んでいる。

それを見守るアスカは、まだまだベルが「ステイタス」に振り回されていると評価していた。^{リアリス・フレゼ}【憧憬一途】による早熟性は、ベルにとって必ずしも良い事ではない。

(体捌き、駆け引き、先読み……技術的な未熟さで言えば、まだまだ素人を脱した程度。それを補おうにも、他に類を見ない成長速度が本来かけるべき時間を大幅に削っている。

尋常ではない成長には、やはり尋常ではない鍛錬が必要か。あるいは私がそうしたように、全て実践で学ぶという手もあるが)

平静な表情で怖い事を考えるアスカは、がむしやらに戦うベルの姿にその考えを霧散させた。

モンスターに立ち向かつては倒していくベルは、明らかにしやいでいる。その浮かれた根性は叩き直して然るべきだが——今日くらいは、まあいいだろう。

ベルを見つめるアスカの頬は、ほんの少しだけ緩んでいた。

「ベル、そろそろ戻ろう。魔石や『ドロップアイテム』も許容量を超えそうだ」

「え？ あ、本当だ……」

戦いに夢中になっていたベルは、アスカの腰に下がっているパンパンに膨らんだ袋に目を丸くする。ベルが元から持っていたバックパックを加味しても、周囲に転がるモンスターの死骸の数を考えれ

ば、これ以上集められないのは明白だ。

「ご、ごめん」とはしゃいでいた事を自覚するベルは、恥ずかしそうに頭を下げる。「気にするな」とアスカは決まり文句を言っただけで回収に動しんだ。

ちなみにアスカは「ソウルの業」で魔石も『ドロップアイテム』も自身の『器』に収納できるが、それをやる事はない。単純な話、そうやって回収したアイテム群を換金する場所がないのだ。

まさかギルドの換金所で『器』からアイテムを差し出す真似はできない。どこかでバックパックへ移し替えるにしても見つければ本末転倒だし、手ぶらでダンジョンから出て換金すれば怪しまれる。アンダーグラウンド裏側でなら換金も叶うだろうが、そんな手間を払うなら初めから普通に回収すればいい。

全ての死骸を灰に返したアスカは、膨れた安物のバックパックを見下ろす。適当に放り込んだので隙間が目立つが、どうでもいい事だ。元より「しまう」イコール「底なしの木箱に放り込む」であるアスカに、サポーター業など土台無理な話なのである。

「今日も『ドロップアイテム』がいっぱい出たね、アスカさん！」

「ああ、そうだな。ベル」

「アスカさんと一緒にいるからかな？ ソロの時はこんなに出なかったよ」

「まあ、『運』がいいからな、私は」

嬉しそうなベルと他愛のない会話をしながら、アスカは頭の片隅で考える。今はまだ二人だけで良いが、この先はそうもいかない。ベルの成長速度を加味しても、パーティの編成は急務だ。せめてサポーターだけでも見繕っておかなければならない。

しかしアスカには人を見る目もなければ伝手もなかった。ダンジョンからギルドへ向かう道中、アスカはベルと会話しなげずとその事を考えていた。

その内心は奇しくも、かつてアスカが出会ったカタリナの騎士と似たようなものだったという。

ギルドに到着したアスカは、ベルに換金を任せて早々にギルドを後にした。エイナ・チュールとの溝を作ってしまった手前、まだ顔を合わせるわけにはいかないと判断したからだ。

謝りたいからと押しかけるのも違うだろう。理由はどうあれ、話をしたいならまず面談の約束を取るべきだ。それをベルに頼んで、ホームに向かっていたアスカは、心からそう思う。アスカに教育を施した大神は、そういった細かい気配りを大事にしていた。

少なくとも——目の前にいる道化の女神と狼ウエアウルフ人よりは、然許さぼかりに。「よお、灰」。こんな所で会うなんて奇遇やなあ」

「そうか？ 私はそうは思わない。この道はギルドから私のホームへ続く経路だからな」

待ち伏せるには丁度良い場所だろう——言外にそう語る灰髪の小人族バルウムに、ロキは何が面白いのかニヤニヤと笑う。その横に佇むベートは心底うんざりした表情で、だがぎらついた敵意を向けてくる。

アスカは——灰はそれで大凡おおおよそを察した。ベート・ローガは狼人ウエアウルフ、そして足に装備する脚甲、《フロスヴィルト》は水に濡れている。地下水路に赴き、灰の残り香を察知したのだろう。

灰は一つ息を零して、懐に手を入れ、内側でソウルから取り出した『極彩色の魔石』を見えるように外へ引き出す。

夕焼けに光る異様な輝きに、僅かにだが、ロキはピクリと反応した。凍てついた太陽のような銀の瞳にその様子を反射させて、灰は静かにまぶたを降ろす。

「ここでする話でもない。ロキ、何処か適当な場所を見繕ってくれ。貴公の話は、そこで聞こう」

「何や、エライ素直やな。前みたいにはぐらかすと思っと思ったわ」

「私は面倒を好まない。楽があれば、そちらに流れる。何より貴公、手ぶらでは引き下がらんだろう？」

欲深いハイエナを遣り過まきえすなら、時に撒餌まきえも必要だ」

「言うやんけ、けったくそ悪い灰の風情が。……ま、ええわ。ついて来きい」

朱色の瞳を一瞬胡乱げに外気に晒して、ロキは反転しひらひらと片手を振りながら歩き出す。澄ました顔で「灰」は続き、忌々しげに琥珀色の眼を吊り上げるベートは舌打ちをしながら後を追った。

夕刻の影に沈む人ごみを縫い、辿り着いたのは街路の側に建つ赤煉瓦のホテル。人気の全くないロビーの休憩室ラウンジに、ロキはドカリと乱暴に腰を降ろす。

「ホレ、自分も座りい。あ、ベートは悪いんやけどちよつと席外してーなー?」

「チツ、またかよ……」

ベートはぼやきながら、ギロリと「灰」を睨みつけてホテルの外へ出る。休憩室の内と外を仕切る窓から見える位置で腕を組む狼ウエアウルフ人を一瞥して、「灰」はロキと向き合った。

「それで、ロキ。貴公、私に何を聞きたい?」

「全部や。自分が知つとる事洗いざらい、吐く物もんが一切無くなるまでぶちまけてもらうで」

「そのために大金はたいてこのホテル貸し切ったんや」と、道化のように笑うロキの目はひどく冷たい。人の身ならば誰であれ、全てを見透かすその瞳に恐怖を抱かぬ筈もない。

無論、「灰」もロキに恐れを感じているが——恐怖の示し方など忘れてしまった不死は、懐から二つの魔石を取り出し、並べる。大きさが違うだけで、どちらも極彩の色を放っている。ロキがそれを注視したところで、「灰」は口を開いた。

「結論から言えば、私の行っている事はこの極彩色の魔石を持つ、新種のモンスターモンスターの調査だ」

「調査、やと?」

「ああ。そのために私は多くの場所へ赴おもむいた。オラリオの地下水路然り、貴公の眷族ファミリアと見えた深層然り。全て調査のためであり、それ以上の意味を持たない」

「ふうん。それ以上の意味を持たない、なあ……それは自分にとってやろ?」

笑みを消して、ロキはスツと朱色の瞳を覗かせる。

「誰に頼まれたんや？」

「答えられない」

「ガネーシヤか？」

「答えられない」

「ウラノスか？」

「答えられない」

「……まさかドチビっちゅう事はあらへんよな」

「答えられない。幾ら質問しようと無駄だ、ロキ。私は腹の探り合いなどできない。開示できる情報は全て話し、それ以外は口にしない。それだけしかできない」

眼を逸らさず視線を合わせる「灰」の瞳には、変わらずソウルが渦巻いている。神にとつては見え過ぎるそれが、「灰」の言葉の真偽を看過させない。それでもなお見抜こうとするロキの行いは、当然ながら徒労に終わった。

「……はあゝゝ。何やねん、自分。ちよつとは動揺すれば可愛げもあるつちゆうに……その顔、岩かなんかでできてるんと違うか？」

「私の人間性など、人を取り繕う程度しか残っていない。表情の作り方も忘れてしまった」

「さよか……。まあそれは置いといてや、他に情報はあるか？」

「ダンジョンにいくつか不審な動きがある。貴公がおそらく知らない情報で言えば、30階層でモンスターの大量発生が確認されている。およそ一、二週間前だ」

「30階層でか……」

「開示できる情報は以上だ。後は確証のない推測しか、私は話せない」

「灰」の淡々とした話にロキは口元を指で覆い、思考に没頭する。飄々とした仮面も消して神らしい威厳を発する道化の女神に、「灰」の右眼が暗く沈み、不愉快そうに片眉を上げる。それは一瞬の事で、平素に戻った灰髪の小人族バルウムは時間を気にしつつ座して待つ。

やがて考えをまとめたロキは真面目な表情で「灰」と向き合う。

「自分の推測つてのを言ってみい」

「現状から言える事は三つ。」

一つはダンジョンで何かが起こっているという事。
そしてそれを利用する何者かが居るといふ事。

最後は『神の塔』以外のダンジョンの入口があるという事。

この程度ならおそろく、貴公にも立てられる推測だろう」

「……まあ、な。自分の話が本当なら、それくらい見当がつく。にしても……あーもお、齒がゆいなあ〜〜〜！」

急に体を仰け反らせてペシンツ、と額を叩くロキは、もどかしそうな表情で綺麗に並んだ齒をかみしめる。

「なんで自分の言ってる事が嘘かホントか分からんのや！ いや分かっとなるんやけどな?! 自分が子供達よりも神々に近いってのはよお分かっとなる！」

せやから納得できんねん！ 自分の生い立ちはあんまりにも荒唐無稽や！ 『火の時代』？ 『不死の呪い』？ 『薪の王』?! ンなもんが神々が生まれる前に起こったやと?! それを神々の誰一人知らなかったやと?!

そんなもん——まるで【創世神話】やんかつ!!」

「馬鹿げた話や!!」とロキは語気を荒げた。対して「灰」は明確に顔をしかめる。幼女の端正な相貌に刻まれた感情の発露をロキは見逃さなかつたが、あえて触れず道化を演じ続ける。

「仮に、仮にや！ それが真実だとして、せやったら自分は何で生きとんねん!? 自慢やないけどうちの年齢はン億年や！ 年増ババア? じゃかあしい潰すぞアホンダラアツ!!」

そのうちよりも自分は年上って事や! アホか!? 信じられんわそんな事! それでも、それでも百億万歩譲ってそれを認めたとしても、せやったら自分はもう子供やない!

不老不死、超越存在! 自分はうちらと同じ神——」

「——巫山戯るなよ、分を弁えない豚が」

空気が、どろりと変容した。明らかに重く、生あたたかな深みが、休憩室の隅々まで席卷する。仰々しく立ち振る舞っていたロキは、滑稽な姿で塗り固められる。

まるで身動きの取れぬ底なし沼に嵌まったかのようだった。楔を

打ち込まれた感覚に囚われるロキは、齒を食い縛って憎しみで頬を歪める。『灰』の形相に、朱色の目を限界まで見開く。

「神だど? 神だど!? この私を選びにも選つて、糞産みの豚と同列に語るか!!」

貴様ら神はいつもそうだ。甘やかな偽りを振りまき、人を欺瞞に陥らせる。欺き、利用し、果ては貴様らの、貴様らだけの時代の延命がために、我らの同胞、呪われ人に軛くびきと使命を刺し穿った!

試練などと嘯き、我らを殺し、亡者を積み上げ、ただ火に焚べる『王』を創る。それに能わぬ者、従わぬ者、そして『闇の魂』ダークソウルを見出した者——その全てを最果ての糞溜めに追いやつて、まやかしの眠りで蓋をした!

神などと、所詮火に分かたれた闇から生まれた幾匹かに過ぎん貴様らが!! 『王のソウル』を篡奪さんだつし古竜を滅ぼした程度で思い上がる、着飾るばかりの肥え太った豚が!! 人を憎み、人を恐れ、われら われら 人も人を利用する!!

——許せるものかよ。この私が、誰も知らぬ小人とて、この私
が、許せるものかよ!!

だから貴様はここで死ぬ。その『ソウル』の一片まで、奪い尽くし殺してやる。その形ばかりの下劣な胎の、すべて内側、粘膜の一滴までさらし上げて呑み干してやる。

屠畜とは、神を気取る豚の末路には、ああ、ふさわしいだろう?

なあ——グウイン」

『灰』の右手が伸ばされる。そこに滴る暗い澱みは何だ。日が落ち、夜が訪れるオラリオの黒よりも、なお深く、なおおぞましく、なおあたたかな闇は何だ?

ロキの目に映る、人の形をした『これ』は、一体何だ? その正体に動付きながら、ロキは動かない。動けない。肉の半分、体の右側からこの世の何よりも深い闇を滲ませる『灰』の、その右眼に宿るものが、動く事を許さない。

満月の如く見開かれた眼窩、火の輪に縁取られた眼球の中心は、ただただ闇が溢れている。人の膿、あるいは人間性、火に望まれぬ深淵

が、今まさに決壊し——直後、それらは全て消え去り、呆けた「灰」の顔ばかりが残った。

「……………？　なぜ私は貴公に手を伸ばしているのだ？」
「……………は？」

ロキに伸ばした右腕を不思議そうに眺める「灰」に、間の抜けた女神の声が落ちる。それもすぐに掻き消して、ブンブンと首を振るロキは、恐る恐る「灰」に尋ねる。

「……………自分、何も覚えてないんか？」

「うん…………？　何を、と言われてもな。私がかしたのか？」

「いや、何かつちゆうか、今のは…………」

「……………ああ、理解した。また発作を起こしてしまったのか」

白い額に小さな手を当てて息をつく「灰」は、先程のそれとは違う、いつもの「灰」だ。神に敬いの欠片もなく、感情が薄く、常に静謐な半眼で、その幼い容姿からは想像もつかない老人のような佇まい。

一人納得する「灰」に、ロキは薄く目を研ぐ。

「どういう事や、説明しいい」

「うむ。何故かは知らないが、どうやら私は神が嫌いなようだな。それ故か神と相對している時折、聞くに堪えない暴言を吐くらしい。

らしいというのは、私にその自覚がないからだ。言ったそばから忘れてしまうみたいでな、故に再発を防ぐ手立てが私にはない。

だから貴公、次からは気を付けたまえよ。私の推測を貴公に話したところまでは覚えている。そこから先で、きっと貴公は私の触れるべからざるものに触れた。次がないよう、貴公がそれを避けてくれ」

「……………分かった。面倒やけど、そうするわ」

神妙な顔をするロキにこっくりと頷いて、「灰」は時間を確認する。ついで窓から景色を眺め、立ち上がった。

「もうこんな時間か。すまないがロキ、私はホームに帰らねばならない。家族が待っている」

「ああ、ええよ。聞きたい事は聞けたし、付き合ってくれてあんがとな」

務めて平静を装うロキは笑いながらひらひらと手を振る。立ち去る灰髪の小人族に「灰」とロキは一声かけて。振り向きに揺れる長い灰髪と凍てついた太陽のような瞳を、道化の女神は確と見据えた。

「も一個だけ、聞かせてくれ。——自分を、信じてええんか？」

「……突然だな。それに、難しい事を聞く。私を信じていいかなどと、神たる貴公が、そんな事を。」

「……言葉にする事は、大凡信じて貰ってもいい。嘘はどうにも好まない。欺瞞は私の肌に合わん。だから後は、貴公がそれを信じるかどうかだ」

言える事はそれだけだ、と言葉にならぬ音を嚙んで、「ではな」と「灰」は立ち去った。その後ろ姿を見送って、ロキはゆつくり椅子にもたれかかり——「ぶはあつ!？」と肺に溜まった空気を絞り出して、急激に激しくなる胸の動悸を抑え込む。

「あゝゝゝ……ヤバかったあ。死ぬかと思った……何や「アレ」、反則にも程があるやろ……」

先の出来事を思い出して大量に発汗し、身震いするロキは「ヒツヒツフー」となぜか出産に良いとされる呼吸法をする。そんな主神の姿に呆れながら、ベートは休憩室に足を踏み入れた。

「……良かったのか、ロキ」

「ん、良かったで。あん時うちの合図に気付いてくれて助かったわ。もしベートが乱入しとったら、うちもベートも今頃天界の真っ只中やったらうな」

「……何なんだ、あの「灰」野郎は」

「……前に言っとった事、全部本当なのは間違いない。そんでまだ何か隠してる……いや、忘れてるって言った方が正しいんか？」

ベートも見たやろ? 『神の恩恵』だけじゃ、あんなならん。かといつて『神の力』でも、あれと同じにはできへん。

ありやあ化物や。【劍姫】よりも、【勇者】よりも……ひよつとしたら【猛者】より格上かもなあ。

ククッ! うちが手塩にかけた眷族より上とか、笑うしかないわ!

想定外の予想外、〃アレ〃は神々も見通せん『未知』の塊！

ああ、これだから——下界は止められん！」

「チツ……クソが。『雑魚』のくせにふざけやがって……強えくせに、達観した顔しやがってよっ!!」

一人滑稽な笑みを浮かべるロキを無視して、「ムカつく野郎だ!!」と〃灰〃の座っていた椅子を蹴り飛ばすベートの表情は苦々しい。憎しみすら沸き立つ相貌で、〃灰〃の立ち去った夜の闇を射殺している。

灰毛を逆立てる狼人ウエアウルフを「まあまあ」となだめながら、ロキはようやく収まった心臓の鼓動に脱力する。そして椅子を傾け、不安定に揺らしながら天井を見上げ、薄く開いていた朱色の瞳を腕で覆った。

「なあ、ベート。自分が前に〃灰〃の話の真偽を聞いてきた時、うちは〃灰〃が子供よりも神に近いって、そう言うたな?」

「……それがどうかしたかよ」

「あれ、撤回するわ」

「あ?」

怪訝な顔をするベートに見せつけるように、ロキはニヒルに口元を引き裂く。嘲笑うように、自嘲するように——心の伴わない形ばかりの笑みを浮かべて、空回りの声を吐き出した。

「ありやあ、子供や。うちの眷族こどもたちと、なーんも変わらん。打ちのめされて、打ちのめされて、打ちのめされて——それで化物ばけもんみたいになっただけの、ただの子供ひとや」

「……………」

「嫌んなるなあ。うちは神やつてんに……あんな様さまを見せつけられてしか、あの子が子供って確信できんかった。まったく、道化や。嫌んなるわ……」

その、お調子者の神らしからぬ声に、ベートは驚き。瞠目した琥珀色の瞳を押し潰すようにゆっくり閉じて、がしがしとロキの朱色の髪を乱暴に掻き回した。

直後響く女神の悲鳴に、狼人ウエアウルフは散々罵倒を投げかけたという。

「——ただいま。ベル、ヘステイア」

「アスカさん！ お帰りなさい！」

「待ってたよ、アスカ君！」

とつぷりと暮れたオラリオの夜。廃教会の地下室、隠し部屋に帰宅したアスカを迎え入れたのは、満面の笑みを浮かべるベルとヘステイアの二人だった。

「遅くなつてすまない」

「ううん、大丈夫だよ！ 丁度準備ができたところだから！ ほら、早く座って座って！」

妙にテンションの高いベルに手を引つ張られてアスカ達は慌ただしく室内に入る。ソファアの前に鎮座するテーブルの上には、三人分のちよつと上等なパン、奮発した鶏肉チキンの網焼き、新鮮な野菜のサラダに、テーブルの中央で当然の如く山盛りになっているジャガ丸くん。

弱小派閥、「ヘステイア・ファミリア」が用意できる非常に贅沢な夕食だ。

「ふふん、どうだいアスカ君！ 君のためにボクとベル君の二人で用意したんだぜ！」

「アスカさんが稼いだお金をちよつと使っちゃいましたけどね」

「気にするな。今日を私も楽しみにしていた。役に立てて嬉しいよ」

鼻高々にドヤ顔するヘステイア、それに苦笑するベル、少しだけ雰囲気の柔らかいアスカ。和氣藹々とする三人は狭いソファアに並んで座った。今日の主役である灰髪の幼女を、白い髪の少年と黒髪の女神が挟む形だ。

「それじゃあ、ちよつと遅くなつたけど、アスカ君の歓迎パーティを始めようじゃないかつ！ ほら、ベル君、音頭を頼んだよ！」

「はいっ、神様！ それじゃあ、アスカさんの「ファミリア」加入を祝つて——乾杯っ！」

『乾杯！』

柑橘系の果汁ジュースが入ったグラスを合わせて、三人で笑い合う。そして早速料理に手を付け始めた。

「どう、アスカさん、美味しい？」

「ああ、美味しいよ。ほら、ベルも食べてみる」

「うん！……—美味しい！」

「当然だよ！ ボクの愛情がたっぷり入っているからね！」

騒々しく、和やかに。笑ったり喜んだりと無垢で真つ新たな心を輝かせるベルと、自分も充分楽しみながら二人の眷族への慈しみを絶やさないヘステイア。静かな夜の帳にもきつと漏れているだろう彼らの暖かさに囲まれて、アスカもまた銀の瞳の暗さを抑えて、人のぬくもりを混じらせる。

神の血を分け合った家族。それはアスカが本当なら、決して得る事のできない絆。

本来の“灰”なら、決して許す事のできない楔。

ああ、けれど。それでもいいと、アスカは幽かに微笑んでいた。人と、神と。彼らと共有するこの熱がまやかしなんかじゃないと、アスカは知っているのだから。

その日はずっと、眠りにつくまで。彼らの笑い声が絶える事はなかった。

翌日。アスカは「ヘアアイストス・ファミリア」、北西のメインストリート支店を訪れていた。数日前にヘステイアに頼んでいたヘアアイストスとの面談が、今日叶った形である。

周囲の店に比べて二回りも大きい、炎を思わせる赤い塗装の武器店。その三階の執務室で、アスカは紅髪紅眼の女神と対峙していた。

「——この度は私の要望に応じて頂き、感謝する。神ヘアアイストス」
早朝の白い日光が窓から注ぐ部屋の中央、執務机の前で姿勢を正したアスカは深々と頭を下げる。こと神に対しては不遜な態度を崩さないアスカも、ヘアアイストスの前では最低限の礼儀を払っている。
ヘステイア
主神も家族も世話になっているのが大きな理由だった。

「堅苦しい挨拶はいいわよ。それで、何の用かしら？ 私、結構忙しい身の上だから、できれば手短に済ませてほしいのだけど」

さらさらと書類を処理しながらヘファイストスは面倒そうに言う。顔の半分を覆う眼帯の左側、外界に晒している紅の片目はアスカに一瞥もくれず、ひたすら書類の内容を追っていた。

元々ヘファイストスはこの面談に乗り気ではない。オラリオでも有数の大派閥の主神である彼女が、吹けば飛ぶような弱小「ファミリア」の一団員と直接会うなど、立場の上でも道理の上でも普通はありえない事だ。

その無理が通っているのは、一から十までヘステイアの顔を立てるためである。莫大な借金と引き換えにヘステイアの眷族へ武器を、ヘファイストス直々に鍛造して以来、あの怠惰な神友は精力的に働いている。

たった一日で音を上げている、という報告は届いているものの、これまでの経緯を考えれば驚くべき働きぶりだ。まだまだ油断はできないが、ヘファイストスとしてはヘステイアの頑張りに素直な賞賛を寄せている。

だからとは言わないが、ヘファイストスはアスカに会う事を承諾した。勿論、その神友がまた土下座をしてきた時は目を疑ったものだ。やはり甘やかし過ぎたか、と過去の自分を罵りさえしたが、聞けば単に自分の子供に会ってほしいという要望だけだった。

それも本来なら受け入れられないが、子供のために必死になっているヘステイアを無碍にはできない。これが最後、短い時間だけ、と念入りに念を押して、今日この場は成り立っているのである。

(……それにしても、一体何の用かしらね。武器を作ってほしいなんて言ったら、即座に叩き出すけど)

そんな事を考えながら、ヘファイストスは淡々と仕事を進める。彼女はアスカの事などまるで知らない。ヘステイアとの歓談の端で小耳に挟んだくらいだ。曰く、『根は良さそうなんだけど変わった子供』という評価をされている小人族が、何を言い出すのか待っていると――羽ペンを走らせていた書類の上に、一枚の紙が差し置かれた。

ヘファイストスは疑問符を浮かべつつ、ちらりとその紙の内容を流し見る。燃える炉のような紅の瞳が向けられて数秒、大きく瞠目した

ヘファイストスは、驚愕の眼差しをアスカに向けた。

「貴方、これ……」

「本題に入る前に、野暮用を済ませておきたい。神ヘファイストス、どうかそれを受け取ってほしい。」

私はその証文をもって、我が主神ヘステイアの借金の完済を望む」平坦に話すアスカの暗い銀の瞳の向こう、片目を見開くヘファイストスの手には、アスカが差し出した紙が握られている。

それはギルドが発行する最も信頼される証文。記された金額と引き換えられる権利書の一種。偽造を防ぐ緻密な金細工と特殊な製法で作られたその高級紙には、『二億』に及ぶ数字が並んでいた。

「……ヘステイアの指示、なわけないわよね……腐っても慈愛の女神のヘステイアが、子供に借金を押し付けるわけない……いえ、そもそもこんな財産、あの子が持つてるはずが……」

「受け取ってもらえるか？ 神ヘファイストス」

「……アスカって言ったわね、貴方。詳しく聞かせてちょうだい」

羽ペンを置いて、ヘファイストスは固い表情でアスカと向き合う。こちらを探る目つきには疑惑の色がありありと浮かんでいるが、アスカはまるで気にしない。むしろようやくまともな面談が始められるとばかりにゆっくり瞬きした。

「まず今回の件だが、私の独断専行に当たる」

「ヘステイアは関わってないって事？」

「ああ。我が主神には場を整えてもらったただけだ。借金を返済する腹積もりも隠していた」

「どうして？」

「ヘステイアに対する金銭面の不信に尽きる。私の家族……ベル・クラネルのためとはいえ、永遠を生きる神でなければ支払えないような借金を背負ったのだ。我ら眷族に無断でな。」

だから私は、それを完済できる資産を持つ事を知られなくなかった」

「ふうん、そう……でも、私の口から漏れるとは思わなかったの？」

「そのための面談でもある。神ヘファイストス、そもそも私が借金を

完済しようとするのは、ヘステイアのためではないんだ」

主神への敬いの欠片もないアスカの言葉に、ヘファイストスは怪訝そうな顔をする。ヘステイアのためでないのなら、一体何のために二億ヴァリスもの借金返済を請け負うのか——顔の右側を覆う眼帯を指で軽くなぞるヘファイストスを見据え、アスカは唇を動かす。

「ベル・クラネルは、私の家族だ。私がこの世でただ一人、尊ぶ者^{たつと}。ベルのためなら如何なる苦勞も私は厭わない。

二億ヴァリスという借金は貴公とヘステイアの個人的な取引だろう。だがヘステイアは「ファミリア」の主神。ベルの寿命が尽きるまでに返せないであろう借金は、必ずベルの脚を引っ張る。いつか必ず、アレの重みになってしまう。

だから私は、その憂いを断ちたい。ベル・クラネルの障害を取り払いたい。この借金返済の申し入れは、そのためのものだ。

……ヘステイアへの情が、全くないという訳でもないがな。そう……ほんの少しくらいは、あのものぐさな女神への義理と、感謝と……家族として、苦勞を肩代わりしてやりたいという思いが、ないわけでもない」

最後の方は、何故か自身の言葉に困惑するような素振りを見せて、アスカは途切れ途切れに言い終えた。神妙な顔をするヘファイストスは、ギシリと背もたれに体重を預けて、しばし黙考に耽る。

アスカの提案、差し出された証文、自身の考え、ヘステイアの笑顔——様々な事がヘファイストスの思考を巡り、意識の海へ消えていく。何となしに天井を仰いでいた紅の瞳が、二億ヴァリスの証文に落とされ。

姿勢を正したヘファイストスは、付き返すように高級紙をアスカへ向けて差し出した。

「残念だけど、受け取れないわ」
その言葉に何の変質も見られないアスカに、ヘファイストスは苦笑を浮かべながら続ける。

「元々、あの子の眷族に作ってあげたナイフはこんな高くないのよ。せいぜい半分、良くて四分の三つてところかしら。早い話、ぼった

くつちやったのよね」

「何故そんな事を？」

「他力本願のヘスティアに痛い目を見てもらいたかったのが一つ。あの子のだらけ癖をこの機に矯正したかったのが一つ。今まで世話して上げた分を労働で返してもらいたかったのが一つ。」

あとはそう……私の我がまま、かしらね」

アスカは返された証文を肅々と受け取る。手渡したヘファイストスは立ち上がり、窓辺に手をかけて朝日の降り注ぐ街並みを眺める。光に照らされる横顔には、神友を慈しむ思いがありありと浮かんでいた。

「私もね、ヘスティアのために何かをしてあげたかったのよ。あの子が、あの子の眷族にそうしてあげたように……私もどうせ手助けをするなら、ヘスティアのためになる事をしたかった」

「それが借金の増額である、と？」

「ええ。何も優しさだけが手助けってわけでもないでしょ？ 今まであの子を甘やかしていた分、とことん厳しくするのが私の役目だと考えたわけ。」

貴方の言う通り、天界の頃からかなりぐうたらな女神なのは変わらないし。これで少しは反省して、子供に見限られない立派な主神になれば御の字ね」

ヘファイストスは左目を優しげに細める。紅の瞳に反射するオリオの街並みの中心に、『神の塔』は高々とそびえ立っている。そこで今もひいひい言いながら働いているであろう神友の姿を、鍛冶の女神は見ているのだろうか。

差し込む朝日に微笑む女神という、一枚の絵画のような光景にアスカは不愉快そうに眉間を寄せ、ヘファイストスに気付かれない内に平素に戻った。

「分かった。貴公がそういうのなら、私もでしゃばるのは止めよう。余計な提案をして済まなかった、神ヘファイストス」

「いいわよ、別に。元はと言えば身の丈に合わない借金を負ったヘスティアと、根負けして武器を作った私が悪いのだし。貴方が謝る事

じゃないわ」

少し自嘲気味に苦笑して、ヘファイストスは執務机に戻る。座つて、留めていた書類仕事へ手を伸ばしたところで、全く動く気配のないアスカに気付いた。

棒立ちする小人族パルウムにヘファイストスが首を傾げると同時に、アスカは口火を切った。

「それでは、本題に入らせてもらおう」

「本題……？」

片側しか見えないヘファイストスの相貌が不可解そうに形を変えらる。今までの話が本題ではなかったのかと思う女神は、数秒してはたと思い出した。

「ああ、そういえば……先に野暮用を済ませておきたいって言ってたわね。それで、何かしら？ 貴方はきっちり対価を支払えそうだし、武器の注文も受け付けてあげるけど」

「いや、武器ではない。私は貴公に尋ねたい事がある。他ならぬ我が主神、ヘステイアについてだ」

「ヘステイアについて……？ そんなの、あの子に直接聞けばいいじゃない」

首を傾げつつ、ヘファイストスは明快な答えを返す。本人の事は本人に聞くのが一番だ、そんな説明するまでもない自明の理に、けれどアスカはふるふると首を振った。

「残念だが、我が主神は借金返済の労働に忙しい。端的に言って、私の望む回答を得られる時間が足りない。」

それにな、こういうのは本人にではなく、他人から伝承を聞くのがへんさん編纂しやすいのだ。多くの物語は語り部の口から伝わり、形となって世に広まる。だから私もそれに則る。

故に神ヘファイストス、私は望もう——炉の女神ヘステイアの物語を、どうか聞かせてほしい」

「聞かせてほしいって、そんな事言われても……」

深々と頭を下げるアスカに、ヘファイストスは深く困惑していた。だが同時に、アスカの目的の意味も理解していた。

つまりは、自らの主神の『神話』をアスカは聞きたいのだ。それは迷宮都市オラリオにおいて珍しい事ではない。特別に主神を崇める信心深い眷族が、天界や下界に降りてからの主神の『神話』を知りたがるのはよくある話だ。

神の物語を知り、より信仰を高める。アスカもそうなのだろうと、ヘファイストスは認識した。

「……私の知ってる事なんて、あんまりないわよ？　こう言っちゃ何だけど、ヘステイアは天界じゃ、かなり没個性な神だったんだから。まあ、他の連中がどうしようもない行動的な馬鹿揃いだったのもあるけれど……」

「それで構わない。私が欲するのはヘステイアの物語そのものだ。その中で使える逸話^{エピソード}が一つでもあればそれでいい」

「そう……なら、私の知ってる限りは話してもいいわ」

アスカの言い回しに奇妙な違和感を覚えつつ、ヘファイストスは了承する。それくらいなら別に構わない。書類仕事をしながらでも充分行えるだろう。そう考えて語ろうとすると、アスカが先に手で制した。

「無論、対価は払う。私が貴公に渡せる最大限価値のある物をな」

「……いえ、別にいらないけど。たかが話をするだけだし、何か貰うような事でも……」

ヘファイストスの言葉は、途中で途切れた。いや、アスカが何処からともなく取り出した物が、強制的にヘファイストスの思考を千切り取った。

紅の瞳が、限界まで開かれる。鍛冶の女神が映すのは、灰髪の小人族^{バルウム}が小さな手に抱く物。本来、下界に在り得る筈のない——天界にすら存在し得ない物。

ごとりと執務机に置かれた“それ”に、ヘファイストスは全てを奪われていた。思考も瞳も、肉体の制御すら奪われたように、ヘファイストスは吸い寄せられるように“それ”を手に取り、瞬きすら忘れて見続ける。

「貴方……これ……」

無意識に眩かれた震える声に、アスカは常と変わらない、平坦な表情で答えを示した。

「――『楔石の原盤』。私が見つ最高峰の、神々の鍛冶素材。きつと貴公なら、その価値を理解できると判断する。」

故に神へフアイストス。私はそれを対価に、ヘステイアの物語を望む」

静寂に満ちた執務室。そこに差し込む陽光だけが、ずっと彼女らを照らしていた。

更に翌日。ベルが『神の塔』^{パベル}に向かうのを見送ったアスカは、ギルドでエイナ・チュールと対峙していた。

「……………」

「……………」

ギルド内を席卷する冒険者達の喧騒も届かない、ロビー隅にある面談用ボックス。防音設備の整った一室で、エイナは緊張の面持ちで、アスカは半眼の無表情で向き合っている。

双方口は開かず、重い空気だけが漂っていた。

(……………何か言ってくれないかなあ、もお……………)

口元を固く結んだ表情を崩さないエイナは、気まぐさで胸が一杯だった。目の前の人物、アスカは相変わらず感情の読めない人形のような顔立ちで、身じろぎもせず座っている。

一応この面談はアスカの謝罪の場、という事になっているが、当の本人は口を開く様子がない。円滑な会話を促そうにも、アスカに苦手意識を抱いてしまったエイナから沈黙を破るのは不可能に近かった。

「……………この度は、謝罪の場を用意して頂き感謝する。エイナ・チュール」

「え、あ、はい」

一向に打開されない重い空気にエイナが瞑目して心中で唸っていると、アスカが急に喋り始めた。とっさの事にエイナは頓珍漢な反応をする。数秒経って、ハツとしたエイナは内心羞恥を抱きつつギルド

の受付らしい完璧な笑顔を作った。

「いえいえ、こちらこそ、必要のない担当官アドバイザーでしかない私のために、時間を取っていただきありがとうございます。アスカ氏。」

今更何の御用があるのかは存じ上げませんが、私にも仕事がありますので、支障を出さない程度に手早く済ませてくださいいね？」

無論、例の一件に関しては非常に怒っているエイナは、言葉に多分な毒を吐かせてもらったが。ハーフェルフの見目麗しい顔立ちには、アスカに対する私怨めいた感情が目に見えない圧力となって表れている。

しかしそれが自分のためだけでなく、ベル・クラネルを危険に晒した事への私的な感情が含まれているのは明らかだった。少なくともアスカには太陽の戦士が太陽に向かって太陽賛美をする事以上に自明であったため、素直に受け止めて深々と頭を下げた。

「済まなかった、エイナ・チュール。貴公に働いた数々の非礼、その全てに対し謝ろう。私には出過ぎた真似だった。」

貴公はベル・クラネルを助けてくれた。アレにとつては厳しいものだったろうが、それ故に貴公の教えに救われた事もあると、ベルはそう言っていた。

エイナ・チュール。貴公はベル・クラネルに必要な。私がそう思わずとも、他ならないベルがそう思っている。だから私もそうだと信じよう。ベルの信じる、貴公を信じよう。

だから貴公、本当に済まなかった。私に心などほとんどないが——それでも、心から。貴公に対し謝罪する」

頭を上げたアスカは真っ直ぐにエイナと視線を合わせる。その凍てついた太陽のような、暗い銀の半眼に嘘が宿っていない事はエイナの目にも明らかだった。それでも否定された苦い記憶のせいか、その半分閉じた瞳に気圧されつつあるエイナは、こほんと咳払いをして苦笑する。

「ええつと……アスカ氏の謝罪を受け取ります。元々私のしている事が、冒険者への余計なお節介である事は理解していましたが。今回の事は、お互い水に流しましょう」

「感謝する、エイナ・チュール」

エイナの言葉に、アスカは軽く一礼する。それから少し瞑目して、スツと瞳を半分開いた。

「さて、エイナ・チュール。謝罪も済んだところで、貴公に一つ提案がある」

「提案、ですか？」

「ああ。エイナ・チュール——私と協力しないか？」

「協力……？」

「そうだ」

アスカの唐突な提案にエイナは首を傾げる。協力とは、一体何を指しているのか。それが分からないハーフェルフの受付嬢は、あまり気は進まないがアスカの話聞く事にした。

「どういう事でしょうか？」

「順を追って説明しよう。」

まず、エイナ・チュール。貴公も気付いているだろうが、我々は根本的なところで反りが合わない。ダンジョンへ抱く脅威度の違い、危機に対する認識のズレ、そして何より——命の価値観が天と地ほどに分かたれている。

故にこそ、私と貴公の衝突は必然だった。私は必ず貴公と相容れない時が来ると考え、早々に決裂の機会を設けた。いずれ避けられぬ破滅ならば、傷の浅い内に終わらせるべきだと。

貴公を誹ったのは、それが理由だ」

「……成程。貴方なりに理があつての行動だったわけですか。ひょ・う・う・に、乱暴な手段だった事は否めませんけどっ」

「然もありなん。私は大概を暴力で解決してきたからな。自ずと手法も粗暴が目立つ」

アスカは何て事のないように言うが、言葉の内容にエイナは引いていた。「暴力で解決してきたって……」と、冒険者という荒々しい職業に近いギルド職員であるものの、暴力性を持たないエイナにとって衝撃的な告白である。見た目が完全に幼女のアスカであるなら尚更だ。

しかし、アスカがそうして来たとしても何ら不思議に思えないのが、何とも不思議な話だ。何かと侮られやすい小人族であるにも関わらず、アスカの佇まいや纏う空気は、僅かでもそれを感じられる者に侮りを捨てさせるだけの何かがあった。

エイナがそんな感想を抱きながら物理的に後ろに下がるのも気にせず、アスカは会話の軌道を修正する。

「話を戻そう。私は貴公を否定した。その後、ベルに泣かれてしまったな。アレにとって貴公は、存外大きな存在らしい。それこそ、大事な人だと恥ずかしげもなく口にするくらいには」

「ベル君がそんな事を……」

「だから私はベルと約束した。貴公との関係の改善を目指すと。

故にエイナ・チュール。私は貴公と協力したい。我々の人間性の相性からして、その辺りが最も適当な落としどころだ」

「……………事情は分かりました。この提案が貴方の……………——本当に自分勝手な都合から生まれた事も、よおーく分かりましたとも！」

「受け入れて貰えない、と?」

「当たり前ですっ!」

怒りの色を発散するエイナは腕を組んで、無表情を動かさないアスカをキツと睨みつける。

「貴方の提案の根底には、確かにベル君への思いやりがあるんですけど! うけど! それでも私に対する配慮ってのが全く足りてません!」

勝手に人の事を決めつけて、人間関係をまるで数字みたいに扱って、一から十まで貴方の都合だけで考えられてるじゃないですか!

そんな自分勝手な提案を受け入れられるわけないでしょう!?

大体、貴方は私を何だと思っているんですか! 私は確かに一介の受付嬢に過ぎませんが、ちゃんと心のある一人のハーフェルフなんですよ!?! それを使える物かどうかみたいには、利用できるかどうかみたいに考えて!

それで私が怒らないでも思っていたんですか、貴方は!!」

前回の鬱憤も合わせて、エイナはかなりの勢いで爆発していた。溜まりに溜まった激情を躊躇なくアスカに全力でぶつけていく。それ

は数十分もの間続いた。

「はあっ、はあっ、はあっ……分かりましたね、アスカ氏!? これに懲りたら、人を馬鹿にするのはもうやめてくださいっ!!」

「ああ、理解した。エイナ・チュール」

怒鳴り疲れて肩で息をするエイナに、アスカは全く堪えていない顔で頷いた。それにイラツとくるも、反応するのも疲れてしまったエイナは、机に手を叩きつけて立ち上がっていた体を椅子に預ける。

ついで大きなため息を吐くエイナに——アスカはひどく冷たい瞳で、厳然と言い放った。

「それではエイナ・チュール。私は貴公をギルドに告発する」

「……………はあっ!?!」

突然の宣告にエイナは仰天した。彼女が意味を理解して反論する前に、アスカは続け様に向こう脛を蹴りつける。

「貴公、ベルの「ステイタス」の開示を迫ったそうだな」

「うっ…………!?!」

真っ赤になつて再び怒声を上げようとしたエイナは、一瞬で真っ青に顔を塗り替えた。それがアスカに知られている事がどういう意味を持つのか、ギルド職員であるエイナには分かりたくなくても分かっってしまった。

「本来ありえない速度で成長するベルを主神に騙されているのではな
いかと心配し、勘違いしたまま下層に降りて死んでしまう事を危惧
し、仮に漏洩した場合人生を投げうつつ覚悟で、貴公はベルに「ステイ
タス」の開示を懇願した。」

これが非常に好意的な解釈である事は、言わずとも理解できるだろ
う」

「……………」

エイナは俯いたまま反論できない。アスカの言葉には多分に裏が
含まれている。

つまりは、主神の勘違いであるという可能性を口実に、「ステイタ
ス」を開示しなければ下層に降りる許可をしないと脅迫し、一方で自
身を奴隷として扱っていいと匂わせて、「ステイタス」を見せるよう要

求した。

アスカが言いたいのはこういう事だ。これでもエイナが貞操観念の高いハーフェルフである事を考慮した物言いであると分かるのが本当に腹立たしい。ぶるぶると握り拳を作るエイナに、アスカは更に畳み掛ける。

「これがギルド内外に知れ渡れば、貴公の評価下降は避けられんだろうな。ギルドとしては冒険者の詳細な情報を得られるに越した事はないだろうが、それが表沙汰になるのはよろしくない。良くも悪くも、ギルドとは信用で成り立つものなのだから。

まして今回のような担当官アドバイザーという立場を利用した「ステイタス」の開示要求は、明らかなギルドの非。流石に優秀な貴公の罷免とまでは行かないだろうが、賠償を支払う案件である事は明確だろう」

「……………」

「そして私は賠償として、『担当官の交換』と『ベル・クラネルに対するエイナ・チュールの接見禁止』を必ずもぎ取る。必ずだ。何に換えてもそれだけは確実に達成する。

それを理解してもらった上で、もう一度聞こう——私と協力してくれないか、エイナ・チュール」

「……………」 仮に、私が代案を出したら、どうしますか？」

「私の望む回答は一つだけだ」

震えるエイナの小さな抵抗をアスカは一瞬で踏み潰す。顔を上げる泣きそうなハーフェルフに、アスカは変わらぬ銀の半眼を向け続けた。その凍てついた太陽のような瞳に当てられて、エイナはがっくりと肩を落とす。

「……………」 了承、します。私は、貴方と協力、します……………」
「……………」 ありがとうございます？ アスカ氏……………」

「感謝する。エイナ・チュール」

「……………」 もおく、なんてあくどい人なの……………」 鬼ですか、貴方は……………」
「私は人だよ。その証左に、とても人臭い取引だったろう？ ……」
「ああ、エイナ・チュール」

肯定を求める言葉に、エイナは返す気力もない。俯いた顔を両手で

覆って、自分の愚かさを呪っていた。

ベルに「ステイタス」を見せてほしいとお願いした事が間違っていたとは思わない。確かにそれはベルの無邪気さと人を疑わない所に付け込んだ形ではあるが、アドバイザー担当官として、エイナ個人として、必要な事だったと断言できる。

呪っているのは、それがアスカに伝わる可能性を考慮しなかった自分の浅はかさ。苛烈で敵を作る事に躊躇いがないのは理解していた筈なのに、ベルを案じるあまりに忘れてしまっていた過去の自分を、エイナはとても呪っていた。

(……アスカ氏は、一体何者なんだろう……)

一方で、頭の片隅に居る冷静な自分エイナが問いかけてくる。アスカと呼ばれる、バルウム「灰」を名乗る無名の小人物が、どのような存在であるかを。ベル・クラネルを筆頭とした、家族「家族」以外には苛烈な人物。それが「必要ない」と否定されたエイナの私情混じりの認識だった。それに今回、新たな一面が追加された。

すなわち、人も状況も含め、目的に利するものをとことん利用する性質であるという事。ベルに頼まれたという「エイナ・チュールとの仲直り」を達成するために、エイナの心情を無視して提案をし、それを「ベルの「ステイタス」の開示を要求した」という切り札で強引に押し切った。

それは乱暴ながら剛毅で、アスカの「本質」が見え隠れする所業だ。

(……大切なもの以外の全てを、利用できるか否かで判断している……たぶん、アスカ氏はそういう人。

別に珍しくない。身内に優しくて他人に厳しいのは、冒険者によくある傾向だし)

ギルドの受付嬢として何人もの冒険者を見てきたエイナの目が、そう判断する。アスカはベルよりも、ずっと冒険者らしい性質を持っていると。

けれど、エイナは心のどこかで納得し切れなかった。推察はおそらく合っている。でも、何かを見落としている——それが分からない

エイナは、壁を透かして自分の机を幻視する。

数日前、その机の棚にはアスカの登録用紙が保管されていた。けれど今はもうない。上層部に持っていかれ、厳重な警護に置かれる書庫に封印されてしまった。

最初の内はエイナだけでなく、他の職員もアスカについて調べていた。登録した翌日に、六階層で暴れ回っているという苦情が散々来たためだ。その対応に追われた職員達は、アスカの事を不審に思い調査していた。

登録初日から六階層で生き残れるという事は、事前に『神の恩恵』をそれだけ成長させていたのだろう。常識的にそう判断した職員達が、どのファミリアに所属していたか調べていたのだ。

エイナはそれに混じって調べていたが、調査はすぐに打ち切られた。「たかがLv.1の冒険者に労力をつぎ込むな」と、上層部からお達しが来たからだ。

これのせいでエイナはそれ以上アスカについて調べる事ができなくなつた。個人的に動こうにも、調べ始めた瞬間別の仕事を押し付けられる。怪物祭の不祥事の後始末に忙しかったのもあって、エイナはロクに調べられていなかった。

(まあ、それもあるけど……たぶん、あれ以上調べてもアスカ氏の事は何も分からなかったって予感がする。少し調査しただけでも、どうやってオラリオに来たかさえ、分からなかったんだから)

壁から視線を戻して、エイナはアスカをじっと見つめる。ともすれば神のように美しく、小人族らしい童女で、けれどそのイメージをマインナスにする程の、巨大な老木の如き存在感。

エイナ・チュールはアスカから、そんな底の見えない異様な存在感を感じるのだ。それがアスカという小人族を極端に見えにくくしている。初見で分かるのは、普通ではないという一点のみだった。

(……この提案は、チャンスかもしれない。どんな協力をさせられるのかはまだ分からないけど……アスカ氏の事を知る、良い機会なのかも知れない……)

立ち直つたエイナは心中でそう思う。本当なら、ここまで拘る必要

もないが——アスカはベル・クラネルの家族だ。エイナはベルのために、アスカの事を知る必要がある。そんな使命感に駆られていた。

パシン、とエイナは自分の頬を叩く。気持ちは切り替えよう。アスカのように、逆に状況を利用してやろう。そんな慣れない事を考えるエイナは、真剣な顔つきでアスカと協力の話を詰めていった。

アスカはエイナとの協力の話に一日を費やした。というのも、エイナは普通に仕事があるので、彼女の時間が空くまで待機していただけだ。エイナの貴重な休憩時間を潰す形になったが、当然アスカは欠片も悪いと思っていなかった。

話をしている内に気付けば、日が没しようとしていた。とぼとぼと窓口に戻るエイナを見送って、面談用ボックスの外に出た途端、眼に飛び込んできた夕日にアスカはひどく苛立つ。

その感情の波は刹那にも満たない。天地を砕く残響が暗い海に溶けていくように、アスカの心に浮かぶ感情もは、全て闇へと消えていく。他人から見れば変化のない無表情を保つアスカは、ふとギルドの入口に目をやって、白髪の少年冒険者に気が付いた。小さな歩幅で近づくと、向こうも気付いたのか笑顔で手を振ってくる。

「アスカさん！」

「ダンジョン帰りか、ベル。その様子だと、今日は稼げたみたいだな」
「うん、今日はリリに……えっと、今日一緒にダンジョンに潜ってもらったサポーターの子なんだけど、リリのおかげでたくさん戦えたんだよ」

「ほう、サポーターか。……ふむ、エイナも忙しそうだ。窓口が空くまで、そのサポーターについて聞かせてくれないか」

「いいよ。あつちで話そうか」

列の並んだ窓口を見て、ベルとアスカは移動する。邪魔にならないところで立ちながらベルはサポーター、リリルカ・アーデの事をアスカに伝えた。

「リリはすごいんだよ。僕なんかよりずっとダンジョンの事に詳しく

てさ、すごく頼りになるんだ。魔石もこう、手をちよつと動かすだけで取り出せるし、リリの体より何倍も大きい荷物だつて軽々持ち運べるんだよ」

「そうか。中々優秀なサポーターのようだ」

「アスカさんもそう思うよね！ だからさ、これからもリリと組んでいきたいなつて考えてるんだ。勿論、エイナさんとアスカさんの意見を聞いてからつて決めてるけど」

「いいんじゃないか？ 私は構わない」

「本当!? 良かった、嬉しいよ！ じゃあエイナさんが許してくれたら、明日一緒にダンジョンに行こうね！」

「ああ。そうしよう」

純粹な歡喜で笑顔を咲かせるベルに、アスカもほんの少しだけ口角を曲げて頷く。そうしていると、丁度エイナの窓口の列が掃けていた。「ベルくん」と聞こえてくるエイナの呼び声に、兎のような少年は嬉々として向かおうとする。

アスカは、そんなベルとは別方向に足を伸ばす。

「済まんがベル、私は先に戻っている。用事ができたのでな」

「え？」

「夕食も別々に取ろう。私とエイナの和解については、エイナから聞いてくれ」

去り際にそう呟いて、呆けるベルを置いてアスカはギルドから出て行った。

リリルカ・アーデはベタツベタツ、とぞんざいな足取りで路地裏を進んでいた。

その手には光沢を失った腐った黒を晒すだけの短剣、《ヘステイア・ナイフ》が握られている。今日、見るからに世間知らずな、鴨が葱を背負った白髪の冒険者から頂いたものだ。

(どうして、なんで……鞆がいる……)

キラアートの硬殻を易々と斬り裂ける短剣は、豪邸が二つ三つ建

てられる値段で売れる筈だった。武器としての性能に加え、「ヘファイストス・ファミリア」のロゴをタイプする事を許された一級品の武器。

その筈が、買い取り価格三〇ヴァリスというジャガ丸くん一個にしかならない買い叩きぶりに、リリルカは怒りと困惑を^{なйма}緋交ぜにしていた。

鞆がいる。ヘファイストスのロゴが刻印された鞆が。そう考え、危険を冒してでももう一度あの冒険者と接触すべきか、リリルカが考えていたその時。

路地に差し込む夕日を斬り裂くように、その小人族^{バルウム}は立っていた。

「——リリルカ・アーデだな？」

「!？」

夕日を背に、リリルカから見える真正面の大部分を影に隠すその存在に、思わず立ち止まる。それと同時に断定的な口調が重くりリルカの耳朵を揺らした。

「……誰かと勘違いしていませんか？ 私はリリルカ・アーデなる人物ではありませんが」

「白髪の冒険者、ベル・クラネルから盗んだナイフを置いて去りたまえ」

「……!!」

とぼけるリリルカに、古びた鐘のような声の主は一方的に話し続ける。その言葉の意味を瞬時に理解し、どきりと心臓を跳ね上げさせるリリルカは、内心の動揺を悟られぬよう、努めて平静な態度を取る。「ですから、私はリリルカ・アーデではありません。見ての通り、私は男です。名前からして、貴方が探しているのは女性の方と思うのですが」

「三度は言わない。白髪の冒険者、ベル・クラネルから盗んだナイフを置いて去りたまえ」

「……話を聞かない人ですね」

男性に変身しているリリルカは、頭の中で舌打ちをしつつ逃げる準備を整えた。明らかに話の通じる類ではない。だから気付かれぬよ

う重心を移動させ、すぐさま動ける体勢を作り——懐から目眩ましの小石を投げ、同時に背後へ逃げだした。

当たったかどうかは確かめなくていい。一瞬でも気を逸らせればそれでいい。この辺りの地図は頭に叩き込んである、がむしやらに動き回ればきつと逃げ切れる。

そう判断して、六歩ほどの距離を走り——リリルカは唐突に、石畳に倒れ込んだ。

「ふぎやつ!？」

不細工な声を上げながら、リリルカは何が起こったか一瞬分らなかった。転んだつもりはないのに、気付けば倒れ込んでいた。追いつかれたらまずいと焦燥を募らせながら、無意識に自分の足へ目を向ける。

腰の下、太腿ふとももの中ほどから——リリルカの足は消えていた。

「……………えっ?？」

リリルカは眼前に広がる光景を、すぐには理解できなかった。

足がない。食事に恵まれずあまり肉付きの良くない、自分の太腿から先が、消えている。それが理解できないまま、視線を上げ、石畳にごみのように転がっている、二本の棒が目映る。

——否。それは棒ではない。リリルカ・アーデの、足だ。

その打ち捨てられた足が、急速にリリルカを現実を引き戻す。ついで、ぶしゆりと切断された太腿から血が吹き出し。神経を伝って脳に這い上がってきた痛みの信号に、リリルカは絶叫した。

「い、あ、げうつ!？」

しかし、それは叶わなかった。凄まじい力で喉を打ち据えられ、リリルカの声帯が無惨に潰れたのだ。

発しようとした声は、風鳴りにしかならなかった。ひゅーひゅーと口を通り抜ける擦過音しか出せないリリルカは、あまりの痛みに喉を押さえる。顔は激痛に悶え、瞳からは涙が溢れていた。

そんな、足を失くしたりリリルカを、小人族パルウムは無情に見下ろしていた。リリルカの中に残る、かろうじて冷静な意識が、その存在を瞳に捉える。

恐ろしく長い灰髪の小人族バルウムだった。体はリルカと同様か、それ以上上に小さく、端正な顔立ちで美しい人形人形のよう。けれどその小さな手にぶら下がる、血に濡れた包丁が様相をひどく不気味に見せている。異様に巨大な包丁だ。刃毀れの目立つ、赤錆に塗れた醜悪な刃。その形と大きさは、まるで人を斬るための、いや、解体するための道具にも見える。

それを握る小人族バルウムは、虫を見るような銀の半眼でリルカを見下ろしていた。その冷たさを通り越した無の双眸に、リルカの冷静な部分分が凄まじい悪態をつく。

（ああ、くそ、ちくしょうっ！ くそつたれめっ！！

こいつはリリを解体したんだ！ リリの足を、家畜の肉を解体するみたいにつ！

そして喉を蹴って潰した！ 叫び声を上げられないようにっ！

ちくしょう、ちくしょう、ああっ、ちくしょうっ！！ くそつたれっ

！！

こいつはリリを逃がさないように、こんな事をしたんだっ！！

こいつにとつて、最も手っ取り早くて——合理的なやり方でっ！！

虫を潰して、足と地面ですり潰してバラバラにするみたいにつ！！

悔しさと、怒りと、身を焦がす激痛でリルカの視界が真っ赤に染まる。そんなリルカの内心など、知った事ではないと言わんばかりに。灰髪の小人族バルウムはゆっくりと片足を上げ、リルカの頭を踏みつける。

その痛みでも、風鳴りが喉を通り抜けるだけ。呻くりルカの頭にゆっくりと体重をかけ、灰髪の小人族バルウムはしゃがみこんで手をリルカの懐に差し込む。そしてまさぐり、黒いナイフをそっと取り出した。そうされても、リルカには何もできない。痛みに苦しんで、喉を押さえてもがくだけ。それが、それがリルカには、何より辛く、悔しい。

リルカの人生には常に悪意が立ち込めていた。

酒に溺れ親らしい事を何一つしなかった両親、リルカがどんなに苦しくとも手を差し伸べず、搾取して弄ぶばかりだった「ファミリ

ア」。たかがサポーターと侮り、上から目線で罵倒して、正当な報酬を払わない冒険者。

世界はリリルカに優しくなかった。だからリリルカが世界を見限るのも仕方なかった。

リリルカは生きるために、汚い事に手を染めるようになった。詐欺、窃盗は当たり前、狡猾に、大胆に、自分を苦しめるばかりの冒険者を相手に金品を奪えるだけ奪ってやった。

リリルカは冒険者が嫌いだ。酒に溺れる「ファミリア」が嫌いだ。何もしない主神ソーマが嫌いだ。そして何よりも、誰よりも——弱つちくて役に立たない、愚図で誰のためにもなれない、リリルカ・アーデが一番嫌いだ。

だから、何度もリセットを望んだ。変われるのなら、もつとまじな自分になれるのならと、何度も死のうと思ってきた。その勇気もない自分が、ますます大嫌いになった。

けれど、でも、それでも——こんな最期は望んでいない。

人として扱われないのはいい。リリルカだって他人をそうしている。それにもう慣れてしまった。だから、罵倒と嘲笑の内にあっさり死ぬのは、やっとな解放されると喜べた筈だ。

だが、これは違う。この小人族バルウムは、リリルカを生物とさえ思っていない。

まるで落とした物に塵が吹き溜まったように考えている。掃き溜めの塵を捨てるみたいに——リリルカ・アーデを、扱っている。

こいつにはきつと、リリルカを殺そうとする意志すらない。単に邪魔だから取り除いているだけ。それが行動から、見下ろす冷たい瞳からまざまざと見せつけられるリリルカは、悔しくてたまらなかった。

こんな最期を遂げる自分が。何の力もない自分が。何も変えられない自分が。

誰からも、必要とされなかった自分が——リリルカは、何よりも悔しかった。

「…………ぎ、ぐう、うええつ…………」

涙が溢れて止まらない。リリルカには、それしかできない。灰髪の

小人族に抗う事もできない。命が赤い液体となって流れて、石畳に沁み込んでいくのも止められない。言葉すら、声に出せない。

意識に霧がかかっていく最後、灰髪の小人族が何かに気付いたように揺れ動いたが、もうその事を考えられる力はリリルカには残っていなかった。

悲しくて、苦しくて、悔しくて、辛くて。世の中を恨み、呪いながら、意識を手放す事しか、リリルカにはできなかった。

そして、リリルカ・アーデの心は。深い、深い闇の底へ消えていった。

「……………」

リユー・リオンは、いつも通っている『豊饒の女主人』へ帰るための近道に、違和感を覚えていた。

それを言葉にできないまま、荷物を持ってくれているシル・フロアを先導しながら、夕日の差し込む路地裏を歩いていく。

そうしていると、不意に、脇道の先の石畳の上に。見覚えのある【ヒエログリフ神聖文字】の刻まれた、腐った色をしたナイフを発見した。

「これは……………」

シルにその場で待つように告げて脇道に入ったリユーは、棒状の塊を拾い上げて確かめる。それは間違いなく、同僚の想い人、ベル・クラネルの得物だ。昨日目にした少年のナイフの記憶と、手の中にある黒い短剣が重なる。

「どうしてこんな所に……………まさか、落とした？」

凜とした声を落として、周囲を見渡すリユーは、ふと先程から感じていた違和感の正体に気が付いた。かつて冒険者であった体の五感を最大限高めて、その場の空気を感じ取る。

「……………おかしい。空気が、清涼過ぎる……………」

エルフであるリユーは森の清浄な空気を知っている。迷宮都市オラリオの雑多な空気が、それに遠く及ばない事も。なのに今喉を通る空気は、リユーの知る故郷の森のそれよりも、厳かに清められた空気

だった。

気になるのは、それがどこか作り物めいている点だ。オラリオでこんな空気を感じる以上、作家的な物なのは間違いないだろうが、どこか、そう——人臭いのだ、この空気は。

リユーが首を傾げていると、シルの聲が聞こえてくる。思考を打ち切ったリユーは拾ったナイフをしまつて、シルの元へ戻り、『豊饒の女主人』へ歩いていく。路地裏から表通りへ出た後、必死な形相の白髪の少年が横切ったのは、その時だった。

リユーとシルはその少年に声をかける。彼女らは、最後まで気が付く事はなかった。

路地裏の屋根からリユー達を見下ろしていた、暗い銀の眼光に。

「……ただいまあ、アスカさん……」

「おかえり、ベル」

その日の夜。落とした《ヘステイア・ナイフ》をリユーとシルが見つけてくれて、何とか取り戻したベルは、そのまま『豊饒の女主人』で夕食を取った。アスカやヘステイアに悪いと思っただが、ヘステイアは最近バイトのせいで時間が合わず、アスカはギルドで分かれる際に夕食は別で取ろうと提案されていたため、そうする事にした。

疲れを滲ませて地下室に降りてきたベルは、ソファアに座って見るからに高級そうな紙に文字を書き綴っているアスカを眺める。テーブルの隅には同じ紙が何十枚も束になって置かれていた。

「アスカさん、何してるの?」

「ああ、これか? なに、興味深い物語を聞いたのでな。使えるように編纂へんさんしている」

「編纂? それに物語って……ひよつとして、【迷宮神聖譚】!?」

アスカの綴る物語が愛読書バイブルだと思っただが、途端に興奮して目を輝かせる。その子供のような振る舞いにアスカは苦笑して、顔にかけている上品な銀眼鏡の位置を指で直した。

「貴公の知らない物語ではあるだろうが、英雄譚ではないよ」

「あ、そうなんだ……でも、気になるなあ。ねえ、ちよつとだけ見てもいい？」

「構わないが……きつと貴公には読めないぞ」

アスカから差し出された一枚を手にとって、ベルは興味津々といった風に、食い入るように高級紙を見つめる。けれどもその表情は数秒で崩れて、十秒も経つ頃には難しい顔になって首を傾げていた。

「……アスカさん。これってもしかして【神聖文字^{ヒエログリフ}】？」

「似て非なるものだ。私の知る、神聖な物語を綴るための言語だな」

紙から目を離して尋ねてくるベルに、編纂を進めながらアスカは答える。会話に出てきた「神聖」という言葉を口の中で転がすベルは、アスカの恰好がそれっぽい事に気が付いた。

アスカは白い布に包まれている。柔らかく仕立ての良いそれは、まるで聖女が身に着ける服のようだ。いつもの無表情ではない、真剣な瞳で編纂を続けるアスカは、どことなく神聖な雰囲気を出していた。

その滅多に見ない懸命に作業する家族の姿に、ベルは少し考えて。満面の笑みをアスカに向ける。

「ねえ、アスカさん。僕も手伝っていい？」

「貴公がか？　だが、この文字は書けないだろう？」

「書けなくてもできる事はあると思うんだ。それにさ……僕も、アスカさんの役に立ちたいんだ。いつも助けられてばかりだから」

恥ずかしそうに、けれど真摯な表情で話すベルに、アスカは手を止めて視線を向ける。ぱちくりと、容姿に見合った童女のような瞬きをして、アスカは柔らかく微笑んだ。

「——そうか。なら、手伝ってくれ」

「うん！」

「ただし、貴公が寝るまでだぞ。明日に支障を出す事は、許さないからな」

「分かったよ、アスカさん！」

二人はソファアーに寄り添って作業をした。帰ってきたヘステイアがそれを見て絶叫を上げるのは、また別の話である。

明日なんて来なければいいのに。リリルカがそう思ったのは、何度目だろう。

もう数えるのも億劫だ。どんなに願ったところでリリルカの望みが叶った試しはなく、今日も無慈悲に太陽はオラリオの空へ昇ってしまった。

「はあ~~~~~……」

早朝のバベル。冒険者達が朝早くから精力的に活動する中、噴水の前で佇むリリルカは、疲れ切ったため息を吐く。明日なんて来なければいい。今日ほど、そう思った事はリリルカにはなかった。

「——リリー！」

「あ……お、おはようございます……ベル、様……」

自分の名を呼ぶ少年の声に、リリルカは一瞬固まって、声のする方へ体を向ける。こちらに向かって手を振りながら走ってくるのは、昨日騙した白髪の冒険者、ベル・クラネルだ。

「ごめん、遅くなつて！ 待った？」

「い、いえいえ、リリも今来たところですから。全然待つてないですよ、ベル様」

固くなつた表情筋を無理やり笑顔にして、リリは受け答えをする。後頭部に手をやりながら笑う純朴そうな少年に、リリルカは少しだけ癒やされながら、きよろきよると周囲に視線をやった。

「どうしたの、リリ？」

「あ、いえ……お連れ様はいらっしゃらないのかと思ひまして。ほら、昨日ソロだったのはお連れ様に用事があったからだ、ベル様がおっしゃる仰つてたじゃないですか」

落ち着かないリリルカの様子にベルは不思議そうに首を傾げる。それに応えながら、リリルカは内心で「今日も用事で来てないんだ」というベルの答えを期待していた。

「ああ、アスカさんならホラ、そこにいるよ」

けれど、それは当然のように裏切られる。リリルカの期待なんか、やはり叶ってくれないのだ。笑顔で手を向けるベルの指先は、リリル

カの後ろを指していた。

「――初めましてだな。リリルカ・アーデ」

「――ツツツ!?!」

背後から鳴り響く掠れた声に、リリルカはビクリと大きく仰け反つて、完全に体を硬直させる。そしてギギギと、まるで錆びついた歯車のように首を回して、背後を見遣った。

そこには、ああ――リリルカが一番会いたくなかった、灰髪の小人族バルウムが立っていた。

「私に名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

そう口にする『灰』は、凍てついた太陽のような瞳で、ずっとリリルカを捉えていた。

私は神を憎悪し、神は私を■する

目の前で繰り広げられる戦いを、リリルカは足を取られないようモンスター死骸を回収しながら、じつと目を離さず眺めていた。

天井から燐光が降り注ぐ薄緑色のダンジョン内。冒険者の息遣いとモンスターの鳴き声が交錯する空間に、紫紺の光が飛来している。

それは空を泳ぐ燕のようで、だが稚拙に過ぎる動きだ。鳥の如く優雅にはいかないうベル・クラネルのナイフ捌きは、それでも「ステイタス」と武器の威力によってモンスターを狩っていく。

右手に持つのが黒い短剣、リリルカの狙っていた《ヘステイア・ナイフ》なら、左手に持つのは何の変哲もない《ダガー》だった。ギルドが支給している《短刀》よりは上、そんな程度の武器に見えるが、遮二無二振るわれる鉄の輝きはリリルカの見立てよりずっと丈夫に、ベルの戦いを支えている。

一対一の定石^{セオリ}を愚直に守るベルの戦い方は、速攻即撃、それに尽きる。モンスターが動くよりも早く攻撃し、反撃はできるだけ回避する。ともすれば防御を捨てた攻撃特化型、それがベルの戦法だ。

何ともまあ、初心者らしいやり方だとリリルカは心の中で嘆息する。ダンジョンの恐ろしさを知らない新米冒険者にありがちな、守りを軽視した付け焼き刃の戦い方だ。

これでよく生き残ってこられたものだ。最初にパーティを組んでダンジョンに潜った時、リリルカは皮肉な賞賛を浮かべていた。一方でこの『新米殺し』が現れる階層——七階層に至れる実力を持ちながら、冒険者となって一月も満たないという事実には驚いていた。

新米冒険者がこの階層に降りられる力量に至るには、どんな才能があっても数ヶ月は要する。「ステイタス」はそう簡単に上がらないし、冒険者としての知識、経験を培う期間も必要だ。だから一月足らずで降りてくるなんて普通は自殺行為でしかない。

けれど事実として、ベルは戦い抜いている。それもほとんど単独^{ソロ}だ。

それが気にならないと言えば嘘になる。だが今はとても、探る気に

もならなかった。そもそも「ステイタス」の情報なんてロクな金にならない。第一級ならともかく、下級冒険者なら尚更だ。だからリルカは金品を掠め取る事以上はしてこなかった。

(まあ、できなかつたのもあるんですけど、ね……！)

ベルとモンスターの立ち位置、周囲の状況を注意深く観察して、リルカはモンスターの死骸を安全地帯に引っ張っていく。長年のサポーター業で身に着けた立ち回りは無駄なく機敏なものだ。

だからこそ——自称サポーターであるアスカの動きの拙さは、戦っているベルにすら伝わっていたに違いない。

「あつ……」

ズンズンと迷いなく前に出るアスカにリルカは察したような声を上げる。同時に影から奇襲する『キラアアント』の鋭い外顎。下級冒険者の骨肉を簡単に裁断するダンジョンの脅威が、リルカよりも小さい灰髪の小人族バルウムに襲い掛かる。

一秒後、アスカが哀れな肉塊になるのは明白だった。リルカが耳にしてきた身の程知らずの冒険者の末路と、いつそ喜劇的なくらい、アスカの行動は重なっていた。

しかし……何とも忌々しい事に、この小人族バルウムに常識なんて通用しない。

振り抜いた、とリルカが認識できたのは、アスカの右手にいつの間にか握られていた《ロングソード》が、垂直に地面へ垂れ下がっているのを見た後。右手から飛びかかってきたキラアアントは、二つの物体となつてアスカを素通りしていく。

この間、一切表情を動かさなかつたアスカは、二つに分かれた蟻型モンスターの灰にならなかつた方を手に持ち、もう片手で最初に拾いに行った死骸を引きずり戻ってくる。

一部始終を目撃していたリルカは、頬が引きつらないようにするので精一杯だった。

(なんてデタラメな……これでサポーターとか完全にリリを舐めてますよね)

リルカが後の魔石回収を見越して計算づくで積み上げたモンス

ターの山に、アスカは恨みでもあるんじゃないかってくらい乱暴に死骸を放り投げる。貼りつけた笑顔を自制心で維持しながら、リリルカはアスカについて考えた。

まずアスカは自称サポーターだが、嘘だ。サポーターの技能など持っていないし、サポーターをするような実力でもない。この道で必死に生きてきたリリルカに言わせれば、アスカのやっている事は完全に遊びである。

それでもサポーターという一面を切り取って考えれば、破格の《スキル》を有しているのが本当に腹立たしい。ダンジョンに潜る前に説明された《スキル》について、リリルカは明確な嫉妬と羨望を抱いていた。

(どんな物でも虚空に収納できる《スキル》……そんなの反則もいいところですよ。リリの商売上がったんですよ。いえ、それ以前にリリがその《スキル》を持っていれば……)

もつとマシな自分^{リリ}であれたかもしれない、という思考を、リリルカは唇を噛んで打ち切る。どうせあの「ファミリア」に居る限り、利用されるだけだ。そう思いながら、それでもリリルカは、自分の【^{あるだけまし}縁下力持】な《スキル》と比べるのを止められなかった。

もし。もしリリルカがアスカの《スキル》を持っていたなら。この暴力的な理性を持つ幼女よりも、ずっと上手く利用できる。それを確信するリリルカは、所詮叶わぬ夢と自嘲した。

今はただ、サポーターに徹するしかない。戦闘が一段落ついたと判断したりリルカは、魔石をナイフで取り出しながら——素手で引き抜くアスカに若干引きつつ——いつものように本心を伴わない笑みを浮かべていた。

本心の伴わない笑みを浮かべながら、リリルカは少し困惑していた。

店内に響く冒険者達の談笑。見目麗しい従業員の忙しない姿。目の前に並べられた料理。楽しそうな白髪の少年の笑顔。

自分にはまるで縁のなかつた酒場の一席で、リリルカはベル、アスカと共に夕食を取っていた。迷宮探索の後、ベルに誘われた形だ。

出される料理は食材の質と料理人の腕がいいのか、とても美味しい。食事にお金をかけるなんて勿体無い、あるいはできないと考えているリリルカでも、つい進みが早くなってしまうくらいだ。

リリルカの一食の十倍以上の値段である事が玉に瑕きずだが。今夜は奢りと言われているリリルカは、一見して遠慮がちに振る舞いつつ、遠慮なしに食事を楽しんでいた。

(……何をしているんでしょうね、私は)

だから、リリルカは心の中で感づいていた。いくら奢りとはいえ、どうして自分がこんな所にいるのかを。どうしてこんな風に、楽しいと思いつながら食事を取っているのかを。

事の起こりは少し前の夕方、ギルドで換金を終えてからだだった。ベルの快進撃とドロップアイテムに非常に恵まれた結果、今日の稼ぎは実に五八〇〇〇ヴァリスという凄まじいものだった。

一般的な下級冒険者五人パーティの稼ぎ、その二倍を優に超える金額だ。望外の喜びをベルと分かち合ったりリリルカは、けれど一方で冷めていた。どうせこの冒険者ベル・クラネルも、平等に報酬を分けようとはしないだろうと。

しかし、リリルカの手元に残ったのは二九〇〇〇ヴァリス。きつちり平等に、半分渡されたのである。

独り占めしようと思わないのか——つい、そう訊ねてしまったら、ベルは心底不思議そうに疑問を返して。そのまま、「リリがいたからこんなに稼げたんだよ。だから、ありがとう。これからもよろしくね」と言つてのけた。

不思議な気分だった。そんな事を言われたのは初めてだった。目を大きく瞬かせて、ぼうつとしていたリリルカは、一緒に夕食を食べようと誘ってくるベルに、慌ててもう一つの疑問をぶつける。

「あ、あの、どうして二半分なんですか?」

「え?」

「だってパーティは、ベル様とアスカ様と私の三人じゃないですか。

「どうして三等分にしないんですか？」

「ああ、それはね」

「我らと貴公は、対等だからだ」

「え……？」

「リルルカ・アーデ。貴公は『ソーマ・ファミリア』の所属であり、我らは『ヘステイア・ファミリア』の所属だ。今回の編成は他派閥同士の組み合わせであり、従って我々の間に格差は存在しない。

我々は対等に契約を交わした。その報酬を平等に分け合うのも当然だ。そこに人数、能力の差、その他議論を差し込む余地はない」

「でも……！」

「リリ。これはアスカさんと相談して決めた事なんだ。これから先、リリみたい他に『ファミリア』の人とパーティを組むかもしれない。そうなったら対等に契約しようって決めたんだ。

はじめはつけなきやいけないからさ。そうしないと、僕達と組んでくれる『ファミリア』なんていなくなっちゃうから。僕とアスカさんの二人だけで、ずっとダンジョンを攻略していくのは無理だって、リリなら分かるよね？」

「だからリリ、悪いけど、どうか受け入れてくれないかな？ 僕達を助けると思ってるさ」

「お願いだよ、リリ」。そう言われてしまったのは、リルルカに反論はできなかつた。そんな言い方、ずるいではないか。

自分がベルに言った事——サポーターと冒険者は対等であつてはいけない。そうしなければ誰も雇ってくれない。だから自分を助けると思つて、受け入れてほしい——それと同じ言い回しをされては、受け入れない選択肢はなかつた。

そして誘われるがまま酒場、『豊饒の女主人』に連れてこられて。こうして今、一緒に食事を楽しんでいる。

不思議な気分だつた。それを悪くないと思う自分が、確かにいた。

食事を終えて、夜の路地裏。月明かりが少ししか届かない石畳の上

を、リリルカはトボトボと歩いている。

そこは地上の迷宮街。『ダイダロス通り』と呼ばれる、奇人ダイダロスが築いた複雑怪奇な住宅地域。リリルカですら足を踏み入れたくない貧民達の砦の中を、重い足取りで進んでいく。

道順は、強制的に覚えさせられた。縦横無尽、目印などすぐに見失う住宅街を、迷いなく掻き分けていく。右へ左へ後ろへ前へ、上へ下へと曲がりくねる内、最下層の全く目立たない扉の前にリリルカは立った。

深呼吸を二回して、大きな取っ手に手をかける。リリルカには重い、古びた扉を外側に開くと——ありふれた室内に一点だけ、奇妙に灯る篝火があった。

煙を起こさない、火が揺れるだけの篝火。灰と熱と、突き刺さる赤い螺旋剣が印象的なそれに扉を閉めて近づくと——暗がりから、掠れた声が擦り鳴らされる。

「来たか。リリルカ・アージェ」

「っ……」

びくりと体を震わせて振り向けば、椅子が四つある円卓の一席に、灰髪の小人族バルウムが腰掛けていた。今日ダンジョンを共に探索し、夕食を一緒に取ったアスカ——いや、その皮を脱ぎ捨てた「灰」である。

「……驚かささないください。心臓が飛び出るかと思いましたよ」

「そうか。それは済まないな」

「……………絶対済まないと思っただけでしょう……………でも、別にいいです。さっさと終わらせましょう」

意図して軽口を叩きながら、小刻みに震える足を無理やり動かして、リリルカは「灰」の正面に座る。それを確認して、「灰」は手の前に差し出し——青白い光を大きな亜麻色の袋に変えて、リリルカの正面に置いた。

「約束の報酬、後払いの十万ヴァリスだ」

「……………」

「確かめてくれ」

ジャラリと金属音を掻き鳴らす亜麻色の袋。その緩んだ取り出し

口からは黄金の輝きが漏れ出ている。ゴクリと喉を鳴らして、リリルカは震える手でそれを手に取り、青い顔で金貨を数え始めた。

こちらをじっと見続ける「灰」の視線から目を逸らすように。しかしこれまで散々リリルカを叩きのめしてきた現実が、現実主義者であるリリルカに逃避を許さない。

一枚一枚、丁寧^{テイネ}に金貨を数えながら——リリルカは「契約」までの経緯を思い出していた。

それは夕闇の記憶。昨日、いつものように冒険者を騙したりリリルカは、灰髪の小人族^{バルウム}に足を切断され、喉を潰され、頭を踏み躪られた。騙した冒険者、ベル・クラネルから盗んだ武器^{ヘステイア・ナイフ}を取り戻す。ただそのために、塵のように扱われたのだ。

リリルカはその激痛の中、世を呪いながら意識を手放した。そしてそのまま、死んだ筈だった。

けれど目を覚ました時、リリルカはこの隠された篝火の部屋に居た。御丁寧^{テイネ}に手を縛られ、目の前に切断された足を置かれた状態で。

不思議と痛みはなかった。いや、今思えば痛みを消失させる何かをされていたのだろう。【激しい鈍麻】、ひどくのろまになった肉体は、視界の端が暗く濁っていた。

「起きたか。リリルカ・アーデ」

そんなリリルカの栗色の瞳に、灰髪の小人族^{バルウム}は無表情に映っていた。変わらぬ虫を見るような瞳、銀の半眼はじっとリリルカを捉えている。

状況を掴み切れず、ぼうっと濁った目を揺らすリリルカの前で、「灰」はいそいそと置かれていた足を持ち上げ、リリルカの側に寄った。そしてぐちゃりと、適当に切断面を引っ付けて、鈍い緑色の瓶から黄金の液体を振りかける。

それによって足が回復したのは、復活した両足の鈍い感覚から理解できた。驚くりリルカに、「灰髪の小人族^{バルウム}は無理やりその液体を飲ませる。熱さと、炉に積もる灰のような味が通り抜け、潰された喉が治つ

た瞬間——急速に戻ったりリルカの理性が、瞬時に今を理解した。

「——ツツ!? ごほつ、げほつごほつ!」

「ん? エストを吐き出したか。勿体無い真似をする」

喉が完治しても口に注がれ続ける液体に、リルカは呼吸困難から吐き戻す。それを少し意外そうな顔で見、灰髪の小人族はすぐさま無表情に戻る。

そして俯いて咳き込むリルカの髪を掴み、乱暴に顔を持ち上げて、二人の小人族は正面から向き合った。

「私の眼を見ろ、リルカ・アーデ」

「っ……!?!」

髪を引つ張られる鈍い感触に目を見開くリルカは、その暗い銀色に凍てついた。灰髪の小人族の、まるで凍った太陽のような半眼には、良く分からないものが渦巻いている。

見てはいけない。その直感は、けれど無意味だ。髪を掴まれて首を回す事ができないリルカは、真っ向からそれを見続けるしかない。逸らす事を許されない中、灰髪の小人族は静かに、声を擦り鳴らした。

「まずは前提の確認といこう。貴公、目を覚ます以前の記憶は鮮明か?」

「は……はい……」

「私が誰か知っているか?」

「い、いいえ……」

「おおよその見当はついているか?」

「はい……」

「では、私に恐怖を抱いているか?」

「……は、い……」

次々繰り出される質問に、素直に答えるリルカ。答えるしかないリルカ。「ふむ」と口元を手で覆いながら、灰髪の小人族は思案顔をする。

それを見ながらリルカは、状況の把握に必死になっていた。ここは何処なのか、こいつは誰なのか、一体何が目的なのか——考えても

考えても、目の前の人物の正体以外、ほとんどの事が分からない。分かるのは、逃げられないという事だけ。

どうしようもないとリリルカは悟った。彼我の戦力差は身をもつて理解している。どんなに頭を回しても、向こうの言いなりになる以上の事はできない。そう結論付けたリリルカは、諦念と絶望でそつと体の力を抜いた。

同時に、思考を終えた灰髪の小人族バルウムがリリルカに向き直る。今度は全てを諦めた人間の腐った目でそれを見返したが、なんら頓着した様子は見せず。古びた鐘のような声は、一方的に告げられた。

「それでは、自己紹介から始めよう。」

「私に名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

「……………」

「此度こたび、貴公かどわを拐かしたのは、貴公に利用価値を見出したからだ。

私はサポーターを欲している。ただの荷物持ちではなく、迷宮を知り、手際が良く、優秀なサポーターだ。貴公はその基準を満たしていると判断した。

故にリリルカ・アーデ。一個人として、私は貴公に提案する。

リリルカ・アーデ——サポーターとして、私と契約を結ばないか？」
「……………はっ」

無意識に口から飛び出たのは、呆れと嘲笑の声だった。灰髪の小人族バルウム——『灰』の提案とやらに、一週回って余裕の生まれたりリルカは、鼻で笑って嘲るように言う。

「冒険者様はおかしな事を聞きますね。愚図で鈍臭いリリなんかと、契約をしたいだなんて。」

素直に言ったらどうですか？ リリを奴隷にしたいから四の五の言わず従えと。冒険者様の腕なら、そんな事簡単でしょう？」

「私にも事情はある。家族の前では、まともな振りをしなければなら
ない。」

だから今、私と貴公は対等だ。貴公に関するあらゆる決定権は、全て貴公の手の内にある」

「対等…………？ あはっ、対等ですかあ？ 一度辞書で「対等」の意味を

調べられてはいかがでしょう？ きつとりリリが知っているのとは違う意味が、冒険者様の辞書には書かれているんでしょうね」

自棄ヤケになってる。リリルカにその自覚はあった。相手は自分を真に人ならぬ塵のように扱い、今なお虫を見る目で視線を合わせ続ける冒険者。奇跡が起ころうと、リリルカが逆立ちしようと敵わない相手。

飛び出す声は震えている。顔は蒼白で、手先からは血の気が引いていた。それでもリリルカの嘲弄は止まらない。あるいはこの状況だからこそ、溜まっていた鬱憤が爆発したのかもしれないなかった。

「冒険者様はいつもそうですよね。傲慢で、残忍で、リリから何もかも奪わないと気が済まないんでしょう？ 役立たずと罵って、いざとなれば困扱い、リリの事を嗤いながら、唾を吐きかけるのが貴方がたです。」

——ああ、全く、本当に。見限るのに困らない奴等かたがたですね。冒険者様は」

リリルカの引きつった不細工な笑みはただの強がりだ。諦めていても、怖いものは怖い。次の瞬間、不興を買ってあらん限りの苦痛を与えられて殺されるかもしれない。そんな恐怖と戦いながら、それでもリリルカは「灰」と向き合っている。

単純に、何もしいまま死にたくなかった。今もリリルカを蝕む鮮明な記憶、世界を呪いながら自分の無力を噛み締める死に様が、何もしない事を許さない。

こんな愚図で、消えても誰も気にかけないリリルカ・アーデにも。何も変えられないと知りながら、叫びたい事はあった。塵のように殺されそうになって、初めて分かったちっぽけなプライドだった。

その小さくも、卑小である故に持ちうる弱者の矜持に、「灰」は僅かに眼を細め。瞬きをし、対等に向き合う。

「貴公の考えは良く分かった。その上で、改めて言わせてもらおう。

リリルカ・アーデ。サポーターとして、私と、対等な契約を結んでほしい」

「……………」

繰り返される言葉に、リリルカは怪訝な顔をする。

どうして対等に拘るのか。それは一から十まで「灰」の都合だろうが、サポーターと冒険者が釣り合うと考えているのなら、片腹痛い話だ。他ならぬ役立たずであるリリルカが天秤は両立しないと、本心からそう思っているのだから。

だが、「灰」はそう思っていないようだ。「灰」の可愛らしく膨れた唇は、その可愛さを嵐で吹き飛ばすような無表情の下で小さく動く。

「私は貴公に利用価値を見出している。」

貴公は良いサポーターだ。迷宮をよく調べ、鷹のように俯瞰する目と使いこなす能を持ち、技術と経験を持ち合わせている。良いサポーターだ。何より貴公は、人の澱みをよく知っている。それは私が欲する者に近い。

私には家族がいる。貴公が武器を奪った冒険者、と言えば分かりやすいか。

アレは純粹で、無垢で、真つ新たな男だ。人の穢れを知らず、また知つたとしてもその在り様を、おそらくは変えない。人の世において稀有な、愚直で、それ故に眩しい男だ。

私はアレの役に立ちたい。だが、そのための力が足りない。私にはサポーターとしての能力が致命的に欠けている」

「……自慢ですか？ 冒険者様なら、そんなの当然でしょう。リリだって、なりたくてサポーターをしているわけではありません。これしか道がなかったから、仕方なく覚えただけです」

「だからこそ、私は貴公を必要としている。」

専属と定めたからこそ、貴公の能力は高い。進むべき道が一つしかないと理解した人間の、諦念を抱えてなお前へ進もうとする力の大きさを、私はよく知っている。

だから貴公と、私は契約を結びたい。他の誰でもない、リリルカ・アーデを私は選択する。

後は貴公の、「返答次第だ」

断言される「灰」の言葉は、真つ直ぐにリリルカの心に落ちる。

何か^{ソウル}が渦巻く銀の瞳が、それが真実だと告げてくる。

リリルカは自棄になつていた感情から理性を取り戻した。同時に素早く思案し、確認するように矢継ぎ早に質問する。

「仮に断つたらどうしますか？」

「話は終わりだ。貴公を解放し、私は去る」

「リリカがそれを信じるとでも？」

「それは貴公の勝手だ。私に語る以上の保証は出せない」

「……リリのした事を許すんですか？」

「私の目的は達成された。《ヘステイア・ナイフ》を取り戻した以上、利用価値のある貴公を殺すのは無為だ。だからこうして提案している」

「……リリが提案を受け入れるとでも？」

「それもまた、貴公の勝手だ。私に語る以上の勸奨^{かんじょう}はできない」

「……報酬は、ちゃんと支払ってくれるんですよね？」

「勿論だ」

鷹揚に頷く「灰」に、リリルカは目を閉じて考える。

「灰」の言葉に嘘はないだろう。それは間違いない。確証は何もないが、「灰」の瞳に嘘はなく、その性質も嘘を好まないトリリルカの観察眼が訴えてくる。

そしてまた、容赦もない。リリルカが生きているのは利用価値があったから。「灰」にサポーターとしての知識経験がなく、リリルカにはそれがあつた。そういう運の巡り合わせでこの場は成立していて、ボタンが一つ掛け間違えば今頃は呆気なく死体になつていた筈だ。

推測だが、リリルカに頷かせるつもりで動いてもいる。リリルカが起きてから傷を治したのは、生かすも殺すも自由自在だと認識させるためだ。恐怖と諦念でリリルカの視野を狭め、意志決定を誘導する。嘘は言わないが、行動に躊躇もない。目的の達成のためなら、おそろく何でもするのだろう。

それらを加味した上で、考える。どうすれば最善に辿り着けるのか。

提案を受け入れる。これは有りだ。対等な契約を結びたいと言っ

ているし、報酬も支払うという。問題は契約と報酬の内容が明言されていない事。だからひとまず保留する。

提案を断る。これも有りだ。言葉通り、〃灰〃は何事もなく解放するだろう。口止めに殺されるかもしれないが、吹聴せず、またあの少年を狙わず、故意に接触しなければ問題ない筈だ。一応本命とする。

答えず逃亡する。無しだ。ともすればあつきり見逃してもらえらるかもしれないが、危険が大きい。何より逃げられるわけがない。却下する。

逆に強請る。大穴だが自殺行為だ。億に一つくらいはゆすりたかりが成功するかもしれないが、失敗すれば早々に見切りをつけられるだろう。〃灰〃はたぶん、愚者を求めていない。却下する。

その他、様々な可能性を考え、リリルカは再び質問してみる事にした。具体的には契約の仔細について。それ如何によつてリリルカの行動は決まる。

「契約の内容と報酬を教えてください」

「契約は私とベル、二人の編成パーティに加わる事。サポーターとして貴公には同行してもらいたい。

報酬は迷宮探索一日につき、二十万ヴァリスだ」

「……馬鹿ですか貴方は。契約内容はともかく、そんなアホみたいな報酬につられると思ってるんですか？」

「信用がないのなら分割しよう。前金で十万、後金で十万だ」

「……………リリは随分信用されているんですね。持ち逃げしてくださいって言ってるようなもんですよ、それ」

「その時は、私の見る目がなかったと反省しよう。そして貴公とは二度と契約を結ばない。それだけの話だ」

「……………」

栗色の瞳で銀の半眼と相對して、そこに嘘はないとリリルカは確信する。髪を掴まれたまま目を閉じて、何度か深呼吸をしたりリリルカは、カツとまぶたを開いてはつきりと言った。

「いいでしょう。私は貴方と契約します。それでよろしいのですね？」

「冒険者様」

「感謝する。リリルカ・アーデ」

「灰」は一つ頷いて、髪を掴んでいた手を放した。今になって痛みを訴えるリリルカの栗色の髪に乱雑に黄金の液体をかけて、「灰」は拘束していた縄を解く。

解放されたリリルカは異様に目を輝かせた状態で立ち上がった体を伸ばし、それから時間をかけて「灰」と契約の仔細を詰めた。

断言しよう。あの時のリリルカ・アーデはどうかしていた。いくらなんでもこんな危険人物と契約を結ぶだなんて、正気の沙汰とは思えない。

金貨を数え終わり、きつちり十万ヴァリスある事を確認したりリルカは、大事に大事にしまいながら、過去の自分をこれでもかと呪う。
(馬鹿じゃないですか! いや本当に馬鹿じゃないですか!)

報酬につられたのは認めましょう! 半ばヤケクソになっていたのかもしれないです!

でもそれでも、どうしてあの時のリリルカは自分が真つ当な判断を下していると思ひ込んでいたんですか!)

あの時のリリルカは極限状態だった。死ぬような目に遭わされて、どこぞと知れぬ場所に誘拐され、痛覚を鈍らせる何かをされて、脅しつけるように契約を持ちかけられた。

休む間もなくそんな事をされたリリルカの精神がまともであった筈がない。覚えているだけでも、驚いたり、冷静になったり、急に自暴自棄になったり、また冷静になったりと、明らかに情緒不安定だった。リリルカの正常な判断力は事が始まる前から奪われていた。

そんな精神状況で考えた事なんて、一見して正道であつても中身は滅茶苦茶だ。あの時リリルカがすべきだったのは、即決で断つて逃げる事だった。あれ以上、「灰」に関わるべきではなかったのだ。

しかし現実には、契約をきつちり交わして、前金の十万ヴァリスを頂いて丁寧な帰された。利用している安宿まで送られて、部屋で呆けていたりリルカが我に返った時、抱えた絶望たるやいかばかりのもの

か。荷物に混じる十万ヴァリスの輝きがリルルカに追い打ちをかけた。

（馬鹿馬鹿つ、リリの大馬鹿者っ!!）

殺されかけた相手にお金で絆ほどされるなんてベル様の事を笑えませんっ！ 確かに報酬は美味しいですし、仕事は今までで一番やりやすいですし、分け前だってちゃんと貰えるチョロい仕事ですけども！

いやいや何考えてるんですかりりはっ!? こんな思考に陥っている時点で相手の思う壺です！ 幸いな事に契約は一日更新、報酬は頂いた事ですしさっさとんずらしますよっ！）

ぐるぐると頭の中で考えながらさっさと荷物を背負ったりりは、精一杯取り繕った満面の笑みを「灰」に向ける。そして別れの言葉を言おうとして、硬直した。

「ア……アスカ、様……そ、その金貨の山、は……？」

「うむ。リルルカ、貴公の働きは素晴らしい物だった。私の想像以上にな。ついては、追加報酬を払うべきだと考えた。これはその代金だ」

「そ……それは嬉しい評価です、けど……いい、一体いくら積んであるんですか……？」

「八十万ヴァリスだ」

「はちっ……!?!」

その圧倒的な金額——今回用意された報酬の四倍の値段に——リルルカは完全に言葉を失った。思わず背負った荷物を落としそうになって、慌てて体のバランスを取る。

「しよ、正気ですかっ……!?!」

「私の正気を疑うか。そこは私自身、狂っていないとは言いが……まあいい。

私はこの追加報酬に関して、契約金も改めたいと考えている。私が最初に提示した二十万ヴァリスに、追加報酬の八十万ヴァリス。計百万ヴァリスを今後の日当として支払おう。

前金についても、最大限貴公の意志を尊重しよう。望むのなら全額前払いでも構わない。ああ、そういえばパーティに所属している間、

使用したアイテムの代金はこちら持ちだったな。手間を掛けさせるが、詳細をまとめて書き出してくれると助かる」

「……………かですか」

「ん？ 聞こえなかったな。済まないがもう一度言ってくれ」

「馬鹿ですかアスカ様はあああああああつ!?!」

「灰」の一方的な話に途中から俯いていたリリルカは、溜まりに溜まった活火山のように爆発した。それを正面から受けて、やはり「灰」は動じない。しかしリリルカの方もそんな事では止まれなかった。

「一体どこの世界の住人なんですかアスカ様はあつ!?! こんな詐欺でも言わないような法外な報酬をサポーター如きに支払うなんて、頭にも湧いてるんじゃないですか?! シロアリみたいに頭を噛んで噛んで苛むような虫がっ!!」

「いや、そんな筈は……だが、私もまた人の膿。白面の虫も湧こうものか…………?」

「例えを本気で取らないでください怒りますよ!! 訳の分からない事言っていないで、ご自身がいかに世間知らずで非常識でとつてもとつても変であるかご自覚してください!!」

貴方は本当に心臓に悪くて嫌なんですよりりはあつ!!」

素っ頓狂な反応を返す「灰」に、若干泣き言を入れながらリリルカは頑張つて反駁する。こんなリリルカに都合が良すぎて堪らない話は、特大の地雷がありますよとあらゆる情報手段を駆使して宣伝しているようなものだ。

ましてそれが自分を殺しかけた相手からの提案であるから性質が悪い。断つたらどうなるか、どうもしないと分かっているもお腹の辺りがきゆうきゆうしてくる。栗色の目に涙を溜めながら、激憤でようやく本音をぶちまけられるリリルカは、ここぞとばかりに吐き散らす。

「最初に会った時から思っていました、アスカ様はおかしいですっ! リリを塵のように扱ったあの一件もそうですし、かと思えばこんな報酬をポンと支払う道楽者、貴方の事が掴めなくて今日一日どれだけリリが怖がっていたか分かりますか!?!」

「そういえば努めて目を合わせようとしなかったな。まあ、健気であつたと思う」

「感想がそれとかホントおかしな人ですねぇっ！ そんな貴方に現実つてものを嫌という程教えてやりますよっ!!」

一旦区切つて、リリルカは大きく息を吸う。そして目元を拭つてキツと“灰”を睨みつけた。

「いいですか!? まず貴方はリリの事を優秀なサポーターだと思つているみたいですが、全然まったく勘違いです！ リリ程度のサポーターなんてそれこそごまんといいますし、なんならアスカの方がずっと凄いです！ サポーター顔負けの反則《スキル》を持つているんですからね！」

「私にとつてはありふれた技能スキルなのだがな」

「リリが話してるんですから黙つててください！ それで、そんなリリにこれだけの大金を払うのは詐欺師か大馬鹿と相場が決まっています！ お金で釣つて騙して追い剥ごうとする魂胆が見え見えです！ 残念ながらアスカ様は大馬鹿に分類されるようですけどね！」

そもそもサポーターを雇つておきながら、稼ぎ以上の報酬を支払う時点で意味不明です！ しかも稼ぎ自体はきっちり折半するとかイカれてるとしか思えません！ 裸に鉄兜を被つて両手に松明を持ちながらドラゴンに挑むくらい馬鹿で間抜けでありえない話です！

貴方がやっている事はそれくらい、誰が見てもおかしい事なんですよっ!!」

バアンツ、と最後は円卓を両手で叩いて、リリルカは強く言い切つた。呼吸を大きく乱す詐欺師の小人族バルウムに、“灰”の様子は変わらな

い。ただじつと、まぶたの半分降りた瞳でリリルカの目を見つめ続けている。そして数拍おいて、“灰”は静かに口を開いた。

「リリルカ・アーデ。貴公は一つ勘違いをしている」

「……何ですか？ これだけ言つてまだ馬鹿が治らないんですか、アスカ様は」

「私の愚かさなどどうでもいい。重要なのはそこではない。」

私はな、リリルカ。本当は貴公にそこまで価値を見出してはいないのだ」

「え……？」

銀の光が音も無く輝く。ソウルが渦巻き、絶対的な真実を叩き込む眼がリリルカを捉える。

「正確には、貴公の力を認めはしているが、わざわざ契約するまでもないと考えている。貴公に語った事は嘘ではないが、大袈裟だった事は否めない」

「じゃあ、なんで……」

「ベルが、そう望んだからだ」

呆然とするリリルカに、アスカは滔々と答える。

「貴公が良いと、ベルが言った。サポーターとして一緒にダンジョンに潜るなら、リリルカ・アーデを選びたいと。ベル・クラネルがそう望んだ。」

だから私は貴公と契約した。《ヘステイア・ナイフ》を奪い返す都合上、そのまま解放しては貴公が姿を眩ませるのは明白だ。故に誘拐を断行し、契約を迫った。ベルの望みを叶えるためにな」

「……リリに、有利な契約は……」

「貴公に断らせないようにする口実だ。生半可では逃げるだろう、そう考えて断れない金額を提示した。今回の値上げは、それでも契約の続行を渋ると判断した故、吊り上げた。」

「金銭を欲する貴公が、決して拒絶しないように」

「……は、はははっ……」

明かされた真実に、乾いた笑い声を上げてリリルカは倒れ込むように椅子に体を預ける。貼りついた笑顔の下で、思う事は一つだけだ。

（――ああ、リリは。一体何を勘違いしていたんだろう）

「灰」と契約したのは、リリルカがまともな状態じゃなかったから。ばつくなかったのは、「灰」が恐ろしかったから。報酬を受け取ってすぐに帰らなかったのは、大き過ぎる金額に目が眩んだから。

リリルカが今日、「灰」との契約に従った理由は様々だが、その中に一つだけ、ほんの小さな想いがあった。

(———こんなリリにも、価値を見出してくれる人がいる)

それはずつとリリルカが願っていた事だ。『灰』が与えてくれたのは、残念ながら歪であったが。それでもリリルカを一個人として対等に扱い、価値を見出してくれた。

リリルカ・アーデが良いと選んでくれて。他ならぬリリルカ・アーデを頼ってくれた。

それが単なる利用価値であっても良かったのだ。リリルカの小さな小さな、けれど誰も叶えてくれなかった願いを、僅かでも満足させてくれたから。

けれど実際は———単なる、玩具おもちゃ扱いだった。

リリルカ・アーデが良い。家族ベベルがそう言ったから、リリルカは大枚をはたいて買われただけだった。子供に玩具を与えるように、リリルカはそう扱われたのだ。

滑稽だ。笑えてくる。子供の欲望を慰める玩具として買い取られないか。必要とされていると思えば、まさしくただの道具じゃないか。壊れるまで遊ばれて、飽きられたら捨てられる。ただそれだけの、道化の玩具。

(ああ、なんて馬鹿らしい。勝手に期待して、勝手に失望するなんて。リリルカはいつから、そんな夢見がちな乙女になったんですか?)

分かっていていた筈だ。この世界は、リリルカに優しくない。夢を見たところで叶う訳がない。ずつとずつとそうだった。今更何が変わると期待していたのか。

リリルカの心に、今日の出来事が次々浮かぶ。ベルの拙い動き、アスカのサポーターを舐めたサポーター業。酒場での夕食と、少年の笑顔。楽しいと思えた小さな一時。

それら全てを破却して、リリルカは濁った目を『灰』に向けた。

「———本当に、報酬として百万ヴァリス頂けるんですね?」

「約束しよう。貴公が望むのなら、全額前払いしよう」

「ではそのようにお願いします。ああ、できれば金貨ではなく宝石の類であると嬉しいのですが」

「ふむ。ならばそちらを用意しよう。ただ、実際の価値の証明はでき

ない。貴公が鑑定し、報酬に足りなければ追加する。それで構わないか？」

「はい、構いません。そもそもリリに文句なんてありませんから」
歪んだ笑みを張り付けてリリルカは「灰」を嘲笑う。勝手が分かれば、あとは簡単だ。「灰」は、要は貢ぐ女なのだ。あの純朴な少年のためにリリルカを差し出すなら、せいぜい搾れるだけ搾り取ってやる。

（日に百万ヴァリス……それだけの稼ぎがあれば、リリの目標にぐつと近付きます。いえ、それ以上の稼ぎが期待できるでしょう。）

なんとたつてアスカ様は、手段を選ばないお方ですから。やり過ぎたら切り捨てられるでしょうが……逆に言えば、程度を弁えるなら多少お金がかかっても文句は言わない筈です。

今日だつてリリが分け前を四対六にしていたのを、アスカ様は気付いていた筈。でも指摘しなかったという事は、ベル様にバレさえしなければ、チョロまかしても見逃すのでしょうか。そもそもアスカ様は金銭なんて興味がないのでしょね。

アスカ様は本当に、ベル様基準のお方ですから。ベル様のためなら何だつてする、そういう人ならリリだつて遠慮はしません。リリの目標のために——アスカ様には生贄になつてもらいます」

悪人面を隠しもせず、リリルカは「灰」へ手を差し出した。「灰」は目を細めるのみで、小さな白い手でそれに応える。

「それではアスカ様、これからよろしくお願いします」

「ああ、よろしく。リリルカ」

手を握り合つて、リリルカは篝火の部屋を後にした。扉を閉めた後、空に浮かぶ月のように口端を引き裂きながら。

そうやって悪い顔を意図して顔に刻み付けないと、リリルカはやっていられなかった。怒り、悲しみ、侮蔑と羨望、そんな感情が渦を巻いてリリルカの心を乱している。

それを全部無視して、リリルカは無理やり己の目的のために行動していた。そうしないと、立ち止まってしまう。

あの少年の笑顔だけが、リリルカの心から消えてくれなかった。

リリルカとの契約更新を終えた「灰」は『ダイダロス通り』を抜け、ホームへの道のりを歩いていった。その表情はいつも通り、無に半眼が乗っかっている。

(さて……リリルカ・アーデはどれだけ持つか)

内心で考えるのはリリルカの雇用期間について。「灰」は元々、この契約がごく短期間に収まるだろうと予想している。リリルカの金銭に対する執着を推測した結果だ。

「ソーマ・ファミリア」——リリルカの所属する、酒造の資金集めをするためだけの酒神の派閥。『神酒』に取り憑かれた彼の眷族たちは、上納金によって神酒を飲めるか否かが決まるため、常に金に飢えている。

そんな「ファミリア」をリリルカが嫌悪しているのは明白だった。そして神酒に酔った様子もない彼女がなおも金銭を求めるのは、脱退を狙っているからに違いない。そう判断した「灰」は、百万ヴァリスという大金でリリルカを釣り上げた。

それも長くは続かないだろう。リリルカの言う通り、サポーターに支払う報酬としては法外もいいところだ。これだけの金銭を日当として支払えば、すぐにリリルカの目標金額に到達するのは火を見るより明らかだった。

そうなれば必然、契約を切られ姿を消される。それだけの事をしたと自覚する「灰」は、その時はその時で仕方ないと考えていた。

(例えベルの望みであつても、出会いと別れは避けられない。分かれる時が、いつかは来る。我ら不死人であろうとも、それが変わる事はなかった。

金銭で繋ぎ止められないのなら、そこが私の限界だ。これ以上はまともな手段でリリルカを留められない。口惜しいが、諦めるしかないか。……ベルをどう宥めたものかな)

既にリリルカが雲隠れした後の事を考え始める「灰」は、角を曲がった先に手押し車を押した灰色のローブの神物を発見した。肩に

かかる群青色の髪を風に任せる後ろ姿に、「灰」は暗い嫌悪を表し、感情は闇に霧散する。

そうやって理由は不明のまま神を嫌う「灰」は、無視して先へ進もうとした。相手が神だからこそ、挨拶など絶対にしない小さな幼女は早足で神の横を通り過ぎ——視界の端に捉えた手押し車に乗っかる物体に、ぴたりと足の動きを止める。

「へステイア……？」

「む？」

「灰」の眩きに反応して手押し車を押す男神も止まる。それを無視してまじまじと視線を這わせれば、そこに居たのは間違いない「灰」の主神、へステイアだった。

顔は赤らみ、酒気が呼吸にこれでもかと思っている。荷物のように運ばれながら幸せそうに酩酊している主神へステイアの姿に、さしもの「灰」も重心が僅かにブレた。

「……何をしているんだ、我が主神は。場末の濼おわりでも見ないような醜い様を晒すなど……」

「へステイアが主神とな？ ふむ……美しい銀の瞳に艶のある灰髪、人形のように端正な顔かんはせの小人族パルウム……もしやそなたはアスカ、ではなからうか」

「……私に名前はない。ただ「灰」と呼ばれている。

そちらこそ、我が主神の盟友である神ミアハとお見受けする」

妙に容姿を褒めてくる男神——ミアハの品のある笑顔に一歩引きながら、「灰」、いやアスカは最低限度の礼儀を取った。常ならば敬意なく呼び捨てにするのだが……手押し車にすっぽりと収まる主神の姿から察するに、眷族たる己には払うべき礼儀があるとアスカは判断していた。

そんな小人族パルウムの心中を知ってか知らずか、長身の端麗な男神は爽やかに微笑む。

「うむ、私がミアハだ。それにしても、聞いていた通り愛い小人族よ。へステイアの子供である事だ、お近づきの印にポーシヨンを一つかがかな？」

「……有り難く受け取ろう。感謝する、神ミアハ」

「なに、気にするな。零細ゆえ、売り込める時に売り込むと決めているのだ。これを機にぜひとも我が「ファミリア」を御愛顧ねがいたい」
「……己を零細と知るのならば、商品が無償で配るのは逆効果ではないか？」

「ふははっ、それはそうなのだが——そなたは美しい。男として、見栄の一つも張らなくてはな」

「……………そうか」

腰を落とし、慈愛の表情で目を細めてミアハはアスカの頭を撫でる。永い不死の人生で一度としてされてこなかった行為に、アスカは困惑しながらもう一步引いた。このような事態にアスカは全く慣れておらず、従って対応を測りかねていた。

だから強引に流れを断ち切る事にする。視線を合わせるミアハから意図して目を逸らし、醜態を見せつけるヘスティアへ向いて掠れた声を擦り鳴らす。

「……………それはそうと、我が主神は何故このような事になっている？」

済まないが、説明してくれると助かるのだが」

「ああ、ヘスティアか。ううむ、どう言ったものかな……………」

難しい顔で立ち上がって指に顎を置くミアハに、アスカは大体の事情を察した。

「余計な気は回さなくていい。私が知りたいのは真実だ。ヘスティアの沽券などその辺りに捨ててくれ」

「いや、しかしだな……………」

「残念ながら、ヘスティアの評価は私の中では既に最底辺でな。今更何を聞かされようと、これ以上の失望はない」

「……………相分かった。ヘスティアの子供の頼みだ、私が断るわけにはいかん」

ズイツと爪先立ちをして顔を寄せる幼女の瞳に本気を見たミアハは、内心で盟友ヘスティアに謝りながら全てを話す事にした。流石に酒場の片隅で愛を叫んだ顛末は語らなかつたが……………全てを悟ったような顔をするアスカは、露骨に白い目をヘスティアに向ける。

そしてミアハに向き直り、深々と頭を下げた。

「……………この度は、我が主神の数々の失態、その肩代わりをして頂き感謝する。そして多大な迷惑をかけた事、ヘスティアの一族として謝罪する」

「むう……………大仰にされるのは困るのだが……………」

「済まないが、付き合ってくれ。我が主神は貴公を無理に付き合わせ、酒に飲まれ愚痴をこぼし、潰れた拳句に奢らせ、あまつぎ剩えホームへの移送を押し付けたのだ。

これで謝らねば、「ヘスティア・ファミリア」に——ひいてはベルの尊厳に傷がつく。それを私は看過できない」

「ベルのためか……………うむ、それならば受け入れよう。顔を上げよ、ヘスティアの子よ。そなたの想い、確かに頂戴した」

「感謝する」

アスカの真意が聞き及んでいた通りと知り、ミアハは快く受け入れた。ミアハも認める真っ直ぐで純朴な少年、ベル・クラネルのためにアスカは頭を下げている。己ではなく家族を第一に考える姿勢にミアハは好感を抱いていた。

同時に、ヘスティアが敬われていない事にほろりと涙しそうになったが、致し方ない事だろう。アスカはヘスティアの醜態をおそらく別の形で知っているのだ。顔を上げる美しい幼女の心情を、真偽の読めぬ神ながらミアハは正確に見抜いていた。

「それではヘスティアはこちらで引き取ろう。これ以上、貴公に迷惑はかけられない。支払った額も返金しよう」

「いやいや、一度切った身銭を返してもらうのは忍びない。そなたには憂いを強いるが、ここは一つ、私の顔を立ててくれ」

「……………分かった。しかしヘスティアは私が運ぶ。これは譲れない」

「ならばこの手押し車を貸そう。そなたにヘスティアは大きいからな」

「だが、これには商品が積まれている。借りるわけには……………」

「私もついでに行けば問題あるまい？ 丁度酔いを覚ましたいと思っていたところだ、いい散歩になる。何より、夜道を女子二人で歩かせる

わけにはいかんしな。

これは私も、譲れんぞ?」

「……………いいだろう。暫し、御同行願う」

人差し指を立てて笑うミアハに、アスカは渋々承諾した。平時、無表情の眉目は小さくしわが寄り、やりにくそうな雰囲気を出している。それを知ってか知らずか、ミアハは楽しげに話しかけながらアスカと共に廃教会へ歩いていった。

翌朝。ヘスティアは見事な二日酔いに陥っていた。それをアスカは放置する事にした。

もはやアスカの中にヘスティアに対する尊敬はゼロだ。元からなかつたかもしれないが、家族としての情は芽生え始めていた。ベルのついでになら手助けしてやってもいい、そう思っていたアスカの枯れた人間性は、昨日の醜態で木端微塵に吹っ飛んでしまった。

生憎とベルには酩酊女神の真実が伝わっておらず、ミアハの言葉を大真面目に受け取った少年は、本気で神様の心配をしている。

ベルらしい、とアスカは看病を任せて、リリルカに本日の探索中止を伝えるに行った。大荷物を背負った濁った瞳の小人族は、一瞬だけベルの姿を探して、偽物の笑顔を大きく顔に貼りつける。

「それでは契約に則り、報酬をきっちりいただきますね」

ヘスティア派の都合による探索中止の場合、報酬は全額支払う——そういう契約を結んでいたアスカは、空元気に弾んだ声に頷いて百万ヴァリス分の宝石を渡した。人目につかないところで渡されたノームの宝石にリリルカは目を輝かせ、「これからもよろしくお願いしますね、アスカ様」と嘲笑しながら去っていった。

これでアスカの琴線を見極めてやっているのだから大したものだ。悪意の底を生き抜いたリリルカの観察眼は確かである。ベルの推薦ありきではあるが、アスカがリリルカの能力を評価しているのは事実だった。

《ヘスティア・ナイフ》を盗んでさえいなければ、もう少し良好な関

係を築けたかもしれない。アスカにしては珍しくそんな事を考えながら帰宅すると、そこには慌てるベルに無理やり縋りつく駄女神ヘステイアの姿があった。

「かつ、神様あ!? もうこれ以上はツ!?」

「ベル君に抱きしめてもらおうと痛みが和らぐんだよ……ボクを助けると思っただけさー」

「で、でもおっ!?」

「……………」

酒臭さを垂れ流しながら甘えまくるヘステイア。真つ赤になつて困り果てながら、それでも主神を慮って突き放す事のできないベル。いたいけな少年の良心に、ヘステイアは見事に付け込んでいた。

それを眺めるアスカは、何とも言えない表情をして、深い深い溜息を吐いた。

「ア、アスカさん! 助けてください!」

「……看病は貴公に任せると言っただろう。私は知らん」

「ええっ!? アスカさん!? アスカさあーんっ!?」

天国のような地獄の中で一筋の光明を見たようなベルをばっさり切り捨てて、アスカは早い足取りで部屋の奥に向かった。色恋沙汰にまるで疎いアスカは、このような状況で自分が何の役にも立たないと良く知っているのだ。

むしろ祖父の訓導を受けたベルの方が、まだ対処法を理解している。残念ながら、それを実行できる度胸がベルにはないようだが……それはもうアスカであつてもどうしようもない事だ。

ベルから見えないところで親指を立てるヘステイアに適当なジェスチャー、手を振るだけの小さな「了解」を返して、アスカは簡易に作られた仕切りに入り、聖女一式を身に纏う。そしてベルの悲鳴を環境音に、物語の編纂作業を進めるのだった。

リリルカをパーティに加えたダンジョン探索は順調に進んでいた。ベルが戦い、リリルカがサポートし、アスカが傍観する。素人以下

のサポーターの真似事に痺れを切らしたりリルカに指摘された結果、このような形となっていた。

戦闘は特に支障ない。元々アスカは本当にベルについていくだけで、戦闘には一切参加していなかった。なけなしのサポーター業も本職のリルカがいる今、アスカがすべき事などほとんどない。

例えばそう——ベルが注意を怠り、絶命の危機にでも陥らない限りは。

「ダメ——っっ!!」

リルカがそう叫ぶ前に、アスカは動いていた。

『ニードルラビット』に奇襲を受け、『キラアント』に組み敷かれた状態。振り上げられた鉤爪がベルの命を奪う前に、暗い銀眼の不死はその手に武器を顕現させる。

刑事の突撃槍、《チャリオットランス》を用いた槍突撃^{ランス・チャージ}。人の身で、だが不死刑の馬車の如く、流れる灰髪が閃光となって倒れたベルの上を通り過ぎる。

その一瞬で、アスカはベルを組み敷いていたキラアントともう一匹を貫いていた。正確に急所を抉られた蟻の怪物が外骨格を震わせ中、アスカは回転し、ニードルラビットに回し蹴りを叩き込む。

不意を打たれたニードルラビットはベルの方向へ吹き飛ぶ。そのままリルカの放った魔剣の炎に飲み込まれ、モンスター群れは呆気なく全滅した。

「……はっ、はっ……」

一瞬で拭われた危機にベルは上体を起こして断続的に息を吐き出す。死の予感に荒れ上がった心を落ち着かせるように呼吸を整え、ベルは近づいてくるアスカによれよれと笑顔を向ける。

「あ、ありがとう、アスカさん。助かったよ……あいたっ!」

が、その笑顔はアスカの手刀によって遮られた。

「ベル、貴公、油断したな。手酷い油断だ、蛾にも劣る」

いやに醒めた瞳で見下ろすアスカにベルは震え上がる。こういう時、アスカは容赦を投げ捨てるとよく知っているからだ。腰の抜けた体は、無意識に正座していた。

「油断、慢心、それを悪とは言わない。油断とは余裕であり、慢心とは自信の裏返しに過ぎないからだ。」

だからこそ、本質を理解しなければならぬ。永遠の緊張も恒久的な全力も人には為せず、必ずどこかで緩みを生む。

その緩みをいつ見せるのか、見極めを貴公は怠った。今の危機はその結実だ。何一つ、不可思議ではない」

「ごめんなさい……」

「謝罪はいらん。重要なのは、繰り返さない事だ。」

いつかまた危機に瀕し、変わらぬままであるのなら。覚悟しておけ、いかに貴公とて、こんなものでは済まさない」

アスカがそこまで言い切るとベルは真っ青になったまま石化していた。青ざめた白兔に瞳を尖らせ、アスカは灰髪で空を切るように振りかえって視線を切る。

そのまま棒立ちのリリルカに近づいて、懐から三つの魔剣を取り出した。

「受け取れ。冷氣、雷、炎の魔剣だ」

「え、は、えっ?」

「貴公の支援は適切だった。貴公は戦闘においても適切な行動を取れると私は確認した。」

これはその支援のための道具だ。使い道は、貴公に任せる」

事も無げにアスカは言うが、リリルカは理解が追いついていない。ベルの死を幻視して、無我夢中で虎の子の魔剣を振るっていた。そんな自分の行動さえ分かっていない。

ましてアスカの動きは目で負えず、瞬きの間もなく去った危機に呆然としていたのだ。急な魔剣の譲渡など、すぐさま理解できなかつた。

それでも、正座したまま動かないベルに視線を向けると——リリルカは差し出された魔剣を受け取りもせず、慌ててベルの元へ走る。

「ベル様! 無事ですか!」

「あ……リリい……」

リリルカが肩を揺らすと、ベルは錆びた歯車のように首を回して青

い顔を見せる。それにホツとしつつもリリルカは説教をし始めた。アスカの説教の上に重ねられた追い打ちにベルは弱り切った顔をす
る。

そんな二人をアスカは遠目に見ていた。暗い銀の瞳は、静かにリリルカを測っている。

これまでのリリルカを顧みれば、一連の行動は不自然と言えよう。希望を持たず、現実を直視し、手段として金銭を欲する。それがアスカの見立てたりリルカ・アーデの根幹だ。

それに従えばベルの危機を助ける理由はあっても、アスカから魔剣を受け取るよりベルの安否確認を優先する筈もない。弱さを自覚し、だからこそ強かなりリルカに、自己の利益に優先するものなどない。そう考えていたアスカにとって、目の前の光景は矛盾している。魔剣をしまう事すら忘れて説教し、支離滅裂な発言をしながら、どこか安心したように顔を赤らめている。昨日の探索休止の際はあれほど濁った目をしていたりリルカが、だ。

「……………」

それが如何なる結果を招くのか、アスカには分からない。

だが、あるいは、確かめるべきなのかもしれない。

守った憧憬を瞳に映し、アスカはベル達の側へ歩いていった。

半ば強制的にリリルカへ魔剣を渡してから二日間、アスカは物語の編纂に勤しんでいた。

理由はリリルカの都合によりパーティを組めない事、それに追隨してベルがダンジョン探索を休止しているためである。

魔剣を渡した後、ダンジョン内で昼食を取った時に見えた不和。リリルカとの間に広がる溝に、ベルは苦悩していた。

そんなベルをアスカは放置している。相談されれば話はするが、他派閥である以上やれる事は多くない。あくまでもリリルカの問題であり、余計な真似はしない方が良いとアスカは論じた。

ベルは納得していなかったが、自分の無力も理解していたのだら

う。それでも鬱屈を捨てきれず、昨日今日と引きずっている。

仕方のない事だ。アスカはそう割り切って、編纂の傍ら本拠ホームの清掃や食事を共にする事でベルの気分転換を図っていた。それが功を奏したのか、今は『豊饒の女主人』にベルは出かけている。

空のバスケットを抱えて地下室を飛び出したベルを見送って、アスカは編纂を続けた。そして作業を終えた頃、ベルは帰ってきた。

その手に分厚い白色の本——魔導書グリモアを携えて。

「——」

「ただいま、アスカさん」

「……ああ、お帰り。ベル」

ベルに言葉を返しながら、アスカの視線は魔導書に固定されている。不思議に思ったベルが銀の瞳の先を辿り、照れ臭そうな笑みを浮かべて本を見せた。

「あ、これ？ シルさんから借りてきたんだ。気分転換にどうですか。誰かの忘れ物らしいけれど、誰かに預けた方が良かったみたいだし、ちよつと甘えちゃった」

「そうか。では、それが何か理解しているわけではないのだな」
「え？」

きよとんとするベルを置いて、アスカはソファアーにかけ直す。テーブルの上を片付け、どこからか取り出した黒色の本をテーブルに添え、ぼんぼんと隣を叩いて座るよう促した。

首を傾げながらベルが従うと、白色の本をテーブルに置くよう指示する。黒と白、二つ並べられた本を前に、アスカは淡々と説明を始めた。

魔導書グリモア。それは魔法の強制発現書。『神秘』と『魔導』、二つの発展アビリティを極めた者にしか作成できない希少著述本。最低でも数千万ヴァリス、場合によっては億以上の価値がつく一筆入魂の一品である。

また使い切りである事を聞いたベルは真っ青になり、石膏の像のように固まった。何気なく借りた一冊の本がそこまで価値のある物とは思わなかったのだろう。滝のように汗を流す白兎をアスカはじつ

と見つめる。

そして少し時間を置いて、アスカは唐突に切り出した。

「魔法が欲しいか、ベル」

「え？」

「魔法が欲しいかと聞いている」

「そ、そりゃあ欲しいけど」

「ならば、これを使うがいい」

そう言つてアスカはテーブルに置かれた黒色の本をベルの方に寄せた。持ってきた白色の本と同様に幾何学模様の描かれたそれにベルはハツとして目を見張る。

「こ、これって、まさか!？」

「魔導書だ。私の私物だな」

「アスカさんの!?! そんなの使えないよ!」

「何故だ？」

「だ、だって……」

ベルはしどろもどろになりながら理由を並べる。

「魔導書って僕なんかにも出ないくらい高いし、そんな貴重な物を使うなんてもったいなさすぎるし、そもそもアスカさんの物だし……」

「ベル」

申し訳無さそうに魔導書をチラチラ見るベルの頬に手をやって、アスカは視線を合わせた。交錯する深紅と暗銀ルベライトの輝きを近づけて、幼女は古びた鐘の声を発する。

「貴公は、魔法が欲しいと言っただろう？」

「そ、そうだけど」

「そして目の前に、それを手に入れる手段がある。何を迷う事がある？」

「でも……」

「ベル。貴公は、冒険者だろう」

顔を寄せてアスカは諭すように言う。

「冒険者が、今この場にある機会を逃すのか？ 今を逃せば二度と手

に入らぬやもしれん、これはそういう代物だ。貴公が迷う理由は、それを覆すほどののか。

魔法が欲しいのだろう、ベル。ならば貴公は、これを使うべきだ」
「……………」

アスカの言葉に息を吞んで、ベルはゆるゆると魔導書を見た。おそるおそる手を伸ばし、逡巡して、幾ばかの時間が経った後、少年は表情を固くしてアスカへ顔を向けた。

「……………本当に、いいの？ アスカさん」
「ああ」

「これはすごい財産だし、本当ならアスカさんが使うべきだって思う。それでも、いいの？」

「ああ」
「……………アスカさん。僕は、魔法が欲しい。

モンスターを倒すための、凄い力が欲しい。

弱い自分を奮い立たせるための、大きな武器が欲しい。

僕が憧れた、英雄みたいな——魔法が欲しい。

そのために僕は、この魔導書を使わせてもらう。いや、使う。僕にはこれに代えられるものなんて何もないけど、それでも。

僕は、僕のためにこれを使うよ、アスカさん。だからこれを……………その、えっと……………僕の物にしたい、です」

「ああ、いいぞ。それでいい」

なけなしの意気地を総動員して言い切ったベルに、アスカは柔らかく微笑んだ。

「私は嬉しいよ。一端の我儘を言うようになったじゃないか、ベル」
「ご、ごめんなさい」

「罵ってはいない。だが、貴公は時に遠慮が過ぎる。こうして我儘を言ってくれた方が、助け甲斐もあるというものだ」

黒色の魔導書を大事そうに抱くベルを見届けて、アスカは白色の本を手を取った。そのまま立ち上がり、地下室の出入り口に向かう。

「それでは、これは私が返しに行こう。貴公はゆっくりそれを読むといい」

「え、でも、それは僕が借りた物だし」

「野暮用もある、そのついでだ。貴公の魔法、楽しみにしているぞ」

背中越しにそう言つて、アスカは階段を登つていく。その瞳は先程まで家族に向けていた暖かさはなく、冷たく、暗い銀光が輝いていた。

「シル・フローヴァはいるか」

『豊穰の女主人』にて開口一番、〃灰〃はそう言い放つた。昼時を過ぎ客の姿もまばらな店内に響いた声に、サボりつつ掃除をしていた茶色の毛並みの猫キャットピープル人が真つ先に反応する。

「ニヤニヤ？ おミヤーは確か、白髪頭といつも一緒にいる小人族バルウムかニヤ？」

「そうだ。ベルが借りた物を返しに来た」

「借りた物つて……その本ニヤ？」

首を傾げるアーニヤが、〃灰〃の右側を指差す。長い灰髪を揺らし、て幼女が小脇の本を差し出すと、「ニヤニヤ〜？」とアーニヤは顔を近づけて目を細める。

小さな唇を尖らせてゆらゆらと尻尾を揺らす猫人は、思いついたようににピーンと尻尾を天に伸ばした。

「あー、思い出したニヤア！ シルが見つけた忘れ物ニヤ！」

「アーニヤ、どうしたの？ そんな大声出して」

「あつ、シル！ この本見るニヤ！」

「本？」

丁度そこにやってきたシルにアーニヤは、〃灰〃を掲げて見せる。シルは無表情で持ち上げられる半眼の小人族バルウムに目を瞬かせて、その手にある白色の本に驚きの声を上げて口元を隠した。

「これつて、ベルさんに渡した本ですよね」

「ああ。不要になったからな、返却しに来た」

「不要になった？ それつてどういう……」

「シル・フローヴァ」

古い鐘の声が言葉を遮る。〃灰〃は真つ直ぐにシルを眺め、はつき

りと断言した。

「手出しは無用だ」

「え?」

「用はそれだけだ。邪魔をしたな」

困惑するシルを放って、するりとアーニヤの手から抜け降りた。灰はトコトコと店外へ去っていった。杲然と見送る二人は、ぽつりと言葉を零す。

「一体何だったんだろう……本も置いていったし。ベルさん、どうかしたのかな。気になっちゃうよ」

「ミヤーはそれよりも、がっちり掴んでた筈ニヤのに生きの良い魚みたいにすっぽ抜けた事にびっくりなのニヤ……何者なんだニヤー?」少女たちの疑問に答える者はいない。代わりに「サボってんじやないよ、馬鹿娘どもお!」と女将の声が轟き、二人は慌てて仕事に戻った。

再び店の奥に飾られた魔道書は、いつしか忽然と消えていたという。

ホームに戻ってくると、ベルは魔導書を枕に突っ伏していた。

目を覚ます気配はない。見た目に変化もないが、おそらく魔法発現のための何かが起こっているのだろう。

眠るベルに毛布をかけて、アスカはさらりと白髪を撫でる。口元をほんの少し緩めて、彼女はベルから離れ壁に寄りかかった。

目を閉じ、ソウルの海から本を取り出す。小さな手のひらに現れたのは分厚い点字聖書——ヘスティアの神話を元に作り上げた、二つの【奇跡】の物語だ。

すでに編纂を終えた聖書を開き、浮かんだ点字を指でなぞる。指先から導かれる物語を一字一句違いなく、『記憶スロット』に刻み込む。巻末まで指を滑らせ、全ての物語を読み終えた不死は、本を閉じてゆつくりと瞳を鎖した。記憶の中に、その物語は確かな形を成していた。

奇跡として十分な体は保っているようだ。使える事を確認したアスカは適当に《タリスマン》を取り出して、早速試してみる事にする。廃教会の地下室、神の血を分かち合った家族が二人。眠る少年の横顔を、暖かな光が照らしては消えていった。

「……ん。ヘステイアが帰ってきたか」

一通り奇跡を試したアスカは、神特有のソウルの気配に《タリスマン》をしまう。点字聖書もソウルに溶かし、自らの主神を待った。

「ただいまー……」

「おかえり、ヘステイア」

「今日はホント疲れたよお……なんだってヘファイストスは今日に限って視察になんか来るんだ……おかげで一日中みっちり働かされて筋肉が……あれ？」

ベル君、どうしたんだい？ 本を枕になんかしちゃって」

借金返済の労働を嘆くヘステイアは、机に突っ伏すベルを見るなり疑問の声を上げた。アスカは説明しつつ背中を押してベッドへ誘導する。

「魔導書を読ませた。今は魔法習得のために眠っているのだろう」

「なるほどー、魔導書をねー。それならあんな風に寝ちゃってるのも納得だよー」

「そうだな。ベルが起きるまで休むと良い。私は夕食の準備をしよう」

「そうさせてもらうよ、アスカ君。それにしても魔道書かー。魔道書、魔道書………グリモア魔道書アっつ!？」

ベッドに寝転がったヘステイアがぐでぐでと呟くのを尻目にアスカが準備を進めていると、ヘステイアが悲鳴と共に飛び起きた。人体の転がる音に目を向けてみれば、勢いが強すぎたのかベッドからずり落ち頭をぶつけた女神が悶絶していた。

「全く、何をやっているんだ、我が主神は……」

アスカは嘆息して、呻くヘステイアに『隼石』を握らせて砕かせる。馬鹿馬鹿しい使い方だが、何より手っ取り早い回復方法だ。ついでに助け起こしてベッドに座り直させたアスカは、女神の横に座りながら

平坦な声で尋ねた。

「それで、どうした？ 急に大声を上げて」

「どうしたもこうしたもあるもんか！ なんでベル君が魔道書なんてものを読んでるんだ！ ていうかなんで魔道書があるんだ、おかしいじゃないか!？」

頭痛の取れたヘスティアは泡を飛ばす勢いで捲し立てる。首元を掴まれてがつくんがつくん揺さぶられるアスカは、微塵も揺らがない表情の下で言葉を擦り鳴らす。

「魔道書は私の私物だ。ベルが魔法を欲しいと言ったから使わせた。説明はそれで十分だろう」

「十分だけど十分じゃないっ！ なんで君が魔導書なんか持って……あれ、なんでだろう、全然不思議じゃない……」

「ならば良からう。離してくれ」

ヒートアップしていたヘスティアは、アスカなら持っていてでも仕方ないと妙な納得感を抱いてしまい拍子抜けする。

その隙にアスカは首元の腕を解いた。するりと抜けた感触に微妙な顔をしつつ、ヘスティアは自分より小さな幼女を見遣る。

「……なんだか理不尽な納得を味わった気分だよ……でも、なんで君は魔道書なんて代物をもってたんだい？」

「故あって譲り受けた。それだけだな」

「その故つてのをボクは知りたいたいんだけど……」

「まだこの話を続けるのか？ 経緯はどうあれ、魔道書は既に使った。もう戻りはしない。そも、私の私物をどう扱おうと貴公には関係なからう」

「いやまあ、そうなんだけどき……仲間外れにされてるみたいで寂しいじゃんか……ボクだって君の家族なんだぜ？」

しおれたツインテールの真ん中から上目遣いの瞳が覗く。寂しげに揺れる青い色に、アスカは半眼を更に狭め、透明な息をついた。

「ならば、貴公にも関係のある話をしよう。

以前、私は貴公と約束をしたな。私の持つ力について、いたずらに広めぬよう努めるといふ約束だ」

「え？ ああ、うん。君の素性は間違いなく神々の格好の的になるからね」

「私は一度それに同意したが、そのままでは不都合が生じるようになった。だから、私が見込んだ相手に対してはそれを明かし、場合によつては継承する許可が欲しい」

「君が見込んだ相手に対しては、か。うーん、話すだけならともかく、継承って言うとは……それはつまり、君の力の使い方を教えるって事だろ？」

「ああ、そうだ」

「……本当なら、極力避けてほしいけど……ボクは君を信じてる。なら、君が見込んだ相手もきつと大丈夫だ。」

うん、だから許すよ、アスカ君」

「感謝する」

「いいよ、そんな畏まらなくてもさ。」

それはそうと、この事がボクにどう関係しているんだい？」

「……そうだな。その辺りはベルが起きてから、話すとしよう」

「あ、おい、アスカ君？」

ちらりとベルを見てそう答えたアスカはベッドから立ち上がって夕食の準備に戻った。台所で揺れる長い灰髪に「自由だなあ」とヘスティアは苦笑して、「ボクはベル君でも起こそうかな〜！」と勢い良くソファにダイブする。

女神の笑声と少年の悲鳴を背景に、灰髪の少女は黙々と食事を用意した。

ベル・クラネル

L v. 1

力：B774↓A812 耐久：F388↓E472 器用：B7

90↓A813 敏捷：A889↓S901 魔力：I0

《魔法》

【ファイアボルト】

・速攻魔法

《スキル》

□

「ふむ、速攻魔法か……」

ベルの「ステイタス」が書かれた用紙を眺めて、アスカは顎に手を当てる。

速攻魔法。それはアスカの知るこちら側の魔法の知識にはないものだ。一番近いもので言えばおそらく『超短文詠唱』型の魔法だろう。一言二言の詠唱で魔法を放つ。威力にはそう期待できないが、速射性と利便性を備えている。ベルの発現した魔法はおそらくその類と思われる。

「ステイタス」から読み取れるのはその程度だ。アスカはこちら側の魔法について詳しくない。ヘステイアの方がまだ詳しいだろう。顔を上げ、銀の瞳を隣に向けると、同じ予想に至ったヘステイアがそれを伝えていた。今すぐ試したがっているベルを苦笑いで宥めながら。

「ベル。魔法が発現して良かったな」

「あ、はい、嬉しいですよ！ 魔法書、本当に、本当にありがとうございます、アスカさん！」

「礼などいいさ。貴公の役に立てれば、それでいい」

小さな両手を掴んで破顔するベルに薄く笑って幼女はこっくりと頷く。ヘステイアはそんな子供たちを微笑ましく思いながら、少しだけ陰った笑みを浮かべていた。

ベルの喜びはヘステイアの喜びだ。アスカの献身が報われ、数少ない笑みを見せるのも喜ばしい事だろう。

けれど同時に、寂しくもある。ヘステイアもまたベルの役に立ちたいのだ。

二人きりの頃はこんな風に思わなかった。ベルとヘステイアの二人三脚で互いを支え、想いを分かち合っていた。あの頃は二人とも精一杯で、こんな事を考える暇もなかった。

けれど今は、アスカがいる。悪いことじゃない。家族が増えて、あ

の頃よりもずっと幸せだ。

でも、自分とアスカを比較するようになってしまった。二人ともベルを大事に思っていて、ヘステイアはアスカほど何かをしてあげられていない。

これは嫉妬だ、理屈じゃない。ヘステイアはベルを愛している。だからこそ自分が一番だと声高々に叫びたい。

誰よりもベルを想っている、そこだけは負けたくないのだ。子供を愛する神の、それは純粹な対抗心だった。

それが妬みではなく疎外感として表れ、若い女神は寂しがっていた。

そんな主神の姿をちらりと見て、アスカは古い鐘の声を呟く。

「……さて、それではもう一つ、貴公に贈り物をしよう。」

私からではなく、ヘステイアからの贈り物だ」

「え？ ボクから？」

「ああ。ヘステイア、こちらへ」

握られた手を丁寧に解いて、アスカはヘステイアを手招きする。ツインテールを不思議そうに曲げながら彼女は近付き、三人で小さな輪を作った。

「まずはベル、貴公にこれを渡しておこう」

「これって……？」

「《タリスマン》だ。魔法の触媒だな」

「魔法の、触媒？ 杖みたいなの？」

「そう思ってくれていい」

ベルは渡された《タリスマン》をまじまじと見つめる。

質素な布を丁寧に織り込んで束ねた物のようで、どこことなくお守りに見える。一見してこれが杖と同じような物とは思えない。「これが触媒ねえ」と隣から覗くヘステイアも首を傾げている。

それを一切気にせず、アスカも《タリスマン》を両手で握って見せる。

「本来なら片手で持つだけでいいのだが、貴公は初回だ。このように両手でしっかりと握れ」

「は、はい」

「ヘステイアはベルの両手を持ってくれ。そうだな、互いに向き合つて祈るような形が望ましい」

「あ、うん」

言われるがままにヘステイアはベルの正面に座り、《タリスマン》を握る少年の手を包むように両手で持った。

するとヘステイアの手が触れた途端、びくりとベルの手が震え、段々と体温が高くなる。ちらりと青い瞳を向けると、熟れた林檎のような少年の顔がそこにはあった。

「ふふーん？　ベルくくん、ひよつとして照れてるのかい？」

「えっ!?　いや、その……!?」

「あ、手を引つ込めるのはなしだよ！　アスカ君がこう言ってるんだ、ちゃんとやらなきやねっ！」

「わ、分かっていますけど……か、神様!?　どうしてそんな手をわざわざさと動かすんですか!？」

「いやあ、ベル君がガチガチに固まってるからねえ。緊張をほぐしてあげようとね」

「逆効果ですうっ!？」

「……あまり集中を欠くような真似は慎んでくれ」

ニマニマ笑う女神は「はい」と気のない返事をして動きを止める。顔を赤くしてぐるぐると目を回すベルは、数分経ってようやく落ち着きを取り戻した。

それを確認したアスカは、《タリスマン》を胸元に寄せて次の指示を出す。

「それでは、二人とも目を閉じてくれ。触媒に意識を集中して、しっかりと祈るのだ」

「祈る、ですか？」

「ああ。ベルは神への信仰を。ヘステイアは眷族^{ファミリア}への想いを。互いに心を定めてくれればいい」

「分かった、やってみるよ」

二人は素直に目を閉じて祈りの姿勢に入る。それはアスカにとつ

てごくありふれた、聖職者の《祈り》の姿だ。

準備は整った。信仰も十分、背中も仄かに熱を放っている。自身の【魔法】が確かに発動している事を感じながら、古びた鐘のような声を、不死は静かに擦り鳴らした。

「それでは、始めよう。私の後を追って、物語を復唱したまえ。

竈火の主、祭祀の護人、慈愛を司る者——炉の女神ヘステイアの物語を」

ヘステイアにとって、それは小っ恥ずかしいものであった。

下界に降臨する前の神話時代。全知全能の神々が、天界で退屈極まりない生活の中で義務を執行していた頃の話。

ヘステイアからすればぐーたらだった赤裸々な過去を明かされるようなものだ。他の神々に比べれば大人しくとも、言い換えればそれだけ何もせずに過ごしていた証なのだから。

しかもそれが妙に美化された話になっていたのがむず痒い。特に太陽神に言い寄られた逸話、処女神となった下りなど、本当に必要だったのかと叫びそうになったくらいだ。

ヘステイアは羞恥に埋もれていた。体全体が熱くなって、顔は火に炙られている気分だった。きつと鏡を見れば、トマトもかくやという色になっていたに違いない。

けれどヘステイアは、決して祈りの姿勢を解かなかった。

羞恥に耐えかね片目をそつと開いた時、ベルは真剣だった。たどたどしく物語を追う声は、強い祈りが込められていた。

アスカもまた真摯だった。分厚い本をなぞり厳かに語る姿は、敬虔なる信徒の信仰そのものであった。

ヘステイアは、その姿を強く焼き付けるようにゆっくりと目を閉じた。体を覆っていた羞恥はどこかへすつ飛んでいた。

血を分け合った家族。この広い下界で奇跡のような出会いを果たした愛しい眷族たち。

彼らから確かに伝わってくる想いを、無視することなどできるわけ

がない。ヘステイアもまたひたむきに、眷族への想いを両手に込める。

擦り鳴らされる不死の声は、朗々と響き、やがて途切れた。物語を最後まで聞き終えた女神が、無意識に目を見開くと——仄かに暖かな燐光が、ベルとアスカを包んでいた。

「これは——」

「……ああ、成功したようだ。ベル、もう目を開けていいぞ」

アスカの声に、ベルはややあつて双眸を開く。よほど祈りに没頭していたのだろう、淡い燐光に揺れる深紅は、どこまでも真っ直ぐに澄んでいる。

それにヘステイアが見惚れていると、ベルはやつと自分の体を包む暖かさに気付いた。火の粉のような燐光を放ち、肌を暖める光に、ベルは驚いて灰髪の幼女へ首を向ける。

「アスカさん、これって……」

「【魔法】だよ。貴公が新たに手にした魔法だ」

「ええっ!？」

いつもの調子で呟かれた一言にベルは驚倒する。【魔法】？ さつき覚えたばかりの【ファイアボルト】ではない、新たな【魔法】？

訳が分からない。混乱して手のひらの光から目を離せないベルに変わって、ヘステイアはアスカに問いかける。

「アスカ君、これは一体どういう事なんだい」

「貴公は既に知っているだろうが、私は三つの魔法を有している。【魔法】、【呪術】、【奇跡】の三つだ。

これは奇跡に分類される。神々の物語を吟じ、恩恵を受ける祈り。それは神話の再現と言えるだろう。

例え虚構であろうとも構わない。稚拙だろうとも真剣で、紛れもない信仰を捧げられるのであれば、あらゆる神話は【奇跡】に足りうる。だから私はヘステイアの物語を知り、編纂した。貴公の物語とベルの信仰が、それに値すると考えたからだ。

そしてそれは、成功した。

受け取るがいい、ベル——ヘステイアから貴公への、特別な魔法

「の贈り物だ」

アスカはゆっくりとベルに伝えた。彼と彼女を包む光が何であるのかを。

ぼんやりしてされるがままになっていたベルは、耳に沁みた言葉をやつと意味を飲み込んで、破顔して泣きそうな顔で「ありがとう」と言った。

アスカに、そしてヘステイアに。自分にはもつたないくらいに家族に、神様の両手を握り返して、少年はずっとお礼の言葉を繰り返した。

ヘステイアは少し混乱していたが、心の底から感謝を口にするベルに、やがて慈愛いっぱいフの笑みを浮かべる。頭を下げるばかりの白い髪を、そつと胸元に抱き寄せた。

「いいんだよ、ベル君。君にはいつも助けてもらってる。たまにはボクも助けたいんだ。お礼ばかりなんて、水くさいじゃないか。

それでも言い足りないなら、その魔法を使つてさ、無事に帰つてきておくれよ。

君がこれからも、君の物語を歩いていける。ボクにはそれが一番嬉しいんだから」

優しく降る女神の言葉に、ベルは何度も頷いた。それを慈愛の瞳でヘステイアは見つめて、視線をアスカに切り替える。

【奇跡】はアスカが与えたもの。物語を編纂したのも彼女で、ヘステイアは自分の神話を伝えてもない。本当は自分の功績のように誇れる事でないのは分かっている。

けれど、そんな事は重要じゃない。アスカは間違いなくベルと、そしてヘステイアのために頑張ってくれたのだ。

神様が大嫌いな不死が、それでもただ、家族のために。その中にヘステイアがいる事を、アスカは認めてくれている。

(ボクは間違っていないかった。やっぱり良い子だ、アスカ君は)

ヘステイアの胸には今、色んな感情が溢れている。口にすればきつと長くなるだろう。

だからヘステイアは、満面の笑みを咲かせて。一番言いたい事を言

葉にした。

ベルと同じくらい愛しい眷族に。紛れもない、自分の本心を。

「――アスカ君、ありがとう！ 大好きだよ！」

その言葉が、アスカにとって何でもなかったのは確かだ。

ごくありふれた、何の変哲もない神の言葉だった。

だからそれはいつも通り、暗い魂ダークソウルの奥底、深海に沈み二度と浮かばぬ筈だった。

何故だろう。アスカには分からない。

それを理解する事は、これまで出来なかった。

だからこそ知らず、胸元に手を伸ばして、感じようとしたのだろう。

そこにあるべき感情の海。憎悪に凝り固まった深海の心。

冷たい闇しかない胸に、小さな暖かさが灯った事を、“灰”は理解出来なかった。

忌々しい神のそれで、けれど人のぬくもりに似た炉の言葉。

そんなもの、“灰”は知らないのだから。

“灰”は、知ってはいけないのだから。

幼女の胸元に置かれた手は掻き毟るように小さくなり、ずっと握られたままだった。

炉の加護

炉の女神へステイアの暖かな奇跡

HPを僅かずつ回復し、スタミナ回復速度を高める

またカット率、耐性も上昇する

体を覆うほのかな熱は家族のぬくもりのようだ
それは無事と帰還を真摯に願う
女神ヘステイアの慈愛の表れであろう

そして彼女は、導きに出会う

薄緑色の洞窟が続くダンジョンの上層中部、五階層。

黒焦げになったモンスター達の死骸に囲まれて、一人の少年が倒れている。

白いライトアーマーを着込んだ白髪の人間ヒューマンだ。力なく倒れた姿は糸の切れた人形のように、ピクリとも動く気配がない。

その傍に、灰髪の少女は立っていた。無表情を貫く端正な顔が、静かに少年を見下ろしている。凍てついた太陽のような銀の瞳は、半分以上にまで削れていた。

「馬鹿者が……」

擦り鳴らされた声は掠れていて、壁に吸い込まれすぐに消える。立ちて動かぬ少女の言葉に、答える者はいなかった。

少し時間を遡さかのぼれば、簡単に分かる話だった。

魔法書グリモアによって手に入れた【魔法】、そしてヘステイアの物語から生み出された【奇跡】。

一夜にして二つの魔法を手に入れたベルは、それを試したくて仕方なかった。

けれどヘステイアに止められて、すぐにダンジョンへ向かうのは諦めた。

ヘステイアが寝静まった後、こっそり行く事にしたのだ。

思わずスキップしてしまうくらい浮かれたベルの後を、灰髪の少女が追っているとも知らずに。

そして現在、ベルはアスカの前で倒れている。典型的な魔力切れ、精神疲弊マインドダウンを引き起こした結果だ。

「全く、後先考えずに使用し過ぎるからそうなる。目を覚ましたら、まずは説教が必要か」

ベルが嬉々として雷型の炎、「ファイアボルト」を乱射していたのを見ていた小人族バルウムは、小さなため息を唇から零した。ついで頭を振つ

て、ベルを担ごうと手を伸ばす。

ダンジョンの奥から人影が二つやってきたのは、その時だった。

「……アスカ……?」

「アイズ。それに、リヴェリア・リヨス・アールヴか」

現れたのは人間である金髪ヒューマンの少女とハイエルフの王女だ。冒険者の頂点、第一級を走る美しき【剣姫】と都市最強の魔道士【九魔姫】ナイン・ヘル。ダンジョン内で稀に起こる思わぬ出会いに、灰髪の小人族バルウムは手を引つ込めて彼女らと対面した。

「こんな所で奇遇だな。探索帰りに見える」

「うん、そうだよ……そっちは、どうしたの?」

「見ての通り、私の家族である馬鹿者が精神疲弊マインドダウンで倒れている。浅はかな魔法行使の結果だ」

少年を冷たく見下ろすアスカの平坦な声に、リヴェリアが無言でベルに近づく。屈んで少し診察した後、然もありなんと首を振った。

「確かに精神疲弊マインドダウンのようだ。しかしここまで自分を追い込むなど、よくやれたものだな」

「酔っ払いと同じだよ。分も弁えず振る舞うから、終いには倒れて無様を晒す。これで懲りれば良いのだがな」

「さて、どうかな。素直な美德を持つ者であれば潔いさぎよいが、捻くれ者だと苦勞する。」

この少年は恐らく前者だろうが、人は見かけによらないからな。私からは何とも言えん」

「それは実体験か?」

「——いや。単なる年の功さ」

アスカの言葉に翡翠色の瞳を瞬かせたリヴェリアは、フツと薄く微笑んでおどけるように肩をすくめた。

それを横目に眺める幼女は興味なさげにしやがみ込んで、悠々とベルを抱き上げる。

明らかに身長バランスの悪い横抱き、いわゆるお姫様だっこだが、気に留める者は誰もいない。危なげなく立つアスカは、クルリと体を入り口へ向けた。

「それでは、我らはお暇させてもらおう。お互い、特に用もあるまい」
「いや、用ならあるんだが……まあ、ここでする話でもないか。灰
〃、引き止めて悪かったな」

「ああ。ではな」

リヴェリアの台詞に首だけ振り返っていたアスカは、顎を引くだけ
の礼をして歩き出す。

長い灰髪の小人族バルラムはそのままダンジョンに消えていくかと思われ
たが——消え入りそうな少女の声、歩幅の狭い足を止めた。

「……待って、アスカ……」

「アイズ？」

「……どうした、アイズ」

アスカは再び首だけ振り返って問う。幼女を真つ直ぐ見つめるア
イズの側では、リヴェリアが軽く驚いた顔をしていた。

それに気付かない少女は、おずおずと言葉を口にする。

「えっと、その……ベルの事、私に任せてくれないかな」

「何故？」

「……お話、したくて。この前、声をかけた時、逃げられちゃったから
……」

アイズは火の消えた蠟燭のようにシユンとする。アスカは少し考
えて、以前起こった街中の出来事を思い出した。

服飾店を物色していたらベルが逃げた日の事だ。あの時はアイズ
の内面に踏み込み過ぎる失敗を犯したが、どうやらベルが逃亡した事
も気に揉んでいたらしい。

その点を踏まえ、あえて無視した幼女は冷めた瞳にアイズを映す。
「別に今でなくともいいだろう。地上で改めて席を設ければいい。」

ここはダンジョンだ。緊急性もない以上、貴公が何であれ、他派閥
の冒険者に家族を預けるのは難しい」

「……そう、だよ。無理言って、ごめん……」

アスカの正論にアイズはしよんぼりと頭を下げた。足元にとても
悲しそうに泣く小さなアイズの幻覚が見えるくらいの落ち込みよう
だ。

それでもアスカには関係ない話だが——少年を抱えた幼女が足を動かす前に、翡翠色の髪のエルフが一步アイズの前に出る。

「待て、『灰』。さっき用があると云っただろう？」

よくよく考えてみれば今すぐ話した方が良い内容だ。済まんが付き合ってくれんか」

「……それでは、地上への帰還がてら話すとしよう」

「いや、できれば二人だけで話したい。お前の家族の事はアイズに任せてやってくれ。」

大丈夫だ、この子は強い。安全は私が保証しよう」

「……………」

不死の幼女は半分閉じた瞳を狭めて、無言でリヴェリアを観察する。

アイズを庇うように、もしくは手助けしてやる母親のようにリヴェリアは少女の前に立っている。森の中心に聳える大木のような姿に、アスカはしばし黙考し、目をつむって頷いた。

「……………分かった。ベルはアイズに預ける」

「! ……いい、の？」

「私もリヴェリア・リヨス・アールヴに話がある。良い機会と捉えよう」

「済まないな、『灰』」

上品に礼をするリヴェリアから視線を移して、アスカは抱えていたベルをアイズに渡した。そのままアスカと同じようにお姫様だっこを維持するのかと思ったが、何を思ったのかリヴェリアがアイズに耳打ちする。

するとアイズは少し考えて、その場に座って自分の膝にベルの頭を乗せた。綺麗な手で白い髪をかき分けて、何やら嬉しそうである。

「……………」

アスカは何か言いたげにそれを見下ろしていたが、やがて大きく瞬きをしてリヴェリアに声をかける。

「では、行こうか」

「ああ」

少年と少女を残し、ハイエルフの王女と灰髪の小人族パルウムは地上に向かつて歩き出した。

「それで、用とは何だ？ リヴェリア・リヨス・アールヴ」

階段を登って階層を跨ぎ、ベル達から完全に離れたアスカは早速本題を切り出した。前置きもない直球な言葉にリヴェリアは苦笑する。

「リヴェリアでいい。フルネームで呼ばれるのは好みじゃなくてな」

「そうか。ではリヴェリアと」

「そうしてくれ。私もお前の事はアスカと呼ばせてもらおう」

「好きにするといい」

アスカは淡々と言葉を返す。呼び方など対して興味がないのだから。

取り付く島もないな、と片目をつむって、リヴェリアは構わず先に礼儀を済ませておく。

「怪物祭では仲間が世話になったな。先に礼を言うておく」

「こちらも世話になった。礼には値しないだろう」

「そう言うな。形式は存外大事なものだ。守って損はない」

「そうか。ではこちらも礼を言うておこう。アイズ達のおかげで楽ができたからな」

齒に衣着せぬ物言いだ。アスカの率直な言葉に思わず苦笑いが浮かんでしまう。ほんの少しだけ、娘のように想っている少女と出会ったばかりの頃に重ねてしまった。

小さく首を振って、リヴェリアは表情を引き締める。思い出に浸るのは後でいい、今はこの小人族パルウムに踏み込む時だ。

「あの時、お前はアイズ達に武器を貸与しただろう？ 確か直剣に特大剣、それから曲剣と、何だったか……」

「投擲武器の《ククリ》を幾つかだな。それがどうかしたのか？」

「ああ、借り受けた物だ。そろそろ返そうと思ってるな」

反応を見つつリヴェリアは言う。正面を向いたままの少女はどうでもよさげに言葉を返す。

「くれてやるつもりで渡した物だ。返す必要はない」

「あれ程の武器をか？ 正直、魔道士の私から見ても、相当な一品揃いだと思うんだが」

「構わんよ。供給用の武器は常にいくつか所持している。協力者の武器が尽きるなど、珍しくもない事だ」

「成程な。だが、こちらとしてはそういう訳にもいかん。色々あつてな、使うには些か障りが出るようになってしまった」

「障り？ そう特殊な武器を渡したつもりはないのだが」

「こちらは返すつもりだったからな。礼を失せぬよう、懇意にしている鍛冶派閥に整備を頼んだんだが……鍛冶師がこぞつて「これを作ったのは誰だ！」と騒ぎ出してな……」

主神に至つては「こんな武器はありえない」と断言した。おかげで混乱が膨れ上がり、整備どころではなくなつたので、回収して今は倉庫に死蔵している。

整備をせねば武器として信頼できず、かと言って鍛冶師に頼めば整備どころではなくなる。困つた事になつている訳だ」

肩をすくめたりヴェリアがちらりと横目で隣を見下ろすと、銀色の光が見返していた。こちらの話に興味を持った様子にリヴェリアは内心驚く。

『『こんな武器はありえない？ それはどういう意味だ』』

尋ねる声は擦り切れている。普段と変わりない、だがじつと見続ける銀の半眼に、リヴェリアは視線を正面に戻して事実のみを述べる。

「……鍛冶師達が言うには、品質と性能がまるで釣り合っていないらしい。」

銀色の直剣を除き、武器自体の出来栄は可も不可も無し。ただの量産品にしか見えないにも関わらず、『ククリ』を除く武器は第二等級武装の中でも上位に位置する性能だそうだ。

しかしその理由をいくら調べても、全く分からない。終いには破壊して穿鑿しようとしたので回収した。

主神に見せたのは銀色の直剣だけだが……曰く、『明らかに神の手が加えられた武器。にも関わらず、神々さえ知らない未知の手法で鍛

えられていた』——との事だ」

「成程……だからありえない、か」

「ああ、そんな矛盾した代物が存在する筈がない。例え『神の力』アルカナナムによるルール違反の武器だとしても、他ならぬ神が見逃す訳もない。

アスカ……お前は一体、何処であの武器を手に入れたんだ？」

足を止め、今度は明瞭に顔を向けて、リヴェリアははつきりと問い掛ける。理知の灯った翡翠の瞳は、暗い銀光を完璧に捉えていた。

沈黙は許さない。そんなある種の圧をハイエルフの王女は放っている。だが無表情を貫く幼女は、立ち止まったりリヴェリアに対し不思議そうに首を傾げ、事も無げに答えを返した。

「火の時代の産物だ。旅路の中、拾い集めたいいくつかの一つ。その辺りは既に語ったと記憶しているが」

「……ああ、そうだ。そうだったな」

項垂れるように頷いて、「足を止めて悪かった」とリヴェリアは歩き出す。小走りで横に並びトコトコ歩くアスカを尻目に、硬い表情のハイエルフは目を細めて黙考する。

火の時代。ロキが全面的に真実と認めた今でさえ、到底信じられない荒唐無稽な「神の時代」。

それは千年前に「古代」から推移した現在の「神代」とは全く異なる、誰も知らない時代である。

最初の火というあらゆる差異をもたらした炎。それが灯り、消えるまでの物語。

火が消えかけた時代の中で不死の呪いを受けた「灰」は、薪の王となるべく旅をした。

意志を失くした亡者、混沌より生まれしデーモン、滅びてなお忠義を尽くす騎士、放浪するかつての英雄。

そして——火の時代を築き上げ、守り続けた数多の神々。旅路に隔たるその全てに、殺され、殺し、ソウルを奪った。

そうして「灰」は薪の王となり、火を消した「灰」は狂王となった。

そう足り得たのはひとえに不死であったからだ、あの時のアスカ

は語っていた。

“ソウルの業”や『神の恩恵』^{ファルナ}によらない能力^{ステイタス}は、さして重要ではなかったとも。

「ロキ・ファミリア」にとつてはそれが最も重要であったのだが、それを聞く前にアスカは「ヘステイア・ファミリア」に所属し、もう聞く事は出来なくなつた。

(……それが残念だ、と考えるのは、流石に身勝手が過ぎるな。未だ信じ切れてもいないというのに、好奇心だけは貪欲とは)

自身の心の有り様に苦笑つて、リヴェリアは表情を引き締め直す。

“灰”。今はアスカと呼ぶこの小人族^{バルウム}の少女は、誰も知らない『未知』の塊だ。それを探り『既知』に変えていく事は、なんであれ派閥の利益になる。

それは冒険者としてマナー違反だが、致し方あるまい。常識的かつハイエルフの王女として気高いリヴェリアでも、迷宮都市の流儀は弁えている。

つまりは、隙を見せた方が悪い。怪物との戦いが冒険者の華、強者こそ正義であるオラリオにおいて、誰もが当然とする常識だった。

(とはいえ、礼節に欠ける行為は無論慎むべきだが。アスカに関してはどうも、な。

何せこの小人族^{バルウム}は隠す事をしない。行動の結果注目を集めてもどうでもいいと考えている節がある。

知られても問題ないから……ではないな。むしろ知られるのは当然といったところか。その上ですべき事は何も変わりはない。そう認識していると考えるのが自然だ。

おそらくアスカには、確固たる目的がある。そしてそれを果たす事以外に興味がない。でなければ我々に“ソウルの業”など容易く見せないだろう。

“ソウルの業”は知れ渡るだけで世界の有り様を変えてしまう。大部分は『禁忌』として明かさなかつたが、触りだけでも取り込むべきと判断するに十分な有用性を示していた。

この小人族パルウムがそれを分からない筈もない。やはり、周囲への影響など露ほどにも考慮していかないのだろうか）

厄介だ、トリヴェエリアは思う。同時にそれは冒険者として当然の性だとも。

冒険者は大抵が自分の規範ルールで動く。夢、欲念、金、渴望——自らの我に従って命を賭ける者たちが、義務と協調で成り立つ社会やすやすに易々と従う訳がない。

善神の「ファミリア」に入団したのは僥倖と言えるだろう。もしも愉快犯の神の元に渡っていたら、目も当てられない惨状になっていたかも知れない。

リヴェエリアはアスカの来歴は知っていてもどれだけの力を有しているか分からない。だからこそ恐ろしいのだ。

神を殺したと豪語する程の存在——そんな『未知』を侮るなど、日々ダンジョンに挑む第一級冒険者であるリヴェエリアにできる事ではなかった。

(……ああ。『未知』と言えば、アスカの使う【魔法】もまた、火の時代の産物なのだろうな)

長考する内にリヴェエリアの思考は脱線する。アスカの『未知』の中で最も興味を惹かれる分野に。

『対象を結晶化させる魔法』、『広範囲を凍結させる魔法』、そしてフィン達が見たという『強力な光線の魔法』……今思い起こしても、やはりあれらは『未知』の魔法だ)

今も記憶に強く焼き付いているアスカの【魔法】。都市最強の魔道士であるリヴェエリアは、既にその特殊性を見抜いている。

(詠唱、魔法マジック・サークル円、いずれも必要とせずあの威力を生み出せるのも気になるが、重要ではない。最も注意を払うべきは魔法行使の方法だ。

あの時のアスカは——魔力の扱いがあまりにも雑だった)

リヴェエリアは脳裏に記憶を奔らせる。二度の魔法行使を果たした少女の姿を。

魔力制御に関しては非の打ち所がなかった。練り上げ、保持、最大量、どれをとっても一級品。

特に完全後衛職の魔道士に必須とされる『大木の心』についてはリヴェリアでさえ脱帽する程だ。

何に於いても揺るぎない精神。それはこうして接触する度にまざまざと見せつけられている。

だからこそ、あの不自然さは容易に目についたのだ。練り上げられた膨大な魔力、それを魔法として撃ち出す際の扱いの雑さは、当時のリヴェリアの肝を冷やすに十分な光景だった。

〔魔法〕とは詠唱によって砲身を作り上げ、魔力を装填する事で発動する。

そして砲身もまた魔力だ。詠唱が長文になる程、巨大な砲身を作り上げ、維持し、それに値する魔力を練り上げて保持しなければならぬ。い。

故に必要なのは詠唱技術と魔力制御。そしてそれらを統括する何事にも動じない『大木の心』。

その観点から見れば、あんな真似は自殺行為でしかない。魔法を撃つ瞬間に雑な扱いをするなど、『魔力暴発』イグニス・フレトウスを故意に引き起こすようなもの。

だからこそ、あの〔魔法〕は異質だった。あれはアスカの魔力制御が桁外れだから成立したのではない——雑な魔力の扱いでも成立する理が、〔魔法〕の側に存在していたんだ

根本から異なる別物。あの時そう判断した違和感の正体こそ、リヴェリアが見出した事実。

〔魔法〕のようで〔魔法〕でない——火の時代に生まれし〔異法〕。それがアスカの〔魔法〕だと、都市最強の魔道士は断じていた。

——知りたい。アスカの持つ〔魔法〕を、アスカの知る『未知』を。誰も知らない、見た事もない——好奇に溢れる、まだ見ぬ世界を。そこまで考えてはたと、リヴェリアは思考が脱線していた事に気がついた。

周囲を見れば既にダンジョン一階層。地上へと続く階段も間近な大通路、『始まりの道』に差し掛かっている。

(しまった、考えに没頭しすぎたか)

リヴェエリアは失策を悟り、堪えるように額へ手をやる。本当ならもつと尋ねるべき事があつたのだが、時間を無駄に使ってしまった。ハア、と失態を演じた自分に吐息を落として、リヴェエリアはちらりと隣へ視線を落とす。

アスカは特に気にせず歩いていただろうなど思つての事だが——予想に反し灰髪の小人族は、凍てついた太陽の瞳をじつとこちらに向けていた。

「随分と長く考えていたな。余程気になると見える」

「ああ、いや……大した事じゃない。武器の処遇をどうするか、決めあぐねていただけだ」

「私はどちらでもいい。どちらにしろ、そう違いはない。それよりも一つ、尋ねたい事がある」

「何だ？」

「貴公の二つ名、【九魔姫】の由来だ。

本来魔法は三つしか覚えられない。それは『神の恩恵』において絶対であり、それ以上魔法を覚えられるのは精霊くらいなものだ。

だが貴公は、都合九つの魔法を使うという。三種の魔法を三段階、故に【九魔姫】と讃えられた。それが真実か、私は尋ねたい」

「……………それを私が答えると思つているのか？」

やや物騒な光を瞳に湛えて、リヴェエリアは呆れたように問い返す。

その心は礼儀の未熟な子供を叱る母親のそれだ。

冒険者の情報秘匿。それはオラリオにおいて当然であり、神々が下界を楽しむための大なる戒律だ。たとえ都市中に知られた自明であり、同時に破られるものであつても、正面切つて尋ねられたら「はいそうです」と頷ける訳がない。

それを翡翠色の髪のエルフの剣呑さから察したアスカは、「済まない」と一言添えて、質問の内容を変更した。

「では、都市最強の魔道士とはリヴェエリア・リヨス・アールヴである。それが間違いではないか、私は尋ねたい」

「……それは間違いはない。自賛になるが、現時点で私以上の魔道士などオラリオには存在しない。それは確かだ」

「そうか……ふむ、そうか。ならば貴公が最適やもしれんな」

「……何の話だ？」

一人納得した仕草を見せる幼女にリヴェリアは訝しげな顔をする。だが、それを問う時間はもうない。既に階段を登り切り、バベルの正面に二人は出ていた。深夜も過ぎ、一人見当たらない神の塔の下で、アスカはいつもの暗い半眼でリヴェリアを見上げる。

その瞳に映るエルフは、*「灰」* にとって利用価値のある魔道士だった。

「リヴェリア。一つ提案がある。

いくつか条件はあるが、貴公——【魔術】を学ぶつもりはないか？」
何気なく告げられた一言に、翡翠色の双眸は見開かれ。

立ち尽くしていた二人は、やがて足取りを同じくしてバベルから去っていった。

「……それで、何故貴公らはここにいる？」

「ああ、別に気にしないでくれ。少し様子を見たくてね」

「せやせや。邪魔はせえへんから、うちらにはお構いなく始めてくれてええでー」

【ロキ・ファミリア】 本拠、*『黄昏の館』*。

夜の闇が長邸を包み込み、夜番に励む団員以外が寝静まる中、魔石灯に照らされる噴水の周りには4つの人影が伸びている。

金髪碧眼の小人族、翡翠色の髪のエルフ、にやにやと笑みを浮かべる赤髪の女神。

その三人を前に、濃い青色の魔術コートの上に灰色のローブを被ったアスカは、面倒そうに鼻を鳴らした。

「……まあいい。邪魔立てしないなら好きにしろ」

「灰」 が今必要としているリヴェリア以外の二人、フィンとロキがいるのは致し方ない流れだ。

自分の一存では決められないとリヴェリアはアスカを伴ってホームに帰還した。門番には内密の件で連れてきたと伝えて通し、途中で

見かけたロキを引き連れて団長室に直行したのだ。

そのまま四人で突発的な密談が始まったが、話は早々にまとまった。

利益が不利益を上回った、それだけの単純な話である。

ロキの鶴の一声で【魔術】の習得を許可されたリヴェリアは、相変わらず“灰”を見極めようとするフィンと妙に友好的な態度を取るロキに片目をつむりつつ、幼女と向き合う。

見た目の上では王族妖精ハイエルフが教師で小人族バルサムが教え子のようだが、内実逆の二人は最後の摺り合わせを行った。

「では、リヴェリア。貴公にこれより【魔術】を教授する。同時に【魔術】に限った質問ならば可能な限り答えよう。」

その代わり、条件は必ず守ってもらう。異論はないな？」

「ああ、問題ない。早速始めてくれ」

毅然とした態度でリヴェリアは頷く。ここから先は誰も知らぬ火の時代の領域、自らを何も知らぬ赤子に見立てて貪欲に学ぶ姿勢を示した。

期待通りの反応にアスカも一つ頷いて、《魔術師の杖》で地面を突く。赤煉瓦の石畳に響く簡素な音を皮切りに——火の時代の【異法】と現代の魔道士の交わりが始まった。

ソウルとは何か。その問いに対する定義と答えは星の数ほどあるが、共通して言えるのはそれが万象の根幹を為しているという認識だ。

ソウル。最初の火が熾る前、灰色の岩と大樹と朽ちぬ古竜の時代より、それは世界に偏在していた。

有形無形を問わず、生死の境すら意味を為さない。何がしかが世界に零れ落ちる度に宿り、揺れ動き、やがて形を為し、何時しか主なきソウルへと還る。

どこから来て、どこかへ行く。誰一人底を見た事のない無限の力は、本物の不死たらんとする者にとって永遠に探求すべき事象であつ

た。

ソウルの根源を探り、ソウルの業を磨き、ソウルの理を知る。どこまでも深く、奥底へ。その過程において見出された魔力は、ソウルの探求にこれ以上ない有用な力だった。

魔力を通しソウルを求める。長い研究の中でそれは論理となり、鍛錬となり、一つの学問体系となった。

【魔術】。現代の魔法とは全く異なる、火の時代の【異法】。

その始まりは、ただ一匹のウロコのない白竜であるという。

「……にわか俄には信じられんな。一匹の竜が学問を形成し、【魔法】を生み出すなど。

お前の話でなければ、いやそうであっても耳を疑う。正体を喪なくした狂人の夢、大法螺吹きの戯れ言と言われた方が、まだ信じられる話だ。ああ、だが……」

「全て真実だ。魔術の祖は白竜シースであり、全ての魔術は彼の竜の源流を汲む。

そして本質は探求の道であり、極論を言えば魔術を使えない魔術師も成立し得る。ソウルを理解し手にする者は、魔術に拘らずともソウルの力を得られるからな。使える使えないは二の次だ。

最も、私にとつてはただの道具に過ぎないが。貴公には真の意味での『魔術師』になつて貰いたい。

すなわち、ソウルの探求者。魔術を扱う者ではなく、魔術を介し求める者。

火の時代が終つに至らなかつたソウルの果て。その業を貴公が継ぐのだ。

継承とは、古い遺志に依るのなら、きっとそれが相応しかろう」
「……………」

擦り鳴らされる声に答えず、リヴェリアは思考の海に没頭している。常に冷静で広い視野を持つ王族妖精ハイエルフには珍しい、自分の世界に閉じ籠こまっている姿だ。

長年の付き合いがあるフィンでも稀に見る光景だ。「リヴェリア？」と声をかける小人族バルウムの勇者を余所に、道化の女神は急かすように

ひらひらと手を振る。

「歴史の話はそれくらいでええやろ。それよりはよ、魔術の実物を見せてくれへん？　うちもう待ちきれんわ」

「……別に貴公に教えるわけではない。待てないのなら立ち去るがいい」

「えー、アスカたんいけずやわあ。話だけやのうて実演して欲しい言うんは当然やんか。」

なつ、リヴェリアもそう思うやろ！」

アスカの冷たい眼光に物怖じせずロキは隣に同意を求める。リヴェリアが娯楽を愛する神ロキ以上に魔術に興味を示しているのを踏まえての発言だったが、帰ってきた言葉は少し様子がおかしかった。

「そうだな。竜が始祖の魔法というなら、竜に特有の思考や仕法が反映されている筈だ。それを改変し人類に理解できるようにした、いやむしろ根底に据えて人類の手を加えたと考えるべきか」

「え……リヴェリア？」

「ならばあの威力も得心がいく。竜の力、竜の息吹——そうだ、あの結晶の魔法、いや魔術は竜ドラゴン・ブレスの息吹そのものだった。魔法円、詠唱、いずれも必要としない訳だ。竜のそれならば冗長に力を行使する理由がない。

人の身に余る力の権化。ドラゴン 竜とは元よりそういう怪物なのだから」

「ちよつ、リヴェリア！　自分どないしたん！　目がごつつうギラギラしとんでっ！」

顎に手を添えたままぶつぶつと喋るエルフの姿にロキは仰天する。慌てて肩を掴んで顔を見るも、美しい翡翠色の瞳は狂熱に浮かされたように輝いている。

「これはあかんっ！」そう直感したロキはフィンに目配せする。異変を感じ取っていた彼も強く頷いて、二人がかりで詰め寄った。

「落ち着けリヴェリア、君らしくもない。僕の知っている頼れる副団長は、いつも冷静沈着だった筈だ」

「せやせや、フィンの言う通りや！　今のリヴェリアはなんかあかんっ、踏み込んだじゃいけんとところに踏み込んだるでっ！」

「二人とも何を言っている、私はいつも通りだ。そうだと、探求ならば何も変わらない。最初からそのために故郷を飛び出したんだ。ダンジョンだろうとソウルだろうと、ああ、挑んでやるさ。邪魔などさせるものかよ……誰にも……誰にもだ……！」

「リヴェリアアーっ!?!」

「これはまずいな……」

焦点の合わないエルフを必死に揺さぶるロキを余所に、フィンは思考を巡らせる。佇む灰髪の小人族バルウムに一瞬視線を向け、すぐに切り上げたフィンは、リヴェリアの袖を掴んで強引に噴水の縁ふちまで引き寄せた。

「何をする、フィン」

「何度でも言うよ、君らしくない。未知を前に昂ぶる君は記憶にあるけれど、そこまで我を忘れなかった筈だ。」

少なくともこの水面に映っているような野蛮に過ぎる顔なんて、君はしなかっただろ?」

「……………」

強く睨みつけるリヴェリアに臆せず、フィンは噴水を指差す。天に昇っては落ちる水の群れは水面を強く波立たせているが、視線を落としたりヴェリアの眼光がいかなるものか、十分に反射していた。

繰り返される輝きにリヴェリアは無言のまま、緩慢な動作で双眸を閉じて目頭を揉み、ゆっくりと長く息を吐き出す。そして二人に頭を下げた。

「……濟まなかった。熱が入り過ぎていたようだ」

「ホンマか、リヴェリアア? 少し疲れてるんとちゃうん? 大丈夫?

おっぱい揉む?」

「調子に乗るな」

「ぐへあっ!?! ちよっ、杖で殴るのはなしやって! 冗談、ジョーダンやから! ……でも良かったあ、いつものリヴェリアア」

頭をさすりつつ安心したようにロキは笑う。暇つぶしと、そして子供たちを愛する普遍的な神の笑顔に「心配をかけて悪かった」とリヴェリアはもう一度謝った。

それを「やれやれ」と苦笑して見守っていたフィンは、そのままアスカへ言葉を投げる。

「それにしても、あんなに熱中したりヴェリアを見るのは初めてだ。原因が何か、君は知っているんじゃないかい？」

「おそらくソウルの影響だろう。ソウルとは一説に思考の糧、世界を理解するための元素エーテルという。啓蒙によってソウルを知り、流れ込む事で、一時的に意識を狂わせる事もある」

「成程ね。できれば事前に言っただけは良かったけど、そうしなかったのはあまり危険じゃないからかな？」

「そうだ。通常はあくまで一時的なものであり、そも稀な事例だ。現に貴公に影響はない。」

私としては歓迎している。ソウルへの感受性の高さは才能だ。加えて智慧ちえもある。先の考察は的を射ている。

リヴェリア。実演がたら、魔術の在り方について説明しよう

アスカはそこで言葉を切って、てくてくとその場を離れる。疑問符を浮かべる三人を余所に、自身の器から鎧を取り出し、ソウルを詰めてその場に立たせた。

隙間なく鉄で覆われた重甲冑だ。兜の細いスリット以外露出のないそれを置いてアスカは戻ってくる。そして注目を向けるように杖の先を鎧に合わせ、古鐘の声を擦り鳴らした。

「魔術師の理想は『竜の二相』と呼ばれている。白竜シースの求めた朽ちぬ古竜の姿、その内面と外面を象ったものだ。

その外面は『佇たすむ竜』。永遠を生きる古竜の静謐、揺らがぬ大樹と重い岩。逃れ得ぬ定め、移り行く淀みに佇む竜こそ、ソウルの本質を示している」

杖を掲げ前に傾けたままピタリと静止するアスカは、緩やかな詠唱を口ずさむ。白竜が構築した学問体系、完璧な理の上に蓄積する魔力は驚くほどの滑らかさで魔術の砲身を練り上げる。

数度目撃したフィンとリヴェリアは元より、既存の魔法をよく知るロキもアスカから放たれる力の波動に瞠目していた。既存の魔道士の魔法行使に見られる力強い魔力、決壊を呼ぶ荒々しさなどそこには

ない。

深く静かに、何事もなく。詠唱は止まり、魔術は発動寸前まで構築される。

「ここまでが竜の二相の外面だ。『佇む竜』に問われるのは技量と集中力……こちらでは精神力だったか。

精神力の量が規模を決め、技量が詠唱の精度を上げる。優先度は無論、精神力だ。技量は必須ではない。より高い魔術師であらんとする者が最後に至る研鑽の道と言えるだろう」

そこまで説明してアスカは横目で三人を見る。銀の瞳が見定めるのは理解の度合いだ。

リヴェリアははつきりと頷き、フィンは腕を組んで首を傾げつつ片目をつむり、ロキは興味深そうに口の両端を吊り上げている。

教授すべきはリヴェリアだけなので、彼女の理解が十分と判断したアスカは次の工程に進んだ。最大まで強化された理力を用い、膨大な魔力を練り上げる。

「魔術師の理想、竜の二相。

その内面は『吠える竜』。時代に轟く古竜の咆哮、無限を満たす力の奔流。神々が抗い、滅びてなお豪然たる吠える竜は、ソウルの偉大な力を示している」

噴き上がる魔力は構築された魔術に注がれる。集中力が魔力に変換され、魔力が主なきソウルを呼ぶ。

青白い輝きが集い、構築された魔術に収束し——最大級の「ソウルの矢」が鎧に向かって放たれた。

キーン、と独特の高音が鳴る。澄んだ硝子の響きのような音と共に光の矢が奔り、鎧の胴体に突き刺さった。

金属音と爆発音の二重奏。青白い光が火花となって散り、音を立てて鎧が倒れる。重厚な鉄の胴体が、遠目から分かるほどへこんでいた。

「竜の二相の内面、『吠える竜』に問われるのは純粋な理力。魔術の深奥、ソウルの理を解する力。

同じ魔術でも理力が低ければ石飛礫に劣り、最大であれば鎧越しで

も十分なダメージを与えられる。

竜の二相を以てソウルを力とし、竜に依ってソウルを探求する。それが魔術であり、それこそが魔術師だ。

リヴェリア。ここまでで何か質問はあるか？」

掲げていた杖を地面に降ろし、アスカはリヴェリアへ問い掛ける。食い入るように目を凝らしていた彼女は早速口を開きかけるが、その前に神速で手が上がった。

「はいはいっ！今の魔術ってうちの眷族が見た三つの内のどれに当たるんっ!? うちの見立てやとビーム撃つ魔術やと思うんやけどっ！」

「……………」

「無視かいな!？」

「……済まん、アスカ。私も気になる、答えてくれ」

先んじたロキに頭を痛めつつリヴェリアは言う。聞きたい事は別にあつたがロキの質問も気になるところだ。

だが言葉を受け取ったアスカは、ゆったりと首を振った。

「以前貴公らの前で使用したどの魔術にも当てはまらない。

【ソウルの矢】は魔術師の最も基礎的な魔術だ。系統としては【白竜の息】が最も近く【ソウルの奔流】【瞬間凍結】それらに該当する魔術ではない」

「へ……………」

何気ないアスカの回答にロキは間抜けな表情を晒す。リヴェリアとフィンもその意味をすぐに理解できない。

奇妙な空白が彼らを覆った。停止した三人にアスカは首を傾げ、ふと思いついたように歩いて倒れた鎧を立て直す。へこんだ個所に【修理】を施し、元に戻して帰ったところで、ロキが錆びた歯車のようにギギギと喉を震わせた。

「いや、え？冗談きついで……………」

「何がだ？」

「何がって…………魔法は三つしか習得できへんやんか…………なのに自分いま、四つ目の魔法、使ったんか…………？」

「ああ、その事か」

様子のおかしい三人の心情を理解したアスカは、事もなげに言い放った。

「【魔術】はこちらの【魔法】と系統が違う。文字通り【異法】であり、こちらの理に縛られない。故に魔術は三つ以上習得できる。それだけの話だ」

「……………マジで?」

「本当だ」

「……………はあああああああああああああああつ!?」

月も傾き始めた深夜の『黄昏の館』に、神の絶叫が轟いた。

「みつ、三つ以上つて、それホンマかつ!? うちらを謀たほかつてるわけじゃないんやろなつ!」

「それをする理由が私にはない。そもそも何をそんなに驚く? 魔術は『魔法スロット』を埋めずに覚えられると、最初にそう伝えただろうに」

「せやなつ、それは聞いとつたわつ! せやからうちは許したんや! リヴェリアの『魔法スロット』はとつくに埋まっとるから、それを超えて魔法覚えられるんならやる価値ありまくりやからな!」

けどな、それでもプラス三つしか覚えられんつて普通思うやろ!?!まさか四つ目の魔術があるとか思わつ……………!?!」

怒鳴り散らしていたロキは急に顔色を変えた。茹だつたタコのような赤色からサツと血の気の引いた顔に、アスカは「どうした?」と首を傾げる。

それに答えずロキはかっぴらいた目で眷族を見た。同じように驚愕を貼り付ける二人の顔も、ロキと同じ結論に達したのか軽く青褪めている。

そんな子供たちを朱色の目に映し、ごくりと唾を飲み込んで、ロキはアスカに向き直る。そして恐る恐る、確かめるべき事を言葉に変える。

「ちよ…………ちよつと待ちいや…………じ、自分、一体いくつ魔術を使えるん

……？」

恐怖が好奇心を上回る質問。聞きたくない思いを堪えて絞り出された声に、やはりアスカは呆気無く回答する。

「四七だ。同系統の魔術も多い関係上、実戦で扱う数はそれより減るがな」

「学問ゆえ、致し方ない側面だ」そんな言葉をアスカは付け加える。だが三人は、特にリヴェリアには数字しか聞こえていなかった。

四七。よんじゅうなな。それを理解した瞬間——都市最強の魔道士は、ふらりと体勢を後ろへ崩した。

「っ！ リヴェリアっ！」

どんな時でも冷静さを失わないフィンが倒れるエルフの体を支える。胴体に手を回して噴水の縁に座らせ、水に落ちないように支え続ける。

そうされるリヴェリアは表情が完全に抜け落ちていた。茫然自失、その言葉を地で行く王族妖精は、やがて長いため息を吐く。

「……見誤っていた。最初から思い至って然るべきだった……アスカに常識が通用しないなど、散々見せつけられて来ただろうに……」

四七、とはな。レフィーヤの例があるとはいえ、あれも常識の範疇だ。あつて精々私のような魔法特性くらいだろうと考えていた。全く甘い、なんて甘い。

学問体系とはよく言ったものだ。たった一人がそれだけの魔法を覚えられるなら、確かにそうもなるだろう。そしてなお、それでも届かぬ高みか……

ああ——遠いな。私の辿ったこれまでの、何よりも……」

「リヴェリア……」

常に凜として周囲の柱となっているリヴェリアの重苦しい姿に、フィンは口を噤む。

彼とて碎かれる常識に空恐ろしいものを感じている。ロキなどさつきから頭を抱えて「チートや、インチキやっ！ うちゅうのほうそくが みだれる！」などと喚いている。

神ですらそうなのだ、魔道士であるリヴェリアはそれ以上だろう。

この場の誰よりも魔法の理を理解しているのは彼女なのだから。だからこそ分かるのだろう。これから挑もうとする道のりの、あまりに遠い険しさを。

かける言葉が見つからなかった。だが同時に、フィンは信頼していた。

リヴェリア・リヨス・アールヴが、ただ打ちのめされただけで終わるはずがないと。そしてそれは、すぐに証明される事となる。

「——何か質問があるかと言ったな、アスカ」

「ああ」

「では聞くが、魔術には『魔力暴発』イグニス・ファトゥスがないんじゃないか？」

項垂れたまま口角を上げるリヴェリアが、確信をもって問い掛ける。何をどう考えたらその結論に至るのか、専門外のフィンは瞠目するが、アスカは当然のように首肯する。

「そうだな。私の知る限り、『魔力暴発』イグニス・ファトゥスに該当する現象は魔術には存在しない」

「その理由はおそらく、魔術が強固な理の上に成り立っているからだろう？」

学問体系と言うくらいだ、それも我々の魔法のような一人三つのオリジナルではない——そうだな、例えるなら規格化された研究分野。

相応に専門的な才覚を要求されるが、確立された広範で安全な技術。私にはそのように見える」

「ほう……やはり、鋭いな」

翡翠色の髪の間隙に光る瞳に、暗い半眼を尖らせる。アスカの見立て通り、リヴェリアは非常に智慧ちえが回る。

ともすれば期待以上の見返りを得られるだろう。そう考えつつ、答えを返す。

「確かに魔術はソウルの理を利用した技術だ。魔力を通しソウルを呼び、魔術を通しソウルを操る。

魔力はソウルの呼び水であり、多くの場合、魔力そのものを利用するわけではない。魔力を直接扱う事もあるが、やはりそれもソウルの理に依っている。

またソウルは魔術によって性質を変化させている。魔術が消えれば、ソウルはただの主なきソウルだ。何も為さずに還っていく。故に『魔力暴発』という現象が存在しなかったのだろう。

無論、こちら側にはこちら側の理がある。貴公らの魔法によっては魔術であつても『魔力暴発』を起こす可能性は十分にある」

「当然の予想だ。検証には時間がかかりそうだが……いずれ明らかになるだろう。そのために私は魔術を学ぶのだからな」

「うむ、良い心掛けだ」

頷くアスカにリヴェリアは不敵に笑い、フィンに礼を言つて立ち上がった。見上げる横顔にもう大丈夫だろうと微笑んだフィンは未だ混乱の渦にいるロキの元へ向かう。

噴水の側で向き合う二人。図らずも当初の望み通りになったアスカは、火の時代の魔法において重要な概念を説明する。

「それでは早速、貴公に【ソウルの矢】を実践して貰いたいが、その前にもう一つ教えておくべき事がある。魔術に限らず、全ての魔法に必要な『記憶スロット』についてだ」

「『記憶スロット』？ 『魔法スロット』のようなものか？」

「似通つた概念ではある」

呟いて、アスカは再び杖を掲げる。今度は長々と詠唱しなかつた。慣れ親しんだやり方、『記憶スロット』に刻まれた【ソウルの矢】を発動する。

一秒足らずでソウルは集い、青白い光の矢は発射された。先と同じく鎧にぶつかり、倒れ、同じようなへこみができている。

先の魔術の焼き直し、だが比べるのもおこがましい行使速度。これを杖で指し、アスカは滔々と語る。

「これが魔術行使の標準速度だ。先ほど見せたのは元来の使い方、原始より教授の過程にしか見られない古いやり方だな。

この違いは『記憶スロット』にある。『記憶スロット』は魔法を刻み込む記憶の枠であり、記憶に刻まれた魔法は詠唱を削減できる。その幅は今見せた通りだ」

「……それは全ての魔法に適応されるのか？」

「全てだ。一つの例外もなく、『記憶スロット』に記憶できない魔法はない。

故に火の時代の戦闘において、魔法は『記憶スロット』に記憶できるだけの魔法に限定された。どんなに強力な魔法であっても、元来の行使速度では話にならないからだ。

こちらではそうでもないようだが。だから貴公、既に思い当たっているだろうか?」

「……………どうすれば『記憶スロット』に魔法を刻み込める?」

話の途中から険しい顔をしていたリヴェリアは率直に問う。ともすれば【魔術】以上に、『記憶スロット』の可能性を都市最強の魔道士は見ていた。

だが、それを知ってアスカは首を横に振る。

「まずは『ソウルの矢』を記憶してもらおう。貴公は心配ないだろうが、生まれついて『記憶スロット』のない者もいる。確かめねばなるまい。

それに第一は魔術の習得だ。貴公の推測は、その後に検証するとい

い」

「そう、だな。逸る必要はないか」
　　呟くりヴェリアに首肯して、杖を背中に差しアスカは右手を前へ向ける。傅かすく者へ与えるように伸ばされた手のひらに、小さな光は煌々と輝いた。

異質な光だ。火や太陽、月、星などの自然のどの輝きとも違う。ダンジョンの淡い燐光や結晶クリスタルの反射光でもない。最も近いもので表現するのなら、暗闇、だろうか。

集い輝く暗闇、そんな矛盾した表現の似合う奇妙な光に、リヴェリアは少し魅入られていた。それに構わずアスカは眼を閉じ、永い歲月の中で体得した火防女ひもりめの姿をとる。

「それでは、私の中の暗い魂に触れたまえ」

「……………この光に触ればいいのか?」

「それでもいい。我らのやり方に倣ならうなら、跪ひざまずくのが通例だ」

「ならばそちらに合わせよう。お前の前では立場など、大して意味の

ないものばかりだ」

厳かに語られる灰の言葉にリヴェリアは即座に従う。王族妖精の矜持を隅に置き、膝を折って頭を下げる。

暗闇に満ちた瞳の中でそれを感じ取り、アスカは暗い魂を通してリヴェリアのソウルに触れる。

その在り様は、アスカの予想とは違う形だった。

「……ああ、もういいぞ」

「分かった。……これは、何か変わったか？」

「私を通して貴公は自らのソウルに触れたのだ。より明確にソウルを感じ取れるようになっただろう。」

さあ、眼を閉じ、瞳の奥に集中しろ。記憶の中に今ならば、魔法を刻むソウルの領域が視える筈だ」

立ち上がって新たな感覚に戸惑っていたリヴェリアは、言われるがままに行動する。眼を閉じ、表情を強く引き締め、やがて自らのソウルに空いた記憶の回廊を手中に掴んだ。

「見つけた……！　これか、これが『記憶スロット』か……！」

「貴公の『記憶スロット』は一つだ。正直、意外な程に少ないが、それでも『ソウルの矢』程度なら十分な容量と言える。」

それでは、記憶を始めよう。私がもう一度『ソウルの矢』を詠唱する。それを記憶に刻み、魔術を得るのだ。

そして貴公は、最初の魔術師となるだろう」

アスカの言葉に強く頷き、リヴェリアは集中する。『記憶スロット』に魔法を刻む、それは決して慣れぬ作業だったが、朗々と響く声は欠ける事なく完全に記憶の回廊に刻まれた。

唱えられる詠唱も終わり、少し後。ゆっくりと翡翠色の瞳を外気に晒すリヴェリアは、自らの杖を睨と握る。そして双眸をアスカが立て直した鎧に向け、杖の先で捉えた。

リヴェリアの持つ魔道士専用武装、《マグナ・アルヴス》が強力な魔力の輝きを放つ。下界の中で『至高の五杖』に数えられる最上級魔杖は、九つの最高位の『魔法石』によって魔力を最大まで増幅する。

更にリヴェリアの基本アビリティである『魔力』、発展アビリティ

『魔導』、スキルによって更に魔術は強化される。杖を構え、魔法円マジック・サークルが展開、ソウルが収束し、「ソウルの矢」となって放たれる。

わずか一秒弱で射出された青白い光は、アスカのそれより巨大で強く輝いていた。着弾の二重奏も重く響き、鎧はバラバラに弾け飛んだ。

「素晴らしい。私の見立ては正しかった。やはり貴公は、良い魔術師になる」

期待以上の結果にアスカは手放しで賞賛した。そこには嫉妬や羨望などない。そんな感情はどうに忘れ去っているし、自分より強い者など枯れ果てるほど知っている。

対しリヴェリアは、ただただ驚嘆していた。威力もそうだが、最も驚くべきはその使用感。魔法という括りにあつて今までにない感覚に、湧き上がる興奮を抑えられない。

「凄まじいな……ここまで魔力制御を手放した状態で魔法が撃てるとは。実践してさえ信じられん。これならば虚を突かれた緊急時にも、いや、恐慌状態でも発動できる。」

魔道士の基礎にして究極の精神、『大木の心』もこれには必要ない。魔道士に成り立ての初心者であっても、習得さえすれば易々と使用できる。そして危険リスクもおそらくない。

精神力マインドの消費効率も良い。消費量に対する威力は中々のものだ。これで最も基礎の魔術なのだから、最高位となればどれ程か……

これが、魔術か。なんて事だ……」

倒れた鎧の破壊痕から目を逸らさぬままリヴェリアは捲まくし立てる。隣の少女はそれを止めようとしなない。

彼女の言葉はアスカにとって有用だ。こちら側の魔法をほぼ使えない不死にとつて、二つを比較できる魔道士の考察情報は垂涎となる。知る事の大切さを、アスカは何よりも身に沁みて理解している。

だから最初に交わりたいいくつかの条件を踏まえ、更なる考察を灰髪バルコムの小人族は要求した。

「リヴェリア。【魔術】と【魔法】、その違いを貴公はどう見る？」

貴公は魔術師となったのだ。そして魔道士でもある。ならば比較

もできるだろう。

その情報を私は欲している。元よりそれが条件の一つだ」

「分かっている。まだ碌な検証もできていないが、直感的な違いなら明確に示せる。

アスカ、【魔術】と【魔法】は思想が全くの逆だ。理に沿って発動するのが【魔術】なら、理に逆らって発動させるのが【魔法】なんだ」
都市最強の魔道士として、また新米の最初の魔術師として、リヴェリアは己の考えを拙速に語る。

「そもそも魔法に『大木の心』が必要とされるのは、荒れ狂う魔力を制御するためだ。己の可能性を世界に顕現させる魔力は、極端に言えば理を塗り替える力であり、どんな武器よりも扱いの難しいもの。それ故に一切の淀みなく魔力を束ねる揺れない精神が必要となる。

それは謂わば、嵐を留め従える巨大な大木。決して折れぬ自らを中心に、嵐のような魔力を放出する。そして手綱を精一杯に引き、どうにか発動させるのが魔法だ。

魔術は違う。魔術はまず、強固な理で周囲を固める。完璧な理論の元に術式を構築し、その内側で魔力を使う。

その理は強力無比だ。人類にはとても抗えない世界の法則で押し固められている。それは如何に強大であろうとも、『神の力』アルカナムに届かない人類の魔力では決して破壊できない。

だから魔力をどれだけぞんざいに扱おうが関係ない。必要分の魔力さえ込めれば、後は勝手に周囲の理が魔術を発動してくれる。
イグニス・ファトウス
『魔力暴発』など、端から起こりようがない。

竜の二相——『佇む竜』の内側で『吠える竜』となるのが【魔術】。
『大木の心』、折れぬ精神を中心に築き、外側で暴れる魔力を従えるのが【魔法】。

目的の違い、手段の違い、理の違い、時代の違い——それらが結果的に、真逆の思想で構成された二つの体系を創り上げた。

それが私の考える【魔術】と【魔法】の違いだ」

中々の早口でリヴェリアは言い切った。頬は軽く上気し、キラキラと光る翡翠の瞳は穢れなき少女のよう。杖をぎゅっと握りしめ、好奇

心に浮かされるままはしゃぐ姿は、見る者が見れば若返ったようにさえ映るだろう。

こんなリヴェリア・リヨス・アールヴは、おそらく「ロキ・ファミリア」ですら見た事がない。そう言い切れるだけの超級稀有な光景だが、生憎アスカに興味はなかった。

ただ聞き取った情報を消化する。リヴェリアをこんな風にした犯人は、小さな顎に手を添えてコクコクと何度も頷いていた。

「ふむ……ふむ。では、双方の利点についてはどう見る？」

「【魔術】の利点は何といつても安定性と安全性だろう。術者の技術力に依存しない発動方法もさることながら、『魔力暴発』を起こさないのは大きな利点だ。

欠点は融通の利かなさか。ソウルの理を利用している以上、理論が完璧でなければおそらく発動すらしまい。長寿種族の私であっても、新たな魔術の構築は困難を極めそうだ。

一方で【魔法】は高い自由度と創造性がある。一人につき最大三つの縛りはあるものの、種類は文字通り無限大だ。

我々のような生来の魔法種族であれば魔法特性にある程度の傾向はあるが、オラリオの冒険者は千差万別。誰もが唯一の魔法を持ち得る可能性がある。

『記憶スロット』に関しては検証の結果で評価が変わるな。だが……ふふふっ。変わるぞ、これは……魔道士の在り方が、根本的に……！」

「うむ、私もそう思う。だが貴公、先に済ませておくべき事があるな。少しばかり、ソウルに酔い過ぎだ」

アスカは再び眼を閉じ、火防女の在り様に変貌した。真の暗闇、暗い魂の輝きを灯し、リヴェリアのソウルへ強制的に干渉する。

それは火防女の献身ではない。『灰』が遠く忘れ去った、小人の狂王の暗い業だ。その意味も記憶も深海に溶けた不死は、僅かな記憶に紡がれた歪な整合性でそれを扱う。

暗い業を、献身として。ソウルに酔った彼女を醒まして、元のアスカへ立ち戻る。

同時にリヴェリアも雰囲気を一変させた。少女のような立ち振る舞いは消え、常日頃の冷静沈着、「ロキ・ファミリア」の母親とまで呼ばれる強い芯を取り戻す。

陽光が月光に裏返ったかのように表情を変えたリヴェリアは、自身の変化に少し戸惑った。

「む……なんだ、急に心が冷えたな。いや、これは……」

「ソウルの酔いを醒ましたただけだ。貴公は感受性が高い。歓迎すべき事だが、ある程度はソウルの業を知るべきやもしれん」

「ソウルの酔い……さつきも言っていたな。それは何だ？」

「そのままの意味だ。ソウルに酔っ払い、思考の枷を緩ませる。酒のそれと同じだよ。知識と自制でどうとでもなる。吞まれてしまえば、もう戻れないがな」

「ほう、危険があるように聞こえるが」

「当然だろう。故にソウルの業には禁忌が多い。それに気にする事はない。貴公に教えたのは浅層だ。そこでソウルに酔えるのは才能の証明に他ならない。」

貴公は良い魔術師になる。期待しているぞ、リヴェリア」

「……ああ、任せておけ」

見上げてくる灰髪の少女に苦笑して、リヴェリアはふと周りを見た。妙に静かなフィンとロキがどうしてるのか気になったからだ。

彼らはすぐに見つかった。噴水の側に立つ二人から離れた魔石灯の下で、フィンはしゃがみ込み疲れた顔を晒している。ロキは……四つん這いでフィンに背中をさすられながら、盛大に虹色の吐瀉物を撒き散らしていた。

「……あれは何だ」

「典型的なソウル酔いだな。腐っても神、感受性は折り紙つきだろう。全く無様だ、反吐が出る」

「……………酔いの醒まし方を教えてくれ。これ以上は見るに耐えん」

「構わんが、その前に贈り物をしよう。貴公は一人の魔術師となった。だが道は遙か遠い。その険しく長きを伝えるため、これを渡すのが習わしとなっている。」

受け取るがいい。《幼い竜印の指輪》と《愚者のダガー》だ」

ロキの醜態から不愉快そうに顔を背けてアスカはソウルからそれらを取り出す。リヴェリアは差し出された指輪を手に取り、何の変哲もないダガーに首を傾げた。

「……普通だな。くれるというなら受け取るが、記念品の類か？」

「《幼い竜印の指輪》は魔術の威力を高める。《愚者のダガー》は携帯している場合に限り、徐々に集中力フォーカス……精神力マインドを回復させる効果がある」

「なっ……!?!」

アスカからすれば当然のありふれた装備の説明に、リヴェリアは勿論目を剥いた。前者はともかく、後者は真実であれば紛れもない弩級の武器だ。

都市最大派閥の「ロキ・ファミリア」の中でも、リヴェリアにしか発現していない発展アビリティ『精癒せいゆ』。魔道士垂涎のそれと同様の効果であれば、こんなボンと渡されていい代物ではない。

だから驚倒しながらも素早く腰に差し、効果の程を確認する。目をつむり、少し佇み……やがて重くまぶたを上げたりヴェリアは、疲れた顔で頭を抱えて深いため息を吐いた。

「アスカ、お前な……こんな物を粗品のようにあつさり渡すんじゃない……」

「ん？ 何か間違ったか？」

「……………ハア、もういい。それよりも、ソウルの酔いの醒まし方を教えてくれ……」

不思議そうに頭を横に倒す少女にリヴェリアは諦めた。色々な事を飲み込んで、まずやるべき事を粛々と進める。

そうして後世における歴史の転換点とも言える、オラリオのありふれた夜は過ぎていった。

酔い醒ましの業を伝えたところだとぼとぼと重い足取りのアイズが帰宅し、事の次第を聞いたアスカの瞳が酷薄に鋭くなったのは、翌朝に訪れる別の悲劇の話である。

「大丈夫かな、ベル……」

薄暗い店内の片隅で、アスカはそんな声を拾った。げっそりと萎れた哀れな白兎を見送る、幼女と同じような半眼の犬シヤンスロープの声だ。

とはいえ、それはアスカのような暗く鋭い表情ではない。眠たげに降ろされたまぶたの下で、半分の青い瞳が戸棚を物色する灰髪バルウムの小人族に気付く。

「あれ、アスカ……ベルと一緒に行かないの……？」

「もう少し見させて貰おう。薬品の類には興味がある」

抑揚の少ない不思議そうな問い掛けに淡々と返す。いくつかの試験管を手にとって見比べたアスカは、もういくつか追加してカウンターに持ってきた。

「会計を頼む」

「こんなに……？ 結構な値段になるけど、大丈夫……？」

十を越える試験管の中には高等回復薬ハイ・ポーシヨンや精神力回復薬マジック・ポーシヨンも混じっている。自身の派閥と同じくらい赤貧のほすの「ヘステイア・ファミリア」にはとても買える量ではない。

そもそも買物自体、さつきベルがしたではないかとナーザは眉をひそめている。けれど訝しげな表情は、カウンターの上へ無造作に投げられた袋によつて一変した。

「これで足りるか？」

「たくさんのお買い上げ、どうもありがとう」

投げられた袋は中から大量の金貨をぶちまけていた。カウンターに散らばった金貨だけでも支払いに足りていて、ナーザはパタパタと尻尾を揺らして深々と頭を下げる。

すぐさま精算に取り掛かる犬シヤンスロープ人を余所に、アスカは買った物を一つ一つ光に透かしてはソウルの器へ溶かしていく。

群青色や柑橘色の溶液に宿るソウルはその品質を包み隠さず伝えてくるが、たかが不死、商売上の駆け引きなどどうでもいい事だった。

「では、また来る」

「うん、待ってるね……」

釣りを受け取って【青の葉舗】を後にしたアスカは集合場所に向かう。人混みを掻き分け中央広場セントラルパークに出れば、すぐに少年の姿かぞくを見つけたが——その隣に並ぶ男の姿に、アスカの無表情が冷たくなった。

何をしているのか、それは見れば分かる事だ。下卑た笑みを裂かせる男の囁きはソウルによって強化されたアスカの耳によく響く。チビ、能無し、役立たずサポーター。それをダンジョン内ではめて金に変えるのだと男はベルに持ちかけている。

誰を差しているのかはすぐに分かった。誰がこの状況を呼び込んだのかも。それを飲んでアスカと呼ばれる不死は、まだ確定はしていないと見に回る。

「——ベル。どうかしたのか？」

「アスカさん!？」

「ああ？　なんだてめえ」

気配を感じさせないアスカの登場にベルは驚く。生意気な小僧ガキの言動に苛立っていた冒険者の男は、急に現れた灰髪の小人族バルサムに眉間を歪め、だがすぐに口端を下劣に引き裂いた。

直後吐き出されたのは、ベルにとつて信じがたい言葉だった。

「おいおいなんだよ、てめえ二匹もサポーターを連れてんのか!？」

ひやははっ、こいつは傑作だぜ！　そうだよなあ、俺の話なんか断るよなあ!？　たかが荷物持ちサポーターでもまとめてはめりやあ金と持ち物もん大儲けだもんなあっ!？」

「っ!？　違う！　僕はそんな事考えてないっ!？」

「いいや違わねえっ!　使えねえゴミを二匹も連れる理由なんざそれしかねえっ!」

しかし悪どい奴だぜ、金のために間抜けを演じやがってよお！　てめえ、本物のクズ野郎じゃねえかつ!？」

「このっ……!？」

男はただ当て嵌めただけだ。役立たずサポーターを二匹も連れていながらうまい話を断る理由はそれしかない。弱者を食い物にしてきた自分の価値観が冒険者共通と信じて疑わない男は、その価値観でベルを嘲笑う。

それでベルの我慢は限界を超えた。ただでさえ触れた事のない悪意が少年の心を怒りで満たしていたのだ。その上家族を馬鹿にされて手を出さずに居られるほど少年は大人でも薄情でもない。

拳を握ったベルが一步前に踏み出す。それを押し留めるように、アスカは二人の間に割り込んだ。

「成程、事情はよく分かった」

ベルが目を睜り、怪訝そうに男が見下す中、灰髪の小人族バルウムは平坦なまま男に告げる。

「失せろ」

「あ？」

「貴公はベルに必要な。故に失せろ。そして二度と姿を現すな」

「……ああっ!? 何だどこの糞小人族バルウムがあっ!?」

端的な言葉は男を激昂させるに十分だった。

女。小人族バルウム。サポーター。男からすれば弱者の代名詞を三つも抱え込んだゴミ屑以下。それが冒険者である自分に何と言った？

男が脚を振り上げる。生意気な小人族バルウムをゴミのように踏み潰すために。それを察したベルは醜悪に顔を歪める男からアスカを守ろうとして——二人の時間は停止した。

「私は三度も、同じ事をしない。それ以上はする必要がないからだ」

二人共、ただ覗いただけだ。自分より小さな、小人族バルウムにおいてさえ背の低いアスカの顔を。

「だから貴公に、もう言葉は要らん」

虚うつろのような容貌に宿る、暗い銀の半眼が写し取る自らを、覗き込んだだけだった。

ただそれだけで、ベルも男も心身の自由を奪われ——数十秒経ってようやく動けるようになった男は、肉体の震えを引き剥がすように悪態をついて去っていった。

それを見えなくなるまで眺めたアスカは、一つ目を閉じてベルに向く。まだ固まっている少年を叩いて正気に立ち戻らせ、自身の結論と参照するために事の経緯を聞き出した。

「——そうか、リリルカをな……それならば、我らが守るべきだろう」

「うん、僕もそう思う。でも不安にさせちゃうといけないから、リリには言わない方が……」

「ベル。最も護衛が難しいのは、守られるつもりのない者だ。知っているのと知らないのでは、咄嗟の行動に影響が出る。」

リリルカには伝える。我らが強固に守れば、何の問題もない」

「それはそうだけど……」

ベルはリリルカを守る方針には賛成だが、伝える事には難色を示した。余計な心労を負わせたくないし、二人で協力して守ればそれでいいのではないかと。

アスカが正論である事は明白だ。しかし少女は少女でベルが望めば黒も白に染め上げる。言うべき事は言うが、最終的な判断はベルに任せるつもりでいた。

難しい顔で悩む少年。無表情に諭す少女。端から見れば二人はそんな形で立っている——金を巻き上げようとする同ソーマ、ファミリア派閥の団員を辛くも凌いだリリルカにも、きつとそのように見えていただろう。

「……あ……」

まさか、そんな。落雷のような言葉がリリルカを過ぎる。彼女が目にしたのは何事かを話す二人だけだったが、広場を行き交う人々の中に前に嵌めた冒険者の男を見た気がした。

男はすぐに人混みに紛れたが、二人から、いやアスカから逃げていたように見えた。もし、男がベルに接触していたら。そこにアスカが現れたなら。事の次第を推測し、リリルカへの報復に巻き込まれそうになっているとあの「灰」が判断してしまっていたら。

「——ッ!?!」

両足を斬り落とされたおぞましい記憶と共に、リリルカの背筋に悪寒が走る。死神に撫でられたかのような感覚に顔が青ざめた。恐怖に引き摺られるままその場を立ち去ろうとして——轉身する直前、銀色の光と目が合った。

「——ああ、そこに居たのか。来たまえ、リリルカ」

古鐘の声に貫かれた瞬間、リリルカの体は硬直した。見開いたままのまぶたすら、自分の意志で動かせなくなった。

魅入られた。もうおしまいだ。頭を巡るのはそんな諦めの言葉だけだ。自分はもう、ここで終わる。まとわりつく死の幻想をリリルカは確信してしまっていた。

「……リリリ？ リリリ？」

「……………ベル、様？」

そんな死に囚われた彼女の心を戻したのはベルの声だった。気付けばそばに少年が立っていて、心配そうにこちらを覗き込んでいる。

白い髪に深紅の瞳^{ルベライト}。兎のような少年が笑っていない事が、嫌に心に突き刺さる。

「リリ、大丈夫？ 顔がすごい青いけど……」

「いえ、その……何でも、ないです。今日はちよつと悪い夢を見てしまいました……」

適当な言い訳を並べて、愛想笑いで顔を飾る。反射的にリリルカはそうして、無垢な少年はそれを信じた。なんて馬鹿真面目なんだろう。こんな苦しい言い訳を、愚直に信じてしまうなんて。

変わらぬベルの在り方に少しだけ安心したリリルカは、そのやり取りをずっと見ていたアスカの存在を思い出して気が沈んだ。そしてあの恐ろしい幼女が行動する前に、絞首台に向かう囚人のように重い足取りで歩を進める。

アスカは何を言うのだろう。契約の解除か？ 危険を誘引した罵倒か？ ひよつとしたら今は無視するかもしれない。けれど後で密やかに始末されるだろう。

悲観^{ネガティブ}的な思考が頭を回る。リリルカにはもう希望がない。いつも通りなら小賢しく回る知恵も、今回ばかりは働かない。

リリルカ・アーデは詰んでしまった。『灰』の決を待つ事だけが、彼女にできる全てだった。

「リリルカ、貴公は狙われている」

だから。

「故に我らは、貴公を守る」

「……………え？」

その言葉を、リリルカは理解できなかった。

「さて、まずは編成からだ。ベルを前衛に、私とリリルカが後衛に入る。前方の敵はこれまで通りベルが処理、後方及び全ての奇襲には私が対応する。リリルカは常に私とベルを盾とし、自身の安全を最優先しろ。」

ベル。貴公がすべき事は敵を決して背後に通さない事だ。悪意を持った襲撃というのは、その悪意を想像できなければ対処できない。自分ならばこう襲うという仮定は貴公には難しい。

だからこそ、リリルカを守るために貴公は己を壁としなければならぬ。倒せずとも通さない。それを前提とすれば自ずとリリルカを守る事に繋がる。その結果、夥しい傷を負う事になろうとも。

あえて問おう。貴公にその覚悟はあるか？」

「——うん。リリを守るためなら、できるよ」

「よろしい。では具体的な行動例だが——」

呆然とするリリルカを置いて、アスカは手早く方針を固める。ダンジョン内での編成、行動、襲撃に備えた事前指示。対モンスターに関しては基本を出さないが、襲撃対策はやたらの確だった。

きっと彼の有名な犯罪組織の暗殺者であっても、アスカの不意を突くのは難しいだろうと思わせる内容。呆然としたまま場違いな感想を抱いたリリルカは、ハツとして慌てて会話に割り入る。

「ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

「どうした、リリルカ」

「なんで私を守る事を前提に話が進んでいるんですか!? ベル様やアスカ様が狙われているならともかく、リリが標的なら見捨ててしまえばいいじゃありませんか！」

「それは出来ない。貴公と我らは、パーティだからな」

「ただの臨時パーティでしょう!? それも自派閥ではなく他派閥のサポーターです！ 役立たずのリリなんか守られる価値はありません！」

「言ったはずだ。我らと貴公は対等だと。貴公を守るのに、それ以上

の理由はいらない」

「でも……」

リリルカは継るようにベルを見る。その行動に宿っていたのは如何なる心理だったのか。

アスカの言葉を否定してほしい、それが現実的に考えた正答だ。たかがサポーター、替えなんていくらでも利く冒険者以下の存在。同じ「ファミリア」ですらない者をわざわざ守る道理も価値も、リリルカ・アーデになんて無い。

リリルカの無価値を理解してほしい、それは彼女の自虐的で打算的な思考だ。もし許されるならここが潮時だとリリルカは理解している。その際障害になるのはベルだ。ベルに望まれてここに居るのだから、ベルが見放せばアスカも見放す。そして契約時の話の通り、ベルに火の粉が降りかからなければアスカはきつとリリルカを見逃す。卑屈な生き方が、その可能性を示していた。

でも、それでも、きつとこの少年なら——そんな考えをリリルカは全力で振り払った。まだ夢を見ているのかと自分を叱責する。

勝手な期待に裏切られたばかりだ。清々しいほど無遠慮に下らない望みを踏み躪られた。

それでもまだ足りないのかと自分を詰る。またあんな思いをしたのかと甘い考えに足蹴を食らわせた。

これ以上、辛い出来事に遭いたくない。それは紛れもないリリルカの本心だった。

それなのに、兎のような少年は——対等であるかのようにしやがみ込んで視線を合わせて、「あの笑顔」で、こう言うのだ。

「大丈夫だよ、リリ。安心して。僕とアスカさんが絶対、リリの事を守るから」

「——」

その時自分^{リリ}は、どんな顔をしていたのだろう。心と体に巻きつけた偽りの姿を忘れるくらい、その言葉はリリルカの根幹を揺さぶった。

「……なんで、リリなんかを守るんですか？」

「え？ それはほら、リリは女の子だし、僕としては守るのが当たり

前っていうか」

「リリが女の子だから守るんですか？ 男の子だったら守らなかったんですか？」

「ええっ!? いやいや、そんな事無いよ!？」

そもそも僕達はパーテイだからお互い助け合うのは当然だし、リリにはすごいお世話になってるから、ちゃんと恩返ししなきゃって思ってた。

こんな事で恩を返せるかどうかは分からないけど、リリを傷つけようとする人が居るなんて、絶対許せない。だから、守るよ」

「そう、ですか……」

何をやっているのだと思う。無表情に俯きながら、狂瀆する自分の心の隅でリリルカは頭を抱えている。

こんな事を聞いても無意味だ。聞くだけ無駄だ。それよりも「灰」と「襲撃者」について考えるべきだ。現実的な思考が嫌というほどがなり立てる。それでもリリルカの心の大部分を占めているのは、傷だらけのちっぽけな希望。

散々打ちのめされたばかりなのに、まだ望みを捨ててきていない——リリルカ・アーデが、ずっと求め続けていた言葉。

それを口にしては駄目だ。言っではいけない、確かめるなんて以ての外。やめるべきだと、やめてくれと、現実主義者が叫んでいる。

「——じゃあ、ベル様は。ただのリリでも、助けたんですか？」

それでもリリルカは、止められなかった。

「リリがただの、パーテイでもない、女の子でもない、ただのどんくさい役立たずのリリでも——ベル様は、助けて下さったんですか？」

何故かは分からない。これから先、どの未来でもリリルカがこの日の記憶を正確に思い出す事はない。自分の心がどうであったか、ぐちやぐちやになって判別できないから。

しかし、どれほど時が経とうとも。きっと死ぬまで、リリルカはこの日の記憶を、忘れない。

「助けたよ」

「——」

「リリを助けるのに、理由なんかいらさないよ。その、上手く言葉には出来ないんだけど……リリの事、放っておけないんだ。

だから助けるよ。リリがどんなリリでも、絶対に僕が助けるから」
子供のように純真で真っ直ぐな——太陽のようなその笑顔を、リルカ・アーデは忘れない。

それはきつと、「灰」も同じだったのだろう。

暗い夜道を重く歩く。

複雑怪奇な迷宮街。オラリオの一角に犇めく『ダイダロス通り』をリルカは鈍重な足取りで進んでいく。

今日の探索は何事もなく終了した。いつも以上に気を張ったり、到達階層より下へは行かなかつたりしたが、結果的には何もなかった。

いつも通りのダンジョン探索。いつも通りの報酬分配。いつも通りの別れ。いつも通りの——「灰」との契約。

「はあ……」

思わず口からため息が漏れた。毎夜毎夜「灰」と会うのもいつもの事だが、こんなに気が乗らないのは初めてかも知れない。

ダイダロス通り「最下層」にある部屋の前に立ったりリルカは重い扉をゆつくり開ける。いつも通り「灰」は先に待っていると思いきさつと受け取りを終わらせたかったのだが……部屋の中に「灰」の姿はどこにもなかった。

「珍しいですね、あの方が先にいないなんて……」

というよりも、これも初めてかも知れない。バックパックを置いて椅子に座ったりリルカは、体を円卓に預けて思索にふける。

思い起こすのはベルの言葉。ただのリリでも守ると言ったあの笑顔。それは確かにリルカの心に消えない記憶を刻み込んだ。

しかしただ、それだけでもある。結局の所リルカはその言葉を信じ切れていない。言葉だけなら偽れる——詐欺師として生きてきた彼女にとってそれは実感を伴った事実だ。

あの少年に詐欺師並みの嘘をつけるかという苦笑が頬に溢れて

しまうけれど。すぐに人を信じるし、感情はそのまま顔に現れるし、
“灰”に……アスカに説教される姿はありふれた家族のようだ。見
た目では兄と妹なのに実体は厳しい祖母と気弱な孫なのがどこか微
笑ましく感じる。

それが皮肉か、あるいは嫉妬によるものだとしても——リルカは
素直に彼らが羨ましかった。

(……リリはベル様の言葉が信じられません。あの笑顔もリリへの態
度も演技って可能性はゼロじゃない。アスカ様がものすつごくヤバ
くて怖いお方だからというのもありますが……そうでなくてもリリ
は、きつと信じなかったでしょう)

実際に、リルカが危機に陥ったとして。

ベルやアスカも危ないような状況になって。

その時本当に彼らは助けてくれるのか。

自分の命も、顧みずに。

(……ありません。そんなのありえない。いくら言葉で言われて
も、リリはそれだけは信じられません。)

現実はいつだって真逆でした。冒険者の方々は言わずもがな、優し
かった花屋の老人夫婦だって最後にはリリを……)

だからベルも、信じられない。

リルカ・アーデはそう思っている。本当の危機に陥り助けられな
ければ彼女の思いは変わらない。行動を伴わなければリルカの現
実を打ち砕けない。

言葉だけでは駄目なのだ。だからもう、リルカは、彼らとの縁を
切りたかった。これ以上関わってしまえば自分の心に癒えない傷が
残ってしまう。そうなる前に利害の関係だけで終わらせてしまいた
かった。

篝火のそばでただ一人、揺らめく炎を瞳に写す。柔らかく暖かな光
に取り留めなく思考していると——重い扉が開かれ、一人の“灰”が
現れる。

「遅くなった。待ったか、リルカ」

「……いえ、そうでもありませんよ。リリはそこまで待っていません」

「そうか。では契約に従い、今日の報酬を支払おう。だがその前に、野暮用を片付ける必要がある」

「え……？」

円卓に体を預けたまま返事をしていたりリルカは、顔を上げて背後を見る。炎に揺られどこか眠たげだった円らかな瞳は——黒く染め上がった黒革の装束を着込む「灰」と、その背後の男たちに凍りついた。

「——よお、アーデ。こんな所にいやがったか」

「カ、カヌウ、さんっ……!?!」

驚愕するリルカにカヌウと呼ばれた獣人の男はニタリと嗤った。他の男たちと一緒にドカドカと室内に侵入する。その中には以前リルカが騙した冒険者の男もいた。

円卓を囲む四人の男たち。見下される圧力に硬直するリルカを他所に、カヌウは親指で「灰」を指差す。

「いやあ、あの嬢ちゃんかな？ トラブルを抱えたサポーターに困ってるみたいだったんでよお、親切な俺達が解決に協力してやってんよ。まさかそのサポーターがアーデ、お前だとは思わなかったけどなあ！

なあそうだろ？ 小人族の嬢ちゃんよ」

「ああ。概ねその通りだ」

「……アスカ様が、リリを……？」

扉を閉めながら応える「灰」に、リルカは呆然と呟いた。頭の中ではとつくに全てを悟っている。

つまり「灰」は、リルカ・アーデを売ったのだ。

「この時を待ってたぜ糞小人族！ てめえに盗られた剣の落とし前、きっちりつけてもらおうかあっ!?!」

「ひいっ!?!」

それに考えを巡らせる間もなく男の一人、リルカが騙した冒険者が拳を振り上げる。思わず頭を庇うリルカに怒りのまま拳は振り下ろされ。

いつの間にか現れた「灰」に拳は難なく防がれた。

「あ？ 何しやがる!？」

「先に一つ質問があると云った筈だ。事はそれからにしてもらおう」

「ああっ!? ふぎけんじやねえぞっ、てめえも糞小人族バルウムの癖によおっ
！」

「まあまあ、いいじゃないですかゲドの旦那。どうせ結果は変わらねえ。そうだろ、小人族バルウムの嬢ちゃん」

「ああ。結果は変わらない。一つ質問があるだけだ」

「ほら、こう言ってる事ですし……俺達だって準備があるでしょう?」
「……それもそうだな。おら、早くしろ」

カヌウの歪んだ笑みにゲドは嫌におとなしく引き下がった。リリルカと「灰」を囲むように下がった男達を気にも止めず、「灰」は淡々とリリルカに問う。

「質問だ、リリルカ。貴公が今日の探索前に話していたのはゲド・ライツシユ以外の三人か?」

「え?」

「貴公が今日の探索前に話していたのはカヌウ・ベルウェイ、ケイ・フェラー、レンダー・ボールの三人かと聞いている」

リリルカは訳が分からなかった。

質問の意味は分かる。話をしていたのは誰かという単純な質問だ。

「灰」はおそらくカヌウ達に詰め寄られる場面を目撃したのでこう聞いてくるのだろう。

それを何故いま、この場で聞いてくるのかが分からない。そもそも「灰」はリリルカを売ったのではないのか。

今日の探索に費やした労力を鑑みれば、リリルカを男達に引き渡した方が苦もなく済む。ベルのためなら何でもするこの幼女なら外道の行いでもためらいなどないだろう。「灰」はリリルカを売った、少なくとも彼女はそう結論付けている。

なのに何故、こんな質問をしてくるのか。リリルカは分からない。「灰」の意図も、その格好もだ。

全身を黒く染め上げた黒革で覆う「灰」は、顔どころか特徴的な灰髪すら黒い布で覆い隠している。唯一見える双眸も銀ではなく赤い

眼光を放っている。

疾しい者のする変装、そう呼ぶにはおどろおどろし過ぎるのだ。まるで先に待つ結果の不吉な予兆のようで——硬直するリリルカは何も答えられなかった。

そして無言のまま時は過ぎ。唐突に、「灰」の頭部に影が振り下ろされた。

ガキンツ、と妙に硬質な音が部屋に響く。

「アスカ様ッ!？」

そのまま倒れ伏す「灰」にこの時、リリルカは心底驚愕していた。あの「灰」が、上層のモンスターなど鎧袖一触に薙ぎ払い、敵に欠片の容赦もない「灰」が、たかが背後からの一撃を避けられず、倒れた？

目の前の光景が信じられない。目をむくりリリルカを他所に、男の下卑た哄笑が耳を侵す。

「ひやははっ、やっぱり大したことなかったぜ！ 糞小人族バルウムがよお、偉そうな態度取りやがって。俺に敵うとも思ってたのか、ああ!？」

「な、なんでアスカ様まで……」

「あ？ 何でだと？ 頭が足りねーんじゃねえかてめえ！ こんな人も寄り付かねえ『ダイダロス通り』の奥底で糞小人族バルウムが二匹もいたら、潰して有り金ぜんぶ頂くに決まってるだろお!？」

「灰」の頭を踏み潰しながらゲドは嗤う。カヌウ達も同意するように武器を抜き放っていた。

つまり「灰」も謀られた？ 男達を利用するつもりで逆に利用された？

——あの「灰」が？ こんな稚拙な罠に嵌った？

ありえない。数瞬の間も置かずリリルカがそう断じた瞬間。

「リリルカ・アード。私は三度も同じ事を繰り返すつもりはない」

倒れたまま、何事もなく。「灰」の言葉は古鐘のように、その場の全ての者に届く。

「あ？ なんだてめえ、まだ喋れんのか？」

「答えないなら、それでもいい。どうせ結果は変わらない」

ケイの喉に直撃させた。

直撃した《メイス》の勢いで壁に叩きつけられたケイは血反吐を撒き散らしてズルズルと倒れる。時間にして十秒にも満たない出来事。瞬く間に自分以外の仲間を全滅させられたカヌウは焦燥で顔を歪めて「灰」を睨みつけた。

「て、てめえ!? 端からこのつもりで俺達をつ!?」

「……………」

「クツ、クソツタレがあっ!?」

無言のまま立ち尽くす「灰」にカヌウはすぐさま逃走を選んだ。元より男に仲間意識などない。全ては酒、この世の物とは思えない極上の神酒^{ソウマ}を飲むためだけにカヌウは生きている。そのために金を欲し、そのためにどんな悪事にも手を染めてきた。

だがそれも生きてこそだ。生きていなければ酒は飲めない。カヌウが仲間を見捨てて一人逃げようとしたのも当然の帰結だった。倒れた仲間を踏みながら狸人^{ラクレン}の男は扉に手を伸ばし——しかし決して、触れる事は出来なかった。

「なあっ!? な、なんでだっ!? なんで触れねえっ!?」

必死に扉に縫りつき爪を立てるカヌウを他所に、「灰」は倒れたゲドに近付く。既に事切れている男に一瞥すらくれず、腹部から《ミダの捻くれ刃》を引き抜いた。

王の愛を欲し、毒すらも自らの美に用い、ついには狂気に堕ちた妃。そのソウルから錬成された捻れた短剣は強力な毒が塗り込まれている。「灰」はこの刃で「致命の一撃」を叩き込み、ゲドはこの毒で息絶えた。

「くそっ、くそおっ!? なんで通れねえ!? なんなんだよこの霧はあっ!?」

「灰」が《ミダの捻くれ刃》をしまう裏でカヌウはひたすら扉を斬りつけ、体当たりを続けていた。だが「灰色の霧」に覆われた扉は僅かな瑕疵すらつかなかった。

まるで世界そのものが断たれたような霧の前で呆然とするカヌウに、「灰」はゲドの死体を投げつける。カヌウは短い呻吟と共に倒

れ、覆いかぶさる仲間だった者の死体に気付き、恐怖した。

そして音もなく目の前にたつた“灰”を見上げ——カヌウは震えながら、媚びへつらうような笑みを浮かべた。

「ま、待ってくれよ、小人族バルウムの嬢ちゃん。俺が悪かった。もうあんたにも、アーデにだって手を出さねえ。この事は誰にも言わねえ。だ、だからよお、見逃しちゃくれねえか？」

「……………」

「お、俺はあんたの言うとおりにしたじゃあねえか。ちよつとした行き違いはあつたかもしれねえけどよ、それは悪かつたって思ってる。ゲドの野郎はしようがなかった。こいつは俺から見てもクソ野郎だ、死んで当然だ。

でも俺は何もしてねえだろ？ 手なんかこれっぽっちも出してねえ。だから俺だけは助けて——」

「貴公、何か勘違いをしているな」

上目遣いで懇願するカヌウを無表情に見下ろして、“灰”は虚空へ手を伸ばす。

「『雇っているサポーターに関する事で困っている』『そのサポーターに聞きたい事が一つある』『だからついてきてくれると助かる』——私が貴公らに言ったのはそれだけだ。それ以外の何も、貴公らに望んだつもりはない」

「そ、そうさ！ それで俺はきつちりそれだけやっただろ!？」

「ああ、そうだ。貴公は良くやってくれた。私の望み通りに動いてくれた。

だからもう、何も望む事はない。このままここで——朽ち果てる」

その言葉の意味をカヌウが理解する前に“灰”の手は虚空に沈み、その先の柄を握り締めた。

“ソウルの業”。有形を無形の『ソウル』に変え『器』に納め、『器』から無形の『ソウル』を引き出し有形に戻す。

本来ならそれで済むにも関わらず、この武器は無形ではない。有形のまま『器』とは別の領域に納められている。

その危険性故に有形のまま、『特別なソウルの領域』に封じられている。

それはあえて施された安易に取り出せぬ安全機構^{セーフティ}。

利便性と引き換えの封印にして『切り札』。

零秒で武装を変えられる “灰” がその利点を捨て去ってまで安全性を優先した『武器』を——不死の幼女は、 “暗い魂” から抜き放った。

「ひいつ——!?!」

その悲鳴は誰のものだったか。懇願するカヌウか、“灰”の背後にいるリルカか。あるいは両方だったかも知れない。生きとし生ける者すべてが忌避する不吉な力が、一瞬にして篝火の部屋を席卷する。

——それは骨だった。

——それは巨大な刃だった。

——それは人骨の塊だった。

——それは死者どもの骨によって造られた、巨大な人骨の大剣だった。

「な、なんだそりゃあああああああああああああああああああああああああ
ああああああつ!?!」

下界に引き摺り出された悍ましい武器にカヌウが絶叫する。当然だ、こんな武器はありえない。世界に存在していないものではない。

死した人の骨を組み合わせた異形の大曲剣。複数の腕骨が互いを喰らい合うように絡んだ柄、頭蓋や肋骨が無数に溶け合わせた刀身、人の脂のようにぬらめく甚大な刃。

おおよそ人の造る武器ではなかった。まともではない。人を材料に造られた武器などまともでもないはずがない。

誰が考えつくだろうか。考えついたとして、誰がそれを実行するものか。禁忌、異様、不吉——死。人の最も忌避する事象を縫り合わせ煮詰めたかのような——こんな在り得てはいけないものを、一体何が造り上げた。

“灰”は、それをよく知っている。かつての最初の王の一人であ

り、そのソウルを薪に変えられてなお死に殉じ、終末期には名すら残らなかつた神の石柱。

「墓王ニト」。最初の火より分け得た「王のソウル」の、そのほとんどを死に捧げ続けた最初の死者。

この剣は死の神が自らの眷属に与えた物だ。墓王の眷属たる者の誓約の証であり、死の瞳によって振り撒かれる災厄の象徴。

故にこれは《墓王の剣》と呼ばれる。生命を蝕む猛毒、おぞましい瘴気をまとった災厄の剣。それが「灰」の選んだ『切り札』の一つだった。

だが無論、「灰」は墓王の眷属などではない。繰り返される火の時代の全てにおいて、神と誓約を結んだ事など一度もない。

なのに何故、この武器が手元にあるのか……「灰」はもう、忘れている。封印を施し、切り札に選んだ理由すらもはや無い。深海の奥底にその記憶は溶けて消えた。

覚えているのは使い方だけだ。どのように用い、どのように祈れば真価を発揮するか——決して折れぬ戦いの記憶だけが、「灰」にこの武器を選ばせた。

「な、何をする気だっ!? その剣で何をする気だッ!?」

半狂乱になって泡を食うカヌウの前に、「灰」は《墓王の剣》を突き立てる。小さな「灰」の身長を容易く超える大曲剣。不吉な力を垂れ流す死者の刃から、急激にそれは立ち昇った。

「あ、いあっ……!?!」

背後でリリルカが腰を抜かす。魂を抜かれたような顔で前を見上げる栗色の瞳に、それは不気味に蠢いている。

それは人の骨のように見えた。黒く吹き上がる瘴気の中でカタカタと蠕動する白骨の死体。

それが瘴気の中で無数に動き回っていた。幾重にも幾重にも重なり、這い回り、まるで一つの巨大な骸骨のように揺らめいていた。

やがてその蛆のような動きは止まり——体幹に満ちる無数の頭蓋が、等しくカヌウを見定める。

「ひ、ひあああああああああああああああああああああああああ

あああああつ?!」

自分に向けられた空っぽの眼窩についてカヌウは発狂した。形振り構わず物を投げ背後の扉にすがりつく。しかし扉は霧に覆われ、決して開く事はない。

《墓王の剣》より吹き上がる黒い瘴気の中で、巨大な骸骨は指を向ける。檻らんるを垂れ下げる白骨の指が、生にしがみつくと生者を定め。

「———【死の瘴気】」

“灰”の捧げた祈りを糧に、神の【奇跡】が解き放たれた。

「あ———」

カヌウの最後の言葉は間の抜けた声だった。神酒ソーマに取り憑かれた獣人の男は、側に倒れた仲間もろとも【死の瘴気】に吞まれ即死する。火の時代の最初の神話。永遠を生きる古竜を滅ぼした畏怖すべき墓王の原始の業。極まった信仰によって再現された物語は、可能性をほんの少し引き出した程度の人類に抗えるものではない。

恐怖に凍りついた表情のままカヌウは死んだ。かろうじて生きていたカヌウの仲間も訳も分からず即死した。

そして放たれ続ける【死の瘴気】が、彼らの生きた痕跡さえも奪い去る。

リリルカはただ見ていた。自分が騙した冒険者が朽ちていく姿を。自分を食い物にしてきた同派閥の連中が骨すらも残さず塵になる様を。

彼らの武器も持ち物も何もかもが黒い瘴気に吞まれ、始めから誰もそこにいなかったかのように消えた光景を、リリルカ・アーデはずっと見ていた。

「野暮用は終わりだ」

そして全てが消えた後、“灰”は《墓王の剣》を納め。

「それでは、契約の報酬を支払おう」

いつも通り、何事もなかったかのように。円卓に座り、黙々と報酬を並べ始めた。

「……………」

言葉にならない。リリルカの胸中をシンプルに表すなら、その言葉

が適切だ。

思考は山ほど転がっている。これまでの忌まわしい現実の事、ベルの事、何よりも恐ろしい「灰」の事、カヌウ達の事。リリルカを狙う彼らをここに呼び寄せ、そして——塵のように、殺した事。

リリルカが予感した不吉の正体はこれだった。敵意を奪う紅い眼光に彩られた瞳は、リリルカが脚を切断されたあの日と同じ眼をしていた。

塵を見る眼。塵を払う眼。敵意も悪意も殺意もなく、ただ邪魔だから排除する。あの日リリルカに向けられた底冷えする暗い瞳。それを同じようにあの男達にも向け……今度は呆気無く殺害した。

その違いは何なのか。リリルカにすれば自明の理だ。リリルカは望まれ、彼らは望まれなかった。両者の命運を分けたのは、本当にたったそれだけなのだろう。

「……アスカ様は……」

だからこそ、リリルカはそれを言葉にした。

カヌウ達が死んで十分も後。報酬を並び終え、紅い眼光を取り払い、服装を罪の女神の教戒師のそれに変えた「灰」が不思議そうに見下ろす中、小人族バルウムの少女はのろりと立ち上がりかたつむりのような速度で椅子に座る。

ぼんやりとした意識のまま報酬を見て、「灰」を見て。単純な動作を何度も繰り返して、リリルカは——報酬を受け取らず、ただ真っ直ぐ「灰」を見た。

「……アスカ様はどうして、そこまでできるんですか……?」

「ん? 何の話だ?」

「どうしてベル様のために、そこまでできるんですか?」

リリルカの栗色の瞳を、暗い銀の瞳が見返す。

凍てついた太陽のような瞳だ。天道を昇る黄金の太陽が、その輝きのまま凍ってしまったかのような色。どんな時も変わらない半眼と灰色の睫毛が、その凍てついた輝きを暗く暗く鎖とぎしている。

恐ろしい眼だ。リリルカは最初からその眼が怖かった。何もかもを平等に写す瞳。それはリリルカもモンスターも、ギルド職員や冒険

者、街の住人、そして——ベル・クラネルですら、例外ではない。

きつと鏡を見ても「灰」の瞳は変わらない。この人並み外れた小人族にとつて、全てのは平等だ。どんな関係を築こうとも、その気になれば殺せてしまう。葛藤も躊躇もなく、それこそ塵を片付けるように「灰」には出来てしまうのだろう。

ずっと不思議だったのだ。そんな眼をしているのに、「灰」の目的は一貫している。「ベルのため」「ベルがそう望んだから」。ベル・クラネルに向ける眼はリリルカと同じなのに、どうしてあんなにも献身的なのか。

一人の人間のためだけに、まともな振りまでして。どうして人殺しまで出来るのか。

不思議だったが、聞けなかった。ひたすら怖かったし、踏み込む意味もない。勝手に裏切られた後は利用する事だけ考えるようにしていた。

でも今は違う。「灰」は言葉通りリリルカを守ったのだ。それが分からないほど少女は愚かではない。

ダンジョンで襲撃を警戒しながら探索するよりこちらから呼び込んで殺す方が手っ取り早い。「灰」はおそらくそんな理由でこうしたのだろう。先程の質問の意味も今なら分かる。あれはリリルカを狙う人間が他にいないか確かめるためだった。

「灰」は、まともではない。灰髪の小人族の選択肢には常に「殺人の手札がある。今回はそれを切っただけだ。」

「ベルがそう望んだから」——「リリルカ・アーデを守る」ために。だからこそリリルカは聞かなければならない。「灰」の行動原理、「灰」がどこまでもベルに捧げる献身の理由を。

「灰」がまともではない己を理解しながら、それでもアスカで在り続けられる理由を。

きつとここが分岐点だ。ベル達との契約を続けるか否かのみならず、リリルカ・アーデの分岐点はここなのだと言観する。

彼らと関わるのは辛い。アスカに傷つけられた痛みは今も消えずに疼いている。ベルの馬鹿みたいな無邪気さが自分を自分でいられ

なくする。理想と現実、希望と絶望。ベルとアスカとの出会いが齎した全てがリリルカ・アーデを追い詰める。

リリルカは必要とされたかった。ありのままの自分を望んでほしかった。誰からも望まれず、何も決められない弱い自分が嫌いだった。

今もそうだ。勝手な期待、勝手な失望。ベル達と過ごした日々の中でリリルカはいつも受け身だった。心の奥底で小さな願いを灯しながら――たったの一度でも、その願いのために行動していただろうか。

現実には甘くない。そんな事は分かっている。理想を追いかけ愚行を犯し、愚者と嘲笑われた敗北の物語は枚挙に暇がない。叶う可能性が万に一つの理想を追うより、より確かな現実的思考と行動の方が正しいはずだ。

……けれど、きつと。アスカはそうではない。そうではないのかもしれない。

例えこの狂った小人族バルウムがリリルカと同じ立場だったとしても。それでもアスカなら、ベルのために献身を捧げたかもしれない。

強さではなく、狂気でもなく、何もなくとも、薪たきぎのように。自分の信じるもののために、アスカは願いに殉じたかもしれない。

リリルカは、それを聞かねばならない。アスカの理由、アスカの根源ルーツ。

暗く恐ろしき一人の「灰」が。家族のために、アスカで在り続ける意味を。

「……ふむ。妙な事を聞くな」

リリルカに真っ直ぐ見定められ、アスカはいつも通りだった。無情、半眼、暗い瞳。真剣なリリルカにさして注意を払わず、唇に指を当てて呑気に左上を向いている。

しばしの黙考が静かに流れた。篝火の薪がバチリと爆ぜ、淡い火の粉が宙を舞う。扉の霧はいつの間にか消え、火に照らされた二人の影が音もなくゆらゆらと揺れていた。

「そうだな。私はベルの螺旋の先を見ていたい」

再び向き合って、アスカは言う。

「ベルに至るまで紡がれた名も無き者たちの物語。ベルがこれから歩むであろう、名も無き一人の物語。」

それは私の遠いかつてを、僅かに思い出させるものだ」

アスカは何も変わらぬ。自分の事を語りながらも淡々と記録を讀むように、アスカはどこか他人事だ。

「だから私はベルを守る。ベルがそう望まぬ限り、全てのいかなる悪意から、私はベルを守り続ける」

けれど。

馬鹿で世間知らずで騙されやすくて。

どこまでも純真で無垢で真っ直ぐで。

争いのない陽だまりの世界で、生きるような。

そんな少年の事を想うアスカの顔は。

「ベル・クラネルは、私の家族だ。ベルは私の――導きなんだよ」

枯れ果てた老木のように、火に祈る旅人のように。薄らと慈しむ、

暖かな微笑みを浮かべていた。

――

その顔を見て。

その微笑みを見て。

アスカの献身の理由を知って。

リリは。

リリルカは。

リリルカ・アーデは。

次の日。

少年と少女の冒険に、小さなサポーターはいなかった。

死の瘴気

最初の死者ニトの原始的な奇跡

死の瘴気を放ち、触れたものを腐朽させる

ニトの物語は墓王の眷属のみが知る

ならばこの物語は本来世にあるはずもないが

あるいは古竜狩りを共にした神々の僕が

死を司る神の畏怖を、密やかに伝えたのだろう

外伝三巻分

蓋（けだ）し仮面は徒し世の仇

始まりは、ウラノスから与えられた使命だった。

24階層にて突如発生した大量のモンスター。通常を遥かに超える怪物の行進に、階層適正レベルのパーティが次々に襲われ、大きな被害が出た。

そうなれば当然ギルドの耳にも届く。ほんの数日で十に届く冒険者依頼が被害に遭った冒険者から叩きつけられ、職員も本腰を上げて上層部に知らせるべきかと動き出した。

その報連相の隙間を縫うようにフェルズは依頼の羊皮紙を回収し、数週間前の『30階層の事例』との類似性を確認。速やかにこれを鎮圧すべく、『灰』に使命が与えられた。

使命の内容は以下の通りである。

24階層のモンスターの大量発生の原因調査、および鎮圧。

そして可能ならば、敵の正体を暴く鍵になる情報の回収。

『灰』は正直乗り気ではなかったが、使命を欲したのは己だ。大人しく従い、迅速に解決するために即日で動く事にする。

それはリリルカ・アーデを巡る悪意を排除した、翌日の事であった。

ダンジョン18階層は『迷宮の楽園』と呼ばれている。

モンスターの産まれない安全階層。大自然と清水、天井を満たす水晶の輝きが擬似的な青空を形作る。階層の中心には青い湖が広がっており、島と見紛うほど大きな岩が鎮座していた。

大きな岩——島に聳える巨大樹が見事な自然の緑を湛える。ダンジョンでありながら世界有数の景観を誇るこの場所は、冒険者たちの数少ない休息の地だ。

そしてまた、冒険者である彼らにのみ許された、まさしく迷宮の楽園でもあった。

そんなダンジョン18階層に一人の少女が降りてくる。

清涼な風の中を滑らかに流れる金髪、主神の趣味が如実に現れた銀の装甲と蒼色の軽装。腰に佩いた《デスペレート》が少女の正体を表している。

アイズ・ヴァレンシユタイン。迷宮都市オラリオで第一級冒険者に数えられる人間ヒューマンの少女は——やたら嬉しそうな空気をふりまいて『リヴィラの街』に向かっていた。

(……ベルとのお話、楽しみだな……)

本人はキリツと表情を整えているつもりだが、緩んだ目元や綻んだ唇が発する空気は誤魔化せない。アイズはほんの少し前、ダンジョンで交わした『約束』を思い返し、心の中の小さな幼女アイズが足元で何度もバンザイをしていた。

それは念願の兎ベットをようやく捕まえる事の出来た、無垢な少女の喜びだった。

(……つと、いけない。これから冒険者依頼だから、しつかり気を引き締めないと)

ふるふると首を振ってアイズは目的地に急ぐ。冒険者たちが運営する『リヴィラの街』、その入り組んだ街中で目立たない場所にある『黄金の穴蔵亭』こがねあなぐらていを、やや迷いながらも少女は無事に探し当てる。

長年この街を利用しているアイズだが、こんな酒場があるとは知らなかった。ダンジョンの構造を利用した酒場の内装に感心しつつ、少女は足を踏み入れる。

そこで見知った犬シアンスロープ人の少女に出会い——『ジャガ丸くん抹茶クリーム味』の合言葉で、彼女を含めた店内の冒険者全てが、今回の冒険者依頼の『協力者』だと知ったのだった。

アイズが受けた依頼は『24階層のモンスター大量発生調査』だ。目的地は食料庫パントリー。『協力者』である「ヘルメス・ファミリア」団長、アスファイ・アル・アンドロメダと依頼内容を照らし合わせたアイズは、臨時パーティを組む上での最低限の情報交換を行った。

その後『リヴィラの街』で必要な物資を補給すべく一行が動こうとした所で、犬シアンスロープ人の少女——ルルネ・ルーイが待ったをかける。

「ちよつと待った。【剣姫】、あんたは二人連れじゃないのか？」

「……？ いえ、一人で来ましたけど……」

「おつかしいなあ……黒ローブのやつは援軍は二人って言ってたんだけど……」

「二人？ それは確かなのですか、ルルネ」

「間違いないよ。援軍は二人って確かに言ってたんだ」

ルルネの断言にアスフィは銀製の眼鏡の奥で黙考する。水色アクアブルーに近い碧眼が僅かに動き、すぐに答えを弾き出した。

「冒険者依頼の内容を鑑みれば、あまり悠長に時間を使っていられません。一度補給かいだしに向かい、終わった後またここに戻りましょう。それでもいなければ我々だけで出発します」

「いいのか？ アスフィ」

「正直【剣姫】がいるだけで援軍としては十分心強いです。もう一人の方には悪いですが、【剣姫】以上の戦力が来るとは思えません。」

店主に書き置きを預けて渡して貰えば、十分な実力を持つ冒険者であれば先行する我々に追いつける筈です。むしろそのくらいでなければ、居たところで大した戦力にはならないでしょう」

「うっわ、シビアだなあ……でもまあ、私はアスフィに賛成。【剣姫】はどう？」

「えっと、私は……」

自分以外の援軍について聞いたばかりのアイズはそつと周囲を見渡す。臨時パーティーである「ヘルメス・ファミリア」の面々も団長アスフィの意向に同意のようだ。

ならば自分が強く反対する理由もないと、アイズが肯定の返事をしようとした——その時。

がしやり、と。店の入口から、金属の軋む音が響いた。

瞬間、「ヘルメス・ファミリア」は一斉に酒宴を楽しむ冒険者の演技をする。来た時とそっくりそのまま同じ光景にアイズが面食らっていると、ルルネが「【剣姫】はこっち！」とカウンター席へ引っ張ってくれた。

がしやり、がしやり。『黄金の穴蔵亭』へ降りる階段から金属の軋む

音が断続する。演技をしつつ店内の視線が入り口に集中し——アイズの大根役者っぷりにルルネが慌てつつも——入り口の天井の角を掴み、金属音の正体が現れる。

それは、並の冒険者より段違いに巨大な——異様な仮面を被った全身鎧だった。

まず目につくのはそのデカさだ。3 M^{メートル}、いや4 M^{メートル}はあろうかという巨体。一般に大男と呼ばれる域を完全に逸脱した異常な身長は、その巨軀に相応しい重厚な鎧で覆われている。

見るからに分厚い古い黄銅の鎧。隙間なく全身を固め、胸部と背部には白色の布が掛けられている。装飾はなく、重厚な防衛力だけを追求した全身鎧は、大抵の武器では凹みすらつけられないのではと思わせる威容を誇っている。

そして何より不気味なのが頭部の異様な仮面だ。誰が作ったかも分からない異質な仮面、それが一つではなく三つも頭に張り付いている。

正面の仮面は雄々しい父を模したものだろうか。髭やもみあげ、巻き上がった髪が歪んだ形で彫られている。どこか笑っているような相貌がおどろおどろしい雰囲気醸している。

左側頭部の仮面は優しい母なのだろうか。装飾冠^{ティアアラ}のような白い冠と女性を歪に描いた彫刻。先の仮面よりはまだマシだが、薄気味悪さは変わらない。

右側頭部の仮面は初々しい子を表しているのだろうか。正面の仮面に似た髪がそれ以上に強調されている。目と口と思しき三つの穴はひび割れ、ぽっかりと空いた黒色が不可解な感情を逆立てた。

4 M^{メートル}の巨軀、全身鎧、極めつけは三つの仮面。およそまともではないう出で立ちに店内の空気が凍りつく。

それを踏み砕くように全身鎧は歩を進めた。がしやり、がしやり。厳しい金属がぶつかり合い、重低音が木霊^{こだま}する。

静まり返った店内。凝集する視線。誰もが鎧^{それ}を冒険者でなく異物として扱っている。

だが止まらぬ4 M^{メートル}の巨人は、がしやり——と。店の中心に全身鎧

は直立し、周囲を見渡す。警戒態勢を取る店中の視線を一身に受け――
「さあ、どうした!」と言わんばかりに、両手を広げ前に出た。

「……………」

完璧な静寂が、店内を包んだ。

(……………な、何だこいつ(何この人)っ……………!?)

【ヘルメス・ファミリア】と【剣姫】の心中が一致した瞬間である。

皆が皆唾然とした表情で謎の全身鎧を凝視していた。

それが見えている筈なのに一言も発せず、両手を広げた全身鎧は数秒で元の立ち位置に戻る。そして【天を仰ぐ】大げさな動きで額を押さえ、何の反応も示さない彼らに【呆れる】ように両手を横に胸を張った。ご丁寧リアクションに小さく首を振り、ため息が聞こえてきそうな迫真振りだ。

(こいつぶつ殺してえ……………!?)

妙に神経を逆撫ジエスチャーでる一連の行動に幾人かが殺意を抱いた。致し方ない話だろう。既に得物ジエスチャーに手をかけている者もいる。

それを見てか、行動を終えた全身鎧は居住まいを正してゆっくりと再び首を回す。今度は店内の全ての人物を一人一人観察するように顔を動かして――ひどくくぐもった、低音の音が、鎧の隙間から零れ落ちた。

『我ら血によつて人となり、人を超え、また人を失う。』

知らぬ者よ――かねて血を恐れたまえ』

「ううええっ!?!」

朗々と詠うたうようだがボケた低音。それに著しく反応したのはルルネ・ルーイだった。アイズが合言葉を言った時と同じように椅子から転げ落ち、あわあわと塞がらない口から悲鳴のような答えを叫ぶ。

「あ、ああ、あんたがもう一人の援軍かよおっ!?!」

「その通りだ。それで、貴公らが今回の冒険者依頼クエストの『協力者』か?」
「……………ええ、どうやらそのようです」

頭が痛い、そんな表情でアスフィは椅子から立ち上がる。正直こんな得体の知れない人物を援軍として送られても…………と、疲れ切った心情が滲む顔で、彼女はパーティの代表として挨拶を交わす。

「……私はアスファイ・アル・アンドロメダです。あちらの【剣姫】を除いた14名が私と同じ【ヘルメス・ファミリア】となっています。

それぞれの情報共有は後ほどするとして、まずは貴方の名前と所属を伺ってもよろしいですか？」

まずは素性を確かめるのが先決だ。色々と言いたい事を飲み込んでアスファイは全身鎧を注視した。装備から戦闘スタイルを推測するためだが……どこを見ても装甲ばかりで武器が一つも見当たらない。道具を収納するバックパックやホルスターやアイテムさへもだ。

本当に大丈夫なんだろうか。というかこれは何なんだろうか。特大の不安を抱くアスファイを他所に、全身鎧はこれといった逡巡をせずあっさり答えた。

この世界にたどり着いてから、今日まで繰り返した。変わらぬ言葉を、古鐘の声で。

「名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

その瞬間、最も強い反応を示したアイズを鎧の内側で眺めながら。

『灰』は『協力者』達を、暗い瞳で見続けていた。

熊を象った獣のモンスター、『バグベアー』が必死に逃げる。

背後には炎、迫り来る火勢。共に冒険者を襲ったモンスター達は火の舌に舐められ焼かれていく。

もはや趨勢は決していた。モンスター側に勝利はない。それを本能で悟った熊獣は巨体に見合わぬ俊敏さで逃亡する。

しかし、それは叶わない。バグベアーには既に対峙した冒険者達の仕掛けにかかっている。全身の体毛を浸す液体。それが僅かに炎に触れ——バグベアーは炎上し、間もなく動かなくなった。

信頼と結束から生まれる素早い連携。パーティ編成の役割を全うする個々の実力。そして素早くて確かな指示を出す指揮官。ブレイン

「素晴らしい。やはり協力とは良いものだ。『協力者』は優秀であるほどありがたい」

全身鎧を纏う4 Mメドルの巨人——『灰』は手放しの賞賛を【ヘルメス・

ファミリア」に贈った。ひどくくぐもった音声は平時の彼女よりずっと低く、正体を知らなければ男のそれと勘違うほどの低音だ。

「うん……強い」

記憶にある「灰」の姿と落差が激し過ぎる隣の全身鎧に戸惑いつつ、アイズも同じような感想を述べる。あまり口が上手くない少女は頭の中で評価を並べ、主力を除いた【ロキ・ファミリア】の中堅と同等かそれ以上と結論付けた。

特に気になったアスファイについてアイズはこつそりルルネに尋ねる。「Lv.は？」と聞いて「Lv.4だよ」とあっさり返していたのを「灰」は当然耳にしていた。

魔石とドロップアイテムを回収した一行は道中の小空間で休息を取る。「ヘルメス・ファミリア」の面々が軽い食事をしながら談笑する横で、アイズ、ルルネ、「灰」の三名は微妙な雰囲気で作っていた。

「……うー、なんで私は「灰」なんかと一緒に飯食ってた……」

気まずい空気の中もそもそと携行食を食べるルルネは耳を垂らして愚痴る。「【剣姫】が「灰」と一緒にいるからだけどさあ……」と呟く犬人の少女は、さつきから気になっていた事を思い切って言葉にした。

「ていうか「灰」さあ、あんたは飯食べないのか？ さつきから無言で座ってばかりで全然食べてないじゃないか」

「私に食事は不要だ。食う事はできるが、あえて物資を浪費する意味はない」

「はあ？ なんだよそりや。何言ってるか分かんないけど、冒険者依頼中に倒れられたら困るのはこつちなんだぜ？ あんたの事知ってる奴がここには居ないんだ。悪気があつて言うわけじゃないけど、ちよつと信用できないんだよ……」

「……あ。私、アスカの事……知ってる、よ？」

「へー、【剣姫】は知ってるのか……って、ええ!? マジでっ!? なんで早く言わないんだよ!」

いつもよりまずく感じる食事を進めていたルルネはアイズの何気

ない一言に仰天する。思わず携行食を放り出す勢いで問い詰める
犬 シアンスロープ 人にアイズは少しそわそわしながら謝った。

「ごめんなさい……私の知ってるアスカと、見た目が全然違ったから……」

「見た目が違う？ それってどういう——」

「私から説明しよう」

「うわあああつ!？」

音もなく接近した「灰」にルルネは大層ビビり散らす。何せ相手は4 M、メドル平均的な少女の身長しかないとルルネからすれば二倍以上デカイ相手だ。それが鼻先に顔を近づけて見下ろしてくるのだから堪らない。

「ビ、ビビらすなよっ!?! 心臓止まるかと思っただろっ!」

「済まない。だが、私のこの姿には理由がある。アイズに話させる訳にはいかなくてな」

「理由……? アスカ、それって……?」

「端的に言えば、変装だ。中層以降での活動が露見するのは困る。だからこのように変装している」

「そうなんだ……じゃあ、アスカの見た目、言わない方がいい?」

「ああ。そうしてくれると助かる」

「……なんだかよく分からないけど、変装つてのは一応分かった。でもそんな目立っていいの? 私なら一度見たら絶対忘れないぞ?」
「この姿が目立つ分には構わん。これと普段の私を結び付けられる者など、よほど頭の切れる者しかいないだろう」

元の位置に戻って片膝で座る「灰」にアイズはこつくりと頷く。
「ほんとかよ……」と納得いかない表情を浮かべるルルネだったが、不意に現れたアスファイから送られる「静かにしなさい!」という視線に気付き、慌てて縮こまった。

「全く……」と小さく息をつくアスファイは、アイズの側まで近寄って話を切り出す。

今回の依頼、『24階層のモンスター大量発生調査』。その危険性はどれほどと予想されるか、率直な意見をアスファイは求めた。

間を置いて、アイズは危険だと肯定する。第一級冒険者の【剣姫】の判断にアスファイは空を仰いだ。足元でこの依頼を呼び寄せてしまったルルネはやりきれない思いを顔に刻む。それをパーティとは長所も短所も、失敗も成功も分かち合うものだとしてアスファイはフォローした。

「先程の戦闘はいい動きでしたよ」と、何てことのないように言うアスファイにルルネは照れくさそうに髪を掻く。そんな彼らの事など関係ないともいうように、「灰」は前触れなく、くぐもった低音を鎧から落とした。

「私は今回の依頼が二度目になる。以前にも酷似した冒険者依頼を経験した」

「……「灰」、それは本当ですか？」

周囲が軽く目を瞠る中、アスファイはすぐさま鋭い目に切り替えて尋ねた。

総勢17人のパーティを預かる身として情報は可能な限り集めておきたい。同時にこの得体の知れない人物について見極めるつもりで彼女は一挙一動を観察する。

それに気付きながらも、「灰」は相手にせず、起伏のない結果報告を伝達した。

「三週間前、30階層でモンスターが大量発生する異常事態が起こった」

「……初耳ですね」

『下層』の話だ。噂になるほど多くの冒険者が辿り着ける領域ではなく、また私を含めた『協力者』が数日の内に鎮圧した。おそらくはそのためだろう。

当時我々は正規ルートを席卷していたモンスターの大军を駆除した。だが異常事態は治まらず、手当たり次第にモンスターを駆逐した結果、異変の原因が食料庫である事を突き止めた。

これはあの黒衣にも伝えてある」

「……続きを」

「食料庫に続く道は正体不明の緑色の生きた肉の壁によって塞がれて

いた。これによりモンスターは食料庫パントリーに立ち入る事が出来ず、別の食料庫パントリーに向かわざるを得なかった。

つまりこの一件はモンスターの大量発生ではなく、大移動。食料庫パントリーを指す一群がいくつかの正規ルートに進出したと考えられる」

いつの間にか「灰」の声以外、立ち上る音はない。アスフィ達のみならず、周囲で休息レストを取っていた「ヘルメス・ファミリア」の面々も真剣に聞き耳を立てている。

「我々は肉壁を破り、食料庫パントリーへの道ルートに侵入した。内部は通路を覆うように緑色の肉壁が蔓延はびこり、血に似た発光を繰り返し、腐乱した甘い死臭がそこかしこから漂っていた。

そして注目すべきは、そこで『新種のモンスター』が大量に襲いかかってきた事だ」

「新種のモンスター……？ それつてもしかして『リヴィラの街』を襲った蛇みたいな奴か!」

「知っているのか、ルルネ・ルイー。ならば話は早い。そうだが、怪物祭モンスターフェアにも現れた食人花のモンスターだ。戦闘を通して得た情報はここで話しておこう」

「灰」は確信した情報を一つ一つ述べる。

食人花のモンスターは打撃に強く、斬撃に弱い。

性質としては植物に近く、炎属性が有効である。

魔力に釣られる習性があり、率先して詠唱中の魔道士を狙う。

他のモンスターを襲い、魔石を食う場面も確認された。おそらく全てが生まれつきの『強化種』である。

最後の情報は特にパーティの面々を驚かせた。周囲からどよめきが聞こえてくる。それをアスフィが片手で制し、「灰」は報告を続行する。

「絶え間なく襲いかかるモンスターを倒しながら食料庫パントリーに辿り着いた我々が見たものは、モンスターの液体しよくりようを生む赤水晶の大支柱はしらに絡みつく——全長三十Mメドルに及ぶ巨大な食人花のモンスターだった」

「三十M!?! おいそれつてっ!?!」

「大きさだけで言えば『階層主』クラス級だな。最も、実際の強さはそこま

ではない。ただ巨体であるだけで、十分厄介ではあるのだが。

その巨大な食人花^{モンスター}は三体いたのだが、我々の侵入と同時に三体全てと大量の新種のモンスターが襲いかかってきた。我々は分担して対処し、三体のうち二体を撃破したのだが……残る一体が何を思っただ主柱に突撃してな。

大主柱を失い、食料庫^{パントリー}は崩壊。我々は辛くも逃げ延び、それで依頼は終わったわけだ」

「灰」が話し終わると、暫しの沈黙が場を支配した。「ヘルメス・ファミリア」はこれから赴くであろう修羅場を想像し、一様に顔を固くする。

アイズもまた凜とした真剣な表情で考えられる危険を想定していたが——ふと『リヴィラの街』の事件を思い出し、それをそのまま「灰」に尋ねる。

「アスカ……ハシャーナさんって、知ってる？」

「ハシャーナ？ いや、知らないが……聞いた事はあるな。確か、【ガネーシャ・ファミリア】のLv.4。【剛拳闘士】ハシャーナ・ドルリア。第二級冒険者と記憶している。それがどうかしたのか？」

「その人、30階層で……その、『緑の宝玉』を回収する依頼を受けてた、みたいんだけど……ひよつとして、アスカも同じ依頼を受けてたの？」

期せずして落とされた質問に、特にアスファイが耳をそばだてた。事件に巻き込まれたルルネも目を見開いて「灰」を見る。

だが「灰」は、即座にそれを否定した。

「いや、ハシャーナ・ドルリアは『協力者』ではない。前回の『協力者』は訳あって明かせないが、ハシャーナ・ドルリアは参加していなかった。それはおそらく別件だろう」

「……貴方にとつてはそうだとしても、黒ローブなる人物にとつてこれらの依頼は繋がっている筈です。」

——貴方の語った事が、全て真実だった場合の話ですが」

水色^{アクアブルー}に一房の白が混じった髪を艶やかに踊らせる美女、アスファイ・アル・アンドロメダは眼鏡の奥に半眼を形作る。その瞳は酷薄に全身

鎧を捉えていた。

「『灰』、率直に言って私は貴方が信用できません。Lv.1などと嘯き、武器は何でも扱おうと豪語、「ヘステイア・ファミリア」なる聞いた事のない新興「ファミリア」に所属している事も貴方への不信に拍車を掛けます。

客観的に言って貴方は怪しすぎる。黒ローブなる人物の仲間ではないかと私は疑っています。「劍姫」とは知己のようですが、それだけではとても信用には足りません」

「お、おい、アスファイ。何もそこまで言わなくても……」

「私はパーティを預かる身です。不確定要素を安易に受け入れて、みすみす犠牲を出すような事はあってはなりません。皆を守るために——必要があれば、私は貴方を『排除』します」

おずおずと止めるルルネの声に被せるようにアスファイは断言した。それは「ヘルメス・ファミリア」を預かる団長として、臨時パーティの命の責任を負うリーダーとしての覚悟の現れだ。それが見て取れたから、ルルネは何も言えなくなる。

そして『灰』は、平然と。アスファイの言葉を肯定する。

「ああ、それで構わない。『協力者』として私を無用と判断すれば、『送還』もまた一つの手だ。それは貴公の権利であり、義務である。

——要は、私に実力を示せと言いたいのだろうか？ 最低限の信用を、勝ち得るだけの力を」

「……ええ、その通りです。私達を信用させてみせて下さい、『灰』」
アスファイの視線が『父の仮面』とぶつかり合う。第二級冒険者の風格を見せつける『万能者』と、不気味な仮面を三つも頭部に貼りつけた全身鎧。

二人の対峙は嫌に長く感じる数秒間続き——マントを翻したアスファイの休息終了の指示によって打ち切られる。

『灰』は何事もなかったかのように立ち上がり、「ヘルメス・ファミリア」一行に続く。遠ざかる4Mの全身鎧をアイズは見つめ——アスカの力を見極めるために、意志の宿った瞳で後を追った。

《アスペレート》の剣閃が『ソード・スタッグ』を斬断する。

止まらぬ流麗な刃の閃き。Lv.6に達したアイズは昇華した肉体と精神のズレを埋めるため、場数を求め怪物を斬り払う。

正規ルートを埋め尽くすモンスターの大军が掃討されたのはあつという間だった。上から見えていた「ヘルメス・ファミリア」の面々が「オレたちいらなくね?」と意識を共有するくらい、アイズの力は圧倒的だ。

第一級冒険者は伊達ではない——実物を目にしてその力を確かめたアスファイは、アイズが倒したモンスターの魔石をドロップアイテムを総出で回収後、目的地を北に定める。

24階層に三ヶ所ある食料庫。そのうちどこかが封鎖されモンスターが移動しているなら、逆にそれを辿ればいい。異変の元凶は北の食料庫であると断定したアスファイは、ちらりと《灰》を流し見る。

「——それでは、ここから食料庫までの道中は《灰》に任せます。よろしいですね?」

「ああ。今度は私の力を示す番だろう。貴公らの実力は見せてもらった。素晴らしい『協力者』だ。足手まといにはならない程度は、私も証明しなければなるまい」

「ええ、ですが期待はしていません。貴方の申告通りLv.1であるのなら、この階層のモンスターと戦える道理はありませんので。

もし力不足であるのなら——貴方をここに置いていきます」

「それで構わん。私も冒険者ではある。死は元より覚悟の上だ」

「では先頭にどうぞ。お手並を拝見させていただきます」

「分かった」

アスファイに促されるまま《灰》は一行の一番前に移動した。4Mの巨大な全身鎧は最後尾から見ても異様な存在感を發揮している。

虎人を初めとした前衛の冒険者は正面の馬鹿でかい鎧が若干目障りだったものの、一応は視界を無闇に塞がないよう配慮する動きを少し評価した。

中衛からそれを見定めるアスファイは、隣に立ったルルネから小さく

耳打ちされる。

「なあ、アスファイ。本当に「灰」一人でやらせるのか？」

「ええ。ここで実力を見ておかなければ後々の行動に支障が出ますから」

「それは分かるけどさ、Lv.1^{レベル}1つて言ってたろ？ そんな奴置いてつたらこの階層じゃ絶対やられるって。そうでなくても一人で戦えるかどうかも分かんないじゃないか」

「それを確かめるための措置です。万が一の時はファルガー達に助太刀に入るよう伝えていきますし、少し痛いですが『ハデス・ヘッド』を渡せば地上に戻るくらいは出来るでしょう。」

……一応『リヴィラの街』には居たのだから、相応の実力があると思いたい所ですが……さて、どうなる事か」

「うー……なあ、『剣姫』はあいつがどれくらい強いのか知らないのか？ 知り合いなんだろ？」

「えっと……正確には、分からない。アスカが戦つてるところ、ほとんど見た事ないから」

でも、とアイズが言葉を続けようとしたその時。前衛の虎^{ワルタイガー}人が敵襲を知らせ、「灰」一人が前に出た。

三仮面の全身鎧。古い黄銅で造られた手甲は両手とも何も握っていない。徒手空拳で歩む「灰」の行く末には20を超えるモンスター^タの群れが迫っている。

前衛は既に救出に入る準備をしていた。後衛は固唾を飲んで、中衛のルルネは落ち着かない様子で、アスファイは冷静に推移を見守る。

そしてアイズは、刮目する。底知れぬ力の片鱗を感じさせる、「灰」の強さを知るために。

16名全員の視線が集中する先で、猛進する怪物の群れと闊歩する「灰」が衝突し。

透けるように交差した直後、全てのモンスターがバラバラになった。

「……は？」

驚愕に彩られる冒険者たちに呆気にとられた声が広がった。

『バグベアー』『バトルボア』『ソード・スタッグ』『ダーク・ファンガス』『ホブゴブリン』——個々の形を保っていた『大樹の迷宮』の怪物は数瞬の内に解体された。モンスターの血と肉が出来の悪い挽肉のように転がり散る。

混合し、一部を残して灰となる死骸の先で、『灰』は無言で凝立していた。後頭部についた二つの仮面が不気味に左右を眺めている。ついさつきまで素手だった全身鎧の両手には、二振りの得物が握られていた。

片や右に垂れ下がるのは切先が湾曲した《生贄刀》。邪教の儀式に用いられる禍々しい大曲剣は、怪物の血に塗れた刀身を禍々しい力によって浄化し持ち主の生命力に変える。

片や左で持ち上げられるのは巨大な両刃斧《ゲルムの大斧》。無骨ながら高い技術力によって造られた精巧な大斧は、その重量をもって大型の怪物を一刀の元に両断する。

4 Mメドルに及ぶ体躯に見合った重量武器。それらを振るい、モンスターの群れを倒したのだろうと——数瞬を見切れなかった「ヘルメス・ファミリア」はそう推測するしかなかった。

アスファイはかろうじて『灰』の残像を追えたただけだ。猛進する怪物と衝突した瞬間、『灰』の姿が多重にブレ、網のように重なった刃の軌跡をモンスターが切り刻まれた後に視認するのが限界だった。

何が起こったのかを見切れたのは、アイズ・ヴァレンシユタインただ一人だけだ。第一級冒険者、迷宮都市オラリオでも数えるほどしかないLv.6レベルの麗しき【剣姫】は、『灰』が何をしたのか正確に捉えていた。

『灰』は、厳密にはモンスターと衝突していない。零秒でソウルを有形に変え、群れの隙間に武器を差し込み、強引に活路を開いていた。その開けた空間に全身鎧をねじ込みながら、両手の武器を素早く振るう。

力任せに振るわれる巨大な大斧と大曲剣は、だが卓越した技量によって正確に急所を斬断していた。勿論猛進の隙間に入ったとはいえず、角や爪は『灰』を襲う。しかし重厚なる全身鎧と強靱によって押

し通し、鎧袖一触の如く斬り払ったのである。

「……マジかよ……あいつ、Lv.1つて言ってたよな……？」

呆然と呟くルルネの言葉が彼らの思いを代弁した。冒険者の常識からはあまりにも——あまりにも逸脱した“灰”の所業は、新たに襲いかかるモンスターによつてなお続く。

空中を飛行する蜻蛉型のモンスター、『ガン・リベルラ』は《ファリスの弓》で悉く討ち取られた。戦技「ファリスの三射」による一射三矢の連撃が、尾から弾丸を放つ狙撃蜻蛉の特性を發揮させる事も許さない。

『上級殺し』の異名を取る『デッドリー・ホーネット』は《ハルバード》で全滅する。巨大蜂が誇る人類を裁断する大鋏の顎と大杭のような『毒針』も、槍の刺突と斧の薙ぎ払いを併せ持つ斧槍の広い攻撃範囲に敵わない。

大昆虫『マッドビートル』は《岩の大斧》で叩き潰された。数Mの外殻も鋭い鎌のような前脚も意味がない。数に任せて群がろうと、“灰”はそれ以上の力任せにすり潰し、大地にめり込んだ大斧を引き抜き敵を搗ち上げる。

『リザードマン』は迷宮の戦士だ。天然武器である鋼の大花と花片の剣を扱う蜥蜴人は時に『技と駆け引き』すら行う。だが“灰”はそれ以上に卓越した“不死”だった。《ミルの曲剣》と《傀儡の曲剣》を踊るように空に滑らせる“灰”は4Mの巨躯でバク転すら軽やかに熟し、小振りな刃が執拗に急所を狙い『リザードマン』の亡骸を積み上げる。

それはアイズのような天才的な剣技ではなかった。常人には後塵すら拝めぬ第一級の力と技。24階層の正規ルートを埋め尽くす怪物の一群を殲滅した「剣姫」の実力は、頂点に足る未完の『器』と憧憬に値する英雄の輝きを示していた。

翻つて、“灰”はどうだろう。確かに驚異的な戦いだ。単独ではLv.3でも厳しいであろう『大樹の迷宮』をたった一人で戦い抜いている。

だが、その戦いに華はない。駆け引き、体捌き、技術と戦術。それ

らはどこまでも凡庸で、教科書的な戦闘だ。

逸脱はしているが、常人の域。常識を超えているものの、革新はない。平凡に動きを読み、汎用の剣技を用い、凡百と同じ駆け引きを行い、尋常の剣で——怪物を殺す。

「灰」の戦いは、特別ではない。殻を打ち破る者が辿り着いた一人の到達点^{オリジナル}、他に類を見ないその者の代名詞とも言える流儀^{スタイル}が、「灰」の戦いには見えてこない。

定型、陳腐、常套、普通。有り触れた凡人の戦い方でありながら。——それは、全てを呑み込む底知れぬ闇のように。一切の過失^{ミス}なく、怪物の命を奪い去った。

「……さて、この程度で十分か？」

連続した怪物の強襲を打ち崩し、最後のモンスターを砕いた。「灰」は《モーニングスター》をソウルに溶かして振り返る。

アスファイ達と「灰」の間には冷たい灰ばかりが積もっていた。魔石は一つも存在しない。徹頭徹尾、敵の確実な殺害を遂行した「灰」はやたらと多い『ドロップアイテム』を『器』にしまいながらパーティに戻る。

血塗れになった4M^{メドル}の巨人。黄銅を汚す怪物の血^{あか}がゆっくりと消えていくのを目撃して、アスファイは冷や汗と共に苦笑を刻んだ。

「……成程。素性はどうかあれ、援軍として送られるだけの實力はあった、という事ですか……」

先程の言葉と今までの態度を撤回します。申し訳ありませんでした、「灰」。少なくとも戦闘能力という一点において、貴方は信用の置ける御仁のようです」

不敵な笑みを取り繕ってアスファイは「灰」に手を差し出す。数秒それを眺めて意図を理解した「灰」は大きく屈んで握手した。

「それでは改めまして、今回の冒険者依頼^{クエスト}に同行するアスファイ・アル・アンドロメダです」

「名前はない。ただ「灰」と呼ばれている」

「貴方の言葉通りなら、この依頼は過酷なものとなるでしょう。ですから無事に完遂できるよう、貴方の力に期待します」

「こちらこそ頼りにしている。貴公らは優秀な『協力者』だ」

団長であるアスファイが認める。その通過儀礼を経て、「ヘルメス・ファミリア」の面々が「灰」に向けていた警戒や棘がようやく取れた。冒険者が信奉する力を示した「灰」に対し、ぎこちないながらもコミュニケーションを取る。

ある程度の人数と挨拶を交わした「灰」は、ふと思い出したようにアスファイに話しかけた。

「ああ、そうだ。アスファイ・アル・アンドロメダ。二つほど言っておく事がある」

「何でしょう?」

「まず私の弱点だが、私は多対一が最も苦手だ。ある程度の数は相手取れるが、許容を超えればあっさり死ぬ。

私を運用する場合、それを念頭に置いて指示を出してくれ」

「……分かりました。覚えておきましょう」

「それと先の報告では信用を考慮し、伝えなかった事がある。今ならばそれも一定の材料になるだろう。

黒衣が言っていた。30階層の件もあり、この事態を引き起こしている何者かは警戒している。故に今回は番人が居る可能性が高いそうだ」

「番人、ですか?」

「ああ。私も詳しくは聞いていないが……何でも、新種のモンスターを操る調教師らしい」

「……!」

調教師テイマイの単語に目を瞠って反応したのはアイズだった。「灰」の戦闘を思い返していた少女は二人の会話に参加する。

「新種のモンスターテイマイの調教師……私、知ってる」

「! それは本当ですか、【剣姫】」

「うん。『リヴィラの街』で戦った、赤髪の調教師テイマイ。その時、私はLvレベル5だったけど……勝てなかった」

「なっ!? だ、第一級である貴方がですかっ!?!」

「ほう。それは初耳だな」

耳を疑うアイズの話に戦慄するアスファイの横で、「灰」は少しだけ興味が出たように耳を傾ける。

「フィンとリヴェリアが相手をしたけど、逃げられた。——赤髪あの調教師は、強い」

「……それが、この先に待ち受けていると？」

「30階層の一件は食料庫パントリーが新種のモンスターのの巣窟になっていた。今回も同様であれば、まあいるだろうな。」

同じ轍を踏まぬよう警戒しているのなら、尚更だ」

「くっ……なんて頭の痛い情報……！ 聞けば聞くほど危険度が増すなんて、ヘルメス様以上に厄介ですね……！」

疼痛を堪えるように頭をおさえるアスファイは、やがて頭を振って目の前の二人を凝視する。Lv.6レベルの冒険者と、自称Lv.1レベルの異分子。げんなりとした顔で瞳だけをギラつかせる「万能者」ベルセウスは二人を見ながらがっしりとアイズの肩を掴んだ。

「——その番人が現れた場合、貴方がたにお任せします。相手は第一級冒険者すら相手取れる凄腕テイマーの調教師。我々が挑んでも時間稼ぎが関の山でしょう」

「それはやらねば分からんだろうが、心得た。番人は我々が相手をする」

「うん、任せて——次は、負けない」

頷く「灰」と決意を秘めるアイズに「お願いします」とアスファイは念を押す。そして予想される脅威とその対処法を考えながら、願わくば何事もなくこの依頼が終わるよう祈った。

総勢17名のパーティは「ヘルメス・ファミリア」「ロキ・ファミリア」「ヘステイア・ファミリア」で構成されている。

前衛は以下の5名。

前衛リーダー、ファルガー・バトロス。剣闘士、ワータイガー虎人の男。武器：大剣。

エリリー・ビーズ。盾士、ドワーフの女。武器：双盾。

ゴルメス・レメシス。重戦士、人間の男。武器：大包丁。
ポット・パツク。戦士、小人族バルウムの女。武器：ハンマー。
ポツク・パツク。戦士、小人族バルウムの男。武器：メイス。
中衛は以下の7名。

中衛リーダー及び全体の指揮、アスファイ・アル・アンドロメダ。
【万能者】、人間の女。武器：短剣と道具。

ルルネ・ルイー。盗賊、犬人の女。武器：ナイフ。
タバサ・シルヴィエ。鞭師、猫人の女。武器：鞭。

セイン・イール。狩人、エルフの男。武器：手斧と短弓。

ホセ・ハイエル。剣士、狸人の男。武器：双曲剣。

スィーシア・リーン。剣士、エルフの女。武器：双長剣。

キークス・カドゲウス。軽業師、人間の男。武器：投石。

後衛は以下の3名。

後衛リーダー、ネリー・ウィルズ。サポーター、人間の女。武器：

魔剣。

メリル・ティアー。魔道士、小人族バルウムの女。武器：杖。

ドドン・ドルドン。サポーター、種族・性別不明。武器：角。

以上15名の「ヘルメス・ファミア」に援軍である「剣姫」アイズ・ヴァレンシユタインと「灰」が遊撃として加わるのが今回の編成となる。

「灰」は『協力者』達を一人一人観察していた。装備と性格、戦闘時の行動規範から自分のすべき協力支援を頭の中で組み上げる。

「灰」は多対一が最も苦手だ。アスファイにあらかじめ伝えたように、ある程度は相手取れるが許容を超えるとあっさり死ぬ。それは全ての不死人に課せられたある種の限界、克服できない弱点である。

不死というのはおかしなものだ。どれほどソウルを強化しようと肉体の脆さを克服できない。火の時代の戦いは命の削り合いであるが故に、完全耐性は存在しない。それも一つの要因ではあるが、呪われ人というものは根本的に脆弱な生き物だ。

それは彼らの死に様によく表れている。踏み潰され、高所から転落し、正面からあつげなく、あるいは奇襲や罠で命を落とす時。篝火で

の復活を選んだ不死は必ず灰に還魂^{かんこん}する。

灰に還り、灰より蘇る。血肉が灰で出来ているような復活は、それが不死と引き換えであるかのようだ。不死人は本質的な脆さを抱えており、神の如き『薪の王』へ至ろうとも、それはずっと変わらない。だから囲まれれば殺し尽くす前に殺し切られる。無傷のまま敵を屠れる範囲なら無類の強さを誇ろうとも、相討ちを覚悟で挑む時、不死の脆さが不死を殺す。

肉を斬らせては骨まで断たれるのだ。対処し切れぬ数の暴力はそれこそ灰を散らすように簡単に不死を死に至らしめる。神を殺せても下水のネズミに食られるように、不死とはそういう者なのである。……あるいはまた、容易く形を失う不死こそが人の本質、『ダークソウル』の姿なのかもしれない。北へ向かう巡礼者が、闇の苗床とならぬよう大きな蓋を被るように。人とは本来、無限に形を変え続ける何がしかであるのだろうか。

まあ、そんな事は『灰』にはどうでもいい事だ。重要なのは多対一の状況を多対多に持ち込める素晴らしき『協力者』の存在である。

『協力者』が一人でもいれば、不死の戦いは劇的に変わる。役割を分担し各々が適切に立ち回る時、一つの強みに特化しがちな不死の寄せ集めは、たちまち強大な一軍に変貌する。

故に『灰』は『協力者』を見極め、自らの立ち位置を決定する。ただでさえ熟達した『協力者』達が、より強くより安全に立ち回れるように。言葉無き霊体との試行錯誤に満ちた『協力』の記憶が、『灰』にそれを体得させていた。

そんな『灰』の卓越した支援を如実に感じているのが、他ならぬ【劍姫】——アイズ・ヴァレンシユタインである。

(すごい……！　初めて一緒に戦うのに、フィン達が側にいるみたい……！)

迫るモンスターを斬り払いながら、アイズは感嘆で瞳を彩る。背中を任せる4M^{メドル}の巨人が何年も戦場を共にした仲間^{ファミリア}のように頼もしい。

複数の敵が迫れば同時に攻撃されないように時機^{タイミング}をずらして牽制

する。死角には常に「灰」の姿があり、決して意識の外から攻撃させない。適切な武器を適切に用い、欲しいと思った時には最適の援護が飛んでくる。

アイズは鋭く《デスペレート》を振るいながら戦いやすさを実感していた。思い通りに敵が動く、常に全力を出させてくれる。金の少女にとつて『大樹の迷宮』のモンスターは相手にならなくても、これほど快適な戦いはそうそう感じた事がない。

最後のモンスターを倒し、魔石とドロップアイテムを回収する「灰」をアイズは尊敬の目で見ていた。自分にはできない初めて戦う味方との連携を完璧にこなす「灰」への、天然少女の純粋な称賛である。

それは端から見ていた「ヘルメス・ファミリア」にも同じ事が言えた。

「うへ〜……ほんつとにすげえなく……モンスターに何もさせないで殲滅してるよ……」

「流石に少し可哀想になるくらいだな。モンスター相手にこんな事を言うのもなんだが」

「つーか【剣姫】についていけてるだけですげーだろ。俺だったらとつくに振り落とされてるぜ」

「そりゃキークス、貴殿が投石専門だからだろ。ま、^{それがし}某も同意見ではある」

「ていうかさ、オレたち本当にいらなくない？ あの二人に任せておけば、もう依頼を達成したも同然でしょ」

「それはちよつとどうかと思うわ。でも、こんなの見せられちゃったらねえ」

「……貴方達、もう少し静かにしなさい」

雑談に興じる団員に^{アスフィ}団長の精彩のない注意が飛ぶ。「「へーい」と異口同音に返事をする彼らも似たようなものだ。文字通りレベルが違い過ぎてやる気が底抜けである。」

アイズと「灰」がモンスターと戦っているのは^{パントリー}食料庫までの道のりでの乱戦と精神力の浪費を嫌ったアスフィの指示だ。「灰」の申

告を考慮してアイズと組ませている。結果は上々だが、味方の士気と引き換えというのは……と、アスファイは頭を痛めた。

流石に致命的な不注意までは犯さないだろうと団員を信頼しているが……パーティの空気が緩んでしまうのはやはり避けたい所である。

緊張を率先して破る犬シアンスローブ 人が約一名いるため、叶わぬ話ではあつたが。

「なあなあレベル 灰レベル、ホントのホントはL.V.いくつなんだよ？ L.V.

5？ L.V.6？ 流石にL.V.7つて事はないだろうけどさ、私だけ

でいいんだ、ちよーつとだけ教えてくれよ！ ちよーつとだけ！」

「L.V.1だと言っただろう。ルルネ・ルーイ」

「もうその嘘は通じねーつて。あんだだけ派手に立ち回つてL.V.1つてこたあねーだろ。ルルネこいつが駄目ならオレはどーよ？ こう見えて口は固いんだぜ？」

「いつて!? おいキークス、頭押しえんなよ！」

横からしやしやり出た大きい耳に鷲鼻が特徴的な人間ヒューマンに犬シアンスローブ 人の少女が文句の声を上げる。それを皮切りに次々と質問が「灰」めがけて飛び交った。

「色々武器を使っていたが一番の得物はどれなんだ？」

「特にはない。使える物は何でも使う」

「アナタつてとっても大きいけど何の種族？ ひよつとしてハーフトワーフとかかしら？」

「答えられない。これは変装だ」

「ハスティア・ファミリア」つて聞いたことないんだけど」

「新興の「ファミリア」だ。結成して一月程度しか経っていない」

「某は詩人なんだが、貴殿と「剣姫」殿の詩歌うた、作っていい？」

「駄目だ。ここでの活動は露見したくない」

「好きな女の子はどんなタイプなのか教えてほしいなあ」

「？ 何故それを私に聞くのだ？」

素性を問うものから全く関係のない個人的な質問まで種々雑多な喧騒が広がる。仲間に押されて「灰」を囲む輪から飛び出たルルネ

はぶーたれた顔でアイズに愚痴った。

「あーもうめちやくちやだよ。あいつら好き勝手しやがって。せつかく私が情報を聞き出そうとしてたつてのにさ」

「……あの、あんまりアスカの事、聞かないほうが……」

「そうだ！ 【剣姫】って『灰』と知り合いだったよな!? いつ、どこで、どんな風に知り合ったんだ!？」

「え？ えっと、その……」

「頼むよ、教えてくれよ！ もう【剣姫】だけが頼りなんだ、私を助けると思つてさ〜！」

おずおずと止めようとしたアイズにルルネは堂々と継りついた。犬耳と尻尾をへたり込ませ、涙目にまでなる役者っぷりである。神々に【泥犬】^{マドル}の二つ名を贈られた盗賊の姿がそこにはあった。

うるうると捨てられた子犬のような目で見つめる犬^{シアンスロープ}人の少女。最近気になっている兎のような少年と重なって、アイズは逡巡した後、つい口を滑らせてしまった。

「……あまり、詳しくは言えないんだけど……」

「うんうん！ それでいいからさ！」

「アスカと最初に会ったのは、ダンジョン51階層で……」

「……………へ？」

「その時、アスカは一人で……単^{ソロ}独で、51階層にいた」

「……………はあああああああつ!? 『灰』が51階層に単^{ソロ}独でいたあああああああつ!？」

アイズの過去を思い返す発言にルルネは硬直し、ひっくり返る程の強い衝撃を受けた。あまりの驚愕に犬^{シアンスロープ}人の少女は思わず大声で叫ぶ。その声量と内容に『灰』を除いた一同がぎよっとして、必然的にほとんどの視線がアイズに突き刺さった。

それに少しびびくりしつつも、思い出を辿るアイズの唇は自然と続きを零していく。

「遠征中だった私は、みんなと一緒にモンスターの群れから逃げて……その群れを、アスカが倒して」

「なんだよそれ?! 遠征中でみんなと一緒にって、【ロキ・ファミリア】

が逃げるくらいのもンスターを「灰」が倒したのかっ!？」

「うん……蒼い光の柱みたいな魔法、ぶわーって撃って」

「魔法おとおおっ!？」

「一発で、モンスターをみんな倒して……レファイヤの魔法と、同じくらい強くて、すごかった、よ?。」

【千の妖精】サウザント・エルフと同じいいいいっ!？」

「……アイズ。変装をしていると言っただろう。私の事を話すのは止めてくれ」

「あ……ご、ごめんなさい」

散々ルルネが叫んだ後、ようやく「灰」の制止が入る。それでやっと自分の不注意に気づいたアイズは申し訳無さそうに頭を下げた。足元で小さな幼女アイズが「すいませんでしたー!」と何度もペコペコ謝る姿が幻視される。

見えているのはアイズと「灰」のみで、ルルネは叫びに固まった顔のまま、ぎこちない動きで「灰」を見た。シアンスロープ犬人の少女の瞳が訴えている事を正確に読み取った「灰」は、ため息を一つ吐いて肯定する。「アイズの言葉は事実だ。私は魔法をいくつか使える。興味があるか?。」

「マ、マジなのかよっ!？」 【剣姫】と張り合うくらいゴリゴリの前衛職だろあんたっ!？ それで【千の妖精】サウザント・エルフツ、純粋な魔道士と同じ威力の魔法まで使えるってっ!？」

「ああ、そうだが」

「信じられるわけないだろそんなのっ!？」

「そうか。ならば見せてやっても構わんが——それよりもいいのか?

ルルネ・ルイー

「な、なにがだよっ」

「私の後ろにいるアレを放置していいのかと、私は聞いている」
焦っている時に見ると腹の立つ顔をした《父の仮面》を被る「灰」は、何となしに親指で後ろを指差した。それにルルネと、「ヘルメス・ファミリア」の面々がつられて見ると。

——そこには、噴火寸前の超巨大活火山のような。ぶるぶると大き

く振動する、アスファイ・アル・アンドロメダの姿があった。

「やっぱ……!?」

「……………あ・な・た・た・ち……………——いい加減にツしなさああああいッツ!!」

「うわあ~~~~つ!? ごっつ、ごめんよつ、アスファイ~~~~つ!?」

ついに爆発した最高権力者の憤怒は、調子に乗っていた彼らを一気に焼き尽くす。ガミガミと落ちまくる雷をポカーンと眺めていたアイズは、状況を全く理解できないまま、大声に釣られてやってきたモンスターを「灰」と一緒に殲滅するのだった。

「——『灰』の話と同じですね。微かな死臭を漂わせる、生きた緑色の肉壁。ならこの先は、新種のモンスターの巣窟……そう考えて行動するべきでしょう」

北の食料庫パントリーに到着し、開口一番にアスファイは言い切る。周辺の調査を団員に命じながら警戒の呼びかけも忘れない。

前衛・中衛混成の調査組は二手に別れて探索に向かった。皆が精悍な顔つきできびきびと動いているのは流石……と言いたいところだが、実際はアスファイの超説教を忘れられないだけである。若干名が震えていたのをアイズは見逃さなかった。

調査組が戻ってくるまでアイズと「灰」は休憩である。道中モンスターの相手を請け負った二人へのささやかな労いだ。サポーターの少女、ネリーから回復薬ポーションを一つ受け取って口にするアイズは、隣で座談する「灰」とルルネにこっそり耳を澄ませた。

「にしても、改めて見ると『灰』はほんとデカイよなー。私の二倍以上の背丈あるし、腕の太さも倍以上か? この中にはどんな筋肉が詰まってるんだよって感じだ」

片膝を立てて座る「灰」の太もも辺りをルルネはコンコン叩く。分厚い黄銅の装甲はしっかりと中身のある音を返していた。それを聞いたアイズが不思議そうに尋ねてくる。

「……………ねえ、アスカ。その鎧って、どうやって動かしてるの…………?」

「ん？ どういう事だ？ 【剣姫】」

アイズの問い掛けに目敏くルルネが食いついた。ついさつきこたまアスファイに絞られたばかりだというのに学習しない犬シヤンスローフ人である。〃灰〃は内心で嘆息して、簡素な解答を放り投げた。

「自身の肉体より巨大な鎧を操る技術がある。それを私は扱い、この変装を行っている」

「そうなのか？ じゃあ 〃灰〃 って……」

「体軀に関しては、この外見と差異がある。だから、これ以上は聞いてくれるな。変装をしている意味がない。アスファイ・アル・アンドロメダも見ているぞ、ルルネ・ルーイ」

「ひっ!? わ、分かっているよ！ 私だって言われた事をすぐ忘れるようなバカじゃあないさっ！」

無言で監視する銀眼鏡の光に盗賊シーフの少女は慌てて居住まいを正した。遠回しに自分も責められていると感じたのか、アイズもそつと反省の色を見せる。それらを見渡して、〃灰〃は自分の腕を眺めた。

本来の 〃灰〃 を大きく超える4 Mメドルの巨体。叩いても空洞音の鳴らない全身鎧には大量のソウルが詰まっている。

ソウルの補強。それは肉体の分を超えた武装を使う時、長さや太さをソウルで補強する術だ。肉体面での不利を抱える 〃灰〃 がよく扱う手法の一つである。

それは火の時代では決して珍しい事ではない。今の 〃灰〃 のように変装の手段として使われるのは珍奇だが、中身のない空っぽの鎧からだが動くというのはそうおかしい事ではない。俗に言うゴーレムはソウルの補強の代表的な例だ。

アノール・ロンドへ至らんとする不死人達への試練、センの古城の守護者であるアイアンゴーレムは、古竜の骨をソウルの核とし鉄塊の鎧からだを動かした。中身のない肉体そのものを補強する、単純にして強力な例である。

不吉なもの、呪われたもの、全て遠く忘れ去られるよう、追放の流刑地であった忘却の牢には虚ろの衛兵と呼ばれるゴーレムがあった。名ばかりとなった暗い伝承をモチーフとした「アレサンドラ」「ルカ」

「レギム」の名を持つ被造物は、やはり実体のない空っぽの鎧だ。

ロスリック城中層、竜の練兵場と大書庫を結ぶ大橋には竜狩りの鎧が鎮座していた。巡礼の蝶に操られし溶鉄の鎧は、ずっと昔に主を失い、狩りの記憶に囚われていた。今では「灰」の所有する武装の一つであるそれも、力を帯びた異形のソウルが原動力になっている。

ソウルの補強は特別な技術ではない。古くから利用されてきたものであり、また種族を選ばない。神も人も、不死人も、様々な場面で大なり小なりソウルの補強を扱っている。だから「灰」も当然のようにこれを扱い変装していた。

ただ……やはり4 Mメドルは大き過ぎたかと、「灰」は若干の反省をしていた。ソウルの補強はあくまで補強なので、「灰」の動きにソウルが連動する形となる。だから内部で手足が引つかからないよう、過剰に装備を巨大にしたのだ。

手の開閉を繰り返しながら、3 Mメドルでも問題なかったなど「灰」は思う。ついでに今の装備についてそつと追憶を奔らせた。

この装備は同胞でありながらも殺し合う定めにある不死たちの、その多くを恐怖と絶望の内に殺害した伝説のダーククレイスの似姿である。

一説には複数人いたとされるこの三人羽織の仮面と巨人の鎧の組み合わせは、不死の奇妙な宿命なのか数え切れぬ後継と亜流を生み出してしまった。

《父の仮面》を被る「灰」の脳裏に古い記憶が思い起こされる。いくつかの時代を超え、何度目か分からぬアノール・ロンドの地を再び踏み締めた「灰」。時代が繰り返す度に強大になっていく、棄てられた神の都の守り手を掻い潜る「灰」の前に『ソレ』は現れた。

始まりは、「灰」の世界に侵入してきた一体の闇霊だ。三人羽織の仮面の一つ、《母の仮面》と巨人の鎧を基調とした伝説のダーククレイスの後継。おぼろげだが確か、伝説に倣い《雷のクレイモア》と《草紋の盾》を装備した闇霊だった気がする。

それだけならばまだ良かった。非常に恐ろしい闇霊だが、所詮は後継。腕によっては立ち向かえない敵ではない。だがその闇霊を皮切

りに、次々と闇霊が侵入してきたのだ。途切れる事なく、際限なく。十に増え、二十に増え、倍々に膨れ上がりやがてその数は数千を超えた。

“灰”は全く記憶にない事だが——既に大半を忘れ去っている——幼女は非常に多くの様々な恨みを買っていた。そして輪の都を呑み干した出自ゆえか、数え切れぬ程の世界と混線していたのである。旅団規模の闇霊が現れば次に何が来るか。そう、復讐霊の侵入である。これも記憶にない（忘れてる）が、“灰”は紛れもない神の大敵だ。ならば神の敵を討つ復讐の刃、暗月の剣が侵入しない道理などない。

青い殺意を揺らめかせる復讐霊もまた数千人規模でやって来た。何故だか“灰”の世界に侵入してきた闇霊を対象にした復讐霊もあり、たちまちダークレイスと暗月の剣の睨み合いが始まった。

それだけでは終わらない。強烈な死の匂いを嗅ぎつけてか、墓王の眷属までがアノール・ロンドに集中していた。死の瞳を求める殺戮者たちは次々に墓王の厄災を振りまき、理解しがたい事だがその全てが“灰”の世界に集中してしまった。

途端、膨れ上がるアノール・ロンドの守り手ども。その力と質は桁違いに上昇し、赤い殺意の化身のような厄災が物理的に増殖する。一つの世界に集中した厄災は通常の規模を大きく超え、もはやアノール・ロンドの地形をした全く別の異界のようだった。

……さて。もうお分かりだろうが、“灰”が伝説のダークレイスを元はこの記憶を想起したのは理由がある。もはや方に達しようとしてた侵入霊と復讐霊の数は驚異的だが、本題はそこではない。

——そう、仮面巨人である。原理主義から自由主義、より洗練された亜流から魔改造極まった成れ果てなど、統一性など欠片もなかったが——“灰”の世界にやって来た霊体は、一人の例外もなく仮面巨人だったのである。

“灰”は逃げの一手を打った。冗談ではない、当時は若く途上であった“灰”では逆立ちしても太刀打ちできない。万の仮面巨人など記憶にすら残しなくなかった。だが悲しいかな、こうした追想が過

ぎるのは、深海ですら容易に溶かせぬほど心折れかかった記憶だからである。

必死に逃避する「灰」をダークレイスは当然追った。神の大敵を滅ぼさんと暗月の剣も追走した。最初は「灰」を殺すため流れて休戦していた闇霊と復讐霊も、ふとした道の譲り合いや【ジエスチャー】の応酬で不満が募る。そうなれば自然と小競り合いが起き、誰か一人が糞団子を投げた瞬間、連鎖的かつ爆発的に不死の戦争が勃発した。

もはや狂気である。幾多の仮面巨人が殺し合う光景は現世に再現された地獄であった。よせばいいのに魔法を習得した連中が忌み嫌われる類の外法を用い、それならばと自制していた者たちも暗黙の了解を打ち破る。混沌として終わらない、吐き気を催す不死の戦争がそこにはあった。

……その先は、もはや語る事はない。結果を言えば「灰」の世界、その時代のアノール・ロンドは誇張抜きに崩壊しかけた。それだけしか語るべきではない。暇を持て余した貪欲な血狂い共、黒い森のおぞましき狩猟者たちが参戦した後の事など——たとえ不死とて記憶の中にすら、思い浮かべるべきではないのだ。

ちなみに「灰」の世界に侵入が集中している間、別の世界の不死たちは随分と平和だったようである。白教、太陽の戦士、王女の守りなどは和氣藹々と協力を楽しみ、混沌の従者はいつも通り蜘蛛姫にせつせと人間性を捧げ、古竜への道を征く不死は意気揚々とサインを書き、いつまでも呼ばれないトカゲ頭を風が優しく撫でていた。

なお。

この一件で最も被害を受けたのは、たった一人で棄てられたアノール・ロンドを守る神であったが、「灰」はついで思い出す事はなかった。崩れかかったアノール・ロンドを呆然と眺める暗月の神の憂いはいかばかりであろうか。

それはもう、誰も知らない。遠い記憶の彼方である。

「……あの……あのー、休息は終わりましたよー？　いつまでも座り込まれても邪魔なので、さっさと立ち上がってくれませんかー？」
「ん」

追憶に浸っていた。灰が意識を戻すと、片膝座りの巨人の半分ほどの少年が呼びかけていた。周りを見れば小人族の魔道士が緑壁に向けて詠唱しており、既に突入寸前だと理解する。

「済まない。知らせてくれて助かった」

「いえいえ、それだけ大きいと頭の周りも悪いでしょうから、ノロマになるのもしょうがないですよね」

「……まあ、そうだな」

にっこりと毒を吐く少女——うなじで緩く束ねた琥珀色の髪に丸い兜を被る小人族の戦士、ポット・パックに灰は曖昧な返事をする。すると「チツ」と露骨な舌打ちが聞こえてきて、音を辿れば隣の少女と似た容姿の小人族の男が睨んでいた。

「まったくいいよなー、お強いお強い。灰様は。周りの事なんか気にしねーでやりたい放題でkindだからよ。羨ましいご身分だぜ」

「そうか」

「はっ、シケた反応しやがって。オレみてーな小人族は眼中にもねえってか?」

「? 貴公は素晴らしい『協力者』だ。私は貴公を頼りにしている」

「ハア? 嫌味かよ。そんなだけ身長に恵まれて【剣姫】と張り合える才能もあって、おまけに【魔法】は【千の妖精】級だあ? そんなLv.1様が、たかだか小人族のオレを頼るってか?」

白々しいんだよ、誰も信じねーような嘘臭え法螺吹きやがって」

最初は皮肉げな顔をしていた瑠璃色の目の戦士、ポック・パックは段々と苛立ち混じりの声を上げる。姉であるポットは弟の気持ちに分かるので、度が過ぎたら止める腹積もりで澄まし顔を保っていた。「嘘ではない。私はLv.1だ。そして『協力者』である貴公を頼りにしている。そこに偽りはない」

「そーかよ、で? じゃあどう協力してほしいんだ? 困か? 使い捨ての駒か? 自称Lv.1様にはオレには考えつかねーような名案があるんだろ?」

「ふむ。貴公、誇り高いのだな。嫉妬もあるがそれ以上に、己の種族に矜持を抱いている。若く、高い目標に感化された矜持だ。その若さ故

に私の言葉を『嘗められている』と感じている。だから私に苛立つのだろう」

「……学者気取りかよ、くそが……」

「灰」の言葉にポックの顔が怒りで歪む。的確に心中を踏み抜かれ、本気の憤怒が滲んでいた。それを若干ハラハラした顔で姉のポツトはまだ見守る。

近くに立つ「灰」の前に絡まれていた（正確には遠回しに他の仲間を守ってくれと言われた）アイズは、ちよつと汗を浮かべつつ不思議そうな目で見ている。

金の少女の心の中では「なんでアスカを信じないんだろう……？」と小さな幼女アイズがウンウン唸っていた。すぐ側では仮面巨人が腕を肩の高さに合わせ肘先をぶらぶらさせながらガニ股でステップを踏んでいる。ガシヤガシヤうるさい横の巨人を気にせず、小さな幼女アイズは突然ポンと手を叩き「そっか！ アスカの眼ソウルが見えないからだ！」と喉に引っかかった小骨が取れたような晴れやかな笑顔を咲かせた。そして隣の巨人を見上げ、満面の笑みで小さな幼女アイズも不思議な踊りを踊り出す。カオスである。

一見して凛々しい【剣姫】のそんな胸中など露知らず、「灰」とポックの険悪な空気はますます膨れ上がった。

「私は貴公に背中を任せたい。貴公ならば安心して私は背中を任せられる」

「……バカかよあんた、体格差を考えろ。オレの身長はあんたの膝にも届いてねーだろうが。そんなんで背中を守るわけねーだろ」

「そうか？ 私はそうは思わない。貴公は己の力をよく知っている。出来る事と出来ない事を秤にかけ、即座に動ける意志がある。

だから私は貴公を信頼するのだ」

「……意志で何が変わるってんだ。意志がありやL.V.レベル差が覆るとでも思ってるのか？ 前衛と中衛の中で小人族オレだけがL.V.レベル2つて、あんたならとっくに分かってんだろ……！」

くそみてーなおおべっか並べやがってついい加減に——」

「やめなさい、ポック！ 言いすぎよ！ ……気持ちちは私もおんなじ

だから、もうやめましょ」

「…………ごめん、姉ちゃん」

「灰」に殴りかかる寸前だったポックをポットが止める。抱き合う家族を見て、だが興味なさげに「ふむ」と仮面の顎を撫でる。「灰」は、一度アイズを見てからあつけらかなと言いつつ放った。

「そうだな。例えばの話だが、私がアイズか、貴公とその姉、ポット・パックとポック・パックの二人を相手に戦うとするのなら——手強いと感じるのは、貴公ら二人の方だろう」

その言葉をポックが理解し、感情を荒げる前に。真つ先に反応したのは、視線で怪物を斬り刻めるような圧を放つアイズだった。

《デスペレート》に手をかける「劍姫」が、ざわりと敵意を泡立たせる。熱された溶岩のような、それでいて何よりも鋭い金の双眸を、「灰」は「勘違いするな」と制止する。

「アイズ、貴公を侮つての言葉ではない。これは純粋な相性の話だ」

「……………相、性？」

「そうだ。順を追って説明しよう」

人間の少女と小人族の姉弟を見渡し、「灰」は語る。果て無き戦いを生き延び続けた、己の力の性質を。

「先も言ったが、私は多対一が最も苦手だ。ある程度の数は相手取れるが、許容を超えればあっさり死ぬ。貴公らが信じようと信じまいと、それは私の戦闘経験に蓄積した事実であり、ずっと変わる事はない。

だが逆に、一対一の戦闘ならば。他の存在が介する余地のない、一個と一個の戦いならば——この私が、殺し切れぬ者など存在しない。」

「……………ッ!?!」

その瞬間、その場に在った全ての生命が戦慄した。アイズやポック、ポットのみならず、他の団員——そして緑の肉壁までもが、「灰」より零れ落ちる暗い何かに震え上がる。

「多対一の戦いで、私は何度も完敗している。最期まで一矢も報いれず敗れた事は数限りない。時に敗北を悟れば難を逃れる努力に終始

し、場合によっては降伏を申し出たのも一度や二度ではない。

多対一は、最も苦手だ。私にとって二人以上を相手取る戦いは、何であれ最も勝算が低いと言わざるを得ない」

「ごぼごぼと、鎧の隙間から黒い液体が流れているようであった。どろりと粘つく重い黒は地面にへばり蒸気を噴き出す。仮面は三枚とも穴という穴から黒を吐き出し、死した人の最期を頭に焼き付けているようだった。

「私は、一対一を最も得意とする。勝ち負けではない。どれほど強大な相手であろうと、一対一の戦いで私が殺し切れなかった者などいない。

全てだ。私が此処に至る旅路に隔たった、あらゆる英雄と怪物たち。それが何者であろうとも、私と敵の、ただ二人の戦いならば——ただの一人も例外はない。

私は、一対一が最も得意だ。それ故に、アイズ一人とポット・パック、ポック・パックの二人の間にどれほど隔絶した力の差があるかと、一対一ならば殺し切れ、多対一では勝率が最も低い。

それが私の相性だ。私の持つ力とは、そういうものである」

暗い闇に包まれていた「灰」は、そこでフツと元に戻った。いや、始めから「灰」はずっと三仮面と全身鎧のまま立っていたただけだ。アイズ達が見ていたのは全て幻覚、白昼夢の類だった。

だが、と。アスファイ・アル・アンドロメダは溜まったつばを飲み込む。たとえ幻でも、確信がある。今見たものは決して己の恐怖から芽生えた悪夢ではなく、全員が共有した、「灰」の暗く底知れぬ何かなのだ、と。

皆が止まっていた。金縛りに遭ったように誰も動かず、神妙な表情で汗を流していた。その奥で塞がっていく緑壁の焼け落ちた穴を見て……「灰」は鎧の中で、面倒そうに嘆息した。

「ポック・パック。私は己の力をよく知る者を、他の何よりも信頼する。自らを知り、そして敵をよく知る。私はそうして旅を続けてきた。

貴公と私は、同じだ。だからこそ、私は貴公を信頼する」

がしやり、と歩を進めながら、通りすがりに「灰」は言った。ひどくくぐもった低音の言葉に、ポックは目を見開くものの、口を動かさずに目で「灰」を追う。

他の皆も同じだった。誰も声なく顔だけで4 Mメドルの巨人を見続ける。間もなく、集団の先頭に立った「灰」はアスファイに謝罪の言葉を投げた。

「済まないな、アスファイ・アル・アンドロメダ。私が長く話したために、せっかくの侵入路が塞がってしまった。これでは精神力を消費したメリル・ティアーも報われん。

だから責任を取って私が侵入路を開けよう。それでこの失態に釣り合う償いとさせてくれ」

「……えっ」

その時、アスファイは猛烈に嫌な予感を覚えた。第二級冒険者の勘か、はたまたヘルメスに振り回され鍛えられた全く嬉しくない危機察知能力か、慌てて行動を止めようとする前に——「灰」は右手に炎を灯し、そのまま緑壁に手を突っ込む。

ずぶりと黄銅の手甲が沈んで、数秒。嫌な鳴動にアスファイ達がうろたえていると、「灰」の手を中心に炎のような赤い閃光がひび割れるように広がっていく——

「ちよつ、待つ——!?!」

アスファイの静止もむなしく、大爆発。勘で耳を塞いだ冒険者たちに骨まで響く音の壁が叩きつけられ。

目も眩む閃光が止んだ後、そこにあったのは。天井まで達していた緑壁を根こそぎ焼き払った、4 Mメドルの巨人のみだった。

「……集中力を全て注ぎ込んでしまったな。穢れを祓う【浄火】と云えど、この規模ではそうもなるか」

啞然とする一同の前でぶつぶつと呟き、どこからか取り出した灰瓶の青く冷たいエストを呷りあお。

「では、行こうか」

平然とそんな事を言う「灰」に、冒険者たちの大ブーイングが飛ぶのは当然の帰結だった。

『まこと不死とは、人の世の機微を知らぬ生き物である』
世界のどこかで、誰かが言った。
幼女への教育で何度も死にかけた、疲れ切った老人^{ゼウス}の声であった。

錆び果つ黄銅、死を裂く銀

「なあ、怖い想像していいか？ もしこのぶよぶよした気持ち悪い壁が全部モンスターだったとしたら……私達いま化物の胃袋ハッラの中を進んでるって事だよな？」

顔を引き攣らせながら、ルルネはそんな事を言った。

シアンスロープ犬 人の余計な一言は「おいっ！」「なんでそんな事言うのお!？」止めて下さいっ!!」「こ、怖いですう……」「シヤレにならないなあ」と大反響だ。思わずアスファイの瞳孔が開き切った視線が騒ぐ団員を薙ぐほどである。

事前情報があるとはいえ、ここは冒険者が体験した事のない未知の領域だ。そんな場所でここまで緊張感を緩めるとは大したものだと——原因を作った己を棚に上げて、皮肉や嫌味ではなく「灰」は純粹にそう思った。

生きた緑の肉壁。パントリー食料庫への道を完全に塞ぐそれを焼き払った一行は、肉壁の大きさに比べ針の穴のような侵入路から突入した。

内部はやはり緑の肉壁で覆われている。そこかしこから漂う腐った甘い死臭、明滅する血のような光。ダンジョンに被せるように緑壁は広がっているが、一部はダンジョンを貫通し独自の迷宮を作り上げていた。

「ここからは既存の地図は役に立ちませんね。ルルネ、地図を作りなさい」
「了解リョーカイ」

ギルドの地図情報マップ・データにアスファイは早々に見切りをつけ、指示を受けたルルネが羊皮紙に地図を書き込んでいく。

「私が覚えている道順と同じだな」と、周囲の観察と警戒をしながらルルネの手腕を「灰」が評価していると、アイズもまた素直な尊敬の目シアンスロープで犬 人の少女を見ていた。

どうやら今の冒険者には馴染みのない地図作成技術マップヒンゲに感嘆しているらしい。「すごい、ね」とアイズが褒め、ルルネが照れくさそうに笑いながらゆるく尻尾を振る。

不死の旅とは縁遠い彼らの姿をみて、[〃]灰[〃]はふと懐古を零した。
「しかし、^{マップ}地図か。私には馴染みの薄い代物だ」

「そうなのか？ あんたも冒険者なんだからダンジョンで使うだろ？」

「いや、使った事はない。事前に多少頭に入れるくらいだな」

「へえ。じゃあ普段はどうしてるんだ？」

「地図を持たずに探索している。己の知らぬ既知を扱うのは、私にはどうにも慣れん事だ」

ルルネは地図を書きながら適当に相槌を打つが、キラリと光る目は盗賊のそれだった。[〃]灰[〃]の言葉は「^{マドル}泥犬」の嗅覚をいたく刺激したらしい。

もはや性だな、と[〃]灰[〃]は看破しながら指摘しなかった。ルルネ・ルーイは『協力者』だ。多少の妥協は『協力』の内である。

三つの仮面を頭に据え置く4 Mの^{メドル}巨人は、自らの足跡を振り返りながら[〃]不死の旅[〃]を語り出した。

「ずっと昔から、私の旅路はとうに滅んだ跡地だった。人もなく、積み上げられた跡もない。壊された営みと人の手の届かぬ領域だけが、私の歩んだ足跡だ。」

そういった土地に地図はない。あつたとして、役に立たない。人が去り、長い年月を経た場所ばかりで、過去の^{ざんしやう}残滓が何の役に立とうものか。せいぜい名残を見つけた者が、かつてを偲ぶ程度だろう。

そして私の使命の先は、往々にしてそればかりだ。だから地図など全く用いず、ただ暗記を繰り返した」

「ふ、ふーん……なんていうか、随分寂しい旅だったんだな。私もよく^{ヘルメス}主神様の付き添いで都市外の怪しい遺跡にもぐったりするけど、流石にそこまで陰気じゃないな。」

でもやつぱり、そんな場所ばつかなら余計地図を作らないか？

あつた方が便利だろ？ あつ、バカにしてるとかじゃなくて、単純な疑問」

「私に^{マップ}地図作成の知識がなく、また器用でなかったというのもあるが……どうせ、全てが終わるまで繰り返すのだ。」

使命の続く限り何度でも訪れるのだから、地図を作るより覚える方が楽だった、というのが事の真相だな」

「……あー、そういう事か！　つまり『灰』は地図のない遺跡の常連みたいなもんで、その内覚えるから地図作るの面倒だったんだな！　行きつけの酒場で「いつもの」しか言わない客みたいだな！」

「その例えはどうかと思うが、概ねその通りだ」

「はー、なるほどなー」

地図を書き、水晶の破片を落として道標としつつ、『灰』の話を中心のメモに書き留める。生業からくる器用さを存分に発揮する犬シアンスローフ人を、『灰』もまた観察していた。

「後はやはり、知らぬ既知の扱いづらさか。未到達階層で地図を頼りにすると、行き止まりと分かる場所には近付かんだろう？」

それは知らぬ既知、そこが行き止まりと知っているだけの未知を残す。それを私は好まない。全ての未知は、己の既知に変えるべきだ」

「ああ、うん。言いたい事は分かるよ。とんでもなく非効率だと思うけど」

「効率など、全てを知ってから考えるべきものさ。それに、地図に頼らぬ探索は、思わぬ発見をもたらす事もある。」

現に私は中層で未開拓領域を発見している。極東で言う『温泉』が湧き出る場所だ」

「えっ、マジかよ!？」

「ああ。『温泉』に目が眩み、油断した冒険者を狙うモンスターがいるのが難点だが……そこに目を瞑れば、極東の最高峰の湯に劣らぬ世界有数の行楽地リゾートだそうだ」

「へえー！　極東の最高峰のリゾートか。なんか良いな、異国情緒って感じでさ！」

なあ、それ何処にあるんだ？　教えてくれよ！」

「悪いが、無償タダでは教えられん。これは対価に値する情報だ。貴公も冒険者ならば、冒険者の流儀われらに従うべきだろう？」

「あー……そりやそうだよな。じゃ、いくらで教えてくれるんだ？」

「そうだな……1000万ヴァリスでどうだ？」

「高えよっつ!？」

地図情報マップ・データ一つにはあまりに高すぎる金額にルルネの仰天と突っ込みが入った。他の冒険者たちからも「そりやねえよ」と異口同音に抗議が上がる。

4 Mの巨人のある意味見た目通りの奇妙なおかしさに笑い声を上げるパーティ。ルルネと“灰”のそばにいたアイズは気楽な空気に包まれながら、けれど憂いを帯びた切ない表情をしていた。

全てが終わるまで、繰り返す。その言葉を正しく理解していたのは、少女ただ一人だけだったから。

心の中で膝を抱えてしくしくとうなだれる仮面巨人を、小さな幼女アイズが懸命に手を伸ばして「よしよし」と慰めていた。

「無駄話はそれくらいにしなさい」

話の途切れないパーティにアスファイの鋭い注意が飛ぶ。それだけで隙のない緊張感を取り戻した一行は、進行方向の先、開けた通路に散乱した灰を発見した。

モンスターの死骸——灰の中に埋まる『ドロップアイテム』を視認した“灰”は、キークスとファルガーを伴って確認しに行こうとするアスファイを制止する。

そして『器』から短い祈りを特徴とする《聖木の鈴草》を取り出し、聖鈴を鳴らして【敵意の感知】を発動した。

途端、大きな瞳を模した赤い光が現れ、天井へ浮き上がっていく。「魔法ですか?」

「ああ。【敵意の感知】という。赤い瞳が敵意を辿り、発動者から最も近い『敵対者』を炙り出す」

「——総員、戦闘準備」

「炙り出すのは最も近い『敵対者』だけだ。不意打ちに注意しろ」

「皆、聞きましたね? 敵はおそらく『新種のモンスター』。打撃は無効、剣で戦いなさい。弱点は口腔、上顎の奥。一体につき三人以上で対処するように」

『了解!』

「——来る」

戦闘準備を完全に終えた一同が気迫の声を上げ、「剣姫」が《デスペレート》を抜く。

「灰」もまた《流刑人の大刀》と《妖木の杖》を構え——天井から大量の食人花モンスターが、破鐘われがねの咆哮と共に襲来した。

どんな敵か分かっている。対処法も知っている。事前準備は完了し、戦力は十分保持している。

食人花のモンスターが襲いかかったのはそういった完璧に待ち構えた冒険者の集団であり、「灰」の経験から言えば敗北する方が難しい状況だった。

だから既に食人花は事切れ、死骸の山となっている。情報は周知していたが初見の敵であったため、無傷とはいかなかったが——形を残す食人花から極彩色の魔石を引き抜く「灰」は、最後の一体を打倒した小人族バルウムの戦士を横目で見た。

「くそつ、全員来んなよ、カツコワリいな……」

姉のポットに支えられて立ち上がる、琥珀色の髪と瑠璃色の瞳の小人族バルウム、ポック・パック。短剣を握る少年は、肉体の小さきで知られる小人族バルウムの特性を生かし、食人花の口腔に飛び込んで喉奥の魔石を直接破壊する荒業で敵を倒した。

それが必要かどうか、ではない。出来ると信じ、実行する。それは「灰」がずっと長く為し続けたやり方だ。

ポックの行いは、「灰」に等しい。だからやはり、良い『協力者』だ。そう「灰」は心中で評し、全ての魔石を回収して一行の輪に戻る。

その時ポックは怒りながら短剣を振り回し仲間を散らしていた。頬が赤いのは羞恥のためだろうか。会話を聞き流していた「灰」は、かろうじて「フィン」「サイン」という単語を思い出して納得する。（ポック・パックを感化した高みはフィン・ディムナだったか。確かに私の見立てでは、フィン・ディムナは何らかの旗印になるうとしている。おそらくはきつと、落ちぶれた同胞、今は希望なき小人族バルウムのためだろう。）

正直、私には興味がないが。憧れからサインを貰うのはある意味での儀式に等しい。私もアイズに頼んでサインを……いや、駄目だ。ベルは憧憬から三度も逃げ出した懦弱者。三度も同じ失敗をしたベルを、甘やかすなどあつてはならない。

……そうだな。サインを受け取る機会があつたが、辞退した。欲しければ自分で言えと説教をするか)

やたらと義を重んじる「勇者」の笑顔を思い出して、数秒もせず思考の海に流した「灰」は、食人花との戦闘を踏まえ改めて情報を整理する一同に加わる。

食人花の強さ、堅さ、攻撃の種類や注意すべき事項。特に『生まれながらの強化種』という点は個々の能力に大幅な差異を生じており、三人以上で対処する方法は変えるべきではないと一致する。

例外は「灰」とアイズの二人だけだ。第一級とそれに並ぶ異分子は、『番人』が出た場合必ず矢面に立つ。「灰」はいつも通りに、アイズは表情を鋭くして再戦に燃えていた。

行動指針を決定したパーティは食料庫への行軍を再開する。緑壁の道を進み、岐路に差し掛かった一行の前に、食人花は長軀を這いずりながら現れた。

右と左の分かれ道。そして背後の三方向から現れる食人花。天井と地面に蛇のような蔦が絡み合い、醜悪な花が菌茎を見せつける。退路を断ち、挟撃を仕掛けてきたモンスターの群れに、アスフィは即時に要請する。

「……「灰」、【剣姫】。通路を片方ずつ受け持つてもらえますか？」
「ああ」

「分かりました」

右へ「灰」が、左へアイズが、背後へ「ヘルメス・ファミリア」が飛び出した。左右の通路を一人ずつで押さえ、その間に数で勝る「ヘルメス・ファミリア」が敵を順次殲滅する。

一瞬で作戦を共有した彼らの内、誰よりも早く「灰」とアイズが食人花を攻撃した——その時。

左の天井から巨大な柱が次々に落下し、アイズとパーティを分断し

た。

「〔劍姫〕!?!」

いち早く反応したルルネが叫び、左の通路へ走った。モンスターの怒号が飛び交う中、ルルネは何度も呼びかけ柱を叩くが、反応はない。武器で道を開けようとしても堅すぎる。それでも諦められず、アイズの安否に気を取られるルルネに一際巨大な食人花が強襲し。

無防備な犬シアンスローフ人を喰らわんとした醜悪な口腔ごと、蒼い光の極大剣に斬り裂かれた。

「なあっ!?!」

直前で食人花に気付いたルルネは度肝を抜かれる。緑色の長軀を真っ二つにした青白い極大剣、それは十数Mモデルにも及ぶ長さで空中から生えている。いや、違う。生えているのではなく、空中に剣の主がいる。

異様な仮面、黄銅の全身鎧。既に右の通路の殲滅を終えた「灰」が。

「――」

「灰」は言葉なく《妖木の杖》を振る。青白い光、ソウルより生じる「ソウルの大剣」。本来は一瞬の内に掻き消える重さのない刃を強引に維持し、それなりの集中力フォーカスを消費する常態を遥かに超える十数Mモデルの極大剣。

もはや別個の魔術ではないかと思わせるそれを、筋力任せ一回転。通路の中心で円を描くように、「ソウルの大剣」は壁を削りながら軌道上の食人花をまとめて斬り伏せた。

残った幾匹かは「強いフアランの短矢」で狙撃する。空中の全身鎧が落下しつつ放つ連続したソウルの短矢が食人花の動きを止め、「ヘルメス・ファミリア」がとどめを刺した。

「退け。ルルネ・ルーイ」

着地した「灰」は幾匹かが仕留められる僅かな間に左の柱壁に移動する。慌てて退避するルルネをよそに、零秒で入れ替えた《叡智の杖》で壁を突き。

残った集中力フォーカスを全て注いだ「収束するソウル」を発動した。

瞬間、4 Mの「灰」を超える球体のソウルが生まれる。青白い暴力の輝きが、球体の中で集束、攪拌、発散を繰り返し、緑色の柱壁を秒も待たず削り切った。

だが、壁は柱だ。下を削っても更に上から落下する。それを前に出て、掲げた《巨像の大盾》で受け止めた。「灰」は——突如現れた4 Mの全身鎧に瞠目する赤髪の女の正面、僅かにも揺れぬ美貌で敵に向き合う【剣姫】に問う。

「アイズ。加勢は必要か」

「必要ない」

「分かった。先に行く」

短い言葉。それは互いの力に対する信頼だ。すべき協力を終えた「灰」は後ろへ引き、支えられていた柱が斬首刑の如く落ちる。

再びアイズと分断された一行は、自然と「灰」に視線を集めた。

「アイズは赤髪の女と戦っていた。おそらく番人、例の調教師だ」

「一人で戦わせるのですか？」

「加勢はいらぬとアイズが言った。ならば信じる他あるまい。それに、番人はわざわざ我々を分断してアイズの前に現れた。加勢したところで分断の繰り返しになる可能性も高い。

我々は依頼を続行すべきだ。私はそう提案する」

「……進みましょう。我々にも猶予はありません。【剣姫】の力を信じましょう」

敵の増援を知らせる仲間の声に、アスフィは即座に決断した。ルルネは後ろ髪を引かれていたが、一人でやると言ったのはアイズだ。それを聞いていた犬シアンスロープ人の少女は無事を祈り、先に進む。

「ここから一気に食料庫まで走り抜けます！ ルルネ、貴方は戦闘を避け道順を覚えなさい！ 先頭はファルガーと私が！

殿は——「灰」、貴方にお任せします！」

「心得た」

指示を聞きながら灰エーストを呷っていた「灰」は頷く。灰瓶の残量は既に9本、あまり余裕はないなど思いながら——アイズを除いた16名は、一丸となって食料庫を目指す。

左手に《呪術の火》を装備した「灰」は右手に《ゴーレムアクス》を持つ。数多の英雄を屠ったアイアンゴーレムの大鉄斧は、集中力を使^{フォーカス}う事で真空の刃を放つ事ができる。

殿を担うこの状況なら片手の遠近両用武器が良い。《呪術の火》からゆらゆらと空中に浮く小さな火、「漂う火球」を断続的に置いて追撃する食人花を爆撃し、撃ち漏らしは真空の刃で斬り刻む。

先頭で多少の危^{アクション}機があつたものの、《ゴーレムアクス》の特性で最後尾から先頭にまで支援を飛ばす「灰」の協力によって、パーティは無事に食料庫^{パントリー}の入り口らしき場所まで辿りつけた。

「全員、止まりなさい。今の内に態勢を整えます」

急に止んだ敵の襲撃を好機と見てアスファイが短い休息^{レスト}を取った。

団員の体力回復と道具^{アイテム}を振り分け、「灰」にもいくつか分配する。

「「灰」、貴方もどうぞ」

「私はいい。他に回せ」

「遠慮はいりません。現状、貴方が最も頼りになる戦力です。魔法も——なにやら三つ以上使っていた気がします——非常に強力ですし、こちらとしては支援を惜しむ気は毛頭ありません」

「そうではない。私には回復薬^{ポーション}の類が効かん。

原因は不明だが、おそらく体質だろうな。全く無意味とは言わんが、高等回復薬^{ハイ・ポーション}であつてもほとんど効果がない。貴公らの数十倍以上の容量を飲んでようやく効果が同等だ。

だから私には必要ない。他を優先しろ」

「……貴方がそういうのであれば、分かりました」

「それでいい。それと、キークス・カドゲウスを叱っておけ。あの男、未だ貴公の渡した回復薬^{ポーション}を飲んでいないぞ」

「——キークス！ なぜ飲まないのですか！ 早く使いなさいっ！」

「こ、これは一生の宝にするって決めたんです！ アスファイさんお手製の高等回復薬^{ハイ・ポーション}なんて、今後手に入らないかもしれないくらい希少なんですよ!?!」

「使われない道具に価値などありません！ 今飲まないのであれば、冒険者依頼^{クエスト}が終わった後に没収しますからね！」

「そんな殺生なっ!？」

溶液の詰まった試験管を宝物のように扱うキークスにアスファイの雷が落ちた。単なる団長と団員には納まらない感情を寄せるキークスに、堅物のアスファイは気付かない。その辺りに詳しい数人は処置なしと首を振り、報われない人間の男に多くの団員が涙した。

理解できない光景だ。何一つ分からぬ未知と出会う時、「灰」は必ず見に戻る。その身に染みつき、錆び果て、剥がれ落ち、何者でもない火の無い灰になろうとも、貫き続けた「灰」の姿勢。

この先に待つ過酷な戦いの前に笑い合う彼らを観察して——休息の終了通知に「灰」は立ち上がり、赤い光を漏らす食料庫の入り口へ『協力者』たちと共に歩んだ。

初見ではない。だが未だ全ては見えていない。「灰」は二度目の戦場に脚を踏み入れ——大主柱に絡まる三体の巨大花に、大量の食人花。

そして前回はいなかった白装束の集団と、ドロップアイテム 白骨から造られた鎧兜を被る、くすんだ白髪の全身白づくめの男を。

「灰」は光無き鎧の中から、暗い瞳ですつと見ていた。

イヴァイルス
闇派閥。

曰く、秩序を嫌う者達。混沌を望む邪神達に率いられた過激派集団。

15年前に起こった『三大冒険者依頼』の失敗から彼らの歴史は始まった。

千年に渡る【神代】で最盛期を誇った迷宮都市二大派閥の敗北は、当時の人々を絶望へ駆り立てるに十分な衝撃だった。世界に走る激震の影に闇派閥はつけ込み、急速に勢力を伸ばしオラリオを混沌に陥れようとした。

ギルドが絶対の根絶を掲げ、今はもう壊滅した筈の連中だ。だが、緑の肉壁が滴る汚泥のように氾濫する食料庫に、奴らは確かに存在した。

命を奪い、混沌を望む。人々の平和を打ち砕かんとする闇の勢力として。

「ルルネ、離れろ!!」

「この命、イリスのもとにい——!!」

セイン・イールがルルネを突き飛ばした瞬間、白装束の男は自爆した。

白装束の一人を捕らえ、『ステイタス・シールド解錠薬』で何者なのか改めようとした矢先の事だ。咄嗟の行動でルルネは範囲外に出たが、セインは爆炎と衝撃を直に浴びる。

『火炎石』。深層域のモンスターの『ドロップアイテム』を大量に体に巻きつけた、闇派閥の命を捨てた死の拡散。敵でも味方でも死体が積み上がれば良いという彼らの端的な性質が現れた所業にルルネは震え、狩人のエルフの名を叫んだ。

「セイン……セイン!! 無事か!?!」

巻き込まれれば自分でもただでは済まない。それ程の火力の熱に肌を舐ねぶられた犬シアンスローブ。人の少女が焦燥を抱えて駆け寄った。

果たして、自爆が直撃したエルフの男は。

「……あ、ああ、無事だ」

服に焦げ目一つない姿で、呆然とルルネの声に答えた。

「セインっ!?! じ、自爆に巻き込まれたんじや……!?!」

「そのはず、なんだけど……黒い靄もやみたいのがオレの周りに出てきて……」

「【反動】だ。ほんの一刻、全てのダメージを無効化する」

不可解な現象に驚く二人の前に、がしやりと、4 Mメドルの巨人が降りた。歪に捻くれた《妖木の杖》と鈴の花を六輪揺らす《聖木の鈴草》を持つ『灰』は、《父の仮面》の内側から闇派閥イヴァイルスと対面する。

「奴らは死兵だ。もう分かった。ここは私が受け持とう」

言うや否や聖鈴を鳴らす『灰』は【放つフォース】を連続して投擲する。弧を描いて空中を飛ぶ風巻く光が、死を覚悟して特攻する白装束達に着弾し、衝撃波となって侵攻を強引に押し戻す。

「警戒しろ、アスファイ・アル・アンドロメダ。白骨を被る向こう側の男

は、おそろく赤髪と同じ番人だ」

「――調教師！ ならば『新種のモンスター』が……！」

「ああ。間もなく襲いかかってくるだろう。」

そちらは貴公らが引き受ける。あの下らん死兵どもは、私一人で相手をする」

「……大丈夫なのですか？ 多対一は苦手だと、貴方はそうおっしゃっていたはず」

「勿論だ。私は多対一が最も苦手だ。だが奴らは、死を恐れぬ生者どもである。」

ならばいい。構わない。生者が冒涇の真似事をするというのなら――不死なりの外法を、使うまでだ」

ごぼりと、*「灰」* から黒いものが溢れた気がした。底知れぬ何かを再び幻視するアスフィは、続く言葉に硬直する。

「何より貴公ら、人の相手は慣れんだろう？ 私は慣れている。だからこれが、最適だ」

「……分かりました。お任せします」

平坦に吐かれた言葉の異質な重みを感じ取ったアスフィは、知らず額に汗を浮かべて *「灰」* の提案を受け入れた。指揮を取るアスフィの励声と同時に、白づくめの男が片手を上げ、指し示した先に食人花が殺到する。

前衛の構える盾を削る長駆。雨のように降り注ぐ触手。醜悪な口腔を裂かせる食人花に、*「万能者」* 率いる *「ヘルメス・ファミリア」* が全力で応戦した。

皆が力を尽くしていた。能力の低い食人花は早々に狩れても、潜在能力が高い個体はLv.3上位に位置するファルガーを含めた数人でもきつい。

前衛の虎人が雄叫びを上げ、中衛の無口な女エルフが技の限りを尽くす。猫人の美女が巧みな鞭捌きで牽制し、後衛で詠唱する小人族の魔道士が巨大な火球でまとめて焼却する。

皆が皆、必死だった。誰もが強く戦況に集中していた。

だから。突如食人花の群れに放られた、白装束を皆が見た。

既に事切れた人体。力なく慣性に従う人だったものを、複数の食人花が喰らおうとし。

——ぼこぼこ醜く膨れ上がりながら、人の死体が爆弾となってモンスターを爆殺する瞬間を、見てしまった。

「……………は？」

【ヘルメス・ファミリア】の思考が停止する。呆然と目を見開くシアンスロープ犬の少女を筆頭に、全ての冒険者の意識が衝撃に打ち抜かれる。

それはモンスターを前にして、致命的な隙だった。最も早く立ち直ったアスファイですら、遅すぎる程の致死の空白。動きを止めた冒険者たちに、食人花が突進し。

放り投げられた複数の白装束だったものが、それを阻み。ルルネ達の前で醜く膨張しながら、爆弾と化してモンスターを粉微塵にする。

「……………——『灰』 ツツ!？」

アスファイの次に立ち直ったのはルルネだった。ヘルメスお抱えの盗賊であり、金の誘惑に負けやすいところを除けば、犬人の少女は十分有能なLv.3だった。

だから気付いた。だから見てしまった。

死兵と戦っている『灰』を。人を相手に立ち回っている筈の4Mの巨人を。異様な三仮面の異質な異分子で、けれど決して悪ではない——そう思い込んでいた、不死の戦場を。

——そこには、言葉を奪われた人々が逃げ惑う、一方的な地獄があった。

「……………なに、やってんだよ……………」

あまりの光景に戦闘を止めて、震える声でルルネは呟く。

地獄だった。白装束の死兵達はもはや死兵の体を成していなかった。覚悟していた筈の死の恐怖に呑み込まれ、顔から体液を流しながら狂乱していた。

そこに『灰』が、【闇術】を落とす。リンデルトの聖職者が用いた《偶像の聖鈴》が【深い沈黙】の闇を広げ、黒い枝が螺旋状に絡む《魔女の黒杖》が、振るわれる度に炎を散らす。

【炎の槌】あるいは【罪の炎】。離れた一点に火を集中させ、巨大な

炎で焼き払う。その熱量は触れずとも『火炎石』に引火し、闇派閥は次々と自爆させられる。

焼け焦げ、バラバラに飛び散る人体。手足や胴体が肉の焼ける臭いを発し地面に広がる。

「灰」はそれを丁寧に拾った。きちんと集め、形ごとに並べ、片手で一纏めに抱え、闇派閥の逃げ場を閉ざすように放り投げる。

ドチャドチャと湿っぽい肉の音が連続した。何度も見せ付けられた恐怖の象徴に闇派閥の顔だけが絶叫に変わり、なりふり構わず死兵どもは死体の破片から離れようとする。

円形に散らばった死体から逃げ、追いつて立てられるように中心へ。

敵対者を誘導した「灰」は、集めた枯れ木を投げて積むように腕を何本か中心に投げ——満を持して放たれる祝福の闇が、死兵どもの最期の記憶となった。

「【死者の活性】」

地を突いた杖の先から、地を這う闇が高速で広がる。それに触れた人の死体は、問答無用に爆弾となる。

ぼこぼこ沸き立つ人体だったもの。内部で虫の卵が這いずり回るような、おぞましい変形を加速させる死体の破片が、ついに形を保てなくなつた時、祝福は爆弾となり周囲をことごとく重い闇に晒す。

それは『火炎石』の比ではなかった。ひたすらに重い闇の暴発。それを至近で何方向からも浴びて、『神の恩恵』を受けた死兵であっても誰が耐え切れるものだろうか。

闇の爆弾に押しつぶされ、白装束たちは一瞬でひしゃげた。人の形がいとも容易く失われ、白装束は赤黒い肉塊を包む血斑の包装のように表面に張り付く。

4 Mの巨人の先に、血の海と、肉団子が出来上がった。

「うつ……うげえっ——!?!」

込み上がる吐き気にルルネは踞る。自分が何を見ているのかわからない。凄まじい悪寒が全身を駆け巡り、総毛立つ肌の上を大量の汗が滑っていく。行き場のない感情が内蔵ごとく口から吐き出そうになる。

喉をせり上がる暖かな感触を必死にルルネが抑える間も、「灰」の行いは続いていた。肉団子に近付き、瞬時に持ち替えた《肉断ち包丁》で料理をするように切り分ける。

闇派閥イヴァイルスは逃げられない。彼らの退路には既に死体が転がっており、超えれば即座に【死者の活性】が発動され吹き飛ぶ。道は「灰」への直線しかない。そこへ進めば今のよう肉団子になってしまう。

闇派閥イヴァイルスは死を恐れない。死の先でこそ彼らの願いは成就する。故に死を振りまく事も忌避しない。それが彼らの神の神意であるから。だが、そんな邪神の眷族にも、これほどおぞましい何かはいなかった。淡々と作業のように、人を殺せる闇派閥イヴァイルスなど。

敵意もなく、害意もない。殺意すらなく、虚ろな動きで。何の感情もなく人を掃除できる者など、誰一人としていなかった。

白装束たちはとうに戦意を失い、涙に震え祈っていた。自らの失った大切な者たちへ、闇に言葉を縛られたまま。

それすらも、どうでもいいと言うように。解体した肉団子の一つ抱えて、闇派閥イヴァイルスに放り投げようと「灰」は持ち上げ。

「灰」っ!! なにやっつてんだよっ、あんたっつ!!」

その言葉を肝胆から絞り出したルルネの声に、動きを止めた。

「敵を殺している」

「そんなの見りや分かるっ!! でもなんでっそんなっ……ひどすぎるっ……!! そいつらだっつて人間だろっ!! そんなむごいつ、殺し方っ……!!」

「惨い? ……ああ、そうか。確かにそうだ。こんなやり方は、もう、惨いやり方は、人の世界で好まれはしないか」

「なんなんだよその言い方っ!? あんたおかしいぞっ!? 人をそんなっ物みたいにっ……!!」

「……………」

自分でもままならない感情を叫ぶ犬シアンスロープ人の少女に、「灰」は暫し沈黙する。片手に腑分けた肉を抱え、少しばかり顎を動かした「灰」は。

突如振り返り、抱えた肉をルルネ達に放り投げた。

「~~~~つ!?」

声なき絶叫を誰かが上げる。空中を赤黒く汚す人の肉片は、未だ押し寄せる食人花の群れへ雨のように降り注ぎ——地を這い追ってきた【死者の活性】によって爆弾となり、破鐘われがねの悲鳴を闇の破裂で塗り潰す。

呆然とそれを眺めるルルネに、“灰”は静かな、ひどくくぐもった声を投げた。

「ルルネ・ルイー。貴公の心は正しい。例え敵でも人ならば、せめて弔いの尊厳は保つ。人の世界ではきつと、そうする事が正しいのだから。」

だが私には、どうでもいい。善悪で動いた事など私にはなく、戦場こごに立ち、『協力者』を背に戦う時。私が定めている事は一つだ。

「協力者は生かす」「敵対者は殺す」

それ以外の何物でもない。それ以外を私は必要としない。あの死兵どもは『敵対者』だ。

だから殺す。それだけだ」

「それでも人だろっ！ あんたには慈悲つてもんがないのかよっ!?」

「ない。私が生かすべきは貴公ら『協力者』だ。『敵対者』ではない。

たとえそれを、貴公らが望まずとも。『協力者』の死を許容してまで、『敵対者』にくれてやる慈悲など——ただの一つも、私にはない」
「そんなっ……」

無慈悲な言葉にへたり込むルルネを他所に、“灰”は闇派閥イヴァイルスの殲滅を再開した。【深い沈黙】で声を殺し、【炎の槌】あるいは【罪の炎】で自爆させ、死体を【死者の活性】で冒流的爆弾に変える。

眼前で繰り広げられる人を人とも思わぬ惨劇。戦いとはとうてい呼べない、呼びたくない戦禍の情景にルルネは打ちひしがれる。

そんな犬シアンスロープ人の少女は、食人花にとって格好の餌食だった。長駆がうねり、人の歯を備える口腔がルルネを食い千切ろうとする。

「——立てえっ!! ルルネツツ!!」

それを虎ワータイガー人の青年が両断しながら、絶叫した。

「ファ、ファルガー……!!」

「ボサツとするな、戦線に戻れっ！ お前が動かない分だけ仲間にも負担がかかるっ！」

「で、でも、〃灰〃が……」

「ああ、気に入らんっ！ 俺だつて気に入らんっ！ あんな真似をする奴とは二度とパーティーを組みたくないっ！」

だが！ 〃灰〃があんな真似をしているのは！ 他でもない俺達を守るためだ!!」

「——ッ!!」

「俺達が〃灰〃を止められないのは！ 敵に気遣いも出来ないくらい、俺達が弱いからだっ……!!」

文句なら後にしろ!! 今はこの戦場を斬り抜ける事だけ考えて戦え!!」

「……………くそおっ!」

半ば自棄になりつつ、ルルネが立ち上がって中衛に戻る。団長に次いで能力の高い虎人の強い発破に他の団員も一層激しくモンスターと交戦する。

(……………マズいですね……………)

それを頭の冷静な部分でアスファイは分析していた。無論アスファイとて人の子だ。〃灰〃の所業には大いに思うところがある。

だが同時にアスファイは人の上に立つ者だ。状況に押され非情を強いられる彼女には、〃灰〃に理解も示している。

よろしくないのは、割り切れない者たち。ルルネの他にも団員の半数が〃灰〃の行動を割り切れないでいる。現にモンスターへの連携もいつもより精彩を欠いていた。

それを解消、ないし軽減するためには——答えを出したアスファイは唇を噛み、虎人の青年に叫ぶ。

「ファルガー！ 指揮を任せます！ 私が戻るまで持ち堪えて下さい！」

指示と同時に身を屈め、脚に装着した靴を指で撫でる。

「『タラリア』」

瞬間、飛翔する水色の髪の乙女。靴から生える二翼一対の白翼

を羽撃かせ、〔万能者〕は宙を飛ぶ。

飛翔靴。装備者に飛行能力を与える天外の魔道具。〃灰〃の頭上を超え、闇派閥の真上に躍り出たアスファイは、囊ホルスターに手を伸ばし——眼を閉じて僅かなあいだ躊躇し、次の瞬間、眦まなじりを決して大量の小瓶をばら撒いた。

「——」
愛する者の名を想い祈っていた白装束たちに、小瓶が次々と直撃する。一瞬の間を置き、大爆発。〃灰〃が追い詰めた闇派閥の者は全滅した。

『爆炸薬』。都市外の素材を用いた〔万能者〕謹製の手投げ弾。小瓶一つで中層のモンスターを絶命させる威力の爆薬は、『火炎石』を巻きつけた白装束たちを爆殺するのに十分だった。

「っ——……〃灰〃。戦闘配置を変更しましょう。あの白装束たちは私が、他の団員は『新種のモンスター』。

貴方はあの——調教師と思しき白ずくめの男をお願いします」
「……それは構わんが。だが貴公、傷を残すぞ？」

「構いません。……覚悟の、上です」
「……分かった。では、任せる」

〃灰〃は両手の触媒をしまい、巨体に見合わぬ速力で白ずくめの男に向かう。それを見送って、アスファイは一度深呼吸をし。残っている闇派閥を目掛け飛翔靴で飛んだ。

アスファイ・アル・アンドロメダは示さねばならない。これは〃灰〃と〔ヘルメス・ファミリア〕、二つに別れた戦いではないのだと。

〃灰〃も含め、栄光も咎も——平等に背負う、私達の戦いなのだ。ルルネは正しい。だが間違っている。モンスターと戦うのが冒険者の華でも、ダンジョンでは何が起るかわからない。場合によっては人と戦い……殺し合いも、しなければならぬ。

それを忌避すると〃灰〃は知っていたからこそ、一身に業を背負ったのだ。人殺しという業を——殺人という業から、冒険者である〔ヘルメス・ファミリア〕が、他人事でいられるように。

だからアスファイは白装束たちを殺した。業を背負わない事がプラ

スに働けばそれでいいが、結果はマイナスだ。ならば業を背負う事で、無関係ではないと知らしめねばならない。

殺人という行為に、己の心が傷つくと知りながら。

それでも、せめて仲間には直接の業を背負わせぬよう。

アスファイ・アル・アンドロメダが、たった一人で。

「……ヘルメス様」

主神かみの名を呼んだのは、人間性を守ろうとする彼女の無意識だった。

殺すだけならば使う必要のない飛翔靴タラリア、爆炸薬バースト・オイル。冒険者として、**【万能者】**として、人として作った己の発明をあえて使う事で、人間性を欠如させる殺人という行為から己を守ろうとしていた。

どんな業を背負おうとも、本当に大切なものは手放さない。その瞬間、闇派閥イヴァイルスと同じ心境であったアスファイは——やはり普通の、『人』なのだろう。

立ちはだかる食人花を斬りながら「灰」は進む。

目指すは白づくめの男、食人花を操る調教師テイマーと思しき番人。頭蓋の内側から覗く無機質な瞳を遠い距離でも明確に見据えながら、「灰」は極東の刀に似た製法の二刀、《鬼切と姥断》をもって食人花の道を斬り開いた。

「食人花サイオラスに大人しく喰われていればいいものを……」

闇派閥イヴァイルスが捨て身の特攻を行う横で余裕を湛えていた白づくめは、面倒そうに組んだ両手をゆっくりと降ろす。大したことのないように見える異質な速さで近づく「灰」を迎撃する素振りだ。

緑の長駆を解体してある程度の距離と空間を確保した「灰」は、膝の鎧を曲げ勢い良く跳ぶ。

戦技**【鬼切】**。前方にふわりと飛び、二刀で傷を開くように斬り捨てる「黒い手のカムイ」が好んだ剣技。

空中で体を小さくたたみ、腕を交差させて二刀を構える4 Mメドルの巨人。頭部の仮面が発する異様さが白づくめの男を捉え。

「フン……やれ」

巨大な全身鎧を鼻で嘲った白ずくめは、地面から大量の触手を呼び、「灰」に襲いかからせた。

敵は空中、避けうる余地なし。迂闊に跳んだデカいだけの間抜けなど、白ずくめの男はもう敵としてすら見ていなかった。

もはや見ずとも決着だ。4 Mメドルのバカな鎧は、空中で針山のようになって死ぬ。予想される結末に皮肉な笑みを浮かべ、白ずくめの男は視線を外した。

だが——「灰」は一度、地下水路にて。その攻撃を受けている。

「ああ。それはもう知っている」

そのくぐもった声は妙に耳に残った。イザイルス闇派閥の残党と神々に操られた冒険者どもの下らない争いを観戦しようとしていた白ずくめは、ふと視線を元に戻す。

そこには。握っていたはずの二振りの刀が、老いさらばえた二つの大剣となった鎧がいた。

白ずくめ以上の無機質な仮面を被る、「灰」の姿があった。

「な——」

白ずくめの男は驚くが、そんな暇はもうない。既に「灰」の戦技は【鬼切】から【残り火】に移行している。

黒い岩のような青竜刀に似た二つの大剣を振るう瞬間、「灰」は刃を擦り合わせた。

呼び覚まされる火の封の痕。往時の姿、火に焼かれる古い人の武器の力を取り戻した大剣は、その莫大な炎を「灰」の周囲に解き放つ。

「ぐうっ!？」

一瞬で食人花の触手を焼き尽くした火は、当然白ずくめの男を焼いた。肌を焼く炎の猛りに反射的に飛び下がる。直後、その場所に巨人が降り立ち、炎が一層荒々しく燃え上がる。

「……そんなに死に急ぎたいのか、冒険者め」

咄嗟に顔を防御した白ずくめは、腕の隙間から悪態を吐いた。苛立ちが交じる無機質な瞳が白骨の奥から「灰」を睨む。

「……………」

対し、火の海に佇む4 Mメドルの巨人は、無言のまま《輪の騎士の双大剣》をソウルに戻した。源が消え、必然的に炎も尽きる。ボウツ、と断末魔のような音が鳴り、火の消えた跡地で、「灰」はごく普通の《ロングソード》と《騎士の盾》を装備していた。

「ぬっ！」

言葉無く、「灰」が動く。斬りかかる4 Mメドルの巨人に白ずくめの男が応戦する。

単調な「灰」の剣を白ずくめは苦も無く躲す。同時に死角に入り、口角を歪め急所を狙う。

それは寸前で向きを調整した「灰」の盾に防がれた。また繰り出される単調な剣。起伏のない攻めを噛いながら白ずくめは回避と攻撃を繰り返す。

十合、二十合、三十合——「灰」の仕掛けた戦いは「灰」が終始不利だった。剣は避けられ、防ぐ盾は間一髪。基本にあまりに忠実過ぎて読みやすい「灰」の動きは、白ずくめの男からすれば生餌も同然だ。

少し崩せば、簡単に殺せる。白ずくめは口角を歪め、「灰」を翻弄しながら同胞を呼ぶ。

「食人花！」

男の声に呼応し、天井の緑壁から垂れ下がる管から数匹の食人花が飛び出る。白ずくめの背後に陣取り、無数の触手を飛ばす援護によって、「灰」の動きが一気に悪くなった。

それを見逃す白ずくめではない。獯猛に噛いながら崩れた「灰」に空気を碎いて唸りを上げる拳を振り抜き。

横殴りの盾が男の拳を、完璧に打ち払った。

「なにっ！」

がむしやらに振るわれた盾にたまたま受け流された。そう感じた白ずくめの男は「灰」の《ロングソード》が先の大剣に似た黒い直剣に変わっているのを悟り、すぐに距離を取る。

すぐさま黒い直剣から火が吹き上がり、10 Mメドル近い刀身となった。

それは一薙ぎで白ずくめの頭上を超え、呼び出した食人花を二つに焼き断つ。

追撃はない。食人花のみを始末した巨人は、再び黒い直剣、《輪の騎士の直剣》を《ロングソード》に戻す。不可解な行動の真意を測りかねるも、白ずくめの男は嗤った。

「先刻から妙な魔法を使うな……貴様、本当に冒険者か？」

「……………」

「無視か……だが、まあいい。もう底は読めた。次は今のよう、偶然では防げんぞ？」

「……貴公、妙な男だ」

そこで《灰》はようやく口を開いた。しかし会話というより、呟きに近い。

「その身体能力、並の手段では得られまい。明らかに常人の域を超えている。『神の恩恵』をもってしても、どれほどの経験値を積みあげればその領域に到れるのか……私では皆目、見当もつかん」

『神の恩恵』だと？ ハッ、貴様も神に踊らされる人形と同じだな。神の『恩恵』に継ぎのみの冒険者には理解できまい。

『彼女』に祝福された私のこの身の素晴らしさはな！」

「……成程。『神の恩恵』ではない、という事か」

白ずくめの男は自らの胸を撫ぜ、一瞬の恍惚を込めて嗤う。期待はしていなかったが、べらべらと喋る白ずくめに——《灰》はゆっくりと構えを解いた。

「ならば貴公、【魔法】もないのだな。何らかの作用を起こす《スキル》も持たない」

「そうだ、もはや私には必要ない！ そんなものがなくとも、この身さえあれば——」

「ああ、もういい。もう分かった。貴公の言葉は、もう十分だ」
「……ナニ？」

そこで白ずくめの男は、ようやく《灰》の変質に気付く。《ロングソード》と《騎士の盾》も消して、棒立ちになる全身鎧。戦闘を放棄したような格好は、だが何かおぞましいものの前触れだ。

「特殊な【魔法】もなく、特別な《スキル》もない。ただ堅く、ただ強く、ただ速い。」

ただそれだけの徒手空拳。有り触れた人型の——『敵対者』。それだけ分かれれば十分だ。だから貴公、侮ってくれ」

再び、〃灰〃が武器を握る。

その左手には古くくすんだ白の直剣。疾病の神ガリブを信奉し、不死廟にあったレディアの徒。やがて傲り、死を弄び、冒涇者として滅ぼされた彼らの特殊な武器——《ブルーフレイム》。

「出来るだけ私を侮ってくれ——そうしてくれると、やりやすい」

そして右手には、異様な大剣が握られていた。

白骨か病人の肌を連想させる不吉な白。刀身も持ち手も歪み切った、蟲に食はまれた葉の残骸のような、闇に蝕まれた大剣。

かつて偉大な指導者であり、のちにダークレイスの始祖となった——《小王の大剣》を、〃灰〃は白ずくめの男に向けた。

(何だ、これはッ!?)

白ずくめの男、オリヴァス・アクトは目の前の現実を信じられずにいた。

敵はデカいだけの雑兵だった筈だ。妙な【魔法】を使うだけの三流だった筈だ。

『彼女』に愛された——人も怪物モンスターも超越した己になら、その気になれば腕の一振り振りで雑草のように千切り取れた存在の筈だ！

その筈なのに——その筈なのに！

(何故私が、こうまで追い詰められているッッ!?)

ギリギリで反応するのがやっとの一撃を薄皮一枚で回避したオリヴァスは、頭上に高々と振り上げられた虫喰いの大剣を知覚し、両手を交差させて間一髪に防ぐ。

「ぐっ、ぐおおおおおおおっ!?!」

だが、完全ではない。人の域を完全に捨て去った肉体が、深層のモンスターと同等以上の『耐久力』を誇る皮膚と筋繊維が、4 Mメトルの巨人

が押し付ける純粋な『筋力』によって徐々に断たれ始めていく。

皮膚の弾ける感触。ブチブチと腕から響く嫌な断絶音。嘖き出す血が千切れた血管の数だけ増え、既に骨にすら達しようとしている。

「食人花ウツ?!」^{ヴァイオラス}

腕を断たれる苦悶と信じ難い現実に限界まで顔を歪めるオリヴァスは、すさまじい戦慄声^{わななきごえ}で同胞に助けを求めた。『彼女』と起源を同じくする食人花が緑壁の管から射出され、十に近い数が一気に『灰』に襲いかかる。

だが、オリヴァスも食人花も、^{ヴァイオラス}『灰』にとって分かり切った『敵対者』だった。

「ソウルの結晶槍」

『灰』は『ブルーフレイム』で食人花の一体を斬断すると同時に青白い光の結晶を撃つ。

戦技【高速詠唱】。攻撃と同時に魔法を発動する、『理力』と『技量』に優れた高位の魔術師のみが使う事を許される戦技。

両断された緑の長駆の間から、鋭く尖った大結晶が直進する。それは食人花を易々と貫き、勢いは衰える事なく射線上のモンスターの花を次々と穿っていく。

『灰』の周りにとぐろを巻く食人花を、ではなく。

遠く戦いを続ける「ヘルメス・ファミリア」が相手取る食人花を、だ。
(在り得ない! 何故だ!? 何故ここまで力に開きがあるツ!?)

内心の震えを無理やり千切りながらオリヴァスは突貫する。食人花の処理を優先する『灰』の隙を突いた完璧な奇襲。

その筈なのに、4 M^{メドル}の巨人はその巨体に見合わぬ速度で掻き消え。かろうじて目で追えたオリヴァスが捉えたのは、数匹の食人花^{ヴァイオラス}を斬り払った後、こちらに虫喰いの大剣を叩きつける『灰』の姿だった。

「ぐ——ぎいいいいいいああああツツ!」

軸をずらして受けた筈なのに、虫喰いの大剣は正確に同じ傷に刃を合わせる。半ば断たれていた筋繊維は完全に千切られ、骨を削られる大激痛がオリヴァスの喉を限界まで酷使した。

ベキリ、と骨の碎ける音が鳴り、斬られた勢いそのままオリヴァスが

十数M^{メートル}転がる。周囲に積み上がった食人花の死骸を巻き込み砕きながら吹き飛ぶオリヴァスは、軌道上にあった大岩に直撃してようやく止まる。

態勢を整えなければ、巨人の追撃に備えなければ！ 半ば感覚の無くなった両腕を、激痛を押し殺しながら無理やり使い、立ち上がったオリヴァスが見たものは。

最後の食人花を直剣と青白い大結晶で処理した後、オリヴァスを気にも留めず灰色の瓶を叩る、巨人の姿。

一口、二口、三口。目玉がこぼれそうな表情で凍りつくオリヴァスの前で、^{フオーカス}「灰」は悠々と灰エストを補給し、集中力を回復する。

「くそっ！ くそっ、くそっ、くそっ!! くそおおおおおおおおおおくくくッツ!!」

かつてない屈辱に焼かれながら、だがオリヴァスは動けないでいた。いや、体が破裂しそうな程^{ほとほと}迸る激情に身を委ねようとした瞬間、

「灰」の方が一瞬早く攻撃を再開していた。
「いぎやあつっ!?!」

冷静さを失っていた所に見舞われた《小王の大剣》の一撃は、戦技によって放たれた【闇の追撃】。

小さく重い闇の破片が、信じられない程の速さでいくつも迫り、オリヴァスの手足、特に血を流す傷を抉るように直撃する。

意識が吹き飛びそうな苦痛に体勢を崩した所に、本命の【闇の追撃】、4M^{メートル}の巨人と同等以上の巨大な闇の刃が大地を削りながら肉薄する。

「う、うぐおおおおああああああああつっ!?!」

もはや『彼女』に選ばれた矜持^{プライド}もかなぐり捨て、全霊を賭してオリヴァスは避けた。体勢の崩れた体を地面に投げ出し、薄皮を削ぎながら通り過ぎる闇の刃のなままたかさに恐怖する。

だが、まだ終わらない。闇の業にふさわしく、意志を見出された闇の刃は、その最後が小さな悲劇でしかありえないとしても、目標を執拗に追い続ける。

独りでの進路を変え、円形に曲がり再度戻ってきた闇の刃をオリ

ヴァスは悲鳴を上げながら避けた。両腕の動かない体を土に投げ出し、無様に転げ回り、虫のように這いずって自分を狙う絶命の一撃を避け続ける。

敵は技に拙い三流だった筈だ。少し本気を出せば呆気無く殺せる存在だった筈だ。

だが今、その敵とはどちらを指す言葉なのだろう。少し本気を出せば呆気無く敵を殺せるのは、果たしてどちらなのだろう。

自分は一体、何と戦っている？ 必死に命を繋ごうとする思考の一瞬、姿の見えない闇に拳を振るう錯覚を覚えたオリヴァスは。

既に一步の距離まで詰めていた、〃灰〃の《小王の大剣》によって両脚を完全に破壊され。

首を掴まれ掲げられた男の体に、闇の刃が直撃した。

「ヒュゼレイド・ファラーリカ!!」

検証をしていた〃灰〃の耳に、その魔法の名と魔力の余波は優に届いた。

広大な食料庫パントリーの大空洞、その五割に及ぶ範囲に火炎の豪雨が降り注ぐ。〃灰〃の立つ場所を避けながら落下する魔法の着弾に、視界が赤い輝きで埋まり、大地を揺さぶる衝撃波が大空洞全体に広がる。

風を巻いて土を削るその衝撃波を棒立ちで眺めた〃灰〃は、足元に転がる瀕死の男を見下ろした。

「う……あ……」

小さな呻き声を零す男は数本の剣で地面に縫い止められていた。

既に手足は切り取られ、男の周囲に散らばっている。魔法を使えない事は事前に確認済みなので、尋問の可能性を考慮し喉は潰していない。

腹部に突き刺した剣はそれぞれ毒、血、祝福の変質強化を施した《ショートソード》だ。どうもこの男は再生力も高く、生半可な拘束は意味を為さなかったため、毒による状態異常と絶えぬ出血で弱体化させ、祝福で損傷と再生が吊り合うよう調整している。

文字通りの、生かさず殺さず。生と死の中間で放置される男に「灰」は【死者の活性】を放つ。

範囲は極小、他の死体を巻き込まないように地に地を這う闇は、散乱する男の手足はへんに触れ——何も起こらなかつた。

「成程。やはり、人ではない」

耐久力、再生力、体構造、痛覚、魔法耐性、異常耐性……初見の敵であるが故に、どの手段がどの程度どうすれば殺せるかを「灰」は検証していた。

己を知り、敵をよく知る。何ら才能のない「灰」にとって、それは半ば脅迫的な観念だ。例えば目に見えた結末であり、誰もが予想できる未来であつても——やってみなければ分からない。

幾億の数え切れぬ己の屍を築き上げ、全ての敵を討ち果たしてきた「灰」は。

だからこそ、それが『協力者』たちに受け入れられぬ狂気の沙汰と知りながら、彼らが「灰」の元に至るまで検証し続けた。

「……何を、やっているのですか、「灰」……」

「来たか。どうやらそちらも片付いたようだな。何やら顔触れが増えているようだが……まあいい。私のすべき事は変わらない」

一団を引き連れ、青い顔で問いかけるアスファイに「灰」は筋違いの返答を投げる。ゆつくりと彼らを見渡すと、何人かがビクリと震え体を強張らせた。「灰」の所業を己も同罪と割り切つてはいるが、受け入れていない。

視点を換えればそこにいるのは、バラバラになつた男をなおも弄ぶ異様な仮面の異分子だ。4 Mメドルの巨人は大きな黄銅の手で転がっている男の脚を掴み、見せつけるように掲げる。

「これを見たまえ。通常の人の足ではない。断面と表皮を見るに、『新種のモンスター』と似たような構造をしている。

この構造はこの男の腹から下を構成していた。おそらくだが下半身を失い、何らかの形でモンスタアの肉体を手に入れたのではないだろうか。

私はそう考えるが、貴公はどう思う？」

「そんな話をしているのではありませんっ！　いくら敵とは言え、そんな残酷な真似をして良い道理がありませんか!？」

「?　分からないな。戦場で説く人の道理などあるまい。それに、どうせ殺すのだ。過程がそこまで重要か?」

「灰」の心底不思議そうな問い掛けにアスファイは絶句する。一人の狼ウエアウルフ人を除き、他の面々も愕然としていた。

彼らの様子にこれ以上の検証は不可能だと判断した「灰」は脚を放り捨て、立ち上がる。

「アスファイ・アル・アンドロメダ。ここは貴公に任せる。貴公ならば白剤の類も持つていよう。その男の素性と目的を確かめてくれ。」

私は、あの『宝玉』を確保する。何かは分からんが、きつとこの一件の核心だろう」

言い終えて、反応を待たずに「灰」は歩いた。巨大なモンスターが三体絡みつく、赤く発光する石英クォーツの大支柱はしら。4 Mメドルの巨人が見上げる先に『緑の宝玉』が取り憑いている。

雌おんなの胎児を内包した緑色の球体。赤子の体に対し肥大した二つの眼球が、自分を見上げる。「灰」を睨めつける。

歪なソウルだ。「灰」はそう感じ取った。「穢れ」や「煤」に類するものではない。これは白竜シースの狂気の産物、存在し得ぬ造られた生命に似ている。

ソウルではなく、肉体の変質。何か別の物と結びつき、融合し、外れてしまった肉体の形にソウルが歪んでいる。

この『宝玉』はそれの、分け身に近いものなのだろう。パチパチとまぶたを叩き、不思議な何かを見つめるように「灰」を見る雌おんなの胎児に、不死は《呪術の火》を灯して、燃え上がる炎を己の体に押し付けた。

【湖の霧】

体内を循環し、生命の根源から古い時代の力を呼び覚ます炎は、その性質を変えながら「灰」の喉を通り、水上の霧となって吐き出される。

大量の水は、眠りを守る断絶である。それは古竜のみが知る、混沌

の炎より始まった呪術の系譜の、その前にあつた生命の悟りだ。

それは神秘であり、故に【湖の霧】はそれを吸う者を眠りに誘う。生きた『宝玉』も例外ではなく、雌おんなの胎児は霧に覆われ、やがてゆつくりと肥大した瞳を閉じた。

それを確認してから片手で掴み石英クォーツから引き抜いた『灰』は、空いた手で首に指を差し込みながら『宝玉』を『器』から取り出した袋に入れて腰に下げる。

すべき事を終えたので『灰』はさつきと『協力者』たちの元へ戻った。するとそこでは、赤緋せきひの瞳を露わにする黒髪のエルフをレフイーヤが必死に押し留めていた。

「……何をしている?」

「っ! 『灰』ですか……『宝玉』は?」

「この通り、回収してきた」

最も話が通りやすいであろうアスファイに話しかけた『灰』は、びくりと反応したアスファイに腰の袋を見せつける。袋の口からは『緑の宝玉』が覗いていた。それを見てアスファイは頷きを返す。

袋の口を締める『灰』は、視線を黒髪のエルフに戻した。

「それで、アレらは何をしている?」

「……貴方が倒した男の名はオリヴァス・アクト。死んだと思われていた『27階層の悪夢』の首謀者でした。そして彼女——フィルヴィス・シャリアは数少ない生き残りの一人。積年の恨みを晴らそうとしているのです」

「成程。そういう事か」

事情を聞いた『灰』は頷き、黒髪のエルフ、フィルヴィスに近寄る。端麗な相貌を怒りと憎しみで歪めるエルフの少女に、『灰』は声を掛けた。

「フィルヴィス・シャリア。貴公、復讐を目的とするのか?」

「何だ貴様は!? 私は仲間の、同胞の仇を取らねばならない!! 邪魔立てはするな!!」

「ああ、邪魔はしない。だが貴公、命を奪うだけでは気が済まんだらう?」

「なんだと……っ!？」

レフィーヤに抑えられながらも暴走する感情に支配された手足は止まらない。その報復に走る心のままフィルヴィスが唐突な部外者を睨むと——赤緋の瞳が見開かれ、完全に硬直する。

「復讐というのだ。単に命を奪うだけでは慰めにも値しまい。心に淀んだ積年の分だけ、出来るだけ惨たらしく、長い間苦しんだ末に死ねと思うのが人だろう。」

だから良ければ、道具を貸そう。私の武具は殺す物ばかりだが、一部には絶え間ない苦痛を与える物もある」

暗がりから這い出るような声と同時に青白い光が集まり、「灰」の手からボトボトと武器が落ちる。

《トゲの直剣》《強化クラブ》《血狂い》《人斬り》《肉断ち包丁》《グルーの腐れ曲刀》《焼きごて》《傀儡の鉤爪》《イバラムチ》——次々と大地に転がる、禍々しく人の暗い側面を表す武器群。

その一つ、《イバラムチ》を拾って差し出し、片方の手には聖鈴を握り【蝕み】を発動させる。

「私は回復の魔法も修めている。あまり長くは付き合えないが、貴公が望むなら何度でも傷を治そう。何度でも痛苦を味合わせるために。」

あるいはこのように、蟲を呼ぶ魔法もある。この蟲は小さな顎に牙を持ち、瞬く間に皮膚を裂き、肉に潜り込む。それは激しい出血と、生きたまま貪られる恐怖と絶望を与えるだろう。

『27階層の悪夢』は知っている。貴公の仲間は望まず怪物の餌食となった。ならばこの男を、蟲の餌にしてやるのも——また一興だと思わないか？」

聖鈴の表面に滑る深みから小さな蟲が蠢き現れる。ギチギチと鳴き、巨人の手を這い回る大量の蟲に悲鳴が漏れた。誰もが「灰」の提案を理解できず、おぞましい者を見る目で4 Mの巨人を突き刺す。

無音が、その場を支配した。誰もが声を上げられない。異様な仮面、全身鎧。目の前に立つ人の形をした何かを、真つ当な人である彼らは決定的に違うものだと認識する。

懐かしい眼だ。「灰」が不死狩りに囚われ、人の世界に引き摺り出

そして「灰」は、幾度となくぶつけられた正しい悪意にいまさら怯まない。むしろ当然といった体で首肯した。

「ああ、そうだ。それで貴公、言いたい事はそれだけか？」

もう聞くべき事もなからう。拷問をしないのであれば、手早く処理をしたいのだが」

「ツツ!! …………… 貴様は危険だ。貴様だけは決して生かしてはおけません。全ては『彼女』のために————ここで死んで礎となれ、冒険者アツツ!!」

巨大花ツツツ!!」

「灰」が地面に落とした全ての武器を消し《小王の大剣》を振り被った瞬間、オリヴァスは極限の殺意を込めて咆哮する。

同胞のただならぬ激情を受け取った巨大花は、ぶるりとその30 Mに及ぶ巨軀を震わせ、ゆつくりと大主柱から剥離し、巨大花からすれば小さな小人の元へ落ちてくる。

オリヴァスもろとも冒険者を全て殺戮しようとする狂気。落下する大質量に狼人が怒号を上げようとした、その時。

「ああ。それはもう知っている」

嫌に耳に透るくぐもった声が、全身鎧から零れ。

次の瞬間、「灰」は大地を蹴り巨大花めがけて飛び上がった。

驚愕の声を置き去りに、「灰」は《呪術の火》に一際大きな炎を蓄え、己の内に封じ込める。落下する巨大花と4 Mの巨人が秒もかからず接近し、着底。

巨大花の裏側に立った「灰」は再び蹴り上げ、反転しながら——体内に満ちる混沌の炎を解き放った。

「噴火」

刹那、「灰」の肉体が燃え上がり、強い炎の衝撃波を発生させる。混沌の魔女クラーグが異形の半身より全方向へ噴射する混沌の模倣。触れるものを焼きながら吹き飛ばす「噴火」は、30 Mの巨大花ですら反対方向へ押し飛ばす。

互いにぶつかって弾かれるように巨大花と全身鎧は反転した。元の位置に着地した「灰」は大主柱の向こう側へ倒れていく巨大花へ

杖を向ける。

《日暮れの杖》と呼ばれる、闇術に最も適した杖の一つを。

「あまり時間はかけたくない。早々に方を付けさせてもらおう」

“灰”がそう呟き、杖の先に全集中力フォーカスを集中した闇の力が収斂しゅうれんする。

それは光だった。目も眩む程光り輝く、陰を生まない闇の光。 “灰”がいつしかに見せた暗い魂の光と似た、だが違う異質な闇の輝きは、膨大な力を秘めながら一点に収束する。

そして目映いばかりの陰無き光が、最高潮に達した瞬間。

【輝く闇の奔流】

闇術の祖が見出した力の名が示され、闇喰らいの息が光線となって発射された。

『ツツ?!』

仮に巨大花ヴィスクムが悲鳴を上げるのだとすれば、一際大きく震えるそれが断末魔に等しかった。

巨大花の頭部に直撃する【輝く闇の奔流】。それは神に育てられ、死なぬが故に永遠に闇を喰らう使命を与えられた古い竜の末裔の息吹だ。

輝く闇とは深淵にして、人間性。神がとうに滅びてなおも使命を忘れず、闇を喰らい続け、闇に侵された古竜の力が息吹に宿ったもの。

人間性のブレスは重く、それは古竜の息でありながら物理的な極大威力を有する。巨大花に直撃した陰を生まない光線は、30Mメドルの巨体に相応しい巨大花の頭部を貫通。その先の緑壁にまで被害を及ぼす。

それだけでは終わらない。【輝く闇の奔流】の真価はそれが人間性である事だ。光線跡に残された莫大な量の人間性は、暗く蠢き、行き場を求め、周囲を食い荒らしながら爆裂する。

内側に膨れ上がった大質量が外へ拡散する大爆発。闇の残滓を残して人間性が消えた後、残ったのは頭部のない巨大花だけであった。

念のため杖を動かし、頭部を失った巨大花を撃ち続ける光線で適当に裁断した “灰” は、人間性の爆発で消滅した巨大花の死を見届け

た。一つ頷き、灰エストを飲み、『協力者』たちに向き直る。

「大主柱はしちに寄生している二体も殺しておきたいが、あの巨体だ。私の魔法では大主柱はしちを巻き込まない自信がない。

この食料庫パントリーの状況を考慮すれば、一度崩壊させるのが手っ取り早い『異常事態』の終息になるだろう。だから私は撤収時に破壊する事を提案するが、どうだ？」

「……………それでよろしいかと。貴方の魔法なら簡単でしょうしね……………」

やる事なす事が突飛すぎて驚いていいやら嫌悪していいやら分からなくなつたアスファイは、何ともいえない顔でずさんに肯定し、馴染んでしまつた頭痛を堪えた。周りも似たようなもので、闇派閥イヴェイルスのような外法から英雄じみた魔法まで使う「灰」をどう評価していいか分からなくなつている顔をしていた。

例外は神妙な顔で「灰」を眇すがめる狼人ウエアウルフと、デタラメな魔力の無詠唱魔法行使を正確に察知していた魔道士組か。特に小人族バルウムの魔道士、メリルは全集中力フォーカスを注ぎ込んだ「灰」の魔法がバカ魔力過ぎて、ずつと涙目で怯えていた。

そんなこんなで一行の緊張の糸が僅かに緩む。山場を超えたと「灰」は判断し、ここからどう動くかアスファイに尋ねようとした——その瞬間。

大空洞の壁面一角が爆発し。

吹き飛んで来る赤髪の女と、大穴の開いた壁面に立つ金の少女に、

「灰」は鎧の中で暗い銀の光を細めた。

失敗した。

やはり、碌ロクに敵を知らぬ状況で判断を下すものではないと、「灰」は改めて不死の教訓を噛み締める。

赤髪の女——ソウルから読み取れる名は「穢れた怪人、レヴィス」

——は地面を削りながら矢のように進み、一行からほど近い場所ですま

全身に裂傷を負い満身創痍の赤髪の女は、こちらを見るなり状況を即座に把握したのか、舌打ちをして強襲してきた。

強靱に物を言わせ、真つ先に動いた第一級冒険者の蹴撃を何度も食らいながら、レヴィスはオリヴァスの回収を最優先でする。

そして静観していた「灰」の前でオリヴァスから極彩色の魔石を奪い——喰らう事で、諸能力を大幅に引き上げた。

そこまでは良かった。結果的に敵の強化を見過ごした形でも、魔石によって力を得る『強化種』であると確信できた。だからそこまでは良い。

問題はその先だ。魔石を喰らったレヴィスは大地を手で貫き、天然武器を引き抜く。そして壁面の大穴から地面に降り立ったアイズへ突貫した。

「——!?!」

「チツ……邪魔が入った」

見に戻っていた「灰」が【ソウルの結晶槍】を撃っていないければ、腕の一本を取られていたであろう一撃だった。その場にいたほとんどは腕の動力視力を振り切ったレヴィスに驚愕が走る中、『風』を発動させアイズを眺める4Mの巨人の首に複数の短剣が刺さる。

「む……」

「返シテ貫ウゾ」

よろめく全身鎧の腰に下がる袋を奪いながら、突如現れた紫の外フーデッド・ローブの襲撃者は、凄まじい『力』で「灰」を殴り飛ばした。

だがそれを予想していた「灰」は自ら飛んで襲撃者の銀のメタルグローブの拳を躲し、同時に【蝕み】で反撃する。深みの蟲にたかられる仮面の襲撃者に追撃しようとした——その時。

「巨大花!・産み続ける!! 枯れ果てるまで、力を絞り尽くせ!」

赤髪の女がそう叫び、大空洞が鳴動。次の瞬間には、大量の食人花が緑壁の管から次々と生産された。

通常を遥かに超える、千以上の食人花が集う怪物の宴である。

「ああ……これは、知らなかったな」

巨大花の未知の力に、「灰」は手を止めて見に戻る。逃げていく仮

面の襲撃者など気にせず——巨大花の始末を後回しにした自分の判断の失敗を考えていた。

(まあ、仕方あるまい。たかが呪われ人が、無数の選択肢から正しい一つを選び取れというのが土台無理な話だ。元より私に出来る事など、正解以外の選択肢を己の死体で埋める程度でしかないのだから。

反省しよう。そして三度は繰り返さない。全ての未知を潰さねば、死ぬのは常に私の方だ)

光を失う大主柱共々枯れ朽ちる巨大花の最期を見届けた「灰」は、首に刺さったナイフをソウルにして回収しつつ、視界を埋め尽くす食人花の猛攻を出来る限り排除する。

固まってどうにか食人花を凌ぐ『協力者』たちの前に出て、「灰」は二本の特大剣を装備した。

《白王の特大剣》。全てが淀みあらゆる物が忘れ去られた火の時代の特異点、そこに勃興した『凍てついたエス・ロイエス』の王の剣だ。戦神の国フォローザの最高位の騎士であったと謳われる《白王の特大剣》は、放出する冷たいソウルによって刀身を伸ばす特別な力を帯びた武器である。

それを二本、両手持ちにした「灰」は、最大まで強化した『筋力』と『技量』を存分に発揮し、冷たいソウルの刀身による暴刃圏を形成する。

冷気を纏った特大剣の剣閃は斬り裂かれた食人花に凍傷を残し、動きを鈍らせる。確実な止めよりも多く巻き込む事を優先すれば、僅かだが余裕を作る事も出来る。

「灰」っ！ 貴方の魔法でどうにか出来ませんかっ!?!」

その猶予の中でアスフィの切羽詰まった疾呼が飛んだ。『持久力』の許す限り攻撃を続ける「灰」は、だが変化のない口調で否定する。「無理だな。私の魔法は威力に特化している。元々殲滅には向かん。範囲を広げようにも精神力の変換効率が著しく悪い。この数だと……殲滅の遙か手前で私の精神力が尽きる」

「そんな……! 何かっ、他に何か手はありませんかっ!?!」

「少なくとも二つはあるが……勧奨はしない。どちらも悪い意味で

強力過ぎる。それを使い、この窮地を脱したとして——生き残るのが私だけになる可能性が高い。

それでも、ここで全滅するよりはマシな可能性だが。賭けてみるか？ アスファイ・アル・アンドロメダ」

「~~~~ツ!？」

アスファイの声にならない悲鳴が上がった。筆舌に尽くし難い葛藤に苛まれる【万能者】ペルセウスは、徐々に押される戦況に決断を迫られる。

その時、一条の雷が迸り。杖を握るエルフの少女の声が響いた。

「——私を守って下さい!!」

その声に、アスファイを含めた全員がエルフの少女、レフィーヤを見る。彼女は少し怯み、だが堪え、魔道士である自分ならば守ってくれる貴方達を救えると宣言した。

瞬間、アスファイは「灰」を見遣り。頷きを返した4 Mメドルの巨人に苦笑を浮かべ、指示を飛ばす。

「全員、千の妖精の元に!! 彼女に全てを委ねます!!」

その言葉に覚悟を決めた冒険者達は、エルフの魔道士を旗印に密集する。

「方円陣形!! 五分、いえ三分持たせて下さい!!」

そして都市最強の魔道士を連想させるレフィーヤの声に円陣を組み——命懸けの三分間が始まった。

さて、どうするべきか。目の前に溢れる食人花を片っ端から斬りながら、「灰」は考える。

三分間の防衛戦。レフィーヤ・ウィリデイスの魔法が完成すればこちらの勝ち。陣形が突破され食人花の牙がレフィーヤに届けば負け。言葉にすれば単純な話である。

「灰」にはそれにもう一つ勝利条件が加わるが、そちらは自己満足のようなもの。この状況では達成できない確率が濃厚である。

それでも『協力者』たちがいる限り、決して手を抜かない「灰」は、最も食人花の多い地点を受け持っている。「灰」の所有する武器軍

の中でも特に攻撃範囲に優れた《白王の特大剣》ならば、多対一における「灰」の許容量を上げられる。多対多なら尚更だ。

だがそれで、レフイーヤの詠唱完了まで持ち堪えられると「灰」は考えていなかった。出来るかどうかを考慮の外に置きがちな「灰」ではあるが——希望が見えた時に限って、絶望とはやってくるものであると、名も無き不死は知っている。

それが数多の冒険者を死に至らしめてきた——迷宮の奥底であれば、尚更に。

そして、防衛開始から20秒。

ホセ・ハイエルが食人花に引きずり上げられた。

「!! ホセを救出——」

咄嗟に出たアスフィの言葉は途中で止まった。片腕を咬まれ連れて行かれるホセが、アスフィに首を振ったからだ。

狸人である彼は既に本能で悟っていた。ここで仲間を助けるために動けば、崩壊する。救うための犠牲が連鎖し、全員が死ぬ事になる。だから助けられてはいけない。自分はここで見捨てられなければならぬ。遠のく団長が断腸の思いで命令する姿を見届け、ホセは笑った。

彼も冒険者だ。覚悟はしている。心残りがあるとすれば、せつかく閃いた詩歌を作れなかった事か——と。ホセが末期を予期した瞬間。「全く、手間のかかる事だ」

ひどくくぐもった声が耳に届き、気付けばホセは仲間の元に押し返されていた。

「「灰」!?!」

そう、「灰」だ。アスフィが目を剥く先で、4Mの巨人はホセを捕らえていた食人花を斬り、ホセを蹴りつけて元居た場所へ返したのだ。

だがそのために飛び出した全身鎧は止まらない。瞠目するホセと対象的に「灰」は食人花の軍勢へ消えていく。空中で己に群がる醜悪な花達を見据えた「灰」は、左手の特大剣を《薄暮のタリスマン》に持ち替え、食人花の中へ消えていく。

そして数秒後。『灰』の消えた場所から紫の衝撃波が爆発し、範囲内の食人花を全て粉々に消し飛ばした。

【因果応報】。発動者は紫炎のオーラを纏い、短時間に大ダメージを受ける事で発動する強力な奇跡。罪と罰は黒髪の魔女ベルカの領分であり、罪を定めるベルカの罰は、因果を必要とする代わりに他と一線を画す応報を下す。

砕け散った緑の肉片が降り、大量の食人花がぼつかりと空いた軍勢の穴目掛けて殺到した。断続的に紫の衝撃波が発生し、その度に多くの食人花が爆散する。

ホセの治療を指示しながらそれを見ていたアスファイは、唇を噛んで目の前の食人花を斬った。多対一は苦手だと申告していたにも関わらず、『灰』は強力な魔法を使い食人花を自らに集中させている。

それが「多対一が苦手」という言葉が嘘だったから、などと楽観するほど、アスファイの眼は曇っていない。

「信じますよ、『灰』……！」

味方を助けるためにあえて苦境に飛び込んだ4Mメドルの巨人に届かぬ激励を送り、アスファイは死力を尽くして防衛に臨んだ。

魔法発動まで、残り2分20秒。

その時、ポット・パックとポック・パックは陣形から外れた場所であれ倒れていた。

元々前衛、中衛の中で彼らだけがLv.2であり、また多くの点で他の人類より劣る小人族である二人は、食人花の猛攻に耐え切れなかった。

「生きてるか、ポット……」

「……ええ、なんとか」

「……くそつ、早く……戻らねえと……」

息も絶え絶えに意識を繋げるポックが腕に力を込める。だが立ち上がれずバランスを崩した。咄嗟に自分の腕を見れば、手首から先が、消えていた。

「——くそつたれっ……！」

ふざけた現実に口端を曲げ、ポックは自分がもう戦えない事を知

る。ふらふらと立ち上がる姉のポットにそれを伝えようとして、固まった。

「ポック……どこにいるの……!? 私達、穴に落ちたの？ 暗くて何も見えない……」

兜が取れ、琥珀色の髪を揺らすポットの顔。そこにあるはずの自分と同じ瑠璃色の瞳は、血で真っ赤に染まっていた。血の赤色しか、そこにはなかった。

「……！ そう……そう……そう……ね」

姉の無残な姿にポックは胸が張り裂けそうな思いで顔を落とし、自分の顔に掌を伸ばすポットは何が起こったのか悟る。

その間にも戦況は悪化していた。絶え間ない怒号と悲鳴が聞こえる。顔を上げたポックの目に写るのは、耐久の限界を超えた武器をなおも振るい、その身を盾に変えて魔道士^{レファイヤ}を守る仲間の姿。

どうする。どうすればいい。もう戦えなくなった自分たちに何が出来る。乾いた熱風のような焦燥に追われるポックは——奇跡的に原型を残した、自爆していない闇派閥^{イサイルス}の遺体に気付いた。

魔法発動まで、残り2分。

都合八回の紫の衝撃波を確認したアスファイは、何か飛んでくるのを察知し、避けた。バキリと、地面にぶつかり砕けながら転がったのは、三つの仮面の残骸。

片目しか残っていない《子の仮面》の黒い目と視線がぶつかり、アスファイは息を止める。

——多対一は最も苦手だ。ある程度は相手取れるが、許容を超えるとおつさり死ぬ——

その言葉が脳裏に再生され、アスファイは苦渋で双眸を歪めた。

「『灰』……！』」

信じ難い物証に心を乱されながらも、アスファイは戦いを止めない。ここで自分が潰れれば皆が死ぬ。その責務とこれ以上の犠牲を容認できない心が【万能者^{ベルセウス}】を動かしていた。

他方、魔道士のメルルは、サポーターであるドドンの動かす大岩に隠れながら、魔法を懸命に撃っていた。精神力^{マインド}の残量など気にしてい

る余裕はない。少しでも食人花を減らせるよう、次の詠唱に取り掛かる。

「メリル！」

「え……きこや!？」

自分の名を呼ぶ声があったのはその時だった。振り向いた瞬間、飛来する何かが見えてメリルは思わず掴み取る。

それはポックの、小人族バルウムの「勇者」の短剣を模して造られたレプリカだった。

「……お前が持つてる」

「何で!? 二人とも何してるの!？」

離れた巨大な大岩の陰に座り込む二人の同胞にメリルは叫ぶ。それに憎たらしい笑みだけ返して、ポックは手のない自分の代わりに投げたくれた姉に礼を言った。

そしてポットが引きずり、ポックが目となってここまで運んだ闇派閥イザイルスの死体の——自爆装置に手をかける。

「ここならきつと上手く敵を減らせる。悪いな、姉貴……」

「いーわよ。みんなのためなもの」

何かと口が悪い姉弟の、本心からの素直な会話。それを終えて、目の見えないポットは自爆装置を作動させた。

遠くで泣き叫ぶメリルの制止が聞こえる。けれどポックは笑っていた。心はもう、あの短剣と共に同胞へ託したのだから。

ふと、ポックの頭に走馬灯が駆け巡る。

自分の生まれた日の事。初めて見た姉の事。

世間から蔑まれ、落ちぶれて生きる自分の種族に腐くさしていた頃。

——そして、小人族バルウムの「勇者」を、知った日の記憶。

あれがあつたから、ポックは冒険者になった。

同じように感化された姉も一緒に歩いてきてくれた。

自分の無力を承知の上でがむしやりに戦った。

見下す冒険者には悪口を返し、屈辱は力を得るための燃料にした。

初めて昇格ランクアップをした時は、鍛冶師に「勇者」の短剣を造らせる程嬉しかった。

それから走り続け、ある時期から「ステイタス」の上がらない停滞期に陥り、後から冒険者になった同胞にはLv.で追いつかれた。

小人族は他と比べるな。だって小人族だから。

そういう持論をいつも抱えていた。何か壁にぶつかる時、思い浮かべるのはいつもそれだった。

そんな時、小人族の【勇者】は、ポックの心を照らすのだ。

小人族でありながら頂点まで登り詰めた【勇者】。落ちぶれた同胞に光を与える一族の英雄。

若く見えても、年齢は自分の倍以上で、自分よりずっと長く冒険者として努力を続けている。

そういった一つ一つを知る度に、ポックは胸が熱くなって仕方がなくなる。

止まった足を、下を向く顔を、また前に上げて走り出したくなる。

……結局最期は、こんな様でしかなかったが。

それでもポックは、後悔はしていない。

自分もあの【勇者】のように。『勇氣』を持ってこの世界を走ったのだから。

『……えっと……今度、フィンを紹介しようか?』

『……いや!! 今は……まだ……やればできるってとこ、見せらんねえし……』

『でも——サイン、とかなら……受け取ってやっても……いいぜ』

数時間も経っていない新しい記憶を思い出して、ポックは笑う。

「あーあ……サイン、欲しかったな」

座り込む二人の小人族の前で、闇派閥の死体が爆発した。

……それは、力なき者のみつともない足掻きだったのかもしれない。

己の分を弁えなかった小人族の、当然の最期だったのかもしれない。

だがもし、小人族の【勇者】が彼らを知る事があるのなら。

決して笑わず、己の心に、誇りある同胞として永遠に名を刻むだろ

う。

たとえ自らの命を失おうとも、仲間を守ろうとした彼らは。

【勇者】が求めた、今は失われた一族の『光』——小人族の『勇氣』を示したのだから。

爆発を起点に、巨大な大岩が均衡を崩し、崩れ落ちる。大量の食人花を巻き込んだ大岩の跡は、レフイーヤを守る冒険者たちの文字通り巨大な盾となった。

瞠目するアスフィに、メリルは告げようとした。自分が見届けた同胞の最期を。

泣きじやくる小人族の少女が口を開こうとした——その時。

メリルの目の前に、灰色の影が降り立った。

——そう。ポット・パツクとポツク・パツクが示したのは、紛れもない小人族の『勇氣』だ。

【勇者】の求めた、今は落ちぶれた全ての同胞を照らす、一族の『光』だ。

ああ、だが。そんな事は——『灰』にとってはどうでもいい。

「協力者は生かす」「敵対者は殺す」

それ以外にまつとうすべき事なんて、『灰』には何一つありはしないのだ。

「え——」

メリルの涙が衝撃で飛ぶ。

目を瞠る小人族の前で、生まれより伸びる髪が戦場の風に強く羽撃く。

並の小人族より更に小さな体。

その身を覆う闇に浸したような黒い長衣。

大地に落ちる、灰色の髪。

そして髪の間には暗く輝く、凍てついた太陽のような銀の瞳。

それをまぶたと長い睫毛で半分隠す『灰』は——両手に抱えた二人の小人族を乱雑に地面へ投げ捨てた。

「ポ、ポット!? ポック!」

「……その声、メリル……? 私たち、生きて……?」

「……一体、何が起きやがった……?」

驚き、一瞬止まった涙を更に浮かべるメリルに、ポットとポックは困惑する。

なぜ生きているのか分からない。そんな二人に、古鐘のような掠れた声は。どこか不機嫌そうに鳴り響いた。

「——全く。どいつもこいつも、自ら進んで死にたがる」

その声に引かれたポックが見上げる中、灰髪の小人族バルウムは聖鈴を取り出した。

輪の都に贈られた眠りの末娘の加護——《フィリアノールの聖鈴》を。

「面倒な事だ。『協力者』が減って最も負担が掛かるのは、誰でもないこの私だというのに」

場違いに自分本位な呟きを落として、幼女は聖鈴を高く掲げる。

『協力者』たちがことごとく死にかけている、この状況を打開するために。

「[太陽の光の癒し]」

掲げられた聖鈴が鳴る。

刹那、“灰”の足元から魔法陣が広がり、全ての『協力者』を効果範囲に収める。

そして《フィリアノールの聖鈴》によつて限界まで広がった魔法陣から、奇跡の光が溢れた。

全てに愛された太陽の王女。広く与えられた恩恵を再現する、太陽のように暖かな光が。

「何だ!? 魔法か!」

「何これ……とても暖かい光——」

「き、傷が、治った……?」

光を浴びた冒険者達は、自分の体についた傷が全て癒やされた事に驚いた。オラリオで最も高名な治療師ヒュラ、デア・セイント【戦場の聖女】を思わせる規格外の回復魔法。

さつきまで満身創痍だった仲間たちが全員傷一つ無くなつたのを周りを見渡すポックが驚いていると——「ポック！」と、姉が自分の名を呼んだ。

振り向けば、そこには。瑠璃色の瞳を輝かせる、呆然としたポットの顔があつた。

「見える……ポック！ 私、目が……！」

「——!？」

驚愕し、無意識に下を見下ろしたポックは、自分の両手がきちんと揃っている事にやっと気付いた。そして頭が真っ白になるほどの衝撃を受ける。

——潰れた目や、失った手すら治す。そんな魔法、オラリオで聞いた事がない！

一体、何が起こっている？ 混乱するポックは、灰髪の小人族を見上げた。この奇跡のような魔法の出処が目の前の小人族である事だけは分かつていた。

やがて光が途切れ、魔法陣が消える。一度周囲を確認した「灰」は、聖鈴を《ルーラーソード》に変え、集団の中心、レフイーヤの近くに投げる。

急に使われた規格外の魔法に面食らっていたエルフの魔道士は詠唱だけは止めていなかった。その近くに垂直に刺さるのは、華美な装飾を施された大剣。

かつてドラングレイグの王が用いた剣であるが、今はそう関係ない。「灰」はただ足場を求め、ドラングレイグの王が振るつた大きさと同じ、5 M^{メドル}相当の剣を呼び出したただけだ。

「灰」は跳び、垂直に突き刺さる《ルーラーソード》の柄に降り立つ。そして《呪術の火》を自らに押し付け——炎を際限なく己に注いだ。

「灰」の吐息が熱を帯びる。巨大な剣に立つ少女の口内から、溶岩のような灼熱の輝きが溢れ出る。

「伏せろ」

そして。小さくも、全員の耳に届いた古鐘の声が響いた瞬間。

「アアアツツ!!」

身を裂くような叫びと共に、「灰」の口から巨大な熱線が放射された。

「は、はあああああああつ?!」

おそろく犬シアンスロープ人の少女であろう驚愕の叫びが、空気を焼き切る熱線の音に掻き消される。

放たれた熱線は方円陣形を描く冒険者の頭上を超え、食人花の群れに激突する。瞬刻、熱線が直撃した食人花は熔けて形を失った。周囲の食人花もことごとくが炎上する。

熱線はまだ終わらない。「叫ぶ混沌」——デーモンの王子が最後に灯した炎の片割れ。混沌の炎を収束した灼熱の熱線は、首を動かす「灰」によって横へ一直線に薙ぎ払われる。

「そ、総員、回避いっ!」

アスファイの咄嗟の号令で、幼女が熱線を吐く光景に啞然としていた一同は慌てて頭を抱え突つ伏した。その上を熱線が通り過ぎ、薙ぎ払われた食人花の群れを焼き尽くされ、溶岩溜まりを残していく。

「灰」はまだ止まらない。首だけでなく体も動かし、冒険者達の方円の更に外に円を描くように「叫ぶ混沌」を吐き続ける。盾になった大岩はその上を熱線で焼き払い、最初に直撃させた地点まで横薙ぎに熱線を吐き続けた「灰」は、天井へ熱線の残滓を放ち終え、上を向いた状態で静止した。

幼女の口から大量の熱が排出され、蒸気となって噴き上がる。

「——アスファイ・アル・アンドロメダ」

「はいっ!」

「私は「灰」だ」

「「灰」 いいいいいっ!」

「あまり時間はない。態勢を立て直せ。あの溶岩溜まりは一時的だ、30秒もすれば消える」

《ルーラーソード》から降りた「灰」は、アスファイの異常な反応を無視してソウルを有形に変換し、周囲の冒険者に投げ渡す。

ワータイガー
虎 人の青年、ファルガー・バトロスには《クレイモア》を。

ドワーフの女性、エリリー・ビーズには《レーヴの大盾》と《オーマの大盾》を。

ヒューマン
人間の男、ゴルメス・レメシスには《巨人の石斧》を。

シアンスロープ
犬 人の少女、ルルネ・ルイーには《影の短剣》を。

キャットビリアル
猫 人の女、タバサ・シルヴィエには《古びたムチ》を。

エルフの青年、セイン・イールには《ハンドアクス》と《ショートボウ》を。

ラクーン
狸人の男性、ホセ・ハイエルには《傭兵の双刀》を。

エルフの女性、スィーシア・リーンには《ゴットヒルトの双剣》を。

ヒューマン
人間の男性、キークス・カドゲウスには『火炎壺』『黒い火炎壺』『雷壺』などを。

ヒューマン
人間の女性、ネリー・ウィルズにはいくつかの魔剣を。

エルフの少女、フィルヴィス・シャリアには——バトルスタイル戦闘型が不明なので割愛。

それぞれに合った武器を投げた『灰』は、アスファイ・アル・アンドロメダに地上で買った『万能者』ベルセウス印の道具袋アイテム・セットを投げた。

受け取ったアスファイは、自分が作って売った品が奇妙な出戻り方をした感覚に微妙な顔をするが、すぐに必要な物を取り出して装備し、『灰』と向き合う。

「……………本当に『灰』、なんですかね？」

「私は『灰』だ。問答の時間はない。三度は言わせるなよ」

「……………分かりました、信じます。その姿については——追求しないでおきましょうか」

「ああ。そうしてくれ」

苦笑し、空元気の軽口を叩いて、アスファイはまだ困惑している仲間に指示を出す。それを背に、メリル達のところへ戻った『灰』は。「態勢が整うまでそこにいろ」

《メイス》と《ウオーピック》を、ポックとポットの前に置き。

「準備が出来たら、共に来い」

凍てついた太陽のような瞳で小人族を見て、倒れた大岩を背に半円

を描く冒険者達の一角へ向かった。

引き摺る灰髪を補強したソウルで一気に拾い、纏め上げる。地面につかぬよう足元で一度、後頭部で二度折り畳んだ髪はそれでも長く、先端が足先に優に届く。

そのまとめた髪を、王冠を半分に分切ったような髪飾りで留める。後頭部を覆う髪飾りには白銀の石が嵌め込まれ、灰色の髪に静かに映えていた。

そして「灰」は、虚空に両手を沈ませる。『特別なソウルの領域』に封じられた『武器』。その内の二振りをも、「灰」は下界に顕現させた。

片方は十字槍の原型、戦神の武器。名を抹消された無名の王の《竜狩りの剣槍》。

片方は十字槍、神代の武器。四騎士の長、オーンスタインの名で知られる《竜狩りの槍》。

その二槍を「暗い魂」より引き出した「灰」は——背中で柄が交差するように左右へ構える。

魔法発動まで、残り1分。

食人花を阻んでいた溶岩溜まりが消え、防衛戦の大詰めが始まった。

雷を纏う槍を振るう。

火の時代の黎明期。古竜を討ち滅ぼすために振るわれた太陽の光の王グウインの大槍。それは太陽の光、すなわち雷であり、以降の竜狩りの武器は必ず雷の系譜にある。

故に打撃の通らない堅い外殻を持つ食人花に対し、「灰」の操る二槍は極めて相性が良く、空を斬る槍の残光すら食人花を両断するに十分な威力があった。

更に戦技【雷の追撃】と【落雷】。離れた敵にも有効な二つの戦技は『協力者』達への支援にこの上なく最適だ。

目に見える範囲ならば、《竜狩りの槍》から【雷の追撃】を放てばいい。十字槍の軌道の延長線上に奔る雷撃は何体もの食人花を貫きな

がら直進する。

目に見えぬ範囲ならば、《竜狩りの剣槍》を掲げればいい。【落雷】は敵の頭上に激しい雷撃を落とす戦技である故に、見なくともある程度の狙いをつければ十分だ。

そして負傷者が出れば槍を大地に突き刺し、聖鈴に持ち替え【放つ回復】を投げ、また槍を取ればいい。

それは冒険者達の戦いをかなりの精度で支えていた。この場で屋台骨になっているのは、間違いなく「灰」だった。

「うつそだろー……なんだよあれ」

戦いながらルルネが一言くらいなら無駄口を叩けるほどだ。半円陣形の一角で暴れ回る幼女を誰もが一度は見つて驚愕を刻む。

だが、この場で最も楽をしているのは、他でもない「灰」である。何故ならば幼女は既に、己の許容限界を最大まで発揮しているからだ。

能力を最大限使っているのに楽をしている、のではなく、「灰」は能力を最大限に使ってもこの程度しかできない。一人では決して千を超える食人花の相手など出来ず、数十数百の己を屍に変えて撤退するのがせいぜいだろう。

だから楽をしているのは「灰」だ。『協力者』がいてこそ幼女は自分の欠点を気にせず戦える。たった一人の旅路に比べれば、この状況のなんと楽な事か。目の前の食人花を削りながら「灰」は魔法発動を待った。

その時、レフイーヤの眼前の地面が裂け、無数の触手が飛び出した。魔力を溜めすぎたレフイーヤは動けない。だから「灰」は《竜狩りの槍》を捨て、《溶鉄剣》を投擲する。

集中力を流し込まれた火を吹く《溶鉄剣》は触手より遥かに速く飛来し、地面に刺さると同時に炎を噴き上げ触手を焼き尽くす。

それを流し目で確認した「灰」は、正面に向き直り、迫る食人花の顎門を見た。

「灰」は限界までリソースを使っていた。だから一手遅れると、次に対応出来なくなる。レフイーヤを助けた一手は想定外だった。だ

から「灰」は己を喰らおうとする食人花に対応出来ない。

だが——そんな事は、何の問題もないのだ。何故なら「灰」は、信頼している。

『協力者』たちを、「灰」は何よりも信頼している。だから問題は無い。

背中を任せた彼らなら——十分にこの危機から「灰」を救ってくれる。

「させつかよお!!」

「させないわ!!」

躍り出た二つの影、振るわれる二槌が「灰」を喰らわんとした食人花を吹き飛ばした。それを見逃す「灰」ではない。埋まった一手で食人花を斬り裂き、投げ捨てた槍を回収する。

「助かった。礼を言う」

「べつ、別に礼なんかいらねえよ! あんたみたいな何でも出来るヤツからなんてな!」

「そうか」

顔を赤らめて悪態をつくポツクに、ポットがクスクスと笑った。〃

「灰」はレフィーヤを確認し、改めて二槍を構える。

「もう少した、踏ん張るぞ。ポット・パツク、ポツク・パツク。」

「背中は任せる。——頼めるか?」

「——応!」

平坦な「灰」の言葉に、二人の小人族は強く応えた。半円を描く冒険者の輪に、三人の小人族が並び。

そして数十秒後。レフィーヤの詠唱は完了し、召喚された都市最強の魔道士の魔法が全ての食人花を焼き尽くした。

「……終わりか」

火炎の極柱が立ち昇り、食人花が業火に消えていく。防衛戦を超え、へたり込む冒険者達の中で「灰」だけは変わらず立っていた。視線の先はアイズと赤髪の女がいる。どうやらアイズの勝利で終わったようだ。観察していると——レヴィスはいつかの巨大花と同じように、食料庫の大支柱を叩き壊した。

途端、大空洞が悲鳴のような痛哭を上げ、次々と岩が落下してくる。
「……………帰るまでが『協力』、だったか？ はて、誰の言葉だったかな」

最後の最後にまだ逃走しなければならぬ事実には、
「灰」はふと、そんな言葉を思い出した。

「だから情けねえ犬人の手なんざいらねえつつつてんだろ！ 離しやがれツ」

「あーもーだれか助けてくれーっ！ 狼人の相手はもう嫌だーっ！」
崩れ落ちる食料庫から這う這うの体で脱出した一行は、へとへとになりながらも地上を指指そうとして、早速頓挫していた。

片足の砕けたベート・ローガが他人の手を借りる事を拒否したのである。仕方なくアイズが肩を貸そうとした横で、
「灰」はベートに『女神の祝福』を投げつけた。

「それを飲め、ベート・ローガ」

「アアツ!? しゃしゃり出てくんじゃねえぞ 灰 野郎ツ！」

「もう一度言う。それを飲め。それは致命傷だろうが生きていけば即時に全回復させる、私の持つ物で最も強力な回復薬だ。飲んでさっさと脚を治せ」

「なんで俺がためえの言う事なんざ聞かなきゃいけねえんだっ!」

「…………私は三度も同じ事は言わん。それを貴公は拒否すると言うのだな」

「そういつてんだろーがッ！」

「そうか。よく分かった。仕方あるまい」

面倒そうに息を吐き出す 灰 は、片足が砕けているのに意地で立つベートに接近する。顔を苛立ちで歪める狼人の足元に来た 灰 は、ベートが反応出来ない速度で襟首を掴み引き寄せた。

両者の額がぶつかり合い、瞠目するベートの灰色の眼と、暗い銀の半眼が互いを貫く。

「私の眼を見ろ、ベート・ローガ。」

私は『協力』をしている。そして『協力者』達は今、何よりも帰還を欲している。傷は私が治したが、気力と体力までが戻るわけではない。だから我々は一刻も早く地上に戻らねばならん。

だから今の、片脚が砕けた貴公のような、この場で最も遅い足手纏い、喧しいばかりの役立たずにかかずらっている暇などない。

私の言っている意味が分かるか？ ベート・ローガ」

「——ああ、よおく分かったぜ。喧嘩売ってんだなてめえツ……!!」

「灰」の真つ向からの罵倒に青筋を浮かべ、だがベートは寧猛に嗤った。そこにあるのは憤怒であり、また歓喜だ。「今の『灰』と戦えるのが嬉しくて仕方がないというように毛を逆立て、全身に力を漲らせるベートに——『灰』は密かに発動させた『湖の霧』を吹き掛ける。

「なアツ?!? てめ、『灰』野郎ツ……!!?」

ほぼ零距离で濃厚な眠りの霧を浴びせられたベートは、数秒も経たない内に意識を剥ぎ取られ、眠ってしまった。ガクリと脱力して倒れる狼 ウエアウルフ 人を支え、『女神の祝福』を回収した『灰』はぼそりと呟く。

「全く、手間のかかる……貴公ほどの異常耐性を抜くのにどれほどの フォーカス 集中力が必要な事か……」

「何を、したの……?」

「面倒だったので眠らせた。『協力』の自覚が無い者はこれだから困る」

「灰」にしては珍しく感情的になっている光景に——それでも大分薄いので「ぶんすこ」レベルの怒りや苛立ちであるが——アイズが驚いていると、『灰』はベートをお姫様だっこして『女神の祝福』をアイズに投げた。

「アイズ、使え。貴公も無傷ではあるまい」

「あ……うん、ありがとう……あの、アスカ」

「何だ?」

「『魔術』、以外にも……魔法、使えたんだね」

「ああ、そうだが」

「気になるな……」

「そうか」

「気になる、な……」

「そうか」

「——教、えて？」

「駄目だ」

素っ気ない拒否にガーン!!! とアイズは大変ショックを受ける。なぜなら少女は昔ロキに教えられた『誰が相手でも絶対胸キュンして何でも話しちやうポーズ』を実践していたのだ。

開いた両脚を内側に曲げ片手を膝に置き、お尻を後ろに突き出して前屈みになり、片目をつむりながら唇に指をつけて相手に向けて放すという——俗に言う『投げキッスのポーズ』であったのだが、無表情の上初の実践だったため、何をしているのか分からない奇怪なポーズになっていた。

悲しい事にこれでもアイズはひどい羞恥に苛まれながら勇気を振り絞った結果であり、秒も待たず袖にされたため心の中で小さな幼女アイズがさめざめと号泣していた。仮面巨人が周りをオロオロしながら何とか慰めようと、そつと匂い立つ何かを取り出そうとした瞬間、突然現れた謎のバケツ頭の太陽の戦士が仮面巨人を彼方までふっ飛ばした。なにこれ。

順調にソウルが「灰」に毒されている金の少女を放置して、「灰」はアスフィと向き合う。

「うるさいのは片付けた。さつきと地上に戻るとしよう。貴公も、この場に長く留まるのは得策でないと考えているだろう？ アスフィ・アル・アンドロメダ」

「え、ええ、それはそうなのですが……あの、「灰」？」

「何だ？」

「その、ザアナルガンド【凶狼】をそのように抱えるのは、止めておいた方が……」「ふむ……確かに、他派閥の私がこうするべきではないか。アイズ、済まないがベート・ローガを私と同じやり方で——」

「いやそのままで行きましょう！ さあ皆、移動の準備はいいですね!? 急ぎ出発しますよー!」

幼女にお姫様だっこされる【凶狼】と【劍姫】にお姫様だっこされる【凶狼】を想像して、アスフィはまだ前者の方が狼人の矜持を傷つけないと断定した。

正直どちらもアウトだと思うが、もはや何も言うまい。親切心から「灰」に申し出たアスフィは、どうかこの凄まじくシユールな光景が【凶狼】に知られませんかのように、と——主神が居たなら『あちゃー、すごいフラグ建てちゃったねー』と言いそうな事を願った。

「な、なあ、灰」

「何だ、ルルネ・ルーイ」

「あんた、本当に灰、何だよな？」

「そう言っているだろう」

「——いやいやいやいやおかしいだろう?! あんた私の二倍はあつたじゃんか! 身長違いすぎだろっ!」

「私のような小人は、時に自らを大きく見せたがるものだ。そも、あれは変装だと言っただろう。疑問はそれで解決しないか？」

「いやだからっ、あのバカデカい仮面鎧とあんたが結びつかないんだってば! そりゃあんな自信満々に変装って言い切るワケだよ!

もう訳分かんなくて頭がこんがらがってきたぞ!」

「はあ……なんか今日は冒険者依頼以上に灰に振り回された気分だ……」

「おいおい、気持ちは分かるがそう言うもんじゃないぞ、ルルネ。何せ某は直接命を助けられたからな! 色々とわだかまりはあるが、感謝の念が一番強い。」

「灰よ、貴殿のおかげでこうして生き延びられた。ありがとうよ。ところで、貴殿は美しいな……詩歌、作っていい?」

「礼は受け取ろう。詩歌は駄目だと言った筈だ」

「そりゃ残念」

「クスクス。ホセったら、美人を見かけたらいつもそうなんだから。貴方のそういうところ、酒場の給仕さんに結構白い目で見られてるわよ?」

「マジで!?!」

「あーあ、ポットがホセ以外知ってて言わなかった事言っちゃまいやがった」

「しようがないでしょ。私だって『灰』に言いたい事あるんだから。

ありがとうございます、『灰』。こうしてみんなと一緒にいられるのも、貴方が助けてくれたからです。本当に、本当にありがとう」

「……………」

「こら、ポック！ 貴方もちゃんとお礼を言うの！」

「痛ててっ!? 耳ひっぱんなよ姉ちゃん！」

「……………」あー、その、なんだ……………こつ、これは借りだからな！ いつかぜってー返すから、逃げんじゃねーぞ!?」

「おいポック、礼になっていないぞ」

「いや、こいつはひよつとして……………惚れたか？ ポック！」

「え!? なになにに、詳しく聞かせて頂戴な！」

「ばっつ!? ち、ちげーよ!? 変な勘違いすんじゃねーぞてめーらっ!?」

「隠さなくて良いでしょう!? どこ!? どこに惚れちゃったの!?!」

「違えっつってんだろおおおおおっつ!?!」

「……………礼は受け取るが……………訳の分からない事で盛り上がるな、貴公らは」

「すみません、『灰』。皆無事に帰れて嬉しいようなので……………どうかご容赦下さい」

移動中、そんな一幕を挟みながら。

激戦を潜り抜け疲れ切った彼らは、『大樹の迷宮』を抜け18階層に辿り着き、『リヴィラの街』に入る前に別れる事にした。

「貴公らの荷物を出来るだけ拾っておいた。返しておく」

「あの状況でそんな事までしてたのですか!?! いえ、回収して頂けたのは感謝しますが……………我々も武器を——」

「無手で地上に戻るつもりか？ 元よりくれてやるつもりで渡した物だ。返す必要はない」

「……………何から何までありがとうございます」

「気にするな。『協力者』は出来る限りの努力を払い生かすと私は決め

ている。それだけの事だ」

『器』からソウルを呼び出し、積み上がった荷物に「ヘルメス・ファミリア」の面々はどよめいた。そして「灰」は抱えていたベートをアイズに押し付け——結局幼女と【剣姫】二人にお姫様抱っこされる【凶狼】であつた——高く飛び、またたく間に見慣れた4 Mメドルの仮面巨人に変貌した事に面食らう。

「それでは、私はこれで失礼させて貰おう。貴公らは良い『協力者』だった。感謝する」

「それはこちらの台詞なのですが……野暮ですね。こちらこそ改めてお礼を言わせてください。今回は本当に助けられました。皆を代表して、貴方に精一杯の感謝を捧げます」

「受け取っておこう。ではな」

「灰」は変化なくそう言つて、がしやりがしやりと鎧を鳴らしながら去つていった。

見送つた「ヘルメス・ファミリア」は、アイズ達とも別れ『リヴィラの街』に入る。「灰」が回収した荷物からフードを取り出し、一行は『黄金の穴熊亭』を目指した。

「今回はマジでしんどかつたな」

「全くだ。ルルネ、これに懲りたら金につられて変な依頼受けるんじゃないぞ?」

「分かつた、分かつたよ! もー懲りた! こんなんじゃ命がいくつあつても足りないって!」

「んな事言つて、どーせまた大金積まれたらコロツと転がりそーだぜ」
「本当にそうなりそうな事言うなよキークス!」

「みんな元気ね……私は早く地上に帰つてお風呂に入りたいわ」

「同感。こんなボロボロになつちやつたし……明日一日は優雅にお休みしなきゃ割に合わないわね」

「そうね。みーんな装備なくしちゃつたもの。きっと明日は【ファミリア】の金庫が火の車ね」

「姉ちゃん、今そんな事言うの止めろよ。アスファイが頭抱えてんで……つーか装備で思い出したんだけどよ、この武器、結構な業物じゃ

ね？」

「ポックもそう思うか。俺の見立てだと第二等級武装、それも上位に位置する性能だぞ」

「マジかよ。そんな物ポンと渡すって……本当に何なんだろうな、
灰は」

「お、恋煩いか？ 惚れた女が気になるか？」

「違えつつってんだろっつ!!」

「まあまあ、そういう面倒な事は後で考えようじゃないか。せつかく皆で戻ってこれたんだ、まずはそれを祝おうぜ？ 『黄金の穴熊亭』についた事だしさ」

「某も賛成だ。——店主！ 取つといた酒、出してくれ！ きっちり15人分だ！」

「メリル、全部飲まなくても大丈夫だからね？」

「わ、分かってるよ！」

「全員行き渡ったかー？ さ、アスフィさんもどうぞ！」

「ありがとうございます、キークス。それでは、全員生きて帰れた事を祝して——乾杯！」

『乾杯!!』

『黄金の穴熊亭』にガラスのぶつかる音が連鎖する。

彼らが駿を担いだ酒は残った半分が注がれ、空の瓶が黄水晶の輝きを反射していた。

「……灰、ご苦労だった」

「ああ。フェルズはどこだ？」

「ここにいる。成果はあったか？」

「これだ。受け取れ」

『宝玉』……！ 【泥犬^{マドレ}】の報告では、奪われたと聞いていたが

「あれは贗物だ。『誘い頭蓋』に【擬態】をかけたものを分かりやすく袋に吊るしておいた。」

期待はしていなかったがな。どうやら贗物を掴まされた事か、蟲に

たかられた苛立ちのせいか、気付いたその場で叩き壊してくれたらしい。

おかげで敵の足取りを、ソウルの残り香で感知できた。

少なくとも私が戦った敵は——18階層の外側に逃げていた」

「18階層の、外側……？ ——まさか!？」

「ダンジョンのもう一つの『出入り口』……私の感覚が正しければ、これは相当に根が深いぞ」

「なんて事だ……想像すらも出来ない何かがあるというのか……？」

イヴァイルス 闇派閥の残党の事もある。対策を考えなくては……」

「ああ、それなんだがな。イヴァイルス 闇派閥の死兵、残党どもの主神は既に把握している。——タナトスだ」

「何だって!?! いや、何故分かる!?!」

「殺せば分かる。ソウルはそれに応じた多くの事を、私に教えてくれる」

「そ、それは……!?!」

「——むう」

よんきょ 四炬の松明が燃える『祈祷の間』。

老神の見下ろす愚者の前で、不死は己の手に、ソウルの光を揺らめかせた。

ブルーフレイム

ロンドール黒教会が追放者に贈る直剣

剣でありながら魔法の触媒となる

かつて死の冒読者たちが用いた直剣であり

黒教会では皮肉と嘲笑の意味合いを持つ
不死こそを人とする Rondol を追われ
亡者に無縁の死にすら許されない
追放者に相応しい、呪われた象徴だ

戦技は「高速詠唱」

攻撃と同時に魔術を使用する

高い技量を求められる技であり

半可な魔術師では扱えもしないだろう

小王の大剣

深淵に墮落した四人の公王の剣

刀身は闇に蝕まれ、ひどく朽ち果て歪んでいる

かつて小 Rondol の偉大な指導者であった公王たちは

出っ歯の蛇に唆され、人知れぬ深淵を覗き込んだ

自らの愚かさを悟った彼らは抗ったが

誘いに敗れ、ダークレイスの始祖となった

密やかに広がり続ける闇の中で

公王たちは、何に見えたのだろうか

戦技は「闇の追撃」

構えからの通常攻撃で、追尾する闇の破片を放ち

強攻撃で目標を執拗に追う闇の刃を撃つ

噴火

混沌の魔女クラッグの呪術

炎を蓄え、強い衝撃波として解き放つ

硬い外殻と棘の半身から放たれる炎は

彼女が失った炎の魔術を模している

それは混沌に消えたかつてへの懐郷か

あるいは怒りだったのか

それを知る者は、もういない

叫ぶ混沌

デーモンの王子が最後に灯した炎

咆哮をあげ、混沌の熱線を放つ呪術

混沌の炎は岩を溶かし

熱線跡には一時的溶岩溜りが生まれる

デーモンにとって、それは吊いの咆哮だった

湖の霧

故も知らぬ古い時代

混沌の炎の熾る、その前からあった呪術

深い眠りの霧を発生させる

古くより眠りとは断絶の湖であり

古竜のみが知る永遠の業であった

やがて火の時代が訪れ

古竜の生き残りの一つがこの呪術を扱い

一度を神に、二度を自らに振るったという

輝く闇の奔流

輪の都の放浪者、吹き溜まりのギリアの闇術

闇喰らいの息、人間性のブレスを放つ

闇術の祖とされるギリアは放浪の末

闇の魂の封じられた地、輪の都に辿り着いた

そして闇喰らいに見え、深淵の禁忌に触れたのだ

イヴィルスのソウル

闇派閥、イヴィルスの眷族のソウル

死の神タナトスの眷族である彼らは

死後の進路を約束された死兵である
愛する者との再会を願い、死の神に殉じ
だが魂は、天に還らなかつた
これはもはや、ただの主なきソウルだ
神に託すこともできるが
使用すればソウルを得られるだろう

原作三卷分

酔うてしがなき灰色の鳥よ

『ダイダロス通り』最奥、『故も知らぬ小部屋』。

煙のない篝火が灯る小さな一室で、リリルカはじっと待っていた。現在の時刻は昼に差し掛かった頃。外では貧民達の生活音が遠く聞こえ、『ダイダロス通り』を出れば世界の中心と称されるオラリオの活気を肌で感じられる時間だ。

リリルカも普段なら、サポーターとしてダンジョンに籠っている。しかし今は篝火を見ながら、息を詰めて待ち人を待っていた。

「——ついでぞ。ここだ」

「や、やっとなついた……アスカさんの部屋がこんな入り組んだ所にあるなんて思わなかったよ……」

「貴公が世話になるとすれば、何らかの形で本拠ホームを失った時くらいだろうからな。今回の件がなければ、教えるつもりもなかった場所だ」扉の向こうから男女二人の声がする。ややあつて重い扉を開けたのは、闇に浸したような長衣のアスカと普段着のベルだった。

「あつ、リリ！ もう来てたんだ！ 遅れちゃってごめん！」

「謝らないで下さい、ベル様。わざわざここへ来てくださるよう頼んだのはリリなんですから。むしろ——ベル様が来てくれて、リリは嬉しく思っています」

丁寧に頭を下げてリリは儂げに笑う。いつもと少し違う少女の笑みに少年は少し顔を赤くして、照れくさそうに頭を掻いた。

「そう？ なら良いんだけど……あ、篝火。それにこの剣、ひよつとしてアスカさんが置いたもの？」

「そうだ。篝火は私にとって特別な意味を持つ。貴公もよく見ているだろう」

「よく見てるっていうか、本拠ホームじゃお世話になりっぱなしというか……ねえ、少し暖まってもいいかな？」

「構わんが、後にしろ」

「うん、そうするよ。それで、リリ。大事な話があるって聞いて来たんだけど……」

「それは——」

新雪のような真つ更な笑顔で尋ねるベルに、リリルカは顔を伏せて目配せをする。栗色の視線を受け取ったアスカは、こくりと頷いて部屋の外に向かった。

「ベル。私は席を外す。リリルカは貴公と二人だけで話したいそう
だ」

「そうなの？」

「ああ。私は案内をしたただけだ。この後、所用も入っている。帰りはリリルカと一緒に出るか、私が戻るまで此処で待っていたまえ」

「うん、分かった。いつてらっしやい、アスカさん」

「ああ。ではな」

朗らかに笑って小さく手を振るベルに少し微笑んで、アスカは外出した。残されたベルはリリルカの勧めに従って、向き合う形で円卓に座る。

「それでリリ、話って何かな？ 相談とかなら、あんまり力になれないかもしれないけど、僕に出来る事なら何でも言ってみよう。リリにはいつもお世話になってるから」

「……ベル様は本当にお優しいんですね。ちよつとでも気を抜くと、その優しさにリリは溺れそうになっちゃいます。」

でも、そういう訳にはいきません。リリは今日、ベル様に本当のリリを知ってほしいんです」

「本当の、リリ？」

「はい、そうです。リリがどうしてベル様とパーティを組みたがったのか。どうして他の冒険者様に追いかけられていたのか。リリが本当は何をしていて、何を目的としていたのか。」

建前じゃない、本当の事を話したいんです。ベル様に、本当のリリを知ってほしいんです。

………勿論、ベル様が嫌だとおっしゃるなら、お話ししません。今日の事はなかった事にしてください。リリは——ベル様に嫌だと

言ってほしいと、思っています」

「……………」

自分の胸元を掴んで、けれどリリルカは真っ直ぐベルと向き合った。震える手、期待や恐怖、諦念、様々な感情が内在した瞳。臆病が垣間見えるリリの固い表情にベルは少し驚いて、すぐに自分の姿勢を正した。

「リリ。リリは僕に、本当のリリを知ってほしくない？」

「……分かりません。最近のリリは、自分で自分の事が分からないんです。だから、逃げ出したい。今のリリを見つめるのが怖いんです。

でもリリは、リリのために見なくちゃいけない。自分の事も——ベル様の事も。

……これは、リリの勝手なわがままです。ベル様には何の得もありません。ですから、嫌なら嫌と言って下さい。本当のベル様で、リリと向き合ってください。

リリは、そう、思っています」

少しだけ躊躇しながら、けれどリリルカは確かに言った。少年の方から拒否しない限り、絶対に目をそらさないと決めていた。

その瞳を受け止めて、ベルは——にっこりと、あの笑顔で笑った。

「大丈夫だよ、リリ。僕は義理だとか、いやいやだとか、そんな風に思っていない。

僕はいつもリリに助けられてばかりだから。リリがいなくちゃ、僕に出来なかった事はいっぱいあるから。

だから僕も、リリの力になりたいんだ。リリに助けてもらったみたい——今度は僕が助ける番だって、そう思うんだ。

それに言ったでしょ？ リリの事、放っておけないって。今も、上手く言葉にはできないけど……きっとリリだから、助けたいんだって思う」

「——」

その笑顔と言葉は、リリルカの心を焼くものだ。

荒んで、乾いた風しか吹かなかった彼女の心を、温かいもので満たしてくれる。灰色の影がちらついても、それも気にならないくらい

に。

「……………ありがとうございます、ベル様」

叶うなら、ずっとこの心を抱いていたい。リリルカは本心からそう願う自分と見つめ合い。

「じゃあ、お話ししますね。——リリが、どれだけ悪い小人族バルウムなのか」
現実ではなく、理想を追って。リリルカは一步を踏み出した。

アスカが、リリルカを取り巻く悪意を殺害したあの日。

アスカはリリルカにこう問い掛けた。

「貴公、ベル・クラネルに惹かれているのではないか？」

古鐘のような掠れた声は、確かにリリルカの心を示していた。それに半ば驚き、けれど知られていても不思議ではないとリリルカは納得し、首肯する。

「ええ、その通りです。リリはベル様に惹かれています。何故かは、リリにも分かりませんが」

「ならば貴公に提案だ。【ヘステイア・ファミリア】に改宗コンバージョンしないか？」

「……………本当に、アスカ様は突拍子がないですね。どうしてそうお考えになったんです？」

心ない本のように会話の筋だけを進める。感情を見せてもしようがないからだ。

アスカは言葉を飾らない。真実だけを少女は口にする。だからと言って正直ではないし、むしろ堂々と逆手に取ってくるが——それが本心である事は、誰にも否定出来はしない。

心希薄うすく、酷薄うすであろうとも、それはアスカの真実である。ソウルの渦巻く暗い瞳は、言葉の嘘を許さない。

だからアスカの提案は本気だ。程度はどうあれ、アスカは本当にリリルカを改宗コンバージョンさせたいのだろう。

これまでの経験からそう断定するリリルカは、まず話の聞き取りを優先した。心の内を曝け出すのは、それからでも遅くはないと。

それを見透かす不死の少女は、ゆつくりと古鐘の声を擦り鳴らした。

「この提案は元より貴公にするつもりだった。貴公が受け入れるかどうかは別としてな。」

勝算はなかった。私が満たしたのは貴公の金銭欲のみだ。それ以外の、貴公が奥底に押し留めていたものは考慮せず、むしろ無造作に踏み荒らしたと自認している」

「……………ええ、本当にそうですね。おかげでリリは心に傷を負ってしまいました。」

けれど、それがどうしたと言うんです？ アスカ様はそんな事、どうでもいいと考えるお方でしよう？」

「そうだな。私にとつては些事に過ぎない。この提案も貴公が身を引く寸前に行くつもりだった。無謀ではあるが、やってみなければ分からないからな。」

だが今は違う。貴公はベルに惹かれている。そうであるならば、コンバージョン改宗の可能性も現実味を帯びる。

ベル・クラネルはリリルカ・アーデを望んでいる。故に私は貴公を引き止める。ベルの家族として、まともな人のように、真つ当なやり方でな。

だから貴公が去るのなら追わない。『敵対者』にならなければ害する事もない。

私と貴公は対等だ。故にリリルカ・アーデ——これは貴公が選ばねばならんのだ」

「……………」

凍てついた太陽の瞳からそつと目を伏せて、リリルカは膝の拳を握り込む。栗色の瞳を閉じて思案し、数秒後。

リリルカはアスカを見据え、はつきりと言い放った。

「お断りします」

「そうか。貴公はベルを信じ切れないか」

「はい。私はベル様を信じられません」

理由を見抜くアスカに物怖じせず、リリルカは己の心を吐露し続け

る。

「言葉だけならいくらでも偽れます。笑顔なんて本物の保証なんかどこにもありません。」

リリはずつと騙してきました。調子の良い言葉で、媚び諂った笑顔で、憎い憎い冒険者様を散々騙してきました。

ウソの味をリリはよく知っています。偽者である事の心強さを、弱っちいリリは身に染みて分かっています。

だから……だから、ベル様の暖かい笑顔が、リリの心から消えなかつたとしても。それを疑う限り、リリはベル様の側には居られませんが。

……居ては、いけないんです……信じられないのに、一緒に居たいだなんて……そんなわがまま、リリは……」

自分の胸を両手で押さえ、血を吐くようにリリルカは言った。それは誰からも救われず、世界の悪意に打ちのめされた彼女の、あるいは初めて口にした本心だった。

それを永きに渡って人を見続けてきた不死はこう見る。リリルカはベルを信じ切れないと同時に、自分の業が許せない。

降って湧いた己の希望。それに縋りたい、信じたいと思いながら、いざ汚れた自分がそれを掴み、穢してしまつたら。自分のために暖かな光を曇らせてしまつたら——そう思うからこそ、リリルカはアスカの提案を受け入れられない。

罪に身を窺すしかなかった、小人のありふれた罪悪感だ。それを取り払う言葉などアスカは持ち合わせていない。当然だ、狂王たる「灰」は聖職者では無き故に。

だが、自らを知らしめる事は出来る。本質的に正しく、真つ当さ故に罪に苦しむのであれば——目の前にいる灰髪の小人族が、リリルカ以上に汚らしい塵芥だと教えれば良い。

「私の眼をしろ、リリルカ・アーデ」

銀の半眼が暗く輝く。ソウルの荒立つ双眸をリリルカは見つめ、魅入られる。

言の葉の真実を叩き込む瞳。それがアスカの、「灰」と呼ばれた不

死の悪性を晒していた。

「私は人殺しだ。数え切れぬ程の人を殺してきた。

私は人喰いだ。ソウルに飢え、時に死肉すらも噛み飲み干した。

私は人でなしだ。我欲のために仇も友もこの手にかけた。

死体から剥いだ身ぐるみばかりが、私の持つ武装のほとんどだ。装具欲しさに狩り殺した敵の数は夥おびただしい。

奪う事も、殺す事も、私にとっては手段でしかない。人の世に馴染まず、馴染もうともせず、放浪し時代を啜り尽くす者が私だ。

人の世界において、私は呪われた化け物である。人の世界の怪物、火の時代の蚕食者。それが私だ。

その私でも、ベルの側に居られる。そうである事を、ベル・クラネルは許すだろう。

それでも貴公、リリルカ・アーデ。自らの罪に苛まれ、願いの成就を望まないのか。

ずっと最後、貴公の息が絶えるまで、暗い日陰で生き続けたいか。そうであるのなら、止めはしない。貴公の現実がそうであれば、私からはもう何も言わん。願望を捨て、我らに背を向け——暗い現実を這い続けるがいい」

「……………そんなの、嫌です」

銀の瞳のソウルに冒され、リリルカは無意識に涙を流しながら叫ぶ。

「でも、じゃあ、リリはどうしたらいいんですか!? ベル様を信じた、でも信じられない! アスカ様のようにあの人の側に居たいのに、リリにはその資格がない!

嘘っぱちで、弱っちくて、何も信じられなくて、役立たずで、そのくせワガママで……………! こんなリリの事を受け入れてくれるわけ、ないじゃないですか……………!

それが現実だって、リリは……………リリは知るしか、なかったのに……………」
リリルカ・アーデの人生は暗い。

悪意に苛まれ、痛みを抱え、一度は逃れても再び突き放され、絶望に落ちた。

希望が見えても、それが彼女を救う事はない。それが『現実』だと思いきらされてきたリリルカには、自らに燻ぶる願いを選べない。

それを瞳を通し、ソウルから読み取るアスカは——面倒そうに鼻を鳴らしてリリルカの『現実』を否定した。

「それは違うな、リリルカ・アーデ」

「え……？」

「貴公は既に選んでいる。ここに在るのがその証左だ。

貴公が本当に現実を見ているのなら、私と対話する事はない。

必要ならば奪い、邪魔であるならば殺す。それが私だと貴公は知っている筈だ。選ぶ前の貴公であれば、その『現実』から逃げる選択肢も容易く取れていただろう。

だが、貴公は選んだ。ベルを魔剣で助けた時から——ベルにただのリリルカ・アーデを救ってくれるのかと口にした時から。

自覚がないだけだ。貴公は現実など見ていない。表面をいくら贗物で取り繕おうとも、その時が来れば貴公は命を投げ出すだろう。

貴公が誰であれ助けると約束した、他ならぬベル・クラネルのため
に」

「……………」

リリルカは否定出来なかった。アスカの言葉に嘘はなく、暗い銀の瞳が映した自身の行動はとっくに打算だけではなかったと認めるしかなかった。

それでもなお、少女は動けない。その理由を端から察していたアスカは、やはり面倒そうに頬杖をついてリリルカの望みを口にした。

「……要は、保証が欲しいのだろう？　ベルが言葉だけでなく、本当に貴公を守るその時まで。あるいはベルが貴公を受け入れなかった時、全てを元に戻すという保証を貴公は求めている」

「……それを、アスカ様が担うというんですか？」

「そうだ。もはや私に貴公は害せない。他ならぬベルがそれを望まない。だから貴公が全てを捨てたくなかったのであれば、私に言え。

貴公がそれを望むのなら、全ての縁を断ち切り、オラリオの外に住処を与えてやる。それくらいならば、私にもできる」

「……………」

表情に影を落としてリリルカは沈黙する。長い時間をかけ、視線を床に落としていた少女は。

顔を上げた時、危うくも確かな決意を栗色の瞳に秘めていた。

「——一度、ベル様と話させてください。お返事はその後にお返しします」

「……以上が、リリの行った全てになります」

リリルカは全てを話した。

ヘステイア・ナイフを盗んだ事。そのためにベルに近づいた事。探索の分け前を掠め取り、必要ならいつでも切り捨てようとした事。

それ以前の、リリルカが冒険者相手にやった悪行も全て話した。リリルカはどこか心が軽くなったように感じながら、俯いて少年の沙汰を待つ。

きつと許されないだろう。擦り切れた自分が鼻で笑って嘲っていた。

どうか、それでも受け入れて欲しい。理想を求める自分が静かに祈っていた。

沈黙が場を支配する。影が炎に揺らめき続け、篝火が何度か火を散らし——リリルカはそつと、ベルに抱き締められた。

「リリ。僕はリリと一緒にいるよ」

「あ——」

リリルカの小さな体に少年の温もりが伝わる。ベルは深紅ルベライトの瞳に優しさを灯して、子守唄のように語りかけた。

「リリのした事は許されないかもしれない。それでも僕は一緒にいるよ」

ベルはこれが正しい事なのか分からない。

だから、自分がされてきた事を返そうと思った。

自分を受け入れてくれたヘステイアのように——ずっと傍にいてくれたアスカのように。

こんなにも寂しそうな少女を見捨てる事だけは、絶対に間違っていると思ったから。

「リリの事、助けてあげたいんだ。リリが僕を助けてくれたみたい……」

「……うっ、えぐっ……」

リリルカは静かに泣いた。泣きながら、少年の胸に顔を埋める。

ベルは目を閉じ、優しく微笑んで受け入れた。

篝火の灯る、誰も知らぬ部屋での一幕。

それは未来に飾られる事のない、少年と少女の物語だ。

——それでは、語られる事のない、暗い物語を始めよう。

『ダイダロス通り』の近くには【ソーマ・ファミリア】の酒蔵がある。

ソーマ
神酒に憑かれた冒険者らしく、ホームより余程嚴重に警備されている酒蔵の上階では、主神であるソーマが黙々と作業を続けていた。

薄汚れたローブを纏う長髪の男神の背後には【ソーマ・ファミリア】の団長であるザニス・ルストラが形ばかりの礼儀を繕って立っている。

「ソーマ様、以上が本日の報告になります。【ファミリア】の運営はこのザニスにお任せ頂ければ、何の問題もありません」

「……………」

理知人を気取り、内心の嘲りを隠せない歪んだ笑みで主神を見るザニスにソーマは反応しない。乳棒を擦り動かし、酒を造る事だけに没頭している。

それが【ソーマ・ファミリア】の日常であり、ザニスが欲望の限りを尽くせる理由だった。

一人の不死が、その場に足を踏み入れるまでは。

「ほう、丁度良い。団長と主神が揃っているとはな」

「ん？」

ギイツ、と扉の開く音にザニスが不審げに振り返る。

そこにいたのはやたら髪の高い幼女と、大きな荷物を背負った見覚

えのある小人族^{バルウム}だった。

「なんだ、アーデか。そのガキは誰だ？　ここは部外者立ち入り禁止だと、言わずとも分かっているだろう」

「……………」

「ふん、まあいい。それで何の用だ？」

灰髪の幼女をザニスは訝しんだが、やたら印象の薄い小人族^{バルウム}などすぐに捨て置いた。そしてたつぷりと嘲りを含んだ目でリリルカを見遣る。

だがリリルカはザニスの言葉を無視してソーマの元へ向かった。ザニスはピクリと頬を顰め、しかしすぐに目的を察して面白そうに事態を見守る。

ソーマの近くに寄った少女は荷物を床に置き、大きく広げる。

そこには大量のヴァリス金貨と宝石が山となっていた。

「お願い致します、ソーマ様。リリの退団を認めてください」

そう呟く少女の目には、この時はまだ、怯えがあった。

「……………本当について来る気なんですか？」

「ああ。少しばかり、気にかかる事がある」

少し前、不安気なりリルカの問い掛けにアスカは遠い酒蔵を眺めながら答えた。

多くの「ソーマ・ファミリア」団員が嚴重に警備するあの場所に、これから彼女らは侵入する。

それについては問題ない。

【音無し】【見えない体】《霧の指輪》《静かに眠る竜印の指輪》。

アスカの魔法と指輪を用いれば密偵の真似事など容易い。それが詐欺師と不死ならば尚更だ。

リリルカが懸念しているのは、アスカが同行する事そのものだった。

「脱退金の用意はあります。ソーマ様がこちらにいらつしやるのも事前に把握していますし、アスカ様まで来る必要はないと思うのですが

……」

「万が一もある。私は貴公を守らねばならない。ならば行動を共にする必要もあるだろう」

「……そうですか。でしたらリリはもう何も言いません。好きにしてください」

有無を言わせぬ物言いにリリルカは諦めた。何が何でもついて来る気配がありありと漂っていたからだ。

正直勘弁してほしいとリリルカは思っていた。

護衛としては頼もしいが、それ以上に厄介事を引き起こすのがアスカという小人族バルウムなのだから。

改コンバーション 宗が何事もなく終わる事をリリルカは祈っていた。

「なるほど、なるほど。1000万ヴァリスといったところか。大したものだ、まさかお前にこれだけの大金を用意できるとはな」

「……………」

「おやおや、無視と来たか。この私を無視するなど随分と態度が大きくなったものだなあ、アーデ？」

身の程を弁えてこそこそと鼠のように生きるお前はどこへ行ったのやら」

大袈裟な仕草で闊歩するザニスを一瞬睨んで、リリルカは焦燥や恐れが緋い交ぜになった顔を地に伏せる。

「ご無礼を働いた事は謝ります、ザニス様。その上でどうか、リリの用件をソーマ様に取り次いでいただけませんか」

「くつくつくつ、いいだろう」

眼鏡の位置を直す傍ら、嫌らしい笑みを浮かべるザニスは大仰にソーマへ礼を取る。

「ソーマ様、こちらのアーデが脱退金まで用意して我らが【ファミリア】を抜きたいそうです。苦楽を共にした仲間が消えるなど何とも心苦しい話ですが、アーデのさもしい努力を無下には出来ませんまい。

つきましては退団を認めようと思いますが、如何でしょうか？」

「……任せる」

「だ、そうだ。良かったな、アーデ」

振り向きもせず答えたソーマの言葉にリリルカは内心飛び上がり
そんな程色めき立つ。

抜けられる。「ソーマ・ファミリア」を、リリルカを虐げるだけだつ
た世界げんじつの象徴から開放される。

それをどれほど待ち望んだ事か。あまりにとんとん拍子に進んだ
退団にリリルカは思わず顔を上げた。上げてしまった。

絶望の底で希望を垣間見たようなりリルカの顔を、ニヤリと口元を
歪めたザニスが嘲笑うように見ていた。

その瞬間、沸き立つような不安に襲われたリリルカを見ながら、ザ
ニスは芝居がかった動きで天を仰ぐ。

「ああ、しかし、しかしだアーデ。お前の脱退金には確かに届いている
が——足りない」

「……は？」

「足りないんだよお、アーデえ。お前自身の脱退金はあつても、お前の
親が作った借金の返済にはまるで届いてないんだ」

「じゃ、借金っ!？」

予想外の台詞にリリルカはがばりと体を起こす。

そんな、ありえない。そんな筈はない!

あの神酒ソーマに囚われ死んでいった両親に借金があったとして、それを
今までリリルカに押し付けなかった道理なんて「ソーマ・ファミリア」
にあるわけがない!

言外にそう語るリリルカを心底楽しげにザニスは笑い、滔々と理由
を並べ立てる。

「お前の親が死んだのは三つの頃だったか? どうでもいいが、当時
物乞いでしか生きられなかったお前に借金を押し付けるのはあまり
に哀れだ。だから皆、お前から借金の取り立てをしなかったんだ」

「そ、そんな訳ありません!? 冒険者あなたがたがそんな気を使うなんてありえ
ないっ!!」

「おいおい、我々の善意を疑うのか? 悲しいなあ、アーデ。だが、こ

れは事実だ。覆しようもなくお前の親は借金を負っていた。

そう……同じ「ファミリア」である我々にな」

「……!?!」

その言葉の意味を理解し、リリルカは顔を蒼白にした。

神酒^{ソーマ}を求め金に飢えた獣共から金を借りていた——それが真実かどうかなど関係ない。

ザニス^{ソーマ}は認めたのだ。リリルカは「ソーマ・ファミリア」が食い物にできる、立派な金蔓であると。

「借金の額は2000万ヴァリス。なあに、脱退金を集め切ったお前なら十分稼げる額だ。それを用意できたら、正式に退団を認めよう」
「にせつ……!?! そんな、そんな大金、リリにはっ……!?!」

「いいやできる、できるはずだ。今ここにある金がそれを証明している。信じているぞお、アーデ？ なんなら協力してやってもいい。同じ「ファミリア」として、なあ？」

「っ……!?! ザニス、様……!!」

逃がすつもりはない。獲物を見つけた蛇のような絡みつく視線がリリルカを縛り付ける。

恐慌、絶望——そして、憎悪。目まぐるしく変化したりリリルカの感情は、ベル達と出会う前の荒み切った”灰かぶり”のそれとなり、淀んだ栗色の目となってザニスを睨みつけた。

それを心地良さそうに受けるザニスは、ニイイツと顔を醜く歪める。

「ああ、その目だ、アーデ！ お前のその目が見たかった！ つまらない希望など捨ててしまえ！

薄汚いお前には、この世の全てを恨んでいるようなその目がお似合いだ！」

醜怪^{しゆうかい}な形相で笑うザニスにリリルカは何も言えなかつた。代わりに何も出来ない自分への罰のように爪が食い込むまで拳を握る。

そうして高笑いするザニスと踞るリリルカの間に——ドンツ！と大量の袋が突如現れた。

「ん？ 何だこれは？」

「——2000万ヴアリス」

「何だと？」

「2000万ヴアリスだと言っている。貴公がリリルカに示した借金、その全額だ」

何もない空間に物体が出現する事象に対するザニスの反応は薄い。目の前の袋にも、いつの間にか寄ってきた灰髪の小人族バルウムにも碌に警戒しないザニスは、やっと「灰」へ認識を向ける。

「お前は……ああ、アーデが連れてきたガキか。まだ居たとは気付かなかった。

あー、それで……2000万ヴアリスだと？ まさかこの袋の山がそうだと言うのか？」

疑念を向けるザニスに「灰」は無言で袋を押しした。積み重なっていた袋の上部が倒れ、袋口から大量のヴアリス金貨が流れ出る。

残った袋も開けてヴアリス金貨を見せつける「灰」に、ザニスはようやく、最初にするべき質問を口にした。

「……誰だお前は」

「名前はない。ただ「灰」と呼ばれている」

呟く「灰」の存在感は薄く。

霧のようにそこに立つ「灰」の後ろで、文字通りの霧が立ち込み始めていた。

ザニス・ルストラにとって【ソーマ・ファミリア】は理想的だ。

主神は【ファミリア】に関心がなく、自らが頂点であり、団員を自由に動かせる神酒さけがある。

この世のありとあらゆる快楽を食りたいと願うザニスからすればこれ以上のない組織だ。たとえ神酒ソーマに狂い死んでいく団員がいろいろと、彼らの下で踏み躪られる弱者がいようと関係はない。

全ては己の食い物になるか否か。必然、格下ばかりを食らう下種が完成する。

理知人を気取る【ソーマ・ファミリア】団長は、その仮面で隠し切

れない醜悪な外道だった。

「……「灰」……「灰」ねえ」

そのザニスをして、目の前の小人族パルウムは測りかねる存在だ。

まずもって存在が薄い。身長の低い小人族パルウムだからどうという話ではなく、そもそもが陽炎のように意識が向かない。純粹に興味がないと言おうべきだろう。

おそらくは歯牙にもかけられない格下だから、と早々に結論を下したザニスは、それよりも眼前に積まれたヴアリス金貨に目を向けた。

「黄金の輝きは魔性だ。価値の有る無しに関わらず、見る者全てを引き込んでいく。適当に一枚取り、その輝きが本物であると確かめたザニスは、金貨を手で弄びながら「灰」を見た。

「聞かん名だが、ま、それは置いておこう。それよりもなぜ、これ程の大金をここに出した？」

まさかアーデの借金を肩代わりしよう、なんて事はあるまい？」

「その通りだ。私はリリルカの借金を精算するために金を出した」

「なぜだ？」

「リリルカ・アーデを改コンバージョン宗させるためだ」

「……ほう」

改コンバージョン宗。その言葉を聞いてザニスの目が変わった。見知らぬ物を

観察する目から爬虫類のように細く、獲物を見る目に。

「何を言い出すかと思えば改コンバージョン宗とは……その意味が分かって言っているのか？」

「勿論だ。私はリリルカ・アーデを引き抜きたい」

「ふはははははっ！ わざわざアーデを引き抜くために2000万ヴアリスを支払うと？ お前がどのようなガキで、どんな「ファミリー」に所属しているかも知らないというのには？」

やれやれ、全く呆れ果てる。そんな得体の知れない奴に大切な団員を売れるわけがないだろう」

「では、何が必要だ」

眉一つ動かさない「灰」にザニスは頬を歪める。確かによく分かつら、格下に見える得体の知れない女だが……どうやら金だけは持つ

ているらしい。

そして何よりも、こちら側の臭いを感じ取ったザニスは、大仰な動きで条件を示した。

「そうさなあ、差し当たっては保証金か。アーデが引き抜かれる損害、コンバージョン改宗後に契約を反故しないための前金、後ろ暗い取引に関わる我々の危険……リスク占めて3000万ヴァリスといった所だろう」

「分かった。この場で支払おう」

言うや否や、ザニスの前にある金貨の山が倍以上に膨れ上がる。ジャラジャラと金属音を上げながら山なりに崩れる黄金の光にザニスは下卑た大笑を響かせた。

「ふははははははははははっ!? おいおいアーデえ、一体どこでこいつを見つけてきた!?

明らかにヤバい事に関わっているガキだ! お前本当にこいつのいる派閥に改宗はいるつもりか!」

「アスカ様……」

ザニスの話を半ば聞き流すリルカは呆然と眩く。

危険なのは承知の上だ。アスカという存在がどれほど恐ろしいのかりルカは重々分かっている。

だがそれを何故、ザニスは分からないのだろう。こうして守られている今でさえ、アスカからは巨大な老木のような力を感じるというのに。

何か見え方が違うのか。リルカの瞳に映る小人族バルサムとザニスが嘲笑う「灰」には決定的な差異があるように思えた。

燃え上がる火の届かざる彼方に潜む、影か、あるいは尽きぬ闇のよう。

「くはっ、くははっ! ああ、構わんとも! お前がどこの誰だろうと金を払うなら構わない!

アーデの退団を認めようじゃないか! どこへなりとも連れて行くがいい!」

両手を広げザニスは笑い続ける。黄金の魔性に囚われた男は眩んだ目でしか「灰」を見れない。

獲物、食い物、吸い続けられる金蔓。大金を軽く支払える無名の弱者など何処に繋がっているか分かったものではないが、同程度の取引ならザニスは既にやっている。

たうえこのガキが闇派閥イザイルスだろうと金が尽きぬ限りは繋がろうではないか。リリルカの利用価値を天秤にかけても「灰」に傾いたザニスは、更に欲望で顔を歪ませた。

まだ出せるのなら、骨の髄まで搾り取る。もっと甘い汁を啜ろうと哄笑混じりの言葉を吐き出す。

「だがそれは更に5000万ヴアリス支払ってからだ！ アーデの親の借金に利子は加算してなかったからなあ！ それも払って貰わねば貸した我々の立つ瀬がない！

さあ、ガキいゝ！ 払って貰うぞお、アーデが欲しければなあ！」
そう。ザニスは言葉を吐き出してしまった。

リリルカに示した両親の借金。「灰」に求めた多額の保証金。それに続く、借金の利子という「三度目」の要求を、ザニス・ルストラは口にした。

「……そうか。分かった。三度目だ」

「なに——ぐげえっつ!？」
瞬間、ザニスは床に叩きつけられる。

灰色の残影をおいてザニスの首を締め上げた、「灰」の逸した力によつて。

「なっ、ぐっ、ぐええっ!？」

「私は三度も、同じ事はしない。貴公は三度、私に要求した。

十分だ。ここからは、力尽くで行かせて貰おう」

「何を、言つて……!？」

自らの喉に食らいつく腕を掴みながら、ザニスは反射的に「灰」を蹴る。

床に叩きつけられた仰向けの姿勢、自由に動くのは両足しかない。空気を裂いて振るわれる男の足は、本来なら簡単に「灰」を吹き飛ばせる筈だった。

「な、なぜだっ……!？」

だが、それは叶わない。ザニスより遙かに小さいガキなのに、巖の如く動かない。蹴り上げようと殴りつけようと、〃灰〃は一切動じずザニスを床に拘束し続けた。

「馬鹿なっ!?! 俺はっ、L.V.2だぞっ!?!」

ザニスはがむしやらに抵抗したが、一つの成果も得られなかった。そんな筈はないと抵抗を続けても、現実は何も変わらない。

(なぜだっ!?! こいつは明らかにひ弱なガキだったはずなのに……!?!)

ザニスはずれた眼鏡の奥から〃灰〃を睨む。ありえない異常事態に冒険者としての観察眼が〃灰〃を捉えた。

ザニスの暴行に揺れる、生まれより伸びる灰髪の奥。そこにある凍てついた太陽のような銀眼を、ザニスは見てしまった。

その瞬間、闇に首筋を撫でられたかのような生暖かい怖気が走り、ザニスは恐怖で体を強張らせる。

(なんだっ!?! なんだこいつはっ!?! これ程の力、これだけの存在圧、明らかに普通じゃないっ!?!)

なぜ気付かなかった!?! ただのガキだと、そんな馬鹿な話があるか!

こいつは、あの狂った闇派閥の化物どもと同じか、それ以上の——!?!)

「——私の眼を見る。ザニス・ルストラ」

降り掛かった古鐘の声に、ザニスはビクリと硬直する。ギリギリと喉を締め上げられる焦燥感の中、半眼の小人族パルウムははつきりとザニスを見ている。

「私はリルカ・アーデの改コンバージョン 宗を望んでいる。

金は、5000万ヴァリス以上は支払わない。それ以上は意味がないからだ。

それで納得して貰おう。後は、力尽くで領かせる。

——リルカ・アーデの改コンバージョン 宗を認めろ」

「ぐっ……!?! わ、わかったっ! 認める、認めようっ! だから放せっ」

「いいだろう」

小さな手を放されたザニスは躊躇って咳き込む。そして縋り付くようにソーマの元へ這いずり嘆願した。

「ソ、ソーマ様！ アーデの改宗コンバージョンをお願い致します！ この「灰」とかいうガキは異常です！ これ以上関わるべきではありません！」

「……」

「……ソーマ様？」

ソーマは反応しない。リリルカの退団も、ザニスの欲望も、「灰」の暴行も全て絵画の向こう側の世界のように無視するソーマは、黙々と作業を行っていた。

「お聞きください、ソーマ様……！」

「やかましいぞ、ザニス。今は忙しい。雑事なら後にしろ」

ザニスの必死の嘆願に目もくれず、ソーマは一蹴した。絶句するザニスを見つめ、「灰」は進み出る。

「ソーマ。リリルカ・アーデの退団を認めろ」

「……これを飲んでまた同じ事が言えたなら耳を貸そう」

「灰」の尊大な物言いにソーマは煩わしそうに動き、柵から酒瓶を取り出して杯さかずきに注ぐ。

神酒ソーマ。今なお【ソーマ・ファミリア】の団員を狂わせる神の酒をソーマは「灰」に差し出した。

「それは……!? いけません、アスカ様っ！」

その味を知っているリリルカは多大な恐怖に支配され思わず叫ぶ。それをアスカは手で制止し、ゆっくりと盃を受け取った。

酒の水面に「灰」が映る。目眩を催すほどの涼しく芳醇な香りが「灰」の鼻をくすぐり、幼い容貌に小さな亀裂が刻まれる。

やや眺め、緩慢な動きで「灰」は酒を呷り——半ばでぴたりと止まり、唇から杯を離れた。

「——まずい」

「………は？」

それは誰の声だったか。吐き出された「灰」の言葉にザニスは驚倒し、リリルカは呆然と眺め、ソーマは瞠目する。

それを他所に、〃灰〃は杯を落とした。甲高い音を立てて割れる杯を、〃灰〃は溢れた酒ごと踏み躪る。

「な……何をしている!？」

思わず、といった風にザニスは絶叫した。目の前の出来事が信じられなかったからだ。

外界最高峰の『神の酒』。子供たちを溺れさせ、獣に墮落させるほどの美味さを持つ至高の品。

それを「まずい」などと言い放ち、あまつさ剩え飲み干しもせず床に零すなどありえない。踏み躪るなど論外だ。

だからザニスは叫んだ。自らの頼った神酒ソーマを否定する光景に恐怖し、拒絶したが故の反応だったかもしれない。だがそれは、もはや無意味だ。

首をもたげ、ザニスを睨む灰髪の小人族パルウム。垂れ下がる髪の間隙から覗く貌は、憎悪に満ちていた。

「ああ……ああ……よくも、よくもこんな物を私に飲ませたな……神の酒など、巫山戯た物ふざけを、よくも……」

「ひっ!? ち、違う!? 俺じゃない!? 俺じゃ——!？」

「煩い」

「ぐげあっつ!？」

〃灰〃の腕がブレた瞬間、ザニスは壁に激突し一瞬で意識を刈り取られる。ずるずると落ちるザニスを暫し睨み、〃灰〃は亡霊のようにソーマへ視線を向けた。

「……さあ、リリルカ・アーデの退団を認めろ」

「……お前は……」

「……何だ、その目は……私の行いがそんなに疑問か……?」

下らない……貴様が人に失望しているように、私は神に何の期待もしていない。

だから貴様にも、期待はしない……応えぬのなら——斬り伏せるまでだ」

〃灰〃は虚空に手を伸ばし、現れた柄に手をかける。

引き出されたのは《混沌の刃》。斑流紋の浮かぶ刀にして、敵と同時

に持ち手を蝕む『魔剣』。

混沌の魔女クラーグのソウルより作り出された刃を抜き去り、
“は”は大上段に構えた。

「……そうか。お前は、そうなのだな。」

ならば良い。お前がそれを望むのなら——この命を差し出そう」
対し、ソーマは。

“灰”の眼からして認識し難い感情を墨色の瞳に宿し、やがてまぶ
たを降ろし、沙汰を待つ罪人のように厳かにその場で立ち尽くした。
故に“灰”は止まる。ソーマの行いを理解出来なかったが故に。

そして呆然と眺めていたリリルカは、全身の血の気が一気に引くよ
うな焦燥に取り憑かれた。

(拙い……!? 拙い、拙い、拙い——!?)

“灰”は恐ろしい。それに今更疑いを抱くべくもない。

けれど、“それ”は駄目だ。“それ”をしてしまったのは、もう人の
世界で生きる事など出来ない。

『神殺し』——神時代以来、神、ひいては人類と敵対する絶対の罪。
神は、神しか殺してはいけない。その不文律を破る決して犯されて
はならない最初の罪を、“灰”は執り行おうとしている!

どうする、どうすればいい。リリルカは愕然としながら必死に頭を
回した。

それはベルの為だ。アスカが『神殺し』を行えば、同じ「ファミリ
ア」であり家族であるベルに被害が及ばない理由がない。

ここで止めなければ、あの白い笑顔を曇らせてしまう。
そしてまた——アスカの為でもある。

アスカは、“灰”は恐ろしい。関わりたいか否かで言えば、間違い
なく否だ。今まさに神を殺さんとする狂気を膨れ上がらせる “灰”
を見れば誰だってそう思うだろう。

けれど、それでも助けてくれたのだ。その手法がどうであれ、リリ
ルカを取り巻く悪意をアスカはその手を汚して取り払った。

心は、少年ベルに救われた。現実アスカは彼女が打ち破った。

ならばリリルカは、動かなければならない。ここで呆然と眺めてい

るだけなんて、リリルカ自身が許さない。

限界まで考え、必死に周囲を見渡し、やがてリリルカはあるものを見つける。

僅かに躊躇し、それでも動いた。相対し止まったソーマとアスカの側、壁に備え付けられた棚まで走って——置かれていた酒瓶を手に取り。

「待ってください、アスカ様っ!!」

叫んで、神と、人がリリルカを見た瞬間。

意を決して酒瓶を呷り——泣きながらソーマに、自分の想いを精一杯叫んだ。

「——以上が、事の顛末だ。リリルカ・アーデは正式に退団した。我々が「ファミリア」に入団するに、何の問題もないだろう」

「んん、んんんん……そうだね、何の問題もない……わけないだろおっ!？」

何をしているんだアスカ君っ!?! 他の「ファミリア」に殴り込みじみた事をするなんて危ないじゃないかっ!?!

というか、サポーター君の改コンバージョン宗の話とか、ボク何も聞いてないんだけどっ!?!」

「事後承諾でどうとでもなると思った」

「ぬあ~~~~っ! あーもう、これだからアスカ君はさあ~~~~っ!」
頭を抱えてぶんぶんとツインテールを振り回す主神ヘステイアの奇行にアスカは冷めた目を向けていた。

場所は廃教会地下。バイトを無理やり切り上げさせられて呼び出されたヘステイアは、疲れた様子のリリルカを連れてきたアスカの話に混乱している。

「というか、話の中でアスカ君普通に暴れてたけど大丈夫なのかい!?! 怪我はしてなさそうだけど、報復とか色々あるだろ!?!」

「チャンドラ・イヒトという男と話をつけている。リリルカコンバージョンの改宗、
移籍については一先ず後腐れはない」

「それ以外は!？」

「何かあれば、黙らせる。貴公が望むまいと、私が蒔いた種だ。私自身で刈り取り尽くす」

「出来ればそういうのはなしにして欲しいんだけど……うくん、うくん……とにかく、とりあえずは何ともないんだね? 何かまずい事とかやらかしてないよね? いや、さっきの話がまずくないってわけじゃないんだけどさ」

「ヘステイア。一つ、至言を紹介しよう」

「何だい?」

「バレなければ犯罪ではない」

「駄目じゃないかっ!？」

「どうしてこう、君ってヤツは!？」とヘステイアはうがーっ! と天を仰いだ。目の前で繰り広げられる神と眷族コソトの話にリリルカはどうすればいいか分からないでいる。

「はーっ、はーっ、はあくくくっ……とりあえず、とりあえずその辺の話は置いてこう。後でたつぷり説教させてもらうけどねっ!」

今は——サポーター君の改コンバージョン 宗の話をしようか
「っ!」

話を聞くだけで疲れ切った様子のヘステイアは、大きく深呼吸をして神の顔を表に出す。超越存在デウスデアとしての瞳でリリルカを見定めるヘステイアは、まさしく天の女神だった。

「まずは君の話を聞かせてくれ。話せるだけでいい、その後アスカ君からも聞いて、君の入団について判断しよう」

「……はい、分かりました」

ヘステイアの瞳に気圧されて、けれどはつきり見返したりリリルカは話した。

自身の半生、ベルに会ってから、盗みの話、アスカにされた事、何を思っコンバージョンて改 宗を承諾したのか。

神妙な顔で聞いていたヘステイアは、途中アスカの所業にドン引きしていたが、最後まで口を挟まず聞き届けた。

そして腕を組み、目を閉じて黙考する。リリルカは緊張した様子で

沙汰を待ち、アスカは夕食の食材を確認していた。

やがて腕を解いたヘスティアは、不承不承という風に頷いた。

「……………分かった。サポーター君の入団を認めよう」

「っ！ 本当ですか！」

「心情的には正直、いやかなーり認めたくないんだけどね。」

君がベル君の側に居るのに相応しいとは思わない。一度ベル君を狙ったのもそうだし、その上でベル君に許されて罪悪感で潰れそうになっているのも気に食わない。しよぼくれた顔をしてさ、卑怯だよ、君は」

「っ…………」

「ただ…………うちのアスカ君が色々やらかしてるし、やらかし過ぎちやって主神として責任を取らざるを得ない状況になってるし…………何より今は無所属の君を放り出すなんてボクの本意に於いては…………。」

…………アスカ君、ひよつとしてここまで読んで行動してたりしないだろうね？」

「ああ。貴公ならそうするだろうと考えていた。だから事後承諾で十分だと思った」

「やつぱり…………今更だけど、君という人ひとがどういうやつなのか分かってきた気がするよ…………」

はあーっ、と盛大なため息をつくヘスティアは、頭を振ってリリルカへ向き直る。

「というわけで、ボクは入団を認めようと思う。もし君が納得できないなら、これからの行動で示してくれ。」

ベル君と、アスカ君を助けてやってくれ。それが出来るのなら、ボクは君と『家族』ファミリアになるよ」

「っ…………はい、ありがとうございます…………ヘスティア様」

暖かな笑顔と共に差し出された手を、リリルカは両手で受け取った。大切に、泣きそうな顔で、もう離さないと誓うように。

それを見届けて柔らかく微笑むヘスティアは、神妙な顔に戻ってすつとりリルカに近づく。

鼻と鼻が触れ合う距離。驚くりりルカにヘステイアはそつと囁いた。

「それから一つ——何か隠している事があるね？」

「っ!？」

「たぶん、アスカ君の事だろう。あの子はどこか危うい。口にしちやいけないような事をしたんじゃないか？」

「……それは……」

「……無理には聞かない。けれど、話すべきと思った時は話してくれ。ボクはあの子の家族だ。もしもの時は、ボクが止めなくちやならない。」

だから、あの子を頼む。アスカ君は無理をし過ぎる。それを出来るだけ、止めてやってくれないか」

「——約束します。ベル様のためにも、アスカ様のためにも、リリが頑張ります」

「うん、ありがとう。頼りにしているよ」

そうやって内緒話を——アスカには聞こえていただろうが——切り上げたヘステイアは、コンバージョン改宗を終えた後、急ぎ足でバイトに戻っていった。色々話すべき事はあったが、無理やり抜けてきたのでヘファイストスが怖いのだ。

「話の続きはまた後でねー!」と去っていったヘステイアを見送つて、地下室にはアスカとリリルカが残される。

ぼつんと残されてどうしようかと考えていたリリルカに、アスカは声をかけた。

「……さて。ベルがダンジョンから戻るまで時間もある。その間、我々【ヘステイア・ファミリア】について話をしようか」

「あ、はい、お願いします」

「差し当たっては、【ファミリア】の家計についてだ。まず、ヘステイアの金銭感覚は信用できない。ベルは言わずもがな、知識が足りない。私には興味がない。」

故に家計に関しては、貴公に任せようと思う。異論はあるか？」

「いえ、ありませんが……本当に、リリに任せてしまうのですか？」

「信用云々なら今更だ。貴公はもう、私の家族だ。家族を疑うなど、それは人の所業ではない」

「アスカ様……分かりました。家計はリリが責任を持ってお預かりします」

「うむ、任せる。それと、私の持つ金の半分ほどを貴公に預けよう。何かあれば、貴公の判断で好きにしてくれて構わない」

「了解です。それで、いくら位ですか？」

「そうさな……——凡そ30億ヴァリス、の筈だ」

「……………は？」

ピシリ、とリリルカは固まった。30億？ 30億ヴァリス？ 30万ヴァリスの聞き間違いではないか？

石像のように動かなくなるリリルカを露とも知らず、アスカはソウルから『底なしの木箱』を取り出した。

古く神を貪欲の罪で追放された一族に課せられる、『貪欲者の烙印』とも呼ばれる木箱。それを開き、腕を突っ込むアスカは次々と大袋を取り出す。

明らかに箱のサイズと合わないそれらは、ザニスの前に積み上げた物と同じ袋だった。

「……………はっ!? ちょ、ちよつと待ってくださいっ!」

「どうした、リリルカ」

「ヴァリス金貨で出されても困ります!? 移動も保管もままなりません! というか何ですかその箱は!? リリの常識を軽々しくぶち壊さないでくださいっ!」

「そうか。済まないな」

「絶対そう思っていないでしょうアスカ様は……っ!」

ゼーゼーと肩で息をするリリルカを一瞥してアスカは袋をしまう。ややあって、思いついたようにもう一つ『底なしの木箱』を取り出したアスカはそれをリリルカの前に寄せた。

「ではまず、これの説明から始めよう。」

名を『底なしの木箱』という。見ての通り、底の空いた木箱だが、貪欲に際限なく物を収納できる。

「一先ずはこれに30億ヴァリスを詰めて貴公に譲ろう」

「……さらつととんでもない事を言ってくれやがりますね、アスカ様は。でも、いいんですか？　こんな貴重なんて言葉じゃとても言い表せない貴重品をリリに譲るなんて」

「何度でも言うが、貴公は家族だ。家族とは、私にとって特別な意味を持つ。」

だから貴公の力となるのなら、私は私の全てを懸ける。無論、最も尊ぶ者はベル・クラネルただ一人だが、その次点に添えるくらいにはな。

家族とは、そうあるべきだと、私は知っている」

「アスカ様……」

リルカにはその言葉の重みは分からない。アスカ自身、大して重みを感じていないだろうが、彼女がそう云うのならそれはまさに誰にも覆せない『真実』だ。

ふと、花屋の老夫婦を思い出す。彼らには迷惑をかけた。最後には拒絶されたが、それも当然だ。それでも老夫婦と過ごした日々は、リルカの心から消える事はないだろう。

アスカにとつても、それは同じかも知れない。そう思うと、目の前に置かれた木箱が重くなったような気がした。

……というか普通に持ち運べそうにない程大きくて重そうだった。

「アスカ様……これを、リリにどうしろと言うのでしょうか……」

「ん？　……ああ、そうか。貴公はまだ『ソウルの業』を覚えていないのだったな。」

丁度良い。私も『ソウルの業』の根幹、基本を人に教えた事は無い。ならば貴公にそれを教える事で経験を積む事が出来る」

「……危なくないでしょうね？」

「大丈夫だ。危険があれば前もって準備をする」

「何も大丈夫じゃないんですがそれは……まあいいです。どうせ何を言ってもしょうがないですし。」

それで、教えてくれるのは何ですか？」

「『ソウルの業』の基幹。最も単純で『火の時代』において誰もが使用

していた術——『物質のソウル化』とそれの逆様だ」

「——！」

その言葉を聞いてリリルカは姿勢を正す。

『物質のソウル化』。それはアスカが当然のように行っている『虚空に物を収納するスキル』の事だろう。まさかそのまま技術スキルを指しているとは思わなかったが、もし本当ならリリルカもそれを使えるようになる。

自分にアスカと同じ事が出来たなら——そう何度も夢想してきた。それが現実となるのなら願ってもない事だ。

そして同時に、これこそが本当の意味での信頼の表れとも思った。アスカにとつての利益もあるだろう。だが利益だけなら『底なしの木箱』か『物質のソウル化』、そのどちらかでもいい筈だ。

リリルカを家族として見ているから、アスカは助力を惜しまない。
改コンバージョン宗をして以降、明確に変わった彼女の在り方にリリルカは思わず涙ぐみそうになり、顔を腕で擦って奮起した。

自分が頑張らなくちゃいけない。

リリルカは知っている。「ソーマ・ファミリア」から出た後、アスカが神酒ソーマを飲んで以降の記憶を失っていた事を。

ザニスの氣を失わせ、『神殺し』を敢行しようとしたあの記憶を一切失い、ただ神酒ソーマの後味に苛立っていた事実を、リリルカは知っている。

おそらくは神か、神に関する何かトリガーが引鉄。それに触れる事で、アスカはリリルカの半生で抱いていた負の感情など消し飛ぶ程の悍ましい憎悪を溢れ出させる。

平素、何に対しても冷たい半眼を貫くアスカの、あの表情は怖かった。煮詰まった闇の如く、蠢くような憎悪を刻む灰髪アスカの相貌は、恐怖を超え、畏怖に近い何かをリリルカに感じさせた。それを忘れていたと知った時、リリルカの背筋に冷たいものが走った。

アスカは、何かを抱えている。それは誰にも触れざるべき、けれど何時しか向き合う事となるであろう何かだ。

それは殺人の件と合わせて、ヘスティアに隠した事だ。最悪「ファミリア」を追放される程の大罪未遂を伝えるには、まだリリルカの中

で考えが熟していなかった。

だから自分が頑張らなくちゃいけない。出来るだけアスカの変異を防ぎ、それが解き放たれた時、アスカが何者も傷つけないように。ヘステイアに頼まれた、そしてベルと、アスカと共にある——『家族』として、自分がやれる事を何でもやるのだ。

そう、リルカが奮起していると、アスカは手を差し出すように言った。素直に従えば、アスカは青白い光を集めて形になった物をリルカの小さな両手に載せる。

それは猛々しく匂い立つ、茶色の混じった割れた内側が瑞々しい何かだった。

「……………何ですかこれは」

「糞団子だ」

「は？」

「糞団子だ。乾いた排泄物。大便だ」

「……………」

「まずはこれを起点に『物質のソウル化』を覚えてもらおう。なに、そう難しい事ではない。物質をソウルと化す業そのものには時間がわかるだろうが、自らのソウルの器に取り込み、取り出す事を覚えればほとんどの物質をソウル化出来るだろう。

それでは、『ソウルの業』の伝承を始めよう。まずは物質のソウルを感じ取る事からだが……………リルカ、聞いているのか？」

「……………う」

「うっ。」

「うつつつきやあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っっ!!」

両手に載せられた汚物を、リルカは渾身の絶叫と共に天へ放り投げた。

——自分が、頑張らなくちゃいけない。

確かにそう思った。そう、自分自身で決意した。

けれどこれは、何か違う。ひよつとしたらリリはとんでもない間違いをしてしまったんじゃないだろうか。

この常識の通用しない小人族、アスカにこれからずつと振り回される——そんな未来を選んでしまったんじゃないだろうか。爆発する意識の中、リリルカはふとそんな事を考えた。そして糞団子が天井に当たる前にアスカが回収したのは、後々の事を考えればリリルカにとって幸運だったのかも知れない。そんな幸運などいらないと、後々の彼女ならば重いため息と共に吐き出すのだろうけれど。

リリルカ・アーデ
レベル
Lv. 1

力：I 4 2 耐久：I 4 2 器用：H 1 4 3 敏捷：G 2 8 5 魔力：F 3 1 7

《魔法》

【シンダー・エラ】

- ・ 変身魔法。
- ・ 変身像は詠唱時のイメージ依存。具体性欠如の場合は失敗。
- ・ 模倣推奨。
- ・ 詠唱式【貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの】
- ・ 解除式【響く十二時のお告げ】

《スキル》

【縁下力持】

- ・ 一定以上の装備過重時における補正。
- ・ 能力補正は重量に比例。

【魂業小箱】

- ・あらゆる物をソウルの器に収納する。
- ・器に登録した物は即座に取り出せる。
- ・登録数、容量は総ソウル量に依存。

まだ日も昇らない夜明け間近の時間、リリルカはいつものように目を覚ました。

窃盗を働いていた時の癖、あるいは嗜みのようなものだ。後ろ暗い生き方には備えて損をする事がない。だからすぐに眠気を飛ばしたリリルカが感じたのは困惑だった。

ここは根城にしている安宿ではない。狭い部屋だし内装も良くないが、綺麗に掃除されており、何よりベッドの上にいる。

数秒ほど呆然として、はたとリリルカは気付いた。

そうだ、自分は改^{コンバージョン}宗したのだ。あの悪夢のような「ソーマ・ファミリア」から、理想を求めて「ヘスティア・ファミリア」に。

リリルカの脳裏に昨晚の記憶が蘇る。それはアスカの授業……授業？ にリリルカが疲れ果てた頃、ベルとヘスティアが帰ってきた時から始まる。

「……なんかサポーター君のスキル増えてるんだけど」

「はい!?!」

そんなやり取りから始まった一騒動は、何かよく分からないがアスカの影響を受けた、という話で無理やり収まった。

【^{ソウル・サエル}魂業小箱】。アスカの持つ『ソウルの器』と同じ名前のそれは、言っ
てしまえばリリルカが覚えようとした『ソウルの業』の基幹だ。

物質をソウルの器に収納し、また取り出す。「火の時代」とやらでは

当たり前に行われていたらしいこの技術は、リリルカにとって革命的な力である。

まず、重量制限から解放される。探索に持っていくアイテムや装備の選別、探索時の持ち帰る魔石や『ドロップアイテム』の取捨選択、果ては一人では持ち帰れない大物ですら自分だけで運ぶ事が出来る。

戦闘にも多大な影響があるだろう。戦う才能がからつきしなのはリリルカも身に染みて分かっている事だが、サポートならお任せだ。特に登録した物を瞬時に取り出せるというのが大きい。

……他にも後ろ暗い事をするには大いに役立つだろう。例えば何かを盗んだとして、捕まってもリリルカは何も持っていないのだ。道具は運ぶもの、虚空にしまうなんて非常識に過ぎるオラリオでは大きなアドバンテージに成り得るだろう……もうやらないけれど。

流星にアスカと同じ性能は持たないようだが、逆に言えば成長の余地があるという事だ。この《スキル》はリリルカにとって大きな武器になる、そう感じた。

だからすぐにでも色々試したかったのだが……そうする前にヘステイアが「そんな事よりも、もっと重要な問題があるっ！」と宣言したのだ。

リリルカの「ステイタス」の更新を終えた後、ソファの上に陣取って拳を突き上げたヘステイアは、ずびしいっ！ とベッドを指差した。

「この部屋にはベッドが一つしかない！ とてもじゃないが四人、いや三人寝るなら二人がベッドで一緒に寝る必要があるんだ！」

「三人？ どうして三人なんですか？」

「アスカ君は寝ないからね……僕らが眠ってる間もずっと起きてるんだよ。ベル君は慣れてるみたいだけど、朝起きたら壁際に立ってじっと見つめてくるアスカ君は正直怖い……」

「ああ、なるほど……」

寝ないなどと、軽く人間をやめている話に納得したりリリルカはちらりとアスカを見る。壁にもたれて腕を組んでいる灰髪の少女は興味なさそうに眼を閉じていた。

ちなみにベルはいない。リリルカの、女の子の【ステイタス】更新をしているのだから当然だが、上の廃教会で待つて貰っている。そろそろ寂しがつているのではないだろうか。

夜に震える白兔をリリルカが連想していると「とにかく！」とヘステイアが話を戻した。

「ベッドで寝る二人、ソファで寝る一人を決めなきゃいけない。そこでボクはこう思うわけだ。新入りのサポーター君は勿論ソファ。

そして……ボクとベル君が二人つきりでベッドインって寸法さッ……！」

「!? だ、ダメですヘステイア様っ！ そんなのダメ、ダメに決まってますっ!!」

「な、なにをおーっ!?」

自分でも驚くほどリリルカは声を張り上げた。

何故か知らないが頬が熱い。理由は分からないけれどとにかくダメどりりルカの心が叫んでいる。

「ダメなものはダメですっ！ ベル様とふ、二人つきりでベッドなんていけませんっ!? ふ、ふ、ふしだらですよっ！」

「処女神のボクに向かってなんて事を言うんだ！ 大体、なんでそんな反対するんだい！ まさかサポーター君もベル君を狙ってるんじゃないだろうな……!?」

そう言われてリリルカはかあつと顔が赤くなった。なんでこんなに体が熱くなるのかさっぱり分からないけれど、何かを誤魔化すように身振りを大きくする。

「そっ、そんなわけありませんっ！ リリがベル様を狙っているなんて、そんなのありえないですっ！」

大体、ベル様は優しすぎるんです！ リリの事だつて簡単に許してしまいますし、女の子だから助けるなんて調子の良い事を言つて！

悪いリリを伝えた時だつて、だ、抱きしめられましたし！」

「それは聞き捨てならないぞサポーター君!」

「そんなの知りませんっ!? ベル様なんてすけこましますっ、女つたらしですっ、女の敵ですっ！」

そんなベル様の事をリリが狙うなんて、あ、ありえないですっ!!」
「そんな事言つて本当は——……あつ……な、なるほど、そうなんだね
……まずい、これはつついちゃいけない藪だ……」

「何か言いましたか!？」

「う、ううん! 何でもないよ、サポーター君! 疑つて悪かつたね
!」

「分かればいいんです!」

何故か動揺するヘスティアにリリルカはそっぽを向く。顔は熱い
ままだつたが、その理由は努めて気にしない事にした。

そうこうしていると、地下室の入り口が控えめにノックされた。ア
スカがするりと外に出て、ややあつてベルと共に戻ってくる。

「言い争うような声が聞こえたから心配で見に来たそうだ。貴公ら、
気を付ける事だ」

「ご、ごめん」

「すみません……」

じろりと見つめる銀の半眼に二人は思わず謝る。それを曖昧な笑
顔でベルが押し留めた。

それからアスカが簡単な経緯を説明して、誰がベッドで寝るかとい
う話に戻る。

「つまりだ、ベル君。ここは君とボクと一緒に寝るのが筋なんだ。

なぜならボクは主神! そして君は団長だ! 主神と団長が仲睦
まじいのは当然、すなわちベッドと一緒に寝るのも当然つてワケさ
!」

「いけませんベル様! こんな穴の空いたしよーもない屁理屈に騙さ
れちゃダメです!」

ヘスティア様は神様なんですから上等なところで寝なきやいけな
いんです! ですから一人でベッドに入るべきです!

ベル様はその、しよ、少々手狭ですがソファでリリと、ふ、二人で

……」

「ごらー! そんな事許すと思うなよー!」

「きー! なんですかー!」

「あ、あの……僕ほんと、床でいいので……」

「ベル君は黙っててくれ!」「ベル様は黙っててください!」

「ええ……」

自分の寝る場所の話なのに口出しを拒否されてベルは思わず困惑の声を上げる。

というか、ベルの顔がなぜか赤い。さつきからもじもじと手を擦り合わせているし、ちらちらとベッドに視線をやってはすぐさま目を逸らしている。

「あーもー、これじゃあ埒が明かない!　ここは一つ、文句なしの一本勝負といこうじゃないか!」

「望むところですよ!　それで、何で勝負をつける気ですか!」

「ふっふっふっ、それは勿論——ベル君に決めてもらおうのさッ!」

「え——えええっ!」

そして理不尽にも話を振られたベルは驚き、しどろもどろに固まりながら必死に舌を回した。

「いやあのですからっ、僕は床でいいんですって!　それで、ベッドは今まで通り神様に使って貰って、ソファはリリに使って貰えばいいんじゃないですか!」

「それじゃあ君が可哀想だろ!」

「そうですベル様!　冒険者たるもの、明日に疲れを残さないために睡眠に気を使うのは当然ですよ!」

「そ、そんなこと言われても……か、神様かりりと一緒にね、寝るなんて……そんなこと僕にはできないですよ!」

「なんだいつ!?　ボクじゃあ一緒に寝るには不満だっけ言うのかいつ!」

「そうじゃなくてっ!」

「じゃありりと一緒に寝るのが嫌なんですかっ!」

「それも違ってっ!」

「じゃあなんで一緒に寝れないんだ!　ちゃんと説明したまえよベル君!」

「それは……その……あの、えつと……」

顔を真っ赤にして追い詰められた表情を浮かべるベルは助けを求めるようにアスカに半泣きの目を向ける。だがアスカは我関せずを地で行くが如く、明日の食材を吟味していた。

右から迫り来るヘスティア。左から攻め立てるリリ。詰め寄られ、理由を聞かれ、熟れた林檎のように限界まで顔を赤くしたベルは、とうとう追い詰められた犯人のようにそれを言葉で吐き出した。

「だ、だって——女の人と一緒に寝たら、子供出来ちゃうんですよっつっ!？」

その瞬間、無音が地下室を支配した。

「……………え?」……………へ?」

ややあつて、間の抜けたヘスティアとリリの声上がる。二人ともベルが叫んだ言葉の意味を咀嚼し切れていない。

真っ赤になって小さくなったベルを囲む二人がぽかーんと間抜け面を晒していると、食材の吟味を終えたアスカが一つため息をついて会話に加わった。

「それは間違いだ、ベル。確かに男女が共に寝る事はセックスに該当するが」

「は!？」

否、会話に乱入した。

「家族間ではセックスは成立しない。現に貴公、よく私と共に寝ていただろう」

「そ、それは、そうだけど…………アスカさんと神様たちでは違うってどうか…………」

「何が違う。ヘスティアは家族であり、リルカもまた家族だ。

家族ならば、違いはない。分別はあろうとも、本質的な繋がりは同じだ。

故に貴公のそれは、ただの杞憂だ。何も心配せず、共に眠ると良い」
「そうは言われても…………やっぱり何か違うよお、アスカさあん…………」

「…………アスカ君は一体何を言っているんだい…………?」

くるくる回る会話の衛星を彗星の如くぶち抜いていったアスカに、ヘスティアが恐る恐る尋ねる。それは恐怖というより処女神として

の相容れなさど理解できない困惑の表れだった。

対しアスカは、その困惑を理解できないという風にこてんと首を傾げる。

「何がだ？ 貴公、何か分からない事でもあったのか」

「いや、分からないっていうか、その……どうしていきなり、セツ……の話をし始めたんだい？」

「？ 男女が共に寝るのはセックスだろう？」

「違うよっ!? いや違わないけどッ！ セツ……ってのはそれだけじゃないだろう!?!」

「……ああ、確かにそうだ。セックスをすれば子供が出来る。それが摂理だな。それがどうかしたのか？」

「そういう事じゃなくて……!? 君、本当にセツ……の意味を分かっているのか!?!」

「勿論だ。セックスとは、男女が共に寝る事だ」

「うん」

「すると子供が出来る」

「……うん？」

「以上だ」

「……——いやいやいやいや!! 大事な部分が抜けてるじゃないか!?!」

「？ 何か抜けが有ったか？ いま説明したのが、私の聞いた全てなのだが」

「誰からそれを聞いたんだよおっ!?!」

「ベルの祖父だ。アレが早朝、酔っぱらいながら帰還した時、回らぬ呂律で喋っていた」

『良いかあ、ベルう。男子が女子と一夜を過ごすと子供ができるのじゃあ。セックスと言ってお、子供ができるのは自然の摂理、神々にすら阻めぬ道理なのじゃあ。』

「じゃから儂が「浪漫」を求めて女子と一夜を分かち合うのも誰にも止められぬ道理なのじゃあ!」

「——というような事を言っていた。まだベルが幼い日の話だ」

「子供に向かつてなんて事を教えてるんだそのお爺さんは!？」

……そんなやり取りを最後に、アスカの一言でベッドはヘステイアとリルルカが、ソファはこれまで通りベルという配置に決まった。というか決めさせられた。

あの銀の眼光には誰も逆らえない。「ヘステイア・ファミリア」ヒエラルキー力関係の一端をリルルカは見た気がした。

それと個人的には、セックスの意味について「間違っ
てないけど間違ってる」と言われたアスカが「馬鹿な……」と呟いていたのが印象に残っているくらいか。

これ以上思い出すと色々恥ずかしくなってくるので、リルルカは頬を叩いて起床する。

隣で毛布を抱きしめてるヘステイアが起きないようそつとベッドから降りたりリルルカは、ベルとアスカの姿がない事に気付いた。

「二人とも、一体どこへ行ったんでしよう?」

「まだ日も昇っていないのに……」と、備え付けの魔石灯を持って外に出たりリルルカは、廃教会裏の一角が霧に包まれているのを見つけた。

どうしてここだけ霧がかかっているのか。そう思いながら近づくと——何か世界を越えたような感覚が走り、霧に囲まれた場所へ辿り着く。

そこではベルとアスカが、抜き身の武器を用いて戦っていた。

「!?」

目を見開くりリルルカの前で、完全武装のベルが「ヘステイア・ナイフ」を振るう。

【ステイタス】に身を任せた全力の一撃。しかしアスカはそれを難なく受け流し、隙だらけの胴を蹴飛ばしてベルを吹き飛ばす。

無様に転がり嘔吐く少年。直剣と中盾を下げて不動を保つ少女。凍てついた太陽のような銀の瞳は、一瞬たりともベルから逸れる事はなかった。

「立て、ベル。次だ」

「っ……はいっ!」

口元を拭いながら立ち上がるベルは険しい顔でナイフを構える。瞬間、接近したアスカの振るう《ロングソード》をギリギリの反応で受け、躲す。

アスカは手を緩めない。加減はすれど容赦なく、縦横無尽に直剣を振るう。受けるのに必死のベルを余さず見極め、打ち崩れた所を柄で殴り抜いた。

「次だ」

生傷の増えるベルを直視し、アスカは呟く。痛む殴られた箇所を押さえるも、動きに支障がない事を確認したベルは、痛苦を堪えて果敢にアスカに立ち向かった。

（成程。訓練という事ですか）

近くにあつた篝火の側で膝を抱えて座るリリルカは目の前の光景をそう読み取った。

打ち合いの基礎、いや『駆け引き』の基本というべきか。相手の太刀筋を見切る最低限の力を培うためにその訓練は行われている。

現に、少しずつだがベルの動きが良くなっている。一手を間違える度にアスカが修正を行い、それに引つ張られるように良い動きを覚えさせられているのだ。

それは本当に基礎の訓練。無色の、まだ自分にすら染まっていないベルの下地を叩き上げるための戦い。

リリがやってきてから日が昇るまでそれは行われ、終わる頃にはベルの体は傷がない場所を探せないくらいボロボロになっていた。

「頃合いか。訓練はここまでとする。息を整えたら、篝火に來い」

「ぜーっ、ぜーっ……い！ あ、ありがとう、ごさい、ましたっ……い！」

全力で息をしながらへたり込むベルを一瞥して、アスカは篝火までやって来た。そして片膝をついて座る幼女に、リリルカは声をかけた。

「お疲れ様です、アスカ様。いつもこんな事をなさっているんですか？」

「ああ。ベルに頼まれてな。ダンジョン探索に支障がない程度に稽古をつけている」

「……あれで支障がないとは思えないのですが」

「問題はない。肉体の傷ならばエストで解決できる」

「エスト……それって確か、リリの両足を繋げた回復薬ですよね？」

アスカと契約した日を思い出したのかややしかめっ面をするリルカにアスカは首肯する。ついで取り出したのは黄金色に輝くガラス瓶だ。

「……え？ それって回復薬じゃなくて……万能薬じゃないですか!？」

「エスト瓶だ。似たような物だが、万能薬ではない」

主に回復薬と万能薬の値段の違いで驚愕するリルカに、アスカは否定を示し、説明する。

「エストとは一時に肉体を灰と化し、回復する液体だ。私にはそう作用するが、貴公らは単純に強力な回復薬として使用できる。」

その効力そのものは毒や病を癒やせず、また最高峰の万能薬にも及ばないが、失った肉体を取り戻す事ができる。目や内臓など代替の利かないものから喪くした手足までな。

そして最も重要なのが、エストはエスト瓶によって生成され、それは篝火で休む事で自動的に補充されるという点だ」

「……つまり、瓶と篝火さえあれば無限に手に入れる事ができる……?」

「そうだ。それ故にエスト瓶は不死の宝。何にも代え難い秘宝として扱われている」

頷くアスカにリルカは呆然としたままだ。その脳裏では尽きぬ回復薬の価値を目まぐるしく換算していたが、やがて無意味と放棄し、大きな大きなため息を地面に投げ捨てる。

「……アスカ様は本当に軽々と常識をぶっ壊してくれますね。そんな物があつたら治療師の商売上がったりますよ」

「エスト瓶は一人の不死に一つしか持てない。複数持てば、一つに成る。それが定められた瓶の在り方だ」

「そういう話じゃないんですが……まあ、アスカ様ですし、言ってもしょうがないですね。」

……エスト瓶のついでに、一応この霧に関しても聞いていいですか？ どうせアスカ様の非常識な力なんでしょうけど」

「ああ。霧か。これに特別な意味はない。ただ、外側と内側で世界が分かたれている。それだけの代物だ。それ以上に、詳しい説明が必要か？」

「いえ、結構です。絶対ロクでもない話を聞かされる事になるでしょうし、どうせ理解できないと思うので。」

そんな事より、さつきからベル様が動いていないのですが、本当に大丈夫なんですか？」

「ふむ……どうやら骨が折れて動けないようだな」

「ダメじゃないですかっ!？」

「ベル様あつ!？」とリリル力が飛び上がってへたり込んだままの少年に駆け寄る。アスカは「軟弱な……」と呟き、エスト瓶を持って後を追った。

それは「ヘステイア・ファミリア」の、ありふれた日常的一幕である。

「——以上が、今日の鍛錬の内容だ。何か意見があれば言いたまえ」

「……………何か意見があれば、ですつてえ…………!？」

探索前の早朝に全身切り傷だらけにして、骨折させて、疲労困憊まで追い詰めておいて、意見がないとでも思ってるんですかあなたは——

——つ!？」

ギルド本部の面談用ボックスにハーフェルフの雷が落ちた。渡された羊皮紙を両手で握りしめてぶるぶる震えるエイナは、目の前で平然と座っているアスカに決死の抗議を続ける。

「だいたいっ、なんですかこの「追い詰め方が甘かった。次からは戦闘強度を一段階上げる」ってコメントは！ ベル君骨折で動けなくなってるのになんでこんな評価になるんですか!？」

「骨が折れた程度で動けなくなるベルが懦弱なのだ。ダンジョンは死の坩堝、骨が折れたからと行儀良く待つ敵はいない。」

万全でなくても動き、打ち勝つ。その心構えが肝要だ」

「言ってることは分かりますけど、そういうのはもつと到達階層を上げてからって話し合いましたよね!？」

「今回はあえて無視した」

「~~~~っ!?! おお、あなたって人は~~~~っ!!」

怒髪天を衝くエイナの叫び。ハーフエルフの怒りを真向から浴びるアスカの表情は全く変わらず、全てはエイナの徒勞で終わるのだった。

アスカとエイナ・チュールは協力関係にある。

その過程には紆余曲折あったものの、最終的にベルのために協力する、という関係に落ち着いた。

しかし、一口に協力と言っても幅があるだろう。何を協力するのか、どの程度関わるのか。

結局のところ、エイナは一介のギルド職員に過ぎない。出来る事の多さで言えばベルにより近く、また冒険者であるアスカに軍配が上がる。

だからエイナが協力するのはそれ以外だ。ギルド職員として培った経験、冒険者を支援するために蓄えた知識、何よりもベルに生きて帰ってほしいという想い。

それらを統合して話し合った結果、まずは「ベルの稽古」を互いに妥協できる範囲で収めようと結論が立ったのだ。

……というより、話の途中でそれを聞いたエイナが虫の知らせを感じて追求したところ、信じられないくらい過酷な訓練を課そうとしていたのである。

『24時間迷宮耐久戦闘』……「一週間以内に上層完全踏破」……

『インファント・ドラゴン』との一騎打ち』……!?!

なんですかこの無茶苦茶な訓練は!?! ベル君を殺す気ですか!?!』

しかも、これでアスカは大した訓練じゃないと思っていたのだ。エイナが必死になるのも頷ける話である。

こうしてエイナとアスカは話し合い、「ダンジョン探索に支障が出ない程度に抑えた稽古」を二人の合意の上で策定した。

結局それは、アスカの匙加減でどうとでもなるものでしかなかったが。

「はあ、はあ、はあ……もういいです……あなたに何を言っても無駄だというのがよおく分かりました……」

「何を当然の事を。我々は元より相容れない、その上での協力関係だろうに」

「それはそうですけど！……ああダメ、感情的になっちゃダメ……こんな態度、アスカ氏にとつたって疲れちゃうだけだもん……」

机に突っ伏して泣き言を呟くエイナをアスカは無視する。側にまとめた羊皮紙を取り出し、明日の訓練の内容をエイナに示した。

「次の鍛錬の内容だ。修正すべき箇所があるなら言うといい」

「……正直、修正したい所だらけなんですけど。アスカ氏は何言っても聞きそうにないですし……」

「貴公、真面目にやれ。これはベルのための鍛錬だ」

「！」

そう言われて投げやりになっていたエイナは姿勢を正す。そうだ、これは少年が死なないための訓練。最後の最後まで諦めず、自分の意志を貫かせるためにやっている事だ。

いくら気苦労を負ったとはいえ、そこを曲げては本当に自分がいる意味がない。エイナは眼鏡を掛け直し、頭を下げて謝罪した。

「申し訳ありません、アスカ氏。気を抜きすぎていました」

「構わん。貴公のそれは美德だ。私とは交わらず、だがひたむきな献身の道。それを否定するつもりはない。」

全てはベルのために。互いの目的がそこにあれば、それでいい」

「……ええ、そうですね」

実直なアスカの言葉にエイナは苦笑する。なんだかんだと、アスカもベルの身を案じているからこそ厳しい訓練を課している。そこに嗜虐の欠片もなく、ただベルのためにやっている事だ。

ならばエイナは、その理由を尋ねるべきだ。真意を聞き、考え、よ

りベルにとって有益な境界を引かねばならない。そう思った彼女は、さっそく疑問を口にする。

「それで、どうしてこんな厳しい訓練をするんですか？ 私には今でさえ過剰に見えるのですが」

「ベルの成長は、尋常ではない。抜きん出ている、などという言葉が霞む程に、ベル・クラネルは飛躍している。

「ステイタス」を見た貴公ならば、分かる筈だ。アレには今、本来積み上げるべき経験がない。そこに至るまでの道を飛び、遥か彼方へ降り立とうとしている。

転べば、死ぬ。損なえば終わりだ。尋常ではない成長には、尋常ではない鍛錬が必要なのだ」

「……成程、一理あります」

口を覆ってエイナは考える。アスカの言葉は確かにそうだ。ベル・クラネルは成長し過ぎていく。

僅か半月と少しで既に到達階層を10階層まで伸ばしているベルには、足りない物が多すぎる。備えて過ぎる事はない。むしろエイナの経験から言って、このレベルの訓練でも足りないかもしれない。

「——ですが、やはりこの訓練は過剰です」

それでもエイナは、否定した。鋭い銀の眼光を、真向から強く見据えて。

「確かにベル君はすごい速さで成長しています。これから彼の立ち向かう過酷な環境を考えれば、これ以上の訓練も必要かもしれません。

それでもやはり、過剰です。彼はもつと余力をもって探索すべきです」

「余力、か」

「はい。今の訓練では、彼は限界を超えるような戦いを強いられているでしょう。それは確実に彼の精神にダメージを与えています。

そんな状態でダンジョンに向かう事こそ、私は危険だと判断します。万全でなくても動けるように、という意見は理解しますが、備えられる分は確実に備えるべきです」

「成程、道理だ。それで？」

「——もう一つ、彼に私の知識を伝える時間をください。

今のベル君はダンジョンでボロボロになつてあまり勉強が出来ていません。それはとても良くない事です。

飛躍しているというのなら、経験以上に知識が必要になる。自分で体験する事も大事ですが、かつて冒険者だれかが通つた道を知る、それをしなければ、彼はもつと過酷な戦いをしなければいけなくなるかもしれません。

だから私に、時間をください。彼が——ベル君が生きて、私達の元へ帰つてこられるように」

「……いいだろう。貴公の言葉を信じよう。ここは私が一步引く」

古鐘の声で頷いて、アスカは広げた羊皮紙をしまった。それから新しい羊皮紙を取り出し、エイナと向き合う。

「それでは、新たな鍛錬を検討しよう。貴公の言う通り余力を残し、知識を得る余地のある鍛錬だ」

「はい。それでは、下級冒険者の一般的な訓練内容から提案しますが

小人族バルウムとハーフエルフの話は続く。

受付嬢と冒険者。価値観の違う、相容れない二人。

けれど道は、少年のために近づき、触れ合う。彼女らの協力関係は、これからもこうして続いていくのだろう。

……余談だがこの時、別室でこれまでのエイナ教室の成果を試すテストをしていたベルは、身知らぬ、だが身の毛のよだつ悪寒に震えていた。

彼女らの協力関係はベルの役に立つ。しかしそれはある意味、力アスカと頭脳エイナがタッグを組んで少年を追い立てるのと同義だ。

自らの行く末を知らない哀れな兎は、頭の良くない自分に時間を割いて教えてくれたお姉さんエイナに応えるために、悪寒を振り払ってテストを頑張った。

あまりに善良な優しい子である。故に誰かが見ていたのなら、その不憫さを嘆いたであろう。

具体的には世界の何処かにいる大神か、嫉妬センサー触覚を反応させるロリ

巨乳が。

『……ベルよ。心折れず頑張るのじゃぞ……』

「はっ!? 今ベル君に他の女の魔の手が迫っているような気がする！」

……きつと、嘆いてくれるであろう。

供饌、空転、暗がりの王

『……あ』

『……えっ!?!』

『む、アイズか』

『……ここにいたんだ。アスカ』

『ヴァ、ヴァレンシユタインさん!?!』

『……えっと。君、は……久しぶり、かな?』

『あの、その、えっと!?!』

『……落ち着け、ベル。無闇に騒ぐな』

『で、でもお!?!』

『……とりあえず口を閉じていろ。話は私がする。

それで、アイズ。どうかしたのか。見た所、我らを探していたようだが』

『……ベル達が、危ない事に巻き込まれてるかもって、ギルドの受付の人に、言われて……エイナ、さんって人』

『エ、エイナさんが!?!』

『……ベル』

『すみませんっ!?!』

『全く……だが、大方読めた。サポーター、リリルカ・アーデの「ファミア」の事だな。

そちらについては問題ない。既に方をつけてある』

『そう、なの?』

『ああ。救援には感謝しよう。礼を言う』

『うん……』

『……』

『……アスカ、あの……』

『……ここでは、場所が悪いな』

『え?』

『ベルと話したいのだろうか? だが、ここはダンジョンだ。歓談には無縁に過ぎる。』

日を改めて地上で会おう。その時は、引き摺ってでもベルを連れて来る。それでいいか?』

『……うん、それでいいよ』

『だそうだ。覚悟を決める事だな、ベル』

『え!?! あの、ええっ!?!』

それは、ダンジョンの中で交わされた約束。

数日前、アスカと約束を交わしたアイズは上機嫌で歩いていた。

颯爽と歩く背筋はスラリと伸び、風が吹くと金色の髪が戯れる。街行く人々はアイズの人形のような静謐で端正な顔立ちに見惚れていたが、その心中では小さな幼女アイズが鼻歌を歌うくらいご機嫌だった。

約束は正午、場所は万神殿バンテオン、ギルド本部。

お互いの「ファミリア」の関係や冒険者としての立場を考慮して、居ても不審のない場所を選んでいる。その代わり長時間話す事はできないが、それでもアイズは嬉しかった。

やっとベルと話せる。やっとあの時の事を謝れる。

それからできれば、もっと話したい。白兔のような少年の顔を思い出して、少女は目を優しく和らげる。ふと、心の中で変なポーズを繰り返していた仮面巨人が、ぐっと親指を立てたような気がした。

アイズがギルド本部につくと、冒険者の姿がほとんどないロビーでアスカが待っていた。

その小さな、けれど絶対に逃さないという妙な圧力を感じる手で、ベルの首根っこを掴みながら。

「来たか、アイズ」

「うん……えっと、どうした、の?」

「この期に及んで逃げようとしたので捕まえている。全く、根性のない」

「だ、だってえ……」

床に座らされて半分泣きそうになっているベルの姿は情けない。アスカが手を放せば今にも逃げ出しそうな兎の姿に、アイズはシュン

と俯く。

「……やっぱり、私のこと、怖い……?」

「へ!」

「だって、また、逃げようとするし……私、やっぱり、怖いんだね……」
「そ、そんな事はないです! ヴァ、ヴァレンシユタインさんは全然怖くなくて、むしろびつくりするくらい綺麗な人だと思って!」 逃げ回ってたのはどんな顔して会えばいいか分からなくて、何話していいかも頭から飛んじやって、気付いたら体が動いてて!?

だから貴方が、ヴァレンシユタインさんが怖いとか全然、全然ないです!」

「……そう、なんだ……」

「は、はい!」

「よかった……」

顔を上げるアイズは、ほころぶように小さく微笑む。それを見たベルはかあつと耳まで赤くなって床に突っ伏した。

それからアスカの取り成しで場を改めた二人は謝罪と感謝のやり取りを行った。主にベルが赤い顔で慌てふためいてそれをアイズがくすりと笑う、ほのぼのとした雰囲気の話が進む。

するとベルが戦い方をアスカに教わっているというところに差し掛かった。考え込む素振りを見せるアイズを眺め、灰髪の少女は古鐘の声を擦り鳴らす。

「アイズ。貴公が良ければ、ベルに戦い方を教えてやってくれないか」

「え……?」

「ええっ!」

「アスカさん!」と仰天するベルを無視して、銀の瞳がアイズを映す。そこにあるのは小さな期待。珍しいアスカの様子に驚きながら、その理由をアイズは尋ねた。

「どうして、私に?」

「私のやり方には色がない。基本は教えられても、その先を示す事は出来ない。」

だから貴公、アイズ・ヴァレンシユタイン。貴公が道を示してやつ

てくれないか。

貴公の辿る剣の道。それこそがきつと、ベル・クラネルの先にある。私はそう、思っている」

「……」

軽く顎を引いて逡巡する様子を見せるアイズ。あわあわと少女と幼女を交互に見るベルは、一杯一杯で事態を見守る事しか出来ない。少しの間考えていたアイズは、やがて顔を上げ、ベルを見つめてゆつくりと頷いた。

「……うん、いいよ。私がベルに、教えてみる」

「感謝する。アイズ」

「うん……その代わり、一つ、いいかな？」

「何だ？」

「アスカがベルに、教えてるところ——見せてほしい」

少年から幼女に視線を移すアイズの金の瞳には、強さを求める炎が灯り。

「いいだろう。貴公がそれを望むなら」

全てを銀の半眼に収めるアスカは、少年の行く末を灯火とする。

「……え、うそ……ほんとに決まっちゃった……？」

そしてベルは。灰髪の幼女と金の少女の間で固まり、現実を受け入れられず呆然としていた。

そんな彼にため息をついたアスカの魔の手が伸びるまで、後少し。

迷宮都市オラリオは巨大な市壁で囲まれている。

それは千年前、オラリオが築かれた際、外ではなく内からの防衛を目的に建てられた最後の盾の名残であり、今なおその役目を全うし続ける巨大な市壁だ。

堅牢な市壁は最上部に胸壁が建ち並んでおり、そこに人がいたとしても摩^パ天^{ベル}楼^{ベル}以外から知る事は出来ないだろう。

その市壁の北西、天辺に結ばれた通路の上でベルは大の字になって伸びていた。

アイズとの訓練の後、アスカの稽古を受けた結果である。

「……頃合いか。今日の鍛錬はここまでとする」

「……」

白み始めた空を見上げ、古鐘の声は擦り鳴らされた。疲労困憊で意識が飛んでいるベルを一瞥して、アスカは武装をソウルに溶かし振り返る。

そこには、真剣な瞳で彼らを見つめるアイズの姿があった。

「……もう、おしまい？」

「ああ。貴公との訓練における疲労も加味して、ここまでだ。これ以上は後に差し支える」

「……」

金色の視線を下に向けて、アイズは考え込んでいるようだ。真剣さを保つ美貌には、どこか困惑が浮かんでいる。

その意図を察したアスカはベルにエストを振りかけ、アイズの前に近寄った。

「何も、特別なものを見出だせない。そういった顔をしているな、貴公」

「……えっと」

「隠す必要はない。貴公の目的など、初めから察している」

囁くようにアスカが言うと、アイズはバツが悪そうに視線を逸らした。表情に乏しい顔とは裏腹に、アイズの体は人差し指同士を突付き合って罪悪感を表している。

それを眺めるアスカは爪先立ちで背伸びをして、そつとアイズに耳打ちした。

「貴公がそれを望むなら、私の持つ力の一端を見せてやろう」

「！」

「いずれベルにも見せるつもりだったものだ。ならばこの限られた鍛錬の先、いつしか見せる時が来る。それを待つが良い」

「……」

「話は以上だ。ベルは、任せる。私は先に戻らせてもらおう」

言うだけ言ってアスカは立ち去る。トコトコと遠ざかる灰髪を見

送って、アイズはベルに視線を移した。

そこではまだ、ベルが目覚まさずにぐったりと伸びている。

「……ちよつと、だけ……」

意味もなく周りをきよろきよろ見渡して誰もいない事を確認したアイズは、倒れるベルの姿勢を正して、頭を優しく自分の膝に乗せた。そして雪のように白い髪を、そつと撫でる。

「……ふふ」

金の少女が白兔を膝に微笑む光景に、優しい風が駆け抜けていった。

「うわっ!? きゆ、急に火が強く!? ……あれ、熱くない……?」

「……リルルカか。何をしている」

「ア、アスカ様!? いつの間ここに来たのですか!」

アスカが『市壁外縁』に設置した篝火から『廃教会』へ転送すると、寝間着姿のリルルカが居た。

呆気にとられた表情で腰を抜かして魔石灯でこちらを照らしてくるリルルカを助け起こし、アスカは簡潔に説明する。

「ここに篝火があるだろう」

「え、あ、はい」

「全ての篝火は繋がっている」

「はあ」

「その繋がりを辿り、私はここに転送してきた」

「……転送?」

「端的に言えば、一瞬の移動だ」

「………まあアスカ様がとんでもない事をやって常識をぶっ壊してくれやがりましたよ……リリへの嫌がらせじゃないでしょうねこれ」

臆気ながら本質を理解し、リルルカは盛大に顔を顰めた。距離という意味の消滅、運搬という概念を打ち壊す力。転送というまるで馴染まない言葉の意味を不幸にも理解してしまったリルルカは、さつさと

思考を切り替えてアスカに尋ねる。

「それで、その転送というのはリリにも使えるのですか？ もしそうであればあらゆる意味でダンジョン探索が楽になるのですが」

「いや……試してみなければ分からないが、おそらくは無理だろう」

「そうなんですか？」

「先例がある。力のある魔術師^{メイジ}だったが、原理を紐解いても使用できなかった。

篝火は不死の故郷。故郷の恩恵を授かるのなら、やはり不死でなければならぬのだろう」

「……不死？」

「ああ。貴公にはまだ説明していなかったか。丁度良い、ベルへの口止めも含め、私について少し話しておこう」

それからリルカは疲れ気味のベルが帰ってくるまで、こんこんと“灰”、そして火の時代について説明された。

戻ったベルが「どうしたのりり!？」と心配するくらいやつれたリルカは、想像以上にやべー奴だったアスカがやらかしそうな未来を想像して、「あはは、もうどうにでもなーれ☆」と投げやりになっていた。

端から見れば、ベルの一日は実に過酷である。

早朝、日も出ぬ時間からアイズとアスカの訓練を受ける。

朝から昼にかけてダンジョンに潜り、正午に小休止。

そのまま夕方まで探索に精を出し、ギルドで換金した後はエイナの授業。

これまで以上に厳しくなった授業にへ口へ口になりながら帰宅。

夕食を食べ、明日の準備を終えたら早めの就寝だ。

これを一週間、【ロキ・ファミリア】の遠征まで続ける事になるベルは、果たして無事でいられるのか。それを神のみぞ知ると言えば、神々に大爆笑されるだろう。

では、アスカは一日をどう過ごしているのだろう。

基本はベルと同じだ。少年の行く末を見たいと願う“灰”は、まる

で軽嶋カルガモのようにベルの後ろに付き従う。

早朝の訓練は言わずもがな、ダンジョンでも戦う兎のような少年の後ろには大抵灰髪の姿がある。

だがそれは、いつもではない。アスカには不死ゆえに得た『使命』があるからだ。

第一の使命は『ベル・クラネル』。不死の少女にとって、彼そのものが使命に等しい。

第二の使命は『隻眼の竜の討滅』。まだ果たされてはいない。今は伏し、機が熟すを待つ。

第三の使命は『ウラノスの約定』。彼の大神より与えられし、使命の一つ。興味は薄く、ただ果たすのみ。

そして第四、最後の使命。それはきつと、『灰』がこの時代に現れた理由。

この分かれた世界が、『灰』を必要とした。それ故に最後の、だが真なる不死の使命なのだ。

大袈裟な話だが、この『使命』故にアスカがいつもベルの側にいる事はない。ベルの側にいる必要がない時、アスカは『使命』のために動く。

アイズの訓練二日目、午前中で探索を切り上げたアスカはベル達と別れ、ダンジョン内を放浪する。現れるモンスターは《レイピア》で魔石ごと貫き、『ドロップアイテム』だけ回収して奥へと進み、やがて袋小路の『ルーム』に辿り着いたアスカを待っていたのは一人の魔道士だった。

「来たか。時間通りだな、我が師よ」

「そういう貴公は早いな。我が弟子よ」

待っていたのは、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

都市最強の魔道士にして、新参新米の魔術師である。

『魔術師』と『魔術師』は明確に違う職業だ。

字面は同じでも、火の時代の後と前に生まれた両者は根本的に異

なっている。

『メイジ』は『魔導職人』だ。特殊な効果を発揮する『マジックアイテム』や魔道士の杖を製作する等、魔法関係の品を扱う者たちを総称して魔術師メイジと呼ぶ。それは火の時代、ヴァインハイムに存在した『魔法鍛冶』達に近い。

対し『ソーサラー』は、現代の魔道士をより探求者の方向に特化した存在だ。ソウルの深淵に近づかんとする火の時代の魔術師ソーサラーは、時に倫理すらかなぐり捨て貪欲に知識を吸収し、魔術を探求し続けた。

魔道士とは方向性が違うだろう。彼らもまた知を追うが、他方冒険者であるが故に、それは力の一種、迷宮ダンジョンに挑むための手段なのだ。

故に新米魔術師となったリヴェリアは、『魔術師メイジ』ではなく『魔術師ソーサラー』である。それもかつての魔術師ではなく、アスカのような不死、あるいは冒険者に近い魔術を手段とする者だ。

アスカとしては探求者の側面を歩んで欲しいのだが、それは我儘というものだろう。所詮彼女らは『契約』により師弟関係を結んだだけの二人。

『契約』の条件だけが彼女らを縛る。その一つとして継続的な師事を約束したアスカは、リヴェリアの魔術行使を一通り観察していた。

最も基礎的な魔術である【ソウルの矢】と上位魔術の【強いソウルの矢】。

初歩的な応用魔術の【ソウルの太矢】と上位魔術の【強いソウルの太矢】。

ファランの魔術であり、最も名の知られる使い勝手の良い【ファランの短矢】。

魔術剣士のために開発された【ソウルの大剣】とそれにファラン独自の調整を施した【ファランの速剣】。

同じく剣術を修めた魔術師に愛用される【魔力の武器】と【魔力の盾】。

ヴァインハイムの竜の学院において密かにあった裏の魔術である【隠密】と【音送り】。

以上がリヴェリアに課題として渡していた『魔術のスクロール』の内容だ。毎日の師事を行えない都合上、独学で行える範囲を押し付け、もとい課題としていたのである。

「威力は上々、詠唱精度も良し。非の打ち所のない魔術行使だ。」

この様子では近く、私の教えられる事も無くなりそうだな」

「いや、まだまだ理解し切れない理論が多い。先達がいなければここまで物にはなっていないさ。」

お前には教えて貰いたい事が山ほどある。悪いが付き合ってもらうぞ、我が師よ」

「構わない。時間の許す限りは、貴公の探求に付き合おう。我が弟子よ」

「恩に着る」

師と弟子と呼び合う関係にどこか楽しいな雰囲気振りまくりヴェリアは、素早い詠唱を紡いで「強いソウルの太矢」を撃つ。

すぐさま放たれた青白いソウルの光は、今まさに産まれようとしていた『ダンジョン・リザード』を壁ごと粉碎した。

深い蜘蛛の巣状の亀裂を残す「強いソウルの太矢」の威力をアスカは賞賛する。

「素晴らしい。もう一端の魔術師を名乗っても良いな。貴公はやはり、最適だ。」

となれば難点^{ネック}は、やはり『記憶スロット』か。これを選んだのも、それが理由だろうか？」

「ああ。威力と精神力効率^{マインド}を突き詰めれば【強いソウルの太矢】が最も扱いやすい。」

だがそれは、『記憶スロット』が一つしかない都合上でもある。いくら破格の効果を持つとはいえ、容量が少な過ぎる。

これでは利用できる範囲も高が知れている。どうにかならんものか……」

「ふむ。どうにかは出来るが、それは条件に含まれんな」

「ふっ、だろうとは思っていた」

リヴェリアは軽やかな笑みを口元に描いて、アスカを見遣る。壁の

破壊痕を見分する灰髪の小人族は、いつもと変わらぬ半眼の無表情だ。

Lv.6^{レベル}であり都市最強の魔道士と謳われ、王族妖精^{ハイエルフ}の身の上でもあるリヴェリアをアスカはまるで特別扱いしない。それがどこか嬉しくて、リヴェリアはアスカとの一時を楽しんでいた。

身分への囚われを否定する彼女にとって、ありのままの少女は得難い存在なのだから。

そう思っていると、ふと銀色の瞳と視線が合う。少し顔を傾けるリヴェリアに、アスカは左手を差し出した。

小さな手のひらに、青白い光が収束する。

「だが、私にそれは有益だ。だから貴公に、『記憶スロット』を増やす術を教えよう」

そう言つて手のひらに現れたのは、いくつかの異なる形状をした指輪だった。屈んでそれを見るリヴェリアは、顎に手を当てて首を傾げる。

「ふむ……『マジックアイテム』の類か、これは？ 何やら奇妙な魔力を感じるな」

「それに近い物と言っておこう。これらは特別な力を秘めた指輪。火の時代において特殊な効果を持つ装飾は、みな指輪の形を取っていた。

これらもそうだ。『記憶スロット』を増やす、単純だが強力な効果を持った指輪である」

「成程、『ステイタス』補助効果のある装身具^{アクセサリ}のようなものか。

……使つてみても構わないか？ 貴重な物だろう、不躰である事も自覚している。

それでも、この身で確かめたい。これは、私の知らない『未知』だ」
「いいだろう。欲しければくれてやる。貴公の身を以て、確かめてみる」

「感謝する、我が師よ」

丁寧に礼を尽くし、リヴェリアは恭しく指輪を受け取る。

【白教の司祭の指輪】【暗月の指輪】【南の司祭の指輪】【聖女の指輪】

【深みの指輪】。

片手の指を全て埋める数の指輪は、合計で『記憶スロット』を八つ追加する。一つ装備する度に記憶の回廊が深まっていく感覚を覚えながら、リヴェリアは五つの指輪を右手に嵌めた。

「……これで、『記憶スロット』は九か……今ならば、いける。その確信がある」

「そうか。ならば我が弟子よ、語りたまえ。」

自らの【魔法】を『記憶スロット』に刻み、その業を示すがいい」

古鐘の声に感応するように、リヴェリアの足元から魔法円が展開される。

【九魔姫】^{ナイン・ヘル}リヴェリア・リヨス・アールヴ。二つ名の由来はその魔法にあり。

『詠唱連結』。彼女にのみ許された魔法特性。詠唱を繋ぎ合わせることで魔法を変容させ、威力を上げる。

攻撃、防御、回復。三種の魔法に三段階の階位。都合九種の魔法を使うが故に、【九魔姫】^{ナイン・ヘル}と謳われる。

攻撃魔法第一階位【ウイン・フィンブルヴェトル】。

攻撃魔法第二階位【レア・ラーヴァテイン】。

攻撃魔法第三階位【ヴァース・ヴィンドヘイム】。

その内、攻撃魔法に属する三段階を流れるようにリヴェリアは発動させた。

正確には発動待機。発動直前まで詠唱し、待機し、次には破棄して新たな魔法を構築する。

それらを僅か十秒足らず。魔道士の常識を完全に打ち砕く破格すら超えた『無詠唱』。

世界最強魔道士の魔法を火の時代の魔術師として使用したりヴェリアは、最後の魔法を破棄し、急速に消費した精神力^{マインド}に立ち眩みを起こして片膝をついた。

「くっ……予想していた通り、精神力^{マインド}の消費が著しい……だが、為したぞ……！」

私の魔法の連続発動……！　これまで到達し得なかった『未知』と『高み』を、初めてこの眼に映し得た……！

ああ、これは、何という——甘美な、代え難い情動の表れか——！
「流石だな、リヴェリア。だが貴公、酔っているぞ」

「ああ——ふふふつ。分かっているさ。すぐに醒ます、醒ますとも……」

知らず弧を描いていた唇に触れ、額まで手を伸ばすリヴェリアは、乱れたソウルの流れを整える。

ソウル酔いは魂ソウルの乱れ。揺らぐが故に逸脱し、見えざるものを瞳に囚とらう。

醒ましたければ、内を見よ。記憶の廊こそ戻る道。心失くさば、二度とは帰れぬ。

そう教わったリヴェリアは、記憶を見つめ、自分自身を取り戻す。酔いの鎮まる感覚はアスカの行いで覚えている。それを辿り、戻ったリヴェリアは、紅潮していた頬も熱を引いていた。

「……この感覚はどうにも慣れんな。あるべきものを、あるべきでない姿に戻しているようだ。」

いや……そう感じるからこそ、私はソウルに酔うのだろうか」

「そうだ。そしてそれこそが、才の証。せいぜい囚とらわれないうようにする事だ。貴公が言葉も解さぬようになるのは、私とて困る」

「……そうはなりたくないな。私はまだ、未だ手のかかるあの娘を見放すつもりはない」

「その意気だ、リヴェリア。それで——何を見て、何を知った？」

貴公が魔術を学ぶ条件、私の知らぬ『未知』の打破を、果たしてもらおう」

凍える太陽のような銀の半眼がリヴェリアを捉える。下から見上げてくる灰髪バルウムの小人族を見返し、妖精エルフの王族は培った知識と経験から先の出来事を分析する。

「……まず言えるのは、『記憶スロット』に登録した魔法は極めて速攻性に優れるという事だ。」

『無詠唱』。それがもたらす利点は超長文詠唱に近づく程大きくな

る。

また安定性にも優れている。流石に『魔力暴発』イクニス・ファトウスがなくなるわけではないが、従来に比べれば驚くほど制御しやすい。

代わりに、汎用性と拡張性を失う。『記憶スロット』に登録された魔法は常に一定の効果を発動する。逆に言えば一定の効果しか生み出せず、調整が利かない。

お前を見る限り出来なくはないのだろうが、効果を上げるにしろ下げにしろ、かなりの訓練を必要とするだろう。少なくとも今の私には出来ん。

総評としては、『記憶スロット』は「魔法」を「魔術」に落とし込む。自由度を犠牲に安定的、いや安易な魔法行使能力を得る。

これはそういった、革新的だが可能性に乏しい術と位置づけるべきだ」

ここでリヴェリアの言う可能性とは、『記憶スロット』のもたらす変化の事ではない。

本来魔法とは、魔法種族や精霊のみが扱う力。それを開花させるには、『神の恩恵』フアルナにより可能性を引き出す必要がある。

それはその者ただ一人が持ち得る唯一。オリジナル他に類似せぬ、神々すら見通せない下界の『未知』。

だが『記憶スロット』に限って言えば、それはない。『記憶スロット』は今ある魔法を型に嵌めて安易に扱う術、即ち可能性への挑戦を捨て、既存の安寧を貪る行為に他ならないからだ。

初めは神々も満面の笑みで迎え入れるだろう。だがすぐに飽き果てる。『記憶スロット』に頼り切りの者に可能性はなく、神々の望む『未知』もまたない。

それを見抜いたりヴェリアは、『記憶スロット』を答えてではなく手段とすべきだと考えた。より高みへ至るための手段であり、安寧に停滞する事はあつてはならないと、『神時代』最初の魔術師は判断したのである。

「……成程な。有用性は多大にあれど、特筆すべきものがない。いや、特質と呼ぶべきものが生まれぬ。貴公はそう考えるわけか」

「ああ。これはあくまで手段、あるいは補助として利用すべきだ。頼り過ぎてはいけない。」

これにのみ寄りかかれば、『魔術師』としては大成しても『魔道士』の芽が腐り落ちる。

教えるのなら、十分な注意が必要だ。少なくとも私が教授する時は、そうするだろう」

「ふむ。分かった。参考にしよう。」

それで、リヴェリア。他に気がついた事はあるか？」

「そうだな……魔法によって使用する『記憶スロット』の容量が違う。これについてお前は何か知っているか？」

「それは詠唱の長さに関係している。相応の記憶領域を求められるが故の違いだ」

「成程……『記憶スロット』に刻む魔法は吟味すべき、という事か。これは後で考えるところでしょう。」

さて、我が師よ。まだ時間はあるな？　あまり教えを乞う機会を得られない身の上だ、出来る事はやっておきたい」

「いいだろう。何をやりたい？」

「まずは短時間で『記憶スロット』に魔法を刻む効率的な方法だが――」

仄暗いダンジョンの中で師と弟子の交流は続く。

後に最初の魔術師として名を馳せるリヴェリアは、今はまだ、新米の赤子であった。

「――以上が、リヴェリアと交わした師事の全てだ」

迷宮都市オラリオの北西、廃墟が立ち並ぶ街外れの居住区。

その中の目立たない場所にある入念に封鎖された廃屋敷の地下で、
“灰”はフェルズと会っていた。

目的は【魔術】の教授。ヘスティアの許可を取り、リヴェリア相手に経験を積んだ“灰”は深夜、フェルズの魔工房アトリエに赴いている。

「助かるよ、“灰”。特に【九魔姫】ナイン・ヘル直々の魔術考察は非常に参考にな

る。

如何に永く生きているとはいえ、この分野では赤子も同然だ。愚者フェルズの名の通り、出来るだけ先達に学びたいのさ」

襪ぼくぎぬ褌衣のような黒フードの奥でカラカラと骨の鳴る音がする。白骨の体しか持たないフェルズは、おそらく笑っているのだろう。

それにほとんど興味を持たない「灰」は、『魔術のスクロール』を取り出してフェルズに渡した。

「では貴公も、基礎から魔術を学ぶがいい。私は奥の空き部屋で霧を張っておく。試し撃ちがしたければ来い」

「ああ、分かった。既に竜の二相を聞き及んでる身だ、自力で使えるようになってみせるさ。」

……それにしても、霧か。君のそれは本当に不可思議だ。世界を断つなんて、そうそう起こり得る事じゃないだろうに」

「そうでもない。類稀なる力、尋常ではないソウルの持ち主は、そのソウルによって次元を歪ませる。」

私のソウルも、もはや尋常のそれではない。故に力を行使すれば、自ずと次元は断たれ、世界は霧に分かたれる。

それだけの事だ。最も、私以外に霧を形作る人間など、この時代で眼にした事はないがな」

「そうか……ソウル、ソウルか……それもまた研究意欲をそえられる……なあ、「灰」。私にもソウル酔いを醒ます方法を教えてくれ。

才があるとは思っていないが、もしかしたら研究の途中に酔うかも知れない。だからきつと、必要だ。」

……それに何より、酔っ払いの魔術師メイジなんて、目も当てられないだろう?」

黒ローブの奥から白骨の頭蓋を晒して、楽しげにフェルズは笑う。それを見据え、一瞬瞬いた「灰」は、どうしても良さそうにソウル酔いの醒まし方を教えるのだった。

灰色の岩石で構成されたダンジョン『中層』の一角では、剣戟の音

が鳴り響いていた。

片や激しい戦闘で鋸のしぎりのように刃の毀れた大剣を握るのは、寧猛な牛頭のモンスター、『ミノタウロス』。

両角を折られ、片目すら潰された牛頭人体の怪物は、全身に負った傷と引き換えに『知性』を得たと云うように、粗雑だが確かな『技』で大剣を振るう。

片や不動を保つのは、たくましい体躯の獣人。軽装の、だが間違っても軽いとは言えない分厚い装甲で限られた箇所を覆う、2Mメドルを超える筋骨隆々の大男。

【もうじゃ猛者】。『最強』にして『頂天』。都市唯一のLv.7レベル、オツタルである。

武骨な面差しの猪人ポアズは片手の装甲で大剣を受け止める。完全防御。

小動こゆるぎもしない異常な『耐久』補正で攻撃を止めたオツタルは、同じく大剣を振りかぶり、ミノタウロスに叩きつける。

加減された、しかし仮借なき一撃。防御ごと斬断され深い斬り傷を負うモンスターは痛苦の咆哮を轟かせ、怒りを目に戦いを学ぶ。

そう、ダンジョン『中層』の一角では、剣戟の音が鳴り響いていた。今は、無音だ。周囲に数多の武装を突き刺し、鋭い眼差しで唯一の出入口を睨むオツタルの息遣いすら聞こえぬ無音。

戦い、調教したミノタウロスは、『マジックアイテム』で眠らされ大型カーゴに詰められている。

オツタルは自らの主神より『使命』を与えられている。

それは美の女神が執着している少年の、因縁を断ち切る事。

少年の白い魂。美神の眼を焼く程に輝く、純粹で透明な光。それを淀ませる原因を、過去を乗り越える事で克服させるためだ。

そのためにオツタルはミノタウロスを鍛えた。未だ至っていない少年の器を、冒険者へ昇華させる——あるいは女神の寵愛を戴くための、洗礼として。

「……」

しかし。しかしだ。オツタルが鍛えた『ミノタウロス』は、これだ。三・体・目である。

前二体は、もういない。加減を誤って潰したのではない——殺されたのだ。

二度もオツタルに不覚を強いながら、その影すらも掴ませぬ何者かによって。

「……」

一度目は、何十体も抜選し、これと思ったミノタウロスを鍛えていた時。

オツタルをして身が竦むほどの、汚泥の大海に飲み込まれたかのような凄まじい殺気に気を取られた一瞬、階層を超えて放たれた魔法の結晶に牛頭は貫かれた。

二度目は、更なる抜選を繰り返し、ようやく目に適った個体を苛烈に鍛え上げた後。

何者かの妨害を察したオツタルが、かつて一人遠征を敢行した際の、深層を歩く気構えで警戒していた時。

背後に気配を感じ、僅かな時間で数十に及ぶ剣戟を閃かせ、気配が消えた頃には怪物の首は呆気なく両断されていた。

そして、三度目。もはや猶予はない。幸運にも見出した一頭を限界以上に虐げ鍛え、間に合わせるために完成させた。

殺させるわけにはいかない。これ以上の遅延は、課せられた『使命』の失敗と同義。

オツタルは彼の女神の名を穢すまいと、全霊を以て臨んでいた。

「……」

『敵』は、おそろくすぐにも現れる。

一度目は地上の深夜だった。二度目もまた、翌日の深夜。

ブラフの可能性もあるが、オツタルの勘がそれはないと断じていた。

敵は、必ず現れる。まるで三度目が通じないと知っているかのように、必ずオツタルの前に立ち開かる。

そう確信する猪人は、ピクリと頭の猪耳を動かし、突き刺した武器の一つを手を取った。

黒色の大剣。オツタルでなければ特大剣とも呼べる肉厚の重刃を握り、2 Mを超え^{メトル}る偉丈夫^{いしやうふ}は構える。

立ち込める霧。唯一の出入口を塞ぐ色のない濃霧。

——そこから滲み出るように。小さな、小さな灰色の“不死”が、【おうじゃ猛者】の戦場に踏み入った。

現れたのは、灰髪の小人族バルウムだった。

オツタルはその存在を知っている。

曰く、『あの子の後について回る何か』『白い輝きに惹かれた誘蛾』。関心がなさそうに呟く敬愛する女神の言葉を、オツタルははつきりと覚えている。

奴がそうだ。奴に間違いない。

油断なく大剣を構える猪の獣人は、灰髪の間を漂う暗い銀の半眼と相対し、確信する。

女神が口にした『魂の色が見えない者』。

二度に渡りミノタウロスを抹殺した『妨害者』。

オツタルが一瞬の隙を晒す程の『殺意の源』。

それら全てが、目の前の老木のような存在感を放つ小人族バルウムと重合する。

奴は——『敵』だ。

オツタルが全ての意識を切り替え、万全の態勢で戦闘に臨むに、それ以上はいらなかった。

対し、灰髪の小人族バルウムは。

両手のひらを小さく開き、瞬間現れた武装を掴む。

それは異形の頭骨。巨大で元が何かも分からぬ、異形の骸骨の半身が縫い止められた十字槍。

かつて公爵の娘、眠りを守る騎士が用いた《狂王の磔》を、二本手にした“灰”は。

ただ歩き、ただ武器を垂れ下げ。

ただ——凍てついた太陽のような銀の瞳の奥底に。オツタルの姿を囚とらえていた。

先に動いたのは——【おうじゃ猛者】だ。

緊迫した空気を物ともせず、人混みを歩くが如く距離を詰める。灰は、容易くオツタルの『死線』を超えた。

故に、一閃。

小手調べ、などとは露ほども思わない。一撃で仕留めんとする大剛斬が音を置き去りに灰髪に迫る。

それを、灰は。受ける事も避ける事もせず。

大剣は呆気なく、灰の右肩から太腿まで斬り裂いた。

「」

オツタルに微塵の動揺もない。致命傷を叩き込まれながら、灰が転じたのは攻撃。

左右から迫りくる《狂王の磔》はオツタルの剣速と同じだ。同レベルの『敏捷』から繰り出される死神の鋏。

防御を捨て、相打ち覚悟で放たれた同じレベルの攻撃。ならば本来、それを防ぐ道理などない。

だが、『完全防御』。読み切っていたオツタルは柄と手甲で難なく防ぐ。

（重い——）

内心では斧槍の一撃の重さに眼を瞠りつつも、オツタルは次の一撃に備えている。

当然だ、これ程の異形の武器、異骨より発せられる尋常ならざる気配。まともな武装であるべくもない。

両側の異形の骸骨が蠢く。暗い眼窩に妖しい光を宿し、存在しない喉から『咆哮』を上げる。

オツタルの『耐久』補正を超えて身を軋ませ、数十セルチC後退させる程の大咆哮。左右から襲いかかる異形の声に、オツタルは眼差しを削り、強引に大剣を振り払った。

大一閃。剣圧で周囲の壁が罅割れる程の一撃を、灰は磔で弾き、だが吹き飛ばされる。

十メドルM程度の間を空けて着地し、再び対峙する両者。

オツタルは大剣を正眼に構え、冷静に敵を分析していた。
スベリオルズ カースウエボン
(特殊武装……呪道具……いや、そのどれとも違う。)

あの武器の仔細は分からん。だがあれは、俺を殺し得る武器だ。油断は出来ん……)

そこまで考えて、厳つい武人の相貌に亀裂が刻まれる。

油断は出来ない？ 何を馬鹿な事を。今の剣合で何を見ていた。
おまえ
自分の眼は節穴かとオツタルは己を叱咤する。

『敵』はまだ、全容どころか片鱗すら見せていない。格上か格下か、それさえも分からない。

手応えがない。気配がない。戦意もなく、ただそこに居る。

目の前の敵はまさしく闇で、正しく闇だ。見よ、正面から背に届くほどの斬傷を負いながら意に介さず立つ姿を。

血は流れず、臓物も零れぬ。人の形をしていながら、明確に生命から逸脱した灰髪を睥睨するオツタルは、ここに来て一切の余念を捨てた。

斃す。否、殺す。刀身が熱を持つ程に柄を強く握り、顔の横に刃を置いて構える。

『絶殺』を掲げた姿勢。それは引き絞られた巨大弓にも、山をも砕く『小さき巨人』にも見えた。

それを見た“灰”は。腕を交差し、深く屈み、翅のように二本の《狂王の磔》を構える。

全ての音が消えた一瞬。互いの眼光のみが行き交った。

そして、瞬間——大激突。

地を砕き、流星の如く突進した“灰”の両斧槍が迫る。

オツタルは歯を食い縛り、渾身の一撃を以て迎撃する。

轟き渡る金属音。周囲の岩が、壁が、天井が碎ける程の大残響。

『頂天』がぶつかり合う刹那の中、オツタルは確かに見た。

その小さな体よりも遥かに長い——《イザリスの杖》を咥える、“灰”の姿を。

「——【ソウルの大澱】」

その瞬間、オツタルの眼前で拮抗する“灰”の姿が澱みに塗れる。

【ソウルの大澱】。永きに渡り深みに沈み、溜まった暗いソウルの大澱を放つ闇術。それは時に、深みから這い出る湿り人たちに憑依するという。

ならば、*“灰”*が纏えぬ道理などない。灰髪は深みのソウルに染まり、溢れ、人によく似た巨大な大澱となつてオツタルを強襲する。

初見の【魔法】。警報を鳴らす危機感。触れてはならぬと全身の毛が逆立つ。

それら全てを噛み締め、全霊で大剣を振り抜いた。

二本の斧槍を弾き、三連撃。縦横に両断し、真向から叩き潰し、深みより現れた大澱を力のみで霧散させる。

その直後。

オツタルの頭上には、三本目の《狂王の磔》を振り下ろす、*“灰”*の姿があつた。

「

武人は瞠目する。

大剣は地面に叩きつけた直後。姿勢は最悪、防ぐ余地無し。

一瞬の後を幻視する。異形の頭骨より生える三日月のような角が、獣人の頭を叩き割る幻覚。

敗北する。『頂天』が、『最強』が、オツタルが負ける。

「——オオオオオオオツツツ!!!」
ふぎけるな。

全ての意識を集中し、オツタルは吼えた。

ここでの敗北は許されない。

それは彼の女神の威光なに泥を塗る。

あの方より課せられし『使命』を、果たせないも同義!

ならばオツタルが敗れるなどありえない。あつてはならない。

勝つのは、俺だ。

咆哮と共にオツタルの全身の筋肉が膨張する。正真正銘、死力を尽くした斬り上げ。

断裂の痛みを発する肉体など無視し、軋みを上げる骨など切り捨て、ただ眼前の『敵』を打ち砕く。

それに全てを懸けた大剛撃が《狂王の磔》とぶつかり合い。刹那の拮抗。

打ち勝ったのは、オツタルの大剣だった。

「――」
《狂王の磔》は弾き飛ばされ、『敵』は胸の中程から頭まで斬り裂かれた。

空中を飛ぶ頭の半分。衝撃で何処かにぶつかるとを待つまでもなく、半固形の血溜まりに成り下がる。

それが壁の染みになった後、残った小人族バルウムの体が天井に叩きつけられ、地に落ちた。

動く気配はない。呼吸も、心音も発していない。

『敵』は、完全に死んでいた。

「……」

残心するオツタルは、己を戒める。

熱くなり過ぎた。何を滾っているのだ、己は。

オツタルがここに在る目的は女神の『使命』がため。

それ以外は全て雑事。意に介す必要のない事柄のはずだ。

なのに今、オツタルは確かに――楽しんでいた。

青い。見た目には分からぬ苦笑を緩く描く。

血振りをし、大剣を納め、灰髪の死体を暫し眺める。去来する空虚

さを抑え、少し俯き、オツタルは背を向ける。

そこには。《狂王の磔》が突き刺さった、ミノタウロスの死体があった。

「――!？」

その時。その時こそ、オツタルは真に驚愕した。

背後で何か蠢いている。土を削り、立ち上がる音がする。

武人は視線のみを背後に投げ――両断に近い傷を負い、頭の半分が欠けながらも。

何一つ、変わらないと云うように。そこには灰髪の小人族バルウムが、立っていた。

「……」

死ぬべきでない怪物が死に、死んでいた筈の死体が立ち上がる。その異常な光景をオツタルは認識し——そして全てを理解する。直後湧き上がったのは、岩漿のように燃え滾った怒りだった。

「……」

「灰」は意に介さない。用は済んだと言わんばかりに背を向け、歩き去っていく。

その無防備な背に、オツタルは大剣を投げた。音を裂く剛剣は灰髪を貫き、胴体の大部分を四散させ、倒れさせる。

悲鳴はなかった。だが今度こそ、死んだ。

ざらりと灰と化していく『敵』の姿を、オツタルは最後まで眼に焼きつける。

——最初から、仕組まれていたのだ。

一体目のミノタウロスを狙撃された時から。二体目のミノタウロスを屠られた時から。

オツタルが『敵』との対峙を決意する過程、そして今の戦いの流れの全て。

死を幻視したあの瞬間、オツタルの意識は全て『敵』に向いていた。

一度も感情を映さなかったあの眼に——凍てついた太陽のような銀の瞳に、囚われていた。

オツタルは、魅入られていた。

「——ツツツ!!」

ドゴンツツ!! とオツタルが壁を叩きつける。破碎というレベルを超え、新たな道を築く程に岩壁は砕き抜かれ、天井や床まで余波が達する。

バラバラと降り注ぐ破片。それを避けもせず、灰の一粒まで消え去った痕を睨み続ける。

「……この屈辱。必ず返すぞ」

憤怒を刻む武人の双眸には、瞋恚の炎が燃えていた。

アイズの訓練開始から五日目。

この日アスカは午前中をリリルカの師事に使っていた。
教えているのは火の時代の道具アイテムの使い方。

アスカは不死であり、手に入れたアイテムの名前、用途、由来をソウルからある程度把握できるが、リリルカにそれは出来ない。

だから一つ一つ教える必要があり、そのために今日の探索は休止して貰っていた。

「うっ……アスカ様、この根つこのような物はなんですか？ ひどく臭うんですけど」

『干からびた根』だ。強い臭気を放つが、その分強い薬効を持っている。口にすれば長く体力を回復するだろう」

「なるほど……効果はあるのですが、このままだとあまり口にしたくないですね。例えば磨り潰したり、薬の原料にした場合はどうなるんでしょう？」

「知らん。現物を持ってくればソウルから読み取れるだろうが、そういった事はやっていない。貴公が試す他なからう」

「うーん……低級の回復薬ポーションに混ぜ込んでみますか。味は……きつとひどくなるんでしょうけれど」

思いついた事をリリルカはリスト一覧表に書き記す。

アスカの教えは午前中だけだ。試したり組み合わせたりするのは後でいい。

「それにしても、火や雷、魔力が閉じ込められた壺に精神力マインドを回復させる効果のある草、鍛冶師泣かせの装備を修復する金属粉、塗る事で付与魔法エンチャント代わりになる松脂やら何やら……」

火の時代の道具アイテムは本当に多彩ですね。これは骨が折れそうです」

「私からすればこちら側の道具も大概だ。特に『マジックアイテム』は効果・効能が多岐に渡る。目につく物は買い込んでいるが、把握は面倒だな」

「ああ、道理で『底なしの木箱』にガラクタばかり入ってたんですね……お互い、考えることが同じなんて、因果ですねえ」

「こんな収集癖はリリには流石にありませんが」と側に置いてある木箱から『ゴミクス』を取り出す。何のひねりもなく、ただのゴミク

ズだ。

なぜこんな物が入っているかというところ、なんと「売っていたから買った」らしい。売る方も大概だが買う方も頭の螺子が外れている。つまりアスカの事であった。

何に使うかと聞けば、特に使い道もないらしい。せいぜい殺した敵の死体に添えたり口の臭い蛇に食わせたりするくらいだと言っていた。何を言っているのか分からないのはリリルカだけだろうか。

「侵入者として不死、同胞ならば通す礼儀がある」とアスカは語っていたが、ゴミクズを添えたりあの忌々しい糞団子を投げつけるのは礼儀ではない。それは冒涇の類であるトリリルカは冷めた目で見ていた。アスカの身の上、火の時代と不死の話聞いた時思ったが、不死という連中はどうもおかしい。不死となった時、人として当たり前欲求を失い、戦いばかりが娯楽になるからだろうとアスカは言うが、それ以前の問題な気がする。

……いや。故郷を追われ、人の世に帰れず、亡者となるまで戦い続ける運命を考えれば、それも致し方ない話であるかもしれない。文字通り遠い世界の出来事ではないアスカの語りに、リリルカはそれ以上、同情や憐憫を重ねるのを止めた。

午後はベルとアイズの訓練に参加する。

一通りの説明を終え、試行錯誤するリリルカを置いてアスカは『市壁外縁』に転送した。

市壁内部を登る四角い螺旋階段。その一室に設けられた篝火に現れたアスカは、そのまま胸壁が並ぶ市壁の天辺を歩く。

ややあつて、見えてきたのは訓練に励む少年と少女。隙を見つけ、あるいは晒し先導する【剣姫】^{アイズ}に、拙い技で少年は必死に食らいついていた。

「……」

暫し、アスカはそれを眺める。

『技』と『駆け引き』。それは【ステイタス】によらぬ、冒険者自身

が得なければならぬ『力』を扱う術だ。

『技』は技術。C、あるいはm^{セルチ}単位の精密な動作。弾き、受け流し、避けては斬る。極めれば一撃の元に怪物を屠る『必殺』に成り得る、弱者が強者に立ち向かうための術。

『駆け引き』とは立ち回り。自身に有利になる動き、あるいは敵を不利に貶める算段。隙を作らせ急所を突く、隙を見せては反撃を狙う。『知性』故の読み合い、未来を競う騙し合いは、刹那の一瞬に明暗を分ける。

どちらも覚えのあるやり方だ。アスカは、己がまだ『灰』の呼び名しかなかった頃を思い出す。

棄てられた神の都『アノール・ロンド』。古くより王に仕える銀騎士達が守り、巨人兵、ガーゴイル、雷のレッサーデーモンどもが侵入者を悉く討つ。

それを凌ぎ、太陽の王女へ至る道に、彼の四騎士の長と処刑者は待っていた。

竜狩りオーンスタイン。処刑者スモウ。

王女を殺すべく侵入を果たした『灰』を竜狩りの騎士は幾度も貫き、残忍な処刑者は何度でも叩き潰した。

雷光の如く敏捷に優れたオーンスタインと、重厚な戦車のように全てを轢き潰すスモウ。

奴ら二人の連携を崩すには、死を積み重ねた先にある埒外の『駆け引き』が必要だった。

鉄の生まれる地を見出し、莫大な富と繁栄を築いた鉄の古王、その在りし日の記憶。

アーロンに教えを乞うた騎士達の守る回廊の果てには、陽光を背に鎮座する騎士アーロンが在った。

血を吸う妖刀、異様の剣技。尋常ではないソウルを求めてやって来た『灰』が遭遇したのは、尋常ならざる卓越した技巧の持ち主だ。

残光すら見えぬ刃が『灰』を斬り裂いた。攻撃は全て避けられ、あるいは受け流され、千の屍を積んでなお掠り傷すら与えられない。

『灰』を貫いて血を吸った妖刀は暗い血の妖刀となり、闇より生ま

れた故に闇への抵抗力を持たない。『灰』を塵となる程に斬り捨てた。斬られ、斬られ、ただ斬られ続ける。途方もない死の螺旋が積もり、それはほんの僅かずつ、『灰』の『技』を磨いていった。

あの日々を繰り返したからこそ、今の『灰』はここにある。何度でも死に、死に続け、そして最後に奴らを死に至らしめた。竜狩りは斃れ、処刑者は敗北し、異邦の騎士は自刃した。

『灰』の前に立ちはだかった、火の時代の英雄達。それに比べれば少年と少女は、器はあれど至っていない。

アイズは雛だ。いざれ現れるだろう英雄の雛。まだ成長の余地があり、飛躍の先がある。

ベルは卵だ。何になるかも分からない生まれぬ卵。殻を破らぬ限り、何者にもなれない。

彼女ら彼女らの進む先に、何かがあるのか。ベル・クラネルを尊ぶアスカは、それを見るために共に在った。

「精が出るな。随分と扱ってやったように見える」

「あ……アスカ」

一区切りついた所でアスカが声をかける。第一級冒険者の感覚で居るのが分かっていったアイズは、さらりと黄金色の髪を風に流して振り向いた。

「ベルの調子はどうだ？ そろそろ何か掴んだか」

「……もう少し、かな。あと何歩か踏み込めれば、物になると思う」

「そうか。では、頃合いだな」

「？」

何か頷く幼女にアイズが疑問符を浮かべるも、アスカは気にせずトコトコとベルに近寄る。膝に手をつけて肩で息をしている少年に「少し休んでおけ」と言い、アイズと向き合う。

「アイズ。私は貴公と約束したな。この鍛錬の中で、私の持つ力の一端を見せてやると」

「……！」

「今がその時だ。ベル、貴公も良く見ておけ。」

古い時代より伝えられる『ソウルの業』。自らのソウルを武器と

為す、かつての英雄達が振るった業を」

灰髪の小人族バルウムが虚空に右手を伸ばす。

同時に、彼らの周りには霧が立ち込めた。

空を隠し、陽の光を遮る、球形に展開された濃霧。アイズが驚いていると、少女の金の瞳に青白い光が反射した。

小さな手に集まるソウルの光。集い、形を為し、現れたのは――折れた直剣。

半ばより折れ鏢もなく、見るも見窄みすぼらしい、闇色の刃。

柄より零れ、刃先に滴る闇が、垂れた地面を汚染する。その光景にぞわり、と肌を逆立てたアイズが、警戒を込めて声を発した。

「……………それは、何？」

「私が最も信を置く武器。私の半身。その一振り。

これより見せる業に名は無い。そこに到れる者が、自ずと扱った剣技。

故に見せるのならば。私のソウルと同質であるこの刃こそ、相応しい」

「――！」

どろり、と刃の闇が蠢く。

ソウルすらも染め上げる闇が、柄より、刀身より溢れ――折れた刃の先へ伸びていく。

形成される闇。ぬらりと空を斬り、現れる実体無き直剣つるぎ。

それは、自らのソウルを刃に這わせ纏う。英雄の到りし、ソウルの業”だった。

「…………」

アイズは何も話さない。眉間を狭め、汗を流し、無意識に剣を構えている。

怖い。アイズの心の大半を占めているのはその感情だ。

アスカが怖い。”灰”が怖い。あの悍ましい悪意を煮詰めたかのような刃が怖い。

僅か数Mモデル。それはアスカの間合いだ。振るえば、斬られる。抵抗も許されず。

アスカがそれをするか、ではない。それを幻視する程に恐怖の感情が湧き上がっているのだ。

闇に浸したかのような長衣。

灰髪を纏める、半分に割れた王冠のような髪留め。

凍てついた太陽のような銀の半眼。

それらにただ、闇を刃と化した折れた一振りが添えられている。

ただそれだけなのに、そこに在るのがまるで恐怖の化身に見える。

何人に相対し、何人を許さず、何人の全てを殺し尽くした——怪物ばけものに見える。

「どうした。アイズ」

ぞぶり、と耳朶に染み込む古鐘の音。擦り切れた少女の声に、はつとアイズは意識を戻す。

気付けば、浅い呼吸を繰り返していた。恐怖に吞まれようとしていた。

小さく、何度も頭を振ってその恐怖を外へ追い出す。そしてアスカのそれと類似した魔法の事を、声に絞り出した。

「……………それは、付与魔法エンチャント……………」

「似て非なるものだ。これはソウルの武器、ソウルの刃。属性はあれど、根本が異なる」

言つてアスカは、左腕だけに防具をつける。肌の露出の無い手甲、それに覆われた前腕の内側を闇の刃で斬り裂いた。

金属に沈み、弾かれる刃。手甲に瑕疵はない。だが手甲が消えた後、腕に残されていたのは——浅い斬り傷だった。

「……………」

「これが、この業の本質だ。火の時代の戦いとは魂ソウルの削り合い。如何に堅牢な鎧を纏おうと、この業の前には意味を為さない。

肉体はソウルを縛り、ソウルは肉体を縛る。肉体の傷はソウルの傷となり、その逆もまた然りだ。

この業はソウルを削る。実体が無い故に鎧では防げず、攻撃を完全に断つ盾か、肉体の外に命を持たねば防げない」

「……………それが、竜だとしても？」

「そうだ。元より火の時代とはそういう場所だ。人も、竜も、神であれその本質は魂ソウルを懸けた殺し合い。下水のネズミとて初歩の初歩だが、この業を扱い獲物を狩る。

それを極めた者が辿り着く境地こそ、刃の結実。自らのソウルを武器と為す、敵を戮りくすという誓い。

それがこの、名も無き、有り触れた、不変の『ソウルの業』である」
柄を胸に寄せ、騎士の誓いのように闇の刃を天に衝く。幼い顔の半分が刃に隠れ、長い睫毛の下の暗い右眼に、一瞬だけ火の輪が灯ったようにアイズには見えた。

「……その業。私にも、使える？」

右手を振り、闇の刃を振り捨てたアスカに「剣姫けんき」は問う。その眼に宿るのは、黒い炎。在りし日の決意と覚悟の先に、少女は巨大な『竜』を見ている。

「さてな。いずれ辿り着く、と言いたいが、存外貴公らはソウルに馴染まない。

私が教えれば可能性はあるだろうが、教えた事はないし、教えるつもりもない」

「教えて、くれないの？」

「見せるだけだと言った筈だが？」

「……いじわる」

「何とでも言うがいい。少なくとも貴公には、まだ早い。私はそう考える」

「……」

不服、を全面に出すアイズ。足元で心の中の幼女アイズが「貴方を詐欺罪と期待損失罪で訴えます！」と書かれた旗をブンブン振っていた。渡したのは仮面巨人である。

「灰」のソウルに毒されつつある少女アイズを幼女アスカは完全に無視した。そしてずっと無言だったベルへ近づいていく。

(……?)

その時、アイズは違和感を覚えた。

ベルは怯えている。Lv.6の、数多の死線を潜り抜けたアイズで

さえ恐怖の感情が大半を占めたのだ。小兎のような少年には酷な環境だっただろう。

だが、それだけではない気がする。何か、言葉に出来ないが——初めてではない。そんな感じがしたのだ。

それも「はっ!?!」と意識を取り戻して「怖がってごめんなさい!?!」と何度もアスカに謝るベルの姿で霧散した。何だったんだろう、とアイズは首を傾げたが、その思考はアスカの声に打ち切られる。

「さて。折角だ、もう一つ、見せておきたい物がある」

「!　ゾウルの、業?」

「いや。特別な物ではないし、技とも呼べぬ代物だ。だが知っていて損はない。少なくともベルはな」

「ぼ、僕?」

名指しで指定されたベルが驚くも、アスカは無視して武器を構える。ベルに向けられる折れた直剣、それに戸惑う少年に、古鐘の声は落とされた。

「ベル。かかってこい」

「え、でも……」

「全力で構わない。今の貴公に出来る全てを、私にぶつけてみる」
「……分かった。行きます、アスカさん」

困惑を捨て、ベルは構える。かつて評価した日から大分マシになった構え。霧に囲まれた市壁の天辺で、少年は腰を落とし、疾駆する。

まだまだ拙い『技』。一人前には及ばぬ『駆け引き』。愚直に突進する少年の武器を、アスカは見つめ。

ベルが肉薄した刹那。折れた刃は振り抜かれ、ベルの《短刀》を撃ち払った。

「え——」

その衝撃に耐えきれず、少年の手から《短刀》が弾け飛び、霧にぶつかって地面に落ちる。

ベルは、尻もちをついていた。腰を地面に落としたり、完全なる無防備な姿勢。そこへ刃の先を向け、アスカは滔々と語る。

『『パリイ』。受け流しと同義だが、それを以て敵に隙を晒させる。』

技とは言えない。敵の攻撃、敵の獲物を全力で撃ち払っているに過ぎないのだから。だが、命を懸けた戦闘の最中。これを成功させれば、『致命の一撃』すら狙えるだろう」

刃を下げて、片手でベルを助け起こす。同時に、周囲を覆っていた霧が消えていく。

「ベル。これは『賭け』だ。『技』でも、『駆け引き』でもない。命を賭した逆転の術。失敗すれば、貴公は死ぬ。

だからこそ、これを覚えておくがいい。貴公に足りないものが、これにはある」

晴れゆく濃霧。現れる世界。いつしか空は朱色に染まり、地平線の彼方に太陽が沈んでいく。

「これは『無謀』ではない。『自棄』でもない。命を捨てるために、あえて苦境に飛び込む『意志』だ。

忘れるな、ベル。常に前を見続けろ」

夕焼けに灰髪が燃え上がる。左の肌を照らされ、右の体を闇に隠す。それはまるで、光と闇の化身のようで。

「先の見えぬ闇に、一步を踏み出す。それこそを人は——『勇氣』と呼ぶ」

少年は初めて。家族^{アスカ}の事を、神様みたいに綺麗だと思った。

その後も訓練が続き、太陽が沈んで夜も更けた頃。

ベル、アスカ、アイズ。そして——ヘステイアの四人が、裏通りを歩いていた。

一度軽食を取りに都市に戻った所、たまたまヘステイアがバイトしているジャガ丸くん店に行ってしまった、なし崩しに一緒になったからだ。

この時アスカはヘステイアに「なんでヴァレン某との訓練を止めないんだー！」と怒られたがどこ吹く風である。ベルのためになる、そう判断すれば主神^{ヘステイア}の神意などどうでも良かった。

手を繋ぐベルとヘステイアのやり取りを横目に、アスカは暗い夜道

を歩く。

街灯はない。いや、道幅のある裏通りの、端に並ぶ魔石街灯は破壊されている。

人工の光の消えた真の夜。既に意識を切り替えているアイズと同様、灰髪の小人族バルウムは暗い銀眼を鋭く削る。

僅かな猶予。それが過ぎ去った時、現れたのは暗色の防具に身を包む、バイザーを被った猫キャットピープル。人の男だった。

トンツ、と軽い音が鳴る。石畳を蹴る猫キャットピープル。人の踏み込み。

ベルを狙い、ベルの反応を振り切った男の獲物、槍の穂先を防いだのは、神速で《デスペレート》を振り抜いたアイズと、虚空より現れたアスカの《スピア》だった。

「——ツツ!?!」

「!?!」

「」

弾き飛ばされる猫キャットピープル。人の男。金の双眸を吊り上げるアイズ。無言で《スピア》を構えるアスカ。

一者と二者は一瞬の無音を交差させ——激突。

少年と女神を置き去りにする、凄まじい剣戟の応酬が繰り広げられた。

「お、おいおいおいっ!?!」

背後で女神ヘステイアの叫びが聞こえる。

関係はない。アスカは、《灰》は経験のみを積み重ねた熟達の動きで《スピア》を操り、猫キャットピープル。人の男を追い込んでいく。

向こうは一名、こちらは二枚。アイズと《灰》は協力の経験もある。連携し、『駆け引き』を重ね、『技』を以て襲撃者の退路を断つ。

「——ツ！・手前……!?!」

想定以上の早さで追い込まれたのか、男は忌々しそうに顔を歪め《灰》を睨んだ。常人ならばそれだけで意識を消し飛ばされる殺気の槍。それを風のように無視し、《灰》は必殺の隙を狙う。

頭上から四つの影が襲いかかって来たのは、その時だった。

「アイズさん!?! アスカさん!?!」

ベルの叫びが裏路地に響く。アイズと「灰」が動くのは同時だ。

「灰」が眼前の猫キャットビープル人を抑え、アイズが空からの強襲に対応する。剣、鎚、槍、斧。閃く四つの得物を、「剣姫」は三日月型の斬閃でまとめて弾いた。

空中で弾かれたものの、応えた様子もなく降り立つのは四人の小人族バルウム。猫キャットビープル人の男と同じ暗色の装備で揃えた襲撃者を「灰」は見据え、距離を取る。

黒衣の五人と二人の「戦姫」せんき。数の有利は覆され、「灰」の苦手とする多対一になりかねない状況。

それに臨み、「灰」は《パイク》を消して左手に《ハルパー》を持ち。隣に立つアイズに囁いた。

「アイズ。あの四人の小人族バルウムを頼む。少しでいい、その間に片付ける」
「……分かった」

頷き、不壊剣デスブレイトを構える「剣姫」けんき。わざと聞こえる制限ぎりぎりの音量で口にした「灰」の言葉は、犬歯を剥く猫キャットビープル人の殺意を膨れ上がらせた。

襲撃者との間に走る緊張の密度が上がり、弾け、再びの激突。アスカに敵意が向かぬよう剣の結界を張って四人の小人族バルウムの足止めをするアイズの側を駆け抜け、「灰」は猫キャットビープル人の男と刃を交わした。
「すぐに片付けるだど？ 糞女くそが、調子に乗るんじゃないやねえ」

「……」
「灰」は答えない。殺意を滾らせる男の激情など知った事ではない。
ただ、その方が早くて楽だと経験則で判断した。交差する襲撃者の槍と《ハルパー》。幾度か散る火花に隠れ、「灰」はちらりと背後を見遣る。

そこでは、「灰」の尊ぶ少年と家族である女神に、新たな四人の黒衣が襲いかかっていた。

「――余所見している暇があるのか？ 死ぬ、糞女くそ」

刹那キヤットビープル。猫人の音を置き去りにする槍が「灰」の体を貫き。

「灰」が前進し、小さな手のひらが男の顔を掴むのは、同時だった。

「!?」

白い指の間から見える猫キャットピープル 人の眼が驚愕に見開かれる。だが、遅い。もはや無意味だ。風に踊る灰髪の間から、見開かれた銀の右眼が覗く。

その銀が、闇に染まり。火の輪が男の眼に映り。

「——【魅了】」

男の顔を掴んだまま燃え上がる手のひらから、妖しい紅い光が閃いた。

そして、直後。有り得べからざる事に、猫キャットピープル 人の男は沈黙した。

「……」

体を貫いた槍を「灰」は引き抜く。猫キャットピープル 人はされるがままだ。

そのまま《ハルパー》を《呪術の火》に切り替えた「灰」は、両手に炎を灯し、呟く。

「三体抑えろ。順次、方をつける」

「……」

命じるだけ命じて、疾走。ついで奔った残影が、四人の連携に苦戦し、剣の境界維持を強いられるアイズに助太刀する。

「——なっ!?!」

「何のつもりだ!?!」

驚愕を叫ぶ小人族達バルウム。猫キャットピープル 人が予想外に乱入し、四人の連携が僅かに崩れる。

その一瞬。誰よりも速く動いた「灰」が、槍を持つ小人族バルウムの顔を掴み。

右眼の火の輪と、紅い光が妖しく燃えて、槍の小人族バルウムも沈黙する。

それから掃討戦だ。一人欠け、連携が完全に崩れた小人族達バルウムにアイズ、猫キャットピープル 人の男、槍の小人族バルウムが襲いかかり、「灰」が頭を掴み、右眼を見せて【魅了】する。

戦闘は、もう終わっていた。最後の一人を【魅了】した「灰」は、武器を納めアイズに伝える。

「終わりだ。剣を納めろ、アイズ」

「……………何を、したの……………?」

「魅了」した」

「!?!」

端的に告げられた事実には、アイズは真性の驚愕で瞠目する。それを他所に、「灰」は上質な紙を取り出し、さらさらと共通言語コイネを連ねていく。

十秒程立ち、書き終わった「灰」は丁寧に紙を畳んで豪華な封筒に入れて封をし、キャットヒール猫人の男に渡した。

「貴公らの飼い主に渡してこい。それと、あの連中を回収して行け」

「……」

キャットヒール猫人は無言のまま、屋根伝いに消えていった。四人の小人族バルウムもべルに倒された黒衣を回収し、去っていく。

そして、「灰」は。都市の中心に聳え立つ、夜に在りてなお雄大な摩天楼を見上げ。

「邪魔立ては赦さない」

そう、暗い言葉を落とす。戸惑う少女に「何でもないと手を振って、「灰」は、アスカは少年と女神の下へ歩いていった。

アイズとの訓練、六日目。

この日、アスカはベルの探索の連れ添いを休み、とある工房にやって来ていた。

都市北西のメインストリート。そこに並ぶ大規模商店の一角にある、「ヘファイストス・ファミリア」支店の工房である。

店に備え付けられた小規模の『鍛冶師』の城。そこで燃えるような紅髪を首筋で纏めた隻眼の女神は、椅子に座って手元を見つめていた。

「我が主神の命により参上した。私に何用か、神ヘファイストス」
「……」

最低限の礼節を保って工房に入室したアスカに、ヘファイストスは答えない。無言のまま、手に抱く『楔石の原盤』を眺めている。

アスカは待った。今日一日は時間がある。このまま日の暮れるま

でここに居ても構わない。

気の長い不死は、生真面目にヘファイストスの返答を待ち続ける。

「ねえ、貴方」

やがて。

数分か一時間か、時を数えず待ち続けたアスカに、ヘファイストスは声をかけた。

「貴方は“これ”を、神々の鍛冶素材って、そう言ったわよね？」

「ああ。その通りだ」

「……けれど、私は“これ”を知らない。他の鍛冶神だって、きつと分からない。“これ”は天界にだって、存在し得なかった物だから」

『楔石の原盤』を顔の近くに寄せて、ヘファイストスは呟く。黒い岩のような、力を秘めた金属のようなそれを見つめ、鍛冶の女神は茫洋と言葉を紡ぐ。

「ねえ、貴方。変な事を言ってもいいかしら？」

「何だ？」

「……“これ”はね、“火”に生なりたがってる。どう見ても燃える物じゃないし、おかしな事を言っている自覚はあるのだけ——“これ”を作った神ひとは、きつと“火”を望んで、“これ”に託したのよ」

「——ほう」

そこで。

初めてアスカは、“灰”はヘファイストスを眼に映した。

それは興味ではなく、値踏み。これまでただ、主神ヘステイアの神友しんゆうという位置付けでしかなかった鍛冶ヘファイストスの女神に対する、利用価値の有無を視る眼。

“灰”にとって予想外の、だが不死であるならば確実に興味を引くであろう言葉の続きを幼女は促す。

「それで、貴公はどうするつもりだ？」

「……分からない。“火”に生りたがってるというのは分かる、けれどその方法が分からない。」

だから貴方と呼んだのよ。“これ”を私の下まで運んできたのは貴方だから、きつと何かを知っているんじゃないかって、そう思った

の

「ふむ。残念だが、答えそのものは私は持たないだろう」

だが、と。アスカは続ける。右手を差し出し、ソウルを灯す。

収束する青白い光。此処ではない何処かを見遣るヘファイストスの瞳に、暗い、光を持たない「火」が揺らめいた。

「それは……？」

『人の種火』。火の時代が過ぎ去った後、光無き闇の時代に見出された火。

正確には火ではない。これの本質は、人間性だ。どろりとしてなまあたたかい、優しい人間性の塊。それが『人の種火』である」

「種火……」

「そうだ。私の知る鍛冶技術には、高度な鍛冶と呼ばれるものがある。それは特別な「火」を用いた、『変質強化』。武器の性質そのものを換え、新たなる力を込める鍛冶の業。

『楔石の原盤』が火を求めるというのなら、おそらくそれ以外にはない。

それは、『種火』に生なりたいのだ」

『種火』……そう、そうね。「これ」は、『種火』。その原料。神作り手が願ったのは、新たなる『種火』。

「これ」は、そう生なれなかつた哀れな遺品なのね。だから、貴方が持っていた。だから、私の手に渡った。

——私は「これ」を、『種火』にしなければならぬ」

何処か虚空に話しかけるように呟くヘファイストスは、気付いているだろうか。

『楔石の原盤』を見つめる己の心が、かつて火の時代にあつた名も無き鍛冶神と感応し、同化していることに。

「灰」にとつては、どうでもいい。それが利益になるのなら、神の一柱程度、安い代償だ。

「良いだろう。私が手を貸そう。」

先導は任せる。貴公の指針が、それを『種火』とする道筋になる。それにはきつと、貴公の鍛冶の腕が必要だ」

「ええ、分かっている……ねえ、貴方。まずはどうすればいいかしら？」
「そうだな。まずは、原盤のソウルを視るべきだろう。私が補助する。
その眼を見開き、視るがいい」

アスカは眼を閉じ、暗い光を集わせる。

異質な光、火防女の献身、小人の狂王の暗い業。

それを躊躇いなく、ヘファイストスに用い——「火の時代」と「神
時代」の、人と神による鍛冶が始まる。

炉に火が灯り、鉄床アシベルを叩く音色が響く。

やがて。その全てが止まった後。

遙か分かれた時代の果てに、一つの『種火』が産声を上げた。

迷い種火

武器の変質強化を行うための種火

名も無き鍛冶の神は死の間際

楔石の原盤を作り、遺志を刻んだ

火の女神ヘファイストスの手に渡り

感応したのは、必然だったのだろう

「不壊」「吸収」「神秘」

三種の貴石を使った変質強化が可能となる

人の種火

武器の変質強化を行うための種火

闇の時代が訪れ、だが人はなお火を求めた

結果生まれたのは、光を生じぬ生あたたかな揺らぎ

それは火を模した、どろりと蠢く人間性だという

「深淵」「邪教」「呪詛」

三種の貴石を使った変質強化が可能となる

オツタルは迷宮を彷徨さまよっていた。

三度目の敗北、身を焼く屈辱から数日。武人の目に叶うミノタウロスは現れない。

もはや時間はなかった。ダンジョンの壁より現れる産まれたてのミノタウロスすら拔選し、オツタルは愚直に『使命』を果たさんとする。

諦めなどしない。オツタルにとって、あの御方は全てだ。あの御方のためならば命を擲なげつ覚悟があり、それはとうの昔に終えていた。

武人は探し続ける。愚直に、ただ愚直に。己にはそれしか出来ないのだと言わんばかりに、ミノタウロスに会うては値踏みし、これでは駄目だと屠る。

「……」

常が増えて厳つい眼差しに、失敗の二文字はない。刻一刻と迫るタイムリミット制限時間、女神の失望が頭を過ぎるも、最後まで諦めるつもりはなかった。

「……む」

それが幸を呼んだのかは分からない。中層を歩く2Mメドルを超える武人は、異質な気配に脚を止める。

ズシン、ズシンと床を罅割る音。薄暗い通路の奥から重いきようわん登音を

響かせ、現れたのは——巨大な頭蓋を被ったかのような『ミノタウロス』だった。

「亜種……いや、変異種か……?」

オツタルは呟く。

他のミノタウロス同様、猛々しい筋肉に覆われた巨躯。巨大な大斧ネイチャーウェポンの天然武器を両手で持つ姿の威圧感と同種とは思えぬ程逸している。

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「……」

下級冒険者ならば動けなくなる程の咆哮。微塵も動じず、ゆらりと片腕を上げるオツタル。

振り上げられた大戦斧を、武人は片腕で受け止める。

「――!」

そのまま握り、大斧ごと持ち上げてオツタルはミノタウロスを投げ捨てた。怪物の巨躯が一瞬浮かび、ドゴンドゴンと音を立てて転がる。

「……」

立ち上がろうとするミノタウロスを前にオツタルは考える。

上々だ。『奴』に殺された三匹を加味しても、それらの上を行く程に上々。

だが、亜種と思しき出で立ち。何よりその力は、ともすれば――

「……いや。迷っている暇はないか」

呟いて、武人は武器を周囲にばらまく。

ミノタウロスの得物はそのままがいい。加減したとは言えオツタルの『力』に耐えたあれならば、十分。故にここから戦いを以て、怪物に『知性』を叩き込む。

(……加減は出来ません。フレイヤ様)

一言、懺悔をするようにオツタルは心中口にした。それは、あるいは想定以上になるかもしれぬと、そう考えたが故に。

少年の洗礼は、過酷なものとなる。

少年の試練は、類を見ないものとなる。

だがそれでも。あの御方の寵愛を受けると言うのなら。
超えてみせろ。武人は大剣を握り、咆哮を上げるミノタウロスに叩
きつけた。

不転心誓

その日の事を、ベル・クラネルはよく覚えている。

シンと静まり返った夜。肺の息も凍りそうな冬の日の事。

あまりの寒さに目を覚ましたベルは、隣で寝て貰っていたアスカがいない事に気付いた。

アスカは人よりも体温は低いけれど、夜の闇の中で抱きつくとは何処か安心する心地良さがある。

それを求めて幼いベルは、広いと言えない家の中を探し、けれど見つけられなかった。代わりに見つけたのは、開かれた玄関と積もった雪に残される、月明かりに照らされた小さな足跡だ。

こんな夜中に外に出たのだろうか。どうしてだろう、と幼少のベルは思う。そして躊躇しながらも、その足跡を辿ってみる事にした。

真冬の夜は寒々しく、吐く息が白く凍えた。家を出て少し、早くもベッドが恋しくなる。けれどベルは震える体を抱きしめて、アスカの物と思われる足跡を追った。

幼少の頃、ベルはアスカに懐いていた。あまり喋らない寡黙な人だったけれど、いつもベルの側に居てくれた。嬉しい時も、寂しい時も、楽しい時、苦しい時、振り向けばいつもアスカがそこに居て、感情を分かち合ってくれた。

だから目を覚ました時、アスカがいないと知ってベルは寂しかった。一緒にベッドで寝て欲しくて探しに出た。

そして少しだけ、好奇心もあつたのだ。こんな夜中、こんな寒い日に、アスカは何処へ行ったのだろうか。

年に一度、何処かへ旅立って、一月程でふらりと帰ってくるアスカは、何をしているのか教えてくれなかった。ベルがいくらねだっても、灰髪の幼女は頭を撫でるだけだった。

だから、気になった。もしかしたら一緒に旅立てるかもしれない、なんて、幼少のベルは夢を見ていた。

——そう。夢を見ていたのだ。

村の入り口まで続いた足跡。それが急に消えて、辺りを探すベルの

前に、巨大な獣が現れるまでは。

それは、家と見紛うくらい大きかった。

それは、銀色の毛並みを逆立てていた。

それは、冷たい空気に透き通る氷柱のように美しく、恐ろしい牙があった。

それは、無感動にベルを見つめる、真っ黒な瞳があった。

——それは、怪物ではなく。いつか祖父の話に聞いた、『銀獣』と呼ばれる獣だった。

『銀獣』。それは冬の、冷たい吹雪の中を彷徨う獣。

遙か北にある常冬の地において、吹雪の止まぬ山から生まれるとき、生まれて、そして息が絶えるまで、冬に寄り添い、冬を追って移動する獣だ。

目撃情報は少ない。数が少ないのか——あるいは、見た者を生かして帰さないのか。

おどろおどろしい語りにはぐると震えるベルに大笑して、祖父は言ったものだ。普通、死を招く冷たさの襲う冬に外なんて出ない。だから多くは、遠目にも見ないのだと。

だがもし。遭遇してしまったのなら。茶目っ気のある祖父は表情を改めて、真剣に言った。

決して眼を逸らしてはならない。『銀獣』は、冬の恐怖に負けた者を喰らう。

だからどんなに怖くても、眼を逸らしてはならないのだと、祖父はベルに言い聞かせた。

『銀獣』と相對して、ベルは頭が真っ白になった。

言葉が出ない。表情は凍りつき、喉が引き攣って呼吸すらままならない。

目玉が零れそうなくらい目を見開いていた。深紅の瞳には、何の感情も示さない『銀獣』の顔が映っていた。

立ち続けていたのが奇跡だ。体が震えなかったのは、圧倒的な死を予期したからだ。

動けば、死ぬ。真っ白な意識がそれで埋め尽くされ、ベルは何も出

来なかった。

数秒か、数分か。ベルと『銀獣』は相対し続けていた。時間を経れば、心が溶ける。凍りついた意識の底で、恐怖が首を擡もたげ、這い上がってくる。

次第にベルは震え始めた。涙を浮かべ、浅い呼吸を繰り返し、カチカチと歯が鳴った。

幼少のベルに力はない。手段もなく、意志もない。

限界はすぐそこだった。祖父の教えも少しはベルを守ったが、すぐに恐怖に負けてしまった。

そうしてベルが、限界に達しようとした、その時。

深紅の瞳ルベライトに閃く、一条の銀光。

気がつけば、『銀獣』の首は空に飛び、大きな銀毛の体がゆっくりと倒れた。

「

その日の事を、ベル・クラネルはよく覚えている。月明かりの下に舞う、生まれより伸びる灰色の髪。少年の前に降り立ち、倒れる獣の血を浴びる幼女。獣血の鮮紅に濡れた——銀の瞳と、アスカの横顔。それをベルは、忘れる事ができない。

がばりと、身を乗り出すように少年は跳ね起きた。

ドクドクと暴れる心臓。激しい発汗、見開かれた目。

荒い呼吸を鎮めるように、脈打つ胸を強く押さえる。

「はっ……はっ……はっ……」

時間は、こここのところ起きる時間より少し早い深夜。

ヘステイアとりりはまだベッドで眠っている。目を覚ます様子はない。

アスカは、何処にもいなかった。

「……………ふう」

それに少し安心して、はっとベルは頭を振る。ついで胸を強く握

り、動悸が治まるのを待った。

「……………行かなくちゃ」

暫くの間跳ね起きた姿勢のままだった少年は、毛布を畳み、一通り準備をして地下室を後にする。

外に出ると、まだ月と星空が輝いていて、それを横に切り取るような黒い市壁が見えた。

その天辺に、憧憬の少女と——きっと家族が、待っている。

アイズの稽古、最終日。

朝焼けの訪れる空の下、《ダガー》を握る少年は繰り出される剣の鞘を捌いていた。

受け流し、あるいは避ける。全てではない、いくつかは体に当たり痛みを生む。それを堪えて少年は、ひたすらに目の前の憧憬に追いつこうとしていた。

前を見る。迫り来る鞘。恐怖が湧いて、避けようとする。それを呑み、踏み越えて——反撃。

防御を超えて、その先へ。攻撃を受け流し、一刀を前に突き出す。響き渡る金属音。《ダガー》は、あっさりと弾かれた。

それでも。少年の一撃は、確かに届いたのだ。

「これで、終わりだね……………」

「はい……………」

「……………」

「今日まで、ありがとうございました」

「私も、ありがとう。……………楽し、かったよ。

……………それじゃあ、頑張つてね」

「……………はい」

地平線に太陽が昇る、市壁天辺。

少年と少女は言葉を交わし、お礼を重ねてお互いに背を向ける。

歩き去っていく金の憧憬。それを一度だけ振り返って、ベルは胸壁の影に立つ、家族の下へ足を向けた。

「終わったか。ベル」

「……うん」

「では、帰るぞ。我らの家に」

擦り切れた声でそう言っつて、灰髪の少女は先導する。市壁内部の螺旋階段、いくつもの長通路を経て、外に繋がる扉を開けた。

「——ねえ、アスカさん」

先にアスカが出た、その時。市壁内部に留まるベルは、俯いて、言葉が続ける。

「一つ、聞いてもいい？」

「何だ？」

「アスカさんがリリと最初に会った時——どうして嘘をついたの？」

「——」

それは、そう遠くない過去の記憶だ。

リリルカがまだ、心を定めていなかった時。アスカが金と暴力で契約を結んだ、次の朝。

挙動不審だったリリルカの背後から挨拶したアスカは、「初めましてだな」と言った。

リリルカを挟んで、ベルとアスカは向き合う形だった。少年の深紅は、ルベライト幼女の銀を映していた。

その銀が。半眼に渦巻く、ソウルの光が。

アスカの言葉が嘘であると、雄弁にベルに語っていた。

「アスカさんとリリは、先にどこかで会っていたんじゃないの？」

「……」

「それなのになんで、あの時『初めまして』って嘘をついたの？」

「……」

「……ねえ、答えてよ、アスカさ——」

「ベル」

その声は、いつもの古鐘の声だった。それなのに恐ろしく掠れていて、ひどく冷たかった。

アスカが振り返る。市壁内部の暗闇にいるベルには、昇ったばかりの朝日に眩むアスカが影に隠される。

陽光を裂く灰髪ひるがえの影。その中で、凍てついた太陽のような。銀の半眼だけが、少年を見ていた。

「ベル。貴公はそれを、本当に聞きたいのか」
「っ……」

何の変哲もない言葉だった。それなのにベルは、気圧された。

少年の足が一步下がる。知らず手が震え、頬に汗が流れる。顔は大きく歪んでいた。

ソウルの翳かげる、銀の瞳と見つめ合う。それに耐えきれなくて、ベルはつい、目を逸らしてしまった。

ふう、と、透명한息をつく音が聞こえる。

「駄目だな。教えられない。貴公には、まだ早い」

「……どうしても、言ってくれないの？」

「ああ。貴公がそれを望むなら、答えよう。だが、それは真に、貴公の望みとなってからだ。」

今のように、逃げる内は。答えてやれる程、私は優しくない」

「……」

「さあ、帰るぞ。家族が待っている」

「……うん」

灰髪をひるがえ翻すアスカが先に進む。ベルは暗い顔で、幼女の背についていく。

その表情に。少年の心に、宿っていたのは――

「うわ……。神様、ごめんなさいっ、僕もう行きますっ！」

「べ、ベル君っ、ちょっと「ステイタス」が……！」

「ごめんなさい、帰ってから聞きますっ！ アスカさん、先に行つてきま
すっ！」

「ああ」

あわただ慌しく部屋を後にするベルに生返事をして、アスカは割れたカップを片付ける。

取っ手が割れた、壊れたカップ。全壊こそしていないものの、テー

ブルに散らばった白い欠片を丁寧に集め、袋に詰める。

扉に伸ばしかけた腕を下げ、溜息をつくへステイアがアスカに声を掛けたのは、その時だった。

「アスカ君、聞いてほしい事があるんだ」

「何だ？」

「ベル君の『ステイタス』の事なんだけど……」

へステイアは戸惑いながら、掻い摘んで説明する。一通り聞いた後、原因を知らないかと問われ、けれどアスカはふるふると首を横に振った。

「残念だが、私には分からない。『神の恩恵』は元より門外漢だ。それが『未知』だとして、『既知』も満足に知らぬ私に、言える事はない」「そうかい……アスカ君、今日はなんだか嫌な予感がする。サポーター君もそうだけど——ベル君を、守ってやってくれ」「ああ。分かっている」

袋をソウルに変え、器にしまったアスカは、先に行ったベルとリルカを追いかける。

「あれ、アスカ様？ お早いですね、ベル様と一緒に来るんじゃないかなかったですか？」

《静かに眠る竜印の指輪》をつけ、音もなく屋根伝いに駆けた幼女は、先に神塔バベルの前で待っていたリルカに合流する。

「へステイアが少しな。何か、嫌な予感がするそうだ」

「嫌な予感、ですか？ うーん、神様の勘って奴でしょうか？」

「恐らくはな。今日は、気を引き締めていけ」

「アスカ様がそう仰るなら……あ！ ベル様——！ こっちですよ——！」

半信半疑という表情だったりリルカは、ベルの姿を見かけるとはあつと顔を明るくして手を振る。こちらに走ってくる少年は「あれ!! アスカさんがもういる!？」と後ろを振り返っては二度見する。

そちらに構わず、灰髪の小人族バルウムは、神塔バベルの遥か最上階を、暗い銀色でじっと見ていた。

ダンジョン9階層は寒々しかった。

気温ではない。早くに潜ったが故に、冒険者の姿が平時より少なく、人影がない。

常より人気のない迷宮。怪物の息遣いさえ聞こえない。そして、背の低い草花が茂る広い空間^{フロア}。

きな臭い。平素、連れ添うばかりのアスカはこの日、パーティの先頭を歩いていた。

「珍しいですね。アスカ様が前を歩くななんて」

「う、うん……そうだね……」

「……ベル様？　どうかしたのですか？」

「……リリ、ここで装備を取り換えちやってもいいかな？」

「あ、は、はい」

普段と様子が違うベルにリリルカは慌てて装備を渡す。

『ヴェルフ・クロツゾ』製の軽装鎧^{ライトアーマー}、エイナから貰った緑玉色の《プロテクター》、リリルカが買ってきた両刃短剣^{バゼレード}。

そして神様からの贈り物である《神の・ナイフ》。

完全武装のベルを背後に、アスカは油断なく周囲を見渡す。《ブロードソード》と《鉄の円盾》を垂れ下げる幼女は、不意にぴたりと静止した。

聞こえる。獰猛な荒遣いの息が。地を踏み砕く轟然とした足音が。

広いルームの二つの入口。ベル達が通ってきたのは背後、そして正面の暗い洞穴から――現れる。

暴圧的な筋肉の巨軀。巨人の両腕、蹄の脚。赤黒く強靱な体毛で随所を覆う、白い頭骨を被ったような怪物。

『ミノタウロス』。下界において、最も名の知られた怪物の一体^{モンスター}。

刃のない石の大斧を両手で持つ二本角の猛牛は、膨張する筋肉を戦慄^{わなな}かせ大咆哮を轟かせた。

『ヴウ、ヴオオ——ヴヴオオ!!』

耳に劈^{つんぎ}く怪物の叫び。体の芯まで震え上がらせ、恐怖で立ち尽くさ

せる咆哮。

それでベルは動かなくなった。恐怖に引き攣った表情は絶望に染まり、固定された案山子のようになる。体を揺さぶるリリルカの悲鳴も届かない。

地響きを上げ、突進する怪物。大戦斧を掲げ、爛々と輝く赫の炯眼あか けいがんが獲物を見定める。

ミノタウロスの尺度で三歩まで迫った刹那。

間に入り大戦斧を防いだのは、アスカの《タワーシールド》だった。『ヴモオ!?!』

「……」

左手に持つ巨大な金属盾が怪物の大斧を押し返す。同時に放たれる追撃は、幼女の身に余る幅広の特大剣《グレートソード》。

致命的な断圧音を破裂させる鉄塊剣が叩きつけられ、しかしミノタウロスは知能を以て防御した。

衝撃が弾け、一人と一体の間に距離が空く。着地し、睨み合う両者。身の丈に合わない武装を構えるアスカは、擦り切れた声で言葉を発した。

「退け、ベル」

「……ア、アスカ、さん……?」

「ここは私が受け持つ。貴公らは退け。時が経てば、私も追いつく」
「で、でも……!?!」

未だ動かぬ体で、恐怖に吞まれながらもベルは逡巡する。それに、灰髪が揺らめいた。

「ベル。私に三度も、同じ事を言わせるなよ」

「——ツツツ!?!」

細い首が周り、灰髪の間から銀の瞳が垣間見える。幼い唇から発せられたのは、古鐘のようで、けれど冷たい擦り切れた声。

それはベルを芯から震え上がらせた。それはあの日と同じ瞳だった。

——幼いベルに刻まれた、拭い切れぬ光景きおくと同じ。

「……リリルカ。ベルを連れて行け」

「は、はい！ ベル様、行きますよ!?!」

「待ってよ、リリ……待って……!?!」

かろうじて動くベルを引き摺るようにリルルカは引っ張っていく。緊急に『指輪』を装備した彼女は「ステイタス」以上の『力』で無理やり少年を動かす。

それに抗おうとして、ベルは何も出来なかった。恐怖で脚が竦む、目元には涙が浮かび、力が入らない。

「待って、待ってよ……!?! 嫌だ……嫌だっ！ アスカさんっ……!!」
かろうじて伸ばされた少年の手に、悲痛に満ちた声に乗る。
けれど幼女が、振り返る事はなく。

怪物と対峙するアスカは、家族の気配が消えるまで不動の姿勢を取った。

「……やはり、こうなったか」

そこへ、ザンツ、と蹙音が響く。

現れたのは、2 Mを超える屈強な体格の猪人^{ポアズ}。

【猛者^{もうじゃ}】オツタル。つい先日、眼前の『敵』に『敗北』を喫した武人は、しかしそれを微塵も感じさせぬ厳つい相貌を保っていた。

錆色の瞳だけが、瞋恚を燃やして『灰』を貫く。

「……フレイヤ様が仰^{おつしや}られていた。あの者の魂^{いづ}を苛^{いぼら}む茨^{いばら}は、二つあると」

オツタルは背囊^{はいのう}を解き、数多の武器を地面に突き刺す。

その内の一本を、確^{しか}と握った。

「その片割れが、貴様か」

「……」

『灰』は答えない。オツタルの登場で怯むミノタウロスを含め、全てを銀の半眼に映している。

身の丈に合わぬ武装に包まれた不死は、既に三つ巴を是としてた。

「……これは、雪辱ではない」

『敵』を眺め、ほんの僅かに眼を閉じたオツタルは、次の瞬間、^{まなじり} 眦^{まなじり}を決する。

そして構える巨大な大剣に、完全なる殺意を乗せた。

「全てはフレイヤ様の為に——ここで斃れて貰うぞ」
肉体に全力を漲らせ、武人が宣言する。
不死の幼女、『最強』の冒険者、白骨を被る『ミノタウロス』。
ダンジョン上層に見合わぬ強者達の、激戦が始まった。

走る、走る、走る、走る。

無様に、格好悪く、これ以上ないほど不細工に。

息が続かない。足取りも不確かだ。何度も脚が繯れそうになる。
リリルカが引っ張っていなければ、今にも立ち止まってしまいうだろ
う。

それが、冒険者になった筈の。憧憬に追いつきたいと願う筈の。
家族を見捨てて逃げる、ベル・クラネルの目も当てられない有様
だった。

「ハア、ハア……！ 大丈夫です、ベル様！ アスカ様はお強い人です
！ ミノタウロスなんか、屁でもありません！ きつとすぐに追いつ
いてくれます……！」

懸命に走りながら、励ますようにリリルカが言う。けれど焦燥に満
ちたベルの顔は晴れない。

分かってる。分かってるよ、そんな事は！

あの人——アスカさんが強い事なんて、ずっと前から分かってる
！

だってあの日、僕は——

右も左も分からない、前後不覚になりそうな意識の中。
少年の記憶は、決して忘れられないあの日に飛んだ。

あの日。

冬の夜に『銀獣』に出遭ったベルは。

決して忘れる事の出来ない、情景を目にした。

月明かりの下に舞う、生まれより伸びる灰色の髪。

少年の前に降り立ち、倒れる獣の血を浴びる少女。
獣血の鮮紅に濡れた——銀の瞳と、アスカの横顔。
剣の一振り、『銀獣』を屠った、家族の姿。

いつしかに聞いた暗い物語と重なる、戦いの絵画。
それは幼い少年が。ずっと一緒だったアスカの、言い知れぬ『強さ』
を知った日だった。

『』
何か、声を発している気がする。

血に濡れた灰髪の少女は、ゆつくりとベルを見た。
さつきまでベルを見つめていた『銀獣』と同じ——いや、それ以上
に、無機質な眼で。

「——ッ!?!」
ドクンツ、とベルの心臓が跳ねる。

真冬の寒さより冷たいものが頭から全身に走った。
手が、震える。体の振動が、歯のぶつかる音が、蘇る。

『』
何か、声を発していた気がする。

覚えている筈なのに、思い出せない。声だけが、灰に覆われたよう
に聞こえない。

記憶に残っているのは、あの日の情景だけ。

目の前に立つ、家族の——家族だった人の、姿だけ。
生まれより伸びる灰色の髪。

血斑に濡れた闇色の長衣。

灰と、白と、赤。そして吹雪の山の銀月よりも、美しくて、恐ろし
い——銀の瞳。

「——う、うわあああああああああああああああああああああああ
ああああああッ!?!」

あの日。

ベル・クラネルは、アスカから——“灰”から逃げ出した。

怖かった。

ベル・クラネルは、あの日からずっと怖かった。アスカが——「灰」が、怖かった。ずっと怖がり続けていた。でなければ。でなければ、家族に「さん」なんてつけて呼ばない。それまでは呼び捨てだったのに——あの日からベルは、ずっと敬称をつけていた。

初めて出会った時。

祖父に連れられた灰髪の幼女は、幼いベルに「灰」を名乗った。それを祖父は「灰」じゃあ、あんまりにも哀れだ。可愛げがない」と、「灰」を意味する「アスカ」と呼んだ。

ベルは、それを真似したのだ。同じように、アスカと呼んだ。家族だから。新しい大切な人だから。親愛を込めて、そう呼んだ。ご飯の時も、遊びに行く時も、畑仕事をする時も、夜、一緒に寝て欲しい時も。

ずっとずっと、そう呼んだのだ。

それが壊れてしまったのが、あの日。

あの日から、ベルは——「アスカさん」としか、呼べなくなつた。それは、幼い少年に刻まれた。あまりにも拭い難い、『心傷』だった。

ベルの意識が、現在に戻る。

相変わらず、脚は言う事を聞いてくれない。

自分より小さな小人族リリルカに引つ張られ。無様に、転げ回りそうになりながら走っている。

なんて軟弱。なんて懦弱。

これが——家族を見捨てて逃げる、冒険者だった筈の僕ベルの姿。

こんな様さまが望みだったのか？　こんな結末を目指してここまで来たのか？

こんな情けない、格好悪い、目も当てられないままで——憧憬あのひとに届くと、本気で思っているのか？

「——ツツツ!!」

少年は、限界まで歯を食い縛った。

脚が、止まる。引つ張られていたリリルカの手が離れる。

「!? ベル様!?!」

少女の動転する声が聞こえる。ベルは動かない。

リリルカはすぐに意識を切り替え、またも少年を引つ張ろうとする。ベルは動かない。

その事実少女は息を呑んだ。今のリリルカの『ステイタス』は『指輪』の効果でLv.1にして『力』を極めたと言っても過言ではない状態だ。

それなのに、少年は動かない。リリルカの見上げる少年の顔は、強い決意で満たされていた。

「……リリ。これを持って行って」

「これは……」

「危ない時に使えって、アスカ、さんから前に貰った。『幻肢の指輪』って言うんだ。装備すれば、遠目から姿を隠せる。それでリリなら……一人で地上うへに帰れるよね……?」

「……何をお考えなのですか、ベル様……!?!」

咄嗟にリリルカの手が伸びる。固く握られた少年の手を掴むために。

けれど、それを振り切って——少年は駆け出した。

地上へ続く道ではなく。さつきまで居た、死地へ向かって。

「リリ、ごめんっ……!?!」

「ベル様あつ?!」

「ごめんっ!!」

謝って、謝って、少年はリリルカを振り切る。遠くなっていく少年の姿。呆然と立ち尽くした少女は、けれどはっと首を振って、己に出来る事を全力で努めに走り出した。

走る、走る、走る、走る。

みつともなく無様に——けれど確かな意志を灯して。

ベル・クラネルは疾走する。

頭を過ぎるのは、ずつと一緒に居た家族アスカの姿だった。

(馬鹿だつ、馬鹿だつ!!) 大馬鹿だつ、僕はツツ!!)

アスカは自分よりずつと強い? だからどうした。

自分が行ったところで役になんて立たない? 関係あるものか。

『ミノタウロス』——今も自分の心を業火のように追い立てる、恐ろしい怪物の姿。

逆立ちしたって敵いつこない相手。体軀も力も到底及ばない、生粋の化物。

だから——だから、自分より強い人に押し付けて逃げるのか?

勝てないから、弱いから、そんな理由で家族を見捨てるのか?

これから先もずつと、そんな風にヘラヘラ笑うだけの『雑魚』として、生き続けるのか?

(ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなっ!!)

そんなんじや駄目だ。そんなんじやあ、何者にもなれない。

家族にも、冒険者にも——あの日この胸に焼き付いた、憧れの人に遠目にさえ、近づけない。

そんなんでいい訳、ないだろっ……!?

(アスカさんっ……!)

ベルの脳裏に、幼い頃の日々が蘇る。

寡黙な人だった。言葉では示さず、行動で示す人だった。

最初の朝、寝ずにベッドの横でベルを覗き込んでいたのはすごくびつくりした。

作った食事はものすごく不味かった。何度も何度も失敗して、美味しくなった。

畑仕事も下手くそだった。けれど黙々と続けて、いつの間にか上手くなった。

遊びも、お風呂も、寝る時すら、最初はてんでなっていなかった。まるで『生きる』という事を知らないかのようにだった。

だから、ベルが引っ張った。太陽を見ていたり、地下室に籠ったり、森で佇んでいる幼女を見つけては、幼い少年は笑顔で手を繋いだ。

『どうしてこんなところにいるの?』『ねえ、アスカ! あつちに行こう!』

あの頃のアスカは、されるがままだったように思う。ただ、繋いだ手を見つめて、笑う僕を見て、そっと握り返してくれた。

いつからそれが、逆になったんだろう。泣いたり、立ち止まったりするベルを、アスカが先導するようになった。

強制はしなかった。何も言わなかった。けれどいつも側にいて、前に導いてくれた。

怖がる僕は、差し出された手を握らなかったのに。

眠れない夜があった。あの人は、小さな体で抱きしめてくれた。病気で倒れた日があった。あの人は、ずっと看病してくれた。

森で迷った時があった。あの人は、最初に見つけてくれて、一緒に帰った。

祖父がいなくなっても、アスカはいなくならなかった。ずっと側にいてくれて。ずっとずっと一緒だった。

僕が、心の裡で今も怖がっていると知っていながら。それでも共に、いてくれた。

それが『家族』なのだと言うように。幽かに微笑んで。
(僕は、僕はっ……い！)

——最後に手を繋いだのは、何時だろう。

憧憬のあの日。ダンジョンで金の少女と出会ったあの日。

みつともなく尻もちをつく僕に、差し出された手を握ったのが、最後だろうか。

それ以来、繋いだ覚えがない。

恥ずかしいとか、もう子供じゃないとか、そんなんじゃない。

——きつと、手を差し出されても。僕は繋ぐ事が出来なかった。

(僕は——っ!!)

走る。迷宮の奥底へと。

心を蝕む二つの象徴、ベル・クラネルの『恐怖』が争う死地へと向かう。

先の見えない深い穴が続く道。仄かに発光する洞窟を駆け抜け、少

年は広間^{ルーム}に舞い戻る。

そこには。

散乱する武器の破片と、無傷で立つ『ミノタウロス』。

そして——左腕と右眼の無い、家族^{アスカ}の姿があった。

少年は、絶叫した。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああつっ!?!」

少年の絶叫が、ルームの壁へ無情に吸い込まれていく。

オツタルの姿はもう無い。数多の得物を破壊された武人は、戻って来る少年の足音を感知し、すぐに身を引いた。

ミノタウロスは健在だ。吼える牛頭の怪物はある意味相手にされていなかった。

オツタルは攻撃を防御し、〃灰〃は意に介さない。捨て置かれた怪物は石の大斧を振り回し、それはあえて攻撃を受けた少女の腕と眼を千切った。

言葉にすれば、それだけの事。オツタルは少女を殺し損ない、〃灰〃は武人の武装破壊を優先し、怪物は暴れ狂った。

ただそれだけの事。〃灰〃にすればごく当たり前の結果。手足を無くそうが眼を奪われようが、そんな事はいつも通り。

だから一瞬、分からなかった。少年が戻って来た理由も、絶望に顔を歪ませて叫んだ意味も。

だが、関係はない。

最初に出会ったあの日。ベル・クラネルという人間と邂逅したその時より、己の生き方は定めている。

己の全ては、ベルの為に使うと決めた。だから何の迷いもない。

言葉では無意味と、三度を通じ知っている〃灰〃は、行動によって少年の脚を止めた。

即ち、斬撃。振るわれる瞬間のみ入れ替わった《ゴーレムアクス》が、真空波を放ちベルの眼前に亀裂を築く。

「灰」とベルを分かつ『線』。それは存在しない、だが分厚く両者の前に立ちはだかる『壁』だった。

「アスカさ——ッ!？」

「ベル。あえて、貴公に警告しよう」

隻腕の不死は再び《グレートソード》を握り、古鐘の声を擦り鳴らす。

「そこから前に出れば、貴公の意識を奪う。全てが終わるまで、眠っていて貰う。」

あの『ミノタウロス』は、貴公の手に余る。だから何も譲らない「でも、アスカさん、腕がっ!？」 それなのに、なんで……!？」

「どうの昔に決めている——私は貴公を、守りたいからだ」

ミノタウロスと対峙する、小さな背。怪物と相對するに頼りない背は、しかし巖のように動かない覚悟があった。

言葉を失うベルを置いて、アスカは戦闘を再開する。

大盾を構える腕はもう無い。隻腕の《グレートソード》でアスカはミノタウロスの大斧を迎え撃つ。

火花が散り、金属音が響く。その度に腕の肌が破れ、血が滲む。

盾無き不死に防ぎ切れる攻撃などない。石の大斧を凌ぐ程に、脆い体が壊れていく。

それでもアスカはミノタウロスを殺さなかった。まだ死なない。まだ耐えられる。

ならば目の前で猛る『未知』を、少しでも『既知』に変えていく。それが偏執的^{へんしつ}なまでに縛られた、灰の戦い方だった。

だが。それを見せられるベルは。闇色の長衣から血が滴る瞬間を見た少年は、固まった掌を強く握り込む。

アスカは察する。ベルがまた動こうとしていると。それを防ぐために筋力でミノタウロスを吹き飛ばし、武装を変えようとした、その瞬間。

「——どけよ！ アスカ!!」

放たれたベルの声に、不死は留まり。

少年は、『線』を踏み越えた。

「……僕はもう、逃げたくないんだ……」

「——ベル」

「……貴方の『家族』で、いたいんだ……!」

ベルは、泣いていた。

それは家族を想う涙だった。自分の不甲斐なさを責める痛みの発露だった。

「だから、どけよ……どいてよ、アスカ……」

『ミノタウロス』、そして『灰』。

ベル・クラネルの心を苛む恐怖の茨。

それを今、引き千切り、少年は一步踏み出した。

もう、何からも、逃げないために。

「……」

アスカはミノタウロスから視線を外さない。

銀の眼光の圧力で怪物を動かさなかったために——これから語る言葉を、邪魔されないために。

「ベル。一つだけ、わがままを言わせてくれ。

この『ミノタウロス』は危険だ。貴公の恐怖など、霧に烟る程に強い。

それに貴公が、ベル・クラネルが勝つには——死線を一度、越えなければならぬ」

アスカが構えを解く。《グレートソード》がソウルに消える。

「受け入れてくれなくてもいい。この場はもう、貴公に譲る。

だから、どうか、一度だけ——私の手出しを、赦して欲しい」

「……アスカ……」

振り向かず、幼女は呟いた。その表情がどうなっているかはベルには分からない。

「ありがとう、アスカ」

それでもベルは涙を拭い、はっきりとそう言った。そこにはもう、怯えも、自責もない。

アスカが下がる。ベルが前に進む。眼前には不審げに唸る『ミノタウロス』。

心傷きずに根付く怪物の姿に、少年は漆黒ヘステイア・ナイフの刃と両刃短剣バゼラードを抜く。アスカと家族であるために。過去の恐怖を乗り越えるために。何よりも——今は遠き憧憬あの人に追いつくために。ベル・クラネルの冒険が、始まった。

ベルが繰り出した最初の一手は、「魔法」を使う事だった。【魔法】。ベルには魔導書グリモアによって掘り起こされた炎雷ファイアボルトの可能性と、ヘステイアから授かった【奇跡】がある。

その【奇跡】を、即座に使う。『ミスリル』製の《ヘステイア・ナイフ》を触媒に、ベルは【炉の加護】を発動した。

少年を包む淡い燐光。仄ほのかで暖かい力がベルの耐性、回復力、持久力を引き上げる。

【炉の加護】は、アスカとの訓練でいつも最初に使う奇跡だ。アスカは苛烈で、容赦がない。戦いの途中で【炉の加護】を使う時間なんて与えてくれない。

故に初手。それも【ファイアボルト】のような速攻性を求めたベルは、驚くべき速度で奇跡を発動した。

——沈黙を保っていた『ミノタウロス』。その獰猛な踏み込みに、かろうじて反応できる程度の速さで。

『ヴモオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』
「——ッ！」

振り下ろされる大戦斧。少年を容易く叩き潰す死の急迫をベルは横へ飛んで躲す。

次いで反撃。《バゼラード》で斬りつけようとして、ベルは瞬間的に防御を選択した。

剛腕による横殴り。太く赤黒い一撃に刃を叩きつけて僅かに逸らす。その隙に体をねじ込むようにベルは回避した。

地面を転がり、草原を蹴り上げて距離を取る。

(強い……！)

分かっていた。分かっていた事だ。

『力』はベルの遙か上。現時点では足元にすら届かない。

『敏捷』もかろうじて互角かどうか。一手誤ればあっさりと踏み潰される。

『耐久』、比べるべくもない。そもその体躯も、怪物の生命力も、ベルとは格が違う。

勝っているのは『器用』と『魔力』程度だろう。それさえも稚拙な扱いをすれば、この化物は食い殺してくるに違いない。

『ミノタウロス』。現状のベルでは敵うべくもない『怪物』。

悪寒、震え。手足が冷え、恐怖が首筋を這い上がる。それを噛み殺して、少年は奮い立った。

ここはもう、ベル・クラネルの戦場だ。敗北は許されない。逃げるなんて以ての外。

眼に映るのは、牛頭の怪物ただ一体。恐怖の象徴に打ち勝つために――少年は、一步を踏み締める。

「手を出すなよ、アイズ」

「……」

「あれは、ベルの戦いだ。誰にも邪魔をさせるつもりはない」

眼前で繰り広げられる激闘。少年と怪物の戦いを眺め、*“灰”*は言葉を擦り鳴らす。

隣に立つのは、金の少女。無言のアイズは*“灰”*と同じように、ぶつかり合う剣戟を見つめている。

「どうしてベル様が戦ってるんですか!？」

そこに割り込んだのはリルルカだった。ベルが戻るのを止められなかった彼女は遠征中の「ロキ・ファミリア」を見つけ、ここまで誘導してきたのだ。

ミノタウロスは既にアスカが仕留めているだろう。頭のどこかでそう思っていたリルルカは、怪物に挑むベルの姿が信じられず、アスカに食って掛かる。

「アスカ様! どうしてベル様に戦わせてるんですか!？」

「ベルが、そう望んだからだ」

「そう望んだから!? そんな理由で戦わせてるんですか!?」

「ああ」

「……ッ!? あ、あの『ミノタウロス』は、アスカ様が腕と眼をやられてしまいうくらい強いのでしょうか!? それなのに、望んだからなんて理由で……!」

「私にとっては、それが全てなのだよ。リリルカ」

肩を掴んで揺さぶるリリルカに目もくれず、アスカはただ眺め続ける。それに苛立ちすら覚える小人族は、更に言い募ろうとして剣戟の音に身を竦ませた。

弾ける轟音、徐々に削られていく草原。たった一合でさえ死に直結するような攻防にリリルカは真つ青な顔を引きつらせる。

「で、でも、あんなの! ベル様が死んでしまいますよ!」

「そうだな。死んでしまうかも知れない。それは、仕方のない事だ」

「仕方ない事!? 何を言っているのですかアスカ様は!? ベル様が死んだっていいって言うんですか!」

「——だって、それは、わがままだろう?」

「え?」

「わがままじゃあないか。命を賭して戦う者に、命を守れと横槍を入れるのは」

そう呟くアスカは、何の変わりもない。

だが幽かに、その暗い瞳には、悲痛の色が漂っているようにも見える。

「ベル・クラネルは、戦うと決めた。自らより遙か強大な怪物と。」

ならば、私に出来る事はない。ある筈もない。私も、貴公も、蚊帳の外だ。余計な真似は、ベルの心に罅を入れる」

「それでも死ぬよりは、マシじゃないですかあ!」

「心の罅は、やがて広がる。何時しか割れて、折れ朽ちる。」

心の死は、魂の死と同じだ。今ここで私がベルを助ければ、ベルはベル・クラネルで失くなる。

——そう。きっと、この日の敗北に。この先全ての生涯を捧げる程

に、心折れてしまうだろう」

「……!?!」

「だから私は、何もしない。見ているだけだ。ただ一度を除いて、私には、それしか出来ない」

重い言葉だった。常日頃の真実ではあれ他人事のように話す幼女の、強い実感の籠もった言葉。

心折れれば、人は死ぬ。まるでそう云うかの如く、アスカは呟いた。それを覆す術なんて、リリルカは持ち合わせていなかった。

「……それでも、リリは……! 冒険者様! お願いします、ベル様を助けてください!」

リリルカは意識を切り替える。アスカと同じように戦いを凝望する冒険者たちに継り付く。

「何でもします! リリにできることなら何だってやります!! だから、だからどうか、ベル様を……!」

リリルカは必死だった。もしベルを助けてくれるなら、文字通り何でもするつもりだった。

あの人になくなってほしくない。あの人を失いたくない。小人族バルウムの少女はその一心で、必死に懇願を叫び続ける。

でも、誰も動いてくれない。人間ヒューマンの少女も、狼ウエアウルフ人の男性も、アマゾネスの姉妹も、エルフの魔道士も、誰もが戦いを見つめるばかりだ。

それにリリルカが絶望しかけた、その時。そつと肩に手を置いたのは、小人族バルウムの勇者だった。

「落ち着いて。皆、君を無視しているんじゃない」
「え……?」

「よく見るんだ。あそこには、僕らが守るべき弱者はいない」
そう言つて、金髪碧眼の小人族バルウムはリリルカの視線を促す。涙ぐんでいたリリルカが、栗色の瞳を向ければ。

そこには。怪物に圧倒されながらも、決して怖じけずに食らいつく、少年の姿があった。

「彼は、戦っている。一人の冒険者として、命を賭して冒険しているんだ」

「君の気持ちはよく分かる。けれど、僕らも冒険者だ。あの戦いに踏み入るなんて、そんな無粋な真似は出来ないよ」

「……ベル様……」

そこまで言われて、リリルカはやつと分かった。ベルは今、冒険をしているのだと。

身勝手に、命知らずの冒険者。リリルカはなれず、ずっと見ているだけだった数多の冒険者達と同じように、ベルもまた誰も顧みないで命を賭しているのだ。

リリルカは、胸の前で両指を組んで強く握り締めた。眦に涙滴を溜めたまま、眼前の戦いから決して目を逸らさずに祈る。

ベル・クラネルの勝利と、無事を願って。

ともすれば敬虔な信徒のようなりリリルカの姿に喜びの笑みを浮かべて、小人族バルウムの勇者、フィンは“灰”の側に並び立った。

「……彼が、君の言っていた『家族』かい？」

「ああ、そうだ。フィン・デイムナ」

「良いね、彼は。すごく良い」

「そうか」

親指を握り締めるフィンに“灰”は淡白な反応を返す。小人族バルウムの勇者は気にせず、しかし表情を改めて声を発した。

「けれど、彼では勝てない」

断言する。リリルカが驚愕する最中、他の冒険者の声が続いた。

「あのミノタウロス……」

「強すぎる……!?!」

「ああ。Lv.2の範疇にない」

彼らの言葉を掻き消すような轟音が空気を裂く。刃のない石の大斧が必死に駆ける少年の影を叩き潰し、草原を破碎する。

その『力』は紛れもなく、Lv.2を超えていた。隙を見て繰り出される少年の一撃も、分厚い皮膚の薄皮一枚しか傷つけられない。

ミノタウロスに非ざる『力』、Lv.1では届かない『耐久』。鈍重さ故に『敏捷』では互角でも、それ以外が話にならない。

焦燥に焼かれるベルが「ファイアボルト」を五連射する。無詠唱の速攻魔法、冒険者たちが驚くも、それが牛頭の怪物に通じぬ事が本能的に分かつていた。

爆炎を踏み散らしながら現れる白骨の頭。振り下ろされる大戦斧を少年はギリギリで刃を当て、勢いを利用して紙一重で回避する。

ベルが生きているのは、ミノタウロスが稚拙だからだった。知性を得ながら、石の大斧を振るう事しか能がない。攻撃の連携、獲物を追い詰める動きがなっちゃいない。

ベルを生かしているのは、過酷な訓練の日々だった。幼女が下地を鍛え、金の少女の手で昇華されたベルの『技』は、『駆け引き』を伴って怪物の致命の一撃をかううじて凌いでいた。

しかしそれも、時間の問題だ。限界は近い。牛頭の破滅の斧が少年の命を粉砕する時が必ず来る。

それが見えた、フィン・ディムナは。変わらず静観し続ける“灰”に尋ねる。

「……いいのかい？ このままでは、彼は死んでしまうよ？」

「ああ」

「あのミノタウロス……恐らくは亜種だろうけど、その力はLv.3に達している。彼は良く戦っているけれど、どう見積もってもLv.1止まりだ。」

「彼が、勝つ道理はない」

「そうだな」

「それでもやらせるんだね。それは君が一度だけなら手出しできるからかな？」

「いや。ベルとの約束は、私のわがままだ。元より勘定に入れていない。」

アレと戦うと、ベルが決めた。ならば私に口は出せない。ただ見る事が、私に許された行いだ。

それに、何より——やってみなければ、分からんだろう？」

「……結果として、彼が死んでしまうだろうね」

「承知の上だ。ベル・クラネルは一度、死線を越えなければならぬ。」

それが出来なければ、敗北は初めから目に見えている」

「……」

フィンはこちらりと「灰」を見る。淡々と語った灰髪の小人族は、フィンの記憶と変わらぬ姿で立ち尽くしている。

その言葉に、偽りはない。だが本当に見殺しにするつもりなのか？

片目を瞑り、思案しつつも眼前の戦いに意識を向ける。

刃の咬合が続けられる。振り回される大戦斧、紫紺と銀閃を描く二刀。『技』と『駆け引き』でどうにか場を繋いでいた少年が、徐々に押され始める。

轟音を爆発させる死の剛閃。草原を砕きルームを破壊する怪物の猛攻が、ベルの退路を断っていく。

やがて、その時は訪れた。悲鳴のような金属音を上げて《バゼラード》が砕け散る。同時にミノタウロスの強すぎる力にベルの体勢が完全に崩れた。

死地にあつて致命的な隙。それを見逃す怪物ではない。ミノタウロスは既に石の大斧から片手を離し、死の砲弾を引き絞っていた。

小人族の少女が叫ぶ。アマゾネスの姉妹が息を呑む。エルフの魔道士が目を背け、金髪碧眼の勇者が目を細める。

狼ウエアウルフ人の男と、金の少女が、はつきりと凝望し。

灰髪の不死は、既にそこにはいなかった。

時が止まる。圧縮された意識の時間、ゆっくりと自身に迫る怪物の拳をベルは見ていた。

脳裏に流れる走馬灯。大切な人たちの笑顔と、忘れられない憧憬。反射的に動けと体に命じるも、肉体は摂理に逆らってくれない。

死ぬ。全ての終わりが近づいてくる。頭が真っ白になって、自分の死を見続けるしなくなる。

瞬間、時は戻り。

迷宮の一角に、有り触れた血の大花が咲く。

それは、ベルを押し退けて割り込んだ。灰髪の不死の、血潮だった。

「——ア——アアア——!?!」

少年の口から、言葉にならない声が吐き出される。

貫かれていた。幼女の胴体など易易と超える怪物の太腕に。鎖骨から下が、腰から上が完全に吹き飛んでいる。

ベルの表情が絶望に染まる。涙が、悲鳴が、溢れそうになる。

それを止めたのは。致命傷を負ってなお前を見続ける、アスカの姿だった。

「ベル」

古鐘の声擦り鳴らされる。凍てついた太陽のような銀の瞳には、ただ一つしか映っていない。

即ち、敵。白骨を被る『ミノタウロス』。

それが、立ち向かう者のあるべき姿だと云うように。

アスカはただ前を、敵を見ていた。

「勝てよ」

怪物が咆哮し、赤黒い腕が振り回される。

振り上げられた灰髪の幼女は、ずるりと腕に血を残し——遙か彼方に、投げ捨てられた。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

本当にごめんなさい——アスカ。

僕の願いが貴方を傷つけてしまった。

僕の冒険が貴方にひどい選択をさせてしまった。

大切な人を守るために、貴方がどうするかなんて、分かっていたはずなのに。

『家族』だから——僕が神様を守るために、囹になろうとした事があつたように。

貴方だつてそうするんだと、僕は気付けなかった。

ごめんなさい、アスカ。

本当に、本当に——ごめんなさい。

ありがとう。

ありがとう。

本当に、ありがとう。

貴方は、僕を信じてくれた。

貴方なら、『ミノタウロス』だって倒せたのに。

僕が勝つと信じて、後を託してくれた。

本当に、ありがとう——アスカ。

僕はもう、逃げない。

貴方からも。

あの人からも。

『ミノタウロス』からも。

自分の心で燃えている、この想いからも。

僕はもう、逃げない。

想いが、炎のように燃え上がった。

「嘘……」

ガタリと、フレイヤは立ち上がった。

摩天楼最上階、スイートルーム。

『神の鏡』を通して戦況を見守っていたフレイヤは、信じられないとばかりに瞠目している。

——最初は、つまらない真似をしたと思ったものだ。

灰髪の小人族バルウムの突然の横槍。ベルを庇い致命の一撃を受けた光景に、フレイヤは落胆していた。

余計な真似だった。水を差された形だった。例えあの場面で死んだとしても、彼が最後まで全うすべきだったのに、と。

けれど、そんな思いは即座に吹き飛んだ。代わりに湧き上がったのは、歓喜と恍惚。

「ああ、こんな事が有り得るの……!?!」

肢体を抱きしめ、熱い吐息を女神は零す。

銀瞳に映る少年の魂は、眼を焼く程に輝きながら、澄み切った透明な色。

その魂を囲う炎の輪もまた、純白の炎を煌めかせている。

その想いが燃え上がる。

一瞬たりとも怪物から視線を逸らさず、ベルは戦い続ける。

彼らのように。家族アスカのように。あの人のようにアイズ。

自分に持てる全てを束ね、眼前のミノタウロスに全力で挑む。

「すごい——」

大双刃を握るアマゾネスが、瞳を輝かせて戦いに魅入る。けれどその横で、エルフの魔道士が目を細める。

「だが、まだだ」

「ああ。彼には武器がない」

フィンが言葉を引き継いだ。戦況はその通りに推移している。

ベル・クラネルには、武器がない。《ヘステイア・ナイフ》だけでは致命傷を与えられない。

武器を奪う事も不可能だろう。相手はLv.3にすら達するミノタウロス。急所を狙った所で、なりふり構わずベルを叩き潰せる『強靱』がある。

（——そんな事、関係ないだろっ!!）

心中で、ベルは吼えた。そうだ、何も関係はない。

全てを燃やせ、想いを吼えろ。僕おまえはもう、この怪物に通じる武器を知っているだろう!?

深紅ルベライトの眼を見開く。少年の振るう漆黒の刃。『ミスリル』で出来た

《神様のナイフ》。

体を包む【炉の加護】が、ほんの少し熱くなったように感じた。そうだ、《ヘステイア・ナイフ》は魔法の触媒にもなる。

だったら。だったら、出来るはずだ!! ——ベルは、ナイフを強く握り締め。

「——【ファイアボルト】!!!」

大咆哮。ありつたけの精神力マインドを注いだ炎の雷を、《ヘステイア・ナイフ》に叩き込んだ。

ミノタウロスが石の大斧を振り被る。空気を割って叩きつけられる大剛断。

それに対し、ベルは。全力で《ヘステイア・ナイフ》を振り抜いた。

一瞬の交差。互いに背を向けるベルとミノタウロス。次の瞬間。それまで掠り傷しかなかった怪物の胸に、斬傷が刻まれた。

「——!?!」

『ヴモオツ!?!』

冒険者達が驚愕し、ミノタウロスが痛苦の声を上げる。

それは困惑だった。これまで攻撃のほとんどが意味を成さなかった獲物が、突然牙を剥いた。そう感じるミノタウロスの背後で、ベルがゆつくりと振り向く。

そこには。少年の握る漆黒のナイフから放たれる——炎の刃が存在していた。

「何、あれ——!?!」

「付与魔法……!?!」

「いや、違う。あれは——」

「——ソウルの業」だ

擦り鳴らされる声に、冒険者たちの視線が集まる。大半が固唾を呑んで見守るのは、何事もなく立つ灰髪の小人族^{バルウム}。

投げ捨てられた結果、灰髪のほとんどが正面に垂れ下がる「灰」は、なんら気にした風もなく言葉を続ける。

「あれは、名も無き「ソウルの業」。自らのソウルを刃と成す業だ」

「……君が教えたのかい?」

「いや、教えてはいない。見ただけだ。そして見ただけで為せる程、容易い業でもない。……だが、あるいは……」

「何か心当たりがあるのか?」

「……いや。今は意味がないだろう。それよりも、見るがいい。アレらの交わす戦いを」

フィンとエルフの魔道士に挟まれる「灰」は、銀の半眼で戦場を見定める。

そこで起こっているのは、互角の闘争。ついに怪物に届く牙を得たベルと、獰猛に荒れ狂うミノタウロスの死闘だった。

「火の時代の戦いは、魂^{ソウル}を懸けた殺し合い。魂を削る戦いに通じぬ攻

撃など存在しない。

海は雨に痛み、落雷は太陽の光を斬り裂き、炎は炎に焼き尽くされる。

例外はない。例え遙か格上だとして——その喉元に、貧者の刃は届き得る」

「灰」の言葉通り、戦況は最早ベルの防戦一方ではなくなっている。

《ヘステイア・ナイフ》より生じる炎の刃がミノタウロスの体軀を傷つける。時には深い斬傷すら残し、牛頭から苦悶が漏れる。

【魔法】もまた変化していた。断ち難く、耐熱耐寒に優れたミノタウロスの外皮。そしてLv.3と同等の度を超した『耐久』がベルの魔法を無効化していた筈が、今は少しずつ焼かれ始めている。

【ファイアボルト】に変化はない。ただ、少年は全霊を乗せているのだ。自らのソウルすら炎雷に宿し、それは確実に怪物の魂を焼いていた。

対するミノタウロスもやられっぱなしではない。調子に乗るなよと言わんばかりに筋肉を膨張させ、石の大斧で薙ぎ払う。

その『強靱』は限度を超えていた。どんなに傷を負おうと、速射される炎に焼かれようと、牛頭の怪物は止まらない。腕を半ば断たれようと、今まで以上の『力』で叩き潰さんとする。

——それは正に、魂を懸けた殺し合いだった。怪物が猛り狂い、貧者の少年が立ち向かう。通常では成立し得ぬ均衡が保たれ、死闘を繰り広げている。

それは、誰も知らぬ。だが遠いかつてに存在した、火の時代の戦いだった。

「アツツツ!!!」

決着が近い。意味を成さない咆哮が重なり、ベルとミノタウロスがぶつかり合う。

炎の刃は、石の大斧と打ち合える。だが強度が足りないとベルは本能的に分かっていた。

故に『技』、漆黒のナイフより長大な炎の刃で逸らし、受け流し、弾き、あるいは透かして——反撃する。

ミノタウロスは、とづくに防御を捨てていた。その身には幾多の傷が刻まれ、怪物の生命力を蝕んでいく。それでもなお突進し、一撃を以て獲物の命を屠らんとする。

織り成される攻防。紙一重の死の回避。重なり合い、ぶつかり合い——やがて、ミノタウロスの『強靱』が、決定的な一撃を放つ。

『オオ、ヴモオオオオオオオオオオオツツツ!!』

「——ツツツ!!」

『強靱』に任せた渾身の太剛断。代わりに致命傷を負おうが、確実に仕留めると魂に誓った全霊の一撃。

ベル・クラネルは、避けられない。回避も防御も反撃も、何もかもを踏み越えてその一撃は叩き込まれる。

もしも、ベル・クラネルが。特別ではない、ただの一般的な冒険者だったなら。

その一撃を頭から受けて、彼の生涯は終わっていた。

もしも、ベル・クラネルが。第一級冒険者にも劣らぬ強い精神を保持していたなら。

片腕を犠牲にして一撃を凌ぎ、怪物に致命の反撃をしただろう。

だが、ベル・クラネルはどちらでもない。死も犠牲も、許容なんてしてやらない。

忘れるな。前を見る。家族の教えが頭をクリアにする。

一步を踏み出せ。そのための『勇氣』を、皆から、あの人から——受け継いで来ただろう!

「あああああああああああああああああああああああああああああああつっつ!!」

漆黒のナイフを引き絞る。炎の刃が追随する。

見る、見る、見る! 決して眼を逸らすな! 急迫するミノタウロスの一撃、その側面に、勝機が見えた。

放たれる炎刃。捉えるは石の大斧の重心。

紫紺炎閃。斧の側面に叩きつけられたベルの渾身は、完璧にミノタ

ウロスの一撃を打ち払った。

『——ツツツ!?!』

牛頭の怪物が驚愕する。それを置いてベルは刃を振り被る。

『パリイ』。全力で敵の攻撃を打ち払う『賭け』。それに勝ったベルは、致命的な隙を晒すミノタウロスに、致命の一撃を叩き込んだ。

即ち、急所——胸の中央、『魔石』狙いの一撃を。

『ヴモオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!?!』

素直にやられるミノタウロスではない。身を振り、何とか『魔石』を碎かれる事だけは避ける。

しかし代償は大きかった。右胸を貫かれ、そのまま横に振り抜かれた炎刃は、散々傷つけられた怪物の右腕を横断し、切断する。

石の大斧が地に落ちる。ミノタウロスが背後によるめく。武器を再び握らせまいと、ベル・クラネルが前進する。

『フウ——ヴウツヴフウ、ウウ——ヴモオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

このままでは終わるまいと、ミノタウロスは決死の姿勢を取った。

片腕を地に突き、腰を上げる突進の姿勢。彼我の距離は近く、威力もさほど期待できない。それでもミノタウロスは、この一撃に『賭けた』。

対し、ベルは。漆黒のナイフを大上段に構え、『ファイアボルト』を更に撃ち込む。炎の刃は輝きを増し、赫から白へ、純白に近くなる。

一瞬の沈黙。

双方は、同時に動き出した。

『ヴモオオツツ!!』

「あああああああああああああああああああああああああああああああつっつ!!」

肉薄する両者。激突するミノタウロスの角と純白の炎刃。

拮抗は一瞬、肉体面で、『力』でベルの遥か上に行くミノタウロスが押し切ろうとする。

だが。

前方に歩く「灰」。普段そこにあるのは生まれより伸びる灰髪で、それ以外は何も見えない。

けれど、灰髪のほとんどが前に回った今なら、見える。「灰」の背中が——いや、背中がある筈の場所が。

そこには、何も無かった。ぽつかりと暗い穴のように、胴の九割が失われていた。

「……」

冒険者達の胸中に過ぎるのは、恐れか、警戒心か。何事もなく歩く灰髪の少女は、それ自体が尋常ではない。

穴が空いているというレベルではない。右側に残った筋肉の残骸と皮膚の切れ端で、かろうじて繋がっているような状態。内臓も骨格も、胴体にある生命器官の何もかもが吹き飛んでいる。

それなのに、「灰」は平然と歩いていく。背骨がないのに尋常に立ち、断面では血が蠢くように巡っている。

——不死。その言葉を、幾度となく「灰」の口から聞いた。その力と合わせ、フィン達は分かったつもりになっていた。

けれども。ただの人類なら、即死している姿で、当然のように歩く姿。

それは相容れぬ異物感と、それに追隨する悍ましさを、冒険者達の心に芽生えさせる。

これが、不死。死なず。死なぬ者。

この日、人類は初めて、火の時代の不死に見えた。まみ

「ア、アスカ様！ ベル様が、ベル様があー！」

「落ち着け、リリルカ。気絶しているだけだ。傷は今、私が治す」

感情がぐちゃぐちゃになっていくリリルカを宥めて、アスカは聖鈴を取り出す。

マジックサークル
魔法円が展開し、祈りを捧げ発動するのは、「太陽の光の癒し」。ルームに広がる暖かな太陽の光が、生ける者の全ての傷を癒した。ベルの傷も。そして——アスカの傷も。

左腕が生え、失った右眼が戻り、何もなかった胴体が蘇る。その光景に瞠目していた冒険者たちは、全員が視線を一箇所に集中させる。

体の右側に残っていた、千切られた服の名残。それによってまだ服が繋がりに、着ていると言える。『灰』の、晒された背に刻まれた『神の恩恵』に。

「――！」

「おい、待て、アイズ！」

エルフの魔道士の制止を無視して、金の少女、アイズ・ヴァレンシユタインがアスカに近づくと。

アイズは『神聖文字』が読める。だからそれによって書かれた『神の恩恵』の内容を知る事が出来る。

強さを貪欲に求める少女は、そこにアスカの力の秘密があるかも知れないと思ひ、読んだ。そして、驚愕と困惑の混ざった声を、麗しい唇から落とす。

「――【暗い、魂】……？」

「……ああ。成程。貴公は、『神聖文字』が読めるのだな」

安静に寝かせたベルの様子見をリルルカに任せ、アスカはゆっくりと振り向いた。そこにはアスカと呼ばれる姿と、『灰』と呼ばれる姿が混在している。

「……全能力、初期値……」

「ああ。それは前に話した通りだ」

「……経験値、獲得不可……？」

「そうだ。私の『神の恩恵』は、これ以上成長しない」

「……アスカの、強さは……」

「『神の恩恵』ではない。私の力は、恩恵とは別にある」

「……」

アイズは黙りこくる。金色の瞳に揺れるのは、如何なる感情か。興味のない『灰』は、近づいてくるフィンに眼をやりつつ、ソウルで衣服を編み直す。

「……彼の名前は、なんて言うんだい？」

「ベル・クラネル」

「覚えておくよ。それと、一つ聞きたいんだけど」

「何だ？」

「君は彼に、何かしたかい？」

「いいや、何もしていない。少なくとも、私しか知らないであろう方法は、施していない」

「……それにしては、彼はLv.1とはとても思えない力を持っている。どうしてかな？」

「……そうだな……貴公らがここにいる。それだけで借りになる。ならば私も、その質問に答えよう。」

ベルの能力値を、貴公らに明かす

「アスカ様!」

幼女の言葉に劇的に反応したのはリリルカだった。少しだけ冷静さを取り戻した彼女は、血迷った物言いをするアスカを止めようとする。

それを制したのは、視線だけ背後に投げたアスカの声だった。

「リリルカ。貴公はどうやって、「ロキ・ファミリア」をここに招いた？」

「っ!」

「なんでもすると、貴公は言っていた。結果は伴わなくとも、履行の義務があると私は考える」

「でも……!」

「問題はない。私が何とかしよう。それに、リリルカ。貴公もベルも、私の家族だ。だから——何があるうと、私が守る」

断言され、何も言えなくなるリリルカ。視線を戻し、「灰」はフィ

ンと向き合う。

「ベルの能力値は、オールSS」

「……何だった?」

「アビリティオールSSだ。ベルの能力値は、限界を超えている」

「——!?!」

顕著な反応を示したのは、「ロキ・ファミリア」でも若手の幹部だった。アイズ、ベート、ティオナ、ティオネ。リヴェリアも目を瞠り、フィ

ンは思案する。

その中で、アイズは。思うがままを口にした。

「……その、方法は？」

「……アイズ」

「どうすれば……アビリティの限界を、超えられる？」

「さてな」

真剣に問うアイズにアスカは肩を竦める。

「詳細は私にも分からんし、知っていたとして、教えるわけにはいかない。勝手に想像する事だ」

「……」

「睨まれたとて、私は意見を翻さない。だが、そうだな……貴公らが遠征から戻った後であれば、教えてやれる事がある」

「！」

顕著な反応を見せるアイズを置いて、*「灰」*は視線をフィンに投げる。

「フィン・デIMUMナ。24階層の件の依頼主から伝言だ」

「……何かな？」

「『宝玉』を解析した。その結果、限りなく精霊とモンスターが融合した存在に近い事が判明した』」

「——！！」

「『ダンジョン深層には、その大元と見られる存在がいると推測できる』。以上だ」

「……なぜ君が、伝言を？」

「依頼されたからだ。そしてフィン・デIMUMナ。推測が正しければ、貴公らとて危うい存在が、待ち受けている事になる。」

それでもし、死なれては、私が困る。故に——私の武装を貸し出そう」

*「灰」*は右手にソウルを集める。現れたのは、多種多様の指輪だった。

同じ形状の指輪もそれなりに交ざっている。視線で素早く吟味したフィンは、*「灰」*に説明を求めた。

「それはリヴェリアに渡した例の指輪かい？ 見たところ、種類が違

うようだけど」

「多くが【斑方石の指輪】と【すべての退魔の指輪】だ。どちらも魔法に対する防御力を上げる。

推測される相手が相手だ。魔法への備えは多い方が良いだろう」

「……他の指輪の効果は？」

「これは【フリンの指輪】だ。身軽であるほど力を増す性質がある。

【獅子の指輪】は刺突による反撃時にダメージを底上げする。

【刃の指輪】は純粋な攻撃力の強化だ。『力』ではなく、武器そのものを強化する。

後は、そうだな……【邪眼の指輪】辺りは貴公に有用だろう。敵を殺す事で生命力を奪い、傷を癒す。呪いの類だが、使い道のある指輪だ」

「一つ、聞いても良いかい？」

「何だ？」

「なぜ君は、これを僕達に貸し出そうとするのかな」

碧眼を細め、尋ねてくるフィン。『灰』は間髪入れず答えを発する。

「理由は二つ。一つは、貴公らに借りが出来たからだ」

「借り？」

「そうだ。貴公らがここに来たのは、リルルカの導きあっての事だろう。そしてそれは、「何でもする」という対価を示しての行いだ。

ならば私には、それを返す義務がある」

「……義理堅いね。けれど、この程度じゃ貸しにもならない。何より僕らは既に、君に対する借りがあるだけどね？」

「後から蒸し返されるのも面倒だ。余計な負い目は、早めに消化するに限る。」

何より——貴公らに対する貸しを、この程度で相殺したくはない」
「……成程。交渉材料は別に持っておきたい、という事か。賢しいね、君は」

「貴公がそう思うのなら、そうなのだろう」

「もう一つの理由は？」

「借りを返す前に死なれては困る。貴公らが遠征から戻った時に、借りは返すつもりだ。」

だから生きて、戻ってこい。これはその為の貸し出しである」「……分かった、受け取ろう。必ず君に、返しに来るよ」

差し出される指輪を、フィンが厳かに受け取った。それを確認した“灰”は、順次武装を渡していく。

武器は嵩張る。故に基本は指輪だけだ。【斑方石の指輪】と【すべての退魔の指輪】を基本とし、それぞれに適すると思われる指輪を“灰”は渡していく。

アイズには【緑花の指輪】【刃の指輪】【佇む竜印の指輪】【フアランの指輪】を。

リヴェリアには【吠える竜印の指輪】【澄んだ蒼石の指輪】【古老の指輪】を。

ティオナには【緑花の指輪】【刃の指輪】【封壊の指甲】【木目の指輪】を。

ティオネには【緑花の指輪】【刃の指輪】【フリンの指輪】【邪眼の指輪】を。

そしてこの場にいないガレスに【鉄の加護の指輪】【ハベルの指輪】【巨人の指輪】【狼の指輪】を。

そして二軍に相当する者達のために【斑宝石の指輪】【すべての退魔の指輪】【封壊の指甲】【木目の指輪】を複数渡した。

【封壊の指甲】と【木目の指輪】は装備の耐久度を上げる。『魔剣』に効力を発揮するのも確認済みだ」

「それは有り難いね。ぜひ試してみるよ」
予備の指輪をフィンに渡した後、“灰”は残る一人を瞳に映す。

ベート・ローガ。戦いの始まりから今の今まで、“灰”を睨み続ける狼^{ウエテウルフ}人。

裡に激情を滾らせる雄の前に、“灰”は静かに、虚空に小さな手を伸ばした。

開かれる“特別なソウルの領域”。抜き放つのは、光を放出する魔法の刃。

《月光の大剣》。白竜シースの尾より生じたドラゴンウエポンを、
「灰」はこの世に顕現させる。

瞬間、変化は劇的だった。月光の魔力——蒼い月の光を浴びたベ
トが、音を立てて獣化する。

「——!?!」

「成程。魔力の月光ひかりとて、獣となるには十分か。

良い事を学んだ。これは、覚えておくでしょう」

自身の意図せぬ獣化に驚愕するベートを他所に、
「灰」はつらつらと感想を述べる。

そして、再びこちらを睨む灰色の炯眼と視線を交わし。

「灰」は《月光の大剣》を仕舞い、ベート・ローガに背を向けた。

「さて。それでは、貴公らに渡した武装の確認だが——」

「——待ちやがれツ!!」

「何だ? ベート・ローガ」

背後で猛る咆哮に、「灰」は再び視線を向ける。そこには既に獣化
が解け、だが激昂するベートがいた。

「手前てまえ、一体何のつもりだツ!?!」

「何のつもり、とは?」

「なんだって俺に、今の馬鹿みてえな大剣を見せたツ!?!」

「ただ確かめたかったただけだ。それ以外に意図はない」

「何だと……!?!」

殺意を帯びる程に双眸を削り抜くベートに、「灰」は面倒そうに嘆
息する。

「そもそも貴公、私が武装を渡したとしてどうする?」

「誰が手前てまえの手垢のついた武器なんざ受け取るかっての!」

「だろいな。だから私は、貴公に何も渡さない」

「あアツ!?!」

「頭を下げてまで貸してやる武装はない、という事だ」

凍てついた太陽のような瞳を半分にして、「灰」は続ける。

「何より貴公——失う事には慣れてるだろう?」

「——」

「だから何も、渡さない。よしんばそれが原因で誰かが死んだとして、関係なからう。」

月夜に吼え、失い続ける。それは貴公の、日常に過ぎないのだから平坦に、吐き出されたその言葉。

その瞬間、ベート・ローガから一切の感情が抜け落ちた。

空気が、極限まで張り詰める。

ベートに三度背を向ける「灰」。その背後で、ゆらりと狼ウエアウルフ人が疾駆する。

「ロキ・ファミリア」の面々は全てを察し、止めようとした。それを留めたのは、小さなてのひら。

瞬間、《フロスヴィルト》が振り上げられ——轟音を以て大地に叩きつけられる。

それは、「灰」の右肩から股ぐらまでの全てを、血溜まりと化すまで抉り抜いた。

誰かの悲鳴が聞こえた。息を呑む声ウエアウルフがする。狼人に憤激する声

が重なった。それら全てを置き去りにして、「灰」は何事もないかのように声を擦り鳴らす。

「ああ、済まないな。ベート・ローガ。私は貴公を怒らせてしまった」

「——」
「謝罪しよう。済まなかった。貴公の『傷』を、踏み躪ってしまつて——本当に済まない」と、思っている」

「——ツツツ!!!」
血を吐きながら、胴体の前面の皮膚でかろうじて繋がっているような状態で、「灰」はそう言い、エストを飲む。

何ら堪えた様子のない、長衣ごと再生する不死に。ベートは歯が砕けんばかりに牙を噛み締め、強引に幼女を半回転させ、襟首を持ち上げた。

「ざけんじゃねえっ!!! ざけんじゃねえぞっ、灰野郎!!!」

「……」

蟲を見下ろすような瞳で眺めてくる「灰」に、ベートは溜まりに溜

まった激情を吼える。

「なぜ避けねえ、なぜ反撃しねえ、なぜ手前は戦わねえっ!?」

「……」

「ぎげんじゃねえぞ『灰』野郎……!! 手前は強えだろうが! 俺達なんか雑魚同然に叩き潰せるくらい強えだろうが!! 第一級だの『頂天』だの、そんなもん話になんねーくらい強えだろうがっ……!!」

「……」

「なのになんで弱え振りをする!? なぜ失う事を恐れねえ!?」

弱え振りをして、『雑魚』みてーに振る舞いやがってっ……!! ウ

ザッてーんだよ!!

手前がッ!!! 手前みてーな強え奴が——『弱者』みてーな顔、するんじゃねえっ……!!!」

ベート・ローガは激怒していた。ともすればそれは、哭いているような激昂だった。

他の「ロキ・ファミリア」の面々が押し黙る。ベートの突然の凶行に声も上げられないほど圧倒されている。

【凶狼】。神々からそう賞賛ばれ、常日頃から『弱者』を見下す驕った強者。

その狼が。恥も外聞もかなぐり捨てて激昂する姿を、彼らは初めて目にしていた。

「……それは違うな。ベート・ローガ」

そして、『灰』は。冷たい銀の半眼で、ベートの言葉を否定する。

「私は『弱者』だ。私は弱い。私は強者などでは在り得ない。全て貴公の、勘違いだ」

「まだ言うか、手前はッ……!!!」

「私の眼を見る。ベート・ローガ」

灰色の双眸と銀の半眼が交差する。不死は滔々と、己の歩んだ道を語る。

「私は限り無く負け続けた。初見で勝った事はほとんどない。出会った敵の大半に、一度は必ず敗北している。

それで何の強さを誇ろうか。私より強い者も、私より永き者も、火

の時代には山程いた。

そこにあつて、私が持っていた物は、ただ『弱者』であるという事実だけ。

そして『弱者』であるからこそ——不死の私は、あらゆる敵を殺し切れた」

不死の瞳に懐郷が宿る。凍てついた太陽のような瞳が映したのは、火の時代の英雄達。

「二人の英雄を殺すのに、千年の時を費やした。

一匹のデーモンを屠るのに、幾万の罫を張り巡らせた。

一柱の神を討つために、その時代の全てのソウルを喰らい尽くした。

私は『弱者』だ。私は弱い。弱さ故に全てを欲し、何者よりも貪欲だった。

それが私に、折れぬ心を与えた。敵を侮らせる卑小ささが、私に勝利を届けてくれた。

ベート・ローガ。私はかつて、竜を屠った事がある。

まだ赤子のようなだった私は、あらん限りの手段を用いて、竜の首を刎ね落とした。

ならば今の私もまた、赤子に首を断たれるのだろう。

故にベート・ローガよ。知るがいい。

私は卑小で——弱いのだ」

それは、〃灰〃の辿り着いた一つの果て。

『強さ』。それは生きとし生けるものが、生きるために求める力。

敵を倒す力。己を通す力。守りたい物を守る力。『強さ』とは力であり、それを蓄えた者こそが、この世に在って生きるに能^{あた}う。

ならば『弱さ』とは、力無きもの。持たざる者。生まれるべきではなかった存在。

〃灰〃には、『弱さ』しか無かった。何者にも打ち勝てず、何人にも殺し尽くされた。

だから〃灰〃は、『弱さ』を手にした。それしかないのならば、それ

を以て全てを喰らった。

『弱さ』こそが、『灰』の武器。『弱者』である事が、『灰』に為せるただ一つの業。

それが、『灰』の到達点。『強者』を上回る『弱者』と云う矛盾を、『灰』は体現していた。

「……………クソがッ」

ベートは気付く。『灰』に、言葉は届かない。

『灰』の価値観は、その膨大過ぎる経験に裏打ちされている。何も持たず、何者にもなれなかった『灰』にとって、永き旅路で得た経験だけが幼女を形作っている。

それを言葉などで、何が変わろうものか。『灰』は、とつくに『完成』しているのだ。それがどんなに不完全なものであったとしても、変わる事はない。

かつてベートが言った通りだった。『灰』は、所詮は『灰』。『灰』が『灰』である限り、何も変わりはないのだと、あの夜にそう、口にした通りだった。

幼女の襟首が放される。落ちる不死は何事もなく着地し、俯く狼ウェアウルフ人などどうでも良いと言うようにフィンに向き直る。

「……………済まない、『灰』。この償いは必ずする」

「……………何の話だ？」

「ベートの事だ。彼の行いは、到底許される事じゃない」

「ああ、それか。構わない。私は許す」

「……………『灰』」

「今回ばかりは、貴公の言葉は聞かんど。フィン・デIMUMナ。

こんなものは、ただの喧嘩だ。言い争い、生傷を負う。その程度の事ではない。

そんな事に義理立てだの何だのと、いちいち口にする気か？ 少なくとも私は面倒だ。だから許す。異論は聞かん」

「……………」

許容も納得も出来ないという感情を飲み込んで頭を下げるフィンに、『灰』はどうでも良さそうな反応を返す。そして虚空から二本の

双剣を取り出し、フィンに押し付けた。

「……これは？」

「持っていていけ。ベート・ローガに貸し出すつもりだった武装だ。

使わなくとも構わない。備えておけば、役に立つ事もあるだろう」
「……恩に着る」

再び頭を下げるフィンに適当に手を振って、「灰」は家族の下へ向かう。眠るベルと、膝枕をするリルルカ。その少し横には、倒れ伏したミノタウロスの死骸があった。

そちらへ向かう素振りを見せる「灰」に、フィンは真剣な顔で声をかける。

「『灰』」

「何だ、フィン・ディムナ」

「もう一度だけ、聞かせてくれ。——彼が死んでも、本当に良かったのかい？」

それは、「灰」の本質を見極めるための問い掛けだった。

フィン・ディムナにとつて、それは重要な事だった。

対し、「灰」は。面倒そうに息をついて、不死の常識を古鐘の声に変える。

「承知の上だと言っただろう。私はベル・クラネルが死ぬ事になっても構わなかった。

不死しなずとは、ただただ失い続ける事。

ベルを失う事になっても、私にとつては慣れ切った事に過ぎない。それがベルの望みならば、尚更だ。

人も、命も、いつかは消える。私の前からいなくなる。

だからといって、蔑ろにするのは違うだろう？

だからこそ私は、私のわがままではなく——ベルの意志を、全うして欲しかったのだ」

「……」

「話は終わりだ。行くがいい。そして願わくば、戻って来い。

それが私の、貴公らに望む。ただ一つの、我が儘だ」

言い捨てて、「灰」は怪物の死骸へ歩き去った。その後ろ姿を、

フィンはずっと見つめていた。

だからこそ、フィンは耳にした。『ミノタウロス』の死骸を転がし、頭の白骨を叩き割った。『灰』。

その幼い唇から零れた、消え入りそうな言の葉を。

「……そうか。やはり——尖兵か」

そう呟く、『灰』の足元。大地に伏せる『ミノタウロス』。

叩き割られた白骨の下には、どこか満足げな牛の顔があり——その額には、三つ目の眼が、ついていた。

その後、『灰』は魔石を引き抜き。ソウルを奪い——何を思ったのか、迷宮の奥底へ解き放つ。

そして灰に塗れた石の大斧を握り、一度だけ振って青白いソウルへと変えた。

ドーザーアクス

凄まじく重い、刃のない大斧

「白骨のミノタウロス」が持っていた武器

だが、迷宮の武器庫にこれと同じ物はない

三つ眼の牛頭は、なにゆえあつて得たのだろうか

戦技は「ウオークライ」

怪物の雄叫びは自らを鼓舞し

一時的に攻撃力を上げ

弱き者を怯ませる

月光の双剣

白竜シースの名で伝わる伝説のドラゴンウエポン

古きと新しき月光の結晶、直剣の双刀武器

シースの月光は真新しく

火の時代に産声を上げた剣である

よりはじまりに近い、古き月光は

ある時、シースの月光と重なり合い

剣は分かれ、それぞれの記憶の依代となった

戦技は「月光の乱流」

二刀を構え、乱光のごとく斬り払い

またスタミナの尽きぬ限り

強攻撃により、月光の小波を連続して放つ

夢を見ている。

忘れる事のできない、あの日の夢。

『無事か。ベル』

銀獣を倒したアスカの、ずっと思い出せなかった声。

『よく耐えた。貴公が無事で良かったよ』

それは家族の無事に安堵する、普遍的なものだった。

たった二言。それだけなのに、僕はベルずっと思い出せなかった。

怖かったから。心の底から家族になれていなかったから。

けれど、もう。僕はベル逃げない。

アスカ。ねえ、アスカ。

また一緒に、手を繋ごう。

貴方と、家族になりたいんだ。
これから先も、ずっと一緒に、歩いていこう。
アスカ、アスカ。ねえ、アスカ――

「……夢を見ているのか？ ベル」

廃教会の地下。本拠^{ホーム}に戻ってきたアスカは、涙を流すベルに問い掛ける。

ヘステイアも、リリルカも一緒だ。ベッドで眠る少年を、三人は囲んでいた。

ふと、少年の腕が虚空に伸びる。それをアスカは、そっと握った。

「大丈夫だよ、ベル。私はずっと側にいる」

無貌を描く幼女の顔が、解けるように淡く微笑む。

「私達は、ずっと一緒だ」

小さな手は強く握り返され、少年は安らかな眠りに落ちていった。

レベル・クラネル
Lv. 1

力：SSS1096 耐久：SS1076 器用：SS1098 敏

捷：SSS1267 魔力：SS1009

《魔法》

【ファイアボルト】

・速攻魔法。

《スキル》

【憧憬一途】
リアリス・フレイゼ

- ・早熟する。
- ・懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

レベル・クラネル
Lv.2

力：I0 耐久：I0 器用：I0 敏捷：I0 魔力：I0
幸運：I

《魔法》

【ファイアボルト】

- ・速攻魔法。

《スキル》

【憧憬一途】
リアリス・フレイゼ

- ・早熟する。
- ・懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

【英雄願望】
アルゴンウット

- ・能動的行動に対するチャージ実行権。
アクティブアクション

【不転心誓】
ダークサイン

- ・誓約条件達成時のみ発動。
- ・全能力及び逃走を除く全行動の超高補正。
ダメージ
- ・損傷を無視した行動可能。
- ・誓約を破棄した場合、24時間全アビリティ能力超低下。

——ああ、まだだ。まだ終わらない。

まだ後始末が残っている。

ゆつくりと握った手を解き、ベルの涙を拭ったアスカは、微笑みを消し去り、銀眼を鋭くする。

あの戦いから既に半日以上、夜の暗い闇がオラリオを覆っている。動くなら今だろう。そう判断したアスカは、手始めにヘステイアを手招きした。

「ヘステイア、こちらに来てくれ」

「ん？ どうしたんだい、アスカ君」

ベッドの反対側でベルの頭を撫でていたヘステイアは、言われた通りアスカの側に回る。100Cを少し上回る程度セルチの幼女を見下ろす幼女神。その彼女に近づいて、アスカは「湖の霧」を吹きかけた。

「え——ア、スカ、君……？」

「済まないな、ヘステイア。貴公がいると面倒だ。だから少し、眠っていて貰おう」

集中力を込めれば第一級冒険者の「耐異常」をも貫通する眠りの霧フオーカスだ。全知無能のヘステイアでは抵抗もできず呆気なく眠りにつく。

崩れる女神の体を抱きとめ、アスカはベルの横に眠らせる。その一部始終を見ていたリリルカは、やっと固まっていた口を開いた。

「な、何をやっているのですか——」

「静かにしろ、リリルカ」

しかしそれは音もなく接近した幼女の人差し指が唇に当てられた事で止まる。訳も分からず困惑するリリルカを置いて、アスカは天井、正確には廃教会の外に意識を馳せる。

「どうやら客が来たようだ。私目当ての客がな」

「きや、客？」

「ああ。リリルカ、貴公はここにいろ。ベルとヘステイアを守れ」

「え、は？」

「夜明けまで、何があろうとも外には出るな。頼んだぞ——リリルカ」

アーデ

栗色の瞳にそう言い残して、アスカは地下室から出て行った。何が何だか分からないが、リリルカは言われた通り防衛の準備をする。

【ソウル・ヴェル魂業小箱】。《スキル》によって得たソウルの領域から取り出したのは、《螺旋の剣》。

それを、少々躊躇ったが部屋の中央に突き刺し、小瓶に入った火を落とす。何も無いのに燃え続ける火は螺旋剣に落ち、絡まり、何処からか灰を引き寄せて一つの『篝火』となった。

『篝火』は、不死の故郷。側で休む者を守る力が、この火と剣にはあるらしい。半信半疑のリリルカは、ベッドに腰掛けて揺らめく炎を見つめる。

——瞬間、轟音と振動が廃教会を襲った。「きゃあ!？」と思わず頭を抱えて体を丸めるリリルカに、轟音と振動は断続的に迫りくる。

ややあつて、それは止まった。恐る恐る顔を上げるリリルカは、眠るベルとヘスティアの安否を確認して、地下室の扉に目を向ける。

アスカは、帰ってこなかった。

「……アスカ様……」

リリルカは不安げにアスカの名を呼ぶ。それに返ってくる言葉はない。ぎゅうつと胸元を握り締めて、リリルカは不安を押し殺す。

リリガ、頑張らなくちやいけない。

アスカはきつと何かをしに行った。その間に少しでも危険があるなら、それを止めるのが託されたリリルカの為すべき事だ。

そしてそれは、『篝火』の火を守る事。夜明けまで眠らぬ覚悟で、リリルカはじつと『篝火』を見つめ続けた。

フレイヤは陶酔的な余韻に浸っていた。

鮮明に思い出すのは、全てを尽くして戦った少年の姿。純白の炎の輪を纏う、純粹で透明な魂の輝き。

それをこの眼に映せた事に望外の喜びを感じていたフレイヤは、控えめにノックされた音にやや不機嫌な表情を向ける。

「……誰かしら？」

「アレンです、フレイヤ様。ご所望の物をお持ち致しました」

「ご所望の物……？」

心当たりがないフレイヤは、とりあえず入室の許可を出す。従者然とするオツタルが扉を開き、猫キヤットピープル人の男が恭しく入り、小人族バルウムの四つ子が後に続く。

暗赤色の絨毯に洗練された動作で四つ子が分厚い布を敷く。その上にどちやりと、猫キヤットピープル人の男が投げ捨てたのは——手足をもぎ取られた、ボロボロの灰髪の幼女だった。

「あら……殺したの？」

「申し訳ありません、私情を抑え切れませんでした。この失態は如何ようにも」

「いいわ。許してあげる」

ちらりと灰髪を流し見て、どうでも良さそうな反応を示すフレイヤは、立ち上がって幼女だった物に近寄る。

それを押し留めたのは、オツタルだった。

「お気をつけください、フレイヤ様。それはまだ死んでおりません」

「そうなの？」

「ダンジョンにて相見あいまみえました。頭の半分を砕いても動き回ります」

「そう……」

虫みたいね、と適当な感想を思うフレイヤは、剣呑な殺気を放つ猫キヤットピープル人の男と小人族バルウムの四つ子に気付く。どうやら言外に仕留め切れてないと指摘したオツタルの発言が気に入らないらしい。

その様子にクスリと、蠱惑的な笑みを浮かべる女神は、歩みを再開した。

「構わないわ、オツタル」

「……しかし」

「大丈夫よ。だって——何があっても、貴方達が守ってくれるでしょう？」

可憐な仕草で眷族を見渡したフレイヤに、武人はそれ以上言葉を重ねなかった。代わりに何時でも動けるよう、ひっそりと構える。それ

は猫 人と小人族バルウムの四つ子も同じだった。

最強の眷族達に囲まれる中で、フレイヤは地に落ちた幼女の前に立つ。そして優雅な所作で手紙を取り出し、呟く。

「何か話があるみたいだったようだけれど、残念ね。その様子じゃ、何も話せないみたい」

ひらりと、フレイヤは手紙を手放した。それは面布のように灰髪の上に落ちる。それを眺めてフレイヤは、腰を少し折り、囁いた。

「……貴方が悪いのよ？ 私の邪魔をするんですもの。どんな方法か分からないけれど、私の眷族こどもたちを誑かしちゃったみたいだし……」

「だから、ごめんなさいね？」と酷薄に微笑むフレイヤの瞳には、確かな激情が秘められていた。

それを聞いた、灰髪の不死は。むくりと、半ば断たれた首を擡もたげる。「構わない。この程度は、想定の内だ」

「え——？」

「オツタル。フレイヤを守れ」

驚きに眼を丸くする女神の前に、不死は突然現れた聖鈴を噛み締める。

フレイヤを庇う武人。最速で槍を突き出す猫キャットピープル。人。四つの獲物を同時に振るう小人族バルウム達。

それら全てを置き去りにして。『灰』は【魔法】を発動した。

瞬間、打ち棄てられた灰髪の不死から——闇の衝撃波が放たれる。

【衝動】。それは闇術の祖ギリアが見出した、奇跡の「フォース」に似た、だが相反する力。

闇そのものに力はない。だがそれは物理的な衝撃を発生させ、周囲の存在を大きく吹き飛ばす。

最も近かった猫キャットピープル。人の男が扉まで吹き飛ばされた。小人族バルウムの四つ子は窓に、天井に、壁に叩きつけられる。

フレイヤを庇うオツタルだけが、不動を保っていた。

闇の衝撃波が止んだ後。いつの間にか、灰髪の不死は立っていた。

万全の手足。綻び一つない闇色の長衣。生まれより伸びる灰髪を王冠を半分に分ったような髪飾りが纏め上げる。

灰髪の不死——「灰」は、凍てついた太陽のような銀の瞳で、オツタルに庇われるフレイヤを見る。

「さて。それでは話を始めたいところだが……まだ少しかかりそうだな」

「——があああああああああああああッ!!!」

「灰」の背後で、霧の立ち込める扉に手をつけて立ち上がった猫^{キヤットビートル}人が、憤激を叫んで血走った炯眼を燃え上がらせる。

「——死ねエ、糞女アッ!!」

都市最速。その畏怖に恥じぬ銀槍が、光を引き裂いて「灰」に迫る。

それに「灰」は、ソウル之光を揺らめかせ。

交錯の後、そこには絵画が入れ替わったかのように、一瞬で猫^{キヤットビートル}人の男を拘束した「灰」の姿があった。

「がっつ、あアッ——!?!」

「黙っている。この会談に、貴公は邪魔だ」

「灰」の周囲に立ち並ぶ数多の《狂王の磔》。そこから伸ばされた幾多の骨腕が、男を仰向けに押さえつけている。

その上に立って、男の喉元を踏みつける「灰」は、改めてフレイヤに視線を向けた。

「さて、フレイヤ。アレン・フロームルを止めてくれ」

「……」

「彼我の戦力差は、これで理解した筈だ。それとも、貴公——この野良猫の首をもぎ取らねば、分らんか?」

「……………アレン。止めなさい」

「フレイヤ、様……………!!」

喉を踏み潰されるアレンが、決死の形相で抗議する。けれどフレイヤは沈痛の表情で首を振り、優しくアレンに語りかける。

「こんな馬鹿馬鹿しい事で、貴方を失いたくないの。どうか分かってちょうだい」

「——ッ!!!」

血が流れるほど歯を食い縛り、アレンは人が殺せる眼で「灰」を視

殺する。それをどこ吹く風と「灰」は無視し、ゆつくりと喉元から足を引いた。

即座に立ち上がり、激情に震える右手をアレンは左手で握り潰す。今にも爆発しそうな「女神の戦車」は、凄まじい形相で「灰」を睨みながら、女神の言葉に従った。

四つ子の小人族バルウムも立ち上がり、屈辱に身を焼かれながら手出しをしない。ようやく整った場に一つ眼を閉じて、「灰」はフレイヤと向き合った。

「では改めて、自己紹介をしよう。名前はない。ただ「灰」と呼ばれている」

「フレイヤよ。と言つても、貴方には必要ないでしょうけど。」

それで、何の用かしら。私の眷族こどもたちを「魅了」して、手紙なんかで一方的に場を持たせて、貴方は一体何を話したいの?」

「私の為すべき事はただ一つ。貴公への警告だ、フレイヤ」

「——ふうん」

倒れた椅子を立たせたオツタルを背に、椅子に腰掛けるフレイヤは、頬杖について「灰」を見遣る。

美しい銀瞳に灯るのは、底の見えない神の炎。無感動に君臨する『美』の下に、瞋恚の炎を揺らめかせる女神に、「灰」は淡々と警告を口にする。

「貴公は二度、ベルに『試練』を差し向けた。一度は『怪物祭』、二度は迷宮。

三度目はない。三度の『試練』を、ベルに課したその時。

——私は貴公を、必ず殺す」

「つまらないわ」

「灰」の言葉、一瞬で膨れ上がる女神の眷族の殺気。

それらを一言でばつさりと切り捨てて、フレイヤは美しい顔かんぼせに失望を乗せる。

「何を言い出すかと思えば、そんな事を言いに来たの?」

その程度でこの私を止められると、本気で思っているのかしら。だとしたら、嘗められたものね。

——あの子は、私のものよ。誰にも譲ったりなんかしない。例え貴方がこの時代の誰せかいよりも強いとしても。

私の邪魔をするのなら——殺すわ。貴方を」

伶俐な双眸で、言葉を返す。宝石のように煌めく銀瞳は薄っすらと断ち切られ、「灰」を貫いた。

示される女神の矜持。下された神意に、眷族達は鬪争の化身となる。

だが、それは。

「ああ。それは別に構わない」

「灰」のあっけらかんとした肯定により、あっさりと霧散した。

「……どういう事かしら」

「どうもこうもない。貴公がベルを欲しがるのなら、好きにしろ。私は構わない。

私が手を出す事があるとすれば、それはベルが貴公を望まぬ、その時だけだ」

「……分からないわ。貴方は私の『試練』に怒った。ではなぜ、私があるの子を手に入れようとする事に怒らないの？」

「私が貴公を、理解できないからだ」

「灰」は凍てついた銀の半眼を見せつける。そこに映るのは、未だ理解しえない『未知』の女神。

「貴公、フレイヤ。美の女神。愛を司る神よ。

私は『愛』を理解しない。誰かを愛した事はないし、愛された事もない。

愛は、私の知らぬ『未知』だ。『未知』を『未知』のまま挑んだ所で、敗北は目に見えている。

私は『弱者』だ。私は弱い。弱き故に、『未知』には勝てない。

故に貴公が、三度目を犯さぬ限り。私は貴公を、ただ見続ける」
「……」

フレイヤは黙考する。頬杖を解き、顎に手を当てて考える姿がそれだけで一枚の絵画になる姿だ。

ややあつて、フレイヤは笑った。それは吹き出すような、失笑する

ような声だった。

「……ふふ、あはは！　そう、貴方ってそういう子なのね。可愛そうだわ。子供たちにとって一番価値のある感情こころを、知らないだなんて。

「だったら、私が教えてあげてもいいけれど。どう？」

「……そうすれば、私は『愛』を理解できると思うか？」

「いいえ、思わないわ！　だって貴方——本当は理解するつもりなんて全然ないでしょう？」

「……」

「ああ、おかしい。少しだけ退屈が紛れたわ。下界には、貴方みたいな子もいるのね」

一頻り清笑したフレイヤは、唇に妖艶な弧を描いて「灰」を見つめる。

それは神々が、下界で駒遊びをする時の眼だ。

「灰」の額に、小さな影がうつそりと生まれる。

「ねえ、貴方。私と協力しない？」

「……協力、だと？」

「ええ、そう。貴方はあの子を守りたい。私はあの子を手にした。お互いのやりたい事が、私達は反しないでしよう？」

だから、協力。私は貴方に便宜を図るわ。だから私の代わりに、あの子を見守っていてちょうだい？

私があの子を手に入れるまで——ねえ、いいでしょう？」

「知るか。下らん」

フレイヤの提案を、「灰」は据わった眼で一蹴する。

「なぜ私が、貴様の言葉など聞かねばならん。着飾った皮で醜い腹を隠す豚が、道理を弁えろ」

「うふふつ！　それが貴方の本性？　いいえ、もつとあるでしょう？」

「さあ——私に見せなさい？」

貴方という子の、底の底まで——私に曝さらけ出してちょうだい」

「……やはり貴様は、理解できません。愛の女神とは、全く理に合わぬ存在だ」

「愛は気紛れで、流星ほしのように心を打つものよ？ 貴方には——永遠に分からないでしょうけれど」

「灰」が睨み、女神が微笑む。それはかつて、ベルに視線を投げつける者を問い質した時と同じだった。

もはや「灰」に語るべき事はない。踵を返し、扉の霧を払う。

「話は終わりだ。邪魔をしたな」

「あら、もう帰るの？」

「ああ。もう用は無い」

「そう……ねえ、一つ聞いてもいいかしら？」

「……何だ。言ってみろ」

いつかと同じやり取りをして、「灰」は視線だけを投げかける。フレイヤは極上の笑みを浮かべて、その銀瞳に二つの物を映し出す。

「その髪飾りと長衣、誰かからの貰い物かしら？」

「何故そう思う」

「だって、私でも滅多にお目にかかれないくらい綺麗で丁寧な一品ですもの。貴方ってそういうの、興味ないでしょ？」

だから、誰かからの贈り物かしらって、そう思ったのだけど」

「……忘れたな。そんな事は」

「そう」

「……………似合っていないか？」

「いいえ？ ぴったりだと思っわ」

「——そうか」

それだけを呟き、「灰」は去っていく。暗い廊下に消える幼女を、扉が閉まるまで女神は見送った。

衝動

輪の都の放浪者、吹き溜まりのギリアの闇術

闇の衝撃波を発生させる

ギリアはその最期、この闇術を見出し

ついに扱い切れず、深淵の沼に溶けた

その亡骸は、白面の虫になったという

放つ闇にダメージはないが、物理的な衝撃を伴い

周囲の敵を大きく吹き飛ばす

また尋常な盾などは、易々と弾くだろう

灰の髪飾り

半分に欠けた冠に似た髪飾り

白銀に輝く涙石が埋め込まれている

古い呪われ人の持ち物のようだが

不死に飾りを贈る酔狂がいるだろうか

けれどこれは、丁寧な手入れの跡があり

ずっと変わらず使われている

闇の長衣

闇に長く浸された黒い長衣

仕立ての良い、丹念に編まれた衣服

上質な布地は深淵に食い荒らされた跡がない

最初から闇に染められていたのだろうか

呪われ人には過分な装束に見えるが

どうしてか、不死が着るとぴったり合う

「……よろしかったのですか。フレイヤ様」

「いいわ。いいように転がされたのは癪だけれど、あんなのと張り合っただってしょうがないもの」

「……」

「オツタル？ 言いたい事があるならばつきり言いなさいな」

「……いえ。貴方様に奏上したい事など、何も」

「そう？ その割には、燻っているように見えるけれど」

「……」

「……良い、オツタル。私は貴方を愛しているわ」

「存じております。貴方様の愛を疑った事など、一度もありません」

「嬉しいわ。けれど、その愛する貴方があんなのに執着する姿なんて見たくないの」

「……」

「あれは、ただの残骸よ。かつて何かであつた者の、哀れな残骸。挑んだところで、得るものはないわ。」

「だってもう、とつくに壊れているんですもの」

「……しかしあの者は、貴方様の名に泥を塗りました」

「あら、別に構わないわ。あんなのにいいようにされても、恥だなんて思わないし。何より貴方達のためなら、私はいくらでも泥を被ってあげられるもの」

「——過分なお言葉です」

「ふふっ、相変わらず生真面目ね。」

「……あれの事はもういいわ。ただ、敵に回すと面倒ね。残念だけれど、ちよっかいをかけるのは止めましょうか。」

「あの子の事は愛しているけれど、あんなのの怒りを買って、貴方達を失うのは嫌だもの」

「……。フレイヤ様の、御心のままに」

「ありがとう、オツタル。それじゃあ、アレン達を呼んでちょうだい？

あの子達には、よく言い聞かせて上げないといけないし——あんなのの【魅了】なんかで私の愛は少しも消えないって、教えてあげなくちやね？」

原作四巻分

盲（めし）いた剣に鍛冶師は願う

ベルが目を覚ましたのは、『ミノタウロス』戦から二日後の事であった。

肉体の傷は全てアスカが治していたため、バベルの治療室ではなく本拠^{ホーム}で眠り続けていたベルは、臍^{ホム}気に意識を取り戻した。

安堵するヘステイアとリルカ。二人に囲まれて曖昧に微笑んでいたベルは、突然がばりと体を起こす。

「——アスカ!? アスカはどこ!？」

「私はここだ。ベル」

部屋の隅に立っていた灰髪の小人族^{パルウム}。アスカが口元に淡い弧を描きながらトコトコ近づくと、ベルは深紅^{ルベライト}の瞳をかつ開いて小さな両肩を掴む。

「大丈夫!? 怪我はない!? 生きてる!? 無事!？」

「何だ、心配してくれていたのか? この通り、私は平気だ。私は、死なないからな」

「アスカ……良かったあああ~~~~っ!! アスカが無事で良かったよおおお~~~~っ!!」

幼女の無事を確認したベルは、顔をくしゃくしゃにしてアスカを抱きしめ、おいおいと泣き始めた。突然の事に驚いて平素半眼の瞳を睜^{ヒラ}ったアスカは、ややあつて眼を閉じ、ひっそりと微笑みながらベルの背中を優しく叩く。

「……全く。何時まで経っても子供だな、貴公は。起きて早々泣きはらすとは」

「だって、だってえっ!! アスカが死んじゃったんじゃないかって、もう会えなくなっちゃうんじゃないかって、思ったからあっ!!」

「大丈夫だよ。私はここにいる。貴公の前から、いなくなったりしない」

「うう、ううう、うわあああああああああああんっ!!!」

ベルは泣いた。それはもう、ありつただけの涙を流した。事態に置いて行かれたヘステイアとリルルカが、思わず苦笑と、優しい瞳でベルとアスカを眺めるくらいに。

そうして泣いて、泣いて、泣き止んだベルは、やっとアスカを離れた。色々と台無しになった顔を少女の手で整えられたベルは、飛び出たベッドにまた寝かされる。

「さて。気は済んだか、ベル。全く、こんなに泣くのは何時以来だろうな」

「う、うん……アスカ、その……」

「森で迷っていた時か、祖父に恐ろしい話を聞かされた時か……ああ、寝台に粗相をした時もだったかな」

「アスカあつ!? その話やめようっ!? ねっ、ねっ!?!」

「そうだぞ、アスカ君。ベル君にはこれからたっつぷり説教をしなきゃいけないんだからね。」

——それはそれとして、その話、後で聞かせてくれないかい?」

「神様あつ!?!」

「あ、リリも聞きたいです!」

「リリまでえっ!?!」

「——クツ。全く、騒々しいな。貴公らは」

「「あ——」」」

それはベルも含めて、初めて耳にしたアスカの笑声だったのかも知れない。喉を鳴らした小さな少女に、三人は一斉に目を向ける。そして誰ももなく顔を見合わせ、笑い出した。

それをきよとんと見ていたアスカは、小さく首を傾げる。だがそのうち疑問を捨て、やっと目覚めた少年に告げた。

「さて、ベル。色々と話はあるが、まずやるべき事があるだろう」

「あ、うん。そうだよね。神様、リリ、アスカ。——ただいま、みんな」

「——おかえりなさい、ベル君」

「おかえりなさいです、ベル様」

「ああ、おかえり。ベル」

見つめ合い、笑い合う四人。この広い下界で出会った、奇跡のよう

な家族の形。

それをアスカが——「灰」が、暫し眺めていると。キラリと、女神ヘステイアの目が光った。

幼女神はにつこりと、慈愛に満ちた笑顔でベルに尋ねる。

「さて、ベル君？ 君は自分が何をしたのか覚えているかなあ？」

「え？ あの、えっと……そうだ。僕、ミノタウロスと戦って、それで……」

「ベル君は勝った。勝って、そのまま意識を失って、二日も眠り続けていたんだ。それについて、ボクに何か言うことがあるんじゃないかなあ？」

「あつ!? あの、し、心配かけて、ごめんなさいっ!!」

「うんうん、そうだよねえ。まずは「ごめんなさい」、からだよねえ。

それなのにベル君ときたら、起きて早々アスカ君に抱きつくなんて。ボクは悲しいよ、ベル君。君の中でボクという存在はそんなものだったんだね」

「ご——ごめんなさいッ!」

「いいんだいいんだ、謝らなくても。ボクはちいつつとも気にしちゃいないからさー!」

「……………あの、神様？」

「何だい？ ベル君」

「その、ひよつとして……怒ったり、してます？」

「——怒ってないように見えるかい？」

につつこりと——それはもう慈母のようなキラキラした笑顔でヘステイアはベルを圧迫する。だからだと汗を流す少年は反射的に逃げようとして、ベッドの上に逃げ場なんかないと悟った。

それを見越したヘステイアは、ベッドに膝をかける。そして青みがかつた瞳を妖しく輝かせ——あろうことかベルの片腕に抱きついた。

どたぶんっ!! と揺れるヘステイアのヘステイアたる所以が、むぎゆうつ、とベルの腕に押し付けられ柔らかく変形する。

「かつつ、神様っつ!?! い、い、一体何をツ!?!」

「んー? いやあ、考えたんだけどねえ、君はアスカ君に抱きついた

じゃないか？ それは家族としちや当然だ。無事を確かめるのは当たり前だからねえ。

——だからボクも、君の無事を確かめるためにこうして抱きついてるわけさー！」

「だっつ、だからって、神様はアスカとは違うっていうかつ!」

「おいおい、差別は良くないぜ？ ボクだって君の家族なんだ、これくらいは当然だろ？」

それともなんだい？ ボクは抱きついちゃいけないっていうのかい?」

「そうじゃないですけど、いやいやそうですけど?! いやいやいや、おかしいじゃないですか色々っ!」

「何もおかしくなんかないさ。それにベル君、忘れちゃいないだろうね？」

——ボクは君に、たっぷりお説教があるんだ。離スト思ウナヨ」

最後の台詞を大いに強調して、ヘスティアは更にぎゅうつとベルの腕を抱きしめる。暖かく柔らかな感触に赤くなったり青くなったりする少年は、はっとして栗色の髪の少女に助けを求めた。

「リ、リリっ!?! 神様を何とかしてっ!」

「ベル様？ リリは悲しいです。ベル様のために一生懸命だったリリの手を振り払って、ベル様は戦いに行ってしまったました。

ミノタウロスと戦うベル様を見て、この胸が何度張り裂けそうになったか分かりません。リリはとってもとっても心配したんですよ?」

——だからベル様には、そりやもうすんごいお説教が必要ですよね?」

「リ、リリいつつ!」

可愛らしい笑顔を貼り付けられるリルルカは、ぴよこんとベッドに飛び乗って反対側の腕に抱きつく。幼い少女の、けれど確かにある双丘にベルの意識は破綻寸前まで追い込まれた。

そして最後の希望——棒立ちでただ見続けるアスカに、ベルは運命を賭ける。

「アスカっ、アスカあつ!? お願い助けて、神様達をどうにかして!? このままじゃ僕、色んな意味でまずい事になると思うっ!?」

「……ふむ。ベル、貴公に謝るべき事がある」

「え!?!」

「色々あつてな、私はヘステイアに借りが出来た。それを返すまでの間、私は主神命令オーダーに逆らえない」

「ふあっ!?!」

「だから、済まないな。貴公の望みは叶えてやりたい所だが——別に、本気で嫌がつている訳でもないだろう?」

ならばここは、ヘステイアの命を優先させて貰おう。それで、ヘステイア。私は何をすればいい?」

「この際だ、君も抱きついちゃえ! アスカ君!」

「その神命、承った」

恭しく一礼して、アスカはベッドに上り、ベルの背後に陣取る。この後どうなるかを想像して、少年は真っ赤になって絶叫した。

「ちよっ、待ってっ!?! お願いだから待ってアスカ!?! これ以上は駄目だからっ、とにかく駄目だからっ!?!」

あっ、ちよっ、待っ、あっ、アツ——!?!」

爽やかな朝の訪れる廃教会の地下から、壊れた少年の悲鳴が轟いた。

「ヘステイア・ファミリア」の、日常が戻った時であった。

「……」

ソファに寝転がるベルは、ブーツと天井を見上げている。

目覚めてから半日。天国のような地獄の説教をみっちり叩き込まれたベルは、暫く絞り滓のようになった後、ゆっくりと休息を取っていた。

取り止めもなく天井を見上げる深紅ルベライトの瞳。『冒険』を終えた少年は、何を思っているのだろうか。

その姿を横目で見ていた幼女は、「アスカ様」と呼ぶりルカの声に

視線を戻す。床の一角に陣取って様々なアイテムを広げる二人の小人族は、リリルカの試作品を検証していた。

ヘステイアはベルの看病をしている。何をしてもどこか生返事のベルに苦勞しているようだが、楽しそうだ。ちなみにリリルカもやりたがっていたようだが、何かヘステイアとの言い争いに負けていた。

少女はまだ、自分の心に素直になれない。

「ねえ、アスカ」

各々がゆったりとした時間を過ごしていると、ふとベルがアスカに声をかける。むくりと体を起こした少年は、布地を敷いた床に座る少女と目を合わせる。

「アスカの話、聞きたいな」

「私の話か？」

「うん。小さい頃、アスカが話してくれた物語。あの時は怖くて途中で聞くの止めちゃったけど、今度は最後まで聞きたいなって。」

……駄目、かな？ アスカ」

「いや、いいぞ。今の貴公なら、構わない」

耳を折る兎のように遠慮がちなベルに、アスカは是と頷く。途端、嬉しそうな顔をするベルに微笑んで、幼女は立ち上がり、ベルが場所を空けたソファに腰掛けた。

凍てついた太陽のような銀の瞳。その奥に懐郷を奔らせる幼女に、ヘステイアが問い掛ける。

「……………いいのかい？ アスカ君」

「ああ。今のベルなら、きっと大丈夫だろう。私に影響される事もない筈だ」

「……………そうかい」

「ならいいんだ」と慈しむ微笑を浮かべるヘステイア。話の見えないベルは幼女神と幼女を交互に見ながら尋ねる。

「えっと……………神様？ アスカ？」

「済まないな、ベル。貴公の知らぬ間に、私はある約束をしていたんだ。」

私の過去について、ベルには話さぬ事。それを貴公以外と約束し、

話しておいた」

「……リリも？」

「はい。申し訳ありません、ベル様。隠し事をするような真似をしてしまい……」

「……うん、いいよ。それってアスカが、僕に気を使ってくれたからだよな？」

「そうだ。貴公はまだ、怖がっていたからな。話すべきではないと考えていた」

「……そっか」

ベルはソファに深く腰掛ける。虚空を見つめる深紅の瞳^{ルベライト}。ややあって、笑顔を形作った少年は、隣に座る幼女の手を握った。

「大丈夫だよ、アスカ。僕はもう逃げない。そう決めたから。」

だから話して。あの物語の続きを——アスカの辿った、物語を」

「ああ。ベル」

ベルの手を握り返すアスカは、静かに語り始める。

アスカという不死の物語。『灰』と呼ばれた狂王の物語。

遙か遠き時代の旅路。擦り鳴らされる古鐘の声は、朗朗^{ろうろう}と地下室に響いていった。

翌日の未明。

ヘステイアとリルルカがベッドで、ベルがソファで眠る地下室の壁に、アスカは腕を組んでもたれていた。

思い出すのは昨日の事。アスカは様々な事をベルに話した。

不死である事。火の時代の事。自らが狂王である事。『灰』にとつてベルが何であるか。

年に一度の旅でオラリオに来ていた事を話した。リルルカとの一連の経緯も話した。【ロキ・ファミリア】に個人的な伝手——リヴェリアへの師事やアイズとの交流、貸し借りがあることも伝えた。

【ロキ・ファミリア】に関してはヘステイアが良い顔をしなかったが、最終的には折れていた。止めろと言っても、止めるつもりはな

かったが。

話していかない事もある。ゼウスの使命、ウラノスの秘事、後ろ暗い殺人。今はまだ、話すべきではない。

アスカの語りが終わった後、ベルは最初にアスカを抱き締めた。「今まで逃げてごめん」と、謝った。そして叱りつけた。「一人で危ないことをしないで」と怒られた。

特にリルカについては、きちんと謝るべきだと言われた。確かに一理あるとアスカが謝り、面食らったりリルカが元々は自分が悪いと謝り、連鎖して謝罪合戦になった。最後には、皆で笑い合った。

その記憶は、今も「灰」の裡にある。暗き深海の心ではなく、アスカと呼ばれる、ベルの家族として。

「ん……」

「ああ。起きたか、ベル」

「おはよう、アスカ……」

ソファで体を起こして寝ぼけ眼をこするベルに、アスカは微笑む。これからも、この導きを見守り続けよう。それが己の定めた、唯一の使命なのだから。

その日の夕方、アスカとリルカは『豊穡の女主人』を訪れていた。早朝からギルドに向かったベルはエイナと相談し、発展アビリティを決めて「ランクアップ」した。その結果現れた《スキル》について一騒動あったが、それは明日の話としよう。

その後ヘステイアは『神会』デナトウスに向かい、ベルは天井を眺めていた。戦いの余韻、感慨に耽っているのだろう。邪魔をしないよう、二人の小人族は廃教会を出たのである。

『豊穡の女主人』に来たのは、ここで「ランクアップ」の祝賀会をするからだ。従業員ウエイトレスのリユーとシルも加わり、店奥のテーブルを囲む四人は適当に注文をしてベルを待っていた。

「へえー、じゃありりさんはアスカさんに勧誘される形で「ヘステイア・ファミリア」に改宗はいったんですね」

「ええ、まあ。色々ありましたが、概ねそんなところですよ」

「そうなんですか。ベルさん目当て、ってわけじゃないんですね」

「……どういう意味でしょう？」

「深い意味はないですよー？　ただ、ライバルが増えるのって嫌じゃないですか。リリさんはそういう心配しなくて良さそうだなって思っただけです。」

——それとも、ひよつとして好きなんですか？　ベルさんの事」

「!?　そ、そそそそんなわけないでしょうっ!?」

「ですよー。安心しました。リリさんとは仲良くやっていけそうです」

「ぐっ……嫌に引つかかる言い方をしますね……」

横で交わされるやり取りを聞き流して、アスカは黙々と食事を口に運ぶ。洗練された所作、腐つても偉大な神である大神ゼウスから教わった作法は確実にアスカの裡に蓄積されていた。

「……綺麗に食べますね」

「ん？　何か言ったか、リユー・リオン」

「いえ……とても綺麗な所作だったので、つい。何方どなたか、高貴な方から学ばれたのですか？」

「ああ……まあ、そうなるな。昔取った杵柄だろう」

「成程……ちなみに、その方はエルフに関わりが？」

「いや……覚えていない。何故、昔などと私は言ったのだらう。礼儀を覚えたのは、最近の事であるのだが」

「……？　そう、ですか」

アスカの引つかかる物言いにリユーは首を傾げる。僅かにだが、妙な人臭さを感じ取ったエルフの戦士は、入り口に現れたベルに思考を中断した。

L.v.2、上級冒険者となつてもそんな様子を欠片も見せないベルが、周囲の密かな会話に狼狽うろたえながらテーブルに到着する。

先に食べ始めていたアスカを窘めつつ、リリルカが音頭を取って宴が始まる。ベルは酒に挑戦し、シルはベルに甲斐甲斐しく世話を焼き、リリルカはニコニコと笑い、リユーは静かに食を進める。

そうしている内に、話はベルの二つ名に移った。

「リトル・ルーキー」？ それがベル様の二つ名ですか？」

「うん……どう思う？ リリ」

「えーつと、そうですねー……普通？」

「だよねえー」

黙々と食べ続けるアスカの対面で「神様は無難で良いって言うんだけどさー」とベルがぼやく。もつと別の二つ名が欲しかったのか、落胆した様子ルベライトのベルは、深紅の瞳をアスカに向けた。

「アスカはどう思う？ 僕の二つ名」

「別に、どうとも思わん。所詮は神の児戯、気に掛ける理由もない」

「そんな事言わずにさー、なにかない？ ここう、もつと格好いい二つ名とか」

「……貴公がそれを望むなら、私の知る異名なを話してやろう」

鼻を鳴らす幼女は、銀の半眼で遠くを見遣る。そしてどうでも良さそうに、古鐘の声を擦り鳴らした。

「——【深淵歩き】」

「……おお!」

アスカの一言にピクリとベルが反応する。気にせずアスカは続ける。

「ドラゴン【竜狩り】 ホークアイ【鷹の目】 ロードブレイド【王の刃】 エクスキューションナー【処刑者】」

「おおお!」

「カオスウイッチ【混沌の魔女】 ダークサン【陰の太陽】 グレイブロード【墓王】 ファアザ・オブ・ジ・アビス【深淵の主】 ザ・パースワー【呪縛者】」

「ルイン・センチネル【虚ろの衛兵】 ザ・ロイヤル・イージス【王盾】 サー【卿】 バインド・アイボリー・キング【灼けた白玉】」

「スカラー・オブ・ザ・ファースト・シン【原罪の探求者】」

「おおおおおおおおおおお!」

「ルーデク【灰の審判者】 アビスウオッチャー【深淵の監視者】 ジャイアント【巨人】 ネームレスキング【無名の王】 ダークイーター【闇喰らい】」

「スレイブナイト【奴隸騎士】」

「ロードオブシンダー【薪の王】——【王たちの化身】」

「おおおおおおおおおおお!」

思わずベルは立ち上がった。びっくりするシルの横でベルの瞳は

それこそ少年のように輝いている。

アスカの口にした二つ名は、ベルの幼心をいたく刺激したらしい。「すごい！　すごいよアスカ！　いいなー、僕もそんな格好いい二つ名欲しかったなー！」

「うーん、確かに格好いいとは思いますが……ベル様にはちよつと厳しいですかね？」

「確かに、クラネルさんの気質には合わないかと」

「リトル・ルーキー」、私は好きですよ？　ベルさん」

「そ、そうですか……」

しかし女性陣の受けはあまりよくなかったようだ。いまいちな反応にベルは面食らい、しおしおと項垂れて椅子に座る。それをシルやリルルカが励ましつつ、宴は進行していった。

途中、色々あった。アスカが緊急時以外はついてくるだけと聞いたリユーが新しい仲間を加えた方が良いと助言したり、それを聞きつけた酔っ払い共が絡んできてリユーたち酒場の従業員が撃退したり。その間もアスカは黙々と食事をしていた。

——ここは敵地だ。『豊穣の女主人』ときる「ファミリア」との繋がりを、アスカはよく知っている。だから下手には動かない。「灰」が動くのは、三度目が起こったその時だけだ。

「——おい、あんた」

アスカがそうしていると、不意に。幼女の体に大きな影が降りかかる。口を拭い、顔を上げれば、そこにいたのは体格の良い女ドワーフ。

『豊穣の女主人』の店主、ミア・グラントである。

「随分と良く食べるじゃないか。おかげ様でこっちはてんでこ舞いだよ」

「そうか」

一言呟いて、アスカはテーブルの上を見る。食事を終えては注文し、それを繰り返していたので、いつの間にやら大量の皿が積み上がっている。

一体何人前になるのだろうか。少なくとも一桁ではきかない量に幼女は眼を瞬かせ、ミアに向き直った。

「済まないな。私一人に手間をかけさせる」

「そりゃいいのさ。たらふく食ってくれる分にはこつちも儲かるからねえ、文句なんかはないよ。ただ、一つ聞きたくてね」

「何だ？」

「あんだ、ちゃんと美味しいと思ってるのかい？」

妙な質問だった。同じテーブルにいるベル達は一様に首を傾げる。

ミアの料理は絶品だ。『豊穰の女主人』の常連も従業員も、そこに文句をつける奴は一人もいない。ミア自身疑ってもいないだろうに、どうしてそんな事を聞くのだろう。

そう、ベル達が疑問に思う側で。アスカは眼を細め、小さく首肯した。

「美味しいと、そう思っている」

「本当かい？」

「ああ——家族と囲む食事は美味しいものだ。私はそれを、知っている」

「——そうかい」

気前の良い笑顔を浮かべていたミアが表情を深める。含蓄を積んできた女将は幼女の無表情を見遣り、振り返って背中越しに手を振った。

「なら、じゃんじゃん食って金を稼がせておくれよお！ アタシらが悲鳴を上げるくらいにね！」

「貴公がそれを望むなら、そうするでしょう」

カウンターに去っていく背中を見送って、アスカは再び料理と向き合う。一連の流れを観察していたリリルカは、はっと表情を変えてアスカを見た。

「アスカ様、ひよっとして——」

「リリルカ。それは、後でいい」

「……分かりました」

リリルカは口から出かけた言葉を引っ込めた。何となく察したベルは、優しいような、悲しいような表情を浮かべている。シルとリユーは空気を読んで暫し口を噤んだ。

周囲の客の喧騒に紛れ、静かな時間がテーブルに流れる。その間も

アスカは黙々と食事を続けた。

黙々と、黙々と——皿を開けては側に積み、新たな注文を繰り返す。短い時間で皿は十枚、二十枚、三十枚と積み上がっていき——

「——食べすぎニヤア!? どんだけミャー達を働かせるのニヤア!」

「ペースも滅茶苦茶早いニヤア!? ちんまい小人族バルウムのくせにどんだけ大食漢なのニヤア!」

「そこ、文句を言う暇があつたら働けよー! このままじゃ手が足らなくなるって!」

結果としてアーニヤ、クロエ、ルノアを筆頭とした従業員達ウエイトレスが悲鳴を上げるくらい、アスカは食べて食べて食べまくった。

一夜にして百人前を平らげる。後の『豊穡の女主人』に語り継がれる伝説の小人族バルウムが誕生した夜であつた。

「【不転心誓】ダークサイン……これって何となくだけど、アスカ君の《スキル》と似てるんだよね……」

祝賀会の翌日の朝。いつもより早起きしたヘステイアは、後回しにしていたベルの新しい《スキル》について考察していた。

【不転心誓】ダークサイン。その効果は以下の通りである。

- ・ 誓約条件達成時のみ発動。
- ・ 全能力及び逃走を除く全行動の超高補正。
- ・ 損傷を無視した行動可能。

・ 誓約を破棄した場合、24時間全アビリティ能力超低下。
この中でアスカの《スキル》、【暗い魂】ダークソウルと似ているのは「損傷を無視する」点と「効果に対する明確なデメリット」だ。

【暗い魂】ダークソウルは対象を不死とする代わりに死亡する度に『人間性』というものを失う。そして死ぬまではどんな傷を負っていても万全と同じ状態で動けると、ヘステイアはアスカからそう聞いている。

誓約条件に関しては具体的に書かれてはいないが、おそらく逃走と関係あるのだろう。逃げない、あるいは立ち向かう決意をした時に発動するのも知れない。

「ボクの考えはこんな感じだけど……アスカ君、何か心当たりがありそうだね。聞かせてくれないかい？」

『『ダークソウル』……おそらくは、私の《スキル》ではないそれと『神の恩恵』が結びついた。私はそう考える』

『『ダークソウル』？』

ベッドでうつ伏せになり、背中にヘステイアが乗っているベルが疑問の声を上げる。壁際で腕を組んでいたアスカは手を解き、ソファに座るリリルカに話しかけた。

「リリルカ。以前、貴公に新たな《スキル》が発現したな。あの時もそうだが、私はある匂いを感じ取っていた」

「匂い、ですか？」

「ああ。本来、人の全てが宿す深淵。暗い魂、人間性の匂いだ。

それは貴公らが既に忘れ去ったもの。遙か古に分かたれ、血の一滴にすら現れず、だが受け継がれ続けたもの。

『『ダークソウル』は、人間性の根源だ。そしてもう枯れ果てたそれが発露したのは——おそらく私と、関わりを持ったためだろうな』

「……つまり、どういう事だい？」

「呼応か、剔出か、仔細は分からんし、考える意味もない。だが私の暗い魂と触れ合った結果、貴公らの『ダークソウル』が目覚め、その可能性を『神の恩恵』が拾い上げた——それが妥当な所だろう」

「……そういえば、アスカ様と最初の交渉をする前、何かなまあたかかものに包まれたような感じがしました。それが『ダークソウル』、なんでしょうか？」

「貴公の場合はそうだな。ベルは、単純に私と時間を共にして長い。《スキル》もそうだが、名も無き“ソウルの業”を実演できたのも、おそらくそれが原因だろう」

「そつか……」

ベッドから起き上がったベルは上着を着ながら呟く。変わらずベッドに座るヘステイアは何かを思索して、おそろおそろアスカに尋ねた。

「……おいおい、それってつまり、その気になればアスカ君は他人に

《スキル》を発現させられるって事じゃないか？」

「正確には『火の時代』の技能を《スキル》という形で習得させられるのだろう。大まかにだが感覚も掴んでいる。あと二、三人ほどで試してみれば、物になる筈だ」

「……アスカ君、分かっているとと思うけど」

「ああ。口外はしない。この業を使う者も限定する。そう言いたいのだろうか？ ヘステイア」

「うん。君が必要だと思うなら止めはしないけど、くれぐれも相手は選んでおくれよ。ただでさえ色々抱えてる君の事がまわり知られたら……ボクはもう、居ても立ってもいらなくなるんだからね！」

「本気で怒っちゃうぞー！」とヘステイアはツインテールを逆立ててビシリとアスカを指差す。それに肩を竦め、少女は面倒そうに首肯するのだった。

ヘステイアが朝食の準備をしている間、ベルとアスカは廃教会裏で向き合っていた。

リルルカはいない。早朝はいつも『ノームの万屋』よろずやという懇意にしている小売店へ赴いている。『確認』が終わる頃には帰ってくるだろう。

「では、ベル。まずは名も無き『ソウル』の業からだ。貴公の真髄、貴公のソウル。それを私に見せてみる」

「うん——行くよ、アスカ」

インナーだけの少年は《ヘステイア・ナイフ》を抜き、魔法を発動する。

【炉の加護】、ついで【ファイアボルト】。仄かな光に包まれるベルの手から炎が溢れ、それは漆黒のナイフを媒介に炎の刃を作り出す。

《ロングソード》と《塔のカイトシールド》を構えるアスカ。憧憬と同じく、遙か高みに立つ幼女に、ベルは突貫した。

今日は『ミノタウロス』戦で壊れてしまった装備品を買い揃えに行く日である。だからダンジョンには行かないし、ベルも病み上がりの

身なので無理をするつもりはない。

だからこれは『鍛錬』ではなく『確認』だ。ベルが新たに得た《スキル》と力。どうせ戦う予定がないのならば、これを機会に確かめてみるべきだとアスカは主張した。

全ての『未知』は、『既知』に変えるべきである。それがアスカの生き方であるが故に。

炎の刃が幼女に迫る。

閃く紫紺と火の残滓。以前とは比べものにならない程に成長したベルの攻撃を、アスカは盾で受け、籠手で防御し、剣で弾く。

確かめるのは傷の具合。盾越しに焼かれる感覚、籠手の下に刻まれる傷、剣で受ける度に裂ける肌。ベルのソウルが、振るわれる炎刃がどれ程のものか、アスカはその身を以て確かめる。

「ふむ……ふむ。もういいぞ、ベル」

「分かった。……大丈夫？ アスカ」

「ああ。すぐに治す」

炎の刃を消して心配そうにベルは尋ねる。アスカは手を振って、エストを飲んでから炎の刃を評価した。

「直剣型の手数武器だな。性能は物理と炎の複合属性、威力は炎にやや偏っている。焼き断つ故に血は流れず、ソウルの刃ゆえに完全な防御は出来ない。盾にしろ、物理と炎両方の耐性がなければ防げんだろう。」

刃の軽さは長所であり短所だ。短剣のように扱える直剣、そう考えれば使い途も広がる。反面、威力と防御性に乏しい。特に攻撃を受けるのは止めておけ。貴公ヘステイア・ナイフの武器ほど耐久に優れている訳ではないのだから」

「うん、分かった。考えてみるよ」

「よろしい。それでは次だ。貴公の《スキル》を試してみよう」

アスカは武装を仕舞い、ソウルを束ね暗い刃を抜き放つ。半ばより折れた直剣の名残。今や短剣にも劣る見窄らしいそれは、『灰』の半身である。

故にそれは、真剣の証。程度はどうあれ、本気でやるとアスカは

誓っている。

その恐怖を呼び覚ます闇色の刃に、ベルは汗を吹き出し、けれど決して逃げなかった。

「灰」と呼ばれた不死に立ち向かう少年。それに頷き、アスカは立つ。

『《英雄願望》^{アルゴノウト}についてはよく分らん。チャージ権、というからには何らかの形で行動の性能を上げるものと思われる。だが条件が不明だ。故にここでは試さない。今回試すのもう一つの方だ。

《不転心誓》^{ダークサイン}。誓約条件達成時のみ発動する《スキル》。誓約条件と破棄判定は不明だが、おそらく『逃走』に関わるものとヘスティアは見た。

その上で、貴公はどう考える？」

「……あの時、僕は逃げないって決めた。アスカからも、アイズさんからも、僕の願いからも——逃げないって、そう決めたんだ」

深紅の瞳が真っ直ぐにアスカを見る。折れた刃を垂れ下げ、片時も眼を逸らさない銀の瞳が静かに少年を映している。

幼女と向き合い、少年は誓う。二度とこの人から、家族から逃げない。

ずるりと、折れた刃より闇が吹き出し直剣となる。ベルは《ヘスティア・ナイフ》を構える。

新雪のような髪の下に灯る二つの深紅^{ルベライト}。その色が、黒い輪^{リング}で縁取られた。

「……成程。やはり、『ダークソウル』だな」

「? どうかしたの、アスカ?」

「鏡だ。見てみる。それで分かる」

手渡された手鏡で自分の顔を見てベルは驚いた。パチパチと瞬き^{まばた}して、自分の瞳に手を伸ばしたり角度を変えて見たりする。

「とりあえず、その状態で少し打ち合ってみるか。どれ程の効果か見せておきたい」

「う、うん」

瞳の変化に戸惑いつつも、すぐに意識を切り替えてベルは構え直し

た。そして何度も繰り返した鍛錬のように二人は刃を交えた。

数分後、「十分だ」とアスカが折れた刃を収める。大した息切れもないが驚くほどに集中していたベルは少し困惑していた。

今なら、思った事が全て出来る。そんな気がするのだ。

その答えを、灰髪の少女は擦り鳴らした。

「この《スキル》の真価は行動補正だな。ベル、今の貴公は全能感があるだろう」

「うん……よく分からないけど、出来ない事なんか無いって思える。でも浮かれてる感じもないし、足が浮つく感覚もない。こう、何て言うか——自分の全部を信じられる。そんな気がするんだ」

「それこそが、《不転心誓》だ。貴公が思い描く動きを、そのまま体に適応させる。能力の向上は副産物、肉体に想いを乗せるための補助に過ぎないのだろう。」

——それは『運』に優れた、本当に貴い者の業。努々ゆめゆめ軽んじないようにしろ。軽々しく扱えば、相応の代償を支払う事になる」

「試しに誓約を破棄してみろ」とアスカは言う。やり方が分からないベルは色々考え、逃走に関連付けて明確に逃げるつもりで一歩引いた。

途端、少年の体は重くなり、瞳から黒い輪は消え、崩れるように座り込む。

「あれ、体が重い……?」

「……見た所、能力アビリティの低下が著しいな。今の貴公は、推定だが駆け出し程度の力しか持たん。」

おそらくだが、「ランクアップ」時の潜エクストラポイント在値すらも誓約破棄の代償となるのだろう。効果が劇的である分、代償も大きいという訳だ」

周囲の霧を晴らし、アスカはベルを助け起こす。そして少年を見上げ、古鐘の声で告げた。

「忘れるな、ベル。名も無き『ソウルの業』と《不転心誓》は諸刃の剣だ。」

『ソウルの業』は自らのソウルを剥き出しにする。それは肉体が耐えられても魂ソウルが耐えられなければダメージを負うという事だ。そ

の業を振るう限り、貴公もまた危険があるのだと知っておけ。

そして《不転心誓》^{ダークサイン}は、貴公が決して曲げられぬと断じた時に使え。ただの戦いで不転を誓い、ただの戦い故に逃走し破棄などすれば目も当てられない。

これは、貴公の意志を通す力だ。貴公が先へ進む覚悟。それを示すための《スキル》となるだろう」

凍てついた太陽の瞳と見つめ合い、ベルは力強く首肯する。

そうして『確認』を終えた二人は廃教会に戻った。帰ってきたリルカと入り口で合流し、三人は地下室に戻る。

ヘスティアが出迎え、賑やかな朝食が始まる。

それは何でもない、ただの日常だ。

『クロツゾ』。それは魔剣に関わる者ならば誰もが知る名前である。

『呪われた魔剣鍛冶師』『凋落した鍛冶貴族』。今では嘲笑と共に語られる名は、かつて世界で最も恐れられた雷名^なの一つだった。

『クロツゾの魔剣』。「海を焼き払った」とまで称された伝説の魔剣。かつてこれを兵卒に持たせた王国^{ラキア}は、地形を変え森を焼き尽くすその威力を以て「不敗神話」を築き上げた。

今では精霊の怒りを買ひ、戦場で全て破砕し、クロツゾの一族は誰一人として打てなくなった魔剣。その『クロツゾの魔剣』を打てる者が、オラリオには居る。

ヴェルフ・クロツゾ。「ヘファイストス・ファミリア」に所属する下級鍛冶師。理由は定かではないが、彼は魔剣が打てる。上級鍛冶師^{ハイスマイス}でもなく、『鍛冶』のアビリティも持たないが、ヴェルフ・クロツゾは魔剣が打てるのだ。

間違いなく、正統の『クロツゾ』。呪われた一族に産まれた唯一の魔剣鍛冶師。

その彼は今——ベル・クラネルと共にあった。

Lv.2、上級冒険者となったベルと契約した専属鍛冶師。そしてアスカを除くベルとリルカの二人パーティに連なる、第三のパー

テイメンバーとして。

「——らああアッ！」

威勢の良い咆哮が上がり、大刀がオークに叩きつけられる。

緑の血飛沫を上げ倒れるオーク。苦悶を刻む豚頭にトドメを刺し、青年は次の獲物に走る。

炎を連想させる少し伸びた短髪。中肉中背で黒い着流しを纏う男——ヴェルフ・クロツゾはリリルカの投げた火炎壺に怯むオークに踏み込み、大刀で獐猛な弧を描く。

オークの胸を斬り裂き、魔石を砕いてモンスターを絶命させたヴェルフは、収入が減ると抗議するリリルカに軽口を叩いた。それが油断だったのか、三匹の『シルババック』に囲まれてしまう。

ジリジリと迫る包囲網にヴェルフは決死の一点突破を狙おうとしたが、そこにベルが飛来し、モンスターを飛び蹴りで吹き飛ばした。そして動きを噛み合わせ、三匹の『シルババック』を撃破する。

「やっぱりいいよな、仲間って言うのは」

そう言つて笑うヴェルフに破顔するベル。やれやれと首を振つて駆け寄るリリルカ。

結成したばかりのパーティの戦闘を、灰髪の小人族パルウム、アスカは棒立ちで眺めていた。

「しかしあんた、本当に戦いに参加しないんだな」

モンスターとの戦いを終えて小休止に入っていた時、思い出したようにヴェルフは切り出した。

「ああ。私はベルを見ていただけだからな。余計な手出しをするつもりはない」

「見ていただけ、か。よくそれを許してるな、ベル」

「あはは……アスカは僕よりずっと強いですから。戦闘に参加すると、逆に僕達のやる事が失くなるっていうか……」

「そうなのか？ けどお前はLv.2レベルだろ？ それでやる事が失くなるって事は……あんたはLv.3レベルなのか？」

「いや。私はLv.1だ」

「はあ？　嘘……ってわけじゃ、なさそうだな……」

せつせと働くりリルカを見ていた銀の瞳がヴェルフに向かう。そこに渦巻くソウルの光が、言葉の正しさを物語っていた。何か化かされたような気分になるヴェルフは、頭を掻いて話を続ける。

「よく分からんが、あんたが強いつてのは分かった。それで、アスカ。あんたはベルのお守りがしたいのか？」

「お守りって、ヴェルフさん……」

「そう取って貰っても構わない。私のやる事は、事実上はそれだ」

「アスカまで……まあ、自覚がないってわけじゃないけどさ……」

『キラアアント』に襲われた時を思い出して肩を落とすベルの横で、ヴェルフは腕を組む。口をへ字に結ぶ鍛冶師は、己の思った事を実直に言葉にした。

「あまり口を出すつもりはないけどな、そういうのは良くないんじゃないか？　それはつまり、ベルを甘やかしてるって事だろ？」

「死ぬ寸前まで手を出すつもりはない。それを加味しても、貴公は私の行いが余計な節介だと思うか？」

「そこまで言うつもりはねえ。けど、ベルだって男だ。いつまでも子供扱いをするのは止めといた方が良くと思うぜ？」

「……ふむ。確かに、一理ある」

知り合って間もないが、本質を突くヴェルフの言葉にアスカは黙考する。少々その嫌いがあつたかもしれないなど、幼女が思い返していると——凄まじい咆哮が轟いた。

ベルやヴェルフに留まらず、驚愕する周囲の冒険者達。その中にあって一人平静を保つアスカは、ゆっくりと咆哮の主に目を向けた。

他の地帯エリアに繋がる通路口の一つから現れる、一匹のモンスター。琥珀色の鱗に覆われた翼なき地を這う竜。

『インファント・ドラゴン』。数あるモンスターの中でも最強と謳われる竜の一匹であり、上層における事実上の階層主だ。

雄叫びを上げる『インファント・ドラゴン』は長い尾で冒険者の一人を弾き飛ばし、猛進した。その先には魔石や『ドロップアイテム』を

回収していたリリルカの姿がある。

逃げろと叫ぶヴェルフ。咄嗟に「ファイアボルト」を撃ち出そうとするベル。その前に灰髪の小人族は、ソウルより零秒で取り出した武装を突き出していった。

空気がうねり、突き進む風の塊。《翼竜の特大剣》より解き放たれた竜の力が『インフアント・ドラゴン』に迫り、通過する。

後方の壁に直撃し、巨大な亀裂を形作った《翼竜の特大剣》の「戦技」。翼竜とは飛竜、竜の末裔ではあれど伝承に遠く及ばぬその力は、けれど強化されたアスカのソウルによって最大まで力を引き出された竜の風となり、『インフアント・ドラゴン』の頭を容易く消滅させていた。

擡げた首ごと消えた『インフアント・ドラゴン』がゆっくりと倒れる。それを眺め、《翼竜の特大剣》を片手で振ったアスカは、首を回して背後のヴェルフに語りかける。

「ヴェルフ・クロツゾ。貴公の言葉は正しい。だが危機とは、常に予想できぬものだ。

それを防ぐ最後の防人として、私はいる。それもまた、必要な事だろう」

「……家名で呼ぶな。その名前は嫌いだ。それよりあんた……そいつは、魔剣か……？」

眉間を絞るヴェルフは、困惑しつつも《翼竜の特大剣》を凝視している。まるで見た事のない物を見るかのような視線にアスカはちらりと特大剣に眼をやり、小さく首肯する。

「そうだな。魔剣、と言ってもいいだろう。

……ふむ。ベル。そういえば貴公には、まだ魔剣について説明していなかったな。丁度良い機会だ。貴公の知る魔剣と私の持つ魔剣について、教えておこう」

「……それは嬉しいけど……まずはリリの無事を確かめようよ、アスカ……」

へたり込んでいたリリルカを背負って戻ってきたベルは、唐突なアスカの発言に肩を落とすのだった。

『インフアノト・ドラゴン』を倒した事で目立ってしまった一行は場所を移していた。

11階層の正規ルートから外れた広間^{ルーム}。一応つけてくる者がいなかどうかアスカは密かに確認して、ソウルの器から魔剣を取り出す。

「それでは、魔剣について話すでしょう。性能と性質を実演がてら説明する」

「それはいいが……さつきからどうやって物を取り出してるんだ？」

「私の技能^{スキル}だ。それ以上は、知る必要はない」

「機密^{シークレット}つてわけか。まあ良いけどな……魔剣、使うのか？」

「使ってみせねば分らん事もあるだろう。百聞は一見に如かず、だ」「そうかよ……」

不機嫌そうなヴェルフはぶつきらぼうにそう言った。ベルは不思議そうな様子で青年を見ていたが、「ベル」と名前を呼ぶアスカに居住まいを直す。

それを確認してアスカは短剣型の魔剣を掲げた。

「まずは従来の魔剣から説明しよう。」

魔剣とは、『鍛冶』のアビリティを持つ上級鍛冶師^{ハイ・スミス}の手によって作製される特殊な武器だ。それは魔法を封じ込めた武器であり、振る事によって詠唱・魔力制御・魔力暴発^{イグニス・ファトウス}の危険^{リスク}を負わず魔法を放つ事が出来る。

その威力は鍛冶師^{スミス}の腕にもよるが、一般に推定威力Lv.1から4辺りまでが出回っているな。それ以上の魔剣は第一級冒険者か、彼ら彼女らを擁^{よう}する「ファミリア」でなければ入手出来ないだろう」

言いつつ、アスカは短剣型の魔剣を振るう。紅い刀身が描く軌跡は焰^{ほむら}となり、一抱え程の火球となって壁に直進し、爆発する。

「これは推定威力Lv.1相当の魔剣だ。リルルカに常備させている三つの魔剣もこれに該当する。ちなみにこの程度でも、一本あたり百万ヴァリス以上はする」

「そ、そんなに高いの!？」

「そうだ。魔剣とは、便利な道具だ。持つだけで身の丈を超える力を得る事が出来る。増長と腐敗を呼ぶ、危険な道具だ。

使うには良い。だが頼り過ぎないようにしろ。道具など、結局は持ち手の心得一つで価値が変わる。魔剣もまた、そういった類の消耗品である」

「……」

アスカが五、六回も魔剣を振るうと、埋め込まれた宝石が光を失い、パキリと音を立てて魔剣が崩れていく。その様を怒りとも悼みともつかない表情でヴェルフは睨んでいた。

それをベルは気にするが、アスカは気にも留めずソウルを収束させ武器を取り出した。

何の変哲もない鉄の直剣。《ロングソード》である。

「アスカ様。それも魔剣、ですか？」

「そうだ、リリルカ。見た目はただの《ロングソード》であるし、基本的な性能もそのままだ。だがこの時代においては、これもまた魔剣と呼ばれるだろう」

訝しげな一同に《ロングソード》を見せたアスカは、《木板の盾》を立てかけて鉄の直剣を振り上げる。そして振り下ろし、真つ二つになった《木板の盾》は——音を立てて燃え上がった。

「!？」

「これが、この直剣が魔剣たる所以だ。

《炎のロングソード》。この直剣に施されたのは、高度な鍛冶である。武器の性質を変質させ、新たな力を込める『変質強化』。

炎に派生させた《ロングソード》は斬撃に炎を伴い、対象を燃やす。常時付与魔法型の魔剣と言えるだろう」

「……武器としての機能を残したまま、魔法に近い性質を加える……簡易型の魔剣、いえ、既存には存在しない『魔法剣』……リリには扱えそうにないですね」

「そうだな。これは前衛が使用する武器だ。後衛の貴公ではその強みを生かせない。従来の魔剣を使用するのが最良だろう」

アスカの規格外を散々思い知っているリルルカは冷静に分析する。それに頷くアスカの前でベルは啞然とした表情をしていた。ヴェルフに至っては瞠目し驚愕を刻んでいる。

それらを流し見て、アスカは《炎のロングソード》を消し、新たな武器をソウルより取り出す。

柄に広げられた翼が、刀身に尾が絡み付くような大曲剣——《竜の大曲剣》を。

「これは《竜の大曲剣》という。古の竜のソウルより錬成されたドラゴンウエポン。この武器は竜の力、恐るべき嵐の一端を宿しており、強く振るう事でその力を解放する」

アスカは両手で握った《竜の大曲剣》を肩に置き、強い力で振り下ろす。地に叩きつけられた大曲剣が解放するのは嵐の力。大曲剣を起点に前方へ吹き荒ぶ風が広がり、地面を削りながらルームの端に到達し壁を叩き壊した。

正方形だった広間が歪な鍵穴型に変わる。台形に広がる瓦礫の道を築き上げた少女は大曲剣を地面に刺し、啞然としている三人に振り向いた。

「これが《竜の大曲剣》の力だ。この通り、魔剣と呼ぶに相応しい力を秘めている。

従来の魔剣と違うのは、この武器が耐久度ではなく集中力——フォーカス精神力を消費して力を解放する点だ」

「——何だどっ!?!」

アスカの説明にヴェルフが吼えた。兎のようにビクリと肩を揺らすベルの横で、ヴェルフは食い入るように《竜の大曲剣》を凝視している。

「そんな魔剣、聞いた事がねえぞ?! 耐久度を消費しないって事はつまり——『壊れない魔剣』って事か!?!」

「その通りだ、ヴェルフ。《竜の大曲剣》は武器として使用可能な魔剣である。当然、武器として使えば何時しか摩耗し破損するが、マインド精神力を使う限り魔剣として碎ける事はない。

耐久度を消費して力を使う事も出来るがな。その場合は持ち手の

力量を反映せず、常に一定の威力しか出さない。その点は従来の魔剣と同じと言えよう」

「持ち手の力量を反映……？　魔剣として碎けない……!？」

「ありえねえ……あんた……一体何なんだ……？」

自分の常識を——自らが背を向けた『魔剣』の諦念を打ち壊されるヴェルフは、震える声でアスカを見る。

それに、灰髪の少女は。銀の半眼を揺らめかせ、ヴェルフの瞳を覗き見た。

「私は不死だ。死ぬ事はない。」

私は亡者だ。足らぬ物を貪欲に食い漁った。

私は「灰」だ。遠いかつてに存在した、『火の時代』の蚕食者。

だから私は、武器が打てる。鍛冶師ではない。だが武器打ちだ。

故に貴公、ヴェルフ・クロツゾ。貴公がそれを望むなら——私の知る鍛冶技術を教えよう」

銀眼の奥に渦巻く、ソウルの光。

その先に見える『火の時代』の片鱗に、ヴェルフは何も返す事が出来なかった。

「良かったんですか？　ヴェルフ様にアスカ様の事を話してしまわれて」

夜、アスカと道具アイテムのやり取りをしていたリルカは、ふとそんな事を口にした。

「構わん。ヴェルフはベルの専属鍛冶師だ。良き鍛冶師でなければ困る」

「それはまあ分かりますが、情報が漏れるとは思わなかったのですか？」

「鍛冶師とは、頑固な生き物だ。アレらは己の信にそぐわない事は死んでもやらん。」

だからこそ語る事に問題はない。ヴェルフも鍛冶師ならば顧客に近い者の情報は流すまい。

仮に流れたとして、何時かは知られる事だ。時期が早まるだけであるし、ヴェルフの試金石にもなる。

何より、あれだけの言葉で如何程の事を理解できようか」

「はあ、成程……強かですなえ」

「リリとしては情報には出来るだけ蓋をして欲しい所ですが」と言いなながらリルルカは並べられたポーシヨンの瓶を一つ取って光に透かす。色の具合を見て蓋を開け、一滴ぺろりと舐めた彼女は『《魂業小箱》ソウル・ヴェソルで収納した物は劣化しない……大分ヤバイですなこれ」と呟いた。

「ねえ、アスカはヴェルフさんの事どう思う?」

「クロツゾ」についてヘステイアと話していたベルが会話に参加する。アスカは道具アイテムを置いて首だけベルに回す。

「典型的な鍛冶師だ。粗野で頑迷、遠慮がなく決して己を曲げない。良くも悪くも職人気質、信頼に値する鍛冶師だろう」

「そっか! じゃあ、『クロツゾの魔剣』については?」

「興味がない」

話の流れで聞いたベルの言葉を少女はぱつきり切り捨てる。

「先にも言ったが、鍛冶師は死んでも己を曲げない。そのヴェルフが打たぬというなら、いくら煌びやかな伝説が在ろうとも無いのと同じだ。

存在しない物に価値など無い。『クロツゾの魔剣』など、求めるにも値しない代物だ」

それだけ言って、アスカは首を元に戻す。得られるかどうかも分からない魔剣より下級ポーシヨンの方に価値がある、そういった態度で道具アイテムのやり取りを再開した。

「それよりベル、『英雄願望』アルゴノウトについてもっと考えを巡らせておけ。

使い方の分からない力など害にしかならん。己の事だ、貴公は誰よりも理解しなければならぬ」

「あ、うん。考えてみるよ」

ついでとばかりに投げられた言葉に頷いて、ベルは静かに思考に耽った。

その後、何があったのか手が白い燐光で覆われたベルは、よく分からないまま食器を洗おうとして大惨事を起こすのだが、蛇足である。

「突っ立ってないで、そろそろ入ろうぜ？　ベル。……アスカ、あんたもな」

「あ、はい。お邪魔します」

「失礼する」

ヴェルフに促されてベルとアスカは平屋に入る。

強い鉄の匂いが染み付いた室内。壁に吊るされた大量の鉄器、棚に置かれた数点の武器、大きな炉と鑄鋼製の鉄床^{アンビル}。

鍛冶師の工房、ヴェルフ・クロツゾの城である。

「悪いな、汚い場所で。少しだけ我慢してくれないか？」

「い、いえっ、大丈夫ですー！」

男二人のやり取りを尻目に、アスカはヴェルフの仕事場を眺める。

鍛冶場は不死の己とは無縁の場所だった。若き日の「灰」には協力などという言葉はなく、棄てられた地のあちらこちらで一人鍛冶に没頭する鍛冶達は略奪の対象でしかなかった。

武器を欲すれば奪いに行き、大抵の場合は返り討ちにあう。若く、亡者の如き不死であった「灰」に、人並みの商いなど出来なかったのだ。

だから「灰」は、鍛冶場とは無縁だ。「灰」にとって鍛冶場は他と変わらぬ戦場。鍛冶は他と変わらぬ敵。後に狂王と畏れられる程の狂気に、縁など出来よう筈もない。

こうして眺めるのは、些か奇妙な感覚であったと言えよう。かつての己に従えば、ここもまた戦場。ヴェルフ・クロツゾは奪うべき敵でしかないのだから。

「——そうだ。どうせならあんたにも何か作るか？」

「？」

「欲しい物があつたら言ってくれ。何でもいいぞ、アスカ」

アスカがらしくもない感傷に浸っていると、不意にヴェルフがそん

な事を言った。疑問符を浮かべる灰髪の幼女に、ヴェルフはニツと気持ち良く笑う。

「貴公はベルの専属だろう。何故、私に何かを作ろうとする？」

「ベルから聞いた。あんたは大事な家族だってな。せつかく専属契約を結べたんだ、顧客の周りにサービスしたって罰は当たらないだろ？」

もちろん、あんただけって訳じゃない。リリースにも聞くつもりだ。どうだ、何か欲しいもんはないか？」

軽く、だが真剣に問うてくるヴェルフにアスカは少しだけ間を開ける。そして次には、ふるふると首を横に振った。

「別に欲しい物はない。貴公はベルの専属として、責務を果たせばいい」

「本当にそれでいいのか？」

「私はベルと違って打算的だ。何も求めぬ方が心象が良いと分かっているながら要求を口にするほど愚かではない。まあ、最適解を求めるなら、ベルのように嘘偽りなく魔剣以外を欲するのが最適だろうがな」

「……バレてたか」

明け透けな幼女の言葉にバツが悪そうにヴェルフは頭を掻いた。大剣を手に子供のような笑顔を浮かべていたベルは、「えっ、えっ!?!」と二人を交互に見て混乱する。それにくつと笑って、ヴェルフは頭を下げた。

「悪いな、ベル、アスカ。お前らを試すような真似をした。すまん、謝る。この通りだ」

「い、いえ！ 頭を上げてください、ヴェルフさん！ 僕はその、全然気にしてませんから！」

「私もだ。悪いと思ってるのなら、さっさと本題に入るがいい」

ベルは慌て、アスカは実直に物を言う。どこか対照的な二人に顔を上げたヴェルフは笑みを深めた。

それを引き締め、真剣な表情でヴェルフは二人と向き合う。

「まどろっこしいのは無しだ、本題に入るぞ。」

——アスカ、あんたが俺に鍛冶技術を教える目的は何だ？」

「貴公の腕が上があれば、ベルの役に立つ。それでは不足か？」

「……俺はあんたが、魔剣を対価に要求するんじゃないかって思ってた。いや、今もそう思ってる。じゃないと説明がつかないだろ？ いくらパーティとはいえ、俺は他派閥の人間だ。あの『壊れない魔剣』を見せるだけなら、俺がいない時にやれば良かった筈だ。あれにはそれだけの価値がある。」

なのにあんたは、俺の前で見せびらかした。裏があるんじゃないかって、どうしても思っちゃまう。だからこれだけははつきりさせておきたい。

——あんたは俺に、魔剣を打たせたいのか？」

一人の鍛冶師として、ヴェルフは問う。それは己の矜持を懸けた問い掛けだった。

対しアスカは、プライドも何も無い。ただ一度瞬まばたきをして、質問に答える。

「それは是であり、否でもある。私はな、ヴェルフ・クロツゾ。詰まる所、どちらでも良いのだ」

「どつちでも良い……？」

腑に落ちない顔をするヴェルフにアスカは続ける。

「ああ。私にとって重要なのは貴公がベルの専属鍛冶師という点だけだ。魔剣が打てるかどうかはどうでもいい。」

私が鍛冶技術を教えるのは、それがベルの為になるからだ。貴公の腕が上がれば、自ずと装備の質も上がり、それに見合う冒険者たらんとベルは奮起する。それは私にとって喜ばしい事であり、それだけが私の目的だ。

魔剣など、ただのおまけに過ぎない。ベルの選んだ鍛冶師がたまたま『クロツゾの魔剣』なるものを打てる。たかがその程度だ。

そんな物の為に払うべき労力など私は持たないし、持つ理由もない」

『クロツゾの魔剣』などただの些事。二の次三の次の副産物。そう語るアスカに、ヴェルフは驚きを隠せなかった。『クロツゾ』と聞いてやってくる者は、今まで『クロツゾの魔剣』しか見なかったから。

それこそを小事と切り捨てるアスカの瞳には、確かに真実が宿って

鍛冶とは何か。それに対する端的な答えは、鉄を打つ事だ。

古来より、人は武器を求めた。脆弱な爪、頼りにならぬ牙。生来の狩人である獣人はともかく、鉱石と洞窟に縁の深いドワーフ、平均的で特徴を持たない人間、最も弱いとされる小人族バルウムのような種族は、己の爪と牙に代わる武器を求め、鉄を見出した。

石よりも、骨よりも硬い鉱物。熱し、叩く事で形を変え、生まれ持った物より強い武器を作り上げる事の出来る鉄。その発見と武器と成すための研鑽は、人類の歴史の大いなる一部と言えよう。かつて人類が火を発見した時のように、鉄は火と関わりの深い、鍛冶れきしの始まりだ。

その鉄に、鉱物に近い性質を持つ『ミノタウロスの角』をヴェルフは熱し、渾身を込めて槌を振る。弾ける火花、甲高い打撃音。炎が猛る炉の前で、鍛冶師の青年は一心不乱に『鉄』を打つ。

『鉄の声を聞け、鉄の響きに耳を貸せ、鎚に想いを乗せろ』

没落した鍛冶貴族の末裔として、父から、祖父から継いできた『クロツゾ』の教え。

ヴェルフにとって鍛冶とは、使い手の半身を打つ事だ。最後の最後まで裏切らない、一心同体の武器を作る事。それが鍛冶師の使命であり、ヴェルフ・クロツゾの矜持である。

熱された『ミノタウロスの角』に鎚を振るいながら、ヴェルフはベルの問い掛けに答える。魔剣が嫌いだ。使い手を残して絶対に砕けていく魔剣が嫌いだと、『鉄』と向き合う青年は言う。

ヴェルフは鬼気迫る表情で、己に出来る極限まで鉄とやり合っている。その後ろ姿にベルが気圧される横で、アスカは静謐な瞳を保っていた。

やはり私は、鍛冶師ではない。火に照らされる灰髪の不死は、そんな事を思っていた。

既に日は沈みかけ、夜の帳が迫っている。

生と死の境のような夕暮れの刻。『ミノタウロスの角』より作られた短刀、《牛若丸》を受け取ったベルはヴェルフに対する遠慮を止めた。

アスカやリルカのように、対等の仲間として接する。短刀越しに握手する男二人を見定めて、灰髪の幼女は口火を切った。

「さて、それではヴェルフ。貴公に『火の時代』の鍛冶を教えるとしよう」

「ああ、いいぞ。よろしく頼む」

「え？ アスカ、こんな時間から？」

快諾するヴェルフと対象的に困惑するベル。格子窓から外を見つめるベルの瞳には夕暮れの光が反射していた。それにアスカは理由を告げる。

「鉄は熱い内に打て、と言うだろう。今のヴェルフは一種の集中状態だ。物を教えるならこちらの方が都合が良い。」

ベル。遅くなるであろうから、貴公は先に帰りましたまえ。ヘステイア達に事情を説明してくれると有り難い」

「……うん。アスカ、僕も見てていいかな？ もし遅くなり過ぎて神様達に怒られたら、僕も一緒に謝るからさ」

「アスカの鍛冶、見ていたんだ」と少年は優しい笑みを浮かべる。それにパチパチと目を瞬かせて、フツとアスカも薄く微笑んだ。

「そうか。では、貴公もそこで見ているがいい。だが、何があるうと、私に近寄らない事だ。約束できるか？ ベル」

「うん、分かったよ、アスカ」

壁に立つベルに一つ頷いて、アスカはソウルの海からいくつかの道具を取り出した。ヴェルフに断って《螺旋の剣》を床に刺し、『武器の鍛冶箱』『防具の鍛冶箱』『修理箱』『底なしの木箱』を並べる。最後に簡素な木椅子を置いて座り、岩のようなみてくれの鉄床アンピルを眼前に置いた。

先のヴェルフのような鍛冶師の姿。だがそこには職人らしい独特の雰囲気はない。

ただ、何処か近寄り難い作業者。そんな空気を醸す^{かも}アスカは、鉄の塊を取り出した。

「では、まずは一つ剣を打とう。私の腕のお披露目も兼ねて、見ておくといい」

アスカは鉄の塊を鋏で掴み、篝火で熱していく。ゆつくりと赤く変色した塊を鉄床^{アンビル}に移し、《武器の鍛冶箱》から適当に槌を取って振り上げる。

カン、カン、カン。規則正しく鳴る槌の音は、取り立てて言う事がなかった。ヴェルフのような微細に変わる旋律を奏でる事もなく、淡々と鉄を打っていく。

その速度は驚異的だったが、ベルが気付いたのは打ち終わってからだ。作業の如く代わり映えないアスカの鍛冶は、驚くべき速さで鉄を鍛造し、一本の剣を作り上げる。

研ぎ終わり、柄も取り付けた一本の剣。それはごく普通の《ロングソード》だった。

「これが、私に打てる限界だ。何か意見はあるか、ヴェルフ」

「……見た目は普通だ。尖っても劣つてもいねえ。けどこの重さ、使い心地、何より切れ味……見事なもんだ。今の俺じゃあ、絶対に届かねえ。この先どれだけの武器を打てば、こいつに辿り着けるかすら、見当もつかねえ。」

けどアスカ。やっぱりあんたは、あんたの言う通り——」

「武器打ちだ。鍛冶師ではない。分かるだろう？ ヴェルフ。その剣は、量産品。初めから繋ぎの、いずれ捨てられるために作られた剣だ」
「……」

手に取った《ロングソード》を見つめるヴェルフは苦い表情で眉間を狭める。目の前にあるのは極上の量産品。『至高』には到らずとも、その手前に確実にある一品だ。

それがただの『道具』として作られた事実には、知らず柄を握る力が強まる。鍛冶師の青年はアスカの《ロングソード》に、魔剣を重ねているのだろうか。

剣を睨むヴェルフに手を差し出し、アスカは返すよう催促する。無

言のまま手渡したヴェルフは険しい顔で続きを待った。

「次は『楔石』について教えよう。これはこの時代がない、『火の時代』にあつて固有の神の遺物だ」

「神の、遺物……？」

「そうだ。説明するより、実際に見せてやった方が早いな」

神の遺物というキーワードに目を瞠るベルを一瞥して、アスカは『楔石の欠片』を掌に出す。岩のような、金属のような黒い断片。在るだけで力を放つ、並の鉱物とは決定的に違うそれにヴェルフは目を奪われた。

「なんだ、こりゃあ……素材か？ いや、こいつは武器に適さねえ。硬度や韌性に優れてるわけじゃなさそうだ。けど、こいつは確かに武器の素材……武器を、強化するための素材か……？」

「ほう。慧眼だな。良い眼をしている。その通りだ、ヴェルフ。『楔石』とは武器の強化素材。名も無き鍛冶の神が今際の際に遺した物。これをソウルと共に武器に打ち込み、刻む事で、武器そのものを強化する事が出来る」

「武器そのものの強化……？ けど武器つてのは、打ち終わった時点で完成品だ。後付けでどうこう出来るもんじゃないだろ？」

「これも見せてやった方が早いな。『火の時代』に有り触れた、強化の手法だ」

鉄床に《アンビルロングソード》を置いたアスカは、器よりソウルを溢れさせる。死しては失い、回収し続けて肥大した主なきソウル。その一部を『楔石の欠片』と同化させ、《ロングソード》に押し付けたアスカは、槌で叩き《ロングソード》のソウルに『楔石の欠片』を刻み込む。

時間にして一分かかったかどうか。『楔石』を刻み込まれた《ロングソード》は見た目は変わりない。けれどその鋭い輝き、武器の性能は明らかに向上していた。

その事実にはヴェルフは目を剥く。常識では在り得ないアスカの行いを一挙一動に到るまで凝視する。それを確認して、アスカは次々に『楔石』を取り出し、《ロングソード》を強化していった。

『楔石の欠片』から『楔石の大欠片』へ、『楔石の塊』を刻み、最終

的に『楔石の原盤』を余さず《ロングソード》の強化に使う。槌を振るう度に刀身に埋まり、刻み込まれる『楔石』は、《ロングソード》の性能を格段に向上させていった。

第三等級最上位相当から、第二等級下位、中位、上位、第一等級下位、上位、最上位——そしてその『先』へ到るまで。『楔石の塊』辺りから明確な変貌を遂げていた《ロングソード》は、『楔石の原盤』を刻まれた瞬間、伝説に並び称される程の武器へ到っていた。

そう——かつてヴェルフ・クロツゾが、「ヘファイストス・ファミリア」に入団する際。ヘファイストスに見せられた『至高の武器』。それと同格に並んでいると、確信出来る程に。

「——もういい、止める。止めてくれ」
だが、違う。胸中に湧き上がった意志に支配されたヴェルフは、はつきりと拒絶する。

「そいつは、邪道だ。鍛冶師が頼っているもんじゃねえ。鍛冶師の矜持を、育てた腕を腐らせる。少なくとも俺は、絶対にそいつを使わねえ。」

だからもう、止めてくれ。俺にもうそれを——見せないでくれ」
「……ふむ。貴公はそう反応するか」

苦渋に満ちたヴェルフの相貌を見て、アスカは《ロングソード》をソウルに溶かす。そして平坦な瞳でヴェルフの思考を分析する。

「穢されたくない、と言ったところか。貴公にはこれに並ぶ、いや、並べたくない唯一があるのだろうか。」

確かに『楔石』は神の力だ。神の遺物、それ故に『楔石』を刻まれた武器は伝説の武器、神の作品に等しき力を宿す。それはどのような武器でも同じだ。高名な鍛冶師が打った渾身の一振りも、私のような無名の武器打ちが作った量産品も、等しく同じ伝説へと変える。

それが貴公には許せないか。あまり理解は出来ないな。私にとって強い武器を求めるのは当然であるし——『火の時代』の鍛冶達にとって、これは当たり前前の物だったのだから」

「……」

「まあ、時代が違う。貴公と私では、生きた世界が違う。受け入れられ

ぬ物があつて然るべきであり、当然の反応と言えよう」

黙りこくるヴェルフを無数の人間を視た瞳で観察し、アスカは一人結論を出す。そして強化を施していない《ロングソード》を一本並べ、その横に新たな鉱物を置いた。

『楔石』が変質したといわれる宝石のような鉱物の一つ——『炎の貴石』を。

「……そいつも、『楔石』って奴か？」

「是であり、否である。そう構えるな、ヴェルフ。今より教えるのは『楔石』による強化のように単純なものではない。

私のような武器打ちでは到底扱えぬ、一握りの鍛冶師にしか為せない高度な鍛冶——『変質強化』について、教えよう」

『変質強化』……？』

身構えるヴェルフにひらひらと手を振って、アスカはもう一本の剣を取り出す。それは魔剣について説明する折に見せた《炎のロングソード》だ。

「これは以前貴公らに見せた炎の変質強化を施した武器だ。斬撃に炎を帯び、傷跡を焼く」

「……あんたの時代の魔剣か」

「そうだ。だが実体は、魔剣というより特殊武装スベリオルズに近い。何故なら変質強化とは、言葉通り武器の性質そのものを変える業だからである」

二つの剣と一つの貴石を並べ、アスカは語る。『火の時代』の変質強化と特殊武装スベリオルズの類似性を。

「特殊武装とは、特殊な属性を持つ武装の事だ。例を上げれば『不壊属性』デュランダルを付与されたアイズ・ヴァレンシュタインの《テスペレート》、魔法を吸収する性質を持つベート・ローガの《フロスヴィルト》が有名か。

変質強化もそれと似ている。貴石を用いて武器の性質を変え、新たな属性を付与する。

持つ者の心技体を反映する『熟練』、持ち手によらぬ粗雑な力を与える『粗製』、この武器のように炎の属性を宿す『炎』変質などは、基本的な変質強化だ。

『熟練』や『粗製』などは特殊武装スベリオルズそのものだろう。だが『炎』を代表する魔法のような力を付与する変質強化は、広義における魔剣と等しい。だからこそ私はこれを魔剣と称した。この時代の言葉では収まらぬ物を、便宜上説明するためにな」

「……本当は魔剣と特殊武装スベリオルズの間にある、って事か。けどそいつもその、『貴石』ってのを使うんだろ。だったら『楔石』と同じだ、俺は絶対使わねえ」

「結論を急ぐな、ヴェルフ。変質強化の核心は『貴石』にはない。必要な物だが、変質強化が高度な鍛冶と呼ばれる所以は、特別な種火を使う処にある」

「特別な種火……？」

訝しむヴェルフに掌を差し出して、アスカは蒼白い光を収束させる。現れたのは、石の箱に入れられた小さく燃える火。思わずベルが、そしてヴェルフが惹かれてしまうその火を、アスカは見せつけるように掲げる。

「『ソウルの種火』。これは腕の立つ鍛冶達が灯す初歩の種火だ。高度な鍛冶、変質強化は種火を以て火を熾おこし、その火を以て『貴石』を武器に熔かし込む。」

特別な種火の炎は、『貴石』の性質と衝突しない。むしろ『貴石』の力を際立たせ、武器のソウルを変質させる原動力となる。

故に変質強化を施す者は、火の扱いに長けた優れた鍛冶師でなければならぬ。過ぎた炎は、我が身すら焼く。火への恐れ無き鍛冶師は、種火の炎に焼き殺される。

だから、ヴェルフ。私はこれを貴公に教えるのだ。変質強化を貴公が生涯行わずとも、火は鍛冶師の生命線。火を知り、恐れ、従える術を得るのは、間違いなく貴公の腕を上げる。

私はそう考える。だから、どうだ。変質強化を知る気になったか？
ヴェルフ・クロツゾ」

「……」

アスカの掌で揺れる種火を見つめ、ヴェルフは沈黙する。小さな火に照らされる青年の脳裏には、きつと様々な考えが巡っているのだろ

う。

それを見透かすアスカの銀の瞳と視線を合わせ。やがてヴェルフは、根負けしたように両手を上げた。

「……分かった。その変質強化つてのを教えてくれ」

「知る気になったか、ヴェルフ」

「いやいやだけだな。けどアスカ、あんたは俺に期待してくれてるんだろ？ そんでこいつは、挑戦状でもある。」

『お前にこの火が扱えるか？』。そんな眼で見られちゃ、俺だって黙っちゃられない。

受けて立つぜ、アスカ。あんたの言う高度な鍛冶つてのを、全部物にしてみせる。俺の意地にかけて、絶対にな」

色々な考えを投げ捨てた様子だが、肝の据わった表情をするヴェルフはニツと不敵に笑う。それは決して曲げぬ己の信を持つ、鍛冶師らしい笑みだった。

対面するアスカは満足げに頷き、早速変質強化の準備に取り掛かる。

「よろしい。それでは変質強化について貴公に教えよう。と言っても、私は所詮武器打ちだ。変質強化を施せる技量など持っていないがな」

「？ どういう事だ？ あんたはそれが出来るから俺に教えるんじゃないのか？」

「いいや、違う。私は『灰』だ、鍛冶師ではない。見様見真似で槌を取った鍛冶もどき、武器打ちに過ぎない。」

だからこれから貴公に見せるのは、失敗例だ。火を扱い損なう者がどうなるか——その眼に灼きつけるがいい」

種火の一部を掌に移し、『ソウルの種火』をしまったアスカは乱雑に火を篝火に投げ入れる。途端、篝火は獰猛に燃え盛り——側にいた不死の幼女を、容易くその身に呑み込んだ。

「!？」

「アスカ!？」

ヴェルフが驚愕し、ベルが叫ぶ。目の前で篝火の炎に巻かれた家族

に、ベルは咄嗟に飛び出そうとする。

それを止めたのは、凍てついた太陽のような瞳だった。炎に焼かれながらもお在り続ける不死は、古鐘のような声を擦り鳴らす。

「何があるうと、近寄らない。私と約束しただろう、ベル」

「でもアスカ、このままじゃ……!?!」

「私は不死だ。死ぬ事はない。火に焼かれようと、私は死なない。

それにな、ベル。貴公が見ていたいと言ったように、私も貴公に見
ていて欲しいのだ」

「え——?」

「私がかつて、どのように生き、どのように在ったか。これから見せる
炎の業は、私の旅路の一つである。

だから、ベル。見ていてくれ。この私を見ていてくれ。

人と結ばず、ただ一人を選び、故に愚かな真似をし続けた私を——
どうか貴公に、知って欲しい」

「……アスカ……」

炎の中で仄かに微笑む家族の姿に、ベルは動き出そうとする体を必
死で押し留める。そして沈痛な面持ちで唇を噛み締め、深紅の瞳で
じっとアスカを見続ける。

決して目を逸らさず。もう逃げないと誓った、家族の姿を灼きつけ
るために。

「——おいっ、ベル!?! 何してんだ、このままじゃアスカが焼け死ぬぞ
!?!」

「黙って見ている、ヴェルフ・クロツゾ」

「なっ!?!」

二人の会話に呆けていたヴェルフが、慌てて鍛冶用の水をアスカに
かけようとした瞬間、暗い銀の半眼がヴェルフを硬直させた。老木の
ような威圧に囚われる青年に、アスカは炎と向き合いながら言葉を投
げる。

「これから見せるのは、下手な武器打ちの末路。未熟な者が分不相応
を求めた結果だ。

黙って見ている。そして目を離すな。貴公は、私のようにならぬよ

う——いや、この私程度は、軽く超えて貰わねばならないのだから」
「——!？」

「さあ、始めよう。『火の時代』の高度な鍛冶。武器を変質させる炎の業。幾多の鍛冶が挑み、焼かれ果てたその業を、知るがいい」

槌を手に、炎に挑む。アスカの、「灰」の『火の時代』の鍛冶が、始まった。

その光景を、ヴェルフ・クロツゾは一度として見た事がない。

ヴェルフは物心ついた時から鍛冶と共にあつた。父の言葉を聞き、祖父の背を見つめ、鉄の匂いが染み付いた古臭い鍛冶場で育つてきた。

ヴェルフには十数年の半生を、鍛冶に捧げてきた自信がある。それは鍛冶師たらんとする彼の自負であり、また事実であつた。

そのヴェルフをして、眼前の光景は見た事がなかつた。

炎に卷かれ、人体を焼く熱に曝されながら、アスカは無感動に槌を振るっている。赤く熱された剣を素手で掴み、天へ振り上げた槌を剣に叩き込み続ける。

ヴェルフは自分より巧みな鍛冶師を見た事がある。自分より下手な鍛冶師も、同等の鍛冶師も、その半生で幾度となく出会ってきた。

だが。だが、こんな鍛冶師は目にした事がない。いや、アスカは鍛冶師ですらない。しかしこの光景の前に、その事実がどれほど儂い事か。文字通り身を焼いて鉄を打つなど、ヴェルフは想像だにすらしなかつた。

「……すげえ……」

打ち震える声が唇から零れる。燃え上がる篝火に吸い寄せられるヴェルフの眼には、ただ鍛冶に打ち込み続ける幼女の姿がある。

その体は燃えていた。闇に浸されたような黒い長衣は既に大半が燃え、人形のように白い肌が露あらわになっている。それも度を超えて燃え盛る篝火の炎に焼かれ、所々が黒く焦げ付いている。

炎の中では呼吸すらままならないだろうに、凍てついた太陽のよう

な銀の瞳は一切揺れ動かず、槌に打たれる剣を捉え続けていた。

その打ち筋は凡庸だ。鍛冶師として見れば平凡だ。炎の中にある事を除けば、アスカの鍛冶からはまるで才能を感じない。

けれど、炎に燃えてなお健在の生まれより伸びる灰髪の少女は、一心不乱という言葉が陳腐に成り下がる程の集中力で鉄と向き合っている。炎の中に居る事も構わず、側で見ているベルとヴェルフの事すら忘れ、ただ槌を振るい続けている。

——それは、真に才無き者が辿り着いた『極限』の景色。ひたすらに、ただひたすらに積み重ね続けた果てにある人間の『極地』。

アスカの鍛冶は、槌の一振りにさえ途方もない歳月を感じさせた。何も持たない人間が、折れぬ心だけを頼りに進み続けた結果が、織り成される槌の旋律に宿っている。

『至高』。それはヴェルフがいつか辿り着き、そして超えようとしている鍛冶の頂。数多の先人が挑み、敗れ去った頂点。

その『至高』に、アスカは確かに手をかけていた。それが永遠に辿り着けない場所であろうとも、手を伸ばし続ける尋常ならざる執念。その結実が、眼前で繰り広げられる『極限』の景色だと、ヴェルフは本能で悟っていた。

「——ッ！」

青年の拳が強く握られる。その胸中に走るのは、一筋の諦念。

鍛冶をするには頼りなく、鍛冶師ですらない武器打ちの背。未だ『至高』の高みも分からず、『神の恩恵』^{フテールナ}による『鍛冶』のアビリティにすら届いていない身の上。

それでアスカの、この小さな少女の背に追いつき、超える事が出来るのか？ 何処か焦燥に駆られる意識の中、その疑問がヴェルフの頭から消える事はなかった。

やがて時が経ち、アスカの鍛冶は終わった。

火勢が戻った篝火の前に残されたのは、真っ黒に炭化した少女の成れ果てと、床に転がった一振りの剣。

座ったまま上半身の前に落とし、俯く幼女だった物の側で、その剣は輝かしい光を放っていた。

《炎のロングソード》。『火の時代』に有り触れた、けれど今この時間において此処にしかない、凡庸でありながら決して普遍的ではない『魔剣』。

『至高』の高みに確かに位置する剣にヴェルフが目を奪われる中、ベルはとうとう動かなくなったアスカに駆け寄った。

「アスカ、アスカ!? 大丈夫!？」

「……ああ。ベルか。私は、問題ない。すぐに、元に戻る」

触ろうとして、今にも崩れそうな炭化した幼女に触れられないベルの前で、煤に汚れた灰髪が揺れ動く。ボロボロと崩れる口を動かしたアスカは、次の瞬間、灰になり——篝火の前で形を成し、いつしか火傷一つない、神の如く美しい幼女となって座っていた。

「そら、戻ったぞ、ベル。だからもう、泣くのは止めろ。貴公は本当に、泣き虫だな」

「アスカ……僕はもう、アスカから逃げないって決めたよ……でも、アスカが無茶をする所が見たいんじゃない……! だから……あんな無茶は、しないでよ……」

「……済まないな。だが、貴公が逃げぬと言うのなら、これを知っている欲しかった。

私は不死だ。死ぬ事はない。そして、私は所詮、『灰』なのだ。貴公がそれを望んだとしても、私はこれまでであった私の在り方しか貫けない。

きつとこれからも、望まぬ私を、貴公は目にする事になるだろう。だから貴公、忘れないでくれ。

私は貴公のためなら、何でもする。何でも出来る。それが貴公の望まぬものだった時は、貴公が言葉で止めてくれ。

私はきつと、それでしか——止まる事が出来ないから」

「アスカ……うん、分かったよ」

涙で濡れる目を腕で拭って、ベルは力強く頷く。それに小さく微笑んで、無表情に戻ったアスカはヴェルフに声を掛けた。

「さて、ヴェルフ。以上が、私の知る鍛冶技術だ。本当はもう少しばかりあるが、それはおいおい教えるとしよう。

私の鍛冶を見て、貴公は何を思った？ 何でも構わん、言ってみろ」
「っ……」

アスカの質問に、ヴェルフはハッと顔を上げて少女と向き合う。焦るヴェルフは拳を握り、何かを言いかけては口を閉じ、時々床に転がる剣を見る。

その様子に全てを察した少女は、嘆息して剣を拾い上げた。つられるヴェルフの視線に構わず、ソウルへと変え収納し、灰髪の不死は語りだす。

「聞け、ヴェルフ。」

私に鍛冶の師はいない。それは私が、鍛冶達との友誼を結べなかった、いや、結ばなかったからだ」

アスカは古く遠きを思い出す。まだ旅を始めたばかりの、何も出来なかつた過去を。

「私は武器を必要としていた。私の目的を果たすためだ。だが私には武器を手にする手段がなかった。

私は奪われる者だった。だから奪う事しか頭になかった。鍛冶達に出会っても商いの真似事も出来ず、ひたすらに奪おうとした。

私は襲い、打ち負けた。太腕を鳴らす鍛冶だ、貧者の私に勝てる道理などない。負けて、鍛冶達の不評を買い、私は武器を得る手段を失った」

古鐘のようなアスカの声を、ヴェルフは黙って聞く。そんな事に何の関係があるだとか、言う気にはなれなかった。ただ不思議と悩むのを止めてくれる話を黙って聞いた。

「だから私は、槌を取った。鍛冶達と戦い、かろうじて掠め取った物。愚かな私は、武器がないのなら自分で作れば良いと思つたわけだ。

鍛冶達の打つ姿を盗み見た。見様見真似で鉄を叩いた。師も無く、鍛冶の才も無く、愚かしいばかりの私は、それが最善だと信じていた。

物を揃え、辿々しくも鉄が打てるようになるのに十年かかった。

猿真似が人の飯事ままごとになり、一本の剣を打てるようになるのに百年を

要した。

明確な目的も目指す場所もない。そんな有様で欲しい剣を打つのに、千年が経った。

今のように、鍛冶師ではなく武器打ちとなるのに、気付けば一つの時代が過ぎていた」

「……」

「ヴェルフ。私に鍛冶の才能は無い。私は鍛冶師ではない。ただの武器打ち、欲しい武器を自分で作る者に過ぎない。

だが、貴公は違う。何故なら貴公は——ベルのために武器を打つ、鍛冶師だからだ」

「——!!」

その言葉に、ヴェルフは視界が一気に晴れ上がったように感じた。そうだ、俺は何を勘違いしていたのだ。アスカに追いつく？ アスカを超える？ そんな事は重要じゃない。

大事なのは、誰かのために——ベルのために槌を振るう事。ベルを決して裏切らない、魂の片割れ、半身を送り出す事がヴェルフの務めだ。

「貴公には先達が居る。貴公には辿り着き、超えるべき『至高』がある。ならば私など、問題にならない。私が武器と呼べる武器を打つのにかけた百年を、貴公はほんの数ヶ月か、数年で走り抜けられるのだから。

貴公には才がある。貴公は、鍛冶師だ。だから貴公、ヴェルフ・クロツゾ。

——ベルのために槌を取れ。私のように、己の為だけに武器を打つ、愚か者であってくれるな」

「ああ、分かっている。勿論だ、アスカ——いや、アスカの姉御。

約束する。俺はベルのために、槌を振るう。ベルを絶対に裏切らない半身を、必ずこの手で作り出してみせる」

胸に拳を当て、快活に笑い誓うヴェルフ。それは粗野な鍛冶師らしく飾り気のない、堂々たるものだった。

(…姉御?)

なお。

唐突に出てきたアスカの呼び方に少年と幼女が心中で首を傾げたのは、どうでもいい話である。

ソウルの種火

武器の変質強化を行うための種火

ソウルの種火は高度な鍛冶の初歩にある種火である

変質強化を行える鍛冶ならば自ら灯し、扱うものだ

ゆえにこれは腕の立つ鍛冶であるかどうかの秤であり

大事に持ち歩く鍛冶がいたのなら、鼻で笑われるだろう

「熟練」「粗製」「炎」

三種の貴石を使った変質強化が可能となる

原作、外伝五巻分 迷宮の楽園に灰は降る

霧^け烟^ぶるダンジョンの草花を踏む。

12階層を駆ける四つの影。ベル、リリルカ、ヴェルフ、アスカの四名は遭遇するモンスターを駆逐しながら俊敏に移動していた。

目指すは13階層、中層への入り口。ベルが先行し、撃ち漏らしをヴェルフが片付け、リリルカが支援する。アスカは相変わらず後をつけていくだけだった。

その銀の瞳は、『サラマンダー・ウール』を纏うパーティメンバーを見つめている。

ヴェルフに『火の時代』の鍛冶を教えてから一週間。アスカはベル達の探索に追従し、ヴェルフに鍛冶を教えつつ、深夜にフェルズに魔術講座を行って過ごしていた。

これといった成果はまだない。ヴェルフは種火の扱いに苦心しており、フェルズはまだ魔術師としてひよつ子である。彼らがアスカの望む成果を上げるには、まだまだ時間が必要だろう。

ベル達の探索についてはいつも通りだ。『ドロップアイテム』の多さに首を傾げたりリルカが「アスカ様、また何かしてませんか？」と聞いたくらいか。「私は『運』が良い」、アスカはそれだけを伝えた。

「ヘスティア・ファミリア」は探索で稼いだ資金を元に人数分の『サラマンダー・ウール』を購入した。当然アスカにも割り振られており、闇色の長衣の上にケープタイプの精霊^{サラマンダー・ウール}の護符を羽織っている。

『精霊の護符』。それは『火の時代』に存在しなかった代物だ。神に最も近いと謳われる精霊の力が込められた護符。『サラマンダー・ウール』は火に耐性があり、耐寒効果もあるという。

精霊には別段興味のないアスカだが、それはそれとして『サラマンダー・ウール』を得た事は不死の蒐集癖を僅かばかり満足させた。大事にしよう、と無意識に、心の中で口ずさむ。

そう考えている内に霧を抜け、ベル達は13階層に続く階段の前に

辿り着いた。そこで一行は中層突入前の最終確認をする。

前衛はヴェルフ、中衛はベル、後衛はリリルカ。アスカは一応後衛で、どうしようもなくなった時の最終手段だ。

「危なくなったらお願いしますよー」とリリルカは真剣な顔で言った。伊達に命が懸かっている訳ではない、アスカもコクリと頷いた。話を進めている内に、ふとヴェルフがベルが笑っている事を指摘する。気付いてなかったベルは、パーティで未開の地に挑む事に興奮しているようだった。「ワクワクしない？」という質問にヴェルフは手を叩いて賛同し、リリルカは微笑ましそうに苦笑する。

そしてアスカは、同意した。未だ到達し得ぬ未知の領域。それは不死としては敬遠に値するものであっても、新たな手段を求め続ける“灰”にとっては歓迎すべきものだから。

心を一つにした一同は、胸を張って中層に挑戦する。

ゴオツ!! と風が逆巻き、目にも留まらぬ速度で人影が現れたのは、その時だった。

「――あア? なんてでめーがここにいやがる、“灰”野郎」

大地を削って急ブレーキをかけ、驚くベル達の前に現れたのは灰色の体毛を持つ狼ウエアウルフ人。

【凶狼】ベート・ローガ。現在深層に遠征している筈の「ロキ・ファミリア」第一級冒険者は、胡乱げな視線でアスカを突き刺した。

「ベル達の中層進出に同行している。私はそれだけだ」

「けっ、そーかよ。ダンジョンでめーの面なんざ拝みたくなかったぜ」

「そうか。それで、貴公はなぜ此処にいる?」

「どーでもいいだろ。てめーには関係ねー」

明らかに不機嫌なベートにアスカは平然と会話を重ねていく。何も変わらない幼女の態度に舌打ちしたベートは、そのまま駆け出そうとして、不意に止まる。

鋭く突き刺さる琥珀色の視線。暫しの間狼ウエアウルフ人と灰髪の小人族パルウムは対峙し、アスカがコテンと見た目相応に首を傾げる。それを眇すがめた眼で睨み、ベートは牙を剥き出しにしながら声を上げた。

「……おい、〃灰〃野郎。てめー確か、回復魔法が使えたよな?」
「? ああ、貴公はあの場に居たのだったな。そうだ、私は回復系統の魔法が使える」

「毒はどうなんだ。毒妖蛆の劇毒くれーは解毒できんのか?」

ポイズン・ウエルミス

「出来るが、それがどうかしたのか?」

「……てめー、俺達に借りがあるつつったよな」

「ああ。貴公らには借りがある。あの場に居た一人一人にな」

「……………それじゃあ、俺への借りを返して貰うぜ。ついて来い、てめーの魔法に用がある」

「今か? 私はベル達の中層進出を眺めていたのだが」

「あ? 関係あるかよ、どーせてめーにはどうでもいい事だろうが。」

「ゴチャゴチャ言ってるねーでさっさとついて来やがれ」

「……仕方ないな。貴公への借りを返すでしょう」

「——ちよつ、ちよつと待つてください!」

トントン拍子に決まったベートとアスカの会話。それに無理矢理割り込んだのは焦りまくるリリルカだった。

「ああ?」とベートがリリルカを睨む。それに悲鳴を漏らしながらも、アスカにやられた事よりはマシだったので小人族バルウムの少女は急ぎ足でアスカに駆け寄り、顔を寄せて小さな声で怒鳴りつけた。

「何を考えているのですかアスカ様!?! 何勝手な事しようとしているんですか!」

「仕方なかろう、リリルカ。ベート・ローガには借りがある。それは出来る限り早く返済しなければならぬものだ。借りは、後回しにするほど面倒になる」

「それは分かりますが、時と場所を考えてください!?! 何もこれから中層に進出しようって時にパーテイから抜けようとしなくてくださいよ!?! リリ達だけでは、もしもの時に全滅する危険がずっと高くなってしまうす!」

「問題ない。保険は既にかけてある」

「ほ、保険、ですか…………?」

「おい、早くしろ〃灰〃野郎。こっちは急いでんだ、モタモタしてんな」

ら引き摺って連れてくぞ」

「ああ、済まない、ベート・ローガ。今、行く」

「あつ!? アスカ様、話はまだ……!」

引き留めようとするリリルカに手を振って、アスカはベートに近寄る。リリルカはアスカを追いかけようとしたが、アスカを睨んでいるベートに気圧されて疎ん^{すく}でしまう。

それに気付いたベートは、リリルカ、ヴェルフ、ベルを流し見て――
――獯猛に牙を剥き、鼻で嘲笑った。

「はっ――なんだ手前ら、灰野郎におんぶに抱っこじゃなきや何もできねーのか? 身の程を弁えろよ雑魚ども、そんなザマじゃあ中層に出る資格なんざねえ。

他人の力に頼るしかねー雑魚なら、自分より弱^{よえ}ー上層の雑魚モンス
ター共をチマチマ狩ってるのがお似合いだぜ」

「――なんだと!」

ベートの罵倒に反応したのはヴェルフだった。矜持を持つが故に反骨精神を見せたヴェルフは、しかしベートの一睨みで言葉に詰まってしまう。

隔絶したLv.の差。それは如何に己の信を持つ鍛冶師であろうと無視できるものではない。少なくとも今のヴェルフではそれ以上言葉が続けられなかった。

それにベートは舌打ちし、他に目を移す。リリルカは耐えるように俯いたまま、そしてベルは――確かな怯えや畏れを顔に描きながら、しかし決してベートから視線を逸らさなかった。

その事実。震えながら逃げぬ覚悟が見え隠れする少年に、ベートはニイツと口角を曲げて嗤う。

「てめーはどうなんだ、兔野郎」

「……え?」

「ボケんなよ、てめー以外に兔野郎なんざいねーだろうが。」

こんな「灰」野郎にすがって恥ずかしくねーのか。てめー、雄だろーが。てめーの事はてめーで背負うって顔してやがるが、いざとなったら女の陰に隠れて震えるつもりか? 俺だったら死にたくない

るぜ」

「っ……！」

「てめーの命を背負えねーならダンジョンになんぞ来るんじゃねえ。ここが天国だとも思ってるのか？　ここは地獄だ。てめーら雑魚の命なんぞ一飲みにしちまうクソの底だ。」

——目障りなんだよ。雑魚のくせに粹がつてる奴を見るのはよく。命を懸ける気がねーなら俺の前から消えやがれ。巣穴に籠もって二度と出てくるんじゃねー。足りねー頭で理解したか？　雑魚野郎」

「……」

心底から吐き出した罵倒をぶつけると、ベルは俯いてしまう。それを嗤いながら、ベートの目は不機嫌そうに歪んでいた。

けれど、次の瞬間、ベルは顔を上げ——そこにはベートが目を瞠るくらいの、とびつきの笑顔があった。

「——ありがとうございます!!」

そして満面の笑みでそう声を張り、兎のような少年は勢い良く頭を下げる。告げられたのは、感謝。罵倒の返答にも、なんなら冒険者にも見合わないストレートな謝礼に、さしものベートも困惑した。

「あ、あア？」

「ありがとうございます、ベートさん！　ベートさんのおかげで僕がどれだけ甘かったか——どれだけ弱くて、覚悟が足りなかったか知る事が出来ました！」

僕は、絶対に強くなります！　絶対に絶対に、ベートさん達の居る場所に追いついてみます！」

だから待ってて——いえ、先に走っててください！　僕は絶対に逃げたり——諦めたりしませんから！」

「……！」

「行こう！　リリ、ヴェルフ！」

振り向いたベルは仲間に笑いかけて、中層へ向かう階段に駆け出す。呆気にとられていたリリルカとヴェルフは、互いに顔を見合わせ、どちらともなく微笑ましそうな笑みを浮かべた。

リリルカはバックパックを担ぎ直し、ベートに向けて舌を出す。

「全く、よくもベル様を焚き付けてくれましたね！　これだから冒険者様は嫌いです！　ベーツ、です、ベーツ！」

言ってる途中で自分のやってる事がどれだけ危険か思い出して、リルカは早々に切り上げつつも最後まで言い切った。そして前を向き、先に向かったベルを追いかける。

それを見ながらくつくつと笑うヴェルフは大刀を肩に担ぎ、不敵な笑みをベートに見せつける。

「せいぜい笑ってる、第一級。あんたがそこで腹抱えて足踏みしてる間に、俺もベルも、リリスケだって、あつという間にあんたを追い越すぜ？」

言うだけ言って、ヴェルフも駆け出す。そこには鍛冶師の矜持が、いや、ベルの仲間としての確かな意地があった。

「……」

ベートは無言で見送る。これまで散々投げかけた罵倒から思いもよらぬ遠吠えが返ってきて、ベートは調子を狂わされていた。

そんなベートに、アスカは手を伸ばし。ポン、と頭を撫でてやる。そして一言、古鐘の声を擦りならした。

「貴公の負けだな。ベート・ローガ」

「——負けてねえつつつ!!!」

頭を撫でる不愉快な小さな手を撥ね退けて、ウエアウルフ狼人の青年は全力で吼えるのだった。

灰色の岩で形成された岩盤の洞窟を、狼が疾駆する。

ギルドの定める最初の死線ファーストライン、ダンジョン13階層以下に広がる『中層』を、ベート・ローガはその健脚を遺憾無く発揮して疾走していた。

その背には、生まれより伸びる灰髪を靡なびかせる小人族バルウム——『灰』の姿がある。

「なんだっててめーは俺の背中に乗ってんだ!？」

「説明しただろう、ベート・ローガ。私はあまり持久力スタミナがない。一昼夜を走る事は出来るが、休まず走り続ける事は出来ない。」

短期の休息を挟まねば、私の持久力スタミナはあつという間に尽きるのだ。だから先を急ぐなら、貴公の背に乗る方が早い。最初にそう言った筈だがな」

「んな事聞いてんじやねえ！ 振り払っても乗ってきやがるフザケた真似を止めろつつつてんだ！」

「断る。私は楽がしたい」

「それが本音だろーがあッ!？」

ぎやいのぎやいのと騒ぎながらベートは足を止めない。理性では「灰」の言葉に従った方が早いと分かっているからだ。だがベートの矜持がそんな事を許さない。隙あらば振り落とそうとするベートの攻撃を平凡に回避しながら、「灰」は現れるモンスターを《竜騎兵の弓》で撃ち抜いていた。

特に中層で危険視される犬のモンスター、『ヘルハウンド』を「灰」は見つけ次第撃ち殺している。『放火魔』バスカウイールの異名を持つ『ヘルハウンド』は火炎を放射する有害なモンスターだ。最速で『魔石』を撃ち抜くのは確かに道理に適っている。

「犬は殺す。必ず殺す。畜生風情が、分を弁えろ」

「犬に何の恨みがあるんだ、てめーは……」

しかし道理云々以前に明らかかな私情で『ヘルハウンド』を撃つ「灰」に、ベートはげんなりした様子で呟いた。気になりはするが、その話題をベートから切り出すなんて死んでも許容できない。決して「灰」を許容するわけにはいかないベートは、背中から発せられる古鐘の声に適当に答えていた。

「それで、ベート・ローガ。解毒を必要としている者はどの程度いる」
「……全体の三分の一以上だ。半分は行ってねえが、動けねえぐれーの奴が大勢いる」

「成程。【ロキ・ファミリア】の規模と、それから【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師スミスもいるのだったか。ふむ、ならば——三日、と言ったところだな。『灰のエスト瓶』の容量も加味して、その程度の時間があれば全員完治させられるだろう」

「そーかよ。なら急ぐぞ、つーかさっさと降りやがれ！」

「断る」

「クソがあッ！ 覚えてろよ。『灰』野郎ッ！」

怒り狂うベートなぞ何処吹く風で『灰』は狼人の背ウエアウルフに乗り続ける。それに吠え立てながら、ベートは中層を駆け抜けるのだった。

「……ベート。どういう状況か説明してくれるかな？」

18階層に蜻蛉リベルラ返りしたベートを出迎えたフィンの最初の台詞はそれだった。

第一級冒険者にとつては地上まで大した距離じゃないだろうにゼーゼーと息を荒らげるベート。その背からは見慣れた灰髪の小人族バルウムがひよっこりと顔を覗かせている。

ベートの背に引つ付いているのもそうだが、そもそも『灰』がいる理由がよく分からない。片目を瞑るつむ小人族の首領にベートはうんざりしながら手短かに説明する。

結果、到達階層を伸ばそうとしているパーティから人員を引き剥がしたベートを窘めつつ、フィンは驚きを顔に浮かべた。フィンの見識では特効薬と【戦場の聖女】デア・セイントの高位治療魔法でしか払拭できない毒妖蛆ポイズン・ウエルミスの劇毒を、『灰』は解毒できるといふのだ。

それについては議論を重ねる前に実践で確かめる流れになった。『灰』の姿にざわつく看病する団員達の間を抜け、『灰』は一人の患者——現在劇毒で倒れている団員の中で最もレベルと「ステイタス」が低い者——の前に立つ。そしてソウルの器から《結晶の聖鈴》を取り出し、魔術と奇跡——【治癒】と【治癒の涙】を発動した。

小ロンドの三人の封印者の一人、赤衣のユルヴァが扱った小ロンド独特の治癒術である【治癒】は、あらゆる毒の蓄積を減らし、またあらゆる毒状態を解除する。これにより毒妖蛆ポイズン・ウエルミスの劇毒と云えど、そのほとんどを解毒する事が出来る。

そして魔術の【治癒】を逃れた少量の劇毒は、女神クアトの死を巡る物語を奇跡とした【治癒の涙】によって完全に分解された。『灰』を中心に展開される魔法円マジックサークルの輝きは、眼前の患者のみならず、周囲の

患者にも奇跡の光を分け与え、顔色を良くさせる。

「リヴェリア。これで解毒は出来た筈だ。私は【治癒の涙】が作用した者達に【治癒】を掛けてくる。貴公は劇毒が残っていないか確かめるといい」

「ああ、分かっている」

“灰”の言葉にリヴェリアが頷き、希少な解毒系の治療魔法を扱える魔道士、治療師ヒーラーを引き連れて“灰”が解毒した患者を診察する。

“灰”が【治癒】を掛け回って戻ってくる頃にはリヴェリアは診察を終えていた。翡翠色の瞳で灰髪の幼女を見つめる王族妖精ハイエルフは、感心した様子で結果を口にする。

「確かに毒ポイズン・ウエルミス 妖 蛆の劇毒が払拭されていた。すごいものだ、驚嘆に値する。流石は我が師、と言ったところか」

リヴェリアの何気ない発言に『我が師!?!』とエルフ達がざわつく。「毒は厄介だ。解毒の方法は多数持つに限る」

「道理だな。ところで【治癒】は魔術だと分かったが、【治癒の涙】とは何だ？ 私の予想では魔術とは別系統の魔法と見たが」

「その通りだ。【治癒の涙】は奇跡に該当する」

「……教えてはくれないのか?」

「貴公は魔術師ソーサラーだ。聖職者クレリックではない。信仰に長けていれば教えもしたが、貴公はそうではなからう。」

故に教える理由はない。貴公が知れるのは、【治癒】のみだ」

「そうか……確かに私自身、信心深いとは言えないな。しかし残念だ。その奇跡とやらは、私の好奇心を刺激して止まないのだが」

「魔術で我慢する事だな。それに貴公は、まず私との契約を果たして貰わねばならない。期待しているぞ、我が弟子よ」

アスカが銀の半眼でリヴェリアを見つめると『我が弟子!?!』とエルフ達が騒ぎ立てた。『なんて不敬な!?!』『許されません!』とけたたましいエルフ達にリヴェリアは頭を痛め、一喝して場を鎮める。

それでも恨めし気な視線をぶつけてくるエルフ達を無視して、“灰”は近場で観察していたフィンに近寄った。

「フィン・ディムナ。私はベートトへの借りを返しに来た。以後、全ての

患者を治癒するまで、貴公の言葉に従おう。この場では依頼クエストを受けた冒険者として、振る舞わせて貰う」

「ン、承知したよ、灰。君の献身に感謝する。それと、ベートが済まないね。本来なら君に頼るつもりはなかったんだけど……全て
の責任は僕にある。もし君のパーティ、引いては君の所属する「ファミリア」に被害があったのなら、償わせてくれ」

「分かった。頭に入れておこう」

「ありがとう。さて、それじゃ早速だけど、君には倒れた団員なかまの治療に当たって欲しい。必要な物があれば適宜言ってくれ、出来る限り用意する。寝床もこちらで用意しよう。君も、リヴィラに滞在する気はないだろ?」

「ああ。私に褥しとねは必要ないが、くれるというならありがたく世話になろう」

「他に何か聞きたい事はあるかい?」

「……そうだな。質問というわけではないが、私はダンジョン探索に当たり、常に物資を携行している。そのいくつかを貴公らに支援しよう」

「灰」は手を伸ばし、青白いソウルを溢れさせる。それは「灰」の側に広がったかと思うと、次の瞬間、ドンドンドンツ! と音を立てて大人二人で抱える程の大きさの木箱が数十個現れた。

『食料箱』と『生活箱』だ。それぞれに食料と生活用品が入っている。とりあえず二十ずつ、計四十を渡しておく。必要ならば、役立てるが
良い」

「有り難いね、重ね重ね恩に着る。アキ! 「灰」が提供してくれた物資を運んでくれ!」

「は、はい!?!」

「灰」の「ソウルの業」に慣れているフィンに比べ、周囲の団員は初めて見る空間から大量の物を取り出す離れ業に面食らっていた。その中でフィンに呼ばれた「ロキ・ファミリア」二軍の中核メンバー、アナキティ・オータム——アキは慌てて人員を抽出し、物資の点検と運搬に取り掛かる。

「うわっ、すごい……！ 新品のタオルとか包帯とかがこんなに……！ これでもみんなの看病も捗りますー！」

「肉、魚、野菜に調味料各種……一箱にどれだけ食料を詰め込んでるの……？ しかもどれも新鮮だし、腐ってる様子もない……！」

「ええっ!? こ、これはまさか、『アルヴの清水』!? ごくりっ……毒味は必要ですよ……！」

「こらっ、アリシア！ 勝手に手を付けちゃ駄目ですよー！」

リーネ、アキ、アリシア、エルフィが点検作業をしながら口々に言い合う。それを尻目に「灰」は移動し、リヴェリアと共に患者の治療に勤しむのだった。

生活箱

商人が運輸によく使う大きな木箱

様々な生活用品が入っている

人並みでいるためには必要だが

不死にとつての価値は薄い

それでも、人を忘れぬために

これを求める不死は多い

食糧箱

商人が運輸によく使う大きな木箱

様々な食糧と調味料が入っている

ソウルの濃いある種の地域では

腐るべきものが腐らぬことがあるという

特に、道半ばに果てた者の糧は

ずっと腐らず、だが死体を漁り

それを口にする者など、あろう筈もない

青い瓶に揺れる灰エストを飲んで、劇毒の治癒を繰り返す。

最大限強化された「灰」の『集中力』は、それなりに最大値が高い。しかし、所詮はそれなりだ。数多の不死を渡し見ても特段に才能がない「灰」は、ズレた世界で垣間見た己と同等の不死どもと比べると、下から数えた方が早い程度の集中力しか持たなかった。

15口飲める灰エストを3口飲めば最大まで回復する程度の集中力。灰エストが尽きるまで劇毒の治癒を繰り返した結果、完治した団員はざっと三十人前後だ。

これは『毒妖蛆』の劇毒が強力であるため、その分【治癒】と【治癒の涙】に集中力を割かねばならなかった結果である。ある程度の事は何でも出来るが故に純粋な魔術師、聖職者より劣る「灰」は、それを当然の事と受け入れていた。

「リヴェリア。『灰のエスト瓶』……『マジック・ポーション』以上は、精神力の回復を待たねば治療は出来ん。

私の持つ『火の時代』に由来する道具ならば、無理矢理にでも精神力を回復できるが、どうする？」

「……いや、いくら依頼した立場とはいえ、そこまで頼るのは沽券に關わる」

「そうか。ならばやはり、三日だな。私の精神力の自然回復速度を考えると、それが妥当だろう」

「分かった。……しかし、三日か。我々は構わないが、お前の【ファミリア】は大丈夫か？ 中層に初挑戦すると聞いている、もし『異常事態』でもあれば……」

「問題ない。弁える者がいるし、仮にそうなったとしても保険はかけてある」

「そうか……その言葉を、信じるでしょう」

頷くりヴェリアを流し見て、「灰」は《結晶の聖鈴》を器にしまっ

た。そして銀の半眼でリヴェリアを見上げる。

「さて、時間も出来た事だ。リヴェリア、フィン・デイルナ以下、私が装備を貸し出した者と呼んでくれ。特にアイズを呼ぶのが好ましい。私はアイズに伝えねばならない事がある」

「そうなのか？」

「貸した武装を返してもらおうのが先だがな。さあ、頼むぞ、我が弟子よ。貴公らの本営にて、私は待つ」

「了解した。我が師よ」

胸に手を当てて一礼したリヴェリアは、魔道士達に指示を出して颯爽とその場を立ち去った。それを見送り、^{モタ}「灰」は首を擡げ、^{マム}菊の花のような水晶群が乱立する天井を見上げる。

乱反射する水晶の輝きに呼応するように、脳裏に刻まれた確かな徴^{しるし}が明滅し。^{モタ}「灰」は静かに、眼を閉じた。

18階層、『昼』。

階層天井を覆う水晶群の発光によって擬似的な昼夜が存在する18階層の『昼下がり』。森林地帯で野営地を設営している「ロキ・ファミリア」の本営、一際大きな天幕の内では、幹部が一堂に勢揃いしていた。

部外者は今回、依頼という形で収まった^{モタ}「灰」と——「ヘファイストス・ファミリア」団長、^{ツバキ}椿・コルブランドの二人である。

「……さて、フィン・デイルナ。なぜ^{ツバキ}椿・コルブランドがここにいる？」

「シー……呼ぶつもりはなかったんだけどね。端的に言っつて、君が貸してくれた武装にいたく興味が湧いたらしい」

「はっはっはっ！　そういう事よ、^{モタ}「灰」とやら！　良いであろう、減るものでもあるまいし！」

胸を張って呵呵大笑する椿^{ツバキ}にフィンは頭を痛める。額に手を当てて苦笑していた小人族^{バルウム}の首領は、しかしすぐに表情を改め、真剣な目で椿^{ツバキ}を見た。

「椿^{ツバキ}。何度も言うが、〃灰〃は【ロキ・ファミリア^ら】との個人的な関わりでここにいる。もし彼女の迷惑になるようであれば、いくら君でも許す事は出来ない。

場合によつては、君よりも〃灰〃を優先させてもらおう。それを忘れないでほしいね」

「分かっておる！ これでも身の程は弁えておるつもりだ、度が過ぎる事はせんわ！」

笑いながら、椿^{ツバキ}はずいっと〃灰〃に顔を寄せた。冷たい銀の瞳と、炎のような緋色の単眼が交差する。無感動に動かない半眼を見つめ、椿^{ツバキ}はニイツと唇を曲げた。

「構わんよな、〃灰〃とやら。手前はただ、お主の貸した武器を見たいだけなのだ。それ以上は手出しも口出しもせんと誓おう」

「……成程。それならば良いだろう。どうやら我々は、お互いに興味が無いようだ」

「はっはっはっ！ その通りであるようだな！ そら、フィン！ 言質は取ったぞー！」

「……やれやれ。ひやひやさせてくれるね」

いい笑顔でサムズアップする椿^{ツバキ}にフィン^{フィン}は首を振る。ともあれ、懸念事項は片付いた。そう判断した小人族^{バルウム}の勇者は、改めて〃灰〃に向き合った。

「それじゃあ早速だけど、君から借りた武装を返却しよう。と言つても、ほとんどは壊れてしまったんだけどね」

「構わない。破損は私には問題にならない。その説明も込めて、まずは返却を受け入れよう」

「へえ、興味深いね。詳しく聞きたいな」

フィン^{フィン}が和やかに、〃灰〃がいつも通りの鉄面皮で談笑する横で、テイオネ^{テイオネ}が双剣と指輪の入ったバックパックを持ってきて、〃灰〃に渡した。

中身を見て、フィンの言葉通りほとんどが破損しているのを確認した〃灰〃は、木椅子を器から取り出しその場で座る。そして鍛冶道具一式を並べて、鉄床^{アンベル}の上に壊れた指輪を一つ置いた。

「ではまずは、貸した武装の修理をしよう。まあ、見ているがいい」
それだけ言つて、ツバキ「灰」は『修理箱』に手を伸ばす。古く使い込まれた布を広げ、その上に石臼いしうすを置き、円柱型の臼の中央に空いた穴に魔力を帯びた金属の欠片を入れる。そのままゴリゴリと臼を引き、生成された金属粉——『修理の光粉』を集めたツバキ「灰」は、鉄床アイゼンベドの上の壊れた指輪に光粉を撒き、ソウルを流し込み——そして槌で何度も叩く。

カンカンカンと簡素に響く槌の旋律。じっと見つめる「ロキ・ファミリア」幹部勢と爛々と輝く片目にそれを映す『単眼の巨師』キョククロボスの前で、破損した指輪は徐々に再生し——気付けば壊れていた指輪は、元の形に戻っていた。

「これが、『火の時代』の基本的な修理方法だ。何か質問はあるか？」
「……どういう理屈だ。なんで半分も欠けた指輪が槌で叩いて元に戻りやがる」

『修理の光粉』を媒介にソウルを消費し、ソウルの記憶を元に破損前へ成形し直す。やっているのは単純な事だ」

「……」

独り言のように呟いたベートは、ツバキ「灰」の説明に唇をへの字に曲げた。どうやら理解を放棄したらしい。その近くで一字一句逃さず聞いているツバキ「灰」は、見開かれた片目で続けて指輪を直すツバキ「灰」を凝視する。

最上級鍛冶師マスタースミスと呼ばれるツバキ「灰」の鍛冶の作法。それは何であれ、確実にツバキ「灰」の糧になるものだった。

ツバキ「灰」は黙々と指輪を直す。破損し、使い物にならなくなった指輪の数々は、見る間に新品同様に生まれ変わっていった。

そして残すは、ベートに貸与した双剣——《月光の双剣》のみとなる。

「このまま直してもいいが、折角だ。リヴェリア、貴公に一つ、魔術を教えよう」

「魔術？」

「そうだ。【修復】と呼ばれる魔術がある。それはこういった壊れた装

備品を文字通り修復する力がある」

《魔術師の杖》を取り出した「灰」は杖の先を双剣に向ける。

無詠唱で放たれる「修復」の光。魔力で構成された光の粉が双剣に触れ、見る間に元の形を成していく。

「【修復】は古い黄金の魔術の国、ウーラシールに伝わる光の魔術だ。元々は生活に深く根ざした魔術であるが、秘術にあたるひとつでもある。

光は時、回帰は禁断の知恵。時を過去に戻すこの魔術は、それ故に扱いやすく、また危険な秘術である」

「——時を過去に戻す、だと!? 時間回帰をしているとでも言うのか!?」

「灰」の淡々とした説明とは裏腹の内容に驚愕のあまり、リヴェリアは声を張り上げた。普段冷静沈着なハイエルフの叫びに目を剥く一同の前で、リヴェリアは思わず「灰」に詰め寄る。

「それは神の領域だぞ!? 明らかに人の手に余る……!」

「いいや、人の領域だ。【修復】はあくまで魔術の理を利用しているに過ぎない。この力は神と人、双方手の届く場所にあり、たまたま神がより上手く扱えるだけだ。

人もまた、回帰の力を我が物と出来る。現について先程見せた『修理の光粉』は、この魔術が元になったと言われている。解き明かせぬものではない。光と時、それもまた探求の道だ。

故に、ゆめゆめ 努々忘れぬようにしろ。禁断の知恵とは、それが時であるからではない。ウーラシールの黄金の魔術、その真髄を知らぬ者は、決して触れ得ぬ力なのだ」

「……」

擦り鳴らされる古鐘の声にリヴェリアは難しい顔で沈黙した。それなりに魔術を扱えるようになったとはいえ、彼女はまだまだひよつ子だ。魔術の深奥、『火の時代』の奥深さを測りかねていた部分もある。

だがそれも、今更であるとりヴェリアは首を振る。一度踏み出したのならば、まだ見ぬ世界の頂に辿り着くまで止めるつもりはない。〃

灰〃を見つめる翡翠色の瞳には、不退転の覚悟があった。

「——ウーラシールの黄金の魔術。私がそれを理解するのは何時になると思う?」

「貴公が望むなら、すぐにでも。貴公は賢しい、その『理力』があれば黄金の魔術も、『ビッグハット』に連なる結晶の秘法すら我が物と出来るだろう。」

そう踏んだからこそ私は貴公を選んだ。そうであるからこそ私は貴公と契約した。誇るが良い、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

『火の時代』の魔術を学んだその先に。貴公の切り開くべき地平線が、待っている」

「……そうか。ならば、怖気づくのは止めねばな」

美しい微笑で口元を彩るリヴェリアは、「これからもよろしく頼む、我が師」と深々と頭を下げる。それに頷いて、灰〃は鍛冶道具一式を収納した。椿は「鍛冶はもう終わりか?」と言いたげな顔をしていたが、自身の言葉通り手出しも口出しもしない。それを流し見て、灰〃はアイズの前に立つ。

「さて、リヴェリアの魔術講座は後にするとして——アイズ。私は貴公に言ったな。遠征から帰った後であれば、教えてやれる事がある」と。

今がその時だ。約束通り、教えてやろう。〃ソウルの業〃の禁忌——私の力の秘密をな」

「——」

アイズは金色の瞳を見開いて、端正な相貌に真剣味を帯びる。椿ツバキを除く他の面々も同様だ。

灰〃は、【ロキ・ファミリア】幹部勢をぐるりと見渡す。そして掲げた右手にソウルの光を収束させ、複数の羊皮紙を取り出した。

その数は七。幹部勢と同じ数の羊皮紙には、同じ内容が書かれている。

即ち、それは——ソウルレベル。

主なきソウルを己の糧とし、自らのソウルを直接強化する、禁忌の業。

『火の時代』以来、誰一人気付く事もなかった禁断の箱が、神降り立つ『神時代』に、静かに開こうとしていた。

鋭い剣閃が宙を舞う。

銀の残光を描き、中空を踊る不壊剣。アイズ・ヴァレンシユタインの得物である《デスペレート》が、幾度となく斬閃を描き、舞い散る木の葉がそれに触れ、塵となって風に消える。

その『力』は、Lv.7だった。

その『器用』は、Lv.7だった。

飛躍という言葉では到底収まらない、アイズ・ヴァレンシユタインの『激変』。

その理由は、遠目でアイズを見つめ続ける、灰髪の小人族バルウムにあった。「ソウルレベル……?」

少し前、本営ではアスカがある言葉を口にしていた。聞いた事のない単語に、アイズを始めとした一同は首を傾げている。

椿ツバキの姿はない。武装の修理が終わった後、興味を失くした彼女は「ちよつくら武器でも打つとするか!」と意気揚々と天幕を去っていった。フィンに他言無用を嚴重に言い渡された後である。

自身の強さに興味がなく、また他派閥の団長である立場を弁えた行動でもあった。ここから先は聞くべきではない、そういった鍛冶師の勘が働いたのかもしれない。

ともあれ、懸念事項が消えたフィンは、『灰』に続きを促した。どちらでも良かった幼女は、まず取り出した羊皮紙を一人一枚ずつ配る。開かれたそこには、以下の内容が書かれていた。

『灰』	ソウルレベル	802⇒	802	所持ソウル	—
99999999⇒	99999999⇒	9999999999	必要ソウル	—	—
能力値	生命力	99⇒	99	集中力	99⇒
99	99⇒	99	99	筋力	99⇒
持久力	99⇒	99	体力	99⇒	99
99	99	99	99⇒	99	99⇒

99 技量 99 ⇒ 99 理力 99 ⇒ 99 信仰
99 ⇒ 99 運 99 ⇒ 99

「これって……?」

「ソウルレベル……802!」

「レベル802って事!」

「いや、流石にそれはなからう……ない、筈だ」

「一概には何とも言えんなあ。ふむ、アビリティ能力値の数は九か。見慣れん項目もあるな」

「99は一見低い数値に見えるけど、それだと『灰』の能力と釣り合わない……この数字は、もしかしたら……」
「……」

ある者は驚き、ある者は睨み、ある者は考察する。口々に物を言い合う彼らは、最終的に言葉を止め、一斉に『灰』を見た。混合する様々な視線、それらを受け止めて、『灰』はそれを説明する。

「S Lとはその名の通り、自らのソウルの力を可視化したものだ。現在のS Lと所持ソウル、次のレベルアップに必要なソウル、そして九つのアビリティ能力値が記されている。」

S Lは1レベルにつきアビリティ能力値を一つ上げる。つまり、貴公らが受けている『神の恩恵』のようなランクアップ階位昇華による『飛躍』は起こらない。あくまで『蓄積』、レベルを積み重ねる事で徐々に強さを得ていくのがS Lだ」

「『蓄積』ね……『灰』、一ついいかな? 今の説明だとソウルレベルはアビリティ能力値の総決算のように聞こえる。けれど君のソウルレベルとアビリティ能力値の合計は計算が合わないようだ」

「それは『素性』に関係している。S Lを強化する前の最初のれきし能力値、その者の歩んだ人生によって変化したソウルの形を大まかに分類したものだ」

『灰』は新しい羊皮紙を配る。それには『素性』の分類——『騎士』『傭兵』『戦士』『伝令』『盗人』『刺客』『魔術師』『呪術師』『聖職者』『持

たぎる者』——が記されていた。

「産まれたばかりの人のソウルは、無垢だ。無垢なる魂は歩んだ時間、経験によつて尖り、あるいは衰え、その形を変えていく。それはある種当然であり、逆らえぬ理であるとも言える。貴公らの神が、天に還つた魂を浄化するように。地を這うしかない我らのソウルは、薄汚れ、それ故に形を変えるのだ」

「……それにしては、分類が少ないようだが」

『素性』という概念を生み出したのは偏屈な不死の学者だ。そもそもSLとは、不死のみが求めるもの。呪いを受け、人の世界を追放され、亡者となるまで放浪と闘争を余儀なくされた者達。それを調べれば必然、戦える者しか残らない。

ある種の、人の世界でこそ価値ある職業に就く者は、不死の世界では皆『持たぎる者』だ。人の世界を追われ、なおそれを名乗る事に、最早意味などないのだから。故に私も、狂王などと呼ばれていたが、その実体は『持たぎる者』に他ならない」

「……」

『持たぎる者』の能力値が書かれた羊皮紙を見ながらリヴェリアは黙考する。不死の運命、*“灰”*に関しては本人から話を聞いていたが、いざ想像してみるとそれがどれほど過酷な旅であったか今更ながらに思い至る。

遠い時代の話だ。今を生きるリヴェリア達には、何の関係もない忘れ去られた時代。それに思いを馳せたところで、意味など何もないのだろうが——せめてこそ、感傷を抱くのは、間違っているだろうか。

湧き上がる情動をリヴェリアは瞳を閉じて押し殺す。その隣で、ガレスが*“灰”*に質問した。

「ふーむ、この分類に従えば、儂の『素性』は『戦士』か？ 『騎士』や『傭兵』という柄でもないし、『魔術師』だの『呪術師』だのという如何にも魔法使いでもない。ま、あえて言うなら儂は『鋤夫』じゃかな」

「いや……おそらくだが、どの『素性』にも当て嵌まるまい。貴公だけでなく、貴公ら『神時代』——『神の恩恵』^{フアルナ}を受けし人は全て、どの

ような『素性』も持たないだろう」

「んん？ どういう事じゃ、それは？」

「これに関しては、説明するよりも見せた方が早い。リヴェリア、貴公のSLを開示して構わないか？」

「私のソウルレベル、だと？」

唐突に振られたリヴェリアは顔を上げて鸚鵡返す。『灰』は右手を前に突き出し、暗い魂の光——火防女の献身、小人の狂王の業を灯して説明する。

「最初に魔術を教えた時だ。貴公はこの光、私の暗い魂に触れたな。これこそは本来、『ソウルの業』の禁忌、主なきソウルをその者の力とする業なのだ。

だからこそ私は、貴公のSLを知っている。あの時「私の暗い魂に触れたまえ」と言ったのは、貴公のソウルを見たかったからだ。『記憶スロット』を始めとした、貴公の魂、その全て。それを私は見通した」
「……それが、我々に『素性』がない事と関係があると言うのか？」
「そうだ。先にも言ったが、見た方が早い。貴公が許すのならば、それをここで開示するが、どうする？」

「……良いだろう。ただし、この場にいる者以外には他言無用だ」

「了承した。それでは見るがいい。おそらくはそれが、貴公ら全ての、ソウルの形だ」

『灰』は三つ目の羊皮紙を渡す。巻かれた羊皮紙を受け取り、開いた一同は、一様に驚愕で目を見開いた。

リヴェリア・リヨス・アールヴ	ソウルレベル	0 ⇒ 0
所持ソウル	173271656 ⇒	173271656
必要		
ソウル	724	能力値
		生命力 0 ⇒ 0
		集中力 0
⇒ 0	持久力 0 ⇒ 0	体力 0 ⇒ 0
		筋力 0 ⇒ 0
0	技量 0 ⇒ 0	理力 0 ⇒ 0
		信仰 0 ⇒ 0
運	0 ⇒ 0	

「なにこれー!？」

「ソウルレベル0ですって……!？」

「アビリティオールゼロ
全能力、初期値……!？」

「どうなってやがる……」
「アビリティ野郎の言う通りならババアの『素性』は『魔術師』じゃねーのか？」

「それ以前の問題だね。彼女の渡した『素性』を見ても、アビリティ全能力初期値は存在しない……『持たざる者』でさえだ」

「成程のう。見た方が早いとはこういう事か。こりや確かにそうだわい。おいリヴェリア、大丈夫か？」

「……………」

次々と声上がる中、リヴェリアは羊皮紙を握り締めて沈黙を保っていた。その双眸は驚愕に固まったままだ。自身のソウル、自分の魂が、これまで歩んできた生の中で何も変化していない。その事実衝撃を受けるのは、当然と言えるだろう。

「——そうだ。貴公らのソウルは、人から何一つ外れてはいない」

そこに、古鐘の音が擦り鳴らされる。羊皮紙から顔を上げる一同は、その声の主に視線を吸い寄せる。

生まれより伸びる灰色の髪。美しい白い肌と、神の如き美貌。少なくとも見た目は人の形を保っている——だが尋常ならざるソウルの持ち主を。

「それは私にも驚くべき事実だった。貴公らのソウルは穢れ、その色を変える事はあれど、その形を変質させる事はない。おそらくは生涯を無垢な人のまま過ごし、終わる。」

それは『火の時代』にあつて在り得ない事だ。全ての人はソウルに惹かれ、容易く形を失う生き物。人に生まれようとも、そのソウルが歪になれば、自ずと人を外れていく。

だが貴公らは違う。この時代の人は皆、人のまま生を終えていく。儂い『ダークソウル』を宿しながら、その力を知る事は生涯ない。それがきつと、『神時代』に生まれし貴公らの、逃れ得ぬ運命さだめなのだろう」
「……………」

擦り鳴らされる古鐘の声に、沈黙が返ってくる。『灰』の語った事実、忘れ去られし理の一端に触れた彼らは、心中で何を考えているのか。

『灰』には、どうでもいい事だ。重要なのは、ここからなのだから。「さて。これで貴公らは、『ソウルの業』の禁忌を知った。ここで足を止めるのも手だが、更に先へ進む事も出来る」

『灰』は暗い魂の光を灯す。その輝きは、今の彼らには魔性だ。近づいてはならない何かがあると知りながら、暗い魂から目が離せない。

そこには確かな、力への手がかりがある。

「私は火防女ひもりめの真似事が出来る。主なきソウルを器に注ぎ、貴公らのソウルを変質させ、肥大化させる事が出来る。」

それは禁じられし『ソウルの業』。不死でなくば求める事も許されない、禁忌に値する業の一つ。

故に約束しよう。貴公らが、この業を受けるといふのなら。確実に貴公らは——今よりもっと強くなると」

「――」

喉を鳴らす一同の中で、顕著な反応を示したアイズ。それを銀の半眼で見据え、『灰』は火防女の献身を——小人の狂王の暗い業を、示し続けるのだった。

ヒュンヒュンと剣が舞い、金の長髪が風に流れる。

虚空に想像上の敵を見立て、素振りをするアイズ。

その『力』は、Lv.7だった。

その『器用』は、Lv.7だった。

『飛躍』という言葉では説明がつかないアイズの『激変』。

それを齎もたらした灰髪の小人族バルウムは、遠目でただ観察を続ける。

アイズだけではない——彼女の周りで同じように己の力量を確かめている、『ロキ・ファミア』幹部の面々を。

「すごい！ 見て見て、ティオネ！ 私の『力』、すごい上がって

るよー!」

「そんな事分かってるわよ、つて痛^{いた}った!? ちよつと、殴りかかってこないですよ! 『耐久』まで上昇してるわけじゃないのよ!」

「えー? でもでも、やっぱり戦ってみなくちゃ、ちゃんと分かんなくない?」

「それで体壊したら元も子もないでしょうが、この馬鹿!」

「ぎゃー!」

「うっせーぞバカゾネスども! ……チツ、『敏捷』は『筋力』と『技量』の間の子かよ……めんどくせえな」

「わっ!? ベート、砂埃立てないですよ!? 口に入っちゃったでしょ!」

「知るかバカゾネス」

「なんだとー!」

「あやつらは元気じゃのう……儂はもういいわい。確認は終わったしのう……やれやれ、この程度で休みたいと思うのは歳を食ったもんじゃ。おいフィン、お主の調子はどうじゃ?」

「シー……きつかりLv分^{レベル}、つて感じかな。【ランクアップ】した時の感覚と似ているよ。ただ、似ているだけで完全に同じってわけじゃない。これはもう少し確かめておきたいね。リヴェリア、君はどうだ
い?」

「……難しいな。試しに『理力』を上げてみたが、魔力制御が追いつかん。優れた魔術師は技量に長けていると言ったアスカの言葉が今ならよく分かる。これは安易に触れるには、問題が山積みだな」

「そうかい。……それにしても便利だね、この『指輪』は。おかげでこうして試す事が出来る」

言いながら、フィンは光に透かすように己の手を上げる。小人族特有の小さな手には奇妙な形の『指輪』が嵌^{はま}っていた。

“灰”が“ソウル^{ソウル}の業”の禁忌、S Lによる魂^{ソウル}の強化を示した後、真っ先に手を上げたのはアイズだった。

力が欲しい。ある目的のために貪欲に強さを求める少女は、S Lによる自身の強化を試みようとしたのである。

それを止めたのは、フィンを始めとする【ロキ・ファミリア】の三

首領だった。理由は明白、どんな危険があるか分からないからだ。

フィンが矢継ぎ早に「灰」に質問したところによると、SLの強化は基本的に不可逆。一度強化した能力値を戻す事は出来ないし、消費したソウルも戻ってこない。

振り直す事は可能だと言っていたが、それは一旦隅に置く事にした。フィンが知りたかったのは、要約すれば試す事は出来ないかという点だ。

ソウルの強化による力の向上。それ自体は冒険者として非常に興味がある。だが不可逆であるのならば、それによつて被った不利益もまた不可逆になってしまう。

だから一時的にSLを上げる方法はないか。聡明なフィンはその可能性に思い当たり、「灰」に尋ねた。しかして「灰」は、是と答えた。

その結果が幹部勢が装備している『指輪』だ。『力の指輪』『技の指輪』『叡智の指輪』『祈りの指輪』『騎士の指輪』『狩人の指輪』『賢者の指輪』『祭議長の指輪』——SLの能力値を上げる指輪の数々を提示され、彼らはそれを身につける事でソウルの強化がどのようなものか確かめる事が出来たのだ。

「……本音を言えば、『筋力』『技量』『理力』『信仰』以外の五つの能力値も確かめてみたかったけれどね」

「ソウルレベルに直接関わる指輪がないというのじゃからしようがないじゃろ。儂としては『体力』や『持久力』を確かめたかったのう」
「私は『運』だな。抽象的だが、それ故に心惹かれる。まあ、ないものねだりをするつもりはないが。」

それよりもフィン——「気付いているか？」

「ああ。今の僕らは『筋力』『技量』『理力』『信仰』がそれぞれ10、ソウルレベルが40の筈だ。それで感覚的には「ランクアップ」時と同等——いや、「ランクアップ」した上で、アビリティを「ランクアップ」前と同じ値まで持っていた状態と同等だと思っている」

「つまり、ソウルレベルにおける能力値10は、『神の恩恵』でいうアビリティ1000と同等、という事か？」

「大雑把に言えばそうなるだろうな。だが、『神の恩恵』は『ランクアップ』で『飛躍』する。それを加味すればソウルレベルのアビリティの『蓄積』は、あるいは『神の恩恵』より大きいやもしれん」

「それはおいおい考えるところでしょう。今はソウルレベルの能力値1が『神の恩恵』のアビリティ100と仮定する。そしてリヴェリア、君のようにソウルレベルが0、アビリティオールゼロ全能力初期値の状態を『神の恩恵』でいうLv.1の初期状態だとすると――

――『灰』は、限りなくLv.11に近いLv.10――という事になる。

「それも、あらゆるアビリティを極めた、と言っても過言ではないくらいだね」

「……………」

気が付けば、場に沈黙が降りていた。三首領の話を小耳に挟んでいたアイズ達は、驚愕を露にし、遠目で立っている『灰』を思わず凝視する。

限りなくLv.11に近いLv.10。そんな怪物は、千年に渡る『神時代』において一人として存在しない。

かつてオラリオで全盛を誇った「ゼウス・ファミア」と「ヘラ・ファミア」。当時の都市最強、いや世界最強は男神の眷族、Lv.8の傑物。

そして世界最恐は女神の眷族、Lv.9の女帝だった。

それを超える、Lv.10。限りなくLv.11に近く、更に全ての能力値を極めた怪物。

それが、『灰』。それこそが『灰』。名も無き不死、『火の時代』の蚕食者。

推定ではあるが、その事実を知った時、彼らの胸中に芽生えたのは納得と疑念だった。

『灰』は、底が見えない。深淵に広がる無限の闇のように何も見えず、ただ老木の如き巨大な威圧感だけを放っている。

それが限りなくLv.11に近いLv.10だったから、と知れば納得だ。今の今まで彼らは誰一人として、『灰』に挑み、そして勝つイ

メージが湧かなかったのだから。

——しかし、本当にそれだけなのか？　「灰」の強さは、そんな程度で足りる程のものなのか？

底の見えない闇。強いかも弱いかも分からず、ただ深淵から覗いてくる瞳。それが「灰」の凍てついた太陽のような眼であるのなら、ただ何かある。

そう——こんな真向から打ち勝つような、正々堂々とした力ではなく。もつと闇に潜む、哀れな貧者の如き狡猾さが、「灰」にはあるのではないか。

今なお「ロキ・ファミリア」の観察を続ける「灰」に、彼らは一様にそのような感情を抱いていた。

「……ねえ、アスカ」

「何だ、アイズ」

「——私と戦って」

その中で、動いたのはアイズだった。抜き身の《デスペレート》を携えたまま、「灰」に近付いた金の少女は、率直に己の願望を口にする。

「何故だ？」

「知りたいから。アスカの、強さ。アスカの力を」

「知ってどうする」

「——私は、強くなりたい。強くならなきゃ、いけない。私は、私の悲願のために——誰よりも、強くなりたい。」

だから、戦って。アスカと戦えば、何か、掴める気がするから」

「……まあ、良いだろう。貴公がそれを望むなら、受け入れるとしよう」

「……！　ありがとう、アスカ！」

少しばかりアイズを観察して、「灰」は首肯した。それに表情には出さないが、アイズは喜ぶ。心の中の小さな幼女が、仮面巨人と一緒にファイティングポーズを取っていた。

そんなアイズの心中を悟って、リヴェリアが苦笑する。ガレスは「やれやれ」と口角を上げ、ティオナは「あっ！　アイズずるーい！」

私も戦いたーい！」と声を上げ、テイオネは「遠征で疲れてるんだから止めときなさいよ」と言いつつも血を疼かせる。ベートは無言で睨み、そしてフィン、場を纏めるために彼女らの下へ歩いた。

「アイズ。他派閥の冒険者と勝手に戦おうとするのは感心しないね」

「あつ……ご、ごめんなさい」

「幸い、彼女は受け入れてくれたようだから大きな問題にはならないと思うけど、気を付けるんだよ。一歩間違えば『抗争』にも発展しかねないからね。」

さて、〃灰〃。話が前後したけれど、こちらとしてはアイズが君と戦う事は許可するつもりだ。君の方も、派閥に断り無く戦えるくらいの裁量を持っていると受け取っていいかい？」

「ああ。元より私は、私のやり方しか通せない。ヘスティアがどう言おうと、止めるつもりはない」

「ンー、それは問題がある気がするけれど……他派閥の話だ、口出しはしないよ。」

それじゃあ、場所を移してもいいかな？ 君と戦うのなら、アイズはおそらく本気を出すだろう。それを他の冒険者に見られたくないんだ。嚴重に見張りを立てた場所を用意したい」

「構わない。貴公がそれを望むなら、そうすればいい」

「ありがとう、〃灰〃。早速移動しようか」

フィンの提案に頷いた〃灰〃は、アイズを伴って先導するフィンの背を追いかける。小人族の首領はラウルを呼んで手早く指示を出すのだった。

18階層、森林地帯の中心付近。17階層への入り口近くにある【ロキ・ファミリア】の野営地からほど近い場所。

立地的に覗き見がされにくい場所に警備を立て、アイズと〃灰〃の戦いの場は整っていた。見物しているのは【ロキ・ファミリア】幹部勢、そして二軍の中核メンバーである。

「い、一体何が始まるっすか……？」

体の震えを押さえるように両腕で肩を抱き締めるのはラウル・ノールドだ。彼の視界には向かい合うアイズと「灰」の姿がある。

片や抜き身の《デスペレート》を構え、これ以上ない戦意を研ぎ澄ます「剣姫」^{けんき}。片や無手を保ち、何の姿勢も取らず、ただ老木のような存在感を放つ「灰」。

双方の威圧がぶつかり合う戦場は、Lv.4^{レベル}であるラウルであつても震え上がってしまう程のものだった。元々臆病な気質であるのは、この際無視する事にする。

「こら！ 怯えてないでびしつとしなさいよ！ 団長達もいるんだからね！」

「痛あ!? ^{いっただ}なんで叩くんすか!?!」

「なよなよしてるあんたが悪い！ それともなに、文句あるの?」

「な、ないっす……」

そんなラウルを許さないのがアキだ。ラウルと同期である猫^{キャットピール}人の少女は情けないラウルの姿に「まったたく……!」と眉を吊り上げる。

「まあまあアキ、しようがないよ。私らだつて緊張してるしさー」

「そうだな。正直身震いを止めるので精一杯だ。あの「灰」つて奴は、どれだけ強いんだ……?」

「……リヴェリア様が師と仰ぐ方です。高貴なお方の名を汚さぬ程度の力はあると思いますが」

「アリシアは厳しいですねー。レフィーヤはどう思いますか?」

「うーん、「灰」、さんは魔道士として強いって事ですよ? 50階層で見た魔法といい、とても強い人だと思いますけれど、魔道士なのにアイズさんと真向から戦えるんでしょうか?」

「あの、それは私も気になってました。元々は『毒妖蛆』^{ポイズン・ウエルミス}の劇毒治療のために呼んだと聞いてますし、実際に治癒魔法を行使する場面も見えています。魔道士としての能力は疑いようありませんが、アイズさんと戦えるかと言われれば……」

「うーん、情報が足りなすぎるわ。団長達も「灰」^{あの人}に関しては情報を出し渋ってるみたいだし……自分の目で確かめてみる、つて事なのかしらね……」

ナルヴィ、クルス、アリシア、エルフィ、レフィーヤ、リーネが推測を重ねていく。最後にアキが締めくくって、二軍のメンバーは観戦に集中した。

それを片目を瞑って見遣りつつ、フィンも観戦に加わっている。後ろに並ぶのは対峙する二人を凝望する【ロキ・ファミリア】幹部勢だ。場が整ったと判断したフィンは片手を上げた。

「双方、準備はいいかい？」

「大丈夫」

「問題はない」

「それじゃあ——始めっ！」

手を振り下ろすと同時に開始を宣言する。同時に動いたのは【剣姫】、アイズ・ヴァレンシユタインだ。

「【目覚めよ】！」

初手で風の付与魔法、【エアリエル】を発動したアイズは風の砲弾と なって「灰」に突進した。

「アイズさんが魔法を使った!？」

ただの付与魔法に収まらない【エアリエル】の力を知るレフィーヤが驚愕の声を上げる。アイズには届いていない、眼前の「灰」に全集中する【剣姫】は本気の一撃を叩きつけた。

森林に響く金属音。渾身の一撃は、棒立ちのままだった「灰」の零秒武装、《番兵の大盾》によって防がれる。

「む——」

「はあああああああつ!!」

気合を込めたアイズの裂帛。流れるように繰り出される風を纏った連続攻撃。織り成される剣の旋律に、「灰」は初撃で盾を捨て、《番兵の直剣》で防御する。

互いの剣が交錯し、弾ける金属音が連続した。幾重にも重なる剣閃を打ち落とす両者、それは少なくとも、アイズと「灰」の『敏捷』と『器用』が拮抗している証だった。

「あのアイズさんと打ち合ってる!？」

「まさか!?! アイズはLv.6で、しかも魔法を使ってる状態なのに

!？」

「いえ……むしろアイズさんが押されていませんか!？」

「すごいです……! あれ、でも……血……?」

一際大きな音が鳴り響き、両者は弾け飛び、距離を取った。険しい顔で《デスプレート》を構えるアイズと対象的に、〃灰〃は余裕すら見える無表情のままだ。だがその手からは、ポタポタと血が滴っている。

盾無き不死に防ぎ切れる攻撃など無い。ましてアイズの風は『火の時代』において竜の嵐ほどしか比べられるものがない。

だから盾では防げない。風を完璧に防ぐ盾など無い。故に〃灰〃は、剣戟による防御を選択した。それが己の脆い体を、更に傷付けると知っていても。

戦いの序盤、アイズが突貫したのは直感的に分かっていたからだ。本質的な不死の脆さ。〃灰〃は、攻め尽くせば討ち取れる。幾多の怪物との戦いによって得た経験が、アイズにそれを教えていた。

そしてそれは、正しかった。このまま強く攻め続ければ、勝つのはアイズ・ヴァレンシユタインだろう。それは〃灰〃も分かっている。だからこそ。序盤の攻防で負った〃灰〃の傷は、最初で最後の傷だった。

アイズが再び突貫する寸前、動いたのは〃灰〃だった。
「!？」

一瞬で掻き消える灰髪の少女。第一級冒険者であるアイズの動体視力を振り切って、〃灰〃は【剣姫】の背後に回る。

出鼻を挫かれつつも、Lv.6の器によって生じる超感覚で感知し、アイズは迎撃する。

振り下ろされる一撃。その余りの重さに、アイズはたたらを踏んだ。

(直剣、じゃない……特大剣!)

〃灰〃の武装は既に《番兵の特大剣》に変わっていた。極めて頑丈な造りの漆黒の特大剣。本来〃灰〃ほどの小さき者ではなく、巨人が使うのではないかと思わせる特大剣を、灰髪の小人族は小枝のように

振り回す。

細剣であるアイズの《テスペレート》よりも速く。縦横無尽に空気を薙ぐ重閃に、アイズは崩れた姿勢を戻し切れない。

（やり辛い——!?!）

それは以前、黒衣の人物の依頼で共闘した時とは真逆の思考だ。あの時は家族に背を任せているような信頼と安心感があった。

だが今は違う。アイズに有利な状況を作らせないように——アイズに全力を出させないように、〃灰〃は巧みに立ち回っている。

アイズが踏み込もうとすれば逆に踏み込み、タイミングを外す。間合いを調整しようにも、〃灰〃の足取りは特大剣の有利を取り続ける。視線、予備動作、先読み、牽制。長年積み重ねてきたアイズの『駆け引き』を、〃灰〃は完全に上回っている。

何より——風を纏い最大まで強化されたアイズの剣が、今は掠りもしない。「エアリエル」を付与された《テスペレート》は見た目以上の間合いを誇るというのに、〃灰〃は最小限の動きで回避していた。（見切られてる!?!）

瞬間、アイズの脳裏に冷たいものが走る。序盤の攻防、最初の攻撃。〃灰〃はあの時、ただ防御するのではなくアイズの動きを見ていたのではないか？　そしてたったあれだけの剣戟で、アイズの剣筋を見切ったのではないか。

その疑念は、確信に変わる。アイズの僅かな癖、剣筋の偏り。それらを完全に見切っていないければ、紙一重で躲かわす事なんて出来ない。

「くっ!?!」

アイズの表情に焦りが差す。それはこの状況では悪手だ。空を斬り裂く特大剣を何とか凌ぎ、反撃に繋げるものの、それが一向に実を結ばない。

次第に押されていくアイズ。冒険者の頂点に立つ【剣姫けんぎ】が劣勢なのは、誰の目から見ても明らかだった。

その時。〃灰〃は不意に攻撃を止め、大きく距離を取った。何時しか呼吸を乱していたアイズは、その行動に疑問を覚える。

「距離を取った？　どうして……」

「あのまま攻め切れれば、アイズさんに勝てたかもしれないのに……」
「ばつ、馬鹿な事言わないでくださいクルスさん!? アイズさんが負けるわけないじゃないですか!」

「でもレフイーヤ、この戦いはどう見ても……」

「『灰』は、ここまで強かつたんすか……?」

外野の声がうるさい。そう感じ取ったアイズは、自意識の乱れを自覚する。呼吸を整え、再度集中する。どうして『灰』が距離を取ったのか分からないが、この状況を生かさないと選択肢はない。

「——攻め切れんな」

アイズが意識を切り替えていると、古鐘の音が擦り鳴らされた。
【剣^{けん}姫】が強い眼差しで『灰』を見れば、棒立ちの幼女は両手を小さく広げる。

右手には《番兵の特大剣》が握られている。そして左手には《番兵の直剣》が現れる。両手に武器を装備する『灰』の姿から——次の瞬間、武器が消える。

「……?」

それにアイズが眉根を寄せた瞬間、『灰』は一瞬でアイズの眼前まで距離を詰め、何も持たない左手を振るう。

——否、違う! その左手には、その指には、先程までなかった指輪が光っている!

「!?」

咄嗟に剣で防御したのはアイズの本能だった。戦いの始まりから今の今まで、ゾツとする程変わらない冷たい瞳。それを見た瞬間、アイズの本能が遮二無二に防御を選択させた。

構えられる《テストプレート》。それが独りで金属音を上げるのと同時に、『灰』の左手が止まる。傍目からは分からずとも、アイズはそれで理解した。

『灰』は武器をしまったのではない——何らかの指輪の力で見えなくしたのだと!

(まづい——!?)

アイズは目を凝らして、最大限まで警戒を引き上げる。

こちらは「灰」と違って、動きを完全に見切っているわけではない。そんな有様で自分より格上の見えない剣を相手取らねばならない。

それがどれだけ困難な事か。武器そのものが見えないのなら、相手の動き、僅かな空気の揺れ、微かな音で判断するしかない。

それはアイズに過度な集中を強いた。通常では必要のない部分まで注意を払わなくては戦いにすらならない。

しかも「灰」は、悪辣だ。零秒で武装を着脱できるのをいい事に、右手と左手の武器を絶えず入れ替えている。直剣かと思えば特大剣が叩き込まれ、特大剣かと思えば直剣で防御を透かされる。

見えない武器、両手の武器の高速入替、そして純粋な『技と駆け引き』。それがアイズを、「剣姫」と賞賛される第一級冒険者を追い詰めている。

「攻め切れんな」——その言葉の意味を、アイズは今になって理解していた。少し前の攻防は確かに劣勢だったが、まだ逆転の目があった。

しかし今は、それが見えない。たった一つの要素、『武器を見えなくする』、それだけでこうも追い詰められている。

このままじゃ、負ける。そう遠くない未来の敗北を、アイズは悟った。

そして知った。「灰」は、本気でも何でもない。ただアイズを測つて、ただ勝つのに必要な要素を選別して、それが揃ってからやっと戦い始めただけに過ぎないのだと。

「――【吹き荒れる】！」

瞬間、アイズは眈まなじりを決した。風を最大出力で放射し、「灰」から無理矢理距離を取る。

目指すは戦いの場の端、森に散在する水晶。一際大きな結晶の塊に着地した【剣姫】は、最大出力を解放した【エアリエル】を纏い、「灰」目掛けて渾身の力で水晶を蹴った。

——そう、アイズには『必殺』がある。巨大な難敵を打ち砕く逆転の一手が、不可能を可能にする英雄の一撃がある。

それは神風の如き勢いで放たれる風の螺旋矢。嵐のように吹き荒れる「エアリエル」を纏い、剣の鋒きつさきに全ての力を集中させた一点突破攻撃。

「——リル・ラフアーガ!!」

掛け値なしの全力。手加減などかなぐり捨てた全霊の一撃を、アイズは解き放った。神速となったアイズの風の矢が駆け抜け、棒立ちの「灰」との彼我の距離を一気に詰める。

そう、アイズは『雛』だ。いずれ現れるであろう英雄の雛。未だ限界を知らぬ未完の『器』は、金の少女が英雄に足る事を示している。それは彼女がこれまで乗り越えてきた数々の『偉業』が物語っていた。常人では呆気なく死ぬ程の、常軌を逸した戦いの記憶。それがアイズをここまで成長させ、更に先へ進ませている。

——そうだとも。アイズ・ヴァレンシユタインは、一度だって死んだ事がない。どんなに強い敵でも、初見でも、格上でも——敗ける事はあれど、決して挫けぬ不屈の精神と覚悟を以て、勝利を掴み取って来たのだ。

それがどれ程の『偉業』であるのか、不死たる「灰」にはよく分かる。何の才覚もない凡人、ただ折れぬ心だけを持った貧者。ただそれだけの虫けらのような「灰」は、死に続ける事だけでしか前に進めなかった。

きっとアイズならば。ここに集う「ロキ・ファミリア」の面々あらば。「灰」が死ぬ事では切り開けなかった道も、死なずに、何も失わずに駆け抜けたのだろう。

不可能を可能とする。それこそが、英雄の証であるが故に。彼ら彼女らはきつと、「灰」と同じ運命にあったとしても、死なぬ英雄足り得たのだ。

「ああ——」

だからこそ、「灰」はアイズを殺せる。

何の才能もないから、何の力もないから、死んで、死んで、ただひたすらに死んで、積み上げてきた「灰」の『経験』。それはどんな怪物でも——英雄すらも殺す、「灰」の唯一の牙なのだから。

「それはもう、知っているぞ——アイズ・ヴァレンシユタイン」

それが、既に一度眼にしたものであるのなら、尚更に。

アイズ・ヴァレンシユタインの『必殺』を知る不死は、静かに左手を突き出した。

激突する。神風と化したアイズの一撃と、
「灰」の左手がぶつかり合う。

瞬間、吹き荒れる風の力。凝縮された「エアリエル」の風が、彼方へと駆け抜けていく。

「灰」を貫き、灰髪を荒らしながら後方へ——ではなく。

「灰」の頭上、天井に咲く水晶群に向かって。

「あ——」

やった事は単純だ。左手の武器を《パリングダガー》に持ち替えた「灰」は、アイズの《アスペレート》を絡め取り、上空へ受け流した。ただそれだけ。それがどれ程緻密なタイミングと精密動作を要求されようが、腕尽くでアイズの『必殺』を巻き上げるだけの力が必要だろうが、関係はない。

何度だって繰り返し返してきた。何度だって死に続けてきた。幾億も幾億も積み重ねた「灰」の『経験』が、アイズ・ヴァレンシユタインの全てを上回っていた。

これはただ、その結果が現れただけなのだ。

「あ——」

そしてアイズは、理解する。

自分は死ぬ。間違いなく死ぬ。空中を飛び、剣を腕ごと巻き上げられたこの姿勢。出来る事は何もない。

そして目の前には、「灰」がいる。凍てついた太陽のような銀の瞳で見つめ続ける、一人の不死が。その手には既に、《番兵の直剣》が見えている。

あれに貫かれて、終わるのだろうか。何も果たせず、悲願にも届かず。不思議とそれに対する怒りや絶望は湧いてこなかった。

そして、一秒後。アイズは勢いのまま「灰」と重なり。

ポスツ、と軽い音を立てて、灰髪の少女に受け止められた。

「貴公の負けだな、アイズ」

ポンポンと背を叩きながら、「灰」は言う。それにパチパチと目を瞬かせて、アイズは体を離れた。「灰」と向き合う。

いつも通りの、銀の半眼。綺麗な眉毛に隠されるその瞳と目が合つて、しばらく。

「……うん。私の、負け」

何かおかしくて、恥ずかしくなって、はにかむアイズは。

そうして、自身の敗北を認めるのだった。

「皆、どうだったかい？ アイズと「灰」の戦いは」

『……』

フィンが二軍の中核メンバーに尋ねると、沈黙が返ってくる。

彼らは一様に啞然としていた。特にアイズの『必殺』、『リル・ラファーガ』を「灰」がパリイした時から口が開きっぱなしだ。

【ロキ・ファミリア】の二軍を先導する彼らは、アイズの強さを、アイズの高みを嫌というほど理解している。

そのアイズが、まるで子供扱いだった。——いや、ぺたりと座り込むアイズを「灰」が撫でている光景を言っているのではない——

アイズが攻め切れたのは、最初だけだ。後は防戦一方、なげなしの攻撃も簡単に躲かわされ、「灰」の攻撃に翻弄かたがされていた。それは戦いと言うより教導、【ロキ・ファミリア】で実践している先達が後輩に行う模擬戦に近かった。

「灰」が加減していたのは明らかだ。何故ならアイズには、傷一つない。二軍メンバーから見ても明らかかな隙にさえ攻撃を加えなかった。相手は無傷で倒す事がどれだけ難しいのかは語るまでもない。アイズと「灰」には、それだけの力の差がある。

それを悟ったラウルは、青い顔をしながらフィンに顔を向けた。そして言い淀むものの、はつきりと言葉を口にする。

「団長……俺達にこの戦いを見せたのは……「灰」が、俺に似てるか

らっすか……？」

「はあ？ 何言ってるのよラウル——」

「そうだよラウル。『灰』は僕らの中じゃ、君に一番近い」
『!?!』

アキの発言を遮ってフィンは何も告げない。それに驚愕する一同を前に、
フィンはラウルと向き合って話を続ける。

「ラウル。君はよく、自分の事を卑下しているだろ？ やれ才能がないだとか、やれ二流止まりだとか、勿論僕はそんな風に思っていないけれどね？ 君には期待しているんだ」

「いや、その……て、照れるっす……」

「ハハハ。……けれど『灰』は、君以上だ。君よりも才能がなくて、君よりも自分を卑下している。そして何より——ここにいる誰よりも、貪欲だ」

フィンは神妙な顔で『灰』を見遣る。聡明さを宿す碧眼に映るのは、敬意を評すべき灰髪の小人族か、それとも『火の時代』の怪物か。瞳を細めるフィンは、ラウル達に向けて言う。

「まだ詳細は明かせないけれど、『灰』はここにいる誰よりも強い。僕よりも速く、ガレスよりも強く、リヴェリアより魔法に長けている。実際に確かめたわけじゃないけれど、それはまず間違いなく事実だ」
『!?!』

「だからこそ、この戦いを君達に見せた。『灰』は貪欲だけれど、得たものには頓着しない。

——いつか必ずその強さを、白日の下に晒す日が来る。だから先に言っておくよ。

『灰』を指すのはいい、けれど『灰』のようにはなるな。

……僕らよりは君達の方が、きっと彼女に惹かれるだろうからね」
『……!』

苦笑するフィンの言葉に、ラウル達は一齐に『灰』を見る。アイスと『灰』の側集まる「ロキ・ファミリア」幹部勢の中で、『灰』の姿だけが異彩を放っている。

それは他派閥だからどうこうじゃなく、その強さだ。アイスを圧倒

しながらも、その戦い方は平凡だった。凡庸な立ち回りで、武器の扱い方も普通で、言ってしまえばラウルよりも普遍的だった。

それがどこか、第一級冒険者のようになれないと諦めている二軍の面々には輝いて見えるのだ。自分よりも才能が無くても、自分よりも一般的でも、あの場所に立てる人がいる。それはある種の、全てを呑み込む底なしの希望のようで。

俺達だって——そんな考えと奮起が過ぎつたのは嘘ではない。彼らは英雄より只人に近いからこそ、誘蛾のように狂王たる「灰」に惹かれてしまう。

それは強さを求め、だが折れてしまった者にしか分からない感覚だろう。凡人では辿り着けないと思つた場所に、辿り着いた凡人がいる。それを目の当たりにして何も思わないのなら、端から冒険者などにはならないのだ。

それをフィンは見越して、忠告するためにこの場を設けた。いつか知るであろう「灰」の姿に、惑わされないように。良くも悪くも「灰」はきつと、表舞台に立つ事で全てを変えていつてしまう。

闇の中にいつしか火が灯り、全てを照らし、焼き払うように。彼女は全てを変えながら、それに何の興味も持たず、歩き続けるのだろうか。「……」

フィンは考える。「灰」にどう接していくべきかを。

フィン・デイルムナには野望がある。今は落ちぶれた同胞、全ての小人族の『光』となる事だ。今は無き小人族の旗印、『勇氣』の象徴として同胞を照らし続けんとしている。

もしも、「灰」にその気があるのなら。「灰」はきつと小人族の架空の信仰である女神『フィアナ』と同じ、いやそれを超える眩い『太陽』となれる筈だ。それをどこか望む自分がある事も、自覚している。

だがそれは、危険な賭けだ。「灰」は、地平線に広がる闇のように底が見えない。いくら片鱗を知ろうとも、その本質に辿り着けていないのではないか。フィンにはその懸念がある。

だからフィンは、見定め続ける。「灰」がフィンの野望に利する存在であるか否か。小人族の勇者は——自身を贗作、人工の英雄と認識

する男は、**「灰」**をこれからも見定めるのだろう。

そしてまた、深淵を覗く時、深淵もこちらを覗いているのだ。

次は誰が戦うかで盛り上がっている幹部勢。その中でひっそりと佇む**「灰」**は、フィンを銀の半眼で見返していた。

その凍てついた太陽のような瞳に、どんな感情が宿っているのか。

——それを知るのは、深淵に眠る者だけだ。

火を知る弟子、人でなしの師

「よし、次は儂じゃな！ いぎ尋常に相撲スモウを取ろうか、灰〃よ！」
「スモウ？ 【処刑者】を取るとはどういう意味だ？」

「何を言ってるのか分からんが、相撲とは組打ちくみうちの一種よ！ 何でも極東に伝わる神事のようなでな、相手の力量を知るには丁度良いものじゃわい！」

「ほう、奴の名にそのような意味があったとは。覚えておくとしよう」
微妙に話の噛み合わない「灰〃」をガレスは笑い飛ばした。ドワーフは細かい事を気にしない、それはガレスとて例外ではない。

アイズとの戦いを終え、次こそは我と「ロキ・ファミリア」幹部勢は手を挙げた。フィンとリヴェリアは端から辞退していたが、それ以外は皆「灰〃」と戦いたがったのだ。

しかし「灰〃」が難色を示した事、この場にあるのはあくまで治療のためであり、アイズ以外は借りを返すという形でしか応じないと宣言したため、最終的に残ったのはガレスとティオナの二人となった。

ガレスはリヴェリアから借りを譲ってもらうという形で、ティオナは持っている借りを精算する形で戦う事となる。ティオナは「どうせ借りを返して貰うなら団長のために使いたいわ」と辞退し、既に借りを支払ったベートはお預けを食らった。

「ふざけんな「灰〃」野郎おおおおおおつ!」とはベートの叫びである。自業自得で「灰〃」と戦う機会を失った狼ウエアウルフ人は「借りを寄せせえ!」とティオナやフィンに食って掛かるが、当然まか罷り通る事はなかった。

「さて、それでは相撲を取るか——と言いたい所ではあるが、貴公と私では体格に差が有り過ぎる。組打ちは出来ないのではないか？」

「む、それもそうじゃの。であれば、シンプルに素手喧嘩ステゴロでやるか。お主とは素手で打ち合いたいんじゃない！」

「そうか。ならばごちらも素手で応じよう。ただし、素手の私はそこまで強くはない。脆い私は受ける事も凌ぐ事も出来ないのだから。それを承知の上で戦うのだな」

「おうとも！ よし、フィン、決まったぞ！ 開始の合図を頼む！」

「分かったよ、ガレス」

戦いの作法が決まった所で幹部勢が場所を開ける。一部まだ騒ぎ立てる狼^{ウエアウルフ}人がいたが、アマゾネスの姉妹とハイエルフの王女に強制的に沈黙させられた。

そして、ドワーフの大戦士と不死が向き合う。拳をぶつけて指を鳴らすガレスに対し、「灰」はだらりと腕を下げたいつも通りの棒立ちだった。

「――始めっ！」

フィン的一声により、戦いが始まる。ガレス対「灰」、ドワーフ対小人族^{バルウム}。それは体格差だけで言えば「灰」側にとって絶望的な戦いだ。

「――ぬうつ!？」

しかし、『神の恩恵^{フェアルナ}』が見た目だけでは判断がつかぬほど冒険者を強くするように、S Lもまた外見から強さを判別する事は出来ない。手足の長さ^{リッチ}の差はあるだろう、『耐久』の差もあるだろう。だがそれを補って余りある『経験』が、「灰」にはある。

ドワーフらしく真向から仕掛けてくるガレスに、「灰」もまた正面から打ち合った。オラリオで一、二を争う超前衛特化のガレスの拳。太腕より放たれる剛拳を、「灰」は正確無比な攻撃によって弾き飛ばす。

（受ける事も凌ぐ事も出来んとはよく言ったものよ！ 儂の拳に直接攻撃して弾いてくるとは、小癩な真似をしおって！）

戦う前から仕込んでいた「灰」の言葉を嚙猛に笑い飛ばし、ガレスは積年の冒険によって磨き上げた連打を叩き込む。

だが届かない。悉く^{こまじと}を弾く「灰」の拳はリーチの差を物ともしない。場所を入れ替えながら殴り合う二人は千日手を繰り返す。

（このままでは埒が明かな……！ ならば、これはどうじゃ！）
「おおおおおおおっ！」

雄叫びを上げてガレスは突進する。体の関節に「灰」の拳が突き刺さるが、ガレスは歯を食い縛り渾身の一発をぶちかます。ドワーフ

の大戦士は大上段から指を組んだ両拳を叩きつけた。

「――」
そこで初めて、「灰」は防御を選択した。頭の上で両腕を交差させ、ガレスの一撃を受け止める。

ひしやげる肉、砕けていく骨。両手の上腕が完全に破碎され、二の腕、肩までも衝撃で血が吹き出る。

「しまったっ!?!」

あまりにも柔らかい感触にガレスは力加減を誤ったと目を剥いた。それがドワーフの大戦士が最後に見た光景となる。

「む――!?!」

潰れた腕で太腕を取った「灰」はガレスの知覚出来ない速度で投げ飛ばす。空を飛ぶドワーフはそれを認識する間もなく、その顔にひしやげた拳を叩き込まれた。

ガレスは空中を直進し、進路の水晶や大木を破壊しながら森の奥へ消えていく。それを銀の半眼で見送る「灰」は壊れた手を構えたまま、それをゆつくりと解いていく。

「終わりだな。ティオナ、準備をしろ。次は貴公だ」

「え? でもガレス、たぶんまだ諦めないよ?」

「――いや、儂の負けじゃ。完膚無きまでにな」

きよとんとしたティオナが言うのと、首を鳴らしながらガレスが戻ってくる。額の一点から血を流すドワーフの戦士は懽然とした様子で鼻を鳴らした。

「数秒意識が飛んでおったわい。こやつなら、その間にトドメもさせたいじゃろ。全く、『力』も『技』も上を行く相手と戦ったのは何時ぶりかのう。儂もまだまだ青いわ」

額の血を拭うガレスは、腕が潰れたままの「灰」に目をやった。見るだけで苦痛が想像できる程に両腕が壊れているのに、灰髪の少女は物ともしない。普段通りの静謐を保つ「灰」に、思わずと言った風にガレスは尋ねる。

「……お主は大丈夫なのか? その腕、痛みを感じていない訳ではないじゃろ?」

「問題ない。私の本質はソウルだ。私の力は、肉体に依存しない。腕が潰れた程度では何の変化もない」

「いや、聞いているのはそこじゃないんじゃないか……まあ良いか。それよりその話、興味が湧いた。詳しく聞いても良いか？」

「良いだろう」

エストを飲んで両腕を治した“灰”は詳細を説明する。

そもそもSLとは、ソウルの強化だ。器を昇華し肉体を強化している『神の恩恵』とは根本から違う。

SLによつて力を得ていく者は、やがてソウルこそを本体とする。肉体は物理的な手段、干渉を主とする道具に成り下がっていき、ソウルこそが台頭していくのだ。

それは“灰”を始めとした不死が、『火の時代』の怪物達が証明している。どれ程に傷つき、肉体の構造を破壊され、物理的に動けなくなろうとも、彼らが止まる事は決して無い。最後の最後、息が絶えるまでソウルを本体とする者達は全盛であり、力を損なう事がないのだ。

それは不死の中でもあらゆる凄惨な戦いを強いられた奴隷騎士が顕著だろう。老いさらばえ、皮膚が焼け爛れ、骨が歪み、正気などとうに失つても、終わる事のない戦いを強いられた不死達。捨て身を身につけた奴隷騎士の戦いは、不死の脆い肉体に反しあまりにもしぶとい。

その秘密こそ、SLにある。ソウルを本体とする者達は、繋がってさえいれば肉体を操れる。肉が裂け、骨が断たれ、薄皮一枚でかろうじて繋がっているような状態でも、その薄皮さえあればなんら変わらぬ肉体として扱えるのだ。

故に奴隷騎士の捨て身とは、薄皮一枚に傷を止めるのではなく、薄皮一枚を残して攻撃を受ける事。どれ程の攻撃を受けようと決して体の繋がりを断たず、ソウルを頼りに戦う悍ましき不死こそが、奴隷騎士だ。

その業を盗み、受け継いだ“灰”もまた、しぶとい不死の一人だ。

『白骨のミノタウロス』に貫かれた折、体が僅かな肉でかろうじて繋がった状態であったのも意図した事である。

だから腕が潰れた程度、何の問題にもならない。肉が働かずとも、骨の支えが無くとも、ソウルを主とする「灰」は全盛の力を振るえるのである。

「成程のう、そういう絡繰からくりがあつたか。であれば、仮に儂らがソウルレベルを用いたとすれば、肉体に縛られなくなるという事か？」

「それは分からん。『神の恩恵フアルナ』によって昇華した肉体がどれ程ソウルと釣り合うかによるだろう。所詮は、どちらかに比重を置くかの話だ。魂ソウルと肉体は表裏一体、どちらを失くしても、人は人ではいられない」「ふーむ……この辺の解釈はリヴェリア達に投げるか」

「ちよつとガレスー、いつまで話してんのさー。あたし早く戦いたくてうずうずしてるんだけどー」

「おお、すまんすまん、ティオナ！」

ぶーたれたティオナに催促されたガレスはのっしのっしと去つていく。入れ替わるようにやって来たティオナは「灰」に快活な笑みを向けた。

「えへへー、ねえねえ「灰」ちゃん。「灰」ちゃんつてさ、アイズにアスカつて呼ばれてるよね？」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「あたしも「灰」ちゃんの事、アスカつて呼びたいなーつて！ あたしの事はティオナつて呼んでいいからさ！ ねえねえ、どう？」

「貴公がそれを望むなら、そうすればいい」

「やったー！ ありがとー！ それじゃあアスカ、やっちゃおつかー！」

二つの特大剣を柄で繋げたような規格外の得物、大双刃ウルガをブン回すティオナは心底楽しそうに笑っている。戦いを本能とするアマゾネスの少女は、しかし血と暴力の凄惨さを感じさせない太陽のような笑顔を咲かせていた。

それと向き合う「灰」は無言のまま、《グレートソード》をソウルより取り出す。平凡に構える幼女に満面の笑みで笑いかけて、ティオナはフィンフィンの合図も待たず「灰」に突進した。

「行つくよおおおおおおおつー！」

大双刃ウルガを回転させ、ティオナは遠慮なしに「灰」に叩きつける。風

を巻き上げて迫る大双刃を、灰は精密動作で撃ち落とし、無秩序に振るわれる大双刃と打ち合う。

それはアイズとの戦いのような防衛優先ではなく、ガレス戦で見せた攻撃的防御だ。相手の攻撃にこちらの攻撃を合わせ、弾く。その精密性と繊細さを要求される行動を、灰は特大剣という巨大な得物で実現させていた。

「すごいすごい！ 私の^{ウルガ}大双刃がこんなに防がれたの、初めてだよー！」

楽しそうに笑うティオナは更に^{ウルガ}大双刃を加速させる。段々と火がついてきたアマゾネスの少女は、次第に加減を忘れていった。

今のティオナが出せる最大の力で^{ウルガ}大双刃は振るわれる。それでも灰の『経験』を上回る程ではない。ティオナより巨大な武器を扱う敵も、得物を高速で振るう敵も、灰はよく知っている。

だが、ティオナのような特殊な武器を使う敵はそうはいなかった。珍しい型の相手ではある。

「……」

だからか、灰の中では少しばかりの興味が湧いた。しばらく打ち合いながら考えていた少女は、やがてその興味を確かめる事にする。

《グレートソード》を肩越しに構え、灰は大振りの一撃を^{ウルガ}大双刃に見舞った。衝撃に重点を置いた重閃は「うひゃあっ!？」とティオナの手を痺れさせる。

その隙を狙い、灰は特大剣を器用に操り^{ウルガ}大双刃を絡め取る。そのまま『筋力』の全てを引き出し、《グレートソード》ごと^{ウルガ}大双刃を上へ^か搗ち上げた。

「あっ!？」

宙を舞う二つの重量武器。それを驚いた目で見上げていたティオナは、素早く飛んで片方の武器を掴んだ。灰を目撃する。

降り立つ灰髪の少女は、ゆっくりとティオナへ振り向く。その小さな手には、特大剣を二つ繋げたような規格外の武器——^{ウルガ}大双刃が収まっていた。

「あー!? 私の大双刃返してよー!」

「済まん。少し、使ってみたくなった」

《グレートソード》をキャッチしたテイオナがぷんすかと抗議の声を上げた。それに謝りつつも、灰は「大双刃を手放さない。」

「試してみよう。それが済めば、貴公に返す」

「もおー! ちよつとだけだからね!」

消極的に受け入れたテイオナが《グレートソード》で斬りかかる。

灰は両刃剣の要領で大双刃を操り、応戦するのだった。

「……すごいね。あの大双刃を『力』だけじゃなく『技』で扱っている」

灰とテイオナの戦いを眺める観戦者達の一人、フィンは感心したように呟いた。団員の武装まで全て把握している小人族の首領は、大双刃がどれ程の超重量であるか知っているし、テイオナの普段の扱いても目にしている。

力任せに振るうアマゾネスの少女と違い、灰は明確な『技』を駆使して戦っていた。特に柄を軸に大双刃を高速回転させ勢い良く薙ぎ払う一撃は、テイオナの二つ名である【大切断】のお株を奪う【戦技】である。

「テイオナにもいい刺激になるだろうね。彼女は些か力押しに頼り過ぎる。悪いとは言わないけれど、これを機に『技』を知るのもいいんじゃないかな」

「儂はそのままが良いと思うがのう。テイオナの単純さは立派な長所じゃ。生半可に技を齧るより、強みを生かした方が良い。技巧派の相手に対する経験を積むという意味では儂も賛成じゃがの」

「それはテイオナが決める事だ。我々は助言に留めるべきだろう。……それにしても巧いな、アスカは。動きは平凡だが、戦場の制御が凄まじく巧い。もはや未来予知と言っている程に予測に長けている」

「シー……あれは『経験』、かな。既に先を知っている動きだ。アイズの時もそうだったけど、おそらく一度か二度見た動きは即座に把握してしまうんだろう。つまり、灰への対抗手段は見た事のない『未知』、という訳だけど……途方もない『経験』を積んでいるだろう彼女を上回る『未知』なんて、そうそうないだろうね」

フィンは苦笑しつつ、観戦を続ける。その推測は的確だ。フィンを始めとした第一級冒険者達の観察眼は、“灰”の特性を確かに見抜いていた。それは彼らが長年培ってきた技能であり、英雄足り得る証左でもある。

初見の相手に対する正確無比な観察力。それは『経験』のみを武器とする“灰”が決して持ち得ないものだった。

「——そうだ、ガレス。さつき“灰”と長く話していたけれど、何を話していたんだい？」

「ん？ ああ、ちよいとソウルレベルについて聞いておった。内容は……儂がとやかく言うより、お主らに判断して貰った方が良いな」

慣れない得物に苦戦するテイオナを眺めつつ、ガレスは説明する。それが終わる頃にテイオナは一旦敗北し、双方の武器を戻して仕切り直していた。

「……ソウルの強化による肉体と魂のバランス、か……正直、僕にはさっぱりだ。リヴェリア、君には理解できるかい？」

「難しいな……ことソウルに於いてはお前達より一日の長があるだろうが、私もまだまだひよつ子だ。ただ問題を挙げるとするのなら、ソウルの強化によって変質した魂を神々がどう判断するか——それによろと考えられる」

「ああ、成程……『転生』か」

魂に関する最も身近な話題にフィンは思い至る。『転生』。人類が死した時、魂は天に昇り、神々の手によって浄化され新たな命となる。

それは下界の生によって穢れた魂が輪廻に還るために必要な行為だ。それにソウルレベルがどのように作用するか分からない。死後のお話であるため極論、今死ぬつもりのない彼らには関係ない話ではあるが、無視できない問題でもある。

「……やつぱり、ソウルレベルは今結論を出すには早すぎるかな。もっと情報と検証が必要だ」

「同意する。既に魔術を習っている私が言える事ではないが、振り返ってみると拙速な判断を下してしまった。これはひよつとしたら、『転生』に支障をきたしてしまうかも知れないな」

「ガツハツハツ！　すぐに思い当たる事がそれとは、歳を食ったもんじやな、リヴェリア！　——お、おい、そう睨むな!?　冗談じゃ、冗談！」

母親ママの眼光を放つリヴェリアにガレスは慌てて弁明する。ハイエルフとドワーフの間で思考するフィンは、ふとテイオナと「灰」の戦いが終わっている事に気付いた。

「あくあ、負けちゃったよ。負ける気全然なかったんだけどな」

「ガレスでも負けたのに何言ってるのよ。まあ、初めから負ける気で戦うなんてアマゾネスあまぞんらしくないけど」

「だよねだよね！　でも楽しかったー！」

「……ほんつと単純ね、あんたは」

「えへへー。またやろうね、アスカ！」

「気が向いたらな」

落ち込みつつもさっぱりした笑顔を咲かせるテイオナにテイオネは呆れ、「灰」は適当な返事をする。それを眺めてフィンは、断片的な情報を繋ぎ合わせるために彼女達に近寄った。

「灰」。一つ、不躰な質問をしてもいいかい？」

「何だ？　フィン・デイムナ」

「君の《スキル》についてなんだけど——」

フィンの質問に、「灰」は手短かに答える。それを聞いた小人族バルウムの首領は、ソウルレベルに関する当面の方針を決定するのだった。

「結論から言おう。【ロキ・ファミリア】としては、ソウルレベルの強化をしばらく見送りたいと考えている」

【ロキ・ファミリア】野営地、本営の天幕内。

ラウル達と別れ、幹部勢と「灰」のみとなったメンバーを前に、フィンは断言した。

「フィン……い！　どうして……？」

真つ先に反応したのはアイズである。『指輪』の力、「灰」との戦いを通じてソウルレベルの確かな強さを知った【剣姫けんぎ】は、今すぐいで

も自身のソウルを強化するつもりだった。それを見送ると言ったフィンに、懇願にも似た疑問を投げかける。

「フィンはその手を冷静に受け止め、指を三本立てて説明する。理由は三つある。」

一つはソウルレベルに関する知識不足だ。僕らは今、ソウルレベルという『神の恩恵』^{フアルナ}によらない力を得る手段を知った。けれどそれがどんな利益、不利益を齎すか^{メリット、デメリット}もたらさ

力は得られるだろう。しかし代わりに取り返しのつかない不利益^{デメリット}を抱えてしまつたらまるで意味がない。試すにしろ、相応の覚悟が必要だ。少なくとも僕は君達を実験台にするつもりはない。

二つ目はソウルレベルのアンバランスさだ。ソウルレベルは任意のアビリティを自由に上げる事が出来る。有り難い話ではあるけれど、相応の危険もあると推測される。

ガレスを例に出そう。ガレスは皆知つての通り、『力』『耐久』に優れている。そのガレスが『筋力』のみにソウルレベルを振った場合、極端な話、『力』だけがLv.16という事になるだろう。

何事もなければそれでいいけれど、もしその『力』に『耐久』が追いつかなかつたら……最悪、自らの『力』に耐え切れず自壊する、なんて事になりかねない」

指を二つ折り、フィンは懸念を口にする。それを聞けば成程、そうだろうと思える内容だ。この中では一番知識に疎いティオナでも頷いている。

しかしまだアイズの瞳に納得はなかった。強くなれるなら——悲願を叶えられるなら、そんな程度の危険性は飲み込める。確固たる意志を宿す金の少女に、フィンは最後の理由を告げた。

「そして三つ目——ソウルレベルによる『神の恩恵』の無効化。それが最も懸念される事項であり、僕が見送る事を決めた理由だ」

『!?!』
フィンの言葉にガレス、リヴェリア、^{フアルナ}“灰”を除く面々が驚愕する。

『神の恩恵』の無効化。その意味するところは、積み上げてきた『成長』と『偉業』の否定に他ならない。何故そんな結論に到つたのか、

固唾を吞んで続きを待つアイズ達にフィンは口を開く。

「これは『灰』の『ステイタス』、正確には《スキル》による所が大きい。既に許可は取っているから言うけれど、『灰』の持つ《スキル》は一つだけ——《暗い魂》^{ダークソウル}だけだ。

その効果は不死となる、死亡する度に人間性を喪失する、致命傷を無視して戦闘続行可能。

そして最後——【経験値】^{エクセリア}獲得不可だ」

「【経験値】獲得不可、ですって……!?!」

信じられないフィンの台詞にティオネが呻くように言った。その意味する所は『神の恩恵』^{ファルナ}が成長しないという事だ。

それはいくら『成長』を積み上げても、『偉業』を果たしても、何の成果もないのと同じ。生誕^{はじまり}から終末^{おわり}まで、その生涯に何一つ変化がないという証だ。

ティオネはその時、初めて真の意味で『灰』に畏怖したかも知れない。『神の恩恵』^{ファルナ}を受けながら、不利益^{デメリット}という言葉では到底収まらない厄災^{ベナルティ}を被っているのに、平然としている灰髪の小人族^{パルウム}に。

ティオネが戦慄している横で、アイズはまだ納得していなかった。【経験値】^{エクセリア}獲得不可については知っている、アイズは彼の少年が『白骨のミノタウロス』を倒した時、『灰』の背を見ているのだから。

しかしそれは、あくまで『灰』^{アスカ}の話。自分には関係ない、とアイズが考えていると——落雷のような思考が突如として、アイズの全身を駆け巡る。

それは、とある可能性。愕然とした表情を露にするアイズにフィンは目を細め、少年にしか見えない唇を開いた。

「そうだ、アイズ。『神の恩恵』^{ファルナ}はあくまできつかけ、その本質は神々ささえも認める下界^{ほくら}の『可能性』だ。

けれどもし。ソウルレベル、ソウルの強化という『神の恩恵』^{ファルナ}に頼らない力を得たとして。それで今の僕らより遥かにLv.の^{レベル}高いモンスターを打ち倒したとして——果たして『神の恩恵』^{ファルナ}は、それを『偉業』と認めるだろうか?」

『——!?!』

その言葉で、アイズを始めとした幹部でも若手の者達は理解する。
『神の恩恵』。それは神々から与えられる力ではなく、あくまでも人
類の芽吹かぬ『可能性』、その者が辿り着いたかも知れない『英雄』へ
の道を花開かせるものだ。

『神の恩恵』は、積み重ねた【経験値】と『偉業』によって肉体を昇
華させる。それは極論、『神の恩恵』がなくとも到達し得る境地だ。
『神時代』以前の『古代』に存在した『本物の英雄』達は、まさしく人
類の『可能性』の体現者である。

ソウルレベルという知識を得た今では、『神の恩恵』はただ力を得る
ための手段の一つに過ぎないかも知れない。だが
「ロキ・ファミリア」は、冒険者達は、『神時代』の全ての人々は
『神の恩恵』を宿し、成長する事で非情なる現実を超克し、千年を乗り
越えてきた。

その千年の重み、千年間人類を助け続けた『神の恩恵』への信頼が、
『神時代』の人々には刻み込まれている。

対しソウルレベルは、[〃]灰[〃]しか知らない。『火の時代』という途方
もない遠い時代の、不死のみが求める事を許された禁忌の業。それを
用いれば力が得られると分かっている。『神の恩恵』と引き換えと言
われれば誰もが躊躇するだろう。

ソウルレベルによる『神の恩恵』の無効化。その可能性があると
知った面々は、ソウルの強化に対する渴望が一気に引いていくのを感じ
た。

それは『未知』に挑む冒険者といえど、あまりにも欲望を誘う、け
れど危険な『未知』の世界。抗い難い力がそこにあると知っても、そ
のために自分の信じてきた全てを投げ捨てられる程、彼らは愚かでは
なかった。

沈黙する一同。十分に考えが巡ったと見たフィンは、改めて判断の
理由を説明する。

『神の恩恵』の無効化、というのは流石に言い過ぎかもしれない。け
れどソウルレベルによるソウルの強化をってしまったら最後、これか
らの『神の恩恵』による『成長』を捨てる事だと僕は考えている。

勿論、『神の恩恵』による『成長』とソウルレベルによる強化、どちらが最終的に上かは僕にも分からない。もしかしたらソウルレベルの方が、『神の恩恵』よりずっと強い力を得られるかもしれない。けれどソウルレベルには、明確な上限がある。これは「灰」に確認したから間違いない。少なくとも「灰」の知る限り、ソウルレベルのアビリティが99を超える者は『火の時代』に一人としていなかったそうだ。

対し『神の恩恵』は、限界が見えない。神々が認める人類の『可能性』、それを体現させる『神の恩恵』は、僕らが諦めない限り『成長』し続ける事が出来る。

これは『神の恩恵』とソウルレベル、どちらがより優れているかという話じゃない。どちらにも利点はあるし、欠点もあるだろう。ただ僕らは『神の恩恵』しか知らないし、それを簡単には手放せない。

だから僕らは、ソウルレベルについてもっとよく知るべきなんだ。それがどんなもので、どんな利益が得られて、どんな不利益を背負うのか。それを知り、よく考えてから決断しても、僕は遅くないと考える」

その言葉を最後に、フィンは説明を締め括る。後はもう、個人の問題である。

たとえば【ロキ・ファミリア】としてソウルレベルによる強化を禁止したとしても、それを望むなら、「灰」は何の躊躇もなく、それをやってしまうだろうから。

「……」

黙りこくる一同の中で、アイズが最も葛藤していた。力を渴望する少女は、ソウルレベルの力を諦め切れない。心の中の幼女と一緒に、考えて、考えて——やがて少女は、「灰」を見る。

「アスカ……私も、アスカと同じように……ソウルを、強化していいのかな……」

「知らん」

嘆願にも似たアイズの呟きを、「灰」はばつさり断ち切った。聞くだけ話を聞いていた不死は、つらつらと己の所見を述べる。

「フィンの話は、あくまで推測だ。事実がどうであるか私は知らんし、知る者もないだろう。」

私から言えるのは、SLとは即物的な力である、という事だけだ。私のような卑小で弱い小人すら、英雄の如き力を手にする。それがSLである。必要なソウルさえあれば、そこらの赤子でさえ貴公らを超える力を持つ——そんなものが尋常であるわけがない。

SLは、歪みを生む。ソウルの強化は『火の時代』において、人から外れ、魔性に近づく禁忌の業とされていた。故に求めるのは、不死のみだった。

不死とは、人の世界では呪われた化物である。自ら進んで化物に成ろうとするなど——それこそ人では、在り得まい」

「……！」

その言葉が、トドメだった。『灰』を見ていた金の少女は目を見開き、顔を伏せて沈黙する。

ソウルレベルを用いれば、ソウルを強化すれば、化物になる。その言葉はアイズの心に深く突き刺さった。

アイズは度々葛藤している。自分の中に燃える『黒い炎』。怪物を殺し、殺し、殺し、殺し尽くして、どんな姿になっても悲願に辿り着こうとするドス黒い執念。

それに向き合う度に、己の辿った足跡を振り返る度に、アイズは自問する。幾万のモンスターを斬り裂き、『迷宮の孤王』モンスターレックスすらも斬り捨て、死の淵に立って生への安堵よりもまだ戦える事を喜ぶ自分は、モンスターと何が違うのだろうか。

それでもアイズは、自分がモンスターでないと知っている。だってアイズは、人間^{ヒューマン}だから。その心が『黒い炎』に飲み込まれない限り、人で居続けられるから。

それに、あの子が——ベル・クラネルが、アイズの『黒い炎』を消してくれる。あの白い笑みが、純白の冒険が心に在り続ける限り、アイズは決して化物にはならない。

けれども。ソウルレベルは、人の魂^{ソウル}を化物に変えてしまう。肉体^{うつつわ}は人でも、魂^{なにかみ}は怪物。そんな存在を、果たして人と、呼んでいいのだから

うか。

「……」

アイズには分からない。どんなに考えても、答えは出なかった。そんな、足元で小さな少女アイズが泣いているような、少女の頭に。

ポンと、背伸びをした「灰」の手が、冷たく差し置かれる。

「あまり悩むな、アイズ」

「――アス、カ……？」

アイズは弱きな眼差しで下を見る。

凍てついた太陽のような瞳。生まれより伸びる灰色の髪。白く美しい、神の如き美貌の少女。

その美しい顔かんほせを無情で彩る「灰」は、古鐘の声を擦り鳴らす。

「貴公は、貴公の望む通りに生きればいい。」

元よりそれは、誰にも邪魔できぬ事。何を選ぶも、何を望むも、全て貴公次第だ。

誰もが先の見えない未来を歩き、足跡を残す。その正誤は遠い先で振り返り、そこで初めて分かるものだ。

だから悩むな。前へ進め。たとえその道が険しく、茨に覆われた道だとしても。

――それでも果たしたい悲願ねがひがあると誓ったからこそ、貴公はここに
あるのだろうか？」

「――！」

「灰」の言葉に、アイズはハツとする。そうだ、自分の原点、アイズ
の心の咆哮さけび。

強くなりたい。

もう誰も、喪わないために。

その想いを吼える限り、アイズ・ヴァレンシユタインは間違っ
てな
んかない。

「……アスカ」

「何だ？」

「――ありがとう」

自分の頭を撫でる手を取って、アイズは微笑む。それは【劍姫けんぎ】と

称賛よばれ、「戦姫せんき」と綽名あだなされる冒険者に似つかわしくない、年相応の少女の笑みだった。

その微笑を眺め、コクリと頷く「灰」を見て、アイズは思う。先程思った、肉体うつつわが人でも魂なかみが化物ならば、人と呼んでいいかどうか。

もしその答えが人と呼んではいけないならば、間違っているとアイズは思った。

だってアスカは、こんなにも冷たいのに温かい。アスカの言葉は、アイズの心を照らしてくれる。

そんなアスカが、ソウルレベルを極めた不死だとしても。

アスカはきつと——誰みんなかと変わらない、『人』なのだ。

この時のアイズ・ヴァレンシユタインはまだ、そう信じる事が出来た。

18階層、『夜』。

天井の水晶の発光が星屑ほどに弱まり、暗い帳が降りた『迷宮アンダーリゾートの楽園』。

そこに茂る森林の中、焚火と『魔石灯』の光が所々に灯る野営地の一角で、「灰」はリヴェリアと向き合っていた。

「——フム。これで、ウーラシールの黄金の魔術は全て覚えたか。流石だな、我が弟子よ」

「いや、お前の教えが良かっただけさ。我が師よ」

「灰」の平坦な物言いにおどけるようにリヴェリアは答える。自分の発言が滑稽だったのかクスクスと笑うハイエルフの王女に、「灰」はコテンと首を傾げ、スクロールを床に広げる。

野営地に立てられたリヴェリア専用の天幕。吊るされた魔石灯の光が漏れる内側で、「灰」は魔術講座を開催していた。

講義対象はリヴェリア・リヨス・アールヴただ一人。しかしこの場にはリヴェリアと「灰」の二人だけでなく、他の面子もいる。

非公式名称『妖精フェアリー・フォース部隊』——ロキが名付けようとしてリヴェリア

に却下され、けれど隊員がこっそり呼称しているエルフ部隊——の隊員が、リヴェリアの後ろにずらりと立ち並んでいる。

その鋭い視線は、リヴェリアが師と仰ぐ小人族——バルウム“灰”に向けられていた。

((じ)——(つ))

「……」

自身に突き刺さる視線の数々を、“灰”は普通に無視する。あくまで“灰”の目的はリヴェリア一人、他は全て些事であった。

「——あ、あのっ!」

そんな中、一人のエルフが声を上げる。チラリと銀の半眼だけを向ける“灰”の瞳に映ったのは、『妖精部隊』の新米隊員、レフィーヤ・ウイリデイスであった。

「や、やっぱりリヴェリア様を弟子と呼ぶのは僭越だと思っんです! せめて講師として礼儀正しい振る舞いと、何より敬称をつけて頂かないと……!」

「レフィーヤ!」

「ひゃうっ!」

王族妖精を尊ぶエルフらしい価値観で頼み事をしてくるレフィーヤをリヴェリアは即座に叱咤した。一言二言叱責を重ねるハイエルフの王女は、ふうと重い息を吐き出した後、“灰”に頭を下げる。

「私の内弟子が済まん。謝罪する」

「構わんよ。雑音程度ならば私も許容する」

どうでも良さそうに受け答える“灰”は魔術講座を続行する。その不遜ともいえる態度がエルフ達のプライドに障っているのだが、どうでも良かった。

彼女らは所詮、リヴェリアの内弟子。リヴェリア以上の成果を“灰”に齎す事はないであろうから。

試してみなければ分からないが、試すつもりはない。労力に対するリターンが割に合わないであろうし、何より——

「あ、あの!」

“灰”の考えを断ち切ったのは、またしてもレフィーヤであった。

リヴェエリアに睨まれ小さくなるエルフの少女は、けれど「灰」と向き合い、はつきりと言う。

「私にも、魔術を教えてくださいませんか!？」

「……断る」

その意外な要求に少しだけ困惑した「灰」は、先の考え通り試すつもりはないと切って捨てた。シユンと火が消えたように小さくなるレフィーヤ。それを眺め、内弟子達に説教をすべきか悩んでいるリヴェエリアに「灰」は尋ねる。

「リヴェエリア。貴公は内弟子らに魔術を教えていないのか?」

「何?」

「魔術だ。私は貴公に魔術を伝授するが、その後を制限したつもりはない。秘匿するも拡散するも、貴公次第だ。」

だからこそ、私は内弟子ら程度には既に開示し、教授しているものと思っていたのだが」

「……………教えられないんだ」

「何だと?」

「灰」の質問に、リヴェエリアは絞り出すような声で答えた。眉間に力を込めるハイエルフの王女は、苦悩を振り払うように顔を振り、翡翠色の瞳を「灰」に合わせる。

「私では、魔術を伝授する事が出来ない。いや、魔術だけでなく、お前から習った『火の時代』に関する全てが教えられない。竜の二相、『記憶スロット』、果ては初歩的な魔術ですら……………私は何も、伝える事が出来なかった」

「リ、リヴェエリア様のせいなんかじゃありません!? 私達の不甲斐なさが悪いです!」

「そうですね! 高貴なお方の責任などと、そのような!」

「リヴェエリア様には何の問題もありません!」

エルフ達が口々に擁護するが、今のリヴェエリアには虚しく響く。それらを観察して、「ふむ」と可愛らしく声を零す「灰」は、思い当たる節を言葉にした。

「やはり、貴公らは存外ソウルに馴染まない。私の所感は正しかった

ようだ」

「……どういう意味だ？」

「どうもこうもない。リヴェリア、貴公の発想は逆だ。ソウルに関する事、特に魔術は学問であり、理力に長けた者ならば学ぶに易い領域である。故に理に聡い貴公らは、本来何の問題もなく学べる筈だ。

だがそれは、あくまでソウルへの親和性があつてこそ。ソウルに馴染まないのならば、必然ソウルを操る魔術もまた価値無き学問に成り下がる」

「つまり、どういう事だ」

「貴公の内側に問題を求めても解決はしない。この場合、求めるべきは外側だ。即ち——ソウルへの親和性を持たない貴公に魔術を教えられる私にこそ、何らかの特別性がある」

「——！」

リヴェリアは瞠目し、翡翠色の視線を「灰」に向ける。灰髪の小人族バルウムは肩越しに自分の背中を一度見て、古鐘の声を擦り鳴らす。

「魔術にはあまり関係はないが、契約だ。私が『神の恩恵』フアルナによつて得た魔法について教えておこう。

私は【魔術】と名のついた魔法を習得している。その効果は『才能により継承可能』。つまり、相応の資質は必要だが、他者に【魔術】を継承させるのが私の魔法なのだろう」

「継承魔法……魔法アルテナ大国には代々同じ魔法を扱い、研究する一族がいると聞いた事はあるが、その類か？」

「詳しくは知らんし、興味が無い。言えるのは、貴公に魔術を教える時、私は確かに魔法を使つていたという事だけだ。

念のため、のつもりだったんだがな。貴公は『理力』に優れているだろうと当たりをつけていたし、実際に驚嘆すべき速度で魔術を習得している。事実はともかく、私は保険のつもりで私の魔法を使つていた。

だがそれこそが、魔術継承の枢要だったとは、私も見る目がない。ソウルに馴染まぬ貴公らが私なしに魔術を得られるのは、果たして何時になることやら」

「……その口振りから察するに、私に教えた時点で魔術を秘匿するつもりはなかったのだな」

新しいスクロールを空中から取り出す「灰」に、目を細めたりヴェリアが質問する。返ってきたのは肯定だった。

「ああ。何事も、何時かは知れ渡るものだ。真に秘密を守りたければ、近づく者皆殺すしかない。」

私にそのつもりはないし、魔術を私のみに留めるつもりもない。誰も彼もが「ソウルの業」を知り、扱う。そんな時代が何時か来るだろう」

「お前は、それが何時だと考えているんだ？」

「さあ？ 千年くらい後じゃないか？」

最後は非常に適当な回答だった。興味がないと言わんばかりの「灰」は、新しいスクロールを広げていく。そんな師の様子を眺めながら、リヴェリアは苦笑していた。

不死にとつての千年は短いかもしれないが、今を生きるリヴェリア達の千年は長い。少なくともリヴェリア達が生きている間は広まらないだろうと予想している「灰」に、リヴェリアは魔術を教えてくださいた事を感じていた。

「さて、リヴェリア。貴公の魔術講座もそろそろ大詰めだ。これより貴公に魔術の源流、白竜シースが生み出し、「ビッグハット」ローガンが体系づけた魔術——『結晶の秘法』を教授しよう」
「！」

「灰」の言葉に、リヴェリアは姿勢を正す。『結晶の秘法』——それについては「灰」の口から度々聞き及んでいる。

『火の時代』における、魔術の最高峰。かつての王であった神々の武器に比肩するとさえ謳われる魔術は、冒険者として、魔術師としてのリヴェリアの力量を高みに導くだろう。

リヴェリアは真剣な面持ちで「灰」の言葉を待った。床に広げたスクロールを今一度見直していた「灰」は、凍てついた太陽のような瞳にリヴェリアを映し、告げる。

「服を脱げ、リヴェリア」

瞬間、世界が凍った。

「……………今、なんと？」

「服を脱げと言った。一糸残さず、全裸となれ。『結晶の秘法』、白竜シースの偉大なる知見に触れるのならば、世俗の枷を外す思考、『裸の探求』が必要だ」

「……………」

何とか再起動したりヴェリアだったが、要求を繰り返す「灰」の言葉に完全に硬直する。呆然とするハイエルフの王女。平然と座る灰髪の小人族^{バルウム}。時間だけが過ぎていく師と弟子の静寂は、凍りついた世界が溶けた——否、爆発した瞬間に吹き飛んだ。

「なっ、なっ、なあっ!? なんて不敬な事をおくくくっ!?」

「不敬です、不遜です、不躰の極みですっ！ 恐れ多くもいと高き貴いお方に服を脱げなどと破廉恥なっ!?」

「苟もリヴェリア様に師と仰がれているというのに、それを利用して^{いやくく}邪な事に及ぼうなど言語道断っ！」

「まして貴方はリヴェリア様と同じ性別！ ああなんて倒錯的な……!?!」

「私達の目の黒い内は、リヴェリア様の純潔に指一本触れさせませんっ!?!」

「そうです!」「その通りですわ!」「この不敬者っ!」

「不敬! 不敬! 不敬!」

動かないリヴェリアを守るように取り囲む『妖精部隊^{フェアリーフォース}』の隊員たち。エルフが敬愛する王族妖精^{ハイエルフ}に対する「灰」の傲岸不遜な態度に鬱憤が溜まっていた彼女らは、ここぞとばかりに不敬不敬の大合唱である。

しかし「灰」は小動^{こゆるぎ}もしない。小娘の集団に詰られた程度で「灰」の鈍い感性は刺激されないし、何より彼女らが言っている事が理解できなかつた。

多感な時期である誇り高い乙女達の妄想は、今の「灰」には早すぎるのだ。

「——騒々しいね。何かあったのかい？」

『団長!?!』

そこへ現れたのが、フィンである。『夜』にも関わらず外から丸聞こえなくらい騒ぐエルフ達へ苦情の申し入れの傍ら、様子を見に来ただ。だ。

無論、リヴェリアの天幕に男身一つで入るつもりはなかったもので、後ろにはティオネが同行している。入り口のカーテンを手で開けるだけで中にも入っていない。彼は紳士だった。

「団長!?! これは、その!?!」

「いいよ。事情は君達の大きな声で大筋は掴んでいる。おそらく、灰が突拍子もない事を言ったんだろう」

「そ、そうです!?! この小人族バルムムときたら、リヴェリア様にとんでもない不敬を——!?!」

「だがそれは、灰」とリヴェリアの間だけで完結すべき問題だ。彼女らは僕らの知らない【魔術】の師と弟子、突拍子もない事だつてする必要があるんだろう。

何より、灰の厚意で君達は同席を許されている。如何に君達がリヴェリアの内弟子とは言え、そのリヴェリアが師と仰ぐ存在には払うべき敬意があるんじゃないかな?」

「くっ……!?!」

フィンの正論にエルフ達がたじろぐ。やれやれとフィンは首を振り、エルフ達へのフォローも含めたこの場を丸く治める言葉を発しようとして。

その前に、何やら考え事をしていた灰が、口を開いた。

「成程。貴公らの言い分はよく分かった。私も脱げばいいのか」

「……………え?」

その、誰のものかも分からない声が落ちた瞬間。

灰はソウルの光に包まれ——

「これでよかろう」

——気付けば全裸となっていた。

再び凍りつく世界。一瞬の間を置いて打ち破ったのは、真っ赤になつたレフィーヤの悲鳴だった。

「きゃああああああああつ!!?　なんで貴方が裸になるんですかああああああああ!?!」

「?　貴公らはずまり、リヴェリアだけが脱ぐのは不公平だと言いたかったのだろうか?」

「そんな訳ないでしょう!?!」

「ねえ団長?　見ました?　見ましたよね?　私という女がいるつてのにあんな『灰』の裸に目を奪われてましたよね?」

「何を言っているか分からないなティオネ。僕は丁度ガレスと話すために外を見てるから中で何が起こっているかさっぱりなんだ」

「外にガレスはいませんかよ団長???」

無表情のティオネに詰め寄られるフィン。とんだとぼっちりを受ける小人族バルウムの首領に気付かないエルフ達は突如全裸となった『灰』——同性でも真つ赤になるほど整った造形の体——へ羞恥に苛まれながら抗議する。

「何をどう解釈したら私達が脱衣を要求した事になるのですか!?　信じられませんか!」

「なんだ、違うのか」

「違うに決まっています!　と、というか、さっさと服を着てください!?!」

「私はこのままでも構わないが」

「!!私達が構うんです!!」!!」

異口同音に詰め寄られて『灰』は小さく溜息をつく。そして青白いソウルの光を纏った。それにエルフ達は安堵し、ティオネを宥めたフィンは視線を戻す。

「そら、これで良いだろう」

そこには、裸に鉄兜を被った『灰』の姿があった。

「——なんで裸のままなんですかあああああああああつ!?!」

「?　よく見ろ、ちゃんと鉄兜を被っている」

「頭以外何も隠せてないじゃありませんか!?!」

「どうでも良からう、そんな事は」

「どうでも良い訳ないでしょう!?!　というかなんで鉄兜被ったんです

か!？」

「——裸に鉄兜は様式美だろうか？」

「そんなっ！ 様式美はっ！ ありませええええええええええんっ?!」

レフィーヤの叫びに「灰」はコテンと首を傾げるだけだった。ちなみにフィンは「今見ましたよね完璧に見ましたよねガン見してましたよね!? そんなにあの「灰」が気になるんですかあの大きな胸が好きなんですかだったら私の胸をいくらでも見てくださいい団長才オオオオオオツ!!」と猛追するティオネから全力逃走していた。騒動の発端となったりヴェリアは、呆然とした表情でずっと固まったままだった。

「灰」がやってしまった不死の様式美。それが矯正されなかったのは言わずもがな、大神のせいである。

「ヤバイと思っただんじやが浪漫を抑えきれなかった」——「灰」について語る時、大神は至極真剣な面持ちで言った。大量の鼻血を垂らし、その瞳は何処までも真っ直ぐに澄んでいたという。

18階層、『朝』。

沈黙していた天井の水晶群に光が戻り、あたかも早朝のように森が照らされていく。その中でアイズは、地上での日課である剣の素振りを行っていた。

偽りの陽光に舞い散る木の葉を斬り裂く《デスペレート》。しばらく素振りを続け、二週間ぶりの日課を終えたアイズは、ふとこちらに歩いてくる小さな影に気付く。

「アスカ……?」

「ああ、アイズか」

「どうしたの……?」

「迎えだ」

言いながら、アイズの横を素通りするアスカ。灰髪の後ろ姿を視線で追いかけるアイズは、何となく同行する。

「迎え……?」

「ああ。そろそろ、辿り着く頃だろうか。私が赴くのは当然だ」
「……？」

疑問符を浮かべるアイズにアスカは説明を重ねない。テクテクと歩いていく小人族バルウムについていくと、やがて17階層に通じる洞窟の前に到着する。

「オオオオオオ」

「！」

洞窟前の開けた草地で立ち止まるアスカにアイズも倣なぞっていると、その咆哮は鳴り渡った。眼前の洞窟の奥より響いてくる咆哮の主は『ゴライアス』——二週間の次産間隔インターバルを経て現れた階層主である。

次いで轟く、破砕音。断続的に響くそれは『ゴライアス』が暴れている証だ。おそらくは17階層最奥の大広間に侵入した冒険者を襲っている。

行かなければ——アイズは草地を踏み締める。通常、階層主は『リヴィラの街』の冒険者総出で討伐する不文律きまりがある。アイズのような第一級冒険者はともかく、それ以下の冒険者達が安全を取るならそれくらいの戦力が必要だ。

ダンジョン探索で見られる数人のパーティ単位で挑むには無謀に過ぎる。故に同業者を助けるため駆け抜けようとしたアイズは、洞窟の奥から転がり落ちるように走る者達に気付いた。

「え——？」

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……!!」

現れたのは、人間の男性二名と小人族バルウムの少女一人。息も絶え絶えに肩を上下させる彼らの中に、見覚えのある少年がいる。

薄汚れた白い髪。震える手に握られた漆黒のナイフ。こちらに気付き、驚愕に見開かれる深紅ルベライトの瞳。

「ハアツ、ハアツ……ア、アイズさん!? アスカ!?!」

ほんの二週間前に『冒険』をした少年——ベル・クラネルは、何度も後ろを振り返りながら彼女らの名前を呼んだ。予想し得る筈もない迷宮ダンジョンの再会にアイズが驚愕する側で、灰髪の幼女は進み出る。

「よくぞここまで辿り着いた、ベル。リリルカ、ヴェルフも無事のように

だ」

「う、うん、アスカのおかげで何とか来れたけど……えっ!? どうなってるの!？」

「説明は後だ。まずは休め。とりあえず、ここは安全だからな」

アスカの言葉を聞いて「どうなってるんだ……」「アスカ様の非常識な力ですよ……」と呟きながらリルカとヴェルフがへたり込む。ベルも痩せ我慢をしていたが、やがて膝をついて倒れるように座り込んだ。

それを眺めて、不死の少女は。上へ続く洞窟の奥で光る白い影を銀の半眼で見つめ。

見返しているであろう白い影は、「一礼」して消えていった。

時は、ベル達のパーティが中層に突入して数時間後に遡る。

中層へ新規進出を果たした彼らは、早々にダンジョンの洗礼を受けていた。

連戦に次ぐ連戦。息つく暇もないモンスターとの戦いに疲労が蓄積していたベル達は、『アルミラージ』に囲まれた状況で『怪物進呈』パス・バレードに見舞われる。

辛うじて保っていた均衡はそれで崩れた。前衛・中衛・後衛の編成が保てなくなった彼らは中途半端な逃走と戦闘を強いらられ、モンスターの大量産出によって天井の崩落に巻き込まれ、挙句の果てに『ヘルハウンド』の火炎放射に追われて『縦穴』に落ちたのである。

中層に仕掛けられる迷宮ダンジョン・ギミックの陥穽。それに嵌ってしまったベル達は、推定14階層を彷徨っていた。

「すまん……」

「いや……」

天井の崩落によって左足が潰れてしまったヴェルフに肩を貸すベルは、その程度のやり取りしか出来ない。背後を歩くりルカは振り返るベルに弱々しい笑顔を返すのみだ。

積み重なった疲労。逃走の最中に失ってしまったアイテムの数々。

13階層より強力なモンスターが跋扈する下部階層を息を殺して歩く手酷い緊張。

彼らは、『詰み』の寸前であった。『縦穴』に落ちてしまった手前、現在地が何処であるかも分からない。闇雲に進んでは何度も行き止まりにぶつかるベル達は、恐怖と絶望に苛まれつつある。

それでもベルは、逃げるわけにはいかない。集団迷宮探索は自分だけの責任に留まらない。信頼を預け合う仲間の命も背負っている。

それに、宣言したのだ。忘れもしないあの日、ただ夢を見続けるだけだった自分は家族に現実を突き付けられ、遮二無二にダンジョンに突入した。

今思えば無謀な行為だ。走って、走って、目についたモンスターと片っ端から戦って、ボロボロになって倒れたベルは誰かに助けられた。

臆気に覚えていた罵倒の声。それが中層に入る寸前に出会った狼ウエアウルフの青年の罵倒と重なった時、ベルは直感的に理解した。

ああ、この人だ。『ベート・ローガ』とアスカに呼ばれたこの人が、あの日僕を助けてくれた男だ。あの日も、倒れる僕に暴言を吐いて――奮い立たせてくれた人だと、ベルは知った。

だから、お礼を言った。だから、宣言した。絶対に追いついて見せると。先を走っていて欲しいと。他ならぬベル・クラネルが、そう言ったのである。

だからこそ、逃げるわけにはいかない。仲間から、あの宣言から、自分の想いから、ベルは逃げない。そう決めた。

だからベルに、諦念の二文字はない。命ある限り、生還の道を模索する。少年にはその覚悟があった。

「……う。」

その時。ベルの視界に、見慣れない光がちらつく。

視線を向ければ、それは地面から発せられていた。行き止まりの壁から振り返った道の先、ついさっきまで何もなかった筈の場所に、白い光が輝いている。

見慣れない、模様のような光。それはまるで文字のようで、ベルは

無意識に唇を動かしていた。

「白い、サイン……？」

音が零れた瞬間、それが引き金だったかのように白いサインが明滅する。不意に発せられた声にヴェルフとリリルカが少年の視線を辿るが、そこには何も無い。

「どうした、ベル……」

「……ベル様、何かあったんですか……？」

「いや……そこにサインが——」

疲労困憊の仲間の声にベルが応えようとしたその時。サインはより一層輝き、白い光が溢れ出した。

『!?!』

リリルカとヴェルフにも知覚できる突然の光。驚きに目を見開く彼らの前で、光は立ち昇り、形を成して収束する。

長髪という言葉では収まらない、生まれより伸びる髪。その髪を束ね留める、王冠を半分に切ったような見覚えのある髪留めと長衣。

全身が白く輝き、そして半透明である事を除けば——

「アスカ……？」

——そこにいたのは紛れもない、ベルの家族の姿だった。

“灰”はかつて、ベル・クラネルとある誓約を結んでいた。

それは幼いベルが森で迷子になった折、アスカの手を取った時に交わされた秘事である。

知らぬ間にベルの魂ソウルに焼き付けられたその誓約の名は——【狂王の烙印】。

『火の時代』にあつて【青教】と呼ばれた、とうに汚染され、歪んでしまった誓約だ。

【青教】は本来、古い約定の庇護者が結ぶものであり、世界を超える侵入霊、闇ダークレイズ霊に對抗する守護者を呼び出す誓約である。しかし『火の時代』の片鱗すら知られぬ今、世界は分かたれず、常に一つの世界線を共有するが故に、この誓約は役に立たない。

だから「灰」は、小人の狂王と呼ばれた不死は誓約を歪めた。古い約定を暗い業によって汚染し、己の都合の良い誓約に改変したのである。

即ちそれは、誓約を課した者の世界への強制侵入。『火の時代』の特定の地域で誓約霊として召喚される【森の狩猟者】【ファランの番人】【神喰らいの守り手】、特異点における一部地域で灰霊を召喚する【鐘守】【ネズミの王】と同じように、汚染した【青教】を相手に強制契約させ、殺し尽くすまで何度でも強制侵入を繰り返す【狂王の烙印】に変えてしまったのだ。

古い話だ。それを忘れ去っている「灰」は、残された暗い業をベルへの献身とした。ベルの世界に強制侵入するのではなく、白霊として強制召喚させる誓約。世界が分かたれずとも、ソウルのみを我が身とする霊体は、あらゆる時代、あらゆる場所を超越する。その不変の「ソウルの業」を以て、ベル・クラネルの助けとしたのである。

その結果が、ベル達の瞳に映る光景——燐光の乏しい洞窟にて輝く、半透明の白き霊体。

場所を超え、そして時をも超えて召喚された、「アスカ」の姿であった。「ア、アスカ……!?!」

突然現れた光り輝く幼女に呆然としていた三人は、ベルが代表して声を上げる。疑問をたつぷりと含んだ少年の声は、しかし古鐘の音が返る事はなかった。

「——」
声無き霊体のアスカは、普遍的な動作で「一礼」する。それに困惑するベル達を他所に、アスカの霊体はソウルの光から《地鳴りの岩石槌》を手にする。

そして前触れ無くゆらりと動き、素早い動作で洞窟を破壊し始めた。

『!?!』

目を剥くベル達の前で中層を構成する灰色の岩石は瞬く間に形を変える。天井が崩れ、壁面が弾け飛び、地面が罅割れ掘り返された。最後に《地鳴りの岩石槌》の戦技、【地鳴り】が繰り出されると、ベル

達がぶつかった行き止まりはちよつとした小部屋程の広さになる。

それでモンスター^の産出しない安全地帯を確保したアスカは《地鳴りの岩石槌》を《呪術の火》と《祭司の聖鈴》に持ち替え、呪術と奇跡を発動する。

《呪術の火》より燃え上がり、中空へ分かれたのは「ぬくもりの火」。燃え移らぬやわらかな火は、触れる者の傷を癒やし体力を回復する。

そして「ぬくもりの火」に並ぶように浮かぶ青い炎は、ヘステイアの奇跡である【分け合う聖火】だ。

アスカはヘステイアの神話から二つの奇跡を見出していた。片方はベルに継承された【炉の加護】。そしてもう片方がアスカの使用した【分け合う聖火】。この奇跡は炉の神であるヘステイアの慈愛の表れであり、この火を守り、触れる者に精神力^{マインド}を分け与える。

破壊した洞窟に浮かび上がる赤と青の火。それは奇妙な光景だが、休憩^{レスト}にはもってこいの場だった。

『……』

驚きで沈黙を保つベル達の前で、アスカは【休息】を取る。片膝を立てて座る幼女に固まっていたベル達はようやくその意図を察した。

「あ、あの、アスカ様……ひよつとして休憩^{レスト}を取れ、という事でしょうか……？」

恐る恐るリリルカが尋ねるものの、返事はない。無言で座り続けるアスカに顔を引きつらせていたリリルカは、やがて深々と溜息をつき、ベルとヴェルフに向き直った。

「休息^{レスト}を取りましょう」

ボロボロになったバックパックを下ろし、アスカの横で膝を抱えて座るリリルカは言う。

「おそらくこれは、アスカ様の言っていた保険です。色々と疑問はありますが、一先ずの安全は確保してくれました。とにかく、今は休みましょう。リリ達にはそれが必要です」

リリルカの言葉に顔を見合わせたベルとヴェルフは、疑問を飲み込んで互いに頷き、休息^{レスト}を取る。ベルの手を借りて座るヴェルフに霊体

のアスカは『女神の祝福』を投げ、羊皮紙を取り出してリリルカに見せた。

「成程……その状態では喋れないんですね。意思疎通は文字でしか出来ない。とりあえず幾つか聞きたい事がありますので、答えて下さい」

リリルカは羊皮紙を通して質問を始めた。カリカリと羽ペンの滑る音が流れる傍ら、『女神の祝福』を飲んだヴェルフは潰れた左足が一瞬で再生した感覚に驚愕する。

「すげえ……なんだこの回復薬は？ ホーシヨウ 万能薬だつてこうすんなりと治らねえぞ……」

「確か、『女神の祝福』って名前だったと思う。生きてさえいれば致命傷でも即座に完治できるつて、リリとアスカが話してた」

「んな規格外の代物なのか!?! やべえな、いくらかかんだ……手持ちじゃとても返せねえぞ」

「アスカはたぶん気にしないとと思うよ？ それにそういうのは、皆で生きて帰ってからじゃないかな」

「……だな。まずは生き残る事が最優先か」

軽口を叩き合い、どうにか笑い合う。

イレギュラー 異常事態に巻き込まれてから、いや中層に降りてから初めての休息レストに、張り詰めていた糸が緩んでいくのを二人は感じた。緩ませ過ぎるのも良くないが、少なくとも余裕が出来た。

「大体分かりました。ベル様、ヴェルフ様、アスカ様の説明と現状の確認をします」

アスカとの情報交換を終えたりリルカが話し始める。

まずアスカの白く輝く姿だが、霊体と呼ばれる状態らしい。それは肉体からソウルを解き放ち、世界を超えて召喚主の元へ顕現する『ソウルの業』の一種だそうだ。

だからアスカの本体はここにはいないし、18階層に留まったままだという。声を出せないのも霊体の都合であり、意思疎通は文字か『ジェスチャー』でしか出来ないらしい。

正直霊体だの世界を超えるだのリリルカにはさっぱりだったが、深

く考えるのは心情的にも状況的にも止めるべきだと提唱した。残った装備を確認した自分達のやるべき事は、生きて地上に帰る事だと。

大刀を失ったヴェルフはアスカから《処刑人の大剣》を貸し出され、リリルカは《魂業小箱》^{ソウル・ヴェル}に収納していた各種回復薬を皆に配る。デュアル・ボーション^{デュアル・ボーション}二属性回復薬の一件で仲良くなったナアーズと共同開発した、『干からびた根』と各種素材を調査した『持続回復薬』^{リジエネ・ボーション}も飲ませておく。

味は良くないが持続的に傷を癒やし体力を回復する画期的な回復薬だ。リリルカの自信作であるそれを飲んで、ベル達の準備は整った。

目指すはアスカの居る18階層。地図位置の分からない現状で正規ルートを探すより、『縦穴』を降りてアスカと合流する方が安全だとリリルカは提案し、ベルは決断した。

それからは戦闘を避けての強行軍である。『強臭薬』^{モルプ}を使用した戦闘回避、『強臭薬』^{モルプ}の範囲外から攻撃しようとするモンスターはアスカが弓で撃滅する。

アスカを先頭にヴェルフ、ベル、リリルカの順で進む一行には余力があった。休息中にアスカの使用した【ぬくもりの火】と【分け合う聖火】^{レスト}によって体力と精神力は回復している。気力もリリルカのおかげでそれなりに手持ちの道具がある事、霊体とはいえアスカがいる事で大分持ち直した。

途中『強臭薬』^{モルプ}が切れるなどしたが、順当に17階層まで進んだ彼らは——何故か階層最奥の大部屋前に立ち込めていた霧を潜り——ついに『嘆きの大壁』まで到着する。

静か過ぎる階層に嫌な予感を覚え、足早に18階層まで駆け抜けようとしたその時。

二週間の次産間隔を超えて階層主——『ゴライアス』^{インターバル}が出現した。

『オオオツツ!!』

『ゴライアス』!? そんな!?

「マジかよ、ふざけろっ!?!」

「くっ……!?!」

咄嗟に《英雄願望》を発動しそうになったベルだが、一步前に立ち、18階層に続く回廊を【指差す】アスカの霊体に気付く。白く輝く霊体の家族は、輪郭ばかりが浮かぶ顔を背中越しに見せ、ソウルの光から半ばより折れた大剣を取り出した。

「アスカ……」

『』

「——分かった。みんな、走って！」

言葉は無くとも、その意志をベルは受け取った。今度は、家族から逃げるんじゃない。心から信頼して、背中を任せる。折れた大剣を構え、黒い刀身に嵐を纏わせるアスカの霊体を背に、ベル達は駆け出した。

断続的に響く破壊音に押されながら、彼らは回廊に飛び込む。転がるように洞窟を駆け下りながら18階層に辿り着く。

そこでベルは、共にいた筈の家族と再会し。

『ゴライアス』を半殺しにし、十分に時間を稼いだと判断した霊体は、【一礼】をして元の世界に帰還したのだった。

つまりは、霊体に関連した『ソウルの業』の応用だ。

霊体は世界を超え、あらゆる時代、あらゆる場所に顕現する。それは時間の超越と同義であり、傍目からはたった一秒佇んでいるのみの幼女だとしても、その実は一日がかりの協力と遜色ない。

同一の世界線であっても、いやだからこそ、その応用は容易になる。誓約者の方が一に反応する【狂王の烙印】を縁に、白霊の強制召喚による時間を超えた協力、救出を可能とする。

それがアスカの、『灰』の仕掛けた『保険』であり、ベート・ローガの借りを返す事に同意した思惑の正体だった。

「——済まない、『灰』」

だから、『灰』にとつては、どうでもいいのだ。

『灰』のために用意された天幕の内。目の前で並んで眠る家族とその専属鍛冶師を前に座る己に頭を下げる、小人族の勇者の事など、

どうでもいい。

「謝る必要はない。フィン・デムナ。私は保険を掛けておいた。その保険は正しく機能した。私の家族がイレギュラー異常事態に見舞われてなお、無事に此処へ辿り着いたのは半ば必然であり、貴公に責任はない」

「けれど、僕は君と約束した。全ての責任は僕にある。君のパーティーは、本来此処に来る筈じゃなかった。それを僕は償わなくてはいけない」

「その責任がないと、私は言っている。これ以上は堂々巡りだ。貴公が何を言おうと、私は責任を問うつもりはない。」

皆、全てを受け入れている。ベート・ローガの依頼を受けた私も、それを知って中層に進出した私の家族も、全て承知の上で前に踏み出した。

我らの命は、我らの物だ。私達は自らの身勝手な理由で命を懸け、生き残っただけに過ぎない。何も、問うべき責任はない。

それは、貴公もそうだろう——フィン・デムナ」

「……」

冒険者として見るならば、『灰』の言葉が正論だった。

冒険者は皆、己の欲望のために命を懸ける。生の栄誉も死の終焉も、己だけが享受すべきもの。死のうが生きようが、何を得て何を失おうが、誰のせいにも出来ない。

依頼を受けてパーティを離脱し、そのパーティが全滅したのならば、依頼を受けた者が間抜けなのだ。後から喚いても、憐憫と嘲笑しか浴びせられない。誰もが異口同音にこう言うだろう。『後悔するのなら、最初から依頼など受けなければ良かったのだ』と。

『灰』の言葉は、それと同じだ。冒険者としては至極正論であり、それはフィンも承知の上である。

だが、プレイヤー【勇者】と謳われるフィン・デムナにとってはそうはいかない。

正式でなくとも「ロキ・ファミリア」の依頼によって一つのパーティーが危機に陥った。それはどんな事情であれ、野望を持つフィンには好ましくないものだ。

冒険者ならば受け入れる醜聞であつても、【勇者】^{ブレイバー}を讃える民衆が受け入れるとは限らない。フィンの野望——全ての同胞に勇気を示す小人族^{バルウム}の『光』となるならば、僅かな瑕疵も許されない。

英雄は、完璧な英雄でなくてはならないのだ。人造の英雄を自認するのなら尚更、正道を貫かねばならない。

どんなに薄汚れ、異端の道を走ろうとも。その名の輝きが潰える事のない英雄に、フィン・ディムナはなれないのだから。

「それでも僕は、君に償わなくてはならない」

もう一度、深々とフィンは頭を下げる。【勇者】^{ブレイバー}の名に恥じぬように。そしてまた——「灰」との繋がりを断ち切らぬように。

「灰」の言葉は正論だ。だがそれは、赤の他人の冒険者に向けるのならば、という前提がある。

【ファミリア】同士の繋がりがあある冒険者同士なら、「灰」の言葉通りにはいかないだろう。嗚咽、衝突、後悔、断絶——最悪の場合、抗争にも繋がりがねない事由だ。

「灰」がそう言わないのは、【ロキ・ファミリア】との繋がりなどその程度と認識しているからに他ならない。所詮は個人的な繋がり、いつ切れても問題のない薄い縁^{えにし}だと。

団長としても、個人としても、それは受け入れられない。「灰」の持つ『火の時代』の技術・知識、「灰」個人の力、どちらも手放し難いからだ。

フィンは頭を下げる。「灰」と対等であるために。少なくとも「灰」から一方的に断ち切れぬような価値がある、それを示さねばならなかった。

「……貴公も難儀なものだな」

それを分かつて、「灰」は一つ、透明な息をついた。フィンの思惑も分かった上で、それを些事としか捉えない不死は、適切な対応で埋め合わせをする。

「では、18階層に滞在する間は貴公らの世話になろう。『ミノタウロス』の一件による貴公への借りもこれで帳消しだ。そして地上へ帰還する折、我らも同行させて貰えるのなら、それ以上望む事はない」

「……分かった。全て受け入れよう」

「ああ、それと私が受けた依頼の方だが、少しばかり延長させてくれ。私の家族が目覚めるまでは、ここで介添えしていたい」

「当然だね。皆にはそう伝えておくよ」

眠るベル達を看護する「灰」にもう一度頭を下げ、フィン是天幕を後にした。暫くアスカが無言で介抱を続けていると、誰かが天幕に入る気配がする。

「ああ、貴公か。アイズ」

「アスカ……私も、看病していい？」

「構わんよ。人手があるのは有り難い」

おずおずと尋ねるアイズにアスカは場所を空ける。幼女の隣にちよこんと座るアイズは、少年の白髪を時折撫でつつ懸命に看護するのだった。

「さて、それでは反省会を始めましょうか」

につこりと良い笑顔を浮かべるリリルカは、しかし誰も逆らえない圧を発していた。仁王立ちする小人族パルウムの少女の前で、ベル、ヴェルフ、アスカの三名は正座である。

目覚めたベルがアイズと共にフィンに報告をしに行き、戻ってきた所で意識を取り戻したヴェルフとリリルカは、お互いの健闘を称えつつ反省会に突入した。無論、中層進出寸前でパーティを離脱したアスカもだ。

「アスカ様？　いくら保険を掛けていたとはいえ、未経験の階層を前にパーティを離れるなんてありえないですよ？　おかげでリリ達は危うく死にかけるところでした。アスカ様さえ居てくれればあんな危機には陥らなかつたんですよ？」

「そのようだな。次からは、急な依頼は引き受けないようにしよう」

「……言葉にした以上、それは真実なのでしょうが、少しは反省する姿勢を見せて下さい……」

がつくりと項垂れるリリルカにアスカは澄ました顔だった。無感

動を貫く幼女をリルルカは恨めしげな目で見るが、気を取り直してベルとヴェルフに向き合う。

「次は全体の反省ですが、アスカ様が離脱した時点で中層進出を取り止めるべきでした。後衛の薄いリリ達のパーティは一度崩れたら立て直しが厳しいです。万が一の対処をアスカ様に頼っていた以上、保険があつたとしても後日改めて挑戦するべきでした」

「うん……調子に乗ってたつて言うか、勢い任せで行動しちゃった気がする。反省しないとね……」

「だな。ダンジョンを甘く見てた。『怪物進呈』パス・バレットを受けたとはいえ、そんなもん言い訳にもならねえ。次に中層に入る時は、もつと準備しねえとな……」

「……」

正座を解いて頭を掻くヴェルフの横で、アスカは冷徹に眼を細める。それは誰にも気付かれない、不死の暗い判断が表出していた。

「リリも『魂業小箱』スカルをもつと活用しなければいけません。指輪もそうですし、例えばヴェルフ様にエンチャントできるアイテムを使つていただくとか……アスカ様？　どうかしましたか？」

「いや……何でもない」

眼を閉じるアスカの様子に首を傾げるリルルカだったが、すぐに反省会に戻る。

冒険者ならば、経験を糧にする。死にかけた経験を無駄にしないためにも、三人は真剣に反省と対策を立てていった。

やがて『夜』が訪れる頃、反省会を終えた一行は「ロキ・ファミリア」の夜宴に参加させて貰った。

「灰」からの物資提供があつたため、遠征直後とはいえ食糧は潤沢だ。共に戦った戦友への労いを込めて調理係が張り切つて作った食事はとても美味しかった。

フィンの仕切り直しでベルへ突き刺さっていた殺意てきいも鳴りを潜めている。治療を施してくれた「灰」への恩義とその依頼がベル達が18階層まで降りてきた原因の一つとあつて、「ロキ・ファミリア」の団員達は——主にアイスやヒリュテ姉妹に構われているベルに向け

られた——己の嫉妬を恥じた。

賑やかな食中を過ぎ、宴もたけなわになった頃、聞き覚えのある女神の悲鳴が、「灰」の耳朵を揺らす。駆け出したベル、リリルカ、ヴェルフを追ってみれば、そこには「灰」の主神であるヘステイアと護衛と思しき冒険者、そしてもう一柱の男神がいた。

「あつはははははっ!? 死ぬかと思ったー!」

汗だくの表情で笑みを貼り付ける男神に、「灰」は眼を細める。旅装束、橙黄色とうごうの髪、弓なりの瞳。聞き覚えのある姿をした男神だ。

ヘルメスと名乗ったその男神は、ベルと好意的な会話を交わした後、今気付いたというように「灰」に目をやり、距離を詰める。

「やあやあ、随分と熱心に俺を見てくれるね。もしかして惚れちゃったかい？ いやー、こんな可愛い子ちゃんに一目惚れさせるなんて俺も罪深いなー!」

軽口を叩いて半眼の幼女に顔を寄せるヘルメスは、人の良い笑みを形作ってそつと囁く。

「——こうして会うのは初めてかな？」「灰」ちゃん。お互い、話には聞き及んでいるだろう？ 俺達は同じ使命を分かち合う同志、と勝手に思っているんだけど、どうだい?」

「それは貴公の、態度次第だ」

「ははは! 手厳しいね! まあ、悪いようにはしないさ。それだけは信じてくれ」

「……」

弓なりの目を細めるヘルメスを「灰」は無言で睨み返す。数秒続いた対峙は、アスファイの挟んだ小言によつて終わった。去り際に目礼するアスファイに少しばかり頷いて、「灰」は同じ「ファミリア」であろう三人の冒険者を瞳に映す。

ベル達を前に顔を強張らせる少女二人と、矢面に立とうとする大男一人。『怪物進呈』パス・パレードを行った冒険者達の風貌と合致する三人を、「灰」は一人、離れた場所からずっと見ていた。

「——申し訳ありませんでした」

「あの、その、本当に……ごめん、なさい……」

ヤマト・命ミコトと名乗った人間の女性ヒューマンが土下座し、ヒタチ・千草チグサが深々と頭を下げる。

それでもリルカとヴェルフの険は崩れなかった。カシマ・桜花オウカが一步進み出て、「今でもあの指示が間違っていたとは思っていない」と宣言する。一触即発の空気が流れる中、ベルは忙しなく視線を歩き来させているが、今回ばかりは「灰」も構う事はない。

ただじつと、「タケミカヅチ・ファミリア」の三人を見つめる。無感動に輝く暗い瞳には、如何なる意志も見出だせなかった。

そこへやってきたヘルメスは、早々と場を手打ちにした。鮮やかな手並みに感心するベルに笑いかけて、ヘルメスは「灰」に声をかける。

「そういう訳だけど、君は何か言いたい事はあるかい」

「私から言うべき事は何も無い」

「そうかい」

帽子のつばを掴んで下げるヘルメスは、それ以上の追求をしなかった。ある意味では「灰」を最もよく知る男神は、その言葉の意味を知りながら。

「それじゃあ、今後の予定について話し合おう！」

何事もなかったかのように空気を払拭するヘルメスにつられて、場の空気も弛緩する。しかし今後の予定を話し合う側で、「灰」の視線が動く事はなかった。

18階層の『夜』も更け、『深夜』に差し掛かろうという頃。

生まれより伸びる灰髪を風に任せる「灰」は、深い夜の闇に沈んだ『迷宮の楽園』アンダーリゾートを一望出来る切り立った崖の上に佇んでいた。

理由は明快だ。眠りを必要としない「灰」は、集中力フォーカスが回復するまでの暇な時間はずっと看病に勤しんでいた。

『朝』も『夜』も関係なく、それが依頼だからと付きっ切りで劇毒に

倒れた「ロキ・ファミリア」の世話をする。それを見兼ねた治療士ヒーラーの面々が「ゆつくり休んで下さい」と「灰」を送り出したのだ。

やる事がなくなった幼女は、ふと思いついた事を実行に移していた。成功する確率はほぼ零だが、賭けに勝てば大いにベルの役に立つ。下から見ればよく目立つ場所で「灰」が佇んでいると——ふと背後で、狼の銀靴ぎようわんが蹠音を上げた。

「——よお、「灰」野郎」

「ああ、貴公か。ベート・ローガ」

灰毛を逆立て、剣呑な空気を発する狼人ウエアウルフ、ベートは端的に告げる。

「俺と戦え」

「断る」

「——らアッ！」

「灰」の返事を待つまでもなく、ベートは不死に飛びかかった。唸りを上げて襲いかかる《フロスヴィルト》は、しかし最小限の動きで避ける。「灰」の真横の空を切る。

空振った勢いを踏み殺してベートは両脚で連撃を叩き込む。だが「灰」にとつてそれはとうに『経験』済みだ。足捌きと体幹の傾きのみで回避する。「灰」に、ベートは歯を軋らせる。

「クソがッ！　なんで戦わねえっ!?!」

「面倒だからだ」

「あアッ!?!」

擦り鳴らされる声にベートの怒りが噴出するも、脚撃は「灰」の髪を揺らすに留まる。このままでは埒が明かなく考えたのか、距離を取ったベートは魔剣を引き抜こうとした。

その寸前に、「灰」はベートへ物を投げた。敵意のない、ただ弧を描いて飛んでくる投擲物。それを片手で掴んだベートは、小さな樽の感触と鼻孔を突く芳醇な香りに顔を顰める。

「なんだこりや、酒か?」

「ああ、酒だ」

「……どういうつもりだ、「灰」野郎」

「どうもこうもない。無意味に暴れるくらいなら、酒に付き合え。そ

れだけの事だ」

「……」

無言で睨みつけるベートに、「灰」は『ジークの樽酒』を取り出して言葉を続ける。

「私はただの酒では酔わない。神の酒であろうと、私を酔わせる事は出来ない。この樽酒を除いてな」

「だったら何だってんだ」

「酒に酔えば、気も変わる。強く酔っ払えば、貴公との喧嘩も一興と受け入れるやもしれん。」

このままではどの道、私は貴公と戦うつもりはない。そして避け続けるのも面倒だ。だから僅かでも可能性のある道を指し示した。

受けるかどうかは、貴公次第だ」

「……」

崖近くに座り、蓋を剥がして樽酒を傾ける「灰」に、暫し無言だったベートは蓋を叩き割って樽酒を呷る。途端、咽る狼人^{ウエアウルフ}。不死とて酒を楽しむためにカタリナの騎士が苦心して作り上げた酒は、只人の口には合わない。

ともすれば酒もどきのような味わいに咳き込んだベートは、だが淡々と樽酒を傾ける「灰」を睨んで一気に飲み干した。酒臭い呼気を存分に吐き出して、狼人^{ウエアウルフ}の男は「灰」の横に座る。

「もつと寄越せ。これくらいじゃあ全然酔いやしねー」

「そうか」

「灰」は追加の樽酒を渡し、ベートは勢い良く消費していく。静かに、そのやり取りだけが続いた。

「……なあ、「灰」野郎。なんでてめーは戦わねえ」

やがて、ベートは口を開いた。酒の香りが乗った言葉は、しかしはつきりと「灰」に届く。

「言っただろう。面倒だからだ」

「その面倒ってのが、理解できねえ。手前は、強え^{つえ}だろうが。何故その強さを誇らねえ」

「誇れるような力など、私は持たないというのもあるが……そうさな。」

言ってしまうえば、私は強さなどに興味はないんだ」

「ああ？」

酒を呷りつつも琥珀色の視線を剥がさないベートに、『灰』は、数えるのも億劫な程の戦いを乗り越えた不死は語る。

「私にとって、戦いとは通過点だ。何を置いても果たしたい目的が在り、その道に立ち塞がる邪魔な敵を排除する手段でしかない。

強さも、力も、ただの手段だ。そして何者よりも弱い、卑小な私は、強さという最も単純な手段を選べなかつた」

「……」

「私には弱さしかない。だから弱いなりの手段を探した。絡め手、禁じ手、未知数の手段。百戦錬磨の英雄を相手に、ただの一撃で喉元を食い破るような弱者の『必殺』。

卑小で、何も持たないのならば、ありつたけの手段を得て叩きつけるしかない。私にとって戦いとは、相手が死ぬまで初見殺しを敢行する事に他ならない」

「……だから、戦わねえって言うのか」

「そうだ。元より、そんなものは戦いとすら呼べない。私がやっているのは、ただの作業。命すら懸けぬ、不死の白痴なる盲信だ。

だから私は戦わない。殺せもしない相手に掻き集めた手段を開示するのは、割に合わない。貴公は強い、その貴公を殺さず倒すのに、私はどれ程の手段を支払わねばならないか。

考えるだけで、面倒になる」

「……ハッ！ くだらねえ」

黙って聞いていたベートは、樽酒を一気飲みして肺に溜まった空気を吐き出した。カハア、と熱の籠もった息が『灰』に向かって吐き出される。

「今日は随分とよオ、舌が回るじゃねえか。いつもだったら虫けらに説法なんぎゴメンだつて目えしてるくせによオー」

「酒が入ってるんだ、口も滑るさ。それは貴公も、同じだろう？」

「一緒にするんじゃねえよ、『灰』野郎オ。俺はてめーみてえな腑抜けじゃねえ、虚仮にされたままで我慢できるかつての」

地面に並べられた樽酒を叩き割っては呷るベートは普段の暴言に拍車パルウムが掛かる。

ベートは兎野郎を貶した。果敢にも齒向かった小人族の少女を鼻で笑った。口先だけが一丁前の鍛冶師の無様を嘲笑った。

ベートは「灰」のパーティが18階層に到る経緯を聞いている。その発端である事を自覚してなお、罵倒を止める事はなかった。

……それに「灰」が反応する事も、またなかったのであるが。

「——チツ」

いくら暴言をぶつけても暖簾に腕押しの「灰」にベートは苛々しながら酒を呷る。鼻孔を突き抜けていく酒もどきの芳醇な香り。それすらも苛立たしく思うベートは、ふと酒香に交じる兎の匂いを捉えた。

「——おい！ 覗き見してんじやねえぞ！ 用があるなら出てきやがれ！」

吠えるベートの視線の先で茂みが動き、ガサガサと音を立てて人影が現れる。まだ包帯をつけたままの少年、ベル・クラネルだ。

「あの、ベートさん……その……」

「なんだア？ 言いたい事があるならばつきりしやがれウスノ口。それともビビツて声も出ないってかア？」

「っ……」

いくら暴言を吐いても堪えない「灰」に苛立ちを募らせていたベートは殺気すら混じった罵倒をぶつける。それに一瞬怯むベルは、しかし頭を振って深々と腰を折った。

「……すみませんでした。ベートさんに自分の弱さを分かせて貰ったのに、何も出来なくて」

「……ああ？」

「アスカがいなきや、僕達は中層で野垂れ死んでたかもしれませぬ。僕が一番しつかりしなきやいけなかったのに、結局はアスカに頼りつきり……悔しいです。あんなにベートさんに励ましてもらったのに、僕は……」

「……………ハッ」

その時、ベートの目から一切の色が消えた。樽酒の一つを掴み、ふらりと立ち上がる狼ウエアウルフ人は——それをベルの頭に投げ、叩きつける。

「!?」

「おい、雑魚野郎。何を言い出すかと思えば、そんなくだらねえ事を言いにここに来たのか。」

ふぎけんじゃねえ。誰がてめーみてえな雑魚なんざ構うかつての。その腐れた頭で何を考えたか知らねえが、てめーの言葉は糞みてえなもんだ」

眇められた琥珀色の視線がベルに突き刺さる。ぶわつと汗を吹き出す少年は何も言えないし動けない。

「分かるか？ 踏み躪る価値もねえって言ってんだよ。励まされただけのありがとうだの、フザケた事ばかり言いやがって、イカレてるんじゃないか、あア？

てめーが取るに足らねえ雑魚だって分かってんならケツまくって消えやがれ。巣穴に引っ込んで一生震えてろ」

「……」

「——チツ」

俯くベルに舌打ちして、ベートはズカズカと立ち去る。そしてベルとすれ違う瞬間、呟いた。

「てめーみてえな雑魚にかまけるなんざ、〃灰〃野郎も見る目がねえ。所詮は〃灰〃——ただの塵野郎か」

「——!」

「……あア？」

その時、ベートの歩みが止まる。狼ウエアウルフ人が視線を下げれば、そこには己の腕を掴む『兎野郎』の姿があった。

「取り消して、ください……!」

「……何だと？」

「僕の事はいい、いくら言われても事実だから……でもアスカは違う! 取り消してください!!」

「——ハッ!」

瞬間、ベートは寧猛な凶笑を刻んだ。無造作に腕を振り、ベルを体

ごと地面に叩きつける。

「がつ!？」

「おい兎野郎、手前^{てめえ}、俺に喧嘩売ってんのか？ そんな様でよー、恥ずかしくねえのか!? オラ、立てよ！ かかってきやがれ！ それとも今更ビビツたかア!？」

「っ……うわああああああああっ!」

立ち上がったベルが殴り掛かる。それを躲してベートはがら空きの胴を蹴り上げた。空中へ浮き上がり、地面を転がる少年。腹を押さえて悶えるベルの頭をベートは踏みつける。

「こんなもんかよ!? 大した事アねーな!? もう終わりか兎野郎!？」
「……まだ、だ……!」

頭を踏みつける脚から逃れて、ベルは立ち上がる。普段であればか弱い兎にも見える少年は、しかしそれを微塵も感じさせない戦士の様相だった。

それにベートは、口角を吊り上げる。凶笑を刻む【凶狼^{ヴァナルガンド}】に、少年は果敢に立ち向かう。

一方的な戦いだった。いや、戦いと呼べるものですらなかった。無傷のベートに、ボロボロのベル。少年の渾身は狼^{ウエアウルフ}人にとって避ける必要すらなく、されど容赦などしないベートは最低限の加減のみでベルを痛めつけた。

少年はやがて、立ち上がれない程に傷つき、倒れる。しかしその目から闘志が消える事はなく、深紅^{ルベライト}の瞳には暗い輪^{リング}が浮かび上がっていた。

再び立つベルに、ベートは犬歯を剥き出しにして嗤った。そうだ、傷つかなければ強くなかなれない。吠え返せないのなら、戦場^{ここ}に立つ資格なんてない——そう言わんばかりの狼^{ウエアウルフ}人が、本気の蹴りを少年に見舞う。

仮借なき一撃だった。Lv.2^{レベル}ならば辛うじて反応できただけでも称賛に値するだろう。だがベルは、反応ではなく反撃^{レベ}してみせた。

到底受け切れない蹴りを受け、受け流せない勢いを反撃に転化する。空中へ搗ち上げられた兎は縦軸に回転し、踵落としを敢行した。

「——あああああつ！」

「ハッ！」

見え透いた攻撃をベートは鼻で笑う。だがその笑みは心底から湧き出していると分かる程に凄絶だった。受けなどしない、至極簡単に避けた狼は、空中で停滞する兎を更に蹴り飛ばす。

地面を跳ね、土を削りながら転がるベル。明らかに骨のいくつかが折れているだろうに、なおも少年は立ち上がるうとした。

それにベートが、トドメを刺そうとしたところで——

「——そこまでだ」

いつの間にかやって来ていたフィンが、中断を宣言した。

「なんだア、フィン。邪魔立てすんのか？」

「そうだよ、ベート。やり過ぎだ。それ以上は彼の命に関わる」

「ハッ！ だから何だつてんだ！ ソイツはまだやる気だろーが！」

「それでもだ。これ以上は慎んでくれ。喧嘩は君の勝手だけど、「ファミリア」に被害が及ぶなら看過できない」

そう語るフィンの視線は倒れるベルに近寄る「灰」に固定されていた。聖鈴を取り出して治療を行う幼女を瞥見したベートは、口元を歪めて踵を返す。

「チツ……興奮めだぜ」

そう言つてベートは去っていった。遠ざかる狼 ウエアウルフ 人の背中を最後まで見たフィンは、謝罪の申し入れをするべく「灰」へ歩を進める。

しかし耳に入る「灰」とベルの会話に、歩みを止めた。

「負けたな、ベル」

「……うん」

「アレが第一級冒険者だ。貴公の目指す目標、英雄の領域に脚を踏み入れた雛。貴公はいずれアレに届き、超えねばならない。」

この敗北を忘れるな。貴公が己を突き通すなら、必ずこれは糧となる」

「うん……！」

涙ぐむ少年に諭すように言つて、「灰」は幽かに微笑む。それを眺めていたフィンは「やれやれ」と苦笑して止めていた足を動かした。

「それで、何処からが君の策略かな？ 謝罪しようと思ったけど、どうやら君は織り込み済みのようだ。ひよつとしてベル・クラネルとベートを戦わせたかったのかい？」

「そうだ。フィン・ディムナ。私はこの場で二人を待っていた。」

ベート・ローガは私一人になれば戦いを挑むだろう。そしてベルは、私を見つければ様子を見に来るだろう。

ベート・ローガの酒癖の悪さは知っていた。酒を飲ませればベルを誹り、それがベルの逆鱗に触れば戦いになると考えた。

所詮は喧嘩だ。だが貴重な第一級冒険者との戦いならば、見逃す手はない。そしてベート・ローガがふっかけてくるのなら、我らに非はない場を実現できる。

おかげでベルは、足りない『経験』を積む事が出来た。有り難い事だ。存外、あの男は扱いやすい」

「ベートを扱いやすいとききたか。全く君は、僕の想像に収まらないよ」「それでもなからう。フィン・ディムナ。貴公は識者だ。よく智慧が働き、それを活用する術を知っている。」

私にとつては、最も面倒な手合いの一つだな」

「そうかい」

片目を瞑って笑うフィンに、バルウム「灰」はいつもの無表情を見せる。暫く小人族の勇者を見ていた「灰」は、疲労で眠ってしまったベルを抱き上げてフィンと共に天幕へ戻った。

「はっ!? 団長がどこの馬の骨ともつかない雌メスと逢引してる気がする！」

……なお、それをアマゾネスの勘で察知したティオネの乱入で一悶着あつたのは、完全な余談である。

『翌朝』、『リヴィラの街』へ見学しに行くベルを見送って、灰は治療に勤しんでいた。

フォーカス 集中力が回復するまでやる事はないのだが、暇なので看護に回っている。治療士陣からは働き過ぎなので休んでほしいと言われたが、本

当にやる事がなくなるので拒否した。

そうして治療を続けていた「灰」は、『リヴィラの街』からベル達が戻ってきたと報告を受ける。ついで女性陣で沐浴する話を持つてこられ、これ幸いと治療士陣ヒーラーの善意に押し出される形で沐浴する事となった。

白すぎる嫌いのある、だが決して不健康ではない肌に水滴が滑る。

澄んだ水面に腰の半ばから浸かり、彼方を向いて佇む幼女。均整の取れた細い体と主神ヘステイアに似た柔らかな双丘、水面に広がる生まれより伸びる灰髪は神秘的で、いつそのこと女神の如くという言葉が相応しい神聖さがそこにはあった。

長く繊細な灰色の睫毛が影を落とす銀の半眼が、感嘆の声を上げる女性陣に向けられる。

「こうして見ると、アスカ君は本当に綺麗だよねえ……」

「ううっ……リリの勝てる要素が一つもないです……」

「驚いたわ……普段と全然印象が違うのね、貴方」

「綺麗だよアスカ！ すっごーい！」

ヘステイア、リリルカ、ティオネ、ティオナの順で好意的な感想が続く。唯一無言のアイズも他の意見を肯定するようにコクコクと頷いていた。

下心の一切ない純粋な称賛。それを受けて「灰」は、しかしほんの僅かに顔を顰めてふいつとそっぽを向いた。

「私はこの体が好かんがな。どうにも気に入らない」

「え、そうなのかい？」

「ああ。進んで着飾ってやろうとは思わない」

「あー、確かにアスカ様はその辺無頓着ですものねー。でも、普段着の長衣と髪飾りはかなり良い物ですよね？」

「そうだな。ただ、手放せないだけだ」

「そういうものですか」

「えー!? こんなに綺麗なのにもったいないよー！ 女の子ならちやんとお洒落しないと駄目だよアスカ！」

「あんた自分でやってからいいなさいよ！ 無頓着なのはあんたも一

緒でしょうが！」

「うー、それはそうだけどおー……でもでも、やっぱりもつたいないよ！ あ、そうだ！ 私の服貸してあげるからさ、それ着てみるとかどう!?!」

「あんたのじゃあ胸が小さ過ぎるでしょ」

「そそそ、そんなことないもんっ!?!」

「……賑やかな事だ」

言い争うアマゾネスの姉妹に辟易したのか、「灰」は人気のない場所へ移動する。しかし何かに気付いたのか、途中で立ち止まって上を見上げた。

ガサガサと木の上を何かが移動する音。それを「灰」が感知している——少年の叫び声と共に何かが泉に落下する。

それは「灰」の、アスカの家族であるベル・クラネルであった。

「げほっ、ごほっ、ごふっ!?!」

ごほごほと咽るベルは水面の上で四つん這いになる。そこへやってきたのはアマゾネスの姉妹。種族の性故か羞恥心さぶがというものが無い二人は瑞々しい肉体を隠しもしないでベルに話しかけている。

ベルはそこから逃げようとして別の女性の裸体が目に入り、また逃げようとして今度はヘステティアとリルカの方へ行く。右往左往する少年にアスカは溜息をつき、するりと動いてベルの手を掴んだ。

「いいっ!?! ア、アスカ!?!」

「全く貴公は……いつまで経っても子供だな。そんなに水浴びをしたかったのか?」

「ちっ、違ちがッ!?! って、ちよっ、アスカあつ!?!」

そのままベルを引き寄せた少女は——あろう事か少年の服に手を伸ばし、慣れた手つきで脱がし始めた。

「全く、水浴びをしたくないならまず服を脱げと、何度も言い聞かせて来ただろう」

「そうじゃないから!?! 水浴びしに来たわけじゃないから!?! やめてアスカ!?! やめっ、下、下はーっ!?!」

少年の必死の抵抗も虚しく衣服が次々とはだけていく。ついにベ

ルトに手を掛けたところで、固まっていたヘステイアとリリルカがハッと目を覚ました。

「な、ななななな、何をやってるんだアスカくーん!」

「それ以上は駄目です! ベル様の色々な尊厳がなくなってしまうすーっ!」

二人はアスカを羽交い締めにして引き剥がす。その隙に服を着直しながらベルは逃げるが、その先にはアイズが居て——絶叫した少年は「ご——ごめんなさあああああああいつ!」と謝罪しながら最高速度で逃げ出した。

その後、残されたアスカがヘステイアとリリルカの二人がかりで説教を受けたのは言うまでもない。

「くっくっ……! そうかい、神ヘルメスに唆されたとはいえ、ベル・クラネルもやるものだ」

「笑い事ではないぞ、フィン」

「灰」から事の顛末を聞き終えたフィンは噛み殺すように笑った。それを憮然とした表情のリヴェリアが窘める。

現在は『夜』、ベルの覗きの一件について「灰」から改めて説明と謝意を述べられたフィンは、こほんと咳払いをして表情を整える。

「主犯は神ヘルメスだ。ベル・クラネル 彼も深く反省しているようだし、嚴重注意に留めておくよ。それよりも、僕としては君の行動に驚きかな。まさか覗きではなく水浴びをしに来たと思うなんてね」

「その覗きというのもよく分からん。清流に訪れて飲水や沐浴以外に目的があるのか?」

「それは流石に僕の口から説明するのは憚はばられるかな」

苦笑するフィンに溜息をついて、リヴェリアが話を引き継ぐ。

「……神ヘルメスに曰く、男の浪漫だそうだが……私にも理解できん。というよりそもそも、裸体を見られて恥ずかしくないのか?」

「裸体を見られる羞恥など、今更感じる事もない」

「ああ、お前はそう言っていたな。しかし、他の者がそうであるとは限

らん。次からは気をつけてくれ」

「分かった」

本当に分かっているのか不透明な頷きを「灰」は返す。それに処置なしと首を振って、リヴェリアは天幕の入り口に向かった。

「では、フィン。私は体を清めに行ってくる。後は頼んだぞ」

「ああ、任せてくれ」

「なんだ、リヴェリア。貴公、沐浴に行くのか？」

「ああ。こんな時間でなければ、団員のエルフ達に気付かれてしまうからな」

ハイエルフ 王族としての扱いを嫌うリヴェリアは、人目を忍んで一人森の泉を目指すつもりでいた。日中に行こうものなら他のエルフが放っておかないからだ。

それを聞いた「灰」は「ふむ」と顎を指にのせて、ややあつて呟く。

「であれば、私も同行しよう」

「何？」

思いもよらぬ提案にリヴェリアが目を瞬しばたかせる。疑問を抱く翡翠色の瞳に答えるように、「灰」はソウルを収束させ、小さな手に杖を顕現させた。

「リヴェリア様はおられたか!？」

「いえ、こちらにはお姿がどこにも……!？」

「くっ、お一人で一体どちらへ……皆の者、探せ！ リヴェリア様に万一の事があつてはならない！」

慌しく動き回るエルフ達を眼下に、「灰」は悠々と崖の上を歩く。その背後には「灰」と同じく半ば透明化しているリヴェリアの姿があった。

「成程な……魔術であれば、第二級冒険者の目すら欺けるか。いや、この場合はお前の隠密術が優れていると言うべきか」

「ここは森だ。隠れる場所も悟られぬ経路もいくらでもある。私の隠密など大したものではない」

「そうか？ 少なくとも私では無理だ。魔術を使って隠れていても、見つかってしまいそうだ」

【見えない体】【隠密】を併用するリヴェリアは苦笑する。夜の森をまるで庭先のように歩く「灰」は時に慎重に、時に大胆に動き回りエルフ達の探索を見事に回避していた。リヴェリアをして目を瞠る優れた隠密術である。

こうして二人は無事に森の泉に辿り着く事が出来た。しかしこのままでは見つかるのも時間の問題だろう。だから「灰」は周囲に霧を展開し、世界との断絶を図る。

「これは？」

「霧だ。私が張った。これがある限りは、たとえ見つかったとしても騒がしくならない」

「ほう、何とも興味を唆られるな。だが、魔術ではないのだろうか？」

「ああ。だからこれ以上は貴公に教えない」

「そうだろうと思った。我が師は魔術以外の道を指し示してはくれないからな」

「それが貴公との契約だろう、リヴェリア」

「ふふ、そうだな、アスカ」

思わず笑声を零すリヴェリアは「さて」と呟いて脱衣に取り掛かる。^{ハイエルフ}王族の王衣を戦闘に耐えうる装備に仕立て上げた《妖精王の聖衣》を脱ぎ、翡翠色の長髪を束ねる髪留めを取り払えば、神々すら嫉妬する一糸纏わぬ美貌のハイエルフがそこには立っていた。

ついでに「灰」も衣服をソウルに還元し、何も隠さぬ裸身となる。

「お前も入るのか？」

「ああ。魔術の扱い方を教授したのはついでだ。どちらかと言えば共に沐浴するという目的が強い」

「意外だな。お前にそのような考えがあるとは思わなかったが」

「これも魔術に関する一つだ。その前に、リヴェリア。私は貴公をここまでつれて来るのに少しばかり苦労した。弟子のために骨を折った師を労ってくれてもいいんじゃないか？」

先に泉に浸かる「灰」は水面に広がる髪をリヴェリアに向けた。

パチパチと目を瞬かせるハイエルフは、堪え切れないという風に清笑して、気取った仕草で一礼する。

「承ろう、我が師よ」

リヴェリアは灰髪の一房を手に取り、ゆつくりと梳かす。手のかかる娘のおかげで手慣れたリヴェリアは、薄く微笑みながら灰髪の手入れに専念した。

されるがままの「灰」の姿は、妙に様になっている。ひよつとしたら「灰」もかつては王族のような扱いを受けていたかも知れないなと、リヴェリアがあらぬ想像に浸っていると——不意に古鐘の声擦り鳴らされた。

「魔術には、『裸の探求』と呼ばれる思考の術がある」

突然の言葉に、しかし興味を惹かれたリヴェリアは手を止めて聞き入った。

「それはかつて魔術の蒙なる平野を啓いた不死の魔術師、「ビッグハット」ローガンが最期に見出した探求だ。

ローガンは魔術の探求者だった。『火の時代』の最高峰、ヴィンハイムの竜の学院の外戚と知られ、また不死となってからは更なる探求のために旅立った。

棄てられた神の都、アノール・ロンドに辿り着いたローガンは魔術の祖、白竜シースの偉大なる知見に触れた。そしてシースの業、古竜の息すらも我が物とし——ついに狂い果て、『裸の探求』のままに倒れた」

「古竜の息……まさか、それは」

「貴公は見た事があったな。そうだ、私が『深層』で用いた『結晶の秘法』こそ、『白竜の息』。ローガンの到達した魔術の極致とは、結晶の理。ソウルと、あるいは魔術と関わりの深い『結晶の秘法』を、ローガンは『裸の探求』の末に魔術と成したのだ」

「……だから、私にもそれが必要だと?」

神妙に問い掛けるリヴェリアに、「灰」はすぐには答ええない。水晶の輝きが形作る偽りの『夜空』を見上げて、手段のために魔術を求めた不死は眼を閉じ——リヴェリアと向き合って、凍てついた太陽のよ

うな瞳を発露させた。

「リヴェリア。『裸の探求』とは危険な術だ。それは思考の枷を外し、世俗に囚われた精神を解き放つ。常識を知るが故に見えぬ知見、人理という蒙に覆われた世界の真の姿を知るには、啓蒙を得るしかない。

だがそれは、人を人たらしめる思考の放棄と同じだ。ローガンは『裸の探求』の末、白竜シースの思考と同化し、狂った。神々に類する偉大なる智慧は、それを知る者を容易く壊してしまう」

「……」

「だからこそローガンは、その最期に『裸の探求』という術を遺した。それは徒に魔術いたずらの深奥を求めた老人の狂気ではなく、未来ある魔術師に贈られた祈りなのだ」

「祈り……？」

眉根を寄せるリヴェリアに、*「灰」*は『裸の探求』を実践して見せる。冷たい銀の瞳がソウルの蒼に輝き、周囲にまるで螢火のようにソウルの光が浮遊する。

瞳に宿る、結晶の色。それを通して見る世界は、人の常とは比べものにならぬほど未知なる智慧に溢れている。手を伸ばせば触れられるくらいに——脚を踏み出せば二度と戻れぬと分かるほどに、その探求の世界はリヴェリアにも感じられた。

「ローガンは純粹なる魔術師だった。それが人の道を外れると知ってなお、理の誘惑に抗えなかった。世に神はなく、神秘もなく、真理があり、知だけがそれを明らかにする。異端の魔術師は、最期まで異端の道を歩み去った。

だが皆がそうではないと、ローガンは知っていた。魔術ばかりが全てではなく、世には異なる道もあるのだと。故にローガンは遺したのだ。まだ見ぬ世界を知らせながらも、踏み出すか否かを後世に委ねる、『裸の探求』をな」

*「灰」*が瞳を閉じれば、漂うソウルの光は消え、リヴェリアの垣間見た未見の智慧も消え去った。それをひどく名残惜しいと思いがながらも、彼女の思考の枷が外れる事はない。

「リヴェリア、『裸の探求』を忘れるな。それは貴公が、貴公で在り続

けるための術。『結晶の秘法』に触れ、なおも人の道に立とうとするのであれば、貴公はそれを知り、御さねばならない。

期待しているぞ、我が弟子よ。亡者のようになってくれるな。貴公が言葉も解さぬようになれば、かけた時間が無駄になる」

「……流石にそれは、私も御免被る。ああ、勿論だ、アスカ。私は私のために、『裸の探求』を身に着けてみせよう。それが、お前の望みなんだろう？　我が師よ」

苦笑するように微笑んで、リヴェリアは受けて立つと言わんばかりに胸を張った。都市最強の魔道士にして世界最初の魔術師は、ついに『火の時代』の極点に挑む。

魔術の最高峰たる、『裸の探求』。咲き誇る菊アムの花のような結晶の夜空の下、現代の魔道士と『火の時代』の不死の交わりは、静かに、だが確かなソウルの輝きを煌めかせて過ぎていった。

分け合う聖火

炉の女神へスティアの司る奇跡

聖なる火を熾し、周囲にFPを分け与える

炉は家庭の中心であり、また祭事のある場である

祀られる火は神性を帯び、絶えるを許されず

故に炉を司るへスティアの慈愛は

火を守り、触れる者に分け与えられるのだ

二度と我が名を、呼ばれずとも

ヘルメスにとって世界は巨大な盤上だ。

愛しい子供達をポーンに進められる駒遊び。対戦相手は食えぬ神々、誰も彼もが仮面を被り、腹の底で笑っている。

下界は最高の娯楽。最高の見世物。最高の暇潰し。

それは清濁併せ持つヘルメスの紛れもない本心であり、多くの神々に共通する人々には到底理解出来ない神理じんりだろう。

「世界は『英雄』を欲している」と、嘯うそぶくようにヘルメスは言う。

平和と破滅は紙一重だ。人々が平和を謳歌する世界の陰では、今も彼方の地で黒竜が眠り、迷宮都市オラリオを滅ぼそうとする勢力があり、全ての元凶たるダンジョンがある。

世界は『英雄』を切望している。『約束の時代』を齎もたらす最後の英雄を、今か今かと待ち侘びている。

世界が望む悲願のために、ヘルメスは全てを使い潰す事を厭わない。たとえそこに大切な眷族ファミリアが居たとしても、それが己自身であっても、旅の神は喜んで身を捧げるだろう。

『英雄』を求める子供達のために、全てを賭ける。あまりにも身勝手な、だが厳然と揺るがぬ神の覚悟がそこにはあった。

だからヘルメスは器を探している。

最後の英雄に足る未完の器。闇を斬り裂く雷光のような、数千年の停滞を覆す『光』。

ともすれば神の傀儡、道化とも呼べる人物をヘルメスは求めており、これも見極めの一端に過ぎなかった。

眼下に広がる一方的な戦い。一本水晶の前を囲う冒険者達の熱狂を焚き付ける洗礼にして制裁。

濃密な悪意をぶつけられ、一人間抜けに転がり回っているような無様な姿を晒す少年、ベル・クラネル。『透明状態』の男に嬲イソビシヒリテイられるベルを、人の良い笑みを湛えたままヘルメスは見ていた。

それはヘルメスが火を付けた悪意シヨウ。世界最速兎レコードホルダー、「リトル・ルークー」に対する鬱憤と反感を溜め込んでいた冒険者達に漆黒どくろくの兜かぶを貸

し与え、彼らが行っている洗礼の下地を作った。

遅かれ早かれこうなっただろう。ヘルメスはただ、いずれ訪れる未来を早めただけに過ぎない。思い通りに事を運ぼうなんて端から思っていない男神は、小細工を弄し己の求める器を探し続ける。

折れてしまえば、それまでだった。器じやなかったと、ヘルメスは見切りをつけただろう。しかし存外、ベルは粘る。その半生で欠片も受けなかった悪意に曝されながら、齒を食い縛り心折れぬように立ち向かっている。

そして、そんな彼を助けようとする仲間達。数の不利を物ともせず果敢に立ち向かう姿は、ヘルメスをして胸を打たれる光景だった。

これはひよつとしたら、ひよつとするかも知れない。悪意に抗う輝きを前に、ヘルメスは思う。もつと試練を課し、その本質を見極めれば——ベル・クラネルは最後の英雄に足る器であると、証明するかも知れない。

ヘルメスは『英雄』を欲している。

世界も、人々も、名も知れぬ小さな幼女さえ求める最後の英雄を、ヘルメスは探し求めている。

だから。ヘルメスがベルに手を出すのは、半ば必然だった。

大神ゼウスの置土産。彼の「フアミリア」が遺した系譜の末裔。素質は十分にあると予てから思っていた。

今ここでなくとも、ヘルメスはいずれ試しただろう。ベル・クラネルという少年の器を、最後の英雄ラストヒーローに足るか否かを。

それが運命であるかのように、ヘルメスはそうしただろう。

——たとえば、少年ベルを育てた大神ろうじんに『決して目覚めさせてはならぬ』と言い含められていたとしても。

神の視座ゆえに、神の傲慢ゆえに、ヘルメスもまたそれを御せる駒だどしか思っていなかった。

音もなく忍び寄る、泥濘の如き暗い闇。

木々の上に佇む旅の神とその従者を森の底から見つめる、凍てついた太陽のような銀の瞳は。

その暗い輝きに悍ましい程の憎悪を宿し、ただただ神を睨んでい

た。

「あー……『ハデス・ヘッド』が壊されちゃったか」
「……」

ベルの回し蹴りを側頭部に受けて漆黒の兜を破碎された男に「あ
ちやー」とヘルメスは旅行帽に手を乗せる。ここまで来たら逆転の目
もないだろう。一先ずベルは、ヘルメスの目に適う成果を残して見せ
たわけだ。

「しかしあれが壊されるなんて……貸しただけのつもりだったんだけ
どなあ。ごめんよアスファイ、壊れちゃったみたいだ」
「……」

「おいおい、怒ってるのか？ 無視はひどいぜ」

とぼけるように笑ってヘルメスは振り返る。背後で不機嫌な顔を
しているだろう眷族の機嫌を取るために。

しかし——そこには誰もおらず。

嫌に乾いた風だけが、誰もいない枝先の上を吹き抜けていった。

「アスファイ……？」

ぞつつ、と、得体の知れない悪寒に襲われたヘルメスは首を回して
アスファイを探す。右も左にも誰もいない。まさかと思い、下を見る。

そこには、地面に倒れるアスファイが——歩脚を千切り取られた虫の
ように転がる、無惨にも手足を斬り落とされた従者の姿が、あった。

「う……あ……」

「——アスファイ!？」

普段耳にする清廉な美声とは程遠い、潰れた呻き声。明らかに尋常
ではない従者の姿に、ヘルメスは橙黄色の目を剥いて枝から飛び降り
る。

その瞬間、嫌に時間が遅くなった。自分の影に、闇に落ちるような
感覚に手先が冷え、「逃げてください、ヘルメス様」と口を動かすアス
ファイの様子がはつきりと見て取れた。

しかし、既に空中に身を投げ出したヘルメスには何も出来ない。何

も出来ないまま、男神は落下し——突如として広がった灰色の残影に、一瞬にして絡め取られる。

「!?」

声を上げる間もなく、ヘルメスは地面に叩きつけられた。自分の体重に乗せられた軽い感触。顔から地面にぶつかったヘルメスは、しかし神の眉目を何一つ損なう事なく、己を拘束する者を肩越しに見上げる。

そこには、生まれより伸びる灰髪影に潜む、右眼に暗い輪の浮かんだ不死があった。

「……貴様は後だ、アスファイ・アル・アンドロメダ。私の問い掛けの答えによつては生かしてやる」

ゴトリと、『女神の祝福』をアスファイの前に放り投げた。『灰』は拘束したヘルメスに眼を向ける。腕を念入りに縛り上げた上で仰向けに転がし、男神の腹の上に乗った。

白く端正な幼女の相貌は、憎悪によつて歪んでいる。

「まずは貴様だ、薄汚い神め。よくも、よくもベルに神の試練など差し向けたな。貴様の下らぬ願望のために。その報い、貴様の命をもつて

——」

「ああ、悪いが口上を聞いている暇はないんだ」

右半身より闇を垂れ流す。『灰』の台詞をヘルメスは遮る。拘束されているにも関わらず余裕を含む笑みを見せるヘルメスは、次の瞬間、表情を消して神威を解放した。

「アスファイを助けなきやいけないんでね——どいて貰おうか」

仰向けに倒れる男神を中心に、神の波動が拡散する。

神威。それは超越存在である神々が神々であると悟らせる威光。地上に降り、全知零能の身となつてなお人類を畏怖させる神の波動は、人類の頭を垂れさせ従わせる力がある。

ヘルメスは知っている。『灰』は、紛れもなく人であると。如何に不遜な態度を取り、神々を敬わぬ姿勢を見せようと、その腹の底では確かに恐怖しているのだ。

恐怖がないのではない。畏怖を感じぬ訳ではない。『灰』はその

表し方を忘れていてだけで、感情がある。当然、神威しんいを発動すれば、
“灰”は間違まちがいなく怯む。

それは大神ゼウスも間違まちがいなくであろうと太鼓判を押した事実だ。そして現実げんじつに“灰”は硬直し、明らかに動きを止めている。

——仮にヘルメスが平素の状況に置かれていたなら、そのような愚は犯さなかつただろう。旅の神にして伝令神たるヘルメスは、受け渡される言葉の重みをどの神よりも知っている。

だがヘルメスは、神威しんいを解放した。他ならぬアスフィを、愛する眷族を助けるために男神は迷わず選択した。

その選択が、大神ゼウスの忠告を裏切るものだったとしても。

アスフィの命には代えられない。ヘルメスはともすれば己の命よりも、それを優先したのである。

だから——“それ”が目覚めたのは、必然であった。

神威しんいに怯んだ“灰”の意識が消失し——裏返る。

瞬間、世界は闇に包まれた。

『決して目覚めさせてはならぬ』

“灰”についてヘルメスに話す折、大神ゼウスは何度もその忠告を呟いた。優男を気取るヘルメスが思わず頬を歪める程に繰り返された言葉は、他ならぬ世界を守るための枷である。

誰よりも長く“灰”の側に在り続けた大神は気付いていた。喪失者となった不死の本質、心に淀む暗い深海、『ダークソウル』の奥深くに消え去った彼の存在に。

“灰”は、“灰”である。幼女の姿を象かたどる不死は『火の時代』の蚕食者、かつての神々に恐れられた人間の残り滓、残骸に過ぎない。

その本質は誰よりも卑小で、弱く、狂った人間だった。今はもはや、堆うずたかく積もった灰であり、風に吹き荒び揺らいでいるだけだ。

“灰”と呼ばれた不死のほとんどは、深海に達した『ダークソウル』の影響で霧散し、二度と浮かび上がらぬ底へと墜ちた。暗い深海、人間性の海の底で、ただ眠り続ける事だけが“それ”に許された全て

だった。

だが、もしも。光届かぬ闇の底すらをも照らす、圧倒的な輝きがあったのなら。生きとし生ける人の全てを平服させる、神の威光に照らされたのなら。

“それ”は目覚め、深海より顔を擡げ、水面を覗き込む者を見返すだろう。

深淵を覗く時、深淵もこちらを覗くように。

“それ”は嗤い、深海の底に立ち——再び世界に顕現した。

「——ヒツヒツ」

闇が、溢れ返る。ヘルメスの発した神威を覆い隠す程に、局地的に、濃密に、深淵の濁流が席卷する。

ヘルメスは吞まれた。アスフィもまた。右も左も前も後ろも、上も下も分からぬ闇の中。なまあたたかな人間性に抱かれる彼らが目にしたのは——どうしようもなく浅ましく嗤う、不死の顔貌。

卑小、卑劣、あるいは卑屈。目を細め、口角を歪ませ、唇を下品に変形させるその幼女は、紛れもなく“灰”と呼ばれていた者の本質。繰り返される『火の時代』に現れ、放浪し、世を啜り尽くした蚕食者。もはや誰も知らぬ、知ってはならぬ、深海に溶解落ちた最後の薪の王の姿。

——かつての神々が忌み嫌い、封じ込めようとしたその者の名は、“小人の狂王”という。

「ああ、ひどいじゃあないか、君」

“狂王”が声を発する。謳うように、嘆くように擦り鳴らされた古鐘の響きは、だがおどろおどろしくヘルメスの耳朶を揺らした。

「海にまどろむばかりの私を、神の威光で照らすなんて」

瞬間、ぞわりと言葉が蠢く。比喻ではなく物理的に、ヘルメスの耳の中でぞぶぞぶと揺蕩い、脳へ向けて揺れ動く。

「眠れる者は起こされざると、母に教わらなかったのかね？」

這いずる言葉は重ねられる。男神の腹の上に乗った“狂王”は三

それでもまだ、足りぬと言わんばかりに。『狂王』は離れ、周囲を呑み込み広がりつつある闇の中に手を伸ばし——半ばより折れた刃の一振りを掴む。

「神どもに、深淵の呪いあれ」

柄を両手で掴み、ゆつくりと『狂王』は頭上へ掲げた。刃を下に、無感動に見下す闇色の瞳の下、『狂王』はヘルメスの胸にそれを突き立てんと振り下ろし。

新たな神威しんいが彼方に光り、『狂王』の発した闇を吹き飛ばし、掻き消した。

「——ああ、ベル」

折れた刃を取り落とす。土の上に転がる半身に見向きもせず、『狂王』は彼方を見遣っている。

「ベル」

全ての闇がソウルとなり、『灰』の深海に還っていく。折れた刃もまた同じように消えて、立ち上がった幼女はふらふらと頭を揺らしながらゆつくりと彼方へ歩き去っていった。

静寂だけが、その場に取り残された。仰向けのままのヘルメスも、手足を切り取られ喉を潰されたアスファイも動かない。だがやがて、ごふりと吐血したヘルメスは、うつ伏せになって自由になった腕で這いずった。

「アス、ファイ……！」

ここに到るまでヘルメスの神意は一つだった。己の眷族たる、アスファイを助ける事。今は何を置いてもそれを果たすべく、かろうじて這いずるヘルメスは——アスファイの側に残された黄金の瓶、『女神の祝福』をその手に掴んだ。

「ベル」

擦り鳴らされる古鐘の声に、少年は振り向いた。

「アスカ！」

ヘステイア、リリルカ、ヴェルフ、リユー、命ミコト、千草チグサ、桜花オウカに囲ま

れる少年は、森に佇む少女に歓声を上げる。何処にいたのかは分からないけど、きつと自分を探してくれていたのだろう。笑顔で手を振るベルにアスカは薄く微笑んで、小さな歩みを進める。

「――止まりなさい」

アスカが茂みから出た所で、その声を発したのはリユー・リオンだった。「えっ、リユーさん？」と疑問の声を上げるベルに構わず、鋭い眼差しを保つ覆面のエルフは強い口調で詰問する。

「『灰』、貴方に一つ質問します。何処で何を、やっていたのですか」
「……？」

リユーの鋭い空色の瞳に、アスカは小首を傾げるばかりだ。何を言っているのか分からないと言う風な少女は一步踏み出そうとしたが、リユーが武器を構えてまで阻止する。

過剰な反応に驚くヘステイアは「おいおい、覆面君……」と窘めようとしたが、言葉を失った。アスカから漂ってくる微かな香り、その鉄臭い匂いに気付いたからだ。

他の面々もそれに気付き、少女を見遣り、驚愕を刻む。

アスカの身を包む闇色の長衣。よく見ればそれは、斑模様になれている。黒の目立つ、赤。まるで大量の血飛沫を浴びたかのような汚れに、一同は息を飲んだ。

「もう一度質問します。何処で、何を、やっていたのですか」

鋭利な眼差しを崩さないリユーは、更に強く問い掛けた。リユーがここまで警戒するのは何もアスカが血に汚れているからだけではない。

ヘステイア・ナイフ
得物ヘステイア・ナイフを拾った時にも感じた匂いが、本質的に正義に立つリユーの心を沸き立たせた。

「……」

アスカは何も答えない。真実何とも言えないのか、それとも後ろ暗い何かをしていたのか。常日頃と違う、茫洋とした表情で佇む少女は、凍てついた太陽のような瞳で見返すだけだった。

双方動かず、緊迫した時間が流れる。一本水晶を背に光に塗れるベ

ル達と、森の影の中にいるアスカ。僅かな、しかし永遠にも思える対時は、18階層の異変によって断絶した。

太陽の役割を果たす天井の白水晶に影が生まれる。バキリツ、と音を立てて亀裂が走り、現れたのは——階層主。

漆黒の硬肌に覆われた黒い『ゴライアス』。通常では在り得ない安全階層でのモンスター出現に加え、『モンスターレックス迷宮の孤王』が既定階層を超えて産まれる特大の異常事態。イレギュラー

信じられぬ現実を前におの慄く一同の中で、アスカだけは心ここにあらずといった瞳で『ゴライアス』を眺めていた。

冒険者を襲うモンスターを狩る。

扱うのは《傭兵の双刀》。魔石まげいしよを狙い、斬り裂き、砕く。灰髪ともども【回転斬り】によつて回る“灰”は、竜巻の如く曲がりくねった軌跡を描いてモンスターを斬滅し続けた。

意識が霞む。記憶が遠い。私が何故こうしているのか分からない。「助かった!」と礼を言う獣人を無視して“灰”はベルを襲った無法者達を助ける。普段ならば、そんな事はしない。何故なら彼らは明確な『敵』だ。“灰”の唯一であるベルを襲撃したのならば、それだけでももう生かす価値のない『敵』と断定する。

いつからだ。いつから私は、私を見失っていた。眼を閉じても、そこには深淵の海しかない。

それなのに、生かしているのは——

ああ、それでも私が為すべきは——

——ベルが、助けようと言ったから。だから、その意志を全うする助けとなる。

焦点の合っていないなかった銀の瞳に伶俐さが戻る。惰性で動いていた少女の体は瞬間、加速し凄まじい速さでモンスターの群れを屠る。時間が必要だ。折れた刀身が、目覚めるまでの時間。ベルを襲った冒険者達——モルド・ラトローを筆頭とした一派——を助けた“灰”は、その力に驚愕する周りの者を置いて、一人黒いゴライアスを見遣

る。

通常種とは色の違う巨人。普段ならば時間をかけ、その『未知』を解明するところだが——その暇も意味も今はない。

ゴライアスは巨人。それだけ分かっていれば十分だ。アスカは青白いソウルを掌に集め、一本の大剣、《ストームルーラー》を握り締める。

《ストームルーラー》。またの名を「巨人殺し」の大剣。折れた刀身は今でも嵐の力を宿し、巨人を地に打ち倒す。

刀身の折れた大剣を構える「灰」は、嵐の力が目覚めるのを待つ。静かなる黒色の大剣は、持ち手が狙いを定める獲物が巨人であると悟ったのか、その刀身から嵐を放出し、凄まじい風を轟かせながら楔のように固定する。

嵐を纏う《ストームルーラー》。それを両手で大上段に振り上げた「灰」は、その力を解放した。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?!』

黒いゴライアスが嵐の斬撃に見舞われる。ダンジョンの憎悪により産出せし死の体現、絶殺を掲げる神への尖兵は、しかしたったの一撃で深い斬傷を刻まれ、片膝をつく。

通常のゴライオスとは違い、黒いゴライアスの潜在能力はLv.5にも達するだろう。18階層を拠点として『下層』に挑戦する程度の冒険者では、全員で束になってかかっても勝率は悪い。

だがここには、「灰」がいる。【鷹の目】の二つ名を持つ巨人をただ神に連なるからと殺し、『火の時代』の特異点、ドラングレイグに戦争を仕掛けた巨人達を王ごと滅ぼし、薪の王「巨人ヨーム」を真っ向から討ち果たした不死がいる。

「灰」の小さな体に蓄積された対巨人戦の経験。それは永き時を経て色褪せず、今再び蘇る。黒いゴライアスを相手に《ストームルーラー》を構える「灰」は、7M程の巨人が赤い光の粒子を発散し再生するのを目撃した。

「流石に、一撃では倒し切れんか」

——ならば、数で押し通すまで。

大量の《ストームルーラー》を広範囲に突き刺す。灰は、ソウルの補強により全ての剣へソウルを注ぎ戦技を待機状態にする。嵐を纏う無数の大剣が乱立する戦場で、灰は嵐の如く疾走した。

生まれより伸びる髪が風に揉まれ暴れ回る。襲いかかるモンスターを鎧袖一触に打払い、ゴライアスの放つ魔力を込めた叫び、『咆哮』を避けて戦技【嵐の王】を叩き込む。

苦痛の叫喚を上げて膝を突くゴライアスを尻目に、灰は手持ちの《ストームルーラー》を突き立てて新たな《ストームルーラー》を掴む。畳み掛けるように【嵐の王】を解放、粒子を振り撒きながら再生するゴライアスに嵐の斬撃を連続で見舞う。

可能ならば脚を断ち斬りたい所だが、流石に再生が追いついている。しかしこのままなら黒いゴライアスは完封されたまま倒されるだろう。

そう上手く行かない事など、灰はよく知っている。重なる嵐の斬撃を強靱で振り払ったゴライアスが両腕を掲げた時点で、灰は退避を選択した。

直後振り下ろされる、巨人の豪腕。周囲のモンスター諸共、ゴライアスの一撃は突き刺さる大剣群を地盤ごと吹き飛ばす。

それをソウルに還し回収しながら、灰は風圧を利用して滑空し距離を取った。着地した灰が顔を上げれば、全ての傷を再生し立ち上がった巨人が雄叫びを上げている。ぎよろりと蠢く巨大な眼球は憤怒を煮え立たせ、灰一人を睥睨していた。

憎悪は取った。後は物量で押されぬよう立ち回りつつ、《ストームルーラー》の戦技で仕留めればいい。それで終わると、灰は推測するが――下から迸るソウルの気配に銀の半眼を細める。

「まずいな……」

灰は後方を見遣り戦力を確認する。明確な味方は同じ【ファミア】であるベルとリルルカ、パーティを組んでいるヴェルフ、捜索隊であるリユート【タケミカヅチ・ファミリア】の一名。救出したモルド一派もいるが奴らは『敵』だ、協力は出来ない。

ヘステイアとヒタチ・千草の姿がない。裏方に回ったか、自主的に

避難したか。どちらでも良いが足を引つ張られないのは有り難い。

しかし状況は悪い。あの黒いゴライアスにまともに対抗できるのはギルドの記録からLv.4と知っているリユー・リオンのみ。他の者に《ストームルーラー》を配るにしても人数が足りない。

せめて『リヴィラの街』から増援を引つ張つてこなければ——一時的撤退も視野に入れる。灰”は、完全再生したゴライアスに視線を戻したところで、駆け付ける大量の足音に気付く。

「よお！ お前がアスカかあ!? お前んとこの主神サマから頼まれて援軍に来たぜ！」

「貴公……確か宿場街の大頭、ボールス・エルダーか」

「おうよ！ リヴィラの首領、ボールス様たあ俺の事だ！ それよか見せてもらったぜ、すげえ魔剣を持つてやがんな!? あれがありやあ、あの黒い階層主も一発だろうよ！」

「そう上手くはいかなかったがな。しかし、援軍か。であれば有り難い。貴公にこれを貸してやる」

言いながら、灰”は三十振りの《ストームルーラー》をボールスの前に顕現させる。

「うおっ!? どっから出しやがった!？」

「どうでも良からう。それよりも、適当な者を見繕つてそれを貸与しろ。嵐を纏った状態で振るえば貴公が見たのと同じ斬撃を誰でも繰り出せる。

それでゴライアスの相手は貴公らがやれ。私は——魔性の相手をする」

「何だか知らんが、引き受けたぜ! ……それとあんた、金になりそうな《スキル》を持つてそうだな。どうだ、事が終わったら俺と組まねえか?」

「断る」

気持ちの良い笑みで金勘定を弾くボールスの提案を斬り捨てて、灰”はボールスが大声で指示を出す冒険者達に目を向ける。統一感のない装備の冒険者達は皆、ボールスが掲げる《ストームルーラー》に目を奪われていた。

欲望を隠しもしないギラついた視線。それほど力の渴望があるのなら、存分に奮ってくれるだろう。その中で若干浮いているベル達も確認して、「灰」はゴライアスに潰された中央樹ちゅうおうじゆを遠く眺めた。

半ばより地面に埋まり、太い幹もひしゃげ見る影もない巨大樹。その根にあつた洞窟も完全に塞がれた19階層への入り口は——突如膨大な爆炎を噴き上げて炎上する。

「なっ、なんだあつ!？」

こちらまで届く熱波にボールスが叫び、冒険者が、モンスターが、階層主ゴライアスさえも燃え盛る中央樹に視線を集める。

ゴウゴウと音を立てて炎上する巨大樹に、バキリツ、と音を立てて亀裂が走り——次の瞬間、真つ二つに割れ崩れながら大爆発が巻き起こった。

『——ウウウウオオオツ!!!』

大炎上する巨大樹の残骸より、それは現れる。

灼熱に燃える頑強な実体。削り出した巖のようなその体は眩い炎を纏い、崩れ落ちた中央樹の残骸の火を更に猛らせる。

大地を踏み締める剛脚は太く、高温に熱された剣のような爪は殺意に満ち溢れている。4 Mモデルはあるうかという体を前屈みに構えるそれには、側頭部より生える巨大な二本角があつた。

それは、この世に在らざりしもの。

可能性などではない、下界の例外。

何処いずこより流れ着き、彷徨い出いづる魔性。

——ソウルを喰らう、禁忌の怪物。

その名を——「炎に潜むもの」と云う。

「現れたか……」

彼方で咆哮と爆炎を発する魔性に、「灰」は静かに呟いた。

冷静であるのは幼女だけだ。冒険者達はこれまで見た事もない怪物に硬直している。

当然だろう。あれは、思考を持つ高位の生命こそを喰らうソウルの天敵。

怪物と人類の戦いが数千年の時を経て不可逆となった宿命ならば、魔性とは在り得べからざる魂の殺戮者。

天と地を回る輪廻の理、それを噛み砕く神の摂理をも超越した真なる怪物。

如何に『偉業』を果たした冒険者とはいえ、それを肌身で感じれば思考が停止してしまうのも無理はない。

あんなものと遭遇し、無事であった人類は誰もいないのだから。

ただ一人——神の枷に囚われた、〃灰〃を除いて。

「――」

中央樹だった物の破片が落ち、燃え広がる草原を〃灰〃は瞳に映す。そして眼を閉じ、薄く研いだ銀の半眼を露出し、一息に疾走した。

「炎に潜むもの」が現れた理由は分かっている。どうやって感知したかは知らないが、あれは〃灰〃の尋常ならざるソウル——『ダークソウル』の匂いを嗅ぎつけてやってきた。

ならばあれは、〃灰〃の獲物だ。元より魔性は、〃灰〃の定めた使命の一つ。

下界を放浪し、色のない濃霧に覆われた地域を探し、ソウルを喰らいし魔性を狩る。

それこそが、〃灰〃の使命であるならば。迷いはない、〃灰〃は燃える草原に立ち、「炎に潜むもの」と対峙する。

——さあ、魔性狩りを始めよう。

暗いソウルの領域より、《アルトリウスの大剣》と《アルトリウスの大盾》を抜き放った〃灰〃に——「炎に潜むもの」は火を撒き散らし、咆哮した。

「初見」の敵に対して〃灰〃が行う行動は大きく分けて二つある。

一つは『経験』から判断した推測を基に弱点を突く戦い方。不確か度勝率も低い、嵌まれば時間がかからないという利点がある。

もう一つは相手の『未知』を出し尽くすまで防御に徹するという方法。必要ならば己の死すらも許容し、徹底的に分析する。時間はかか

るが『未知』を見極めれば最小の労力で敵を倒せる。

「灰」が今回選択したのは後者だ。18階層中のモンスターは黒い『ゴライアス』の元に集まっており、そのゴライアスも《ストームルーラー》によって著しい劣勢を強いられている。

つまりは一对一の状況が持続する環境であり、「炎に潜むもの」があのゴライアスを襲う危険性を考えれば、むしろここで時間を稼ぐ方が都合が良い。

完全にこちらのソウルを狙う「炎に潜むもの」に対し、「灰」は《アルトリウスの大剣》と《アルトリウスの大盾》を構えた。

後者を選んだ「灰」は極めて正統派オーソドックスな戦法を取る。

並の相手であれば直剣と中盾、小さき敵なら短剣と小盾。

そして眼前で燃え盛る炎の魔性に対しては、大剣と大盾を使うようにしている。

理由はそれらが基本的な武装だからだ。変な尖りや使い難さがなく、誰にでも扱えるよう設計されている。大抵の状況は剣と盾で斬り抜けられる。

それを『経験』によって知っている「灰」は、まず相手の出方を待つ。迂闊に斬り掛かって勝った例ためしがないので当然の判断だ。

不釣り合いな大剣と大盾を構えたまま動かない幼女に焦れたのか、先に飛び出したのは「炎に潜むもの」だった。雄叫びを上げ屈強な脚と腕で地面を叩いて舞い上がった魔性は、火に燃える拳を組み大上段から叩きつけた。

眼を焼く程の光と、耳を聳そとする大爆音が「灰」の隣で炸裂した。真つ当なステップで回避した「灰」は大盾より伝わる熱と衝撃で威力を逆算する。

(まともに食らえば八割は削られるか。即死でないだけマシだが、樂觀は出来んな)

所感を記憶に書き留め、「灰」は次の行動を待つ。ジリジリと足を滑らせ間合いを測る幼女に「炎に潜むもの」は両手の炎を更に燃え上がらせ殴りつけた。

途端、轟く大爆炎。ゴライアスと戦う冒険者の何名かが思わず顔を

回す程に大炸裂した爆炎は、剛拳が放たれる度に追従し巨大な円形の炎を散らす。

それを大盾で防ぎ、あるいは躲し、「灰」は検証を重ねていく。
(爆炎の範囲が尋常ではない。その上連続で振るわれる。厄介な攻撃だ)

追い立てられるように後退する「灰」を魔性は猛追し、剛拳と大爆炎の連打を見舞う。その内の一発が「灰」の大盾に直撃し、幼女は弾き飛ばされた。

空中を平行に直進し、数十Mメートル離れた場所に着地する「灰」。その瞬間、幼女の体が影に覆われ——上を見上げれば、莫大な炎を纏う魔性が、「灰」目掛けて落下していた。

『ウオオオツ!!』

「——」
生半可な実力者なら強制停止リストレイトを引き起こす咆哮が「灰」の全身にぶつかる。そのまま隕石のように落下した「炎に潜むもの」が着弾し——大爆発が巻き起こった。

燃える草原を地盤ごと吹き飛ばす巨大な爆炎。まさに隕石が落下したかの如くクレーター状に焼き潰された中心で「炎に潜むもの」は咆哮し。

その肩に。天より落ちてきた「灰」が両手持ちする《アルトリウスの大剣》が突き立てられた。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

「炎に潜むもの」が悲鳴を上げる。その場で暴れ回り「灰」を引き剥がそうとするが、幼女は更に深々と大剣を刺し込み魔性の傷を広げた。

そして掴まれそうになったところで離脱し、怒りの咆哮を上げる「炎に潜むもの」と再び対峙する。

「炎に潜むもの」が落下した瞬間、「灰」は入れ替わるように飛び上がった。そして大盾に小さな体を隠し爆炎に押し出される形で上昇、空中で大剣を両手持ちにして肩口に攻撃したのである。

『経験』 済みの動きだ。何も難しい事はない。落下致命など幾度も繰り返してきた“灰”は、「炎に潜むもの」に関する大凡の動きを見切ったと判断する。

「飛びかかりと爆炎を纏う連撃が主流。それ以外の行動は小手先に過ぎない。」

ならば良い。そこまで分かれば十分だ。——狩らせて貰うぞ」

燃え盛る炎を反射する凍てついた太陽のような眼で呟いて、“灰”は大地を蹴った。

それからは一方的な蹂躪だ。大盾を捨て、《アルトリウスの大剣》のみとなった“灰”は「炎に潜むもの」の攻撃を的確に見切り、反撃する。

ただそれだけの繰り返し。爆炎の影響範囲を見極めて紙一重で躲し、飛びかかりは股を潜り抜けるか戦技によって対応し、残りの動作は隙を晒して攻撃を待つ。

これがただの怪物であればこうはいかない。どんなに知性が欠けた相手でも学習はする。同じ事の繰り返しで勝てる相手など早々はない。

だが、魔性は違う。由来の知れぬ魂喰らい共は、確かに思考する怪物であり、だがなにかの模倣に過ぎない。

魔性には実体化するために根を下ろす何らかの伝承があり、それに擬えた行動しか出来ない。

かつて“灰”が巡った世界各地の魔性が良い例だろう。英雄『竜殺しのジェルジオ』が倒した伝承の怪物、シレイナ湖畔に潜む竜を模倣した「白帯びの湖竜」は決して湖から出る事はなかった。

『騎士ガラード』が王女アルティスを救おうと挑んだ『竜の谷』より降り立ちし「雪嶺の飛竜」、その似姿たる魔性は鎖された雪山にしか存在し得なかった。

魔性は、所詮は魔性だ。如何に強大な力を蓄えていたとしても、伝承に定められた在り方から逃れる事は出来ない。模倣する事しか能がない、原生の怪物。それは“灰”にとって格好の獲物である。

「炎に潜むもの」もそうだ。何れの伝承より現れたか定かではない

が、この魔性は猛る炎のままに暴れ狂うだけの似姿。炎の模倣とも言える原始的な暴力の化身は、逆に言えばそれだけの猛威でしかない。分かりやすく強いただけの魔性は、^{デーモン}「灰」の敵ではなかった。「炎に潜むもの」のソウルを削り取るだけの作業を続ける「灰」は、何れ来たる戦いの終息を予見する。

——それが、いけなかったのだろう。何故ならばここは戦場で、^{イレギュラー}異常事態が進行している。

ましてや「炎に潜むもの」は「初見」の敵だ。それをただの不死如きが、一切の瑕疵なく倒せると考えたのが間違이었다。

爆炎の剛拳を回避し、斬り裂く。あまりに当たらず、一方的に攻撃されるのに激怒したのか、「炎に潜むもの」の攻撃が激しくなる。

それすらも軽やかに躲し、作業に没頭する「灰」の背後に——突然現れた『ゴライアス』は、死物狂いの『咆哮』^{ハウル}を解き放った。

今まさに「炎に潜むもの」の攻撃を避けた、「灰」に向かって。

『オオ』

「——！」

間一髪、《アルトリウスの大剣》による防御が間に合ったが、それで防ぎ切れるものではない。『咆哮』^{ハウル}が直撃した「灰」はいとも容易く吹き飛ばされ、小さな体が宙を舞う。

銀の半眼で回る視界を冷静に観察すれば、こちらに殺到する冒険者達。おそらくは致命傷を負うまで追い詰めたゴライアスが、「炎に潜むもの」を喰らわんと猛進したのだろう。

（まづいな——）

ああ、まづい。あの黒い『ゴライアス』も「炎に潜むもの」も、常識では在り得ない力を持った怪物だ。

片や神すらも喰らいその力を我が物とする『隻眼の竜』と同じ『黒色』であり、片やソウルを無限に喰らい際限なく強化されるソウルの怪物。それが互いに喰らい合う光景を眼にしながら、何も出来ない「灰」は。

せめても、空中で奇跡を発動し——「灰」は呆気なく墜落し、落下

死した。

冒険者達は怒号を上げて『ゴライアス』を追いかけていた。

「灰」より貸与された《ストームルーラー》のおかげで難なく『ゴライアス』を追い詰めていた冒険者達は、最後の止めを刺す前に逃亡した階層主を全員で追った。

だが歩幅が違う。通常の『ゴライアス』より速い黒い『ゴライアス』は、冒険者達を置き去りにして一直線に炎上する中央樹の残骸に突進した。

あらん限りの罵倒を叫びながら走っていた冒険者達は、誰ともなく足を止め、その光景に目を皿にする。

「……な、なんだありやあ？ なにしてやがんだ……？」

一同を代表してボールスが困惑の声を上げた。彼らの見たものは、突然現れた新種と思しき炎の怪物と喰らい合う階層主^{ゴライアス}。モンスターがモンスターを襲うだけでも異常なのに、捕食行動をしない筈のゴライアスが焼かれるのも構わず食い千切っている。

呆然と足を止める冒険者達。それがいけなかった。せめて彼らが《ストームルーラー》の戦技を放つていれば、この後の悪夢が顕現する事はなかっただろう。

7 M^{メドル}の巨人と4 M^{メドル}の魔人が互いを喰う。貪り、噛みつき、組み合わせる。転がる怪物達は——やがて一つの影となる。

「……………は？」

呆然と声を上げたのは誰だったか。口を開けて成り行きを見守っていた冒険者達の前で、それは立ち上がった。

——10 M^{メドル}はあろうかという、炎の巨人。黒色の外皮の上で燃え盛る火炎は、最初からそうであったかのように馴染んでいる。

だが、そんな筈はない。敵は手負いの怪物二体だった筈だ。間違っても一体だけの筈がない。

けれど、目の前の現実がそれを否定している。その意味する所は

「……合体、した……？」

眩いたのは、ベル・クラネル。《ストームルーラー》ではなくただの大剣を持つ少年は、有り得ない妄想を口にした。

しかし、誰もそれを否定できない。現実にはただの一体となった燃える巨人は、巨大な顎を開き、その奥から眩い輝きを溢れ出させる。

瞬間、粟立つ冒険者達の肌。彼らの危機察知能力が、あれはヤバイと警鐘を鳴らす。

だが——全てが遅く。

回避し始めた冒険者の視界も、18階層の岩壁も、崩れ落ちた天井の水晶も。

——全てが、眩い灼熱の光に飲み込まれ。

大地を揺るがす大爆発が、巨人を中心に巻き起こった。

呻き声だけが、立ち上っていた。

中央樹の残骸があった場所に立ち尽くす巨人、炭化した草原に佇むゴライアスが放ったのは——『咆哮』。

しかし、ただの『咆哮』ではない。「炎に潜むもの」との捕食競争に打ち勝ち、その力を我が物としたゴライアスの『咆哮』は、炎を蓄え、全方位に極限の灼熱を放出する広範囲攻撃へと変貌していた。

それに巻き込まれた冒険者達は、皆が瀕死だ。尋常ではない衝撃に加え、上級冒険者の『耐久』を物ともしない灼熱の炎。吹き飛ばされ倒れ伏す彼らの誰もが体の半分以上を焼かれ、行動不能に陥っていた。

——その中にはベル・クラネルと、少年が行動を共にした者達も含まれている。

「ベル様!?! ベル様あつ!?!」

倒れる少年に縋り付いて懇願するようにリルルカが泣き叫ぶ。ベルは目を覚まさない。装甲の破壊されたインナーは肌と同化し、焼け爛れている。明らかな重症だ。もしかしたら致命傷かも知れない。そんな予測を否定するように、リルルカは必死で呼びかける。

側で泣いている千草チグサも同じだ。命ミコトと桜花オウカもあの『咆哮ハウル』をまともに食らい、意識を喪失していた。

特に桜花オウカの火傷がひどい。『咆哮ハウル』が炸裂する瞬間、咄嗟トコトに命ミコトとベルを庇った彼の背は火傷を通り越して炭化している。

ヒュー、ヒュー、と喉を通り抜ける呼吸音も弱々しい。この場で最も死に近いのは桜花オウカだった。

その光景を見つめるヘステイアは、どうする事も出来ない。補給拠点から持ってきた手持ちの回復薬ポーションではまるで足りない。誰から助けて良いかも判断がつかなかった。

唯一レベLv.のおかげで動ける程度の火傷しか負っていないリユートの表情も暗い。ここまでか、という諦念と絶望が場を支配しつつあった、その時。

チリンチリンと静かな鈴の音が、重い空気に転がった。

ついで眼下に広がったのは、光り輝く魔法円マジックサークル。倒れる冒険者達に留まらず、立ち尽くすゴライアスまで射程圏に収める複雑な文様の円は、光を溢れさせ癒やしの力を解放する。

「太陽の光の癒し」

おびただしい光の粒子が、太陽のような暖かな光が倒れる冒険者達を包み込み、その傷の全てを治していく。莫大な精神力マインドを消費する、規格外の治癒魔法。それが出来る者の心当たりなんてヘステイアは一人しか知らなかった。

「……ああ。間に合ったようだな」

「——アスカ君！」

弾かれるようにヘステイアが振り向くと、森から灰髪の少女が現れた。何事もなく歩くアスカはヘステイアの側に立ち、足元のベルを見つめる。

「生きていたか、ベル。それで良い、貴公は『運』が良かった」

火傷が痕も残さず治り、苦しげだった顔が安らかになった少年に一度眼を閉じて、アスカは彼方で佇む炎ゴライアスの巨人を眺める。

「どうやら歩く力はないらしいな。如何に魔性を取り込んだとは言え、それで消費した生命力が戻る事はない。あれは必死の抵抗、手負

いの獣の足掻きというわけだ」

呟いて、『ストームルーラー』を顕現させる。炎を取り込んだところで、巨人には変わりない。まして手負いであるならば、アスカ一人でも仕留められる。

ならば問題は一つだな、と——幼女が考えていたその時。

「桜花オウカっ!? 桜花オウカツ!!」

涙を止めない少女の叫びが、『灰』の鼓膜を煩わしく震わせた。

「どうしたんだい!?!」

「桜花オウカのっ、桜花オウカの傷が……治ってない……!」

「何だって!?!」

慌てて駆け寄ったヘスティアに千草チグサは嗚咽を零しながら言う。驚愕したヘスティアが見れば、呼吸のか細い青年の火傷は手酷いままだった。

「アスカ君! この子の傷が治ってない! 早く治癒魔法をかけてくれ!」

「……」

焦るヘスティアに呼ばれても、『灰』は黙ったままだった。黙ったまま、炎の巨人を眺めている。

「何をしているんだ、アスカ君!?! 早くしないと手遅れになる!」

「構わんだろう!」

「……え?」

「構わんと言っている。そのまま死なせてやれ」

「……何を、言っているんだい……?」

信じられない『灰』の言葉に呆然となったヘスティアは、しかしすぐに眦まなじりを吊り上げて佇む幼女に食って掛かる。

「何を言っているんだ、アスカ君……! この子はボク達を助けてくれた仲間だろう!?!」

「仲間ではない。『敵対者』だ」

首だけを動かす不死は、銀の半眼を冷たく光らせる。

「その男は、ベルを窮地に陥れた『敵対者』。私が助ける義理などない」
「……まさか『怪物進呈』パス・パレイドの事を言っているのかい!?! けれどこの子達

はベル君を助けに来た！ 誰の強要でもなく、自分の意志でここまで来たんだ！ それを見捨てるなんて、それこそ義理に反するだろ!?」
「たとえばそうだとしても、私の答えは変わらない。その男は、『敵対者』だ。私は助けない」

「——でも！ 命君は助けてるじゃないか！ なのにどうして桜花君だけっ!?!」

「だって、謝らなかつただろ?」

「え?」

首を元に戻し、背中だけを見せて「灰」は呟く。

「謝らなかつたじゃあないか。ヤマト・命も、ヒタチ・千草も謝つたというのに、その男だけが謝らなかつた。」

ならば私の、『敵対者』のまままだ。そも、己の判断が間違っているとは思わないとその男は言ったのだ。ならばそのまま死なせてやれ。それが本望というものだろう」

「……謝らなかつた……? そんな理由で、君は見捨てるっていうのか!?!」

「私の眼をしろ、ヘステイア」

振り返って、「灰」は凍てついた太陽のような眼を晒す。そこにあるのは、世界を二分するだけの眼。『協力者』か、『敵対者』か、それでしか測れない不死の狂った瞳のみ。

「私は謝罪なき者を許せない。贖罪を果たさぬ者は、何処まで行こうと『敵対者』だ。その男は謝らなかつた。だから、カシマ・桜花は私の『敵』だ。何をやろうと、何を思おうと、贖罪せぬ限りそれはずっと変わらない」

「……そんな理由にならない！ 少なくともベル君もボクも、桜花君に助けられた！ それには報いなきやいけないだろう!?!」

「それは無理だ、ヘステイア。私はな、本来何者も許す事など出来ない。それでもなお、許さなければ、人の世は回らないと教えられた。」

だから私は、贖罪を是とした。それは何者も許せない私が、それでも人を許すために己に刺し穿った軛。それが謝罪であり、贖罪である。

謝らなければ、私は『敵対者』を許せない。その男は『敵対者』だ。贖罪を果たさぬ限り——私は私を、変えられんのだ」

「……!!」

人ならぬ神の身で、ヘステイアは「灰」の言葉が真実だと悟った。それは神算鬼謀に長けぬ、純粹で大らかな慈愛の女神であるからこそ、信じられた言葉だ。

しかし、そうであるからこそヘステイアは桜花^{オウカ}を見捨てられない。やりたくはないと思いつつ、背に腹は代えられないとヘステイアは「灰」の急所を突く。

「——ベル君が怒るぞ」

「そうだな」

「君の事を一生許さないかもしれない。二度と会いたくないって、そう言うかも」

「——それでもいいさ」

「え——？」

だが、返ってきたのは肯定だった。女神から少年に視線を移す「灰」は、ほんの少しだけ優しげに眼を細める。

「それがベルとの、永遠の訣別^{けつべつ}を招くとしても。私は構わない。

とうの昔に決めている。私はベルを守りたい。この世のどんな悪意からも、ベル・クラネルを守り続ける。

その果てに——二度と我が名を、呼ばれずとも。後悔はない。何一つ」

当たり前のように、そんな事を言っつて。当たり前のように、別れを受け入れて。

「灰」は——アスカは、微笑んだのだ。家族^{ファミリア}の皆で笑い合った、あの時のように。

「ベルを頼むぞ。ヘステイア、リリルカ。私はあの怪物を、倒しに行く」

笑みを消した「灰」は、折れた大剣を垂れ下げてその場から消えた。生まれより伸びる灰髪は既に彼方に舞い、炎の巨人へと直進している。

呆然と話を聞いていた千草^{チグサ}は、希望が消え去ったと知って、滂沱の涙を流した。段々と呼吸が細くなつていく青年の手を取り、桜花^{オウカ}と力なく囁く。

ヘステイアには、どうしようもない。幼女神は「灰」の言葉に込められた覚悟を悟ってしまったのだから。

しかし——リルルカだけは違った。ベルに縋り付いていた小人族^{バルウム}の少女は、自分の涙を拭って千草^{チグサ}の元に駆け寄る。

「千草様、これを使って下さい」

「……これ、は……？」

『女神の祝福』と言います。アスカ様の持つ、最も強力な回復薬。これを飲ませれば、桜花^{オウカ}様も絶対に助かります」

「……！ 本当!?!」

「ただし！ 渡すのには条件があります」

『女神の祝福』を両手で掴んだ千草^{チグサ}は涙を止めて聞き入った。どんな過酷な運命でも背負ってみせる覚悟を秘めた少女に、リルルカは言う。

「——桜花^{オウカ}様に、アスカ様へ謝らせてください。あの方は言葉通りのお人です。謝れば、本当に許してくれるでしょう。」

「……元々は、貴方がたの蒔いた種です。必ず刈り取ってくださいね！」

同業者を私的な理由で助けられないという醜聞がアスカやベルのためにならないという本音を隠して、リルルカは『女神の祝福』を押し付けた。受け取った千草^{チグサ}は、慎重に桜花^{オウカ}の口に運び——青年の傷は優しい光に包まれて快癒し、呼吸も安らかなものになる。

人目も憚らず青年に抱きつく少女を尻目に、体の具合を確かめたりリユーは立ち上がった。そして既に交戦を始めた「灰」を睨み、木刀に手を掛ける。

「私も行きます。神ヘステイア、この場をお任せします」

「あ、うん……」

疾風のように駆け走るエルフを見送って、ヘステイアはベルの側で膝を折った。少年の手を取って、悔しいような、悲しいような表情で

唇を噛む。

「ベル君……ボクは、何も出来なかったよ……アスカ君の意志を、変えられなかった……」

ボクは、あの子の主神おやなのにね……アスカ君の事、何も分かってあげられてなかったんだ……」

女神の涙が、零れ落ちる。それは少年の白髪に落ち、弾けた。

すると、両手で優しく持つていた手が握り返される。驚くヘステイアの青みがかった瞳には、悔恨に満ちた表情のベルが目を見まわした。

「ベル君、いつから……?」

「ずっと、ずっと聞いてました。アスカの話……僕は、自分が情けないです。アスカには、いつも守られてばかりで……僕がアスカを守った事なんて、一度だってないのに……」

「ベル君……」

「だから、僕は逃げません。アスカが何をしていたとしても、絶対に逃げたりしません。あの日、逃げないって、そう決めたから……」

だから、神様——行ってきます」

「……うん。行ってらっしゃい、ベル君」

立ち上がった少年は、側に転がっていた《ストームルーラー》を手にする。

【英雄願望】アルゴノウトが発動する。リンリンと響く蓄力音チャージ。限界を知らず、限界を超える前に守られてきた少年は、限界解除する事はない。

しかしベルには、逃げないという意志がある。何からも逃げないと決めた、誓いがある。深紅の瞳ルベライトに暗い輪リングが浮かび上がり——【不転心誓】ダークサインが、【英雄願望】アルゴノウトと接続する。

リンリンという鐘の音が、ガラアン、ガラアンと崖際の祭祀場で鳴り響く古びた鐘のように変質する。嵐の支配者の名を冠する大剣に光が収束し、暗い粒子が取り巻いた。

【英雄願望】スエキルの引鉄トリガー、思い浮かべる憧憬しょうけいの存在は『カタリナの騎士ジークバルト』。

志し半ばに倒れ、だが古い友のため、火の無き灰となつてなお約束

を果たしたカタリナの勇士。

その最期が寂寥に満ちたものだとは知っていても、偉大なる英雄の物語がベルの心から消える事はない。

アスカの辿った灰の道。そこで出会ったという友の物語を胸に——ベル・クラネルは炎の巨人へ駆け出した。

その後は、特筆すべき事もない。

アスカとリユーが炎の巨人の動きを止め、ベルの放った『英雄の一撃』が巨人を真つ二つに両断した。言葉にすればそれだけだ。

それを目撃した冒険者達は沸き立っていた。熱狂し、ベルの齎した勝利を祝っていた。少年を目の敵にしていた者達も、これで認められた事だろう。

だが、そんな事はアスカには、“灰”には関係ない。

仲間にも困まれる少年を、眩しいものでも見るかのように目を細めた幼女は。

静かに、誰に知らせる事もなく、闇の中へと帰っていった。

……まあ。恥ずかしげもなく言ってしまうえば、合わせる顔がなかったのだ。

そんな感情がまだ残っていた事に、他ならぬ“灰”自身も驚いていた。こう言っては変だが、まるで若返ったような気持ちさえ感じる幼女は、何かあったかと記憶を探る。

しかし思い出せる事はなにもない。どうしたのだろうかと考えながら、まあ良いだろうと思いを切り捨てた“灰”は、その場から立ち去ろうとしたが。

幼女の小さな足に縋り付いて離さない眼帯の大男が、それを許さなかった。

「頼む、頼む！ この通りだ！ あんたの持つてるあのスゲー魔剣を譲ってくれえっ！」

大の大人が駄々をこねる子供のようになぞり叫ぶ。二度も断つたというのにまるで引き下がらない大男——ボールス・エルダーに“灰”

は辟易していた。

事の発端は貸し出した《ストームルーラー》の回収に“灰”が赴いた事だ。戦いも終わり、黒い『ゴライアス』の出現によって崩壊した正規ルートも開通してる。後は帰るだけなので、その前に回収してしまいたかったのだ。

それに否を突き付けたのがボールスだ。これはあの時へステイアの願いによって加勢に來た俺達への正当な報酬だと言って返さなかつたので、溜息をついた“灰”はソウルに変えて強制回収したのである。

ボールス達が“ソウルの業”を会得していたのなら別だったが、そうでないなら所有権はずっと“灰”にある。急に掻き消えた《ストームルーラー》に慌てふためく無法者共に勝手に分け合えと十億ヴァリスほど現金でくれてやって、さあ帰ろうとした時にボールスに縫りつかれたのだ。

「頼む、頼む、頼むー！ 必ず武器もにしてみせる！ 何だったらこの街リヴィラで俺に出来る最大限の便宜を凶つてやる！ だから頼む、譲つてくれえっ！」

「……はあ。分かった。そこまで言うなら譲つてやろう」

「ほ、本当か!?!」

武器狂ウエボンマニアの気もあるボールスにいい加減面倒になったのか、渋々“灰”は領いた。即座に立ち上がったボールスは《ストームルーラー》を受け取り危ない顔でさする。

「では、便宜とやらは任せたぞ。いずれまたここに来るだろうからな」「ん？ おお、分かっている分かってる。さっさと行きな」

「……」

けろりとした表情でしっしっしと手を振るボールスに“灰”は常日頃の半眼を更に細めた。だが何も言わず、踵を返す。

——仮に言葉を反故にするようであれば、力で分かせてやればいい。幼女はそう判断したのだ。

それを虫の知らせで感じ取ったのか、ぞぞぞと背筋が凍りついたボールスは平身低頭で先の態度を謝つたのであるが。

「すまねえ、『リトル・ルーキー』！」

ボールスとの商談のようなものから少し経った別の場所では、モルド・ラトローを筆頭とした一派がベル達に頭を下げていた。

襲いかかったにも関わらず、逆に助けられ改心した——などと言う事はなく、単純に桜花オウカを見捨てようとした『灰』の話が冒険者達の間で広がった結果だ。

『灰』はヤバい。強さもヤバいが価値観がヤバい。一度敵認定されたら謝るまですつと付け狙われてボコボコにされる——尾ひれがついているがあながち間違っていない噂話を聞いたモルドは、自主的にあの時募った仲間を掻き集めて謝罪したのだ。

無法者達なりの誠意なのか、やけに息のあつた膝に手をつけて頭を下げる光景に慌てるベル。その様子を遠く眺めていた『灰』は、近付いてくる三人の足音にずつと前から気付いていた。

「何か用か。【タケミカヅチ・ファミリア】」

振り向いた『灰』は硬い表情の三人と対峙する。ヤマト・命ミコト、ヒタチ、千草チグサを背に、カシマ・桜花オウカは一步進み出て——膝をつき、両拳で地面をついて、深々と頭を下げる。

「——済まなかった」

極東に伝わる土下座。言葉少なく、最大級の謝罪を支払った桜花オウカに、『灰』はどうでも良さそうに答えた。

「分かった。許す」

「……いいのか？」

「良いも悪いもない。謝れば許すと言ったのは私だ。貴公も、あの者らも、もはや私の『敵』ではない」

そう言つて、『灰』は立ち去ろうとする。それを止めたのは、「待つてくれ」と呼び止めた桜花オウカだった。

「何だ？ カシマ・桜花オウカ」

「……俺には、覚悟が足りなかった。あんたの【ファミリア】を切り捨てた癖に、いざ切り捨てられる側に回ったら、死にたくねえって思っちゃまった」

「それで？」

「あんたが、家族との別離も覚悟の上で俺を見捨てたつてのは聞いている。俺も……それだけの覚悟を持つつもりだ。それをあんたに伝えなかった」

「……」

桜花は覚悟を決めた男の目をしていて、それを眺め、面倒そうに溜息をついた。『灰』は、桜花の後ろを顎で指し示す。

「貴公の覚悟は勝手だがな。それは貴公の、家族が望むものなのか？」

「え……？」

「桜花殿……」

「桜花……」

桜花が振り向けば、そこには悲しげな表情の命と泣きそうな千草がいた。うつ、と気圧された桜花に、『灰』は呟く。

「私は私の決めた摂理で動いている。それは私のわがまま、勝手であり、他者の介在する余地がない。ただ一人、ベルを除いてはな。

貴公はどうだ。勝手に覚悟を決められる程、人との繋がりを安く見ているとは思えないが、それでも構わないのか？」

「……すまん。俺が軽率だった」

「いえ……けれど桜花殿の責任は、私の責任でもありません」

「一人で、背負わないですよ……桜花……！」

「……本当に、すまん」

暖かな家族のやり取りを『灰』は冷めた眼で眺める。手に入らぬものは、ないのと同じだ。あの場に入る事はないと不死はどうに悟っていた。

「……改めて、謝らせてくれ。済まなかった。そして、ありがとう。俺一人じゃ何も気付けなかった」

「礼はいらん。所詮、打算だ。ヘステイアとタケミカツチは仲が良いからな、これからは共に探索する事もあるだろう」

「……優しいんだな、あんたは」

「？ よく分からんが、貴公がそう思うなら、勝手に思えばいい」

苦笑を描く桜花達に首を傾げて、『灰』は指先を遠くに向ける。そ

ここにはモルド達に囲まれるベル達の姿があった。
「では、行くがいい。共に地上へ帰るのだろうか？」
「あんたはどうするんだ」
「私は野暮用がある。先に戻らなければならぬ」
「……話さなくていいのか？」
「地上^{うえ}でたつぷり話すぎ。なに、時間はある」
それだけ言って「灰」は立ち去っていった。森の奥に消えていく
灰髪に、残された三人は深々と頭を下げるのだった。

「神命を賜り参上した。何か用か、ウラノス」

「——ダンジョンに、私の祈祷が届かぬ存在が現れた」

「ああ、^{デーモン}魔性か」

「お前が^{ゼウス}大神より与えられた使命……進捗はどうなっている」

「何も変わらん。何処からか彷徨い^い出で、^{ソウル}魂を喰らい色のない濃霧を
発生させる。飲み込まれれば全てが消える——その存在も、記憶すら
も」

「……」

「だが、今回の件で一つ分かった事がある」

「……何だ」

「やはり^{デーモン}魔性は、ダンジョンに近づく程に強力になっている。此度、私
が戦った「炎に潜むもの」程の^{デーモン}魔性は、^{オラリ}迷宮都市の外では見なかった
な」

「……そうか。ならば私より、神託を与える。」

デーモンはダンジョンではなく、だがダンジョンよりほど近い場所
に根源がある。それは今も眠っているが、いずれ目を覚ますのであれ
ば——世界は濃霧に包まれるだろう」

「そうか。であれば少し、急がねばならぬ」

「……見込みはあるのか」

「何もない。だがいずれ、辿り着くだろう」

「望む望まざるに関わらず、その資格があるならば呑み込まれる。そ

れが私の、使命なのだから」

外伝六巻分

戦い続ける者達よ

剣を振るう。

翳される盾、防がれる刃。数度の攻防、蹴り、盾を剥がし、致命。殺す。

短剣が閃く。

素早い連撃、肌を掠める鉄。入れ替わり立ち替わり、背後を取られ致命。殺される。

大剣を振り回す。

敵の攻撃の当たる限ぎりぎりの一步。見切り、踏み込み、振り抜く。殺す。特大剣が空気を薙ぐ。

重い一撃、たたらを踏む。互いに待ちの千日手。痺れを切らし、踏み込み、粉碎。殺される。

曲剣を踊らせる。

先読み不能の神速。先の先を取る軽く鋭利な刃。追い斬り、斬り刻む。殺す。

大曲剣が斬り払われる。

走りからの斬り払い。鋭く、痛みも大きい。パリイを狙い、失敗。殺される。

刀を鞘に入れ、構える。

攻防一体、居合とパリイ。二択を迫り、猛進。こちらが一步速く、斬首。殺す。

刺剣がピタリと静止している。

初動を潰す流麗な一刺し。手に、足に、そして胸に穴が開く。殺される。

斧を持ち、叫ぶ。

己の鼓舞、湧き上がる力。体当たり、崩し、頭頂へ一撃。殺す。大斧が迫る。

盾で防ぐ。脆弱、破損。破片の最中に迫る鉄塊てつぐわいの鋒せき。殺される。

槌を手にも、走る。

粗末な盾、戦い慣れてない不用意さ。正面から殴る。何度も、何度も、何度も。殺す。

大槌が高々と振り上げられている。

へたり込んだ体。とつさに上げられた手。言葉虚しく、振り下ろされる巨塊。殺される。

槍を両手に前方を刺す。

長い射程、届かざる敵の一撃。腕に覚えがあろうと、無意味。殺す。

長槍と大盾が鎮座する。

反撃狙いの不動の構え。一切の隙なし、考えなく攻撃。ただ反撃が蓄積する。殺される。

斧槍を前方に構え、待つ。

突き、払い、断つ。武器種固有の有利。生かさぬ手はなく、手練とて獲物に過ぎない。殺す。

突撃槍が空を裂く。

止まらぬ猛進、防ぎ切れぬ勢い。大盾を弾かれ、礫となるまで突き破られる。殺される。

両刃剣を回し、刃圈を築く。

より特化した攻撃性。円の回転と重量の加わった斬撃。盾の防御は間に合わない。殺す。

鎌が翻る。

武器とは呼べぬ特異性。故の独特と熟達した剣技。対応が間に合わず、斬壊。殺される。

ムチが撓る。

肉を叩き、肌を弾け飛ばす痛みの武器。怯むばかりでは、戦いにならない。殺す。

拳を構える不死は笑った。

屈強も貧弱も関係ないハリボテの肉体。それでも己を懸け、拳で進む。殺される。

爪を擦り合わせる。

人になき獣のそれを模倣した鋼。狩人たる敵は、だが獣と誤認し

た。殺す。

弓が引き絞られ、矢が放たれる。

次はなかった。次々に刺さる矢の雨粒。雨は止まず、千本の山となる。殺される。

大弓に退路はなく、ただ待つのみ。

回り込む敵をどこまでも捕捉し続け、相打ち覚悟で解き放つ。粉碎するのは、敵の頭。殺す。

クロスボウに殴られ、続く矢に間髪はない。

それにのみ縋った者の執念。脆弱な武器を屈強なそれに変えた、貪欲なる攻撃。殺される。

杖にソウルが集う。

魔術師の証、近距離の無作法。侮った敵の腹をソウルの大剣で両断する。殺す。

手に火を抱き、炎を操る。

求道者たる呪術師、その火は苛烈、そして憧憬。溶岩に退路を断たれ、混沌が投擲。殺される。

タリスマンは寄る辺なき旅人のお守りだ。

どのような過酷にも耐え忍ぶ旅人の支え。血の滲むタリスマンは、時に闇すら招く。殺す。

聖鈴が鳴り、奇跡は再現する。

聖職者、腐り果て、なおも純粹なる人。その祈りほど、雷鳴は高らかに。殺される。

火炎壺が弧を描く。

炎を吹き出す、それだけの道具は、致命傷に到らぬ不死の最後をよく照らす。殺す。

投げナイフが複数の軌道で迫る。

あと一撃。ボロボロの肉体を全盛のままに、逃げて、逃げて、逃げ切れない。殺される。

武器を使う。魔法を使う。道具を使う。何をも使う。

昼夜を問わず、場所を問わず、彼らは出会い、殺し合う。

殺し殺され、踏み躪り踏み躪られる。敗者に言葉はなく、ただ屍を晒すのみ。

空虚、だが鮮烈に。無意味、だが炎に向かう蛾の如く。

その歴史が始まった時から、人は殺し合いを続け。

その身に呪いを刻まれて、なお戦いだけは捨てられなかった。

殺す。殺される。殺す。殺される。

死なずが繰り返る戦いの螺旋。

終わる事のない——不死の闘技。

誰もそれが目的ではなかった。

「灰」は無感動に、だが確信を持って呟くだろう。

無限の戦いに身を投じる不死が、求めるものは——

「……アスカ？　どうか、した？」

「」

微かな潮の香りが乗った風。そこに混じる到来の匂いを感じ取っていた。「灰」は、湖を眺める銀の半眼を隣に滑らせる。

そこには瑞々しい肢体を惜しげもなく陽光の下にさらす、水着姿のアイズがいた。

「アスカ？」

「いや、何でもない」

それだけ言って、幼女は視線を前方に戻す。臙脂色えんじのフードを被る

「灰」は、黒いベールの奥に常と変わらぬ凍てついた太陽のような瞳を湛えていた。

風に混じる、血鏑の匂い。第一級冒険者アイズですら気付かないそれは、果てしない闘争に身を置いた者のみに通じる匂いだ。

何か、あるいは誰かがやってくる。濃密で底の無い、血と殺戮の闘争を求めて。

「何しとるんやー、アスカたん！」

その何かに思いを巡らせる。「灰」の邪魔をしたのはロキだった。黒い胸当てに包まれた幼女の胸を遠慮なく鷲掴んだ道化の女神は、モ

ミモミと蛞蝓なめくじのように指を動かす。

何も感じない。『灰』は、だが鬱陶しいと思ったのだろう。片手に垂れ下げていた扇を閉じ、背中越しにロキの頭を一閃。「ぐへえっ!？」と地面に倒れるロキの朱髪を黒いブーツで踏みつける。

女神へんたいを見下ろす絶対零度の視線。それにロキは心底震えながらも、臙脂色のパレオの奥で際どいラインを描く下衣をガン見し、女体の神秘に鼻血を垂らしていた。

「眼福やあ、ぐ褒美やあ……アスカたん連れてきてホンマ良かったわあ……」

「……何の用だ、ロキ」

意味不明の言葉を口走る道化の理解を差し置いて、『灰』は端的に目的を問う。「ぐへへへへ」と気味の悪い笑い声を上げるロキは、ニマニマしながら言葉を垂れる。

「いやなあ、アスカたんが泳ぎもせんとずーっと湖ばっか見とるから気になってなあ。アイズたんも気になってたみたいやし、ここは主催者ホストのうちが楽しませなあかん思て来たんや」

「そうか。ならば私は気にするな。望んでこの場にいる訳ではない」「いけずやわあ、アスカたん。ちゆうかなんでうちのあげた水着着てへんの？ その格好もアマゾネスみたいでエロ、げぶんげぶん可愛かわえーけど、うちは水着姿のアスカたんが見たいんや!」

「知らん。貴公の願望を叶える義理などない。何より、神に賜った衣服など、私が袖を通す筈もなからう」

『灰』はソウルの器から取り出し摘み上げた闇色の水着——ロキ曰く「オフショルダーフリルつきショートパンツ」——を眺め、再びソウルの器に還す。水中専用の衣服など何の興味もないが、不死の収集癖ゆえに手放す事はしなかった。

それに満足そうな顔をするロキは「ちよ、踏みつける力が強なつとる! ギブ、ギブやアスカたん!？」と叫ぶが、綺麗に無視された。道化の女神を踏みつけたまま、『灰』はアイズに視線を移す。

「それで、アイズ。貴公こそどうした。貴公の仲間ファミリアは、ああして湖水浴を楽しんでいる。参加はしないのか?」

「……………えつと……………私、泳げなくて……………」

「そうか。奇遇だな。私も泳げない」

「……………！　そう、なの？」

ふいっと視線を逸らして呟くアイズに「灰」がそう言うと、アイズは驚いたようだった。大抵の事を卒なく熟すイメージのある「灰」が泳げないなどと、考えもしなかったのだろう。

「私に限らず、不死と水は相性が悪い。この身はどんな水にも浮かばず、沈む。水を掻こうと水面に届かぬのなら、それは泳げないのと同じだ」

「灰」の言葉通り、不死と水は相性が悪い。それは不死という化物が現れた時から変わらぬ、自然の摂理の一つだった。

不死は泳げない。浅瀬程度なら歩けもするが、背丈より深い水面に入れば空を落ちるが如く沈む。そして浮かばず底に溜まり、死を受容する事でしか戻れない。

それはどのような不死も同じだ。海に生まれ、海と共に生きた人とて、不死となれば拒絶される。漁村や港街で不死となってしまった者は、往々にして海に追いやられ、二度と浮かばぬ水葬の餌食となる。終末期ともなれば、途方もない不死の山が水底に積もっていたであろう。

一説にそれは不死が闇の魂を抱いているからだという。闇は何よりも暗く、重い。不死の体は闇に等しく、幼女とてその身に似合わぬ重さがある。それでも軽くはあるのだろうか、水に浮くほどの力が無い。故に不死は沈むのだ。地にへばりつくしかない影か、あるいは世界の枷の如く。

何時しかに聞いた、原罪の探求者の言葉。それを「灰」は思い返す。そうしているとアイズはレフイーヤに誘われ、水辺へ歩いていった。

そして水面に入り、仰向けに浮かんだと思えば、俯せになり――沈む。高速で水中に消えるアイズに慌てる一同を眺め、「灰」はふむ、と顎を撫ぜる。

無駄な筋肉の強張り、過度な緊張。何より水辺に相對し何かを想起

する仕草。どうやらアイスが泳げないのは、過去の心傷トラウマに原因があるようだ。

「あー、いかななあ。こりやありヴェリアとの特訓がトラウマになつとる」

「……」

「そこはツツコンでほしいでアスカたん！ 気になるやろ、気にならんか!？」

「知らん。話がしたいのなら己の眷族と話せ」

「灰」はロキの頭から脚をどけて尻を蹴飛ばす。「殺生やー！ でもありがとうございますッ！」と神特有の戯言を口走りながらロキはアイス達の方へすっ飛んでいった。

「ねーねー、アスカー！ アスカも泳ごうよ！」

アイスに弾かれて湖の藻屑と化すロキを静観していると、入れ替わるようにティオナがやってきた。燦然と輝く太陽の如く、快活な笑みを咲かせるアマゾネスの少女は自然に「灰」の小さな手を取る。

「悪いが、私は泳げない。だから遠慮させて貰おう」

「えーっ!? アスカも泳げないのー!? じゃあさ、アイスと一緒に練習しようよー！」

「いや、私は——」

「いいからいいから！」

「灰」が説明する前にティオナは笑顔で引っ張っていった。強引に言葉を切られた形の「灰」は、まあ良いかと追従する。

この場にいるのも望んでではない。「灰」は「ロキ・ファミリア」の幹部勢に背負った借り、その返済をしているだけに過ぎないのだから。

事の発端はウラノスへの報告のために18階層から「灰」一人で地上に戻った後の事だ。いつも通り魔術を用いてギルドの表から出た「灰」は、何故か路地裏でロキに捕まった。

「女神のキャン」と嘯く道化にティオネの借りを突き付けられ、「灰」は渋谷港街メレンに同行する事となった。ベルやヘスティア、リリルカはまだ本拠ホームに戻っていなかったので、置き手紙したたを認め一足先に港街メレンへ足

を運んだのだ。

合流時に知ったがどうやらロキの独断だったらしく、ティオネは怒髪天を衝く勢いで激怒したという。それをフィンに押し付けて悠々と退散した逸話は腐つても神だと「灰」に思わせた。

以上が、「灰」が「ロキ・ファミリア」と行動を共にする経緯である。前回と同じく依頼形式で請け負っている「灰」は、オラリオに戻るまで彼らに従うつもりだった。

だから、泳ぎの練習にも付き合おう。それが報われぬ努力と知っていても、それを知るのは「灰」だけだ。見せてやらねば人は分からない。ティオナに促されて湖に脚を踏み入れた「灰」は、そのまま前進し——水面の底へ消えていく。

蟒蛇うわばみのように広がった灰髪が湖の蒼に引きずり込まれ、気泡の一つも浮かばない。見守っていたティオナ達は、慌てて「灰」の救出に向かった。

水上に引きずり出される「灰」。逆様さかさまになった視界には、湖岸に並ぶ街並みが広がっていた。

今日も港街メレンは平和である。ここ数年の平穏と同じように。

ティオネ・ヒリュテにとつて、「灰」は気に入らない女である。

「全く……泳げないんだったら先に言いなさいよね。無駄に苦勞しちゃったわ」

「済まないな。ティオネ・ヒリュテ」

「ティオネでいいわよ、面倒くさいから。アスカだっけ？ 私もあるの事そう呼ぶわよ」

「貴公がそれを望むなら、好きにするが良い」

腕を組んで不機嫌そうに言うティオネに「灰」はコクリと頷いた。興味があるのかなのか、どうでも良さそうなその態度。それがティオネは気に入らない。

思い返せば最初に出会った時からそうだった。『深層』で事も無げにモンスターを屠ったあの姿。魔法を用い、杖を垂れ下げ、気怠げに

立ち去ろうとした灰色の幼女。

その幼い容貌に見合わぬ不遜な態度が、第一級冒険者達を歯牙にもかけないその姿勢が、何より蟲を見るような冷たい銀の双眸が癩に障った。

ティオネはアマゾネスだ。ベートほど傲岸かつ嚴格ではないが己の力に自信を持っているし、鬪争に血を滾らせる己の性質も受け入れられている。

しかし「灰」の瞳は、それを真つ向から否定する。ティオネが積み上げたもの、勝ち取ったものなど無意味だと告げるように、その暗い銀の半眼はティオネ・ヒリュテという存在になんら価値を見出さない。

舐められている。挑発に人一倍敏感なアマゾネスのティオネにとつてそれは受け入れ難い屈辱だった。だが目つきが気に入らないからと喧嘩を売る真似はできない。せいぜいが不機嫌な態度を露にするくらいだった。

「それで、私達にどんな魔術をかけんのよ？ 変なのだったら承知しないわよ」

「心配するな。効能は実証されている。実際に使うのは初めてだがな」

「ちよつと、実験台はごめんよ！」

「危険はない。それが信じられないのなら、貴公にはかけないでおこう」

「何よそれ、私がビビってるって言いたい訳!？」

「そのつもりはないが、気分を害したのなら謝罪する。済まんな、ティオネ」

「ッ……！ フン！」

これだ。どうでも良さそうに頭を下げるその態度。ティオネの神経を逆撫でる事すら分かっていて、アスカはそうする。

ティオネ・ヒリュテという存在に、心底興味を抱いていない。それが如実に分かるから、ティオネは苛立ち交じりにそっぽを向いた。

全く忌々しい。これじゃ一方的に敵視している自分が馬鹿みたい

ではないか。腕を組んで口ログ湖を睨みつけるティオネは、トントンと指で二の腕を叩いた。

そもそも。そもそもだ。どうしてティオネがこんなにも敵愾心を抱いているかと言えば——彼女の愛する異性であるフィン・デIMUMナが、アスカをやたらめつたら特別視するからである。

最初の遭遇もそうだし、地上に帰ってからも、遠征中救援を求められて鉢合わせた時も、18階層に滞在していた時も——そして今も。

フィンはアスカばかりを見ていて、そこには彼が生涯を捧げている野望の光が見て取れた。

(団長……どうして私にあんな事を……)

ティオネは港街に向かう直前、フィンにこう言い含められている。

「『灰』の動向を注視してほしい。本来の目的を疎かにしない程度でいい、その上で『灰』について君の所感を聞かせてくれ。

君の意見が必要なんだ。僕らの中でおそらく、最も公平な目を『灰』に向けている君の意見がね。

……頼むよ、ティオネ。君にしか任せられない。どうか聞き入れてくれないかい？」

愛する人に頼られる——その嬉しさのあまり二つ返事で引き受けたティオネだったが、よくよく考えてみればおかしな話だ。

ティオネはあまり頭が良くない。流石に能天気な妹には負けないが、教養のある方ではないし人を見る目があるわけでもない。

『灰』を見極める、というだけならティオネよりフィンやリヴェリアの方がずっと得意な筈だ。なのにフィンは、ティオネに頼んだ。まるで彼の指が、疼きと共に知恵を示したかのよう。

(団長のお考えは分からないわ……私はただ、言われた事を精一杯務めるだけ。でも、アスカの何を見ればいいの？)

この気に食わない小人族は、見ただけじゃ何も分からないってのに)

ティオネはちらりとアスカを見る。その小さな体より長い杖を持つ幼女は、再起動したりヴェリアに説明しながら魔術を構築していた。

放出される魔力はレフィーヤ並みだ。つまり、全力じゃない。18階層で観戦していた時も思ったが、アスカは必要以上の实力を見せない。

老木のような威圧感。凍てついた太陽のような瞳。生まれより伸びる灰色の髪。

印象に残るのはそれくらいで、アスカは強さがボヤケている。侮るべきでないと思観するのに、肝心の判断材料が不明瞭だ。

だからティオネは、積極的に関わろうとしなかった。何となく、近づきたくないのだ。近寄り難いのだ。

アスカからは——ティオネの最も嫌悪する故郷テルスキュラの土と、同じ匂いがする。

（——チツ、余計な事思い出しちゃったわ。それもこれもコイツのせい！ 本当に忌々しいヤツ！

見た目に欠点がないのも腹が立つわ！ 顔綺麗だし、体の造形ラインばっちりだし、乳デカいし……その乳で団長を、団長を——!!）

わざわざフィンの前で全裸を見せつけたあの『夜』を思い出して、ティオネの心に嫉妬の業火が——……燃え盛らない。

ティオネは恋する女戦士アマソネスである。愛する団長フィンに擦り寄ったり媚を売る雌豚どもなんか片っ端から殴り飛ばしてきた。

その価値基準から言えば、フィンが熱視線を送り続けるアスカなんか真っ先に『敵』認定してもおかしくないのだが……不思議とティオネは、そんな気持ちがあく湧かなかった。

そうはならない。妙な確信がある。根拠のない、得体の知れない気持ち悪さ。それがティオネに忌避を選択させる一因であるのは、間違いない。

ティオネが横目で見続けていると、やがて魔術が発動してティオネの周囲を水流が取り巻く。はしやぐティオナに溜息をついて、意識を切り替えたティオネは妹と共に口ログ湖へ飛び込んだ。

『古代』より続く生粋の、『闘争』に身を捧げた戦闘民族アマソネス。

彼女に流れる『戦士』の血は——“灰”と呼ばれる不死の、何を感じ取ったのだろうか。

「ふむ……『水精靈の護布』と相乗し、効果が増幅している。これならば『潜水』のアビリティを持たずとも、水中での活動がより広がるだろう。」

【集う水流】——素晴らしい魔術だ。これは是非とも研究したいな」
ロキの用意した際どい二枚布水着スリングショット——ではなく、『水精靈の護布』で仕立てたワンピースタイプの水泳服を着こなすリヴェリアは、水辺に立ち魔術の効果を検証していた。

【集う水流】。『火の時代』の産物ではなく、ごく最近編み出された新しい魔術。その意味を一旦隅に置いて、新米魔術師は探究に勤しんでいる。

リヴェリアの薄い唇よりこぼれる推測、検証、実践の言葉。言葉の上に形作られる理論に「灰」は耳を傾けていたが、先程から鬱陶しいロキの自己主張に眼を閉じて、道化の女神に付き従う。

主神のために用意された砂浜日傘ビーチパラソルの下、簡素なテーブルに座った一人と一柱は無貌と笑顔を突き合わせた。

「んじゃ、情報の擦り合わせといこか。自分、どこまで掴んどるん？」
「18階層に存在するダンジョンの外側への入り口。その位置を把握している」

「……ほーん？」

ニコニコと道化らしい笑みを浮かべるロキの、薄く見開かれた眼だけが「灰」を貫く。何とも冷酷で、恐ろしい眼だ。神と対峙するひ弱な不死は、その表情に上り切らぬ恐怖を抱いたまま、端的に経緯を説明する。

「リヴェリアに『裸の探求』を教授した折、ベルとレフイーヤ・ウイリデイスが『新種のモンスター』と戦っていたのは知っている。闇派閥イヴァイルスの残党らしき者達がいた事も。」

その残党共を始末した『仮面』は、以前私が相対した者だろう。私から偽の『宝玉』を奪い、後に砕き、それ故にソウルの残り香を漂わせる者。アレが動く程、匂いは残り、私に道を指し示す。

その結果の一つが、18階層の入り口というだけの話だ」

「その場所はどこや？」

「地図に記してある。適宜、確認するがいい」

「ん、あんがとさん。他に情報はあるか？」

巻かれた羊皮紙を受け取ったロキは、開かず懐にしまつて話を続ける。〃灰〃は一度視線を外し、辺りを見渡した。

ヒリユテ姉妹の帰還を待つ者。リヴェリアの周囲で魔術を観察する者。それとなくこちらを監視する者。

それらを流し見て、再びロキに向き直る。

「疑懼ぎくに値する対象が幾人かいる。だが、確証はない。故にここでは伏せておく」

「分かった。次はこつちの情報な」

〃灰〃の言葉を軽く流してロキは自分の持つ情報を開示する。それを〃灰〃が理解する必要はない。一字一句違わず、愚者フェルズに伝えれば良いだけだ。

彼らは、頭が良い。能のない〃灰〃と違って、僅かな断片でも正答を導ける。

だから〃灰〃の為すべきは、収集と実働。それだけで良い。それしか出来ない。

沈黙を守る灰色の不死は、密やかに、その時を待ち続けている。

「……ってな感じやな。ま、アスカたんの情報に見合う収穫つちゆう収穫はない。そこん所は謝つとくわ」

「いや、問題ない。感謝する、ロキ」

「ええってええって、うちの子供たちも世話になつとるしな。こんくらいは——……ん？」

ケラケラと笑うロキの言葉は不意に途切れた。明後日を見る視線を追えば、一隻のガレオン船に触手が絡みついている。

『新種のモンスター』か。救出に動こうとする【ロキ・ファミリア】を横目に眺めるだけの〃灰〃は、船より飛び出し食人花を斬り裂いたアマゾネスに目を留める。

ひどい匂いだ。咽るような、血錆の匂い。船より溢れ、押し寄せる

ような闘争の気配は、そこに潜む者たちの性質を否応なしに突き付ける。

——血と殺戮の願望者。果てしない闘争を望む者たち。

面倒事が起きそうだ。『灰』は薄く息をつき、入港するガレオン船を追う【ロキ・ファミア】に付き従った。

眼下で二人のアマゾネスが暴れている。互いを貪る無限の蛇のようには、『蛇』の異名を与えられた【怒蛇】と【女神の分身】は寧猛に相手を喰らわんとしていた。

拳が交差し、脚星が閃く。隙あらば牙を突き立てんとするアルガナにティオネは憤怒を逆立て、溢れる感情のまま怒濤の攻めを叩き込んでいた。

どちらが勝つか、それに『灰』は興味がない。あえてどちらが有利かと問われれば、アルガナに軍配を上げるだろう。

己の力を十全に振るえる者と、力に意識が追いつかない者。加えて心に躊躇を宿すティオネでは、純粋な殺意を抱くアルガナに劣っていると言わざるを得ない。

ティオネ・ヒリユテは、おそらく負ける。決着がつくまでは分からないが、そう見当をつけていると——現れたロキとカーリーが戦いを止めた。

「……」

嘯いた笑顔で語らう二神を屋根上から見下ろす『灰』は、眷族を引き連れて去っていく仮面の女神に眼を細める。

アレが一番、血腥い。あの神から溢れ出す闘争の気配は全く消え去っていない。

ここではない、と判断しているのだろう。闘争であれ、殺戮であれ、あの女神が求めるものには相応しい舞台が必要だ。

いずれまた、相見える事になる。その時の立ち位置は定かではないがな——と『灰』が黙考していると、こちらに目配せをしてちよいちよいと指を曲げるロキに気付いた。

「アスカたん、居たんなら止めても良かったんちゃうか？」

屋根から無音で降り立った「灰」に開口一番ロキが言う。灰髪の幼女は《フィリアノールの聖鈴》で【大回復】を放ちつつ、懸念を端的に告げる。

「ロキ・ファミリア」と「カーリー・ファミリア」の小競り合いに、私
が交じる。第三派閥である身としては、その結果起こり得る「ヘス
ティア・ファミリア」への不利益を考慮した。

それに元より、貴公が私に命じたのは「カーリー・ファミリア」の
監視のみ。それ以上の行動動機は私にはない」

「んー、まっそれもそうやな。いらんこと言ったわ。そんで、アスカた
んから見てドチビ二号はどうやった？」

「また、事を起こすだろう。その時は自らの神意に適うよう、周到な用
意をする筈だ」

「……目的はテイオナとテイオネ、ちゅーことか？」

「それについては知らん。だが、あの女神は闘争を求めている。私に
すらそうと分かる程に、血に飢えている。

ならばアレらは、雌伏の獣だ。その時をただ待つのか、あるいは自
ら招き寄せるのか。どちらにせよ、嬉々としてこの平穩を掻き乱すの
だろうさ。

それが迷宮都市の外であれ——内であれ」

「灰」がそう締め括ると、ロキは押し黙った。この程度の予想は神
には容易い筈だが、何か思う所があったのだろうか。どうでもいい、
と「灰」は遠く聳えるオラリオの外壁を見遣る。

早く、ベルの元へ帰りたいものだ。幼女が思うのは、それだけで
あった。

レフィーヤ・ウイリデイスが拐われた。それを「灰」が報告したの
は大分後になってからだ。

レフィーヤを拐った「カーリー・ファミリア」の後をつけ、海蝕洞

を発見。戻る際にヒリユテ姉妹を見かけ、そのままロキに報告した。
何か言いたそうなロキだったが、「灰」への依頼を監視のみに留めていたのは彼女自身だ。深々と溜息を吐いた後、矢継ぎ早に己の眷族へ指示を出したロキは、神妙な表情で「灰」に告げる。

「アスカたん、カーリーをうちの前に引つ張り出してくれ」

「構わないが、良いのか？ 他派閥である私が手を下しても」

「うちが許す。この件、どーもきな臭い。今ティオネらを連れ戻しに行かせてんけど、最悪何かしらの妨害受けて連れ戻せんかもしれん。そうなったら全部カーリーの思惑通りや。」

——んなもん、うちが許すわけないやろ」

「……恐らくは、眷族達アマッネスが立ち塞がるだろう。そちらはどうする？」
「叩き潰せ。ああ、言うとかくけど殺しはナシや。後々面倒になるからな。半殺しくらいなら構わへん。むしろそれぐらいイテコマしたりい」

「承った。可能な限り、貴公の要望に応えよう」

平静を装う顔の裏に瞋恚を猛らせる神に、「灰」はそう言い残して立ち去った。向かうは海蝕洞——【カーリー・ファミリア】の根城である。

コツリ、コツリと音が鳴る。

水滴の滴る黒い海蝕洞。鋭い岩肌を歩む影は大きく、まさしく岩のような姿をしている。

かつて巨人と友誼を結び、太陽の光の王の古い戦友と謳われた戦士の鎧。2 Mメドルを超えるそれを着込む「灰」は、鎧の内側から外界を臨む。

ソウルの補強によって矮小な体より巨大な鎧を操る「灰」は、控えめな足音をあえて踏み鳴らしながら進んでいた。

己の誇示、あるいは虚勢。自らの弱さを信じて憚はばからない不死は、やがて開けた空洞に辿り着いた。

石棺のように岩の折り重なった場所。これから行われる儀式の祭

壇の如く、テルスキユラ 闘 国の戦士たちが集う闘技場に “灰” は無粋にも足を踏み入れる。

岩のような鎧に影が落ち、見上げた不死に剛撃が叩きつけられたのは、その時だった。

「――
「ほう、やるな」

頭上からの一撃を軽くないなすと、降り立ったアルガナは唇を吊り上げた。アマゾネス語で呟かれた一言を理解するも、“灰” は反応せず部屋の一歩奥を見る。

泰然とそこに鎮座する殺戮の女神、カーリーを前に “灰” は己の目的のみを発した。

「ロキからの依頼だ。共に来て貰おう、カーリー」

「……何かと思えばロキの差し金か。これから大事な儀式じやと言うのに無粋な奴よ」

退屈、失望。そんな感情を眼差しに混ぜるカーリーは、だが獰猛な笑みを形作っていた。女神の勘か、あるいは『最強の戦士』を求める性か。眼前の大鎧がただの虚仮威しでない事を見抜く女神は、既に戦闘態勢に入っているアルガナに告げる。

「アルガナよ、ちと早いが余興の時間じや。テイオネの前にこやつを食ってしまえ」

「心得た、カーリー」

言うや否や、最速でアルガナは “灰” に仕掛ける。徒手空拳、だがLv.6の『力』により放たれる一撃必殺の連撃を《ハベルの大盾》によつて “灰” は凌ぐ。

更に反撃するは《大竜牙》。朽ちぬ古竜の牙をそのまま武器にしたとされる大槌を振るい、アルガナの四肢を叩き潰さんと剛閃が炸裂する。

石棺の祭壇を揺るがす破壊音。軽装を通り越した下着のような服装のアルガナでは、『耐久』を加味しても当たれば無事に済まないだろう。その事実には凄絶に嗤つて、アルガナは眼前の獲物へ突貫した。

アルガナの攻撃は変幻自在だ。亀の歩みのように緩い拳もあれば、

蛇行する一撃が喉元を食い千切りにかかる。緩急を織り交ぜた間隙のない打撃の嵐。得物を仕留めるまで獰猛に飛びかかり締め上げる、蛇の如き苛烈さがアルガナの強みだ。

加えて「灰」の体に組み付き、鎧の隙間より流れる血を啜る行為。それによって戦闘力が増加していく。上昇量に斑むらがあるのは啜る血の量ゆえか。何らかの魔法、もしくは呪詛カースを使用している可能性が高い。

大振りの攻撃に鉄壁の盾。隙を見せて攻撃を誘い、相手の出方と手数を見る。「灰」に染み付き、こびりついた見けんの戦法。それは実を結びつつあり、「灰」はアルガナの「底」を見据えていた。

だが――

(……ジリ貧だな。このままでは、私の方が先に死ぬ。その上この女は、半殺し程度では止められない)

肌を流れる血の量が、己の体力の無さを「灰」に示している。戦闘開始から数分、「灰」の体力は既に半分を切っていた。それ程アルガナの攻撃は激しく、そして自身を顧みない。

《大竜牙》の一撃はアルガナの横腹に直撃した。少くないダメージであった筈だがアルガナは意に介さず、むしろ戦意を爆発させ更なる力を吐き出している。

死を前に高ぶり、増大する戦闘力。戦いを至上とする中毒者にありがちな闘争そのものに価値を求める行為。

ある意味で「灰」と相容れないそれが、ロキの依頼の達成を困難にしていた。殺してはいけない。だが半殺しでは止まらない。どちらかが死ぬまで、あるいは死んでもこの闘争は続く。

カーリーを連れて行くにはアルガナと、同格とされるバーチェ、そして闘技場を形作るアマゾネスの戦士達を倒さねばならない。その道の険しさを確認した「灰」は――無数に用意した手段の一つを、この場で切る事にした。

不意に、「灰」が両手の得物を手放した。ガラガラと音を立てて落ちる《大竜牙》と《ハベルの大盾》。咄嗟に動きを止めたアルガナは、怪訝そうに顔を歪める。

「……武器を手放した？ お前、何のつもりだ——」
言葉は続かなかつた。アルガナの眼前で2 Mメドレの鎧の頭が、ポロリと転がり落ちたからだ。

アルガナに限らず、啞然とするアマゾネス達。ゴロゴロと転がる兜が背後の洞窟に消えるのをただ眺める。理解不能の困惑のまま、首なしの鎧に視線を戻し——そして気付く。

空っぽ。何もない胴体が首の断面から見える鎧は、次々に部位を落とし自壊していく。

手首が、二の腕が、肩が。足首が、脛が、太腿が。それぞれの部位に相当する鎧が崩れ落ち——そして最期に、残った胴体が前後に割れて離れる。

その中から現れたのは、闇色の長衣を纏った灰髪の少女だった。

「……女？ 小人族？」

思わず、アルガナが呟く。背格好とくぐもった低い声から男だと当たりをつけていたアルガナは、ある意味対極に位置する存在の出現に困惑していた。

その隙を、見逃す。『灰』ではない。手段を行使する準備を整えてから、幼女は静かに、眼前の敵に語りかけた。

「貴公は、強いな」

流暢なアマゾネス語。驚くアルガナに構わず、『灰』は暗い銀の瞳でアルガナを眺めた。

「強く、そして死を恐れぬ戦士だ。貴公はきっと、殺しても止まる事がないのだろう。」

私はロキにカーリーを連れてくるよう依頼されている。だが、殺しは禁じられた。許されたのは、半殺しまでだ」

「……それがどうした。お前にそれが出来るとでも言うのか？」

「出来る出来ないの話ではない。このままでは、私は依頼を達成できない。」

だから、致し方ない話だ——貴公を半分、殺すとしよう」

ふつつつと煮える戦意を湛えるアルガナに、周囲に散らばった武装を交換した青いソウルを纏う『灰』は、ある物を向ける。

灰の零れる、^{てのひら}掌の中。青い布を握った——『王者の遺骨』を。

【不死の闘技】

“灰”は静かに、そう呟き。

アルガナの世界は一変した。

「何だ、これは……!?!」

変容した世界にアルガナは飛び退いた。それは戦士としての勘と
いうより動物的本能に近い。

それ程までに世界は激変していた。ここはもはや、あの闘技場さな
がらの祭壇ではない。

空が開けている。薄く曇った暗い夜空がどこまでも広がっている。
地平線に見えるのは雪がかった山々か。麓すら見えぬ高い峰が四方
八方に並んでいる。天空には青い三日月が輝いていた。

更にはアルガナの立つ円形の舞台。縁に手摺があるのみの簡素な
平地は完全な石造りで、おそらくは塔の頂に位置するのだろう。

だが、そんな事は重要ではない。実妹にして獲物であるバーチエ
が、自身に全てを教え与えてくれた女神カーリーが、有象無象の戦士
達がここにはいない。

いるのはたった一人だけだ。アルガナの眼前に佇む、灰髪の^{パルウム}小人族
のみ。

「これをやったのはお前か!? 何をした!」

警戒心を最大限引き上げたアルガナが吼える。“灰”は密やかに、
古鐘の声を擦り鳴らす。

「貴公に、【不死の闘技】を挑んだ」

「何だど?」

【不死の闘技】だ。ここは、『円舞台』。闘技を行う不死達に好まれた、
最も公平な闘技場だ。

見ての通り、ここには何も無い。貴公と私以外、邪魔する物はない。

ここなら——存分に殺し合う事が出来る」

「——」

強いからどうした。速いからどうした。強ければ強い程、肉体を巡る命の熱は高くなる。速ければ速い程、生を叫ぶ心臓の鼓動が加速する。

例えようのない、生の実感。今まで殺してきた同胞たちが体内で甦るかのようアルガナは猛り荒ぶ。

闘争。そう、闘争だ。アルガナの生きる意味、存在理由。いずれ『最強の戦士』へ至るために、アルガナ・カリフは闘争を続ける。

眼前の小人族は極上の獲物。如何なる攻撃も防ぎ、如何なる防御もすり抜け、アルガナを斬り刻む。今のところ薄皮一枚に留めているが、いずれ急所を捉えるだろう。

ならばその前に速攻を仕掛けるのみ。相手より速く、相手より強く。そのためには——血を啜る他あるまい。

「があああああああつー！」

アルガナは叫び、捨て身で小人族に組み付いた。胴体を直剣が貫くが構わず、首筋を噛み千切る。

弾ける鮮血、口腔を巡る肉の味。胴を貫いた剣が振り抜かれる前に、アルガナは飛び下がり距離を取る。

(チツ……なんてひどい味だ。この血の味だけは最悪だな)

肉ごと小人族の血を呑み込むアルガナは赤く染まった唾を吐く。

この小人族の血はひどく不味い。命を啜るような背徳的な味ではなく、汚泥に溜まった灰の如き味の上、舌を刺すような痛みが走る。

血の温度も曖昧だ。滴る血は氷のように冷たいと言うのに、今しがた噛み締めた血肉は燃え盛るが如く熱かった。味もひどい上温度も違うとなれば、呑み込むのにも苦勞する。

だが見返りは大きい。深い痛手を避けるために啜る事はできなかったが、これまで感じた事のない力が湧き上がってくる。

アルガナの呪詛【カーリマー】の効果は血潮吸収。『神の恩恵』を受けた者の血を啜るだけ強くなる凶悪な呪詛だ。

代償に『耐久』が激減するが、さしたる問題ではない。闘争において命懸けは当然で、危険の増大と引き換えに更なる力を得られるのならそれ程喜ばしい事はない。

それに、アルガナは見抜いた。いや、この場合は見抜いてしまった
と言わなければならない。

眼前の灰髪の小人族、その弱点を。

「お前、脆いな」

「……」

「最初の儀式を超えた『戦士』……いや、それ以下の下級戦士の脆さだ。
残念だ。お前は私と同じ、ともすればそれ以上の『戦士』だと言う
のに。その様では、私に勝つ事など出来ない」

「それは、やってみなければ分かんたろう」

「いいや分かるさ。何故ならお前の剣が届くより先に——お前の頭蓋
を砕くからだ！」

言うや否や、アルガナは驀進する。敵を翻弄する縦横無尽の大疾
走。それに小人族は見事に反応し、必殺の一撃を受け流す。

『パリイ』。相手の攻撃を全霊で受け流し、致命の一撃を叩き込む賭
け。それに勝った小人族は幾億も繰り返した動きの通り、空中のアル
ガナに致命を入れようとして——気付く。

アルガナは、嗤っていた。まるでそれを待っていたかのように獯猛
な笑みを引き裂くアマゾネスは——小人族の致命の一撃を受け流し
返す。

『パリイ返し』。小人族によって受け流された攻撃の力をそのまま
に、空中で回転し敵の致命を強引に蹴り上げる凄まじい荒技。

カウンター狙いを読んでいたアルガナによる才気溢れる反撃だ。
凡人には到底出来ない真似に小人族は反応できず、剣を手放さないま
でも剣先を打ち上げられる。

無防備になった、がらんだ肉の肉体。アルガナは舌を舐めずり——
殺意を乗せた渾身の一撃が、小人族の頭部を貫いた。

長い灰髪が飛散する。頭蓋だった物が『円舞台』の上にバシヤリと
弾け、アルガナの腕は赤黒く濡れていた。

「こんなものか……もう少し出来ると期待していたんだがな」

腕にこびりついた血肉を舐め、振り捨てたアルガナは落胆する。棒
立ちのままの死体に目もくれず、背後を振り返ったアマゾネスの戦士

は手摺の先の景色に鼻を鳴らす。

「さて、術者は殺したがこの【魔法】はいつ解けるんだ？ この手の魔法は術者が死ねば崩壊すると相場が決まっているものだが」

「そもそもこれは幻術か何かなのか？」とアルガナは呟く。答えを求めての事ではなかった。今やこの『円舞台』には彼女しかないのだから。

「これは【不死の闘技】だ。貴公と私、どちらかが折れるまで終わる事はない」

だから。

背後から聞こえたその言葉に、アルガナは反応出来なかった。

ぞぶりと、アルガナの腹部から直剣が生える。

「あつ、がつ……!?!」

「敵を前に余所見とは、余裕だな。よほど命が軽いと見える」

「ぐっ……!?!」

直剣で引き裂かれる前に強引に前進して抜き去り、アルガナは反転する。痛みに歪んだ顔が刻むのは驚愕だ。大量に発汗する彼女は血が溢れ出る腹部を押さえ、小人族を睨む。

頭を殴り飛ばした筈の、何の変哲もなく佇む五体満足の小人族を。

「どうなっている……!?! 私は確かにお前の頭蓋を砕いた筈だ!」

「聞いていなかったのか？ 【不死の闘技】だ。貴公も私も、ここでは死なず。魂のみで動いている。」

魂は、何度でも殺せる。だからここで死ぬ事はない。理解したか？

——アルガナ・カリフ」

「……!」

「では、行くぞ」

「っ!?!」

腹の傷を押さえるアルガナに小人族が接近する。アルガナは奥歯を噛み締め、吹き出す血を無視して迎撃した。

だが、間に合わない。呪詛によって上昇した能力を小人族は軽々と超えてみせる。腹に空いた二つの穴など障害にはならない、アルガナは純粋な戦力で圧倒されていた。

片腕が斬り飛ばされる。残った手足で反撃するも防がれ、両脚を切断される。

そして、アルガナの体が地に落ちる前に。

小人族バルウムの閃かせた刃が、呆気なくアルガナの首を両断した。

(負けた? 負けたのか? この私が、あんな小人族バルウムに敗北した?)

回転する視界の中で、アルガナは愕然としていた。

(馬鹿な……まだテイオネを喰らっていないのに……私は、私たちは……『最強の戦士』に……)

意識が薄れる。視界が霞む。ゴロゴロと転がるアルガナの首は、最期に、佇む小人族バルウムの姿を見た。

生まれより伸びる灰色の髪。闇に浸したような長衣。凍てついた太陽のような瞳。

その暗い銀に映る己の生首が、アルガナの最期に残った記憶だった。

——そして、気が付けば。

アルガナは再び、五体満足で『円舞台』に立っていた。

「——ハッ!?!」

思わず、と言った風にアルガナは己の首を掴む。そこにあるのは頭と胴体を繋げる己の首だけだ。斬られても、離れてもいない。

(何が起こった?! 幻覚なのか?! ……いや、あの痛み、あの無力感、何より仕留めた獲物の死体のような冷たい感覚は、紛れもなく本物の——!)

焦燥するアルガナは、ザリツ、と擦り鳴らされる音にビクリと反応する。バツと顔を上げれば、そこには何も変わらず佇む小人族バルウムの姿があった。

冷たい銀の半眼が、アルガナを鋭く貫いている。

「ツ……お前ツ……!」 お前、一体何をしたっ!?

「何をした、とはっ!」

「とぼけるなツ! 私は確かにお前を殺した! 私はお前に殺され

命懸け、いや命すらも捨て、全てを焚べる——ソウル魂の闘争。
アルガナは今、カーリーの神意しんいと神理しんりたる『最強の戦士』に到ろう
としていた。

即ち、何者にも敗北する事のない——『無双』へと。

「ははははっ、ははははははははははははははははははははははははっ!!」

拳を振るう。

カース呪詛は継続する。致死量を遥かに超えて啜り、拳は破壊の権化と化
す。殺す。

刃を向ける。

カース呪詛によつて劣化した肉体は、もはや不死と同等だ。傷にもならぬ
傷が致命となる。殺される。

繰り返される幾十の戦い。アルガナは嗤い続けた。

頭を振り被る。

行動類型パターンのを読み切った“灰”への、慮外の行動。対応を許さず、額
にて撲殺。殺す。

柄を握る。

刃のみならず、鐔による刺殺、柄による撲殺。読み切っても、回避
は許されない。殺される。

繰り返される幾百の戦い。アルガナは嗤い続けた。

背中を向ける。

手札を見せ切ったのなら、付け焼き刃でも闘争に用いる。女神より
聞きし異国の背撃。殺す。

髪を翻す。

生まれより伸びる灰色の髪。唯一硬質のそれを盾に、あるいは刃
に。殺される。

繰り返される幾千の戦い。アルガナは嗤っていた。

蛇のように這う。

【不死の闘技】を通して身につけた奥義。全てを敵にぶつける捨て
身の極み。殺す。

不死は佇む。

何も、変わりはないと云うように。ただ構え、ただ振るい、ただ殺

す。殺される。

繰り返される幾万の戦い。アルガナは、嗤う。

拳を、振るう。

もはや技も何もない。全て出し切り、見切られてしまった。それでも殴れる。それでも、殺せる。

剣を振るう。

翳される盾、防がれる拳。数度の攻防、打ち払い、防御を剥がし、致命。殺される。

繰り返される、数え切れぬ戦い。アルガナは――

（――一体いつまで、私は戦わなければならぬ？）

夥しい勝利。夥しい死。生涯を通した闘争の数など既に超えた闘技の最中、そんな思考がアルガナを過ぎった。

「っ!？」

馬鹿な、と思わず頭を振る。瞬間、斬首。首を落とされたアルガナは『円舞台』に甦り、迫りくる「灰」に対応する。

汗が吹き出す。当然だ、数えるのも億劫な程殺し殺され、戦い続けている。呼吸も乱れ、視界が覚束ない。

錯覚だ。アルガナの体力は未だ尽きていない。いや、これほど戦ってもまるで減っていない。甦る度、最盛を取り戻すように、アルガナは常に万全である。

そう知った。【不死の闘技】とはそういうものだど体感した。ここでは、失う物が何もない。

ならばこの体の震えは何だ？ どうして手足が震える、どうして「灰」の攻撃に硬直する。鈍らない筈なのに鈍くなる感覚に、アルガナは焦りを覚えながらも戦い続ける。

殺す。殺される。殺す。殺される。

交互じゃない。アルガナが圧倒的に殺している。「灰」が遥かに死んでいる。

なのに、灰髪の小人族パルウムはまるで揺らがない。もはや遠い最初の戦いから、何一つ変わらない瞳で挑んでくる。

アルガナはそれを、ずっと見ていた。

凍てついた太陽のような銀色の奥に、光も差さぬ深淵を秘める。灰の眼を。

「ぐっ——!?!」

暗闇の底を覗き込むような銀の半眼に、顔を歪めたアルガナは思わず飛び退いた。

「灰」が追い継る。アルガナが退く。『円舞台』に逃走劇はない、すぐにアルガナは追い詰められる。

アマゾネスの戦士は必死の形相で殴った。「灰」の盾に防がれる。それでも殴る、蹴り頭突く。内から溢れ出ようとする蓋を押し留めるが如く、アルガナは全力で抵抗する。

それでも——首を刎ね落とされた。攻撃の隙間を縫う凡庸な一撃が、来ると分かっていたのにアルガナの首を両断した。

そしてまた、甦る。眼前には佇む小人族。灰髪の幼女。大剣を両手に握る「灰」は、幾度目かも分からない同じ動きで迫りくる。

その姿に、アルガナは初めて——「恐怖」を抱いた。「うっ、うわあああああああああああああつ?!」

遮二無二に手足を振り回す。「灰」は潜り抜け、アルガナの心臓を貫く。

殺す。殺される。殺す。殺される。

それでもアルガナは殺している。それでも「灰」は止まらない。

永遠に終わらない「不死の闘技」において、慣れ切ったかのような態度で、それでも何かを見出すように戦っている。

アルガナ・カリフは闘国の頭領姉妹だ。

物心ついた頃から闘争に明け暮れ、怪物を殺し、同胞を殺し、殺した全ての獲物の血を啜ってきた。遂には師であるベルナスを殺しLv.6に至った。

アルガナの知る『最強』とはカーリーに教えられたLv.7。頭領となつてからも研鑽を積み、ティオネを喰らい、実妹であるバーチエを喰らえばそこへ辿り着くまでに迫った。

【女神の分身】。戦いの女神の化身。『最強の戦士』に最も近い存在。そう呼ばれていたアルガナが。自他ともに認める闘国最凶の戦

士が。

たった一人の不死に、恐怖している。

戦いこそ、アルガナの全て。闘争こそアルガナの存在理由。

アルガナ・カリフを支える絶対的な柱。

それに僅かでも、疑念を抱いてしまえば――

「あああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああっ!?!」

決壊する。闘争そのものを目的としていたアルガナが闘争を厭えば、死の恐怖を克服する理由はなくなる。

命を奪い合う喜びは恐怖に。痛みの歓喜は苦しみに。甦りは高揚から極寒に変わる。

もはやアルガナの意志は機能していなかった。体に染み付いた反射だけで戦い、当然のように殺し、殺される。

恐怖に吞まれていくアルガナは、最後に見た。

殺され、なおもアルガナを惨殺する小人族。この無限の闘争に君臨する『王者』。

アルガナ・カリフが【女神の分身】だと云うのなら。

“灰”を名乗る、数多の武装を従え戦い続ける『戦士』は、まさに

「――【闘争、そのもの】――ツ!?!」

その言葉を最後に。

アルガナの魂は、ただ一人の不死に敗北した。

「あああああああああああああああああああああああああああああ
ああああっ!?!」

『ツ!?!』

突如として、アルガナが叫んだ。

バーチエも、祭壇を囲む戦士たちも、カーリーでさえ瞠目する。

2 Mの鎧から現れた灰髪の小人族。ともすればカーリーより幼い容貌の幼女が人の手の骨のような物を翳した瞬間、アルガナは叫び膝

を折る。

ガクリと崩れ落ち、項垂れるアルガナ。苦心して育て上げた己の眷族が突然起こした行動に、カーリーは立ち上がった。

「——何をしておる、アルガナ！ 立て！ 立って奴と戦え！」

カーリーの大呼にビクリと震え、アルガナは油の切れた人形のように首を回す。

「……カー、リー……」

「っ!？」

振り向いたアルガナは、憔悴していた。まるで何十年も苦行を強いられた奴隷のように、恐れと怯えがありありと浮かび上がる卑屈な目をしている。

アルガナがそんな目をする筈がない。強い戦意、自信、凶気。幾多の『儀式』によってカーリーの理想近くまで育て上げたアルガナが、こんな弱々しい目をするわけがない。

側に控えるバーチェも驚愕している。常に捕食者、恐怖の対象であったアルガナがこんな様になっているのを信じられない目で見ている。

カーリーは原因と思しき存在を睨んだ。手に握る『骨』を青い光に溶かす小人族は、暗い半眼でこちらを見上げている。

「貴様……アルガナに一体何をした!？」

「心を折った。私がやったのはそれだけだ」

「馬鹿な……!?! アルガナは闘テレスキユラ国最高の『戦士』！ たかが『マジックアイテム』如きで心折れるものか！」

「『マジックアイテム』？ そんな物を、私は使っていない。」

私はただ——【不死の闘技】を、挑んだだけだ」

「【不死の闘技】、じゃと……?？」

聞き慣れぬ言葉にカーリーは口元を歪める。

闘技は分かる。不死という言葉も。だがそれを繋げて何になる。まさか本当に不死身となって戦うとでも言うのか。

訳の分からない小人族の戯言に拳を握っていると、ざわざわと動揺する戦士たちが目についた。

皆、へたり込むアルガナと小人族バルウムを見ている。何が起こったのかと口々に言葉を交わし合い、小人族バルウムを指差している。

一部にはアルガナに侮蔑の目を向ける者もいた。何が起こったかはともかく、現実を起こったのは闘争の最中に突然叫び、戦意を喪失したアルガナだ。闘争を旨とする者たち、その頭領が無様を晒しては『最強の戦士』を指す彼女らが憤るのも当然だ。

たとえ常日頃よりその強さと残忍さを知っていようとも、だからこそ大一番の前に怖気づくなど受け入れられない。ましてや余興、見た事もない小人族相手バルウムにこんな様では、己が代わりに『儀式』を遂げる方が良い。

アルガナに冷たい視線を送るのはそう考える者たちだ。そしてそれは、徐々に増えていつている。

だが、それはカーリーの神意にそぐわない。『最強の戦士』をこの目で拝むために、どれ程の時間をかけてここまで漕ぎ着けたか。変わり種の姉妹テルスキュラが闘国を抜け、『外』で強くなりカーリーの育てた頭領姉妹とぶつかり合う。こんな下界の未知と奇跡、今後起こる保証などない。

「——皆の者！ その小人族バルウムを殺せ！」

だからカーリーは自らの神意を遂げるため、決した。一斉に視線を捧げる眷族たちに、神らしく威厳を放ち命じる。

「そやつは得体の知れぬ邪法を持って、アルガナの意志を狂わせた！ 神性不可侵、何人にも穢されてはならぬ我らの『儀式』に外法を持ち込んだのじゃ!!」

アルガナを見よ！ 斯様にも心を狂わせ、戦士らしからぬ姿を晒しておる！ このままでは、ここにいる皆も同じ末路を辿ろう！

——その前に殺せ。殺すのじゃ！ 今宵は『最強の戦士』を生む『儀式』の刻！ 何者であろうとも邪魔させてはならぬ！」

有無を言わさぬカーリーの発声に戦士たちは即座に従った。石棺の戦場アリナ、その中心に立つ小人族バルウムへ次々に飛びかかる。

カーリーと——なおもアルガナを見つめるバーチエだけが動かない。

「——ああ。多対一は、最も苦手なのだがな」

そして、灰髪の小人族^{バルウム}は。垂れ下げた手に再び『遺骨』を顕現させる。

襲いかかるアマゾネスの戦士たちを、暗い銀眼で見上げ。

【不死の闘技】

石棺の闘技場に在る全ての者を、魂の闘争^{魂闘争}に誘った。

遙かなる巨大な山の峰に、その遺跡は存在している。

『古竜遺跡』。名を抹消された戦神が古竜の友と共に君臨していた遺跡の名残。

数多く存在する不死たちの、【古竜への道】を行く者の一部がこの地に辿り着き、その記憶は【不死の闘技】の舞台となった。

その場所に今、集うのは——【カーリー・ファミリア】。

突如として変容した世界に、戦士たちは混乱していた。

「何だ!？」

「何が起こった!？」

アマゾネス語の叫び声が飛び交う。広い遺跡の至る所に飛ばされた戦士たちは合流を図りながら敵を探していた。

この事態を引き起こしたであろう小人族^{バルウム}、〃灰〃を。

その〃灰〃は、『古竜遺跡』の頂にて神と対峙していた。

アルガナ、バーチエと共にある、カーリーと。

「あ、ああああああ、ああっ……!？」

カーリーの膝下でアルガナが呻く。既に心折られた戦士は再び【不死の闘技】を挑まれたと悟り、頭を抱え絶望していた。

今のアルガナに、死と再生を繰り返す【不死の闘技】は耐えられない。

それを見つめるカーリーは憐憫を湛えていた。愛する眷族^{わがこ}の非^{あら}れもない有様に、そつと首を振る。

「……アルガナはもう駄目か。これでは『最強の戦士』どころか、今後戦う事すら出来まい……」

「それでもなからう。それは最初期の不死にみられる兆候だ。大抵は心折れたままだが、意志が強ければやがて立ち上がる。」

アルガナ・カリフもそうなるだろう。いずれ必ず再起する——私に對する、憤怒と憎悪を携えてな」

「……最初期の不死、か。成程、読めたわ。お主がアルガナに何をしたのか」

優しく肩に手を置き、震えるアルガナの前に立つカーリーは「灰」を睥睨する。

「殺したのじゃろう？ この地で、おそらくは幾度も。死の恐怖を心髓に刻み、心折れる程に」

「ほう、鋭いな。足らぬばかりの私の言葉で、よくぞ見抜いたものだ」
「妾を誰じゃと思うておる。妾の名はカーリー——血と殺戮、鬭争を司る神よ。」

鬭争における万事を、確しかとこの目で見定めてきたわ。アルガナの心中がどうなっておるのか、一目見ればすぐに分かる」

「では何故、そのような目で私を見る」

鮮血のようなカーリーの瞳に宿るのは怒りと不満、そして——眷族への■だ。

「灰」の理解できない感情。それが何処に向かっているかは分かっても、それそのものは理解できない。

露骨に観察の眼を向ける「灰」にやれやれとカーリーは溜息を吐いた。

「お主がその殺し合いを妾に見せなかったからじゃ！ アルガナをここまでへし折った『戦士』がお主ならば、その鬭争を見逃した事実は痛恨の極み！」

アルガナも無念じゃろう……このような形で『最強の戦士』への道を断たれるなど。

なればこそ、妾は仇を取らねばなるまい？ アルガナを折ったお主という『戦士』を見定める事だな！」

「それは貴公の、神意に過ぎまい」

「それがどうした。理解せよとは言わん、妾は妾で在る限り、己が司る

『闘争』を極めるのみよ。

——さあ、やがてここに妾の眷族こくらが集う。まずはそれを見事討ち取ってみせよ。

さすればお主を認めよう——我が神意に適う、『最強の戦士』に到れる者じやとな！」

カーリーの宣言と同時に、既に集まっていたアマゾネスの戦士たちが「灰」に襲い掛かった。

既に察知していた不死は、神の思惑の上で踊る事実じじつに溜息をつき――

『闘争』に身を捧げる者達。頭領を折った程度では止まらぬか。ならばいい。来るが良い。

戦い続ける者達よ——心逝こころゆくまで、折れ続けろ」

——己の半身たる、半ばより折れた闇色の刃を、ソウルの光から抜き去った。

右手に垂れ下げた折れた刃。

闇の滴る見窄らしい武器は、的確に戦士たちの首を刎ねた。

頭部を失い、倒れるアマゾネス。その骸が消える瞬間を見る暇もなく、「灰」は次々と首を刎ねる。

同時に襲い掛かってきた戦士たちの包囲網を突破し、既に知っている『古竜遺跡』の構造を駆使して「灰」は縦横無尽に駆け回る。

「灰」の軌跡を追いかける灰色の髪。それすらも捉え切れない灰色の残像は、進路の戦士たちに反応も許さず斬首、首を落として次を狙う。

「灰」に変化はない。半身たる刃を引き抜いたとて、その力が変わる事はない。

だが、一つだけ。「灰」はこの折れた刃を手にする時、決めている事がある。

それは——眼前の敵の抹殺に、全力を尽くす事。

見を取らない。傷を許容しない。己が持てる全てを用いて、敵の抹

殺を完遂する。

掛け値なしの、「灰」の本気。「ロキ・ファミリア」にも、闇派閥イヴァイルスにも、都市最強オツタルにすら見せなかつた全力の闘争を今、「灰」は体現していた。

何の事はない——神の思い通りになるのは気に食わないという、「魔王」^カの遺志の名残によって。

幼稚な我儘ワガママだ。それは結果的に、カーリーの神意通りにしかならない。

それでも「灰」は、半ばより折れた刃を振るう。

ただ、眼前の神に。不死の刃の行く先を、示すように。

「」

結果として「灰」の選択は、カーリーの神意から外れていた。

量より質の『神時代』。推定Lv.10の能力を持つ「灰」が見積もっても第二級冒険者相当の戦士たちに勝るのは、至極当然の結果である。

しかし——カーリーの眼は訴えていた。

Lv.による絶対的な格差。そんなものは、「灰」には存在しないのだと。

甦った戦士たちはなおも「灰」に突貫する。

始めのうちは殺され、狼狽えていたアマゾネスたちは「不死の闘技」の性質を体感するに連れ、闘争に没頭した。

死せぬ闘技。それを理性や知恵で彼女らは判断できない。闘争本能で育てられ、埋め尽くされた思考は死を超越してなお戦いを望む。

だが、届かない。届きはしない。掠り傷一つすら、戦士たちは「灰」に刻めない。

それは掠り傷一つさえ、「灰」には致命傷に成り得るからだ。『神時代』の理に乗っ取るのなら、Lv.による格差は著しい『耐久』の違いで現れる。

そもそもの攻撃が通らない。それでは敵に勝つ事など、ましてや殺す事など出来はしない。

だが「灰」は、違うのだ。カーリーは見る。その能力から推測でき

るLv.に換算すれば、反応する必要のない攻撃をも弾き、避ける。灰の戦いを。

カーリーは確信する。灰の強さは、『神の恩恵』によるものではない。

そうでなければあまでも避ける必要はない。『神の恩恵』が引き出す可能性、人類の到達点はあのような形では決してないのだ。

だから灰は違う。おそらくは『未知』の、誰も知り得ぬ方法によって灰はあの強さを得ている。

しかし今は——そんな事はどうでもいい。

「——『戦士』よ、お主は何故戦う？」

「私の使命を、果たすため」

闘技の最中、カーリーは問う。

敵を殺し続ける灰は、静かに、だが力強い言葉で呟く。

「『戦士』よ、お主は何故闘争を好まぬ？」

「戦いなど、とうの昔に飽いたからだ」

己の神理の外にいる存在に、カーリーは問う。

灰は変わらぬ銀の半眼で前を見据え、殺戮を繰り返す。

「『戦士』よ、お主は何故——『最強の戦士』に到らぬ？」

「決まっている——『闘争』そのものに、意味など無いからだ」

その戦いを、カーリーは見る。

終わり無き魂の闘争。数多くの戦士と戦い続ける、灰髪の舞う一人の不死を。

それは『最強の戦士』などではない。『最強の戦士』とは、比類無き者。『無双』へと辿り着きし者。

そして——闘争のために生き、闘争のために死ぬ者。

灰は違う。灰はそうではない。その力がカーリーの知るところの人類より強いとしても、灰は決して闘争を目的としない。

だからこそ、カーリーの瞳に映るのは『最強の戦士』などではなく。無限の闘争、[不死の闘技]。それに血と殺戮の女神が、見出したのは——

やがて、最後の一人が倒れ伏す。

甦り、そのまま打ち崩れたアマゾネス。彼女らはアルガナ程ではなく、数千の死を経て皆心が折れた。

散在するアマゾネス達。その中心に立つのは、ただ一人の勝者。闇の滴る折れた刃を握り締める「灰」は、暗い半眼をカーリーに向けた。

「さあ——まだ、続けるか？」

「……いや、もうよい。もう十分じゃ。此度の闘争——妾の敗北よ」

「っ!?! カーリー……!?!」

血塗られた『戦士』を前に降伏するカーリーに、バーチエが叫ぶ。まだ私がいる。まだ戦っていない。たとえアルガナが折られたとしても、私まで折れた訳じゃない。

言外にそう抗議するバーチエに、カーリーは慈しむ目を向けた。額に汗するフェイスベールの『戦士』に、全てを見通すカーリーは告げる。

「よいのじゃ、バーチエ。お主が戦えぬ事などもう分かっている」

「っ!?!」

「お主の戦う理由は『死への恐怖』。死にたくないからお主は戦う。死を受容せぬがゆえに、『最強の戦士』への道を進む。

じゃがお主の恐怖の象徴たるアルガナはこ奴に敗れた。斯様に心折られてな。

なればもう、お主は戦えまい。彼の『戦士』はアルガナより遙か格上よ。お主であろうと死は免れん。ましてこの、【不死の闘技】じゃったか？ 死してなお戦い続けるなど——到底無理であろう？」

「ッ……」

何かを言葉にしようとして、バーチエは口籠った。カーリーの言葉は全て事実だったからだ。

バーチエ・カリフは死にたくない。その一心で闘テルスキユラ国を生き延びてきた。

唯一の肉親であるアルガナも、一度だって姉と思った事などない。常にバーチエを喰らおうとする恐るべき魔物がアルガナであり、それから逃れたくて強くなった。

そのアルガナが、無残にも心折られてしまう程の闘争。死してなお続く【不死の闘技】に、バーチエが足を踏み入れられるか？

——否である。バーチエは一度だって死にたくない。たとえ甦ると分かっていたとしても、アルガナを折った『戦士』に挑もうなどと考える筈もなかった。

「……」

「この通り、妾を守る戦士はもういない。後はお主の好きにせよ」

沈黙するバーチエに微笑んで、カーリーは身を差し出した。暗い半眼で眺めていた「灰」は、【不死の闘技】を終了する。

『古竜遺跡』が消え、世界は海蝕洞の石棺に戻る。倒れ伏すアマゾネス達の中心で、「灰」は静かに呼びかけた。

「共に来て貰おう、カーリー。ロキが、貴公を待っている」「うむ」

己の神理に則り、敗者としてカーリーは従う。自発的に降りてくる女神を待ち、「灰」はカーリーを連れて海蝕洞を後にしようとした。

「——ウウ、ウウウウウ——」

獣のような唸り声が聞こえたのは、その時だ。「灰」が振り返ると、心折った筈のアルガナが女神と不死を見つめている。

いや、「灰」を睨んでいると言った方が正しいだろう。恐れ、怯えるアルガナの眼は、その奥底に頼りない闘争の火を揺らめかせている。

「思ったよりも早いな、貴公。なおも闘争を求めるとは、純粹と見える。」

……いや。貴公ほどの才気溢れる戦士だ。遙か格下、凡夫の私に、再起の予見など出来る筈もないか」

当然のように己を卑下する「灰」は、少し考えて武装を取り出した。

人を解体するための武器、《肉断ち包丁》を。

「追ってこられても面倒だ。貴公はここで、再起不能であるのが望ましい。」

故に、その手足を断ち切ろう。なに、命までは取るまいよ。ただこ

の先——肉達磨として、生きるがいい」

「ウウ——ッ!？」

唸り続けるアルガナは、恐怖に突き動かされ後退る。だが、背中にあるのは石の壁だ。そこにぶつかり、逃げ場もないアマゾネスに「灰はゆっくり歩み寄った。

その眼前に、一人のアマゾネスが降り立つ。

「……何のつもりだ。バーチエ・カリフ」

「灰」の前に立ち塞がったのは、バーチエだった。目を見開く彼女は、震える手で拳を作り、構える。

(何だ……!?! 何をしているんだ、私は……!?!)

心中で自身の行動を信じられないと罵るバーチエは、それでも「灰」の前から立ち退かなかった。

背後には、アルガナがいる。あんなにも恐ろしかった姉とも思えない姉が、弱々しく。

それがバーチエの心にある何かを突き動かした。姉をこんな様に変えてしまった、「灰」の前に立つ無謀を。

かつてティオネを守るために、カーリーと契約し同胞を殺したティオネのように。

弟子であった天真爛漫な少女に抱いた憧憬を、この瞬間バーチエは見ていた。

「退け。バーチエ・カリフ」

そしてそれは、「灰」には関係ない。人を見続けた経験からバーチエの真意を推測し、言葉では退かぬと判断して背後のカーリーに告げる。

「カーリー、命令しろ」

「……無理じゃな。妾の命でもバーチエは退かぬよ」

「何故?」

「家族を守る絆、という奴よ。まさかバーチエがそうするとは思わな
んだが……変わるもんじゃなあ。

まっこと子らは、不変の神々わらわたちとは違う……つくづくそう思わされるのう」

愛おしそうにバーチエを眺めるカーリーはそれ以上の言葉を打ち切った。女神の表情は、この後に訪れる未来を雄弁に語っていたからだ。

■と憐憫、そして諦念。これから起こる惨劇の予感を見据えるカーリーの前で、**“灰”**は呟く。

「バーチエ・カリフ。貴公に、『不死の闘技』は挑まない。死を恐れる生者であれば、アレは不要な代物だ。

故に貴公は、半殺す。どうあっても退かぬというのなら——私はそうしよう」

「ッ……!!」

“灰”より放たれる、老木のような威圧感。それはこれまでのどの場面よりも強く、バーチエの心をへし折りにかかる。

それでも。バーチエはアルガナの前に立つのを止めず。

震える拳で対峙するアマゾネスに——不死は静かに、眼を細めた。

ティオネは走っていた。

湖に面する海蝕洞、そこへ突入し、奥へ、奥へ。

道はすぐに分かった。奴らの垂らした錆びついた匂い、それが不愉快にもティオネに道を教えてくれる。

「待ってよ、ティオネ！ 皆を置いてちやっつてどうするの!? 私達だけでバーチエ達と戦うの!？」

「うっさいティオナ！ あんな奴に、アスカなんか任せておける訳ないでしょ!!」

追いかけてくるティオナに吐き捨ててティオネは走る。怒り、迷い、その心に渦巻くのは自分でも分からない感情の嵐だ。

しかし、アスカに——**“灰”**になんて任せておけない。その一心だけは確かだと、海蝕洞を突き進む。

ティオナとティオネは迎えに来た【ロキ・ファミリア】の団員に連れ戻された。

いや、正確には逃げようとしたティオネに団員がこう叫んだのが原

因だろう。

「ロキがああ、灰”って人にカーリーを引っ張り出すよう言ってます!?”」

その言葉に困惑と憤怒を爆発させたティオネはすぐに戻ってロキに詰め寄った。

「ロキ! あんたなんでアスカなんかカーリーの所行かせたの!?”」

「自分らを戦わせたくなかったんや。前はともかく、今の自分らはうちの眷族こどもや。子供が主神おやも頼らんで二人で危ない真似しとったら、お節介焼くのは当然やんか」

「ツ……でもっ! アスカは何の関係もないでしょ!?”」

「だからこそや。あの子は何も関係あらへん。誰だろうが何だろうが、頼まれたらぶちのめす。借りの返済クエスト、依頼ならそれこそ殺しでも引き受けるんやろなあ、あの子は」

「ならッ!」

「だからアスカさんに頼んだんや。ティオネ、自分はもう殺しなんぞしなくてええ。カーリーんとこの連中やアスカたんみたいに手遅れじゃあらへん。」

何よりうちは、ティオネに殺しなんぞして欲しくないんや。親心、ちゅーやつやな。他の皆も同じやと思うで」

ロキは周りを見渡す。アイズやリヴェリア、アナキティ、リーネ、【カーリー・ファミリア】にやられたエルファイ達も皆心配そうにティオネを見ている。

それを見て、ティオネは俯く。分かっている、皆を守るためだなんて言い訳して、自分の手で決着をつける事に拘っているのは。

「……それでも、あんな奴なんか……!」

「……分かった。んじゃ、行ってええで」

「え……?」

「ただし、皆でや。皆で行って、一緒に決着つけて来きい。それならうちも文句言わへん」

「……」

にっかりと笑うロキにそう言われ、ティオネはアイズ達と共に海蝕

洞を目指した。

港街^{メレン}に食人花が現れたのはその時だ。「カーリー・ファミリア」より食人花の対処を優先したアイズ達を置いて、ティオネはティオナを引き連れ海蝕洞に走ったのである。

その理由は、やはり私情だ。アスカなんかには任せてられない、過去の決着は自分でつけねばならない——その思いに駆られたアマゾネスは海蝕洞を突き進む。

一層濃厚になる血錆の匂い。黒い岩肌を駆け抜け、石棺の部屋に辿り着いたティオネが見たものは。

血溜まりの上に膝から崩れ落ちた、傷だらけのバーチェ。

縋るように、支えるように、バーチェの背後で唸り声を上げる憔悴したアルガナ。

その二人を静かに見つめ続けるカーリー。

そして——見窄らしい、折れた刃を右手に携える、「灰」。

その光景を見た瞬間、ティオネの意識は灼熱に侵され、暴発した。

「——何やってんだっ、てめえはあっ!!」

ティオネの拳が唸る。半ば反射的なティオネの攻撃は、振り返った「灰」の左顔面に突き刺さり、吹き飛ばした。

舞い散る灰髪に拳が振り抜かれる。ビシヤリと血と脳髓が飛び散り、「灰」の頭部が半分になる。

それでも「灰」は、何も変わらなかった。激情に満ちたティオネの表情を、恐ろしいほど静謐な銀の右眼でただ見ている。それにティオネが硬直している間に、ティオナは焦燥を噛み締めながらティオネを羽交い締めにした。

「何してんのティオネ!? アスカを殺す気?!」

「うるせえっ! 黙ってるティオナツ!!」

目を血走らせるティオネはなおも暴れる。力の限りティオナが押さえつけている間に、「灰」は『エスト瓶』を取り出し、半分になった唇に流し込む。

再生する「灰」の頭部。灰髪も、半ば砕けた髪飾りも元に戻った。「灰」は、右手の武器をしまいティオネに話しかけた。

「さて……何のつもりだ、テイオネ。貴公に殴られる覚えなど、私にはないのだが」

「つせーんだよアスカツ！　なんでてめえが戦ってんだっ！　てめえがロキに言われたのはカーリーを連れ出させてだけだろうが！」

「カーリーの眷族は、その障害であった。私はそれを排除したに過ぎない」

「だからッ、バーチエを殺ったのか!?　アルガナに何をしやがった!?　あのアルガナが、何をしたらそんな風になるッ!？」

指差すテイオネの燃える双眸にさえ、アルガナは怯え、体を震わせる。ただ唸るだけの、痩せ細った負け犬のような姿に出処の知れない怒りが沸き上がる。

そのテイオネに「灰」は淡々と説明した。因縁と決着。そんなものになど、心底興味がないと言わんばかりに。

「バーチエ・カリフは死んでいない。このような形なりだが、生きている。半殺しにただけだ。

アルガナ・カリフには「不死の闘技」を挑んだ。戦いの末、心を折った。

他のアマゾネス達も似たようなものだ。皆心折れ、倒れている」
「~~~~~ッ!？」

血が流れる程テイオネの歯が軋る。そんな事は聞いていない。そんな説明は求めていない!

テイオネ・ヒリュテが聞きたいのは、言いたい事は——
「——私がやらなきやならなかつたんだッ!!」

叫ぶ。驚くテイオナの腕の中で、テイオネは思いの丈をぶちまける。

「私が、テイオナが戦わなきやいけなかつた!　戦って、勝って、金輪際私らに、私らの家族なかまに関われないうようボコボコにブツ潰してやらなきやならなかつたッ!

そうしないとこいつらは何処までも追ってくる!　そうしなきや——私の過去はいつまでもいつまでも付き纏うッ!

だからッ、私がブン殴って分かせて、二度と近づけないようにし

たかった！ そうしないと、私は明日笑えない！ 皆の前で、あのみと団長の前で——胸を張って笑えない!!」

「ティオネ……」

心の内を曝け出すティオネにティオナは眩く。そんな妹の音が耳障りで、とても安心して、だからティオネは叫び続ける。

「なのにあんたは踏み躪った！ 私もティオナも、カーリーもアルガナ達も、誰かの思惑なんて関係なしにまとめて蠅みたいに叩き潰した!!」

なんでそんな事が出来る?! どうして誰も顧みない!?

私はあるたのそんな所が——誰かの大事なものを分かかって踏み躪れるその眼がツ、大ツ嫌いつ!!」

「……」

心中を吐き切ったティオネを、「灰」は無言で眺める。正面から感情をぶつけられても痛痒にすら値しないとありありと浮かぶその無貌は、可愛らしく、場違いに、ぺこりと頭を下げた。

「済まなかったな。ティオネ」

「——」

「貴公の想いは分かった。私がそれを為すべきでなかったのも、今はつきりと理解した。」

だからこそ、貴公に謝ろう。済まないな、ティオネ。

貴公の『過去』を、二度と癒えぬ『傷』に変えてしまつて——本当に済まないと、そう思っている」

「——……」

ああ、分かっていた事だ。

どうでも良いから、謝罪する。何の価値も見出してないから、簡単に謝れる。

「灰」の丁寧な、丁寧なだけの辞儀は、ティオネの心を掻き筆り——そして悟らせた。

何を言っても、無駄なのだ。「灰」はとっくに——終わっている。

人として生きるつもりなんて、毛頭ない。それを理解したティオネは、怒った。

「……クソが……」

項垂れたティオネが呟く。秘めたる想いを聞いて緩んでいたティオナの腕を振り払い、ティオネは数歩前に出る。

「クソが、クソが、クソが……クソつたれえええええええええええええええええつ!!!」

石棺に差し込む一条の光を見上げ、ティオネは吼えた。

どうにもならぬ不条理に怒る、アマゾネスの咆哮。ともすればそれは、泣き喚く子供の悲鳴のようであった。

「……ねえ、アスカはそれで良いの?」

数分後。『灰』に背を向け入り口に戻り、壁を横殴りにして沈黙したティオネを心配しながらも、ティオナは言う。

ティオナはいつも、誰かのために笑っていた。辛い時も、苦しい時も、思いつきり笑って、笑えない誰かの分まで太陽のような笑顔を浮かべていた。

いつかその誰かが、心の底から笑ってくれるように。

幼い頃、鬪争しかない血と灰の世界で、壊れそうだったティオネも笑ってくれた。

【ロキ・ファミリア】で出会った、強さを求めるばかりのアイズも偶に微笑むようになった。

ティオナは馬鹿だ。考える事は苦手だし、難しい事は分からない。でも、笑ってない誰かは見過ごせない。だからティオナは『灰』と笑顔で向き合った。

いつか仏頂面なアスカも、笑ってくれる日が来ると信じて。けれど――

「アスカはさ、自分の役に立つかどうかでしか、人を見てないよね。上手く言えないけど……なんとなく、そんな風に見られてる気がするんだ」

「そうだな、ティオナ。私は貴公を、値踏んでいる」

「……それって、辛くないの? それじゃきつと、皆離れていつちや

う。誰とも友達になれなくて、一人ぼっちになっちゃうよ。

それでもアスカは良いの？ ——それでもアスカは、笑えるの？」

「——笑えるさ」

目を瞞るティオナの前で、*「灰」*は微笑む。

「私にはベルがいる。ただ一つの私の『願い』、その側にいる事を許さ
れている。

だから私は、何でも出来る。何をも受け入れられる。

私の全てを捧げられる『願い』が、そこにあるのなら。

笑えるさ。大切な家族と共にいるのなら——それは、当たり前的事
だろう？」

「——」

火に照らされる星々のように、*「灰」*は美しく微笑んだ。

それを見つめ、ティオナは、悲しそうに眉を下げる。

だってそれは、まるで——死者の肖像画だ。

とつくにいなくなった死人。そんな風に微笑む彼女は、灰のように
儂かった。

ティオナもこの日、悟ってしまう。

ティオナがこの先、どれほど太陽のように笑おうとも。

*「灰」*が心の底から笑う日は、決して来ないのだろうと。

「お主、アスカと呼ばれておったな。それがお主の名か？」

「名前はない。ただ*「灰」*と呼ばれている」

「*「灰」*じゃと？ うーむ、何とも味気ないのう。そうじゃ、妾が名を
つけてやろう」

「要らん」

「そうじやなあ……そういえばお主をまだ称えておらんかったな。

『汝こそ、真の戦士』——うむ、これに准えて、『戦王』とも呼ぶかの」

「どうでもいい」

「まあ聞け。『戦王』とは妾が下界に降りる前、『古代』鬪国の歴史上最強と謳われた争姫の名でな。その強さは鬪国ですら異端と称される程じやったという。

是非とも、この眼で拝みたかったのう……そういつた『戦士』は他にもおつてな。神の名を冠する格闘武器を操り、『神の恩恵』を持たぬ身で竜を屠った『ビッグF』の伝説など——」

「……………」

全てが終わった、後日。

【ロキ・ファミリア】が撤収するまで港街に滞在していた「灰」は、ずっとカーリーに付き纏われ、延々と昔話を聞かされたという。

「ご苦労だったね、ティオネ」

「……………」

「……済まない。やはり軽率な判断だった。謝ろう——君に、「灰」を監視させるべきではなかった」

「いえ、そんな！……団長は、何も悪くありませんから……」

「せやせや！ 悪いんは勝手にアスカたん連れてきたうちやしな！」

「つつっ!!」

「痛ったああああああああつ!! ちよっ、本気!? 本気で殴らんでもええやろ!？」

「今のはロキが悪いよ。……さて、本題に戻ろう。ロキ、貴方から見て「灰」はどうだった？」

「んー、やっぱり印象が変わったなあ。うちに色眼鏡ガンガンにかつとんのは間違いないで。」

正直もう、うちはアスカたんの事面白おかしく見られへん。せいぜ

い道化らしくおちよくるくらいしか無理やろな。

その上で分かったんは——アスカたんがウラノスんこと繋がつとる事くらいや」

「そうか……前々から予想はしていたが、やはりか」

「私兵つちゅーよりは傭兵よりやろうけどな。ちよいと調べればかなり好き勝手しとるのは分かるし」

「そうだね。僕らが『深層』で出会う前から、彼女はオラリオに存在していた。表舞台に出て来なかったのは……おそらくはベル・クラネル、かな?」

「そうやろなー。ドチビんとこの眷族、冒険者になってまだ数カ月も経ってないみたいやし。ちゅーかアイズたんの記録塗り替えるとか、ホンマ腹立つわあ……」

「まあまあ、その話は置いておこう。……それじゃあ、テイオネ。君の所感を聞かせてくれ。」

君は「灰」を、どう思う?」

「……団長。団長はそれを聞いて、どうするおつもりですか?」

「場合によっては、僕の野望の糧になって貰う。まあ、最悪の仮定だけどね」

「……そうですか。じゃあ、言います。あいつは、アスカは……糞野郎です。」

そしてあいつは——けもの獣です」

魔石灯の灯る、夜の団長室。

椅子に腰掛けるフィンと机に座るロキの前で、テイオネは断言した。

暴血

戦いの女神カーリーの血に飢えた奇跡
筋力と技量を大きく向上させる
また、受けたダメージの量で効果が上昇する
血潮の雨を啜り、闘争の行く末を知る
それを望んだ血と殺戮の神は
死せぬ者たちの闘技に、「真の戦士」を見た

火の一閃

歴史に消えた「愚者」が編み出した魔術
ソウルより火を生じ、大剣として攻撃する
イザリスの魔女は混沌に飲まれ
以降、炎の魔術は失われた
そして全てが忘れ去られた時代の果て

「愚者」の叡智は、だが届き得たのだ

集う水流

歴史に消えた「愚者」が編み出した魔術
ソウルの水流を纏い、炎のダメージを軽減する
また水流は水中での動き、呼吸を助ける
水を操るこの魔術は精霊の働きに近い
万象の根幹、ソウルの業を探究した「愚者」は
ソウルと精霊との、本質的な似通いを見出した

原作六卷分

雷鳴の塔、落日の火

そして卵は、目覚めを告げる。

逃れるなかれ、抗うなかれ、戦いなど以ての外。ただ震え、倒れ伏すしか道は無し。

太陽に命じられ兎を追いし時、暗黒は現れる。

血の轍わだちを引き摺りて、厄災の権化と成り果てる。

やがて暗黒は幾許いくばくを眠り、汝なんじは輝ける破滅を知るだろう。

寵童は雷鳴に焼かれる。

徒ともがらは嘆きをも奪われる。

友は灰に塗れる。

光を啜られ、太陽は墜ちる。

そして廃滅の城は墓標へと変わり、以て全てを許される。

忘れるな。太陽が兎を求めるのなら、汝に他の道は無い。

手綱を引き、喉のどを噎からし、気紛れを請え。

心せよ。揺籠ゆりかごの卵はまだ、目覚めぬ――

それはとある少女の『夢』。

神さえも知らぬ、少女だけが知る『夢想の真実』。

声なき悲鳴を上げ飛び起きた少女は、終つひぞその『夢』の『正体』に辿り着けなかった。

幾度の『悲劇』を見届けるしかなかった少女。 “悲観者” となった彼女をして、初めて見る『悪夢』。

それはこの世の物とは思えぬ、たった一人の “小人” を描いていて――
全てが終わるその時まで、少女は『夢』を言葉にすら出来なかったのだ。

「よおくやく帰つてきたねえ、アスカくうくん？　ロキとの「旅行」は楽しかったかあ〜く〜い？」

港街メレンでのいざごぎを片付けて漸ようやく帰還したアスカを出迎えたのは、間延びした主神の声と満面の笑顔だった。

時間は夜もとつぷりと更け、深夜に差し掛かろうという頃。朝帰りならぬ隔日帰りを果たしたアスカは、青筋を浮かべヒクヒクと口元を痙攣させるヘスティアに、素直に頭を下げる。

「置き手紙一つで勝手な真似をしましてしまい、謝罪する。これは土産だ。港街メレンの特産品らしい」

「わー、新鮮な海産物だー、嬉しいなー。ボクが君と話したがってるの分かつてる癖に、ここ数日姿を消した事も謝ってくればもつと嬉しかったんだけどなア！」

「それも含めて謝ろう。済まなかったな、ヘスティア。諸々の反省を込め、貴公と対面する所存だ」

「うんうん、偉いよーアスカ君！　興味のない事と素直に向き合うなんて中々出来る事じゃない！　これで主神ボクより仲ロの悪い神キを優先したりしなければ鼻を高くして自慢出来たのになー！」

「本当に申し訳ない」

「……………うがーっ！　通じないイヤミなんか言つてられるかーっ！

今日はとことんボクに付き合つて貰うぞアスカくーんっ！　まずはお説教だーっ!!」

「ハア……………やつぱりこうなりましたか。ほつといてさつさと寝ましよう、ベル様」

「アハハ……………」

ツインテールを逆立ててアスカに飛びかかるヘスティアに、リリルカは溜息をつく。就寝を促されたベルも流星に擁護できないのか苦笑していた。

ベル達が18階層から帰還して既に四日目。待てど暮らせど一向に帰つてこないアスカに悶々もんもんと不満を溜めていた神様ヘスティアを見ていただけに、ベルは自分の思いを引つ込める。

邪魔しちやいけない。アスカとは話したい事が一杯あるけれど、まずは神様にお任せしよう。

そんな風に考える少年は、無事に帰ってきてくれたアスカに喜びつつも寝る準備に入る。リリルカが【魂業小箱】でしまったお土産を見て、明日のご飯はちよつと特別かもしれない、なんて小さく微笑むのだった。

「……ベル君達は寝たかな？ アスカ君、【魔法】の効き目はどうだい？」

【湖の霧】を存分に吸わせた。朝までは双方とも起きぬだろうよ」

「そうかい……なら、話し合いを始めようじゃないか」

ベッドとソファに目配せをするヘステイアにアスカは古鐘の声を擦り鳴らす。そのまま一人と一柱は階段を上り、隠し部屋の外に出た。

廃教会の割れた天井から月光が降り注ぐ。屋根越しに青い月を見上げるアスカに、ヘステイアはまず謝罪する。

「先に謝らせてくれ。ゴメン、アスカ君。」

あの日ボクは焦るあまり、ベル君を出しにして君を脅してしまった。ベル君を引き合いに出せば言うことを聞くだろうなんて、浅はかな間違いをしてしまったんだ。

本当に、ごめんなさい。ボクは主神失格だ……」

沈痛を堪え、真摯に頭を下げるヘステイア。それにアスカは凍てついた太陽のような瞳を向け、唇を動かす。

「気にするな。私が貴公に見せたのはベルへの献身がほとんどだ。離別を暗示すれば、止まると考えるのも無理はない。」

貴公に非はないよ、ヘステイア。元より私は、貴公に何の期待もしていないのだから」

「っ……………」

アスカの残酷な言葉にヘステイアは涙を溜めた。それをゴシゴシと腕で拭って、主神として、眷族と向き合う。

「アスカ君、君にとってボクは……神は何なんだい？」

「嫌悪すべき存在。信仰に値しない汚物。憎悪が沸き立つ豚。」

私は神が嫌いだ。その理由は定かではないが、ひどく腹立たしく癪に障る。

奴らは、人を辱める。偽りの安寧を与え、甘やかな夢に浸し、己が時代の供物とする。

多くの不死じゅうぼうが、その為に死んだ。多くの人が、神の礎となった。

ああ……だからなのだろうか。私が神を嫌悪するのは。

結局の所、貴公らは——人など、唾棄すべき道具程度にしか、考えていないのだろうか？」

「——違うっ！」

ヘステイアを静観するアスカの右眼。それが暗く明滅する様を見ながらもヘステイアは叫ぶ。

「ボクは子供たちを愛している！ 他の神だって同じだ、たとえ絶対悪を司る神が居たとしても、子供を愛さないなんて事はない！」

愛しているんだ……！ 君の事だって！ だからっ、だから……」

ヘステイアの声は続かなかった。青みがかった神の瞳は、全知零能の身で何を見ているのか。

それはアスカには分からない。今なお理解できない慈■の眼差しに映る自分の姿を覗くのみだ。

深く歪んだ己の表情。その意味する所など、アスカにはどうでも良かった。

込み上げる感情は、全て闇に消えていく。正も負もなく深海に溶けたアスカの心は、波紋一つない静かな水面を取り戻す。

「この話はもう良かろう。何処まで行っても平行線だ。」

それよりもヘステイア、他に話はないのか？ であれば、私は戻らせて貰うが」

「……………あるよ……話したい事なんか、一杯ある……」

俯くヘステイアは、途切れ途切れに話を紡ぐ。

君にとってベル君は何なのか。

本当にベル君が大事なら、どうして彼の望まない事をするのか。

サポーター君、リリ君の事をどう思っているのか。
アスカ君にとって、家族とは何か。

もしボクが君を止めたとして、君は聞き入れてくれるのか。
アスカは滔々と答える。

ベルは家族だ。私が唯一尊ぶ、たった一人の導きだ。

全ては私の我儘だ。ベルの為に、すべきと思った全てを行う。

リリルカは家族だ。ベルが望み、貴公が許した。ならば家族に相違ない。

家族とは、互いを信じ、助け合う者達だ。血と絆で結ばれた縁だと、私は知っている。

場合によっては、聞き入れもするだろう。貴公もまた、私の家族なのだから。

アスカの魂は強大だ。剥き出しの魂は神には見え過ぎて、その本質を悟らせない。

だからヘスティアは根気強く、疑問を一つ一つ紐解いてアスカを知ろうとした。

それはある種の贖罪だろう。ベルにばかりかまけて、少年の側に影のように付き従うもう一人の眷族を蔑ろにしていた罪。

本人からそれで良いと言われても、甘えてはいけなかった。ヘスティアは、向き合わなければならぬ。それが主神の務めであり――何よりもアスカを想う一柱の神として、このまま放っておくなんて出来る筈もなかった。

「――アスカ君は、子供たちを殺した事があるかい？」

「ああ。山ほど、という言葉が霞む程度にはな」

「……ボクの眷族になつてからは？」

「百以上は殺している。ベルの祖父に人の在り方を教えられ、驚くほど少なくなつた」

「………君は、殺しをやめるとボクが言つたらやめられるかい？」

「難しいな。私は既に慣れ切っている。如何に貴公が慈愛を司ろうとも、その時が来ればいくらでも殺すのだろうさ。」

ずっとそうしてきた。これからもそうするだろう。それだけしか、

私には出来ない」

「……………綺麗事ばかりで、下界を生きていけないのは分かってる。でも、ボクは嫌だよ……………」

「悪い事や汚い事を全部君に押し付けて、自分たちだけ綺麗に過ごそうなんて、絶対に嫌だよ……………」

「ふむ。優しい事だ。それは、ベルのために取っておけ。」

「私には必要ない。全ては私のわがままだ。私の行いは、私が背負う。貴公にも、ベルにも、譲らない」

「アスカ君……………君は、それで良いのかい？」

「ああ。これで良い。良いのさヘステイア——」

「ベルが、その物語を全うしてくれるのなら。」

「私は——灰に埋もれても構わない」

「……………」

ヘステイアは沈黙した。長い沈黙だった。言葉を失ったかのように、目を伏せてぎゅつと拳を握る。

やがて顔を上げたヘステイアは、泣いていた。その瞳から透明な涙を流しながら、じつとアスカから目を逸らさなかった。

「君の考えは、よく分かった。これからボクの言う事は、きつと君を変えられないと思う。」

「それでも言うよ、アスカ君。君は、ボクの大切な家族だ」

「ああ」

「君がどんなに嫌がっても、君のした事を一緒に背負う。もしもベル君が君を拒絶して、君がボクたちの前からいなくなろうとしても、絶対に見つけて無理やり引っ張り戻してやるんだ。」

叱りつけて抱きしめて、仲直りさせるんだ。君も、ベル君も、リリ君だって、ボクの大らかな眷族だから。

誰一人離さないよ。皆で泣いたり笑ったり、色んな事を一緒に分かち合える——そんな「皆の帰る家」に、ボクはなる」

「そうか」

ヘステイアの覚悟を聞いて、けれどアスカは淡白だ。神に何の期待もしていない不死は、己の主神でさえ微塵も信じない。

それを知って、なおヘステイアは。垂れ下げられた小さな手を取って、両手で握りしめて誓った。

「だからアスカ君、約束だ。」

何があっても、君の手を離さない。ボク自身に誓って、絶対に「

青い月光の下、その約束は交わされる。」

涙に濡れ、神秘的に輝くヘステイアの瞳。そこに溢れる慈■を、アスカはただ見つめ。

「分かった」と、ただ一言。興味なさげに呟くのがあった。

朝。

常日頃と違い、日が昇ってから目覚めたベルは、やたらと質の良かった眠りに首を傾げながらも周りを見渡す。

ベッドで眠る神様。朝ご飯を作っているリリ。そして、壁にもたれ掛かっているアスカ。

「ああ、起きたか。おはよう、ベル」

「おはよう、アスカ」

ソファから降りたベルは寝起きの挨拶をリリルカとも交わして、ベッドで眠るヘステイアに近づく。

少し驚きながら眠るヘステイアの目は、涙の跡があった。驚いたベルは、側にいるアスカに問い掛ける。

「ねえ、アスカ。昨日神様と何を話したの？」

「謝罪と、約束。私は私の事を話し、ヘステイアは私を離さないと言った」

「そっか……アスカ、僕も話したい事があるんだけど……」

「済まない、ベル。私はこれから出掛けなければならぬ。」

野暮用が出来た。場合によっては、一日かかるだろう。だから今日は、話せない。

……そんなしよぼくれた顔をするな。明日もある、時間はこれからいくらでもある。

今日は、『神の宴』に赴くのだろうか？ ならば存分に楽しんでい。

行けぬ私やりりルカの分まで、それが務めというものだ。

私と話すのは、それからでも遅くはあるまい」

「……うん、分かった」

少年の頬に手を伸ばしてアスカが微笑むと、どうにか納得したベルは眉を下げて笑う。

「朝餉あさげが出来たらへスティアを起こしたまえよ」と言い残すアスカに頷いて、ベルは朝食を作るりりルカの手伝いに向かった。その後ろ姿を見ながら、アスカは隠し部屋の扉を閉じる。

廃教会に上がり、正門から外へ。廃墟の立ち並ぶ区画の奥へ進み、アスカは人目につかない路地裏に入る。

そこには剣呑な空気を纏う、犬シアンスロープ人の少女が立っていた。

「待たせたか？」

「……時間いぴったしだよ。厭味いやみつたらしくらいにさ」

鋭い表情の裏に警戒と怯えを隠す少女は、調子の悪い軽口を叩いてアスカと——「灰」と顔を合わせる。

「来てくれたって事は、話を聞く気はあるって事でいいんだよな？」

「ああ。そのつもりだ」

「じゃあ、ついてきなよ。私らの本拠ホームの場所、知らないだろ？」

「いや、知っている」

「……あつそ。じゃ、案内はいらない？」

「いや、万が一もある。私には必要だ。」

だから貴公に任せよう。頼んだぞ——ルルネ・ルーイ

暗い半眼の奥底から、「灰」は告げる。

「ヘルメス・ファミリア」所属の【泥犬マドゥル】、ルルネは全身の毛が逆立たないよう必死に抑えながら、「灰」を先導していった。

「ヘルメス・ファミリア」本拠ホーム、『旅人の宿』。

ルルネの案内に従い建物内に通された「灰」は、大広間にて待機していた。

中央に立つ灰髪の幼女を囲うように、「ヘルメス・ファミリア」所属

の団員達が壁際に並んでいる。

見知った顔、見知らぬ顔。冒険者にさして興味のない「灰」は、中堅派閥の詳細情報までは集めていない。主神ヘルメスと团长アスフライ、それ以外は共に冒険者依頼クエストをこなした連中くらいしか「灰」の知識にはなかった。

そしてその差異は、団員達の視線に表れている。「灰」が知る者は、その強さ故に警戒と畏怖を。知らぬ者はその威圧感に負けじと圧を発していた。

まるで『抗争』寸前の派閥同士のようにひりつく空気。それに「灰」はどうとも思わない。

ただ静かに、ここに至るまでの過程を思い返していた。

ルルネから手紙を受け取ったのは昨晚、港街メレンから廃教会に至るまでの帰り道だった。

闇に紛れるように路地裏から現れたルルネは、懐から手紙を取り出し、「灰」が受け取るや否や早々と立ち去った。

その背が消えるまで眺めていた「灰」はその場で内容を閲覧する。

『当方、謝罪の用意あり。願わくば『旅人の宿』に来られたし』

ヘルメスの名が刻印された手紙を読んだ「灰」は、一先ずルルネの去った方向へ放っていた殺気を潜めた。そして廃教会に帰り、ヘスティアとの対話を経て今に至る。

これが本当に謝罪なのか、それは「灰」にはどうでも良い。たとえ罨だとしても、それこそ考慮の余地がない。

ただ、『敵対者』であれば殺す。場合によっては一日通しの作業になるだろうと幼女が当たりをつけていると――

「……よお、久しぶりじゃねえか「灰」野郎……!」

見知った顔の、一人の例外。警戒と畏怖ではなく、堪え切れぬ憤怒を煮え立たせる人間——キークス・カドゲウスが「灰」の前に歩み出てきた。

「貴公か。冒険者依頼以来だな」

「ああ、あん時はクソほど世話になったぜ。その礼が言いたくてよお……!」

「その割には、随分と剣呑だな。何か気に障る事でもあつたのか?」

「——ッ！」

他人事のような「灰」の物言いにキークスは歯を食い縛り、胸座むなぐらを持ち上げて「灰」を宙に浮かせる。「キークス!」と何名かが叫ぶが構わず、銀の半眼を睨む男は煮え立つ怒りを吐き出した。

「ブツてんじやねえぞ teme エ……! アスファイさんにやった事忘れたのか!」

「アスファイ? ……ああ。確か私は、アスファイ・アル・アンドロメダの四肢を斬り落とし、喉を潰した。

そう記憶しているが、それがどうかしたのか?」

「どうかしたのかじゃねえっ! 何とも思わねえのか teme エは!」

まるで惚とぼけている「灰」にキークスは激昂する。

仮にも同じ冒険者依頼クエストで生き残った仲だ。知らぬ相手じゃないだろうに、どうしてそんな惨むじい真似ができる——キークスはそう問い質している。

しかし両手で胸座を掴まれ揺さぶられる少女は、何の感情も指し示さない。

淡々と言葉を返すだけだ。それがキークスの堪忍袋の緒を切ると知って、なおも。

「特に何も思わない。必要だったからやった、それだけだ」

「必要だった!?! ヘルメス様への仕返しにか!」

「何だ、知っているのか。ならば話は早い。」

私は私の家族、ベル・クラネルに襲撃をけし掛けたヘルメスに報復しようとした。

アスファイ・アル・アンドロメダは、ヘルメスの護衛として側にいた。そのままでは、報復が出来ない。だから行動を封じるため、手足を断ち切り喉を潰す必要があった」

「そこまでする必要はねえだろうが! ヘルメス様だけぶん殴りやあいいいっ!」

「駄目だな。ヘルメスに報復するためには、邪魔の入らない環境が望ましい。その最大の障害はアスファイ・アル・アンドロメダだった。

だから、どけた。それだけだ。仕方のない事だ」

「どけた……？ ……ふざけんな、ふざけんなよ……！ 仕方ねえだ
と!？」

人間の男ヒューマンは怒りに震える。片手を離し、振り被り、「灰」目掛けて
振り抜こうとする。

「じゃあ、俺がてめえを殴んのも仕方ねえよなあつ！ やり過ぎたん
だよ、てめえはっ!!」

キークスにとってアスフィは敬愛の対象だ。それは団長と団員と
いう立場を超えて、男と女の関係を望む程に強い。

そのアスフィが、傷付けられた。自分の手の届かない所で、惨たら
しい真似をされた。

許せない。それをやった「灰」も、守れなかった自分も。爆発する
キークスの感情は、理屈をどこかへ吹き飛ばしてしまっていた。

「——やり過ぎ、か」
だから、キークスの拳は寸前で止まった。

暗く翳る銀の瞳。その凍てついた太陽のような輝きに、射抜かれた
が故に。

キークスの激昂を——「灰」より滲み出る恐怖が、上回っていた。
「では、聞こう。我らがどれ程傷付けば、貴公は私の行いを許せた？」

「……何、だと……？」
硬直するキークスは、辛うじて喉を動かす。宙に持ち上げられたま

まの「灰」は、ただ古鐘の声を擦り鳴らす。
「ベルが、私の家族がどれ程の悪意に晒されれば、貴公は私の報復を許
せた？」

やり過ぎというのだ。適切な範囲を、きつと貴公は知っているのだ
ろう。だから尋ねよう。

私の家族が腕を失くしていれば、私は腕を千切り取っても良かった
のか？

私の家族が二度と立ち上がれなければ、私は脚を砕いても良かった
のか？

私の家族が、死んでいれば——貴公はアスフィ・アル・アンドロメダ

が殺されても仕方なかったと、受け入れられたのか？

報復が超過しているというのなら、言えるだろう？　なあ——キークス・カドゲウス」

「——ッ!？」

目を見開くキークスは、答えられなかった。

——当然だ。仮にアスファイが何かに巻き込まれ、命を落としたとして、キークスはアスファイの死を受け入れられない。

頭では分かっているとしても、絶対にアスファイの死を許容できない。現実を許せず、キークスは手を尽くしてアスファイの命を奪った全てに報復するだろう。

だからキークスは、答えられない。もしアスファイが傷付けられたら、相手を許すつもりなんて毛頭なかったから。

今まさに——“灰”を許すつもりがないように。

「貴公と私は、同じだ」

暗い銀眼に、キークスの顔が映る。眼前の男を静かに眺める“灰”は、古鐘の声を擦り鳴らす。

「私もベルを傷付けた者を、許す事はない。それをベルが望まぬ限り、私は『敵対者』を必ず殺す。

そう決めている。ずっと前に。私はずっとそうし続けてきた。

程度はどうあれ、私と貴公に違いはない。立場が逆であったとしても、私は貴公と同じ事をする。

理屈ではないのだ。大切な物を抱く限り、私はそうする。

——きつと、貴公もそうなのだろうか？

ああ、だから。忘れるな。

先に剣を抜いたのは、貴公からだ」

その暗い瞳に、真実キークスは気圧された。

震える腕から“灰”を取り零し、どきりとキークスは尻餅をつく。

無音で着地した“灰”は、大量に発汗する人間ヒューマンを捨て置いて皺の寄った襟を伸ばす。

「——手を上げるつもりはないけど、心情的にはキークスと同じよ」

周囲を囲む団員の一人、エリリー・ビーズが声を上げる。“灰”の強さを知るドワーフの女性は、それでも幼女と視線を交わす。

「ヘルメス様が柄の悪い人達を唆して、貴方の「ファミリー」は被害を受けた。だから貴方が報復しようと思うのも分かるわ。でも、だからこそ、私はアスフィを傷付けた貴方が許せない。」

だから聞くわ、〃灰〃。他に方法はなかったの?」

自分の胸に手を当てて、エリリーは訴えかける。

「話し合う余地はなかったの? アスフィを傷付けなくても、言葉で訴えればヘルメス様だって……」

「その仮定は無意味だ。エリリー・ビーズ」

心優しいドワーフの言葉を、〃灰〃は斬って捨てる。

「どのような過程を辿ろうとも、最後には殺す。必ず殺す。私はそれを、曲げられない」

「っ……なら! どうしてアスフィとヘルメス様を見逃したの!? とでも無事とは言えないけど、二人とも生きてるわ!」

「さてな。どうにも、アスフィ・アル・アンドロメダの喉を潰した辺りから記憶があやふやでな……本当にヘルメスを殺したかどうか、確認がなかった。」

ここに来たのは、確認のためだ。殺し逸れていた場合、ベルにまた被害が及ぶとも限らない。

故に私は、殺しに来た。ヘルメスが二度と、ベルに試練など課せないように」

『なっ……!?!』

その言葉に、エリリーだけでなく他の面々も驚愕した。〃灰〃は堂々と言い放ったのだ。

お前たちの主神を、殺しに来たと。

「……本気?」

戦慄を抑えてタバサ・シルヴィエが言う。腰の得物に手を伸ばす

猫キヤットピエール人の美女は、銀の瞳を揺らめかせる幼女にゴクリと喉を鳴らす。「当然だ。貴公らはヘルメスの眷族、故に私の『敵対者』。邪魔立てするならば、容赦はしない」

『敵対者』という言葉にルルネを筆頭とした〃灰〃を知る面々が真っ青になる。以前『敵対者』に何をしたら、彼らはその目で見てい

たが故に。

そして「灰」を知らぬ団員は、「神を殺す」と豪語する小人族パルウムに敵意を向けた。「灰」の真実を叩き込む瞳が、いやそれがなくとも、団長を傷付けられ主神を殺すなどと言われては、戦わない理由がない。

膨れ上がる、一触即発の空気。悲壮な程の覚悟を決める者と、敵対を決意する者とに分かれる。「ヘルメス・ファミリア」の面々を前に。

「灰」はただ、眼を細め。

「——はいはいそこまで。物騒なものしまつてしまつて」

嫌に響く軽薄な声が、緊迫した場面に割つて入った。

「いやーごめんごめん、すっかり遅くなっちゃったよ。待たせちゃったかな？ アスカちゃん」

「へ、ヘルメス様!?!」

右手に美女、左手に美少女を侍らせて大広間に入ってきたのはヘルメスだった。やっと顔を出した主神にルルネは涙目で抗議する。

「何やってたんだよ！ こっちはもうちよつとで「灰」と戦う羽目になるとこだったんだぞ?!」

「おおっと、そりやまずい。せつかく招待したのにお客様の機嫌を損ねちゃ、ヘルメスの名が廃るってもんだぜ」

「こんな時までキザだったらしくしてんじゃねーっ!? そもそもアンタのせいでこんな事になつてんだからな!?!」

早くどうにかしてくれよ！ 体調が悪いんだか何だか知らないけど、【戦場の聖女】デア・セイントまで呼んで治らないなんて絶対仮病だろアンタ!?!」

「あははー、バレちゃったかー」

「くくくっ!?! ふざけんなよこのバカ神がみいくっ!?!」

ヘルメスの貼り付けた笑顔にルルネは本気で激怒する。今すぐにも飛び掛かって来そうな犬アンスローブ人の少女に慌ててヘルメスは両手を上げた。

「ごめんウソウソ！ 今のナシ！ ホントマジで体調悪いから！ 仮病だったら真っ先にアスカちゃんここに足運んで謝ってるから！」

だから許してくれルルネえっ!?!」

「がるるるるるるるっ……!?!」

「……はあ、本当にもう……止めなさい、ルルネ。これ以上は時間の無駄です」

ヘルメスの右側に待てる美女、アスファイが疲れたように言う。やや窶やつれているが美貌を損なわないアスファイは、ちらりと一瞬「灰」を見て、ぶるりと体を震わせ、必死に悲鳴を噛み殺した。

そんなアスファイを安心させるように頭を撫でて、ヘルメスは前に出る。それを押し留めたのは左側の美少女、アミツド・テアサナーレだった。

「いけません、ヘルメス様！ まだお体が……！」

「ごめんよ、アミツドちゃん。こればかりはオレがやらなきゃならないんだ。それにこれ以上は、アミツドちゃんの体に良くない。」

大丈夫、アスカちゃんは話せば分かる良い子だから。心配してるよ
うな事は起こらないよ」

「……」

アミツドは不承不承というようにヘルメスから離れる。アスファイの腰を抱く腕を離れた男神は「つと」と若干ふらつきながらも、堂々と「灰」の前に立った。

「さて、と……じゃあ早速だけど、アスカちゃん——」

暗い銀眼で見上げる「灰」と、視線を合わせるヘルメスは。

「——オレが悪かった！ どうか全部水に流してくれえっ!？」

ガバツと勢い良く頭を下げ、頭上で両手を合わせ。

謝罪と言うには、あんまりにもあんまりな言い草を言い放った。

あんぐりと口を開ける団員達。額を押さえるアスファイ。アミツド
でさえ瞠目する。

流石にそれはないだろ……!?! と、ほとんどの心中が一致する。

対し、「灰」は。

「分かった。許す」

ただそれのみを、擦り鳴らした。

静寂が、大広間を包み込む。

((……えっ!? 終わり!))

たっぷり数十秒ほど停止していた団員達は、思い思いに同じ言葉を

浮かべ再起動した。

「いやー、助かったー！ アスカちゃんが良い子で良かったよー！」

「贖罪があれば、私は許す。私はそう、決めている」

「いい心掛けだ！ オレも見習いたいくらいさ！ ところでアスカちゃん、言葉だけつてのもアレだし、お詫びの品を贈りたいんだけど……何か欲しい物はないかな？」

「貴公に欲する物はない。これ以上の詫びは不要だ」

「まあまあ、そう言わずに！ たとえば英雄譚なんかはきつとベル君が喜んでくれるぜ？」

「……む。それは、確かにそうだろう」

「だろう！ 実は極東に足を運ぶ予定があるんだけど——」

そのまま雑談に突入する「灰」とヘルメスに、周囲は俄然混乱する。

さつきまでの緊迫は一体？ 自分達の怒りはどこ？ そもそもこんな簡単に終わっていいのか？

『神殺し』すら宣言してのけた「灰」が呆気なく許してしまい、団員達の心情は混乱の最中だ。あまりにも乱高下する会話の温度差について行けてない。

「体調が悪いそうだな」

「そうなんだよ、18階層から戻ってからずっと悪くてさー。アミツドちゃんに診てもらったんだけど、流石にどうしようもないみたいだ」

「そうか……ふむ、そうか」

男神と幼女の閑談は続く。詫びの話から体調の話に切り替わる二人の会話に打ち解けてんじゃねーよ！ と団員から内心のツツコミが入る。

しかし悲しいかな、心中なので届かない。ようやく立ち直ったルルネが、開口一番ツツコミを入れようとしたその時。

「——ヘルメス。服を脱げ」

「灰」の放った一言が、立ち直りかけた団員達を再び混乱の渦に叩き込む。

「おおつと、これは大胆な発言だ。まさかアスカちゃんからアプローチをくれるなんて、さしものオレも予想できなかったよ！」

「貴公の予想はどうでもいい。脱ぐのか、脱がないのか、どちらだ」

「ああ、勿論脱ぐよ！ 脱ぐに決まってるじゃないか！ ただ、本当に体調が悪いからさ……アスカちゃんが脱がせてくれないか？」

「良いだろう」

凍結する団員達を他所に、あれよあれよと話は進む。

「灰」は手早く動いた。ヘルメスの襟巻マフラーを剥がし、ベルトをスリ取り、スルリと旅装束を脱がす。妙に手慣れた手つきでシャツのボタンを外し、「灰」はヘルメスのあられもない上半身を衆目の面前に晒した。

均整の取れた、子供たちならば誰もが羨む神の肉体。

その筈が、そこにあつたのは——黒い斑に食い荒らされた、萎びた体だった。

「……………え？」

誰かの声が、ぽつりと落ちる。

表面を取り繕った笑みに、一筋の汗を流すヘルメス。眷族に悟らせぬ、だが「灰」には一目瞭然の痩せ我慢。

何よりも、ヘルメスから匂い立つ人臭さ。それが「灰」に、ヘルメスの現状を教えていた。

胴体には肋あばらが浮き出ている。老人のように皺だらけの皮膚、痩せ細った筋肉、その上に蠢く黒色の斑まだら。

上半身にくまなく広がるそれは、おそらく下半身にも広がっているのだろう。顔だけが免れているのは偶然か、はたまた意図されたものなのか。

それはおそろく——「灰」にしか、分からない。

「へ……ヘルメス、様……？ その、体は……？」

「言っただろ？ 体調が悪いって。たった数日でここまで広がっちゃって……このままじゃ死んじゃうだろうなあ、オレ」

呻くように問いかける虎人ワライガー、ファルガー・バトロスにヘラヘラと笑いながらヘルメスは答える。

しかし男神の回答は衝撃的だ。死ぬ？ ヘルメスが、自分達の主神が、いなくなる？

声が出ない。喉が干乾びたかのように呻きも上げられない団員達は、ヘルメスの萎びた肉体を凝視する。

明らかに、尋常ではなかった。病人の末期を思わせる手遅れの体。不変である筈の神の変容に、皆が言葉を失う。

「……ふむ。ふむ」

その嫌な静寂の中で、「灰」の声だけが聞こえてくる。ヘルメスの体を眺め、首を左右に振って検分し、黒い斑に小さな手が触れる。

途端、斑は脈動し「灰」の指を侵蝕した。白い指がずるずると黒く侵されていくのを見ながら、「灰」は手を離す。

黒く染まった「灰」の指。増殖し広がろうとする斑は、不思議と小さくなっていき——最後には吸い込まれるように消え、指は白さを取り戻した。

「……驚いたな。確かにこれは、『深淵の呪い』だ」

一人得心が行ったように「灰」は呟く。軽薄な笑みを保つヘルメスは、予想していたようにその答えに追従した。

「やっぱり、アスカちゃんは知ってるのか」

「ああ。古い人に有り触れた、『闇の魂』のダイクソウル一形態だ。

深淵とは、原初の闇。最初の火によつて分かれた、生まれたばかりの深い底だ。

それは何物でもなく、不定形で、故に全てを喰い荒らす。そうやってただ広がり、広がった果てに、最初の人は産まれたという。

しかし、奇妙な事もあったものだ。『深淵の呪い』は、人より這い出で呪うもの。今や火も無きこの時代に、闇はここまで育たない。

故に私以外、この業を扱う者などいないと思っていたのだが……貴公、これを何処で拾ってきた？」

不思議そうに問い掛ける「灰」に、ヘルメスは無言で見つめ返した。笑みを湛える橙黄色の瞳は、暗闇の少女を映している。

「そうか。私か。記憶にないが、貴公が神であるのなら、そういう事もあるのだろう」

ふむ、と一つ頷く幼女は、そのままヘルメスを見上げる。暫し見つめ合う、神と人。交わされる無言の交流を打ち切ったのは、「灰」であつた。

「さて……用件はこれで終わりか？　であれば、私はもう立ち去るが」「——ちよつと待てよ!?!」

ヘルメスに背を向けて本当に立ち去ろうとする「灰」を止めたのはルルネだ。混乱の極みにある犬シアンスローフ人の少女は、とにかく言葉を繋いで物を言う。

「それはあんたの仕業なんだろ!?!　だったらどうにかしてくれよ!?!」「何故?！」

「なぜって……全部あんたの責任じゃんか！　このままだとヘルメス様は死んじゃうんだぞ!?!」

「別に私は構わない。死んだとて、特に困る事もないのでな。」

それにもう、私の責任ではない。何故ならばヘルメスは、「全てを水に流してくれ」と言った。

私はそれを許し、受け入れた。ならばどちらにも通用する贖罪だ。この呪いは、もはや私の手を離れている」

「けどつ、【戦場の聖女デア・セイント】にも解呪できなかったんだろ……!?!　そんなのっ、かけたあんた以外どうしようもない！

——そうだ、アスファイ！　あんたはアスファイにあんなひどい事をしたんだ、だからあんたも償うべきじゃないのか!?!」

「私はヘルメスの姦計によつて傷付いたベルを癒した。救助に来た、他の『協力者』も同様だ。」

ならば貴公らも、同じようにするべきだろう。こちらは治療に支払った対価を要求するつもりもないのでね。

それとも貴公、贖罪のやり直しを望むか？　私がそれを受け入れると思うなら、言つてみるが良い」

「かつ、神を殺すのはご法度——!?!」「それこそ、私には関係ない」

ルルネの言葉は、それ以上続かなかつた。理屈以上に、「灰」を説得する言葉が尽きたからだ。

そもそもがヘルメスを発端とした結果だ。ルルネとて自分の言っている事が道理に適っていないのは重々承知している。それでも何とかしようとして、不条理な台詞を吐き出したただけだった。

そして言葉で言い包められないのなら、どうする事も出来ない。〃灰〃はこの場にいる誰よりも強力で、無慈悲である故に。

「――アスカちゃん。オレの呪いを解いてくれないか」

その〃灰〃に、不死の、化物の如き人に、ヘルメスは言う。

「アスカちゃんがどうしても解きたくないって言うなら、オレも素直に諦める。

でもまあ、本音は死にたくないんだ。まだまだやりたい事は一杯あるからさ。

だから、もし引き受けてくれるなら依頼したい――オレの呪いを、どうか解いてくれ」

再び見上げてくる〃灰〃に、ヘルメスは強がった笑みを纏う。

「君は冒険者だ。理由はどうあれ、冒険者つてのはそれに見合っていると判断すれば大抵の事は引き受ける。

アスカちゃんがそうだとは言わないよ。でもオレの見立てじゃ、君は他の何よりも冒険者らしい気質を持っている。

だから、『深淵こゝろの呪い呪い』の解呪に見合うだけの対価を、オレは用意するつもりだ。

それでどうか、頼まれてくれないか。アスカちゃん――」

はつきりと、不死を臨んで神は言った。それをどう受け取ったのか……深海に溶ける〃灰〃の心は、既に凧いでいる。

「先にも言ったが、貴公に欲する物はない。だが私には、望む物がある」

〃灰〃は青白いソウルを手に収束させ、見せつけるように持ち上げる。

小さな頭蓋の溶け込んだ、灰色の石。呪いを吸い込み、蓄積を減らす呪物――『解呪石』を。

「それを用意出来るのなら、私は『深淵の呪い』を解呪しよう」

「必ず用意する。オレの、ヘルメスの名に懸けて」

「良いだろう——冒険者依頼成立だ」

差し出された『解呪石』ごと、ヘルメスは「灰」の手を握った。ヘルメスに巣食う『深淵の呪い』が僅かばかり石に吸い込まれ、石の崩壊と共にヘルメスを延命する。

「アスファイ・アル・アンドロメダ」

「——ひゃいつ!？」

ヘルメスの体を痛ましそうに見つめていたアスファイは、突然の指名に心底震え上がった。

ブルブルとビビり散らす【万能者】。

後にアスファイは——

「私が望む対価だ——貴公には、【魔術】を覚えて貰おう」

「……………へ?」

——「灰」と共に、地獄の七日間を過ごす事となる。

「いよっしやあ! 治ったぞおーっ! ビバ☆健康な肉 体! も
う一生病気になんか罹らないよう予防するぞーっ!」

——そのような事を宣って、完全復活したヘルメスは走り去っていった。

「ちよっ、どこに行くんですかヘルメス様ー!？」と叫んだアスファイはヘルメスを追いかける。残された「灰」は、一度だけ瞬きし、片付けに入った。

「——あの、よろしいですか」

砕け散った『解呪石』の残骸やら何やらを掃除する「灰」に、一人の少女が声をかける。

「何だ。アミッド・テアサナーレ」

「アミッドで構いません。貴方は……「灰」、様? それともアスカ様? どちらで呼びますればいいのか?」

「私に名前はない。ただ「灰」と呼ばれている。」

「貴公がどう呼ぼうとも興味はない。好きに呼べ」

「……………では、アスカ様と」

視線もくれずに作業する幼女をそう呼んで、アミッドは傍らを見上げた。

積み上がる、頭蓋、頭蓋、頭蓋。おおよそ人の大きさではない巨人の如き頭骨から、赤子のような小さな髑髏どくろまで。融けて歪み、一体となった頭蓋の山は、巨大な墓石のように聳え立っていた。

『解呪の碑』。『灰』がそう呼んでいた石碑を、アミッドは厳しい目つきで見つめている。

眦まなじりを鋭くする迷宮都市最高峰の治療師は、それが作り物の類ではなく、紛れもない本物であると見抜いていた。

「——アスカ様。貴方は、呪詛師ヘクサーなのですか？」
少女の唇から零れ落ちる声は気迫に満ちている。

これは、呪いだ。解呪と名がついていようと、その本質、製法は呪詛で溢れ返っている。

窪んだ眼窩、大口を開ける頭蓋は今にも悲鳴を吐き出しそうだった。人を救う事を第一とするアミッドにとって、それは許せない。許すべきではない。

だから、問う。『解呪の碑』を出現させ、ヘルメスの呪いを解いた——その呪いの元凶でもある、灰髪の小人族バルウムに。

「闇術師ヘクサー？ 確かに私は闇術師だが、これに闇術は関わっていない。

救いを求め、縋りつき、寄り合わさった人の成れ果て。人の縮図、人の摂理に則って自然とこうなっただけの代物だ。

元より闇の存在である人をあえてそう呼ぶのなら、闇術の産物とも言えるだろうが。さしたる意味はないだろう。

呪いなど、押し付ける他に手段もない。その意味でこれは、実には有用な置物だ」

「……」

時代の違い故、ズレている回答を返す『灰』にアミッドは沈黙する。『解呪の碑』より目を離し、清掃を続ける幼女を見つめる蒼い瞳は、如何ばかりの感情が宿っているのか。

視線を感じる『灰』には興味がない。【戦場の聖女デア・セイント】と賞賛される治療師の少女にも、なんら関心を示していなかった。

価値がない。アミッドを見定めた『灰』の判断は、それだけだ。

「アスカ様。『深淵の呪い』は、私が必ず殺します」
だから。

その、思いもよらぬ宣言を聞いた時。『灰』は手を止め、振り返った。

そこにいるのは、決然とした表情の『聖女』。人を癒し、全ての傷を癒す。そのような光溢れる世界に立つ少女に、不死は銀の半眼を向け。

「クツ。フツ、ハハハ」

幽かに。だがはつきりと。『灰』はアミッドを、嘲笑った。

「……何がおかしいのですか」

「いや……いや。貴公が随分と、大層な夢を囁るのでな。思わず、笑ってしまった」

「私には、『深淵の呪い』を殺せないと？」

「さて……それはやってみなければ分かんたらうが。だが貴公、己の無知を知らぬと見える」

唇を僅かに、だが卑しく歪める『灰』は銀の右眼の奥に闇の魂を揺らめかせる。

「先にも言ったが、『深淵の呪い』とは『ダークソウル』だ。それは今や枯れ果て、意識する事もないが、確かに人の系譜に受け継がれるもの。

それを殺すと集くのは、血の病を癒すために首を掻き切るも同然だ」

「……!？」

「血を抜けば、血の病は断たれるという発想さ。手段はどうあれそうすれば、血の病に苦しまずにも済むだろう。尤も、血を失くして生者が生きられるかどうかは、別の話だな。

そういう事さ。『深淵の呪い』を殺すなど、人殺しとそう変わりはない。い。

闇は、誰にでもある。それがほんの些細な、一滴ばかりの魂だとしても、それを失くして人は生きてはいられない。

端から闇を持たぬ身、神でもなくば、『深淵の呪い』を殺されて無事で済みはしないだろうよ。それでも貴公、殺すなどと、なおも囀るつもりなのか？

ならば貴公は、聖人だ。それもこの時代に珍しい——人間性溢れる聖女なのだろう」

笑みを潜めた「灰」の言葉には、まだ嘲りが含まれていた。

それはアミツドの知らぬ火の時代の摂理。だがソウル渦巻く銀の瞳が真実であると突き付けてくる。

アミツドは気圧されていた。自らが呪詛師と呼んだ、その実呪いの塊に。あらゆる物を呑み干し、最後に残った呪詛の怪物に、しかし聖女はなおも立ち向かう。

「それでも私は、殺します。このような呪い——この世にあつてはいけない」

「そうだな。そうだろうとも。貴公のような生者は、そうあつて然るべきだ。

だが貴公、アミツド・テアサナーレ。そんな様では、とても無理だ。ヘルメスより受け入れた『深淵の呪い』。その断片すらも殺せぬのであれば、受け入れるしかない。しかし人間性溢れる聖人として、限度はある。

いずれ取り殺されてしまうだろう。私にはどうでも良い事だが……まあ、ここには『解呪の碑』がある。

私が仕舞う前に使うくらいは許そう。なに、どうせ貴公にはどうにもならない。

であれば、押し付けたまえよ。貴公のような聖人が、ただ呪い死ぬのは惜しいのでな」

大言を吐いた聖女への気紛れか、「灰」にしては珍しく利益のない提案をする。しかしアミツドは固い表情を崩さず、前に添える両手の力をグツと強めるのみだった。

「灰」とアミツド。不死と聖女。ある意味で背中合わせの、されど決して交わらぬ両者を、『解呪の碑』が静かに見下ろしていた。

「待てよ、灰」

「ヘルメス・ファミア」における全ての雑事を終え、帰ろうとした「灰」を呼び止めたのは小人族バルウムの姉弟だった。

「何か用か。ポック・パック」

玄関口を出て、都市の外壁に沈む夕陽を眺めていた「灰」は声の主にそう返す。畏怖、緊張、妙な熱意。瑠璃色の瞳にそういった意志を乗せるポックは、ゴクリと喉を鳴らし、尋ねた。

「灰……あんたは、『神様』なのか？」

瞬間、ポックの視界は反転した。

地面に叩きつけられる体、締め上げられる喉。ギリギリと音が立つ程に、ポックの首を握る力は強い。

「ポック!」と叫ぶ姉の声が遠い。首に噛み付く白い手を掴み、藻掻いても、取れる事は決してなかった。突然の苦痛に喘ぐポックは、自分の周囲に落ちる灰髪と、己を見下ろす銀の瞳を見る。

見開かれた、「灰」の眼光。その右側は暗く、底なしの闇に炎の輪が燃えていた。

「――二度と私をそう呼ぶな。さもなくば、貴様の細首、引き千切る」
おどろおどろしい古鐘の声に震え、かろうじて頷くポック。するとゆつくりと手は引き離され、呼吸を取り戻したポックにポットが駆け寄った。

「ポック、大丈夫!」

「げほっ、ごほっ……」

ポットが必死に呼びかけるも、咽るポックは答えられない。姉の助けを借りて何とか上体を起こすポックは、こちらをただ見続ける「灰」を見上げる。

落ちゆく夕陽を背にする、暗闇の化身。灰髪に隠れた影の中で、常と同じ銀の半眼が光っている。

「貴公、何を座り込んでいる。私に用があるのではないのか？」

「え……?」

「灰」の発言に、ポットの声落ちる。たった今弟にやった行動を

鑑みれば、その発言はおかしい。

しかし「灰」は、何の疑問も感じていないようだった。小人族バルウムの姉弟を見続けるだけの幼女は、しばらくして踵を返す。

「用がないのなら、私は去る。ではな」

そのまま歩いていく「灰」に、二人は何も言えなかった。ただ去っていく灰髪を、見つめるだけだ。

ポットとポツクは思い返す。「ヘルメス・ファミリア」と対話する「灰」は、己の所業を覚えていなかった。ヘルメスに、神に呪いをかけるなど、それこそ神をも恐れぬ所業をやっておきながら、それを忘れていたのである。

そして、今しがたの出来事。それは二人に、「灰」が神に関する事物に何かを抱いている証明となった。

その何かは、想像も出来ない。けれどポツクとポットは、「灰」がいなくなった後も、ずっとそこを見続けていた。

「あ、おかえりなさい、アスカ様」

本拠ホームに戻ったアスカを出迎えたのは、一人留守番をしていたリルルカだった。

18階層の一件もあり、「ヘステイア・ファミリア」は少し長めの休養を取っている。その間に失った装備やアイテムを買い揃えたりリルカは、そういった諸々の点検をしていた。

「ただいま。リルルカ。ベルとヘステイアは帰っていないのか?」

「まだお帰りではありませんね。二時間ほど前に出発されたので、今は『神の宴』を楽しんでいるんじゃないでしょうか?」

薬液の詰まった試験管を振りながらリルルカは言う。多少はサポーターのイロハを理解しつつあるアスカも手伝いに入る。

「しかし、『神の宴』か。私には縁遠い代物だな」

「リリだって同じですよ。神様であるヘステイア様であれば違うのでしょうか……きつとベル様も慣れない環境に戸惑ってるでしょうね」
「だろうな。ベルは、故郷の村落から出た事がない。『神の宴』に限ら

ず、オラリオで見る全てが新鮮に映った事だろう」

「リリとは真逆ですねえ。前に『セオロの密林』に行つた時が初めてのオラリオの外でしたから。次はあのような冒険者依頼形式ではなく、ベル様達ときちんとした旅行に行きたいものです」

暗い過去を感じさせない様子でリリルカは笑う。それはアスカが尊ぶべきものではないが、家族であればきつと喜ばしいのだろう。

幽かに微笑む幼女は、時折リリルカにサポーター業について指導されながら談笑する。

そうしているとリリルカが、ふと思いついたように言った。

「それにしても、『アポロン・ファミリア』ですか。変に拗れなければいいんですが」

「？『アポロン・ファミリア』がどうかしたのか？」

こてんと首を傾げるアスカに「ああ、まだアスカ様には言つてませんでしたね」とリリルカは続ける。

「実は二日前、ベル様が酒場で『アポロン・ファミリア』と喧嘩したんです。詳細は省きますけど、最終的にベル様がやられてしまって、傷だらけで帰る羽目に……」

「——ほう」

何気ないリリルカの話に、平素半眼のアスカの瞳が僅かに細まる。何時になく冷たい相槌にぎよつとしたリリルカは、自分の足を斬り落とした時と同じ眼をするアスカに慌てて釘を刺した。

「だ、駄目ですよアスカ様!? いくらベル様が怪我をしたからと言って、それだけで他派閥に喧嘩を売らないでくださいね!? 下手に抗争にでも発展したらベル様やリリ達に危ないんですから!」

「問題ない、リリルカ。——バレないようにやる」

「それが駄目だと言つてるんですよ!? ええい、リリじや塚が明きません、ベル様が帰ってきたら駄目だつて言つてもらいますからね!」

「む……それは困る。ベルが望まぬなら、私は何も出来ない」

「それでいいんです!。そもそも今日の『神の宴』の主催は『アポロン・ファミリア』なのですから、神様同士で話をつけてくるはずですよ!」

アスカ様がやるべきことなんて何もありませんよ!」

「ですから本当に大人しくしてくださいね!」とリリルカは必死に念を押した。「ベルが私に言うならな」と素知らぬ顔で言うアスカにリリルカは告げ口を決心する。

しかし帰ってきたヘステイアが「全くアポロンのやつく! まさか戦争遊戯ウォーゲームを企んでいたなんてく!」と触覚ツインテールを逆立てるのを見て、リリルカは真っ青になった。

凄まじい悪寒と嫌な予感。少女を襲う不穏な未来視は、隣で異様な威圧感を発揮する不死の所業の前触れだ。

慌ててベルに頼み込み、アスカを諭してもらうリリルカ。少年に「喧嘩は駄目だよ」と言われた幼女は「分かった」と頷いていたが、果たしてこれで丸く収まるのだろうか。

拭えぬ不安を抱える小人族バルウムの少女は、「どうか何事も起こりませんように……!」と祈るのだった。

翌朝。

昨晩は『神の宴』に参加した疲れからか、アスカと話し合う時間がなかったベル。ダンジョンに向く準備をした少年は、本拠ホームを出る前に家族である幼女と向き合うつもりでいた。

「――囲まれているな。それも数十ではない。恐らくは、百に近いか」しかしそれは、鋭い眼つきで呟いたアスカによって実現しなかった。驚くベルやヘステイアよりも早く、不安が的中したりリリルカが呆然と言う。

「まさか……【アポロン・ファミリア】の襲撃……!?!」

「おいおい……!」抗争でもおっ始めるつもりなのか、アポロンは!?!」にかわに慌ただしくなるヘステイアとリリルカの横で、ベルは話についていけていなかった。冒険者としては着実に成長していても、体験の欠如、特に対人経験なんてベルにはない。

神と少女の意見が飛び交う最中、少年が見つけたのは幼女だった。部屋の扉に触れ、集中するように眼を閉じているアスカにベルは話しかける。

「ア、アスカ……これからどうなるの?」

「十中八九、『アポロン・ファミリア』との抗争になる。そして狙いは、貴公だ。ベル」

「僕の、せい……?」

「履き違えるな。責任は仕掛けてきたアポロン側にある。何がどうなるろうと、貴公の背負うべき責にはならない」

「……アスカは、どうするつもりなの?」

アスカの言葉に18階層での既視感を覚えたベルは、眉を下げて問う。対する不死は平然と、最も簡単な手段を提示した。

「皆殺す。それがどのような相手だろうと関係ない。私の家族に手を出すものは——根から全て殺し尽くす」

幼女はいとも簡単に殺人を宣言した。

それは、人の世界において最も忌避すべき悪行。されど不死の旅路にあつて、最も有り触れた日常。

立ちほだかる敵は、討ち殺す。そう決めている『灰』の眼が、少年を貫いた。

「……駄目だよ、アスカ。そんな事しちゃいけない」

「何故?」

「僕が、そうしてほしくないから。もしアスカが人を殺したとしても、僕はずっと一緒にいるよ。でもそれは、許されないことかもしれない。僕とアスカが引き離されるかもしれない。」

そんなの、僕は嫌だ。だから——戦うなら、皆で戦おう。アスカ」
ベルははつきりと、己の心を言葉にした。

感情的な台詞だ。理屈や戦略の上にはなく、ただ家族を想う心ばかりが溢れている。

ああ、そうだ。ベル・クラネルは、アスカの導きだ。少年がそう微笑むのなら、不死に否はない。

「分かった。であれば、我らの取れる手段は三つに絞られる。

逃走か、迎撃か、逆襲か。ベル、貴公は団長だ。ならば我らに、指針を示したまえ」

戦局の直前故、無表情を保つアスカはそう提案する。ヘステイア

が、リリルカが、「ファミリア」の視線がベルに集まる。

「――逃げよう」

それを受け止めたベルは、自分の責務から逃げず、決断した。

「まずは神様とリリの安全を確保しなくちゃ。行動するのは、それからでも遅くないと思う」

ベルの団長としての発言にリリルカが真つ先に反応する。

「賛成です。リリはともかく、ヘスティア様の身に何かあれば「ファミリア」は終わりです。神質ひとしちにされないためにも、安全圏へ避難して頂くのが一番です」

「……分かった。悔しいけど、この状況じゃボクは足手まといにしかならない。せめて君たちが心置きなく動けるよう、身を隠すよ」

ヘスティアは悔しそうに拳を握りながらも頷く。それを見渡したアスカは、己の考える最適な配置を提示する。

「ならばヘスティアを中心に、リリルカ、ベルが前後につけ。

リリルカ、貴公は先導だ。まずはギルドへ向かえ。そのままヘスティアが保護されるのが望ましいが、そうでなければ『ダイダロス通り』の小部屋へ案内しろ。あの場所は、そう容易くは見つからない。

ベル。貴公は護衛だ。ヘスティアとリリルカの安全は貴公にかかっている。必ず守り通せ」

「うん、分かった。アスカは、どうするの?」

「私は、陽動だ。敵の注目を集め、包囲網を穿つ。必要があれば敵の数を削る。」

……大丈夫だ、殺しはしない。多少は傷つけるが、一人も殺さないと誓おう。貴公らがギルドに到着したと判断すれば、すぐに離脱する」

嘘を含まないアスカの瞳と見合い、ベルは頷いた。そして皆が手早く準備をする中、ヘスティアは幼女に囁く。

「アスカ君……くれぐれも、くれぐれも子供たちを殺さないでください。ボクが言っても、無駄かもしれないけど……」

「いや。分かっている。私はベルと約束した。人の不殺は、必ず果たされるだろう」

その時、リルルカは言い様の無い不安に襲われた。思わずヘステイアとアスカを見るが、目につく異常は何もない。

それでも背筋に這い寄る、言葉に出来ない違和感。リルルカは何とかそれを突き止めようとするが、その前に時間が来てしまった。

「準備はいいな？　まず、私が正門から出て注意を引く。その隙に貴公らは裏口から脱出しろ」

「了解！　……アスカ、怪我しないでね」

「——ああ、勿論だ。それも、約束しよう」

微笑んで、アスカは地下室から出る。それを追って三人は、裏口付近に待機する。

壊れかけた廃教会。その正門から堂々と出ていく灰髪の幼女。生まれより伸びる灰髪と、密やかな髪飾りばかりが見える後ろ姿に、リルルカは不吉の予兆を幻視した。

「出てきたぞ——撃て」

廃教会の正門に人影が現れた瞬間、リッソス・レスピアは片手を掲げ、合図を出した。

途端、放たれる攻撃魔法。十数人の魔道士による同時攻撃は寸分違わず正門に直撃し、多量の光と爆音を轟かせる。

ガラガラと崩れる、廃教会。兎一匹逃さぬと巻き上がった煙を注視するリッソスは——そのまま意識を刈り取られた。

煙を貫き、閃光の如く驀進した灰色の砲弾。有無を言わさぬ、認識すら許さない真っ向からの不意打ちによって。

「っ?!　隊長?！」

威力を余す事なく叩き込んだ蹴りによって、リッソスがその場に崩れ落ちる。驚愕するリッソスの小隊の目に飛び込むのは、気絶したエルフを足蹴にする灰色の幼女。

妖しい光を揺らめかせる刃を握る小人族——バルウム「灰」は、両手で長い柄を掴み。

十秒後。リッソスの率いる小隊は、抵抗も許されず全滅した。

敵の五割を戦闘不能にする。足止めを考えるのなら、それが最良だと「灰」は考える。

優先順位は治療師、魔道士、『敏捷』に長けた者。後衛を潰し、健脚を断ち切る。そうすれば組織は目に見えて鈍くなると、「灰」はよく知っている。

だから最初に狙うのは最も後ろにいる者だ。S Lによって歪に強化された速力を以て、敵を翻弄し背後を取る。

そして確実に、喉を潰す。魔道士の詠唱を潰せば魔法の脅威は軽減され、救助のためにアイテム、人手を浪費させられる。

到って凡庸な、足止めの手法。それを実践する「灰」は、当然敵に見切られる事も勘定に入れていた。

「来たぞ！ 囲め！」

「灰」の狙いは既に看破されている。魔道士を守るように立ちふさがり、敵は複数人で襲い来る。

多対一。「灰」にとって、最も苦手数数の暴力。

しかし不死は、灰髪を翻し——鎧袖一触に斬り払った。

斬られ、吹き飛び、倒れる敵。それを踏みつけて「灰」は経験則による速攻を決める。

怪我はしない。そう、ベルと約束したのだから。見を捨てる「灰」の力は、全力には程遠くとも敵にとって十分過ぎる脅威だった。

襲い来る敵も、守られる敵も、片っ端から蹂躪する。殺しはしない、それもベルとの約束だ。しかし後遺症程度は覚悟して貰う。

最後の一人を斬り捨て、「灰」は瞬く間に小隊を全滅させた。移動するベルらのソウルを確認し、次の敵を探す少女。その灰髪に、鋭い短刃が投擲される。

当然の如く避ける「灰」。廃屋の上に立つ少女を攻撃したのは、【月桂の遁走者】——ダフネ・ラウロスだった。

「やってくれたね……リツソスのところをやったのもアンタ？」
「だとしたら、どうする」

「ヘステイア・ファミリア」にはバカみたいに強い小人族バルウムがいる……
本当じゃん。ヒュアキントスの奴、大事な情報を誇張だなんて斬り捨てて……」

「その結果がこれだよ」と、戦闘態勢を崩さないダフネは言う。灰を警戒する短髪ショートヘアの少女は、小隊を預かる指揮官として命じた。

「カサンドラ！ 治療師ヒーラーから順に治して！ ウチが相手してる間に、頼んだよ！」

ダフネは抜剣し、灰に仕掛けようと走り出し――

「――ダメえ！ ダフネちゃん!!」

後ろから抱きついてきたカサンドラによって、体勢を大きく崩した。

「馬鹿……!!? 何やってんのカサンドラ!?!」

命令無視、挙句の果てに味方の邪魔。いくら親友とは言えあまりの行動にダフネの頭に血が上る。

「う、うう……」

「!?!」

しかし上った血は、一気に引いた。カサンドラを無理やり引き剥がした自分の手に、べつとりと血がついていたからだ。

膝から崩れてままだ動かないカサンドラを見れば、広がった長髪の間に見える華奢な背に深い斬傷が刻まれている。そして前にいたはずの小人族バルウムが、カサンドラの背後に立っていた。

滴る血が巻き戻って纏わりつく、異邦の刃――《アーロンの妖刀》を握る灰は、静かに二人を眺めている。

「このっ……!?! よくもカサンドラを！」

「ダメツダフネちゃん……!!? この人に手を出しちやダメツ……!!」

激昂するダフネを、息も絶え絶えのカサンドラが必死に押し留める。自分を庇った親友の訳の分からない言動に、思わずダフネは声を荒げた。

「さっきから何言ってるのカサンドラ!?! ウチらから仕掛けたんだよ、戦うしかないでしょ!?!」

「そしたらダフネちゃんが死んじゃうっ……!!? だからダメツ、死ん

じやうよう……!」

「カサンドラ……?」

涙に塗れ、痛苦を堪えなお継るカサンドラの表情に、ダフネもようやく微かな異常を悟った。それでも『呪力』まりよくが、ダフネに信じさせまいとするが――

「……お、お願い、お願いします……! 私は、ど、どうなっても、いから……ダフネちゃんだけは、助けてください……!!」

必死に動き、頭を屋根に擦り付け、カサンドラは懇願する。

それに意味はない。分かっている。それでもカサンドラは、喉が嘎れ果てても願うしかなかった。

どうか暗黒の気紛れが、大切な友達を奪い去らないでくれますようにと。

「お願いします、お願いします……!!」カサンドラは懇願を続ける。自分の傷も顧みず、友人の助命を願うカサンドラにダフネの思考は乱された。

「……ヒュアキントス・クリオは、向こうか」

その間に、〃灰〃は動く。都市の北西、家族が逃げた方向に視線を投げる銀眼の不死は、そこに誰もいなかったかのように、一瞬で掻き消える。

残されたのは【悲観者】ミラピリスと、彼女に守られた大切な人。それを自覚しないダフネは「どうなってんのよ、もう……!?!」と髪を掻き回して、カサンドラの治療を優先した。

ヒュアキントスは苛立っていた。

彼を満足させる報告は一向に入ってこない。兎狩りを命じた筈の団員はいつの間にかやられ、現場は混乱を加速させている。

栄えある太陽神の眷族であるというのに何という体たらくか。命令一つ満足にこなせない仲間にも、崇拜する主神の願いに応えられない自分にも苛立つヒュアキントスは、不甲斐ない団員に指示を飛ばして一際高い鐘楼に登る。

「——聞こえているか、ベル・クラネル！」

小賢しく逃げ回る兎に吠え立てるヒュアキントスは、気付かなかった。

鐘楼の最低層。彼の登った塔の真下にへばりつく、影の如き小人に。

——そして雷鳴が、晴天の空に響く。

時間は少し遡る。さかのぼ

廃教会の裏口から脱出したベル達は、曲がりくねった裏道を走りながらギルドを目指していた。

土地勘は襲撃者よりこちらが優れている。散発的な襲撃にベルが対応しつつ、リリルカが先導して道を指し示す。

「この道を抜ければギルドまであと半分です！ アスカ様のおかげで思ったより相手の数も多くありません、このまま逃げ切りましょう！」

「そ、それはいいけどサポーター君!? も、もうちよつとボクに気を使ってくれてもいいんだぜ!」

「背負われている身で文句言わないでください！」

《スキル》、アーテル・アシスト【縁下力持】に加えて『指輪』を多数装備するリリルカ的能力はLv.2相当だ。ヘスティアを背負っても十分に速く走り回れる。

二人を守り、追いかけるベルは今も戦っているであろうアスカを心配した。いくら強いと分かっているけど、胸に巢食う不安は消えない。どうか無事でいますようにとベルは願い——

『聞こえているか、ベル・クラネル!』

晴天に響き渡る声が聞こえたのは、その時だった。

「この声……! ヒュアキントスさん!」

一際大きく反応するベルに叩きつけるように、大音声は辺り一帯に広がる。

『どこかに隠れようと、どこかに逃げ込もうと、我々は貴様を追い続ける。』

一時を凌ごうが無駄だ!』

執念深いアポロンを象徴するかのような警告。ギルドに逃げても終わらない、決着をつけなければどうにもならないと悟るベルは、歯を食い縛る。

——こうなればもう、逃げる道はない。戦うしか——

そう考える、少年の耳に。

『地上でも、ダンジョンでも同じことだ! この先、お前に安息の日々はないと——』

——その雷鳴は、底知れぬ怒りのように轟いた。

「!——つ!」

轟音が、席卷する。ヒュアキントスの発した大音声を遥かに超える、雷の悲鳴。

思わず音の発生源を見た三人の目に映ったのは——鐘楼に降り注ぐ、太陽の光の如き雷霆。

【落雷】。そう呼ぶには力も範囲も桁違いの暴力が、鐘楼を砕き、崩壊させた。

ガラアン、ガラアンツツツ——と、落下した大鐘の音が耳に突き刺さる。

「な、なんだあ!?! 『神の力』!?!」

足を止めるリリルカの背で、驚倒したようにヘスティアが叫んだ。

『神の力』、その言葉を拾ったベルは、バツとヘスティアに顔を向ける。

「か、神様のどなたかが『力』を使ったってことですか!?!」

「い、いや……違う。一瞬それっぽかったけど、今のは『神の力』じゃない……」

けれど、あれだけの力……まさか、アスカ君……!?!」

「っ!」

ベルははつととして視線を戻す。既に崩れ落ち、ベル達からは影も形も見えない鐘楼の方には、きつとベルの家族がいる。

アスカは強い。けれど体は、そうじゃない。もしも今のが、追い詰められての行動だったら……反射的に向かいそうになる体を、ベルは抑える。

「……急ごう！　ボクらがギルドに到着すれば、アスカ君も離脱するはずだ！」

同じ結論に達したヘスティアは、皆を急かした。しかし、動かない。ヘスティアを背負うリリルカは、崩れ落ちた鐘楼を見遣ったまま、棒立ちになっている。

「何をしてるんだ、サポーター君?!　早く行かないと、それだけアスカ君に負担が……!!」

『神の力』……神の力……神……?」

ぶつぶつと呟くりリルカは、動かない。ただずっと抱いていた不安が、その不吉な正体を現そうとしている。

それを少女は必死で解き明かそうとした。そうしなければ、手遅れになってしまう——そんな漠然とした思いが、ずっと伸し掛かっていた故に。

そしてリリルカは、ついに気付く。アスカ、神、忘却——ソーマ。あの時「灰」が、何をしようとしていたのか。

それが、ただ一回の過ちでない事に、小人族バルウムの少女は気付いてしまった。

「まさか……!!?　ヘスティア様、「アポロン・ファミリア」の本拠ホームはどこですか!?!」

「な、何だい、藪から棒に!?!」

「いいから早く答えてくださいっ!」

「せ、西南だ!?!　ギルドとは反対の方向だよ!」

「——っ!!」

唇を噛んだリリルカは、走り出す。

都市の北西、ギルドの方角——ではなく。

都市の南西、ヘスティアが言った「アポロン・ファミリア」の本拠ホームへと。

「っ?!　リリ!?!」

「ついてきてください、ベル様!!」

驚くベルに叫んで、リリルカは全力疾走する。慌てて駆け出し、追いかけるベル。それを後ろ首で見るヘスティアはリリルカに叫ぶ。

「どこへ行くんだ、サポーター君!? ギルドはあっちだろ!」

「分かったんです! アスカ様が、一体何をなさろうとしているのか……!」

「ど、どういう意味だい!」

リリルカに足を抱えられ背中から離れられないヘステイアは、慌てて問い質す。並走するベルを横目で見たリリルカは、自分の不安の正体を口にする。

「ずっと違和感があったんです……! アスカ様は、一人も殺さない」と仰られていました! リリ達がギルドに到着する頃には離脱するとも……!」

けれど、離脱したあと合流するとは言わなかった! 一人も殺さないとは言っても、一柱も殺さないとは言わなかった!

「——っ!」

「リリの勘違いなんかじゃありません! アスカ様は——アポロン様を殺すつもりです!!」

リリルカの断言に、ベルとヘステイアは真に驚愕した。神を、殺す? それは許されぬ、あつてはならない所業。

「そんな馬鹿な! 『神殺し』は下界最大の禁則だぞ!」

「そんなこと、アスカ様に関係ありますか!? ベル様以外は何だって踏み躪るあの方に、禁則タブーなんてありません!」

「い、いくらアスカ君でもそんなこと……!」

「リリは見たんです! リリが『ソーマ・ファミリア』から脱退する時、ソーマ様を殺そうとしたアスカ様を!!」

「!」

「もつと早く言うべきでした……! あの時、アスカ様が何を思っただけ矛を収めたのかは分かりませんが、ソーマ様を殺そうとしたことだけは確かです!

アスカ様は、必要と思えばそれをやるお方です! 誰も殺さずに『アポロン・ファミリア』を無力化させようと、アポロン様を殺す選択肢を考えても不思議ではありません!」

「……………」

ヘステイアは押し黙る。リルルカの言葉を否定しようとして、けれど接してきた記憶がそれを許さない。

アスカなら、それをやる。そう結論付けるしかない女神の横で、まだ信じ切れていないのはベルだった。

「そんな……だって、ありえないよ、リリ……アスカが、神様を殺す、なんて……」

「忘れたんですか、ベル様!? アスカ様はご自身で仰っていたではありませんか!」

英雄も化物も——人も神も、邪魔をする全てを殺してきたから、今があるって!!」

「あ……」

そうだ。ベルは聞いていた。自分から望んで聞いたのだ。

アスカの暗い物語。ひたすらに、ただひたすらに戦い続けた、救いの無い不死の話。

その物語の語り部たるアスカは言っていた。英雄を殺したと。化物を殺したと。人を殺したと。

——神を、殺したと。それが必要だったから、進み続けるために殺したと、アスカはベルに言っただけで聞かせた。

それが紛れもない真実だと、分かっていたのに。ベルもヘステイアも、真実心では受け入れていなかった。そんなはずはない、何かの間違いに違いないと——ずっと目を背けていた。

もう逃げないと、誓ったのに。ベルは忸怩たる思いで唇を噛み締める。無意識にまだアスカの暗い側面を見ようとしていなかった自分を殴りたい気持ちになる。

けれど、今は。贖罪も、自罰も、全部後だ。前を向いて走るベルは、より一層脚に力を込めた。

「——急ごう、リリ! アスカを止めないと!」

「はい! 神殺しだなんて、そんなこと絶対にさせません!」

二人の眷族は走る。自分の家族を、自分に希望を指し示した人を止めるために。

その背中、ヘステイアは。ある決心を抱いていた。

「止まれ！……ここは「アポロン・ファミリア」の私有地だ！」
背の高い鉄柵の門の前に立つ門兵が、招かざる客に槍を構える。
生まれより伸びる灰色の髪。闇に浸したような長衣。

凍てついた太陽のような眼。

何処の馬の骨とも知れぬ灰髪の小人族バルウムを寄せ付けぬよう、門兵は槍を突き出す。

それに「灰」は、興味がなかった。障害とは捉えている。だが、目的じゃない。

「灰」の目的は、ただ一つ。この門の先にいる——神一柱。

ならば「灰」の取るべき手段は、一つだけだった。

「……おい、こいつまさか、「ヘステイア・ファミリア」じゃないか……？」

「馬鹿な、今頃奴らは都市中を追い掛け回されているはず——」
門兵の会話は、それ以上続かなかつた。

大一閃。

最大まで血を啜った《アローンの妖刀》による、横一文字。それが鉄柵を門ごと真つ二つに斬り裂き、衝撃で門兵を吹き飛ばす。

金属のひしゃげる金切音。庭先の噴水に突っ込む門兵。巨大な石造りの屋敷から現れる「アポロン・ファミリア」の構成員。

その全てに、「灰」は興味がな。庭の先、屋敷の奥、障害物越しにアポロンのソウルを感じ取る不死は——

「——【反逆】」

——《渴望の鈴》を手に、かつての狂王が振るいし己の闇術を唱えた。

アポロンは待っていた。

ヘステイアが戦争遊戯ウォーゲームを受ける時を。あるいは兎が捕まる時を。

どちらでもいい、運命の筋書きはもう決まっている。

アポロンはあの無垢な兔を手に入れ、存分に寵愛を注ぐのだ。

——ああ、ベル君！ いやベルきゅん！

——もう逃さないぞ！

そう遠くない未来を夢想し、愉悦に浸る男神は優雅に葡萄酒を嗜んでいた。

何よりも深く、重い闇。遠き時代の原初の深淵が、膨れ上がるまでは。

「……ん？」

ふと、急に暗くなつた窓辺にアポロンは訝しむ。雲がかかるにしても、この暗さはおかしい。そう思ったアポロンが立ち上がり、窓辺に近寄ろうとしたその時。

「——アポロン様あ!?」

扉を破壊する勢いで開けた団員達が、アポロンの周りに群がり。

「ど、どうしたんだ、お前たち——」

アポロンの言葉が言い切られる前に、膨れ上がった闇は、破裂した。

瓦礫の山が出来ている。

整えられた庭、美しい噴水、荘厳な石造りの屋敷。

【アポロン・ファミリア】の本拠は、美しい物を愛する主神の趣向もあつて、ある種の荘厳さすら纏う美しい土地だった。

今やもう、見る影もない。【反逆】——神々の怒りの物語に対抗する闇術によつて、全て跡形もなく吹き飛ばされていた。

その、闇の爆発の中心地。草木の一本も見当たらない更地に立つ“灰”は、無言で佇んでいる。

ただ静かに、その時を待っていた。晴天も陰り、曇天が支配しつつある空の下、“灰”はただ立ち続ける。

「……なっ、なっ……何がっ、起こつたっ……!?!」

ふと、彼方の瓦礫が動き、零れた。辛うじて動ける団員が瓦礫をどかす中、自身の眷族に守られたアポロンは呆然と周囲を見渡す。

何もない。己の財、己の屋敷。あるのは全ての残骸と、愛する眷族

たちの倒れる姿だけ。混乱、忘我、悲哀。アポロンは何も出来ずにいた。

「……ア、アポロン、様……！ お逃げ、ください……！」

その身を盾にアポロンを守り、力尽きた団員の一人が呻く。はっとして駆け寄り、その無残な姿に悲しみの涙を流すアポロンは、ふつふつと沸き上がる怒りに震えた。

「——何者だ！ 私の愛する眷族達を傷付けたのは！」

猛ぶアポロンの声に、答える者はいない。代わりに、ぺたぺたと裸足で歩む小人族が、徐々にアポロンへ近付いていく。

その灰髪の小人族が犯人だと、アポロンを守った構成員は知っていた。だから動ける数名がアポロンを連れ、逃げようとする。

させるものかよ——右眼に火の輪がちらつく「灰」は、なおも垂れ下げる《渴望の鈴》から闇術を放つ。

「約束された平和の歩み」

「灰」の足元より広がった闇が、効果範囲内の全ての生命に絡みつく。

【約束された平和の歩み】。白教の知らぬ、辺境の奇跡を闇術に転化したもの。本来は逃げるため、あるいは睨み合う平和を実現するための奇跡は、獲物を絶対に逃さない闇術の檻へと変貌している。

通常の効果を大幅に底上げされ、まったく動けなくなったアポロン一派を「灰」は見つめる。そして周囲を見渡し、確かめた。

十分だ。もう十分待った。これでもう、憂いはない。

自らも動けなくなった「灰」は闇色の鈴をソウルに還し、右手を天に掲げる。

白い手に灯る、《呪術の火》。ボツと浮かび出た小さな種火が燃え上がり——それは際限なく巨大化した。

【封じられた太陽】

球形に収束する、灼熱の光。燃え上がる呪術の火はそれが太陽であるかのようだ。

アン・テイルの悍ましい秘儀によって生み出された呪術。それを「灰」は、許容限界まで蓄積する。

「——そこまで！」

第三者の声が割り入ったのはその時だった。仮面をつけた男達が続々と現れ、「灰」とアポロンの間に並ぶ。

双方に武器を構える仮面の集団。その中で一際存在感のある女性は、槍のような杖を掲げ大呼した。

「これ以上の都市内での抗争、罷り成らん！ なおも争う者は【ガネーシャ・ファミリア】が取り締まると知れ！」

【ガネーシャ・ファミリア】団長、シャクティ・ヴァルマ。都市最上位の第一級冒険者であるLv.5の女傑は、堂々と抗争への介入を宣言した。

【ガネーシャ・ファミリア】による、異例の介入。通常は都市の住人の安全を確保するのみで不干渉を貫く【ガネーシャ・ファミリア】の行動に、アポロン一派は驚愕する。

だが、「灰」には関係ない。たとえウラノスを通じて「灰」を知るガネーシャが、「灰」の行動を予期して眷族を動員したとしても、それは何の枷にもならない。

杖を掲げるシャクティの前で、「灰」の呪術がなお燃え盛る。

「——その小人族！^{バルウム} 今すぐ魔法行使を中止せよ！ さもなくば実力で排除する！」

杖を構え、シャクティは厳しい表情に汗を流す。炎の熱のせいではない、シャクティは「灰」と呼ばれる不死を知っている。

その秘めたる力が、己では遠く及ばない事も、今ありありと理解させられている。

それでも、退けない。退く事は出来ない。今や「灰」の身長は何倍にも膨れ上がった炎球が放たれば、アポロン一派のみならず周囲にも多大な被害を及ぼす。

都市の安寧を守る者として、その長としてシャクティは逃げられない。万が一の時は退避するよう団員に命じて、第一級冒険者の麗人は「灰」と対峙する。

「う、うわあああああああつ!？」

背後から叫び声が聞こえ、「灰」の顔に槍の穂先が突き刺さったの

は、その時だった。

馬鹿な!?! とシャクティは振り返る。壊れた槍を投げたのは、辛うじて動ける「アポロン・ファミリア」の眷族。「約束された平和の歩み」によって逃げる足を奪われ、巨大化する太陽の如き火球に恐慌した一人ががむしやらに武器を投げたのだ。

だが、それは悪手だ。これ程の魔法、イグニス・ファトウズ魔力暴発でも起こるものなら惨事は避けられない。槍を投げた人物の捕縛を命じたシャクティは、どうか魔力制御を手放さないでいてくれと振り返り。

そこには、左眼を潰されながらも。眉一つ動かさず炎を猛らせる、不死の姿があった。

「なっ——!?!」

炎球は、更に大きくなっている。もはや地上に降ろした太陽と言っても過言ではない程に光り輝く灼熱は、触れる者皆焼き尽くす圧倒的な暴力を誇っていた。

これほどかと、シャクティは戦慄する。話に聞いた「灰」の力と、実際に目にしたその本質は桁違いだ。神殺しすら恐れぬ不死は、その業火をもつて全てを灰燼に帰そうとしている。

何よりもその、重たい瞳。一切の情緒が欠落した、払うべき塵を映す銀の半眼が、シャクティの体を強張らせた。

それでも——何もしないわけにはいかない。玉砕覚悟で魔法を放ち、少しでも威力を相殺しようとしてシャクティは詠唱を口にし。

「——ちよおっと待ったあああああああああああ
!!!」

それは、響き渡った女神の呼号によって中断された。

思わず、シャクティは声の方向を見る。アポロンも、許容限界まで炎を蓄えた「灰」でさえ、投擲を中断し首を回す。

走ってくる、二つの影。精一杯の速力で到着した二人——ベルとリルカは、左眼が潰れている「灰」に息を呑んだ。

リルカの背より降り、痛ましいものを見るかのように顔を歪めるヘステイアも、カッと目を見開いて「灰」の前で両手を広げる

「——アスカ君、やめてくれ! これ以上はもう無意味だ!」

暗く輝く銀の半眼と向き合い、ヘステイアは説得する。

「この惨状、君がやったんだろう!?! なら、これで痛み分けだ! ボクらも本拠ホームを失った、アポロンの奴も本拠ホームをぶっ壊された!」

それで終わりだ! これ以上君が、泥を被る必要なんてない……!

ヘステイアは必死に訴える。しかし「灰」は、静かに言う。

「ヘステイア。まだ何も、終わってなどいない。——アポロンが生きている」

「つ……! アポロンを、殺す気かい……!?!」

「そうだ。そうしなければ終わらない。不変の神は、何も諦めなどしない、私は知っている」

「灰」は揺らがない。己の為すべきと断じた事を、何処までも遂行しようとしている。

それを悟ったヘステイアは、バツと背後を振り返った。杖を構えるシヤクテイと、目が合う。

「——その君! 手袋を貸してくれ!」

ヘステイアの突然の申し出に、だが目的を理解したシヤクテイは従った。手渡された手袋を、ヘステイアは振り被り——「どりやあああああああつ!!」とアポロンに叩きつける。

「アポロン! 戦争遊戯ウォーゲームだ、受けて立ってやる!!」

「は……へ、ヘステイア?」

「早くしろ、死にたいのかあつ!!」

「わ、分かったつ!」

慈愛の女神らしからぬ怒号にアポロンは頷いた。それを見たヘステイアは、再び「灰」と向き合う。

「アスカ君、戦争遊戯ウォーゲームは成立した! 決着は戦争遊戯ウォーゲームでつけられる!」

「……」

「敗者は勝者の言う事を聞く、これは絶対だ! 神々でさえ、その勝敗は覆せない!」

「……」

「だからお願いだ、止まってくれ……! ボクはこんな形で、君を失い

たくないんだ……!!」

ヘステイアは叫ぶ。それはただ、「灰」だけに全てを背負わせたくないために。

ヘステイアは、「灰」を■しているために。それは■しい眷族と離れたくないと願う、女神の心の表れだった。

「……」

それでも「灰」は、止まらない。ヘステイアの、神の言葉など論外だと、「灰」はとうの昔に定めている。

「アスカ君……」

それをヘステイアは、理解してしまう。心の底から悲しそうな顔をする慈■の女神に、「灰」が思うことは何もない。

だが。

「……ベル君、リリ君……——許してくれ」

その言葉は、確かに「灰」の挙動を止めた。

にわかに立ち昇る、神の気配。ヘステイアから溢れ出す、超越存在たる存在の証。

——神威。人類を平伏させる神の威光をヘステイアは放つ。

その目的は、決まっている。ヘステイアはもう決心していた。

「灰」が、アスカが全てを背負おうとするのなら——『神の力』^{アルカナム}を使つてでも、それを止めると。

ヘステイアは今、覚悟している。アスカを止めるためならば、下界から去る覚悟を。

ルール違反を犯した神への制裁。天に還る罰をも受け入れて、ヘステイアは一人の眷族と対峙していた。

対し、「灰」は。

「灰」と呼ばれる残り滓の意識は、深海に途絶え。

代わりに奥底の、目覚めさせてはならない王が首を擡げる。

ギョロリと蠢く、不死の右眼。それは慈愛の女神を映し、小人族の少女を映し——そして無垢なる、少年を映し。

「ヒツヒツ」と、音に乗らぬ嗤い声を、不死は喉の奥で鳴らす。

ああ、全く——ひどい神だ。

その優しきは、取っておけと。ベルのために使えと——そう言ったのに。

不死が思ったのは、それだけだ。一瞬間に塗り替わった銀の右眼は、ただベルを映し、王は再びの微睡まじろみに還る。

残ったものは、〃灰〃ばかり。意識を取り戻した〃灰〃は静かに——【封じられた太陽】を掻き消した。

単純な話だ。

ヘステイアが送還されたら、ベルは悲しむ。それをベルは、望まない。

ベルが望まないのなら、それは〃灰〃が——アスカが望まない事と同じだ。

だからアスカは、呪術を消した。結局は、ヘステイアの意志なんて関係なく、ただベルのためだけに。

「……ごめん。アスカ君」

それを悟る、ヘステイアは。神威を引っ込めて、涙を流す。

「こんな形でしか、君を止められなくてごめん……不甲斐ない主神おやで
ごめん……何も出来なくて、ごめん……！」

「ごめんなさい、アスカ君……ボクは君に、何もしてあげられない
……！」

「構わないよ。ヘステイア」

滂沱の涙を零す女神を、顔から槍を引き抜いた少女が抱き締める。

「貴公の覚悟は、よく分かった。そしてそれは、ベルのために使つてくれ。」

私になど、構ってくれるな。貴公はベルの——家族なのだから」
「……ごめん、ごめんね、アスカ君……！」

左眼が潰れたまま、泣くヘステイアの背中を叩くアスカは、暫しの後、主神と向き合う。

「それで、ヘステイア。どれくらいの猶予がある？」

「……一週間。それだけの時間を、必ず勝ち取ってみせる。」

「だからアスカ君、勝ってくれ。勝って、ベル君を助けてやってくれ」
「ああ。心得ている」

頷いたアスカは、ヘステイアから離れた。そして『エスト瓶』を飲み、沈黙する少年に視線を合わせる。

「済まない、ベル。私は怪我をしてしまった。貴公との約束を、果たせなかった」

「……いいよ。アスカが無事なら、それで……」

「そうか。ならば良かった。それでは、ベル。リリルカ。行くぞ」

「……行くって、何処へ？」

「決まっている——【ロキ・ファミリア】の本拠^{ホーム}へだ」

ベルに答える銀眼の不死は、既に戦争遊戯^{ウォーゲーム}を見定めていた。

反逆

「衝動」の隠された原型

強い闇の衝撃波を発生させる

拡散する闇は光を喰らい、深淵となる

狂王は神々の手の届かぬ、吹き溜まりの底で

ただ一人、深淵を広げ続けた

「反逆」は狂王の、神々への抵抗である

故に、抗い難い力の誘いがあるうとも

人は決して、触れるべきではない

目覚めぬ卵の殻のように

曇天が、空を覆っていた。

黒い雨雲が立ち込めた曇り空。今にも涙を零しそうな空を、窓辺からアイズは見上げている。

上空に立ち昇る幾筋の黒煙。それは都市で『抗争』が勃発した証だ。いつも窓から見える賑やかな喧騒は鳴りを潜め、住人の不安やざわめきがここまで聞こえてくるかのようであった。

ここまで露骨な抗争はいつ以来だろうと、アイズは思う。力を求め、ダンジョンにばかり足を運ぶ【剣姫】^{けんき}であっても、派閥の柵^{しがらみ}は避けられない。

オラリオの頂点を二分する【フレイヤ・ファミリア】との関係のように、武力をもつて他派閥と争った事は数知れない。その経験から言えば、関係の薄い【ファミリア】の抗争に介入するのは良くない事だ。たとえそれが、気にかけている白兔の【ファミリア】であっても。たとえそれが、この世界の誰よりも強い——『個人』が所属している派閥であっても。

だから、アイズは振り返る。金の少女の瞳に映る光景は、通常では決して成立し得ないものだった。

【ロキ・ファミリア】本拠^{ホーム}『黄昏の館』、応接間。そこには今、二つの【ファミリア】の幹部勢が一堂に会していた。

【ロキ・ファミリア】団長、フィン・デイルムナは言うに及ばず、エルフトドワーフの三巨頭、アイズを含めた若手の幹部まで、ここには全員揃っている。

対するのは——【ヘステイア・ファミリア】。

都市の評判、世界各地の知名度で言えば、全く無名の新興も新興。結成して僅か数カ月という、弱小の一言すら力不足の超零細【ファミリア】だ。

規模、名声、何より保有する戦力。二つの派閥の力関係は天と地ほどの開きがある。だから、この光景は成立し得ない。

彼らが、まるで対等であるかのように顔を突き合わせる場面^{シーン}など。

……対外的に知れ渡っている情報を元に判断すれば、の話ではあるが。

「——さて。まずは来訪の理由を尋ねようか」

ピンと張り詰めた緊張が支配する場で、口火を切ったのはフィンだった。にこやかな笑みを浮かべる小人族の勇者は、指を組んで正面を見据える。

左側でガチガチに固まる、しかし真っ直ぐに視線を逸らさない少年、ベル・クラネル。

右側で緊張した面持ちの、けれど真剣にこの場に臨んでいる少女、リリルカ・アーデ。

その中央。両手を膝に置く静謐な、だが冷たい銀眼を光らせる小人——「灰」と視線を合わせ、フィンは応答を待った。

「フィン・ディムナ。貴公への貸しを返して貰う。私は今より一週間、アイズ・ヴァレンシユタインの貸し出しを望む」

「灰」の要求は簡素だった。装飾も諂いもない、直球の言葉。それを深く吟味したフィンは、すかさず言葉の太刀を返す。

「僕個人の貸し借りで、派閥を動かせと。君はそう言っているんだね」「そうだ」

「いくら君とはいえ、それに僕が領くと思っているのかい？」

「必要ならば代価を支払おう。この場合、私が差し出せるのは『ソウル売買』だ」

「……ソウル売買？」

「ソウルを通貨とした商い。私の持つ、『火の時代』に由来する物品、技術、あるいは『業』。それをソウルを介し、売り買いする。

この時代に辿り着いてから、誰とも交わした事のない取引だ。おそらくはまだ、価値がある。

故にその権利を、貴公らに与えよう。それを対価に私は、私の望みの達成を願う」

「——それでも否だと、僕が言ったら？」

笑みを崩さないフィンは、機嫌の良さすら滲ませる楽しげな声色で質問する。それに「灰」は無感動に、だがはつきりと答えた。

「話は終わりだ。我々は去る」

「けれど、それで終わる君じゃあないんだろう？ 次はどこへ話を持っていくつもりだい？」

「フレイヤ・ファミリア」。そこでも駄目なら、「ヘファイストス・ファミリア」だな。とかく、心当たりのある派閥を片端から当たっていくつもりだ」

「そこまでする必要があるのかい？ 極論を言ってしまうえば、君は誰に頼らずとも目的を果たせるだろう？ 『戦争遊戯』が成立した今なら尚更だ。

なのに何故、君は代価を支払ってまで他派閥の『庇護』に入ろうとするのかな」

「今ではないからだ」

フィンの物言いに一切揺れず、「灰」はただ持論を述べる。

「戦争遊戯が始まるまで、一週間の猶予がある。その間、『敵』に渡る情報は出来る限り抑制したい。

貴公らほどの巨大派閥であれば、手を出せる者も限られる。一時であらうとその内側に在れば、私は私を開示せずに済む。

その時は、一週間後の先だ。それまで私は伏せねばならない。私の持つ——あらゆる手段の全てをな」

「成程……つまり『ロキ・ファミリア』に、隠れ蓑になつて欲しい。君はそう言っているわけか」

「そう取って貰って差し支えない」

無表情で肯定する「灰」の言い分は、しかし都市最大派閥に要求するにはあまりにも無茶な内容だ。

「ロキ・ファミリア」を、隠れ蓑にする。この場合、「アポロン・ファミリア」の干渉と監視、情報流出を防ぐ意味合いで矢面に立てと言いつ張っているに等しい。

同盟を結ぶ派閥同士でも面と向かって言えない要求だ。ましてや主神の仲が悪い、最大と零細では、まず不可能な内容である。

しかし……笑顔で黙考するフィンは、やがて降参したと言うように両手を挙げ、唇を曲げた。

「やめよう。これ以上の腹の探り合いなんて時間の無駄だ。いつもなら、僕も団長としてそれなりに交渉するんだけど……君相手じゃあ、形無しだね」

「そうか」

「興味なし、か。相変わらずだね、灰……。……さて、それじゃあそろそろ、君に回答を返そうか。」

「ファミリア」と主神の仲はともかく、君個人においては僕らは随分と親しくさせて貰っていると感じている。相応に世話になっているし、何より君には、大きな借りがある。

それを加味すれば、これくらいの要求は飲んで然るべきだ。それが君に対する礼儀であり、僕らが返すべき恩義だろう。

——今までなら、ね」

そこでフィンは笑みを消して、真剣な表情で「灰」に告げる。

「現在、君の所属する派閥、「ヘステイア・ファミリア」は「アポロン・ファミリア」と抗争状態にある。それは「アポロン・ファミリア」から仕掛けられたものだし、君、ひいては君の「ファミリア」に非はない。

けれどその後が問題だ。君は神アポロンの眷族を蹴散らした後、相手の本拠ホームに赴いてこれを破壊した。一切合切、文字通り更地になるまでね。

そして——神アポロンを殺すべく、強大な火炎魔法を行使しようとした。それに間違いはないね？」

「ああ」

「ならば君は、未遂とはいえ『神殺し』を敢行しようとした大罪人に近い。今の都市に巡っている噂はひどいものだ。「ヘステイア・ファミリア」は閹派閥イッイルスである、すぐに追放、ないし主神の送還をするべきだ、なんて声も聞こえてくる。

君がどう思おうと、『神殺し』はそれ程までに重い罪なんだ。君に関わった全てに疑義が及ぶ、拭い難い罪悪。正直、こうして交渉の場を持つている事すら、危ない橋を渡っている。

今の君と関わりを持つ事は、「ロキ・ファミリア」の今後に暗い未来

を齎すだろう。派閥の長として、一族の『勇者』として、それは認められない。

だから君には、協力できない。今後一切ね」

「……」

フィンの断言に、張り詰めた緊張の糸が更に引き絞られた。

【ロキ・ファミリア】の有する第一級冒険者の面々が、凄まじい圧を発する。ぶわっと汗を吹き出すベル、唾を飲み込むリルカ。『灰』だけがそれに、真つ向から圧を返す。

都市最大派閥の最高戦力と拮抗し、呑み込む程の存在感。巨大な老木の如く、頼りない姿であろうと、『灰』はその裡に膨大な力を秘めている。

容易くは倒れない。丁寧に座るだけの姿からは想像も出来ない言外の圧。それと睨み合い、形成された異様な空気は。

「——というのが建前だ。僕としては、君の要求を受け入れるつもりだよ」

フツと相貌を崩したフィンの、あつけらかなとした言葉で霧散した。

「勿論、アイズの貸し出しについては本人の同意が必要だ。けれどそれを差し引いても、君達の『庇護』、というより隠れ蓑になるのも吝かじゃない」

「……」

「どうして、という顔をしているね。ベル・クラネル」

「えっ!? いやっ、そのっ!?」

「アハハ、そう驚かなくてもいいよ、というのは酷かな。芝居とはいえ、それなりの威嚇をしたからね」

「……芝居……?」

かろうじてその一言を呟いたりリルカに、フィンは深い笑みを向けた。その後ろで威嚇を引っ込めたティオナが声を上げる。

「ねーフィンー、今の本当にやる必要あったの? アルゴノウト君と小人族ちゃんを怖がらせただけじゃない?」

「そうでもないよ、ティオナ。おそらく彼らは、『灰』に振り回される

形でここに連れてこられている。目的も要求も、何一つ知らされてはいないだろう。

そんな彼らに現状を説明するには、僕らが体を張って示すのが一番分かりやすい。だから「灰」が「ファミリア」を伴って訪れた場合は、一旦断って威嚇する。そう話したつもりだけどね」

「それは分かっているけどさ……なんか納得いかない」

後頭部で指を組んで不満を露わにするティオナに、フィンは笑顔を上げた。そして右隣に立つリヴェリアが引き継ぐように説明を続ける。

「本来であれば、我々もこんな真似はしない。しかし我が師、アスカとなれば話は別だ。」

同じ「ファミリア」である君達なら知っているとと思うが、アスカは言葉が足りない時がよくある。特に、自分で決めた行動指針に関しては、言葉もなく行動する事でしか示さない。

だからフィンは、君達がアスカに振り回されていると予測して、現状の説明が必要だと判断した。そうするのが、アスカにとって最も都合が良いだろうと言ってな」

「……どうしてそこまでして頂けるのですか？ アスカ様を受け入れるのも、莫大なデメリットがあると今しがた仰られていたのに」

立ち直ったりリルカが疑問を呈する。「灰」が主導する交渉に口を挟むのは怖かったが、「ロキ・ファミリア」は「灰」ほど恐ろしくはない。ある意味で麻痺した少女の感覚が、心中の疑問を言葉にした。

「決まっておる。「灰」が強いからじゃ」

それに答えたのがガレスだ。腕を組むドワーフは、威圧を抑えてなお巨大な存在感を放つ「灰」を見る。

「儂らが推定したこ奴のLv.は10——文字通りの世界最強、誰も敵わん『頂天』におる」

「レツ、Lv.10つつつ!?!」

「やはり知らされておらんかったか。そこは「ファミリア」の問題じゃから突っ込まんが……とにかく「灰」は、とてつもなく強い。それがオラリオや世界に知れ渡ればどうなると思う?」

——受け入れる他あるまいよ。この世界で『強さ』とは絶対、一つの真実じゃ。どのように時代が動こうと、その存在を認めないわけにはいかん。

そしてその時は、既に定まっておる。お主らの挑む戦争遊戯……その時こそこの時代は、『灰』という『頂天』を知る事となるう」

呆然とする少年少女に呆れた顔をしながらガレスは語った。それは半ば確定した未来、「ロキ・ファミリア」の予測した既定事項だ。結果がどうなるうとも、それを前提に考えを進めなければ足元から瓦解しかねない。

『灰』は、全てを変えながら、歩き続ける。いつか『灰』が表舞台に立つ時が来ると常々思っていたフィンは、リヴェリアとガレスの説明を総括した。

「分かってもらえたかな？　つまり僕達が受けるデメリットは、ほんの一時期に過ぎない。多少の非難を凌ぎ、『灰』が戦争遊戯で力を示した後、おそらく世論は反転する。

『灰』と呼ばれる小人族を、世界が畏怖するようになる。その時、『灰』との繋がりを持つべきか持たざるべきか。

僕は前者を選択した、というわけさ」

そこで言葉を切ったフィンは、未だ驚愕に包まれているベルを眺めた。まじまじと『灰』を見ていた少年はその視線に気付き、目を白黒させながら受け止める。

「ベル・クラネル。ここまでの話は、『ヘスティア・ファミリア』の团长である君への説明だ。『灰』にとってはこちらの事情なんて、全く興味がないだろうからね」

「そ、そうなんですか……すみません、ありがとうございます」

「気にしなくていい。おそらく君は知らないだろうが、彼女には随分と世話になっている。派閥に話を通すぐらいの義理は働くさ。

それに正直言つて、僕は『ファミリア』の柵を抜きにしても『灰』とは良い関係を築きたいと考えている。まあこの辺りの話は、それこそ『灰』には興味がないだろう」

「そうだな。私の望みを叶えてくれれば、それ以上はどうでもいい」

「ハハハ、はつきり言ってくれるね。それでこそ君だ。

……余談もここまでにしておこう。アイズ、〃灰〃のご指名だ。ベル・クラネルの鍛錬に、君も参加して貰いたいらしい」
「うん、いいよ……私も、そうしたいと思ってたから」

「アイズもこう言っている、前回の分も含めて、この一件で貸し借りは相殺しよう。それで良いかい？　〃灰〃」

「ああ。では、ベル、アイズ。表に出るぞ。

鍛錬を始める。今すぐにだ」

スツと立ち上がって、〃灰〃は応接間から出ようとする。それを呼び止めたのはリリルカだった。

「ア、アスカ様!?!　リリはどうすれば……!?!」

「リリルカ。貴公は、〃ソウル売買〃の下準備だ。貴公が知る限りの『火の時代』の道具を、フィン・ディムナに伝えておけ」

「ええっ!?!　ちよっ、待つてくださー!?!」

仰天する少女の声も聞かず、〃灰〃はさっさと応接間から出てしまった。呆然とそれを見送ったベルは、数秒経ってから表情を改める。「リリ、ごめん。この場をお願い」と頼んで、少年は灰髪の幼女を追いかけた。

アイズも追従し、アマゾネスの姉妹と狼 ウエアウルフ 人の青年もそれを追った。残されたのはリリルカと、「ロキ・ファミリア」の三巨頭のみ。

口を開けて見送るしか出来なかったリリルカは、ギギギと錆びついた歯車のように首を回して、にっこりと満面の笑みを浮かべるフィンと顔を合わせる。

「——どうやらそういう事らしい。〃灰〃に振り回される同胞同士、できれば仲良くしたいけれど、君はどうかかな？」

「あ、あはは……そ、そうですね……」

(う、恨みますよ、アスカ様あゝゝつ!?!)

精一杯の愛想笑いを貼り付けて心中で傍若無人な灰髪を呪うリリルカを、フィンはニコニコと眺めていた。

それをハイエルフとドワーフが呆れた目で見ていたのは、完全な余談である。

「ロキ・ファミリア」の団員達は、「灰」に対し複雑な思いを抱いている。

『深層』で初めて目撃されて以降、「灰」は様々な形で「ロキ・ファミリア」に関わってきた。

『深層』での異常事態^{イレギュラー}、『新種のモンスター』の襲撃に対する魔法行使に始まり、リヴェリアへの師事、毒^{ポイズン}妖^{ウエルミス}蛆に冒された団員の回復、幹部勢との模擬戦まで。

「ロキ・ファミリア」は短期間で「灰」という存在に急接近している。しかしそれを実感しているのは上層部のみで、二軍以降、特に遠征に参加していない面々は「灰」に懐疑的な目を向ける者もいた。

彼らの尊敬する冒険者が、都市の頂点に位置する「ロキ・ファミリア」の長達が気にかける価値が、「灰」にあるのかと。

そして、ベル・クラネル。「灰」と同じ「ファミリア」である少年には、より一層強く、その思いを抱いていた。

しかし、そうした者達はこの日——その考えを粉々に打ち砕かれる事となる。

残像すら追えぬ、灰色の影。

瞬きの間に立ち位置を何度も移動する少女が、少年を強襲し、斬滅し、蹂躪する。

吹き飛ばされ、血反吐を吐く少年。新雪のような髪は土と血の赤に汚れ、全身に斬り傷が刻まれ、片腕片脚があらぬ方向を向いている。

「立て、ベル。次だ」

内臓も傷つき、呼吸するのがやつとの少年に、その言葉は無情に告げられた。古鐘のような、擦り鳴らされる掠れた声。震える腕を杖に何とか立ち上がる少年に少女は動き——その四肢の骨を粉碎する。

空に打ち上がる少年の絶叫。文字通り肉体を破壊される痛みに、転げ回る事も出来ない。壊れた人形のように横たわるしかない少年に、少女は再度、同じ言葉を言う。

「立て、ベル。次だ」

物理的に立つ事が出来ない状況に追いやっておきながら、そこには欠片の感情もない。只管ひたすらに、ただ只管に——少年に持ち得る力をぶつけ、超克させようとしている。

それに少年は、泣きながら吼えた。「不転心誓ダークサイン」——損傷を無視させ、思い通りに肉体を動かすスキルの効果が、既に立てない少年を奮い立たせる。

その姿に、しかし銀の半眼は何の感慨も抱かず……再び跳躍する灰色の影は、ボロボロの体を動かす少年を抵抗すら許さず、蹂躪した。「立て、ベル。次だ」

何だ、これは。

眼前の光景に目を見開き、固唾を飲む「ロキ・ファミリア」の団員達は、一様に同じ記憶を想起した。

あの幼女は、「灰」は鍛錬をすと言っていた。「神殺し」の噂が都市中に駆け回る最中、堂々と『黄昏の館』に姿を現し、団員達の制止の声を意に介さず、門前で待っていた団長フィンに連れられて本拠ホームに入り、出てきたと思ったらそう告げた。

訳が分からなかった。「灰」の物言いも、それを許す上層部も。どのようなやり取りがあったかは分からないが、アイズを筆頭とした若手の幹部勢は、少年にこれから味わう地獄を説明する「灰」を見つめるのみだった。

「ベル。一週間だ。この一週間で、私に出来る限界まで貴公を鍛え上げる」

「はい……」

「これまで貴公には、基礎しか教えなかった。それは貴公が未熟であったからだが、私に『技』を教えられる素養がなかったからでもある。

故に貴公には、『技』を扱う私と戦って貰う。その身が死の淵に迫るまで、何度なんどでも、幾度いくたびも、私は貴公を殺しにかかる。

嫌だと言うなら、この場で述べる。貴公が言うなら、私は止める」

「ううん、お願いします！」

「よろしい。いい返事だ。それ故にベル、心折れるなよ。」

これより貴公が味わうは、不死隊の劍つるぎ、フアランの刃。私と同じ『薪の王』——「深淵の監視者たち」が担った『狼の劍技』だ。

それを貴公は、我が物としなければならぬ。受ける、弾け、知って、盗め。それ以外の方法を、私は知らない。

覚悟しろ。そして誓え——私の心臓に、貴公の刃を突き立てると。

その時まで、私は決して、止まらない」

その言葉は、果たして真実だった。『灰』は一切の容赦なく、少年を斬りつけ、追い込み、殺そうとしている。

隠しもしない、純然たる殺意。見ていなくても心胆が震え上がり、足が縛り付けられる恐ろしき幼女。

もはや呻きも上げなくなつた少年に、なおも「立て」と『灰』は言い、特大劍と短劍を構える。

それを止めたのは、眦を決する金の少女だった。

「——やめて、アスカ。これ以上は、駄目」

《デスペレート》を抜き放ち、血みどろの少年の前に立つ【劍姫けんぎ】は、深く洗練された闘志を纏い、『灰』と対峙する。

「貴公は後だ。アイズ」

それに対し、なおも殺意を緩めない『灰』は呟く。

「何も教えられない私が、ずっとベルと戦つた所で、辿り着く先は知れている。

だから私は、貴公を選んだ。ベルを導くつるぎ劍の星。先導を担う先達の役目を、私は貴公に望んでいる。

その他は、どうでもいい。たとえ私の前に立とうとも、私は私の為すべき事を全うする」

「……それでも、駄目。これ以上は、ベルが死んじやう」

「まだだ。まだ死の三步手前にいる。あと二歩、死に踏み込ませなければ、意味がない」

「……………どうして？　ベルを見ていたって、言つてたのに……」

「死線を越えなければ、人は成長しないからだ」

悲しげに双眸を狭める少女に、『灰』は呟く。

不死の見出した自明の理。『灰』をここまで歩ませた、ただ進み続

けるだけの手段を。

「死は、生者にとって最も忌避すべきものだ。それはこの世に生まれ
た時から、生者に刻まれる抗えぬ本能。

死に近づく程に、生は輝く。その命を薪に変えて、死に抗い、燃え
盛る。

故に私はベルを殺す。死の一步手前まで追い込み、そして癒す。

生と死の繰り返し。それに勝る成長を、私は知らない。

——それは貴公も、同じだろうか？」

「……」

「私は示した。ベルは望んだ。ならばこの心臓に刃を突き立てられる
まで、私は止まらない。

それをベルが為せるかどうかではない。これが私の、為すべき事だ
からだ」

「……—なら、私も戦う」

細剣を構える【剣姫】は、剣先に凜然と言葉を乗せる。

「ベルの成長を、アスカが望むなら……私はベルに、戦い方を見せる。
貴方に勝つために必要な全部を、知ってほしいから」

「好きにしる。元より鍛錬は、貴公に任せるつもりでいた。貴公が必
要だと思ふのなら、そうするがいい。

だが——」

瞬間、〃灰〃は掻き消える。目を睜り、振り返ったアイズが見たも
のは、ベルにとどめの一撃を刺し込んだ〃灰〃の姿。

「——アイズ。私は貴公とは、戦わない。ベルの盾、ただの障害として
認識する。

貴公の成長に付き合うつもりはない。貴公に払う関心は、最小限
だ」

「……いいよ。アスカが、それを望むなら」

エストを振り掛け、全快した少年を流し見て、〃灰〃はぺたぺたと
距離を取る。

立ち上がるベルと、並ぶアイズ。その一人と一つの障害物を見据
え、〃灰〃は《ファランの大剣》を構える。

「——私もやるよ。このままアルゴノウト君を見てるだけなんて、嫌だもん」

それに加わったのがティオナだ。常日頃の笑顔を引つ込める難しい顔のアマゾネスは、《大双刃^{ウルガ}》を振り回してベルの横に立ち並ぶ。

「構わない。多対一の時点で、同じ事だ」

それを一言で捨て置いて、《灰》は鍛錬を再開した。

それから、同じ事が繰り返された。

ベルが必死に食らいつき、アイズが斬り、ティオナが暴れる。

Lv.2とは思えない能力^{ステータス}。Lv.6の隔絶した力^{レベル}。

その全てを《灰》は踏み越え、一蹴する。著しい成長を遂げる少年が、歴戦の勇士である少女達が、防戦一方に追い込まれる程の猛攻撃。

アイズとティオナが守り、導いてなお、ベルは斬り殺された。死の一步手前、常道ならばそのまま死する致命傷を与えられ、されど少年は《灰》の手で引き戻される。

繰り返す。繰り返す。ただ只管に、生と死を。無意味とすら感じる螺旋の最中、けれど彼らは成長する。

彼らもまた、知らないのだ。命を賭し、高みに挑む。それに勝る成長など。

故に——その何度目かに、狼の遠吠えが轟いたのは、必然だった。「るオおおおおおおおおおおおつ!!!」

乱入する。

ベルに迫った『狼の剣技』を全力で蹴り、退けたのは、灰毛を逆立てる狼^{ウエアウルフ}人の青年。

牙を剥き出しにするベートは、驚くベルに吐き捨てる。

「勘違いすんじゃないやねえぞ、兎野郎。俺はただ、《灰》野郎と戦いに来ただけだ。

アイツにとつちやあ邪魔くせえ虫が一匹増えたくれーだろうが……んな舐めた態度、二度ととれねーようにしてやる。

——ボサつとすんな、立ちやがれ兎野郎！ てめーも雄^{オス}なら、女共の前で情けねえ姿を見せんじゃねえ!!

《灰》野郎を、狩るぞツ!!!」

殺意を放ち続ける幼女を睨み、ベートは吼える。それに感化されたのか、ベルもまた力強い表情で奮い立った。

「——そういう事なら、私も参加しようかしら」

そして、もう一人。拳を鳴らして歩み出るアマゾネス、ティオネは腰の《湾短刀》^{ソルアス}を抜き放つ。

「アンタには悪いけど、私もベートと同じ、個人的な理由よ。」

——私、アスカのこと嫌いなもの

ちらりとベルを見たティオネはそう言って、「灰」の殺意と真つ向から向き合った。

「だから、戦う機会があるんなら喜んでぶん殴ってやるわ。泣いて謝るまでポツコボコにぶっ潰してやる……！」

「ティオネ……うん！ やろう！ みんなでアスカを倒すぞーっ！」

ティオネの参戦に目を見開いていたティオナは、嬉しそうに笑って《大双刃》^{ウルガ}ごと腕を掲げた。能天気な妹にティオネは呆れ、ベートは口端を吊り上げる。

「ケツ、やつと調子を取り戻しやがったか。似合わねーのに辛気くせー顔しやがって、バカゾネスが」

「なんだとーっ!？」

「はいはい、喧嘩は後にしなさい。珍しくベートが協力的なんだから。」

——アイズ、合わせるわよ」

「うん。みんなで、戦おう。——ベルも、一緒に」

「——はいっ！ アイズさんっ！」

圧倒的な実力差。勝ちの目などない戦いを前に、それでも彼らは笑い合った。拳を握り、前を見て、遙か高みに挑戦する。

そしてそれを、心底どうでもいいと言うように。「灰」は見つめ、蹂躪する。

繰り返される敗北。繰り返される生と死。それでも彼らは、心折れない。

まるで物語の英雄のように——絶望なんて吹き飛ばして、果敢に挑み続けるのだ。

『……』

それを見せつけられる、「ロキ・ファミリア」の団員達は。無言の胸中に、同じ思いを噛み締めた。

ああ、分かった。認めよう——ベル・クラネルは、あちら側だ。

「ロキ・ファミリア」の象徴、後世に名の残る第一級冒険者と同じように、少年は光り輝く道にいる。

人々の心を打つ、英雄の証左。人々を駆り立てる『何か』を、あの少年も持っている。

その過程がどうであつたかは関係ない。今こうして見せられているのは、英雄の雛アイズたちに遥か劣りながらも、決して諦めないその姿勢だからだ。

ベル・クラネルは、自分達とは違う。心に蟠わだかまっていた嫉妬、羨望が、諦念へと変わっていく。

ああ、そうだ。所詮自分達は、「名も無き者達」だ。英雄の率いた「ロキ・ファミリア」の一員、後世にはそれだけしか記されない、英雄足り得ぬ者達だ。

そしてそれは——「灰」も同じ。あの強いだけの、恐ろしいだけの幼女は、どれだけ英雄の雛を打ち負かそうと、人々の希望となる『何か』を持たない。

自分達と同じ、無名の語り部。後世に英雄の在りし日を語り継ぐだけの、残らぬ存在。

「ロキ・ファミリア」の団員は、「灰」に対し複雑な思いを抱いていた。

老木のような威容を誇りながら、何処か特別性のない幼女。どれだけ存在感があろうとも英雄とは不釣り合いに見える、枯れ木のような佇まい。

それなのに、「灰」は強い。英雄を超える程に、彼らが届かぬ程に、遥か高みに位置している。

その理由は、もう分かっている。今まさに、彼らは体現している。無名の彼らは、ただ立ち続け。それでも「灰」は、歩み続けた。

その歴然とした歩みの結果が、こうして現れているだけだ。拳を握り、歯を食い縛る「ロキ・ファミリア」の団員達は。

その光景を、ただ見続ける事しか出来なかった。

『黄昏の館』が黄金に燃えている。

夕焼けに染まる、削り出した炎のような塔の連なる長邸。その内側、訓練場を兼ねた広場で、五人の若者が一人の幼女と対峙していた。呼吸は必死という程に荒く、体中傷のない箇所が見当たらない。体力も既に限界だろう。

特にひどいのが白髪の少年で、襟らんる褌も同然の衣服は血で真っ赤に汚れていた。

「ここまでだ」

それでもなお、闘志を掻き消さない彼らを半眼で見据え、「灰」は中斷を口にする。長邸の陰に佇む幼女は『フアランの大剣』をソウルに還す。

「後はアイズ、貴公に任せる。ベルを休ませるなり、更なる鍛錬をつけるなり、好きにしろ。

私との戦いは明日、早朝に再開する。以上だ」

それだけ言つて、「魔法」をかけた「灰」はさっさとその場を後にした。観戦していた団員達が後ずさり、開いた道を闊歩して『黄昏の館』へ入つていく。

記憶の道順を辿り、応接間へ。扉を開いた「灰」を出迎えたのは、リリルカの体当たりだった。

「ア、アスカ様の馬鹿あゝゝつ!? 何ですかあのベル様への暴行はどう見てもやり過ぎですよいくら訓練とはいえ限度があるでしょう限度がなんでリリ一人だけ置いていったんですかおかげで勇者とかお呼ばれしてるのにお腹真っ黒のフィン様と一人でやり取りするハメになったじゃないですかリリの胃に甚大な被害が及んでますよこれからどうされるんですかまさか宿まで「ロキ・ファミリア」のお世話になるおつもりなんですかそれがまかり通ると思つても実行しないてくださいいよせめてやる前に事前説明ぐらいしてくださいもうリリは一杯いっぱい泣きますよええ泣きますからね泣き喚いてや

りますう——!!!

「リリルカ。話の要点は、一つに絞れ」

「うるさいですよこのストコドツコイツ!! 人に常識を説ける立場だと思ってるんですか!? この不死脳! 頭亡者! 終いには糞団子ぶつけますよ……!?! 本気ですからねっ!?!」

「む……それは、不死の作法だ。死なずの礼儀をよく覚えていたものだな」

「あああ礼儀じゃないですよそれは冒涇の類だつて言つたでしょうがあああああああつ!?!」

涙目になってポカポカ叩いてくるリリルカに「灰」は全く動じない。精神^{ストレス}負荷の限界は見極めていたつもりだったが、流石に苦勞をかけすぎたか——などと心中で考え、暴走しつつあるリリルカに「湖の霧」を吹きかける。

そのままガクリと失神するように眠つたりリリルカを抱きとめて、「灰」は今のやり取りに笑いを堪えていたフィンに尋ねた。

「手酷い事だ。リリルカに任せたのは私だが、加減してくれても良かったものを」

「そうしたつもりだけだね。中々どうして彼女は聡い。以前から『勇氣』ある同胞だと思つていた手前、つい楽しみ過ぎてしまったようだ」
「では、次からは気をつけろ」

それだけ呟いた「灰」は眠るリリルカを横抱きにして、応接間を出ようとする。それを呼び止めたのはにっこりと微笑むフィンだった。

「ああ、彼女も言つていたけれど、寢床の心配はしなくていい。乗りかかった船だ、客室の用意くらいはするさ」

「そうか。そのつもりはなかったが、用意があるというなら世話になろう」

「僕が案内しよう。本拠^{ホーム}の都合上、立ち入られたくない場所もあるんでね」

「そう言つて立ち上がるフィンに連れられ、「灰」はリリルカを抱えて『黄昏の館』を移動する。道中擦れ違ふ団員^{フィン}達が団長直々の案内に驚いていたが、それを疑問に思う者はもういなかった。

既に彼らは、見てしまっている。『灰』と呼ばれる凡人の、だがただならぬ歩みの果てを。

屋敷の外れにある客室にリリルカを寝かせた『灰』は、そのままフィンに従い団長室を訪れていた。

「少し話そうか」、そう提案したフィンに、特にやる事もないので乗った形である。

以前も訪れたフィンの団長室。当時と代わり映えない室内を見渡す『灰』は、ふと暖炉の上にかけられた絵画風織物を見上げた。

金糸や銀糸を用いた、一柱の女神が描かれた織物。槍を手に、多くの武器に囲まれる女神の姿を、『灰』は銀の瞳に映している。

「——それは『フィアナ』を象ったものだよ。興味があるかい？」

「ああ。だがそれは、貴公の話の後でいい」

『灰』の肯定にやや驚いた反応を示すフィンは、その突拍子の無さも今更だと目を細める。一つ目をつむった小人族の勇者は、まず自分の話題を切り出した。

「ベル・クラネルの鍛錬を見せてもらった。君はいつも、あんな事をしているのかい？」

「いや。あの鍛錬は特別だ。通常では為さない、命を懸けた『死闘』も同然。手元が狂えば死に至る真似は、恒常的には行えない」

「確かに、それもそうか。あれが日常だとすれば、ベル・クラネルの著しい成長にも説明がつくと思っただね。けれど違ったようだ」

「まあ、見当はついてるけどね」とフィンは『灰』の薄い反応を見つめ、話を続ける。

「さて、それじゃあ君との『契約』の仔細を詰めようか。同胞の彼女、リリルカ・アーデとはそれなりに話したけれど、やはり鍵を握るのは君だ。

君が確認し、承認しなければ進まない事柄もある。それをこの場で終えておきたい」

「いいだろう」

『灰』の領きを確認して、フィンは慎重に交渉を進めた。

『契約』の期限は一週間。

「ロキ・ファミリア」はその間、客室と一部団員を「ヘステイア・ファミリア」に貸し出す。

貸し出す団員はアイズ、ティオナ、ティオネ、ベートの四名。

目的はベル・クラネルの鍛錬。それ以外の運用または追加の場合、都度交渉の場を持つ。

戦争遊戯^{ウォーゲーム}への介入及び支援は一切厳禁。刺客への対処は例外とする。

消費した物資、金銭に関してはリリルカ・アーデを通じて返済。これは「灰」の提案によるもの。

「ロキ・ファミリア」は本『契約』を「灰」の監視」と対外的に説明する義務を負う。

報酬は「ソウル売買」。内容は「灰」の持つ『火の時代』の遺産、技能、新たな業も含まれる。

『契約』は以上と相成った。詳細は別に羊皮紙に書き出し保存するが、おおよそはこの形である。

フィン^{フィン}は勿論異議を唱えている。それは「ロキ・ファミリア」にとって話が美味すぎるからだ。

そもそもが「灰」との貸し借りに端を発する『契約』だ。貸し借りの解消以上に報酬を貰う必要はないし、そもそも貰おうとも思っていない。しかし「灰」は押し通した。恩義に縛られるよりは、物欲で結ばれた方がマシだと。

また、鍛錬で知り得る「灰」やベル・クラネルの能力^{ステータス}に関する箝口令を敷かないのもいただけないとフィンは言ったが、「灰」は全てを「どうでもいい」の一言で一蹴した。

「どうせいつかは知れ渡る」。「灰」の論理はそれに尽きる。

常人、生者とは違う不死の永い時間。その感覚はいずれ全ての価値が消え去ると知っている。フィンの世代が生きる内は広まらずとも、千年経てば普遍の物となる。

そうなる前に、切れる手札^{カード}は切る。価値がある間に消費するということ。名目で、「灰」は「ロキ・ファミリア」に「ソウル売買」を押し付けた。

降って湧いた機会チャンスに対する彼らの反応。それは後の取引においても、「灰」の判断を左右する指針になると告げて。

(……何処までも自分本位。分かっていた事だけど、彼女は本当にベル・クラネル以外を顧みない)

不承不承に合意したフィンは、改めて「灰」の有用性と危険性を考察する。

「灰」と呼ばれる小人族バルウムは、フィン・ディムナにとって特大の爆弾だ。

フィンの野望である一族の再興、それはかつて小人族バルウムの拠り所であった『フィアナ』に並ぶ存在になる事を意味する。

だが「灰」は、それを超える。その在り様を世界に示すだけで、同胞バルウムは新たな希望を見出すだろう。

しかしそれは、果たされてもいいのか？　こうなってしまうてはもう無意味な問い掛けだが、それでもフィンは考えずにはいられない。

「灰」はベル・クラネルのみを尊ぶ。それはこの数ヶ月の交流でよく分かった。彼女にとって全ては一人の少年のためにあり、それ以上の意味を持たない。

それ故に「灰」は、あらゆる手段を行使する。『神殺し』を敢行しようとしながら、都市最大派閥ロキ・ファミリアに正面から助力を求める行動が良い例だ。何者の都合も関係なく、「灰」はただ己を押し通すだけであり、そしてそれだけの『手段ちから』がある。

おそらくはベル・クラネルの本質が『善性』であるからこそ、この程度で済んでいるのだろう。もしも「灰」の尊ぶものが『悪』であったなら、迷宮都市オラリオは——いや、世界は既に滅んでいる。

何者よりも強く、また不死であるのなら、その答えが当然なのだ。だからこそフィンは、危ぶんでいる。

今はいい。ベル・クラネルという『枷』が、「灰」を縛っている限りは。どのような結果になろうと、少年の生が続く限り、「灰」はフィンの望む一族バルウムの『太陽』に近い存在となる筈だ。

だが、その後は？　「灰」は死した少年をずっと尊び続けるのか？　それとも新たな導きを見出すのか？

その導きが、『悪』ではない保証が何処にあると言うのか。

フィンには分からない。それは純粹に判断の材料が足りていないからだ。まだフィンは、『灰』のベルへの献身しか見ていない。それ以外の、『灰』自身の思想や本質、ましてや深海に眠る彼の王の存在など、予測の範囲にもない。

『アスカたんを神と呼ばん方がええ』——手掛かりはロキの忠告、そして『灰』本人が語ったという物語だけ。それ以上は語らなかつた、露骨に『灰』への態度を変えた主神の反応を鑑みても、『灰』にはまだフィンの知らぬ『爆弾』がある。

それは小人族バルウムの今後を左右するのみならず、世界の崩壊をも招きかねない『地雷』。おそらくはきつと、まだ爆発していないのが奇跡に等しい、『灰』の底知れぬ何かだ。

それを見極めるまで、フィンはあらゆる可能性を考慮する。場合によっては『悪』と化した『灰』を討ち取り、『勇者』の糧とする未来をも。

出来るかどうかではない。それを為さなければ、きつと世界は滅んでしまうのだ。『灰』と呼ばれる、たった一人の小人族バルウム——たった一人の『個人』によって。

「これで、貴公の話は終わりだな。次は、私の番だ」

執務机を挟んだ正面にいる『灰』を、フィンは見据える。

「先の話の続きだ。貴公ならば十分に、その語り部の資格があるだろう」

平坦に呟く灰髪の少女は、凍てついた太陽のような眼でフィンを見返していた。

「架空の女神『フィアナ』の神話——それについて、私は知りたい」

その起伏のない銀の半眼の底を見ようとしながら——フィンは朗々と己の信仰する『フィアナ』の物語を『灰』に聞かせた。

二日目の正午。

ベルへの鍛錬を一時的に中断した『灰』は、貸し切りの応接間で一

人の人物と見合っていた。

【ガネーシャ・ファミリア】団長、【象神の杖】アンケーシャ——シヤクテイ・ヴァルマである。

「——まずは謝罪を。ガネーシャの命とはいえ、私は貴方に刃を向けた。それを謝らなければ、話し合いの場も持てないだろう。だから、謝罪する——済まなかった」

「良いだろう。私は許す」

頭を下げるシヤクテイに、灰はただ頷いた。

文字通りの、それは儀式。灰が自らに穿った楔を機能させるための形式だ。それを分かっている双方は、早々に儀式を切り上げ話を始めた。

「聞いているとは思いますが、現在の都市の様子は芳しくない。特に貴方に対する一般市民の評判は最悪だ。【ガネーシャ・ファミリア】は混乱の収束のため動いているが、【ロキ・ファミリア】を交えた共同宣言でもしなければこの状況は収まらないだろう」

「その話は後でいい。フィン・デイルムナがいなければ、通る話も通らない。

用件は何だ——シヤクテイ・ヴァルマ」

「……」

率直な灰の物言いに沈黙するシヤクテイは、その蒼い瞳に灰を映す。

灰髪の小人。神々よりも以前から存在し続けているという、本物の不死。

ガネーシャに明かされている、とある一件にも深く関わっている幼女に、難しい表情でシヤクテイは口を開いた。

「この事態で、私は貴方という人物を否が応でも受け止める事となった。

灰……正直私は、貴方が怖い」

「……」

無言で見つめ返す幼女に、シヤクテイは続ける。

「神々が定めた規則ルール、下界に敷いた絶対の禁則タブーですらいとも容易く破

ろうとする、貴方が怖い。

ガネーシャが言っていた。『いかに『ガネーシャ群衆の主』とさえい、
『ニュー・ガネーシャ群衆と不死の主』にはなれない。あの子は……われわれ神々では救えない』
と。

意味は分からなかったが、言わんとしている事はもう理解できた。
貴方は、神々にすら縛られぬ存在。この時代の例外にして、途方もない力の持ち主。

だからこそ聞きたい。『灰』……貴方は、一体何処へ向かうつもりなんだ？』

真つ直ぐに不死を見つめ、シヤクティは問う。

『灰』はただ、平坦に答えた。それが己の定めた、ただ一つの道であるが故に。

「決まっている。私の導きは、ベルだ。アレの行く末に、私は寄り添っているだろう」

「……ベル・クラネルか……年端も行かぬ少年に、世界の命運を委ねねばならんとはな……」

「己の無力を、ここまで呪った事はない」とシヤクティは自嘲した。膝に並ぶ握り締められた両拳が、彼女の葛藤を表しているかのようにであった。

暫しそうしていた麗人は、やがて拳の力を緩め、決然とした表情で『灰』と向き合う。

そして深々と、幼女に頭を下げた。

「――『灰』。いずれ貴方の膝下で、都市の安寧が脅かされる時が来るだろう。その時はどうか、都市に住まう無辜の人々を気にかけてほしい」

「……」

「【アポロン・ファミリア】との抗争の折、貴方が住人の逃げる猶予を容認してくれたのは知っている。そうでなければ【ガネーシャ・ファミリア】も、神ヘステイアも間に合わなかっただろう。」

慈悲ではなかったのかもしれない。貴方にとってはただ、そちらの

方が私益に適っていただけかもしれない。

それでも貴方は、力を持たない人々の安全を慮おもんばかつてくれた。どうかそれを、これからも継続してほしいと——私は伏して願い出る」

そこまで言って、シャクティは目を閉じた。頭を下げたままの麗人が見せるのは、懇願。

己の無力を認め、世界の無情を悟り、諦念を抱えてなお人々を守ろうとする、気高い意志。それを銀の半眼に収める「灰」は、一つ息を吐いて眼を閉じた。

「顔を上げたまえ。シャクティ・ヴァルマ」

「……受け入れてくれるか？」

「保証は出来ない。あの時私が待ったのは、生者を嫌ったからに過ぎない。

アレらは、無用だ。不死わたしにとつては害ですらある。元を同じくする、だが外れてしまったものに、生者は決して容赦しない。

分かっている筈だ、シャクティ・ヴァルマ。同類を手助けする我々ならば。

世界を敵に回すなど——ただただ面倒な事ばかりだ」

「……それを面倒で済ませるからこそ、私は貴方が恐ろしい」

懇願を否定も肯定もしなかった「灰」にシャクティはもう一度頭を下げた。そして「個人的な用件はこれで終わりだ」と明言する。

それを確認した「灰」は席を立ち、扉に立ち込める霧を取り払った。そのまま扉を開けると、そこには片目をつむる勇者が立っている。

「シー、話は終わったかな？ それとも僕が必要になったのかい？」

「後者だ、フィン・デイルムナ。私に端を発する都市の混乱、その収束のため、協力を要請する」

「分かったよ。君との契約にもある事だしね。それじゃあ、中で話そうか」

フィンを招き入れた「灰」は扉を閉め、再び霧を張る。次元を断絶する色のない濃霧は、室内で交わされる密談の全てを世界から覆い隠した。

ベル達との死闘を経て深夜、「灰」はリヴェリアの私室に招かれていた。

リヴェリアに施した魔術講座——その完遂を見届けるためである。

【魔術】は『竜の二相』に始まり、『結晶の秘法』に終わる。一匹の古竜より始まった探求の道は、一旦は古竜の秘宝に終結した。

だが魔術は、未だソウルの深奥に辿り着かず、道は続いている。

霧に覆われた蒙なる荒野。それを啓くのは、貴公だ。リヴェリア「膝をつき、厳かに拝礼するリヴェリアに「灰」が向けるのは『王者の遺骨』だ。

よもや室内で魔術を放つわけにもいかない。かと言って『黄昏の館』の訓練場は、『結晶の秘法』には手狭に過ぎる。

故に【不死の闘技】。「カーリー・ファミリア」を通して『神時代』の人々にどのような作用するか存分に試した「灰」は、最も危険性のない方法でリヴェリアの実力を測ろうとしていた。

傍目には数秒の礼拝。しかしソウルの体感では数時間にも及ぶ魔術行使を経て、「灰」とリヴェリアは【不死の闘技】より帰還する。

「うむ。申し分の無い魔術だった。貴公はもう、【魔術師】^{ソーサラー}として一人前だ」

「……」

遺骨をしまい、コクリと頷く「灰」を他所に、リヴェリアは肉体の感覚を確かめるように掌を開閉する。そして眼前に立つ少女と視線を合わせ、今一度深々と拝礼した。

「——感謝する、我が師よ。貴方のおかげで、私はまだ見ぬ世界に辿り着く事が出来た。

この身に為せる精一杯の恩義を、ここに示そう。本当に、ありがとう——アスカ」

「受け取ろう。だが、これからだぞ。リヴェリア」

杖を両手に捧げられた感謝を受け止め、「灰」は立ち上がるようリヴェリアに促した。最初の魔術師となったハイエルフは、首を擡げる

銀の半眼を見下ろす。

「ああ。お前と交わした『契約』は、これからだ。『火の時代』が築いた魔術の根幹と奥義は、全て私が受け継いだ。ならば私は、魔術を更に先へ進めなくてはならない」

「そうだ。私が貴公に望むのは、この時代における新たな【魔術】の構築。既に前例はある。貴公に教えた【集う水流】、そして【火の一閃】はこの時代に生まれし魔術だ。

片や『火の時代』の黎明期に存在した炎の魔術、失われた最古の再現である【火の一閃】。

片やソウルと精霊との似通いより見出された、全く新しい水の魔術【集う水流】。

どちらも貴公の同輩が生み出したもの。故あって名は明かせぬが、その力量は既に悟っているだろう」

「悔しい事にな。僅かばかりの差であろうとも、私が最初であったというのに。まだ見ぬ同輩は、既にお前との契約を果たしている。

ああ、悔しい事この上ない。師の期待に応えられなかった弟子の苦悩とは、こんなにも歯痒いのだな」

言葉とは裏腹に、リヴェリアは微笑んでいた。それは美しくも挑戦的な、冒険者の表情。

己がこれより斬り拓く『未知』。そこに一步先んじている何者かがいるのなら、超えてみせよう。

師である幼女を見つめる翡翠の瞳に、その高潔な意志が宿っていた。それを観察した『灰』は、そう遠くない内に契約は果たされるだろうと考える。

都市最強の魔道士。そう謳われるリヴェリアの生み出す魔術は、どれ程のものか——薄い期待を抱く『灰』の思考は、横槍に投げ込まれた声で中断された。

「しっかしまあ、訳の分からん事ぎよーさん書いてあるなあ、これもそも何の文字かも分からへんし、リヴェリアはよく理解できたもんや。

あつ、アスカたん、ここ分からへんのやけど翻訳してくれへん？」

「……」

師と弟子の交流に水を差す能天気な声に、ハイエルフと幼女の沈黙が重なる。頭痛を堪えるように目を閉じたリヴェリアが見れば、私室に備え付けられた事務机に我が物顔でロキが座っている。

「……何をしてるんだ、ロキ」

「んー？ いやなあ、ドチビの奴がいつまで経っても神会デナトウスに来ーへんから暇過ぎて帰ってきたんやけど、アスカたんいる言うやないか。こら会わなあかん思て駆けつけたんや」

「それが、机の物を漁るのと何の関係がある」

「だってうちが部屋入っても気づかへんもーん。アスカたんは視線合ったのに無視されるし、うちはもう悲しゅうて悲しゅうて……」

「それは済まなかったが……おい待て、何をしてる!？」

「んー？ ラクガキ☆」

広げていたスクロールに羽ペンで何やら書き込んでいるロキに驚倒し、リヴェリアはすぐさま柳眉を逆立てた。

無理もない。なぜならロキが勝手に何かを書き足しているスクロールこそ、師である「灰」より賜った『黄金のスクロール』だったのだから。

「ロキ……!!」

「うひゃー!! リヴェリアが怒ったー!! 退散や、退散っ!」

「待て! 逃がすと思うか!」

怒りのオーラを放つリヴェリアが大袈裟に慌てふためいてロキは遁走する。それを追うハイエルフが廊下に飛び出て数秒、「ぎゃーっ!？」と鳴り響く道化の声を「灰」は無言で聞いていた。

一体何しに来たのだから。心中に浮かんだ薄い感情を暗闇に還し、幼女は予備のスクロールを取り出す。そして椅子の上に膝立ちになって机に予備のスクロールを置こうとし。

そこで動きを止めた幼女は、僅かに眼を細めるのだった。

「灰」が【ロキ・ファミリア】に滞在して既に三日目になる。だが

なおも、ベルの地獄は終わらない。

いや、地獄と形容するのは相応しくないだろう。少なくとも当の少年にとつて、それは絶望的な破滅の嵐ではなく、れっき歴とした『死闘』だからだ。

命を懸けた、格上との闘争。死の一手前で引き戻されると分かっている。そんな程度でこの戦いが偽物だと思いき知事事はできない。

「立て、ベル。次だ」

もう何度聞いたかも分からない、アスカ家族の言葉。エストを振り掛けられ、あるいは【奇跡】の使用で復活するベルは、抵抗も許されず蹂躪される。

成長はしている。『技』と『駆け引き』も、以前とは比べ物にならないほど飛躍している。

しかし、そうした高みに手を伸ばすことに実感する、彼我の断絶した力の差。単純な力量、根底に蓄積された『経験』が、天と地ほどに隔たっている。

ベルは言うに及ばず——少年の憧憬である、アイズ・ヴァレンシユタインでさえも。

「くっ——!?!」

攻め抜かれる。【エアリエル魔法】を発動し、仲間達と培った連携をもって挑んでも、“灰”はまるで意に介さない。

アイズ達【ロキ・ファミリア】の幹部をただの障害とみなす、“灰”の最小限の関心。それは幾らでも付け入る隙のある明確な『弱点』だ。

だがそれに、何の意味があると言うのか。アイズの『風』、それを受け取るベートの銀靴フロスワイルト、ティオナとティオネの双子ならではの猛攻撃。

——その全てを鎧袖一触に斬り払い、“灰”は執拗にベルを狙い続ける。

暴威を前に蹴散らされ、辛うじて放つ反撃も《ファランの大剣》の短刀で弾かれる。特大剣と短刀という異様の二刀流は、深淵狩りによって昇華された『狼の剣技』を存分に振るう。

反撃を『パリイ』され、大きな隙を晒すアイズ達を、灰は素通りした。屈辱に、悔しさに身を焼かれる彼らに興味などないと言うように、灰はただベルを付け狙い、斬り伏せる。

（———ああ、なんて遠いんだろう）

ベルが、アイズが、同じ想いを心に抱いた。

その姿は美しく、その眼は恐ろしく、その力は何者よりも強い。灰

斬り伏せられる度に、家族の辿った道の遥か険しさを思い知る。打ち払われる度に、冷たくも暖かな少女の強さを理解する。

（だから———逃げてなんていられない）

（だから———心折れるなんてできない）

ベルは不転を心に誓う。アイズは持てる全てをぶつける。

ベートも、テイオナも、テイオネもまた、決して諦めない不屈の精神を柱に、ただ一人の不死に立ち向かう。

燃え上がる命、猛る魂の輝き。ソウルを嗅ぎ取る不死の瞳が、彼らの肉体をも超越しようとする魂を映し——

「———ここまでだ」

いつしか地平線に沈んだ太陽を背に、灰は三日目の終了を宣言した。

「はっ、はっ、はっ……!!!」

誰も声を上げられなかった。全霊を絞り尽くした彼らは息も絶え絶えに、だが地に崩れる事だけは意地でもやらない。

それらを一瞥して、「太陽の光の癒し」と【修復】を行使した灰は『黄昏の館』へと消えていった。

残されるベルと、装備だけは復元されたアイズ達。膝に手を突いてゼーゼーと必死に呼吸する少年よりも早く立ち直った【剣姫】は、少年の呼吸が整うのを待ってから声を掛ける。

「今日も、勝てなかったね……」

「はい……」

「反省と、対策。それからアス力を倒す作戦、考えようか……」

「はい……」

どれだけ打ちのめされてもめげない姿勢を見せるベルにアイズは微笑んで、まずは反省点を指摘する。

ティオナとティオネもそれに参加する。ティオネは義理で、ティオナは少年の力になりたいからだ。

「ケツ、やってらんねーぜ」とベートだけは吐き捨てた。膨らんだ尻尾を振って立ち去る狼ウエアウルフ人の後ろ姿を、ベルは「灰」と重ねる。

孤高を貫くベートの背は、どこか「灰」と似通っている。全ての別離を受け入れているかのように、だが決定的に違う部分がああ二人にはある。

それが何なのかは、ベルには分からない。ベートの内心も、「灰」の心も知れなかった少年は、だからこそ今一度決意した。

何があっても、アスカから逃げない。これからも家族で在り続けるのだと——少年は誓い、この死闘を乗り越えるために全てを懸ける。

戦争遊戯ウオーゲームが成立してから三日間、ヘステイアは仮病に臥せっていた。

アポロンの眷族に追い回されて体調を崩したと見え透いた看板を立てて、とにかく時間を稼いでいたのだ。

己の眷族達の近況は聞いている。ミアハやナーザが都市を歩いて拾ってくる情報は、はつきり言ってひどいものだった。

「ヘステイア・ファミリア」は闇派閥イザイルスである。特に灰髪の小人族バルウムはその筆頭である。『神殺し』をも恐れぬ大罪人。下界の摂理に剣を向けたまわしき小人。

現在は「ロキ・ファミリア」に監視されていると聞くが、それに腹を立てて暴れていると『黄昏の館』より響く戦闘音に住人は噂を立てていた。都市中からそればかりが聞こえてきて、ベルやリルカの話はほとんどない。

これが「灰」の、アスカの望んだ事なのか。全ての恐怖、排斥を一身に集め、たった一人だけで背負う。その結果が別離であったとしても、ベルが無事ならそれでいい。その考えを理解してしまうヘステイ

アは、唇を噛み締めて自分の不甲斐なさを呪った。

（主神のボクには、時間を稼ぐ事しかできないなんて……本当にボクは、アスカ君に何もしてあげられない……）

申し出は幼女からだった。それでも受け入れたのはヘステイアだ。子であり、家族であるアスカに報いる事のできない自分をこれでもかと罵って、キツと表情を改めたヘステイアは堂々と扉を開けた。

摩天楼施設30階、神会の会場。悪びれない顔で遅刻の謝罪をするヘステイアにアポロンは苛立った声を上げる。それをヘステイアは受け流し、ミアハが補強して拳を握るアポロンに、ロキがパンパンと手を叩いて神会を始めさせた。

戦争遊戯の勝者が行使できる権利、絶対の要求はベル・クラネルを貫うことだとアポロンは告げる。敗北した場合は何でも言うことを聞くと言言する男神は、しかし内心に大いなる焦りを抱えていた。

アポロンの最強の眷族、ヒュアキントスの容態は良くない。一命は取り留めたものの、全身の皮膚が炭化する程の雷を浴びた青年はつい先程やつと意識を取り戻したと報告があつたくらいだ。

他の眷族も似たようなものだ。半数が壊滅し、残っているのは前衛ばかり。吹き飛んだ本拠から掻き集めた財を全て使い、他派閥に借金までして治療と立て直しを図っているが、組織としての全力を既に出せない状況であるのは明らかだった。

それを知る、金の無心をされた派閥の神々がアポロンに野次を飛ばす。面白おかしい娯楽を楽しみたいだけの愉快神どもは、単なるいじめでしかないと思っていた戦争遊戯に立ち込める暗雲を嬉々として笑っていた。

「――ヘステイア。戦争遊戯の形式を決める前に、一つ問い詰めたいことがある！」

だからアポロンは、立ち上がって声を張り上げた。指差されたヘステイアは驚くも、決してしくじれない場面であるだけに毅然とした態度で立ち向かう。

「何だい、アポロン。ボクの何を問い詰めたいって言うんだい？」

「決まっている――君が隠していた不正についてだ！」

「なっ——!?!」

思いもよらぬアポロンの発言にヘステイアも立ち上がる。見に見えるの疑念に、幼女神は反論した。

「バカなことを言うな!　ボクがいつ不正を働いたって言うんだい!」

「ああ、なんと嘆かわしい。ここにきてしらばっくれるなど、慈愛の女神の名が泣くぞ?」

なぜなら君の不正は明白だ——あの忌々しい灰髪の小人族を、Lv.1などと申請していたのだからな!」

「っ!?!」

目を見開くヘステイアに、ここぞとばかりにアポロンは畳み掛ける。

「ギルドに提出された冒険者登録を調べさせてもらった。その結果、君の「ファミリア」に所属する団員はLv.2が1名、Lv.1が2名だと確かに記録されていた!」

しかあし!　あの灰髪の小人族は明らかにLv.1ではなあい!

私の眷族を痛めつけたのみならず、我が本拠をも破壊したあの魔法!

どのような『神の恩恵』を持つともLv.1ではあれほどの力は使えない!

故にヘステイア、君は不正を働いたのだ!　Lv.詐称という、許してはならない罪をな!」

「そ、そんなことあるもんか!　アスカ君は何も偽ってなんかいない!　全部あの子の力だ!」

「往生際が悪いぞお、ヘステイアあく?　それが事実だとしても、『神の力』で改造した可能性は捨てきれまい」

うろたえるヘステイアにアポロンはニヤリと笑う。

ベル・クラネルを手に入れるためにアポロンは入念な下調べをした。だが灰髪の小人族に関するはあまりに荒唐無稽な情報であったため除外してしまった。

その結果がこれならば、それを逆手に取る。ギルドの公式情報がLv.1である以上、何らかの不正が関わっているのは間違いないの

だ。

それが下界の摂理、それが神々の認めし『恩恵』。よもや『古代』に存在した『本物の英雄』ではあるまいし、アポロンは勝利を確信する。「あの灰髪の小人族、〃灰〃と言ったか。名すら偽っているとは滑稽極まるが、そのような不正の存在を公正なる戦争遊戯ウオーゲームで許してはおけない!

故に私はここに自明を宣言する! 不正なる存在、〃灰〃はこの戦争遊戯ウオーゲームに参加厳禁だとな!

「そ、そんなことを許すかあーっ!」

「――ならば本人に聞こう。それが一番手っ取り早いだろう?」

激昂するヘステイアを鼻で笑って、アポロンはパチンと指を鳴らす。途端、閉められた扉が開き――その灰暗い奥底より、一人の小人族パルウムが歩み出る。

生まれより伸びる灰色の髪。凍てついた太陽のような眼。白く美しい、神の如き美貌。

その肉体を薄い魔力の衣で包む小人族パルウム――〃灰〃は、男神が歓声を上げ、女神が嫉妬する程に美しい姿をしていた。

「『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おっ!!』」

「あれがアポロンを殺そうとした子供か!」

「美しい……」

「可愛えーっ!」

「あんな姿なりで『神殺し』しようとするとか、マジヤバくね!?」

「『やっべええええええええええええええええええええええええええええっ!!』」

「綺麗ね……」

「チツ……可愛い」

「中身はともかく、外見は完璧だわ」

「何あの胸……ロリ巨乳ヘステイアの眷族はロリ巨乳ってこと?」

「『羨ましい……』」

好き勝手に声を上げる神々は一頻り騒いだ後、一人、また一人と口

を閉じた。爛々と輝く神々の目が映すのは、アポロンと灰髪の小人族だ。

皆が好奇の視線を向ける。ニヤニヤと口角を上げる神々を片手を上げて制し、アポロンもまたニヤついた笑みで「灰」を睥睨する。

「こうして会うのは二度目か……我が愛しい子らを傷つけし者よ」

「……」

アポロンの声に特に反応せず、「灰」は神々を流し見て、ヘステイアに眼を止める。かつて暗月の神が纏った月光の薄衣を羽織る幼女は、可愛らしい手でヘステイアを手招きした。

「アスカ君！ どうしてここに……!？」

「招致されたのだ、致し方あるまい。それよりヘステイア、『錠』^{ロック}を外せ」

「!？」

「呼ばれた理由など分かっている。時間が惜しい、手短に済ませるぞ」歩み寄ったヘステイアに一方的にそう言つて、「灰」は豪快に上衣を脱いだ。

肌着も下着もない幼女の素肌が露わになる。たぷんと揺れる神々しい双丘に男神どもが喜色満面で立ち上がった。

歓声や指笛が飛ぶ会場で、「灰」は一切の関心を示さない。裸体を見られる羞恥など今更感じる事もない不死は、堂々とその場に立っていた。

「み、見るんじゃないっ!？」と慌ててヘステイアが「灰」の灰髪で前を隠す。途端、男神どものブーイングが席巻するが、ヘステイアは本気で威嚇し返した。

そんな男神どもを女神達は汚物を見るような目で見ていたという。

「——ロキ」

その渦中に、古鐘の聲は擦り鳴らされる。男神に交じつて歓声を上げていた道化の女神は「あん？」とその声に反応する。

「来い。貴公に私の「ステイタス」を見せてやる」

続けて放たれた言葉に場は一瞬で静まり、代わりに熱気が支配した。ここにいる七割の神々が浮かされる、好奇の熱。その行く先は

「灰」と、指名されたロキだ。

「……うちでええんか？」

「誰でも構わん。さっさと来い」

一応の確認を挟んだロキは、「しゃーないなあ」というポーズを取りながら浮足立ってやってきた。

道化の女神だ。それくらいの演技、事もない。「ホレ、はよせいドチビ」と『錠』の解除を急かすロキにヘステイアは狼狽える。

「灰」の指名だ、ヘステイアの口出しは無意味だろう。しかし公衆の面前で『神の恩恵』の『錠』を解除するのも心情的に踏ん切りがつかない。

「——待て！ ロキでは駄目だ！」

悩むヘステイアの思考に水を差したのはアポロンだった。彼もまた「灰」の裸体に見惚れていた一柱であるが、煩惱を振り払い疑義を呈する。

「その小人族は『ロキ・ファミリア』の監視下にある！ しかし何らかの裏取引が関わっている可能性は否定できない！」

「ああん？ なんやアポロン、うちを疑うって言うんか？」

「そうではない！ 不正の確認は公正な神の手に委ねるべきだと——」

「フレイヤ」

アポロンの台詞を、「灰」は一言で斬り捨てた。一種の圧、神々すら押し黙る力を僅かばかり言葉に込めた少女は、嫣然と微笑む美の女神と視線を交わす。

「足らぬそうだ。貴公が補え」

「あら、私で良いのかしら？」

「誰でもいいと言った筈だ。本来、このような余興に付き合っている暇など、私にはない」

「だから早くしろ」と言外に発する少女に、フレイヤはおかしそうに笑って「偶にはこういうのも良いわね」と立ち上がった。

「おい、私を差し置いて勝手な真似をするではない！」

「ならば貴公も選べ、アポロン」

「なにつ」

「三度も同じ事を言わせるな。私は【ステイタス】を開示する。その為だけにこの場にいる。」

だが貴公では駄目だ。これより我らは戦うのだからな。故に、貴公が信を置く神を、一人選べ」

「ぐっ……!?!」

アポロンは声を詰まらせた。とっさに指名する神を選べなかったからだ。

ここにいる神々の七割の視線がアポロンに殺到する。俺を選べ私を選んでと好奇と圧に満ちた神々は、別の意味で信用できない。

なにせ娯楽を楽しむことしか考えていない愉快神どもだ。アポロンの不利になるような判定を下すとも限らない。

「——ヘルメス。我が友よ、君に全てを委ねよう」

「えーと……本気？」

一斉に視線が集まる中、自分を指差すヘルメスにアポロンは厳かに頷いた。中立を気取る姿勢スタンスのヘルメスならば、少なくとも不正の有無ははつきりさせる。

指名された優男は「参ったな」と困り顔をしつつも、「灰」という『未知』を前に抗えない神特有の飢えを見せる。

つまり、退屈を吹き飛ばす娯楽。幼女の元に集った三柱を横目に、

「灰」は再度ヘステイアに告げた。

「ヘステイア。私の『錠』を外せ」

「アスカ君……」

「貴公との約束を、破る事になる。だが、致し方ない。それが規律ルールの範疇ならば、私もそれに則ろう」

有無を言わさぬ銀の半眼に、ヘステイアも覚悟を決めた。「灰」の力が知れ渡れば、不正を疑われるのも無理ならぬこと。アポロンの思惑はどうあれ、この状況はいずれ訪れていたと察して。

佇む幼女の背にヘステイアは一滴の神血イコルを落とす。淡い波紋が広がり、彫像のように整った白い背中にヘステイアの眷族の証たる『神ファルナの恩恵』が現れた。

それを覗き込む三柱。数秒の間、上から下まで完璧に精読した神々は——三者三様の反応を示す。

「……フ、フフ——アハハハハハハハ！」

突然笑声を上げたのは、フレイヤだった。普段の彼女からすれば珍しいという言葉でも足りない、口元を手で覆うくらいの大笑。

その横でロキは顰めつ面をしていた。道化の女神らしからぬ、痛ましいものを見るような目。それも一瞬で、すぐさま道化の仮面を被る。

そして、ヘルメスは。

「——ああ、ああ！　なんてことだ！」

背後からヘステイアを抱きすくめ——幼女神の口を塞いで、高らかに声を張り上げた。

「【魔術】！　【呪術】！　【奇跡】！　魔法が三つも発現している！」

しかもなんだこの説明文は！ 『ウロコのない白竜が探求したソウルの業』とは何だ！ 『火の魔女が創造した混沌の炎を扱う術』とは！

何より『神々の物語を学び恩恵を受ける祈り』！　まるでオレ達の神話から魔法を形作ってるかのようにやあないか！

それだけじゃあない、これは単体の魔法じゃなくて分類だ！　詠唱式もない、それはつまり、おそらく彼女は三つ以上の魔法を使える！

「むーっ!？」

ヘルメスの突然の凶行にヘステイアは目を剥く。

まさかの、『ステイタス』の読み上げ。ヘルメスの行いはまさしく凶行だ。神々の目前で『神の恩恵』を開示することでさえ有り得ないというのに、それを読み上げるなど以ての外。

しかし止められない。不意を打たれたヘステイアは完全に拘束されている。優男とはいえ男神と幼女神、力の差は歴然だった。

「ヘルメス!　貴方何やってるの!？」

「それは許されんぞ！」

「今すぐその行いをやめよ！」

ヘファイストス、タケミカヅチ、ミアハが次々に立ち上がる。当然

——『【経験値】獲得不可』。それが最後の説明文さ」

「……………なんだって？」

勝ち誇った顔のまま固まるアポロンに、ヘルメスはもう一度同じ言葉を繰り返す。

「『【経験値】獲得不可』。それがこの子のスキルの効果だ」

「ば、馬鹿な……呪いでもあるまいし、そんなスキルがあるわけ……」

「本当さ。俺は何一つ嘘をついてないぜ？ この子の『神の恩恵』は、成長しないんだ」

「……し、しかし、それが何だと言うのだ！ 重要なのはL.V.、アビリティ！ その小人族の真のL.V.は——」

「——L.V.1よ」

狼狽えるアポロンの反論に被さったのはフレイヤの声だった。目元に溜まった涙を拭う美の女神は、喜悦の混じった微笑みを湛えながら歌うように言う。

「L.V.1、全能力初期値。それが、この子の『ステイタス』よ」

「あ、有り得ない……！ そんな馬鹿な事があるわけ……！」

「嘘やない。うちとフレイヤ、あとヘルメスが保証するで。『灰』は、間違いなくL.V.1や。それもたぶん、最初に『恩恵』を刻まれてから全く成長しとらん。そうとしか考えられへん」

「……一体どういうことだ……！ よもや『神の力』による不正でも言うのか……!?!」

「あら、それこそ有り得ないわ。アポロン」

『灰』の小さな背中を見下ろすフレイヤは、神々の自明を口にす

る。
「L.V.の詐称ならともかく、実際に『神の恩恵』を見れば『神の力』を使ったかどうかなんて一目瞭然でしょう？」

それとも貴方は、ヘステイアが神々の目を掻い潜る『抜け道』を見つけたとでも言うのかしら？

——いいえ、それはないわ。だって私達は超越存在——零能に身を落としても全知を名乗るからには、それが分からないなんて神失格でしよう？」

「ぐっ……！」

フレイヤの正論にアポロンは反論の言葉を失う。その心中に過ぎるのは多大な焦燥だ。

まずい、まずいまずいまずい！ アポロンは不正の指摘に託^{かこ}つけて「灰」の不参加を要求する腹だった。そうしなければ勝利も同然の戦争遊戯^{ウォーゲーム}が根本から引つ繰り返ってしまうと感じたからだ。

己が眷族を信頼していない訳ではない。しかし現実に半数が敗れた以上、「灰」の存在はこの上ない不確定要素として場を掻き乱すことになる。

だからアポロンは勝利を確実なものとするために、何としても「灰」を排除しなければならなかった。故に、足掻く。万が一にも可能性があるのなら、それを試さない理由はない。

「だ、だが！ ならばその小人族^{バルウム}の力をどう説明する!? あれ程の力、何よりこの私を殺そうとした大罪^{つみ}、受け入れるわけにはいかない！ 神聖なる戦争遊戯^{ウォーゲーム}に得体の知れない存在の介入は認めない！ どのような理由があろうとも、その小人族^{バルウム}の参戦を私は拒否する——」

「——ダメだ、アスカ君!!」

その時。何とかヘルメスの拘束を解いたヘスティアの声と、服を着直した「灰」が動いたのは、同時だった。

バガアンツツツ!!! と、アポロンの真横で甚大な破砕音が爆発する。一瞬で体を駆け抜けた暴風、耳元の爆音に何の反応もできなかったアポロンは、大量の汗を流しながらおそるおそる横を見る。

そこには、巨大な鉄塊の如き大斧——《グレートアクス》が突き刺さっていた。

「——私には、何の興味もない」

盛大に顔を引き攣らせるアポロンがはつと前を向けば、そこには大円卓の上に立つ灰髪の小人族^{バルウム}がいた。

銀の半眼で太陽神を見下ろす「灰」は、古鐘の声を擦り鳴らす。

「この戦争遊戯^{ウォーゲーム}も、貴公の戯言も、私にとってはどうでもいい。

私の参加を禁ずると言うのならそうしろ。その時はただ、貴公の眷族を再起不能にするだけだ」

「なっ……!?!」

「手段など、私は選ばない。必要ならば貴公を殺し、この遊戯そのものを瓦解させる」

「わ、私を殺すというのか?! それは世界を敵に回すということだぞ!?!」

「だから何だ。その程度で、私が止まるとでも思っているのか。」

ああ……それならば、何とでも言えば良い。貴公が規律の外側で戦うというのなら——私もそうしよう」

神を見下ろす凍てついた太陽のような瞳には、忌諱もなく、殺意もなく、ただソウルだけが渦巻いていた。

「……おい、聞いたか、今の」

「ああ、聞いた聞いた。必要ならアポロンをぶつ殺すつてよ……!」

「本物だあ……! ひひっ、本物の『馬鹿な眷族』だあ……!」

その巨大なソウル故に、『灰』の真意は神には読めない。いやしかし、だからこそ、『灰』という『未知』に神々は狂喜し、囃し立てる。降って湧いた神々すらも見通せぬ存在。楽しまぬなら神ではない。楽しめぬなら神ではない。

「貴方、思ったよりも面白いのね」

全ての用は済んだと言わんばかりにアポロンから離れ、帰ろうとする『灰』にフレイヤは声をかける。同じ色をした、だが暗黒と美麗に分かれる銀の半眼と銀瞳は、一瞬だけ絡み合った。

「だってそうでしょう? 『神の恩恵』を受けておきながら、『恩恵』を否定しているんですもの」

「……『神の恩恵』など、【誓約】と同じだ。私は『恩恵』に頼らない」
美の女神とそれだけを交わして、

「二度目だ、ヘスティア。三度目はない」

己が主神にそう言い放った灰髪の少女は、会場より立ち去る。

扉が閉まる前。最後に『灰』は振り返り、ヘスティアの手でギタギタにされるヘルメスを見た。

依頼通り、あの神は十分に働いた。惜しまぬ報酬を与えようと、そう考えて。

廊下の暗闇に銀の半眼が光る中、それを閉じ込めるように扉は閉まった。

またあの小人族バルウムが神を殺そうとしたと、都市中で噂が駆け巡った。それは神会デナトウスに参加した神々が喧伝したものだ。己の眷族に、道端の民に、面白おかしく楽しそうに神々は吹聴した。

同時に、この戦争遊戯ウォーゲームの行方を見守ろうとも念を押した。こんなにも興味を唆る見世物ミセモノが、あと数日もすれば開催されるのだ。余計な邪魔は、見ていて萎える。

「ロキ・ファミリア」「ガネーシャ・ファミリア」の再三に渡る『』の監視』宣言もあり、都市は表面上は落ち着きを取り戻している。しかしこの状況は、戦争遊戯ウォーゲームが終わるまで変わらないだろうと――寝ずの番を遂行するラウル・ノールドは小さな溜息を吐いた。

「何だ？ ラウル・ノールド」
「い、いえっ!? なんでもないっす!？」

正面から飛んでくる幼い眩きに、ラウルは大袈裟に慌てふためく。うだつの上がない人間ヒューマンの青年を見つめるのは、銀の半眼。神会デナトウスから変わらない、月光の衣に身を任せる灰髪ハルムの小人族だ。

「そうか。ならば良い。話を続けろ」

「灰」はそれだけを呟いて、作業に戻る。客室に備え付けられた椅子に腰掛け、窓から差し込む月光を頼りに羽ペンを滑らせる幼女は、何時ぞやの編纂の時のように、とある物語の書き手となっていた。カリカリと、ペン先が羊皮紙に引つかかる音と、ラウルの声だけがする。

「……………あの。一ついいっすか？」

何処か神聖な空気を発する「灰」に、話を終えたラウルはおずおずと声を掛けた。すると羽ペンがピタリと止まり、凍てついた瞳が再びラウルに向けられる。

「何だ」

「……………その、「灰」は……………——どうして、神様を殺そうだなんて、思え

るんすか？」

意を決するラウルの問い掛けは、『神時代』の人類であれば誰もが思う疑問だろう。

『神殺し』。それは下界において最大の禁則タブーとされる絶対の罪だ。

そもそも、なぜ神を殺してはいけないのか。それは偏ひとへに、神の与える『恩恵』、『神の恩恵』が、下界の摂理となる程に人類を支えているからである。

人類社会は『神の恩恵』を中心に回っている。何故ならば彼らには不倶戴天の脅威——モンスターがいるからだ。

遙か昔より『大穴』より這い出で、人類を殺戮し続けた怪物達。抗つても抗つてもモンスターが尽きる事はなく、『最初の英雄』が現れるまで人類は絶滅の瀬戸際まで追い詰められていた。

『最初の英雄』を旗印に、数多の英雄が生まれ、戦い、散った。僅かな大地に生き延びるのみだった人類は次々に土地を奪還し、そしてついには『大穴』にまで辿り着いた。

迷宮都市の起源。『大穴』から溢れるモンスターの侵攻を防ぐ人類の壁は、『最強の英雄』によって黒竜が打ち払われたのち、神々の降臨した最初の場所となった。

『古代』が終わり、『神時代』が幕を開ける。それは人類の可能性を花開かせる『神の恩恵』の始まりであり、『神工の英雄』の芽吹きであった。

『神時代』が始まって千年。『神の恩恵』はモンスターに対抗する手段として、更なる叡智を得る補佐として、人類の存続を後押ししてきた。

『神の恩恵』はもはや、人類の手放せない摂理だ。そしてそれを与える神々は、決して失ってはならない超越存在なのである。

だからこそ——神を殺そうとする者は、人類の敵対者に他ならない。神々のルールによって、神は神しか殺してはいけないとされているのも——その実、神を殺そうとするのは、同じ神を除けばモンスターしかいないからだ。

全てを失い、復讐に身を落とした善人も、迷宮都市の崩壊を望む悪

人も、神だけは殺さない。

それをすれば、モンスターに身を窶やつしたも同然だ。数多の人類を食い殺してきた怪物達。それと同じ存在に成りたがる人類は、誰もいない。

何より、定命の者でしかない人類の行き着く先は天界である故に。神を殺せば魂が天に昇った後どうなるかは、想像に難くない。

怪物は、全人類の敵である。『神殺し』は、モンスターも同然の行いである。そしてそれをすれば、輪廻転生すら望めないかもしれない。

『神殺し』とは、世界を敵に回す大罪だ。己の未来、次の人生すらもかなぐり捨てる無謀の極みだ。

そんなことを分かり切っている人類は、決して神を殺さない。だからラウルは問う。

「分かり切っている筈なのに——なおも神を殺そうとした小人に。」

「……妙な事を聞くな。貴公」

蒼い月光の中にいる『灰』は、暗い銀の輝きを細める。

そして一つ瞬いて、古鐘の声を擦り鳴らした。

『神殺し』か。私にとっては有り触れた……いや、それそのものが目的だったのやも知れん。今となっては、無意味な話だがな」

「それって、どういう……」

「ベルに出会うまで、原初の憧憬すら忘れていた私には、理由なんてどうでも良いのだよ。」

憎いから、必要だったから、あるいは邪魔だから。ただそこにいるというだけでも良い。

私にとって『神殺し』など、『人殺し』と変わりない。『怪物殺し』ともさして差はない。

皆、同じ事だ。あるのは程度の差だけで、本質は何も変わらない「つ……でも！ 神様を殺したら世界を敵に回すんすよ!! 居場所が

どこにもなくなるっていうのに、何で……!?!」

「元より世界に、私の居場所など何処にもない。

人の世界では、不死わたくしは呪われた化け物である。地上に怪物の居場所がないように、私に許される安寧などないのだ。

ああ——だからこそ、今は何よりも貴い。それを守るためならば、世界など——どうでもいいだろう?」

「っ——!?!」

ぞくりつつ、とラウルは怖気立った。

月光に揺らめく銀の光。闇の底から覗き込むその凍てついた輝きは、全てを平等に映している。

「灰」にとっては、皆同じ。何もかもを平坦に見渡し、殺すか殺さざるべきかで二分している。

それだけなのだ。全てを考慮の外に置いて、ただそれだけを全うしている。

ごくりっ、とラウルの喉が鳴る。回答を終えた「灰」は視線を戻し、【神聖文字】^{ヒエログリフ}に似た文字で物語を書き綴る。

その姿に、ある種の憧れにも似た、けれど決してそれではない感情を抱くラウルは——フィンの言葉を思い出す。

『「灰」を目指すのはいい、けれど「灰」のようにはなるな』

その真意を、ラウルは今になって理解した。

この幼女は、『異端』だ。ラウルの憧憬、【ロキ・ファミリア】の英雄達のように『正道』の中にはいない。

誰にも理解されぬ、異端の道。それを突き進む「灰」は、間違いなく英雄ではなく、けれどそれに足る力を持った存在だ。

高みを目指すのは、冒険者共通の真理。『正道』であれ、『異端』であれ、力そのものに貴賤はない故に、一見して「灰」はラウルのような凡人を自称する者の到達点に見える。

だが、違うのだ。あの戦いを——ベル・クラネルが挑む『死闘』を見た今なら、痛いほど理解できる。

導きなど何一つ無い、険しく無情な『異端』の道。それを歩み、突き進み、踏破してなおも前を向く「灰」は、凡人という言葉が陳腐に成り下がる程の壮絶な『経験』を経て強くなった。

それは『正道』を望むラウル達が決して辿ってはいけない、禁忌の道。力という手段のために目的をも見失うような、全てを捨てて行く道だ。

ラウルには出来ない。出来てはならない。その道の果てを見る事すら、『毒』に成り得る甘い罠。

“灰”を指すということは、ラウル・ノールドの全てを捧げるような危険な賭けだ。それ自体は冒険と変わりなく、それを三度乗り越えてきたからLv.4の【超凡夫】^{ハイ・ノービス}はいる。

だが、その果てにまで辿り着いてはならない。それは全てを捨てるのと同義——仲間も、居場所も、^{ファミリア}最初に抱いた憧憬すら忘れる、力だけの修羅と化してしまう。

“灰”は既に辿り着いてしまった。だから手遅れだ、もう戻れない。

ラウル・ノールドはその道中にいる。『正道』の側には、常に『異端』の道が潜んでいる。

フィンの忠告は、それを端的に表したものだ。憧憬と手段を、履き違えるなど。『英雄』と“灰”は隣り合っているだけで、決して交わる事はないのだと。

「……っ！」

ラウルは指が白くなるほどに、拳を握る。

ラウル・ノールドは常に諦観を抱いていた。所詮、自分は「名も無き一人」。どれだけフィンや上層部に一目置かれようと、自分では絶対に彼らに追いつけないという諦念がある。

それでも、齒を食い縛って走ってきた。遙か前を走る彼らに少しでも近づけるよう、必死に足を動かしてきた。

落伍する者、志半ばに倒れる者、共に走ってくれる仲間を見ながら。

——その全てを捨て去って、“灰”は英雄の先にいる。

迷わなかったのだろうか。走る事さえ命懸けで、『正道』ですら遙か遠い道のりを、『異端』のままに歩く事を。

ラウルには分からない。その辛さも、険しさも、眼前の小人が歩んだ足跡の長さも。

けれど、これだけは分かる。

“灰”は、諦めなかったのだ。どのような困難にも決して心折れず、歩み続けた。

(……自分だつて……!!)

その姿を見せつけられて、滾らないなら冒険者ではない。

月光の降り注ぐ一室で、ラウルは強く、決意した。

翌日。

ベル・クラネルの鍛錬という名の『死闘』に、一人の人間ヒューマンが加わった事を——“灰”は何の興味もない瞳で見つめていた。

ラウル・ノールド

レベル
Lv. 4

力：C 6 0 1 耐久：C 6 0 2 器用：C 6 0 3 敏捷：C 6 0 4

魔力：I 0

狩人：H 耐異常：H 逃走：I

《魔法》

《スキル》

【人間性情ヒューマニテイ】

- ・ 人間性の蓄積。
- ・ 蓄積量に応じて『耐久』補正。
- ・ 人間性の消費による『運』の上昇。

ベルの鍛錬を始めて五日目の夜。

「灰」は新たなる眷族かぞくとなった、二人の人間ヒューマンと対面していた。

「……成程。つまりは義理と、友情か。貴公らが、我らの派閥に加わったのは」

「ああ」

「そうなります」

佇む幼女の前で直立不動を保つのは、ヤマト・命ミコトとヴェルフ・クロツゾの二名だ。命は一度は死地に追いやった「ヘステイア・ファミリア」を見捨てないため、ヴェルフは友であるベルを助けるため、それぞれの理由で改宗コンバージョンした。

ヘステイアの姿はない。彼女は現在、ベルの過酷で残酷な『死闘』に驚倒し、ロキとの無駄な喧嘩で体力を使い果たし、何ならアス力のことですつと悩んでいたせいで心労が祟って寝込んでいる。

改宗コンバージョンだけはしっかりとやって寝込んだヘステイアを少しばかり労って、「灰」はこの場にいた。ヴェルフと命ミコトの加入理由を聞いた幼女は、ふう、と透明な息をつく。

「理由はどうあれ、歓迎しよう。盛大にはいかないが……新たな家族となったからには、私に拒む理由はない」

「……意外だな。姉御のことだから、てつきり俺達なんていらねえつて言うと思ってた」

「ヴェエ、ヴェルフ殿……」

ヴェルフの率直な物言いに命ミコトが困り顔をする。彼ほどはつきりとは言わないが、命ミコトも同じ気持ちだったからだ。

「灰」は強い。18階層の戦いでそれを嫌と言うほど理解している二人は、戦争遊戯ウォーゲームの趨勢すうせいがどちらに傾くか既に悟っている。

「ヘステイアが許したのだ、私に拒む権利はない。我らの派閥は、「ヘステイア・ファミリア」。ベルの家族である限り、私は受け入れ、助けよう」

それを見透かして語る「灰」は、困ったと言うように腕を組んだ。「しかし、今は時期が悪い。私はベルにかかりつきりであるし、夜は夜

すべき事がある。

貴公らに使える時間は、少ないだろう」

「ああ、それは別にいい。姉御目当てで改宗はいったわけじゃないしな。俺はベルの助けになりたいだけだ。

——それから姉御、できればあんたの助けにもな」

「微力ながら、助太刀致します！」

ヴェルフが鉄のような意志で、命ミコトが刃のようにはつきりと協力を申し出る。暫し思考に没頭した『灰』は、やがて可愛らしい唇を開いた。

「であれば、命ミコト。貴公は明日からベルの鍛錬に加わる事を許可する」「はい！」

「参加は自由意思だ。やめたければ何時でもやめろ。だが、貴公がそれを望むなら、私は決して手を抜かない」

「望むところです！」

「ヴェルフ。今日の夜は貴公に当てる。何か、相談したい事があるのだろうか？ 僅かばかりだが、私に出来る範囲で力になろう」

「……やっぱ見抜かれてるか。すまねえ、前言を撤回するようだが、胸を貸してくれ」

張り切る命ミコトと一旦別れ、『灰』はヴェルフを連れ立って『黄昏の館』の離れに向かった。

見張りの団員に断つてから空の倉庫を借り、霧を張る。世界との断絶を図り、周囲に影響が出ないよう——おそらくはこれから始める『鍛冶仕事』の被害を出さないよう、『灰』は取り計らった。

「それで、ヴェルフ。私に何を相談したい？」

「……こいつのことだ。まずは、見てくれないか」

ヴェルフは背負っていた荷物を取り、布を解いて『灰』に見せる。幼女の眼に映るのは、炎を凝縮したような鏢かづきのない無骨な武器。そのソウルより読み取れる緋色の魔剣、『火月』を眺める『灰』に、ヴェルフは呟く。

「こいつは俺が、『ヘファイストス・ファミリア』に入って最初に打った魔剣だ。ヘファイストス様に打てと言われて、仕方なく打った一本

だ。

……俺は、こいつにずっと眠っていて貰いたかった。鍛冶師も使い手も腐らせて、寄り添うこともできず砕けていくなら、ずっと打ち捨てられて眠っている、そう思ってた。

なのに俺は、あの黒いゴライアスと戦う時、こいつに頼ろうとした。そんで、何もできなかった。あの大男は、ベルを助けたつてのにな。笑っちゃまうぜ……意地と仲間を天秤にかけて、無様に寝っ転がってただけなんだからな」

深い自嘲と悔恨を相貌に浮かべるヴェルフは、それを振り払って「灰」と向き合う。

「俺は今度こそ、ベルの助けになりたい。口だけじゃない、友として、あいつの力になってやりたいんだ。

だから、姉御——あんたにこいつを、受け取ってほしい。どうかこいつを、ベルのために役立ててくれ」

そう言つてヴェルフは、《火月》を「灰」に差し出した。もう、意地と仲間は天秤にかけない。ベルのために、《火月》を砕いてやつてくれと。

「……ふむ。くれると言うなら、受け取ろう」

ややあつて、コクリと頷いた少女は緋色の魔剣を手にとった。刀身に手を這わせ、純粋な武器としての性能を推測する「灰」は、思い出したように呟く。

「ああ。そういうえば貴公に、言っていなかった事があつたな」

「……？ 何だ、姉御？」

「私は、魔剣を砕かずに使用する事が出来る」

「——なんだと!？」

驚愕するヴェルフに、《火月》を検分しながら「灰」は続ける。

「以前説明した私の持つ魔剣、使用者の精神力を消費する型の魔剣だが、あれはどちらかと言うと魔剣の特質ではなく、私の性質だ。

私は特殊な武器を使用する際、武器の耐久値を消費するか、己の精神力を消費するか選べる。精神力があればそちらを使うし、なければ耐久値を削る。

それだけの事なのだが、貴公にとっては意味があらう。だから今、教えておく」

「……どうして今になって、そんなことを？」

抜け切らぬ驚愕に陥りながらも問ひ掛けるヴェルフに、性能の類推を終えた「灰」は鍛冶道具を取り出しながら語った。

「貴公が、私の家族となったからだ。」

ヴェルフ。私はベルの鍛冶師である貴公には一定の手助けをするが、それ以上を施すつもりはなかった。貴公自身の成長には、何の興味もなかったからな。

だが、今は違う。貴公と私は、神血ちちを分けた家族となった。ならば私には、私の持てる全てで貴公を助ける義務がある。

それが家族というものだ。それを私は、知っている。だから貴公、ヴェルフ・クロツゾ。これからも私を頼るといい。

家族の成長は、喜ばしい。それが普遍と、いうものだろうか？」

「……そうか。分かった、ありがとう——恩に着る、アスカの姉御」

深々と頭を下げるヴェルフに、「貴公は家族だ、礼はいい」と「灰」は手を振った。小さな木椅子に座る幼女は、岩のような鉄床アンビルに《火月》を置く。

「さて、それでは私は、これから魔剣を打ち直すが、貴公はどうする？」

「……打ち直す？」

「ああ。貴公には悪いが、これは魔剣としては優秀だが、武器としては落第だ。このままでは、使う気になれない。」

だから武器としての使用に耐え得るよう、鍛え直す。『火の時代』の鍛冶は既に知っているだろうか？

古きに新しきを刻み込む——既に完成した武装を更に昇華させる事に、火の鍛冶の真髄はある。私はそうするつもりだが、後学のために見ていくか？

きっと貴公の、指針の一つとなるだろう。そのつもりで私は提案したのだが」

「……そういう事か。なら姉御、俺にそれを手伝わせてくれ」

「ふむ？」

「実は姉御の業を、『火の時代』の高度な鍛冶つてのを見てから、俺に新しい《スキル》が発現したんだ。

正直、なんでこんな《スキル》が出たのか分からなかった。けどたぶん、きつとこの時のためだったんだと思う。

だから、手伝わせてくれ。こいつはきつと、あんたの力になる」
神妙な顔をするヴェルフは、新たな《スキル》の効果を告げる。

「――ほう。それは、興味深いな」

それを聞いた、幼い不死は。値踏みの眼で鍛冶師を見つめた。

ヴェルフ・クロツゾ

レベル
Lv.2

力：10 耐久：10 器用：10 敏捷：10 魔力：10

鍛冶：1

《魔法》

【ウイル・オ・ウイスプ】

アンチ・マジック・ファイア
・対魔力魔法

・詠唱式【燃えつきろ、外法の業】

《スキル》

クロツゾ・ブラッド
【魔剣血統】

・魔剣作製可能。

・作製時における魔剣能力強化。

エンバリーリット
【残火双楔】

・二重変質強化可能。

六日目の正午。〃灰〃はギルド本部、万神殿パンテオンに足を踏み入れていた。

再三に渡るギルドからの呼び出し。いい加減鬱陶しくなったので、一息に精算するためである。

「——以上が、アスカ氏に課される罰則ペナルティとなります。本来、貴方にごのような罰を下す理由はないのですが、アスカ氏の行いを重く見た上層部の決定によって——」

「御託はいい。早く手続きを済ませろ。私は急ぎ、ベルの元へ戻らねばならない」

〃灰〃はエイナが読み上げる令状を切り上げさせる。ギルドより下った罰則ペナルティ——具体的には多額の罰金——を幼女はさつさとヴアリスで支払う。

「用件は済んだな」

「ええ、恙つがな無く。アスカ氏の罰則ペナルティの遵守、確認いたしました。今後はこのようなことがないよう、ギルドの規定に従ってください」

ギルドの受付嬢として完璧な対応をしたエイナはそこで言葉を区切り、私情の混じった表情で〃灰〃に語りかける。

「……アスカ氏。貴方と私の関係上、このようなことを言っても意味はないのかもしれませんが、それでも、言わせてもらいます。

——どうか、ベル君の前からいなくならないでください。あの子にとって貴方は、何よりもかけがえのない『家族』。彼はきつと、そう思っているでしょうから」

「考えておこう」

祈るようなエイナの言葉に適当な対応をして、〃灰〃はさつさとギ

ルドから去っていった。

小人族バルウムの小さな背を覆う、灰色の髪。その後ろ姿を見送りながら、エイナは悲しそうに眉を下げる。

「灰」に言いたいことは一杯あった。けれどそれをしても、あの荒んだ小人族バルウムとの認識の差を深めるだけだ。

エイナと「灰」は、交わらない。生まれも育ちも、生き方さえ違う両者を繋げるのは、ベル・クラネルという白い少年。

(……いつまでもこうしちやいられない。私は、私にできることをやるう)

自分の頬を叩いて気合を入れたハーフエルフは、ひとまず上層部への陳情書をまとめ上げる。

今回の「灰」への罰則ペナルティは異例だ。それは「灰」の行動、『神殺し』未遂に対する制裁というより、ギルドが「灰」の手綱を握っていると証明する意味合いが強い。

ギルドは迷宮都市オラリオの統治者。その統治能力が疑われることはあつてはならない。かつて闇派閥イヴァイルスの絶対根絶を掲げたように、そう噂されている灰髪の小人族相手なら尚更に。

けれどそれと、「灰」に対する上層部の態度を受け入れるかは別の話だ。エイナは「灰」の味方ではないが、ベルの味方である。あの少年が悲しむことがないよう、最善を尽くすのがアドバイザーとしての務めだと自負している。

だから、今回の罰則ペナルティの不当性を訴える。彼女に半分流れるエルフの矜持ちかがそれを後押しした。

エイナの奮闘が実を結ぶかは、まだ、誰も分からない。

——その一瞬に、全てを懸ける。

特大剣と短刀の二刀流、《狼の剣技》の暴威に曝されるベルは、短刀を楔に地を駆ける動きで灰髪の不死に立ち向かう。

痛みが失くなるくらい受けた。反射で弾けるくらいそれを知った。ならば後は盗むだけ、この一週間で呆れるほど繰り返し返してきた稚拙な

動きは、もう一端のそれに辿り着いている。

極めてもない。使いこなせてもない。だが使えるようにはなった。ベルは《ヘステイア・ナイフ》と《牛若丸》の二刀流で、『狼の剣技』を再現する。

「フアランの不死隊、深淵の監視者たち」。その物語を、幼いベルは聞かされた覚えがある。

曰く、深淵を狩る者たち。深淵を監視し、氾濫の予兆あらば、一国をも落とす忌まわしき旅団。

その不吉なる長兜を、赤い長布のたなびく姿を、集団で敵を狩る不転の生き様を聞かされたベルは、恐ろしい思いの中に小さな憧憬を溶かしていた。

どんなに落ちぶれた者にも、手放せない矜持はある。彼らに救いはなかったが、それでもなお、己が信念に尽くしていた。

狼の血を分け合った絆——分かち難い仲間たちと共に。

「るオおおおおおおおおおおおっ!!!」

ベートが吼える。幾度となく『狼の剣技』に打ちのめされた狼人は、己こそが真なる狩人だと知らしめるように「灰」に喰らいつく。

銀靴に纏うは【劍姫】の『風』。何度打ち払われようととも牙を剥くベートの猛攻は、着実に「灰」の許容限界を削っている。

「おらあああああああああああああああああつ!!!」

「どりやあああああああああああああああつ!!!」

それに続くのはアマゾネスの姉妹だ。

【大熱闘】、【大反攻】。死に近づく程に全能力を、怒りの丈で力を爆増させるティオナとティオネが、鬱陶しそうに攻撃を捌く「灰」の僅かな注視を掻き集める。

「俺だつてえええええええええええええええええええええええつ!!!」

『死闘』に遅れて加わったラウルは必死の援護を繰り返していた。

武芸百般、全て二流。何一つ極められなかったが故にあらゆる武器を試し、手に取り、鍛錬を繰り返してきた【超凡夫】。その蓄積を、諦観を抱えてなお積んできた執念を吐き出さずして何が冒険者か。

最も「灰」に影響を受けた人間は、自身に訪れた変化に未だ気付

かず、弓を、投擲武器を、道具アイテムを駆使して遠距離より「灰」に仕掛ける。

近距離の三枚、遠距離の一枚。同胞ふしの侵入たたかいで途方もなく「灰」を追い詰めた、最も苦手な多対一。

【神武闘征】——【フツノミタマ】!!」

更に命ミコトが、畳み掛ける。

新たに「ヘステイア・ファミリア」の団員となった命ミコトは「灰」の『死闘』に戦慄し、それに何度打ちのめされても立ち向かうベルに打ち震え、自分にできる全てを考え、答えを出した。

魔法による、「灰」の拘束。三方より「灰」に攻撃する三名ごと、幼女を重力の檻に捕える。

不死に重さは悪手だ。その状況を、「灰」は土を舐め啜ってその身に受けてきた。闇は重く、不死は重い。【約束された平和の歩み】の対抗策で、容易にこの重力圏を突破できる。

それをさせじとベート達が組み付いた。ベートは背後から首をへし折らんと腕を回し、テイオナとテイオネがそれぞれ片腕を封鎖する。

更にラウルが、両脚を狙って遠距離武器を放出する。矢が、投げナイフが、機動力を奪う道具アイテムが一齐に「灰」に迫った。

「——『リル・ラファール』!!」

同時に、満を持して放たれるアイズの『必殺』。

『死闘』の開始から今に至るまで練り上げた魔力を用い、全霊を以て編み上げた『風』の全てを突進に捧げる。まさしく嵐の如き暴風の剣つるぎが、拘束された「灰」に肉薄する。

背後に組み付き、首級を千切り取ろうとするベート。

右腕を掴み、今にもへし折らんと力を込めるテイオネ。

左腕を押さえ、両腕で抱えて絶対に離すまいとするテイオナ。

自分に出来る限界まで、「灰」を足止めしようとするラウルと命ミコト。

「灰」の心臓を抉らんと迫る、アイズ・ヴァレンシユタインの『必殺』。

その全てを、今になってようやく『認識』した「灰」は——刹那、凍

てついた太陽の瞳を細めた。

灰髪が、翻る。渾身を込めた一廻転。それだけでベートを、ティオナを、ティオネを弾き飛ばした。灰は、特大剣の剛閃により発生する剣圧でラウルの攻撃を全て捌く。

そして特大剣を振り上げ、肉薄する『リル・ラファール』を叩き潰す。アイズの『必殺』、Lv.6の『力』を結集した一撃を、ただの一振り霧散させる。

ベートが宙を飛ぶ。ティオナ、ティオネが地に叩きつけられる。ラウルの攻撃も、命の魔法も意に介さない。アイズの『必殺』が敗れ、後方に弾け飛ぶ。

——その一瞬に、全てを懸けた。

吹き飛ぶアイズの背後。灰に破られた金の少女の『必殺』を取り込んで——アイズが全霊を注いだ『風』を纏ったベルが飛び出す。

灰に最小限の関心しか払われない冒険者たち。彼らは屈辱を飲み込み、痛恨に耐えながら、少年のための『礎』となった。

全ては、この一瞬のために。関心を払わない灰の『弱点』を最大まで突き、許容限界を削り、対応できない一撃を少年に託す。

【英雄願望】、【不転心誓】。この時、初めて限界を超えた少年は、限界解除の訪れと共に大鐘楼を響かせる。

追隨する、炎の輪。深紅の瞳を燃え上がらせる暗い魂が、昇華された【英雄願望】の力を更に跳ね上げる。

一撃を。ただ一撃を。眼前の家族に、時代の『頂天』に叩きつける一撃を、ベルは解き放つ。

「ああ、それだけは分かっていた。ずっとベルだけを見ていた。灰は、それが来ると予測していた。」

だからまだ、手を残している。アイズの『必殺』を斬り伏せた反動で使い物にならない特大剣を捨て置き、左手に潜ませた短刀でベルの一撃に対抗する。

「あああああああああああああああああああああああああああああああつ!!!」

それをベルも、分かっていた。それだけを振るい、それだけを少年に刻みつけ、覚えさせた『狼の剣技』。

その一瞬が来れば、必ず「灰」はそうするとベルは確信していた。だから一撃を込めた《ヘステイア・ナイフ》ではなく、《牛若丸》で短刀に挑む。

両者が振るった、『パリイ』の応酬。短刀と《牛若丸》が互いの敵を喰らわんと噛み合い、火花が弾け——砕け散る。

互いに柄は手放さなかった。ただ武器だけが、耐えられなかった。

「灰」の一手を用いた『賭け』は不発に終わり——少年の一撃が、心臓に迫る。

「――」

「灰」にもう手はない。アイズ達に削られた許容限界を温存して対抗した一手を砕かれた以上、その一撃を受け入れるしかない。

けれど。アイズの『風』を纏い、命の重力圏を飛び越え、心臓に刃を突き立てんとするベルの瞳には。

何も諦めてなどいない、一人の不死が、映っていた。
半歩。

「灰」の最後の行動、最後の許容限界。右足を後ろへ、半歩下げた「灰」は——ただそれだけでベルの一撃を躲す。

肉薄する漆黒の刃の到達を、ほんの僅かに遅らせるだけの一瞬。だがそれだけあれば、「灰」は新たな一手を繰り出せる。ベルの一撃を征伐し、少年を斬り伏せ、死の一步手前まで送り込む『狼の剣技』を刻みつけられる。

ベルと視線を交わす「灰」は、何一つ変わらなかった。全てを平坦に映す眼は、導きたる少年ですら、己の手で消し去れる。

それが分かった。それを交わした。

言葉ではなく、魂をも懸けた『死闘』の中で。ベルはやっと、アスカの心に触れられた。

だから。

少年は何も、迷わなかった。

「ファイアボルト」オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオツ!!!」

咆哮する。

白く輝くベルの右手に、炎雷の力が迸る。それは漆黒ヘステイア・ナイフの刃に流れ、少年の魂ソウルと同調し——一筋の刃となって顕現する。

名も無き「ソウルの業」。己のソウルを刃と為す、英雄の振るいし古の業。

それは確かに、不死の心臓を貫き——

「——ああ、よくぞ。私の心臓に刃を突き立てた」

全ての音が消えた一瞬。感嘆と、親しみと、薄い喜びの灯った言葉が、古鐘の声となって落ちる。

「灰」は——アスカは、微笑んでいた。己の導きたる少年に、自らの心臓を貫かれながら。それでもただ純然と、少年の成長を祝うように。

「——アスカ!!!」

命ミコトの魔法が消え、炎の刃が消失した《ヘステイア・ナイフ》が地に落ちる。

そのままベルは、家族の名を叫んで。

微笑むアスカを、抱きしめた。

「ごめん、ごめんね……! 痛かったはずなのに……! 僕のためにここまでしてくれて……!

ごめんね、アスカ……! ありがとう、アスカ……!! 貴方の家族でいられて——僕は本当に、嬉しいんだ……!!!」

「——」
珍しく眼を丸くする幼女に、泣くベルの言葉が浴びせられた。

感謝と謝罪。家族への■と想いの丈。泣いて、叫んで、抱きしめる少年は、心からの言葉を溢れさせる。

理解と無理解。分かった事と分からない事。お互いにまだ、分かり合えない部分はあるだろう。

それでももう、逃げないと決めた。アスカの家族で居続けると誓った。

その誓いは——あの日に願った少年の想いは、今ここにようやく、

果たされた。

「……ああ、全く。ずっと痛かったのは、貴公の方だろうに。私の事ばかりとは、本当に貴公は——眩しいな」

驚いていたアスカは、フツと目元を和らげ、小さな手を回してベルを抱きしめ返す。

「だからこそ、嬉しいよ。そんな貴公が歩む道が、私には何よりも貴いのだ。

だから、ベル。それを許してくれるなら——これからも共に、歩んでいこう」

少年は泣いて、幼女は微笑んで、互いに抱き合う二人の家族。

この世界でちっぽけな、有り触れた、けれど不死には望むべくもない、暖かな『絆』。

どうかこの温もりが、少年の元から消えないでくれますようにと――

呪われた、寄る辺もない、灰髪の不死は——それだけをずっと願っていた。

ベル・クラネル

レベル
Lv. 2

力：SSSS1389 耐久：SSSS1331 器用：SSSS145

7 敏捷：SSSS1653 魔力：SSSS1203

幸運：I

《魔法》

【ファイアボルト】

・速攻魔法

《スキル》

リアリス・フレIZE
【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

【英雄願望】

アルゴノウト
アクティブアクション
・能動的行動に対する

チャージ実行権。

【不転心誓】

- ・誓約条件達成時のみ発動。
- ・全能力及び逃走を除く全行動の超高補正。
- ・損傷ダメージを無視した行動可能。
- ・誓約を破棄した場合、24時間全アビリティ能力超低下。

焼き尽くす者

「世話になったな」

ウォーゲーム
戦争遊戯前夜。

既にシユリーム古城跡地へ出発したベル達と異なり、〃灰〃はオラリオに留まり、『黄昏の館』の応接間でフィン達と向き合っていた。「気にしなくていい。君と神へスティアの滞在延長くらいはサービスするさ」

副団長のリヴェリアを伴い、フィンは爽やかな笑顔で応対する。主神のロキはサービスの範疇で今夜までへスティアを泊めなければならぬため、喧嘩中むだなあらそいでこの場むだにいない。

「師よ、これを」

「む、『スクロール』か。もう完成したのか？」

厳かにリヴェリアが差し出したのは一軸の『スクロール』だ。その内容を察した幼女に、ハイエルフの魔術師は説明する。

「それはお前に【魔術】を教わってから、ずっと考えていた論理だ。構築が甘いせいか粗は目立つが、一応は形になっている。

私ではまだ、魔術師としての経験が浅すぎる。だからその魔術を扱い切れない。

しかしお前のような老練の魔術師であれば、その真価を發揮できるだろう」

「……成程。良い【魔術】だ。契約の対価として、受け取ろう」

広げた『スクロール』を読み込んだ〃灰〃は、やや満足そうに頷いて『ソウルの器』にしまった。掌から蒼いソウルを立ち上らせる幼女は、静かに席を立つ。

応接間の出口に向かう灰髪に、最後にフィンは声を掛けた。

「〃灰〃、君が戦争遊戯ウォーゲームで何をするつもりかは聞かないよ。ただ一つだけ、頼まれてくれないか」

「何だ。フィン・ディムナ」

首を回す幼女に、フィンは笑みを深める。

「派手にやってくれ」

挑戦的に碧眼を光らせる、小人族の勇者に。

「——良いだろう。私もまた、そのつもりだ」

銀の半眼を瞬く「灰」は首肯して、『黄昏の館』から出立した。

「ヘルメス・ファミリア」本拠『旅人の宿』。

『黄金の館』から直行でここへ来た「灰」は、軽薄な優男の相手をしていた。

「いやーしかし、アスカちゃんに依頼された時はびっくりしたなあ。神会で「ステイタス」を開示するから、もしオレがアポロンに選ばれた時は読み上げてほしいなんてさ。聞いた時は耳を疑ったよ」

「だが貴公は、役目を果たした。『交渉』と『契約』を司るだけはある」
「当然さ！ それがおれの全知権能だからね！」

応接間のソファで大袈裟に両手を広げるヘルメスは、優しげな目で「灰」に尋ねる。

「それにしても、君の依頼通りアポロンはオレを選んだ。確信があったのかい？ それとも他に手を打っていたとか」

「どうもこうもない。アスファイ・アル・アンドロメダへの教導で、少しばかり未来を知っただけだ」

「ああ、あの白霊ちゃんか！ あつちのアスカちゃんともお別れなんて、寂しくなるなあ」

「貴公の感想などどうでもいい。それより、依頼の精算を済ませるぞ」
鼻を鳴らす幼女は虚空から大量の物品を天板に落とした。金貨、宝石、極めつけは魔導書。価値にして数億ヴァリスの資産を、当たり前のように手放す。

「約束の報酬だ。確かめろ」

「オーケイ、きつちり精算しよう。ルルネ！ ひとまず倉庫に運んでくれ！」

「あ、あいよ!?」

眼前の光景に目を白黒させていた犬人の少女は、天板に転がる財宝の数々にゴクリと喉を鳴らす。

内容自体は前回、「灰」と共にこなした24階層の冒険者依頼報酬と似たりよつたりだ。しかし【剣姫】と分け合った前回と違い、今回は総取り、しかも量は二倍近い。

金の匂いに敏感なルルネでも恐れ慄く額の財貨。尻尾を足の間に巻き込む少女は、恐る恐る報酬を手に取り、丁重に包み、運び出す。

「ちよろまかすなよー」

「わ、分かってるって!？」

主神の軽口に必要以上の大声を返すルルネはバタバタと倉庫に向かった。残された財貨の量から数回はかかるだろうと頭の片隅で思考する「灰」は、刻限が来るまで時間を潰す。

「少し話さないか、アスカちゃん」

「……」

「アスファイが来るまでもう少しかかるだろう。せつかくの客人に暇を持って余させるのは本意じゃない。だから君が退屈しないよう話そうじゃないか」

「私は知らん。話したければ勝手に話せ」

どうしても良さそうに受け答えする幼女に笑みを深め、ヘルメスは一方的な雑談を始めた。

「灰」とヘルメスの関係は簡素である。一介の冒険者と他派閥の神、それだけだ。

ヘルメスの『試練』で拗れた互いを滅ぼし合う破滅的な関係は贖罪によって許され、白紙となった。現在は良好でも険悪でもない、ただの他派閥同士である。

だから「灰」は依頼もするし、ヘルメスは報酬次第で引き受ける。ヘルメスの、引いては「ヘルメス・ファミリア」の内心はともかく、「灰」にとってはそれで十分だった。

二度目があれば、「灰」は同じ事をするだけ。三度目があれば——語るべくもない。「灰」はただ、己の妄執を実行する。それだけの話であった。

「来たか」

ヘルメスの話を聞き流していた「灰」は、唐突に呟く。すると応接

間の扉が開かれ、白い霊体の少女が現れた。

その小さな手に繋がれ、引き摺られるように連れられて来たのは、目元に大きな隈を浮かべるアスファイ・アル・アンドロメダである。

「ひいつ!? ほ、本物までいるう……!?」

心傷を大いに刺激されるアスファイはガタガタと震え出す。水色トラウマの瞳が怯えに染まり、涙目になる始末だ。

後ろ足で逃げ出そうとするアスファイを白霊は逃さない。更に蟲を眺めるような「灰」の半眼が彼女を追い詰めた。

そんなアスファイを安心させるように、ヘルメスがヘラヘラと歩み出る。

「まあまあ、アスファイ、そう怯えなくていい。オレがついてるからさ」
「へ、ヘルメス様……元はと言えば貴方のせいでこんな目にあってるんですからねっ!?」

「あつ、やばつ、藪蛇——ぐぼあつ!?」

ひくりつ、と笑顔を硬直させるヘルメスにアスファイのビンタが飛んだ。Lv.4の『力』より繰り出される神速の平手が優男をぶっ飛ばす。

宙を飛んで壁に叩きつけられたヘルメスにハツとして、アスファイは気絶した男神に駆け寄ろうとする。が、白霊に捕まっているので動けず、更には「灰」が近づいてくるので真っ青になった。

「あ、ああ……た、食べないでください……」

「喰わん。何を言っているのだ、貴公は」

恐怖のあまり小動物のように震えてしまうアスファイに首を傾げ、「灰」は掌を差し向けた。

「解呪の報酬だ。アレを渡してもらおう」

「……ど、どうぞ……」

ぶるぶるとまごつくアスファイは何とか懐から用意させられた物品を取り出し、「灰」の手に載せる。すぐさまそれを検分した「灰」は、ややあつて頷いた。

「よろしい。七日七晩の教導が功を奏したな。これをもって、ヘルメスの解呪の契約は完了だ」

「は、はい……」

「貴公の【誓約】も解除しよう。後は好きにするが良い」

受け取った物品をしまった「灰」が手を振ると、アスフィに強制的に刻まれた【誓約】——【狂王の烙印】が消え去った。同時に役目を終えた「灰」の白霊が明滅を始める。

「アポロンはヘルメスを選ぶ。依頼しておけ」

消え行く白霊じぶんにそう告げると、霊体は「一礼」して消失した。それを見届けた「灰」は、時間も惜しいのでさっさとその場から立ち去る。

「や、やっと終わった……ヘルメス様あ、起きてくださいよお……」

「うーん……ダメだぜ、メイアちゃん……オレを困らせちゃあ……」

「起きろって言ってるんですよこの甲斐性なしのロクデナシいつ!!」

「ほげえっ!?!」

再び閃くアスフィの平手ピンダでヘルメスは叩き起こされる。甘い夢に浸っていた男神は精神が決壊して大泣きする眷族アスフィに詰め寄られた。

「何が『必ず用意する。オレの、ヘルメスの名に懸けて』ですか! 結局苦労するのは全部私じゃないですか!? この七日間どれだけ、どれだけ私が恐ろしい目にあつたか貴方に分かりますか!?!」

「い、いや、一応本拠ホームにいる時は一緒にいたじゃないか……」

「本当にいただけじゃないですか!! しかも食事睡眠きちんと取ってる貴方と違って私は得体の知れない物を口に詰め込まれながら不眠不休で【魔術】を覚えさせられたんですよ!?! 一っ言も喋らない「灰」を相手に!!」

ああもう、思い出したくもない……! こんな目に遭うのは二度とごめんですからね!? 絶対に絶対に、絶対に金輪際「ヘスティア・ファミリア」に手を出さないでくださいよヘルメス様!! こんなんじゃあ命がいくつあっても足りませんよ!!」

「あ、ああ、分かったよアスフィ……それはそうと、少し休んだ方が良くないんじゃないか……?」

「言われなくても休みますよ! ヘルメス様は今日一日ずっと側にいてくださいよね!!」

「いや、オレこれからバベルで戦争遊戯見るから……」

「本拠ホームにいても見れるでしょこのダメ男神!!! 戦争遊戯ウオーゲームと私どつちが大事なんですか!!」

「それは禁断アンタツチヤブルの質問だぜアスファイ!？」

その後も籬たがが外れたように滂沱の涙を流して喚き散らすアスファイをヘルメスは必死に宥めすか賺した。

敬愛する团长アスワイの醜態に本拠ホームにいた「ヘルメス・ファミリア」は一同に涙を飲み、この一件をなかつた事にしたという。

夜明けも近づいた頃。『灰』は崩れ去った廃教会の前に佇んでいた。

【アポロン・ファミリア】の襲撃でついに形を失った廃教会。元の名残しか見られない瓦礫の山を、幼女は静かに眺めている。

たかが数ヶ月。不死の永い時の流れからすれば一瞬の、されど貴い導きの時間。

ここで寝食を共にし、時には笑い、時には泣いて、前に進む少年を見てきた。

その淡い、小さな憧憬の記憶を思い返して、『灰』は目元を緩める。それも眼を瞬いた次の瞬間には鋭くなり、幼女は廃教会の裏側へ向かった。

そこには、あの襲撃の後も絶えず燃え続けていたであろう篝火と。眷族の到来を予期していたように待っていた、一柱の幼女神がいた。

「何をしている。ヘステイア」

「……」

【ロキ・ファミリア】の本拠ホームに滞在している筈の主神がここにいる理由を、率直に問う。

暫し無言で、俯いていたヘステイアは。やがて顔を上げ、青みがかつた瞳で真っ直ぐに『灰』を見た。

「行くんだね、アスカ君」

「ああ」

「ボクが何を言っても、君には届かない。けれど、だからこそ、言わせてくれ」

「何だ」

「——いつてらっしやい、アスカ君。必ず無事に、帰ってきておくれ」
その双眸に慈愛を灯して、ヘステイアは微笑んだ。それだけが女神に為せる、ただ一つの行いだった。

その慈■に、不死は眼を細め。

「分かった」

何の感慨もない一言を返して、燃え上がる篝火の炎に消えていった。

黎明が、地平線を覆っている。

シユリーム古城跡地を遠く望む崖際に集う「ヘステイア・ファミリア」一同は、背後の篝火から吹き上がる炎に振り返る。

現れたのは、灰髪の小人族^{バルウム}。炎の中から歩み出^いで、皆の視線を一身に集める「灰」は、静かに口を開いた。

「遅くなったな」

「全くですよ。もうすぐ始まってしまいますよ」

「済まない」

「気にするな、姉御。それよりほら、仕上げてきた。受け取ってくれ」

「ふむ。磨きを掛けたな。いい出来だ」

「アスカ殿……本当に、よろしいのですか？」

「ああ。貴公も、それで構わないな？ リュー・リオン」

「ええ。元より数合わせの助っ人のようなものですから」

「よろしい。ベル、準備はいいか」

「うん——決着は、僕の手でつけるよ」

「良いだろう。それでは——」

「——始めよう。我々のミッションを」

【ヘステイア・ファミリア】VS.【アポロン・ファミリア】。

戦闘形式、攻城戦。

勝利条件——敵大将の撃破。

『戦争遊戯』、開戦。

オラリオは熱狂の渦に包まれていた。

『戦争遊戯』は神々の至上の娯楽であり、また大規模な興行の機会だ。ギルドが主導して都市外から多くの観戦客を招き入れ、ほとんどの商會が臨時店舗を並べ声を張り上げる。

冒険者や神々は賭博に明け暮れ、市民は開幕を今か今かと待ち侘びる。都市に溢れる活力と熱気は、だが内側に潜む恐怖を覆い隠すためでもあった。

「なあ、あの『神殺し』をしようとした小人族……どう思う?」

「そりゃあ、イカレ野郎だろ。神を殺そうなんざ、どんな無法者だって考えもしねえ。それをやらかそうとしたんだ、頭がイツちまつてるんだろーぜ」

「ここ一週間は「ロキ・ファミア」の連中が監視してたらしいが、それも今日までだ。戦争遊戯でもやらかすのかねえ」

「まっ、それでも「アポロン・ファミア」には勝てねえだろ。あれだけの人数差で、しかも攻城戦だ。アポロン派の連中にはちよいと手元を狂わせてもらって、イカレ野郎には消えてほしいね」

「……なんだお前、知らねえのか?」

「ああ? 何がだ?」

「戦争遊戯が成立する前の抗争で、あの小人族は一人でアポロン派を半分ぶっ潰したんだよ」

「……マジで?」

「大マジだ。俺も眉唾だと思っただが、更地になったアポロン派の本拠を見た後じゃあ、信じるしかなかったぜ」

「……………俺、「アポロン・ファミア」に十万賭けたんだけど」

「そりゃあ……御愁傷様だな」

「ノオー!」と絶叫する男を、周囲の冒険者たちが野次を飛ばして笑

い物にする。賭博の予想配当も〔アポロン・ファミリア〕が一に対し
〔ヘステイア・ファミリア〕は五。耳聡い冒険者や大穴狙いの神々が予
想以上にヘステイア派に賭けている証拠だった。

大口を開けて笑う彼らはしかし、不吉な予感に苛まれている。肌が
ピリつくような、首筋に冷たいものが走るような、ダンジョンで発揮
される冒険者の勘。

何かが起こる。上級冒険者はそんな怖気を抱き、神々は興奮で目を
血走らせ、市民は漠然とした不安を感じていた。

「――ダフネ、防衛の準備は整ったか」

それはオラリオから遠く離れた、シユリーム古城跡地で開戦を待つ
ヒュアキントス・クリオも同じであった。

治療師の尽力により完全復活した彼は玉座の間で腕を組み、爪を立
てながら、何度繰り返したかも分からない質問をする。

「とつくに終わってるって言ってるんじゃない。ウチらに出来る用意は全
部したよ。後は士気が下がらないよう気を付けながら三日間警戒す
るしかないって」

「それだけでは駄目だ、あらゆる可能性を考慮しろ。速攻を仕掛けて
くるかもしれない、アレはいつでも稼働できるようにしておけ」
「はいはい、分かったよ」

目に見えて緊迫しているヒュアキントスに呆れた顔をして、ダフネ
は命令を実行するために玉座の間から移動する。残る団員にも気を
抜くなど叱咤し、ヒュアキントスは窓辺から古城を一望した。

（この戦争遊戯、負けられん……アポロン様の御名に懸けて、絶対に）
思い出すのは、天からの雷撃に打たれたあの記憶。何も出来ずに身
を焼かれ、数日も意識不明を彷徨っていた屈辱を思い返すヒュアキン
トスは、ギリツと奥歯を噛み締める。

（この私に屈辱を与えたばかりか、アポロン様すら手に掛けようとし
たあの小人族……絶対に許さん。戦争遊戯など知るものか、必ずや今
此処で、禍根を断つ――）

そう決意するヒュアキントスは、改めて戦力差を考える。

敵は六人。〔ヘステイア・ファミリア〕構成員五名に加え、助っ人が

一人。対する「アポロン・ファミリア」は構成員のほぼ全てである百十名と、幾つかの派閥から参戦させた二十余名の上級冒険者がいる。助っ人制度はアポロンが押し通した提案だ。人数制限なし、派閥は都市内外問わず。戦争遊戯に確実に勝利するというアポロンの思惑が透けて見える制度は、ヒュアキントスの恥辱と使命感を掻き立てる。

助っ人制度などなくとも太陽神の眷族は勝利する。ヒュアキントスはそう信じている。一方で不意打ち、一撃にて戦闘不能に追いやられた彼の経験が、敗北の予兆を捉えて離さない。

だからこそヒュアキントスは、あらゆる準備、戦術、戦略を駆使してどんな手を使うことも躊躇わなかった。

(全ては、あの小人族だ。あの小人族さえどうにかすれば、我々は確実に勝つ)

一度は切り捨てた小人族の情報。

18階層に溢れたモンスターを瞬く間に屠り、階層主『ゴライアス』に『魔剣』で立ち向かった小人族。その時現れた新種と思しき「炎の怪物」と一人で渡り合った小人。

その戦いを目にした冒険者が口を揃えて言った、バカみたいに強い冒険者。

そこに新たに加わった——不死という、規格外の情報。

(それがどこまで本当かは分からん。だが、対策は既に済ませている。来るなら来い——この古城が、貴様の墓標だ……!)

肌に粟立つ悪寒を握り潰しながら、ヒュアキントスは記憶に佇む灰髪の小人族を睨んだ。

「アイズー！ そろそろ始まるよー！」

窓辺から都市を見ていたアイズは、後ろから抱きつくテイオナに「うん」と頷いた。

「ロキ・ファミリア」本拠、応接間。壁に寄り掛かるベートを除いてソファに座る幹部一同にアイズも交ざる。既に展開されている『神の鏡』にはシュリーム古城が映っていた。

「さて、どうなるかのう」

「結果は目に見えているだろう、ガレス」

「それはそうじゃが、『灰』が何をするのか、気にならん訳ではあるまい」

「……確かに、そうだな」

趨勢を見切っているリヴェリアとガレスが会話する側で、ティオナがティオネに問い掛ける。

「ねーティオネー、アルゴノウト君勝てるかなー?」

「知らないわよ、そんなこと。何があっても、最後にはアスカが踏み躪るでしょ」

「えーっ!? それってさ、アルゴノウト君の出番もないってこと!?

あんなに頑張ったのに!」

「関係ねえっての。『灰』野郎がどうやろうが、兎野郎は自分でケリをつけるだろ。」

男おすだぞ、あいつは」

見透かしたように語るベートに複雑な顔をするティオナの横で、アイズはフィンを見た。

祈るように顔の前で指を組む彼は、ただじっと『神の鏡』を見つめている。

やがて、都市中に拡散する実況の声と共に、開幕を告げる銅鑼の音が鳴り響いた。

「どうやら始まったようだ。皆、この戦争ウオーゲーム遊戯を見守ろう」

そう言ってフツと不敵に笑うフィンは。

——次の瞬間、驚愕の表情で立ち上がった。

「——お、おい!? 何だありゃあ!?!」

それに最初に気づいたのは、城壁で哨戒していた弓アーチャー使いだった。

開戦を告げる銅鑼の音に今一度気を引き締めていた彼らは、突如出現したその光景に目を奪われた。

平野に鎮座するシユリーム古城跡地。その周囲は川と林以外、せいぜい一人隠れられる岩が散在する程度でしかない。

だから上級冒険者である彼らの強力な弓矢があれば、遠方の詠唱も近距離の特攻も撃ち潰せる。

それで何の問題もない筈だった。

遙か遠方の崖、その頂上から聳え立つ——光り輝く槍が顕現するまでは。

左手を掲げ、10Mメートルを優に超える光の槍を“灰”は握る。

それは本来存在し得ない、架空の【神話】。

『ファイアナ』——『古代』の小人族達バルウムが崇めた、今は打ち捨てられし女神の【奇跡】。

小人族バルウムの最初で最後の英雄譚、『ファイアナ騎士団』の物語より芽生えし——《英雄の槍》。

【勇者の突撃】

その奇跡の名を口にした灰髪の少女は、輝ける槍を両手に、腰だめに構え——流れ落ちる星のように、崖際から飛来した。

「く、来るぞーっ!? 迎撃しろっ!」

アーチャー
弓使い隊を率いる隊長の一声で弓が引き絞られ、矢が放たれる。

冒険者の膂力に合わせた特注の弓は威力も射程も桁違いだ。迷宮の怪物を殺すために用いられるそれは、第三級冒険者の肉体をも破壊するに余りある。

更に連射力も引けを取らない弓使いアーチャーの攻撃は、瞬く間に空を覆う矢の雨となって“灰”に殺到した。

だが——急襲する矢ことごとの悉くが、光り輝く槍より発せられる白い光によって阻まれる。

「くそっ、止まらねえ! 何なんだありや、魔法か!」

悪態を吐きながら必死に矢を番える『敵』を、滑空する“灰”はじつと見つめる。

流星の如く前へ進み続ける少女は、新たなる【奇跡】の効果を確認していた。

【勇者の突撃】。輝ける槍を召喚し、全力で突撃する架空の【奇跡】。

その真価は前へ進む者に与えられる強力な加護だ。矢を弾き、魔法ドラゴン・ブレスにも耐え、竜の息吹すら貫く『勇者』の輝き。

勇猛果敢、具不退転ぐふたいてんで知られた『ファイアナ騎士団』の物語。それに擬え、在りし日の英雄の如く突き進む者にのみ、女神ファイアナの加護は与えられる。

弓使いアーチャーの矢も、待機していた魔道士の魔法も、【勇者の突撃】は全てを弾く。平野に着地し、加速する「灰」は、威勢をいや増す槍の輝きによつて巨大な『破城槌』の如く変貌する。

持久力スタミナが尽きる寸前の、最後の一步。「灰」は踏み込み、跳躍した。白く輝く槍を持つ幼女が飛ぶ。穂先が狙うは、古城の正門。

分厚く堅牢な石造りの城門に、『破城槌』が迫り――

『う、うわあああああああ――!?!』
大激突。

城壁の上上にいた【アポロン・ファミリア】構成員の悲鳴を掻き消す大爆音が轟き。

シユリーム古城の正門は、一面の城壁ごと完全に破砕された。

『な、何だあつ?!』

すわ隕石が落ちてきたのかと錯覚する程に、その揺れは常軌を逸していた。

まるで古城全体が揺れているような大震動。内部で待機していた団員達は次々に中庭へ飛び出し――絶句する。

消えている。10Mメートルを超える堅牢な城壁が、そこにある筈の【アポロン・ファミリア】の守りが、跡形もなく。

朦々と上がる莫大な土煙が薄れ、見晴らしの良い平野が広がる光景に、誰もが啞然としていた。

動揺、不信、悪夢きおくの想起。更地となった本拠ホームの如く、甚大な破壊力が振るわれたのは想像に難くない。

停止する構成員達は、呆然と破砕された城壁の跡を見ているしかなかった。

故に、気付く。立ち昇る土煙の中、ゆつくりとこちらへ歩いてくる小さな影に。

生まれより伸びる灰色の髪。闇に浸したような長衣。

——凍てついた太陽のような銀の半眼。

その、神をも殺そうとした小人の出現に、誰もが目を見開く中。

【「勇気の鼓舞」】

光で織り成された戦旗を左手に、土煙を払った「灰」は、堂々と旗を大地に突き刺した。

数多の武器に囲まれし、槍持つ女神——ファイアナの肖像が描かれた、光の戦旗を。

「——くっ、はははははははははははははははははは——」

『神の鏡』を通し、その光景を目に焼き付けていたフィンは、声を上げて笑った。

「だ、団長!?!」と驚くテイオネの声も今の彼には届かない。仲間達の注視など意識の外、親指の疼きを押し潰すように拳を握るフィンはおも大笑する。

「はははははははははは——……全く。派手にやってくれるね、「灰」は」
やがて笑声を引っ込めたフィンは、腹の底から湧き上がる感情に打ち震えながらニヤリと笑う。頬を伝う汗は、彼が感じている戦慄の表れだった。

確かに言った。「灰」は応じた。ならばこの光景は必然だろう。
されどフィンの同胞、小人族にとってそれは特別な意味を持つ。

光り輝く槍、不転の突進、槍持つ女神が描かれた戦旗。

そのの意味するところを分からない小人族がいるものか。その【魔法】は——その【奇跡】は、間違いなく『ファイアナ』の【神話】だ。

存在する筈のない、架空の女神。擬神化される程に一族を支えた、小人族の最初で最後の偉大なる栄光。

『神時代』の到来と共に廃れた信仰を、「灰」は再現していた。架空と打ち捨てられた女神の力を、見る者全てに知らしめたのだ。

他でもない、どの他種族でもない——灰髪の小人の手によって。

(やれやれ……僕の勘は正しかったか)

これまでとは全く違う種類の疼きを上げる親指に、フィンは目を細める。

それが歓喜か、あるいは別の感情であるかはどうでもいい。

フィンは今ここで、一族の新たな『太陽』の誕生を目にしているのだから。

「さあ、[〃]灰[〃]。証明してくれ」

『神の鏡』に映る灰髪の小人を見上げるフィンは、呟く。

「君の可能性を」

その言葉が契機であるかのように、鏡の中の[〃]灰[〃]は動き出した。

【勇気の鼓舞】。それは架空の女神フィアナを信仰する、とある敬虔なる信徒の物語より発現した【奇跡】だ。

語り部は、ラウル・ノールド。誰よりも『彼』に憧れ、『彼』の遂げる英雄譚を目撃した人間ヒューマンの男に、[〃]灰[〃]は語らせたのである。

前々から素質はあると思っていた。【奇跡】とは、それに値するのであれば、架空ですら神話と成り得る。ならばあの男の物語は——神に並び立たんとする『野望』が透けて見える『彼』の献身は、神話として成立し得るだろうと。

しかしてそれは、正解だった。【勇気の鼓舞】——光の旗を突き立て、周囲の味方を鼓舞するこの奇跡の効果は、一言で言うなら【我慢】である。

戦技【我慢】。断固たる祈りの姿勢で強靱度を上げる戦技。攻撃に対する意識、姿勢を整えることで損傷をも軽減する戦技効果を、この奇跡は再現する。

故に今の[〃]灰[〃]に大抵の攻撃は通用しない。攻撃が通らない、という意味ではなく——如何なる攻撃にも怯まない『勇氣』で、小人は満たされているからだ。

彼の四騎士、深淵を狩りし英雄——【深淵歩き】の卑小なる似姿の如く。

ドスリ、と[〃]灰[〃]の胸に刃が食い込む。

微塵も揺らがない銀の半眼に映るのは、相貌を歪めるエルフの男だった。

「先の雪辱、果たさせてもらおうぞ……!」

幼女の胸に短剣を突き刺したのはリツソスだ。抗争の最初期に意識を刈り取られた男は、その屈辱を晴らさんと真つ先に襲い掛かっていた。

「灰」はちらりと眼を滑らせ、周囲を見渡す。すると辺りは「灰」の逃げ場を塞ぐように敵が囲みつつあった。

八方塞がり、四面楚歌。その状況に「灰」は嘆息する。同時に取り出した大剣を無造作に振り下ろし、リツソスの腕を両断した。

「ぎゃああああああああああああっ!?!」

絶叫するエルフなど気にも止めず、「灰」は乱雑にリツソスを解体した。ボトボトと手足を失って地に落ちるエルフの男を祝福派生の直剣複数で縫い止め、死なぬよう調整する。

その一瞬の出来事に、周りを囲う敵どもは慄いた。仮にもLv.2、小隊の長を任される上級冒険者を、いとも容易く無力化した「灰」を恐れている。

どうでもいい。意図された陣形を保つ敵も、残っている城壁の上に立つ敵も、古城の中央で派閥を指揮する敵も、その全てがどうでもいい。

策があるのだろう。術を用意しているのだろう。遊戯とはいえ、これは戦争。負けを見越して戦うなど、そんな愚か者はここにはいない。

だから何だと、「灰」は眼を細める。不死の本領、死なずの外法。そんな物を公の場で見せてやれる程、私は優しくない。

だからこそ、戦おう。乱雑に、無造作に。知性のない怪物の如く、ただ降り積もった力を振り回そう。

まだ何も出来ず、何者にも成れなかった、あの頃のように。古い記憶を想起する「灰」は、それを脛の裏に斬って捨て。

不死が半眼を開いた時。幼女は無数の矢と魔法で跡形もなく四散した。

『ああととお!? 例の小人族に【アポロン・ファミリア】の攻撃が殺到!
! これは決まったかー!?』

ギルド本部の前庭に勝手に設置された舞台上で、イブリ・アチャーは熱弁を振るっていた。

喋る火炎魔法を自称する褐色肌の青年は、『神の鏡』に映し出される戦争遊戯の様子を高らかに実況する。

『いや! 無傷、無傷です! 土煙が晴れた先にいたのは、全く怪我を負っていない小人族! ギルド公式発表のLv.1とは何だったのかー!』

闇色の長衣にほつれ一つすらない幼女に唾を飛ばすイブリのことなど露知らず、〃灰〃は適当に歩き出す。最も近い敵に歩を進める幼女は、雄叫びを上げて飛び掛かってくる獣人の四肢を両断し、直剣を複数刺して次を狙う。

『凄惨! 容赦なし! 『神殺し』すら恐れぬ小人族には慈悲の心もないと言うのでしょうか!? しかし【アポロン・ファミリア】も一方的にやられるばかりではありません!』

〃灰〃は次々に敵を撃破するものの、無傷ではない。攻撃を全く避けない幼女は、がむしやらかな反撃を受けては徐々に損傷していく。

敵の後衛も黙ってはいない。動きを止めた瞬間に降り注ぐ矢と魔法が幼女の脆い体を削っていく。

やがて〃灰〃は、誰の目から見ても明らかかなほどに满身創痕となっていた。体に無数の矢が刺さり、あらゆる傷が刻まれ、既に片眼も潰れている。

だがなおも止まらぬ〃灰〃は、取り囲んでいた最後の敵を斬り捨てた。しかし、瞬間——一本の大矢が幼女の頭に直撃し、僅かの後、ふらりと倒れる。

『決まったあー!? ついに、ついにあの小人族が倒れました! 致命傷だったのでしょうか、全く動きません!』

ああと、ここで【アポロン・ファミリア】の別働隊が出現! 味

方を救助しつつ、小人族を再び取り囲んでいます！　どうやらトドメを刺すようです！』

イブリが緊迫した様子で声を張り上げる。いかに戦争遊戯と言えど、不慮の事故は避けられない。まして互いに殺意を抱いているとなれば、人死が出るのも当然だ。

オラリオにおいて、人が死ぬなど珍しくもない。ダンジョンに挑む冒険者は常に命懸けであり、迷宮都市の住人は人の死にある種の慣れと諦観を抱いている。

下界で人が死ぬのは仕方ないことだ。神々も認める摂理に抗うのは、それこそ英雄と呼ばれる存在しかない。

だから皆、ただ見ていた。取り囲まれた小人族に、次々と刃が突き刺さるその瞬間を。

だが。

まだ誰も、知らぬのだ。

『灰』と呼ばれる小人族を。『灰』と呼ばれる小人を。

——『灰』と呼ばれた忌まわしき不死を、この時代の誰もが知らなかったが故に。

その有り得べからざる光景に、都市中の人類が息を止めた。

『あれ、今動いて……ああ!?!　火です!?!　どうやら小人族に火を放つたようで……何だあれ……黒い、炎……?!』

イブリの実況が止まる。倒れた幼女にトドメを刺していた「アポロン・ファミリア」構成員は黒い炎に巻かれ転がり叫ぶ。

やがて、ざらりと。『灰』に突き刺さっていた幾多の武器が、独りでに抜け落ちた。

そして——火の無き灰が立ち上がる。黒い炎に焼かれながら。

無傷。全ての損傷が、何一つ無かったかのように黒い炎に佇む『灰』は。

郷愁の大鎌と魔法刃の補助鎌——《フリーデの大鎌》を両手に、黒い炎を巻き込んで飛び上がり。

黒炎が目も眩むほど燃え上がった刹那、その全てを眼下の敵に叩きつけた。

【黒い炎の舞】。

それはかつて『灰』が相対した、絵画世界の腐れを選んだ哀れな修道女が扱った剣技の果て先だ。

「黒い炎のエルフリーデ」。既に捨てられたその名で知られる、ロンドール黒教会を築いた三姉妹の長女。

【闇術】と化すほどに熟達した彼女の剣技を、今一度ここに再現する。

【黒い炎の舞】は黒炎を纏い、巻き上げながら上に飛び、大上段から黒い炎を叩きつける。

叩きつけには黒の爆炎が発生し、更に前方を黒炎の奔流で薙ぎ払う。これにより、『灰』にトドメを刺そうとした別働隊、及び負傷者を退避治療させる援護隊の半分が完全に戦闘不能となった。

古城の中庭に黒い炎が燃え盛る。その中に倒れ、焼かれ苦しむ敵を踏みつけながら、『灰』は前に歩み出る。

交差された幼女の白い腕に、既に《フリーデの大鎌》はなく——月の裁きを称する《裁きの大剣》と罪の火を称する《罪の大剣》が、暗い魔力と罪の火を帯び、左右の手に鎮座していた。

トドメを刺した筈の小人が甦るといふ現実を「アポロン・ファミリア」が受け入れられていない内に、『灰』は疾駆する。

イルシールの僭王せんおう、「法王サリヴァーン」の戦法を模倣した剣技は、罪の炎を伴う斬撃と裁きの剣先より放たれる魔法刃が主体の連撃だ。

《罪の大剣》より溢れる爆炎が、《裁きの大剣》から放射される魔法刃が、敵を焼き断ち、貫き、次々と撃破していく。

脈絡もなくただ暴れ回っているだけに、「アポロン・ファミリア」はすぐに対応してくるだろう。そんな隙など、『灰』は与えない。

腕の交差が解かれた時、幼女の動きは一変した。距離を一気に詰める独特の歩法から、踊るような廻転に戦法を切り替える。

《踊り子の双魔剣》。「冷たい谷の踊り子」の誓いの証である双刀武器は、法王のその左右逆位置に等しい、暗い魔力の右手剣と炎の左

手剣。それ自体は常時付与魔法型の魔剣でしかないが、踊り子たるを命じられた旧王家の末裔は、王家に伝わる舞の作法を外敵を滅ぼす剣技に昇華した。

灰髪が舞う。一種の高貴さすら感じさせる旋律を踏み鳴らし、少女は踊り、誰にも捉えられぬ速度ですれ違いざまに敵を斬る。

最後には舞うように廻転しながら周囲の敵を斬り払った。灰は、更に加速し、武装を変換した。

「どこだ!? どこに行った——ぐああっ!?!」

槍を構え周囲を警戒していたアマゾネスは、閃く黄金の輝きに斬り裂かれた。それに気を取られた槌を持ったドワーフは、背後より暗銀の毒に貫かれ、泡を吹いて倒れる。

《黄金の残光》と《暗銀の残滅》。グウィン王の四騎士が一人、「王の刃キアラン」が賜った暗殺者の得物。

輝かしい黄金の残像に目を奪われた時、その影で凄まじい猛毒の暗銀が敵を殲滅する。死角から死角へ、影から影へ疾走する少女は、一人一人確実に敵を戦闘不能にした。

それは蘇生した「灰」が「黒い炎の舞」を放ってから、僅か数十秒の出来事。敵の混乱の隙を突き、無駄の多い非効率な動きで戦い、「灰」は特攻隊と別働隊を完全に沈黙させた。

その辺りでようやく、黒い炎が鎮火する。中庭に燃え盛り視界を遮っていた黒炎の海が消えた瞬間、城壁上からの射撃が「灰」に再び殺到する。

「……少し、鬱陶しいな」

矢と魔法の雨を浴びながら少女が呟いたのはそれだけであった。どうせ死ねば、全盛で甦る身の上だ。飽和攻撃は「灰」の弱点を突く有効な手段だが、この程度で終わるなら元より不死は忌み嫌われない。

体中に刺さる矢を気にも留めず、「灰」は肩に手を回す。同時にソウルが集い、背中に顕現した柄を握り、引き抜いた。

霧がかかった灰色の刀身を持つ、無骨な大剣。それを「灰」は両手で構え——

「《灰輪》」

鍛冶師が名付けた銘を呼び、『魔劍』の力を発動した。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!』

バベル30階で戦争遊戯を観戦する神々は、踊り出さんばかりに熱狂していた。

「すげえっ、すげえよ！ 本当に甦りやがった!?!」

「本物の不死だ！ ひひひっ、やっべえ！」

「おい！ あの小人族、何もないとこから武器を取り出してるぞー！」

「《レアスキル》!?! ——は、有り得ねえから……つまり俺達も知らない『未知』か!?!」

「はあ……『灰』たんかわゆ……尊い……好き」

「うおおおおおつ!?! 今度は『魔劍』を使い始めたぞ！ 何だあの馬鹿げた威力は!?!」

「『クロッゾ』だあ！ 間違いねえ、ありやあ『クロッゾの魔劍』だあ!?!」

「おいおい、しかも炎と何だ、あの黒いのは!?! 闇か!?! 中二病か!?! 火と闇が合わさり最強に見えるってか!?!」

「『二重属性』の『魔劍』かよ……ホント壊れてんなー、あの小人族」
口々に好き勝手声を上げる神々は、皆が皆ギラギラと目を輝かせながら戦争遊戯に釘付けになっていた。

戦争遊戯は退屈に飽いた神々の御馳走だ。とはいえ『神時代』が到来して既に千年、永く下界に留まり続ける神の中には何度も戦争遊戯を観戦した神物もいる。

そんなある意味で飽き飽きしている神ですら、今回の戦争遊戯は何もかも違った。

全ては、たった一人の小人族。たった一人の小人。

『時代』という尺度からすれば余りにも小さな『個人』が、今まさに『世界』の在り様を変えようとしている。

「ぐ、ぐぬぬぬぬぬっ……!」

翻つて熱狂する神々とは異なり、膝に拳を叩きつけて焦燥を露わにするのはアポロンだ。

「灰」という『異常存在』^{イレギュラー}については分かっていた。分かっていたもりになっていた。だが、まさかここまでとは。死してなお立ち上がり、魔法のみならず前衛をもこなす。まるで絵に描いたような万能戦士、子供の夢想の如き強さをあの小人族^{バルウム}は誇っている。

このままでは、負けるやも——いやっ、愛する我が眷族^{こら}を信じるのだっ! 不安を必死に振り払う太陽神は、これまた熱狂の例外であるヘステイアに引きつった笑みを向けた。

「ふっ、ふふふっ……随分余裕じゃあないか、ヘステイアあ……!」

だが、これで勝つたと思うなよ!? 私には、ヒュアキントスにはまだ【切り札】がある! この戦争遊戯^{ウォーゲーム}、勝つのは我々だ!」

「うるさい、アポロン」
「っ!」

アポロンの口撃をヘステイアは一言で斬り捨てた。驚愕する男神に一瞥もくれず、微動だにしないヘステイアはじつと『神の鏡』を見つめる。

「ボクは今、怒ってるんだ。話しかけないでくれ」

その淡々とした口調に秘められた怒りにアポロンは怯み、口を噤む。そんなことなんてどうだっていいと、ヘステイアは戦争遊戯^{ウォーゲーム}から目を離さなかった。

傷つき、倒れ、また立ち上がって傷つく眷族。自分の子の、何も顧みないあまりに痛ましい戦い方。

それを見つめるヘステイアは、何も出来ない自分に怒り。
けれど絶対に、目を背けなかった。

東西の城壁が崩壊している。

「灰」とヴェルフの合作、《火月》^{かづき}を素体^{ベース}に「灰」の武器打ちの粋をつぎ込み、ヴェルフのスキル【残火双楔】^{エンバースリット}、二重変質強化によって生み

出された二つの属性を持つ『魔剣』。

《灰輪》^{かいらん}。ただ一人の名も無き不死のためだけにある、唯一無二の『特別製』。その戦技【砲撃】を用い、「海を焼き払った」とすら称される炎と闇の砲撃で城壁を破壊した『灰』は、視界を覆う古城を見上げた。

北の城門は初手で破砕した。東西の城壁もたつた今崩壊させた以上、残ったのは役に立たない南の城壁と丸裸の城砦のみ。

《灰輪》をしまい、『灰』はその場に佇む。顎に手を当て、思考に耽っているように見える幼女は、頭上から降り掛かってきた青年の声に顔を上げた。

「やってくれたな、小人族^{バルウム}！ 栄光あるアポロン様の名誉を穢すこと、どれほどの悪行であるか理解しているのか——」

『灰』はその辺りで聞くのをやめた。狂信者の戯言など神の言葉ほどにも価値がない。拳を振り上げ喚くヒュアキントスを無視して、幼女は城壁だった物を見渡す。

そしててくてくと歩み、瓦礫の山に近づいた『灰』は——形を残していた尖塔を軽々と持ち上げた。

「……………は？」

唾を飛ばしていたヒュアキントス、そして団員達は目を皿のようにして顎を落とす。

「た、退避いっ!？」

誰が叫んだか、【アポロン・ファミリア】は一斉に城砦内に身を隠す。一瞬遅れて到達した尖塔は大質量の砲弾と化して城砦の一角を爆砕した。

ドワーフの大戦士、【重傑^{エルガラム}】ガレス・ランドロックは、沈没したガレオン船をただ一人で持ち上げたと言う。

L v. 6の『力』を極めた冒険者でそれならば、推定L v. 10の『灰』が形を保った瓦礫を投げられない道理はない。ソウルの補強により、崩れかけた瓦礫をそのままの形で投擲できるなら尚更だ。

尤も、出来るかと問われたら、ガレスは「あんな馬鹿な真似をする理由があるまい」と無然として答えるだろうが。実際に観戦しながら

そう呟いていたドワーフは一先ず置いておき、「灰」は次弾を持ち上げるために歩く。

「ヒュアキントス様あ!? このままではっ!?」

「くっ……!? 静まれ、取り乱すな!! もはや出し惜しみはできん、今すぐアレを出せ!!」

他方、「灰」の規格外の馬鹿げた行動に狂乱する「アポロン・ファミリア」構成員をヒュアキントスは一喝し、命令を発する。それに唯々諾々と従う事で狂乱を振り払った構成員達は、一斉に行動を開始した。

次弾、装填^{ばつびょう}。再び尖塔を持ち上げた「灰」は、足元から響いてくる微震に気付いた。

妙な振動だ。まるで何か、巨大な物が蠢いているかのような。

まあ、「灰」にはどうでもいい事だ。「灰」の数十倍はある尖塔を投擲し、着弾も見ずに次弾を「灰」が探しているところ――突如として、城砦の一部が自壊する。

「……?」

はて、何かしただろうか。灰髪の少女が首を傾げていると、微震の正体、城砦を自壊させた元凶がその姿を現した。

——それはただ、巨大という他ない――アポロンを模した偶像であつた。

「……………」

突然の事態に、然しもの「灰」も言葉を失う。というか完全に白け切っている。

そんな幼女などお構いなしに、どこからか登場したヒュアキントスが高笑いを放った。

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!!」

これぞ我らの主神、アポロン様の威光そのもの! 太陽の化身たる御身を写し取った巨大アポロン像なり!」

「……………」

「ただの巨像と思うなよ!? これこそは彼の魔法^{アルテナ}大国で購入した完全自立型魔導兵器だ! たかが一匹の小人^{バルウム}族如きにどうこうできる代

あああああつ?!」

その、巨大アポロン像に少女が口からビームを吐いて戦う場面に、神々の歓喜は最高潮に達し。

『ああつ?! 巨大アポロン像が死んだ!!!』

『この人でなし!!!』

たったの一撃で燃え盛り、崩壊した巨大アポロン像に異口同音のセリフを口走った。

「……おかしいな。どうも、妙に苛立たしい」

それを察したのか、少女は無然とした空気を薄っすらと携え。

「何やってるんだよ……アポロンも、アスカ君も……」

一気に弛緩した空気の中、ヘステイアは思わずそんな言葉を零したのであった。

さて、気を取り直すとしよう。

連中の奥の手、らしき巨大アポロン像は一瞬で始末した。まあ、巨大というのはそれだけで武器だ。まともに戦うだけ無駄であると、灰は理解している。

【叫ぶ混沌】が効かなければ非常に面倒なやり方をしなければならなかったが、どうにかなったようだ。面倒事を避けられたと判断した。灰は、溶解する巨大アポロン像の残骸へと近づいていく。

何の考えもない行動である。今の灰は、言葉にすれば白痴の獣だ。学びもせず、考えもせず、急場凌ぎに終始する。このような下等な生き方は、即座に死を招くだろう。

実際に灰は死んでいるし、不死故に蘇っている。それで良い。それだけで良い。

不死とは元より、化け物なのだ。怪物が怪物らしく這いずつたとて、それを訝しむ者も在りはすまい。

灰はただ、歩むのみである。その先にいる、ほとんどの敵——ただ一人を除いて、何もかもを壊し尽くすまで。

「——む」

して何もできずにいる！

そこで唾える指もなく見ているが良い、小人族^{パルウム}。何時までも貴様を囚えることはできません。

だが、その僅かな時間で十分だ。あの兎や、貴様の尻にひつつく糞のような連中を叩き潰すには、十分な時間がある！」

「……」

「……ふん、恨み言の一つも零さんか。その胆力だけは大したものだと褒めておこう。」

直ちに『呪詛^{カース}』を完成させる。戦争遊戯^{ウォーゲーム}が終わるまで、奴をここに釘付けにしておけ」

「ヒヒッ、了解だぜえ、旦那あ」

無言を貫く、灰^{カース}に背を向けたヒュアキントスは、黒い矢型の『呪詛^{カース}』を放ったフードの男にそう命令する。

男は本来、ヒュアキントスの命令など受け入れる立場ではなかったが、今回ばかりはどうでもよい些事だった。

そうだと。男は、毒されていたのだ。眼前の小人族^{パルウム}に。神の如く美しい小人に。

その肢体に、己の呪いを焚べる歓喜に湧き上がっていた男は。次の瞬間、ヒュアキントスの側を通過し、超速で壁に叩きつけられた。

下卑た笑顔を浮かべたまま。四肢をもがれ、祝福の直剣に縫い留められて。

「なっ——!?!」

「——良い策略だ。手際も良い。殺せぬのなら、縛れば良い。成程、道理に適っている」

時を遡る闇のような焦燥に襲われたヒュアキントスが振り返る。

馬鹿な、馬鹿な!?! そんな筈はない！ 奴はもはや、言葉一つも口に来ぬ筈！

されど、そこにあつたのは。

「だが、残念だ。『呪詛^{カース}』では、私を止められない」

全身を縛る『呪詛^{カース}』を当たり前のように引き千切る、小人の姿があつ

た。

馬鹿な——!? ヒュアキントスは戦慄する。

有り得る筈がない。あれ程の『呪詛』を無防備に受ければ、たとえ都市最強であろうとも動けない筈!?

一体、どうやって——その答えは、ヒュアキントスの瞳に写っている。

火の輪が灯る右眼より溢れる闇。それが「灰」の全身を覆い、指先から崩壊させている。

その名の通り、灰となつて。「灰」と呼ばれる小人族が、『呪詛』ごとく崩れていく。

『呪詛』!? 【魔法】!? それとも【スキル】か!?

いや、そのどれでもない……! これは——)

そして、「灰」が完全に灰となつて崩れ落ちた瞬間。背骨を撫でる悪寒に従つたヒュアキントスは、直ちにその場から飛び退いた。

(——『自死』!?)

ヒュアキントスの勘が叫ぶ。警鐘が乱立する頭の中で、その光景を知覚する。

壁に縫い止められた『呪詛師』。恍惚とした笑みを浮かべる男に突き刺さつた直剣の内、ただ一つ捻じくれた大剣の前に、灰が吹き荒ぶ。

それは即座に人の姿を取つた。捻じくれた大剣を握り、引き抜き、周囲を一掃する小人族。

バキバキと、その小人から音が鳴る。振り回される灰髪が、輝く蒼に染まつていく。

瞬間的に圧縮された時間の中、ヒュアキントスは確かに聞いた。

【詠唱連結】——【ソウルの結晶大剣】

今は遠き『火の時代』にすら存在しなかつた、その【魔術】の名を。

大一閃。

空中に逃げたヒュアキントスは、両断される仲間達をただ眺める他なく。

ギシリと。噛み合わさつた奥歯の砕ける音を聞いた。

リヴェリア・リヨス・アールヴには、【魔術】と呼ばれる『火の時代』の【異法】に触れたその時から、構築し続けた理論があった。

それこそが、【詠唱連結】。己の魔法特性たるそれを【魔術】に転化する、単純にして大いなる可能性を秘めた論理だ。

『神時代』の理において、それは詠唱を繋げる事による魔法位階の上昇を意味する。

短文詠唱から長文へ、長文から超長文詠唱へ。異なる魔法の詠唱を連結し、その威力、範囲、効果を上昇させる魔法特性。

それを【魔術】へ転化させると、何が起こるのか——その答えがリヴェリアの眼前で、これ以上ないほど示されていた。

【降り注ぐ結晶槍】。

【冷たいソウルの大剣】。

【追尾するソウルの衝撃】。

【収束する見えないソウル】。

本来在り得べからざる魔術が、『神の鏡』に展開される。映し出される情景は、『火の時代』にすら存在し得なかった連結されし【魔術】の業。

リヴェリアは、都合三つの【魔法】を連結する。だが“灰”は、二つの【魔術】しか連結していない。

それはリヴェリアの構築した理論が浅かったからだ。リヴェリアの現在の実力では、本来の魔法特性、三つの【魔法】を連結させる力を模倣し切れなかった。

故にその理論を振るう“灰”もまた、二つの【魔術】までしか連結できない。

だが、それで十分である。

少なくとも今——戦争遊戯ウォーゲームの惨憺たる有り様を見る限りに於いては。

「……ひどいもんじゃな」

「ああ、そうだな」

「何も思わんのか？」

「思うところはあるとも。だがこの結果を、私は受け入れなければならない。」

こうなると知って、それでも私は……あの【魔術】を託したのだから」

全ては、『未知』への好奇のために。

そのために【アポロン・ファミリア】を対象とした『実験』を許容したりヴェリアは、自らの浅ましい醜さに苦く笑う。

ああ、構わないとも。故郷を飛び出したその時から、泥に塗れる覚悟はできていた。

それが底なしの闇であろうとも、構うものか。ギラギラと、瞳に満ちるソウルを振り払ってリヴェリアは観測を続ける。

ガレスはそれ以上何も言わなかった。彼は数十年来の友を信じているから。

そしてもう一人の友を見る。こちらもまた、飲まれている。

大それた『野望』の、行き過ぎた『終着』。それを眺める小さな【勇者】に、密やかな溜め息を吐き。

(やれやれ……こりゃあ、儂がすっかりせんとな)

一様とはいかずとも、似たように魅入られた後輩達をどう説得したものと、ドワーフの大戦士は慣れない頭を回すのだった。

『戦争遊戯』の前段階、抗争における「灰」の行動は、【アポロン・ファミリア】に大打撃を与えていた。

半数に及ぶ戦闘員の負傷。本拠の消失。それに伴う築き上げた財産の消滅。

端的に言って、アポロンは追い詰められていた。自ら望み、承諾した『戦争遊戯』ですら、このままでは完遂できないほどに。

だから方々に手を回した。借金を重ねられるだけ重ね、神々の哄笑に耐えながら頭を下げ、表立った活動をしている『呪詛師』達を借り受けた。

全てはたった一人の小人族を抑えつけるため。アポロンは勝った

めに、負けたら破滅する崖に身を投げるしかなかったのだ。

そして、その結果は——『神の鏡』に映し出される惨劇が物語っている。

『立ち止まるな！ 魔法を回せ！ 拘束しろ!!』

ヒュアキントスが檄を飛ばす。団長として、太陽神の信徒として、何より一人の冒険者として諦めるわけにはいかない男は、急造の策で“灰”を縛ろうとする。

『【飛翔】』

『なっ……!?!』

『と、飛んでる?!』

『ば、馬鹿がつ……ふざけんなよ!』

しかしそれを嘲笑うように、小人は上空へ舞い上がった。肌を晒す足首に、二翼一対の光の羽根を生やして。

【飛翔】。それはアスファイ・アル・アンドロメダが七日七晩の地獄の果てに構築した画期的な【魔術】だ。

24階層の一件で【ヘルメス・ファミリア】と共闘した時から、“灰”はある欲求を抱いていた。

『飛翔靴』。世界に五人としない発展アビリティ『神秘』持ち、様々な『マジックアイテム』を開発した【万能者】の発明の中でも傑作の一品。

食料庫での戦いで『飛翔靴』を使用したアスファイを目撃した時から、“灰”はずっとそれを欲していた。

不死の蒐集癖。物珍しい、あるいは有用な道具を求める、呪われ人の異様な共通認識。

その観点から言って、『飛翔靴』はまこと画期的な道具だった。装備者に飛行能力を与えるなど、まさに天外と呼ぶに相応しい。

だからこそ“灰”は、18階層でヘルメスが試練を課した時もアスファイを生かそうとした。

歪な紛い物とはいえ、“灰”には極まった『理力』がある。『神秘』が【魔術】に、『飛翔靴』が【飛翔】に通ずる論理構築を有しているのは見抜いていた。

だからヘルメスを殺した後、〃灰〃は問うつもりだった。【魔術】を覚え、『飛翔靴』を【魔術】とするか。さもなければ神に殉じて死ぬかを。どちらでも良かった。前者ならば喪失しない手段を手にし、後者ならばアスフィを殺して『飛翔靴』を奪えばいい。

結果的に〃灰〃の忘れ去った〃狂王〃の出現によってそれは果たされなかったが、ヘルメスが深淵に呪われたことで巡り巡って機会はやってきた。

ヘルメスを許したのは贖罪の楔のため。だが取引に応じたのは『飛翔靴』があつたからこそだ。そしてそれは、正しかったと——光の羽根で空を飛ぶ〃灰〃は、【飛翔】の可能性を見出していた。

眼前に広がる、第三世界。地底でも海原でもない、天空という新たな戦場。

成程、【飛翔】は、良い魔術だ。これは〃灰〃の蓄えた手段を、無限の枝葉の如く成長させる。深海に溶け、萎びた感性すらも揺り動かすその【魔術】に、〃灰〃は暫し茫洋としていた。

『——む』

何処までも広がる空を眺めていると、人形のような頬を大矢が掠める。足元を見下げれば、罵声を飛ばしながら必死に〃灰〃を狙い撃とうとする敵どもが、蟲のように群がっていた。

ああ、そうだ。今は、神の下らぬ遊戯の最中だ。感慨に耽っている場合ではないと、幼女は意識を切り替える。

『詠唱連結』——【ソウルの結晶奔流】

【アポロン・ファミリア】の最後の抵抗を打ち壊すには、それだけで事足りた。

【ソウルの結晶奔流】。蒼く輝く結晶で構成された極大の光線が、射線上の敵を削り取る。

ここまで生き残った精鋭なのだろう、幾人かは逃した。しかし残りは、杖を適当に振り回す〃灰〃によって手足を削り取られ、蛆のように這う他なくなった。

その哀れな蟲共に祝福の直剣を投げ、〃灰〃は着地する。そして、逃げた幾人かを追い始める。

『ひ、ひいつ?!? 助けっ——』

一人は、崩壊しかけた城砦の部屋で待ち構えていた。不意打ちを受け頭から上半身の前半分を斬り落とされた“灰”は、そのまま反撃して相手の腕を落とした。

驚愕し、絶叫し、逃げ出そうとした相手の脚を斬り捨て、“灰”はそれを城砦の外に投げ捨てた。

『いやっ?!? いやあっ?!? やだああ、やめてええええっ?!?』

一人は、城砦の片隅で戦意を喪失していた。ガタガタと震え、命乞いをする相手を見無視し、“灰”は適当に掴んだ腕を千切り取る。

鳴り響く悲鳴。哀咽の交じった涙。そんなもの、“灰”には意味がない。四肢を千切り取ったのち、城砦の外に投げ捨てた。

『くっ、来るなあっ?!? こっ、殺すぞおっ?!?』

一人は、石造りの廊下の最奥にいた。判断を間違えたかと思えば、弓を番えて“灰”を狙っている。

どうやら勝算なしではないらしい。“灰”が無視して踏み入ると、見事にその左眼が射抜かれた。

首がのけぞる。元に戻る。右眼は変わらず、敵を見据える。

そして“灰”は、両手に盾を持った。大扉を模した異形の盾、何も守れなかった弱者の守り手の双刀武器、《大扉の盾》にて“灰”は光を閉ざす。

廊下の入り口に鎮座する大盾。それはゆっくりと前に滑り……加速する。

『あ、ああっ……?!? そんな、やめろ、ふざけるなアツ?!?』

相手は未来を悟り絶望する。弓を数本放ち、止められないと知れば投げ捨て、石の壁に縋りつく。

『いやだ、いやだあっ?!? 助けて、助けてえっ?!?』

石壁を殴り、ガリガリと引つ掻く。半壊してなお堅牢な要塞は、第三級冒険者程度では破壊できない。拳が割れて、爪が剥がれ、それでも泣き叫ぶのをやめない。

『助けてアポロン様あああああああああああああああっ?!?』

断末魔は、それであった。グシャリと、《大扉の盾》で相手を押し潰

した「灰」は——開かれた盾の間から倒れる血塗れの相手の手足を握り、引き千切る。

そして髪の毛を掴み、引き摺って城砦の外へ向かった。

もはや動く力を失った、尚も生きているそれを、捨てるために。

「あ、ああ……ああ……!!?」

自らの頭を掴むアポロンは既に滂沱の涙を流している。

「やめろ、頼む!!! やめてくれえっ!!」

嗚咽交じりの絶叫は何も変えられない。逃れた幾人かを淡々と処理する「灰」を、『神の鏡』を通して見続けることしかできない。

「ヘスティア、やめさせろお!! 私を負けでいい、やめさせてくれえっ!!」

もはや『戦争遊戯』などに構っていられなくなったアポロンは、形振り構わずヘスティアに叫ぶ。

しかしヘスティアは、己の無力を知っている。呪うほどに、噛み締めている。

だから『神の鏡』から目を離さず、首を振ることしかできなかった。それに絶望して、アポロンはへたり込む。

『神の力』を使っても、周りの神々は助けることを許してくれないだろう。それを悟った太陽神は、弱々しく呻くしかなかった。

「わた、しの、愛する、子らが……私の、せいで……」

全ては、アポロンの過ち。ベル・クラネルを手に入れようとした我欲が、眼前の地獄を築いている。

何よりも尊い眷族達に、深刻な出血を強いている。

それに、やつと気づいたアポロンは。

「う、うう……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

涙を流し、絶叫し、慟哭するしか、できなかった。

グチャリ。グチャリ。グチャリ。グチャリ。

回収する。並べる。手足を千切り取る。

グチャリ。グチャリ。グチャリ。グチャリ。

解体する。何もできぬように。喉を潰し、祝福の直剣を突き刺して、強制的に生き延びさせる。

グチャリ。グチャリ。グチャリ。グチャリ。
半壊した城砦の庭先で、それは行われていた。歩む「灰」、引きずられる人の形をしていたもの。

グチャリ。グチャリ。グチャリ。グチャリ。
最初から仕込みは終えていた。敵を生かしたまま行動不能にさせるのは、難しいができない事じゃない。

『火の時代』に生者に追われ、呆れるほど拘束され、それでも死なぬよう執拗に生かされてきた「灰」は、その経験に適応する。

【勇者の突撃】による城壁の崩壊。

《灰輪》^{かいりん}によって焼かれ、潰された者達。

ここに至るまで斬り捨て、生かしてきた敵ども。

その全てを、「灰」は中庭に並べている。

何の事はない、ただの生死確認だ。そして手遅れにならないための処置でもある。

優しい事だ。不死に似合わぬ、不殺の善行。

それでも受け入れられぬ者は、どうやらいるらしい。

「――止めなさい、「灰」」

振り下ろそうとした《肉断ち包丁》が止められる。腕の痛みを辿って見れば、リユー・リオンが己の得物で「灰」の腕を止めている。

グチャリ。構わず、「灰」は振り下ろした。腕を斬り落とされようが構わなかったからだ。

その行為に苦く齒を食い縛って、リユーは「灰」に武器を向ける。闘争も辞さぬその姿勢に、「灰」は嘆息するのみだった。

「はて、貴公は『協力者』だと思っていたが。それは『敵対』の宣言と受け取っても構わないのか？」

「……これ以上は無用です。徒に敗者を辱める必要はありません」
「見解の相違だな。少なくとも私にとっては、必要な行為だ」

そう言って、「灰」は《肉断ち包丁》をソウルに還す。そして振り返り、リユーの向こう側――青い顔をして立ち尽くす、少年に言葉を

かける。

「ここには本来、死体が並んでいるべきだった」

他にも仲間はある。家族も。^{ファミリア}けれど「灰」は、ベル・クラネルにのみ語る。

「私は全ての敵を殺してきた。それは、それが最も後腐れのないやり方だからだ。

敵を生かして、何になる？ 私には、再びの障害にしなければならない。全て同じだ。一度殺し合った者と、どうして『協力』なんて出来ようか」

振り返る。死屍累々の、だが一人も死んでいない敵どもを。

そして少年に視線を戻し、「灰」は真意を明かす。

「それでも貴公は、生かせと言った。だから私はこれを選んだ。

殺せぬのなら、植え付けるしかない。二度と私に歯向かわぬよう――二度と武器など握らぬよう、心を折るしかない」

「……アスカ」

「勘違いするな。これは全て、私の宿業だ。

こうすると決めていた。けれど貴公には明かさなかった。止められると知っていたからだ。

言葉もなく、勝手を行った罪を詫びよう。それでも私は、二度があれば同じ事をする。

三度もあれば、きつと貴公の言葉も聞けないな。私はこのようにしか、生きられないのだから」

「……」

「だから、そんな顔をするな。しないでくれ、ベル。

悲しみは、貴公に似合わない。私は……ああ、そうだとも。貴公にただ、笑っていて欲しいのだ」

それが、無理だと分かっている。 「灰」は眩き。アスカは、微笑み。

少年の返答を待たず、捻じくれた大剣を顕現させた不死は、それを眼前に突き立てる。

「動くなよ。でなければ、巻き込まない自信がない」

そして「灰」は、燃え上がる。その身に秘し、見せなかった——「最初の火」を、刀身に注ぎ。

「ベル。決着をつけるのは、貴公だ」

その言葉と共に。世界は、かつての在り方を思い出した。

「——そうか。使うのか、「灰」」

老神は静かに呟いた。

「……そう。そうなのね、貴方」

美の女神は神の塔の頂で、自らの盲を知った。

「……」

道化の女神は何も語らない。ひっそりと、朱色の目を開いている。

「あ……」

そして、太陽神は。その光景に、全てを悟った。

「……分かるだろう、アポロン。外ならない君が、あれが何なのか分からない筈があるもんか」

「お……おお……おおおおおおおおおおおおおおおおおお……!!!」

「恨むぞ、アポロン」

泣き崩れる太陽神に、言葉だけを投げて。

「ボクは、あの子のあんな姿なんか、見たくなかった」

炉の女神は涙を湛えた瞳で眺め、己の無力を握り締めた。

その光は、都市中で巻き起こった。

『神の鏡』より放たれる、目を焼くような光。それは無辜の人々のみならず、冒険者の視界すら奪う。

「うわっ、眩しっ……!?!」

「何!?! 何なのよ、もうっ!」

第一級冒険者であるアマゾネスの姉妹ですら、あまりの眩しさに目を覆った。ややあつてそれが収まると、ティオネは周囲を見渡す。

ティオナ、ベートは自分と似たような反応だ。ガレスとリヴェリア

は、瞠目して固まっている。

そして、ティオネの愛する人。フィンは、ずっと心ここにあらずだった。

面白くない。そう思うティオネは、沸き立つ怒りを抑えながら最後にアイズを見る。

少女は『神の鏡』ではなく、窓の外を眺めていた。

「アイズ、どこ見て……」

そこでティオネは、言葉を失う。

それは皆、同じだった。

「……ぐっ……」

暗がりの影で、ヒュアキントスは目を覚ました。

何だ。何が起こった。突然意識を失った事実を認識した彼は、努めて冷静に辺りを窺う。

視界に入ったのは、ボロボロに破壊された部屋の残骸に差す夕暮れ。

まさか数時間も意識を失っていたのか？ 己の失態に思わず舌打ちし、舌に異物の感触が混ざる。

「何だ、これは……灰だと……？」

口を拭うと、そこにあったのは灰だった。よく見れば、辺りは灰塗れになっている。山となって幾つも積もっていた。

どうなっている？ 自分は確かに玉座の間にいたはずだとヒュアキントスは記憶を探る。

策を破られ、とっさの抵抗もあっさりとなり無力化されたヒュアキントスは、最後の手段に出るつもりでいた。

それは、城砦ごとの自爆。どうせ負けるなら相手に勝たせぬ、最悪の手法を取ろうとしたのだ。

あの糞つたれな「灰」は生き残るだろう。だがあの兎は？ その他の連中は？ ヒュアキントスですら即死を免れない量の爆薬を用意した。ならばこの戦争遊戯ウォーゲームに「勝者」はいなくなる。

その手段を取ろうとした直前で、ヒュアキントスの記憶は途切れている。気がつけば、灰塗れの残骸の影だ。

まさか、自分は生き残ったのか？　しかし、灰も残らぬ程の爆薬を用意したはず……確認するべく瓦礫に手をかけ、歩き出そうとしたヒュアキントスは、バサリと落ちてきたそれを見て、固まった。

それは、灰塗れの「アポロン・ファミリア」の旗エンブレムだった。

「……馬鹿、な……」

残っている筈がない。原型を留めている筈がない。しかし同時に、自分が手を掛けている瓦礫が玉座の残骸だと思に至る。

思わずヒュアキントスは駆け出した。そしてすぐに立ち止まる。

残っている。覚えている。扉の跡も、窓の破片も、残骸であり灰塗れという点を除いて、玉座の間そのままだ。

「そんな馬鹿なっ!!!」

ヒュアキントスは絶叫した。まるで悪夢だ。体中の血に冷たい焦燥が巡っているようで気味が悪い。

だからヒュアキントスは夕日を見た。そこには信仰する神の象徴、暮れゆくも輝かしい太陽があるのだから。

「……あ……」

故に。それを見てしまったヒュアキントスは、膝から崩れ落ちるしかなかった。

世界が燃えている。

そう錯覚するほどに、その夕暮れは爛れている。血を垂らしたような光だった。

ああ、それは正しくない。今ここに、夕暮れなんて存在しない。

遥か高く、空の果て。燃えているのは——黒い太陽。

落涙のように、赤く、赫く、光を零す、消えゆく太陽。

太陽が墜ちている。

それは少女の夢見た、悪夢の実現。

かつて隆盛を誇った時代の末期、『火の時代』の最期が顕現した世界

だった。

積もった灰の上に、足跡を残す。

一つ、二つ。それ以上は意味がない。緩く流れる灰の川が、足跡を掻き消して道筋だけを残す。

歩く、歩く、小さな足。靴のない裸足はただ歩み、やがて立ち止まる。

墜ちた太陽の、落涙の下。

消えゆく光、火の終着点。

そこに、王は佇んでいた。

左腕が燃えている。

その手に握る捻じくれた大剣、《最初の火の剣》から立ち上る炎が、王を焼いている。

それは王のみならず、衣服を焼き消していた。左手から首を登り、焼き尽くし、その瞳さえ侵食する。

燃える左眼には、真に太陽が輝いていた。凍てつくそれではなく、正しく瞳に太陽が宿っている。

その対に在るは、闇溢れる右眼。火の輪が灯り、ただそれだけが光である、黒々とした火の篡奪の証。

光と影。火と闇。それは互いを喰らい合うように、王の体を犯している。

さながらそれは、闇に焼かれる火か、火に侵された闇か。どちらともなく、混じり合うように——王は二つを、宿していた。

その衣服は檻褸らんるに等しい。されど燃えようと、吞まれようと、跳ね除けるだけの力がある。

腕輪も、脚輪も、片側を失くしている。残る隻輪せきりんは、炎に罅割れ、闇に侵されている。

戴く冠は見窄らしい。半分に割れ、欠けている。それでもなお、王と示すには十分だった。

風に靡く灰髪だけが、火に焼かれようとも、闇に侵されようとも、灰

色を保っている。

それが、王の姿。

「最後の薪の王」たる、“灰”の姿であった。

その姿を、何に例えよう。

都市の人類は息を止めて見る。

燃えながら歩むその姿。闇に落ちてなお損なわれぬ、作り上げられた美貌。

その瞳を、何に例えよう。

太陽であり、反転した黒でもある。

唯一分かるのは、それは人が持つに過ぎたものである事。

その力を——何に例えよう。

荒々しく、暴力的で、全てを焼き尽くすようなあつい圧威。

清らかでなく、灼あたかでなく、されどそれは、まさしく——

何の迷いがあるうか。

その姿を、その瞳を、その力を。

たかが小人であり、たった一人でしかないその存在を。

——神の如くと。そう呼ぶのに、何の——

「あ、ああ……あああつ……!?!」

ヒュアキントスが正気を保っていられたのは、彼が敬虔な信徒だからであった。

極限状況の中でさえ、自らの外に柱を置く。それはヒュアキントスという個人の自我が崩壊しかねない危機であろうとも、であるからこそ行動の指針となる。

けれどまた、それだけであった。ヒュアキントスにはもはや反抗心すらない。

ただ、栄えある太陽神の眷族として、立ち向かわないわけにはいかなかった。

ヒュアキントスにあったのは、それだけなのだ。
カタカタと震えるヒュアキントスの得物、フランベルジュ波状剣の切っ先は、一人の王に向けられている。

燃え盛る。燃え盛る。

太陽の落涙の下、歩く王の足跡は灰すらをも焼き尽くす。

染み渡る。染み渡る。

垂れ落ちる闇の雫は灰に沈み込み、一つ二つと深淵を広げていく。流れ往く。流れ往く。

火と闇の上を引き摺られる灰髪は、生まれより伸びる灰色であり。それだけが不死の生まれから唯一保ち続けたものであると、きつと誰も知らぬだろう。

見えるのはきつと、燃え盛る捻じくれた大剣だけ。

火継ぎの反証、篡奪の剣。けん奪い取った「最初の火」、それが焚べられた大剣だけだ。

《最初の火の剣》。ソウルにそう記された剣を左手に、王は—— 灰

“は、ゆつくりと歩む。”

【ポエプス・アポロ太陽の光寵童】と対峙するように、一歩ずつ、ゆつくりと。

「……………うわあああああああああああああつ!？」

耐えきれなかったのはヒュアキントスだった。顔面蒼白の青年は震える両手を掲げ、がむしやらに前へ走り出す。

それは逃避か、あるいは本能か。命ある者として、目の前の存在が許せなくなっただのか。

どうでもいい事だ。 灰”は静かに、右手を動かす。

キイン、と高らかな金属音が鳴り響いた。

「あ……………」

ヒュアキントスの手にフランベルジュ波状剣はもうない。それは 灰”の右手に、闇の中に潜んでいた《折れた刃の一振り》によって弾き飛ばされていた。

ぺたり、とヒュアキントスは後ろにへたり込む。その姿勢からの対応策なんて思いつきもしない。

呆然として見上げるヒュアキントスが見ているのは、神の如き小人

の瞳。

その眼は、初めからヒュアキントスなど写してなく——
素通りする。ヒュアキントスの横を、何事もなかったかのように“
灰”は歩く。

数秒の意識の空白の後、ヒュアキントスはゆっくりと振り返った。
零れ落ちそうな目が捉えるのは、引き摺られる灰髪と——その先に立
つ者達。

小人族バルウムの少女。赤髪の青年。妖精エルフの女。極東の忍。そして、兎。

王の歩みを待たず、兎は歩き出し、“灰”とすれ違った。そのまま
燃える大剣を突き刺して座る“灰”に倣うように、小人族バルウムの少女は膝
を抱き、赤髪の青年はどっしりと胡座を構え、妖精エルフの女は静かに、極
東の忍は規則正しく正座する。

彼らに見守られ、近づいてくる兎。赤いマフラーを棚引かせ、灰の

大地に突き刺さる波状剣フランベルジュを引き抜き、ヒュアキントスに投げた少年

——ベル・クラネルは。

「立つてください、ヒュアキントスさん」

紫紺の刃を右手に、まっすぐに掲げ。赤色の短刀を逆手に、左腕を
首に巻くように構え。

「——決着を、つけましょう」

名もなき“ソウルの業”、燃え盛る炎の刃で以て【不死隊の儀式】を
完成させ、最後の戦いを宣言した。

「ふっ……巫山戯ふぎげるなアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

最初に動いたのはヒュアキントスだった。呆然と座り尽くしてい
た青年は、顔を激情で染め、波状剣フランベルジュを取ると同時に疾駆し、ベルと激
突する。

「この期に及んで貴様はア！ どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むの
だ!!」

「ッ！」

「この惨状を見ろ！ 全てあの小人族バルウムがやった事だ!!」

私の策を打ち破ったのも！ アポロン様の眷族を斬り伏せたのも！
そう、この馬鹿げた光景でさえ、あの小人族パルウム一人がやった事だろう！」

力任せの、しかし確かな技量を誇る連撃ラッシュ。それをベルは冷静に捌いていく。

「貴様に何の関係がある！ 全てが終わった後にこのこと現れ、決着をつけるだど！」

そんなもの、もうとつくについているだろうがッ!!

たとえば私が貴様を倒したとて、その後にあの小人族パルウムと戦えば終わらだ!!」

「……それでもアスカは、僕に決着を託してくれた！」

「戯言だ!!」 そんな口約束には何の価値もない!!!

貴様も分かっているだろう!? あの小人族パルウムが——あの存在が、どれほど我々と隔絶しているのか!!

分からない筈がない！ 家族などと、あんな化け物をそう呼ぶ貴様でさえ!! 分からない筈があるものかア!!」

「——シッ！」

「ぐうっ!？」

突如として動きを変えたベルの一撃にヒュアキントスは弾かれる。ついで迫りくる、地を這うような一撃。左手の短刀を楔に、狼の如く炎の刃で斬りつける。それにヒュアキントスは対応できない。

「ふざけているのは貴方だ！」

「なん、だとおっ!？」

「これはアスカだけの戦いじゃない……僕だけの戦いじゃない……!」

これは、僕と貴方の戦いだ！ ヒュアキントスさん！ あの酒場で、あの喧嘩で——僕と貴方が始めた戦いだ！」

「っ!？」

「だから！ 最後は僕たちで決着をつけないきやいけないんだ！

それが僕たちの権利で——義務だろ!!」

「ぐっ、うおおおおおおおっ!？」

狼襲 兎撃。 ラビット・アンド・ウルフ ファランの不死隊の『狼の剣技』を糧に、自らの

神々は、沈黙していた。

ホームで眷族達と見守っていた神も、酒場で冒険者と混じって観戦していた神も。

『バベル』三十階で戦争遊戯ウォーゲームを見守っていた神々も、誰一人として口を開かなかつた。

「邪魔をするぞ」

そこへ、異物が現れる。神々の視線を一斉に集める中、炎と共に顕現した『灰』は、ただ一柱だけを睨んでいた。

力なく踞る太陽神——アポロンだけを。

「っ！ ダメだっ！ アスカ君!」

咄嗟に駆け出したヘステイアは、しかし近づけなかつた。『灰』の放出する熱が、近づくと事を許さなかつた。

「近づくなよ、ヘステイア。貴公ならば、見れば分かるだろう。」

この炎は、神さえも焼く。近づけば貴公とて、例外ではない」

それだけ呟き、『灰』はアポロンを右手で持ち上げる。そして底なしの右眼と太陽の如き左眼でアポロンを見た。

「私の眼を見ろ。アポロン」

「……」

「ここに来た理由は、分かっているな？ ああ、貴公はこの遊戯の対価に、望むものをくれてやると言ったのだ。

ならば望もう——貴公の全てを。さあ、貴公のソウルを私に」

寄越せ、と。そう言おうとして、『灰』は固まる。

アポロンは、泣いていた。

「……濟まない……」

右手から、深淵の呪いに侵食されながら。

「……濟まない……!」

その左手で、今にも焼かれそうになりながら。

「君を愛してやれなくて、濟まない……!!!」

それでもただ、■故に。アポロンは、『灰』のために涙していた。

「……………何だ、それは」

ぞわりと、『灰』の心が荒立つ。それは久しく感じていなかった、

『未知』に対する恐怖。

今私が掴んでいるのは何だ。神ではないのか。神ならばなぜ、■を私に向ける。

アポロンを掴み上げたまま、〃灰〃は周囲を見渡す。するとどの神も、似たような表情で〃灰〃を見ている。

沈痛と、後悔と、憐憫と。そして、■情。

どうしてそんな目で私を見る。なぜ私に■を抱く。

貴様らは、神は——そんなものではないだろう——？

思い出す。

灰に塗れ、倒れる己を嘲笑する神々の姿を。

思い出す。

いつかの迎えを約し、卑金の王冠を被せた彼の大王のまやかしを。思い出す。

止めを刺すその瞬間、己に、不死に、人間に向けられる神々の怨嗟を。

思い出す。

——遠い、遠い。掠れた記憶。

闇の中に生まれ、闇を慕った己に手を伸ばし、微笑んだ——ドン、と〃灰〃の体が揺れる。

突如として脳裏に溢れた記憶の濁流から戻った〃灰〃は、己の左腕が何者かに掴まれていると知覚する。

燃える左腕を。神をも焼く火を。

——それを抱えるように抱きしめていたのは、ヘステイアだった。「ぐっ、うわあああああああああああああああつ?!」

「……………、……………何をしている、ヘステイア」

焼けている。ジュウジュウと音を立てて、幼女神が。

不変の神の体を焼いている。当然だ、それこそが「最初の火」が尊ばれる所以なのだから。

だが、それは神であれば即座に理解できるはず。なのにどうして、ヘステイアは——

「ああああつ、ああつ…………ゆ、許さないぞ、アスカ君…………!!!」

「!」

「ボクの前からっ……ベル君の前からいなくなるなんて、絶対に許さない!!! それに、約束したじゃないかっ!?

「何があっても——君の手を放さないって!!!」

「……………だが、このままでは、貴公……」

「うっがあああああああっ!!! ボクは、アスカ君の神様だ!!! こんなくらいいつ、へっちらだああああああああああっ!!!」

「——」

それがやせ我慢だと見て分かる。いつ送還されてもおかしくない、それほどの火傷をヘステイアはとくに負っている。

全知全能であるならばともかく、全知零能であるのなら神の死すらも在り得てしまう。

なのはどうして、ヘステイアは。

『お花の冠は知ってるかしら? そう、なら一緒に作りましょうか』
何だ。どうして今、この記憶を思い出す。

『私が? フフフ、いいえ。つけるのは貴方よ……ほら、ぴったり!』
無意味な想起はやめろ。それが間違いだったと、私は既に知っている筈だ。

『いつか、貴方に似合う服を送ってあげるわね。ああ、髪飾りもつけましょうか』

私は二度と、間違えない。私は二度と、絶対に……

『私は好きよ? 貴方の灰色の髪。だってほら、こんなに綺麗なんですもの——』

……………。

「——……分かった。ヘステイア。その手を放せ」

「ふんぎぎぎぎぎぎっ!!! ぜっつったい、放さないいいいいいいいつ!!!」

「もう良い。分かった。アポロンのソウルは、諦める」

「見ててくれよベルくん!!! ボクがアスカ君を、みんな家族を守るんだ——!!!」

「……いい加減にしろ。一人で勝手に盛り上がるんじゃない」
「ぐえっ!?!」

「灰」が軽く手を振ると、それだけでヘステイアは地べたに落とされた。それでも手を放さないのは流石と言うべきか……判断を保留するアスカは、今になって火傷の痛みに悶えているヘステイアに「奇跡」を行使する。

「痛っ!? 痛ああああっ!? 火傷ってめっちゃ痛い!!! で、でも、こんな程度で、ボクは諦めないぞおおおおお!!!」

「分かったと言っているだろう。貴公の言い分は、よく分かった。だから少しは落ち着け」

「あ、アスカ君……って、え!? あれ!? ボクの火傷は!? 結構ヤバめに自分がステーキになつてた感覚あつたけど!?!」

「今、治している。とりあえず、話を聞け。私はアポロンをもう襲わない。それをまず理解しろ」

「そ、それは本当かい!?!」

「ああ。その理由についてだが」

「良かったあ~~~~!! 君がいなくなるなんて、ボクは絶対イヤだったんだ!!! でもボクに取れる手段なんかあんまりなくて、『神の力』アルカナムだつて、君をただ脅迫してるだけで!!!」

ボクはね、アスカ君! 君の事をもっと知りたいんだ! 愛したいんだ! 一方的で、迷惑かもしれないけれど……それでも! ボクは君と一緒に、未来を歩いていきたいんだ!」

「……クク、フフフ……アハハ!」

「えっ!? アスカ君今、笑っ……!?!」

「ああ、笑った。笑ったとも。本当に……全く。いつぶりだ、こんな感情を抱くのは」

クスクスと、なおもアスカは笑う。年相応の幼女わらべのように。

そして一頻り笑った後、周囲を見渡す。暗い顔で己を見つめる、神々を。

「なあ、ヘステイア。私にとって神とは、度し難き存在だ。

平和のため、時代のため、そんな言葉で我らを謀り、貶めた。何も

かもを失った者が、それでも最後に見出した希望は、神々のまやかしだったのだ。

神は、私を憎んでいる。不死を疎んでいる。人を——恐れている」言葉を重ねる度、神々の顔は暗く沈んでいく。ただただ「灰」を哀れみ——■そうとしている。

「だが貴公らは、違うのだな。私の知る神々とは。ずっと同じだと思っていた。ああ全く、ひどい勘違いだ。

貴公らは、私の知る神々ではない。もっと『未知』の、理解できない——化け物だ」

その■から逃れるように、「灰」はヘステイアを見る。ヘステイアを観察する眼で、どこか自虐するように微笑んでいる。

「愚かしいとは思わないか？ 見知った狩りのつもりでいて、全く知らぬ化け物の巣窟に迷い込んでいたなんて。

今此処で暴れたところで、きつと高が知れている。いつものように私は負け、何も得られはしないのだろう」

「……アスカ君……」

「何だ、ヘステイア。私が変わったとも思ったのか？ 相変わらず、貴公は眷族を信じ過ぎる。

私は何も変わらない。これまでも、これからも、進む先に変わりはない。

……ああ、だがきつと、だからこそ。

私はこんな事を、言いたくなくなってしまったのだろうか」

「灰」は、そつと両手を差し出す。闇の滴る右手と火に焼かれる左手、どちらも小人には過ぎた力。

「誓約だ。ヘステイア」

その手と同じ両眼で以て、「小人の狂王」は宣言した。

「私は貴公と縁よすがを結ぶ。離れ難く、分かち難い縁を。

これは誓いだ。私は貴公を、「炉の女神ヘステイア」を信じる。その言葉を、その心を、私は受け止め、従おう。

だからヘステイア、誓ってください。

決して、私を裏切らないと。私の手を放さないと。

ただ、そうしてくれるのであれば——私もまた、貴公を決して裏切らない」

真摯な言葉だった。それは真偽などいらぬ、*「灰」*と呼ばれる不死の……弱く卑小な、アスカと呼ばれる幼子の、懇願に似た言葉だった。

だからヘステイアは、眦を決する。包み込むように、神の如き力が秘められた両手を取り——苦痛に一瞬悶えながらも、慈愛の微笑みをアスカに向けた。

「——うん。約束だ、アスカ君。何があっても、この手を放さない。ボクの名に誓って、絶対に」

それは、互いを信じることによつて成立する、か細く、頼りない——不変の誓いであつた。

灰の大地を王は歩く。

揺らぐ灰髪は神の如く、解き放たれたその力は畏怖となつて降り注ぐ。

「これは、一度目だ」

城砦だつた場所に並べられた、ただ生きているだけの人の果て。並ぶ剣は墓標のようで、それに縫い止められた者達は、恐怖と絶望、折れた心で言葉を聞く。

「二度目があれば、同じ事をする。三度あれば、貴公らを殺す。

何があるうとも、私はそうする。だから二度と——齒向かつてくれるなよ」

王は神の【奇跡】を行使し、墓石の如く横たわっていた者達のすべての傷を癒やした。そして剣をソウルへと変えてその身に取り込み、歩き続ける。

『……………』

彼らは倒れたまま、言葉もなかった。完全に心が折れていたからだ。

もはや【ファミリア】としても、冒険者としてもやっていけないだ

ろう。それだけの心傷を、彼らは刻まれていた。

王には、何の関係もない事だ。どちらだろうと構わない。火の粉が降り注ぐなら、それが終末であろうとも払うまで。

王はそうして、ずっと生き続けてきたのだから。

「……ああ」

けれど。だから今、立ち止まろうとしている。

王は、「灰」は、アスカは。導きたる少年を前に、歩みが止まりそうになる。

「勝ったよ、アスカ」

「……ああ、見ていたよ。」

強くなったな。ベル」

「うん。でも、これからもっと強くなる。僕は、強くなりたい」

「そうか……そうか。ならばもう、私は必要ないかも知れんな」

「ううん。必要とか、そんなのいらない。僕はアスカと、皆と一緒に歩きたいから」

少年は、不死の手を取る。未だ燃えるそれを、当たり前のように。

「帰ろう、アスカ。皆の家に」

「——ああ……そうだな。帰ろう、ベル」

確と握られた手を握り返して、「灰」は歩む。

これは泡沫の夢なのかもしれない。求めるものすら忘れ去った不死の、都合の良い妄想なのかもしれない。

それでも、この手の暖かさは確かにある。「灰」にはそれだけで、

それだけで……

「……私はまた、間違えたのだろうか」

歩きながら、誰にも聞こえぬ言葉を呟く。

「きつと貴公には、笑われてしまうな。そうだろうか？」

なあ、フィリアノール——」

光を奪われた太陽の下。少年と幼女の繋がれた手は、決して離れる事はなかった。

その日は、歴史の大いなる転換点と記録されている。

『神時代』最後の動乱、『約束の時代』へと至るまでを繋いだ、一人の小人族バルウムが出現した日として。

その日を境に小人族バルウムは、「最後の薪の王」とも、「神の如き化身」とも、「ファイアナの再来」とも呼ばれ。

——あるいは、【焼尽者スコッチャー】と。人々に恐れられたという。

折れた刃の一振り

輪の都を飲み干した怪物、小人の狂王が振るった刃
半ばより折れ深淵に満ち、暗い刃はその実闇である
最も幼い小人の王は、なまあたかな闇を慕った

それは今も人の奥底に息衝いている

これを握り、そっと目を閉じれば、思い出すだろう
まぶたの裏に、暗く優しい海と、人の熱を

戦技は「人間性の刃」

滴る人間性を刃に変える

それは螺旋の大剣と共に生まれ
だが打ち捨てられた剣の似姿という

最初の火の剣

はじまりの火を宿した螺旋の大剣

火継ぎの終わり、闇の時代が

悪意によってもたらされた証

闇こそが、最も強く火を求め

火の無い闇など、灰と何が違うのだろうか

戦技は「最初の火」

刀身にはじまりの火を注ぎ一時に燃やす

強攻撃で眼前に突き立て、周囲に火を放つ

最古の火継ぎ、神を燃え殻と化した炎の猛りを

灰輪（灰右衛門）
どらえもん

名も無き不死のため、特別に鍛えられた魔剣

飾り気のない、霧がかつた灰色の刀身を持つ

盲目的な献身は、関わる者を腐らせる

魔剣とはそういった類の消耗品であるが

これは折れず、使い手を残して碎けない

それは鍛冶師の感傷、独善的な祈りだった

戦技は「砲撃」

踏み込みから炎、または闇の砲撃を放つ

「海を焼き払った」とまで称される一撃は

巨大な難敵に対する有効な手段となりえるだろう

詠唱連結

最初に魔術を修めたとされるエルフの王女

その魔法特性を模した魔術

詠唱を連結し、二つの魔術を一つとして使用する

魔術とは、魔法とは全く異なる学問体系である
理に優れた者であれば学ぶに易いが

実際に魔術を使える者は少ない

魔術に限らず、師を持たねば得られぬ力がある

最初の魔術師が最強の魔道士であったことは
後世においても幸運であったといえるだろう

飛翔

「万能者」アンドロメダの稀代の魔術

光の羽を足元に形作り、飛翔する

ありふれた羽根は自由への憧憬を多く宿す

空に焦がれた海の王女もまたそれを託し

自由気儘な男神の手を取ったのは、必然だった

黒い炎の舞

ロンドール黒教会を築き、また捨てた長女

黒い炎のエルフリーデの卓越した剣技

黒炎を纏い舞うように飛び、地に叩きつける

叩きつけは黒炎の爆発を伴い、前方を薙ぎ払う

腐れを選び、だが果たされなかったエルフリーデは

嘴の仮面を再び取り、黒教会に戻った

裏切り者である彼女の変心は定かではないが

この闇術には、守るべき故郷を焼き払い

終わりなき悲劇から救った火の無い灰への

甘い香りの、一握りの憐憫が込められている

勇気の鼓舞

架空の女神フィアナの存在しえない奇跡

自身と周囲を鼓舞し、強靱度を高める

また効果中は被ダメージも軽減される

架空の女神に奇跡などありようはずもない

故にこれは愛執にも似た敬虔な信徒の物語であり

勇気を問う彼の、全てを捧げた覚悟を示す

勇者の突撃

架空の女神フィアナの存在しえない奇跡

輝ける槍を召喚し、全力で突撃する

突撃中は強力な加護を纏い、決してひるまない

フィアナ信仰はとある小人族の騎士団に端を発する

それは小人族の最初で最後の英雄的物語であり

彼の騎士団に続く者は、まだ現れない

欠けた冠

火の時代の蚕食者、小人の狂王の冠

半分に欠け、後頭部を覆うのみの王冠

出来ない卑金の王冠は小人の王に与えられたものだ

神の枷であり、グウインのまやかしの象徴である

自らの卑小と弱さを知っていた狂王は

神々の嘲笑を誘うこれを最後まで被り

故に火の時代は、終わりを迎えた

狂王の長衣

火の時代の蚕食者、小人の狂王の長衣

神々に賜った純白の衣は見る影もなく

大きく破れ、みじめな様を晒す服
小人の王たちは最果ての都で待ち続けた
大王の末娘に縋りながら
全てがまやかしであると、知る由もなく

狂王の腕輪

火の時代の蚕食者、小人の狂王の腕輪
一対の腕輪だが、片側は失われて久しい
ソウルを振るい、解き放ち、従える
狂王の伝承は、ただそれのみが伝わっている

原作七卷分

移りゆく滕（かが）りし夜道花降れば

雨が降っている。

黒い夜空より落ちる雨。曇天は分厚く、暗く、月の光すら通さない。破壊された空中庭園。とある『儀式』が行われた祭壇に、少年はうずくま踞っていた。

泣いている。嗚咽を零し、精一杯に抱きしめ、己の無力を噛み締めながら。

少年の腕の中にいるのは、かそけ幽しのように微笑む狐人。ルナール胸に血染めの剣が突き刺さる少女は力なく、二度と動くことはない。

それが物語であつたのなら、幸福な結末を迎えたのかも知れない。少女と少年の運命は、変わったのかも知れない。

だが、狂った歯車は回り続けるだけだ。時は無情に前へ進み、振り返ることを許さない。

幼女は眺めている。失意に墜ちた少年を。最期に夢を見れた少女の終わりを。

見覚えのある、ありふれた、残酷な物語の結末だ。世界はこんなくだらない事で満ちており、幼女は呆れる程に、それを眺めてきた。

「ベル」

少年に呼びかける。返事はない。彼は今、絶望と世界の重みに押し潰されようとしている。

それでも良いのだろう。それが、少年の生き様の結果ならば。幼女に、灰に思うところは何もない。

ここで倒れて、二度と立ち上がらなくても。最期まで共にいると、既に誓っているのだから。

雨が降っている。天より落ちる、恵みにして悲哀。

雲はまだ、払われない。空中庭園の二人と一つを、雨は無情に叩き続けていた。

ガラガラと市中を馬車が行く。車列を組む豪華な車両は、所有者の財力を表している。

その先頭、所有者である「灰」。車中に腰掛ける少女は白け切った顔で、ずっと虚空を眺めていた。

「ああ、本当につれないなあ。けれどそんなところも可愛らしい！」

君は野に咲く葉薊はあざみのように美しく、けれど決して触れられない……

ああ、私の『美しい棘』アカンサス！ どうか心の雲を払い、太陽にも負けぬ可憐な笑顔を見せてくれないだろうか！」

「……………」

無言。無言である。「灰」は一切の対応、反応を拒絶していた。

当然だろう。何故ならば座席の反対でこちらに手を伸ばし、キラリと笑みを光らせているのは——先の戦争遊戯ウォーゲームの発端者、太陽神アポロンであるのだから。

「くうっ！ なんと冷たい仮面なのだろう！ その冷氣だけで身も心も凍りついてしまいそうだ！」

けれど、だからこそ、私は君の仮面を溶かしてしまいたい！ 私の愛によって君を包み、触れ合うことでしか得られない温もりを知ってほしい！

ああ——我が麗しき花『美しい棘』アカンサスよ！ どうか私の手を取ってくれ！ 一度だけ、本当に一度だけでいい！ 何なら先っちょだけでもいいから！」

「……………」

ビシィッ！ とポーズをキメるアポロンに、「灰」は視線すらくれてやらなかった。ただ身じろぎ、ひどく面倒そうに顔を動かし、アポロンの隣に固定する。

何とかしろ。そこに座るヒュアキントスに、「灰」は視線だけで訴えかける。しかし慥然として腕を組む青年は、不満を全面に表した顔で首を横に振るのみだった。

全く……どうしてこうなったのだから。次々とポーズを変えて訳の分からないセリフを囁ささやるアポロンを前に、「灰」は記憶を想起するこ

とで現実から逃避した。

都市を賑わせ、戦慄させた戦争遊戯は「ヘステイア・ファミリア」の勝利で終わった。しかしヘステイアは、アポロンに最大の罰則を科さなかった。ペナルティ

要因は色々とあるが、決定打だったのは「アポロン・ファミリア」構成員のあまりの怯え様だ。彼らは一様に「灰」を恐れ、半数近くは即座に「アポロン・ファミリア」を抜けて冒険者すら辞めてしまったのだ。

逃げるように都市を後にした彼らをヘステイアは哀れみ、アポロンへの信仰心のみで残った構成員達に涙した。あんな目にあつて尚も立ち上がろうとする彼らに、これ以上の責苦を与えられるだろうか。

流星は慈愛の女神だ、「灰」とはまるで観点が違う。元より戦争遊戯は神々の代理戦争であるため、主神であるヘステイアがお咎めなしとすれば「灰」に否はなかった。

けれど、それでなぜ、こんな事になっているのかと言えば……まあ、「灰」にも利益のある状況だからである。

忌々しいことにアポロンは神だ。ならば男神の囀る愛は、「奇跡」に転用できる可能性がある。

出来るかどうかは分からない。けれど可能性があるならば、試さずにはいられない。「灰」にとって自身の快不快は判断材料の外であり、故にアポロンを送るついでに愛を囁かれるというこの状況も……非常に、全く、嫌々であるが、許容できる範囲内であった。

それから数十分、「灰」はアポロンの好き好き大好き愛してる攻勢を耐えた。うっかり手を出しそうになったのも一度や二度ではない。しかしその度にヒュアキントスが殺気を放ち、目的を思い出す。「灰」は渋々やめる、という繰り返しだった。

「……ついたぞ。さっさと降りろ」

やがて馬車が止まると、「灰」は真っ先に飛び降りる。後ろで別離を嘆くアポロンの事など気にも掛けず、目的地の全容を見渡した。

土地を四角く区切る背の高い鉄柵から見えるのは、古めかしくも繊

細に整えられた庭。入り口の門からは石畳が並び、土地の中央には篝火が燃える円形の広場があり、邸宅へと続いている。

それは木造の館だった。一見すると年齢^{よわい}千年を超える巨大樹のようで、荘厳な精気を感じさせる古風建築^{アンティーク}。高く、無秩序に上へ積み上げたような外観だが、よく見れば驚くほど精巧に造られていることが分かるだろう。

九階建て、部屋総数一〇〇を超える館は、まさに豪邸と呼ぶに申し分ない。それが「ヘステイア・ファミリア」の新たな本拠^{ホーム}——『竈火^{かまど}の館』であつた。

「——ふおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!? こ、ここがボクたちの新しい本拠^{ホーム}かい!」

「そうだ。ここが我らの新たな本拠^{ホーム}——貴公の命名通り、『竈火^{かまど}の館』と名付いている」

後続の馬車から降りてきたヘステイアを筆頭に、ベル、ヴェルフ、命^{ミコト}は感嘆の息を漏らしている。その中でリルカだけはさきさつとアスカに近寄り、耳打ちした。

「……大丈夫なのですか? このような豪邸を借りてしまって……」

「借りたのではない。ここは元々私の所有物だ。私はオラリオの各所にこういった物件を有している。『ダイダロス通り』の小部屋のようなにな」

「成程、それでは資金源は……いえ、聞くまでもありませんでしたね」

「貴公に預けたのは半分だからな。それに、現金^{ヴァリス}以外にも資産はある」

そこで内緒話を打ち切ったアスカは、言い争いをしているアポロンとヘステイアを眺める。

「ああ、頼むヘステイア! 天界で愛を囁き合い、共に同じ子に心を射止められた仲じやないか! どうか私の『美しい棘^{アカンサス}』をこの手に委ねてくれないだろうか!」

「だくかくらっつ! 愛なんて囁き合っていないだろツ!! いい加減嘘をつくのをやめないか!

それに何度も言ったけど、ボクは絶対^{ぜえつた}にアスカ君の手を放すつもりなんてないからなっ! 約束したんだ、ボクは決して裏切ったりし

ない！」

「そんな殺生な!? ベルきゆんのみならず『美しい棘』^{アカンサス}まで独り占めするとは、どれだけ強欲なんだヘスティア! 大神も草葉の陰で泣いているぞー!」

「そんなこと知るかアツ! とにかく、君の要望には応えられない! 分かったらとつとと帰れ、帰るんだ!」

「そこをなんとか……!」

「……もういい、止める。時間の無駄だ」

堂々巡りする話にこめかみを蠢かせる「灰」は、本当に嫌そうな顔をしながら割って入る。そして「おお、私の『美しい棘』!」と両手を広げ口付けの体勢に入るアポロンをゴミクズを見るような眼で見上げ、決定的な言葉を口にする。

「貴公、アポロン。何故私がここまで同行させたか、理由を覚えているか」

「勿論だとも! 『どうかアポロン様の神話をお聞かせ願えないでしょうか……』と、『美しい棘』^{アカンサス}がいじらしくも可愛らしく私に縋りついて来たからではないか!」

「ああ、貴公の認識に興味はない。端的に言おう——時間だ、アポロン」

「灰」が心底どうでもよさそうに呟いた瞬間、アポロンの両肩を誰かが掴む。瞬間、硬直した太陽神がギギギと振り返ると——そこにはイイ笑顔の神と血管が浮き出るほど怒り笑う屈強な男がいた。

「やつはろー☆ アポロンちゃん☆ 初日から遅刻とはいい度胸だねえええ?」

「そうですね、神様よお……テメエの眷族はもうとつとつに仕事に入っただ、さっさと働けこのウスノロがあああああアツ!!!」

「ヒイヒイヒイヒイヒイッ!? た、助けてヒュアキントス!」

「ええ、はい。今日の支払いが滞りなく……はい、夕刻までには払いますので、はい。それでは、返済までの仔細を詰めさせて頂きたく……」

「ヒュアキントスウウウウウウウッ!?」

「……………私以外に構うアポロン様など知りません」

助けを求める主神を放置して債権者と交渉するヒュアキントスは、
「灰」ばかりにかまけるアポロンにそれはもう嫉妬していた。絶望
するアポロンは「私は絶対に諦めないぞおおおおおっ！ アイ
ルビーバークック!!」と叫びながら連行されていく。

すぐさま追いかけるヒュアキントスは、一度「灰」とベルに視線を
やって盛大に舌打ちし、去っていく。嵐を眺めるかのような一同の中
で、「灰」はふと思いついた。

『男の嫉妬ほど見苦しいものはない』……ふむ、ベルの祖父の言葉
だったか。どうだろう、ヘステイア。あれは嫉妬の部類に入るのか
？』

「えっ!? うーん、ボクにそれを聞かれても……た、たぶん入るんじや
ないかな……? ボク処女神だからそういう話はちよつと分かんない
けど……」

「そうか。ならば、それで良い」

そこで話を切ったアスカは、自分の家族を見渡した。

「それでは、中に入るとしよう。やるべき事は山積みだ」

「そうですね。まずは引越しの準備、それから改装の手配でしょう
か。先立つ物がない都合上、アスカ様が資金を出してくれるそうです
から、要望があるなら今の内ですよ」

「戦争遊戯には勝ったけど、ほとんど何も貰えなかったもんね……」

「姉御が相手の本拠ホームごと吹っ飛ばしちゃったんだ、言ってもしょうが
ねえ。それより姉御、俺は作業用の炉が欲しいんだが」

「構わん。それなりに蓄えはある。命ミコト、貴公も遠慮する必要はない
ぞ」

「で、でしたらお風呂を導入して頂きたい……!」

「ボクはね、パーティーと皆でお祝いしたいな〜!」

「貴公は駄目だ。ヘステイア」

「なんで!」

「金遣いが信用ならない」

「うっ!」

「神様?」

「二へステイア様?」

「な、なんでもないよ! なんでも! さ、さあ、入るぞお君たち! まずは新居の探検だー!」

誤魔化すように館へ走るへステイアに、皆、何か隠してるなど察しつつ後続く。最後に門を潜ったアスカは、庭の木陰に呟いた。

「今日からここに住む。管理を怠るなよ」

木陰に佇む人物は、「灰」の言葉にゆっくりと頭を下げるのだった。

都合三十を超える怪物達の、狂乱の悲鳴が連鎖する。

薄暗い岩窟の通路で、振るわれる大曲剣。柄に包帯を巻いただけの巨大でありながら軽量の武器、《カーサスの大曲刀》が空を裂く。

ヘルハウンド黒犬は跳び下がりながら吐く火炎ごと両断される。アルミラージュ一角兎は数体まとめて首を断ち切られる。

歩数八、回転七、経過時間一秒弱。それだけで瞬く間に『怪物進呈』パス・パレードを葬った「灰」は、固まる冒険者達に眼を向けた。

揺れる灰髪の間で仄暗く輝く、凍てついた太陽のような瞳。それが次の獲物はお前だと言わんばかりに凝視する恐怖に、冒険者達は瞬時に叫ぶ。

『す、すいませんでしたああああああつ!』

蜘蛛の子を散らすように逃げ出す冒険者達。彼らがもつれ合って岩窟の奥に消えていくのを眺めていたアスカは、ややあつてポツリと零した。

「分かった。許す」

「アスカ様、もういません」

生真面目に返答するアスカに呆れ顔で突っ込むリルカ。いそいそと怪物の死体へ近づく少女は、魔石を回収しつつアスカに尋ねた。「それで、リリ達を放っぽってどこに行ってたんですか? 流石にサポーター業まで投げ出されたらたまったもんじゃないんですけど」

「冒険者依頼の品を集めていた。もはや貴公らに、私の助けは必要な

いだろうからな」

幼女はリリルカに持つていた袋を手渡す。一同が覗いてみると、そこには彼らが集めた倍以上の戦利品が詰まっている。

『おー』と感嘆の声が上がる中、リリルカだけはこれ見よがしに溜息を吐いた。

「だとしても、まずはそうすると報告してください。せめて事前に一言入れてくれないとリリ達も困ってしまいます」

「考えておこう」

「ちゃんと確約してください！ アスカ様がそういう時は大体はぐらかして結局やらないパターンですっ！」

「努力する」

「……はあく……ベル様、お願いします」

「ええと……アスカ、一人で何かしたい時はちゃんと一言おうね？」

「分かった。報告の義務を請け負おう」

ベルが相手だと素直に頷くアスカにやれやれとリリルカは首を振り、ヴェルフと命は苦笑する。そのまま周囲を警戒する一行は、魔石ドロップアイテムと怪物の宝を回収した後、地上に帰還するのだった。

木漏れ日の差す『竈火の館』かまどを作業衣姿の職人達が歩き回っている。

それぞれが連携し、淀みない動きで館の改修作業を進めるのは【ゴブニュ・ファミア】だ。鍛冶と建築を司るゴブニュは依頼があればこういった作業も引き受ける。率いられる眷族も双方に精通した職人であった。

「それにしても、すげえ館だな……」

「ああ、本当に生きている大樹みたいだ。屋根に生い茂ってる枝葉も本物だし、こうして触れるだけでも命の脈動が伝わってくるみたいだ……」

「誰の作品だ？ これほどの芸当、あの『奇人ダイダロス』でもなければ無理じゃないか？」

「さあな。俺としちゃ、これだけの建築物がなぜ話題にも上がらな

かったのか、不思議でならないよ」

口を動かしながらも作業を止めない眷族達を、ゴブニユは険しい顔で見守っている。それは不機嫌を示すのではなく、どんな仕事にも手を抜かない職人らしい気質の表れであった。

「神ゴブニユ。折り入って頼みがある」

「……『不死の酒』か」

ゴブニユは腕を組んだまま視線を下げる。そこには暗い銀色の瞳を湛える小人族、^{バルウム}「灰」が佇んでいた。

「以前、テイオナの得物、《大双刃》を見た。あれは貴公の「ファミリア」の作品らしいな」

「ああ」

「私はアレを欲している。については、貴公に作製を依頼したい」

「使えるのか？」

老巧の匠神は端的に問う。それは『扱えもしない武器をくれてやるつもりはない』という鍛冶師としての誇りが垣間見える質問だった。

「灰」はそれに、《大双刃》と同質量の金属塊をソウルより具現化することで回答する。片手で握り、振り回し、完全に制御する。

ドンツ！ と地面に金属塊を突き立てる「灰」に、ゴブニユはただ頷いた。そして条件を口にする。

「価格は一億二〇〇〇万ヴァリス、所要日数は七日だ。ただ、材料である深層の超硬金属が不足している。価格から差し引く形で冒険者依頼を発注したい」

「心得た。私が採掘に向かおう」

ゴブニユの言葉にコクリと頷いて、「灰」は歩き出す。その小さな背中を暫し眺め、ゴブニユは重く目を閉じると職人達を見守る立ち位置に戻るのだった。

「あークソ、ついてねえな……絶対売れると思っただが……」

モルド・ラトロローは『リヴィラの街』で悪態をついていた。

常日頃から大賭博場で散財するモルドはいつも通り金欠に陥り、一

発稼ぐために大量の怪物の宝ドロツプアイテムをリヴィラに持ち込んでいた。

だがすべて買い叩かれ、相場を大きく下回る額しか得られなかった。

間が悪かった、が全てだろう。モルドの計算では高く売れるはずだった怪物の宝ドロツプアイテムは、だが他の冒険者達に先を越され、既に値崩れを起こしていたのだ。

「ケッー」とモルドは小石を蹴飛ばす。今日は組んでいる二人もおらず、一人でできることは高が知れていた。これ以上『リヴィラの街』にいたところで、どうしようもないだろう。

「あ……どつかに良い儲け話が転がってねえかなあ……できりやあ楽でたんまり金が入るヤツがいいんだが……」

「ほう、奇遇だな。私も丁度、冒険者の流儀とやらを教えてくれる冒険者を探している。

ついては貴公、私に雇われるつもりはないか？」

「ああ？ 誰だか知らねえが、『リヴィラ』に居やがる癖にモグリか？ 別に教えてやってもいいが、俺は高え、ぞ……——ツツツ!？」

背後から擦り鳴らされる、古鐘の声。虫の居所が悪かったモルドは、盛大に吹っ掛けるつもりで振り返る。

冒険者として舐められまいと、凶悪な人相を浮かべるモルドは——振り返った瞬間、真っ青になるほど血の気が引いた。

「すっ、すっ——【焼尽者】スコッチャーああああああああああああああつ!？」

モルドの絶叫と周囲の冒険者達が一目散に逃げ出すのは、同時であつた。

この日ほど、モルドは自分の不運を呪った事はない。

「成程、冒険者の流儀に則った交渉とは肉体言語か。とかく、相手を叩き潰せばいいのだな？」

「違えよ!?! ただ殴り合うんじゃないで手心つつーか、超えちゃいけねえラインがあんだよ！ おいやめろ、そのバカでけえハンマーを振り上げんな!?!」

「ふむ、リヴィラに在るのならば、それはみな冒険者。食い物にされるだけの弱者はなく、故に私が最も弱かろうと、牙は見せねばならんわけだ」

「弱いつて何言つてんだアンタ……つておい!? その武器をジャラジャラ鳴らすのやめろ!? 周りを威嚇するんじゃないやねえ! ちよつとぶつかったぐれーでガン飛ばすな!? 相手命乞いしてんじゃないやねーか!」

「リヴィラはダンジョン、運搬の関係上、商いで足元を見られるのは当然か。仕方あるまい、正規の手段で支払おう」

「お、おう……そこはちゃんと分かるんだな。良かったぜ、アンタマジで常識ねえのかと……なんでそんな大量のヴアリス金貨持ち歩いてんだよ!? 店主が金で埋もれちまったじゃねーか! アンタやつぱり足元見られてキレてんだろ!」

「樽、木箱、それにあからさまな宝箱。ここは探索のし甲斐があるな。未知を前に今も猶、踊る心を持ち合わせるとは、不死の性は変えられんという訳か」

「何言つてんのか分かんねーけど所構わず体当たりすんのやめろ!」

「なんだつてアンタはそんな奇行にばっか走るんだ! 見ろよ、涙目で文句も言えねーアイツらをよ! もうちよつと自分の厄介さを噛み締めやがれ!」

「幼女を相手に怒鳴り続けるモルドは、全てを放つて逃げ出したくて堪らなかつた。」

「モルドの先を進む小人族、バルウム。それは現在の迷宮都市オラリオにおいて最大最悪の爆弾である。」

「時代に語り継がれるであろうあの光景——惨憺たる戦争遊戯ウォーゲームを目撃した迷宮都市オラリオの人々は、イザイルス “灰” と呼ばれる存在に恐怖していた。」

「当然だろう。あの闇派閥をも彷彿とさせる大凶行、ともすればそれ以上の蹂躪、虐殺に近い所業を敢行した灰髪バルウムの小人族は、今や触れてはならぬ厄災と認識されている。」

「特に冒険者は、その力に畏怖していた。レベル L.V. 差を物ともせず、死してなお蘇り、全てを焼き尽くす “暴力”。その化身たる “灰” は、冒

険者達の「力」に対するある種の畏れを呼び起こし、同時に決して近寄ってはならないヤベー奴だと思われているのだ。

モルドは不運だ。それは間違いない。何故ならその厄災そのものである「灰」に声を掛けられ、あろう事か依頼までされたのだから。勿論逃げた。全力で逃げた。何なら無様に泣き喚いて命乞いまでした。けれど何処までも追跡する「灰」を撒く事はできず、モルドは泣く泣く依頼を引き受けるしかなかった。

「畜生……なんだって俺様がこんなこと……」

「モルド・ラトロロー。次は酒場に寄りたいのだが、何処にある？」

「ああ、それならその角を曲がった先に——ってオイオイ!? 何担いでやがる!?! カチコミに行くんじゃないぞ?! 酒場を潰す気がテメエは!?!」

「? 酒と喧嘩は冒険者の華、なのであろう?」

「喧嘩な! ケン・カ!! 殺し合いじゃねえんだよ!」

こてん、とその恐ろしさに見合わぬ可愛らしさで首を傾げる「灰」に、モルドは怒鳴り、ゼーゼーと息を切らす。

もう嫌だ。何もかも投げ出したい。これで依頼料が少なかったらとつくに逃げ出してる所だ。逃げられるわけがないのであるが。

「モルド・ラトロロー」

「ああもう、今度は何だよ!?!」

「貴公、思ったよりも良く働くな。報酬を二倍にしてやろう」

「よし分かった! 何でも聞きな、【焼尽者】の姐さん!」

事も無げに「灰」が言うと、モルドは途端に元気になる。

……現金なのは、何処の冒険者も同じだ。例に漏れず、金に目が眩んだモルドは、嬉々として地獄に足を突っ込むのだった。

そんなやり取りが、一週間前にあった。

モルドに数千万ヴァリスの報酬を支払った「灰」は、毎日のように

『リヴィラの街』^{アダムンタイト}に出入りしていた。

目的は特にない。『深層』の超硬金属^{アダムンタイト}を採掘するついでに立ち寄っ

ているだけだ。

モルドから教わった冒険者の流儀。それを実践し、物になれば良い。思惑と呼べるのはそれくらいだった。

これにたまったものではないのが『リヴィラの街』の冒険者だ。〃
灰〃の薄い思惑とは裏腹に、十八階層は上へ下への大恐慌に陥っている。

——曰く、「最後の薪の王」。

「神の如き化身」「燃え盛る憎華ぞうか」「ファイアナの再来」——「焼き尽くす者」。

神々が囁し立てる、〃灰〃への様々な呼び名。それに加え、太陽すらも燃え尽きたあの光景を目撃した冒険者達には、一つの渾名が浸透するに至った。

【スコッチャー焼尽者】。全てを焼き尽くし、世界を灰の地平に変える、圧倒的暴力に捧げられし二つ名。

その名は畏怖の象徴である。その名に決して近寄ってはならない。その血肉、骨までも、灰にされたくないのなら。

冒険者がその思いを共有し、触らぬ神に祟りなしと避けているにも関わらず——【当の本人焼尽者】はそれを無視して、突然現れては騒動を引き起こす当たり屋と化していた。

——一週間前の初日。

「ああ？　またてめえかモルド、何度来ようが相場以上はビタ一文——げえっ!?」【スコッチャー焼尽者】!?!」

「おいモルド、この前貸した金、そろそろ返さねえと痛い目に——」【スコッチャー焼尽者】あああああああっ!?!」

「今日は店仕舞いだ、さっさと帰——ぎゃああああ【スコッチャー焼尽者】ああああっ!?!」

モルド・ラトロローに案内される〃灰〃は、それだけで『リヴィラ』を震撼させた。

その陰で、モルドはちやつかり自分の良いように立ち回っていた。

二日目。

「す、【スコッチャー焼尽者】!?!　じよ、『上層』のドロップアイテムを覚えだあ!?!」

そんな端金にもならねえモン買えとかふぎけツ、いやすいません何でもありません言い値で買いますので早く立ち去ってぐべえっ!」

「けっ! 小人族風情がノロノロ歩いてんじゃねえよって【焼尽者】スコッチャーあああっ!?! いや違うんです今のは調子に乗ってスイマセンツシタアツお願いだから助けひぎやあああああああっ!?!」

「ひいつ!?! 【焼尽者】!?! きよ、今日は店仕舞いなんでさあ、来てもらって悪いんですが他を当たってくださいえ、へ、へへへっ……って、なんでそんなバカでけえ武器振りかぶっておいよせやめグワーツ!!!」

モルドから教わった冒険者の流儀をやや過激にしたらどうなるだろうと、灰は各所で暴れ回った。

『リヴィラ』のそこかしこで悲鳴が上がり、灰の出没情報が高く売れたという。

三日目。

「ク、クソツ……なんだって俺様がこんな真似……畜生、縮こまってても始まらねえ! や、やるぞ、やってやる!」

「おいおい、どうしてくれんだ【焼尽者】!?! アンタのせいで『リヴィラ』の人流はメチャクチャだっ!?! いくら腕っ節があってもなあ、こんな真似されちや商売上がったりなんだよ!」

「ひいつ!?! ぼ、暴力はやめろ暴力は!?! こっちがわざわざ頭下げて交渉に来てやってんだぞ!?! 少しは慈悲って奴をだなあ! ……え? 分かった? リヴィラ流に従おう?」

「お……おお! やーっと分かってくれたか! なんだよ、案外物分かりがいいじゃねえか【焼尽者】! じゃあ早速今までの損害を賠償……お、おい、今領いただろ!?! なんで鐘鳴らしてやがんだ、それ魔法の触媒だろっ!?! 一体何をするつもり——」

大頭として『リヴィラ』を纏めるボールス・エルダーは、被害に遭った冒険者達から突き上げを食らって、泣く泣く灰と交渉。失敗し、星となった。

三三四代目『リヴィラ』は吹っ飛び、短い歴史を終える。ボールスの交渉が成功するか失敗するか賭けていた冒険者達は一騒ぎした後、『リヴィラ』跡地に戻ることはなかった。

四日目。

「お、おい……本当にやんのか？」

「いやアンタの、いやいや姐さんの言葉を疑うわけじゃねえけどよ!?
こんな馬鹿げた方法で『リヴィラ』を再建するなんて聞いたことねえ!」

「今からでも遅くはねえ、俺様も協力してやるから、冒険者どもに頭下げようぜ!? このままじゃ、ギルドにだって目えつけられて——」

「……………う、嘘だろ……こんな事、マジでありえるのか!? し、信じらんねえ……」

「ボールスと何やら言い合っていた『灰』は、『リヴィラ』跡地にて”ソウルの業”を使用。」

ソウルの青白い光が溢れたと思えば、それが消えた頃には立派な城塞が出現していた。

『リヴィラ』の代わりをどうするか話し合っていた冒険者達も、これには啞然としたという。

五日目。

「ホラホラどうした!? 先着順だぜ!? 『リヴィラ』は生まれ変わった! 見ろよこの立派な城構えを! こいつは【焼尽者】^{スコーチヤー}の姐さんが用意した城だ! 俺たち冒険者への詫びでもある!」

「疑うヤツはまず足を踏み入れな! 今までのクズみてーな『リヴィラ』とは訳が違うって分かるだろうぜ! こいつはスゲー城だ!

【焼尽者】^{スコーチヤー}の『特別』だ! なんせ、どれだけ暴れ回ろうが壊れねーんだからな!」

「いいかテメーら!? この新しい『リヴィラ』の自治権は俺様、ボールスが承った! しかも【焼尽者】^{スコーチヤー}の姐さんは太え蜜月^{パイプ}を約束してくれた! これはチャンスだぜ!? こいつを見逃すなら冒険者じゃねえ!」

「さあ、入った入った! 一等地を手に入れるのはどいつだ!? 遅れるほど損をするのは当たり前だ! 一番手を引き受ける『勇氣』あるやつだけが、栄光を手に入れるってもんだぜ!」

新生した三三五代目『リヴィラ』の前で声を張り上げるのはボール

スだった。集まって来た冒険者達の前で熱弁を振るうポールスは、『下層』から戻ってきた「灰」を指差す。

『下層』への道、大樹の根元から這い上がってきた「灰」と、無数のモンスター^{バス・バレット}の集団。怪物を引き連れた「灰」はそのまま『リヴィラ』へ『怪物進呈』^{バス・バレット}を行い——城塞と化した『リヴィラ』は、無傷で乗り切ったのだった。

六日目。

「おい、聞いたか？ 『リヴィラ』の噂」

「ああ、『烧尽者』^{スコッチャー}の野郎が吹っ飛ばして、城を建てちまったって噂だろ？ そんな馬鹿げた話、信じてんのか」

「いや、俺も嘘だろうと思つて『リヴィラ』に行つたんだが……マジだった」

「は？」

「マジだったんだよ！ 『リヴィラ』はすげー城塞になつてるし、中身は金と冒険者で溢れ返つてやがる！ あそこは今、ダンジョンで一番熱い場所だぜ!? ホラ、俺もこんだけ稼いで——」

「おいおいマジかよ……俺も行つてみつかない……」

「灰」が再建した『リヴィラ』の噂は瞬く間に冒険者の間で広まつた。それに釣られて『リヴィラ』にやつて来た冒険者が見たのは、かつてないほどの熱狂に包まれる『リヴィラ』の姿。

『深層』に潜る「灰」がもたらす怪物の宝、^{ドロップアイテム}魔石、そして金^{ヴァリス}。それは『リヴィラ』に空前絶後の好景気を呼び寄せていた。

——そして、一週間後には。

「ウツス！ 『烧尽者』^{スコッチャー}の姐さん！ 『リヴィラ』によろこそ！」

「三三ウツス姐さん！ 今日もよろしくお願いします!!!」

「灰」は、三三五代目『リヴィラ』の『王』として、冒険者に頭を下げられる立場になっていた。

つまりは、適応である。

冒険者とは即ち、強く、生き汚い生き物。ダンジョンという過酷に

適応し、怪物と相対する彼らは、【スコッチャー焼尽者】と呼ばれる「灰」に見事適応して見せたのだ。

「灰」は強い。話は通じるが、気紛れである。金銭への興味は薄い。物欲が強く、蒐集癖がある。

『協力』するならそれなりに交渉できる。『敵対』ならば容赦はしない。三度目は、決して無い。

そういった表面上の情報を集め、分析し、また「灰」が暴れ回った事例から冒険者達が導き出したのは——「灰」とは、自分ルールで動く身勝手な冒険者」である事。

ならず者、社会の爪弾き、真つ当に生きられなかった存在。

大半がそうである冒険者と、「灰」は同類である。冒険者達はそう認めただのだ。

それからは早かった。幸いにもモルドから冒険者の流儀を教わっていた「灰」は、一週間という期間で冒険者の流儀に慣れていった。冒険者達も「灰」の散々な暴れようを見て、とても勝てない『格上』と認識した。

そういった諸々が噛み合わさった結果、「灰」の生態と冒険者達の対応は奇跡的に適合し、共生する関係となったのである。

「よお、【スコッチャー焼尽者】の姐さん！ 今日姐さんのために仕入れた品がたんまりあるぜえ！ さあさ、見てつてくんな！」

「見せて貰おう。……ふむ、ほとんどは贗作だが、それなりに使い道はありそうだな。よろしい、全て言い値で買おう」

「マジかよ!? いやー流石だぜ姐さん！ 俺にはとても真似できねえ！」

『リヴィラ』に「灰」が立ち寄れば、そこかしこから声がかかる。そのほとんどは「灰」の金銭目的だが、「灰」にとっても利益になるので問題はない。

「す、【スコッチャー焼尽者】の姐さん！ へっ、へへっ、悪いんだがよ、借りた金を返すの、もうちょっと待ってもらいてーんだわ」

「構わんが、貴公、二度目だな。三度目はない。心しておけ」

「へっ、へへへっ、分かっているさあ。んじゃ、そーいうことで」

「灰」は『リヴィラ』で金貸しの真似事もしていた。それはボールの助言によるものである。金銭で冒険者との利害を結べるのなら、それは容易い手段になると。

「おお、来たか【焼尽者】^{スコーチャー}！ 調子はどうでえ、今日もたんまり稼いで来たかあ!？」

「ああ。ボールス、換金を頼む」

「承ったぜ！ 金はいつも通り、『リヴィラ』の運営費に回していいんだな？」

「構わん。必要なら適宜使え」

「おうともよ！ 全くアンタは最高だぜ、【焼尽者】^{スコーチャー}！ アンタさえいてくれりゃ、この街も安泰つてもんよ！ ガハハハハハハハハッ！」

「灰」は『深層』の魔石とドロップアイテムをおおよそボールスに売り払っている。金にしか換えられない素材など、持っていてても邪魔だからだ。

必要な物資は溜め込んでいるので問題はない。ボールス以外にも伝手はあるが、それでも売り払う手段は、多いに越した事はない。

「さて、それでは、私は行く。暫くは夜間に限りダンジョンに潜ってやるが、その後は私の都合を優先させて貰おう。」

「構わないな？ ボールス・エルダー」

「おうよ！ 姐さんの貯めた財貨は十分だ！ これだけありや、向こう十年は街を運営できるだろうぜ！」

「そうか。ならば、一割は貴公の好きにしていどうぞ。随分と働いているようだからな」

「マジかよ!?! いやー、本当に姐さんは話が分かるお方だぜ！」

「その代わり、私の家族が訪れた時には、頼んだぞ。貴公の便宜次第では、首を挿げ替えても構わんからな」

「へ、へへ……怖えこと言うじやねえか……まあ安心しな！ このボールス様、肝心な時にへマはしねえぜ！」

「期待しておこう」

適当に脅しつけた後、「灰」は『リヴィラ』を発つ。道中擦れ違う冒険者達に頭を下げられ、適当に返事する幼女は、地上へと戻るの

だった。

「あゝ、今日も疲れたなあ……なんか日に日に仕事バイトがキツくなってる気がするよ……まさかとは思うけど、ヘファイストスの策略じゃないだろうね……」

夕刻。暮れる日の光が差し込むオラリオの雑踏を、トボトボとヘスティアは歩いていった。

うのようにと垂れ下がるツインテールを力なく動かす幼女神は、ふと人集りを見つめる。

「ん？ なんだろう、こんな時間に珍しいなー。何か催し物でもやってるのかな？」

興味が惹かれたヘスティアは、本拠ホームへ向かう足先を変更する。「ベル君達へのいいお土産話になるかもねー」なんて思いながら人集りを掻き分けると、そこには――

「ああ、そこお！ もっと、もっと力強く踏んで、『甘露アムリタの水盤』ちゃん！」

「睨んでください、見下してください、罵ってください！ ああ、愛しの『月の人魚ローレライ』！ もっと私めにご褒美を！」

「おーいお前らー、さっさと代われよー。『草食ムシユフシユみの蛇』はお前らだけのものじゃないぞー」

――見るに堪えない醜態を晒す男神達と。

「なっ、ななななななな――何やってるんだっ、アスカくんっ!?!」
男神を踏み、ひどく冷めた眼で見下ろす灰髪の少女がいた。

「む。ヘスティアか。仕事帰りか？」

「そうだよってそうじゃないよ!? ホント何やってるんだい君は!?!」

「ああ……突然現れて私の道を阻んだこの男神ゴミクスどもを踏み躪っているだけだ。貴公は気にせず、先に帰るがいい」

「気にしないわけないだろお!? ホラ、帰るよアスカ君！ こんな男神バカ達に構っちゃいけない！ 絶対付け上がるから！」

慌てて駆け寄ったヘスティアは男神の上で不動を保つアスカを

引つ張る。されるがままの幼女は、慟哭と抗議の声を上げる男神達に何ら関心を持つていなかった。

「そりゃないぜヘスティアー！俺まだ順番回ってないのにー！」

「独り占めなんてずるいぞ！俺達にも愛でる権利はある！」

「二「そーだそーだ！横暴だぞ、ヘスティアー！」」

「うるさーい！ボクの眷族に勝手な真似は許さないぞー！」

次々に手を伸ばす男神達を振り切って、ヘスティアは無理やりアスカを連れ出す。街路を走る女神と不死を見て、人々は避けるように道を開けた。

その瞳に浮かぶのは、恐れ、怯え、拒絶の色。何の力も持たないオリオの民にとって、『灰』は恐怖の象徴であった。

「――」
ああ、構わない。如何に生者に忌み嫌われようと、アスカには何の痛痒もない。

己を手を引く、温かさ。それがあ限り、アスカは微笑んでいられるのだから。

空は晴れやかに、雲がなく、燦々と太陽が輝いている。

目も当てられぬような眩しい朝焼け。都市の目覚めに呼応するかのように、大樹の如き『竈火の館』には精気が溢れ返っていた。

所詮は大樹を模した建築物でしかない筈だが、太陽に照らされるその威容からは精霊の宿った老木のような神秘的な生を感じさせる。その不可思議さは、あるいは一種の力であり、『竈火の館』はどこか世界から隔絶した空気を醸し出していた。

「――」
その空間の中央、石畳が並べられた円形の広場で、一人の幼女が太陽を見上げている。

両足を揃え、つま先立ちになり、天高く両手を広げた姿勢。いわゆるYの字、『太陽賛美』を行う幼女は――目も眩むほど輝かしく、物理的に光っていた。

【みなぎる体】。それはとある不死に愛を捧げたという太陽神の物語より芽生えた【奇跡】だ。

その効果は、一定時間におけるスタミナ消費の無効。太陽の如く輝く体は、尽きる事のない持久力で満たされている。

それは不死にとつて垂涎の、いや不死以外であつても望外の代物だろう。何故ならばこの世に無限など存在せず、全ての存在には必ず限界があるからだ。

無限に飛行する鳥はいない。竜すらも時に羽を休める。動き続けるといふ事はエネルギーの消費であり、終わらなき不死として体力の底がある。それは時間経過でしか回復せず、故に不死の隙であり、数多い弱点の一つだ。

それを帳消しどころか、一定時間『無限』にまで持ち上げるのが、【みなぎる体】。その身が太陽の光で輝く限り、どれほど限界を超えた動作を繰り返しても持久力は尽きず、不死は動き続ける。

それはおそらく、太陽の光に見合わぬ、悍ましい、死してなお蠢く虫のような姿だろう。【太陽賛美】を続け、効果時間を確認していた少女——アスカは、その小さな体から光が消失した時点でジェスチャーをやめる。

「素の効果時間は六〇秒といったところか。まあ、強化魔法は絶えず掛けるものであるし、他の【奇跡】との併用を考えれば、むしろ管理しやすい部類だな。

何より効果は破格である。あの忌々しい……意味の分からない囁きに見合うだけの力だ。決して、そう決して、好ましくはないが。

……さて、愚痴もここまでにしておこう。貴公ら、休息は十分か？
そろそろ鍛錬を再開するが、まさか動けないとは言えないな」

『……………』

振り返ったアスカに戻る言葉はない。石畳の上、篝火の回りには——息も絶え絶え、ボロボロの【ヘステイア・ファミリア】がぐったりと地に落ち、伏せている。

「……………なんだこれ、冗談じゃねえぞ……………おいベル、お前本当に毎日こんな事やってんのか……………」

「……一応、アスカに鍛えてもらってからは毎日……」

「マジかよ、ふざける……こんなん死んじまうぞ……」

「……実の所、「ロキ・ファミリア」の本拠ホームで行われた死闘アフレに比べればマシというか、大分優しいのですが……正直、キツイです……」

「これ以上があんのかよ……!?!」

「……なんでリリまで、こんなこと……」

ゼーゼー言いながら声を投げ合っているのはベル、リリルカ、ヴェルフ、命ミコトの四人だ。

ベルが日課の鍛錬をするからと、物の試しに付き合ってみるかと思案したのはヴェルフ。賛同したのは命ミコト、無理やり付き合わされているのがリリルカなのだが……戦闘が本職でないヴェルフとリリルカは早速後悔し始めている。

何せ、鍛錬が始まってからまだ一〇分。最長一時間はかかるというその、まだ六分の一しか終わっていない。

それをアスカが告げると、ヴェルフはげんなりと項垂れた。リリルカに至っては正確な体内時計があるため既に悟り顔である。

そんな状況で、アスカが強引に鍛錬を再開する。なんとか立ち上がる一同は——「みなぎる体」によって持久力の概念を捨てた不死の猛威に晒された。

「ベル。貴公の精神は常に未熟だ。先行し続ける肉体うづわの速度に、貴公の認識は追いついていない。

常に前を向け、鍛え続ける。生涯未完であるならば、それは際限なき成長となる」

ベルの二刀を掻い潜り、アスカはがら空きの胴を蹴り飛ばす。吹き飛ばす少年の横を走って斬りかかるヴェルフの大刀は、翳される盾によって防がれる。

「ヴェルフ。貴公は真っ直ぐに過ぎる。意志は強固だが、また頑迷だ。無意識に絡め手を忌避している。構わんが、対処法は知っておけ。

能力に関しては、『筋力』は良い。鍛冶師なのだから当然だな。故に『技量』を磨け。その鍛錬は、鍛冶にも繋がる、貴公の目指す『至高』への道だ」

そのまま大刀を受け流して、直剣の腹でヴェルフに一撃を叩き込む。ベルに次いで吹き飛んだ青年を眺める幼女は、背後から強襲する命の刀を弾いた。

「命。貴公に私は何も教えられない。」

既に基礎を鍛えている貴公に、これ以上の指針は無用だ。徒に私から学び取る必要はない、己の根幹を大事にしろ。

だが、『技』は盗んでいけ。これは私のものではなく、かつて私が対峙した強者達の模倣。模倣の模倣など笑い話だが、貴公ならばいずれ、本物をすら凌駕できるやも知れん」

刀を凌ぎ、宙を飛び、直剣の柄で命を吹き飛ばす。加減はしている、十分に。だが傷を負わせる事に躊躇はない。

肉体も、精神も、傷つかねば強くない。それは不死としての持論ではなく、生物ならば当然の摂理。過酷であるからこそ、より大きく、より強く、生命は変化していくのだ。

それを身に染みて理解しているのは——佇むアスカにアイテムで奇襲する、リリルカ・アーデくらいだろう。

「リリルカ。貴公は私に学べ。」

卑小、弱さ。いずれも私より下の者などいない。貴公もまた例外ではなく、私より優れた知性がある。

ならばそれを活用しろ。もつと悪辣に嵌めてやれ。心配はない、やり方は、私が教えてやる」

投擲されるアイテムの数々を避け、一つだけ蹴り返す。『油壺』が頭に当たり、油まみれになったリリルカは「やっぱり戦闘はリリの専門外です……」と露骨にやる気が下がっていた。

それからベル達はみっちり一時間、アスカに扱きに扱かれた。心身ともに疲れ果てた四人は、朝っぱらだと言うのによろよると館へ帰っていく。

それをどこか微笑ましそうに見送ったアスカは——「灰」の眼となって、本拠の外周に並ぶ鉄柵を見る。すると、こちらを窺う複数の視線が慌てるように掻き消えた。

その視線が消えるのも束の間だけだ。しばらくすれば、やがて視線

は増えていき、じつと「灰」を見つめてくる。

鬱陶しい。それが「灰」の率直な感想であつた。用件があるなら正面から堂々と来れば良いのに、まるで「灰」から出向くのを待っているような状況。

そういつた受けの姿勢を「灰」は好まない。初見の敵にそれをされると千日手となるし、大抵の場合不利な状況に追い込まれる。

つまりは、「灰」の戦法と同じだ。だから好まないし、面倒である。受け身の姿勢は後ろ手に、猛毒のナイフを握っているものだろう。

「おいおい、アスカ君！ なんだいあのボロボロのベル君達は！ ひよつとして君、また無茶苦茶な訓練をしてないだろうね！」

「——ヘステイアか」

館から飛び出してきた主神の登場により、「灰」はアスカとなつてまわりつづく視線を一旦隅に置く。

「通常通りの朝の鍛錬だ。ベルに頼まれてからは毎日行っている」「やり過ぎじゃないのかい!？」

「そうでもない。命の危険もなく、加減した私と戦うだけだ。所詮は、たかが鍛錬でしかないからな。」

それでも成長を望むなら、あれくらいでなければ意味が無い」「むむむ……アスカ君がそう言うなら、信じるけど……」

「ああ、信じてくれ。それよりヘステイア。そろそろ、時間だ」「あつ！ そうだった！」

「私はここで待つ。——楽しみだな、ヘステイア」「——うん！ そうだね、アスカ君！」

満面の笑みを咲かせるヘステイアに、アスカもフツと微笑む。笑顔を交わし、女神と別れたアスカは——「灰」の眼で、これからの未来を見定める事にした。

「ヘステイア・ファミリア」本拠^{ホーム}『竈火^{かまど}の館』には、少なくとも数の冒険者が集まっていた。

その多くは、小人族^{バルウム}である。アマゾネス、ドワーフ、エルフ、獣人

などの亜^{デミ・ヒューマン}人も見受けられるが、小人族^{バルウム}、そして人間^{ヒューマン}が大半を占めているのは間違いなかった。

その視線が向かうのは、手を取り合って喜ぶ団長^{ベル}と主神^{ヘステイア}の側に佇む、灰髪の幼女である。

「予想はしていましたが、やっぱり多いですね、小人族^{バルウム}」

「ええ、多いです。やはり、アスカ殿の影響なのでしょうか」

「それ以外に理由があるか？ 姉御自身は何も感じ入っちゃいねえみたいだけだな」

窓から身を乗り出して見物するリルカ、ヴェルフ、命^{ミコト}はアスカを横目に会話する。眼を閉じ、灰色の静謐を保つ幼女は、「ファミリア」の規模が大きくなる負の側面をベルに諭すヴェルフの言や、恣意的に団員を選別しようとするヘステイアに呆れるリルカの声を聞いていた。

そして、会話が一段落した頃。ヘステイアが入団式の刻限を告げようとした、その時。

「さて。入団式の前に、貴公らに明かすべき事がある」

入り口に整列する「ヘステイア・ファミリア」から一歩前に出て、不死の幼女が声を上げた。

「あ、アスカ君？」とヘステイアが困惑するも、幼女はそれを片手で制する。

入団希望者を見つめる、凍てついた太陽のような銀の半眼。その眼光に思わず竦む冒険者達に眼を細め、アスカは——何て事のないように、恐るべき事実を口にした。

「我が主神、ヘステイアには、二億ヴァリスの借金がある」

「ヴェツ!」

「……………え？」

「二はあつ!」

その発言に、ヘステイアは女神らしからぬ声を上げ。

ベルは、長い空白の後にかろうじて呆けた声を絞り出し。

他の三人は一樣に、目を皿のようにして驚愕した。

それに構わず、灰色の幼女は、眼を逸らさずに言葉を続ける。

「途方もない借金だ。今のままでは、返済に百年以上かかる程の。それでも良いと、覚悟があるなら、『ファミリア』の門戸を叩くが良い」
軽い言葉だった。だがその銀の瞳は、ひたすらに重い意志を宿していた。

たかが「ファミリア」、たかが組織。そんな生易しい考えでは、敷居を跨がせない。

「ヘスティア・ファミリア」に入るのなら、骨の髄まで家族になってもらう。そういった覚悟を問う瞳だった。

瞬間、中庭に集まっていた冒険者達は脱兎の如く消えていく。最後まで名残惜しそうに幾人かの小人族バルウムが残っていたが、やがて現実と折り合いをつけたのか、肩を落として去っていく。

新たな門出の賑わいから一転して、閑古鳥が鳴く『竈火の館』かまど。その光景に満足してか、「うむ」と頷くアスカは。

「どうやら入団希望者はいないようだ。残念だが、これまで通り、小さなファミリア零細家族でやっていこう」

「……………なっ、なあっ——なにやってんだっ、アスカくうううんっ!？」

再起動したヘスティアの絶叫に、甘んじて身を晒すのだった。

「で、どういうことなんですか。説明してください」

仁王立ちするリルルカの、据わった目が正面を睨む。

頬杖をつく命ミコト、ヴェルフ、後ろのソファで魔されるベル。

その正面、暖炉の前で正座するのは、ヘスティアとアスカの二人だった。

「まずはヘスティア様です。二億ヴァリスの借金って何なんですか」

「いやあ……………それは……………かくかくしかじか……………」

眷族による針の筵に観念したヘスティアは事情を省略せつめい。『ヘスティ

ア・ナイフ』について説明されたリルルカは「やっぱり」とため息をつき、「実際、二億はヤバいだろ」とヴェルフが呻き、命ミコトが追従する。

眷族の反応にちくちくと刺されるヘスティア。その横でどこ吹く

風と正座するアスカを、リリルカはジロリと睨めつけた。

「次にアスカ様です。どうしてあのタイミングで借金を明らかにしたんですか?」

「それが最善と判断したからだ」

一切悪びれない少女は、自身の思惑を滔々と語る。

「戦争遊戯ウォーゲームの勝利、新たな本拠ホーム、新規団員。いずれも貴公らの心を躍らせるものであり、水を差すべきではないと感じた。

だが、ヘステイアの借金に当たっては、必ず明かさねばならない事項だ。これを放置する事は、貴公らに対しても、入団希望者に対しても不義理となる。

ならばタイミングは、入団式の直前しかあるまい。僅かでも長く、温かな喜びを。そして冷たい現実を。その天秤にかけた結果、あの時機タイミングだったというだけだ」

「……………まあ、一応考えてはいるんですね。受け入れられるかどうかは別の話ですが」

「せめてリリ達には事前に説明して欲しかったです……」とリリルカは肩を落とす。ヴェルフと命ミコトも、納得のラインを跨いでいる状態だった。

そんな時、ベルが起きて、真っ直ぐな瞳でヘステイアと向き合う。手伝わせてくださいと、一緒に返していきたくないと、女神の手を取って少年は純真に笑った。

ベルが言うなら、仕方ない。空気がそのように弛緩する。これからどうするか話し合う一同の中で、リリルカだけは微妙に気まずそうな顔をしていた。

ちらり、ちらりとアスカを見て、何かを口にしようとしている。それに気付いているアスカは、けれど反応する前に為すべき事を実行した。

「さて、貴公ら。話し合いは一時中断だ」

『え?』

「来客だ。私が応対する」

そう言つて少女が立ち上がるのと同時に、カランカランと来客を告

げる鐘が鳴る。とてとてと玄関へ向かったアスカは、扉を開けて——その銀の瞳を、少しばかり細くするのだった。

「えーつと、それで……君達は入団希望者、って事でいいのかい？」

「そうだ」

「そうね」

ぎこちない笑みを浮かべるヘスティアに、つつけんどんな声が返る。

場所は先と同じ、『竈火の館』の応接間である暖炉の一室。ヘスティアが座り、眷族一同が後ろに控える対面には、二人の人物が座っていた。

琥珀色の髪、瑠璃色の瞳。詭えたようにそっくりな二人の容貌は、それが男女という点で分かたれている。

剣呑な空気を纏おうと、背伸びにしか見えない小さな体。武器も、装備も、体格に合わせ、相応に小さい物となっている。

彼らは今や落ちぶれ、蔑まれる一族。冒険者で大成した者はほとんどなく、名が轟くのも頂点の一人と四兄弟のみ。

そんな、はつきりとヘスティアとその眷族を品定めする二人は——「茶だ。菓子も持ってきた。良ければ口にするといい。ポット・パツク。ポツク・パツク」

「!? あ、アンタ直々にかよ!? いや、ですか!？」

「そうだが、何か不満でもあるか？」

「な、ないわ! いいえないです! い、いただきます!」

盆を持ったアスカが現れた瞬間、誰が見ても分かるくらいはつきりと態度を変えた。

「あー、これは……アレですねえ」

「ああ、アレだな」

「私にも分かるくらい、アレです」

「うーん、そうだねー。明らかにアスカ君目当てだねー」

「あ、あはは……と、ところでアスカ。その二人と知り合い？」

苦笑するベルが尋ねると、アスカにもてなされる小人族バルウムの二人、ポットとポックはギンツ！ とベルを睨みつける。

「なんだその口の利き方はええ兎風情が全身の毛え糞つてやろうかオラアアアアン!？」と今にも口にしそうな姉弟にビクツ!? とベルが身を強張らせると、アスカが嘆息してそれを止める。

「貴公ら。私の家族を怖がらせるのは止めたまえ」

「あつ……す、すいません」

「ご、ごめんなさい……」

幼女の一言でシユンと火が消えたように小さくなる二人。それを見ていたヘスティアは苦笑を浮かべつつ、神として場を仕切り直した。

「さて！ それじゃあ面接を始めようか！ えーつと、ポット君にポック君でいいんだよね？ まずは自己紹介をして貰ってもいいかな？」

「それじゃあ、私から。元【ヘルメス・ファミリア】所属、ポット・パックと言います。Lv.2の第三級冒険者、得物はハンマー、魔法・スキルは特に無いので前衛です」

「……同じく、元【ヘルメス・ファミリア】所属、ポック・パック。姉貴と同じLv.2で前衛、魔法もスキルもねえよ。文句あつか？」

「い、いやいや、文句なんてないよ！ それにしても、ヘルメスの【ファミリア】にいたんだね。元つてことはもう抜けていて、『改宗』コンバージョンつてことでいいのかな？」

ヘスティアが尋ねると姉弟は無言で頷く。どこか刺々しいその態度にたじたじになりながらも、ヘスティアは面接を続行した。

「えーつとそれで……次は動機を聞かせてくれないかい？ どうして、その……」

「借金二億の爆弾【ファミリア】を選んだか（ですか）？」

「そ、そう……借金二億の、爆弾【ファミリア】……それでも入団希望を出してくれる理由を教えてください……」

チクリ。言葉の棘に刺されたヘスティアはしおしおと小さくなりながらも動機を尋ねる。

「そうですねー……理由は表と裏の二つあるんですけど、どちらから聞きたいですか？」

「ふ、二つ？ 表と裏？」

「何だよ神様、アンタ俺らがそんな純真に見えるのかよ？ こんな【ファミリア】に入りたいて言ってるんだ、裏の理由くらいあつて当然だろうが」

「で、ですよねー……」

ポックの言動の荒々しさに押されるヘステイアを見かねたのか、アスカは無言で片手を上げる。それに過剰に反応したポットとポックは、居住まいを正して動機を語り始めた。

「まず裏の理由からですが、私達はヘルメス様から派遣されたスパイです」

「ず、スパイ？」

「はい。ヘルメス様だったら、そちらにいらつしやる【未完の少年】リトル・ルッキーをいたく気に入ったみたいでして。私達が『改宗』コンバージョンしたいと申し出たら、『じゃあ時々でいいから情報流してね。よろしく☆』と許可してくれました」

「ええ……ヘルメスの奴、一体何考えているんだい……？」

「俺らも世話になった元主神からの頼みだ、無下にはできねえ。

【ヘルメス・ファミリア】あっには仲の良い連中もいるし、たまに会って話くらいはする。そんな時に多少は情報が漏れる事は覚悟してもらいたいな」

「うーん、本当ならその時点で入団させたくないんだけど……まあいいや。それで、表の理由は？」

挑発的な笑みを浮かべるポックに困り顔のヘステイアは、さらっと流してもう一つの動機を尋ねる。

すると、途端に沈黙する二人。顔を伏せて、口を固く閉じた姉弟は、けれど両方とも腕を組んで待機するアスカの様子を伺っていた。

「あー……アスカ君。ちよつと頼まれ事を……」

「断る。妙な気を使うのは無しだ、ヘステイア。

ポット・パックとポック・パックは、自分の意志でここへ来た。な

らばその意志を我らに示すのは至極道理だ。

たとえそれが、私への憧憬であつたとしても。私がそれを聞かない理由にはならないな」

「……くっ！」

事もなげにアスカがそう言うと、ポットとポックは一気に赤くなつた。ぎゅつと拳を握り、羞恥心で体を縮こませる姉弟に、どうでも良さそうにアスカは続ける。

「何より——これは彼らの『勇氣』を問う話だ。

憧憬を前に、自らの意志を宣言する。それは誰もが、最初に刻む『勇氣』である。

ならば憧憬たる私が聞き届けるのは、当たり前前の事だと思うが？」

「！」

アスカは姉弟を見つめる。その銀の半眼には、『協力者』か『敵対者』かの二分した世界しか映っていないのだろう。

だが、そうであるからこそ、その超越的な輝きは焦がれる者を眩ませる。神の如くと、そう呼ぶに相応しい存在に憧れた二人は、意を決して言葉を紡いだ。

「——分かつてるとは思うけどよ。俺らがこの「ファミリア」を選んだ理由はアンタだ、ウオーゲーム「灰」。

あの戦争遊戯を見た。アンタの魔法を見た。アンタの、力を見た。その時からもう、体が熱くなってしようがねえ。震えて、駆け出したくて、たまらなくなる。

一族の『勇者』を初めて知った、あの時みたいに——俺は、アンタについて行きたいって、そう思ったんだ」

「私も、同じ気持ちです。バルウム「灰」——いえ、ファイアナ様。

貴方こそ、私達の『光』。小人族を照らす、鮮烈なる『太陽』。

一度そう思つたらもう、この想いの丈は止まりませんでした。私達は、貴方の道を共に行きたい。貴方の下で、戦いたい。

たとえ入団を断られても、貴方自身が拒否しても、この意志は変わりません。

私達は——貴方に『槍』を、捧げたいのです」

二人の瑠璃色の瞳が、真っ直ぐに幼女を見返す。そこに宿るのは、強い『覚悟』。小人族バルウムの最も優れた、『勇氣』の力。

「私に名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

その意志を受け止めて、アスカは何も変わらない。『灰』であろうと、同じ事だ。

「今更、覚悟の程を試すつもりはない。どのような困難が待ち受けていようとも、貴公らは私の側に在る事を望んだ。

ならば問うべきは一つだけだ。貴公らは、私の家族となるつもりがあるか？」

「『家族……』」

「そうだ。私はこの『ヘスティア・ファミリア』を、実の家族のように思っている。神も人も、関係はない。血の繋がりはなくとも、我らには確かな絆があり、それを私は尊んでいる。

貴公らも、そうなれるか。私の家族で在り続けられるか。何が起ころうとも、決して裏切らぬ、貴い意志を貫けるか。

それが出来るのなら——私から言うべき事は何もない。後はヘスティア、貴公次第だ」

「ええっ!? ボクうっ!」

「貴公の『ファミリア』なのだから当然だろう。私は貴公を蔑ろにするつもりはない。

——私は、貴公を信じている。だから、任せる。それで良いだろう? ヘスティア」

「——まったく、かなわないなあ、アスカ君には。うん、分かったよ。君の信頼に、応えて見せる」

驚いて、アスカの気持ちを聞いて、ほにやりと笑うヘスティアは。深く頷いて、改めて姉弟と対面する。

「動機は分かった。君達の覚悟も。その上で、ボクの判断をここに告げよう」

「……」

「——合格だ、二人とも! ようこそ、『ヘスティア・ファミリア』へ!」

ぱあつと花咲くような笑顔でヘステイアが宣言すると、ポットとポックはホツとしたように緊張した面持ちを解いた。それもアスカが見ている事に気付いた途端、顔を赤くして石のように固くなったのだが。

そんな姉弟に一同は笑って、弛緩した空気を醸して会話する。

「やれやれ……良かったんですか、ヘステイア様。こいつら結構良い性格してると思いますよ」

「うんうん、良いんだヴェルフ君！　口は悪いけど、この子達は良い子だぜ！　ボクが保証するとも！」

「ヘステイア様が太鼓判を押すなら、異は有りません。改めまして、ヤマト・命ミコトと申します。よろしくお願いします、ポット殿、ポック殿」

「お、おう。よろしくな、極東のねーちゃん」

「あらあら、ポックったら緊張してるの？　分かるわ、命ミコトさんって美人さんだものね」

「ちげーよ姉貴!?!　と、とにかく、足は引つ張らねえ！　むしろ俺達の足引つ張んじやねーぞ?!」

「フフフ、勿論です！　日々精進あるのみですから！」

一番手を命ミコトが務め、姉弟と握手を交わす。続いたのはヴェルフだ。

「ヴェルフだ、よろしくな。【ファミリア】じゃ鍛冶師をやってる。何か欲しい装備があつたら言ってくれ、力になるぜ」

「……アンタ、クロツゾらしいな」

「！　ああ、そうだが」

「呪われた魔剣鍛冶師だか何だか知らねーけどよ、ちゃんと良い武器モウ作ってくれよな！　俺達が欲しいのは魔剣なんかじゃねー、命を預けられる相棒なんだからよ！」

「……！　おう、任せろ！　チビ助二号！」

「誰がチビ助二号だツ、ポックだつつの！」

「フフフ、もう仲良しさんね、ポック。ポットです、よろしくね鍛冶師さん。あ、それと——チビ助三号なんて呼んだら許しませんからね？」

「あ、ああ!?!　も、勿論だ！」

茶化すヴェルフにポックはウガーツ！ と吠え、ポックは空恐ろしい笑みを浮かべる。そんな彼らにため息をついて、リリルカは一步前に出た。

「チビ助一号もとい、リリ助ことリリルカ・アーデです。まったく、何だつてこんな自己紹介しなきゃいけないんですか、ヴェルフ様のせいですよまったく。」

話を戻して、サポーターをやってます。戦闘はからつきしなので期待しないでくださいいね」

「ああ、よろしくな、同胞」

「よろしくお願ひします、リリルカさん」

「……蔑まないんですか？ リリはたかがサポーターですよ？」

「そんなん「ヘルメス・ファミリア」にもいたつての。ドドンつつー、図体スゲーでけえのにサポーターしかできねえやつ」

「そ、そうなんですか？」

「ええ。臆病で、優しくて……気配りが得意なとっても頼りになるサポーターでした。貴方もそうである事を、期待していますよ？」

「……………分かりました。ご期待に添えるかは分かりませんが、精一杯務めさせていただきます」

姉弟と握手し、リリルカはペコリと頭を下げる。まだ完全に心を許していないのは、この「ファミリア」で一番しつかりしないといけなのは自分だという意志の表れだ。

それを分かって、ポットとポックも握手を交わした。信用は積み重ねていけばいい、信頼は育めばいい。何よりリリルカは、同じ小人族バルウムなのだから。

困ったように笑うリリルカが離れて、次に歩み出るのは本当に嬉しそうな少年。

「べ、ベル・クラネルと言います！ あの、「ファミリア」に入ってくれて、その、とつても、とつても嬉しいです！ よろしくお願ひします、ポットさん！ ポックさん！」

「……………」

「あ、あの…………？」

「明らかに業物のナイフ……【ヘファイストス】のロゴ……分かった、二億の借金はそいつのせいだな？」

「!? な、なんで分かってっ!?!」

「少し情報を整理すればすぐ分かりますよ。これでも元【ヘルメス・ファミリア】ですからね。ヘルメス様の癖がちよつと移ってるんです」

「アンタが団長って聞いているし、主神の寵愛を一身に受けてるってところか……おまけに『灰』の、ファイアナ様の寵愛も……」

「いやあのこれはそのつ、否定するつもりはないですけど、語弊があるっていうかっ!?!」

「——ま、いいけどな」

「えっ?」

「ファイアナ様が選んだ事に文句を言うつもりはねーし、アンタを殊更可愛がる主神に不満もねー。ただよ、【未完の少年^{リトル・ルキー}】。俺達を納得させるくらいの事は、してみせろよ?」

「ええ、納得させて見せてください。貴方にその価値があるのか、私達は見定めます。もし、そうでないと判断したら……」

「は、判断したら……?」

「……………」

「にっこり笑ってないでなんか答えてえっ!?!」

ニヤニヤと笑う姉弟に、ベルは存分に誂^{からか}われる。その後冗談だと、まったく冗談に見えない真顔で口にした姉弟に、ベルは恐れながらも、なんとか握手を交わしたのだった。

そして——最後。

「名前はない。ただ『灰』と呼ばれている」

「……………」

「貴公らの呼び方に興味はない。好きに呼ぶといい。ただ、そうだな——アスカと呼んでくれると、嬉しい。それは私の、家族が呼ぶ名前だからだ」

「……………」

「——はい、分かりました、ファイアナ様！　じゃなかった、アスカ様!」

「よろしくお願い致します、アスカ様。貴方と轡を並べられる事、光栄の極みに存じます」

「……なあ、露骨に態度ちがくねえか？」

「しようがないですよ。だってあのアスカ様に憧れて来たんですよ？」

「憧憬に出会えば自然と居住まいも正されるものです。私も最初にタケミカツチ様と会った時は——」

「でも、良かった。仲良くやっていけそうで。本当に——良かった」

「うんうん！ 仲良き事は良い事、だよね！」

アスカと姉弟の握手を終えて、一同は笑い合う。

「ハスティア・ファミリア」の新たな門出はここに相成った。行く先にはきつと、明るい未来が待っているのだろう。

「それでは早速ですが、借金返済に向けた計画を立てましようか」

数分後。テーブルを囲う一同は、目の前に聳える暗い未来について語り合っていた。

「真面目な話、どう返す？」

「ダンジョン探索しかねーだろ。一応ここ、探索系【ファミリア】なんだろう？」

「そう、ですね。他に稼ぐ方法があるわけでもありませんし……」

「無理をしても破綻するだけですから、地道にやっていくしかないと思いますよ？」

「うん。それが一番の近道、だよね？」

リリルカを中心に、団員達が口々に言い合う。その光景はハスティアにとって嬉しいものであるし、借金なんて作って申し訳ないと胸が一杯になる。

それでも、新しい仲間かぞくが出来て、幸せだ。きっとベルも、同じ思いだろう。

万感の思いで自分の借金精算に向けて話す眷族達を見ていると——ふとヴェルフが疑問点を口にした。

「そういやリリ助、お前思ったほど慌ててないな」

「藪から棒にاندすか、急に」

「いや、借金二億ヴァリスだぞ？ 守銭奴のお前が一番ヘステイア様に怒ると思つてたんだが」

「守銭奴なんて失敬な！ リリは健全な派閥運営ファミリアを目指してるだけです！」

借金については、その……アスカ様、言つてもいいですか？」

口ごもつたりリルカは、ちらりとアスカに視線を向ける。首を傾げる一同の前に、アスカはただコクリと頷いた。

「リルカ。あの件に関しては、全て貴公に任せてある。必要だと思ふなら、口にするが良い」

「……分かりました。それでは、言います。皆さん、これは本当に最後の手段なんですが——実は二億ヴァリスの借金なんてどうとでもなるんです」

『……………はあ？』

リルカの発言に、皆が皆理解できないという顔をした。それを踏まえてリルカは、努めて平静に事実を述べる。

「ここだけの話にしてほしいのですが、実はリリはアスカ様の資産を預かっています。それを使えば、借金は全額返せます」

「えっ!? そうなのかいっ!? しかも全額つて……アスカ君つて二億ヴァリスも持つてたのかい!?!」

「いえ、その……………三〇億ヴァリスです」

『はっ!』

「——ですからつ、三〇億ヴァリスですつ!! ざつと現金三〇億ヴァリス、リリは現ナマで預かつてるんです!!」

『……………ええ、ええ——つ!?!』

静かな風が吹き抜ける『竈火の館かまど』に、絶叫が鳴り渡つた。

「さつ、さつ、三〇億ヴァリスつ!! 嘘だろオイ、第一級冒険者だつてそんな金持つてねえぞ!?!」

「三〇億……………三〇億……………三〇億とは一体……………?」

「ああ!?! 巨額過ぎて命君ミコトの意識が宇宙に飛んでる!?!」

「いやいやいや待って待って、三〇億って何だよ!? 俺ら結構覚悟してこの【ファミリア】に入ったんだぞ!? 前提引っくり返すんじゃないよー!」

「……驚きました。でも、アスカ様の資産なら納得です。ああ、貴方はやはり、凄まじいお方……」

「ポットさんが敬虔な信者みたいになってる……!?!」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ「ヘステイア・ファミリア」。怒号すら飛び交っているような状態が続くかと思われたその時、スツとアスカは手を上げる。

「騒ぐな。喧しい」

小さな、けれど響く古鐘の声。その音に込められた圧力に、一同はリストレイト強制停止させられた。

一気に静まり返る応接間。その沈黙の中で一人、アスカは滔々と言葉を連ねる。

「順を追って説明しよう。」

まず、私の資産だが、総額で一〇〇億ヴァリスくらいはある筈だ」
『……っ!?!』

「正確な額は知らん。金銭になど興味はないからな。」

リルルカには、その内の現金で所有していた六〇億ヴァリスの半分を渡している。三〇億ヴァリスとは、つまりそういう事だ。

次に、私が資産を持つ理由だが、単純にダンジョン探索の結果だな。ベル、私が年に一度、旅に出ていたのは知っているだろう」

「え……う、うん、一ヶ月くらい、だよね?」

「そうだ。私は旅の最中にオラリオにも訪れ、ダンジョンに潜っていた」

「……アスカ様の冒険者登録って最近の話では?」

「無断での不法侵入だが、どうかしたのか?」

「相変わらず自由ですね……!」

「話を戻すぞ。私は年に一度、おおよそ十日ほどをダンジョン探索に当てていた。」

短いと思うだろうが、事実としてダンジョンになど興味はないから

な。使命のついでに探索していた程度だ。

それでも、私は不死である。不眠不休で『深層』に潜る程度の事は、このひ弱な肉体にも為し得た」

「……姉御は確か、”ソウルの業”つてのを使えたよな。どんな物でもソウル化して持ち運べるとかなんとか……」

「……つまり、アスカ殿が地上に持ち帰れる戦利品は事実上無限大……成る程、一財産出来るのも道理ですね……」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ!? 一体どうやってそれを売っ払ったんだい!? 絶対ギルドにバレるだろ!?!」

「悪いが教えられん。ただ伝手がある。そう認識しておけば良い。

まあ、つまりは、そういう事だ。年に一度のダンジョン探索を十年以上続けていたら、いつの間にか金が増えていた。

私にとっては無用の金だ。故に家族に役立てるよう、リリルカに預けた。

説明は以上だ。何か質問はあるか?」

アスカが一同を見遣ると、ややあつてリリルカが手を挙げた。

「ずつと気になってたんですけど、アスカ様はヘステイア様の借金を返済しようとしなかったのですか?」

「やろうとはした。だがヘファイストスに断られた」

「そーなの!?!」

「曰く、「ヘステイアに厳しくする事が己の役目」だそうだ。故に借金の返済は叶わず、これはヘステイア個神こじんの物となっている」

「ぐぬぬ、ヘファイストスのやつ……とは言えないかあ……ボクの借金だし……」

「神様、一緒に返していきましよう」

「……うん! そうだね、ベル君!」

「あの、俺からもいいですか?」

「何だ。ポック」

「ひよつとして、この豪邸もアスカ様の……」

「そうだな。私の資産の一つだ。他にも幾つかある。機会があれば、紹介する事になるだろう」

「すげえ……俺もいつか、アスカ様みたいに……」

ぎゅつと拳を握って決意を新たにするポック。それを微笑ましそうにポットが見つめ、姉の視線に気付いたポックはかあつと顔を赤くした。

そのまま一方的なじやれ合いをする姉弟を背景に、ヴェルフはフーツと息を吐く。

「まあ、とりあえずは一安心つてどこか。姉御の金だ、そう簡単に頼りたくはねえが、最後の砦があるつてのはありがてえ」

「ええ、気持ち軽くなります。一丸となつて立ち向かう事に変わりありませんが、とても心強いです」

「本当にそう思います。ええ、リリは特に。」

さて、それでは改めて、返済計画を立てましょうか」

「そうだな。だがその前に、今一度時間を取る必要があるらうぞ」

そうやってアスカは立ち上がる。何事かと視線を集める幼女は、とてとと玄関へ向かい、扉を開けて——そこに佇む、震える人影に眼を細めた。

「ほう。まさか、貴公が来るとはな。」

さて、我が家族、「ヘステイア・ファミリア」に何用かな？——ル

アン・エスベル」

『竈火の館』に夜が来る。不死は客人を招き入れ、パタリと扉を閉じ——また一人、「ヘステイア・ファミリア」の団員は増えるのだった。

ウルガ

超硬金属が用いられた両刃剣

「両刃剣の中で最重量のもの

二つの特大剣が太い柄で連結された超大型武器
信じられぬほどの重さと、攻撃力を備えているが
人の扱いうる限界を超えている

「武器とはとうてい呼べない珍品」と

鍛冶たちの笑い話の種にしかならないが

古い絵本には、これを振るう少女が描かれている
戦技は「大双刃」

柄を軸に回転させ、重さのままに薙ぎ払う

それは堅牢な鉄塊をも大斬するだろう

みなぎる体

太陽の神アポロンのさえざる愛の奇跡

体に光を蓄え、スタミナ消費を無効にする

「悲愛」と称されたアポロンの傾慕

行き過ぎた愛の物語を、時に受け入れる者もいる
太陽のごとく輝く体は、まさに喜劇という他ない

灰の交わり、火と陰り

パチパチと、暖炉に燃える薪が爆ぜる。

昇る火の熱、揺らめく灰。積み上げられた薪は静かに焼けて、時折崩れ、灰を零す。

放出される、火の温もり。その暖かさを一身に受け、広がる光に影を揺らめかせるのは、一人の幼女。

暖炉の側で、椅子に座り、アスカは小さな手に自らの灰髪を乗せていた。

「……」

炎の色が反射する、凍てついた太陽のような銀の瞳。それが見つめる灰髪に、アスカはひっそりと折れた刃を差し込む。

冷たい鉄の腹に乗せ、灰髪を持ち上げ、刃を縦に。ぷつりと、一房の髪を斬り取った幼女は、折れた刃を置いて髪を編む。

束ね、寄り分け、丁寧に。黙々と手を動かす幼女の姿には、どこか現実感がない。

火に照らされ、影を揺らし、灰髪を編む。幼い記憶の揺籠の如く、それは柔らかに微笑む老婆のようだ。懐郷とも、神秘とも取れる情景が重なって見える幼女は、やがて編み終わった髪を机に置いた。

《灰髪のタリスマン》。かつてはそう呼ばれていた、自らの髪で編んだお守りの出来映えを、アスカは確認する。

「……うむ。仕上がりはこれで十分だな。人数分揃った事であるし、始めるとしよう。」

準備は良いな。ポット。ポック。ルアン」

「「……」」

「? どうした、貴公ら。黙っていては分からんぞ」

「……あーいや、なんつーか……」

「オイラ達、見惚れてたっていうか、惹き込まれてたっていうか……」
「アスカ様、とっても素敵なお姿でした……! 眼福です! ありがとうございます!」
「どうもありがとうございます!」

半ば呆けたようなポック、ルアンの横でキラキラと目を輝かせるの

がポットだ。「ヘステイア・ファミリア」に加入したばかりの小人族三名は、たかが編み物ですら隔絶した空気を発するアスカに共通した信仰おもいを抱いていた。

そんな彼らの熱い眼差しを「そうか」の一言でアスカは流す。慣れ切っているが故の自然な態度で立ち上がった幼女は、それぞれに《灰髪のタリスマン》を与えた。

「それでは、改めて聞こう。準備は良いな」

「まあ、準備はもう終わってるっつーか、そもそも準備する事なんもねーっていうか……」

「……本当に、やるんですか？ アスカ様……」

「当然だ。私の家族となったからには、助力を惜しむ理由がない」

「……でも、オイラ達には才能なんか……」

「才能は問わん。努力も、今は必要ない。私が問うのは、貴公らの意志だ」

アスカはソウルの光を集め、古く汚れ切った《灰髪のタリスマン》を取り出す。

ほつれ歪んだ、小さなお守り。かつてそれを編んだ時、願った祈りをアスカは口にした。

「それが果たされるかは分からない。目指したところで、何も無いのかも知れない。

それでも『前』に進むのだと、私は祈り、このタリスマンを編んだ。足を踏み出し、『前』を見て、無力に踞うすくまるままには帰らぬと。

ポット。ポック。ルアン。貴公らは、あの時の私と同じだ。無力のままではいられないから、足を踏み出し、『前』に進む。私の力になりたいと望む。

ならば先達として、不肖の身であろうとも、私は応えよう。

——踏み出す事こそ、我らの『勇氣』。我が家族よ、一步を踏み出す『勇氣』はあるか」

「二」——はい——」

「よろしい。ならば立ち上がれ。これより試験——『火の時代』の【魔法】に対する、適性検査を開始する」

数十分後。

ポット、ポック、ルアンの三名は、がっくりと項垂れていた。

「……やっぱり駄目じゃねーか……」

【魔術】【呪術】【奇跡】……初歩魔法も発動できなかつたね……」

「うう……やっぱりオイラに、才能なんか……」

深く落ち込んでいる小人族達に、アスカは平然と告げる。

「まあ、予測通りではあるな。『神の恩恵』によつて魔法を得ていない

者は、『火の時代』の【魔法】であつても習得は難しいという訳だ」

「分かつてて試させたのかよ!?!」

「ああ。だが、実際にやってみなければ、結果は分からんだろう?」

「それはそうですけど……アスカ様つて平然と酷な事しますよね

……」

「性分だ。変える事は出来ない。さて、それでは次だ。今度は【奇跡】を試して貰おう」

「え? で、でも、今だつて発動なんか出来なかつたのに……」

「そうだな。だが、これは別だ。何故ならば、次に試すのは『ファイアナ』の【奇跡】だからである」

「一・二」

目を瞠る三人の前で、アスカは《灰髪のタリスマン》を握り、【奇跡】を行使した。

幼女の左手に光が収束し、10M^{メートル}を超える輝ける槍が顕現する。

それに目を奪われる小人族達に、『ファイアナの再来』と呼ばれし不死は滔々と説明する。

「この【奇跡】は、小人族の『ファイアナ』信仰を元に編纂したもの。本来存在する筈のない、架空の【奇跡】ではあるが、事実として発動は可能だ。

ならばこれは、真に祈りを捧げた小人族達の、願いの結晶とも言える。私を『ファイアナ』と呼び、崇拜する貴公らには、使える可能性がある【奇跡】だ」

「……でも、それはアスカ様だから発動可能ではないでしょうか？
アスカ様はソウルレベルという『ソウルの業』で、限界まで力を高め
ていると仰っていましたし……」

「確かに、私の『信仰』は極まっている。この【奇跡】、【勇者の突撃】
がその極まった『信仰』を要求するのも事実だ」

「……なら、俺らに使える訳が——」

「——オイラ、やってみる」

「ルアン!？」

突然の宣言に驚く姉弟の前で、可愛らしい小姓ペイジのような風貌のルア
ンは、両手で確りと《灰髪のタリスマン》を握った。

「オ、オイラだって、出来るとは思わない。でも、オイラはアスカ様に
——ファイアナ様に憧れて、この【ファミリア】に入ったんだ。

その想いだけは……だ、誰にも、負けるつもりなんか、ない。だか
ら、オイラ——やってみるよ」

まるで自信のなさそうなルアンは、けれどその瞳の奥に強い決意を
湛えて、祈りを捧げる。

アスカを前に、全てを捧げる騎士のように。今この瞬間、祈祷に全
霊を尽くすルアンの献身は——果たして、《灰髪のタリスマン》より芽
生える光の穂先となって、彼らの前に発現した。

「ル、ルアン……!？」

「すごい、本当に……!？」

「——流石だな。やはり貴公が、最も信心深い」

自身の手のひらに確かに存在する輝ける槍に、ポットもポックも、
ルアンですら信じられないという表情をしている。アスカだけは当
然という風に頷いて、ルアンの【勇者の突撃】を観察し始めた。

「ふむ……全長1M18Cモデルセルチ、必要集中力フォーカスは【雷の槍】と同程度、威力
帯は第三等級武装上位、といった所だな。

私の【勇者の突撃】より短いのは、純粋な『信仰』の差だろう。S Lソウルレベル
を引き上げれば、私を超える事も容易いだろうな。

用途としては、使い捨ての副武装と見れば扱いやすい。道を切り開
く、敵への投擲、あるいは仲間を守る場合、一歩前に出て『加護』を

乗せれば、攻防一体の強力な【奇跡】となるだろう。

だがこればかりは、実際に試してみなければ分らん。それは後で行うとして……私もまた、語り手として、為すべき事を為すとしてしよう。

——よくやった、ルアン」

「……！ はい、アスカ様！」

アスカに褒められて、ルアンは喜色満面の笑顔を浮かべる。舞い上がって跳び跳ねそうな程喜ぶ同胞に、ポットとポックも火をつけられた。

「くっそー……やってやる！ 気持ちだけなら、俺だって……！」

「私も、アスカ様への想いは誰にも負けないわ！ 見ていてください、アスカ様……！」

「ああ。期待しているぞ。ポット。ポック」

崇拜する幼女の前で、姉弟もまた祈りに全霊を捧げる。彼らの手に輝ける槍が握られるのは、そう遠い話ではなかった。

灰髪のタリスマン

丁寧に編み込まれた灰色の髪のアリスマン

この髪の主はあらゆる苦痛に晒され続けた

だからか、全ての魔法の触媒となるが

理力、信仰、いずれの補正もない

記念品の類であろう

戦技は「不帰の祈り」

左右どちらに装備していても有効な戦技

ごく短い間、使用する魔法の威力を強化する

その日の昼。昼食を取った【ヘステイア・ファミリア】一同は、アスカに呼び出されて暖炉の間に集っていた。

「全員、揃ったな」

「うん。でもアスカ、用事ってなに？ 今日引越し作業を終わらせないといけないけど……」

「それは既に手配している。心配する必要はない。

さて、ヘステイア。構わないな？」

「うん。いいよ、アスカ君」

はつきりと視線を投げかけるアスカに、ヘステイアはこくりと頷いた。二人だけに通じる会話に一同が訝しんでいると、アスカはそつと前に出た。

「ヘステイアの許可も取れた事だ。これより貴公らには、『火の時代』の力を【スキル】として発現して貰う」

『……え？』

アスカの突飛な発言に、皆が皆目が点になった。驚く、というよりも困惑する空気が広がるのを他所に、アスカは説明を開始する。

「まずは、既に【スキル】を発現している者について説明しよう。

ベル、貴公は【不転心誓】^{ダークサイン}という【スキル】を持っているな。それは意志を貫く、ある意味で不死たる私に最も近い【スキル】だ」

「う、うん」

「リリルカ、貴公の【魂業小箱】^{ソウル・ヴェソル}は物質のソウル化とその逆様^{さかしま}だ。『火の時代』に由来する、普遍的な技術^{スキル}でもある」

「は、はい。そう聞いています」

「ヴェルフ、【エンバールリット残火双楔】は特異な力だ。それは鍛冶の業でありながら、私の、延いてはかつての鍛冶師のそれを超えている。二重変質強化とは、それ程に強力で、また異端であるのだ」

「おうよ。ベル達の役に立てるなら、何でも構わないけどな」

「うむ。このように三人は、既に【スキル】を発現している。それは『火の時代』に関係する——私との関わりによって芽生えた【スキル】だ。私自身が意図した事ではないが、三度、同じ事が起こった。ならばもう、私の『既知』だ。私は『火の時代』に由来する力を、【スキル】として他者に与える事が出来る」

内容を察したベル達と違い、ミコト命を筆頭とした「ハステイア・ファミリア」新参の団員は驚愕の渦中にいる。

「【スキル】を、与える。発現させる。そんな事が可能な眷族など、『神時代』の歴史上一人として存在しない。『ファールナ神の恩恵』はあくまで人類の可能性を開花させるきっかけであり、それを他者にまで拡張する権能など持ち合わせていないのだから。

「ちよ、ちよつと待ってください!? 【スキル】を発現させるというのも頭が追いつきませんが、『火の時代』とは一体……?」

「ああ。そういえば、ベルとリルルカ、ハステイア以外は私の歴史を知らないか。丁度良い、私という存在の説明も、ここで終わらせておくとしよう」

そう言っアスカは、この時代に降り立ってから幾度となく繰り返した説明を始める。

『火の時代』『不死』『薪の王』——アスカ“灰”を構成する様々な情報を、受け手の許容に構わず流し込む。

それに音を上げたのが小人族組バルウムだった。『ファイアナ』の神話とはあまりに違う歴史を聞いて、とりあえずの休憩を要望する。その陰では命も、ミコトついでにヴェルフもほつと一息ついていた。

「——そりゃまあ、本物の『ファイアナ』様とは思っちゃいなかったけどよ……本物とは別の意味で神様してねえか? アスカ様……」

『薪の王』……ただの囚われた罪人から、数々の怪物を、英雄を、神

すらも手にかけて、世界を繋ぐ生贄になる……明らかに悲劇の物語ですけど、だからこそ、とでも言うのでしようか……どこか、惹かれるものがありますね……」

『不死』つて、呪い、だったんだな……オイラにやあとてもそう思えなかつたけど、死にたくても死ねねえつて、そりや嫌だよなあ……化け物みたいになっちまうなら、尚更さ……」

「自分は、アスカ殿が戦った英雄達に心惹かれました……！特に、騎士アーン」の物語……！ その剣技、是非とも拝見したかったです！」

「俺はやっぱ鍛冶師の話だな。姉御の視点じゃ大概は敵だったみてーだけどよ、その頑固さっつーか、矜持の持ち方っつーのが……何処の世界も鍛冶師は変わらねえなつて、つい笑っちまいそうになる」「うんうん、分かる分かる！ 僕も昔聞いた時はすっごい怖かつたけど、改めて聞くと、新しい発見が一杯あるつていうか！ 皆とこうして話せて、すっごく嬉しいっていうか！」

「ベル様……『英雄譚』の感想大会じゃないんですから、そんなにはしやがなくても……」

アスカの歴史^{はなし}を理解するための休憩は、いつの間にかワイワイと騒がしさを増していった。

そんな家族の光景に、アスカは瞬き、ヘスティアを見て。笑い合う眷族達を微笑ましそうに見守る女神は、幼女にうんと頷いて。

「仕方ないな」と、アスカも微笑み。一柱と一人は、その光景を温かく見守るのだった。

「さて、それでは改めて、貴公らに【スキル】を発現させる。ここで重要になるのが、どのような【スキル】を欲するか、明確に定める事だ」時間を置いて、皆が落ち着くのを待ったアスカは、【スキル】発現に関する注意事項を説明する。

「ベル、リリルカ、ヴェルフは意図せぬ【スキル】の発現であった。結果、それぞれが最も必要とするであろう【スキル】の形に収まった。

それは発現者の想いが深く関わっていると私は見ている。その者が何を大切にしているかで、「スキル」の傾向は変わるのだろう。

故に貴公らには、まず目指す「スキル」の形を決めて貰う。その上で私が見定め、明確な形にして「スキル」を発現させる。

おそらくは、それが最も効果的な方法だ。ここまでで質問がある者は、口にすることが良い」

アスカが言葉を切ると、命ミコトが綺麗に手を挙げる。頷く少女に、命ミコトは質問した。

「[スキル]の方向性を具体的にするための方法は分かりました。しかし自分は、どのような「スキル」にするべきか悩んでいます。

『火の時代』——アスカ殿が辿られた時代の技術は、一朝一夕で理解できるものではありません。その中から自分に合った「スキル」を選ぶのは、非常に難しいです」

「尤もだな。ならば命ミコト、貴公の「スキル」を私が見繕うのも一つの手だ」「アスカ殿が、ですか？」

「ああ。『火の時代』に精通している、などという戯言を吐けるのは、どうも私しかないらしい。ならばその私が、貴公に最適な「スキル」を見繕うのは、可能であると推定する」

「成程！ それではよろしくお願いします、アスカ殿！」
「うむ。任された」

こくりと可愛らしく顎を引いたアスカは、とてとてと命ミコトに近寄って、じつと見つめる。右から左から、前から後ろから、じいっつと眼を近づけるアスカに、命ミコトが若干の居心地の悪さを感じたところで、少女は身を引いた。

「成程な。命ミコト、貴公には二つの道がある」
「二つ、ですか？」

「ああ。一つは斥候、刺客、暗部への道だ。
それは隠密に長けた、暗がりを駆ける黒い手の御業。

正々堂々たる決闘ではなく、不意を突く闇討ちこそを得意とする、暗殺者の暗き道。

貴公には、それが見えている筈だ。自身の向き不向きくらいは、と

うに察しているだろう?」

「それは……確かにそうではありますが、正直に申し上げればあまり好みではありません。極東の忍と呼ばれる方達には、確かにそのような側面がありますし、自分に向いているとは思いますが……」

「ふむ。ならば、もう一つだな。かつての英雄の半身、その武器が宿す記憶を模倣する、【戦技】の道を選ぶが良い」

「【戦技】……?」

首を傾げる命の前で、アスカは暗闇より武器を取り出す。

己の半身たる、《折れた刃の一振り》。その【戦技】、【人間性の刃】をその場で発動した。

見窄らしい、半ばより折れた刃の先に、蠢く闇が纏わりつく。

「これは【人間性の刃】という。我が半身である刃より滴る闇を介し、自らのソウルを刃と成す【戦技】。

これが【戦技】、模倣と呼ばれる理由は、この刃を持つ者であれば、誰であれ【人間性の刃】を使用可能であるからだ」

「!? それは、一体……!?」

「タケミカヅチの眷族であった貴公ならば、語るまでもない事だが、一応説明しておこう。

技とは、一息に扱えるものではない。月日を重ね、肉体に馴染ませ、集中し放てるようになって初めて『使える』ようになる。

そこから熟達し、極めるとまでなれば、途方もない時間が必要だ。技の鍛錬に終わりはなく、磨くほどに鋭く、強く、美しくなる。それは身に沁みて理解していよう」

「はい。自分はタケミカヅチ様に、そう教わりました」

「だが、【戦技】は違う。これは武器の記憶を読み取り、かつての英雄の一撃を模倣する『ソウルの業』だ。

この刃を握る者が、誰であれ【人間性の刃】を使う事が出来るように。【戦技】と呼ばれる概念を体得する者は、どのような武器からも洗練された一撃を放つ事が出来る。

そうだな……仮に私が命の刀——銘は《残雪》か——を用いれば、貴公の最も得意とする技を、【戦技】として使用できる。

ベルの《ヘステイア・ナイフ》ならば、あるいは炎の刃を使用出来るだろう。相応の集中力——精神力を必要とするだろうが、その者の【魔法】を乗せた一撃すら模倣し得る、それが【戦技】だ」

「何と……デタラメと言うべきか、凄まじいと言うべきか、判断に迷いますね……」

驚きつつも、命は微妙な顔をしていた。当然だろう、【戦技】とは、その武器の持ち主が積み重ねた努力を掠め取る業とも言える。実直な性格の命が無意識に忌避感を抱くのも仕方のない話だ。

それを理解しているアスカは、それでも【戦技】が命に向いている理由を話す。

「そう忌避するな。私が【戦技】という選択肢を提示したのは、何時までも模倣し続ける理由がないからだ」

「それは、どういう……?」

「命。貴公はタケミカツチに武術を学ぶ。それはタケミカツチの武に対する努力を奪う事か?」

「それは違います! いくら技を真似ようとも、最後に努力するのは自分自身です! 決してタケミカツチ様を侮辱するような行為では——あ」

「そうだ。【戦技】も、また同じだ。

確かに、最初は模倣であろう。かつての英雄、その技を、ただ使うだけの業だろう。

しかし、何時までもそこに甘んじる理由はない。真似は学び、模倣から始まるのなら、それを己の物とすべく努力すれば良いのだ。

——そう。かつての英雄達が振るいし武術。それを学ぶのに、【戦技】とはいかにもびったりではないか?」

「——!」

「知りたくはないか? 英雄と呼ばれた者達が扱った技を。試してみたくはないか? 今の貴公が、何処までその高みに手を伸ばせるかを。」

【戦技】とは、それを可能とする『ソウルの業』である。ならば貴公、ヤマト・命。この道こそ、貴公の選ぶべき道である。

私はそう、考える。あとは貴公の、選択次第だ」

アスカはそこで、口を閉ざした。命ミコトの選択を待つように。

命はじつと、アスカを見ていた。正確にはその右手にある、「人間性の刃」を発動する、折れた刃を。

周囲の仲間達の武器も渡し見て、最後に自分の刀を見つめ、ぶるりと武者震いする命は——力強く咲く花のように、美しく口角を上げ、笑った。

「まったく……アスカ殿は人を乗せるのが上手ですね」

「そうか？　むしろ貴公が、分かりやすい部類だと思うが」

「アハハ！　率直に言って頂けるのは有り難いです！

——決めました。自分は、「戦技」を「スキル」にします。始めは模倣でしかなくとも、いつか必ず、自分の技にして見せます！

タケミカツチ様の名に恥じぬよう——努力を怠るつもりは毛頭ありませんから！

「よろしい。これで命ミコトの方向性は確定だな。次は、ポット、貴公の番だと言いたい——」

((じい~~~~つ))

「——どうやら既に、肚は決まっているようだ。さて、ポット。ポック。ルアン。

貴公らは、『火の時代』のどのような力を望む？」

アスカが問うと、小人族組バルウムは一斉に声を上げる。

「アスカ様みたいになりてえ(なりたいです)(な、なりたい)!!!」

「そうか。まあ、そうだろうな。だが一つ、注意事項がある」

命ミコトの前から移動するアスカは、キラキラと目を輝かせる三人に告げる。

「まず、私のようにになるとは、即ち不死となる事だ。だが貴公らでは、不死に近づくか……あるいは半端な、死ににくいだけという結果になりかねん。

何故ならば、貴公らには『ダークソウル』が足りない。この時代の人が宿す闇の魂は、私のそれとは比べ物にならない程、小さく儂い。それを「スキル」にしたところで、小さな効果しか得られないだろ

う。それでも貴公らは、私のようになりたいと望むか？」

「「はい！ なりたいです!!」」

「……そうか。愚問であったな。ならば貴公らに、私は与えよう。

——歓迎する。新たな同胞よ。その身が亡者にならずとも、貴公らは、私と同じ不死だ」

アスカは静かに眼を瞑り、その手に暗い魂を発露する。

火守女の献身、狂王の暗い業。自らのソウルを剥き出しにする不死に、目を奪われる四名は——一人ずつその暗い魂ダークソウルに触れ、『火の時代』の力を「スキル」として会得した。

ヤマト・命ミコト

L v. 2

力：H 1 2 1 耐久：H 1 0 3 器用：H 1 6 5 敏捷：H 1 4 9

魔力：I 8 0

対異常：I

《魔法》

【フツノミタマ】

・ 重圧魔法。

・ 一定領域内における重力結界。

《スキル》

【八咫黒鳥ヤタノクロガラス】

・ 効果範囲内における敵影探知。隠蔽無効。

・ モンスター専用。遭遇経験のある同種のみ効果を発揮。

・ 任意発動。アクティブトリガー

【八咫白鳥】ヤタノシロガラス

- ・ 効果範囲内における眷族探知。隠蔽無効。
- ・ 同恩恵を持つ者のみ効果を発揮。アクティブトリガー
- ・ 任意発動。ヤタノイクサカガミ

【八咫戦鏡】ヤタノイクサカガミ

- ・ 精神力消費による【戦技】再現可能。マインド
- ・ 極限集中時、特殊武器の効果再現。アクティブトリガー
- ・ 任意発動。

ポット・パツク

Lv. 2

力：G 2 5 6 耐久：G 2 7 1 器用：E 4 8 2 敏捷：F 3 7 9

魔力：I 0

対異常：I

《魔法》

《スキル》

【半輪小人】ハーフリング

- ・ 損傷、睡眠、食事、情欲に対する微耐性。
- ・ ソウルに対する親和性の上昇。
- ・ 『篝火』使用可能。

ポツク・パツク

Lv. 2

力：G 2 6 7 耐久：G 2 5 9 器用：E 4 8 1 敏捷：F 3 8 0

魔力：I 0

対異常：I

《魔法》

《スキル》

【半輪小人】ハーフリング

- ・ 損傷、睡眠、食事、情欲に対する微耐性。
- ・ ソウルに対する親和性の上昇。
- ・ 『篝火』使用可能。

ルアン・エスペル

L v. 1

力：F 3 5 7 耐久：F 3 4 2 器用：E 4 9 2 敏捷：F 3 1 2

魔力：I 0

《魔法》

《スキル》

ハーフレインゲ

【半輪小人】

- ・ 損傷、睡眠、食事、情欲に対する微耐性。
- ・ ソウルに対する親和性の上昇。
- ・ 『篝火』使用可能。

翌朝の事。

朝帰りを果たしたベルに、ヘスティアとリルルカは激怒していた。

事の発端は昨夜、早々に就寝すると言ってこつそり館を抜け出した命ミコトをベル、リルルカ、ヴェルフの三名が追いかけた事だ。

それをアスカは追った。そのアスカを三人の小人族達バルウムが追うという、尾行の多重連鎖が起こっていた。

しかし歓楽街に差し掛かったところで、小人族組バルウムが三人掛かりでアスカを捕縛。「やべーって！　ここはやべーって！」「アスカ様は足を

踏み入れてはいけません！」「オ、オイラも駄目だと思う！」と制止される。

彼らもまた、アスカの家族だ。ベルの事は気になったが、家族の言葉が無下には出来ない。アスカは渋々説得を受け入れ、ホツと胸を撫で下ろす小人族達バルウムと館に帰った。

その後ヘスティアが仕事バイトから帰り、ヴェルフ達も戻って来たが、ベルだけが帰ってこなかった。結局少年は日が昇るまで、帰還する事はなかったのである。

そんな服がほつれている、滂沱の涙を流すベルに、ヘスティアとリルカは雷を落とす。

ヴェルフと命ミコトは何やら訳知り顔で額を抑えている。事情をよく知らないポックとルアンは娼館帰りかよと軽蔑半分、やりやがったと男の尊敬半分で、女性のポットはずっと冷たい笑顔を浮かべていた。

ふむ、とアスカは顎を指に乗せる。しばらく思考していた幼女は、やがて結論を出すのを諦めたのか、素直に尋ねる事にした。

「ヘスティア。少し良いか」

「ちよつと待ってくれ、アスカ君！　ベル君にまだお説教しなきゃいけないんだ！」

「それだ。ベルが一体何をしたから問題なのだ？」

「え？」

唐突なアスカの質問に、ヘスティアは思わず振り返る。首を傾げる灰髪の幼女は、疑問点を口にする。

「その、歓楽街？　という場所の、娼館？　とやらに行く事の何が問題なのだ？　そこでベルが何かおこなを行ったとして、何が問題か私には分からない。

ついてはヘスティア、教えてくれないか。ベルの行動の一体何処が、貴公の逆鱗に触れたのか」

「えっ!?　いやーそれは……えーつと……」

先程までの勢いをなくして、ヘスティアはごにごによごによごもてる。そうだろう、ヘスティアは処女神だ。知識はちゃんと持っていて、説明なんて恥ずかしくて出来ない。

それが自分の眷族こども相手なら尚更に、どう説明すればいいか分からなかった。これが答えにくい質問をされた主神おやの気持ちかッ……！
などと妙な感慨が湧き上がるまでである。

他方、「まさか……!?」という感情を共有するのはヴェルフ達だ。まさかアスカには、性的せいせいな知識がない……？ 一説には神よりも長生きだという不死の予想外の事実を、彼らは信じられないでいる。

「？ どうした、ヘスティア。説明してくれないのか？」

私が聞きたいのは、歓楽街、娼館、ベルに疑われる行動の詳細だ。生憎と、不死には無縁に過ぎる事項でな。私にはよく分からのだ」

しかし再度繰り返されるアスカの質問に、「こいつマジだっ!？」とヴェルフ達は確信した。同時にどう対応すべきか判断に迷った。教えるのか？ 幼女アスカに、俺（オイラ）が？ 男性陣の切実な心中である。

そんな、一様に動けないでいる彼らを後目に、ため息をついたのがリリルカだった。長いため息をこれ見よがしに吐いたリリルカは、アスカに近寄ってその灰髪に軽く手刀を叩き込む。

「む。どうした、リリルカ」

「どうしたもこうしたもありませんよ。いいですか、アスカ様。性的こういつたな知識はアスカ様にはまだ早いです」

「早い？ 情報の鮮度を考えれば、早く知るに越した事はないと思うのだが」

「鮮度とかそんな話じゃないんです！ 少なくとも白昼堂々と「ファミリア」の前でやっていいような話じゃないんです！ 後でリリカが教えてあげますから、とりあえず今は黙っててください！」

「ふむ……そういう物か。であればここは、黙っているとしよう」
「そうしてください！ まったくもう……ヘスティア様、ポット様、後で付き合ってくださいね」

「ええ!?! ボクもかい!?!」

「私ですか!?!」

「当然です！ リリだって耳年増なだけなんですから、正確に教えられる自信なんてありませんよ！」

「そんなのボクだって同じだよ！ 処女神だぞボクは！」

「わ、私だって処女……ハッ!？」

思わず叫んだポットは、バツと自分の口を塞ぐ。顔を真っ赤にして、恐る恐る周囲を見れば、ヴェルフとポックは気まずそうに明後日を向いて、ルアンは耳まで赤くして下を向いていた。

知られた。聞かれた。とんでもない事を！ かあ~~~~っ!! と全身が熱くなるポットは、わなわなと体を震わせ、涙目になり。

「——い、いやあああああ~~~~~~~~っ!？」

「ちよ、姉ちゃんなんで俺んとこに走ってぐべえっ!？」

居ても立つてもいられなくなったポットは、丁度そこに突っ立っていた弟ポックに八つ当たりするのだった。

ヘステイアに罰として奉仕活動を命じられたベルが出発した後。

ヘステイアは「夕方に全員集合!」と宣言した後、仕事バイトへと旅立った。

リルルカは買い出しに、ヴェルフは鍛冶に、残る四名は新たに手に入れた「スキル」の確認と鍛錬のため、中庭でアスカと向き合っていた。

「さて、まずは命ミコトからだな。

「ヤタノイクサカガミ【八咫戦鏡】——【スキル】の内容だけを見るのなら、私の扱う【戦技】よりも高次に位置する能力と思われる」

「そう、なのですか?」

「ああ。貴公の【スキル】は【戦技】を扱うのではなく、【戦技】の再現可能だ。それはつまり、該当する武器を持っていなくとも、【戦技】を発動出来る可能性がある。

実際に試してみよう。命ミコト、《残雪》を抜け」

アスカの言葉に従い、命ミコトは《残雪》を抜刀する。愛刀《東雲》を黒いゴライアス戦で失った関係上、間に合わせとして装備している刀だ。

それでも命ミコトの、第三級冒険者の使用に耐えうる性能をしている。同じように《打刀》を装備したアスカは、【居合】の構えを取った。

「今から見せるのは【居合】と呼ばれる【戦技】だ。極東の出である貴公には馴染み深いだろうが、刀を収めた姿勢から一気に抜き放ち、斬撃を受け流しかの二択を迫る、有用な【戦技】である」

言いつつ、アスカは【居合】を発動する。柄を握り、腰を落とした姿勢から瞬間抜刀、一文字を描く斬撃と、次いで敵の攻撃を弾く受け流しを上演。

滑らかな幼女の動きを確りと見つめる命に頷いて、アスカは《打刀》を納刀する。

「これが【居合】だ。命、貴公から見てどう思った？」

「——非常に美しい技でした。無駄の一切ない、洗練された抜刀術。派生にも一切のブレがなく、今の自分では二択を見極められないでしょう。」

しかし、その、何というか……無理やり体を動かされていると、そのようにも感じました。自分の気のせいかも知れませんが……」

「ほう。やはり、タケミカツチの眷族だな。」

正解だ、命。【戦技】は、本来扱えない技を精神力によって実現する『ソウルの業』。

それは体に馴染みなく、故に素人でも発動できる利点はあるが、発動直後に硬直が発生する欠点もある」

そこで言葉を切つて、アスカはもう一度【戦技】を実演した。素人目からは全く分からない、同じ技の繰り返し。しかし目を輝かせる命には、明確な違いが見て取れたようだ。

「すごいです……！今の技には、まったく違和感がありませんでした！いえ、むしろより高められた技の極限にまで迫りつつあるような、そんな気迫さえ感じました！」

「うむ。私はひ弱で、才能など持たないが、千年以上時間をかければこれくらいの事は出来る。」

命、今のは【戦技】を使用していない、純粋な技だ。私のつまらない鍛錬の成果でもある。私程度ではここまでにはかならないが、きつと貴公なら更に先へ進める筈だ。

始まりは、かつての英雄の【戦技】を借り受ける。扱う内に努力を

重ね、鍛え上げ、最後にはそれを我が物とする。かつての英雄が振るいし力を、貴公こそが継承するのだ。

「どうだ？ 何とも心躍る話だと思わないか？」

「はい！ これを見せつけられて、滾らなければ武人ではありません！ フフフツ……やる気が漲って参りました!!」

「よろしい。それではまず、貴公は【居合】の使用からだな。【戦技】は模倣、扱う者の実力を反映しない代わりに、どのような姿勢からでも扱える利点もある。

そういつた利点欠点を知る事が、技を担う第一歩だ。とりあえずはその辺りで、練習するが良い」

「了解しました、アスカ殿！」

《残雪》を握り、命は拳を振り上げて己を鼓舞する。そのまま【居合】の練習に向かった命を見送って、アスカは小人族組へ眼を向けた。「次は貴公らだな。ポット。ポック。ルアン。

貴公らの【スキル】は一様だ。【半輪小人】——説明文を鵜呑みにするなら、私の能力を控えめにした性能をしている」

「劣化、じゃねーの？ そりゃ、ちよつとは期待してたけどよ……アタみたいになれる強力な【スキル】とは思わね——」

「違うな、ポック。純粋な低劣ならば、不死である事の欠点も受け継いでいる筈だ。

しかし貴公らの【スキル】には、それが見当たらない。不死らしく、人間性を少しばかり喪失する効果を持ちながら、ソウルにより馴染みやすくなり、何より『篝火』を使用出来る。

それでいて不死の致命的な欠点がないのは、私に似通いながらも芽吹いた、新たな『可能性』と言うべきだ」

「新しい、『可能性』……」

「所感ではあるが、【半輪小人】には成長の余地がある。『ソウルに対する親和性の上昇』——それはおそらく、時間をかければ、私の扱う『ソウルの業』、引いては私自身に大なり小なり近づけるといふ事だろう」

「つまり、この【スキル】を使い続けければ——」

「いずれは私のような、肉体に縛られぬ、ソウルを主体とする存在になれる可能性が高い。」

それを良しとするか悪しとするかは、貴公ら次第だがな。これは謂わば、貴公らに与えられた『ソウルの火種』。

今は小さく、か弱い火であろうとも、いずれは闇をも照らし、焼き払う大火となる。そのために何を焚べるかという点においても、私に似通った【スキル】だろう」

「……………」

三人は同じように、自分の手のひらを見つめる。そこに宿る【スキル】——ソウルの力を見ているのか、やがて三人とも、拳を握りしめた。

「【スキル】については分かった。そこで、俺達は何をすりゃいーんだ？」

「まずは【スキル】の項目にあった微耐性の確認だな。主に損傷に対し、どれ程の耐性を持っているか調べれば、自ずと他の項目にも適応できる。」

つまりは、鍛錬だ。これより貴公らには、私と戦って貰う」

「ア、アスカ様とですか!？」

「ああ。無論、加減はする。一方的に黽つては鍛錬にならない。」

だが、私は本気で行く。幸いにも貴公らは、『篝火』が使用可能だ。どのような怪我も、傷も、考慮する必要はない」

「『篝火』……………そういえば【スキル】にも書いてあったけど、それってどんな効果なんだ?」

「そうだな……………色々あるが、こと鍛錬に限って言えば、側で休むだけであらゆる消耗を回復する。」

疲労回復を待つまでもない、鍛錬にうってつけの効果だ」

そこで言葉を切ったアスカは、何故か悪寒に襲われる三名を無視して命に声を掛ける。

「命。これより私は鍛錬を始める。貴公も参加する気はあるか?」

「それは、是非とも、お願いします! 不肖のこの身には、まだまだ努力が、足りないのです!」

【居合】を繰り返しながら返ってきた言葉に頷いて、アスカは右手に闇を滴らせる。

現れる見窄らしい刃、《折れた刃の一振り》を握ったアスカは——その冷たい、凍てついた太陽のような瞳を細めた。

結論から言おう。ポット達は気づくべきだった。

「休むだけであらゆる消耗を回復する」——そのアスカの言葉は、言い換えればあらゆる消耗を強いる言葉であった事に。

【スキル】の確認から数時間。日が天に昇るまで鍛錬が続いた結果、アスカの前には死屍累々の状況が出来上がっていた。

「ふむ。もうこんな時間か。午後は所用があるので、鍛錬はここまでする」

『……………』

返事はない。中庭の中央に設置された『篝火』の周囲に倒れる四名は、息をするのがやつとなままでに消耗し切っている。

『篝火』による回復すら追いつかない、埒外の鍛錬。途中、初見の小人族組は逃げ出そうとしたが、アスカから逃げられる訳がなかった。

泣き喚きながら戦わされるという一種の極限状況まで追い込んだアスカは、どこか満足げな雰囲気を出している。それに恨み言の一つも吐けない四名は、心中で「もつと強くなってやる……!!」と、ヤケクソ気味の決意をするのだった。

そんな彼らの心中を知ってか知らずか、アスカは《折れた刃の一振り》を闇に隠し、居住まいを正して倒れている命に『エスト瓶』の身を振り掛ける。

命は『篝火』の効果を受け取れないので当然の処置だ。傍から見れば追い打ちにも見える所業をこなした後、アスカは『竈火の館』から出立した。

「やあ。戦争遊戯ウォーゲーム以来だね、〃灰〃。歓迎するよ」

午後。【ロキ・ファミリア】本拠ホーム、『黄昏の館』を訪れていた〃灰〃は、早速フィンに出迎えられていた。

「ん」と素っ気ない返事をして、フィンに応接間まで案内される。そこに揃っていた幹部達と主神ロキの前で、〃灰〃は訪問の目的を口にした。

「少しばかり時間は経ったが、報酬を支払いに来た。

『火の時代』のあらゆる要素を取引する〃ソウル売買〃——その契約を、貴公らと結ぶ」

〃灰〃は契約のために用意した羊皮紙をフィンに手渡す。周囲から覗き込まれながら内容を確認するフィンは、とある項目に目を留めた。

「〃灰〃、この【スキル】の発現というのは一体何かな？ 前回リリルカ・アーデから聞いた取引の内容には、こんな項目はなかった筈だ」
「ああ。それは最近出来るようになった〃ソウルの業〃だ。『火の時代』に由来する力を、【スキル】として発現させる。内容は選択できるし、欠点デメリットも排除出来る、中々に画期的な業だと思うぞ」

「……設定金額は一人につき五万ソウル……〃ソウル売買〃の相場は知らないけれど、少なすぎやしないかい？」

「そうか？ 五万ソウルは、『偉大な英雄のソウル』を砕いた時に手に入るソウル量だ。

『火の時代』においては、『特別な異形のソウル』を除いては、最もソウル量に優れた物。『偉大な英雄のソウル』と引き換えに得る力としては、妥当だと思うがな」

「………実はラウル、あの『死闘』に加わった仲間にも、突然【スキル】が発現したんだ。内容も、おそらくは君に関係している。

それがこの【スキル】であると、見ていいのかな？」

「ん？ ああ……そうじゃないか？ 元より【スキル】の発現など出来るとは考えていなかったし、私と関わっている内に勝手に生える事もあるだろう。

私と交流がある貴公らにも、いずれ芽生えるやもしれん。ならば敢

えて取引する事ではないとも言えるな」

「そういう事じゃないんだけど……まあいいや。君の無関心は、今に始まった事じゃないからね」

的外れの回答をする。『灰』に苦笑するフィンは、ロキやリヴェリアに契約内容を確認させて署名する。さらさらと共通語コイネーで書かれたサインを確認して、『灰』はソウルによってそれを二枚に増やし、一枚を懐に入れた。

「さて、これで契約は成立だ。早速だが、欲しい物品はあるか？」

『灰』がそう問うと、途端に幹部の若手勢——テイオネを除く——が身を乗り出し、口々に要望を叫ぶ。

「はいはい！ あたし武器ほしー！ 重くてでっかくて強いやつ！」

「あの双剣……『月光の双剣』つつつたか……？ 寄越しやがれ……！」

「【スキル】……！ 【スキル】、欲しい……！ 頂戴、アスカ……！」

「……チツ!!」
ワイワイと騒ぐアイス達に隠れるように、テイオネは全力で舌打ちする。最初からずっと『灰』を睨み続けるアマゾネスを何処吹く風と、『灰』は取引の対応をしようとした。

それを中断させたのが、『ロキ・ファミリア』の三首領だ。

「待て待て、そんなに詰め寄るなお主ら。話はまだ終わってないじゃろうが」

「そうだぞ。少しは慎め、お前達。『未知』を前に気が逸るのは分かるが、事前の準備はしっかりしなくてはな」

「その通りだ。取引自体はするつもりだけど、幾つか規則ルールを決めなくちゃならない。際限なくやってしまうと、『灰』にも迷惑がかかってしまうからね」

「そやでーみんなー。焦るのはしやーない！ うちかてめっちゃ期待しとる！ でもアスカたんは逃げも隠れもせえへんから、まずは息を整えよーなー？」

ロキの茶化しも入り、アイス達は渋々引き下がった。やれやれと首

を振って、フィンは改めて「灰」と向き合う。

「さて、それじゃあ規則を決めようか。君はぼつたりとかそういうのはしないと思うけど、危険を承知で伝えない事があるかもしれないからね。」

商品の詳細な説明、危険性の明示、他の手段の提供——その辺りを詰めようじゃないか」

「心得た」

こつくりと頷いた「灰」は、フィンと規則の仔細について話し合うのだった。

「ねーフィン、なんで指輪と武器だけなの？ あたし、もつと色々欲しかったのに」

「仕方ないんだ、テイオナ。最初の取引だからね、慎重に事を運ぶに越した事はない」

「でもでも」

「しつげえぞバカゾネス。灰、野郎に頼ろうって事自体がそもそも間違ってるっつーの」

「ぶ〜！ ベートだってあの綺麗な双剣買ってたくせに〜！」

「それ以外に興味なんざねえっての……おいアイズ、何時までも落ち込んでんじゃねえ〜！」

「【スキル】……私の、新しい【スキル】……欲しかった……」

「アイズ。気持ちは分かるが、今回は諦める。【スキル】の発現なんて代物は、早々に活用するには不明な点が多すぎる」

「ラウルの様子を見る分には、問題なさそうじゃがのう。本人は人間性というやつがよく分からんようじゃが」

「一応聞いてはみたけど、どうも意味が多岐に渡る言葉らしい。灰、曰く、「拾って貯蓄出来る」らしいけど……ラウルに説明して貰うしかないかな、これは」

「……【スキル】……」

「アイズ、いい加減にきなさい！ あんな奴に頼ったってしょうがな

いでしょ！ それより団長、そろそろ……」

「ああ、うん。そうだね、ティオネ。それじゃあ皆、続きを始めようか。

——あの戦争遊戯における、『灰』の真意。推測だけれど、それを話しておこう」

フィンが手を鳴らすと、幹部勢は静かになる。皆が皆、真剣な表情で臨んでいるのを見渡して、フィンは言葉を切り出した。

「まずは前回までを振り返ろうか。あの戦争遊戯で見せつけられた『灰』の実力、それについての意見は出尽くしているね？」

「……アスカ、強い……すごく、すごく強かった……」

「ああ、とんでもねー『力』の持ち主だった。クソツ、あの『灰』野郎……あれだけ強^{っえ}くせに、ナメた真似しやがってツ……」

「ベートの感想はもういいよー！ すごかったよね、アスカ！ あんなに武器も魔法も使ってたよー！」

「……癪だけれど、私より格上って思わされたわ……あんなに強いなんて、思わなかった……」

「敵に対する冷酷さは特筆に値するだろう。アスカはあまりにも、無慈悲に過ぎる」

「儂はあの眼が印象的じゃったな。山のような覚悟をした、強^{つわもの}者の眼じゃった。ありゃあ梃子でも動かせんぞ」

幹部達は口々に印象を語る。あの戦争遊戯^{ウォーゲーム}で視認した、アスカの強さ。その特徴、力、何より強さを見せつけられた彼らは——だがしかし、ある同じ思いを抱いていた。

「そこまでにしておこう。これ以上は前回の焼き直しだ。」

僕も彼女の、『灰』の強さは認めている。特にあの光景——世界さへも塗り替えた、あの終末の景色には——皆、思うところがある筈だ」

『……………』
「けれどそれは、一旦隅に置いておこう。確かに、『灰』は強かった。僕らの想定を遥かに超えて。」

けど同時に、こうも思った筈だ——『灰』は決して、倒せない相手じゃあないと」

フィンの断言に、一同は目を逸らさない。思い思いに抱いていたそ

の印象を、フィンは解説する。

「『灰』を無力化する手段は、戦争遊戯ウオーゲームでも答えは出ていた。

殺せないなら、縛ればいい。自決をも封じる完全捕縛、それこそが『灰』に対する答えだ。

彼女は、何度でも蘇る。本人の口振りではデメリットがあるようだったけれど、おそらくそれを無視できる段階に入っている。

殺す事は出来るだろう。けれどそれには意味がない。だったら拘束し、時間稼ぎをして——『灰』の目的そのものを潰すしか、手段はない。」

「……フィン」

「ああ、心配しないでくれ、アイズ。勿論そんな手段を取る気はないさ。僕らにその理由はないし——使命もくてきを失った、何をするかも分からない『灰』を相手にするなんて、そんなのは御免被るからね」

眉を下げるアイズにおどけるようにフィンは言って、表情を再び引き締める。

「これは他の『ファミリア』も辿り着いている結論だろう。『灰』は、『最強』ではあるのだろうけれど、決して『無敵』じゃない。

弱点はあるし、手段もある。出来るかどうかは別として、僕らには確かに、その選択肢が存在するんだ。

けれど、もし——そう思わせる事が、戦争遊戯における『灰』の目的だったのなら——話は変わってくるだろうね」

『……!?!?』

何気ない、けれど確信の籠もった呟き。それを耳にした一同は驚愕し、真っ先にリヴェリアが声を上げる。

「待て、フィン。戦争遊戯ウオーゲームのあの所業は、アスカの示威行動だったと結論が出たのではなかったか？」

「最初はそうだったよ。けれど違和感があった。そして今日、改めて『灰』と話して、疑問が湧いたんだ。

『灰』は強い、それは分かり切っているのに、どうして僕は倒せるなんて思っているんだろうってね」

その言葉に、ハッと目を見開く一同。陰で親指を強く握りしめ、

フインは続ける。

「彼女の脅威は、その得体の知れなさだ。探ろうとしても、分からない。見た目からは判断がつかない。霧のような佇まいと、向こう側から覗いてくる眼。それだけが僕らに分かる全てだった。」

そこに表出した、「灰」の強さ。「灰」が見せた、強いだけの姿。それが全てだなんて、どうして言い切れる？

これがオツタルだったら、こうは思わないだろう。僕らは彼の強さを知っているけれど、だからこそ、簡単に倒せるなんて思わない。

なのに「灰」に対しては、強いと分かっているのに倒せると考えている。それは、あまりにもおかしな話じゃないか」

「……つまり、アスカの脅威は、あの強さだけではないという事か？」
「違うよりヴェリア。この際、戦争遊戯ウォーゲームで見せた強さなんかどうでもいいんだ。」

重要なのは、彼女の、「灰」の本質は、あの強さ以外にあるという事なんだよ」

強い意志を湛えたフインの言葉に、一同は難しい顔をする。強さ以外にこそ、「灰」の本質がある？　まるで煙に巻かれたような問答だ。

けれど、あるいは、それこそが——顎を掴まえていたガレスは、髭を撫で下ろし、唸った。

「確かに、考えてみれば変な話じゃ。儂らはずっと、「灰」の底知れなさを警戒していた。何が出てくるか分からない——まるで迷宮ダンジョンのようじゃとな。」

にも関わらず、分かりやすい強さを見せつけられて、それが「灰」の底だと勝手に思っておった。あの眼に宿るものが、その程度ではないと分かっておった筈なのに」

「そうだ、ガレス。彼女はその力を開示したようで、その実何も見せちゃいない。不死性に身を任せ、力のままに暴れ回る、怪物のような姿を晒しただけだ。」

それでどうして、「灰」を知ったと言える？ 『技』も『駆け引き』もない、力を振るいながら殺されるだけの光景で、「灰」の何を知っ

たと言える？

——そうだと。『灰』は、強さを見せつけたんじゃない。隠したんだ。

『灰』の本質を、霧の向こう側に佇む者の正体を、彼女の抱える、あらゆる未知数の『手段』を。

『灰』は強さという一枚の手段を見せ札にする事で、僕達を欺いた。

人類と神々の見つめる、戦争遊戯という大舞台で、堂々とね」

フィンの結論に、全員が絶句する。同時にそこには、ある種の納得もあった。

『灰』が、あの程度である筈がない。強さという輝きに隠れていた感情を、彼らは思い出したのである。

「——アスカたんは、かわいいそうな子や」

そんな中、ぽつりとロキが呟いた。

「あの子は神々が、愛せなかった子。神々が傷つけて、何もかも奪ってしまった子。」

神々はその子の事を、なーんも知らなかった。目の前に現れても気付かへんで、馬鹿やって試して、灰色の髪を引っ剥がしてあの子の抱えるもんを見定めようとした。好奇心と、快楽を満たすためにな。

本当に、阿呆な話や……あの子の本当の姿は、神々の罪そのものやった。神に傷つけられて、利用されて、捨てられた……一人の小さな子供の、成れの果てしか、そこにはおらんかった。

嫌んなるよなあ……全知全能、超越存在を気取っておきながら、たった一人の小さな子供さえ、神々の誰も愛せなかったんやから。

……その存在さえ、知らなかったんやから……

せやからもう、神々には何も出来へん。せいぜい自分の司るやり方で、あの子を愛したいと願うだけや。

あの子が望むのなら、命だつて差し出す。それくらいでしか、償えへん。神々は……うちは、少なくともそう思つとる。他の神も、きつとそうやろうな」

ロキは、薄く笑っていた。それは常日頃の、道化の女神らしからぬ、

消え入りそうな自嘲の笑みだった。

子は、神々の言葉の真偽を見抜けない。けれどそこには、確かな後悔と——愛情があるのだと、眷族は直感的に理解した。

「……………まっ、そーいう訳や！ アスカたんに関しては、うちに期待するのはやめた方がえーで！ 下手に関わると、天界に送還されるどころか普通に殺されてまうやろしな！」

「不吉だぞツ、ロキ！ ……冗談でも、そんな事を言うのはよせ……………」
「なはは……………ごめんなあ、リヴェリア。ごめんなあ、みんな」

『ツ…………』

「そこまでしておこう。これ以上は不毛な話だ。〃灰〃もきつと、こんな話は望まないだろう。」

さて、戦争遊戯ウォーゲームに関する〃灰〃の真意、もとい推測については、全て話した。ここからは、僕らが〃灰〃とどう接していくべきか議論しよう」

感傷的な空気を、フィンは打ち払う。そして「ロキ・ファミリア」の今後を決める建設的な話を、幹部達と重ねていくのだった。

同時刻。「ロキ・ファミリア」との取引を終えた〃灰〃は、帰り道である人物と対面していた。

「お久しぶりです、アスカ様。少し、時間を頂けないでしょうか」

「……………構わんが、用件は手短に済ませるがいい——アミッド・テアサナーレ」

暗い銀色の眼を細める〃灰〃の前に立つ、迷宮都市屈指の『治療師』ヒーラー。【戦場の聖女】と呼ばれる少女は、〃灰〃を連れて雑踏を進んでいった。

「それで、用件は何だ」

アミッドと〃灰〃は路地裏に立っていた。

「人目につかない場所で話しましょう」と言ったアミッドに「ならば当てがある」と〃灰〃が先導した結果である。

周囲に人の気配はなし、念の為〃霧〃も張っている以上、話が漏れ

る可能性はなかった。

「……用件は、これを渡す事です」

緊張した面持ちのアミッドは、一度大きく深呼吸をして、懐からアイテムを取り出す。それを受け取った「灰」は検分し、まぶたを僅かに見開いた。

「貴公、これは……」

「——『女神の祝福』。そう呼ばれる回復薬を参考に生成した品です。【ロキ・ファミリア】の【剣姫^{けんき}】から預かった物ですが、元を辿れば貴方の物と聞きましたので。」

……代わりにはならないでしょうが、差し上げます。どうか、受け取ってください」

そう言つて頭を下げるアミッドは、悔恨を眉間に刻みながら、言葉を続ける。

「……私では、『深淵の呪い』を殺す事は出来ませんでした。為し得たのは、この体に取り込んだ呪いを、どうにか減少させただけ。」

大本を断つ事は、出来なかった……そうしてしまえば、人は死んでしまうと、悟つたからです」

目を強く閉じて、アミッドは沈黙する。それも次の瞬間には見開かれ、胸に手を当てて「灰」に宣言した。

「けれど！ けれどいつか、人は呪いを克服できる！ 病に、呪いに、傷に苦しむ人々の全てを、救う事が出来る！」

——私はそう、信じています。だからそれを、受け取ってください。『深淵の呪い』を殺せずとも、この手が届く限りがあつても——私は決して、諦めるつもりはありませんから」

「……」

「用件は、それだけです。最後まで聞いて頂き、ありがとうございます。沈黙を保つ「灰」に今一度瞳を閉じて、アミッドは背を向ける。それは決別ではなく、宣誓。

「待て」と「灰」は声をかけた。

「待て」と「灰」は声をかけた。

「何でしょう、アスカ様」

「……まさかな……貴公がこれ程の物を作るとは、予想すらしていなかった。

やはり私には、見る目がない。貴公は本当に——素晴らしい聖女だ」

「……？ あ、ありがとうございます……？」

「ああ、済まない。要領を得ない言葉だったな。

貴公の実力を見せて貰った。ならば私も、応えねばなるまい。

貴公、【戦場の聖女】、アミッド・テアサナーレ。

——私の下で、【奇跡】を学ぶ気はないか？」

その「灰」の言葉を、アミッドは測りかねていたが。

真意を聞いた時、聖女の瞳は見開かれ——力強い領きと共に、彼女達は路地の闇へと消えていった。

聖女の祝福

聖女テアサナーレが祝福した聖水

HPを全回復し、異常を癒す

また呪いの蓄積を減らし、亡者状態を解除する

迷宮都市の聖女と名高いテアサナーレは

生涯をかけ、不死の呪いに挑んだ

これはその努力の一端であり

ついに為しえなかった名残という

夕刻。ヘスティアの宣言に従い、『竈火の館』^{かまど}に帰還した『灰』は、
「ヘスティア・ファミリア」総出である場所に向かっていた。

あまり人気のない、みすばらしい店——ヘスティアの知己である老人が運営する書店である。

ヘスティアの頼みで奉仕活動の一環として書店の整理を始めた一行の中で、アスカは黙々と作業を行っていた。

「——君がアスカちゃんかい？」

「そうだが、何用か」

そうしていると、老人の店主が声をかけてくる。作業の手を止めず対応するアスカに、けれど老人は柔らかく笑っていた。

「いや、用ってほどのもんじゃないけどね。ヘスティアちゃんから、君の話はよく聞かされていたもんだから、話してみたくなったんだよ」

「そうか。まあ、好きにすると良い」

「そうさせてもらうよ」

「よっこいせ」と椅子に座る老人に、アスカは興味を示さない。手早い動きで淡々と整理する少女は、老人の話聞き流していた。

「——フッフ、やっぱり君は、ヘスティアちゃんの眷族だこどもねえ」

しかし、その言葉だけは聞き逃がせなかった。思わず手を止めるアスカは、老人に冷たい銀の半眼を向ける。

「どういう事だ？」

「いいや……こんな年になるまで本を扱って来たからね、その分だけたくさんの人を見てきたんだ。

だからかな、その人が本をどんな風に見ているかで、少しはその人の事が分かるんだよ。

君はいい子だ。どんなに古い本でも大切に扱ってくれる。きつと

君を育ててくれた人は、何かを大切にすることを、教えてくれたんだねえ」

「……どうかな。私は何時だったって、それを踏み躪る事が出来る」

「けど、やらない。そうだろう？　少なくとも無意味には、そんな事はしないはずだよ」

「……意味があれば、するのだろうさ。私はそうやって生きてきた」

「うん、うん……君の手は、きれいなようでボロボロだ。たくさん、たくさん……苦労して来たんだね。」

「……だけどね、アスカちゃん。これから、そうである事はないんだよ」

「……それでも私は、為すべき事のためにそれをする。それこそが、私の決めた道だからだ」

「うん、うん……アスカちゃん、またおいで。今度はおすすめの本を、教えてあげるよ」

「……ああ。また、来る」

それつきり、アスカと老人は喋らなかつた。静かな店内に、幼女の作業する音だけが聞こえる。

けれど、それを見つめるヘステイアは。確かにそこに、温かなものがあると気付いていたのだ。

翌日。

アスカはヴェルフと共に鍛冶を行っていた。

ヴェルフのスキル、【エンバール残火双楔】を検証するためだ。

「……成程な。貴石の数だけ組み合わせは可能、同じ貴石を重ね強化する事も出来る。」

貴石の相性によっては効果が増減する事もある。確かめるには、さらなる検証と実践が必要だな」

「ああ……そりゃあいんだがよ、姉御……少し休ませてくれ……流石に疲れちゃった……」

現存する貴石の数は十九。【エンバール残火双楔】による『二重変質強化』の派生には、単純な計算では三六一通りの組み合わせがある。

それをたった数時間に凝縮され、ひたすらに鍛えさせられたヴェルフの体力はもう限界だ。既に槌を握る力もない青年は、鉄床アンヴァイルの側にへたり込んでいた。

「そうだな。貴公はよく働いた。暫しの休息を設けるべきだろう」
アスカはその手に炎を灯し、「ぬくもりの火」を発動させる。

狭い工房の中に、ふわりと暖かな火が浮かび上がる。それに照らされ、徐々に回復するヴェルフの視界に、ふとアスカの左手に灯る炎が過るよき。

「……なあ、姉御。その『炎』……一体何なんだ？」

「ん？」

「姉御の左手に燃えてる『炎』の事だ。ただの『炎』、って訳じゃないんだろ？ 確かに燃えているのに、姉御の肌を焼いていないんだからな」

「ああ、これか。《呪術の火》と呼ばれる魔法の触媒だ。『呪術師』における杖、とでも言えば分かりやすいか。

ふむ。そういえば貴公には、まだ【呪術】を教えていなかったな。丁度良い機会だ、貴公に【呪術】を仕込んでおくとしよう」

アスカがそう口にする、ヴェルフは途端に嫌そうな顔をする。

「姉御……あんた俺に、『呪詛師』ヘクサーになれってのか？」

「『闇術師』？ いいや、『呪術師』バイロマンサーだ。」

【闇術】は、この時代の人類には扱えん。人間性も、『ダークソウル』も、意志を見出すにはまるで足りない。

学びたくても学べるものではない。だから、【呪術】で我慢する事だな」

「ああ、そうかよ……たまにズレるよな、姉御は……」

思考を放棄して大の字に寝転がるヴェルフに、アスカは近付き、《呪術の火》を分け与える。

《呪術の火》が肉体を焼かぬのは、それが体の一部であるから。『呪術師』は師の火を分け与えられ、初めて火の制御を学ぶ。

『呪術』とは、憧憬にして火への畏れ。文明から離れ、原初を目指す求道の術は、きつとヴェルフの鍛冶に役立つだろう。

そう聞かされ、いまいちピンとこないヴェルフは、けれど至極真剣にアスカから【呪術】を学んだ。

鍛冶師と火は、相性が良い。特に「火の親方」と称されるヘファイストスの系譜であるヴェルフならば、そこに有用性を見出す筈だ。

アスカがそう考え、【呪術】を教えていると、ふと思いついたようにヴェルフが言った。

「そういうえば、ヘファイストス様が姉御に会いたいって仰ってたな。なんでも、武器を見せてほしいとか」

「——ヘファイストスが？」

「ああ。言っても急ぎじゃないし、姉御の都合に合わせるらしい。何時でもいいとも仰ってたな」

「……そうか」

ヴェルフから言い渡された唐突な話に、アスカは内心首を傾げる。とはいえ、今は【呪術】の教えの真つ最中。師としての振る舞いを優先し、一先ず隅に置くのだった。

その武器を、ヘファイストスは見つめていた。

見窄らしい、半ばより折れた、一振りの直剣。闇に濡れ、零れ落ち、深淵を吹き出すその刃を、鍛冶の女神はじつと見つめる。

数秒か、あるいは数分か。短い時間は、けれど確かに、女神が降臨した時間だった。無意識に神威しんいの片鱗を漂わせるヘファイストスは、ふう、と透明な息をつく。

「……ひどい武器だわ。刃はボロボロだし、柄もガタガタ。とても実用に耐えうるものではない。」

こんな武器を使っている人がいるなら、私だったら引つ叩くわ。いつまでもそんなガラクタに頼ってないで、ちゃんとした武器を使いなさいって。

……けれど、もしこの武器を作ったのが、私だったのなら。きつと鍛冶師冥利に尽きるでしょうね。

だって、この武器は——ずっと主を支え続けた、唯一無二の半身で

すもの——」

隻眼に想いを秘めるヘファイストスは、重い瞬きをゆっくりと行い、そつと刃を机に置く。

それを無造作に握ったのは、折れた刃の主人にして半身——“灰”であつた。

「そうだな。仮に私のソウルを錬成する機会があるのなら、この刃を生み出せるだろう。

『ダークソウル』に染まり、穢れ切った剣だ。ツルギけれど、だからこそ、私はこれを生涯の友とした。

……運命、とでも言うのだろうか。神に裏切られ、喰らい、怨讐えんしゅうを誓ったあの時に。

この折れた刃は、確かに私の前に現れたのだ。打ち捨てられた、残骸の中にな」

「……………」

“灰”の言葉を、ヘファイストスは重く受け止める。眼前に立つ小人は、確かなる神々の罪。

ヘファイストスとて、例外ではない。鍛冶の女神もまた、気付けなかった。

アスカの裡に、今も燃え盛る。全てを分かち、焼き尽くす——『最初の火』の存在を。

「……ああもう、やめましょう。感傷なんて柄じゃないわ。

何より、貴方はそれを望んでいない。『炎の写身』ヴァルカン……いいえ、アスカ。

貴方は、貴方で在り続けなさい。必要なら手も貸すわ。もつとも、貴方は私の手なんて、借りたくないのでしょうけれど……………」

「……………」

視線を下げるヘファイストスに、“灰”は沈黙をもつて答えとす。一度瞳を閉じた幼女は、それを契機とするように別の話題を持ち出した。

「それで、ヘファイストス。こちらの『魔剣』の出来はどうだ。

ヴェルフとの合作だ。私としては、相応に良い武器に仕上がったと

思っている」

「……ヴェルフの打った『魔剣』を素体に、貴方の鍛冶技術を注ぎ込んで新たに打ち直した『魔剣』、ね」

つう、とヘファイストスは机に置かれた『魔剣』に指を滑らせる。霧がかかった灰色の刀身は曇っており、光を鈍く反射する。

ヘファイストスの目は本気だ。鍛冶神として、「火の親方」として、一切の容赦なく『魔剣』を見定めている。

手に取り、隅々まで目を走らせ、沈黙するヘファイストス。鍛冶師にとつては長い時間、されどただの武器打ちである。『灰』には短い時間が流れ——ヘファイストスは口を開いた。

「……一歩及ばず、というところね。この『魔剣』は、貴方の色が強すぎる」

真剣な表情の女神は、そつと刀身を撫でながら品評する。

「武器の出来は確かに良いわ。私でも片手間に打てるような代物じゃない、それだけの『執念』が込められている。

けれどこの『魔剣』は、持ち手の事をまるで考えていない。誰に使われてもいいように調整されてるし——誰に使われなくてもいいように打ち捨ててある。

貴方、この『魔剣』を打った時、失敗してもいいって思ってたでしょ。物は試し、どうせやってもやらなくても結果は変わらないから、実験台に使おうって。

だから、一歩及んでいない。『至高』には届かなくても、『極致』に至るだけの素地はあった筈なのに……貴方はこの子を、見捨てたのね」

「ああ。私は武器打ちだからな。一定以上の仕上がりには興味がない」

「……鍛冶師でないと言うのなら、私から言うべき事は何も無いわ。一歩及ばず……この『魔剣』の評価は、それだけよ」

「そうか」

差し出される『魔剣』と評価を受け取った『灰』の言葉は、それだけであった。鍛冶師ならば一喜一憂する文字通りの『神の言葉』でも、

武器打ちである「灰」にとってはさして価値のある言葉でもない。

そんな「灰」の態度に、ヘファイストスは何も言わなかった。常日頃の彼女なら小言の一つでも零していただろうが……「灰」に対しては、その資格がない。一柱の神として、ヘファイストスはそう思っていた。

用件を終えた「灰」は、『魔剣』をソウルに還そうとする。「灰」は、ヘファイストスに「貴方の武器を見せてほしい」と頼まれてこの場にいる。それを達成した以上、この場に留まる理由もなかった。

「ほう、これが件の『魔剣』か。どれ、手前にも一つ見せてくれ」

けれど、ソウルに『魔剣』を還す前に、ひよい、と後ろから誰かが『魔剣』を取り上げる。ついで頭に乗せられる、重たい二つの感触。物置にされる「灰」は、ちらりと上を見上げて——双丘に阻まれて

何も見えないが——古鐘の声を擦り鳴らした。

「何用だ。椿・コルブランド」

「んー？ いやなに、今日は久々に本拠で武器を打つかと思っておいたら、たまたまお主を見かけてな。追いかけてきただけの事よ」

「つけていたのは知っている。私が問うているのは、なぜ『魔剣』を取り上げたかだ」

「なんじゃ、ケチケチするな、減るもんじゃあるまいし。主神様には見せたのじやろ、ならば手前がついで見ても問題なからう」

「……」

「ほうほう、これが戦争遊戯ウォーゲームで使っておった『魔剣』か！ うむ……やはり、手前の知らぬ技術が詰め込まれておるな……クツクツ、久々に血が滾る！」

「灰」の沈黙を納得と受け取ったのか、前屈みの椿ツバキは少女の頭から胸をどかし、本格的に『魔剣』を検分する。それに「灰」は無言のまま、ただ待つ事にした。

それから暫く。心底楽しそうに『魔剣』を見つめていた椿ツバキは、ふと表情を消して言葉を紡ぐ。

「なあ、「灰」」

「何だ？」

「手前にお主の鍛冶技術を教えてはくれまいか？」

「断る」

「そうか」

短い言葉の応酬。即断で椿^{ツバキ}の提案を拒否した。灰^{ツバキ}は、再び沈黙する。

椿^{ツバキ}もまた、無言に戻った。表情を消したまま『魔剣』を眺める。フドワーフの鍛冶師は、言葉と共に『魔剣』を灰^{ツバキ}に返す。

「どうしても駄目か？」

「断る」

「手前の全てを差し出しても？」

「三度は言わん。私と貴公は、お互いに興味がない。

貴公が私に武器など打ちたくないと思っっているように、私は貴公の武器に何の価値も見出していない。

これ以上は、時間の無駄だ。だから貴公、言葉を重ねてくれるなよ」

「……」

声を交わしながら、灰^{ツバキ}は『魔剣』をソウルに還す。そして出ていこうとしたが——その直前、不意に椿^{ツバキ}が笑い始めた。

「……フフ、ククク……アーツハツハツハツハツハツハツハツ!!」

——知らぬ間に、自惚れておったか。手前もまだまだ精進が足りないな」

「……」

「手前の全てを差し出せばどうにかなると思っっておった。積み上げた研鑽、至った高み……それがお主の眼に合うだろうとな。

まったく、ひどい勘違いよ。ヴェル吉には教えているのだ、手前にも教えるだろうと賢しら顔で考えていた自分を殴ってやりたいわ!

……手前では、造れぬ。その『魔剣』に値する武器など、未熟なこの身に届く域ではない。

それでも……——それでも、この『執念』だけは捨て切れんのだ。だから、頼む。

手前に、お主の鍛冶技術を教えてくれ。

お主が積み上げた、その全てを。どうか手前に譲っておくれ」

笑声を上げ、口元を抑え、遣り切れないように言う椿は、「灰」の前で膝を突き、渾身の土下座を披露した。

「灰」には、何の感慨もない。価値なき者の嘆願など、それこそ何の価値もない。

だが、椿の単眼に燃え盛る『執念』を見ていた「灰」は。薄く、透明な息を吐いて、椿に言葉を突きつけた。

椿・コルブランド。先にも言ったが、私は貴公に興味がない。

ヴェルフは、そもそも私の家族だ。そうだったからには、私が手間を惜しむ理由はない。

だが貴公は、家族でもなければ、有能な鍛冶師でもない。見るが良い、この『魔剣』を」

ソウルから再び『魔剣』を取り出した「灰」は、顔を上げる椿の前にそれを掲げる。

「これは、私の時代にすらなかった『魔剣』だ。

ヴェルフが『クロツゾ』だから生まれたのではない。ベルの助けになりたいと願うヴェルフの意志の結実が、この『魔剣』を作り上げた。

貴公は、これを超えられるか。超えたとして、先へ進めるか。『火の時代』を極めながら、この時代の『至高』に手を伸ばせるか。

聞かせてみる。椿・コルブランド。

貴公の腕が——この『魔剣』《灰右衛門》に値するのかわ

「必ず及ぶ。超えてみせる。手前はただ、そのために——……ん？」

お主、今何と言った？」

「聞かせてみる。椿・コルブランド。

貴公の腕が——この『魔剣』《灰右衛門》に値するのかわ」

「……………」

「……………ヴェルフ……………」

思わず真顔になる椿の横で、ヘファイストスは頭痛が痛そうに額を抑える。

しばらく、無音の時間が流れた。対面したまま静止する二人と、元眷族のネーミングセンスを嘆く一柱。

やがて。再起動した椿は「はあ~~~~つ……」と長い溜息をつき。

土下座から立ち上がった、パンパンと埃を払う。

「ヴェル吉のせいで気が抜けたわ。何じや、あやつの壊滅的な感性は」
「そうね……こればかりは擁護出来ないわ……。」

……アスカ、ヴェルフは多分、もう一つ名前をつけていたでしょう？」

「ああ。《灰輪》の事か？」

「今後はそう呼んであげてちょうだい。流石にその『魔剣』が可哀想だから」

疲れたように話すヘアリストスに「分かった」と「灰」は頷く。
心なしか強く光を反射する《灰輪》を振ってソウルに還し、部屋から出ていこうとする椿に声を掛けた。

「椿・コルブランド」

「ん、何じや？ 気でも変わったか？」

「いや。だが、貴公の決意は変わるまい」

「まあな！ 覚悟しておれよ、灰よ！ 手前は一度こうと決めたらしつこいからな！」

「知っている。鍛冶師とは、頑固な生き物だ。」

だから、これを渡しておく。私からの『宿題』だ」

「灰」は机に眼をやり、そこにソウルの光を収斂させる。何もなかった机に青白い光が輝き——幾つかの貴石と、『楔石の塊』が現れる。

「これは貴石と呼ばれる。《灰輪》に施した二重変質強化に必要なもの、そして『楔石の塊』が変化したものだ。」

貴公には、この『楔石の塊』を何らかの貴石に変えて貰おう」
「！」

「出来るとは思っていない。期待もしていない。これは『火の時代』にあつてごく限られた場所では精製されなかった『秘法』、私も多くは知らぬ業だ。」

その製法以外では、貴石の内包する力に由来する場所では見出す事は出来ない。貴石とはそういった、希少な強化素材である。

だが……私の眼は、節穴だ。つい最近も、そうである事を見せつけ

られた。

だから、貴公、椿・コルブランド。貴公に私は『宿題』を渡す。『楔石の塊』を、貴石へと変えてみせろ。

貴公にそれが出来るのなら。『火の時代』の鍛冶を教えてやるのも、吝かではない」

「——フツツ、成程な。これは手前への挑戦状というわけか……！」

良かろう、受け取ろう。『灰』よ！ 手前が、手前こそが、お主の期待に応えてやる!!」

「ああ。まあ、頑張れよ。先にも言ったが、私は期待していない。

せいぜい足掻いてくれ。貴公の意志が折れるまでな」

そう言つて、やる気に満ちる椿を眺める。『灰』の眼は、ぞつとするほど冷たいままだ。

『灰』は本当に期待していない。出来るとは思わない。これは絶対的に己を曲げぬ鍛冶師を誘導するための撒き餌でしかない。

けれど。不死の眼は確かに節穴で、物事の本質を見抜く審美眼など持ち合わせていない。

だから、あるいは、成し遂げるかもしれない。早速^{ヘファイストス} 神と議論する椿を後目に部屋を出ていく。『灰』は、心からそう思う。

迷宮都市で生まれし、新たな貴石。

『神秘の貴石』は、歴史に消えた『愚者』がもたらした。

『不壊の貴石』は、最硬精製金属の内に見出された。

叶うならそれに並ぶ、新たな貴石が生み出されん事を。己の物欲に従う不死は、ただそう思うのだった。

——こうして、彼らの日々は流れて行く。

何もしていない訳ではなかった。ベルは歓楽街で『少女』に出会い、命はその手を掴もうと足掻いていた。

助けようとした。救おうとした。少年達の意志は確かに本物で、運命に抗おうとした。

けれど。

飄々と動いて己の目的を達しようとする伝令神ヘルメスは、「ヘステイア・ファミリア」と接触しようとはしなかった。

淫蕩の宮殿、その最上階に君臨する美の女神イシユタルは、フレイヤのお気に入りである少年に手を出そうとはしなかった。

全ては、「灰」が現れたが故。神々の罪、その証たる小人の出現が、神々の手を引かせたのだ。

悔恨か、罪悪感か。あるいは、ただ——愛情なんて代物のために。

狂った齒車は回り続ける。時は無情に前へ進み、立ち止まる事を許さない。

少年の抵抗も、少女の献身も、全てを引き砕いて回り続ける。

——そして、運命の日。満ちた月が、廻る世界に訪れた。

産声

事の発端は、何だったろうか。

命が「春姫殿ミコトを救いたいのです！」と頭を下げたからだろうか。

リリルカが「他派閥に不用意に関わってはいけません！」と止めたからだろうか。

ヴェルフが「勿論協力する。なんたって家族だからな」と笑ったからだろうか。

ポックは「お人好しの団長め」と呆れ半分、好ましき半分だった。

ポットは「気持ちは分かりますけども……」とリリルカに近い立ち位置だった。

ルアンは「本当にしないよな？　大派閥に喧嘩を売るなんて……!？」と怯えていた。

ヘステイアは「いざとなったらボクの渾身の土下座で……！」と気持ちだけは一人前だった。

そして、ベルは。

「あの人を——春姫ヘルヒメさんを、助けたいです」と、純粋な眼差しで誓った。

ああ、きつと「灰」ならば。それは少年の意志によつてのみ成立したのだろう。

けれど、それがアスカなら。今ばかりは少しだけ、違うのかもしれない。

ほんの、少しだけ。家族を想うその心が、不死の裡に芽生えたのかもしれない。

——どうでもいい事だ。己の変容、精神の変質。そんなもの、「灰」には何の興味もない。

ただ、己が掲げた使命を全うするために。「灰」は、ヘルメスを呼び出していた。

「やあやあ、アスカちゃん。遅くなってごめんね」

複雑な隘路あいろの一角に建つ、喫茶店『ウィーシエ』。

待ち合わせの場所をそこに指定された“灰”は、帽子を取って正面の席に座るヘルメスに眼を向けた。

「遅かったな、貴公」

「それでも忙しい時くらいある身でね。でもアスカちゃんのお誘いなら断らないぜ？」

それで、用件は何だい？　いくらでも聞こうじゃないか」

「『イシユタル・ファミリア』と、その眷族と思しき狐人ルナール、サンジヨウノ・春姫ハルヒメについての情報が欲しい」

「——やっぱりそれかあ」

「あちやー」とヘルメスは天を仰ぐ。両手で顔を覆う男神は、すぐに前へ体を乗り出して指を組んだ。

「情報はある。それもアスカちゃんが欲しがってる情報もがピンポイントで。」

ただ……教えたくない。というか教えられない。

これを口にしたら、俺は君に殺されてしまうからね」

「……ベルの『試練』に関わるか」

「残念だけど、そうなる。」

俺も腹黒い神だからさ。『誰』に『何』を渡すかで、舞台裏から糸を引きたがってしまう。今回の件に限って言えば、君に——『ベル君』に『春姫ちゃんハルヒメの情報』を渡して、不穏分子の「イシユタル・ファミリア」を排除する、みたいな筋書きはどうしても考えてしまうんだ。

だから、教えられない。俺の望む望まざるに関わらず、事態はとつとくに俺の予測通りに動いてしまっている。ここで情報を渡すのは、ベル君に『試練』を課してしまう事になるし——何より、君を傷つけてしまう。

それだけは、絶対に避けたい。ごめんね、アスカちゃん——『不死狩りハハの鎌剣バキ』ちゃん。

たとえばベル君に、『英雄』になって欲しいと願っていても。それだけはもう、絶対に出来ないんだ」

「……」

儂い笑みを纏うヘルメスは、隠さず全てを開示した。

己の思惑、ベルへの願い、〃灰〃への想い。それを一切飾らぬ言葉で、眼前の不死に差し出した。

気に入らない。〃灰〃はつくづくそう思う。最近の神はどいつもこいつも、同じ目でこちらを見る。

悔恨、憐憫。そして、■情。〃灰〃には理解出来ぬ感情で、〃灰〃には理解出来ない行動をする。

本当に、忌々しい事だ。ずくりと、胸に蠢く感情を無視して、〃灰〃は深く、嘆息する。

「分かった。ならば契約だ。」

私は貴公に手を出さない。貴公は私に手を貸すがいい。

ベルへの『試練』——それを私への『試練』として受け取ってやる。報酬は払おう。だが一度目だ。貴公の謝罪の先払いをもって、この契約を呑んでやる。」

「……いいのかい？」

「そうしなければ、貴公は情報を吐かんだろう。実に、実に癪に障る話だが……ベルのためだ。ならばこの程度は、呑み込んでやる」

「……分かった。この契約を受け入れよう。済まない、そしてありがとう、アスカちゃん」

自分本位に提案しておきながら、それで手を打ってやると傲岸不遜に言い放つ〃灰〃であったが、ヘルメスは真摯に、それを受け入れた。

その態度に腹が立って仕方ないのだが、〃灰〃に手を出す事由はない。胎の底を曝け出す眼前の神の醜さに反吐が出そうになりながら、

〃灰〃は情報を受け取った。

「何だって!?! 狐人の子が、『殺生石』の生贄にされる!?!」

『竈火の館』に戻ったアスカは、ヘルメスから聞き及んだ情報を話していた。驚愕するヘステイアに、灰髪の少女は言葉を続ける。

「【イシユタル・ファミリア】の目的は、おそらくサンジヨウノ・春姫の持つ【魔法】だ。どのような魔法かは知らないが、極東では【妖術】

とも称されるそれを団員全てに与えようとしている。

その代償は、サンジヨウノ・春姫の『魂』。その『儀式』が行われるのは、満月の夜——つまりは、今夜だ」

「そんな……!? だってもう、月は昇って……!?」

窓から空を見上げる命が、愕然と口にする。迷宮都市にはもう、夜が降りている。満月が天高く昇るまで、時間はない。

その事実には皆が閉口した。情報を集めるため援軍としてやってきた「タケミカツチ・ファミアリア」の千草は、さあつと青くなつて倒れそうになり、桜花に抱き止められる。そうする巨漢の青年も、とても平常心とは言えなかった。

「一体、どうすれば……! 時間があまりにもない……!」

「タケミカツチ様……今すぐにも、助けに行かなければ!」

「ちよ、ちよと待てよ命!? そんなの出来るわけないだろ!」

「無理です、無茶です、ありません!? 相手はあの「イシユタル・ファミリア」ですよ!? 私達にどうにかなる相手じゃない……そんなの分かり切ってるでしょう!」

「じゃあ何だ!? 俺達に見捨てろって言うのか!」

「落ち着いてください、ヴェルフ様!? ポット様に当たっても何も解決しません!? 何か、何か方法を考えないと……!」

「……もう無理だよ……こんなの、助けられねえって……オイラだつて、見ず知らずでも見捨てたくねえけど……どうしようもねえよ……」

狂乱する彼らの怒号に、弱々しいルアンの眩きが、いやに大きく零れ落ちる。それに一同は、沈黙するしかない。

あと一時間もない状況。相手は屈指の巨大派閥。そんな有様で、何処にいるかも分からない狐人を助け出す?

不可能だ。そんな事、分かり切ってる。けれど、それでも——不可能を覆せる者は、確かに一人、ここにいます。

沈黙する皆の視線が、一箇所に集まった。そこに佇むのは、無表情の幼女。時代の『頂天』に立つ力を秘めるアスカは——その凍てついた太陽のような眼を、呆然とする少年に向ける。

「ベル。貴公は、どうしたい」

「え……？」

「私は貴公の家族だ。貴公が行くというのなら、私は常に側にいる。だが、貴公も、私も、家族が増えた。もはや我々だけの責任はなく、行動全てが、家族に重くのしかかる」

「っ……」

「その上で、あえて問おう。ベル、貴公はどうしたい。

貴公のためなら、私は捨てられる。貴公のために、全てを尽くせる。だから貴公が、選ばねばならんだ。私はそれを、待ち続ける」

そう口にして、幼女は沈黙した。託された少年——ベルは、震える体で周囲を見渡す。

「神、様……」

ヘステイアは、呻くように名前を呼ぶ少年に、笑みを浮かべた。君を信じる。そこにはベルへの、全幅の信頼があった。

「リリ……」

リリルカは、駄目ですと叫ぼうとして、思い留まった。

誰も手を差し伸べてくれない辛さを、少女は知っている。少年に助けられたリリルカは、ベルが手を差し伸べないのは、嫌だった。

「ヴェルフ……」

ヴェルフは、無言で己の胸を強く叩く。

俺達に構うな。突っ走れ！「ヘステイア・ファミリア」の兄貴分は、少年の背中を後押しする。

「命さん……」

命は、継るようにベルを見ていた。眦に涙を溜める少女の希望は、少年ただ一人しかいなかった。

「ポックさん……」

ポックは、苦虫を噛み潰したような表情をしている。

常識では不可能な、ありえない選択。それをしそうな少年を前に、彼は拳を握りしめている。

それでも——団長はお前だと。ポックは試すように、ベルを見ていた。

「ポットさん……」

ポットは、青い顔で首を振る。

それは紛れもない彼女の本心だ。巨大派閥に喧嘩を売るなんて、馬鹿を超えて自殺行為でしかない。如何に例外がいるとはいえ、この恐怖は拭えない。

けれど、だからこそポットは涙を堪え。貴方に託しますと、ベルを見た。

「ルアンさん……」

ルアンは、俯いていた。

この中で諦めているのは、ルアンだけだ。誰もが一縷の望みをベルに向ける中、ルアンは少年を信じる事が出来なかった。

ルアンが信じるのは、ただ一人。ベルではなく、アスカに顔を向けるルアンは——その銀の瞳に映る少年を、確かに見た。

「みんな……ごめんなさい……」

少年の唇から、言葉が零れ落ちる。広がるのは安堵か、諦念か、絶望か。

それが場の空気を支配しようとした瞬間。少年は——ベル・クラネルは、眦を決した。

「——それでも僕は、助けたい」

『——！』

決断したベルの表情に、目を瞠る一同。

代表するかのように、アスカが問う。

「【イシユタル・ファミリア】は、サンジヨウノ・春姫ハルヒメを諦めないだろう。どうする？」

「強くなる。春姫ハルヒメさんを守れるくらい、強く」

「時間がない。『敵』は、それを許しはしないだろう。どうする？」

「逃げる。逃げて、逃げて、強くなって——いつか必ず、迷宮都市メイキョウに戻ってくる」

「私ならば、全ての禍根を断てる。どうする？」

「アスカ。僕は、みんなで助けたい」

「そうか」

アスカは眼を閉じ、薄く微笑み、それを消し去って振り返る。

「そういう事らしい。さて、貴公らはどうする?」

「——たくつ、マジでダメダメな団長だな、あんた! バカじゃねーの!?!」

「あたつ!?! ポ、ポックさん!?!」

ベルの足をポックは容赦なく蹴った。ついで、皮肉げにニツと笑う。

「でもま、アスカ様が家族だつていう団長様なら、それくらいが丁度良いや。ダメでも、バカでも、頼りなくても——あんたみてーに真つ直ぐなヤツは、嫌いじゃないぜ。ベル」

「……!・ポックさん!」

「……フフツ。ええ、そうね。私も、ポックと同じ意見。

行きましよう、ベルさん。とつても、とつても怖いけれど……私達は、家族だから。

それに、万が一傷物になっちゃったりしても……責任、取ってくれますよね?」

「ええつ!?! ポ、ポットさん!?!」

「ウフフツ! 冗談ですよ! 冗談! ベルさんったら、カワイイ人ね♪」

悲壮感は、もうなかった。賑やかになる家族の姿を、アスカはただ見続ける。

ポットに食つてかかるヘステイアとリルカ、桜花^{オウカ}と拳をぶつけ合うヴェルフ、千草^{チグサ}と共に命^{ミコト}がベルへ涙ながらに感謝する。

ルアンだけは、不安そうにこちらを見つめていた。それに応えないアスカは、一つ手を叩いて注目を集め。端的に『作戦』を口にした。「時間もない。速攻で方を付けるぞ」

アスカの提案した『作戦』はシンプルだった。

全員に【飛翔】を施し、空を飛んで歓楽街に『侵入』。

上空から『儀式』の場所を見つけ出し、奇襲によって『殺生石』を

破壊するというものである。

『殺生石』の詳細はヘルメスから聞き、タケミカヅチが補完した。原料である『鳥羽の石』は、月の光に左右される。ならば『儀式』の場所は空を仰げる、天高き場所である可能性が高い。

ならば上空から探索すれば、闇雲に走り回るより『儀式』の祭壇を見つけられるだろう——その予想は当たっていた。

「発見した。あそこだ」

水平移動を止め、滞空するアスカが静かに指差す。

女主の神娯殿、その別館にある『空中庭園』に、多くのアマゾネスと一人の狐人の姿があった。

狐人——春姫は既に鎖に繋がれ、青白い光に満ちる祭壇は、次第に赤く発光していく。

時間は、もうない。だからアスカは、一言のみ発した。
「行くぞ」

古鐘のような声を同時に、【飛翔】を施された者ともども一気に速度を上げる。

誰かの悲鳴が漏れる。当然だろう、空を飛ぶなんて行為に慣れていない彼らには、自由落下より速い高速移動なんて恐怖に等しい。

それを無視して、アスカはただ一点を指していた。

『殺生石』。それが柄頭に取り付けられた儀式剣を狙い、襲撃。

「!? なんだあ、一体いゝゝ!?」

それを唯一察知したのは、第一級冒険者、Lv.5のフリユネ・ジャミール。

春姫に被害が及ばぬよう、最低限の威力として《レイピア》を装備したアスカの一撃を、フリユネの大戦斧が弾く。

「なっ……!?」

「【焼尽者】!?」

「——敵襲だ!! 全員、構えな!!」

着地するアスカ。驚倒するアマゾネス。それを一喝して統制するのは【麗傑】、アイシャ・ベルカ。

次々と空中から現れる、【ヘステイア・ファミリア】と【タケミカヅ

チ・ファミリア」。

剣が、ナイフが、戦斧が、大朴刀が。刃を交え、火花を散らす。月が満ちるまで、ごく僅か。短い攻防戦が、始まった。

詠唱^{ウタ}が聞こえる。

フリユネと真正面から打ち合うアスカは、ヒキガエルのようなアマゾネスの向こう側で鎖に繋がれた狐人^{ルナル}が紡ぐ詩^{うた}を耳にする。

美しい詩だ。儂い詩だ。彼女の瞳に映る、絶望の世界に捧げる祝詞のような。

アスカには何の感動もない。ただ、その詩は確かに不死の『未知』であり。

遂げられてはならない。行動指針に詠唱の中断を追加する少女は、だがフリユネに阻まれ動けないでいた。

「ゲゲゲゲゲゲッ!? 行かせないよオ、【焼尽者^{スコイチャ}】！」

フリユネが嗤う。想像よりも遥かに弱い手応えに、第一級冒険者は明確に少女を見下している。

対し、アスカは。ただ執拗に、フリユネ・ジャミールという『初見』の敵を見定めていた。

必要なのは、確実なる『殺生石』の破壊。

一刻を争うこの戦いにおいて、僅かであろうと不確実な手段を行使する訳にはいかない。

だから、数十秒。月が満ちる限^{ぎりぎり}限^{ぎりぎり}まで、アスカはフリユネを観測した。

その強さ、癖、戦法と策略。全ての『未知』を『既知』に変え、絶対の『排除』を敢行するために。

数十秒で十分だった。それだけの時間武器を交えれば、『致命の一撃』を叩き込むだけの猶予は捻り出せる。

フリユネが油断している状況も良い。闇雲に飛び込んで『殺生石』を破壊するより、よほど勝算のあるやり方だ。

——それは「灰^{アスカ}」の悪癖だった。本来であれば、圧倒的な地力の

差に任せた暴力を振るう事こそ、この場における『最適解』。

襲撃以前に、空中から弓矢か魔法による破壊でも十分だっただろう。第一級冒険者の感覚を欺き、春姫を危険に晒さない。その対処法は確かにあった。

だが、不死たる「灰」はそれを選ばない。選べない。無数の敗北を積み重ねた膨大な経験が、『手段』を有する不死の手足を縛る。

「灰」は只人だった。凡人だった。卑小で、弱く、愚かしかった。そんな『凡愚』の判断が、『最適解』を導き出せる道理などないのだ。そして——春姫は。

「大きくなあれ」——【ウチデノコヅチ】

旋律の果てに生まれた魔法を、フリユネに向かって行使した。

時の歯車は、無情に回り続ける。

もしも春姫が、もっとベルと話していたら。命の言葉を聞いていたら。

諦め、秘めて、水面に沈めた本当の願いを、口にする事が出来たら。

こんな事は起こらなかったのかもしれない。

けれど、狐人の少女は。

我が身を省みず、助けに来てくれた少年の姿に。こちらへ手を伸ばす、少女の涙に。

それだけで救われたと、錯覚してしまった。

薄汚れた娼婦の身には、たったそれだけで十分だと。

最期は、笑おうと決めた少女は——自らを殺す者へ、魔法を明け渡しってしまった。

歯車は、回り続ける。

フリユネの解析を終え、『致命の一撃』を叩き込もうとしたアスカの攻撃は、春姫の魔法によって強化されたフリユネの速度に引き千切られる。

春姫を巻き込まぬよう、力を最低限に抑えていたのが仇となった。隙を晒したアスカは、耳障りな哄笑を上げるフリユネの大戦斧に抉り抜かれる。

宙を飛ぶ、灰髪の幼女。壁に叩きつけられ、絶命する不死の末路。その最期。意識を手放す一瞬に。アスカは、胸を貫かれる春姫ハルヒメを、ただ見ていた。

雨が降っている。

数秒か、数十秒か。瓦礫の中で蘇生したアスカは、曇った空を見上げていた。

いつの間にか、分厚い曇天が空を覆っている。あんなにも輝いていた月の光は、もう見えない。

それに何の感慨もなく、むくりと、幼女は体を起こした。ガラガラと音を立てて崩れる瓦礫を押し分け、空中庭園へ帰還する。

全ては、もう終わっていた。

アマゾネスの姿はない。仲間が倒れ伏している。おそらくは、第一級冒険者リクネの暴威に一蹴された家族は、ただ一点を見つめている。涙を流す者がいた。やり切れないと拳を握る者がいた。ああ、やっぱり無駄だったと、諦めている者がいた。

その間を歩きながら、アスカは一箇所をただ目指す。役目を終えた祭壇の、中央に崩れ落ちた一人と一つを。

少年は、泣いていた。己の無力を噛み締めながら。

少女は、最期に微笑んでいた。それでも救われたのだと、慰めるように。

ありふれた、残酷な物語の結末だ。仮に「もしも」を願ったとしても、それで結果が覆る事はない。

時は無情に、進み続ける。歯車はただ、回り続ける。

「ベル」

——そうだとも。まだ、回っているのだ。

まだ何も、終わってなどいない。それを悟っている不死は、厳然たる事実を口にした。

「私ならば、サンジヨウノ・春姫ハルヒメを黄泉帰らせる事が出来る」
僅かな間の後。少年が、顔を上げる。

暗い目だった。涙でぐしゃぐしゃになり、潰れそうな心が映っている。このままでは、きつとベルは折れてしまう。

それでもいい。そうでなくともいい。アスカには、どちらでも構わない。

「だが、そのために。私はこの歓楽街を、炎で焼き尽くすだろう」

これは、きつと『天秤』だ。

少年に課する、価値の『天秤』。少女か、それ以外かを問う不死の瞳に、少年以外は映っていない。

きつと、ベルには分からない。これからアスカが為そうとしている事の、その暗き業の果てを。

それでも問うのは、残酷な事なのだろう。選ぶのは、貴公だと。アスカはただ、押し付けているに過ぎないのだから。

だからこそ、これはベルが決めなくてはならない。

アスカが——『灰』が、全てを捧げるのは、ベルただ一人。

それ以外を救う事に。『灰』は、何の興味もないのだから。

「……けて、ください……」

嗚咽を漏らす少年は、絞り出すように声を上げる。

「……助けて、ください……！」

少年の心に影を落とすであろう選択を、不死はただ見続ける。

「——春姫^{ハルヒメ}さんを、助けて……アスカ……！」

その言葉に。絶望であろうとも縋るしかないベルの声に、アスカはただ眼を細め。

「分かった」

それだけを口にして、『灰』は空中庭園から消失した。

ペーレト・バピリ
女主の神娼殿、その最上階。

宮殿の主たる女神の神室^{しんしつ}で、イシユタルは沈黙していた。

報告を受けたその表情には、イシユタルらしからぬ憂いが秘められている。

「……そうか。『深淵^{アプス}の子』が現れたか」

「はっ。如何なさいますか？」

「……放っておけ。『儀式』が終わったのなら、フレイヤとの抗争も目前だ。お前達が構う必要はない」

「畏まりました」

窓から歓楽街を見つめるイシユタルは、青年従者を下がらせる。神室しんしつに一人、窓辺に近づくイシユタルは、降り注ぐ雨をただ眺めていた。

「……なあ、『深淵の子』。お前は、私の愛を受け入れるか？」

問いかけるように独り言を呟き、否、とイシユタルは否定する。

あの子供が、神の愛を受け入れる筈がない。あれ程までに傷つけられ、神々を憎む子供には。

受け入れられるのはきつと、最初から寄り添い、暖かな心で照らし続けた悠久ヘステイアの聖火だけだ。己に資格などないと自嘲しながら、それでもイシユタルは想う事を止めなかった。

「……ん？」

だからだろうか。イシユタルの視界に、小さく灰色が翻る。

窓の外、降り注ぐ雨の中、別館の頂上に——誰かいる。

生まれより伸びる灰色の髪。闇に浸したような長衣。

彼方を見つめる、凍てついた太陽のような眼。

『深淵の子』……？』

イシユタルが呟く。その手は無意識に伸ばされ、触れようとしているかのようだった。

同時に、佇む小人の手も、前方に伸ばされる。

「さて……」

ベル達の前から消えた「灰」は、歓楽街を見下ろしていた。

夜に咲き誇る淫蕩の園。それを眺める灰色の小人は、漂うソウルの匂いを嗅ぎ分けている。

『殺生石』に封じられ、砕け散った春姫ハルヒメの『魂』ソウル。それは百以上に分裂し、歓楽街の方々へと現在進行系で散っている。

取り戻す事は出来る。『灰』個人であろうとも、それは達成できる事項だ。

問題なのは、時間だ。

『灰』のみであれば、おそらく年単位の時間を要する。上手く行けばもつと短いだろうが、『灰』は己の能力を過小評価しかない。

百以上にバラけた、それぞれがLv.3以上の冒険者。その上でフリユネが纏つたのと同じ、絶大な強化をもたらす春姫の『妖術』を扱える。

その全てを倒し、集め切るのは苦勞するだろう。元より不死とは、何度でも繰り返す化け物。

何度でも、何度でも。時間が許す限り死トライ・アンド・エラー合輪廻を続行するのが、不死の強みである故に。

限られた時間の中で、最大の結果を得る。それを苦手とする『灰』は——己の持つ大いなる二つの『手段』、その片方を切る事にした。

「ヨーム」

ソウルを振るい、解き放ち、従える。

小人の狂王の伝承は、ただそののみが伝わっている。

ソウルを振るい——それが小人の狂王の半身、《折れた刃の一振り》
ならば。

解き放ち——それが小人の狂王の咎、深淵を広げる闇術たる〔反逆〕
ならば。

従えるとは、一体、何を指すのだろうか？

『火の時代』は、知っている。

何処いずこかより現れ、放浪し、啜り続けた蚕食者。小人の狂王が、何を
したのかを。

その下卑た笑みを浮かべる口で、喰らい続けたソウルどもを、どう
したのかを。

【青教】【青の守護者】【狂王の烙印】【法官の契約】。

汚染され、歪められた【誓約】は。それを刻まれたソウルどもを、【狂
王の侍従】とした。

——霊体の、強制召喚。

それこそが、小人の狂王の——暗い業の正体である。

地響きが、迷宮都市を襲った。

都市を揺るがす文字通りの震え。大地の上げる唸り声に、眠りにつ
いていた者達は飛び起きる。

何事かと、まだ夜に蠢いていた者達も外に飛び出し——絶句する。

都市の南東、歓楽街が、燃えている。

炎がまるで壁のように、歓楽街を囲っている。

その向こう側。女ベイルト・バベリ主の神ベイルト・バベリ娼殿のすぐ側で。

——『火の時代』を繋いだ『薪の王』は、全身を焼かれながら『産
声』を上げた。

「——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオツ!!!」

その咆哮に、都市中の人類の魂が震えた。

「な、何だ……この叫び声……!?!」

立ち上がる、炎の影。女主の神娼殿をも超える身の丈を、目撃者は恐れた。

「巨人!? モンスター!?!」

「何だありやあ……『ゴライアス』、なのか……?」

冒険者は足を止める。炎の先、咆哮する『巨人』。歓楽街で今、ただならぬ事が起こっていると。

「ウラノス、これは!?!」

「……ああ。動いたようだ。もはや、誰にも止められん」

都市の創設神、ウラノスは静かに、愚者へただ『事実』を告げる。

「……アスカ君……」

そして、『竈火の館』で、眷族の帰りを待つヘステイアは。

吹き上がる炎の中に、確かに愛おしい小人の姿を見て。

また、一人だけ傷つくつもりなのかいと。己の拳を握り締めた。

歓楽街は大混乱に陥っていた。

突如として現れた、燃え盛る『巨人』。女主の神娼殿を超える全長の

巨大な怪物は、その手に塔ほどもあろうかという巨大な大鉈を握っている。

燃え盛り、炎を撒き散らすその威容。装備を纏い、頭部に王冠を掲げるその異様。

何もかもが既存の怪物と違うその姿に、けれど人々は逃げ惑った。

——何よりも、その咆哮と。燃える炎の奥に宿る、『薪の王』たる証の瞳に。

その『巨人』が、何かに『敵意』を向けていると分かってしまうから、彼らは怯え、逃げるしかなかった。

しかし、それは叶わない。

歓楽街を囲う炎の壁——それが人々を一人たりとも逃さない。

炎上覚悟で飛び込んだ冒険者も、ことごとくが弾かれる。

外界を断つ、拒絶の炎。

逃げられないと、人々が悟ったその時に。

『巨人』の咆哮は、再び大地に轟いた。

今は遠き『火の時代』。消えかけた『最初の火』を再び灯すために、『王』となった者達がいた。

『最初の薪の王』——「太陽の光の王、グウイン」より続く、薪の系譜。

その身に『王』たる力を宿し、その『器』をソウルで満たす。その資格があろうがなかろうが、望もうが望ままいが、彼らは焚べられ、『火』の安寧を保つ贅となった。

『薪の王』。そう呼ばれる者達は、『最後の薪の王』たる「灰」に至るまで幾人も現れた。

「罪の都の孤独な王、巨人のヨーム」

歓楽街の中心で、「巨人ヨーム」は咆哮する。

巨人の呼び名に相応しく、その体はただただ巨大だ。歓楽街で最も高い建物である女主の神娼殿ペーレト・バビリを超える体軀は、それだけで見上げる者を睥睨し、圧倒する『力』がある。

その巨腕が、振り被られる。傍目にはゆっくりと、しかし信じられない速度で上昇する二つの巨腕は、塔ほどの大鉈を両手で握り、大地へ振り下ろす。

瞬間、爆砕。巨人から溢れ出る炎が、その体軀に身を任せた一撃が、巨大な地震となって歓楽街に襲いかかる。

『夜の街』を満喫していた冒険者も一般人も関係なく、ただの娼婦も戦闘娼婦バーベラも見境なしに、歓楽街中の人々は炎の熱に炙られた。

広がっていく、『開戦の狼煙』。『最初の火』に焼かれる「巨人ヨーム」は、雄叫びを上げ続ける。

「ファランの不死隊、深淵の監視者たち」

歓楽街の南で、突如として棺が溢れ出た。

百以上を超える、棺の波。それは建造物を破壊しながら積み上がり、やがては一つの塚の如く、山となって沈黙する。

朦々と吹き上がる煙、さらなる事態に追い打ちされる人々。狂乱の最中にある彼らは、その瞬間だけは狂乱を忘れ、ただただ目を見開いた。

立っている。煙る向こう側に、無数の人影が。

彼らは皆、燃えている。音を立てて炎に巻かれながら、無感動に立ち上がっている。

大剣と短剣の二刀流。風にはためく薄汚れた血錆の外套。不吉を象徴する、不死隊特有の長兜。

「深淵の監視者たち」は続々と棺の中より立ち上がり、狼のように疾駆した。

四方八方へ飛び、屋根伝いに翔ける監視者たち。彼らは一様に、深淵の兆しあらば異形と戦ったかつてのように、ある物を探して奔走する。

春姫の『魂』を秘めた、『殺生石の欠片』。それを持つ戦闘娼婦は、突然の事態に順応する暇を与えられぬまま、不死隊との交戦を強いられた。

「深みの聖者、神喰らいのエルドリッチ」

歓楽街の東側が、暗い深みに沈んでいく。

地より染み出し、溢れ出で、広がっていく深みの泥。それは深海より鳴り響く音のように押しでは引き、触れた建造物を引きずり込んでいく。

人も、例外ではない。一度でも足を取られたら、逃れる事はもはや出来ない。悲鳴を上げ、助けを懇願しながら、彼らはゆっくりと深みに沈んでいく。

その中から。どろりと、それは現れた。

溺れた豚のように膨れた、蕩けた汚泥の巨塊。もはや形なく、蛭かナメクジにしか見えないその物体は、ずるずると真黒の体を引きずつ

て地上へと這い上がる。

その節々には明らかに、人の骨が紛れていた。蛆が湧き、深淵に食い荒らされ、残骸となった成れの果て。大量の人骨と同化した深みの汚泥は、無音のまま進軍を開始する。

「神喰らいのエルドリツチ」の動きは緩慢だ。見境なく万物を飲み込みながら進むそれに、無謀にも挑戦しようとする者もいた。

『殺生石の欠片』を使用した戦闘娼婦^{バレーベラ}。一時的にL.V.^{レベル}の壁を超え、より高次の、より神々に近い『器』へと昇格した彼女は——即座にエルドリツチに捕食される。

響く絶叫は、徐々に小さくなって消えた。捕食の瞬間のみ人類の認識^{げんかい}を引き千切るエルドリツチは、己の使命を遂行し続ける。

「血統の末、王子ロスリックと兄王子ローリアン」

歓楽街の西の屋根に、いつの間にか彼らはいた。

街中に燃え盛る火を、中心に聳える女主の神娼殿^{ペイレト・バベリ}を見上げるローブの男。5M^{メドル}はあろうかという体で小さく蹲^{うずくま}る彼の肌は青白く、痩せ細っている。

明らかに病人のそれである姿をローブの陰に隠す彼を、逃げ惑う人々の幾人かが発見する。中には戦闘娼婦^{バレーベラ}も含まれ、明らかに歓楽街に馴染みない存在を、敵かと即座に判断した。

しかし、飛びかかる戦闘娼婦^{バレーベラ}は——炎の一閃によって全員弾き飛ばされる。

ローブの男の足元、街路に現れたるは、デーモン殺しの刃。「王子ロスリック」の剣にして、分かち難い呪いの半身である「兄王子ローリアン」は、炎の剣を地面に突き立て、声なき声を張り裂ける。

直後、ローリアンの足元が光り輝いたかと思うと、鎧を纏う6M^{メドル}の巨軀が瞬間移動し、デーモンの燻る残り火を宿す大剣が振り払われた。

周囲を建物ごと両断し、焼き払う一撃。それは連続で振るわれ、破壊の波を広げていく。

兄王子が倒されぬ限り、王子の出番はない。ロスリックは首を擡げ、女主の神娼殿別館^{ペイレト・バベリ}の頂上に立つ灰髪の不死を、倦んだ瞳で見上げ

ていた。

「灰」は、その光景を眺めている。自らも『薪』となり、燃え盛りながら。

その右手に折れた刃の姿はない。火を起こすのに、闇は邪魔だ。燃え続ける限りは、遙か彼方でひっそりと、消える時を待っていてほしい。

だから握るのは、《最初の火の剣》のみ。左腕が燃え、装いも狂王のそれとなり、『薪の王』として君臨する「灰」は——背後の存在へ声をかける。

「王たちの化身」

螺旋の大剣が燃え立つ篝火の前に鎮座する、焼け熔けた鎧の『王』。
「貴公は、好きにしろ」

そう言つて飛び降りる「灰」にまるで反応せず、『化身』と呼ばれる存在は、不動と沈黙を貫いていた。

霊体の、強制召喚。

「灰」の持つ大いなる力、絶望を覆す最も強力な『手段』、その二つの一つ。

もう一つの『手段』とは、戦争遊戯ウォーゲームで見せた『火の時代』を顕現する力だ。

火と闇を統べる『王』となり、万象を焼き尽くし、飲み干す力。それは平時に振るうには余りにも強力で、故に使い勝手が悪く、早々用いられる事はない。

『霊体の強制召喚』も同じである。如何に「灰」が『火の時代』の蚕食者であり、その身の裡に無数のソウルを蓄えていようとも、それを一つ一つ強制召喚するのは面倒極まる。

何より、強制召喚した霊体は今の「灰」では制御出来ないという一点においても、安易に使うべき力ではないだろう。

それでも「灰」はこの手段を選んだ。外界を断絶する炎の壁で歓楽街を『檻』に変え、そこに『薪の王』達を解き放つという暴挙を。

「灰」の全ては、ベルのために。最終的に全ての『殺生石の欠片』が集まりさえすればいいと考える不死は、自らも蒐集するべく動き始めた。

「……駄目です、フレイヤ様。突破出来ません」

炎の壁に渾身の【魔法】を撃ったオツタルは、眉間に亀裂を刻みながら苦く言った。

「そう。貴方でも無理なら、しようがないわね」

「申し開きも有りません。この罰は、如何様にも」

「いいわ。きっと、あの子の仕業ですもの。だから、私は赦す。貴方自身は赦さなくてもね」

「……………」

柔い風のようなフレイヤの言葉を受け止めるオツタルの表情は暗い。普段、巖のような鉄面皮を保つ武人の顔には、僅かだろうと苦渋が滲んでいる。

フレイヤ率いる眷族達が立つのは、歓楽街の内側。彼らは足を踏み入れたとほぼ同時に炎の壁で外界と遮断されてしまった。

同行している【女神の戦車】、【白妖の魔杖】、【黒妖の魔剣】、

【炎金の四戰士】がそれぞれの武器、魔法で炎の壁を攻撃するも、まるで通じていない。

「やめておきなさい。その炎は、一種の『理』よ。」

空に雲があるように、花が風に散るように……『現象』そのものを書き換える力なんて、個人が持ち得るものじゃない。

あの子くらいになれば、話は別なのでしょーうけど……少なくとも『今』の貴方達に叶う事ではないわ」

『ツ……………!!』

「だから、前を向きなさい。『彼ら』をその目に焼き付けなさい。

この時代に、神に依らない『本物の英雄』がいるとするのなら。そ

れはきつと、ああいうものよ」

フレイヤは、眼前に広がる光景を見つめながら呟く。燃える歓楽街、屋根を走る狼の影、彼方に広がる深み、女主の神娼殿ペーレト・パベリを超える巨人、ひっそりと紛れる双子の魂。

綺羅びやか、などという言葉さえ焼け落ちる炎の中で、それでも彼らは動き続ける。器みも魂こころも焼き尽くされながら、消えぬ意志ソウルでそこに在る。

その『色』を、悲痛に暮れる銀の双眸で、決して目を逸らさず。

「行きましょう」

己の罪を受け入れる美の女神は、眷族と共に歩き出した。

気に入らない。気に入らない。気に入らない。

アレン・フロームルの機嫌は最悪だった。

ここ最近、彼を苛立たせる事柄が多すぎる。

この歓楽街もそうだった。生来の狩人、獣人であるアレンにとって、歓楽街の甘ったるく生臭い空気は鋭敏な感覚を刺激し過ぎる。

今は焼け焦げて多少マシになっているとはいえ、それで根本が変わるわけではない。今にも唾を吐きそうな猫キャットピブル 人の青年は、だかもっと気に入らない事があった。

「ぎゃああああああああああああつ!？」

耳障りな悲鳴と共に、何かが眼前の建物へ激突する。当然のようにフレイヤを庇うアレンは、剥がれ落ちるように倒れるアマゾネスに眉間を決裂させた。

「ぐっ……クソツ、チクシヨウツ! 何なんだ、アレは……!？」

「おい。今すぐ失せろ、糞」

「え——ひいつ!? 【女神の戦車】ツ!? 【フレイヤ・ファミリア】ツツ!？」

血を流すアマゾネス、戦闘娼婦バーベラは突き出された槍の持ち主と、その背後に驚愕する。

遅い。あまりにも遅過ぎる。認識も危機感も、まるで足りていな

い。

率直に言つて、アレンは切れていた。些細な事でも逆鱗に触れるほど、彼の意識は荒んでいる。

ああ、もういい。数秒も時間を無駄にした戦闘娼婦に、これ以上の慈悲をアレンは与えなかつた。著しい殺気、Lv.6の本物の殺意。

それをようやく察知した戦闘娼婦は、這う這うの体で逃げ出そうとするが——都市最速の槍が放たれるよりも速く、狼の牙が戦闘娼婦を食い千切る。

それは地を飛んで現れた。彼方から炎の軌跡を残し、滑空するように、第一級冒険者の感覚を引き千切つて飛来した。

大地に短剣を突き刺し、アレン達の眼前に着地するまでに一度。吹き荒ぶ火の粉が消えるまでに一度。

瞬く間に二度の連撃を食らつた戦闘娼婦は、その剥き出しの腹を燃える大剣で貫かれ、意識を手放していた。

ずるりと、大剣が引き抜かれる。血も内臓も零れ出ない。腑ごと焼かれた戦闘娼婦は、Lv.故に絶命に至る事はなく。

その手に握り締められた『殺生石の欠片』を、長駆の不死隊、「深淵の監視者」はゆっくりと奪い取つた。

そして。その長兜をアレン達に向け、淀んだ瞳でじつと見つめる。暫しの後。「深淵の監視者」は興味を失くしたように、彼らから離れていった。

「……………ツツツ!!!」

ギシリと、アレンの剥き出しの歯から軋む音が響く。

侮られた。見逃された。確かにアレンを、「フレイヤ・ファミリア」を認識しながら、「深淵の監視者」はそれを障害と見なさなかつた。

銀の槍を握るアレンの手が震える。柄を砕きそうな程の力が込められた腕に宿るのは、恐怖。

都市最大派閥にして冒険者達の最上位に君臨するアレンには無縁である筈の、恥ずべき人の弱さ。それをたつた一度の対峙で強制的に思い出させられたアレンは、『恐怖』を力づくで抑え込みながら、誓つた。

——俺は必ずてめーらを超える。女神に捧げしこの槍で、必ず血祭りに上げてやる……！！

アレンは立ち去る「深淵の監視者」を射殺さんばかりに睨む。その背は確かに、『階層主』のそれを遥かに超える『本物の英雄』の後ろ姿であり。

最も憎むべき、殺さなければならぬ灰髪の小人と被るその背を、アレンはずっと睨んでいた。

ヘディンとヘグニは、燃える歓楽街を気ままに歩くフレイヤの護衛に徹していた。

殲滅する対象は、錯乱して襲いかかってくる有象無象と、崩壊する建築物。常人では逃げ惑う事しか出来ない状況下で、二人は文字通り露を払うが如く平然と歩き、対象を沈黙させる。

だが、その二人を持ってして全力で当たらなければならない『現象』が、今まさに歓楽街に轟いた。

「永伐せよ、不滅の雷将」——【ヴァリアン・ヒルド】

ヘディンは超短文詠唱の【魔法】を解き放つ。ヘグニは既に人格改変魔法を使用している。

燃える歓楽街を光で塗り潰す一条の迅雷が、最強の『己』を召喚した黒妖精の連撃が、迫り来る炎の衝撃波とぶつかり合い、押し負ける。

「ッ——たとえば我が剣が及ばずとも、我が身を呈すに一切の怯懦なし！」

「永争せよ、不滅の雷兵」！ 【カウルス・ヒルド】！

魔法と斬撃を散らしながらなお衰えぬ衝撃波にヘグニは躍り出た。その身が傷つくのも構わず、防御無視の渾身の連撃を叩き込む。

その背後で、ヘディンの魔法が炸裂する。正確無比な操作コントロールによってヘグニを避け、その『魔眼』により見極めた炎の衝撃波の弱点に攻撃を集中。

そこまでしてようやく、衝撃波に僅かな隙間が生まれ、フレイヤに被害を及ぼさない領域を確保出来た。

が憎しみの果てに絶滅した戦争の跡地で女神に拾われ、その責務から解放された。

だが、あの巨人は、逃げなかった。

その背に石を投げつけられて。孤独な王とまで呼ばれて。それでも最後まで、『王』の責務から逃げなかった。

そんな義理はなかった筈なのに。「巨人ヨーム」はその身を薪に変えてまで、『王』で在り続けたのだ。

だから、ヘデインは評価する。だから、ヘグニは羨望する。

あのような様は望まないが、それでもあの巨人のように在れたのなら。

二人が『王』であった過去も、少しは違っていたのかもしれない。大鉦を振り上げる巨人を見上げる二人は、次の衝撃波に備え、それぞれの武器を確と構えた。

ガリバー兄弟の長男、アルフリッグ・ガリバーには、弟達との確かな絆がある。

確かに四人は似たり寄ったりだ。四つ子である事も影響しているのか、互いの考えている事は大抵分かる。

ドヴァリンもベーリングもグレルも生意気な弟だが、その分だけ損をする長兄の役割を、アルフリッグは不幸だとは思わなかった。

先に生まれた兄が、後に生まれた弟を助けるのは当たり前。幼い頃は、女神に拾われるまでは、卑屈な小人族バルウムでしかなかった彼は、だからこそ弟達との絆を大事にした。

自分が弟達を助けているのではない、弟達に助けられているのは自分の方だ。時にはそんな思いさえ抱くアルフリッグは、きつとそうであるからこそ、その『英雄』に目を奪われたのだろう。

歓楽街を自由気ままに歩くフレイヤは、西への道を進んでいた。

当然、警護は眷族達が務める。屋根に登り、周囲を警戒する【炎金の四戦士】は、先の広場で繰り広げられる戦いに見入っていた。「デカいな」

「ああ、デカすぎる」

「何だあの鎧男。デカすぎんだろ」

「小人族ナメてんのか」

示し合わせたように口々に言い合うガリバー兄弟が見ているのは、炎を纏う大剣を振るい続ける王子の一人。

「兄王子ローリアン」は、数十のアマゾネスに囲まれながらも、それを鎧袖一触に斬り払っていた。

『ぎゃああああああああああああつ!!?』

光の粒を纏うアマゾネスの複数の悲鳴が重なる。『殺生石の欠片』を使用する戦闘娼婦は、「イシユタル・ファミリア」が保有する戦力を明らかに超えた動きで戦っている。

だが、相手は更に桁が違った。何処までいっても途上でしかない彼女らでは、一つの極みに至った「兄王子ローリアン」の一撃を視認する事さえ叶わない。

一方的な蹂躪劇は、ローリアンが解き放った光り輝く聖光によって終焉を迎える。歓楽街西の中心近くから炎の壁まで優に届く光の斬撃は、光の壁と見紛う聖光を立ち昇らせ、戦闘娼婦達を完全に沈黙させた。

そこにぽつぽつと、淡い光が灯っていく。戦闘娼婦の握られた手、その内側から上へ昇る光の中には、『殺生石の欠片』が浮かんでいた。それはゆつくりと、徐々に速度を上げ、屋根の一つに集中する。両手を天に差し出したローブの男、「王子ロスリック」の掌へ集まった。

「あのローブ、鎧男の弟だな」

「ああ。顔と形が似ている。病人っぽいけどな」

「それを言うなら鎧男もだろ。足と喉、使えないみたいだぞ」

「……なあ。やっぱり、そうなのか?」

「……………」

グレイルの一言に、他の三人は沈黙する。それは彼らが兄弟だから察知した事だ。

あの兄弟は、呪われている。ガリバー兄弟のそれとは違う、歪で不幸な形の結びつきによって、分かち難く繋がっている。

きつとそれは、兄が病弱な弟を想うが故に、足と喉を差し出したの
だろう。生涯弟の剣となり、その身を守り続けるために。

けれど、それで救われたのは、果たして誰だったのか。アルフリッ
グは思う。

兄は弟を助けるもの。けれど弟が救うのは、いつだって兄だ。

「王子ロスリック」を背負い、一度こちらを見て、路地へと消えてい
く「兄王子ローリアン」。その二人の背中を見つめ、四人兄弟は戒めと
して、それを記憶に刻むと決めた。

オツタルはただ、フレイヤに付き従っていた。

気ままな風のように歓楽街を歩く女神。けれどその瞳は憂いに満
ち、綻ぶような美しい微笑みはなく、表情に影を落としている。

歓楽街を駆ける狼の如き戦士達。中心で今も暴れ狂う巨人。静か
な場所へ消えて行く双子の王子。

そして、西に広がる深みにさえ、女神は痛苦の色を浮かべる。まる
で彼らの存在が、女神の犯した罪そのものであるかのように。

普段のオツタルならば、迷いはなかった。オツタルにとって世界と
は、フレイヤのみ。己が何者かも分からぬまま、寒々しい夜に震えて
いたあの日にその手で抱かれた時から、オツタルが報いようと思える
のはフレイヤしかない。

都市最強、『頂天』、Lv.7。そう讃えられる力をもって、オツタル
は女神に仇なす全てを取り払い、どうかまた微笑んで欲しいと願った
筈だ。

だが、それは出来ない。オツタルの意志が薄弱になったのではなく
……この地に現れた誰も彼もが、オツタルの遥か『格上』だからだ。
それはここにいる仲間達……いや、女神の寵愛を争う同士にして敵
も理解している。

彼の『王』達は皆、凄まじく強い。それこそあの小人、迷宮都市の
『頂天』を塗り替えた灰髪の小人族バルウムにも迫るか、凌駕する力を、どの
『王』であつても秘めている。

それはオツタルにとって許し難い事だ。許せないのは『王』の強さではなく、呪わしい程に弱い己の力。

なんたる脆弱。なんたる懦弱。

この脆すぎる身で、一体何を掴もうと言うのか。

今のオツタルでは、あの『王』達に挑んでも戦いにすらならないだろう。道端に転がる戦闘娼婦のように、有象無象の如く敗れ、打ち捨てられるだけだ。

だからこそオツタルの目は、一点に向けられていた。

炎の檻と化したこの地で、最も強力であろう者。

見えずとも、そこに在るだけで太陽の如き存在を誇示する——『化身』へと。

その気配が一瞬で、オツタルの眼前へ迫った。

「——ツツツ!!」

オツタルは反応した。辛うじて、であろうとも、ただ女神を守るために。

そして向こうは、その気すらなかった。ただ目の前に立ちほだける。それだけで、オツタルを後退させる。

突如として吹き荒ぶ、炎の圧力。アレンを、ヘディンを、ヘグニを、ガリバー兄弟を押し退ける火炎の轟圧。

彼らが数M単位で押される中、オツタルだけは数歩に留まっている。その数歩が、オツタルの追う背中が果てしなく遠い事を今一度理解させられ、巖のような武人の顔に亀裂が走る。

——弱いこの身が呪わしい。この程度で、己は何を掴もうとしているのか。

炎の圧を防ぐので手一杯のオツタルは、それでも渾身を込め、斬撃を繰り返す。

大一閃。そう呼ぶに相応しい斬撃は、けれど圧力を跳ね返す事すら出来ず。

眼前に立つ炎鎧の『王』——「王たちの化身」は、ただじっと、彼らを虚の瞳で見つめていた。

「——あら。ひよつとして、迎えに来てくれたのかしら？」

そんな中。炎の圧力が弱まった瞬間に、するりとフレイヤは前に出る。

止めようとするオツタルを手で制し、『化身』の前に立つ女神。神々の罪、その果てを映す銀の瞳を瞬くフレイヤは、眉を下げ、悲しそうに微笑んだ。

「……そう。ごめんなさいね。——いいえ、ありがとうございます」

傍から見れば、フレイヤの独り言。けれど会話しているように振る舞うフレイヤは、女神を守らんと前に出る眷族達に告げる。

「あの子のいる場所まで案内してくれるみたい。ついていきましよう」

「……お言葉ですが、フレイヤ様」

「いいえ、聞かないわ。だってこれは、神々の罪。わたしたち

いずれ必ず、向き合わなければならぬ罰。ものなら、私は逃げないわ。

たとえその果てに、この命を手放すとしても。あの子から逃げるなんて、私にはできない」

『ッ……!!』

「ごめんなさい、貴方達。だから、一緒に行きましょう?」

この地で最期を迎えるのなら。私は、貴方達と一緒にいいわ」

「……………御身の、御心のままに」

骨が軋む程拳を握る八人は、オツタルは、誓う。

たとえこの身が減びようと。女神だけは、必ずや守り通す。

その誓いだけが、オツタルにできる全てだった。

「駄目っす!?! 歓楽街に続くどの通路も『炎の壁』で通れないっす!?!」

「そうか……………住民の避難誘導は?」

「【ガネーシャ・ファミリア】が率先して対応してるっすけど、歓楽街内には逃げ遅れた住民が多数との情報が……………! そ、それと【フレイヤ・ファミリア】の目撃情報も上がってるっす!」

「【フレイヤ・ファミリア】……………この状況を予見していたのか?」

ラウルの報告に考え込むフィンは、有り得ないと判断する。

如何に神の視座が人智を超えていようとも、全く由来の分からない『未知』を見通す力はない筈だ。

この光景こそ、その『未知』の一つ。背後を一度振り返るフィンは、外界を拒絶する『炎の壁』を見上げる。

「ラウル、引き続き情報収集と避難誘導を頼む。特に「ガネーシャ・ファミリア」との協力は惜しまないようしてくれ」

「は、はいっすー！」

「アキ、「ヘステイア・ファミリア」の本拠ホームの様子は？」

「足の速い数人で調べに行きましたが、神ヘステイア以外は誰もいませんでした。不可思議な力で、内部に踏み込む事はできませんでしたが……」

「十分だ。余計な不興は買わない方がいい。アキは部隊を率いて『見物』に来た神と「ファミリア」を牽制してくれ。誰もが経験した事のない事態だ、何が起こるか分からない」

「分かりました！」

その他、必要な指示を出したフィンは、改めて歓楽街の正門を見据える。

変わらず立ち上る、『炎の壁』。それは燃料もないのに燃え盛り、一向に衰える様子がない。

フィンの親指が囁く。お前はこれと同じ物を見た事がある筈だと。

ああ、そうだ。フィンは見ている。戦争遊戯開戦前ウォーゲーム、シャクティ・ヴァルマを交えた密談をした折に見た『霧』と、これは同じ物だ。

「やはり、君なのか。『灰』」

その呟きは独り言に近く、反応する者はいない筈だった。リヴェリアもガレスも、別の場所で対処に当たっている。

「ああ、その通りだ。我らが『灰』と呼ぶあの不死が、この事態を引き起こした」

だから。突如として降ってきたその言葉に、フィンは目を見開き。

つられるままに正門の上を見上げ——高い門柱に座る、一人の老人と目が合った。

「やあ、君。こんな場所から済まないね。見ての通り、簡単には動けな

い身だ。だから召喚されたこの場所から、失礼させてもらうよ」

「……それはどうも。ところで、貴方は何者かな？」

「クールラントのルドレス」。あるいは「追放者ルドレス」。

君達に馴染み深い名前では……『薪の王』。信じられないかもしれないが、私はあの「灰」と同じ、『最初の火』を継いだ王の一人だ」

「——！」

その言葉に、フィンは目を瞠る。

『薪の王』『最初の火』。それは「灰」の語る物語にも出てきた言葉だ。

古い時代、『火の時代』にまつわる、偉大なる火とそれを継ぐ王の物語。門柱の老人は、その英雄的な業を為した王の一人だという。

「その証拠は？——なんて、尋ねるだけ無駄だろうね。この状況下で平然と第一級冒険者に話しかけられる老人というだけで、尋常でない事は理解できる。」

何より貴方の体に燻る『火』……それは「灰」の体を焼いていたあの『火』と同じものだ」

「ほう、目が良いのだね。それに冷静で、賢くもある。君はきっと素晴らしい勇士なのだろう」

「……それで、貴方がここに居る理由は？ どうして僕に話しかけてきた？」

「前者は足止め。後者は私の自由意志だ。」

私はただ、「歓楽街に侵入しようとする輩の足止めをしろ」と言われ、召喚されただけでね。それに従う理由もないし、それをするだけの力もないんだ。

だからこうして、君に話しかけている。願わくばこの老人の戯言が、君の足を止めるようにとね」

ルドレスの言葉に、フィンは黙考する。

確かに、門柱の老人は力ある『王』には見えない。あの「灰」とは比べるべくもなく、か弱い力しか持たないのは明白だ。

けれどそれは、あくまで「灰」と比べてだ。この迷宮都市最強や、それに準ずるフィン達と比べれば、それは全く違う話になる。

如何にか弱く見えようとも、老人もまた『王』なのだ。その卑小に隠された力の一つや二つ、あってもおかしくはない。

「……どうして貴方はここにいられる？ なぜ『灰』は貴方を召喚できる？」

「教えて欲しい、「クールランツのルドレス」。『灰』と同じ、『薪の王』よ。」

「『灰』が一体、どのような『手段』を行使したのか。『灰』とは一体、何者なのか」

だからフィンは、核心を尋ねた。

老人の口車に乗り、この場に足止めされる事を選択した。

それしか選択肢がないとしても。だからこそ、フィンはこの機を逃さない。

「『灰』の知らぬ、『灰』の真の姿を知るのであろう、『火の時代』を生きた老人に。『灰』が何者なのかを尋ねる、この機会を。」

「……すべては、遅すぎたんだ。我々がただ惑い、それを利用しようと企む間に、『灰』はずっと睨っていた。」

闇の中に潜み、深淵を広げながら、ずっと力を蓄えていた。もう後戻りできなくなるまで、彼女は隠れ続けていたんだ。

「だからもう、遅すぎた。どうしようもなかったんだよ……」

「……」
嘆きのような老人の独白を、フィンはじつと聞き続ける。ルドレスは首を擡げ、火の粉が燻る暗い夜に、在りし日を思い浮かべるように言の葉を紡ぐ。

『火の時代』は、繰り返される。その最初と、最後を繋ぐ、闇の因果が崩壊したからだ。

それは等しく、『火の時代』を生きる全てにもたらされた。神も、人も、例外なく。ありとあらゆる存在が、繰り返される『火の時代』に囚われてしまったんだ。

それが一度か二度であれば良かったのだろう。神も人も、より良い時代にするために邁進できたのだろう。

けれど、繰り返しに終わりはなく。限り無い時代の果てに残ったの

は、ただ絶望だけだった。誰もが終わりを望み、終わらぬ日々暮れていくしかなかったんだ。

そう……「灰」に啜られた、ごくわずかな存在を除いてはね」

「……」

「『灰』はすべてを啜る。闇の化身たる「小人の王」は、底なしの闇へと繋がっている。

彼女は啜った。すべての火を。彼女は呑んだ。あらゆる存在を。

……そうして、今も眠っている。結局、我らに終わりは訪れなかったけれど、永遠の微睡みに身を委ねることはできたんだ。

だから私はここにいるんだよ、小さな勇士。『灰』を知らんとする君の前にね」

「……まさか……!?!」

「『灰』は、すべてを啜り尽くした。なにもかも、跡形も残らないほどに。

そして彼女は、闇に繋がっている。その闇の中には、あらゆるものが眠っている。

……もう、分かるだろう？ あの子は、『火の時代』そのものなんだ」

燃え盛る『灰』は、女主の神娼殿の階段を登る。

一歩一歩、踏みしめるように、その歩みは緩慢だ。柱で区切られているだけの階段からは、その外側、歓楽街で起こっている出来事の手を一望できる。

それを流し見ながら、『灰』は最上階に到達した。女主の神娼殿内に存在する、最後の『殺生石の欠片』。そのソウルの匂いが漂う神室に。

「……来たか。『深淵の子』」

そこには、窓辺に佇むイシユタルと。

「ゲゲゲゲゲゲッ、アタイに負けた不細工が、また挑みに来たのかいい?」

ヒキガエルのような巨軀のアマゾネス、フリユネ・ジャミールが

立っていた。

“灰”は無言のまま、神室しんしつに足を踏み入れる。

「おや、アタイに向かって来るんだねえ。力の差は分かっているだろうに、これだから不細工は頭が足りないんだよおー！」

「……」

「無視かい？ まあいいさあ。

ゲゲゲゲゲゲッ！ さあどうする、イシユタル様あ？ またアタイがぶっ飛ばしてあげようかあ？」

「逃げろ、フリユネ」

「は？」

「逃げろと言ったんだ。お前では『深淵アブズの子』に敵わない」

べちやりと嗤いながら女神を伺うフリユネに、イシユタルははつきりと言い放った。一瞬呆然としたフリユネは、次の瞬間には額に血管を浮かべてひくひくと唇の端を蠢かせる。

「……面白い冗談だねえ？ イシユタル様あ？ アタイがあの不細工に負けるつてのかいい？」

「そう言ってるだろう。分かったらさっさと逃げろ。お前まで犠牲になる事はない」

「……ゲゲゲゲゲゲッ！！ 上等じゃないかア！ だったら証明してやるさ、アタイの方が上だって事をねエ！！」

「そうか。なら好きにしろ」

言い聞かせるようなイシユタルの言葉に激昂して、フリユネは突貫する。それを目を閉じて見送ったイシユタルは、眷族の最期を目に焼き付けるべく眺める。

「死になア、不細工う！！ 小人族バルウム如きに、アタイが負ける筈ないんだよお~~~~！！」

ドスドスと神室しんしつを揺らしながらフリユネが迫る。その体は光の粒を纏い、力を昇華していた。

けれど。それはもう、一度見た『既知』だ。ましてやここに至るまで、多くの戦闘バトル娼婦ベラがそうするのを眼にしてきた“灰”は、ただ《最初の火の剣》を握る左手を前に突き出し——払う。

爆光、炎伐。

“灰”の、ただそれだけの動作で、炎に焼き尽くされたフリユネは骨と化し。

佇む幼女の三步手前で灰となり、勢いよく床に撒き散らされた。

その灰の中から、『殺生石の欠片』を拾った不死は。ゆつくりと、窓辺へ歩を進める。

そしてイシユタルの前で立ち止まり、“灰”は虚空を見上げた。

「——私を殺しに来たのか？」

「……ああ」

『殺生石の欠片』を集めているな。よもや、春姫を救うためか？」

「そうだ」

「そうか……そうか。フレイヤへの切り札のつもり、だったんだがなあ。お前に目をつけられてしまうとは、運がない。

いや……そうでもない、か。こうして話し合う機会を与えられたんだ。あながち不運とは言い切れないな」

「……？」

自嘲気味に笑うイシユタルに、“灰”は首を傾げる。ややあつて、不死の幼女は、思い至ったように唇を動かした。

「ああ、貴公。私と話しているつもりだったのか？」

「……何だと？」

「私は別に、貴公と話していた訳じゃない。ただ、頭の中が煩うるさくてな。それに答えていただけだ。

貴公の事など、どうでもいい。どうでもいいのだよ、イシユタル」

「……『深淵アブイの子』、お前は何を言っている……？」

困惑するイシユタルは、“灰”の瞳を覗き込む。だがそこには虚空が映り込むばかりで、初めからイシユタルなど眼中にない。

無意識に、イシユタルは一步引いた。“灰”を恐れたのでも、忌避したのでもない。ただその銀の瞳が、限り無い闇の底を映しているようにうで。

その暗い眼に、冥界の兆しを見たイシユタルは。自分に『死』の危険が迫っている事を、はつきりと自覚した。

「ああ、だから、その、なんだ。……—喰っていいぞ。エルドリツチ」
「——ツ!？」

暗い影が覆う窓辺を、イシユタルは焦燥と共に振り返る。

そこには、蕩けた汚泥の巨塊があつて。それははつきりと、イシユタルに口腔を向けていた。

「あ——ああっ!?! 『深淵の子』! 『深淵の子』 ツ!!」

一瞬で汚泥に飲み込まれたイシユタルは、まだ無事な上半身を捻り、[〃]灰[〃]に腕を伸ばす。

「私は、お前を愛して——!!」

その言葉は、最後まで言い切られる事はなく。

大量の鋸のじぎりのような歯を露出した汚泥は、一息にイシユタルを飲み込んだ。

噛み千切られた至極色の髪が、ぼとりと床に転がる。

「……」

床に散らばる髪を見つめ、拾い集める[〃]灰[〃]は青白いソウルへとそれを溶かした。

直後、背後に何者かの気配を感じる。

「あら、こんなところにいたの、『死せる女神』。いいえ、アスカと呼ぶべきかしら?」

「……私に名前はない。ただ[〃]灰[〃]と呼ばれている。

貴公こそ、こんな場所で何をしている。フレイヤ」

神室しんしつに現れたのはフレイヤとその眷族だった。

八人の第一級冒険者に守られる女神は、心底おかしそうに清笑を零す。

「フフフツ、どうしてここにいるのか、ですって?」

そんなの簡単よ。貴方と彼が空を飛んで、歓楽街に向かったんですもの。あんなに目立つ真似をして、神わたしの興味を引いておきながら、どうしてそんな事を聞くのかしら?」

「貴公がここにいる事が意外だった。ソウル自体は探知していたがな」

「そう」

心底どうでも良さそうに対応する「灰」に、フレイヤは微笑む。そして「灰」の向こう、湿っぽい音を断続的に鳴らす汚泥の巨塊を見つめた。

この場では彼が、最も危険だ。特に神であるフレイヤには、彼は一切の情け容赦を持たないだろう。

それでもフレイヤは、留まる事を選ぶ。とうに覚悟を終えている美の女神は、再び灰色の幼女を瞳に映し。

「――フ、フフフ……アハハハハッ！」

燃える歓楽街、佇む不死。そして神喰らい。そのどれにも似つかわしくない、少女のような笑声を響かせた。

フレイヤは、笑う。銀の半眼を細める「灰」に構わず、動きを止める汚泥の巨塊に目もくれず。

ただ、炎を纏う灰髪の不死が、心底おかしいと言うように。フレイヤは「灰」を、笑っていた。

「――広い、広い『世界』が見えるわ」

やがて。笑声を収めたフレイヤは、風を紡ぐように語りかける。

「美しいものがある。醜いものもある。それは全てを内包した、一つの『時代』の景色。」

その中心に、荘厳な城は聳え立っている。『王』を迎える『玉座』が待つ、ただ一人のための城が。

それは貴方のための城。貴方のための『玉座』。フフフ……笑ってしまうわ。

魂の色も、その景色でも――貴方はたった一人なのね」

「……」

フレイヤはその『眼』で、「灰」の魂を見定めていた。

常ならば、万象の嵐のように色を変える巨大過ぎる魂。フレイヤをして見通せぬ、剥き出しに過ぎる魂の奔流は、けれど今だけは存在しない。

そうだろう。『最初の火』は魂を燃やし、継がれるもの。『最後の薪の王』として君臨する「灰」の魂が、今まさに焼かれているのは想像に難くない。

だからこそ、その魂は痩せ細っている。フレイヤの『眼』が見通せる程に——神々が、その魂の持ち主が普遍の子供である事が理解できる程に、小さくなっている。

「滑稽だわ。それだけの『時代』を秘めながら、それだけの立派な『玉座』が在りながら、貴方はずつと、たった一人。

治める民も、かかず傳く臣も、おみ誰もいない。孤独な『玉座』の上で、被る事も出来ない王冠に囲われている哀れな小人——それが貴方」

「だから、何だと云う」

「おかしいでしょう？ だって貴方は、ずつと歩き続けてきた。神々わたしたちに呪われようと、人々に忌み嫌われようと、何一つ顧みず進み続けた。

その果てに手に入れたのが、誰もいない『世界』だなんて。喜劇にしても出来の悪い、悲劇にしても行き過ぎていて。

——貴方が欲しかったものは、本当にそんなものなの？」

「……」

沈黙する。『灰』に、フレイヤは微笑する。その美しい顔かんばせには、心の底から『灰』を想う、慈しむ思慕で溢れていて。

『灰』の理解出来ぬ■で、一杯になっていて。

「だから、笑ってあげるわ——それが私の『愛』」

フレイヤははつきりと、『灰』への■を告白した。それを不死が、理解出来ぬと知りながら。

それでも『灰』は、不変の神などではなく。いつだって神々を驚かせる、変わり続ける子供だから。

いつかそれを理解した時、神々の■が届くように。フレイヤはそれを、捧げたのだ。

『灰』は沈黙する。眼前の『美の女神』は、『灰』の理解の範疇を超えている。

■は、『灰』には未だ理解出来ぬもの。どれほど見続けようと、その一片すら、心に留まらぬもの。

それでも、だからこそ、『灰』は観察を続行する。いつの日か、■を理解して——神の生首を、その折れた刃で斬り落とすために。

「——フレイヤあああああああああああ
あああつつつ!!!」

一人と一柱の対峙する時間は終わった。ぱちりと、目を瞬くフレイヤの前で。振り返る「灰」の眼前で、汚泥から褐色の腕が突き出される。

蠢き、飲み込もうとする汚泥にその腕は抵抗する。蕩けた肉を掴み、さらに腕を突き出し、這い上がるのは——深みに塗れるイシユタルだった。

「あら、イシユタル。貴方、そんなところにいたの？」

前に出て、「灰」と並ぶフレイヤは、本当に意外そうにそう口にした。その『美』を、灰色の幼女と仲睦まじそうに並ぶ姿を、限界まで目を見開くイシユタルは睨み、歯噛みする。

「~~~~~っ!? どうしてだ!? どうしてお前がそこにいる!?」

私でも良かった筈だ!! 『深淵の子』を愛するのは、私でも良かっただろう!!

それなのに何故、お前がそこにいる!!! 答えろッ、フレイヤアツツツ!!!」

「……哀れね、イシユタル。この子がそれを受け入れないなんて、百も承知の上でしように」

「関係あるものか!!! たとえ『深淵の子』に殺されようと、構うものか!!!」

私はッ、『深淵の子』を——アスカを愛している!!!

この想いだけは、決して手放さない!!! 一万年の時を経て、再び舞い戻る事があるうとも——私はアスカを愛し続ける!!!」

「それが哀れだと言っているのよ、イシユタル」

「なっ……!?!」

「貴方は普段からそうであるべきだった。同じ『美』と『愛』を司りながら、私達を分かっつものがそれよ。」

貴方もまた、愛深き女神……その心をアスカだけではなく、万人に明かしていたのなら、私と争う事もなかったでしょうに」

「——ッ!？」

心底憐れむフレイヤの言葉を、イシユタルは理解出来ない。「神喰らいのエルドリツチ」に侵食される女神は、もはや思考の半ばまで奪われている。

だから、フレイヤは。イシユタルへの最後の手向けを、その手から撃ち放った。

イシユタルの喉に、《月光の矢》が突き刺さる。

「あ——」

「さようなら、イシユタル。これは、私からの慈悲よ」

「フレ、イヤ——」

喉を撃ち抜かれ、致命傷を負った神イシユタルの体が、死ぬまいと『神アルカナムの力』を発動させる。

衝撃と共に鳴り響く、凄まじい轟音。拡散した光の粒が、天を貫く大光柱はしとなって下界に屹立する。

その光景を、《暗月の長弓》を降ろして見つめるフレイヤは。

目も眩む『神の威光』に照らされる陰で、禍々しい、下卑た嘲笑を浮かべる「小人だの狂王か」を、確かに見た。

フツ——と、光の柱が消え去っていく。キラキラと美しい、光の粒が降り注ぐ中。

フレイヤは「灰」に、借り受けた《暗月の長弓》を返した。

「ありがとう。助かったわ」

「そうか」

「そうよ。……フツ。ねえ、アスカ」

「何だ」

「私達、お友達になりましょう?」

「……?」

「灰」は一瞬、フレイヤの言っている事が理解出来なかった。『美の女神』を見上げる小人は、全てを魅了する極上の笑みに何も感じない。

「言っている意味が分からないな、フレイヤ。貴公も神ならば、私がそうしないと分かっているだろうに」

「ええ、分かっているわ。けれど世の中には、蓋を開けるまで分からない事もあるでしょう?」

「……私が神を友とするなど、有り得ない」

「それでいいわ。いつまでも、それでいい。貴方は貴方であってほしいから。」

でも、だから、覚えていて、アスカ。

貴方がそれを許してくれる限り。私はずっと、貴方の友達よ」

「……………」

「灰」は、何も答えなかった。代わりに、《最初の火の剣》を握り締め——「神喰らいのエルドリッチ」に鋒きつぎを向ける。

「止まれ。エルドリッチ。この神は、喰われると困る」

「灰」は私的な理由で言葉を発した。まだ『既知』に変えていない■を観察できなくなるのは、困ると。

対し、「神喰らいのエルドリッチ」は止まらない。聖者たる彼は、それが遙か長い苦行と知ってなお、喰らう事を誓っている。

だから、「灰」は一つ瞬き。「神喰らいのエルドリッチ」と殺し合わんと、《最初の火の剣》を構え。

直後。エルドリッチは、無数の刃に貫かれ。最後には巨人の一撃によって、『神時代』から退場した。

膨れ上がる、エルドリッチのソウル。それを全て吸収した「灰」は、集結する『薪の王』達の呼び名を口にする。

「ヨーム」

幼女が見上げる巨人は、無言だった。言葉もなく、ただ、「灰」を見つめている。

「深淵の監視者たち」

百以上もの隊列から、一人の監視者が前に出る。その手には、『殺生石の欠片』が握られている。

「ロスリック、ローリアン」

部屋の隅で、双子の王子は項垂れていた。「灰」に頭を下げているようにも見える双子の片割れ、ロスリックは魔法によって『殺生石の欠片』を届ける。

「……『化身』」

一人、フレイヤ達を案内した「王たちの化身」だけは、突き刺した《螺旋の大剣》の前に座っている。まるで全てが終わったかのように。最初から最後まで己の意志で動き続けた者達に、「灰」は告げた。「すまんな、貴公ら。手間をかける」

言葉は、たった一つだけ。それでも『薪の王』達には、それで十分だったらしい。

そのまま沈黙する彼らの前で、「灰」は『殺生石の欠片』を宙に浮かべる。分かれたソウル、砕け散った魂を修復するため、「灰」は「ソウルの業」を行使した。

「ふうん。貴方、そんな事もできるのね」

「ああ。砕かれたままのソウルでは、役に立たん事も多いからな。……む。この記憶は、要らないな」

興味深そうに眺めるフレイヤに適当な返事をして、「灰」はソウルの修復に集中する。そのために春姫ハルヒメの記憶の全てを眺め、不必要な記憶——この場合は『殺生石』に魂を吸われる際の苦痛の記憶——を消去する。

『殺生石の欠片』が一つに集まる。渦巻くソウルが一へと還る。砕け散った欠片達は、やがて一つの影となり——『殺生石』は傷一つ無い完璧な姿を取り戻し、「灰」は修復された『春姫ハルヒメのソウル』を手に入れた。

「さて。それでは、私も行く。霧も……あの炎の壁も解除しよう。後は好きにするがいい、フレイヤ」

「あらそう。なら、貴方と一緒に外へ出ようかしら」

「何のつもりだ？」

「何のつもりって、貴方、ここまでの事を仕出かして、ただで済むと思っているの？」

歓楽街の外では、きつとたくさんの「ファミリア」とギルドが待機しているわ。だから、私がついて行ってあげる。その方が余計な手間がかからないわよ?」

「……奇特だな、貴公は」

「そうかしら？ 友達の背負うものを一緒に背負ってあげたいって、そんなに変なこと？」

「……………勝手にしろ」

「ええ。勝手にさせてもらうわ——アスカ」

楽しそうに振る舞うフレイヤを、[〃]灰[〃]は呆れ果てた眼で見上げた。それも直に消え、[〃]灰[〃]は落ち合う場所を指定した後、その場から消え去るのだった。

「ベル」

『空中庭園』に舞い戻ったアスカは、いつも通りの声で呼びかける。

少年は、少女の遺体を抱えていた。その体は傷つき、側にはアイシャ・ベルカが転がっている。

きつと、春姫^{ハルヒメ}の遺体を回収しようとしたアイシャと衝突したのだから。そう予測して、歩を進めるアスカは。

「待て……………【^{スコッチャー}焼尽者】……………あんた、何をするつもりだい……………!?!」

辛うじて上体を起こすアイシャを一瞥して、立ち止まらずに答えた。

「何を、と言われてもな。私はただ、サンジヨウノ^{ハルヒメ}春姫を黄泉帰らせるだけだ」

「なっ……………!?!」

「黙って見ている。『殺生石』はここにがある。……………ああ、そういうえば、貴公だけは『欠片』を持っていなかったな。

最早、どうでもいい話ではあるが」

目を見開くアイシャの驚愕を捨て置いて、アスカは春姫^{ハルヒメ}に近づいた。その胸の傷を魔法で治し、そつと『殺生石』を押し当て——万が一が起こらぬよう、[〃]ソウル[〃]の業[〃]で調整する。

ポウ、と『殺生石』の中に浮かび上がる『春姫^{ハルヒメ}のソウル』が、主の体に還っていく。それを見届け、用済みとなった『殺生石』をしまったアスカは、一歩下がって観測に移行した。

止まっていた春姫^{ハルヒメ}の胸が上下し、少女はゆつくりと目を開く。茫洋

と、自身に起こった出来事を理解し得ない春姫は、精一杯の力でベルに抱きしめられた。

「こんつ!? ベ、ベベベ、ベル様……!?」

「春姫さんつ……春姫さんつ!!」

「春姫殿つ!!」

「春姫ちゃんつ!!」

「皆様!? これは、一体……?」

黄泉帰った春姫は、固唾を飲んで見守っていた皆に囲まれた。

純粹に喜ぶ者もいる。燃える歓楽街を見つめ、苦い顔をする者もいる。アスカの所業に、心底畏怖する者もいる。

その全てを瞳に捉え、ベルを見つめ続ける少女は。ただじつと、銀の半眼で眺めていた。

時の歯車は、回り続ける。運命の筋書きは変わり、されど不死に変わりはしない。

「灰」はこれからも、少年を見続けるだろう。その道の果てを眺め続けるだろう。

それこそが、「灰」の尊ぶ。たった一つの大切なのだから。

美神の至極髪

限りなく黒に近い紫、至極色の髪

美しく長いそれを束ね、ムチとしたもの

美を司った女神は、同じ美の女神を呪った

だが最後に敗れ、神喰らいの餌食となった

噛み千切られた髪は呪詛の象徴であり

奇跡の触媒としても使用できる

戦技は「呪詛のムチ」

引き絞る事で一時的に呪詛を纏う

呪詛は生命を蝕み、癒えぬ醜い傷を残す

美神の嫉妬とは、まこと醜悪な愛である

契約の証

巨人の法官が召喚に用いる、契約の証

異端の銀騎士、レドを一時的に召喚する

法官の契約は、幾つかの事由で交わされる

その多くは一方的な執行にすぎないが

稀に友誼であり、取引であることもある

これは友誼の例であり

それ故に、唯一つ形を残したのだろうか

暗い契約

小人の狂王が課した契約の闇術

霊体を強制的に召喚する

大王に遣わされた巨人の法官は

闇の魂を求めざる者を屠り

輪の都を守る契約の一部とした

だが、輪の都は狂王に飲まれ

契約は汚染され、暗い歪みとなり

狂王の意のままに蠢く成れ果てとなった

それはかくもおぞましき、人の業である